

上野国分僧寺・ 尼寺中間地域(4)

前橋市元総社町小見地区、群馬郡群馬町大字東国分村前・薬師道南・中道南・上野道南(植野道南)・高井道東地区に所在する遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書 8分冊中の第4分冊。

— 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第33集 —

本文編 (1)

1990

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

資料	(財)群馬県埋蔵文化財 調査事業団保管	01-320
		49-1
No. 2-59	平成2年7月12日	(6)

上野国分僧寺・ 尼寺中間地域(4)

前橋市元総社町小見地区，群馬郡群馬町大字東国分村前・薬師道南・中道南・上野道南(植野道南)・高井道東地区に所在する遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書 8分冊中の第4分冊。

— 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第33集 —

本文編(1)

1990

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



B区第1号井戸跡
「法花寺」墨書
下同片



C区第140号住居跡金銅製飾金具片



B区第1号住居跡印章型片



灰袖陶枕片



C区第4号井戸跡
文字瓦片



J区第14号住居跡出土畿内産土師器



J区第34号住居跡出土須恵器



J区第10号住居跡出土須恵器

序

関越自動車道新潟線は、太平洋側の首都東京と日本海側の新潟市を結ぶ高速自動車道として、昭和60年10月1日に開通いたしました。本道路の開通に際しては、数多くの埋蔵文化財が、道路建設工事に先立って調査されました。本県でも58箇所の埋蔵文化財包蔵地が発掘調査され、記録保存されています。

本報告による上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡は、群馬郡群馬町東国分、前橋市元総社町に所在する埋蔵文化財包蔵地であり、昭和55年4月から昭和59年3月にかけて、当事業団が調査しました。

ご承知のように本遺跡は、上野国分寺の僧寺・尼寺跡、上野国府跡、山王廃寺跡に隣接する遺跡として早くから識者の注目をあびていました。発掘調査によって奈良時代・平安時代の国分寺僧寺・尼寺中間地域の歴史が明らかにされ、数々の貴重な資料が得られました。これら資料は、昭和59年4月から8年計画で報告書作成のための整理作業が行われており、「上野国分僧寺・尼寺中間地域」として既に3分冊の調査報告書が刊行されています。

今回、遺跡のB区、C区・J区についての整理が完了し、4分冊目の報告書を作成することができました。法花寺と記された墨書土器、銅印の鋳型、畿内産の土師器等貴重な資料が報告されていますので、県民各位、研究者、教育機関等において、本県の歴史を解明するための資料として、活用していただければ幸甚であります。

平成2年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水 一郎

例 言

1. 本書は関越自動車道(新瀉線)建設工事に伴い、記録保存のため事前調査された前橋市元総社町字小見・群馬郡群馬町大字東国分小字村前・薬師道南・中道南・上野道南(植野道南)・高井道東地区に所在する“上野国分僧寺・国分尼寺中間地域”(小見・村前・薬師道南・中道南・上野道南(植野道南)・高井道東地区)の埋蔵文化財発掘調査報告書8冊の内の第4冊である。
2. 委 託 者 日本道路公団東京第二建設局
群馬県教育委員会
3. 発掘調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
4. 調 査 期 間 昭和55年4月～昭和59年3月31日
5. 発掘担当者 佐藤明人・石井克己・石北直樹・徳江秀夫・木津博明・桜岡正信・麻生敏隆・関根慎二
※調査担当年度については、上野国分僧寺・尼寺中間地域報告書第3冊を参照。
6. 調査嘱託員 黒沢はるみ・間庭 稔
7. 事務担当者 邊見長雄・松本浩一・田口紀雄・神保侑史・住谷 進・真下高幸・笠原秀樹・小林昌嗣・須田朋子・吉田有光・柳岡良宏
8. 整理事業は、財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団が昭和59年4月～平成4年3月までの8ヵ年にわたり実施するもので、本報告書は、昭和63年11月～平成1年10月までの1年間に整理実施した報告書である。また、本報告書にはB・C・J区古墳時代(後期)～奈良・平安時代の検出された遺構・遺物を掲載した。
9. 整理担当者 木津博明・桜岡正信
10. 整理補助員 黒沢はるみ(嘱託員)
安藤三枝子・今井サチ子・飯塚妙子・川原嘉久治・金子ミツ子・小池洋子・嶋崎しづ子・須田育美・鈴木紀子・関口貴子・高橋順子・高橋優子・田村栄子・武永いち・中野秀子・中野和子・生巢由美子・蜂巢滋美・萩原鈴代・原島弘子・茂木順子・渡辺フサ枝(50音順)を中心に以下の方々の協力を得た。長沼久美子(嘱託員)・佐藤美代子・高梨房江・尾田正子・千代谷和子・八峠美津子・吉田恵子・吉田笑子・野島のぶ江・並木綾子・今井もと子・今井あや子・松井美智子・角田みづほ
11. 遺物保存処理 関 邦一
北爪健二(嘱託員)・小材浩一
12. 写 真 撮 影 遺構 発掘調査担当者
遺物 佐藤元彦・木津博明
一部の遺物についてはシン航空写真株式会社による。
13. 現場コンサルタント 並木秀行(三洋測量株式会社)
14. 出土遺物の化学分析・鑑定について以下の方々に依頼した。(敬称略)
獣骨鑑定 大江正直(前 群馬県家畜登録協会常任理事)
石材鑑定 飯島静男(群馬地質研究会)
15. 発掘調査及び本書を作製するにあたっては、群馬県教育委員会・前橋市教育委員会・群馬町教育委員会・同町都市計画課及び以下の方々の御指導・御教示を頂いた。記して感謝の意を表したい。(敬称略)

上原真人(国立奈良文化財研究所)・須田 勉(文化庁)・大川 清(國士舘大学)・大塚初重(明治大学)・新井房夫(群馬大学)・池上 悟(立正大学)・斎藤孝正(名古屋大学)・吉岡康暢・平川 南(国立歴史民俗博物館)・矢部良明(東京国立博物館)・林辺 均(奈良県教育委員会)・前園実知男(奈良県立橿原考古学研究所)・本沢慎輔(岩手県平泉町教育委員会)・大金宣亮(栃木県教育委員会)・橋本澄朗(栃木県立博物館)・田熊清彦・田代 隆(財団法人栃木県文化振興事業団)・柳沼賢治(財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団)・梁木 誠(宇都宮市教育委員会)・阿久津 久(茨城県立歴史館)・瀬谷昌良(茨城県協和町教育委員会)・堤 隆(御代田町教育委員会)・安田 稔(福島県文化センター)・井口 嵩(君津郡袖ヶ浦町郷土博物館)・光江 章(財団法人君津郡市文化財センター)・高橋一夫(埼玉県教育委員会)・井上尚明(埼玉県立歴史博物館)・有吉重蔵(東京都国分寺市教育委員会)・遠藤政孝・田崎通雄(尾鷲市教育委員会)・種定淳助・岡崎正雄(兵庫県教育委員会)・松尾宣方(鎌倉市教育委員会)・斉木秀雄・原 廣志・小林康幸(鎌倉市文化財研究所)・井澤洋一(福岡県教育委員会)・増田 修(桐生市教育委員会)・前原 豊(前橋市教育委員会)・大塚昌彦(渋川市教育委員会)・羽鳥政彦(富士見村教育委員会)・宮崎重雄(大間々高校教諭)・望月公子(日本大学農獣医学部獣医学科)・西田隆雄・伊東信夫(東京大学農学部畜産獣医学科家畜解剖学教室)・茂原信夫(獨協医科大学第一解剖学教室)・西中川駿(鹿児島大学農学部獣医学科家畜解剖学教室)・吉川瑞子(国立科学博物館分館動物研究部動物第一研究室)・石川春律・藤巻 昇(群馬大学医学部第二解剖学教室)・山下靖雄(東京医科歯科大学歯学部口腔解剖学教室)・小林次郎(群馬県食肉事業協同組合)・森村隆作(群馬県畜産試験場)

16. 発掘調査及び整理事業に関する業務委託は以下のとおりである。

遺構実測、遺構・遺物トレース 株式会社測研

遺物実測・トレース シン航空写真株式会社

井戸跡の調査 株式会社原沢ポーリング(調査所見は同社有賀正明による)

17. 調査に至る経緯については、上野国分僧寺・国分尼寺中間地域報告書第1冊に詳述されているので、同報告書を参照願いたい。

18. 本書の執筆は以下のとおりで、文責は別記した。

木津博明・桜岡正信・黒沢はるみ

19. 発掘調査においては群馬町、吉岡村、榛東村、榛名町、渋川市、赤城村、前橋市、高崎市の多くの方々ならびに、ふるさとを知る会の方々の御協力を頂いた。また、群馬町立中央中学校、南中学校の社会科学クラブの生徒諸君の参加を得た。

20. 本遺跡の図面・写真・遺物は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が管理し、現在群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

凡 例

1. 本書中に掲載した地形図は、国土地理院、1：25,000、群馬町・前橋市都市計画図、1：2,500を縮小し使用した。
2. 本書中の方位記号の方向は真北を指す。
3. 本書中の遺構実測図の縮尺は以下のとおりである。

竪穴住居跡 1：60 掘立柱建物跡 1：60 埋設土器遺構 1：20 土坑 1：60
 井戸跡 1：60 溝 1：80 遺構分布図 1：500を基準としたが、全てがこの限りではない。

4. 遺構挿図中の等高線・断面基準線は海拔で表示し、断面基準線標高値はL＝で示した。
5. 土層断面図中のI～VII……は、基準層序のI～VII層……に準じ、覆土の層序は1～nとした。
6. 本書中にある火山灰は以下のとおり略記した。










浅間山噴出B軽石層→B軽石・BT・B 浅間山噴出C軽石層→C軽石・CP・C
 榛名山二ツ岳噴出火山灰層→FA、FP

7. 遺構挿図中に使用した遺物の記号は以下のとおりである。



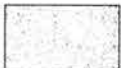








●土師器・須恵器・土師質土器 ○灰釉陶器・緑釉陶器・白磁 ▲石器 △金属製品
 ▲紡錘車 ◎白玉 □土錘 ■瓦 ★鞆の羽口 □炭化物 ☆骨

8. 挿図中に使用したスクリーンは以下のとおりである。

遺構実測図

	焼土・焼土層		灰・灰層		粘土
	礫の断面		B軽石		C軽石
	FA		礫層		掘り方

遺物実測図

	灰釉陶器		緑釉陶器		摩滅部分
	黒色処理・炭化物		赤色塗彩		鉄滓
	羽口の鉄分付着		羽口の珪酸分		羽口の酸化部分
	羽口の還元部分		羽口の中性部分		

9. 遺構実測図中の遺物番号は出土遺物実測図の番号と一致し、挿図番号―遺物番号の順で記載した。
10. 遺物実測に当たっては、当事業団拡大整理委員会歴史部会で編集した「仕様書―遺物編」に準拠したが、全てがこの限りではない。

11. 本書中の遺物実測図の縮尺は以下のとおりである。

土器・土製品 1：3（大形1：6、瓦1：5） 石器・石製品 1：3（白玉1：2）

金属製品 1：3（古銭1：1）

上記以外の縮尺のものについては、個別に明記した。

12. 遺物観察表中の「度目」「度・量目」は、度は長さを、量は重量を示す。また、()は完形品以外の推定値・復原値を表わし、量目では残存量を計測した。金属製品については、錆等の除去後の数値である。
13. 遺物観察表中の「色調」は、「標準土色帖」農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色表監修、1976年9月発行を使用し記載したが、細部では観察者の個人差がみられる部分もある。
14. 遺物計測位置は、上野国分僧寺・尼寺中間地域（2）図表編参照。
15. 土器の種別については、原則として轆轤使用・還元焰焼成のものを須恵器、轆轤不使用・酸化焰焼成のものを土師器として扱ったが、中間的なものについては判断をさけたものがある。
16. 土器の器種については、原則として高台を付すものを、塊付さないものを坏、口径に比較して器高の著しく低いものを皿とし、その他、甕、壺等使用したが、文献にあたって使用したものではなく、また、特に概念規定を明らかにした上で使用したわけではなく、あくまでも整理上便宜的に使用した。
17. 本遺跡出土遺物の注記は、「KK17」を冠し区名・遺構名称を記入した。初めのKは「関越自動車道」のKanetuのKで、次のKはKousokudouのKで、17は群馬県内で南から17番目の遺跡であることを示す。

目 次

序
例 言
凡 例
目 次
対照目次

第1章 調査経過	
第1節 調査経過	（木津博明・桜岡正信） …… 1
第2章 遺跡位置	
第1節 遺跡位置	（桜岡正信） …… 2
第3章 グリッドと基本層序	
第1節 基本杭とグリッド	（桜岡正信） …… 3
第2節 基本層序	（木津博明） …… 4
第4章 検出された遺構・遺物	
第1節 南側調査区	…… 5
第1項 C区について	（木津博明） …… 5
第2項 検出した遺構・遺物について	（木津博明） …… 7
第3項 B・C区検出の住居跡について	…… 22
第2節 北側調査区	…… 503
第1項 J区の検出した遺構・遺物について	（桜岡正信） ……503
第3節 追 補	……634
第1項 南側調査区	……634
第2項 北側調査区	……643
第5章 ま と め	
第1節 南側調査区	……645
第1項 B・C区の住居跡とその出土遺物	……645
第2項 金属器類と砥石類について	……670
第3項 瓦について	……679
第4項 特殊遺物について	……680
第5項 土師器坏の成型技法について	……683
第6項 吉井型羽釜について	……689

第2節 北側調査区	698
第1項 J区第14号住居跡出土畿内産土師器について	(桜岡正信) 698
第2項 J区第28号住居跡出土遺物について	(桜岡正信) 701
第3項 J区住居跡出土の特異な須恵器について	(黒澤はるみ) 703
付 章 上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の 動物遺存体	(大江正直・木津博明・桜岡正信・友廣哲也) 707
第1節 鑑定依頼に至る経緯	708
第2節 出土状況の概要	709
第3節 観察について	711
第1項 はじめに	711
第2項 調査方法に関する主な例言	711
第3項 観察表について	715
第4項 遺存体の部位と模式表現について	718
第5項 実測図について	725
第4節 観察結果	864
第1項 遺存体の出土状況	864
第2項 遺存体の形態	882
第3項 遺存体を有する動物の性・年令・大きさ	882
第4項 県下5遺跡における調査結果のまとめ	889
第5節 考 察	898
第1項 時代別上野国分層寺・尼寺中間地域出土の馬歯・馬骨を有する馬達	898
第2項 中間地域における出土馬歯の歯冠巾、巾率から見た上野国の馬の体格	932
第3項 中間地域における近世以降の牛の飼養状況	932
第4項 国分寺中間馬C中世について	935

対 照 目 次

名 称	本 文 編 (1)					図表編	写 真 図 版 編	
	総 頁	遺構表	所 見	遺構挿図 (番号)	遺物挿図 (番号)	遺 物	遺 構	遺 物
調 査 経 過	1		1	1				
遺 跡 位 置	2		2	2				
基本杭とグリット	3		3	3				
基 本 層 序	4		4	4				
南 側 調 査 区								
C 区 について	5・6							
検出した遺構・遺物								
サ ク 状 遺 構	7・8		7	7				
溝状遺構について	9・10			8				
C区第5号溝状遺構	9		9					
C区第6号溝状遺構	11～16		11	付図2	9～13	3～6	15・16	99～101
C区第8号溝状遺構	11・18		11・18	付図2	17	8	17	
C区第9号溝状遺構	16・18		18	付図2	14	6・7	17	101
C区第10号溝状遺構	16～18		18	付図2	15・16	7	17	101・102
C区第11号溝状遺構	19		19	付図2	18	8		
C区第12号溝状遺構	18～20		18	付図2	19・20	8～10	18	102・103
C区第13号溝状遺構	11		11	付図2				
C区第18号溝状遺構	11・18		11・18	付図2	17	8		
B区第4号溝状遺構	21				21	10		251
C区第8号住居跡	25・26	25	25	23	24	10	19	104
C区第9号住居跡	26～30	27	27・28	26・27	25・28・29	11・12	19	104・105
C区第10号住居跡	30	30	30	30	30	12	20	105
C区第11号住居跡	31～35	31	31・33	31・32	33～35	12・13	20・21	105・106
C区第12号住居跡	36・37	36	36	36	36・37	13・14	21	106・107
C区第13号住居跡	37・38	37	37・38	38	39	14	21	107
C区第14号住居跡	38～40	38	38	41	40～42	14・15	22	107
C区第15号住居跡	40～42	40	40	44	43～45	15・16	22	107・108
C区第16号住居跡	42～44	42	42	47	46～48	16	23	108・109
C区第17号住居跡	44～47	45	45	50	49～52	16・17	23	109・110
C区第18号住居跡	47～50	47	47	53	53～55	17・18	24	110～112
C区第19号住居跡	51～53	51	51	56	56～58	18・19	24・25	112・113
C区第20号住居跡	53～56	54	54	60	59・61・62	19・20	25	113・114
C区第21号住居跡	56～60	56	56・57	63	63～66	20～22	26	114・115
C区第22号住居跡	60～62	60	61	68	67～69	22・23	26	115・116
C区第23号住居跡	62～64	62	62	70	70・71	23・24		116・117
C区第24号住居跡	64～68	64	64	72	73～76	24・25	27	117・118・119
C区第25号住居跡	68～70	68	68	77	77～79	25	27	118・119
C区第26号住居跡	70～73	70	70	80	80～83	25・26	28	119・120
C区第27号住居跡	76・77・80	76	80	89	88	28	28	122
C区第28号住居跡	73～76	73	73	84	85～87	27・28	28	120～122
C区第29号住居跡	76～80	76	76・80	89	89～91	28・29	28・29	122・123
C区第34号住居跡	80・81	80	80	93	92・93	29・30	29	123
C区第37号住居跡	81～83	82	82	95	94～96	30・31	29・30	124
C区第38号住居跡	83・84	83	84	97			30	
C区第39号住居跡	83・84	83	84	97	98	31・32	30	124
C区第40号住居跡	83・84	83	84	97			30	
C区第41号住居跡	83～85	83	84	97	98・99	31・32	30	124・125
C区第42号住居跡	85～88	85	85～87	100	100～102	32・33	30・31	125・126
C区第43号住居跡	88～90	88	88・89	103	103・104	33	31	126
C区第44号住居跡	90・91	90	91	105	105	34	31・32	126・127
C区第45号住居跡	91	91	91	106	106	34		127
C区第46号住居跡	92～94	92		107	107～109	34・35	32	127
C区第47号住居跡	94	94	94	110	110	35		128
C区第48号住居跡	95～97	95	96	112	111～113	35・36	32	128・129

名 称	本 文 編 (1)					図表編		写真図版編	
	総 頁	遺構表	所 見	遺構挿図 (番号)	遺物挿図 (番号)	遺物	遺 構	遺 物	
C区第49号住居跡	98~100	98	98	114	114~116	37	33	129・130	
C区第50号住居跡	101~103	101	101	117	118・119	38・39	33	130~132	
C区第51号住居跡	104・105	104	104	120	120・121	39	33	132	
C区第53号住居跡	105・106	105	105	122	122・123	39・40	33・34	132	
C区第54号住居跡	106~110	106	106	124	124~128	40・41		133~135	
C区第55号住居跡	110~115	110	111	129	130~134	41~43	34	135~137	
C区第56号住居跡	116~118	116	116	135	135~137	44	34	137・138	
C区第57号住居跡	119~121	119	119	138	138~140	45	34・35	139	
C区第58号住居跡	121~126	121	122	141	142~146	46・47	35	139~142	
C区第59号住居跡	126		126	147					
C区第60号住居跡	126		126	147					
C区第61号住居跡	126		126	147					
C区第62号住居跡	126~129	126		148	148~150	47・48	35・36	142・143	
C区第63号住居跡	129・130	129	130	151	151	48・49	36	143・144	
C区第65号住居跡	131・132	131	131	152	153	49	36	144	
C区第66号住居跡	133	133	133	154	154	49	37	144・145	
C区第67号住居跡	134・135	134	134	155	155・156	50	37	145	
C区第68号住居跡	135~137	136	135	158	157~159	51	37・38	145・146	
C区第69号住居跡	137・138	137	137・138	160	160	51・52	38	146	
C区第70号住居跡	136	136		158					
C区第71号住居跡	139~141	139	139	161	161~163	52・53	38・39	146・147	
C区第72号住居跡	141~146	141	142・143	164	165~168	53・54		147・149	
C区第73号住居跡	147・148	147	147	171	171・172	54	39	149・150	
C区第74号住居跡	148~151	148	148	174	173~176	54・55	39	149~151	
C区第75号住居跡	155・156		155	180	181	57			
C区第76号住居跡	152~154	152	152	177	178・179	55・56	39・40	151・152	
C区第77号住居跡	154~161	154	155	180	182~187	57・58	40	152~155	
C区第78号住居跡	163~165	163	163	190	190・191	60	40	156	
C区第79号住居跡	165~172	166	166・167	193	192・194~199	61~63	40・41	157~160	
C区第80号住居跡	172~174	172	172	200	200~202	63	41	160・161	
C区第81号住居跡	154・155・162・163	154	155	180	188・189	59・60	40	155・156	
C区第82号住居跡	174・175	174	174・175	204	203・204	63・64	41・42	161	
C区第83号住居跡	147	147	147	170			42		
C区第84号住居跡	176	176	176	205	205	64	42	161	
C区第85号住居跡	176~178	176	176	206	206~208	64・65	42	161~163	
C区第86号住居跡	178~181	178	178・179	210	209~212	65・66	42・43	163・164	
C区第87号住居跡	181	181	181	213	213	66	43		
C区第88号住居跡	182~184	182	183	214	214・215	66・67	43・47	164	
C区第89号住居跡	186~189	186	187・188	220	221・222	68	45・47	165・166	
C区第96号住居跡	193~198	193	193	227	228~232	70・71	43・44	167~169	
C区第97号住居跡	198~200	198	199	234	233~235	72	44	169・170	
C区第99号住居跡	200~203	200	201	236	236~238	72~74	44・45	170・171	
C区第100号住居跡	186~188・190・191	186	188	220	223・224	68・69	45・47	166	
C区第103号住居跡	217~219	217	217・218	258	257~259	77・78	45	176・177	
C区第104号住居跡	203・204	203	203	240	239・240	74	45	171・172	
C区第105号住居跡	205・206	205	205	241	241・242	74・75	46	172	
C区第106号住居跡	206~213	206	207	243	244~250	75・76	46・47	172~174	
C区第107号住居跡	182~185	182	184	214	216・217・275・276	67・82・83	47	164・165	
C区第108号住居跡	182・183・185・186	182	182	214	218・219	67・68	47	164・165	
C区第109号住居跡	216・217	216	216	256	255	77	47	176	
C区第110号住居跡	187・188・191・192	187	188	220	225・226	69・70	45・47	167	
C区第111号住居跡	217・218・219		217・218	258	260				
C区第112号住居跡	250・251		250	298					
C区第113号住居跡	220~223	220	220	261	261~264	78・79	47・48	177・178	
C区第114号住居跡	223~225	223	223	265	266・267	79・80	48	178・179	
C区第115号住居跡	225~227	225	225	269	268~270	80・81	48・49	179・180	
C区第116号住居跡	228~231	228	228	271	271~274	81・82		180・181	
C区第118号住居跡	231・232	231	231	275					

名 称	本 文 編 (1)					図表編	写真図版編	
	総 頁	遺構表	所 見	遺構挿図 (番号)	遺物挿図 (番号)	遺物	遺 構	遺 物
C区第119号住居跡	231・232	231	231	275		82・83		181・182
C区第120号住居跡	187・188	187	188	220			45・47	
C区第121号住居跡	206～209・213	206	207	243・245	251	76	49	174
C区第123号住居跡	231・232	231	231	275				
C区第124号住居跡	233・234	233	233	277		278	83	182
C区第128号住居跡	206～208・214～216	206	207	243	252～254	76・77	50	174～176
C区第129号住居跡	206～208	206	207	243			50	
C区第130号住居跡	207・208		207	243				
C区第131号住居跡	207・208		207	243				
C区第132号住居跡	207・208		207	243				
C区第133号住居跡	207・208	207	207	208			50	
C区第134号住居跡	234～236	235	236	279	280・281	83・84	50	182・183
C区第135号住居跡	236～238	236	236	282	282・283	84		183
C区第137号住居跡	231・232	231	231	275			50	181・182
C区第138号住居跡	238・239	238	238	285	284・285	85	51	184
C区第139号住居跡	207・208		207	243				
C区第140号住居跡	141・142・146	141	143	164		169	54	149
C区第142号住居跡	239～242	240	240	287	286～289	85・86	51	184・185
C区第143号住居跡	242・243	242	242・243	290	290	86・87	47	185
C区第144号住居跡	244	245・246	244	292		292	87	186
C区第145号住居跡	244・247	244	244	291	291・293	87・88	52	186
C区第146号住居跡	248・249	248	248	294	294・295	88	52	186・187
C区第147号住居跡	217・218	217	218	258		78		177
C区第148号住居跡	249・250	249	249	296	296・297	88・89		187
C区第149号住居跡	201・202	201	201・202	236				
C区第150号住居跡	250～252	250	250	298	298・299	89		187・188
C区第151号住居跡	250～252	250	250	298	300	89		188
C区第152号住居跡	252～254	253	252	301	301・302	89・90	52	188
C区第153号住居跡	252・253・255・256	253	252	301	303・304	90・91	52	188・189
C区第154号住居跡	256		256	305	305	91	53	
B区第1号住居跡	257～272	257	257・259	307・308	306・309～321	91～94	53・54	190～195
B区第2号住居跡	273～278	273	273	322	322～327	95・96	54	196～198
B区第3号住居跡	278～280	278	279	328	328・329	96・97	54・55	198・199
B区第4号住居跡	281・282	281	282	331	330・331	97		199・200
B区第5号住居跡	282～284	282	283	332	332・333	98		200
B区第6号住居跡	284・285	284	284	334	334	98・99	55	200
B区第7号住居跡	285～287	286	285	335	335・336	99	55	200・201
B区第8号住居跡	287～289	288	287	337	337・338	99・100	56・59・60	201・202
B区第9号住居跡	290	290	290	339	339	100・101	56	202
B区第10号住居跡	291～293	291	291	340	340～342	101	56・57	202・203
B区第11号住居跡	293～298	293	293	344	343～348	101～103	57	203～205
B区第12号住居跡							57	
B区第13号住居跡	299～300	299	299	349	349・350	104	57	205・206
B区第14号住居跡	300～306	301	301	352	351～358	104・105	57・58	206～208
B区第15号住居跡	306～308	306	307	359	359・360	106	58・61	209
B区第16号住居跡	308～316	309	309	362	361・363～369	106～109	58・59	209～212
B区第17号住居跡	316～319	316	316・317	370	370～372	109～110	59	212・213・256
B区第18号住居跡	319・320	319	319	373	373・374	110・111	59・60	213
B区第19号住居跡	320・321	320	320	375	375	111	60	213・214
B区第20号住居跡	322～324	322	322	376	377・378	111・112	60	214・215
B区第21号住居跡	324・325	324	324	379	380	112	61	215
B区第22号住居跡	325～329	325	325・326	381	381～394	112～114	61	215～217
B区第23号住居跡	330・331	330	330	385	385・386	114・115		217・218
B区第24号住居跡	331・332	331	331	387	387	115	61	218
B区第25号住居跡	331～333	331	331	387	388	115	61・62	218・219
B区第27号住居跡	333～335	333	333・334	389	389・390	116	62	219
B区第28号住居跡	335・336	335	335	392	391・392	116	62	219
B区第29号住居跡	336・337	336	336	393	394	116		219

名 称	本 文 編 (1)					図表編	写真図版編	
	総 頁	遺構表	所 見	遺構挿図 (番号)	遺物挿図 (番号)	遺物	遺 構	遺 物
B 区第30号住居跡	337・338	337	337	396	395・396	117		220
B 区第31号住居跡	338・339	338	338	397	398	117		220
B 区第32号住居跡	337・338	337	337	396				
B 区第33号住居跡	339・340	339	339	399				
B 区第34号住居跡	337・338	337	337	396				
B 区第35号住居跡	340	340	340	400				
B 区第38号住居跡	340～346	340	341	401	402～406	117・118	62	220～223
B 区第39号住居跡	347～350	347	347	407	407～410	118～120	62・63	223・224
B 区第40号住居跡	351～353	351	351	411	412・413	120	63	223～225
B 区第41号住居跡	353・354	353	353・354	415	414・415	120・121	63	225
B 区第42号住居跡	355	355	355	416	416	121	63	225
B 区第44号住居跡	355～357	355	355・356	417	417・418	121・122	64	226
B 区第45号住居跡	357・358	357	357	419	419・420	122		226・227
C 区 4 号 井 戸	359～383	361・362	359・360	421	422～442	122～133	66	227～243・256
B 区 1 号 井 戸	384～395	384	384	443	443～454	133～137	65	244～250・256
B 区 3 号 土 坑	401							
B 区 42 A 号 土 坑	401							
B 区 44 A 号 土 坑	401							
B 区 47 A 号 土 坑	401							
B 区 51 A 号 土 坑	401							
B 区 52 A 号 土 坑	401							
B 区 53 号 土 坑	401							
B 区 55 A 号 土 坑	401							
B 区 56 A 号 土 坑	401							
B 区 57 号 土 坑	401							
B 区 58 号 土 坑	401							
B 区 59 号 土 坑	401							
B 区 60 号 土 坑	401							
B 区 61 号 土 坑	401							
B 区 62 号 土 坑	401							
B 区 63 号 土 坑	401							
B 区 64 号 土 坑	401							
B 区 65 号 土 坑	401							
B 区 66 号 土 坑	401							
B 区 67 号 土 坑	401							
B 区 68 号 土 坑	401							
B 区 69 号 土 坑	401							
B 区第40 B 号土坑	396			455			64	251～254
B 区第41 B 号土坑	396			455			64	251～254
B 区第42 B 号土坑	396			455			64	251～254
B 区第43 B 号土坑	396			455	455	137	64・65	251～254
B 区第44 B 号土坑	396			455			64	251～254
B 区第45 B 号土坑	396・397			455	455・456	138		251～254
B 区第46 B 号土坑	396・397			455	456	138		251～254
B 区第47 B 号土坑	396			455			64	251～254
B 区第48 B 号土坑	396			455				251～254
B 区第49 B 号土坑	396			455				251～254
B 区第50 B 号土坑	396			455			65	251～254
B 区第51 B 号土坑	396			455			65	251～254
B 区第52 B 号土坑	396			455			65	251～254
C 区第54 B 号土坑	396			455		138		251～254
C 区第55 B 号土坑	396			455			65	251～254
C 区第56 B 号土坑	396			455				
C 区第13号土坑	402			462	463	141		254
C 区第14号土坑	402			462				
C 区第15号土坑	402			462				
C 区第17号土坑	401～404		401	462	463～465	141		254～255
C 区第18号土坑	402・404			462	465	141	64	255

名 称	本 文 編 (1)					図表編	写真図版編	
	総 頁	遺構表	所 見	遺構挿図 (番号)	遺物挿図 (番号)	遺物	遺 構	遺 物
C 区第 23 号土坑	402			462			64	
C 区第 27 号土坑	402・404			462	465	141		255
C 区第 40 号土坑	402・404			462	465	141		255
C 区第 48 号土坑	402				463			
C 区第 52 号土坑	402			462				255
C 区第 53 B 号土坑	402・404			462	465	141		
C 区第 60 号土坑	402			462				
C 区第 79 号土坑	402			462				
C 区第 80 号土坑	402			462				
C 区第 81 号土坑	402			462				
C 区第 82 号土坑	402			402				
C 区第 83 号土坑	402			462				
C 区遺構外	405~431				466~492	142~161		256
B 区遺構外	431~436				493~498	161~164		
文字瓦類	437・442~473		437		500~531			
瓦当瓦類	437~441・474~502		437		499・532~560			

名 称	本 文 編 (2)					図表編	写真図版編	
	総 頁	遺構表	所 見	遺構挿図 (番号)	遺物挿図 (番号)	遺物	遺 構	遺 物
北側調査区 検出された遺構・遺物	503		503					
J 区置構配置図	504			561				
J 区第 1 号住居跡	505~508	505	507	562・563	564・565	165・166	67	257
J 区第 2 号住居跡	508~510	508	508	566	566・567	166	67・68	257・258
J 区第 3 号住居跡	510~512	510	511	568	569・570	166・167	68	258
J 区第 4 号住居跡	513	513	513	571	571	168	68	258
J 区第 5 号住居跡	514~520	514	514	572~576	577~580	168~171	68・69	258~260
J 区第 6 号址	521・522	521	521	581	582	171・172	70	260
J 区第 7 号住居跡	522~524	522	523	583	584・585	172	70	260
J 区第 8 号住居跡	524・525	524	524	586	587	172・173	70	260
J 区第 9 号住居跡	525~530	525	525	588~590	591・592	173・174	71・72	260・261
J 区第 10 号住居跡	531~536	531	531	593~595	596・597	174~176	73・74	261・262
J 区第 11 号住居跡	536~539	536	536・539	598・599	600	176	75	262・263
J 区第 14 号住居跡	539~542	539	539・540	601・602	603・604	176・177	75・76	263
J 区第 15 号住居跡	543	543		605	605	177	76	263
J 区第 16 号住居跡	544	544	544	606	606	178	77	
J 区第 17 号住居跡	544・545	544	545	607・608	608	178	77	263・264
J 区第 19 号住居跡	545~548	545	546	609・610	610・611	178・179	77・78	264
J 区第 21 号住居跡	548~550	548	548・549	612	613	179・180	78	264・265
J 区第 22 号住居跡	551~556	551	551	614・615	616・617	180~182	78・79	265
J 区第 23 号住居跡	556~557	556	556	618	618	182	79	266
J 区第 24 号住居跡	557・558	557	557	619	619	182	79・80	266
J 区第 25 号住居跡	558~560	558		620	621・622	182・183	80	266
J 区第 26 号住居跡	560~563	560	560	623	624~626	183・184	80	266・267
J 区第 27 号住居跡	564・565	564	565	627	628	184・185	81	267
J 区第 28 号住居跡	565・566	565	565	629	629	185	82	267
J 区第 29 号住居跡	567~569	567	568	630・631	631・632	185・186	82・83	267・268
J 区第 30 号住居跡	569~572	569	569	633・634	634・635	186・187	83・84	268
J 区第 31 号住居跡	572・573	572		636	637	187・188	84	268
J 区第 32 号住居跡	574~576	574	574	638	639・640	188・189	84・85	268・269
J 区第 33 号住居跡	576~579	576	576	641・642	642・643	189・190	85	269・270
J 区第 34 号住居跡	579・580	579	579	644	644	190	86	270
J 区第 35 号住居跡	581~584	581	582	645~647	648・649	190・191	86	270・271
J 区第 36 号住居跡	584~586	584	584	650	650・651	191・192	87	271・272

名 称	本 文 編 (2)					図表編	写 真 図 版 編	
	総 頁	遺構表	所 見	遺構挿図 (番号)	遺物挿図 (番号)	遺物	遺 構	遺 物
J区第37号住居跡	587~589	587	587	652・653	654・655	192	87・88	272
J区第38号住居跡	589~591	589	589	656・657	658・659	193	88	272・273
J区第39号址	591~593	591	591	660	661	193	88	273
J区第40号住居跡	591~593	591	591	660	661	193	88	273
J区第41号住居跡	594~600	594	595	662~664	665~669	194~196	89・90	273・274
J区第43号住居跡	600・601	600	600	670			90	
J区第44号住居跡	602・603	602	602	672	673	196	90	275
J区第47号住居跡	603・604	603	603	674・675	676	196	91	275
J区第48号住居跡	605	605	605	677	677	196	91・92	275
J区第52号住居跡	606~609	606	607	678・679	680・681	197・198	92・93	275・276
J区第53号住居跡	609・610	609	609	682	682	198	93・94	276
J区第54号住居跡	610・611	610	611	683	683	198	94	276
J区第55号住居跡	600・601	600	600	670	671	198	90	275
J区第56号住居跡	611	611	611	684	684	199		276
J区住居跡出土遺物追補	612		612		685	199		
J区第1号堀立柱建物跡	613・614		613・614	686	686	199	94	
J区第2号堀立柱建物跡	614		614	687			94	
J区第2号土坑	615			688				
J区第4号土坑	615			688				
J区第5号土坑	615			688			94	
J区第8号土坑	615			688				
J区第9号土坑	615			688				
J区第10号土坑	615			688	688	199	94	
J区第11号土坑	615			688				
J区第12号土坑	616			689				
J区第13号土坑	616			689				
J区第14号土坑	616・617		617	689	689・690	199~201	95	276・277
J区第15号土坑	618			691	691	201	95	277
J区第16号土坑	618			691				
J区第18号土坑	618			691				
J区第19号土坑	619			692	692	201	95	277
J区第20号土坑	619			692			95	
J区第21号土坑	619~621	619		693	694	201		277
J区第22号土坑	619~621	619		693	694	201	95	277
J区第23号土坑	619~621	619		693	694	201	95	
J区第24号土坑	619~621	619		693	694	201		278
J区第25号土坑	619・620	619		693			96	
J区第26号土坑	619・620	619		693			96	
J区第30号土坑	622			695				
J区第34号土坑	619・620	619		693				
J区第36号土坑	619~621	619		693	694	201		
J区第38号土坑	619~621	619		693	694	202		278
J区第39号土坑	619・620	619		693				
J区第41号土坑	619・620	619		693				
J区第42号土坑	619・620	619		693				
J区第45号土坑	622			695				
J区第47号土坑	619・620	619		693				
J区第51号土坑	619・620	619		693				
J区第52号土坑	619~621	619		693	694	202	96	278
J区第53号土坑	620・621	620		693	694	202	96	278
J区第54号土坑	620	620		693				
J区第61号土坑	622			695	695	202	96	278
J区第62号土坑	622			695				
J区第63号土坑	622			695			96	
J区第67~73号土坑	620	620		693				
J区第74~82号土坑	620・621	621		693				
J区第3号溝状遺構	623~626		624~625	696・697	699	202・203	96・97	278
J区第5号溝状遺構	623・625・626		625	696・698	699	203	97	278

名 称	本 文 編 (2)					図表編	写 真 図 版 編	
	総 頁	遺構表	所 見	遺構挿図 (番号)	遺物挿図 (番 号)	遺 物	遺 構	遺 物
J区第8号溝状遺構	627		627	700	700	203	97	278
J区第9号溝状遺構	627		627	700	700			
J区河川敷トレンチ	628~630		629	628・630			97・98	
J 区 遺 構 外	631~633				703~705	203~205		278・279
追 補								
南 側 調 査 区	634~642		634	706	706~713			
北側調査区 (G・H)	643・644		643・644	714・715	714・715	205		

第5章

題 名	総 頁 本文編(2)	挿 図 (番号)	図 表 (番号)
南側調査区			
B・C区の住居跡と その出土遺物	645~669	716~736	
金属器類と砥石類に ついて	670~679	743~741	
瓦について	679~680		
特殊遺物について	680~683	742・743	
土師器坏の成型技法 について	683~689	744~746	
吉井型羽釜について	689~697	747・748	

題 名	総 頁 本文編(2)	挿 図 (番号)	図 表 (番号)
北側調査区			
J区第14号住居跡出 土畿内産土師器につ いて	698~701	749~751	
J区第28号住居跡出 土遺物について	701~702	752・753	
J区住居跡出土の特 異な須恵器について	703~705	754~756	

付 章

題 名	総 頁 本文編(2)	挿 図 (番号)	図 表 (番号)	写 真 図 版 編
上野国分僧寺・尼寺中 間地域出土の動物遺存 体	707~938	757~822	1~52	280~313

第1章 調査経過

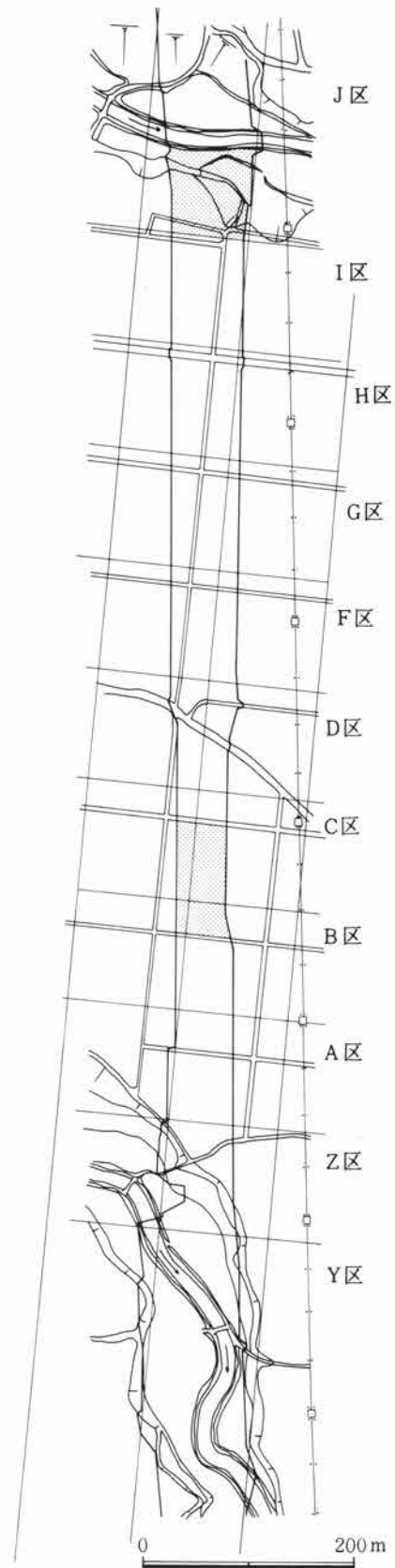
第1節 調査経過

当遺跡の調査経過及び体制については、上野国分僧寺・尼寺中間地域(1)～(3)の例言等に詳しいので簡潔に触れると、本調査に先立ち、群馬県教育委員会文化財保護課によって昭和54年度後半に遺構密度を把握する目的で、路線に沿った南北トレンチ及び直行する等間隔の東西トレンチによる試掘調査が実施された。その後翌年の昭和55年5月から財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団により、南北に調査区を分けた2班体制で本調査が開始された。そして昭和57年度には調査体制が2班から1班となり、調査方法の迅速化が要求されると共に、本線と側道及び工事用道路の分割調査が実施され、調査最終年度である昭和58年度まで継続した。

本報告書に掲載した南側調査区のB・C区は、昭和56年からI班（佐藤・木津・麻生）が調査に着手した。また、この調査区は国分僧寺と国分尼寺の中間地域に当たり、本報告書の名称の由来ともなった区画であり、その位置関係の重要さから昭和46年に文化庁・群馬県教育委員会・関東地建等の協議によって高架橋による遺跡の保存がはかられた部分である。この高架橋の橋脚の設置位置については、昭和56年度の調査所見に基づき遺構の破壊が最小限に止どまるよう、日本道路公団・群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団の三者で協議がなれた。その結果、橋脚台部以外の部分については、中世から平安時代の面までの調査に止どめ、特にB区第1号溝状遺構・C区第1号掘立柱建物跡・C区第1号溝状遺構を重要な遺構と認識すると共に破壊を最小限なものとし、さらに検出した住居跡についても住居跡床面下及びカマド掘り方の調査をしない状態で極力遺構の現状保存に努め、確認面から約30cm上位まで山砂で埋め戻しを行った。

北側調査区のJ区は、当遺跡最北端に位置する区画で、II班（石井・桜岡）が昭和55年度から調査に着手し、ほぼ1年間で調査終了した調査区である。調査は台地上の遺構調査を先行した後牛池川河川敷の調査を実施した。河川敷調査は、昭和54年度の試掘調査において遺構の確認を行っていなかったため、南北トレンチによる遺構確認、及び河川敷の形成についての調査を目的とした深掘を行った後、本格的調査を実施した。

当遺跡全体で最終的に検出した遺構は、住居跡約1,350軒、掘立柱建物跡約40棟、土坑約1,500基、土壌墓約70基等である。

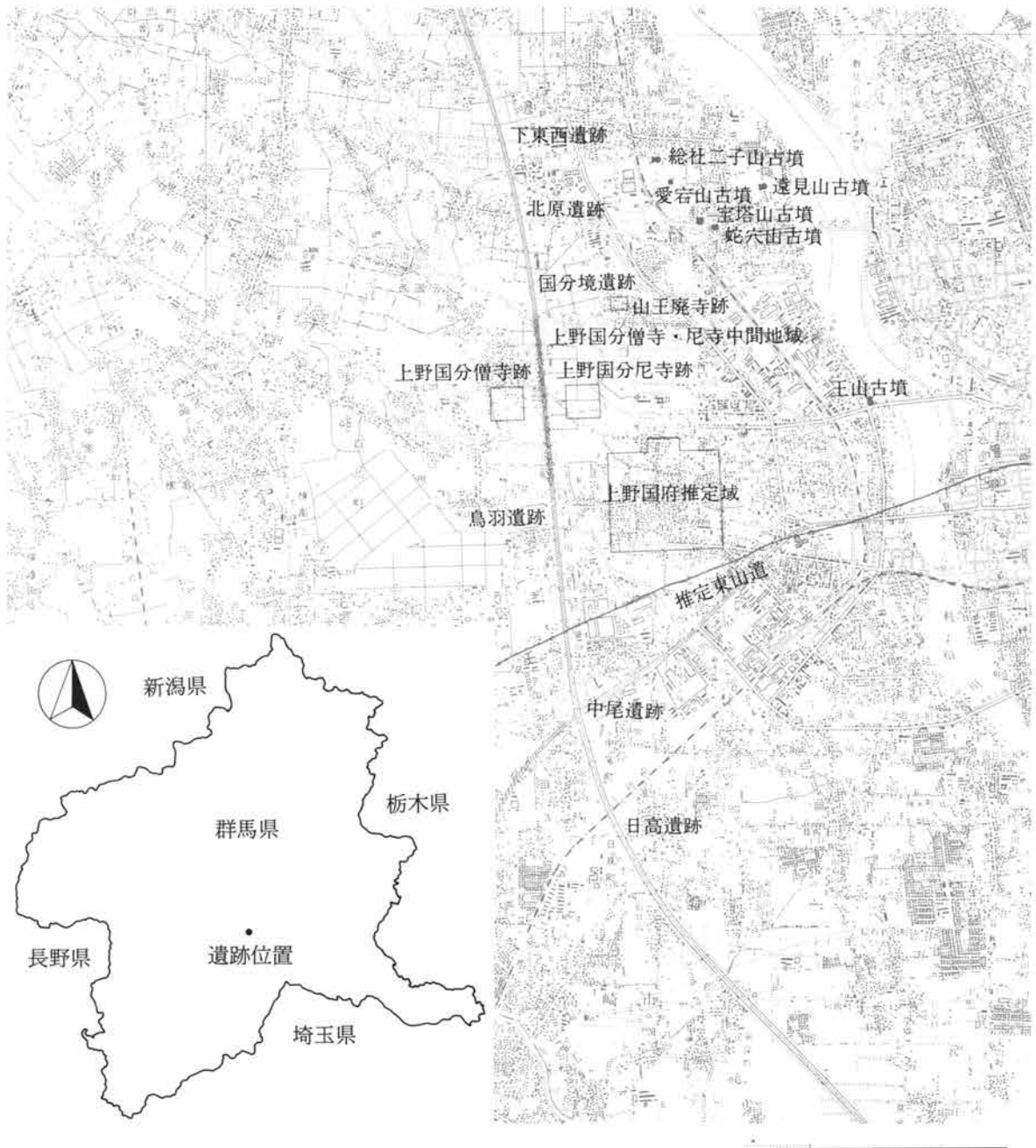


第1図 調査経過概念図

第2章 遺跡位置

第1節 遺跡位置

当遺跡は、群馬県のほぼ中央わずかに南寄りに位置しており、南流する利根川右岸の、前橋市中心部から西へ4km付近の前橋市元総社町および群馬郡群馬町東国分の両地区にわたって所在している。遺跡立地は、北側を牛池川に、南側を染谷川によって開析された前橋台地と呼ばれる平坦な洪積台地上である。当遺跡からは縄文時代前期から中世までの遺構が多数検出されており、周辺に関連する多くの遺跡が点在している。これらの遺跡立地や周辺遺跡の詳細については、上野国分僧寺・尼寺中間地域(1)～(3)を参照。

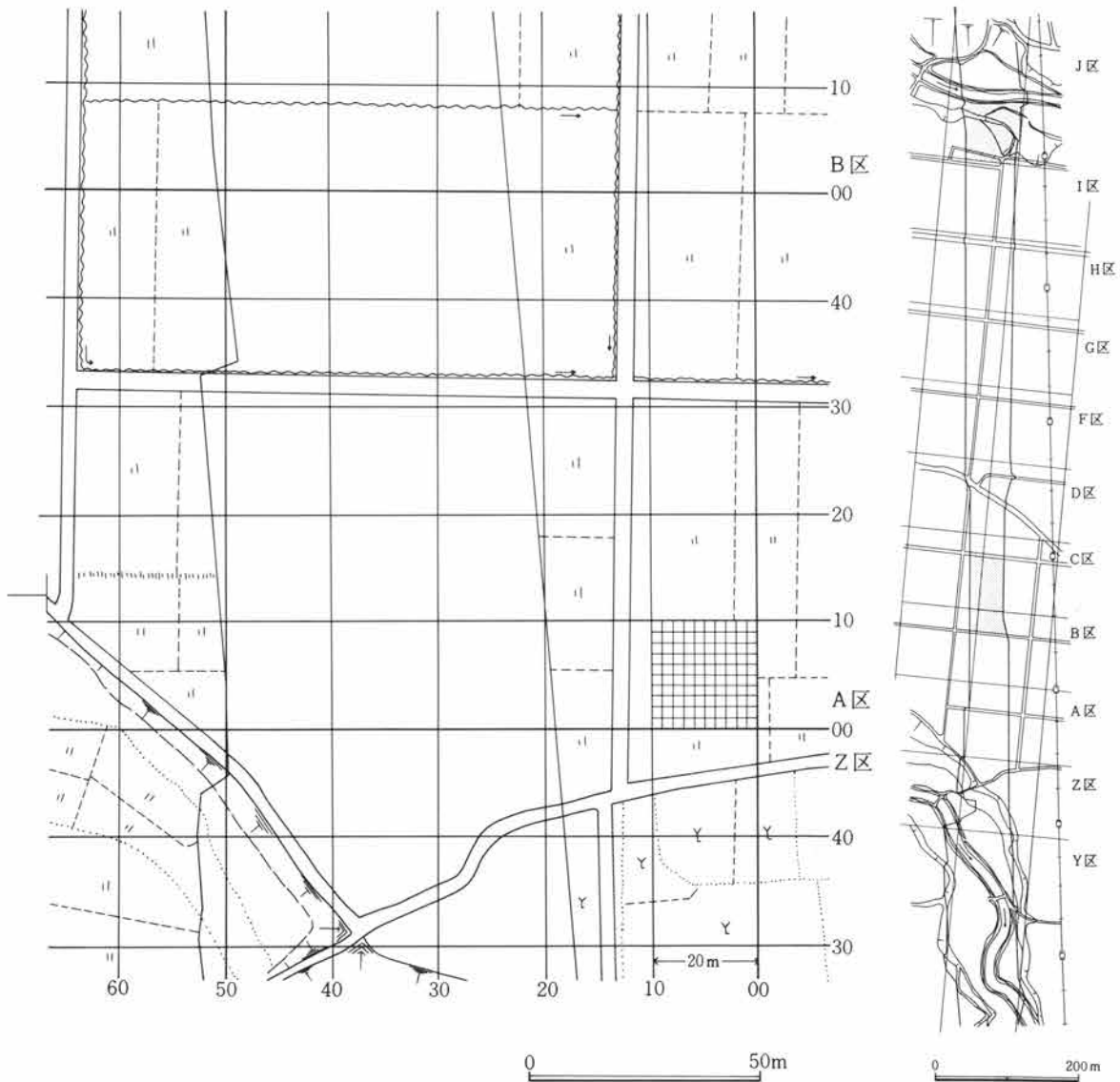


第3章 グリッドと基本層序

第1節 基本杭とグリッド

調査区のグリッド設定は、史跡上野国分寺跡の保存整備事業との関連も考慮して、国家座標を使用した。基準としたのは、調査区南の染谷川左岸に位置するIX系X=43400、Y=-72100である。この位置を00として南北100m、東西200mを大グリッドとして南からY（河川敷）・Z・A～J（Eを除く）の11区を設定した。また、大グリッド内は、南東コーナー部を基準として北方向に0～50（50=次大グリッドにおける0）、西方向に0～100の数字を与えた2m×2mの小グリッドに区分した。杭の設定は、調査の便宜上10mごとに行ない、必要に応じて増設した。

小グリッド名称は、大グリッド同様南東コーナー杭名称をもって呼称することとし、（X軸上の数字）-大グリッド名-（Y軸上の数字）として表記した。



第3図基本杭とグリッド

第2節 基本層序

当遺跡は榛名山東南麓・浅間山東方に位置し、両山の火山活動の痕跡は土層中において顕著に認められた。基本層序は上述の火山活動時に噴出された「火山灰・軽石」を含有するもので、その種類の含有等により分層できる。基本層序は第4図に示したとおりであるが、各調査区の地点により層厚等差異が認められるが、おおよそ図示した状況であり、図はD区での状況を模式図化したものである。

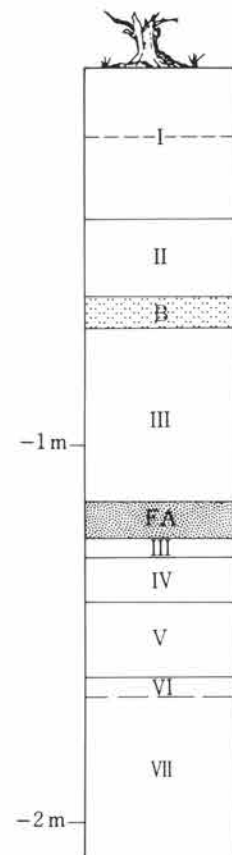
上層は7層に分層できる。地山はローム土層であり、同層下位は火山系のシルト層でその粒子・色調によって分層できるが、ここではローム土層を地山と呼称し、ローム土層下位の土層については井戸跡の断面図を参照されたい。ローム土層は堆積時の状況により2分される。これは黄褐色を呈する部分と濁橙褐色を呈する部分である。前者は比較的乾燥状態での堆積で、後者は水性ないし水の流路部であった可能性が指摘されている。さらに前者は砂質味を帯びる部分等も認められ、後者は粘性に富んでいる。これらの状況は、両者が調査区内を横断する様に認められる点で、地形の傾斜方向に沿うと考えられる。また、この両者のあり方は上位の層にも影響を及ぼしており、前者の上位層のIV・Vは粗粒質土であるのに対し、後者の上位層のIV・V層は比較的微粒質で粘性に富んでいる。

このローム土層の堆積した段階では地山の起伏が著しく、上位層はこの起伏を埋める様な状態で堆積しており、おおよそ平坦になったのは奈良時代に至っての頃と考えられる。また、調査区の部分によってはV層土の層厚の変化が著しいが、倒木痕の調査によりV層土は調査区全体に均一的に堆積していたことが判明した。

基本層序

- | | |
|-------------|--|
| I層一表土層 | 濁暗褐色を呈する。昭和35年に実施された耕地基盤整備事業以降の土壤、全体的に発色が濁る。また、上述の昭和35年以前の土壤の存在も認められる。この土層は調査内の地点により存在し発色もやや暗い。両者は砂質味が強く、下位のII層土を主体に耕作された土壤である。 |
| II層一黒色土層 | 浅間山供給のB軽石を多量に混入する。砂質味もB軽石により非常に強い。発色はIV層土に次いで暗い。本土層はB軽石降下以降(天仁元年とすれば1108年以降)から近世ないし近代に至る間の土壤と考えられるが、おおよそ12世紀から17世紀頃の年代が考えられる。これは文化層として出土した遺物の年代観からであり、中世遺構の覆土の主体をなす土壤である。 |
| B 一浅間山給源B軽石 | 基本層序の中では土壤としての層とは把握しなかった。B軽石は前述した粘性を帯びるVII層土上位に遺存する傾向が認められた。降下時期は天仁元年(1108年)・天永3年(1112年)・弘安4年(1281年)等が考えられるが、現状では天仁元年(1108年)説が有力視されている。 |
| III層一黒褐色土層 | 浅間山給源のC軽石を多量に混入する。砂質味はほとんどなく、粘性も際立ったほどでもない。C軽石の降下年代は4世紀頃であるが、本土層とIV層土に主体的に混入する。本土層は古墳時代中期以降B軽石降下直前までの間の土層で、上述した間の遺構の覆土の主体を成す土壤である。また、本土層下位では古墳時代後期以降降下した榛名山二ツ岳供給のFAが埋没する畠状の遺構が検出されており、IV層土との間隙は5cm前後である。 |
| IV層一黒色土層 | 浅間山給源のC軽石を多量に混入する。III層土より粘性があるが顕著なものではない。本土層は層として確認されたものは比較的薄いのが、古墳時代前期の住居跡の覆土は本土層を主体として埋没している。この点から古墳時代前期以降の何らかの作用を想起せざるを得ない。FAが存在する部分の畠のサク内だけであり、他の部分に降下したFAは土と共に攪拌され、IV層・V層の色調の差に現われたものと考えられる。 |
| V層一暗褐色土層 | 本土層は比較的さらさらした感の土層であり、明定できる軽石は認められないが、細粒の白色粒子(鉱物質)・黄褐色粒子を含有している。また、本層中には特に南側調査区で縄文時代の遺物を多量に包有している。さらに北側調査区の弥生時代の住居は、上述のIV層と本層の中層的な土壤により埋没している。縄文時代の遺構は本土層と褐色味の強い土壤により埋没している。 |
| VI層一濁橙褐色土層 | VI層土はソフトロームに相当する層である。VII層土は前述したローム層であり、D区では粘性の強いローム土であった。 |
| VII層土層 | |

註1 新井房夫先生の御教示による。



第4図 基本層序

第4章 検出された遺構・遺物

第1節 南側調査区

第1項 C区について

上野国分僧寺・尼寺中間地域（以下、中間地域と略称）の発掘調査報告書は、本冊で才4分冊目である。この今才4分冊は、南側調査区のB（一部）・C区及び北側調査区のJ区である。本項では南側調査のB・C区に就いて概述し、前刊第3分冊で報告したD区を含め記述したい。

このB・C・D区は上野国分僧寺・尼寺が併列し、推定寺域一辺方2町の各々の東・西の延長部分であり、二寺の中間部分に当たっている（中間地域の遺跡名称された要因である）。そして、この希有な状況に鑑み、高速道路の計画が発表されて、即座に計画変更等の要望が民間組織の「国分寺遺跡を守る会」により出されている。これらの諸事情により調査着手以前より保存問題の惹起した部分でもあり、昭和46年に実施された発掘調査所見を元に、群馬県教育委員会・文化庁・関東地建の三者での協議結果、高架方式とすることに決定された。この間の経過・問題等に就いては第一分冊中に詳述されているので参照して戴きたい。

この高架方式は、発掘調査所見に基づき計画がなされており、計画は、以下の観点から二回の設計が行なわれた。

- ① 国分二寺の景観保存。
- ② 発掘調査所見。

以上の2点を昭和56年11月11日に内容の確認がなされた。そして、この内の後者が調査担当として間接的に係わったが、調査時点での所見は、整理を実施した現段階ではより具体的な所見を得ており、本項では、調査当時の所見を補足する形で、この保存部分の高架橋の位置選定に係わる調査所見を記述したい。

当該部は、調査の便宜上設定したB区の北側及びC・D区に当たる。調査は、昭和55年4月に着手し、同58年に完了した。検出した遺構は、7世紀～11世紀にかけての住居跡209軒、土坑及び柱穴状遺構277基・溝状遺構16条と、14世紀～20世紀（主としては14世紀～16世紀）寺院址1ヶ寺及びこれに付随する掘立柱建物1棟・基壇1基・竪穴状遺構2基・地下式土坑1基・暗渠遺構1条・井戸3基・土壇墓42基・溝状遺構4条（掘を含める）・土坑・柱穴状遺構426基等である。遺物は、前者で土器類・瓦類多数と特筆し得るものとして、国分二寺に係わる金銅製男神立像1軀・金銅製装飾金具2点・「法花寺」墨書土器（B一号井戸埋設に直接係わる祭祀埋納）・輸入青磁・白磁等がある。後者では、室町時代の瓦葺き建物に葺かれた瓦多量と土器・陶磁器類・石造品・石製品等が多数出土している。

これらの多数に互る遺構の中で、中世溝（C1・4・7・B1溝）は、居館跡乃至寺院の堀と考えられ、その走行方向も古代もそれと殆ど変わらない点から、地割を考える上で重要なものと考えられ、この中で、B1溝・C1溝は特に重要性が考えられた。更に古代溝では、C5・6・8・9・10・12・18溝は条里制に基づくものと考えられ、特にC6・9・10溝は、国分二寺の東大門・西大門との係わりが想定される特に重要な存在であること等から、主眼はこれらの溝状遺構に置かれた。そして、住居群及びその他の遺構は、各々の新旧関係による破壊が顕著であった為これらを従と考えたが、「法花寺」墨書土器を祭祀遺物と埋納したB1井戸にも溝同様に重要遺構と考えた。

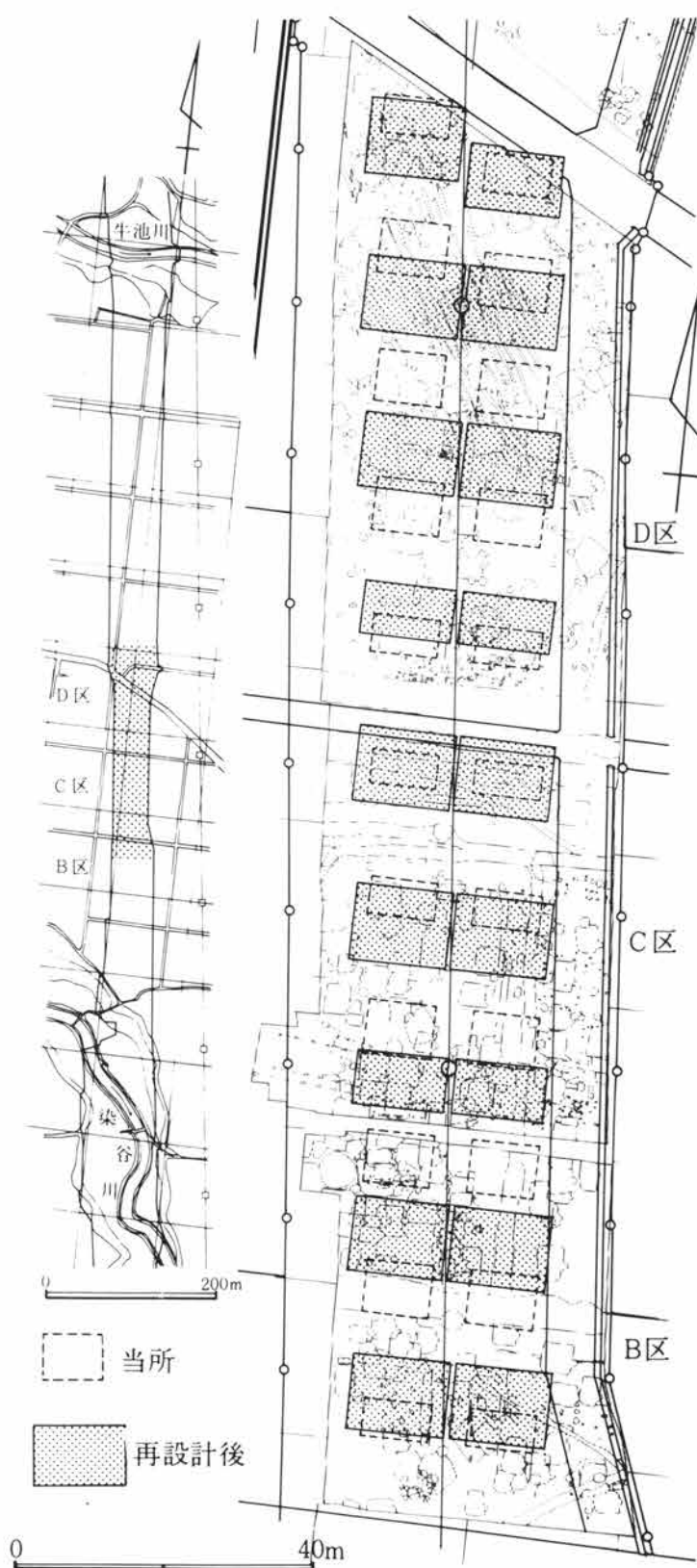
上述した調査担当者側の所見を基本とし、道路公団から提出のあった第1案の検討を行なった。第1案は、橋脚22基（11脚×2列）で、B1溝が完全に重複し、C5・6・11溝が重複する。この為、これらの溝等が

第4章 検出された遺構・遺物

完全に破壊されることから、別案の提示を県教育委員会より日本道路公団に求められた。この結果を踏まえ、第2案が提示された。この第2案は第5図のとおりである。橋脚18本（9脚×2列）で第1案より4本減ぜられた設計となったが、フーチング面積が100㎡弱増加した。しかし、古代のC6溝が破壊される点には変化がなかったが、B1溝・B1井戸の破壊が免がれた点と、橋脚数の減による「景観」に対する改善が認められたことによりこの第2案により施行実施になった。

この第2案によるフーチング面積の増加により、完全に破壊された遺構も第1案よりその数の増加があったが、調査側の所見である溝状遺構は辛うじて破壊を免がれ、当時の諸般の事情の中では最善のものであったと考えている。

この橋脚施行に伴う工事（フーチング）以外の部分は山砂を埋設し保存をはかった。この保存部分は溝状遺構に主眼を置いたが、この理由は調査段階では未だ漠然としていたが、今次の整理業務を実施する中で、当該部分の遺跡としての性格がかなり鮮明化された。そして、古代においては、B1井戸内出土の「法花寺」墨書土器・溝状遺構・小鍛冶遺構等の遺構・遺物から、国分尼寺に直接的に係わりがあったことが考えられ、中世（14世紀～16世紀）には、上野守護代長尾氏の菩提寺として濃厚な可能性のある仮称「小見庵寺」の存在等が明らかとなり、その重要性は、保存問題を惹起させるに十分な遺跡内容であることが明らかになった。今後は、文化財保護上の観点から、当該部の活用を何如になすかが課題であるとする。（木津）



第5図 保存部分概況図

第2項 検出した遺構・遺物

サク状遺構（FA埋没畑跡）

当該報告区にあたるC・B（北側）区（以下C・B区と略記する）における当該遺構は、前刊第3分冊中に掲載したD区の畑跡の如く広範囲に亘り検出されたものではなく、極部分的に検出されたものである。この部分的に検出された主な要因として、後世の遺構等による攪乱が顕著である点にあり、検出部分は、後世の遺構等が検出されない部分であった。

一方、前刊書中のD区の畑跡は、C区を境として検出されなかったが、これは畑耕作時の旧地形による要因が考えられ、検出出来なかった部分は、旧地形が自然提防状に高まっていたと考えられ、この部分に後世の攪乱が及ぶに至ったことが考えられた。又、昭和45年の中間地域試掘調査で検出された「ロームブロック^{註1}」はC1溝の西方30m程の所であり、この調査例も畑跡であることが認識出来ることより、台地上にかなり広範囲に畑作が行なわれていたことが考えられる。

C・B区で検出された畑跡は、C1溝とC4溝に挟まれた部分で4条。16～20—C—43～49のC55・28住付近で6条が検出され、この外、B区寄りの部分で認められている。前述のとおり極部分的に検出されたことによる数値である。

中間地域全体では、当例の如く、極部分的に検出されている部分として、Z・A区（古墳時代前期の住居跡の被覆土内で検出）（第1分冊参照）・F・G区（第2分冊参照）・H・I・J区等で認められ、D・C区（第3分冊参照）では、調査区全体に及んでいる二者での存在がある。これらの点と、昭和45年の調査例を加味すれば、台地全体に畑跡が存在した可能性は非常に濃厚で、染谷川・牛池川沿岸の集落は、この畑の耕作者集団のそれであったことが、ほぼ確定し得る。さらに、近年前橋市元総社地区で牛池川の河川改修に伴う発掘調査で検出されているFA埋没の水田跡^{註2}は、同様に、牛池川沿岸の集落の構成員になることも判断され、集落と耕作地が至近の位置関係であることが判断される。

上述してきたとおり、当該の畑跡は、台地全面に及んだことが推定出来、その耕作者は染谷川・牛池川の両沿岸の集落の構成員であったことが推定出来る。詳細は第3分冊第3章周辺遺跡を参照されたい。

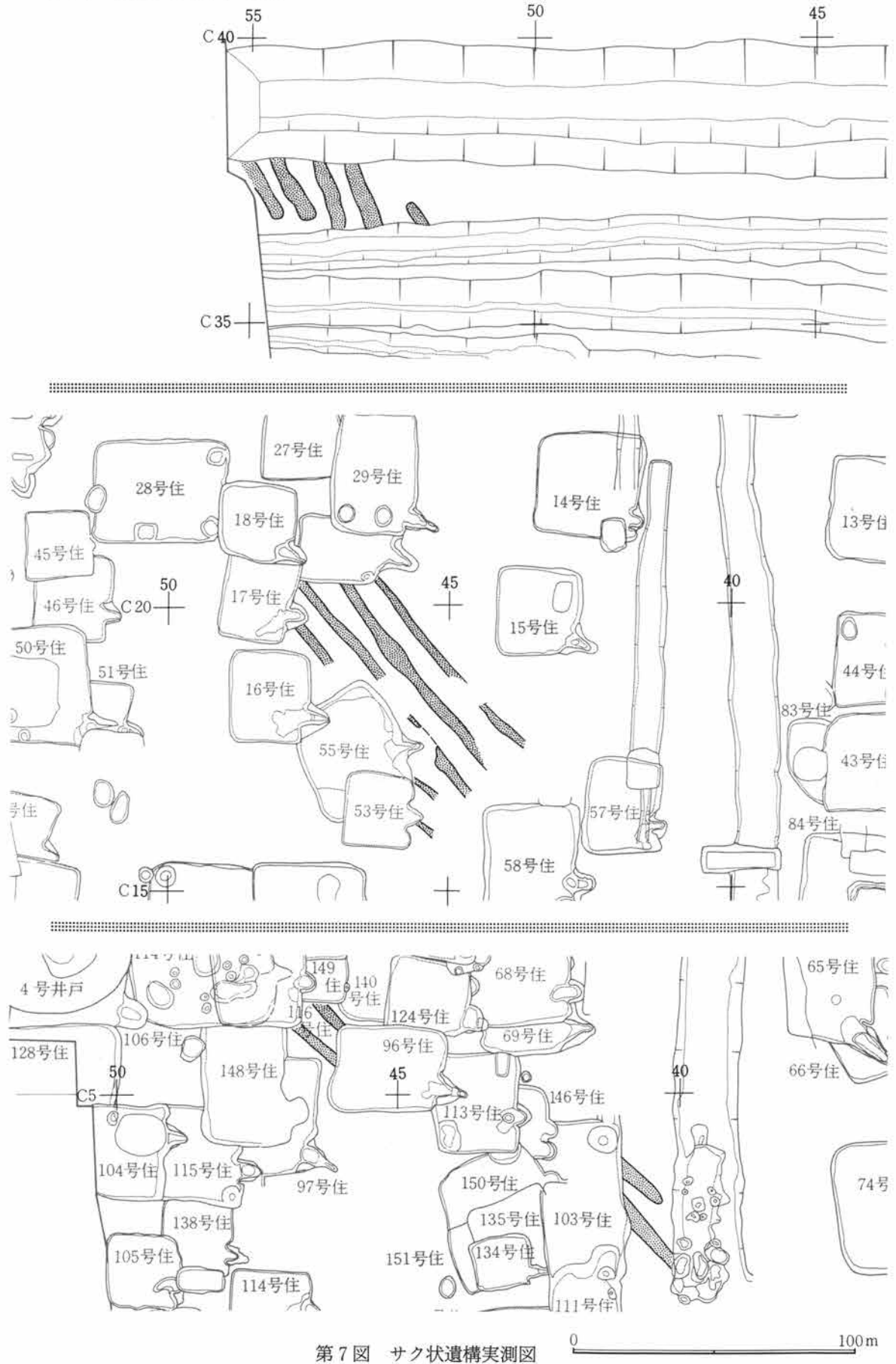
註

1. 群馬県教育委員会「上野国分寺周辺地域発掘調査報告」一僧寺尼寺中間地域の考古学的検討—1971（昭和46年）
2. 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団が調査実施している。



第6図 昭和46年度試掘調査時検出「ロームブロック」、写真

第4章 検出された遺構・遺物



第7図 サク状遺構実測図

溝状遺構

概況

当概報告区で検出された溝状遺構（以下溝と略記）は、東西走6条・南北走2条・北西から南東走1条があり、合計9条で、これに中世（14世紀後半～16世紀前半）の東西走4条・南北走（暗渠）1条の溝を加えれば14条となり、その内の9条の東西走のものは極限定された範囲内で検出され、密集度が高く、調査区内全体でも最も密集している。

これらの溝は、中世溝の存在からも一時での併存は極限定されており、仮に国分僧寺・尼寺を中心に時期区分を行なえば、1 建立以前。2 存続中。3 廃寺以後の3 時期での存在である。そして、これらの東西走する溝の中で密集する9条は、国分僧寺東大門・尼寺西大門のほぼ延長上にあたり、国分二寺の配置関係（土地区画）とは無関係でなかったことが示唆される。更に、国分二寺が、国分寺創建以前に存在したであろう「条里」に基づき建立があったとするならば、これらの溝は「条里」とは無関係でなかったことが類推し得る。この点から、国分二寺に先立つC 8 溝（後述）は、国分寺建立以前の「条里」の実態を考えるに非常に重要な存在であることが推察されるのである。

則、当該の溝の一群は、古代～中世の地割の実態を如実に示す存在であることが、最大の意義である。

以下、各溝毎に記述する。

C区第5号溝状遺構（C 5 溝）

当溝は調査時の不手際により詳細不分明な点があり、調査担当としての責任を感じている。

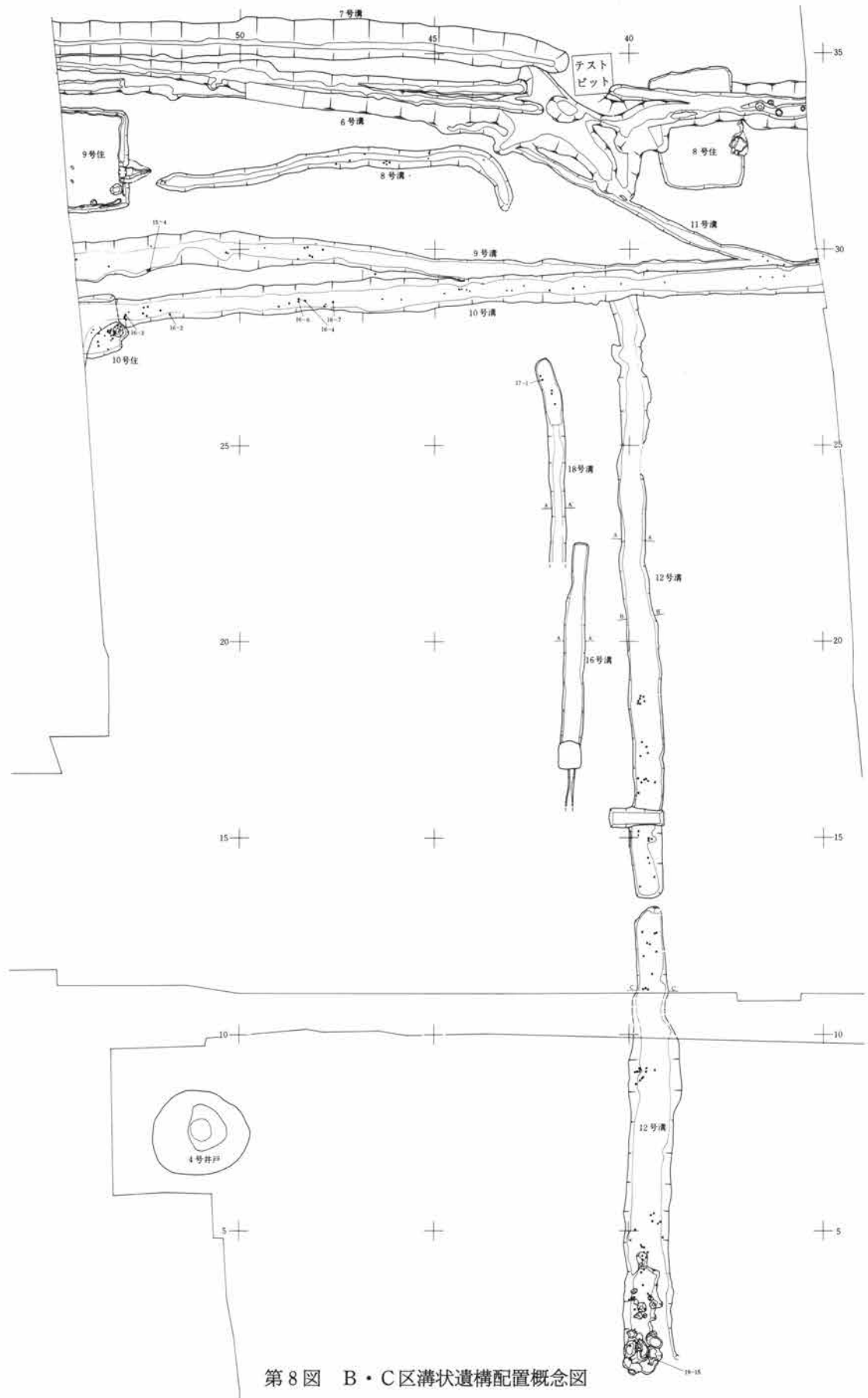
当溝は、6・7 溝と重複し同一部分に3条の重複が認められることは、この3条が如何に重要な溝であったかが、位置関係からも明らかである。

確認時の状況は、第II層土（中世文化層）直下で検出され、調査区東側部周辺部で淡青灰色を呈する軽石に充満した状態で検出された。更に、この軽石の直下には通有に認識されるB軽石ユニットの埋没する6溝を切る状態であった。この状況は、B軽石ユニット—淡青灰色軽石—第II層土^{註1}の堆積経過があり、淡青灰色軽石とB軽石ユニットには間層認められなかった。然し、この淡青灰色軽石の状況を写真撮影により記録せんと周囲を清掃を実施したが、計らずもこの淡青灰色軽石はなくなってしまい、遺構自体詳細な状況は完全把握出来なかった。清掃時鋤簾を用いたことにより、約5cm程削平した結果に原因している。更に、調査区東端の壁面には認められなかった。

この淡青灰色軽石の埋没する溝に切られるC 6 溝を調査区東端壁面で観察すると、B軽石ユニットの上層には、B軽石の混入の認められない覆土の堆積（人為層か）（付図1参照）が認められる。この溝内でのB軽石ユニットは、溝全体に水平堆積しており、この状況から、上層に認められた覆土は、淡青灰色軽石との間層と認められる。この間層は、溝自体の遺存状態・当溝の溝底面が部分的に低い状態であったことにより、切り合い部分で認められなかったのかも知れない。これらの状況から、当該溝を被覆した淡青灰色軽石は、B軽石降下後若干の時間を置いて降下したB軽石に類する様な軽石であることが考えられる。

一方、この軽石の状況を新井房夫先生に現地で（軽石を逸して後）御説明し上げたところ、当該の淡青灰色軽石は、検出時の状況からB軽石ではないのかという御指導を戴いた。この御指導の内容は、従前よりB軽石の降下年に対し、文献資料で「中右記」の記述内容からの「天仁元年（1108）説」と「弘安4年（1281）説」があり、当溝とC 13溝で認められた状況から、当溝内に被覆した淡青灰色軽石は、後者の「弘安4年」に降下した可能性も考慮される。然し、通有に認識されるB軽石ユニット自体、天仁元年説を確定し得るだけの根拠も現状では無い。尚、当該の淡青灰色軽石は、現在当遺跡のみで確認されているだけである。

第4章 検出された遺構・遺物



第8図 B・C区溝状遺構配置概念図

C区第13溝状遺構（C13溝）（付図2）

当溝は前述のC5溝に切られ、C6溝を切りほぼ重複する状態で構築している。走行方向は北-96度-東である。覆土は、溝底面から確認面までB軽石ユニットが認められ、上層にB軽石の混入が認められない濁褐色を呈する被覆土が認められた。

当溝は下位のC7溝（改修が3次に亘っている）とほぼ同じ位置に構築される点にその重要性があり、長期に亘り、当溝・C溝が存続させる意義が存在することによる所産と判断される。

C区第6号溝状遺構（C6溝）（付図2）

当溝は前述のC13溝に切られ、C13溝がほぼ重複している。走行方向は北-91度50分-96度-東で一様ではないが、これは、改修に伴ない若干のずれにより生じている。

改修は3次期に亘り実施され、付図2に図示したものは、この3次期に亘る改修の結果による状態であり、各改修段階の状態での図示ではなく、調査時の不手際により詳細な作図は出来なかった。この3時期に亘る改修の状況は調査東端での断面より所見を得た。以下各時期別に記述しておく。

第1期 第1期は最古の状態を示す。この第1期の断面形状は溝底幅0.88+ α m程で断面は箱堀りである。覆土は、水性堆積により砂の堆積が認められ、中央部の不整状の部分では30cm程の堆積が認められたが、調査区両端では3~5cm程しか認められなかった。この堆積は西から東に向かい水流があったことが確認出来た。又、この水性堆積の上層には、改修された状況が断面で確認出来た（第2期・第3期）。

第2期 第2期は第1期同様であるが、第3期の改修により大半が失われていた。土層断面では、第1期の溝底面直上で認められた砂層と同様な状況は、本期では認められなかった。又、溝底面は、土層断面で見ると平坦な状態は看取されず、緩やかに丸味を帯び、北側はそのまま壁として立ち上がり、南壁は斜位に立ち上がっている。そして、覆土全体は、上位の第3期の水成堆積の影響を受け、全体の発色が濁った状態であった。

第3期 第3期は、当溝の最終改修の段階である。幅は土層断面で1m程で、断面は「U」字状を呈する。覆土全体は、水成堆積による砂質土の堆積が顕著で、時に、C8住の北西部周辺では、その状態が特に顕著であった（写真図版参照）。出土遺物は、この第3期に伴うものがほぼ全てに近い。又、出土遺物は瓦・礫が主体を占め、中には、水流の影響によるのか磨滅した土器類・瓦類が認められた。

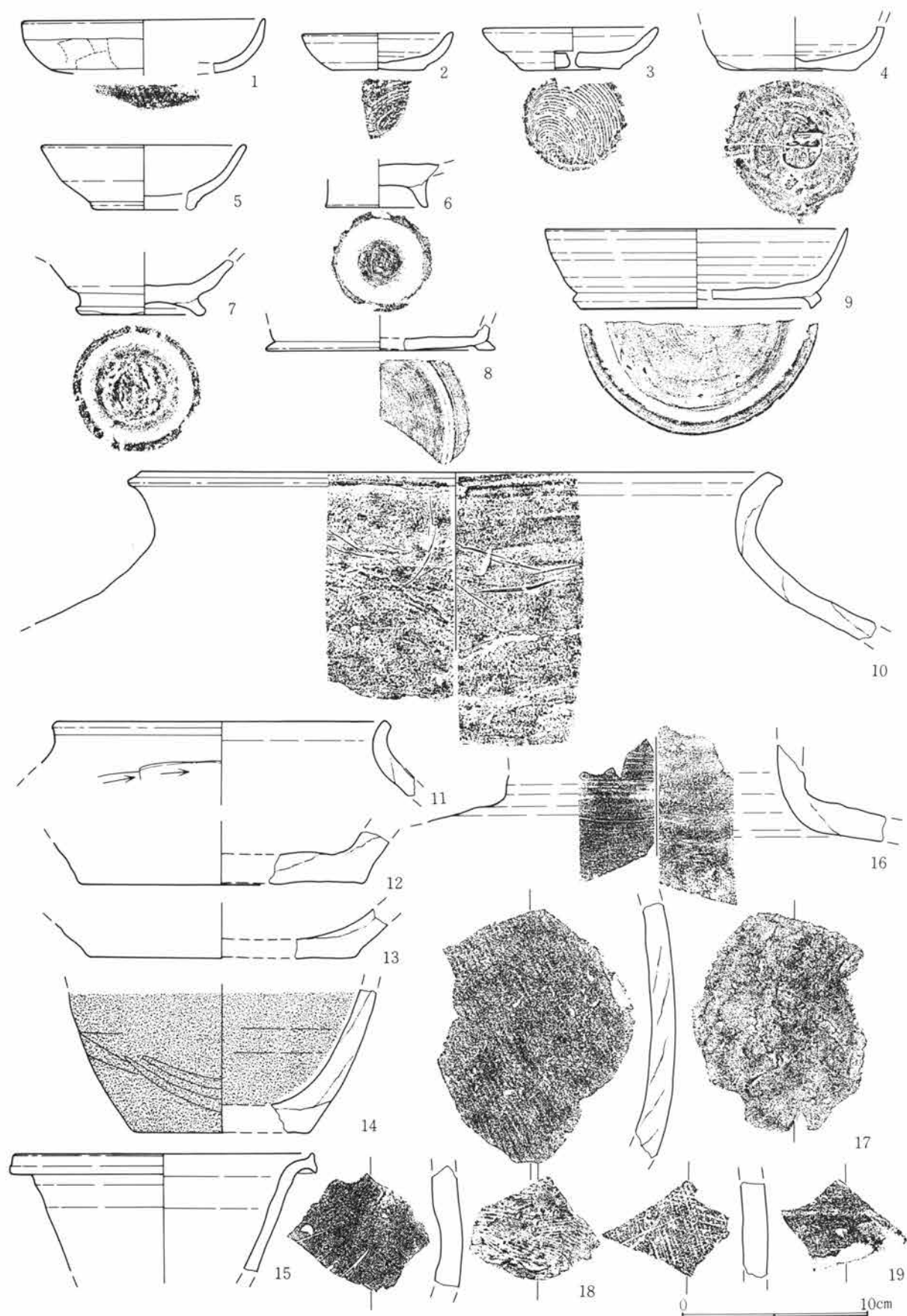
当溝の最大の特色は、3期に亘る改修と、水成堆積の状況が看取された点にある。この2点の特色の内後者は、当該区の溝状遺構が集中している点に、その背景たる要因が考えられる。前者は、当時の生活面（B軽石降下面下の文化層-調区断面）に認められなかった現象である。

一方、国分僧寺では、地域内東大門周辺では、冠水の痕跡が顕著である。恐らく、北側からの雨水等が、築地北縁を破壊し、これにより寺域内に水の進入があったものと思われる。これは、国分僧寺の造営時に地形を平坦に削平した際、北縁側を掘鉢状の地形にしたことによると考えられる。

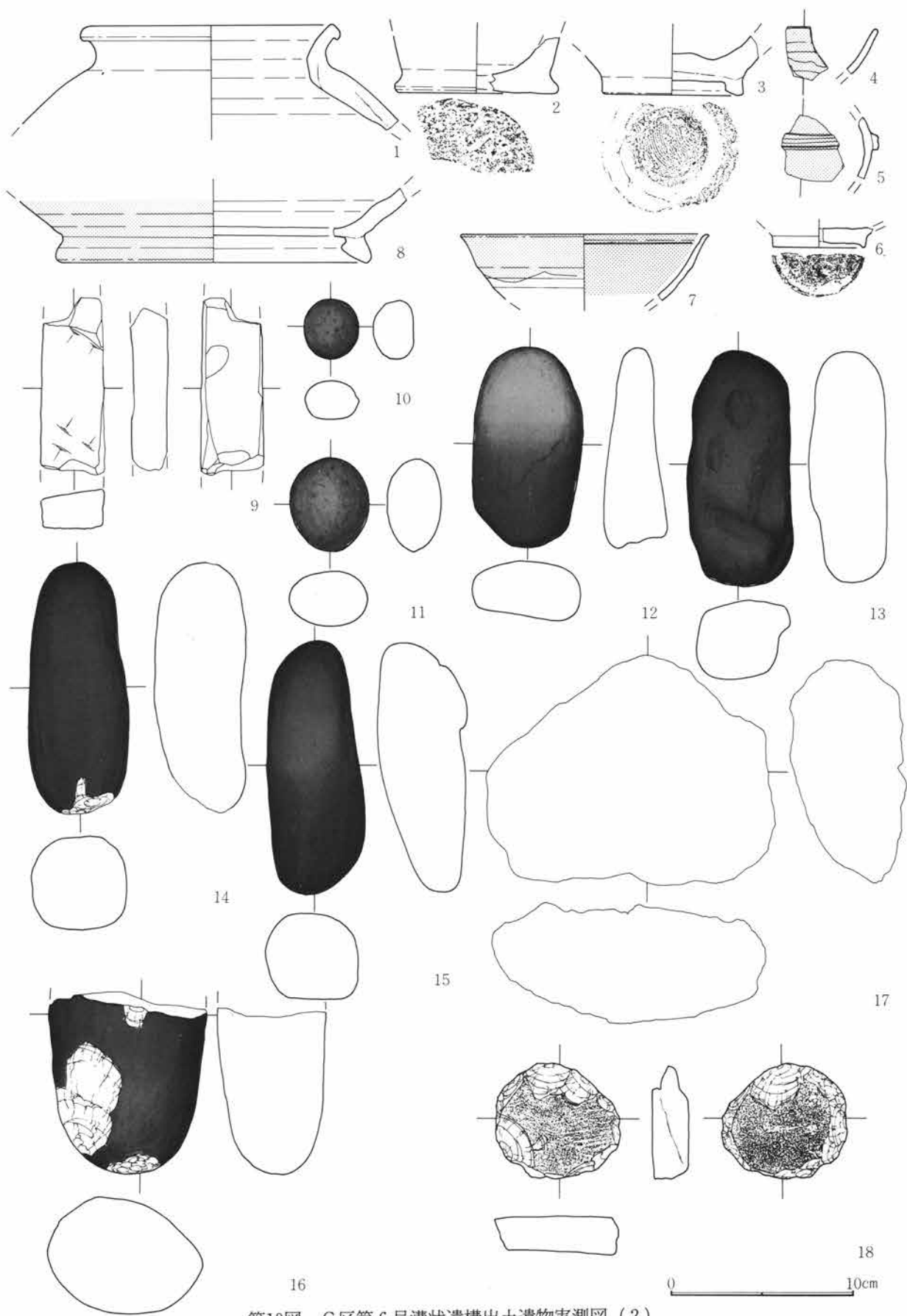
上述の様に、国分僧寺は、雨水との戦いも想起され、これらの雨水を寺域・寺域周辺から処理することがはかられたと類推出来る。則、本溝は、上述した雨水の処理等もその機能の一部にあった可能性が想起される。当溝の廃棄は、出土遺物から10世紀末頃と考えられる。

C区第8号・18号溝状遺構（C8溝・C18溝）（付図2）

溝は幅0.8m~1m程で、断面は浅い「U」字状を呈する。この両者は溝は、調査区内を「鍵の手状」に区画した施設に伴うと考えられ、その北東部（C8溝と18溝の境の部分）は入口状になり、溝は構築されていない。そして、この双方の溝に平行する様にC9・10溝が構築されている。廃棄時期は、8世紀前半代と

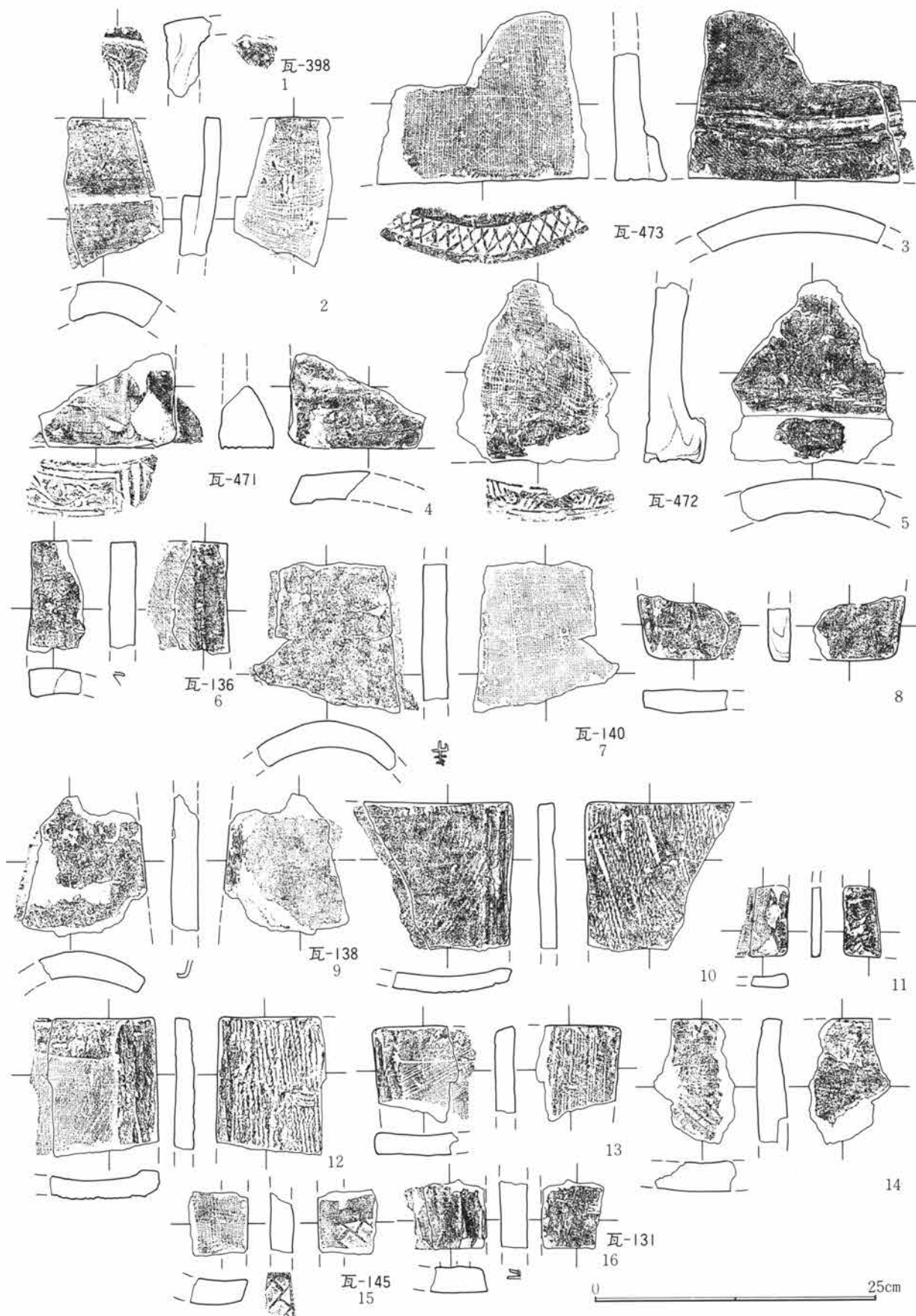


第9図 C区第6号溝状遺構出土遺物実測図(1)

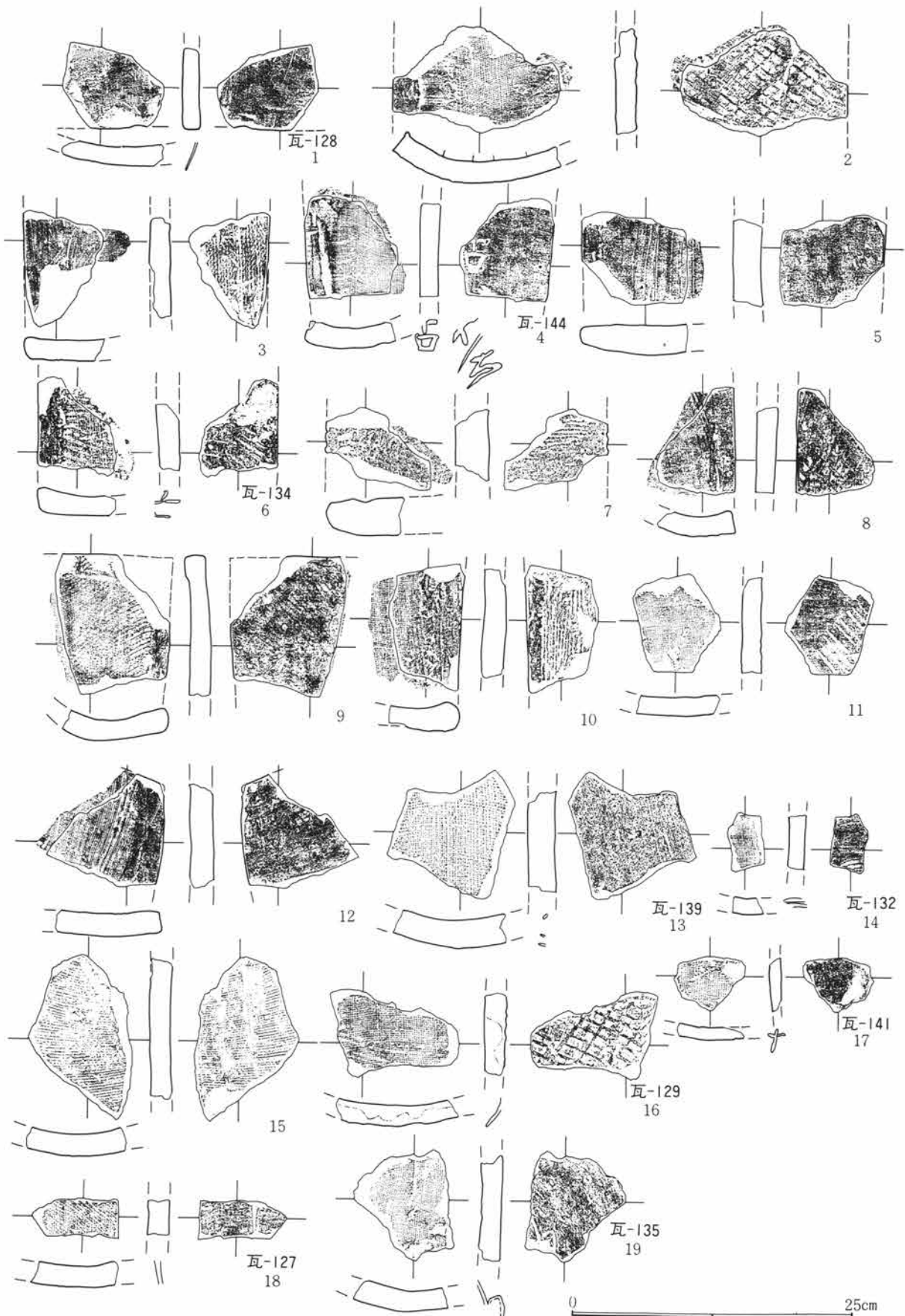


第10図 C区第6号溝状遺構出土遺物実測図(2)

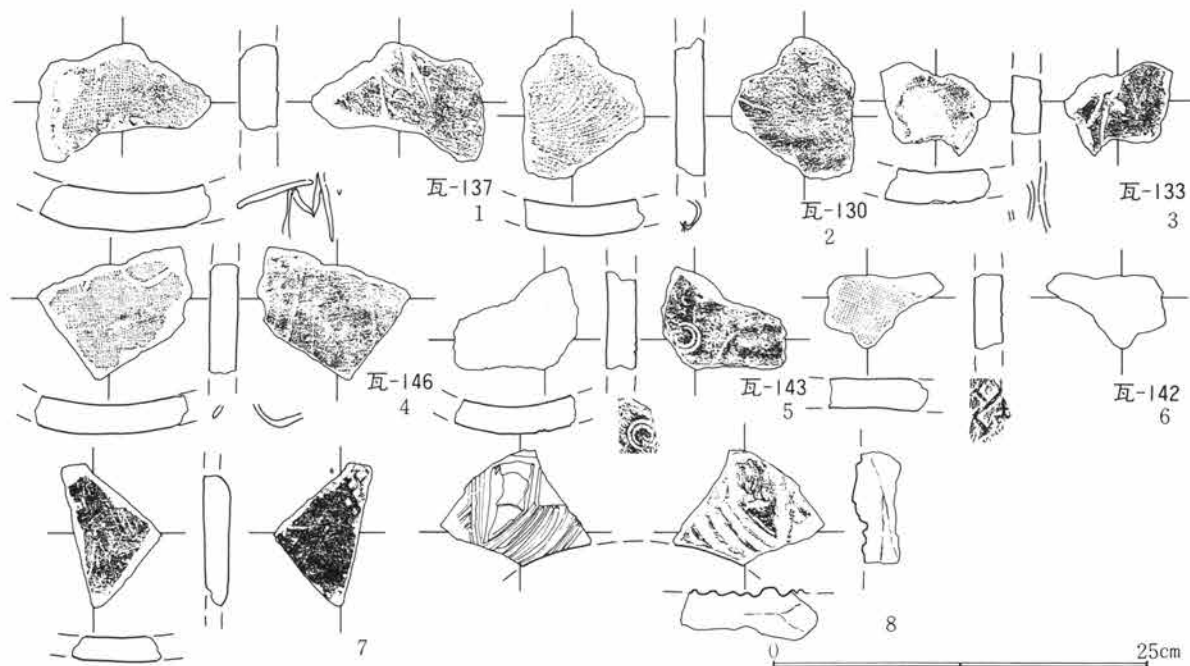
第4章 検出された遺構・遺物



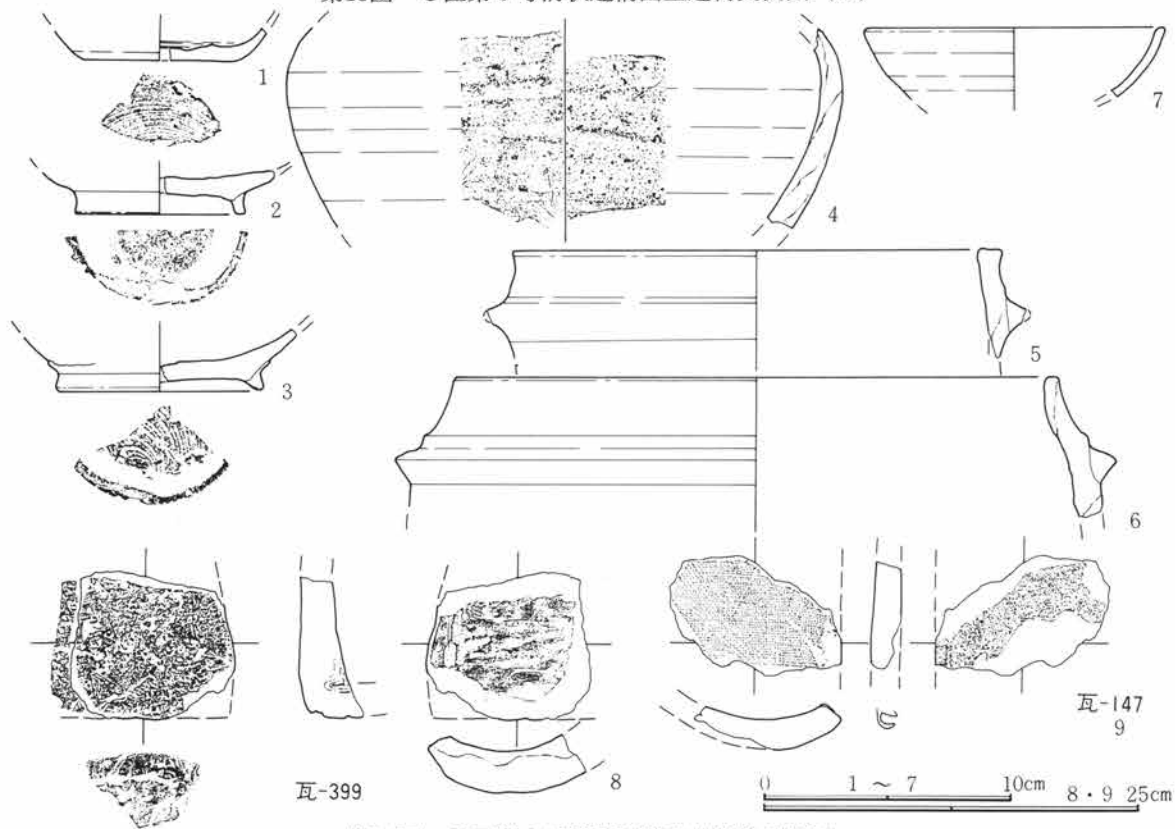
第11図 C区第6号溝状遺構出土遺物実測図(3)



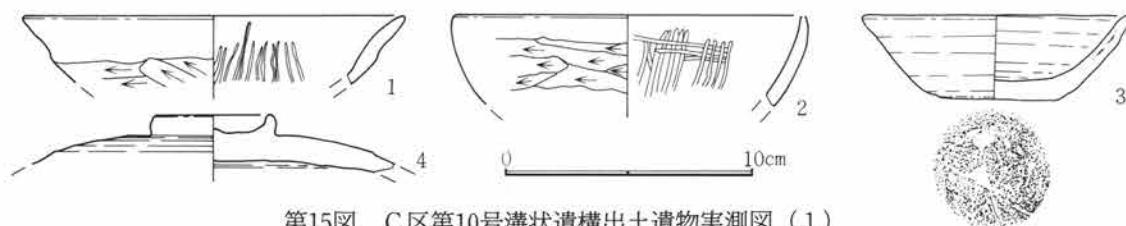
第12図 C区第6号溝状遺構出土遺物実測図(4)



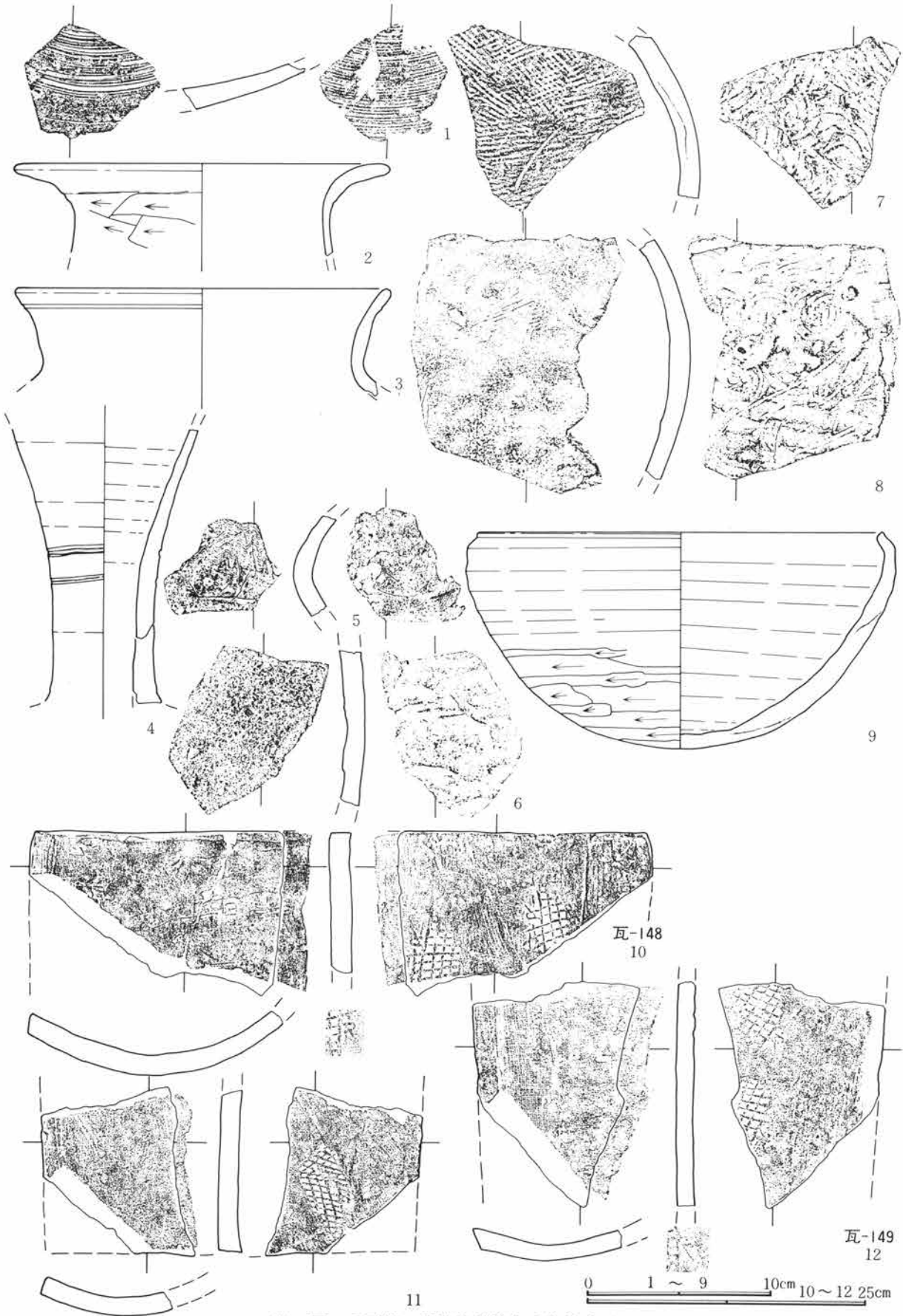
第13図 C区第6号溝状遺構出土遺物実測図(5)



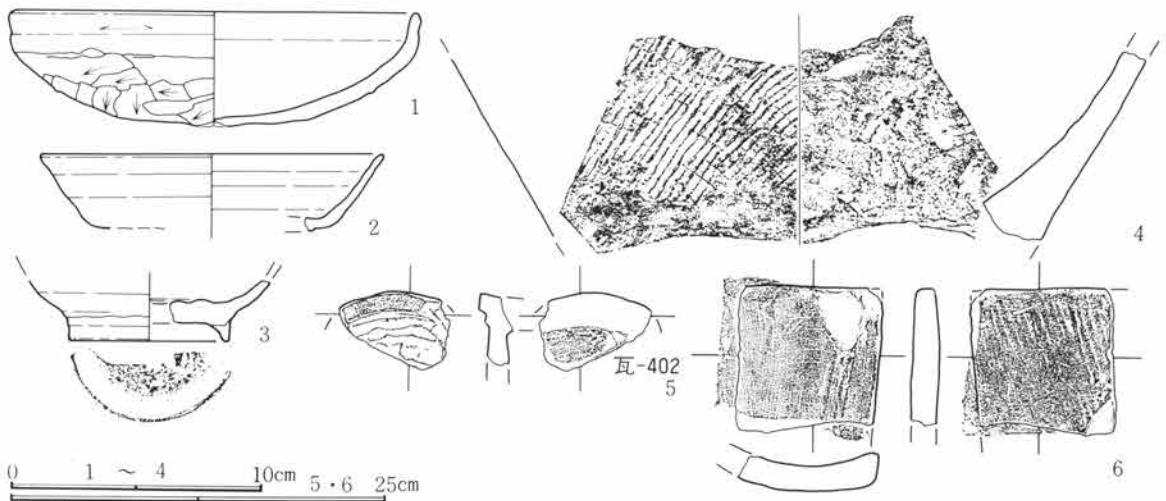
第14図 C区第9号溝状遺構出土遺物実測図



第15図 C区第10号溝状遺構出土遺物実測図(1)



第16図 C区第10号溝状遺構出土遺物実測図(2)



第17図 C区第8・18号溝状遺構出土遺物実測図

考えられ、C8・9・10号住と併存している。又、走行方位から構築は7世紀末～8世紀初頭頃と考えられる。

C区9・12号溝状遺構（C9溝・12溝）（付図2）

この両溝は、前述したC8・18溝と平行する状態で構築している。幅は1.6m前後で、箱掘されている。又、両溝はC10溝に切っている。C12溝は、南北走行しC14溝とも平行している。

このC12溝とC14溝に挟まれる部分には住居跡が検出されていない。この部分は、試掘調査時に、III層下面が非常に硬化していた。この硬化は、“道”としてこの間が機能していたことによると考えられる。この道としての機能は、C12溝の覆土上の位置でも認められている。即、この“道”の存在により住居が構築されなかったことが考えられる。そして、C12溝は、構築頭初段階は、溝として“道”は別としても、区画を構成する機能が想定され、“道”が存在す頃は、溝が廃棄されたのではなく、東側に改修された可能性があるものの、当溝の出土遺物の様相から、部分的には重複した可能性も考えられる。この為、当溝は、これらの点から、構築頭初から計画的に配置され、その存在自体は、他の遺構の構築を規制させるだけの規制力を備えていたと考えられ、それゆえに存続期間は非常に長期に亘ったものと推定される。出土遺物は、9世紀後半から10世紀前半頃の土器類が比較的遺存がいい点から、埋没開始時期は、9世紀末頃と考えられ、10世紀前半代には、少なくとも検出部は完全埋没してたとと思われる。

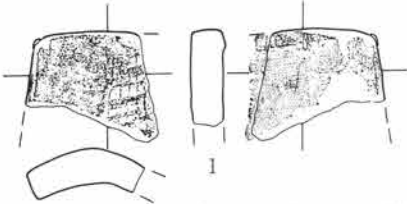
C区第10号溝状遺構（C10溝）（付図2）

当溝は、前述のC8溝を切り、C9・12溝に切られている。幅は1.1m～1.4m程で箱掘されている。そして、調査区内西端部でC10住を切り方向を転換し南方へ延びている。廃棄時期は8世紀後半と考えられる。

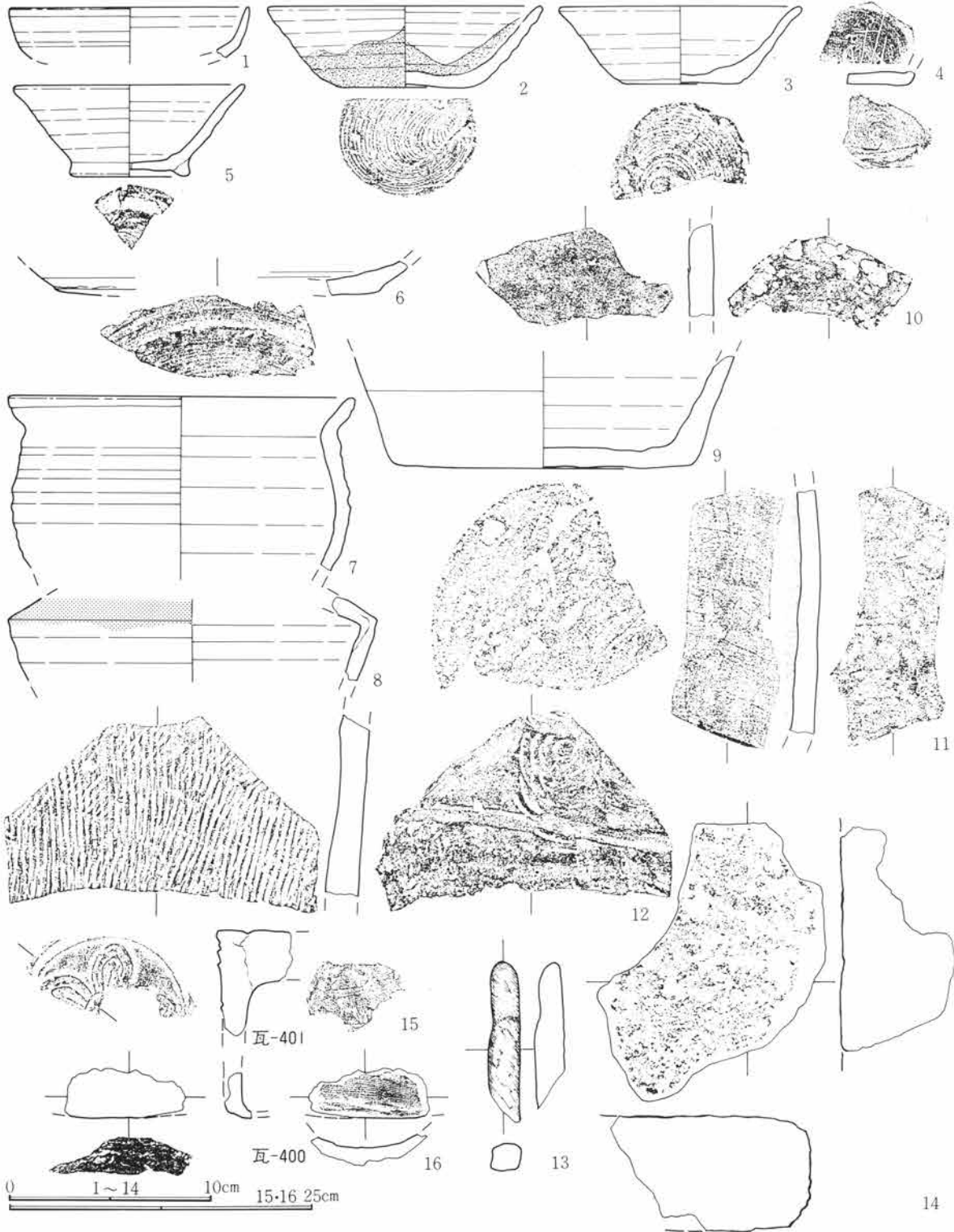
C10溝はC8・18溝・C9・12溝と同様に区画域を構成する溝と考えられる。これらの溝は、孰れも、区画域を構成するものと考えられ、構築の上限が7世紀末頃に想定されるC8・18溝→8世紀代の存続が想定される当溝→遺物から埋没の上限が9世紀末頃に考えられるC9・12溝と、これらが構成する区画域には変遷がある。この中で、当溝の構築される8世紀代は、国分二寺の創建がある。しかし、C8・18の存在により、この国分寺建立以前からの区画域が存在していた訳である。この点から、C8・18溝の構成する区画域は、国分寺との係わりは想定し難く、C9住の遺物組成に認められる高坏・盤は、当該期の住居としては類例が少ない。また、同時期には、I区内でも通有と異なる状況が認められ、下東西遺跡と同様に特殊な状況が看取される。そして、これらの点から、C8・18溝とC8・9・10住は、何らかの特殊の状況も想定される。だが、この状況が、C10溝・C9・12溝に継続されたかは現段階では不分明である。

C区第11号溝状遺構 (C11溝) (付図2)

当溝は、C 6 溝とC10溝を結ぶかの如く状態である。幅は0.5m~0.9m程である。恐らくC 6 溝と係わるものと推定される。

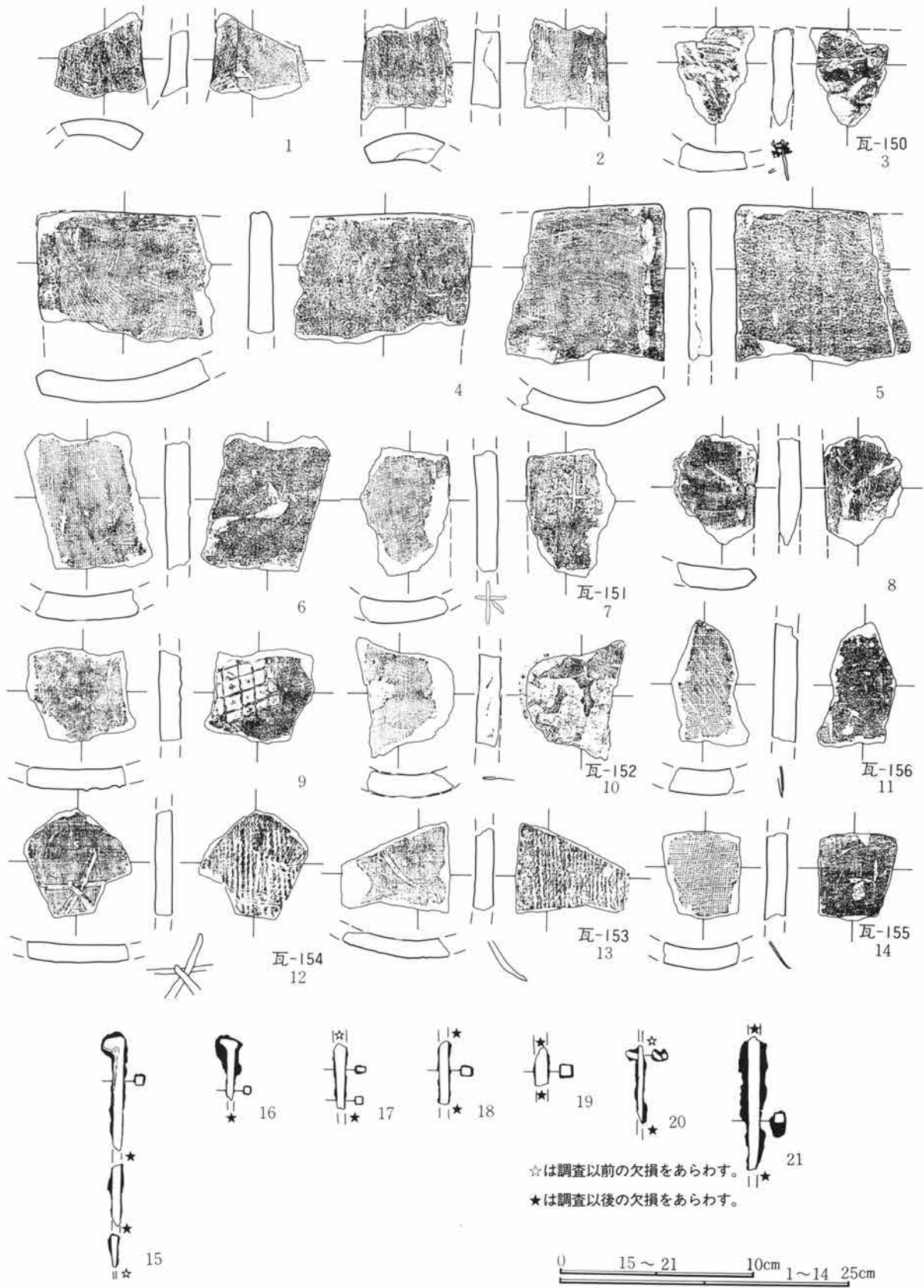


第18図 C区第11号溝状遺構出土遺物実測図

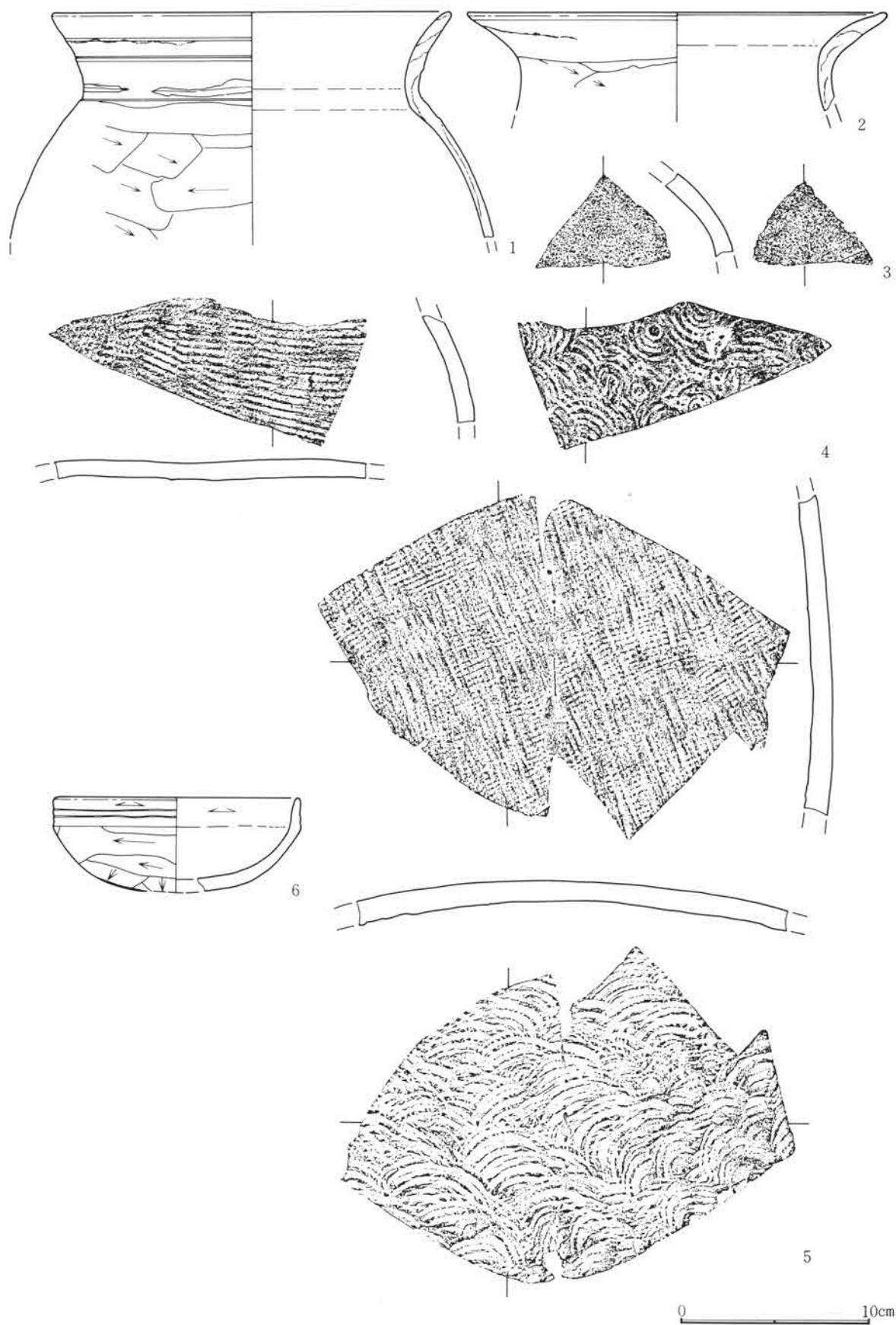


第19図 C区第12号溝状遺構出土遺物実測図 (1)

第4章 検出された遺構・遺物



第20図 C区第12号溝状遺構出土遺物実測図(2)



第21図 B区第4号溝状遺構出土遺物実測図

第3項 B・C区検出の住居跡について

B・C区内で確認された住居は合計168軒（B区41軒・C区127軒）であり、これらの住居数値には、調査の必要上の観点から、調査区の拡張を実施し、この拡張により新たな住居の確認をしたが、調査自体は、工事に直接拘わらない住居は調査実施を行なわなかった数も含まれている。この為、調査を実施した住居の検出は161軒（B区41軒・C区120軒）であり、確認のみに留まった住居は7軒である。然し、調査の便宜上確認した住居には住居番号を付した。

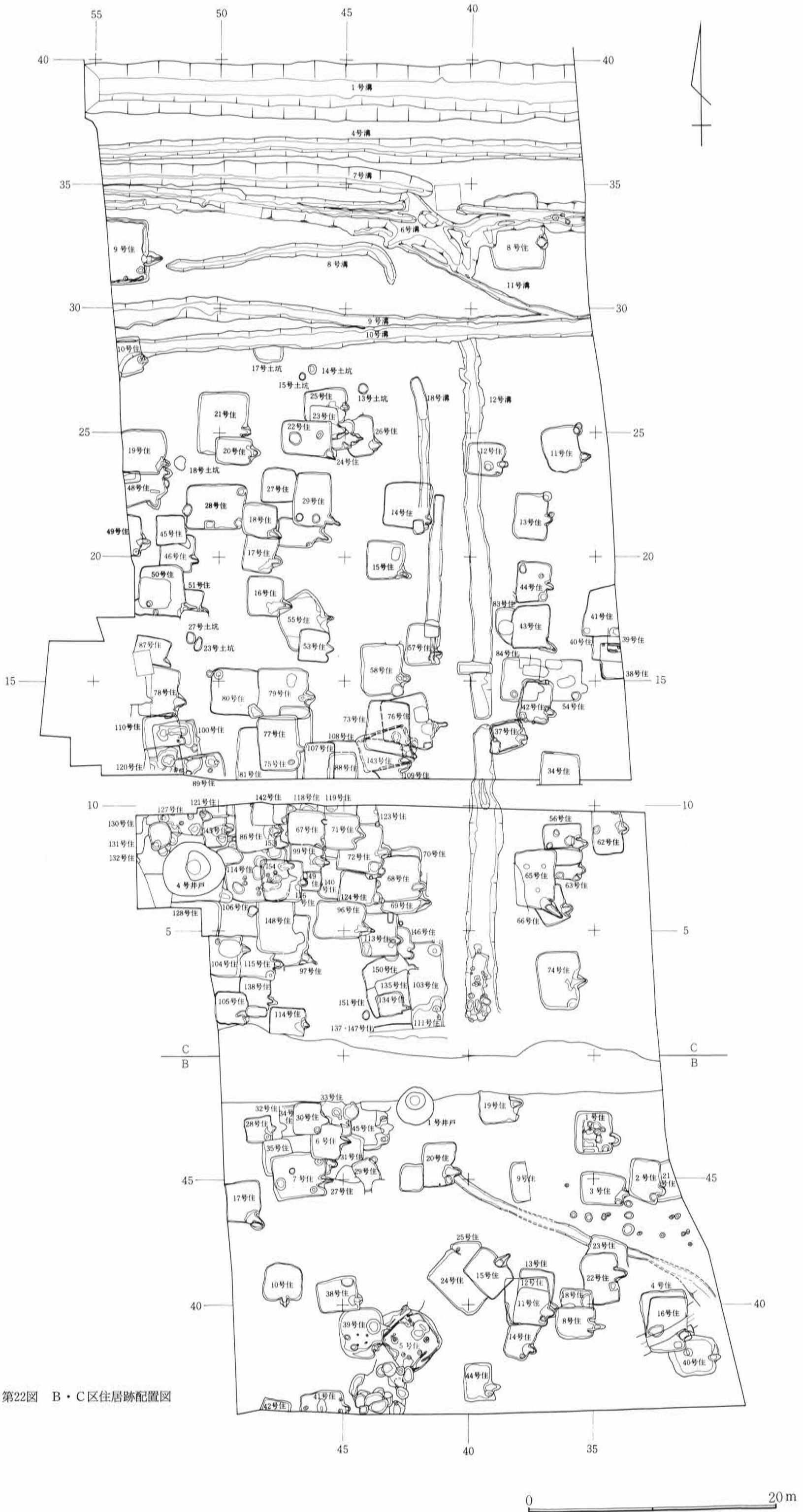
検出住居は上記のとおりB・C区で168軒である。これらの住居には単独で存在するもの、少数での切り合い関係が認められたもの、多数での切り合いが認められたもの等、検出状況は概ね三者の状態がある。この内後者では67軒以上での切り合い関係があり、今次の報告区のほぼ中央部で認められた。この異常とも思われる数値での切り合い関係の住居の時期は、概ね、8世紀前半から11世紀中頃にかけての約350年間位の間の状況で、単一時期ではないものの、これ程に重複することは、住居構築に何らかの規制があったことを示唆しているものと推察され、これが、国分僧寺・尼寺に近接する立地に対するものであることも類推出来るのである。上述の如く、当該の報告区は、僧寺・尼寺の寺域の各々の東・西への延長部に狭まれた地点であり、以下に掲載した住居は正に、この二寺に係わった住居の報告である。報告・記述に就いては以下の記載方法により記述した。

住居の覆土は、基本として当遺跡の基本土層の第Ⅲ層の埋没と考えている。この為、発色は第Ⅲ層の黒褐色土であり、夾雑物等の混入量に起因し認められる明暗による微細な発色はその一切に発色名を与えていない。又、夾雑物にはC軽石粒・焼土粒・木炭粒・第Ⅶ層土粒等の混入量・混入状態を記入したのみである。覆土に就いては第3分冊中に記述してあるので参照して戴きたい。

住居の時期に就いては下限と考えられる廃棄年代を記述したが、一部この限りではないものも含まれている。又、基本とする時期判定は、第3分冊中の考察中に記述したD区検出の住居分類を用いた。この住居分類は、単純な形状では無く、住居を構成する施設（カマド・傍竈坑）の存否・布設位置・形状等により、第Ⅰ段階から第Ⅴ段階まで分類し、各段階での住居の出土遺物組成、坏・埴類の変化から各段階での遺物様相を把握した。このことから、住居形状の各段毎の住居間には、遺物組成が共通することが判明した。このことから、各住居段階に帰属する住居はほぼ同時期と判断され、更に、住居間での新旧関係等から各段階毎に推移したことが明らかとなった。一方、相対年代としては確実な資料が無かったが、県下での諸氏による土器編年を参照し各段階毎に付した。この各段階毎の相対年代は、第Ⅰ段階—9世紀後半～10世紀初頭。第Ⅱ段階—10世紀前半。第Ⅲ段階—10世紀中頃から同後半。第Ⅳ段階—10世紀末から11世紀前半。第Ⅴ段階—11世紀中頃から同後半頃とした。この第3分冊中で認められたD区の状況を基本とし、当該区の住居の形状・出土遺物様相を対比させて住居の廃棄時期の推定を行なった。この住居分類に就いては、第3分冊中に詳述したので参照して戴きたい。

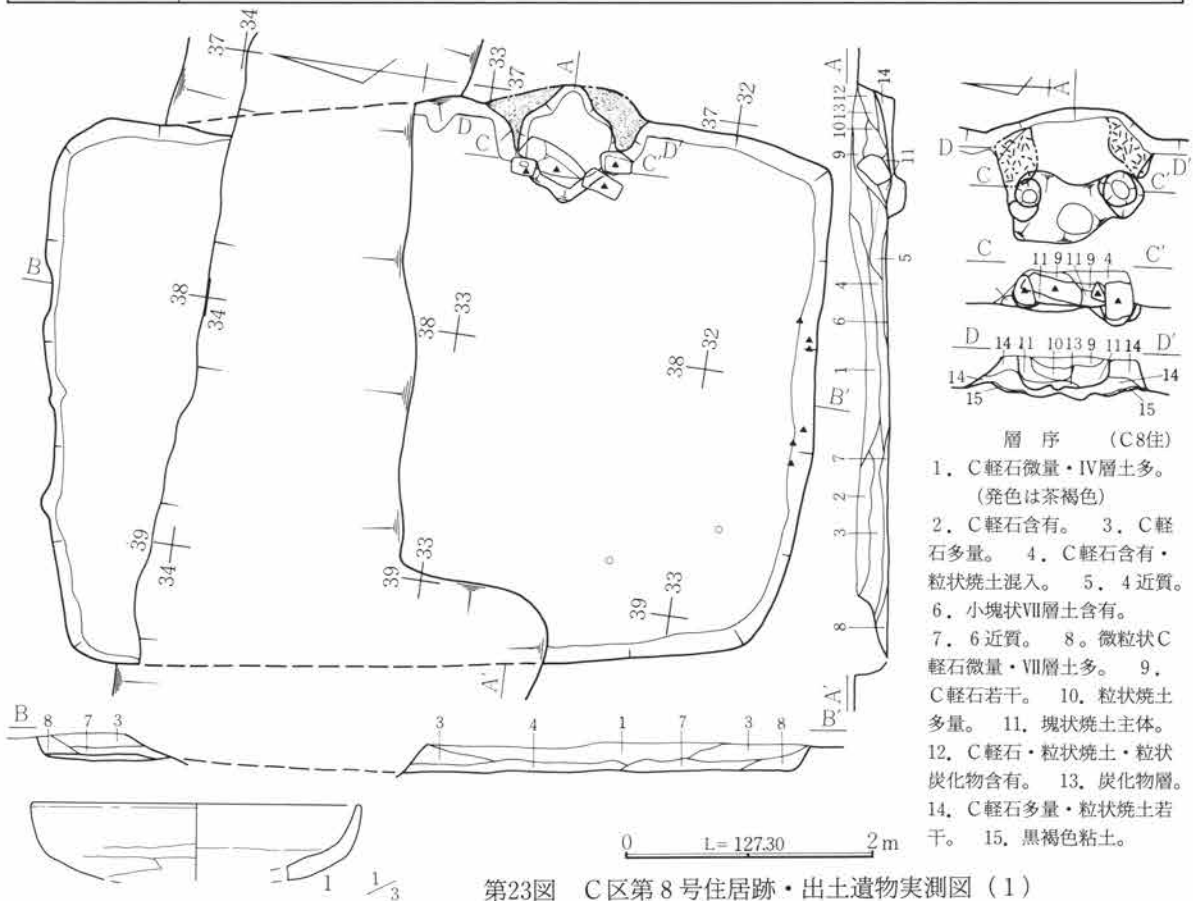
住居の主軸=指向方向に就いては、従前より行なわれているカマド付設壁と、その対壁の中心をもってする方法とは異なり、住居構築に伴ない設定されたと考えられる。“構築基準になった壁”を求め、これを“構築基準辺”とし、この壁の指向方向をもって構築基準に当てた方位とし主軸にした。この“構築基準辺”に就いても第3分冊中の考察に記述したので参照して戴きたい。

筆者が本書を作成する（B・C区）に当っては、特に上述の点に就いて留意した点でもある。又、土器図中の → は削を示し、 ← は撫でを意味し、技法の特徴も示した。



第22图 B·C区住居迹配置图

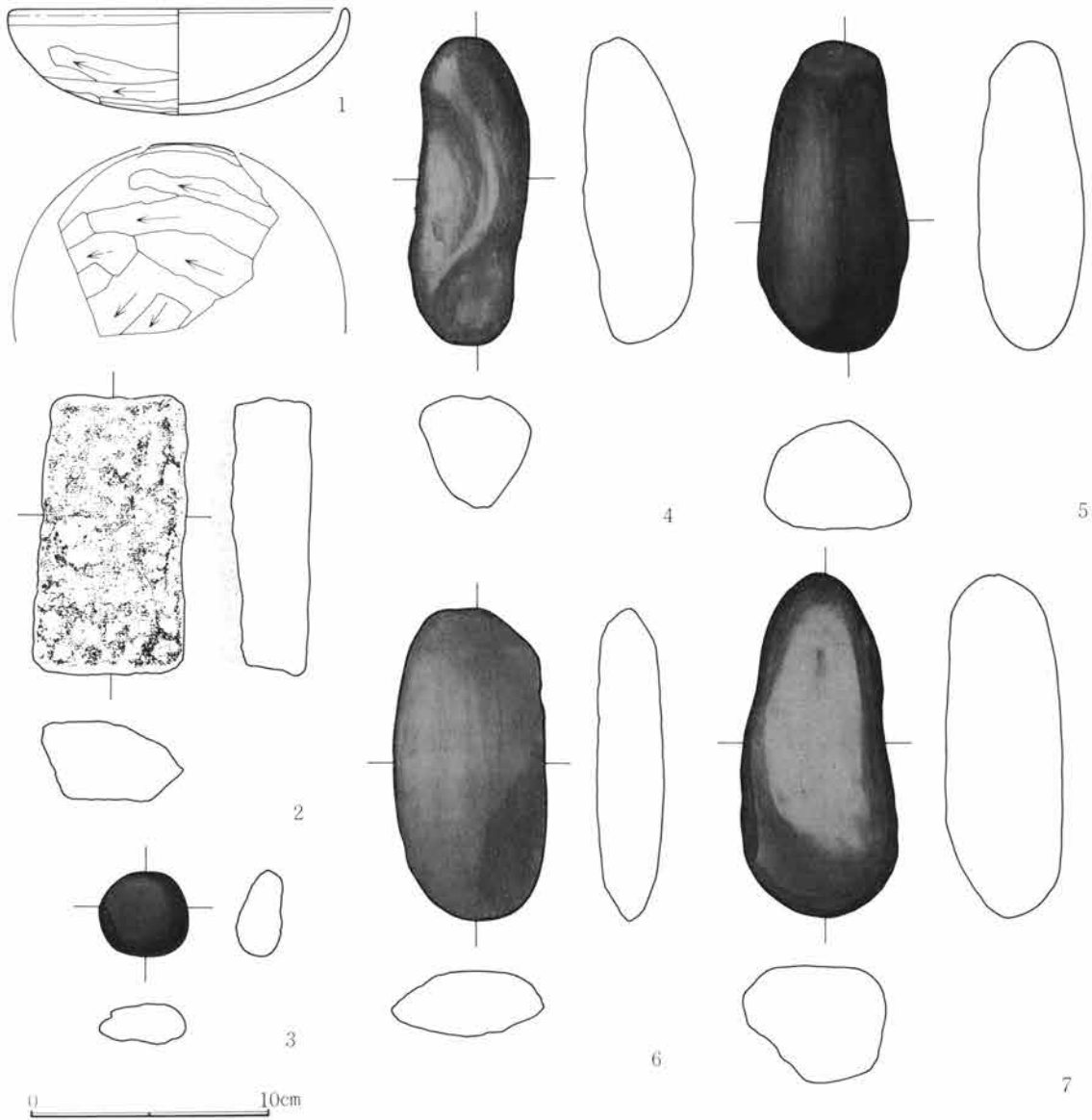
遺構名称	C区第8号住居跡		位置	31~33-C-36~39グリッド内に位置する。		残存深度	約32cm
平面形態	長方形。	規模	4.50m×6.13m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-99度-南
壁	斜位に立ち上がる。		床面	平坦で部分的に硬化している。VII層土使用。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	北壁下に部分的に認められる。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から146cm。			主軸方位	北-90度-南	
改築	有。左右両袖下に粘土が認められる。		形状	「コ」の字状を呈し、先端がやや突出する。			
規模	全長 93cm・屋外長 23cm・屋内長 70cm・袖部幅116cm・燃烧部幅 73cm・煙道部幅 30cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
	袖	改築以前は粘土と考えられるが、改築後はIII層土主体。					
煙道	詳細不明。		掘り方	据方のを検出。袖石部分にピット。			
遺物出土状態	南壁側に礫器が多い。全体に遺物量は少ない。						



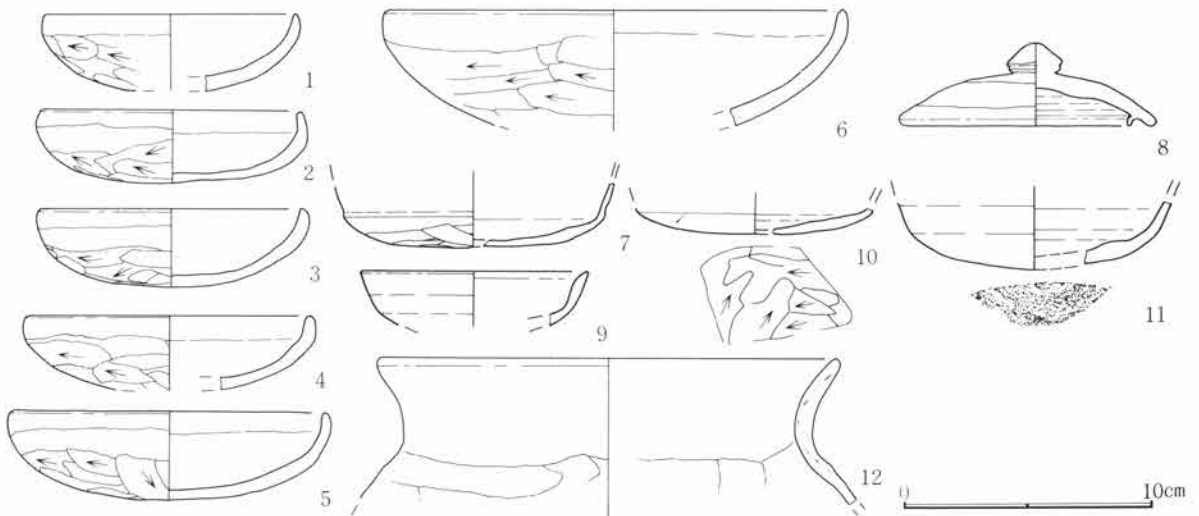
第23図 C区第8号住居跡・出土遺物実測図(1)

所見 当住居跡は、今時の当該報告区の中では最古の一群に含まれ、C6溝に切られ国分寺創建に先んずる住居である。住居跡は全体的に遺存が悪く、カマドの上半部に当たる煙道部は失われている。カマドの袖・焚口部天上には、地山砂岩質土を切り出し角柱状に削り加工したものを補強材に用いている。

当住居の西側で検出されたC9住・C8溝は、当住居と同時存続した可能性が強く、C8・18溝により占地に規制があったと考えられる。当住居の廃棄は7世紀末から8世紀初頭頃と考えられる。

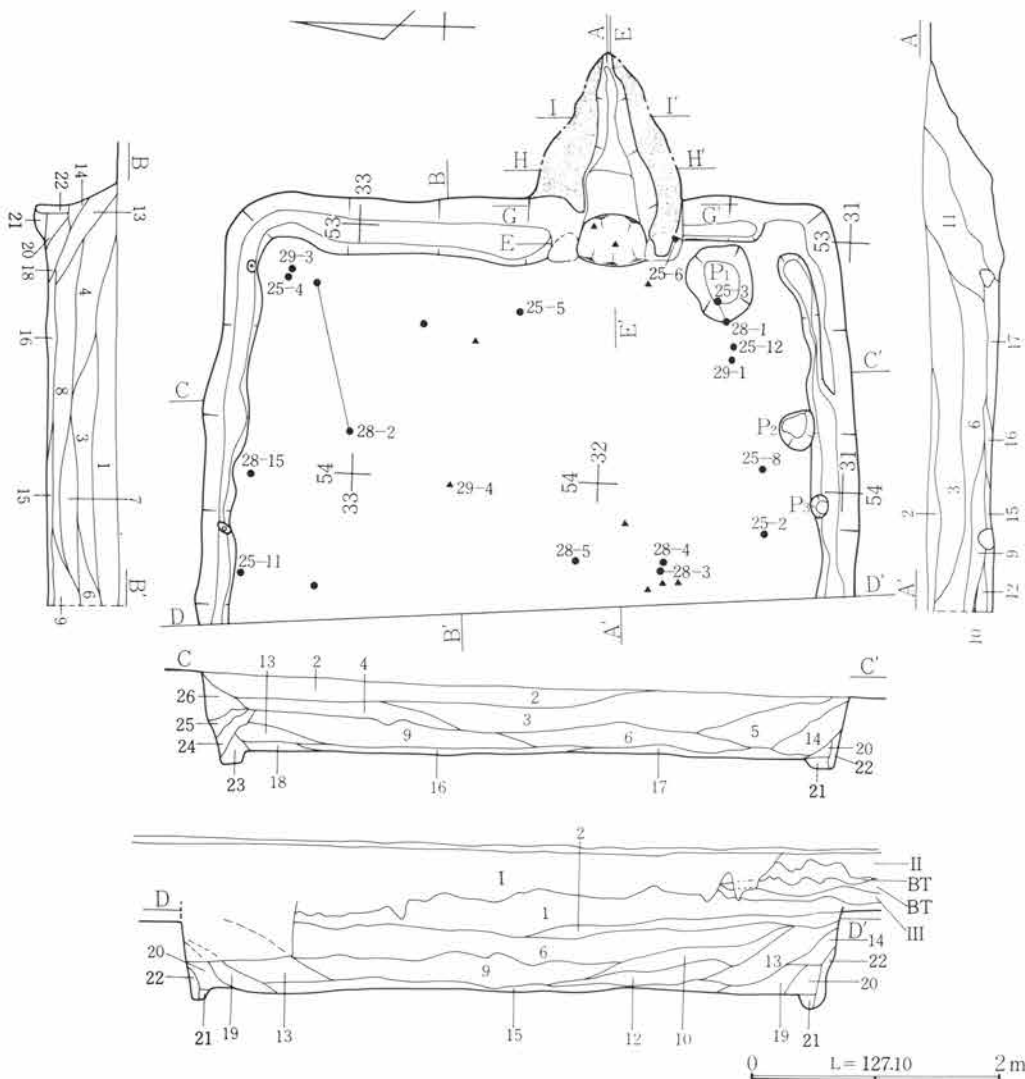


第24図 C区第8号住居跡出土遺物実測図(2)



第25図 C区第9号住居跡出土遺物実測図(1)

遺構名称	C区第9号住居跡		位置	30~33-C-53~55グリット内。		残存深度	約50cm
平面形態	不詳	規模	Xm×5.25m	構築基準辺	北壁?	主軸方位	北-91度-南
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	VII層土を使用し、掘り方はほとんど認められない。			
壁溝	全周か。		傍竈坑・貯蔵穴	P ₁ 。不整長方形。68×50cm・深度-18cm			
柱穴	P ₂ ・P ₃ は出入口施設に伴うものか。						
掘り方	壁溝自体が掘り方であるが、他には認められなかった。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から115cm。				主軸方位	北-88度-南
改築	有。39層は改築以前の掘り方と考えられる。		形状	細い舌状を呈する。			
規模	全長169cm・屋外長115cm・屋内長 54cm・袖部幅105cm・燃烧部幅 45cm・煙道部幅 28cm。						
焚口・燃烧部	楕円形の窪みは焚口部での灰の掻き出しに伴ない窪んだものと考えられる。燃烧部の壁は						
垂直に立ち上がり奥側はオーバーハングする。	袖	地山砂岩質層を角柱状に切り出した芯材に用いる。					
煙道	楕円形の断面形状を呈する。		掘り方	箱状を呈する燃烧部と舌状の煙道からなる。			
遺物出土状態	床面直上での遺物がやや多い。						



所見 C9H

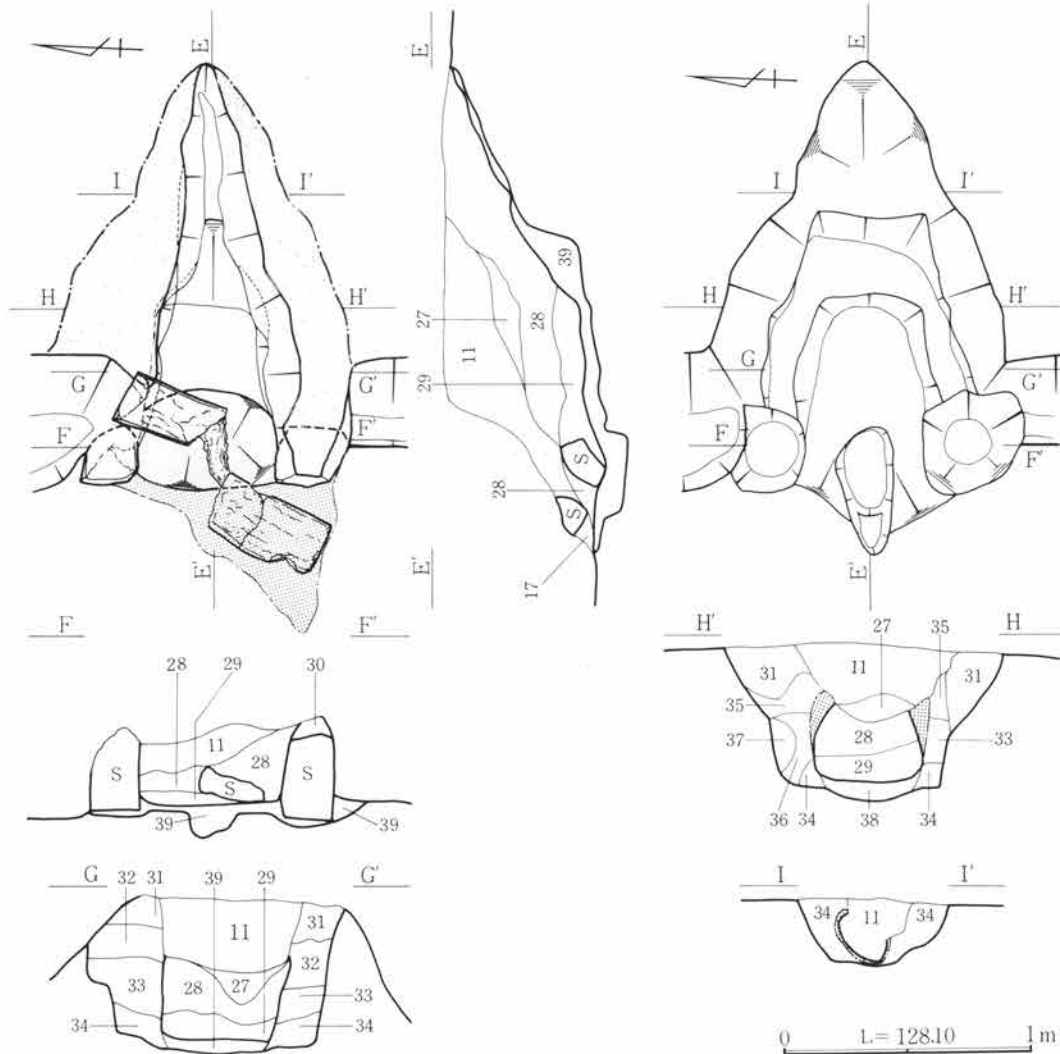
当住居は、前述C 8 住の西側25m程に位置する。

調査自体は住居の西壁側が未露呈に終わったが、覆土の堆積状態から形状は正方形を呈すると思われる。

壁溝の検出された住居としては数少ない住居で、恐らく全周すると思われる。

第26図 C区第9号住居跡実測図

第4章 検出された遺構・遺物



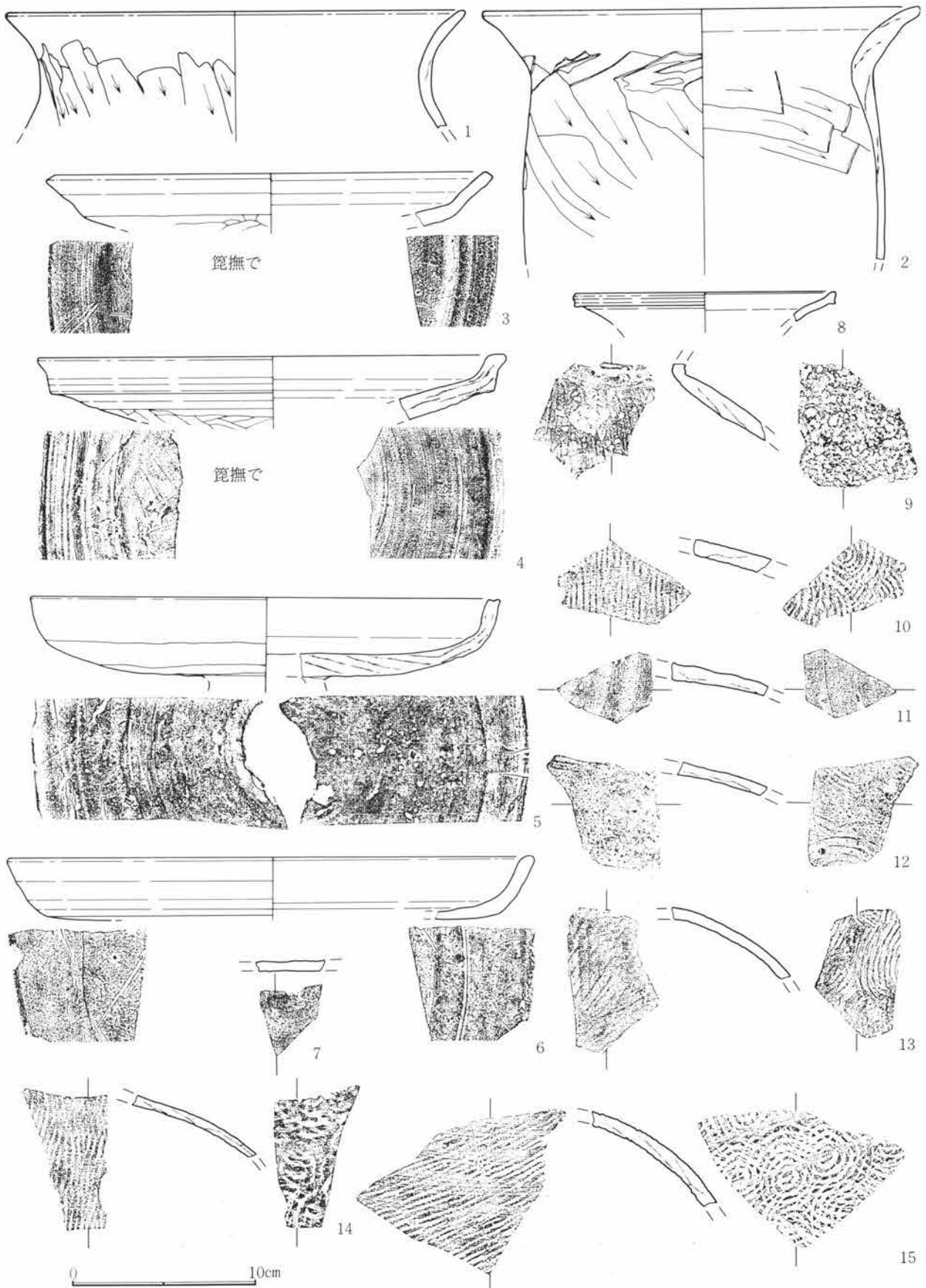
層序 (9住)

1. 粗粒状C軽石多量混入。 2. 粗粒状C軽石多量・塊状V層土斑状混入。 3. 粗粒状C軽石多量・粒状焼土若干混入。
4. 粗粒状C軽石混入(発色最暗)。 5. 粗粒状C軽石多量(4近質、4よりやや明るい)。 6. 粗粒状C軽石混入・VI乃至VII層土混入多。
8. 4・5近質。 9. 粒状C軽石多量混入。 10. 4近質。 11. 粗粒状C軽石多量・粒状焼土混入・粒状炭化物若干。
12. 9近質。 13. 粒状C軽石含有・小塊状VII層土含有。 14. 細粒状C軽石若干・粗大塊状VII層土混入(壁崩壊土)。
15. 粒状C軽石混入・有粘性・硬質土。 16, 15近質・小塊状VII層土含有。 17, 16近質・粒状焼土多量。 18. 粗粒状C軽石含有(硬質土)。
19. 18近質・塊状VII層土含有。 20. C軽石含有・粗大塊状VII層土多量混入(壁崩壊土)。
21. C軽石微量・塊状VII層土含有・粒状VII層土多量混入。 22. C軽石若干・粒状焼土微量(発色黒い)(壁板材の痕跡)。
23. 17近質。 24. 14近質(VII層土主体)。
- 25, 24近質。(23~25, 壁崩壊土)。
26. III・IV・V・VI層土の混土(壁の崩壊土)。
27. C軽石混入・塊状焼土・粒状焼土多量混入。 28. 塊状焼土・粒状焼土主体。 29. 灰・炭化物主体。 30. C軽石含有・粒状焼土含有。
31. 細粒状C軽石混入・粒状焼土混入・塊状焼土主体。 32. C軽石含有・粒状焼土混入・塊状VII層土主体。 33. C軽石含有・粒状焼土混入(硬質土)。
34. C軽石含有・粒状炭化物混入(硬質土、33近質)。
35. C軽石微量・粒状焼土・塊状焼土含有・灰混入。 36. C軽石微量・塊状焼土斑状混入・灰混入。 37. C軽石微量・塊状VII層土の混土層。 38. C軽石微量・灰・炭化物・粒状焼土含有。

第27図 C区第9号住居跡カマド実測図

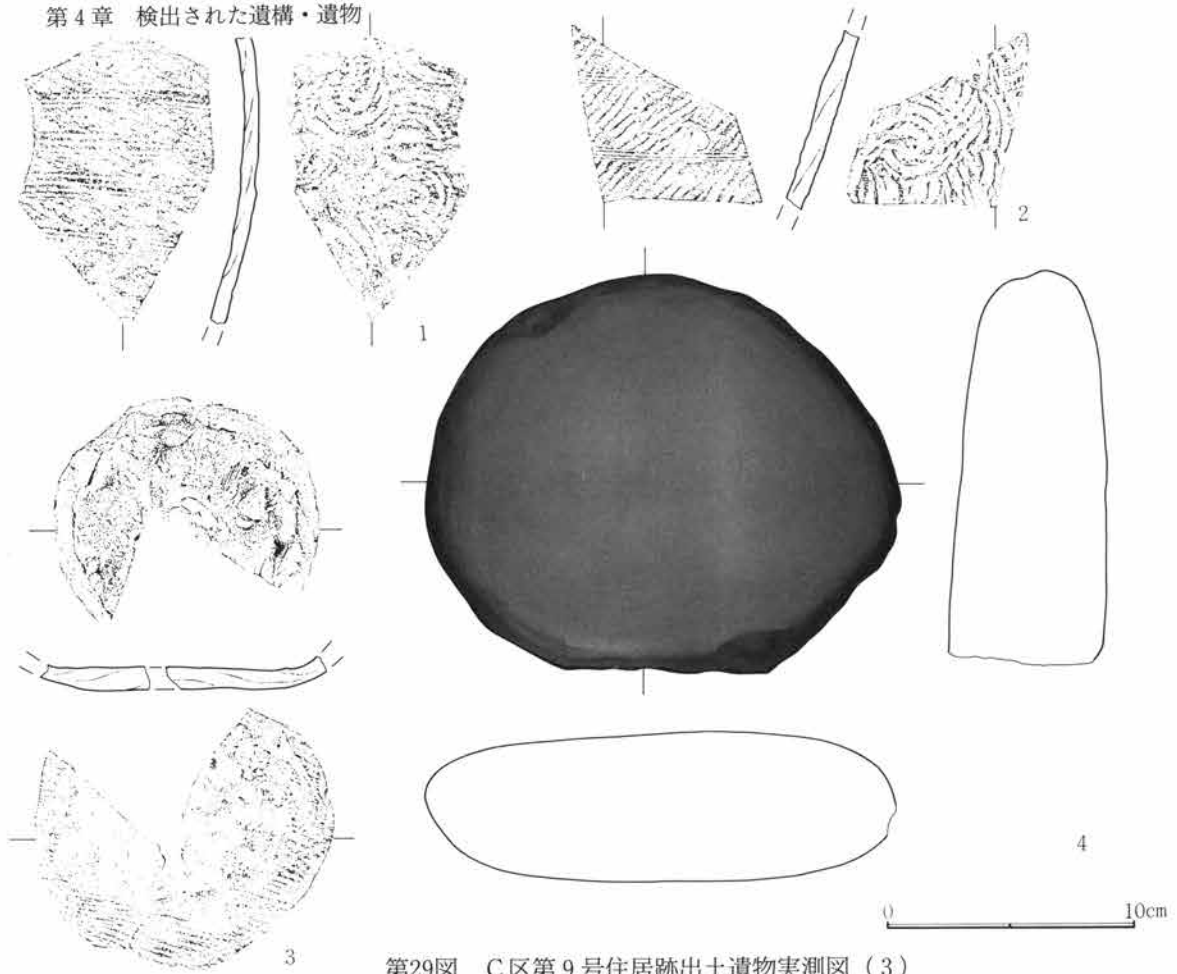
る。しかし、カマド部・南東隅部では認められなかった。この壁溝・壁の部分の土層断面では、壁添い・壁溝底面から壁添いにかけて、発色の暗い22層土が看取されている。この22層土は、壁体崩落防止に用いられた板材の痕跡と考えられる。壁板材の痕跡を留めた住居跡としては、当該区では唯一のものである。

カマドは遺存が良好で、H-H'・I-I'間では天上の痕跡が認められる。しかし、G-G'間では内傾する痕跡が認められたものの天上の存在は疑問視される。又、31・35層土の分層部は、切り合い状態が認められ、掘り方土内での焼土・炭化物の混在状態から改築があったと判断される。廃棄時期は8世紀初頭と考えられる。



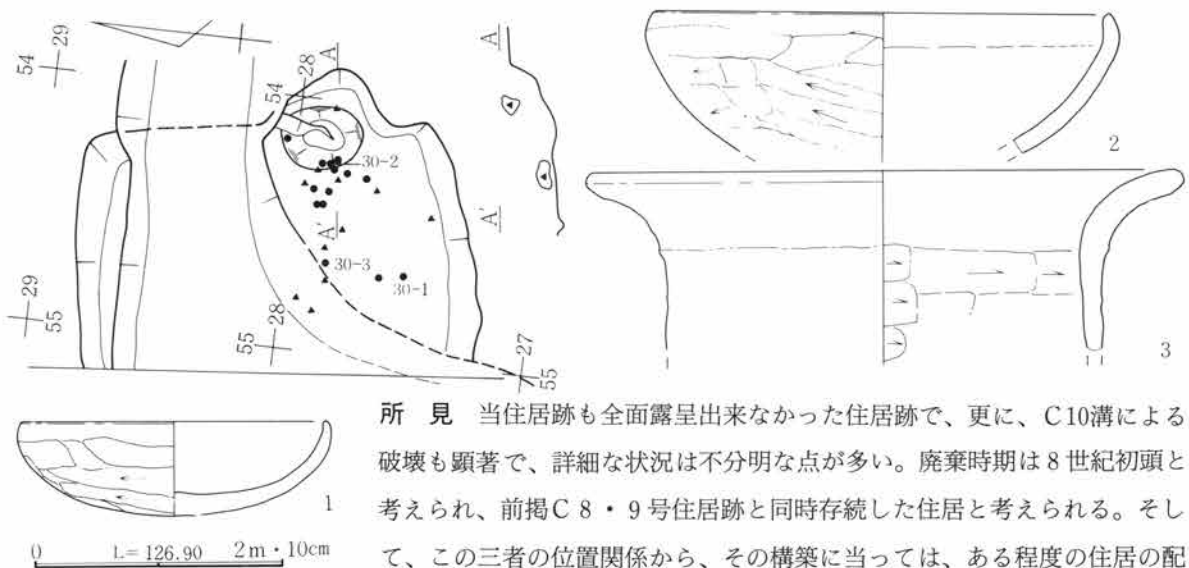
第28図 C区第9号住居跡出土遺物実測図(2)

第4章 検出された遺構・遺物



第29図 C区第9号住居跡出土遺物実測図(3)

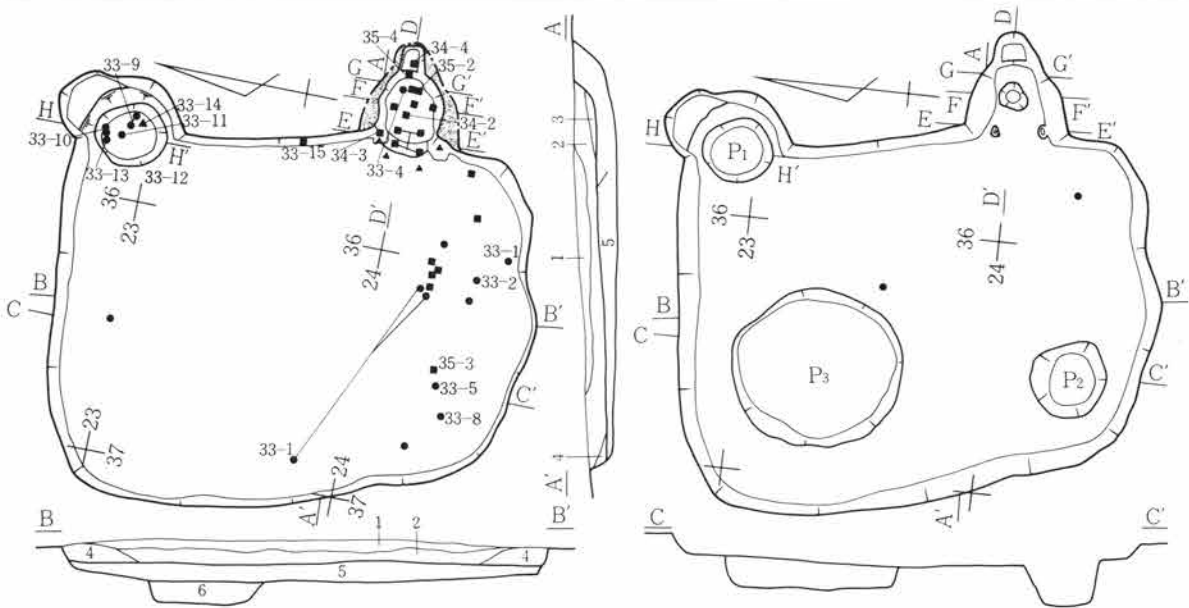
遺構名称	C区第10号住居跡		位置	27・28-C-53~55グリッド内。		残存深度	約38cm
平面形態	不詳。	規模	Xm×3.20m	構築基準辺	不詳	主軸方位	北-83度-南程
C区10号溝の破壊により詳細不詳。							



所見 当住居跡も全面露呈出来なかった住居跡で、更に、C10溝による破壊も顕著で、詳細な状況は不明な点が多い。廃棄時期は8世紀初頭と考えられ、前掲C8・9号住居跡と同時存続した住居と考えられる。そして、この三者の位置関係から、その構築に当っては、ある程度の住居の配置規制があったことを示唆している。

第30図 C区第10号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	C区第11号住居跡		位置	23~25-C-35~37グリッド内。		残存深度	約50cm
平面形態	不整長方形。	規模	3.87m×2.95m	構築基準辺	北壁	主軸方位	北-80度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	2期に亘り認められる。第1期はVII層土使用。			
壁溝	未検出。		貯蔵穴	P ₁ ・P ₂ 。P ₂ は第1期。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺を精査したが未確認であった。						
掘り方	全体的に平坦で、ほとんど認められない。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から50cm。				主軸方位	北-82度-南
改築	有。全体に瓦を多用している。		形状	瓦の付設状態では正方形に近い形状と考えられる。			
規模	全長 91cm・屋外長 68cm・屋内長 23cm・袖部幅 61cm・燃烧部幅 50cm・煙道部幅 18cm。						
焚口・燃烧部	焚口天井に男瓦を用い、燃烧部は瓦(女・男)を用い正方形に近い形状に構築する。幅は						
広目である。			袖	地山礫を用いている。			
煙道	検出部からほぼ垂直に立ち上がるのか?		掘り方	全体を箱形に掘り込んでいる。			
遺物出土状態	P ₂ 内で完形品が多い。また、床面での遺物が多く完形に近いものも認められる。						

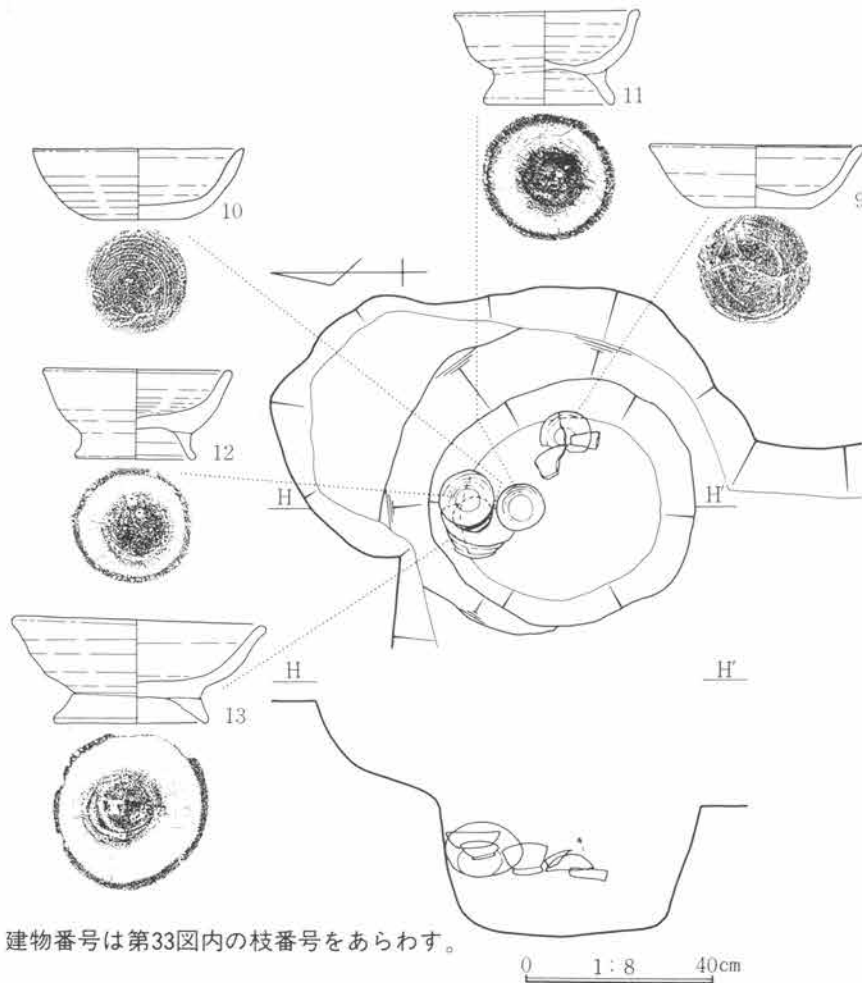
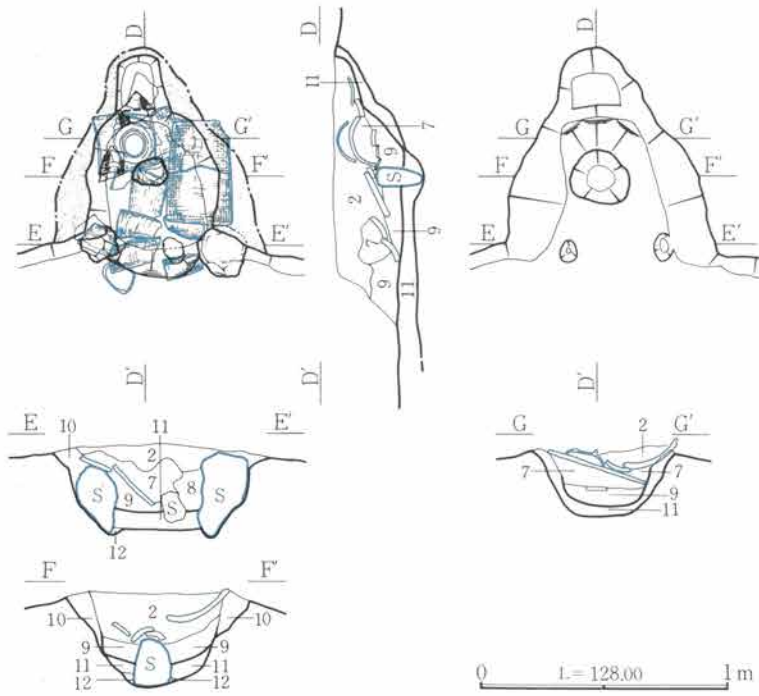


層序 (C11住)

1. 細粒状C軽石多量。
2. 細粒状C軽石含有・小塊状VII層土含有・VII層土混入(発色明)。
3. 細粒状C軽石若干・粒状焼土混入。
4. VI及VII層土(壁崩壊土)。
5. 細粒状C軽石若干・粒状炭化物混入・小塊状VII層土含有(第1期床面埋設土)。
6. 細粒状C軽石若干・小塊状VII層土少量混入。
7. 細粒状C軽石若干・塊状焼土・粒状焼土多量混入(粘質土)。
8. 粒状焼土・灰若干混入。
9. 粒状焼土・灰混入。
10. 小塊状焼土・粒状VII層土(粘質土層)。
11. 粒状炭化物・粒状焼土・灰混入。
12. 細粒状VII層土多量混入(発色黄褐色)。

第31図 C区第11号住居跡実測図

所見 当住居は瓦を多用するカマドを備える住居跡である。このカマドは、比較的南東隅部に寄った東壁に構築している。傍竈坑は認められず、これに類する皿状の窪みも認められなかった。しかし、南西隅部で検出されたP₂は位置的に貯蔵穴と考えられる。一方、このP₂の対角線上の位置で検出されたP₁は、住居から突出する状態である。この土坑状のものは、本跡に伴うか否かが問題であるが、調査時に設定した土層断面の観察所見では、切り合い関係は認められず、住居の床面直層土が流れ込む状態で住居の埋没とP₁の埋没がほぼ同時と考えられた。又、出土遺物での検証を現地で行なったが、カマド周辺からの出土のものとはP₁出土のものとは、やや年代観の異なるものも含まれているものの、ほぼ、10世紀後半に比定出

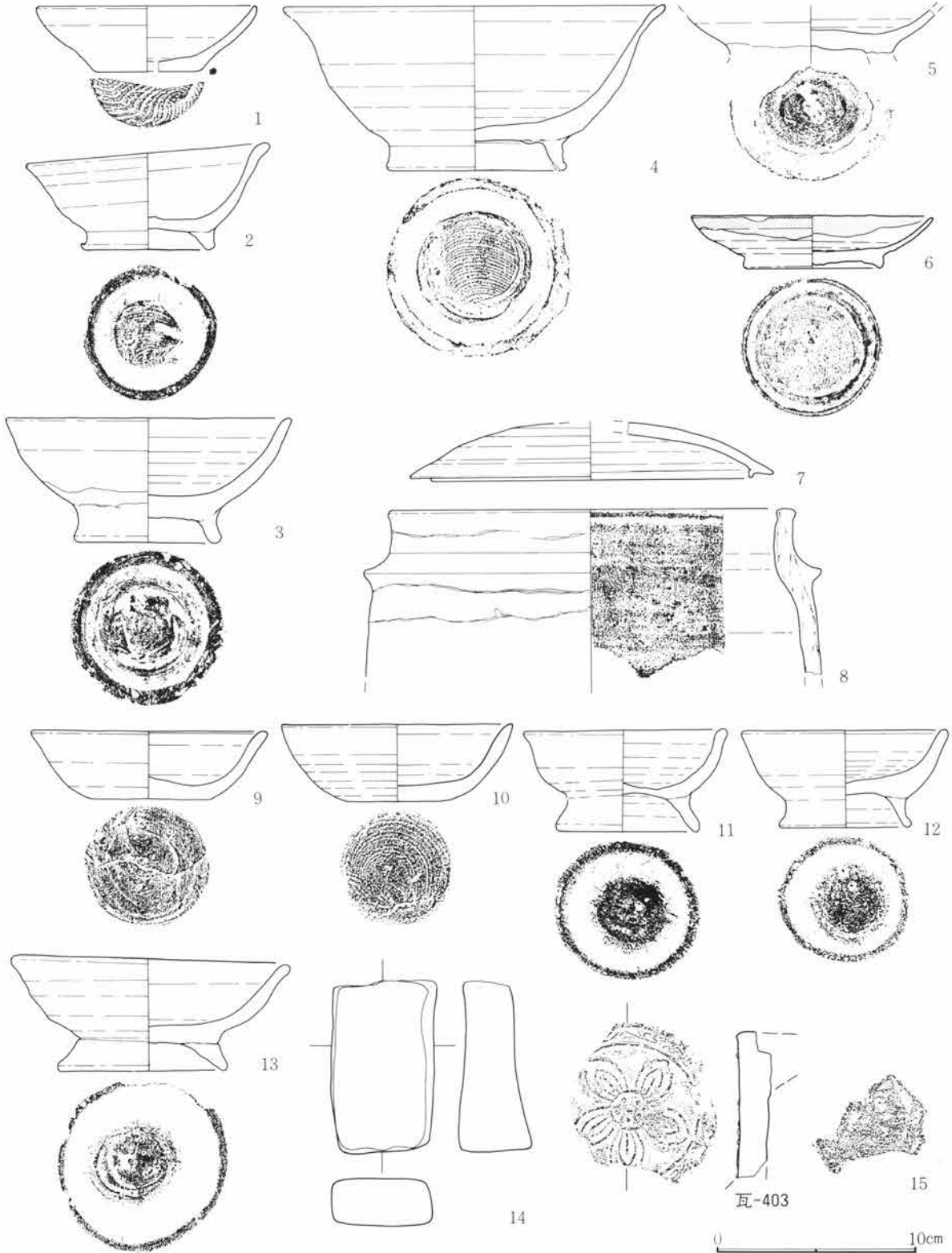


建物番号は第33図内の枝番号をあらわす。

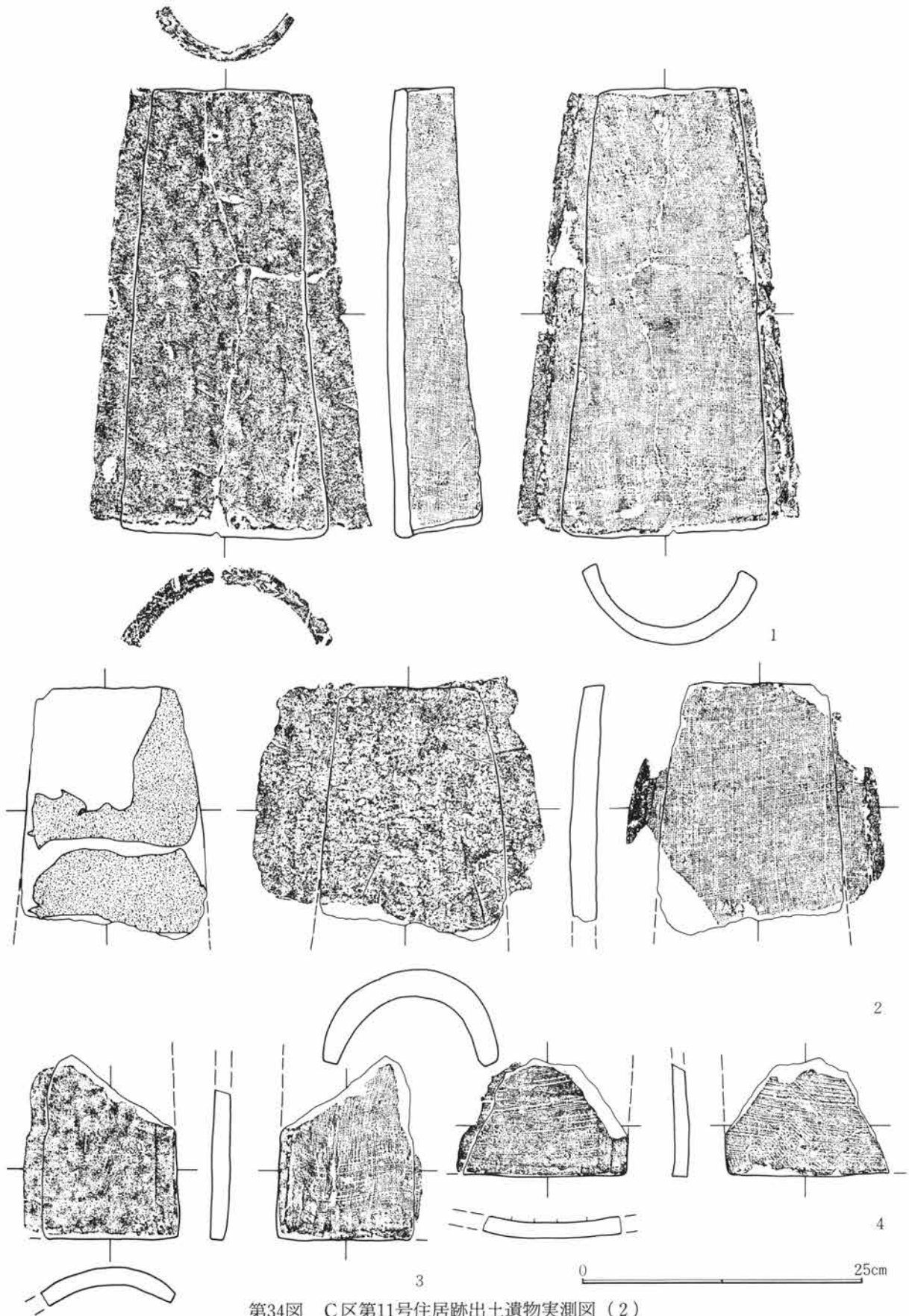
第32図 C区第11号住居跡カマド・P₁微細図

来ることから、このP₁は、当住居に伴うものと考えられた。

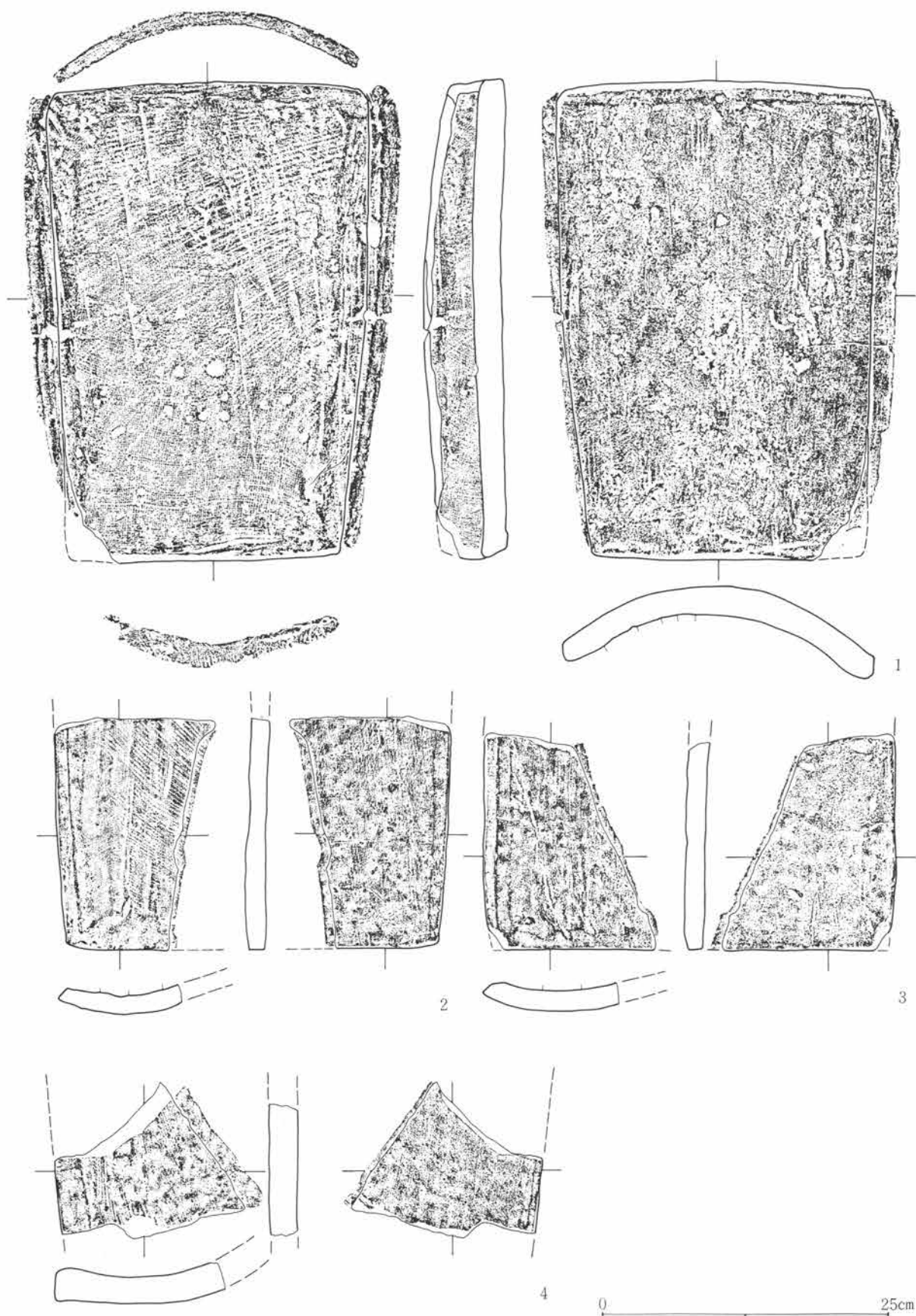
住居の形状では、D区検出の住居跡の所見である第III期のD10号住に代表される形状に類似が認められる。この点と上述した傍竈坑・貯蔵穴の位置等を勘案して、D区第IV期の時期である11世紀前半代での廃棄と考える。



第33図 C区第11号住居跡出土遺物実測図(1)

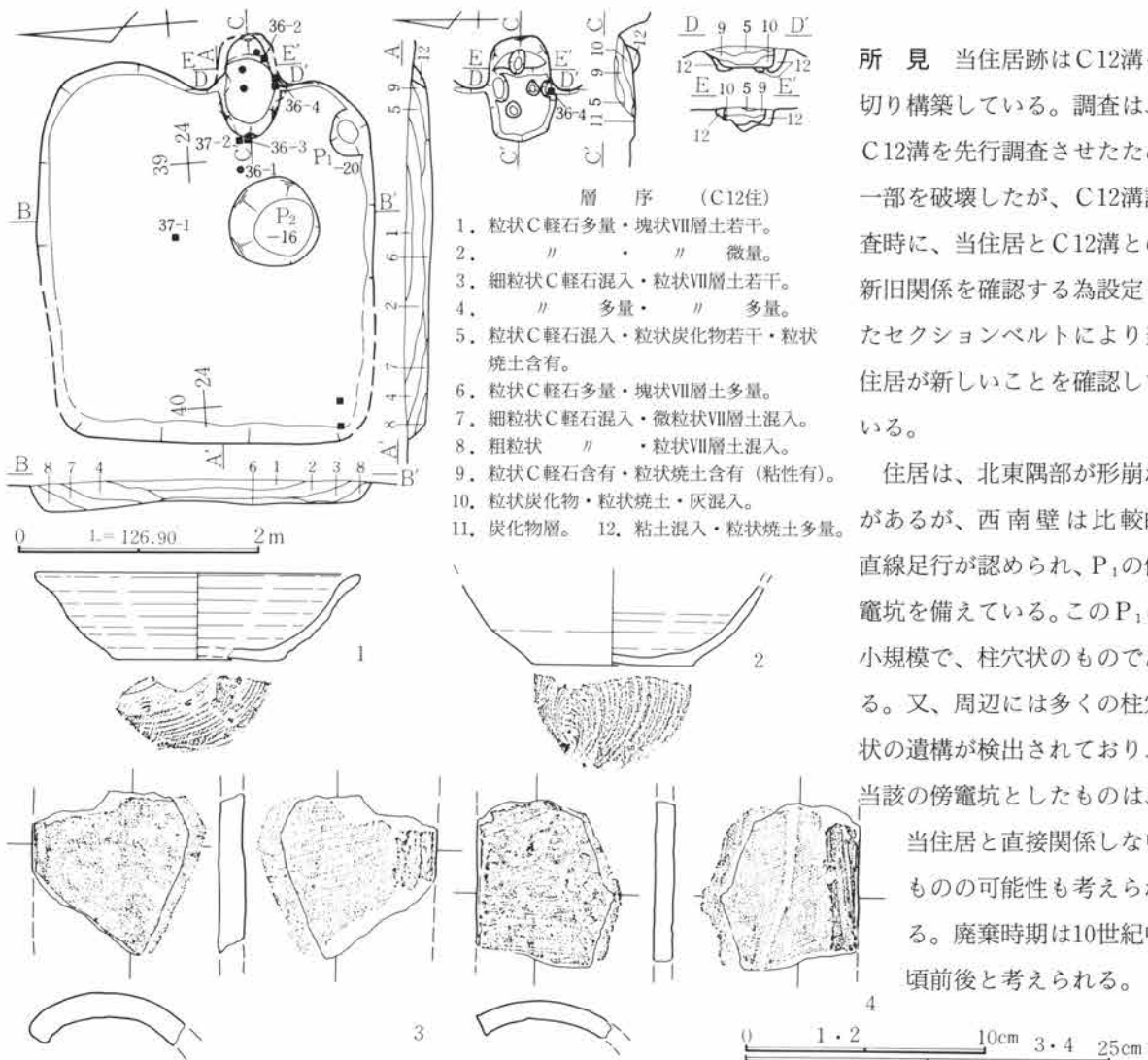


第34図 C区第11号住居跡出土遺物実測図(2)

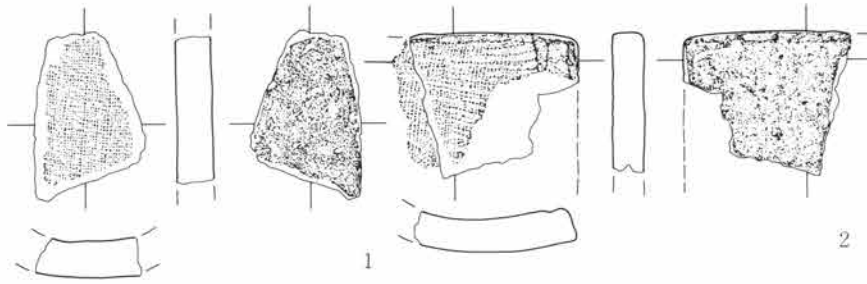


第35図 C区第11号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	C区第12号住居跡		位置	24・25-C38~40グリッド内。		残存深度	約23cm
平面形態	矩形	規模	3.06m×2.8m	構築基準辺	南壁?	主軸方位	北-95度-南?
壁	斜位に立ち上がる。		床面	VII層土を使用し、掘り方の造床は認められない。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P ₁ 。楕円形。60×30cm・深度-20cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	認められなかった。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から70cm。			主軸方位	北-92度-南	
改築	有。掘り方の袖部のピットは袖材の裾方。		形状	全体的に遺存が悪く馬蹄形状に残存する。			
規模	全長 82cm・屋外長 43cm・屋内長 39cm・袖部幅 51cm・燃烧部幅 35cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しい。壁は一部瓦により補強されている。全体に残存が悪いため詳細不明。						
煙道	未検出。	掘り方	燃烧部奥寄の掘り方内ピットは支脚の裾方。				
遺物出土状態	カマド内底面で若干量が認められたが、全体的に少量で大半が覆土内である。						



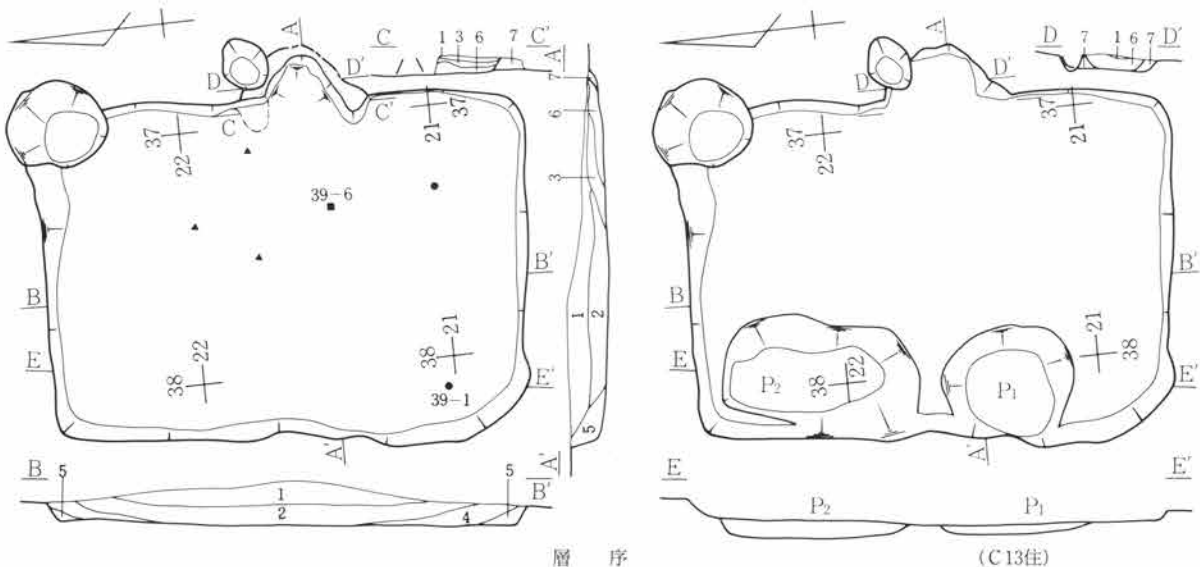
第36図 C区第12号住居跡・出土遺物実測図(1)



第37図 C区第12号住居跡出土遺物実測図(2)

0 25cm

遺構名称	C区第13号住居跡		位置	20~22-C-36~38グリッド内。		残存深度	約32cm
平面形態	長方形。	規模	4.0m×2.83m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-96度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	東壁下以外はVII層土を使用する。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	東壁下で土坑状の掘り込みが認められるが他の部分では認められない。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から60cm。			主軸方位	北-90度-南	
改築	残存不良なため不明。			形状	全体的に遺存が悪く馬蹄形状に残存する。		
規模	全長 61cm・屋外長 36cm・屋内長 25cm・袖部幅 1cm・燃烧部幅 45cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しい。焚口部は浅い落ち込みが認められなかった。						
	袖	住壁覆土掘り下げ時に左袖を破壊してしまい詳細は不明。					
煙道	残存不良な為未検出。			掘り方	比較的広い状態であるが、詳細は不明。		
遺物出土状態	量的に少ないが、住居の残存状態に起因すると考えられる。						

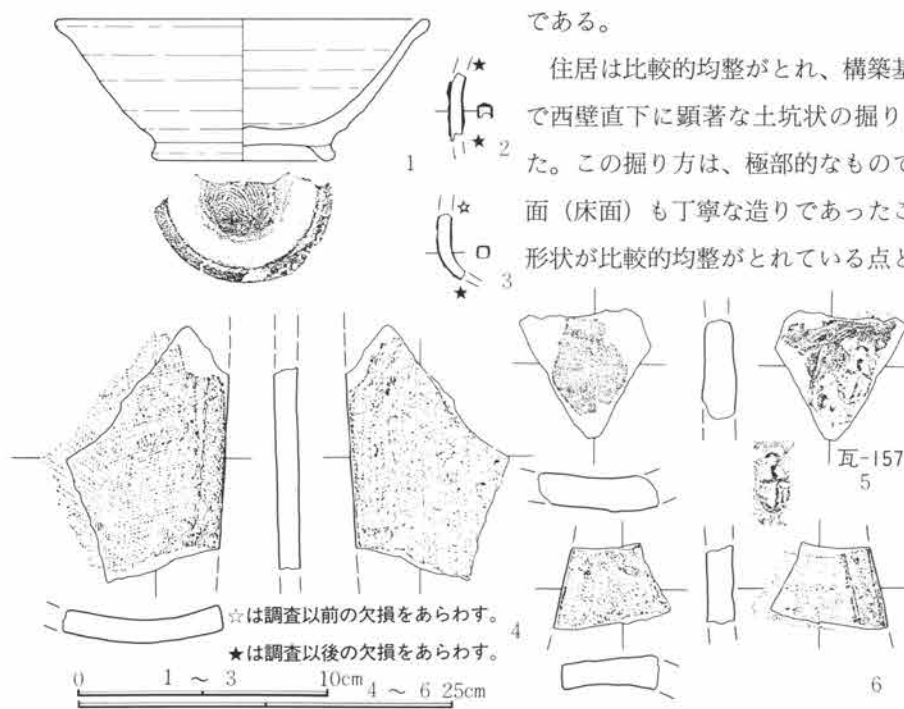


- 層序 (C13住)
1. 細粒状C軽石多量・塊状VII層土混入。
 2. 細粒状C軽石混入・塊状VII層土含有。
 3. 細粒状C軽石含有・粒状焼土含有。
 4. 細粒状C軽石少量・粒状VII層土混入。
 5. 微粒状C軽石微量・VI層土混入。
 6. 細粒状C軽石含有・粒状焼土・粒状炭化物・灰混入。
 7. 細粒状C軽石若干・小塊状焼土含有。

第38図 C区第13号住居跡実測図

0 L=127.00 2m

所見 当住居跡は比較的均整のとれた横長方形を呈している。カマドは東壁中央で山形状を呈している。この特長を備える住居跡の類例は少なく、前刊第3分冊中の第II段階に位置付けたD36住が上げられる程度



第39図 C区第13号住居跡出土遺物実測図

である。

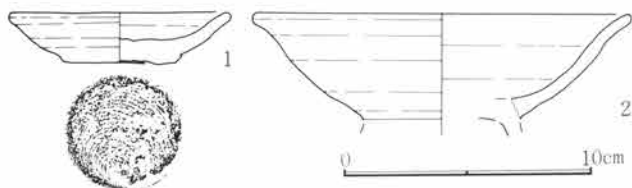
住居は比較的均整がとれ、構築基準辺と考られる壁は、掘り方で西壁直下に顕著な土坑状の掘り込みが認められた西壁と考えた。この掘り方は、極部的なもので他の部分では認められず、底面（床面）も丁寧な造りであったことが考えられる。この住居跡形状が比較的均整がとれている点と、掘り方底面を平坦に掘削し、

掘り方に造床を行わず底面を床面にする点では住居掘削時に於ける意識には、「丁寧。に造るという感を強く受ける住居である。

住居の存続時期は、9世紀末か10世紀初頭と考えられる。

遺構名称	C区第14号住居跡		位置	21~23-C-41~43グリッド内。		残存深度	約18cm
平面形態	正方形基調。	規模	3.8m × 3.8m	構築基準辺	南壁	主軸方位	北-98度-南
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	VII層土を床面とし、掘り方は認められない。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	未検出。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から36cm。			主軸方位	北-92度-南	
改築	不分明。掘り方内では微量の焼土を確認。		形状	全体的に遺存が悪く馬蹄形状に残存する。			
規模	全長 60cm・屋外長 28cm・屋内長 32cm・袖幅 85cm・燃烧部幅 40cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しい。燃烧部側は奥壁部側よりやや		袖	瘤状の造り出の掘り方を備え、III層土を主体に構築。			
煙道	未検出（住居の残存深度不良が原因）。		掘り方	焚口部下に皿状の掘り込みが検出されている。			
遺物出土状態	全体的に覆土内が多いが、床面直上・床面直上層出土のものもやや多い。						

所見 当住居は比較的均整のとれた形状を呈するが、北壁はややみだれているものの、南壁を構築基準辺とする正方形を基調にした住居である。又、カマドは、南東隅部に接近しているが、未だ若干の空間を有し構築しており、傍竈坑に対する意識は存在したものと考えられる。住居の掘り方は認められず、当住居同様に掘り方の認められない住居は、概して、

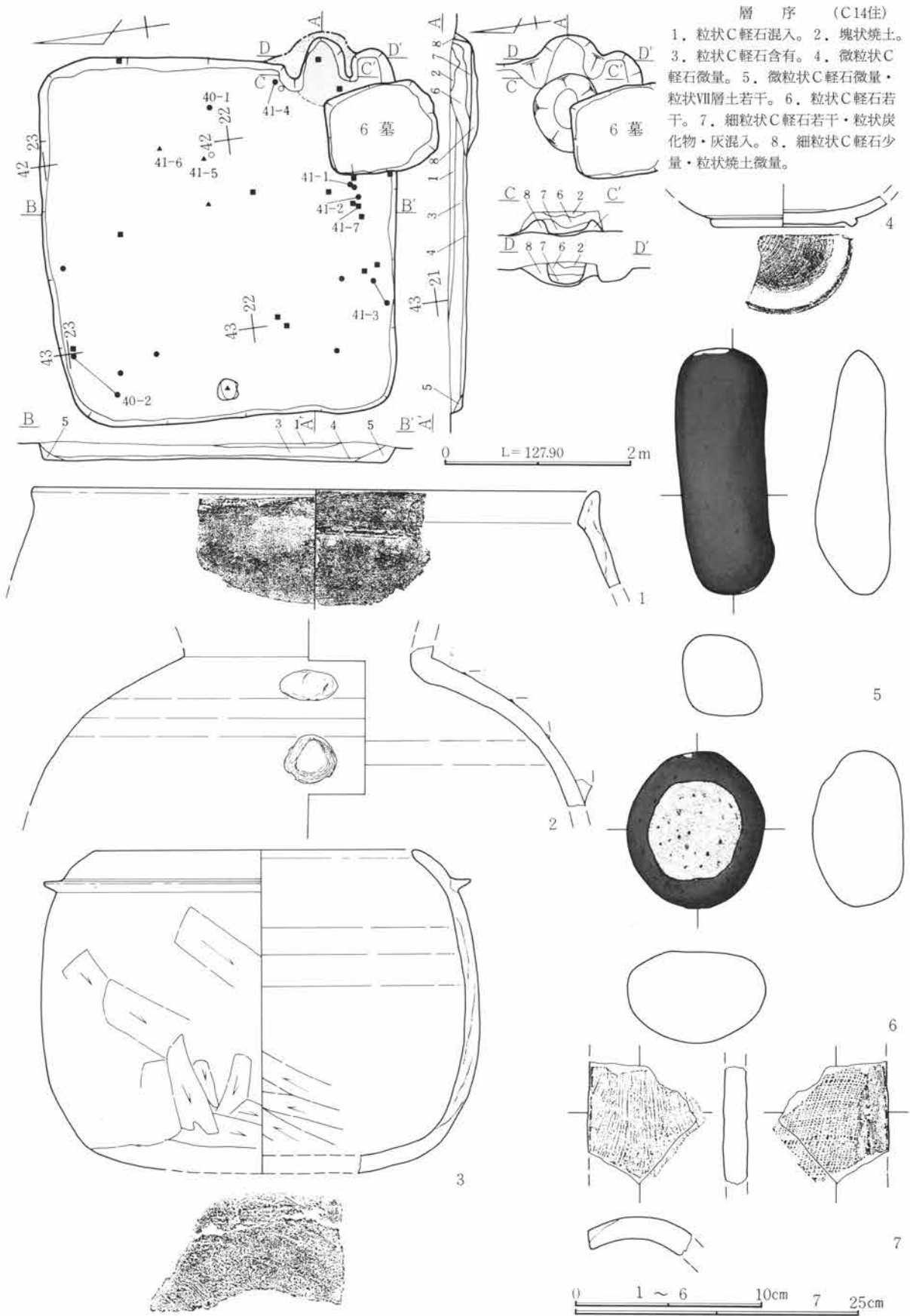


第40図 C区第14号住居跡出土遺物実測図（1）

黄褐色を呈するローム土（VII層土）の分布域での特徴とも言い得る。

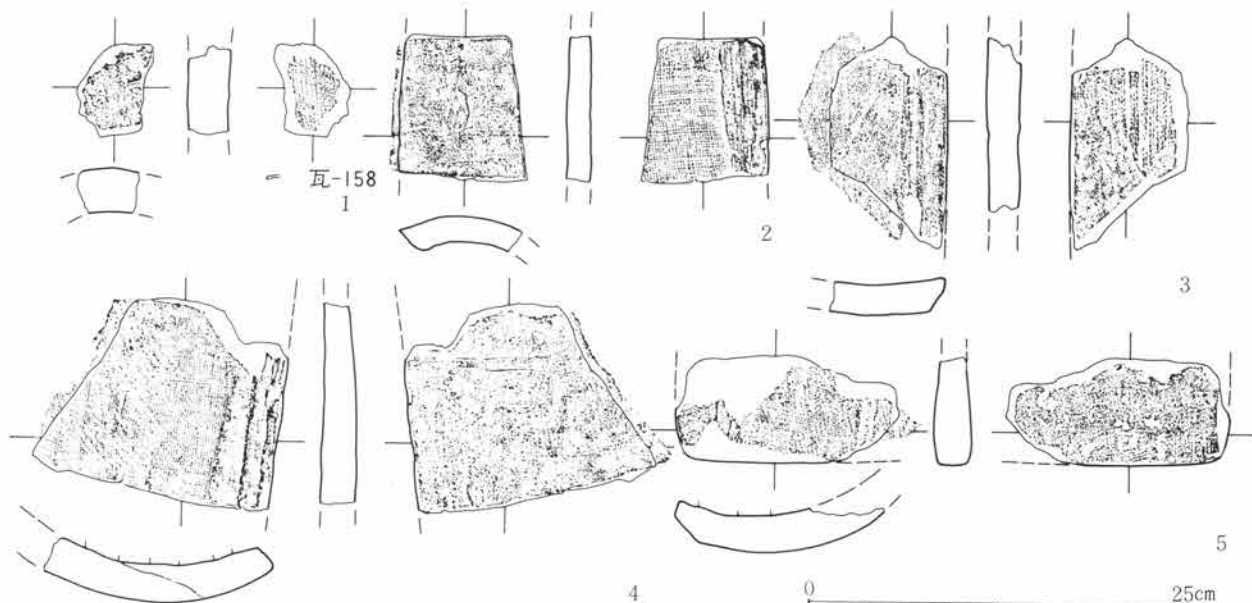
出土遺物は良好なものが皆無であるが、住居形状から10世紀後半の廃棄と考えられる。

第1節 南側調査区



第41図 C区第14号住居跡・出土遺物実測図(2)

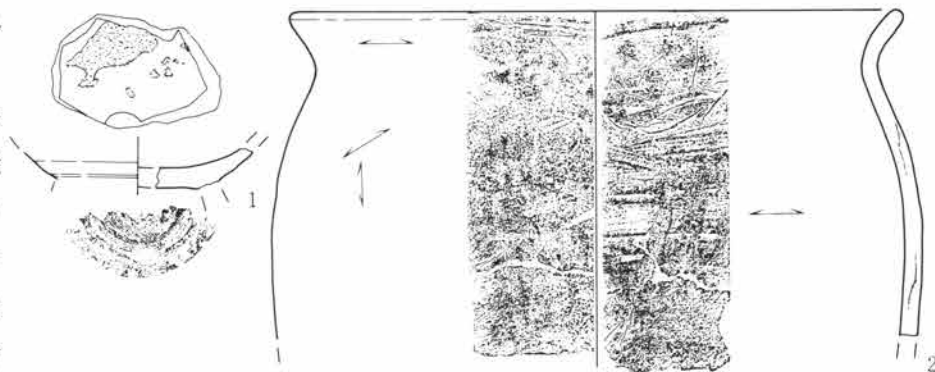
第4章 検出された遺構・遺物



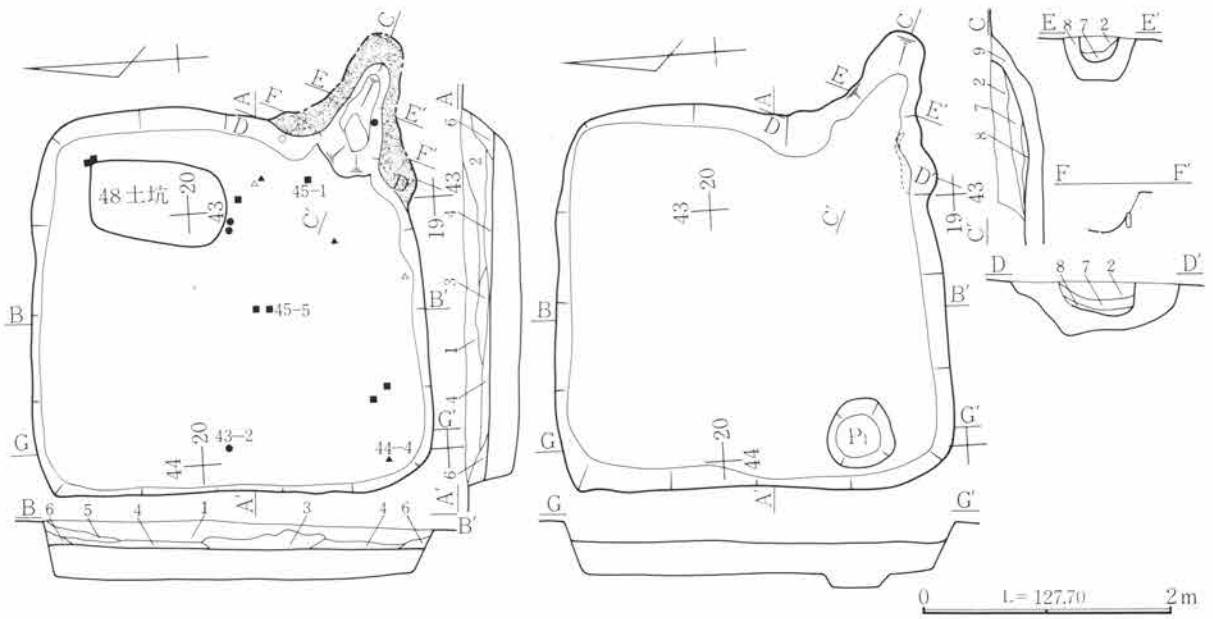
第42図 C区第14号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	C区第15号住居跡		位置	19・20-C-42~44グリッド内。		残存深度	約43cm
平面形態	正方形基調。	規模	3.08m×3.20m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-91度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	住居改築以後(第2期)は造床。改築以前(第1期)は不明。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P ₁ が貯蔵穴と考えられる。径×50cm・深度-20cm			
柱穴	未検出。住居周辺を平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	第1期・第2期共に不分明。第2期は基本的に掘り方はなかったと考えられる。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部。			主軸方位	北-114度-南	
改築	有。改築以前の燃烧部右壁を一部検出。		形状	舌状。			
規模	全長 98cm・屋外長 82cm・屋内長 16cm・袖部幅110cm・燃烧部幅 43cm・煙道部幅 23cm。						
焚口・燃烧部	焚口・燃烧部は重複が多いと考えられる。改築後は使用期が短期であったと考えられる程						
顕著な焼土・炭化物の検出がなかった。	袖	改築後は、形該化した観のする瘤状で認められる。					
煙道	斜位に立ち上がるが、検出部分是一部。		掘り方	改築時のものは判然としなかった。			
遺物出土状態	床面・床面直上層に近い層位の出土がやや多いが、完形個体の出土はなかった。						

所見 当住居は、正方形基調の南東隅部にカマドを備える住居である。掘り方で検出されたP₁は、位置的に貯蔵穴と考えられる。カマドの改築は、改築以前の壁補強に用いた瓦の基部を残す状態でのもので、大懸りな改築ではないと考えられる。住居の廃棄は11世紀前半~中頃と考えられる。

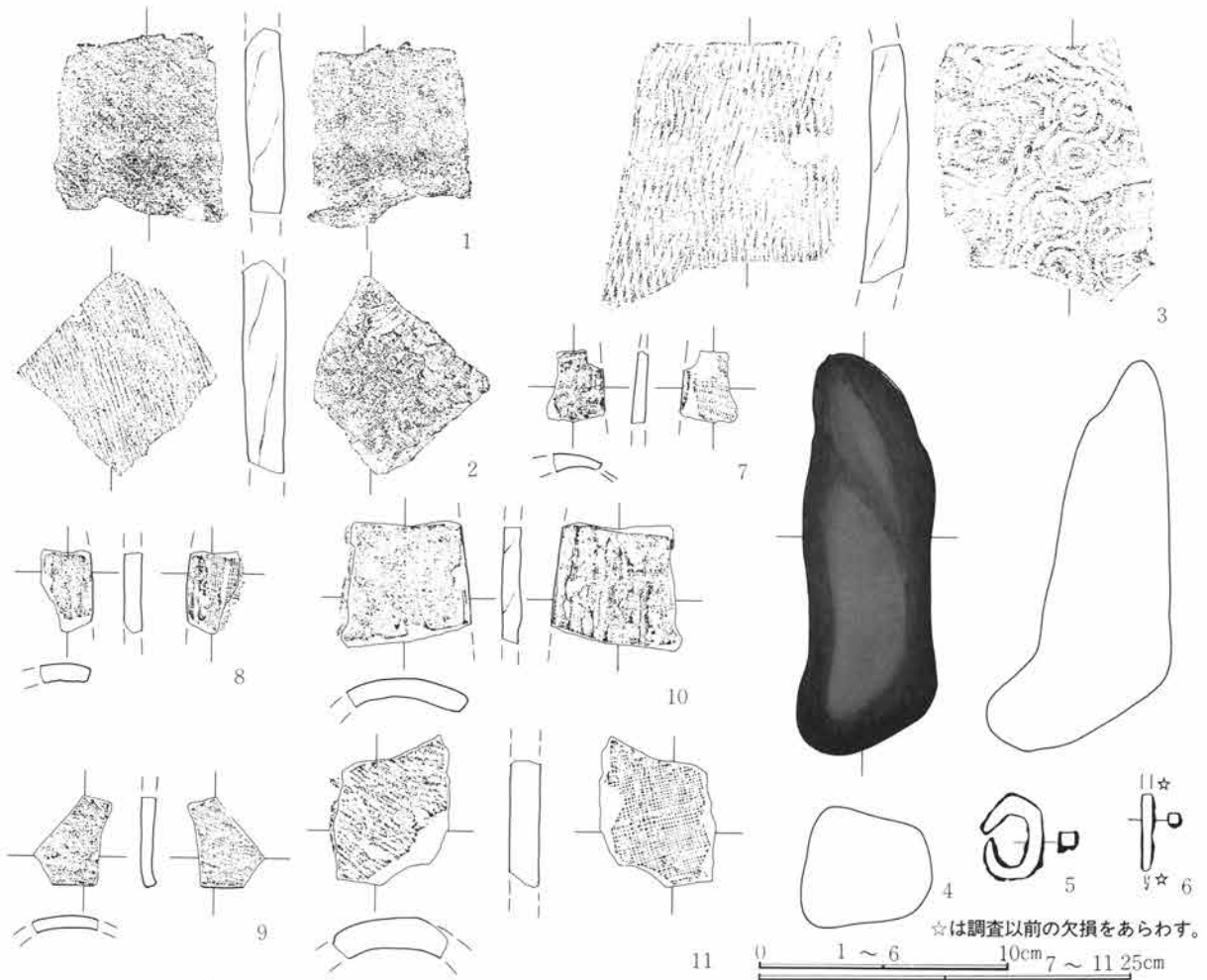


第43図 C区第15号住居跡出土遺物実測図(1)



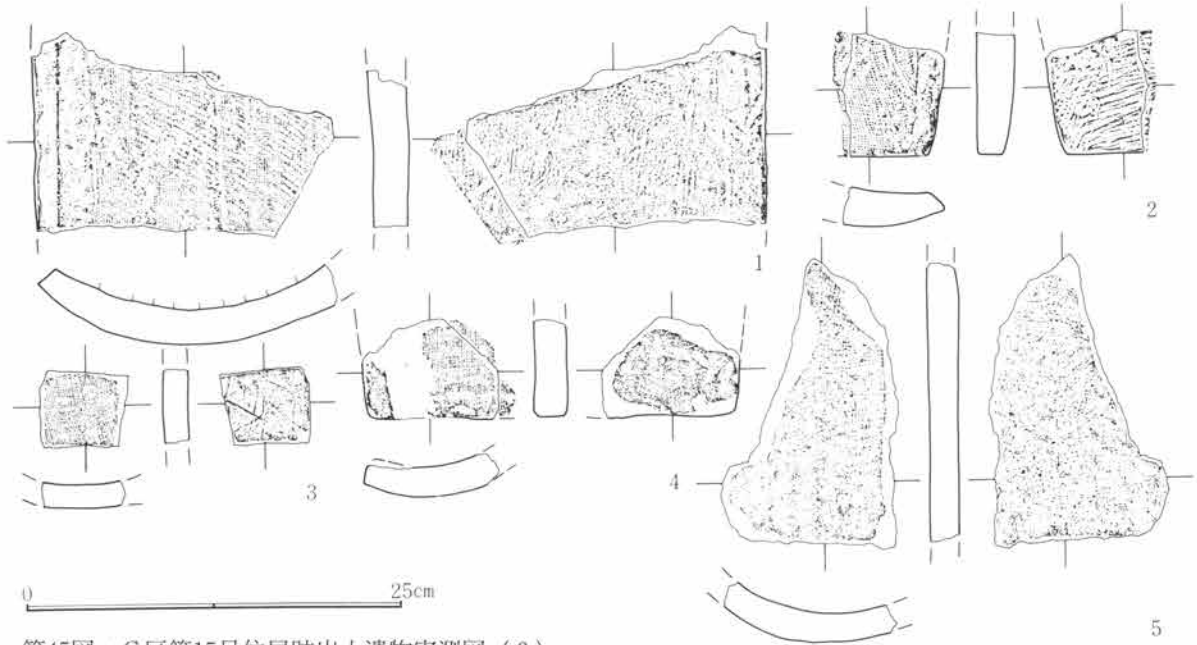
層序 (C15住)

1. 粒状C軽石多量・粒状炭化物微量・粒状焼土微量。
2. 粒状C軽石混入・粒状焼土混入。
3. 粒状C軽石混入・塊状炭化物斑状混入。
4. 細粒状C軽石若干。
5. 2同質。
6. 微粒状C軽石微量。
7. 細粒状C軽石若干・粒状焼土多量。
8. 細粒状C軽石微量・粒状炭化物微量。
9. 細粒状C軽石含有(上層)・塊状VII層土多量(第2期床面造床土)。



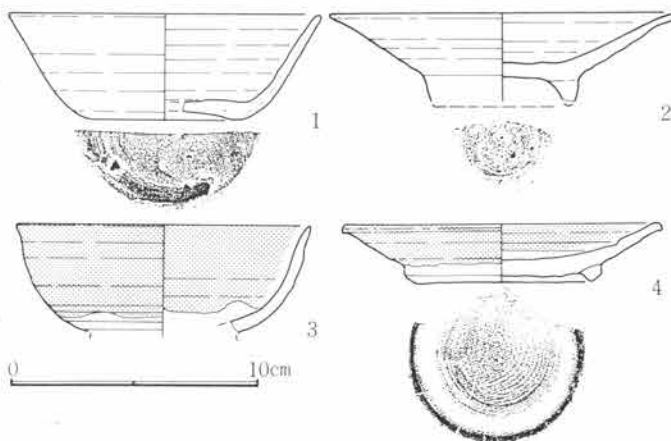
第44図 C区第15号住居跡・出土遺物実測図(2)

第4章 検出された遺構・遺物



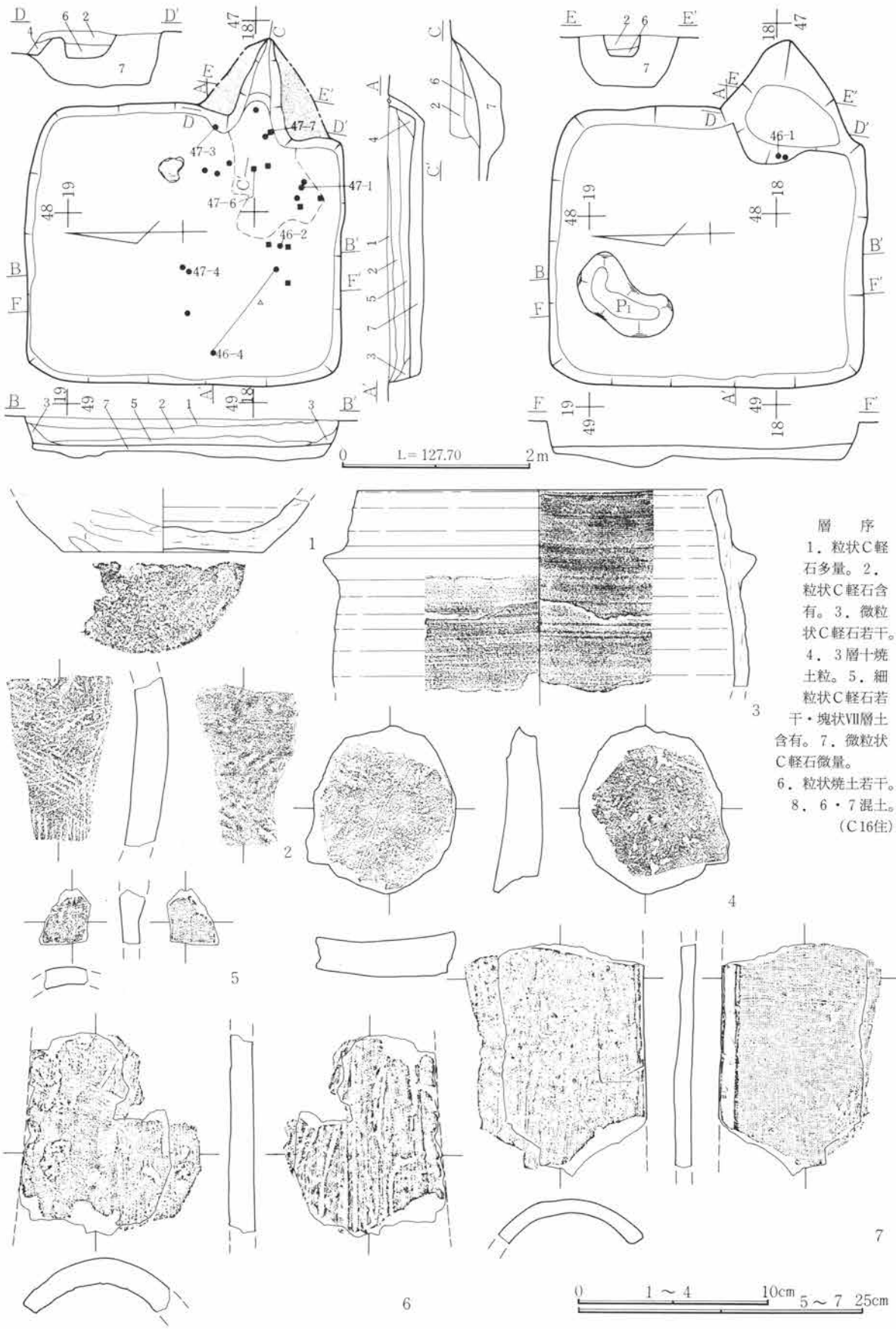
第45図 C区第15号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	C区第16号住居跡	位置	17~19-C-47~49グリッド内。			残存深度	約24cm
平面形態	矩形。	規模	2.93m×3.35m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-91度-南
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	改築時に造床。改築以前は不明。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	P ₁ を検出したが用途等は不明。全体に南西部分がやや窪む。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から35cm。ほぼ南東隅部寄り。			主軸方位	北-98度-南	
改築	有。改築以前の形状等の詳細は不明。		形状	舌状。全体的に屋外に向かい突出する。			
規模	全長106cm・屋外長 87cm・屋内長 19cm・袖部幅115cm・燃烧部幅 46cm・煙道部幅 15cm						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。右側壁天井周辺に瓦を使用。						
袖	瘤状を呈する。礫・瓦等による補強は認められない。						
煙道				掘り方	改築以前と重複する部分が多く詳細不明。		
遺物出土状態	住居内南東部にやや多く、床直・床面層も目立つ。						

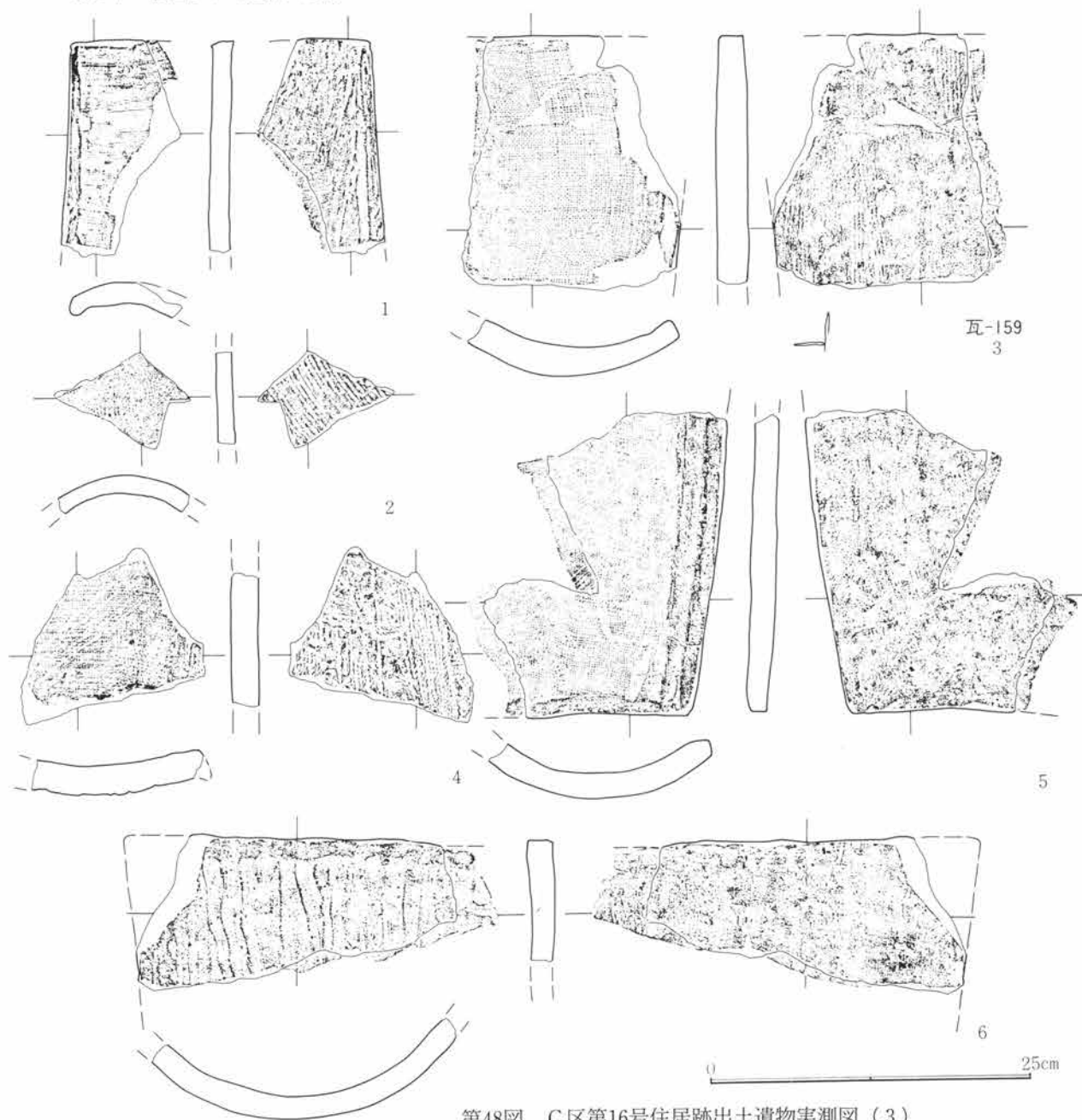


第46図 C区第16号住居跡出土遺物実測図(1)

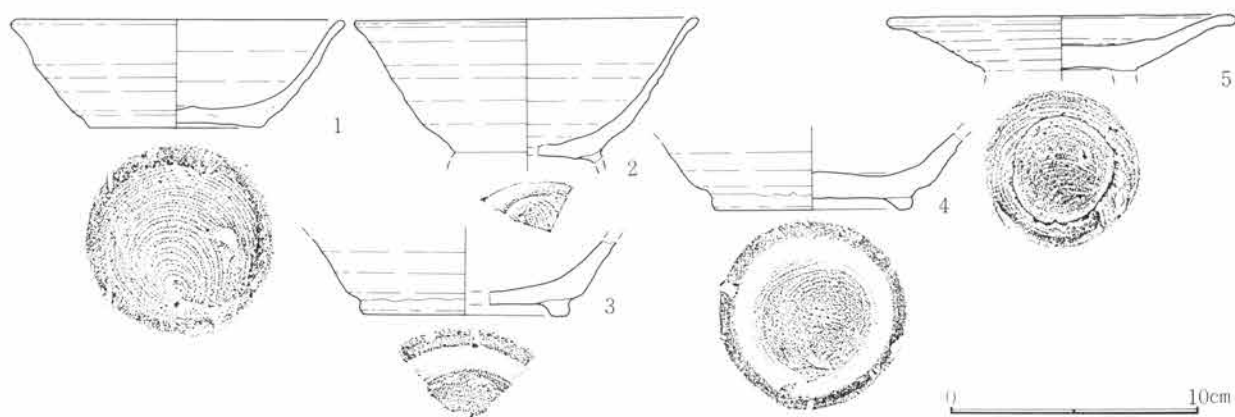
所見 当住居のカマドは、数次に互り改修されたと考えられる。平面では、細い舌状を呈する状態で検出されたが、掘り方は著しく幅広の状態、前刊書C6住や、今次の報文中のC49住と同様に、改築による所産と考えられる。出土遺物は、灰釉段皿が良好な遺存状態であるが、カマド位置と、隅部カマドの形状に類似する当住居カマドから、住居の廃棄は11世紀初頭頃と考えられる。



第47図 C区第16号住居跡・出土遺物実測図(2)

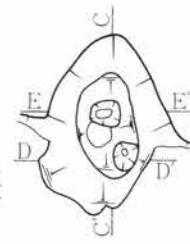
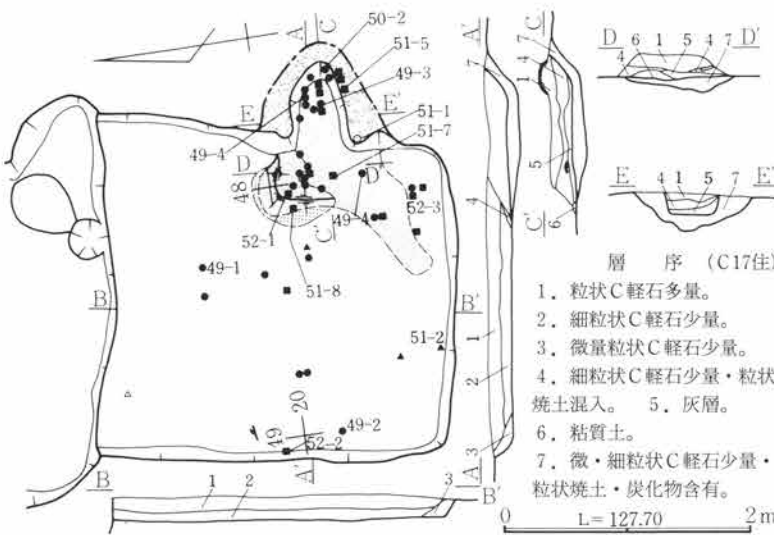


第48図 C区第16号住居跡出土遺物実測図(3)



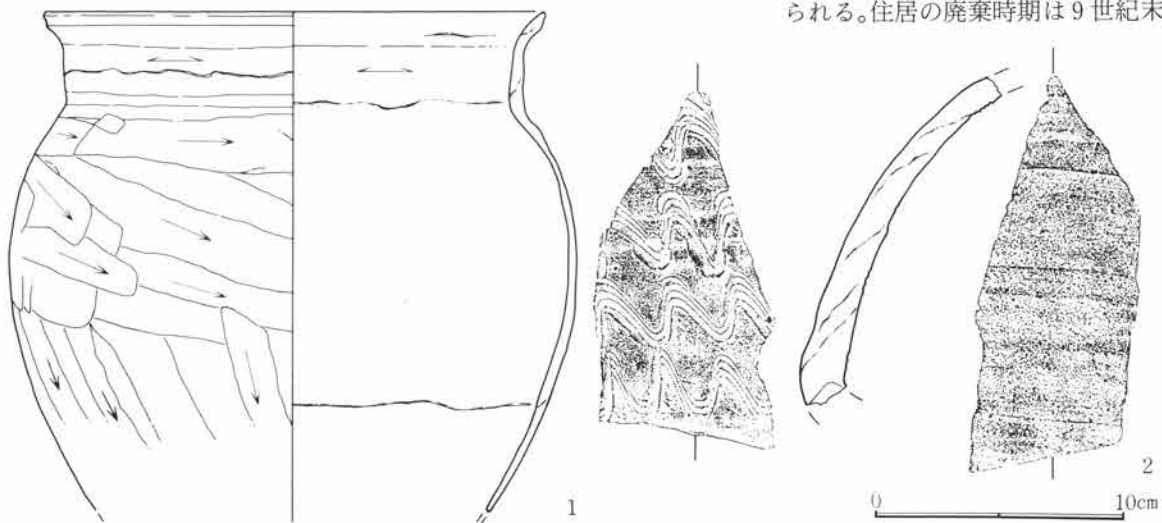
第49図 C区第17号住居跡出土遺物実測図(1)

遺構名称	C区第17号住居跡		位置	19・20-C-47~49グリッド内。		残存深度	約20cm
平面形態	矩形か長方形。	規模	2.75m×2.8+αm	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-98度-南
壁	斜位に立ち上がる。		床面	地山VII層土使用し平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	未検出。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から50cm。			主軸方位	北-93度-南	
改築	不分明。掘り方内の焼土からは「有」か。		形状	舌状。大半が屋外に向かい突出する。			
規模	全長 87cm・屋外長 54cm・屋内長 33cm・袖部幅130cm・燃烧部幅 45cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。			袖	瘤状の状態で作出す。		
煙道	未検出。		掘り方	規模的に比較的大きく改築が示唆される。			
遺物出土状態	カマド燃烧部奥で集中して出土している。						



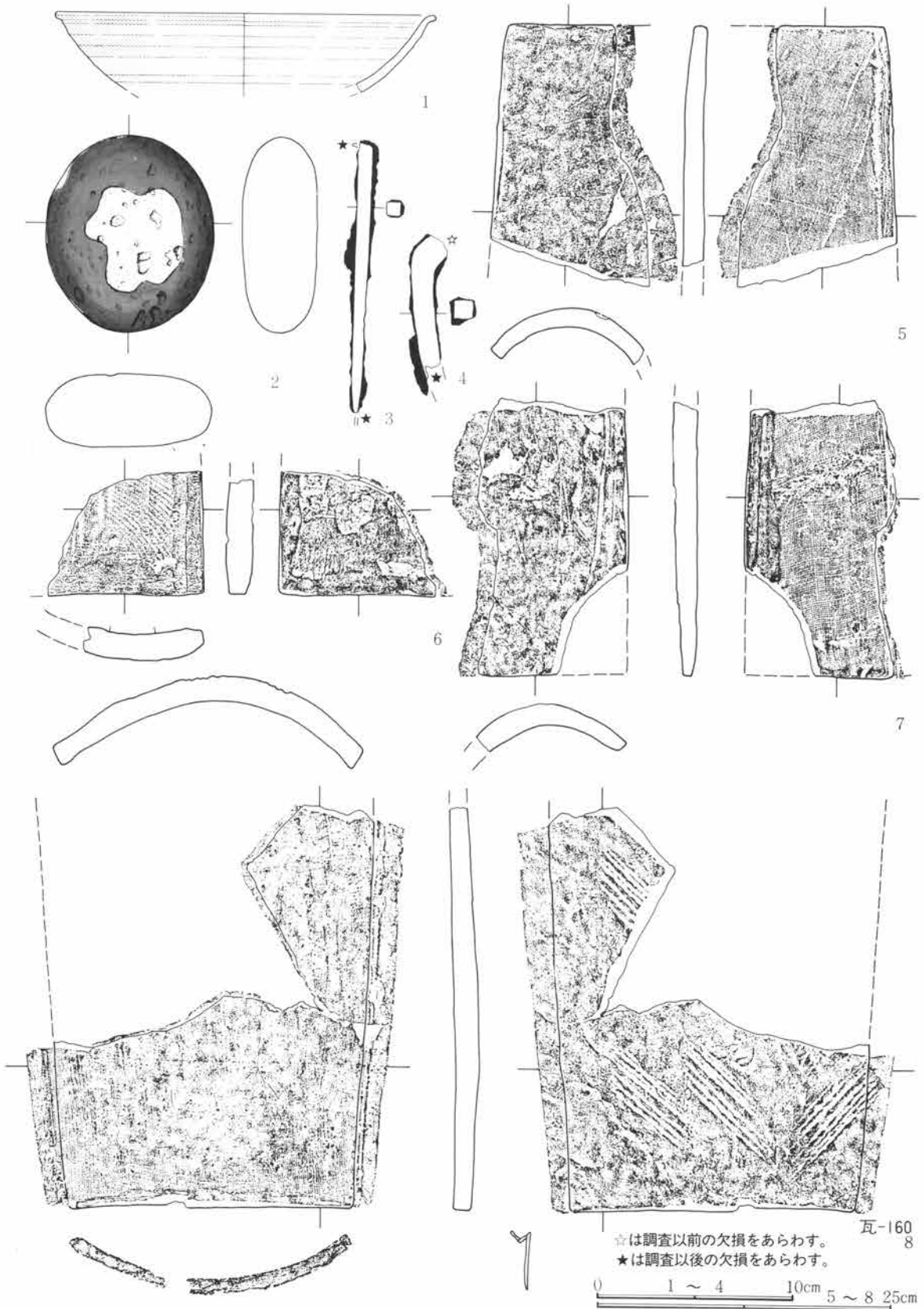
所見 当住居は北壁部全体がC18住に切れ失なわれている。カマドは、

東壁中央やや南東隅部寄りに構築し、燃烧部幅はそれ程広くない。又、左袖寄り焚口前面の床面から粘土が検出されている。そして、南東隅部周辺には、遺物の集中散布が認められ、傍竈坑の意識による状況と考えられる。住居の廃棄時期は9世紀末。



第50図 C区第17号住居跡・出土遺物実測図(2)

頃と考えられる。



第51図 C区第17号住居跡出土遺物実測図(3)

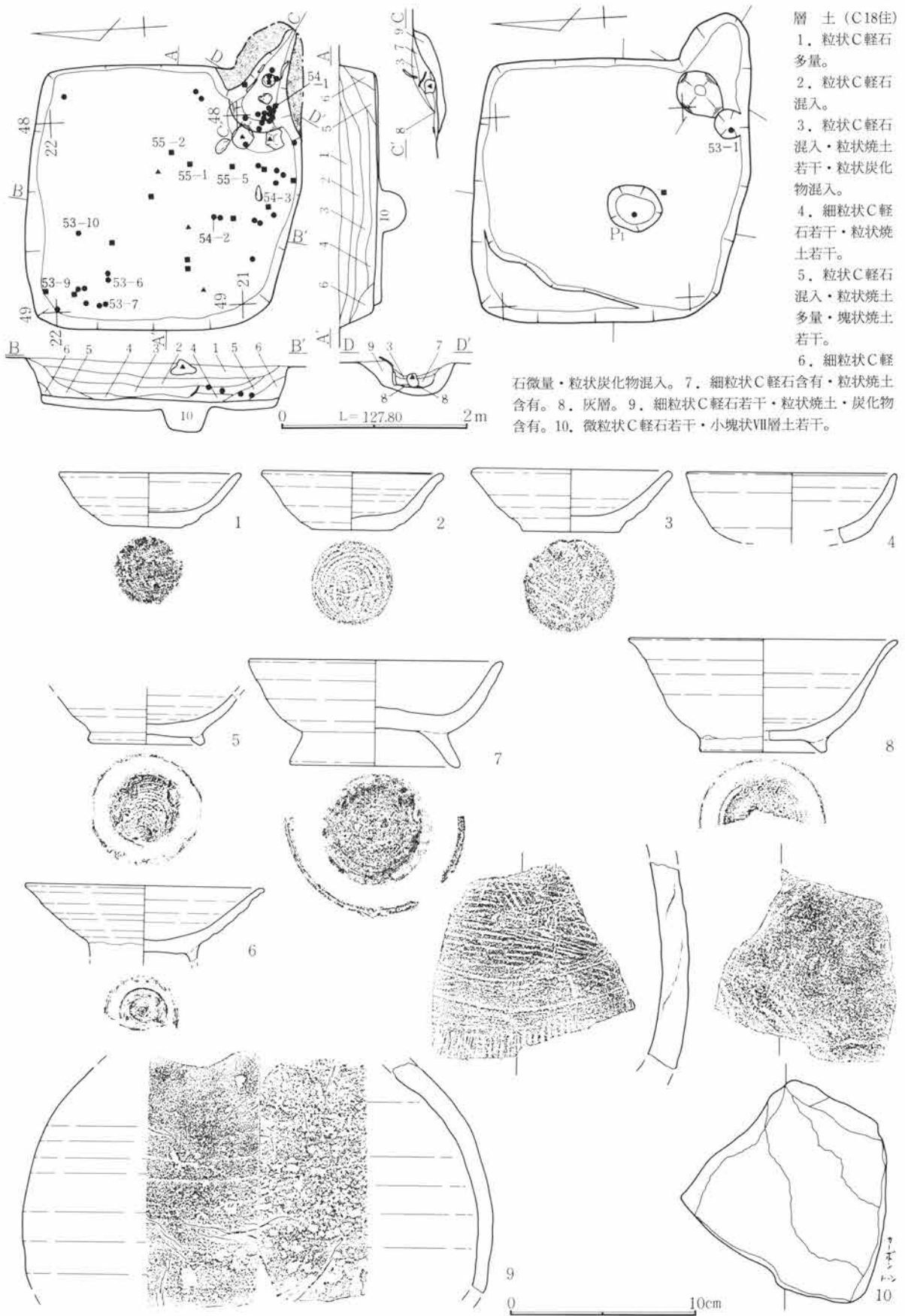


第52図 C区第17号住居跡出土遺物実測図(4)

遺構名称	C区第18号住居跡		位置	20~22-C-47~49グリッド内。		残存深度	約42cm
平面形態	正方形基調。	規模	2.80m×2.90m	構築基準辺	東壁	主軸方位	北-89度-南
壁	ほぼ垂直に立ち上がる		床面	掘り方底面から造床し平坦な床面を構築する。			
壁溝	未検出。	傍竈坑・貯蔵穴	未検出。P ₁ 用途不明。60cm×48cm。深度-30cm				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	西壁下を段状に掘り残こし、中央部南北方向にやや細長く、やや深目の掘り込みが認められる。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から0cm。			主軸方位	北-119度-南	
改築	不明。掘り方土からは「有」。考えられる。			形状	細い舌状。		
規模	全長116cm・屋外長 71cm・屋内長 45cm・袖部幅115cm・燃烧部幅 45cm・煙道部幅 15cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。S ₀ は支脚台と考えられる。						
	袖	左袖は瘤状を呈するも右袖は壁の一部的で顕著ではない。					
煙道	暖やかに立ち上がり狭長なもの。		掘り方	大きな舌状を呈する。			
遺物出土状態	カマド周辺から南壁下で、床面より遊離したものが多い。						

所見 当住居跡は前掲C17住を切り構築している。住居は正方形基調で南東隅部にカマドを備えている。カマドは先細り状の細い舌状を呈し、燃烧部から煙道の立ち上がりは仰角28度程を計り、段を有して立ち上がっている。さらに同部位周辺の壁は瓦により補強されている。住居の掘り方は、北西部隅部に、一部地山の掘り残しが認められる。P₁は住居中央部で検出されているが、性格等に就いては分明ではない。出土遺物は、完形品もやや多いが、床面で磨製石斧が検出されている。廃棄時期は11世紀前半と考えられる。

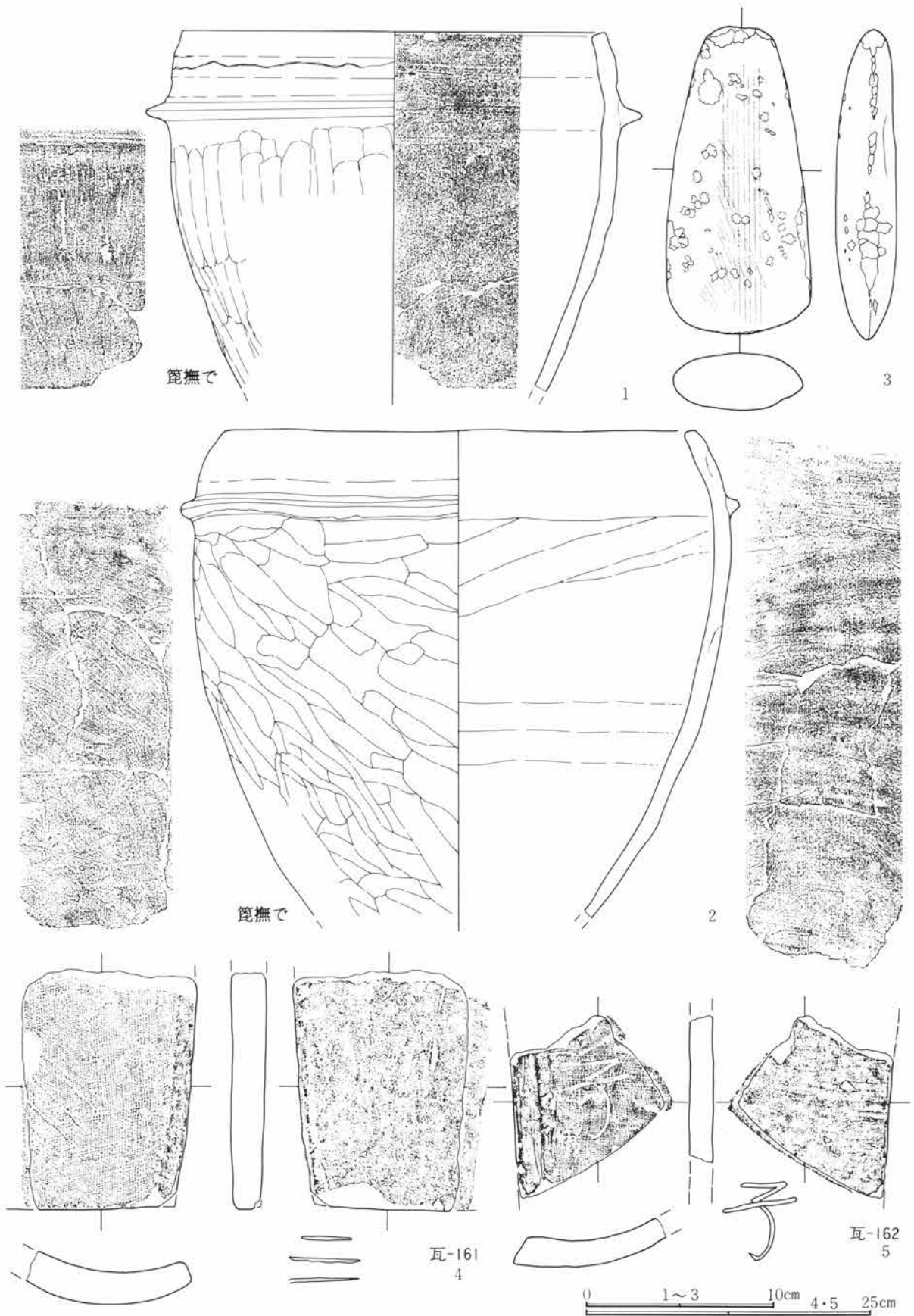
第4章 検出された遺構・遺物



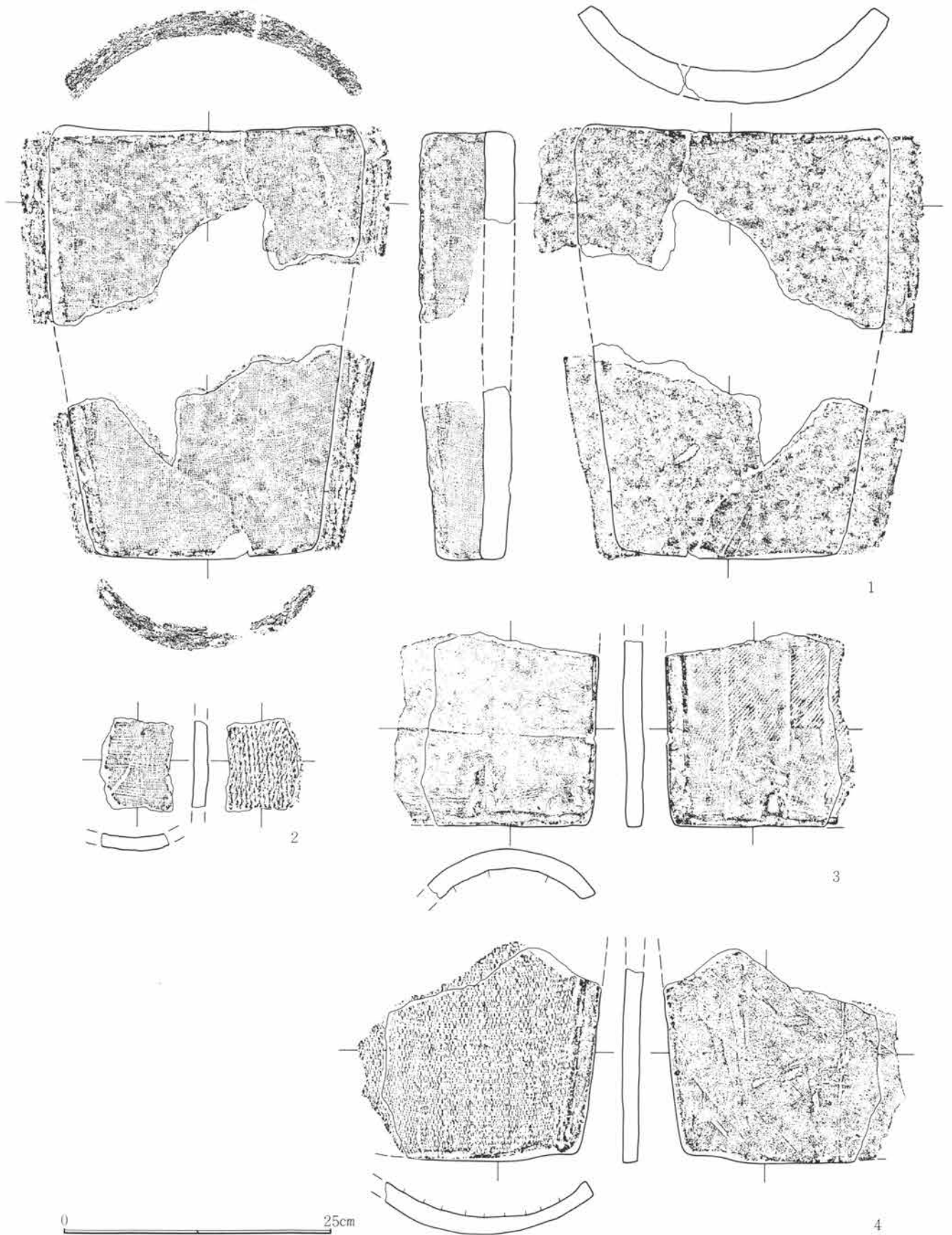
層土 (C18住)

1. 粒状C軽石多量。
2. 粒状C軽石混入。
3. 粒状C軽石混入・粒状焼土若干・粒状炭化物混入。
4. 細粒状C軽石若干・粒状焼土若干。
5. 粒状C軽石混入・粒状焼土多量・塊状焼土若干。
6. 細粒状C軽石微量・粒状炭化物混入。
7. 細粒状C軽石含有・粒状焼土含有。
8. 灰層。
9. 細粒状C軽石若干・粒状焼土・炭化物含有。
10. 微粒状C軽石若干・小塊状VII層土若干。

第53図 C区第18号住居跡・出土遺物実測図 (1)

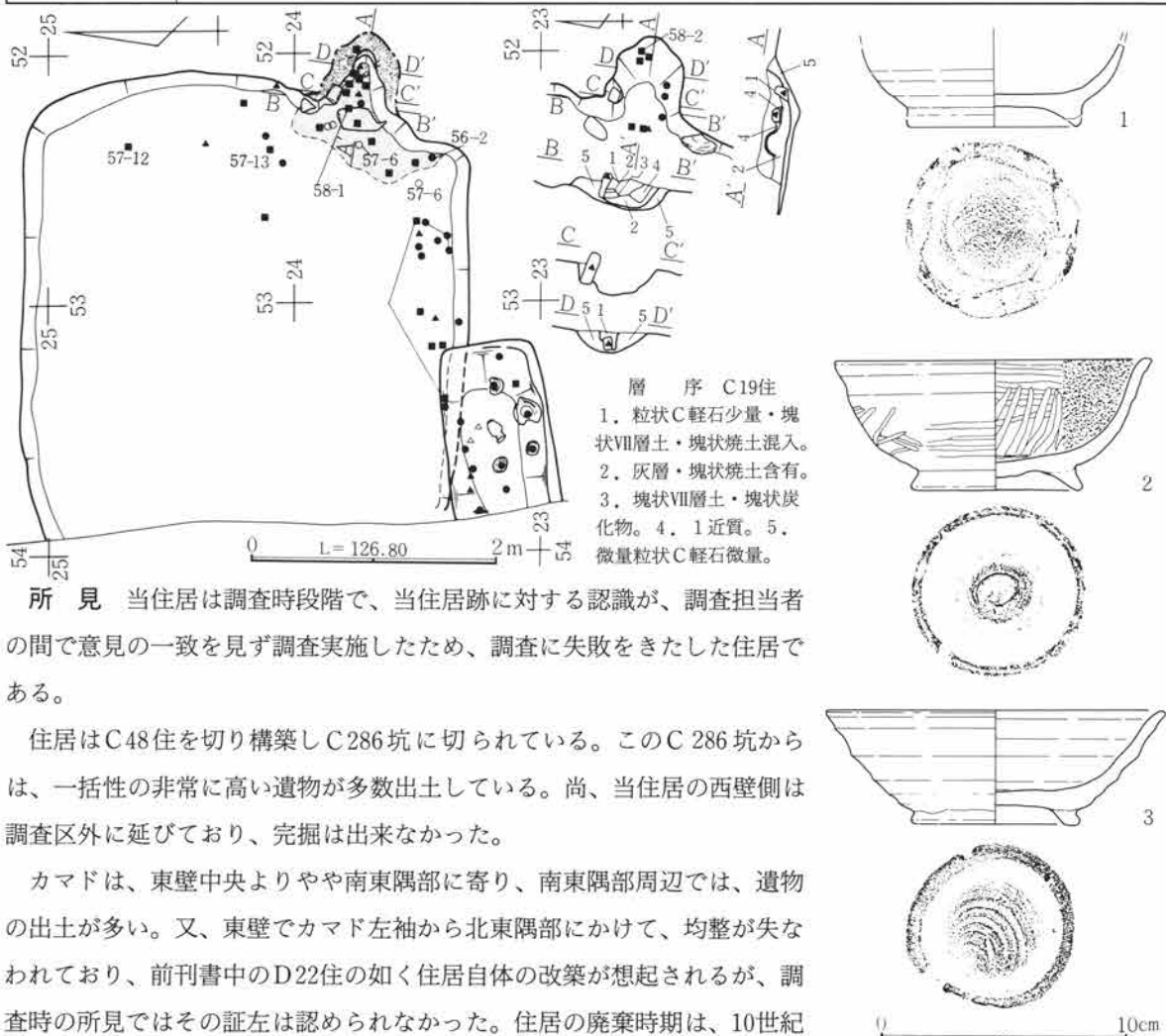


第54図 C区第18号住居跡出土遺物実測図(2)



第55図 C区第18号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	C区第19号住居跡		位置	23~25-C-51~54グリッド内。		残存深度	約30cm
平面形態	矩形状。	規模	3.7+αm×3.57m	構築基準辺	不分明壁	主軸方位	北-90度-南位か
壁	斜位に立ち上がる。		床面	北東側で側木址を切る。造床が認めたが調査不良。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	浅い状況は看取したが、調査不良のため平面的検出出来なかった。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から54cm。			主軸方位	北-101度-南	
改築	不分明。主要部位の状況では「無」か。			形状	舌状。		
規模	全長 65cm・屋外長 47cm・屋内長 17cm・袖部幅115cm・燃烧部幅 30cm・煙道部幅 16cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。礫を支脚とする。						
煙道	仰角60度程で細く立ち上がると思われる。		掘り方	比較的使用時の形状に近い。底面はほぼ平坦。			
遺物出土状態	南東隅部周辺で床直層に近い覆土内での出土がやや多い。						



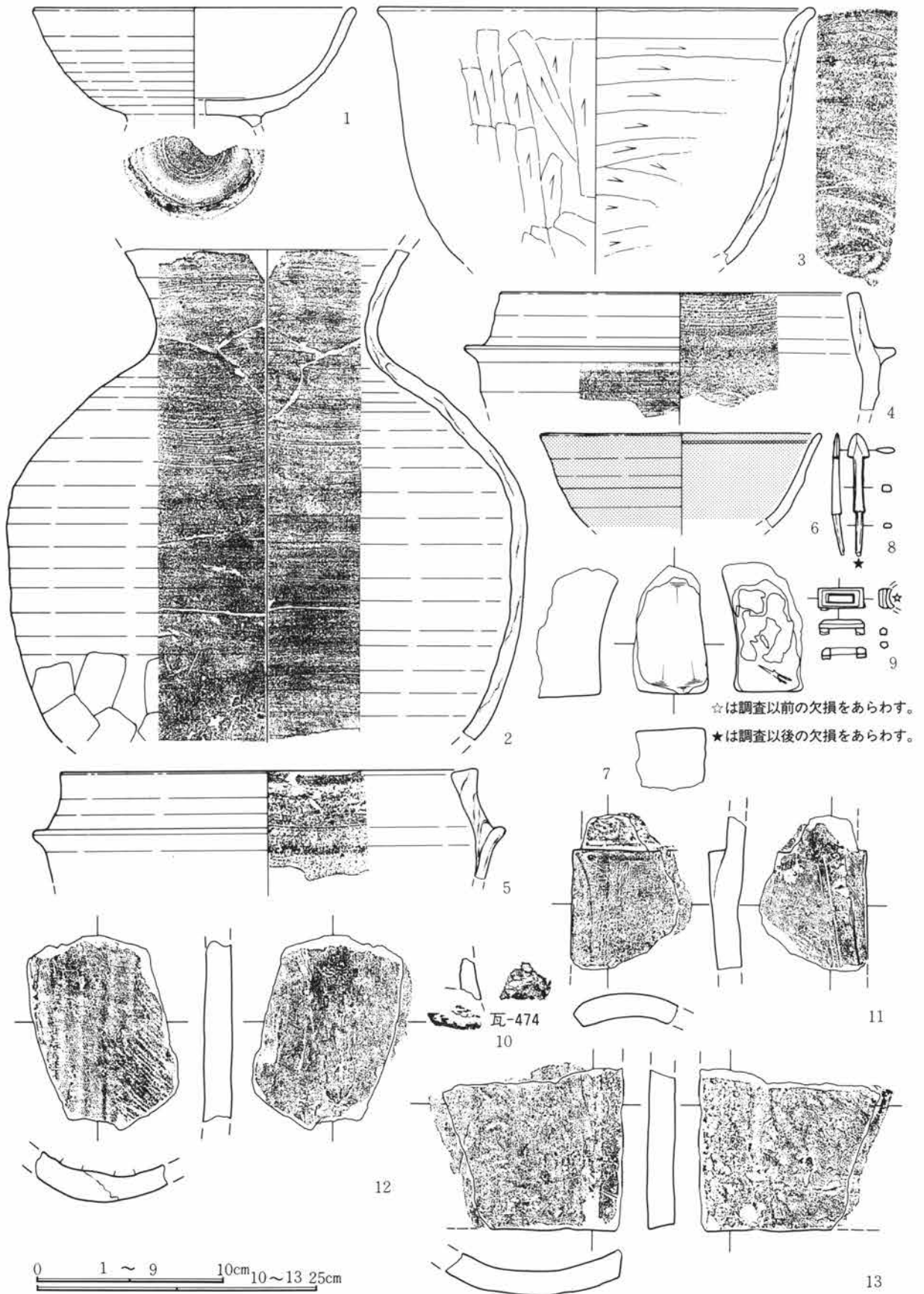
所見 当住居は調査時段階で、当住居跡に対する認識が、調査担当者
の間で意見の一致を見ず調査実施したため、調査に失敗をきたした住居で
ある。

住居はC48住を切り構築しC286坑に切られている。このC286坑から
は、一括性の非常に高い遺物が多数出土している。尚、当住居の西壁側は
調査区外に延びており、完掘は出来なかった。

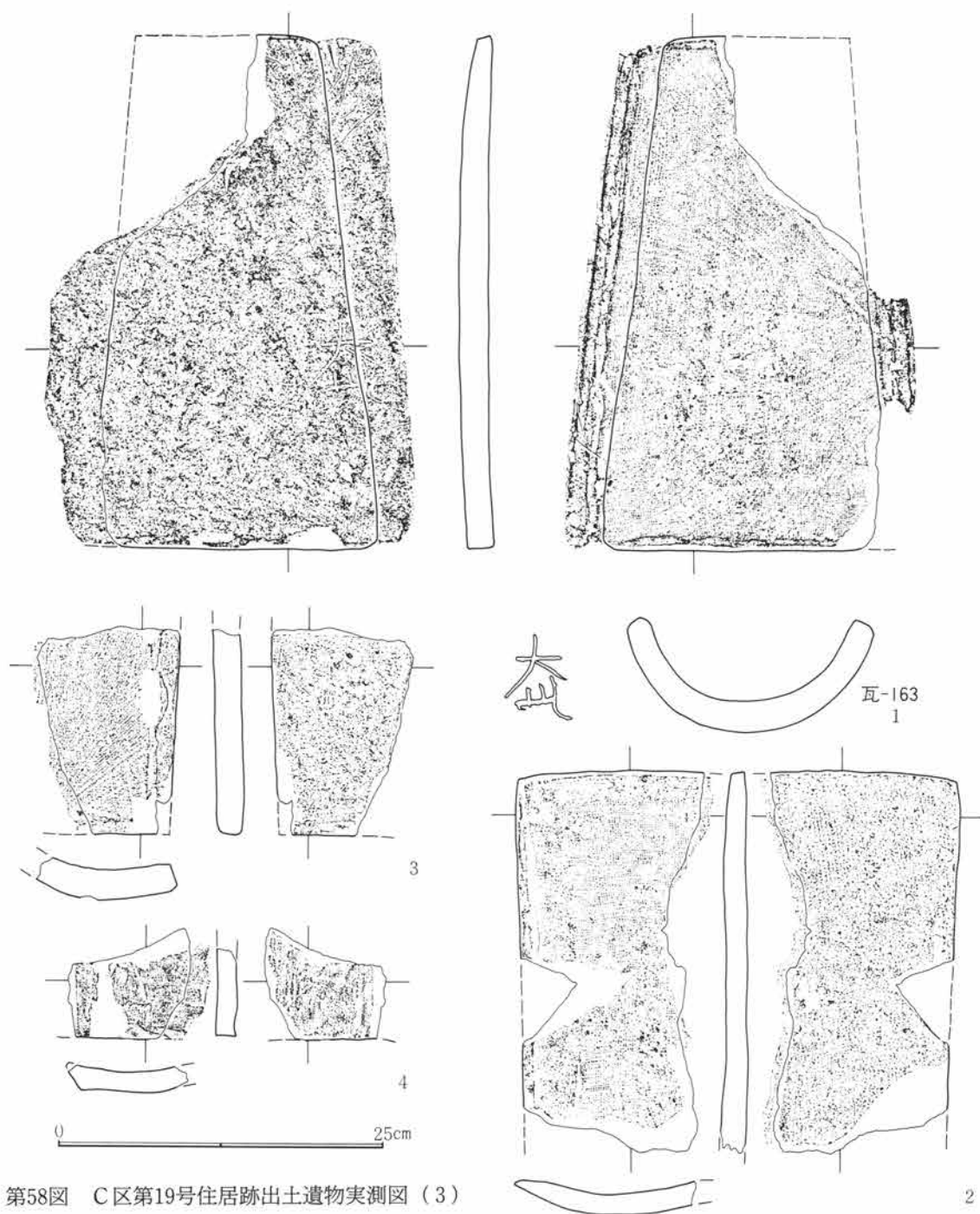
カマドは、東壁中央よりやや南東隅部に寄り、南東隅部周辺では、遺物
の出土が多い。又、東壁でカマド左袖から北東隅部にかけて、均整が失な
われており、前刊書中のD22住の如く住居自体の改築が想起されるが、調
査時の所見ではその証左は認められなかった。住居の廃棄時期は、10世紀
前半頃と考えられる。

尚、当住居の下位には風倒木址が確認されている。

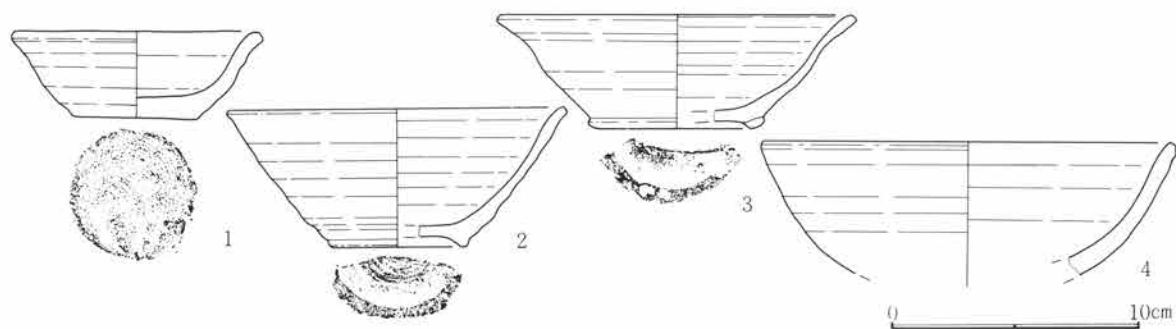
第56図 C区第19号住居跡・
出土遺物実測図(1)



第57図 C区第19号住居跡出土遺物実測図(2)



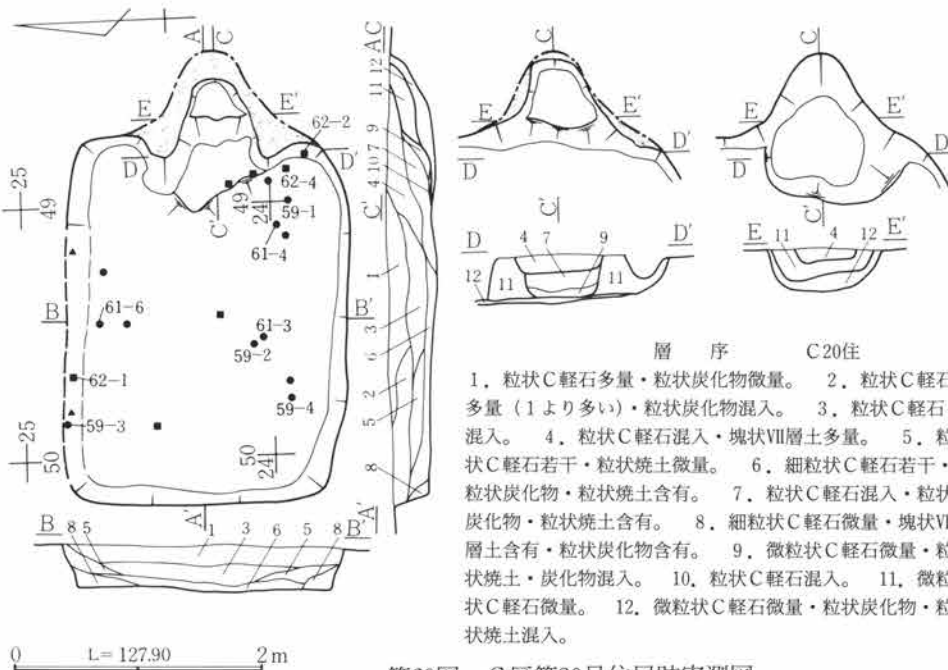
第58図 C区第19号住居跡出土遺物実測図(3)



第59図 C区第20号住居跡出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物

遺構名称	C区第20号住居跡		位置	24・25—C—48～50グリッド内。		残存深度	約38cm
平面形態	縦長方形。	規模	2.90m×2.20m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北—90度—南
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	全体を造床。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	住居中央部に向かい皿状に窪んだ状態であるが顕著なものではない。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から20cm。			主軸方位	北—91度—南	
改築	有。	2回と考えられ、図中右側は掘り方。		形状	舌状を呈する。		
規模	全長 90cm・屋外長 47cm・屋内長 43cm・袖部幅135cm・燃烧部幅 53cm・煙道部幅 38cm?。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
	袖	左袖が屋内に大きく右袖は小さい。補助材等なし。					
煙道	不明な点が多いが立ち上りは幅が広い。		掘り方	改築に伴うものが部分的に埋設している。			
遺物出土状態	遺物量が少なく、床面直上は皆無であった。						



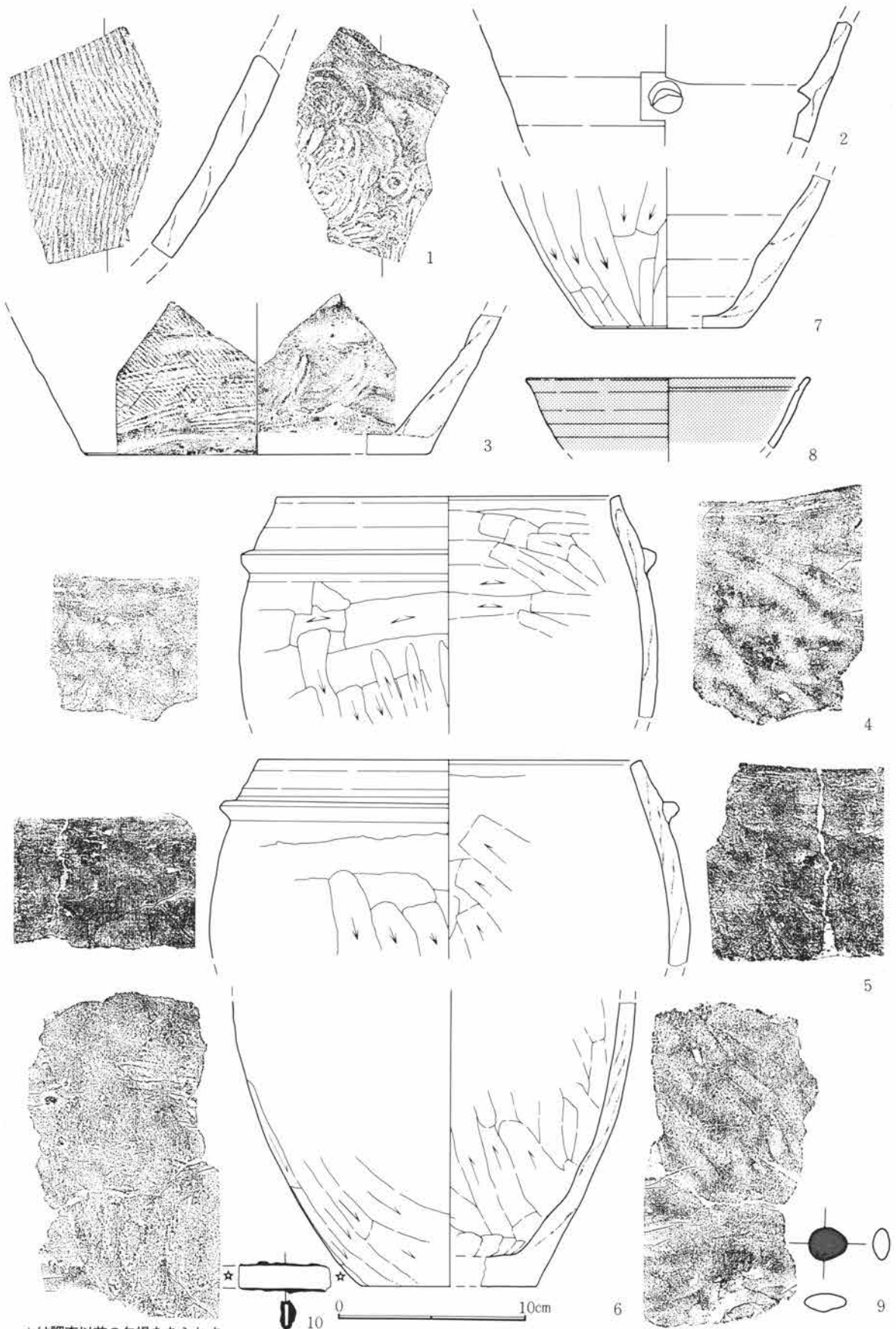
第60図 C区第20号住居跡実測図

所見 当住居跡は、C21住を切り構築している。調査時の平面精査による両者の新旧確認所見でも上述の点は確認出来たが、壁検出時の掘り過ぎにより不明にしてしまったが、土層断面の所見より図上に復原を試みた。

住居は縦長の長方形を呈し、東壁

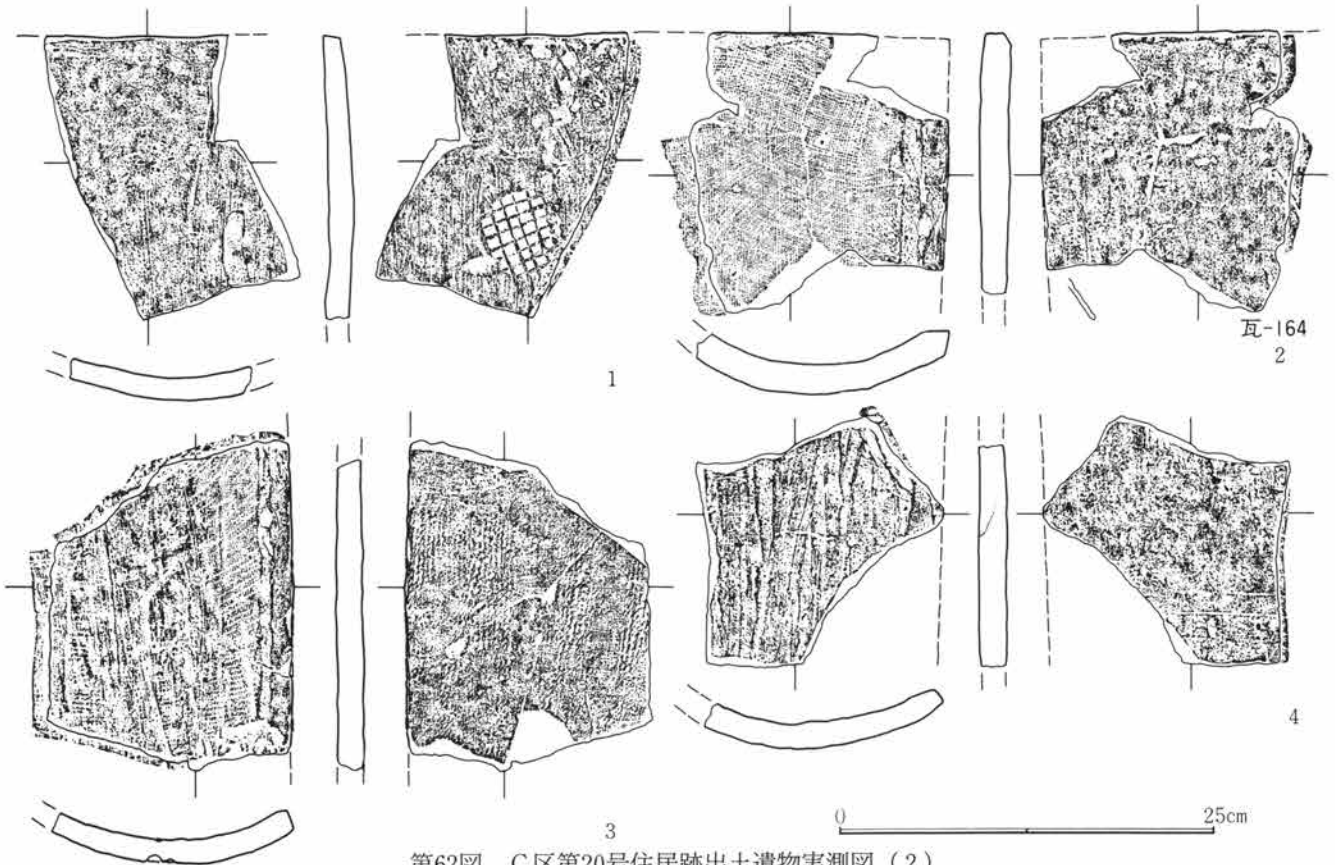
中央にカマドを備えている。カマドは、数次に及ぶ改築が考えられ、住居廃棄時のカマドは、全体的に屋内寄りに構築されている。改築の痕跡は、住居廃棄時段階のカマド掘り方が平面検出出来、さらに改築以前のものと考えられる掘り方が検出されたが、これが頭初に於ける単時期としてのカマドの掘り方形状としてのものかは明確でない。寧ろ、第60図右図は、地山土面を単に露呈させただけでの図であると解釈戴きたい。

構築案準辺は、西壁と考えたが、南壁とは考え難く、北壁は調査時の不手際により分明ではない点によるが、北東隅部の状態と、確認時の状況・土層断面所見から復原した北壁は、ほぼ直線走行するものと考えられ、この点では、この北壁が構築基準辺であった可能性は非常に大きい。ただ、北壁・西壁がほぼ直交する状態から、主軸方位角に就いては、遺構表中に記した「北—90度—南」のほぼ真東であることは明らかである。住居の廃棄時期は、10世紀代でも後半と考えられる。



☆は調査以前の欠損をあらわす。

第61図 C区第20号住居跡出土遺物実測図(1)



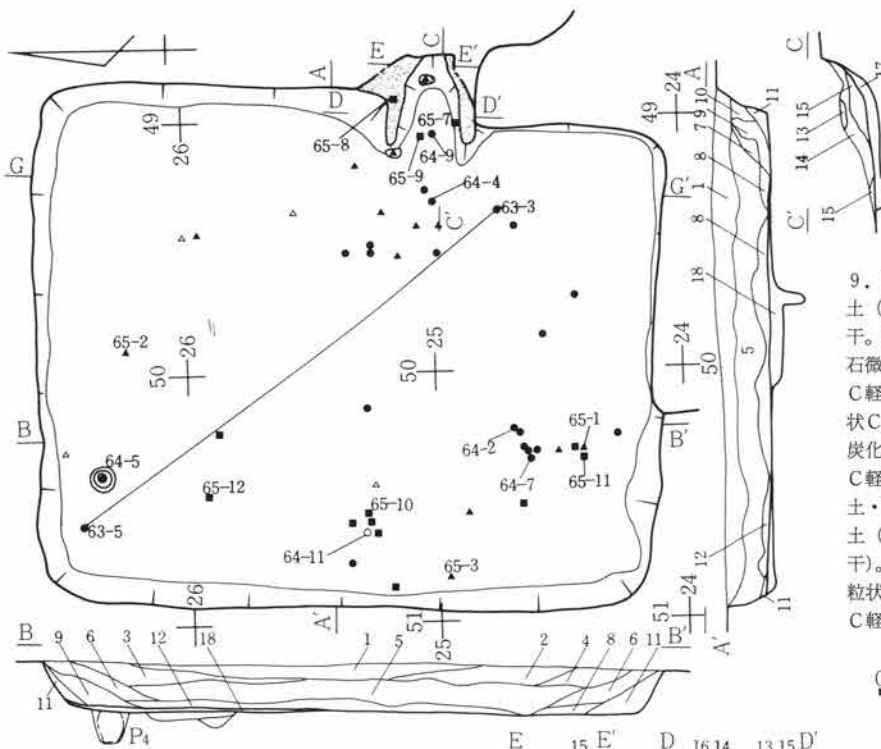
第62図 C区第20号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	C区第21号住居跡		位置	24~26-C-48~51グリッド内。		残存深度	約37cm
平面形態	長方形。	規模	4.08m×4.97m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-92度-南
壁	斜位で検出。		床面	部分的に地山土を床面とするが、中央部は造床。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P ₆ か(不分明) P ₆ (137×120cm・深度-30cm)			
柱穴	P ₁ ・P ₂ の中央部が柱穴状を呈する。P ₁ ・P ₂ を柱穴とした場合、住居規模を勘案すれば改築(拡張)か?。						
掘り方	土坑状の広い掘り方を有するP ₁ ・P ₂ ・P ₅ ~P ₇ の土坑状のものが多い。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から120cm。				主軸方位	北-97度-南
改築	有? 確実に把握出来なかった。			形状	逆U字状。		
規模	全長 90cm・屋外長 35cm・屋内長 55cm・袖部幅130cm・燃烧部幅 45cm・煙道部幅 23cm?。						
焚口・燃烧部	煙道立ち上がり部で検出された礫を支脚とすれば、燃烧部・焚口は長い。この場合、焚口部は袖に囲まれた内側に完全に入る。						
	袖	長く細い。左袖先端に礫を据える。					
煙道	仰角75度程で立ち上がる。			掘り方	土坑状に大きく掘り込んでいる。		
遺物出土状態	東側から南側にかけて床面直上での出土が多い。						

所見 当住居は均整のとれた横長方形を呈する住居で、東壁のほぼ中央部にカマドを備える大形の住居跡である。そして、掘り方の調査時の過程でP₁・P₂を検出している。このP₁・P₂は、他の住居例で掘り方で検出される隅部周辺のピットと異なり、土層の状態から柱穴と判断したものである。しかし、この2本に北壁側で対応する柱穴の存在がない点では、上屋構造が片持型であった可能性も考慮される。

住居内北西隅部では、床面下に肩部以下を埋設し、口縁部を床面上に出した完器の須恵器瓶が検出された。

第1節 南側調査区

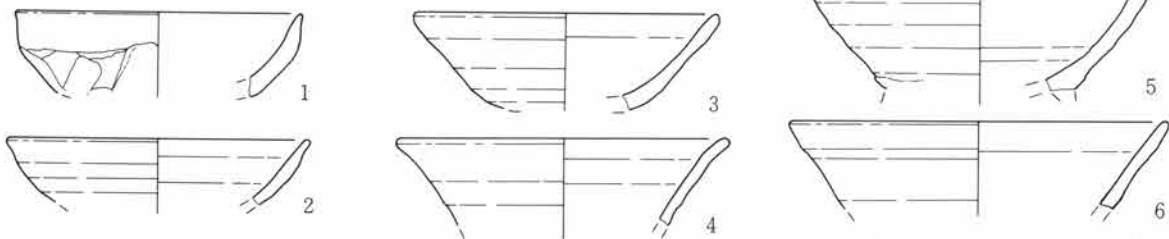
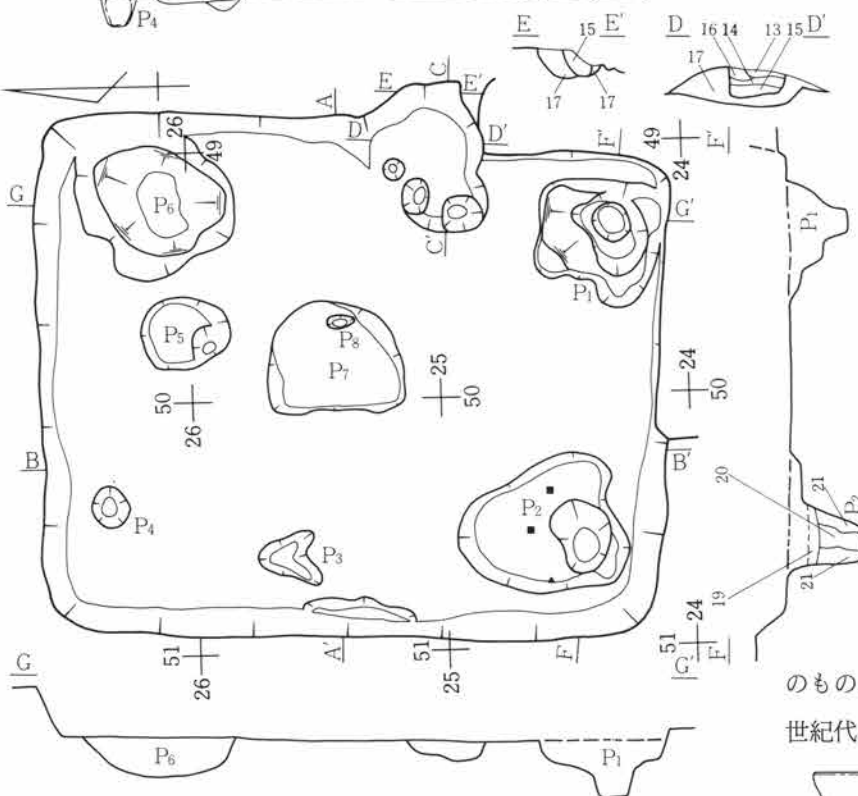


- 層序 C21住
1. 粒状C軽石多量。
 2. 粒状C軽石混入・粒状炭化物多量・細粒状VII層土含有。
 3. 2近質(炭化物少量)。
 4. 2近質(C軽石少量)。
 5. 2近質(C軽石多量)。
 6. 4近質。7. 塊状V層土。
 8. 微粒状C軽石微量。
 9. 細粒状C軽石若干。10. 塊状IV層土(壁崩壊土)。11. 細粒状C軽石若干。塊状VII層土含有。12. 微粒状C軽石微量・小塊状VII層土多量。13. 粒状C軽石少量・粒状炭化物含有。14. 粒状C軽石混入・塊状焼土少量。15. 灰炭化物層。16. 13近質。17. 細粒状C軽石若干・小塊状VII層土含有・粒状焼土・粒状炭化物含有。18. 掘り方埋設土(微・細粒状C軽石含有・粒状焼土若干)。19. 粒状C軽石混入。20. 細粒状C軽石混入(軟質)。21. 細粒状C軽石含有・粒状VII層土混入。

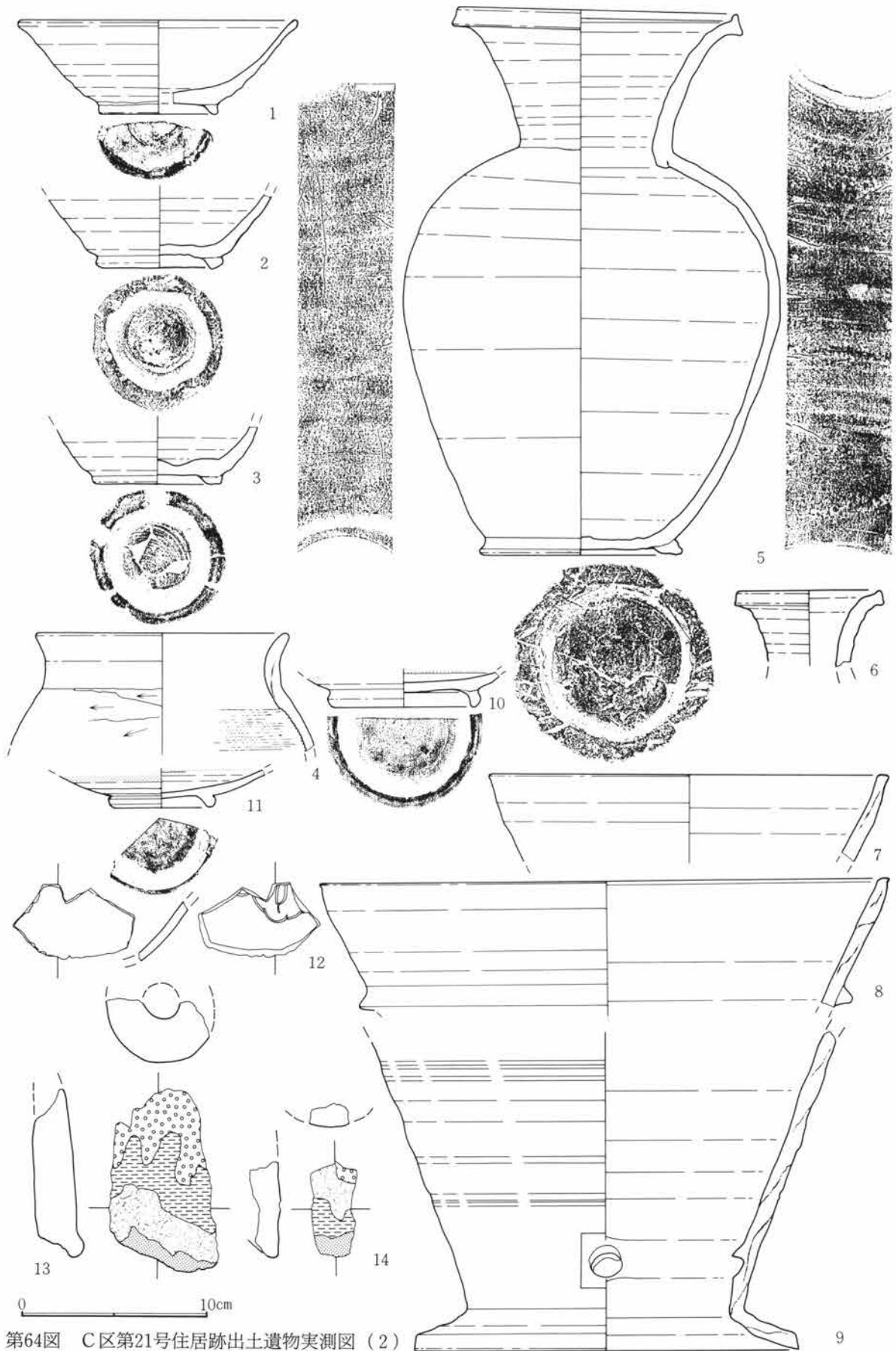
0 L=127.90 2m

この据え方がP₄であるが、据え方は、瓶本体とほぼ密接した状態で、他の遺物の出土はなかった。又、瓶内部は土が充満してたが、その中は後世の小動物による攪乱が著しく所見が得られなかったが、やや塊状のVII層土の混入が有り遺物等は皆無であった。

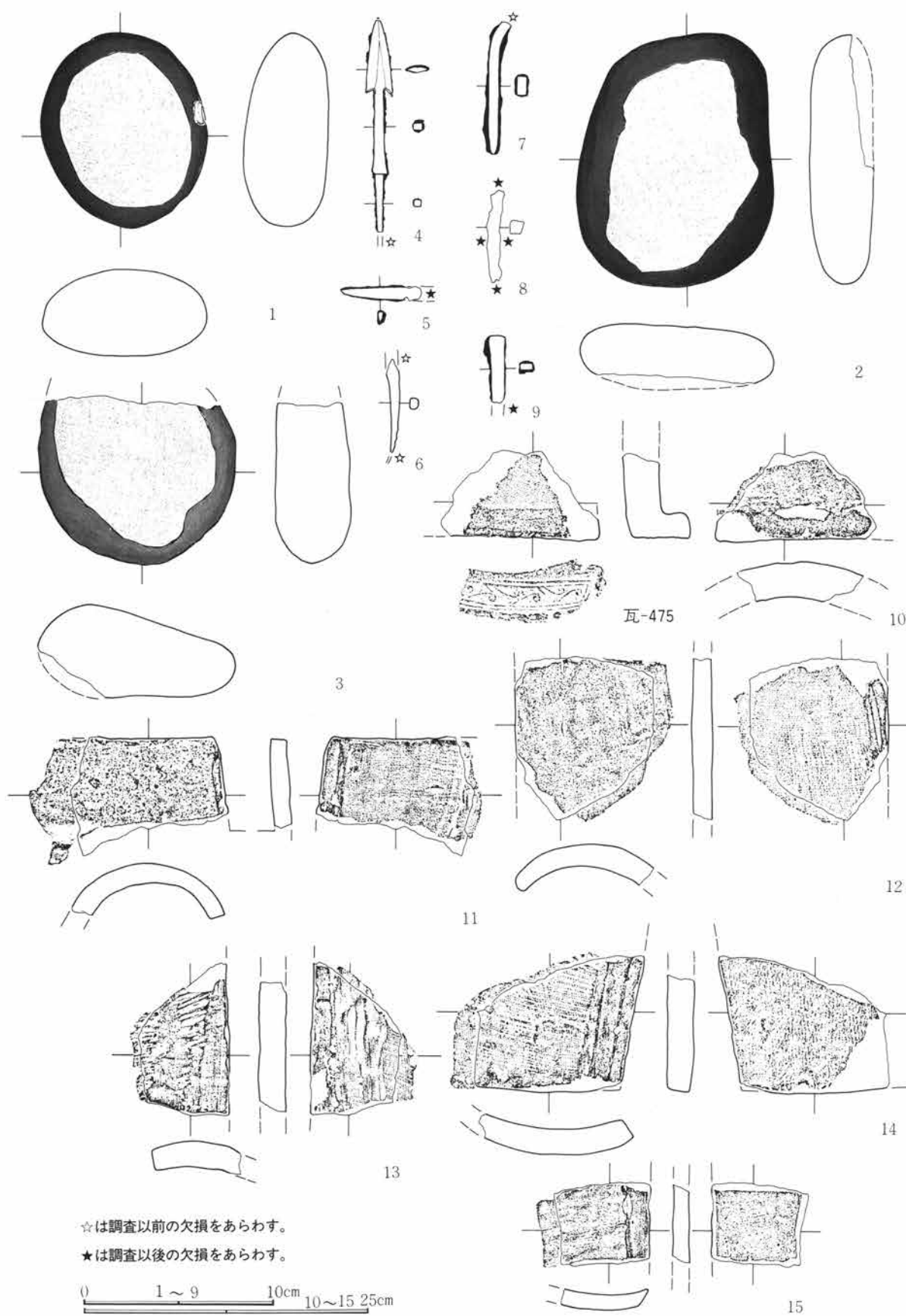
傍竈坑に該当する位には上述のP₁を検出したが、このP₁の存在により位置の移動が考えられ、P₆が同種のものと考えられる。住居の廃棄は10世紀代と考えられる。



第63図 C区第21号住居跡・出土遺物実測図(1)

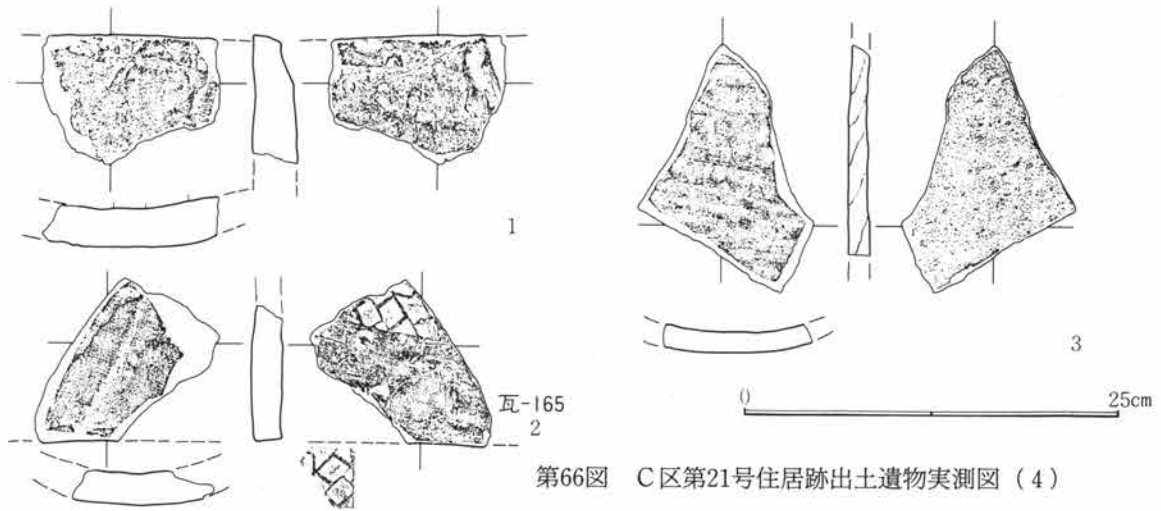


第64図 C区第21号住居跡出土遺物実測図(2)



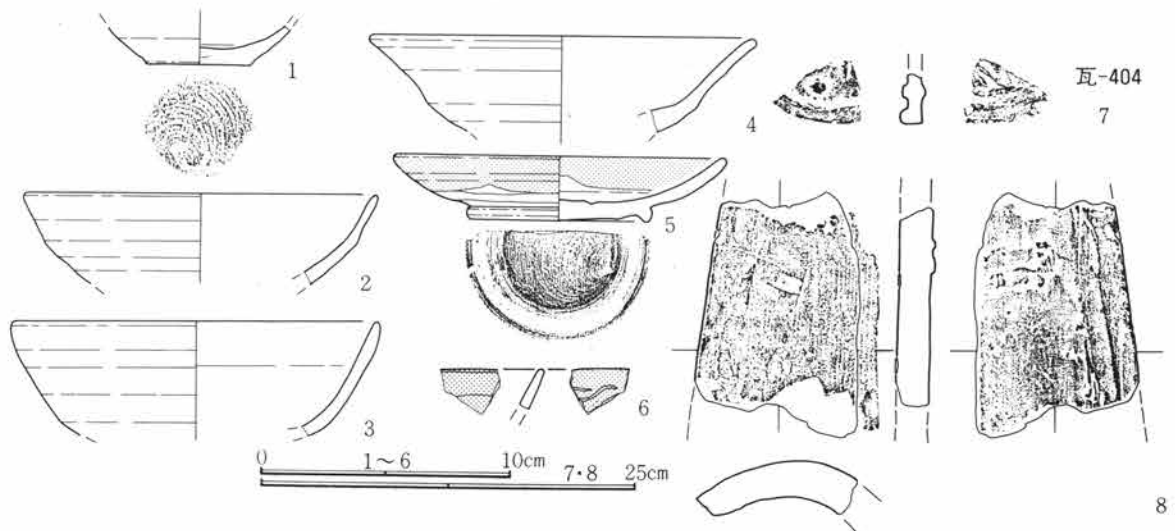
第65図 C区第21号住居跡出土遺物実測図(3)

第4章 検出された遺構・遺物

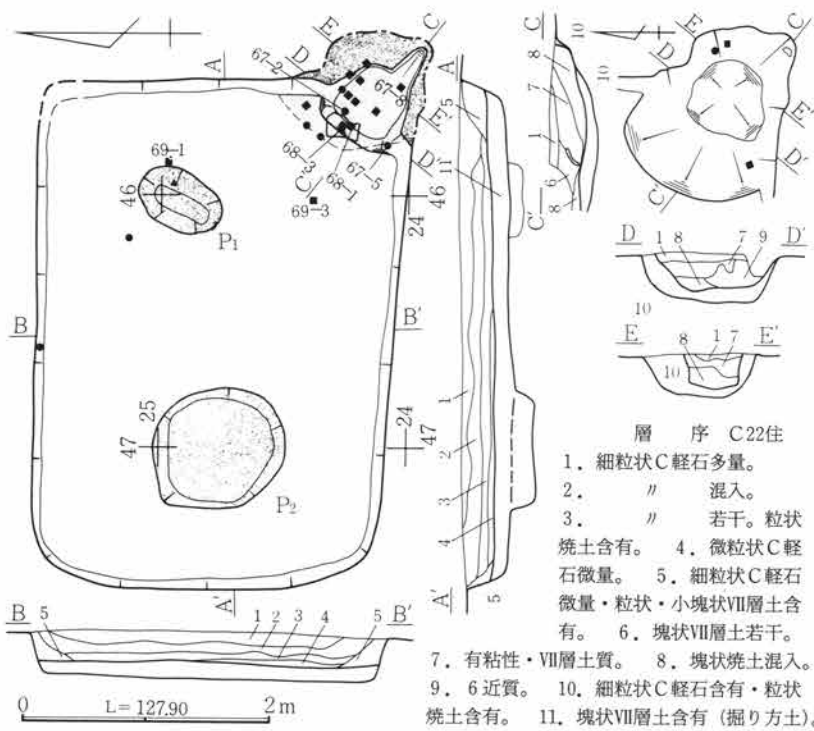


第66図 C区第21号住居跡出土遺物実測図(4)

遺構名称	C区第22号住居跡		位置	23~25-C-45~47グリッド内。		残存深度	約26cm
平面形態	縦長方形。	規模	4.03m×2.93m	構築基準辺	北壁	主軸方位	北-90度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	掘り方を埋設し造床。ほぼ平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	平坦である。P ₁ ・P ₂ を検出。P ₂ は住居構築以前の土坑の可能性が高い。P ₁ は用途不明。						
カマド	位置	住居南東隅部。			主軸方位	北-130度-南	
改築	不分明。掘り方の状況から「有」か。		形状	馬蹄形を呈し、細い舌状の煙道が屋外側に突出。			
規模	全長 97cm・屋外長 70cm・屋内長 27cm・袖部幅100cm・燃烧部幅 52cm・煙道部幅 22cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。			袖	形骸化した状態である。		
煙道	暖やかに立ち上がり細い。		掘り方	大きな土坑状の観がある。			
遺物出土状態	カマド以外では全体的に非常に少ない。						



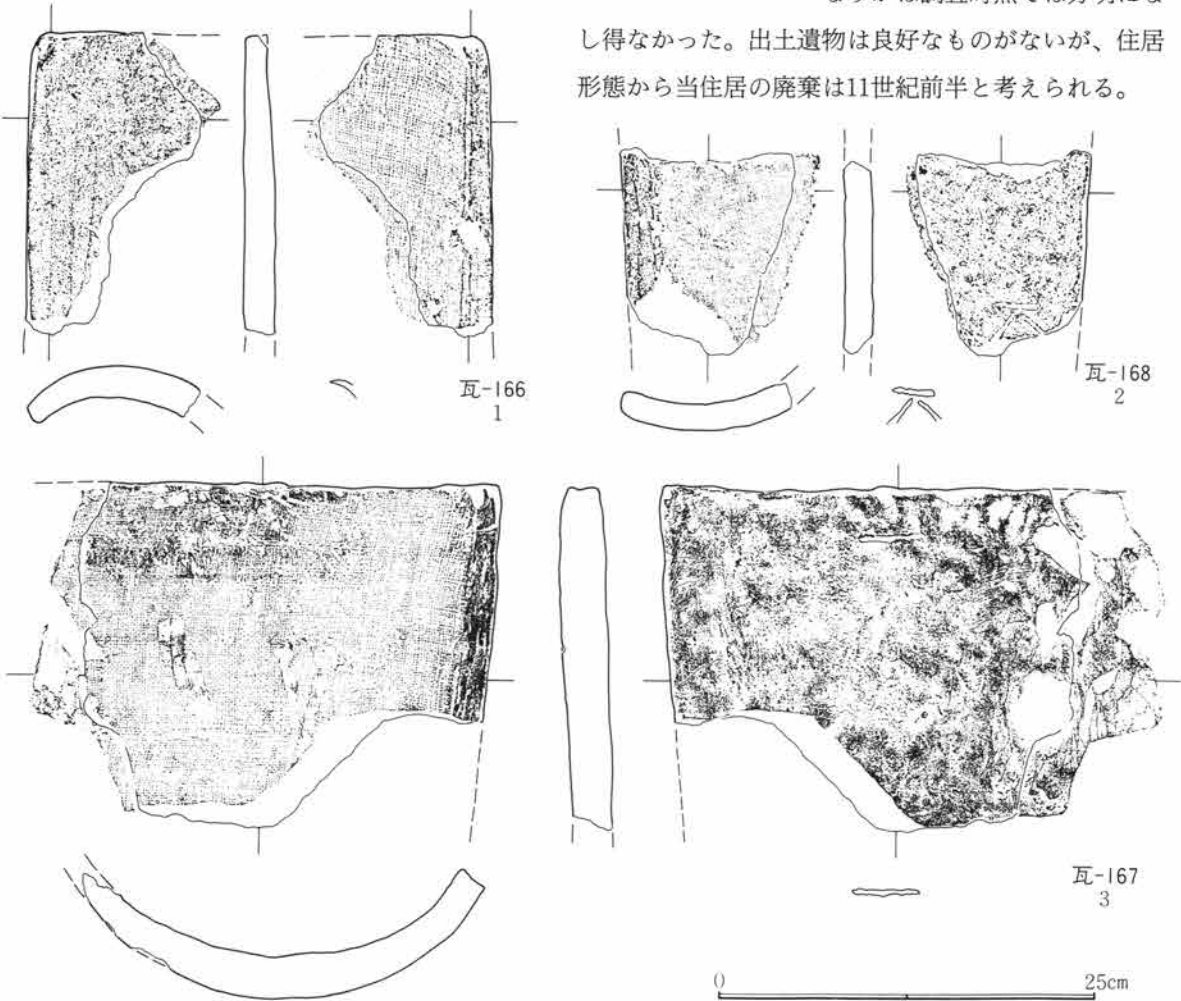
第67図 C区第22号住居跡出土遺物実測図(1)



- 層序 C22住
1. 細粒状C軽石多量。
 2. " 混入。
 3. " 若干。粒状焼土含有。
 4. 微粒状C軽石微量。
 5. 細粒状C軽石微量・粒状・小塊状VII層土含有。
 6. 塊状VII層土若干。
 7. 有粘性・VII層土質。
 8. 塊状焼土混入。
 9. 6近質。
 10. 細粒状C軽石含有・粒状焼土含有。
 11. 塊状VII層土含有(掘り方土)。

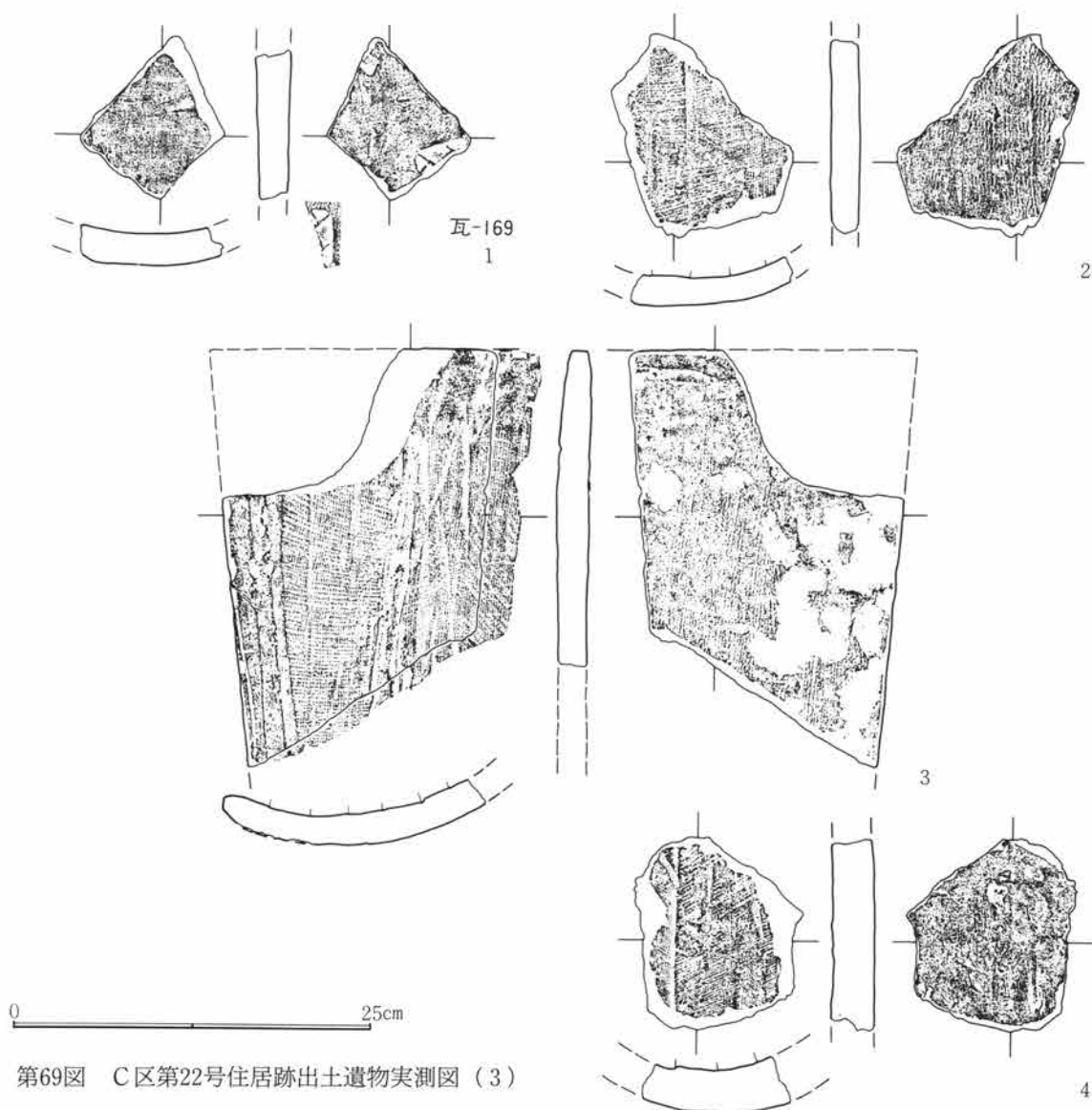
所見 当住居跡は南東隅部にカマドを備えるD区の第IV段階に比定し得る住居である。北西隅部は調査時の不手際により逸している。住居形状均整のとれた縦長形状を呈し北壁が構築基準辺と認識出来た。カマドは、壁体等への瓦の補強材としての転用は少なく、焚口・燃烧部は、隅丸正方形形状を呈するもよでC・D区での南東隅部にカマドを備えるものとしては特異である。床下の掘り方で検出されたP₂は円形状を呈する土坑状のもので、確実に当住居に併なうかは調査時点では明にな

し得なかった。出土遺物は良好なものがないが、住居形態から当住居の廃棄は11世紀前半と考えられる。



第68図 C区第22号住居跡・出土遺物実測図(2)

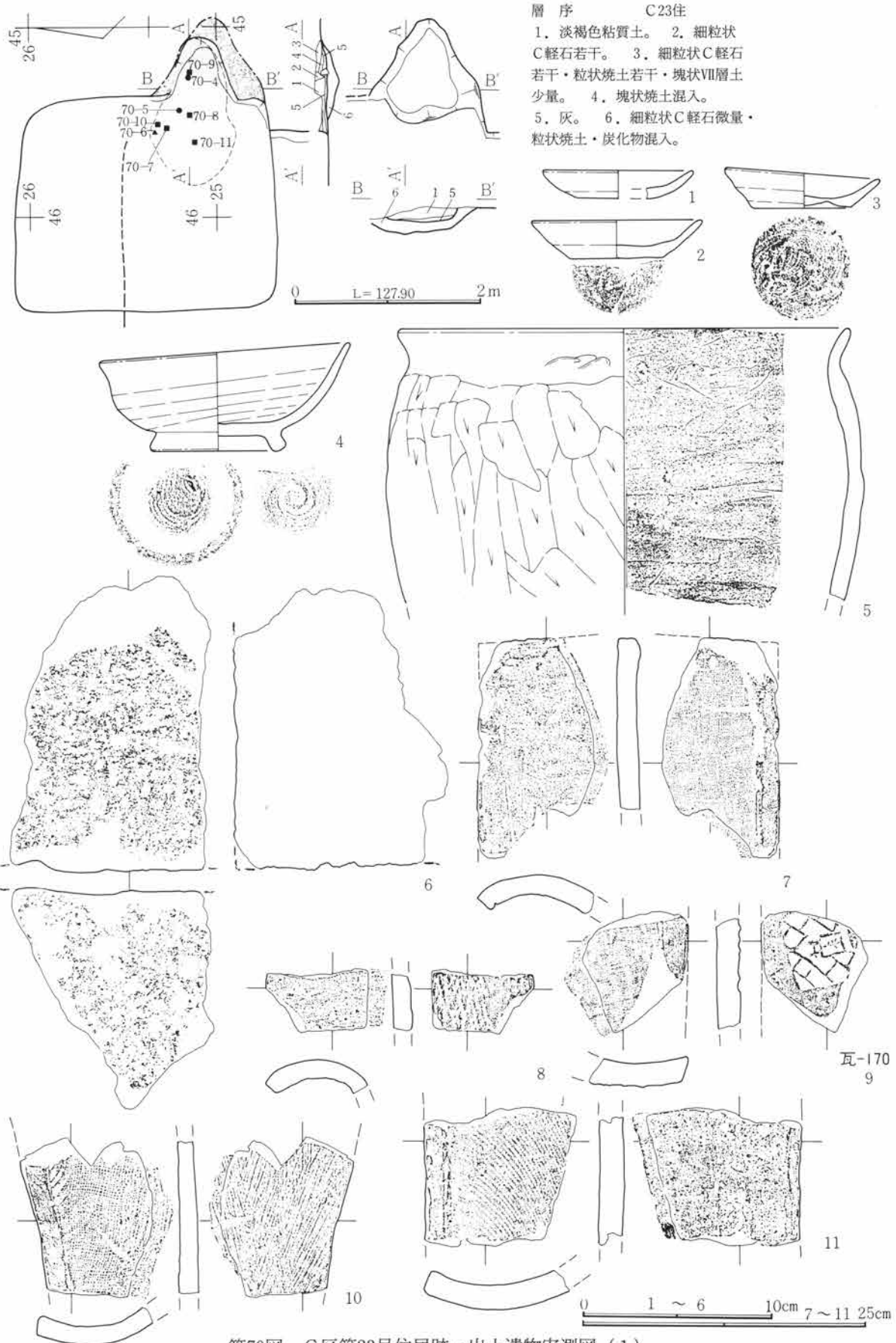
第4章 検出された遺構・遺物



第69図 C区第22号住居跡出土遺物実測図(3)

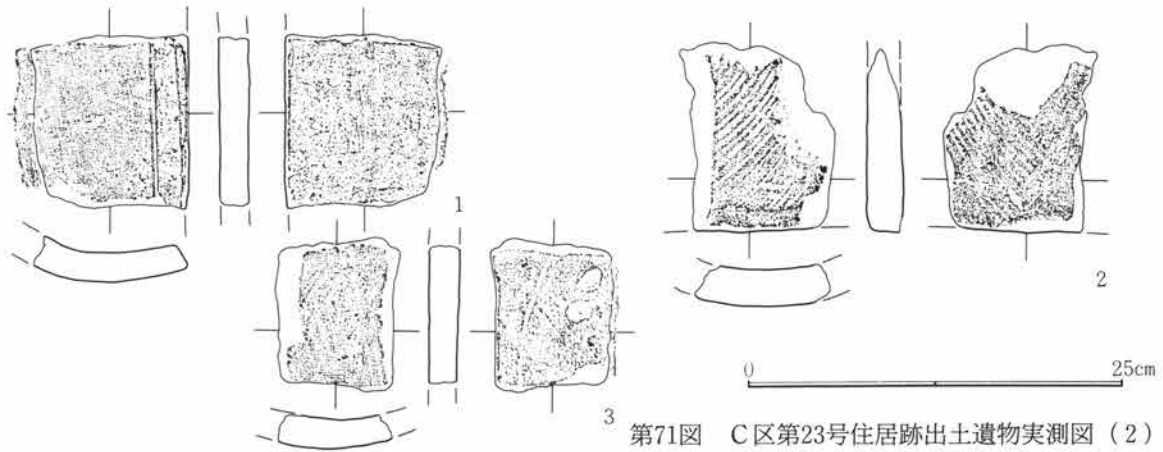
遺構名称	C区第23号住居跡	位置	24・25-C-44~46グリッド内。	残存深度	約12cm
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から10cm。		主軸方位	北-90度-南
改築	有。掘り方内の焼土粒子が多い。		形状	全体的に遺存が悪く、舌形状に残存する。	
規模	全長 70cm・屋外長 63cm・屋内長 7cm・袖部幅110cm・燃烧部幅 50cm。				
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。				
	袖	明稜なものは検出出来なかった。			
煙道	未検出。	掘り方	三角形状を呈し、深く幅も広い。		
遺物出土状態	焚口部左側に集中する。いずれも底面乃至直上層からの出土。				

所見 当住居は22号住居に切られ、24・25号住居を切り構築している。調査時は不手際により25号住居を先行させた。形状はカマド位置・土層断面より図上復元した。そして、この復原形状から、傍竈坑を備えない南東隅部寄りにカマドを備える矩形を呈する住居であることが考えられ、C6住に類似する形状である。この形状からD区の第Ⅲ段階の住居に比定出来、廃棄時期は10世紀末頃と考えられる。



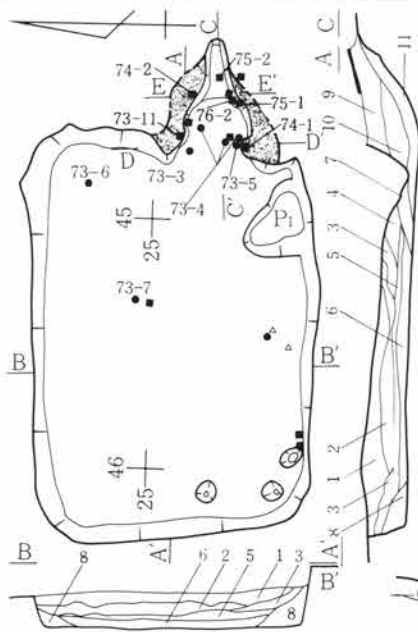
第70図 C区第23号住居跡・出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物



第71図 C区第23号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	C区第24号住居跡		位置	24・25-C-44~46グリッド内。		残存深度	約37cm
平面形態	縦長方形。	規模	3.25m×2.27m	構築基準辺	北壁	主軸方位	北-88度-南
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	平坦で地山VII層土を使用する。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P ₁ 。不整形。50×58cm・深度-8cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	南西隅部付近で Pit 状のものが認められたが、構築時の工具痕か。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から15cm。			主軸方位	北-89度-南	
改築	不明。		形状				
規模	全長103cm・屋外長 88cm・屋内長 15cm・袖部幅120cm・燃烧部幅 50cm・煙道部幅 19cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
煙道	立ち上がり部（燃烧部奥壁）に男瓦で補強。		掘り方	補強材の瓦の据方が検出されている。			
遺物出土状態	床直層中に少量認められている。カマドの補強材は全て完形瓦を使用。						



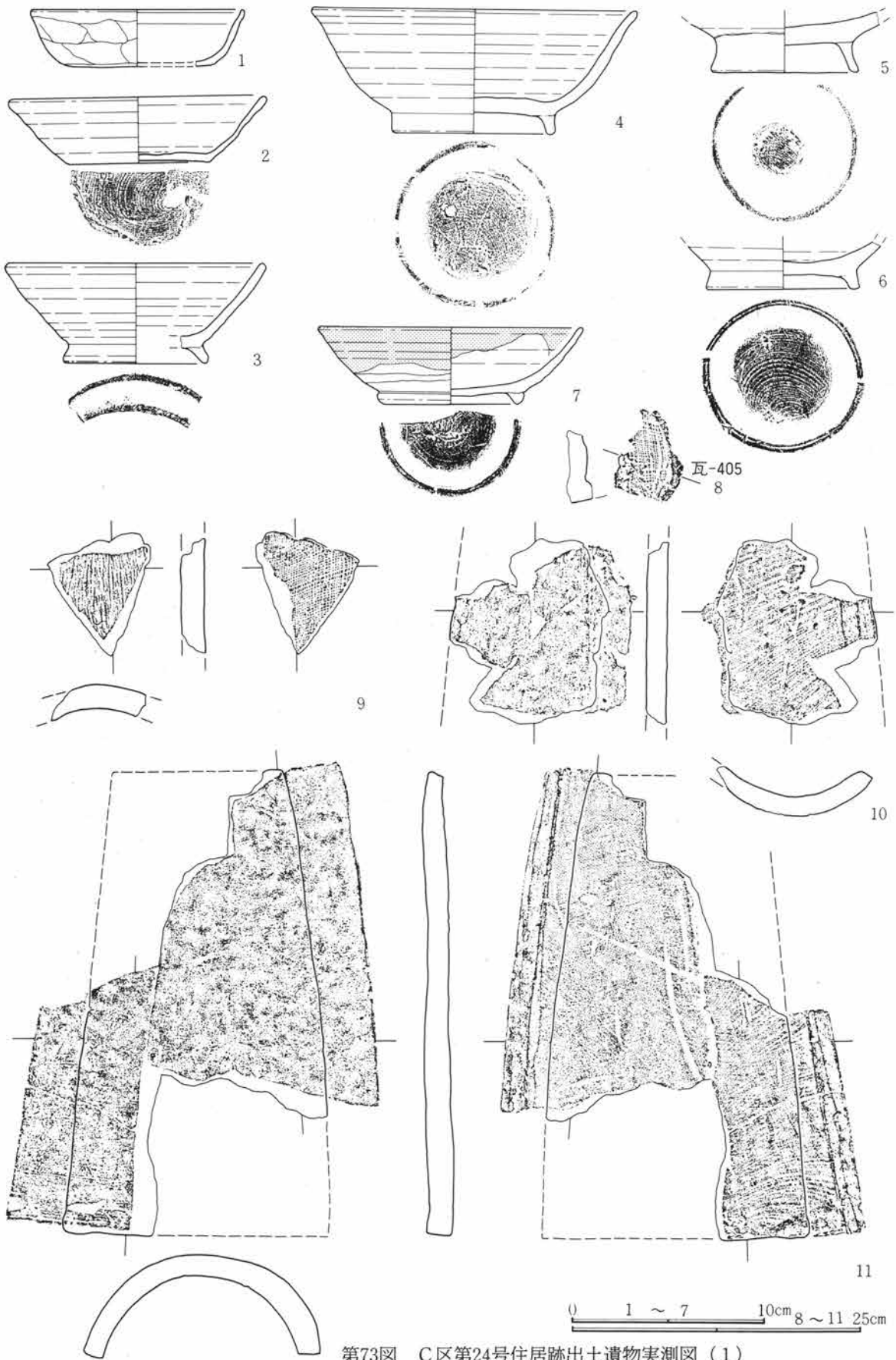
所見 当住居跡はC22・23・26住に切られている。住居は縦長方形で東壁に燃烧空間が幅広のカマドを備える。カマドは、両袖・燃烧部左右両奥壁部に瓦を補強材として用い、煙道部天井を完形の女瓦を用いている。P₁は傍竈坑と考えられ、カマド形状等を勘案すればD区の第I乃至II段階の住居と考えられ、出土遺物の様相からは、9世紀後半代の廃棄が考えられ、D区の住居様相だけでは未だ不完全である。

層序 C24住

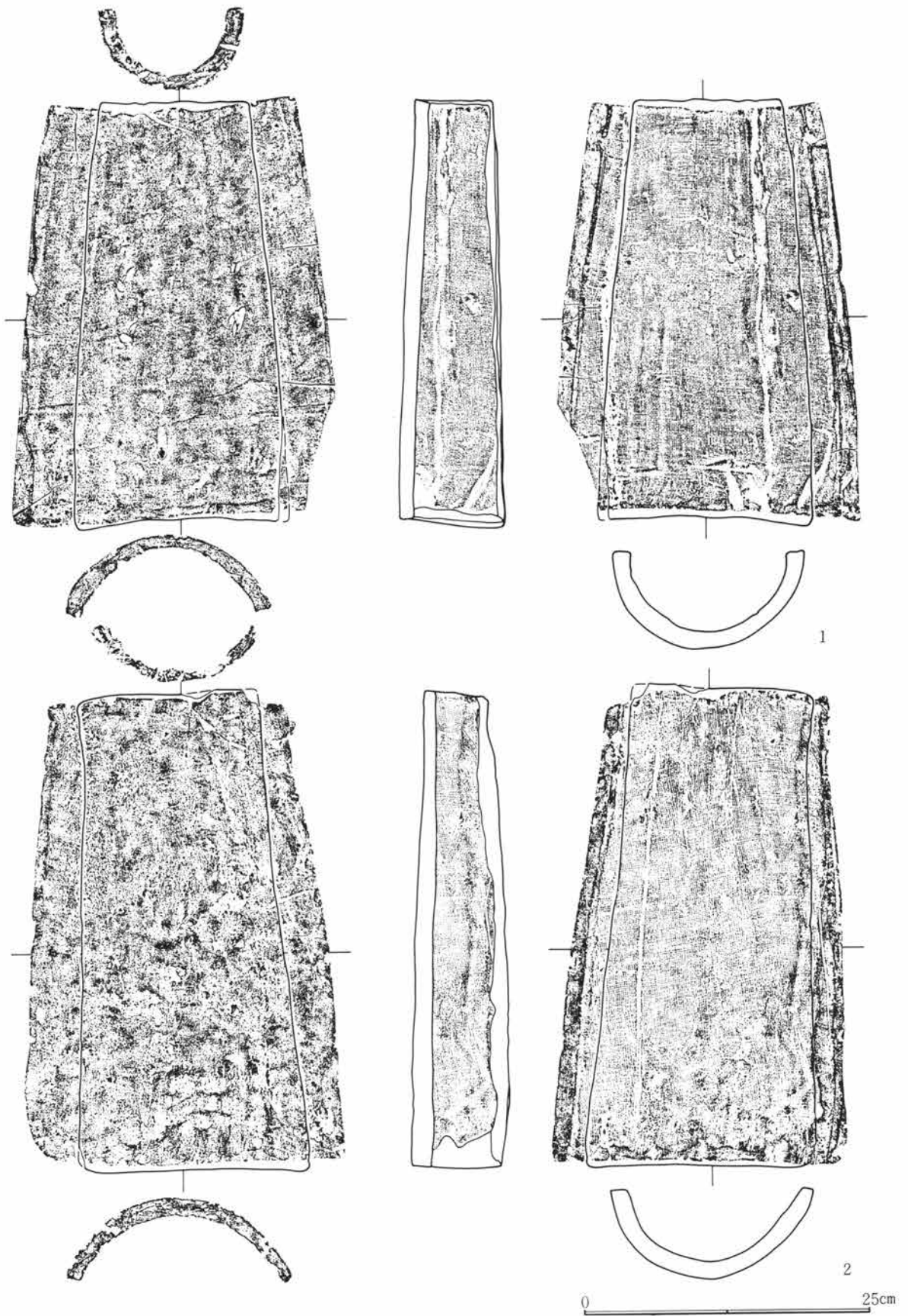
1. 粒状C軽石多量・粒状焼土混入。
2. 粒状C軽石混入・粒状焼土混入・粒状炭化物混入。
3. 粒状C軽石含有・黄褐色粒子（FA?）多量。
4. 粒状C軽石若干。
5. 若干・塊状VII層土混入・粒状炭化物多量。
6. 細粒状C軽石微量・粒状焼土含有。
7. 粒状C軽石若干・細粒状C軽石若干・粒状焼土混入・粒状炭化物含有。
8. 微粒状C軽石微量・塊状VII層土混入。
9. 7近質。
10. 細粒状C軽石微量・粒状焼土混入。
11. 粒状C軽石微量・粒状焼土・粒状炭化物混入。
12. 細粒状C軽石微粒・粒状焼土微量。

第72図 C区第24号住居跡実測図

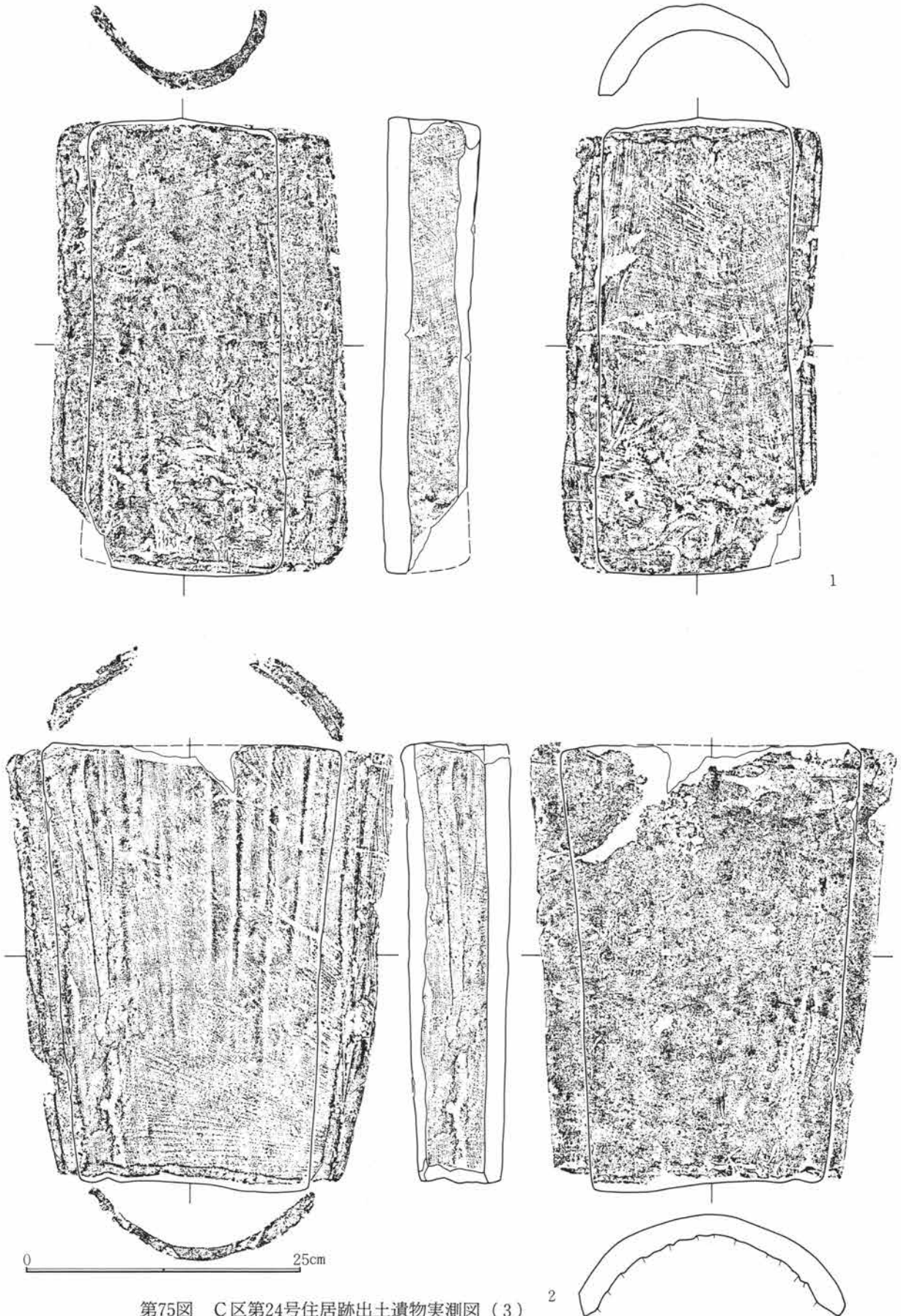
第1節 南側調査区



第73図 C区第24号住居跡出土遺物実測図(1)

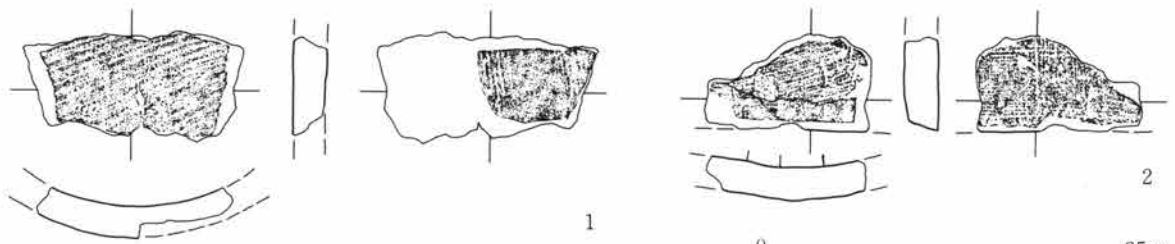


第74図 C区第24号住居跡出土遺物実測図(2)



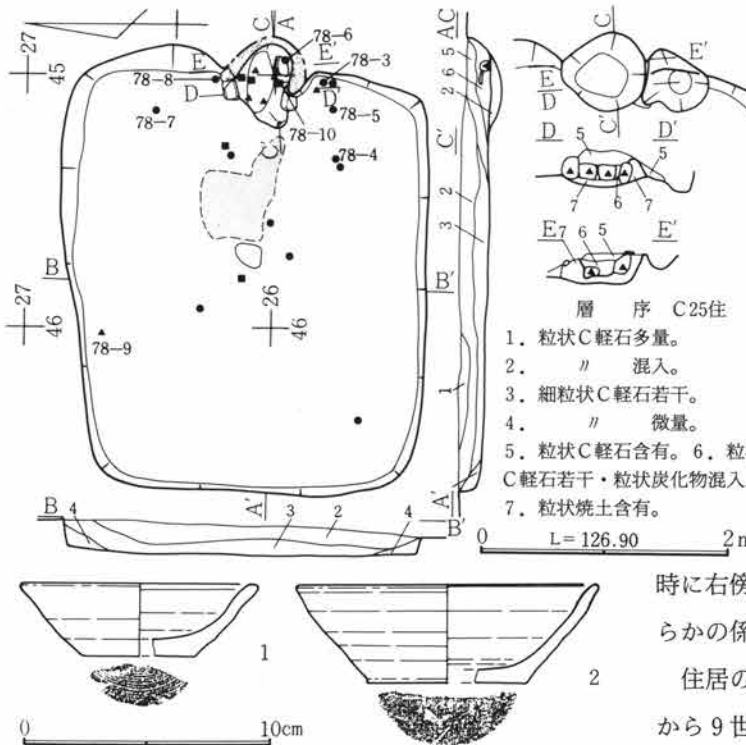
第75図 C区第24号住居跡出土遺物実測図(3)

第4章 検出された遺構・遺物



第76図 C区第24号住居跡出土遺物実測図(4)

遺構名称	C区第25号住居跡		位置	25・26-C-44~46グリッド内。		残存深度	約23cm
平面形態	縦長方形。	規模	3.53m×2.97m	構築基準辺	南壁?	主軸方位	北-89度-南
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	部分的にVII層土を使用するが、大半は24住の覆土を利用。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未確認。(24住との切り合による)。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から80cm。			主軸方位	北-89度-南	
改築	不明。			形状	全体的に遺存が悪く馬蹄形状に残存する。		
規模	全長 67cm・屋外長 20cm・屋内長 47cm・袖部幅 78cm・燃烧部幅 30cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しい。壁は地山軟質砂岩により補強されている。						
			袖	地山軟質砂岩により補強されている。			
煙道	未検出。		掘り方	不整円形状を呈する。			
遺物出土状態	遺物量は少ないが、床直のものが多。						



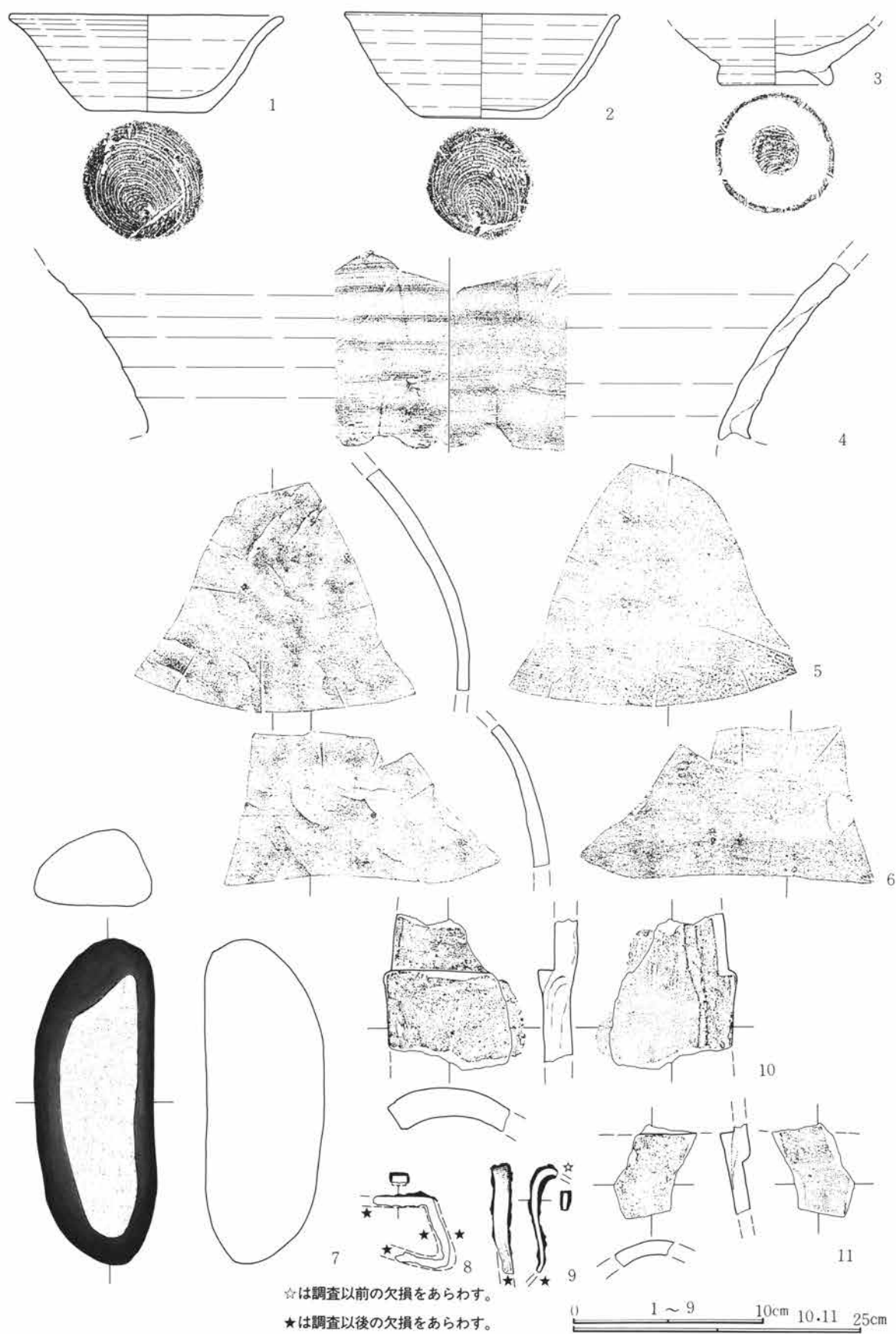
第77図 C区第25号住居跡・出土遺物実測図(1)

所見 当住居は24号住に切られている。当住居をはじめ周辺部の21・22・24・27号は孰れも縦長方形を呈し、これが集中する観があるが、時期的に異なるものもある為一概に言及しかねるが、何らかの状況が内在するが想起される。

カマドは東壁中央部に具備するが、南東隅部には傍竈坑は認められなかった。亦、同部には遺物の出土はな

く、施設を想定させる状況は認められなかった。しかし、カマド掘り方調査時に右傍らからP₁が検出され、これが傍竈坑と何らかの係わりがあることが考えられる。

住居の廃棄時期は、カマド・住居内の出土遺物から9世紀末から10世紀初頭頃と考えられる。



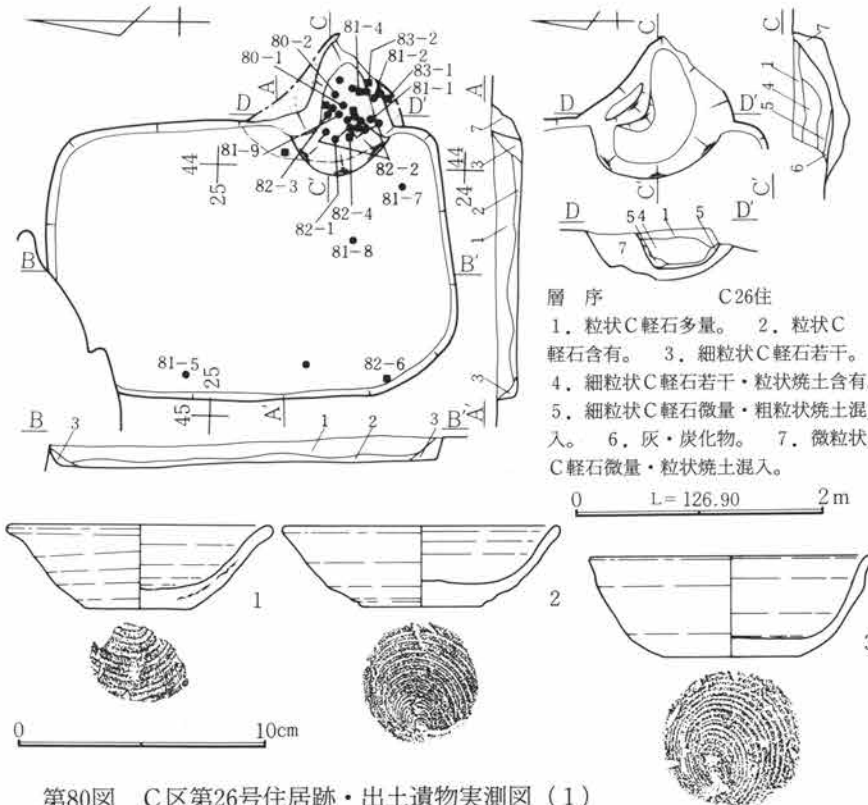
第78図 C区第25号住居跡出土遺物実測図(2)

第4章 検出された遺構・遺物



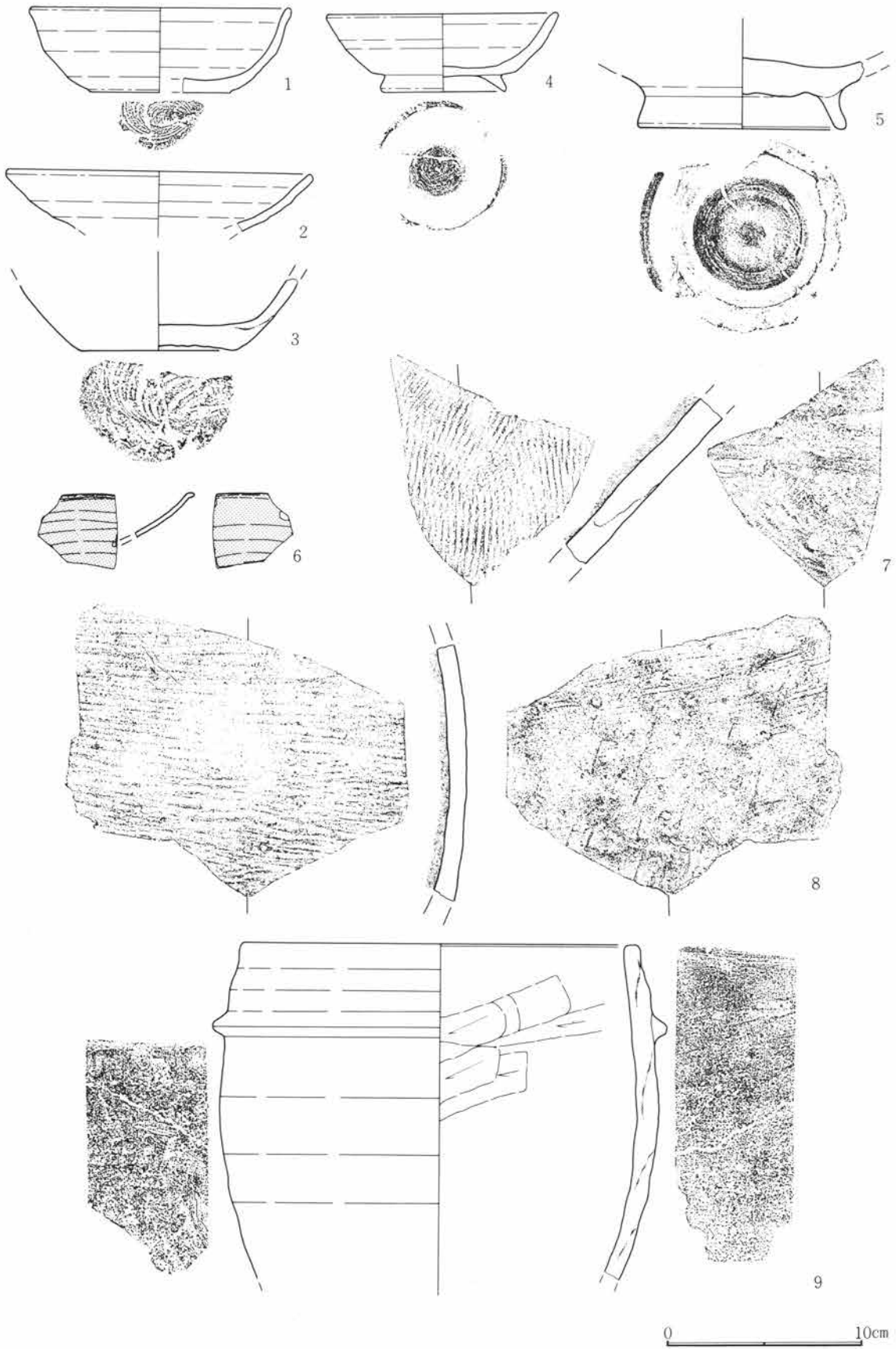
第79図 C区第25号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	C区第26号住居跡		位置	24・25-C-43・44グリッド内。		残存深度	約20cm
平面形態	横長方形。	規模	3.27m×2.22m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-88度-南
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	地山Ⅶ層土を使用しほぼ平坦である。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から33cm。			主軸方位	北-88度-南	
改築	有。旧態は不分明。			形状	舌状を呈する。		
規模	全長105+αcm・67+αcm・屋外長67+αcm・屋内長38cm・袖部幅102cm・燃烧部幅63cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
	袖	左袖は比較的状态がいいが、右袖はほとんど認められない。					
煙道	未検出。		掘り方	左袖側がやや削り出されている。			
遺物出土状態	カマド内で出土が多いが、いずれも底面より遊離している。						

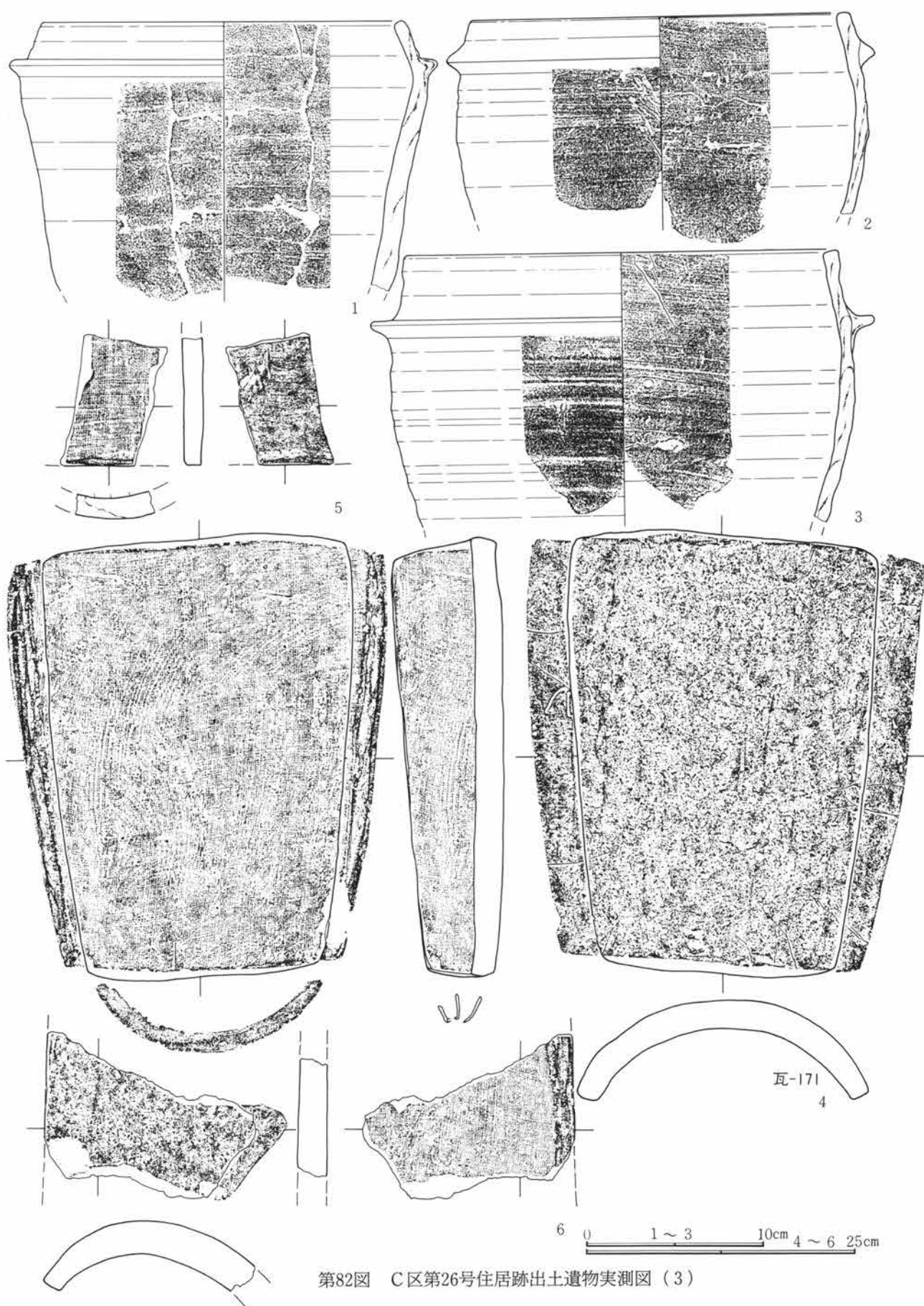


第80図 C区第26号住居跡・出土遺物実測図(1)

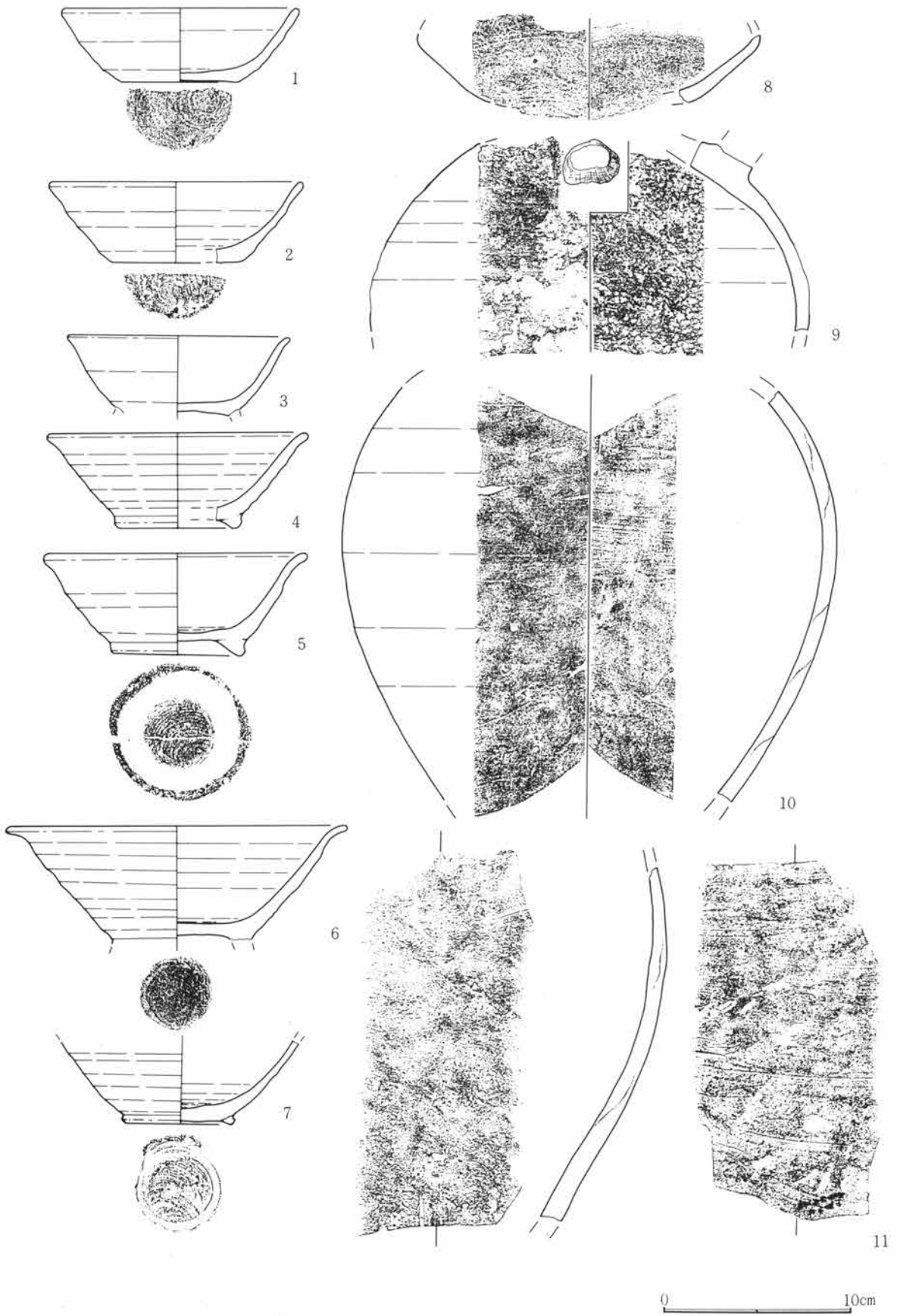
所見 当住居は24号住に切られている。住居は掘り方が認められず、傍竈坑・貯蔵穴等の施設も認められなかった。そして、カマドが南東隅部に偏していることから、当住居はD区の第III段階に比定出来る。このことから、この両者間の切り合いは、D区の住居分類の第III段階と第IV段階との切り合いであり、両者の間の推移はD区の状況に整合している。又、出土遺物も第II・III段階の組成様相が認められることから、廃棄は10世紀後半と考えられる。



第81図 C区第26号住居跡出土遺物実測図(2)

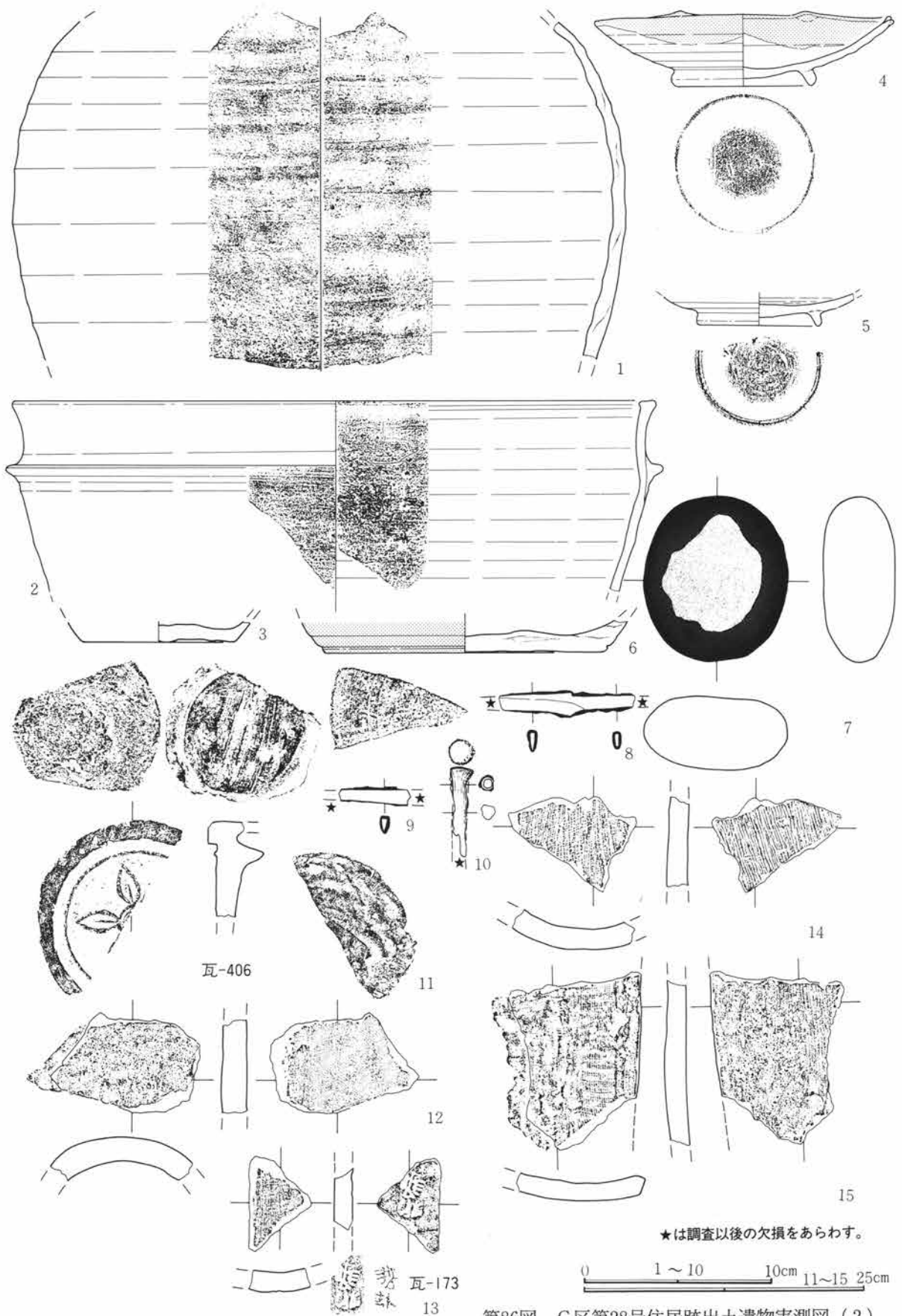


第82図 C区第26号住居跡出土遺物実測図(3)



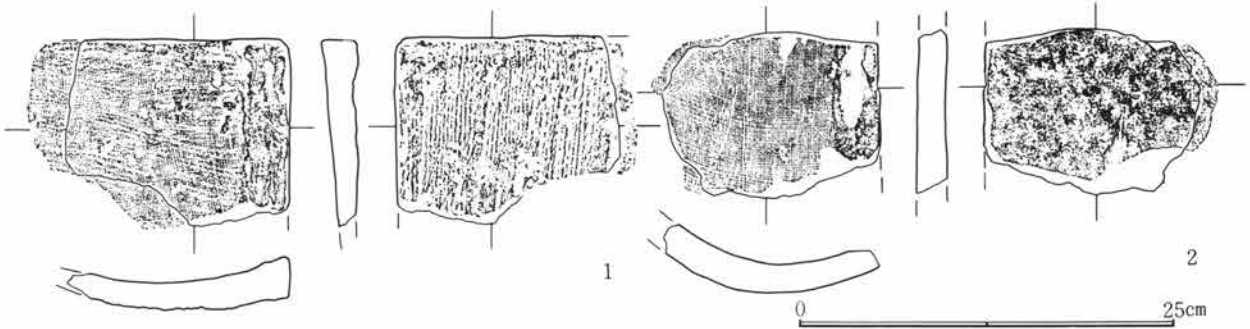
第85図 C区第28号住居跡出土遺物実測図(1)

第1節 南側調査区



第86図 C区第28号住居跡出土遺物実測図(2)

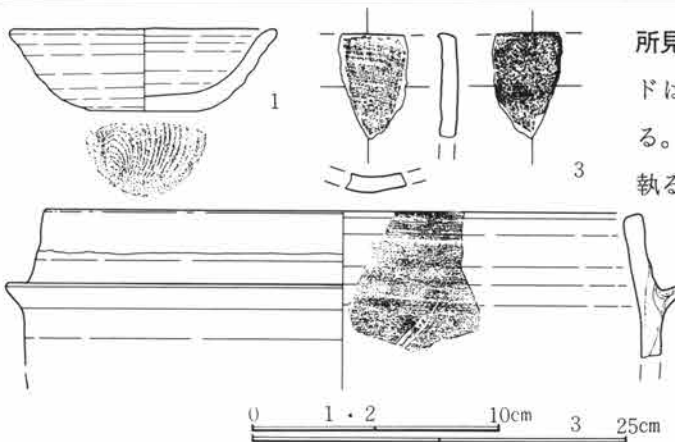
第4章 検出された遺構・遺物



第87図 C区第28号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	C区第27号住居跡	位置	22・23-C-46~48グリッド内。	残存深度	約8cm
平面形態	梯形	規模	2.9?m×2.83m	構築基準辺	南壁
		主軸方位	北-87度-南		
C29号住の破壊及び残存不良により詳細不詳。					

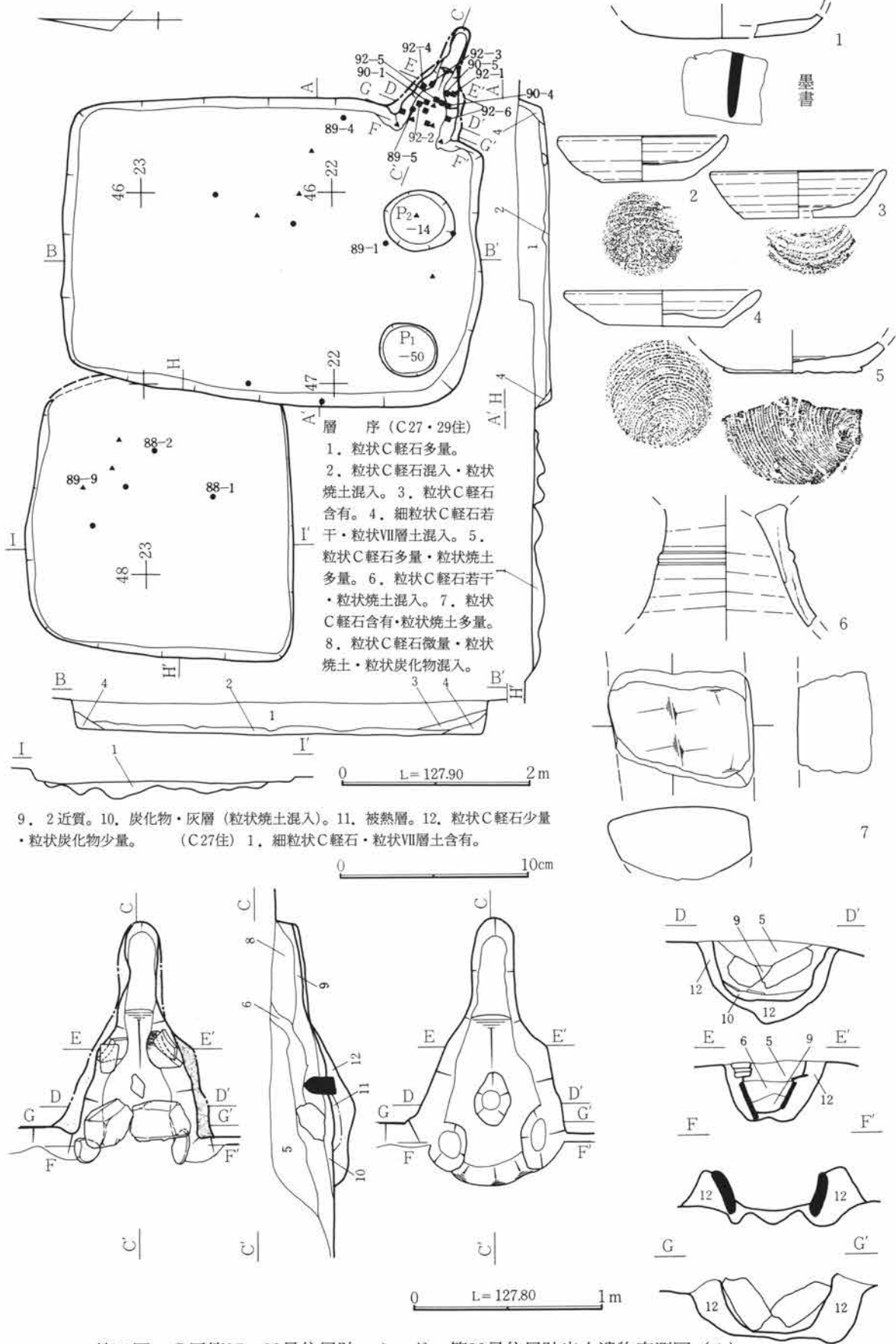
遺構名称	C区第29号住居跡	位置	20~23-C-45~47グリッド内。	残存深度	約54cm
平面形態	横長方形	規模	3.15m×4.38m	構築基準辺	東乃至北壁
		主軸方位	北-90度-南		
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	地山土を主とするが、部分的に小規模な造床がある。	
壁溝	未検出。		貯蔵穴	P ₁ 。円形。径60cm・深度-50cm。	
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。				
掘り方	P ₁ は土坑状のもので出土遺物は皆無。古い時期の土坑の可能性がある。				
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から23cm。		主軸方位	北-114度-南
改築	不分明。掘り方内の焼土は無し。		形状	舌状の燃焼部に細い溝状の煙道が備わる。	
規模	全長126cm・屋外長108cm・屋内長18cm・袖部幅102cm・燃焼部幅57cm・煙道部幅20cm。				
焚口・燃焼部	扇状を呈する焚口部は、燃焼空間と重複する部分が著しい。壁は瓦により補強されている。				
底面には、被熱の顕著な面がある。	袖	瘤状で磔で補強されている。			
煙道	細く45cm程で立ち上がる。		掘り方	瓦・磔の据方が検出されている。	
遺物出土状態	全体的に遺物は少ないが、カマド内からの出土が多い(瓦)。				



第88図 C区第27号住居跡出土遺物実測図

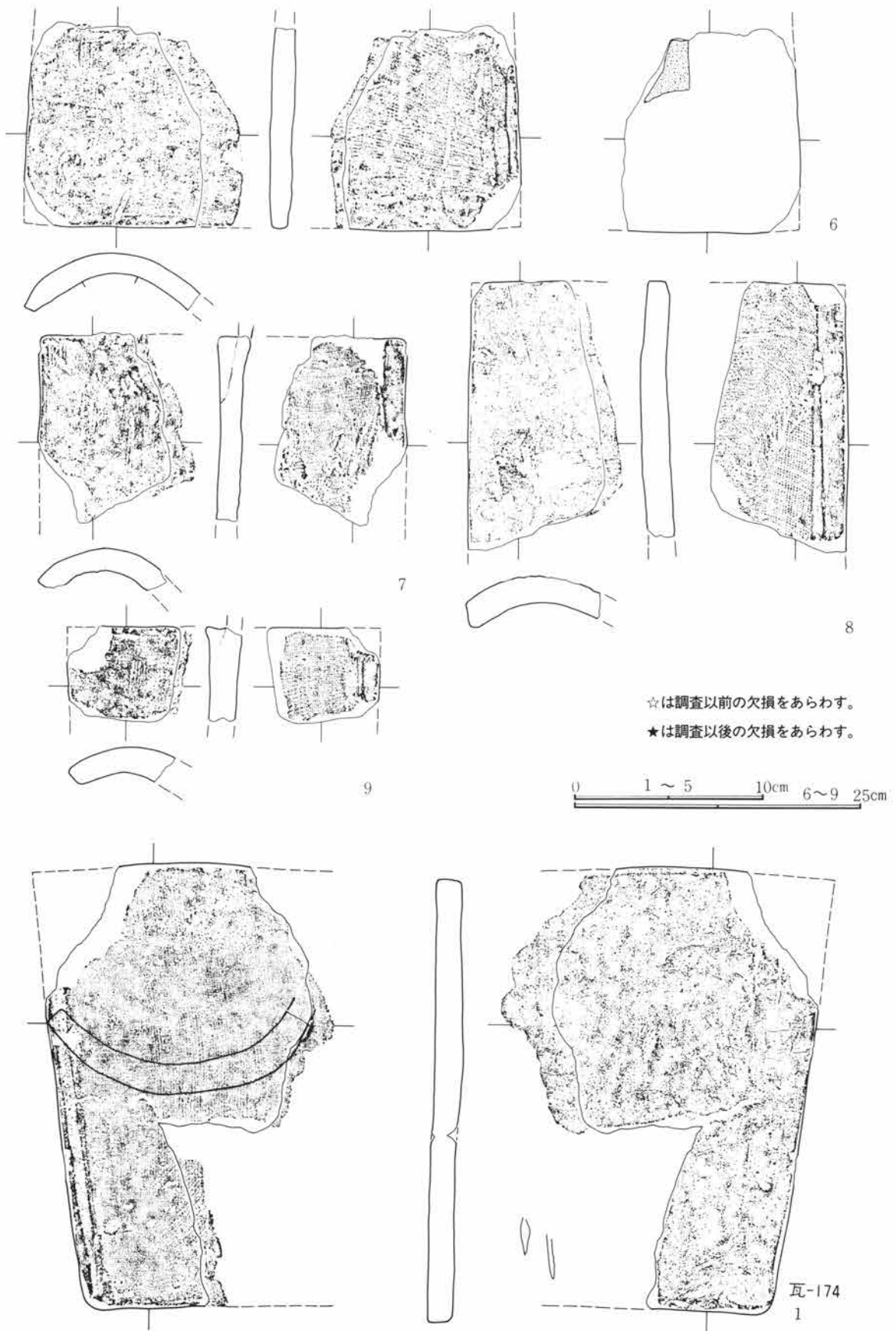
所見(C29住) 当住居は29号住居を切る。カマドは南東隅部に住居の対角線方向に具備している。さらに、カマド自体隅部でも、右袖を隅部に執る為やや東壁寄りに構築している。又、カマドは、燃焼部はやや広く、煙道部の立ち上がりに浅い段が認められる。このカマド形状は、D区第V段階のカマド形状にやや類似するが、未だ第IV段階のカマド形状を色濃く残こしている。更に、カマドの位置では、第V段階の様相が色濃い。

住居形状では、東壁に構築基準辺を備える横長方形を呈し、西壁がやや不均整な状態で南西隅部に貯蔵穴(P₁)を備えている。この形状とカマド付設位置から、D区の住居分類の第IV・V段階に比定出来る。又、

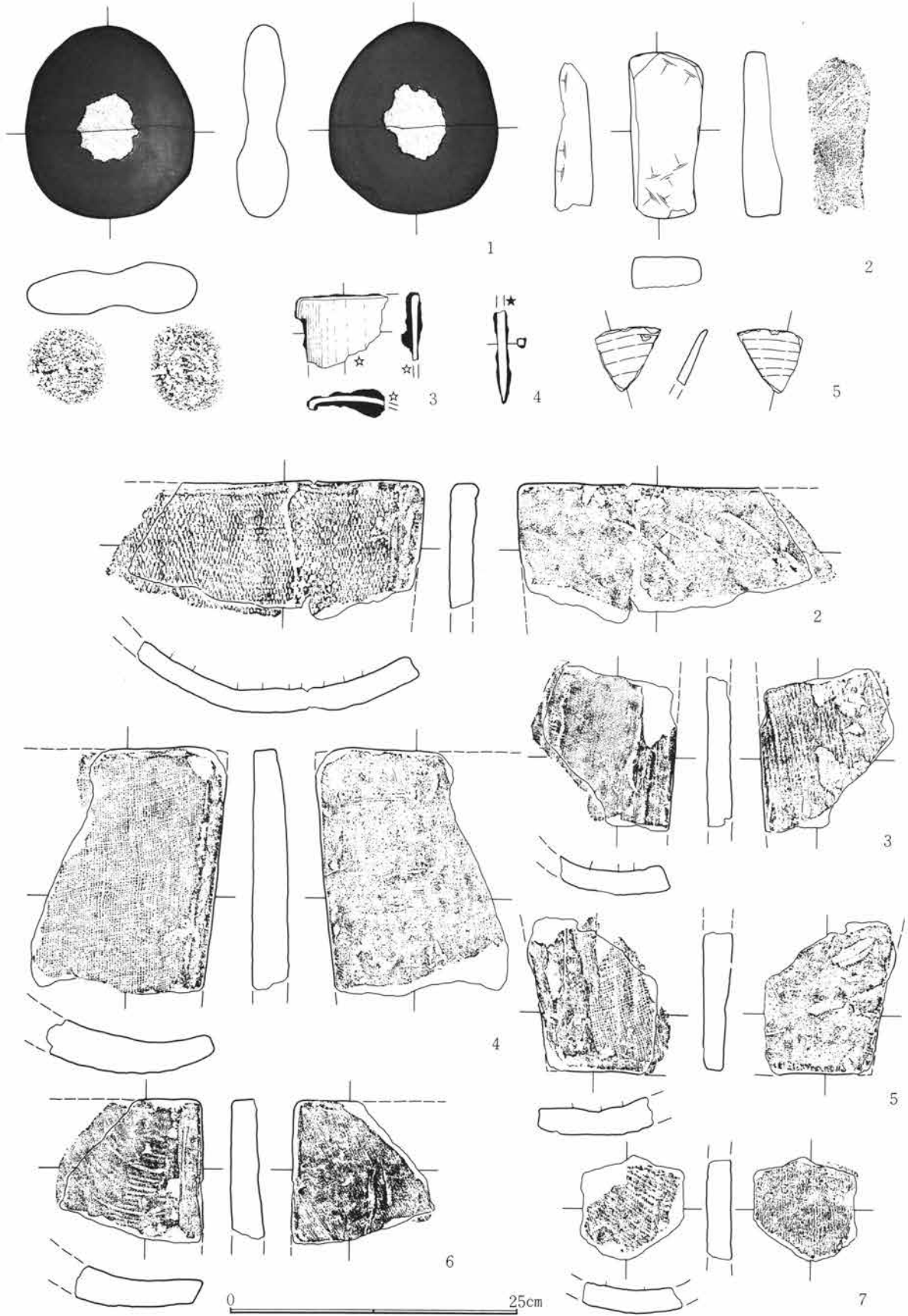


第89図 C区第27・29号住居跡・カマド・第29号住居跡出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物



第90図 C区第29号住居跡出土遺物実測図(2)



第91図 C区第29号住居跡出土遺物実測図(3)

第4章 検出された遺構・遺物

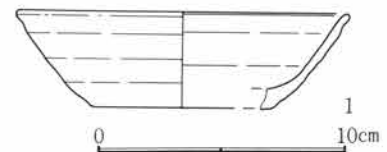
前述したカマドの付設状態・西壁等の状況を勘案すると、改築も考慮される。改築があったと仮定すれば、その旧状は、カマド右袖部から南壁が直線的に延び、西壁の歪む部分が北西隅部にあたる様な、正方形形状を呈したと推定出来、北・南側が拡張された可能性が想起される。しかし、この状況は、調査所見では得られなかったが、平面図上での所見である。住居の掘り方は全体に認められなかったが、南壁下でP₂の検出がある。このP₂は円形状を呈し、径73cm程で、南壁より20cm程内側に位置している。この位置関係は、上述した様に住居に改築有れば、旧状は南壁直下にあったことになる。しかし、性格等を検証し得る状況が得られなかったことより、それらの意図を分明に為し難い。

出土遺物では、土師質土器が3点有り、D区の第IV・V段階の一括遺物に対比し得る。この遺物様相と住居様相からD区の住居分類の第IV段階乃至第V段階に対比し得、住居の廃棄時期は前述のことより11世紀前半乃至11世紀中頃と考えられる。

所見 (C27住) 当住居は上述のC27住に切られている。このC27住の破壊によりカマド・東壁を逸している。残存部の状況より東壁にカマドを付設したことはほぼ確実視される。しかし、詳細な状態を窮知するにはやや困難であるが、南東隅部を含め住居内全体からは傍竈坑を含め何らの施設も検出されていない。又、掘り方では顕著な状況は無く、土坑状の掘り込み等も何ら検出されていない。これらの状況から、当住居は、傍竈坑を備えない住居であったことが考えられ、このことより、カマドは、東壁でも南東隅部寄りに備えていたことが類推出来る。出土遺物では、少量の土師器・土師質土器等の細片があったのみで、当住居の時期を求めるには些か困難であるが、土師質土器の存在から9世紀後半以降であることは判断される。これらの状況から、住居の時期を考えると、D区住居分類III乃至IV段階の10世紀後半と考えられる。

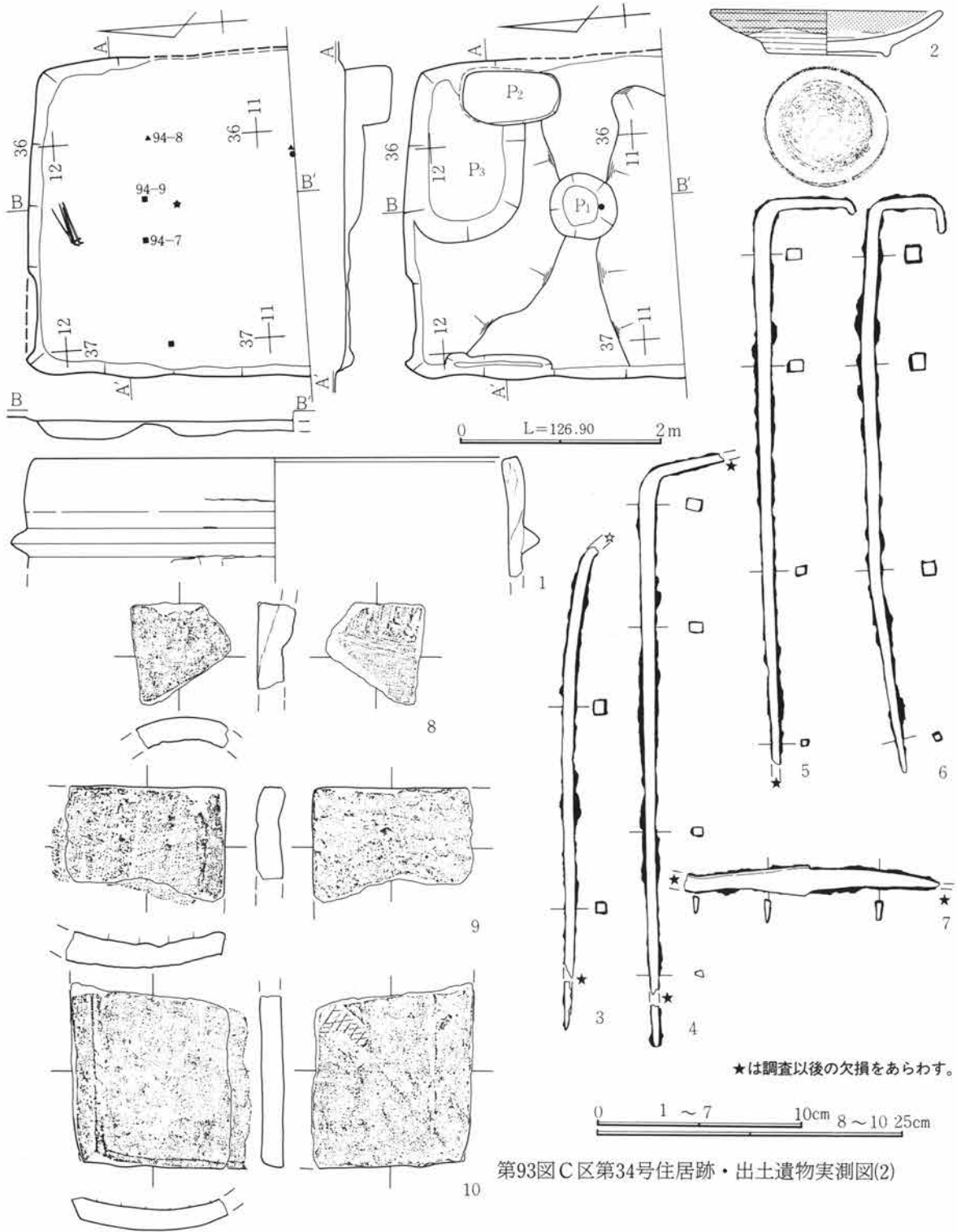
遺構名称	C区第34号住居跡		位置	10~12-C-35~37グリッド内。			残存深度	約10cm
平面形態	横長方形か?	規模	3.15m×(2.75+αm)	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-93度-南	
壁	詳細不明。		床面	掘り方を埋設し平坦。				
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	北西隅部・中央に土坑状の掘り込みがある。この内、P ₂ は本跡とは別のものか?凹凸が顕著。							
遺物出土状態	床直・床直層のものが散在する。北壁下では、鉄器が一括して出土している。							

所見 当住居は南側部分は、調査区内を東西に横走る農業用水路下にあたり、調査実施が能わざる部分が生じた。そして、この水路により、南側に位置している64号住の北側も同様な状況である。この両者の住居は、同一の住居の可能性が考えられたが、余りにも長大な住居になる為各々に個別の番号を付した。又、当住居周辺も中世以降の攪乱により住居の遺存が非常に悪かった。住居は、上述の状況により、カマドは水路下に存在すると考えられる。然し、詳細位置等に就いては検証し得なかったが、住居が正方形乃至矩形と想定した場合、南東隅部に寄った位置か南東隅部に付設したと考えられる。又、横長方形とした場合、検出部・水路部断面にはカマド等の施設は認められなかった。この点からも、カマドは南東隅部に寄った位置は最低限想定される。出土遺物では、月夜野産羽釜が特筆され、灰釉皿の出土からは、10世紀後半代との年代推定出来る。尚、床面直上からは、鍵形状の鉄製品が4本出土しており、堂宇の庇の懸金具と考えられ、国分二寺に係わる遺物と考えられる。上述のことより当住居は10世紀後半以降の廃棄と考えられる。

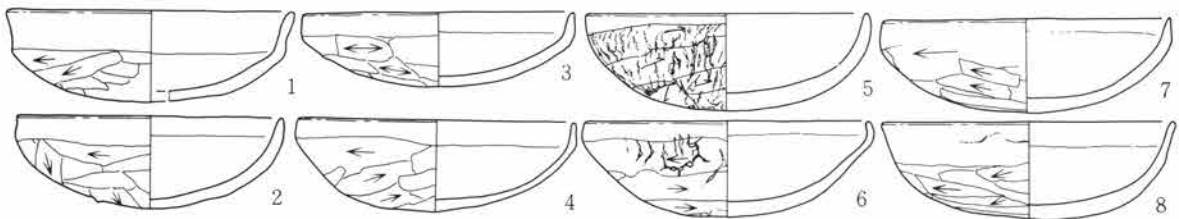


第92図 C区第34号住居跡出土遺物実測図(1)

第1節 南側調査区



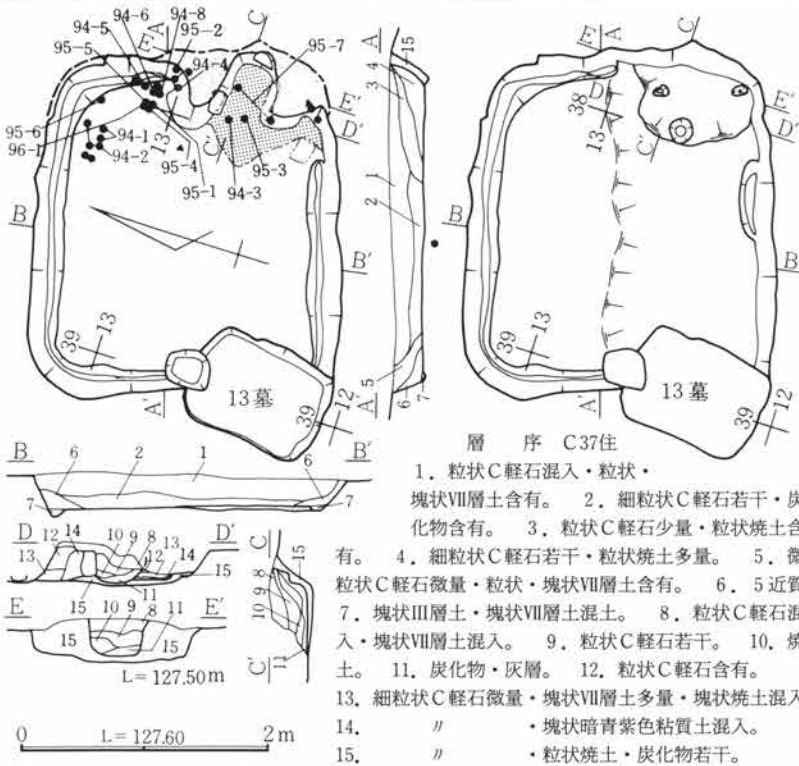
第93図 C区第34号住居跡・出土遺物実測図(2)



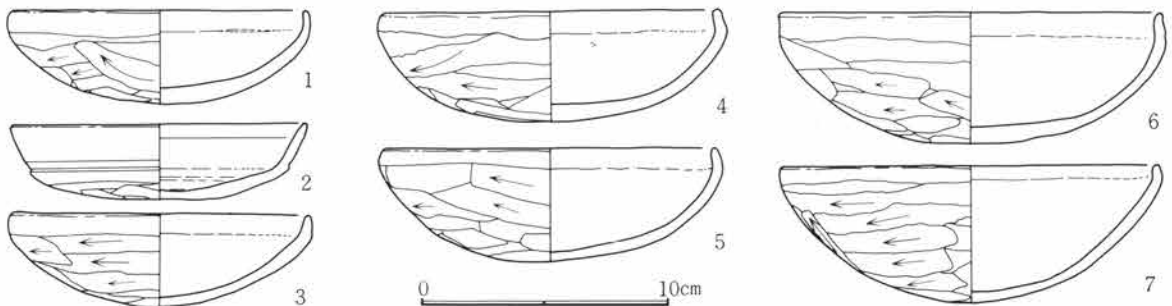
第94図 C区第37号住居跡出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物

遺構名称	C区第37号住居跡		位置	12~14-C-37~39グリッド内。		残存深度	約28cm
平面形態	矩形。	規模	2.7m×2.5m	構築基準辺	南壁	主軸方位	北-73度-南
壁	斜位に立ち上がる。		床面	北側はⅦ層土を使用する。南側は造床で全体に平坦。			
壁溝	カマド周辺以外は全周する。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	住居中央より南側が浅く認められる。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部寄り。			主軸方位	北-93度-南	
改築	有。旧掘り方を若干掘り込み再構築する。		形状	堅固な袖と「コ」の字状の燃烧部を備える。			
規模	全長 67cm・屋外長 0cm・屋内長 67cm・袖部幅125cm・燃烧部幅 45cm・煙道部幅 18cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。			袖	左袖の焼き口部を礫で補強する。		
煙道	奥壁中段よりほぼ垂直に立ち上がる。		掘り方	皿状に浅く窪む。			
遺物出土状態	カマド左側（住居北東隅部周辺）で、床面直上から完形個体が多く出土している。						

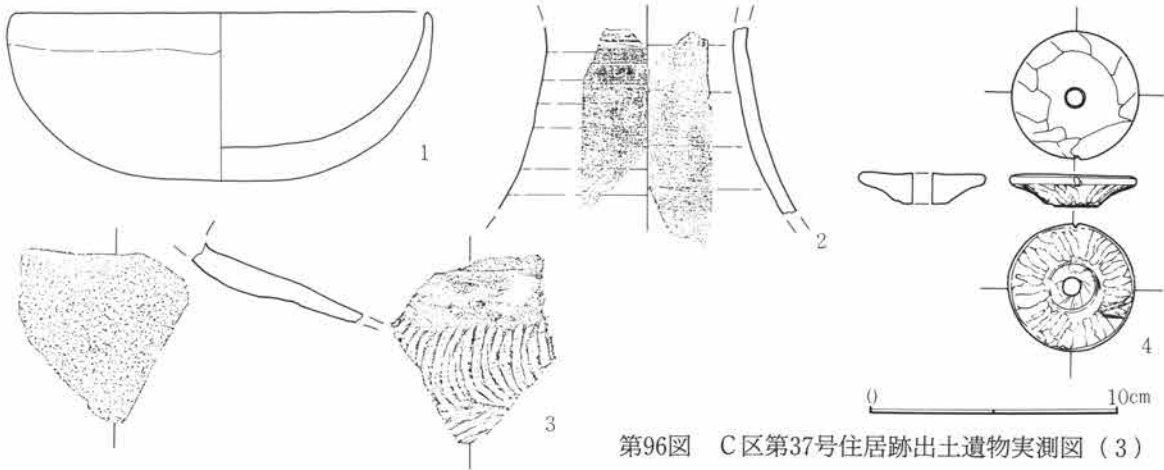


所見 当住居は、矩形状を呈する小型住居で、住居の指向方向は、東から北へ向かい7度程で、当区内の通有とは異っている。カマドは、東壁に備え、掘り方は、南東隅に寄った部分で検出されている。壁溝は、カマド部以外で全周し、南壁下では掘り方埋土の床面で明瞭に認められ、掘り方自体は、南半部のみに認められた。出土遺物では石製紡垂車（第96図-4）がカマド袖覆土内から出土し、土師器坏類がカマド左袖周辺で床面より出土している。住居の時期は7世紀後半と考えられる。



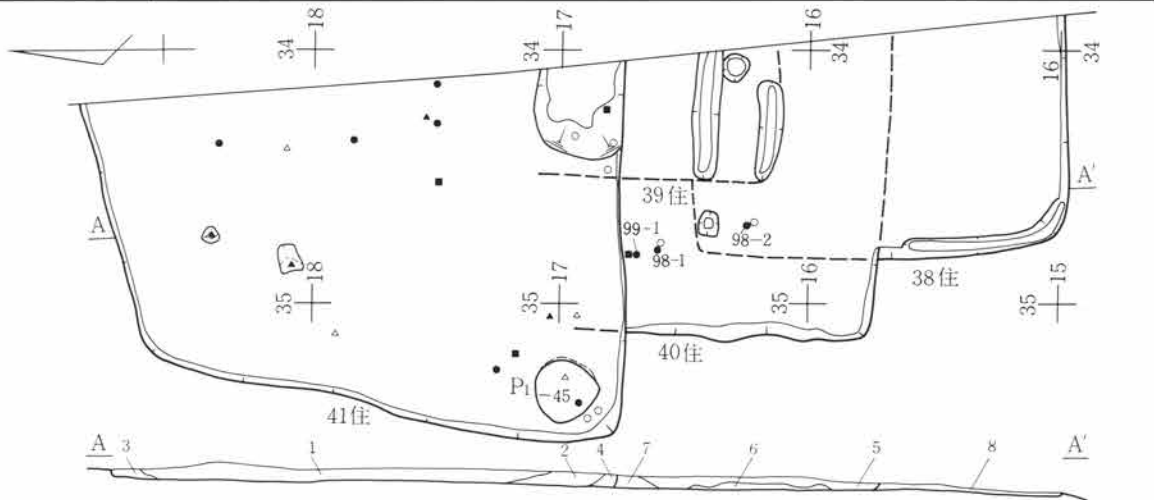
第95図 C区第37号住居跡・出土遺物実測図（2）

第1節 南側調査区



第96図 C区第37号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	C区第38号住居跡	位置	14~16-C-33・34グリッド内。	残存深度	約4cm
平面形態	長方形か?	規模	1.8+αm×3.0m	構築基準辺	不詳
東側は調査区外、40号住の破壊により詳細不詳。					
遺構名称	C区第39号住居跡	位置	16・17-C-33・34グリッド内。	残存深度	約0cm
東側は調査区外、更に41・40号住の破壊により詳細不詳。					
遺構名称	C区第40号住居跡	位置	15・16-C-33~35グリッド内。	残存深度	約11cm
遺物出土状態	東側は調査区外、更に41号住の破壊により詳細不詳。				
遺構名称	C区第41号住居跡	位置	16~18-C-34~36グリッド内。	残存深度	約12cm
平面形態	不整形?。	規模	2.95+αm×4.36m	構築基準辺	南壁
壁	詳細不分明。	床面	平坦でⅦ層土を使用する。		
壁溝	未検出。	貯蔵穴	P ₁ 。不整円形。径30cm・深度-45cm。		
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。				
掘り方	床面がⅦ層土を使用しほぼ平坦であるが、掘り方は、小さな凹凸状で若干認められる。				
遺物出土状態	貯蔵穴周辺にやや多い。鉄器は全て床面直上よりの出土。				



層序 1. 細粒状C軽石混入。 2. 細粒状C軽石若干。 3. 微粒状C軽石微量。 4. 細粒状C軽石若干。(41号住)
 5. 細粒状C軽石混入。 6. 微粒状C軽石微量・粒状Ⅶ層土混入・塊状Ⅶ層土若干。 7. 細粒状C軽石含有・塊状Ⅶ層土若干。(40号住) 8. 細粒状C軽石若干。(38号住)

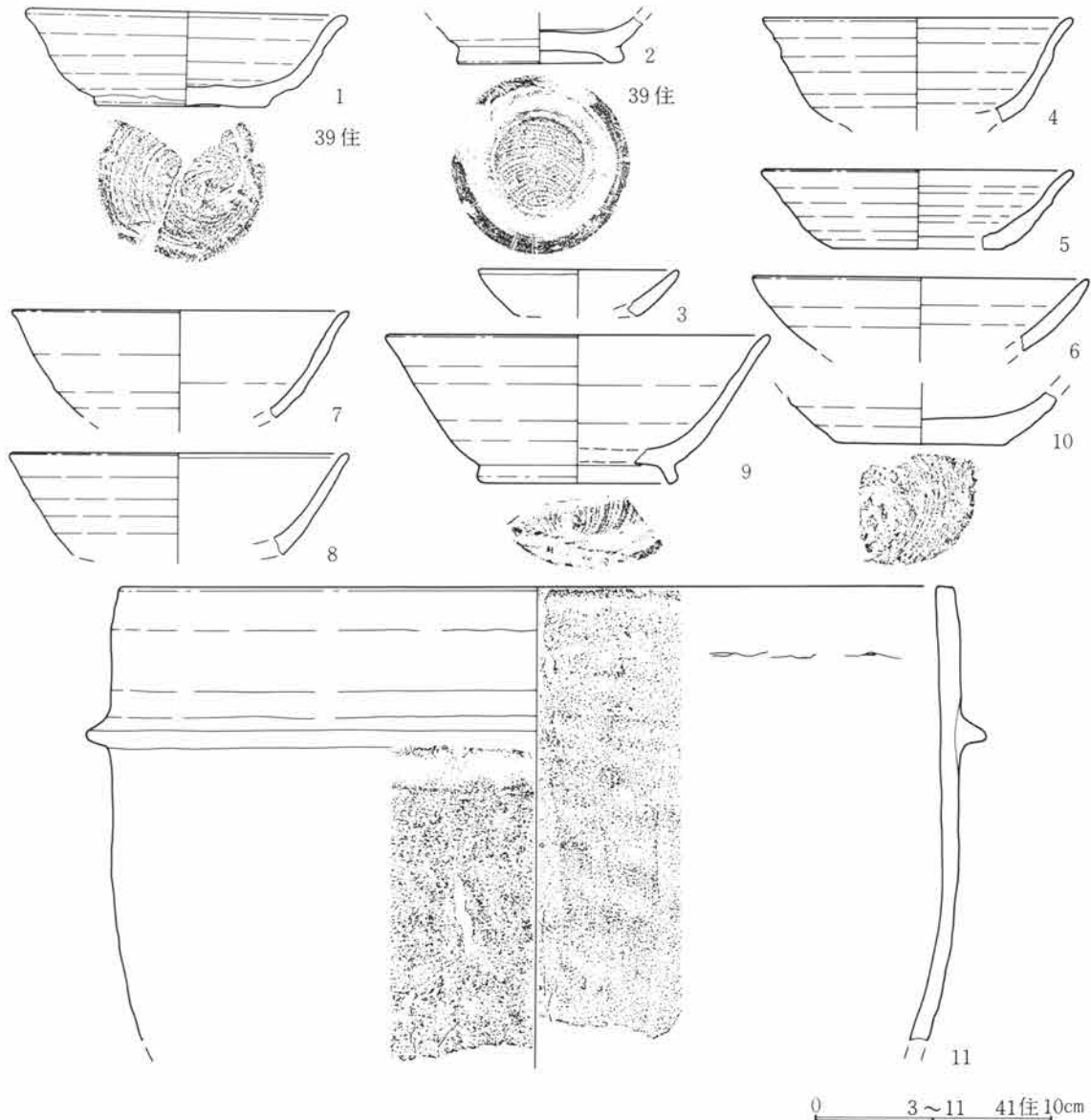
第97図 C区第38・39・40・41号住居跡実測図

第4章 検出された遺構・遺物

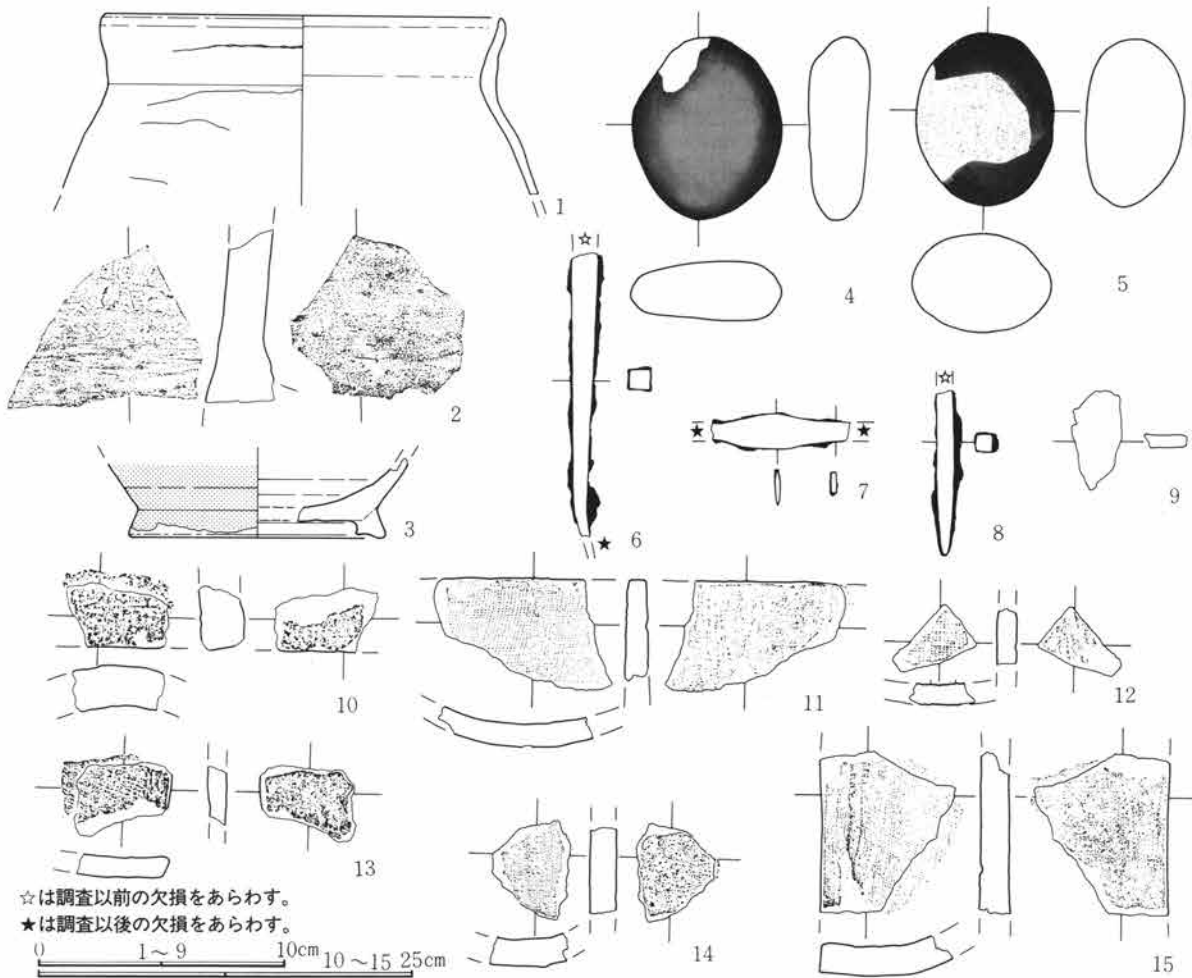
所見 (C38~41) これらの4軒の住居跡は調査東端で検出され、東側が末調査である。確認時の状況は、中世(14世紀後半~16世紀前半)の攪乱が著しく、確認自体VII層上中であつた。これにより、住居自体の遺存は非常に悪かつた。そして、4軒の新旧確認は平面で不完全であつた為調査の断面所見を加味することとし南から通し番号を付した。しかし、断面での観察も、床面が同位で遺存深度も浅いことから疑念は残る。

C38住は、西壁下で壁溝が検出され、その他の施設は何ら検出出来ず、同様に39・40号住居も明瞭な施設は認められなかつた。又、これら3軒からの出土遺物は、時期を特定し得る様なものも無かつた。

C41住は、これら4軒の北端に位置し、平面精査・断面調査所見からも4軒中で最も新しい住居であることは認識された。住居自体は梯形状を呈し、南壁が構築基準辺と考えられる。そして、当住居のみが南西隅部で貯蔵穴と考えられる施設が検出された。この部位に貯蔵穴を備える住居は、D区の住居分類では第IV段階の住居であり、当区内では、C29住など、横長方形の住居の特徴と判断された。又、出土遺物でも皿形・羽釜等の若干量ではあるが、第IV段階の様相が認められる。これらのことを勘案すると、当住居は、横長方形を呈し、南東隅部にカマドを備えることが推定出来、住居の廃棄は11世紀前半であることが類推される。



第98図 C区第39・41号住居跡出土遺物実測図(1)

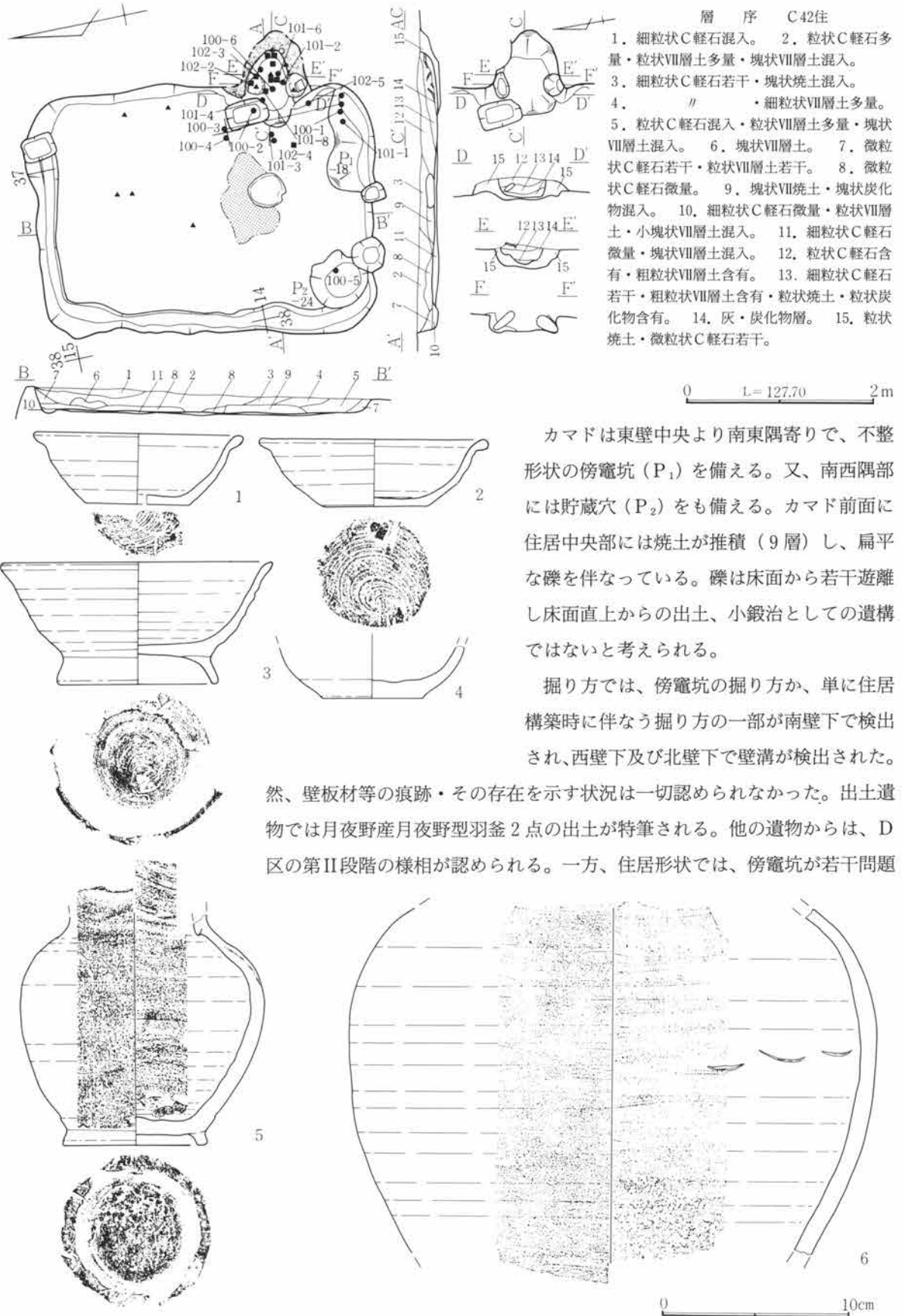


第99図 C区第41号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	C区第42号住居跡		位置	13~15-C-36~38グリッド内。		残存深度	約22cm
平面形態	横長方形	規模	2.63m×3.68m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-102度-南
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	全体的に極造床(VII層土の使用も多い)。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P ₁ は不整形。P ₂ は不整形円形。P ₁ -17cm・P ₂ -12cm。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	全体的に浅いが、北・西・南壁周辺は、やや掘り込が深い。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から20cm。			主軸方位	北-103度-南	
改築	無。礫の据方は、構築頭初のもの。		形状	舌状。遺存が不良のため、煙道は未検出。			
規模	全長 80cm・屋外長 40cm・屋内長 40cm・袖部幅120cm・燃烧部幅 43cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。燃烧部両壁を礫で補強。						
煙道	未検出。詳細不分明。		袖	瘤状に削出し、III層土等で造る。			
遺物出土状態	カマド内は多いが、住居内は少ない。住居内ではカマド周辺部が床面直上で出土。						

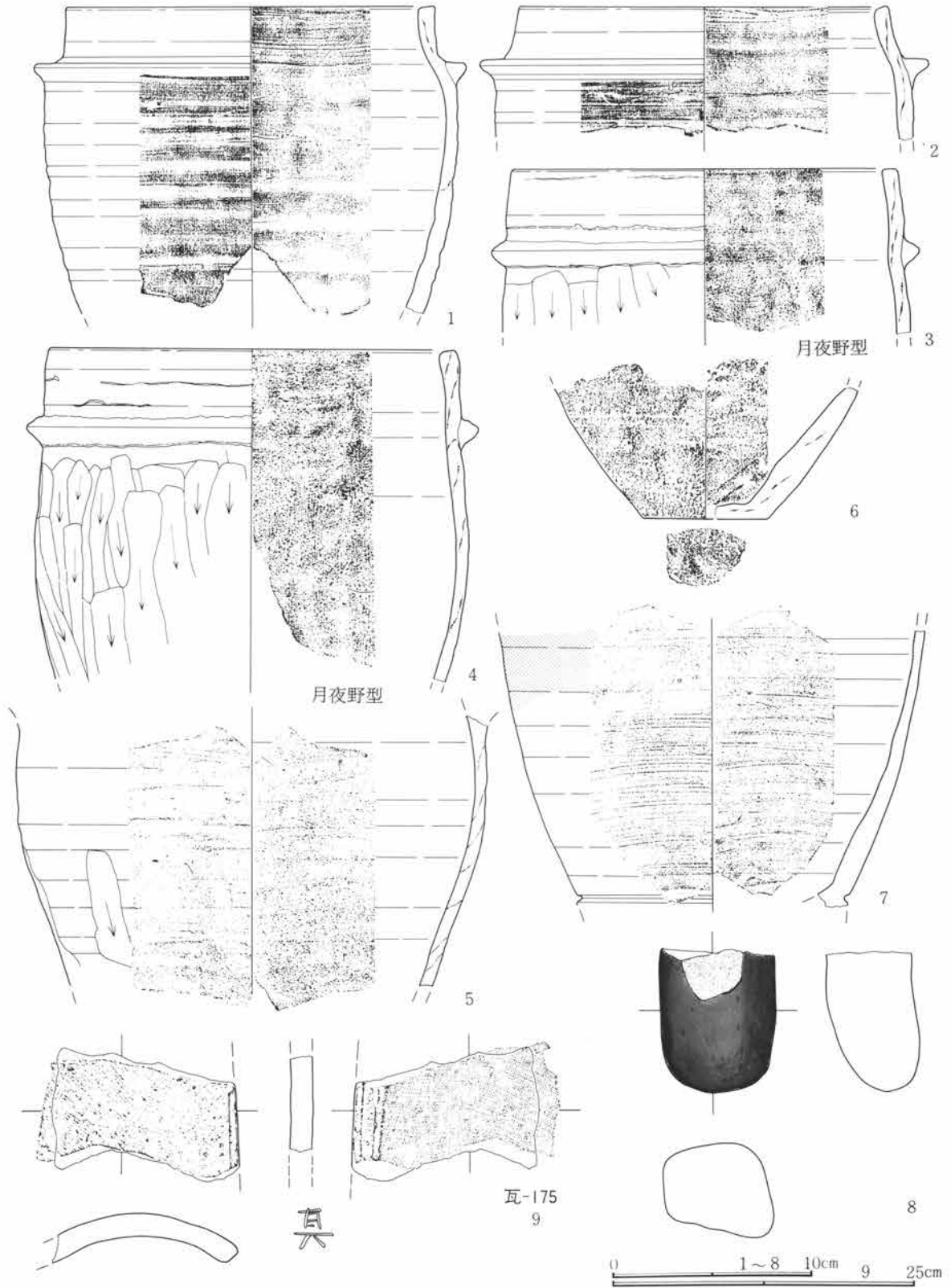
所見 当住居はC54・84号を切る。当住居も前述の38~41住の如く残存状態が非常に悪く、図中4本の柱穴状遺構は中世(14世紀後半~16世紀前)の所産である。

第4章 検出された遺構・遺物



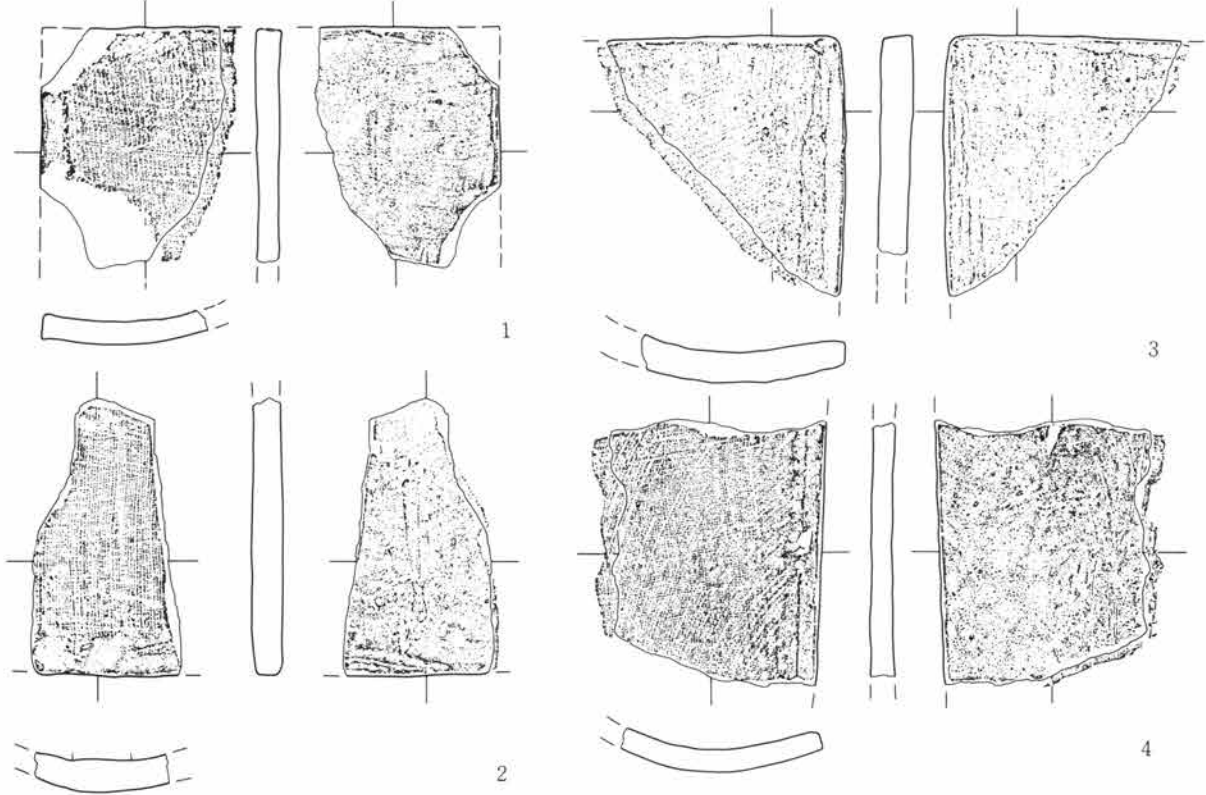
第100図 C区第42号住居跡・出土遺物実測図(1)

になるが、カマドの付設位置からは、D区の住居分類の第II段階に比定される。このことから、当住居の廃棄時期は第II段階の示す10世紀前半が考えられる。



第101図 C区第42号住居跡出土遺物実測図(2)

第4章 検出された遺構・遺物



第102図 C区第42号住居跡出土遺物実測図(3) 0 25cm

遺構名称	C区第43号住居跡		位置	16~18-C-36~38グリッド内。			残存深度	約20cm
平面形態	矩形気味。	規模	3.20m×3.45m	構築基準辺	南乃至北壁	主軸方位	北-89度-南	
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	造床で平坦。				
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。P ₁ は本跡を切る。P ₂ ・P ₃ は掘り方。				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	北東隅部周辺及び東壁でやや顕著。南西隅部周辺もやや顕著。							
カマド	位置	東壁、住居南東隅部。				主軸方位	北-117度-南	
改築	有。補強材ピットは改築前のもの。			形状	舌状。			
規模	全長120cm・屋外長100cm・屋内長 20cm・袖部幅110cm・燃烧部幅 55cm・煙道部幅 23cm。							
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。両側壁上半は礫により補強。袖 顕著なものではなく、形該化している。右のみ瓦で補強。							
煙道	燃烧奥壁部から段を有し立ち上がる。			掘り方	図示したものは改築以前の状態。			
遺物出土状態	南半部で少量有る。住居残が良好でないため、全体がほぼ直面に近い。							

所見 当住居はC83住を切り構築がある。当住居も周辺住居同様中世以降の攪乱により住居の遺存が非常に悪い。

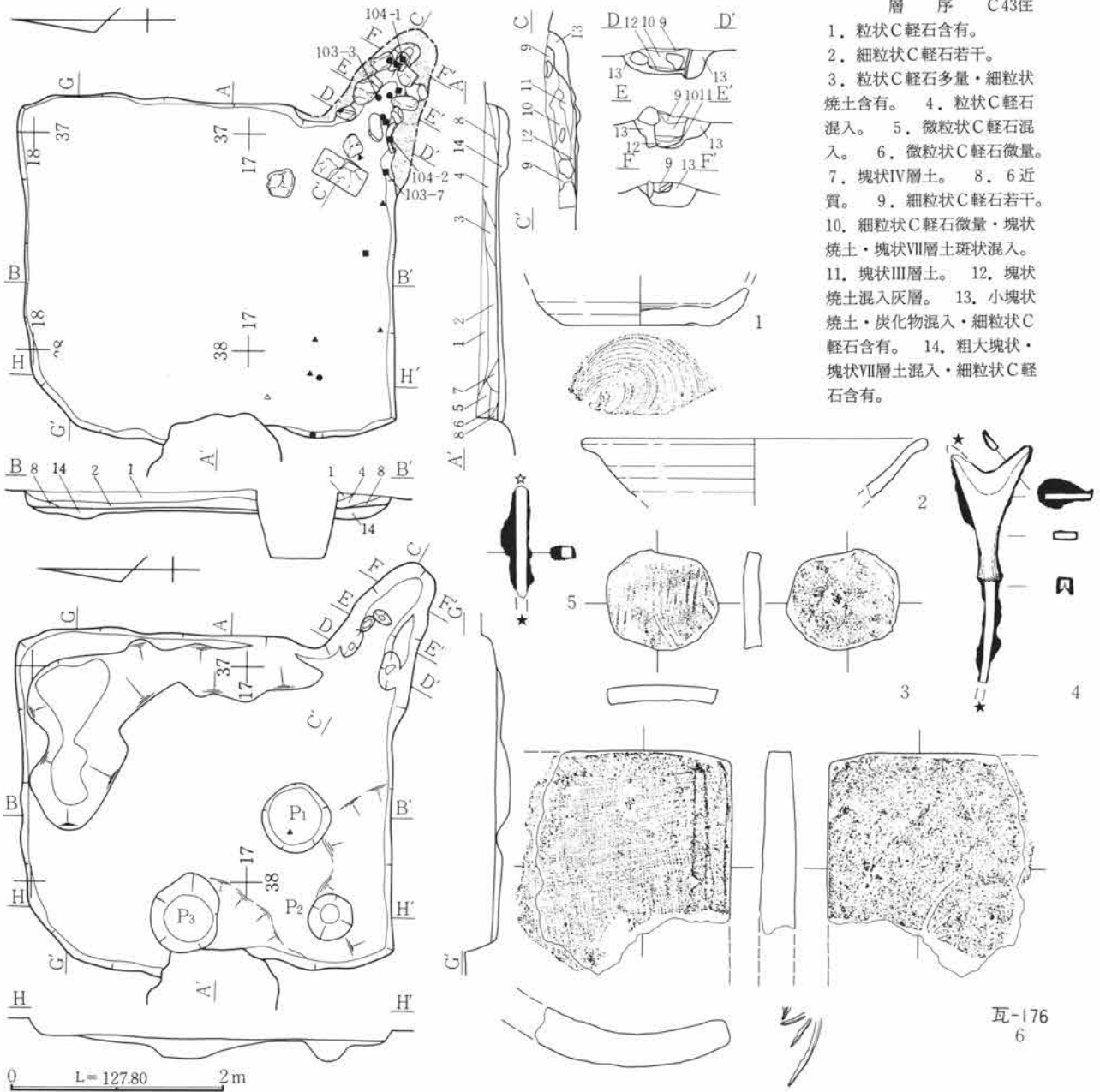
住居は正形状で南壁に構築基準辺が想定されるが、東・北壁下の掘り方も注意される。然、南壁の直線走行は、構築基準辺に充分足りる状態があり、南壁が構築基準辺と考えられる。

カマドは南東隅部に住居の対角線方向に主軸を執っている。燃烧部等の各部位は地山礫を多用し、部分的

第1節 南側調査区

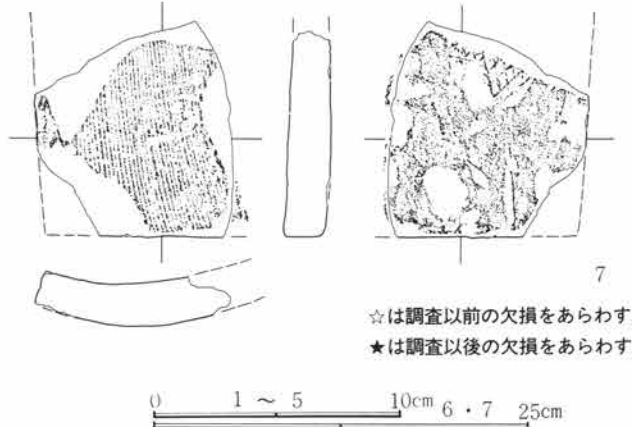
層序 C43住

1. 粒状C軽石含有。
2. 細粒状C軽石若干。
3. 粒状C軽石多量・細粒状焼土含有。
4. 粒状C軽石混入。
5. 微粒状C軽石混入。
6. 微粒状C軽石微量。
7. 塊状IV層土。
8. 6近質。
9. 細粒状C軽石若干。
10. 細粒状C軽石微量・塊状焼土・塊状VII層土斑状混入。
11. 塊状III層土。
12. 塊状焼土混入灰層。
13. 小塊状焼土・炭化物混入・細粒状C軽石含有。
14. 粗大塊状・塊状VII層土混入・細粒状C軽石含有。



は、8面を丁寧に整形した碟が出土している。貯蔵穴はP₁が考えられるが、掘り方で検出されたP₂・P₃はP₁より平面形状がしっかりしている。

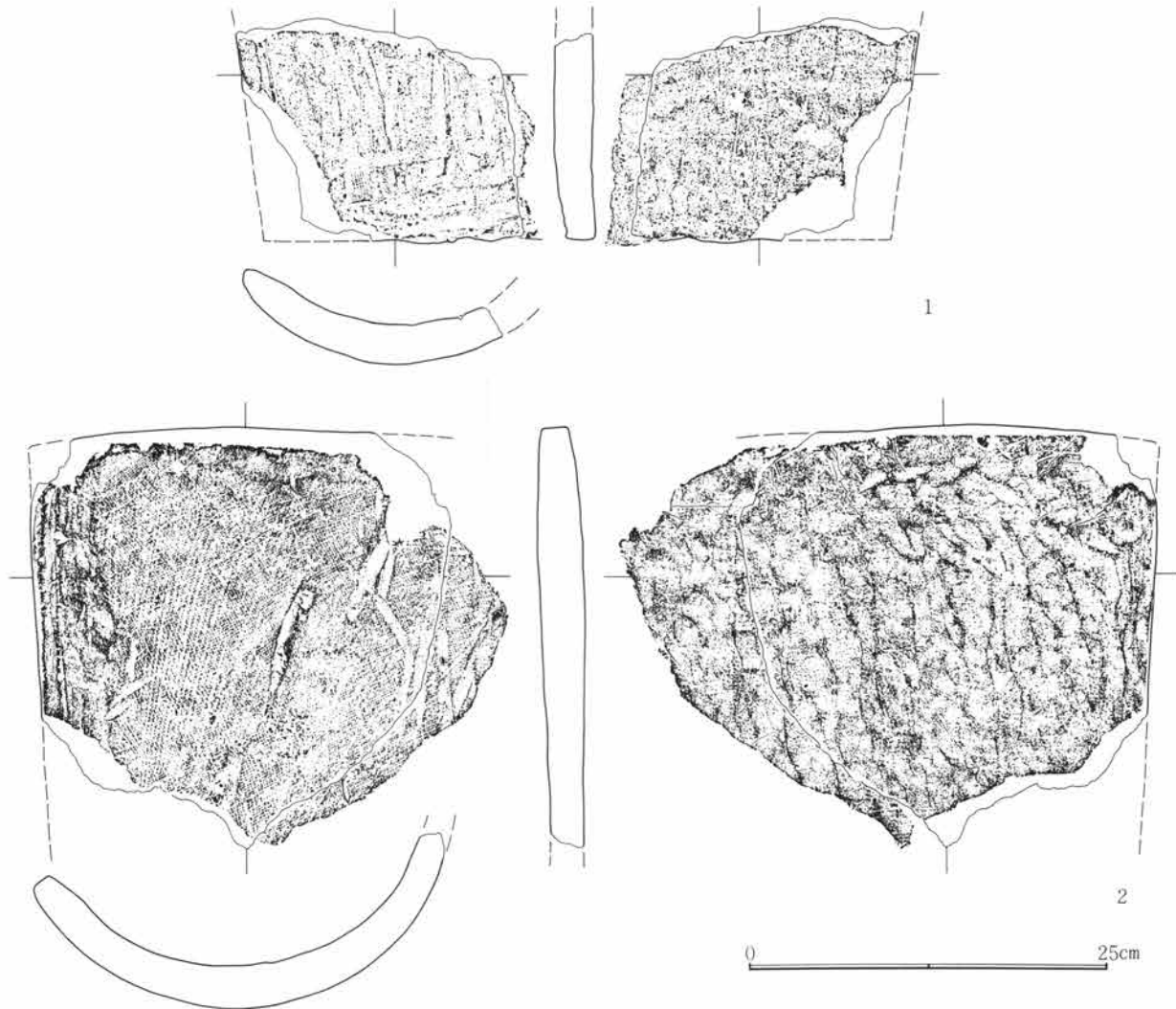
出土遺物は少なく時期を想定される遺物が少ないが、瓦の年代観からは9世紀代が考えられる。住居自体ではD区の住居分類の第IV段階に比定出来、廃棄時期は11世紀前半頃と考えられる。



☆は調査以前の欠損をあらわす。
★は調査以後の欠損をあらわす。

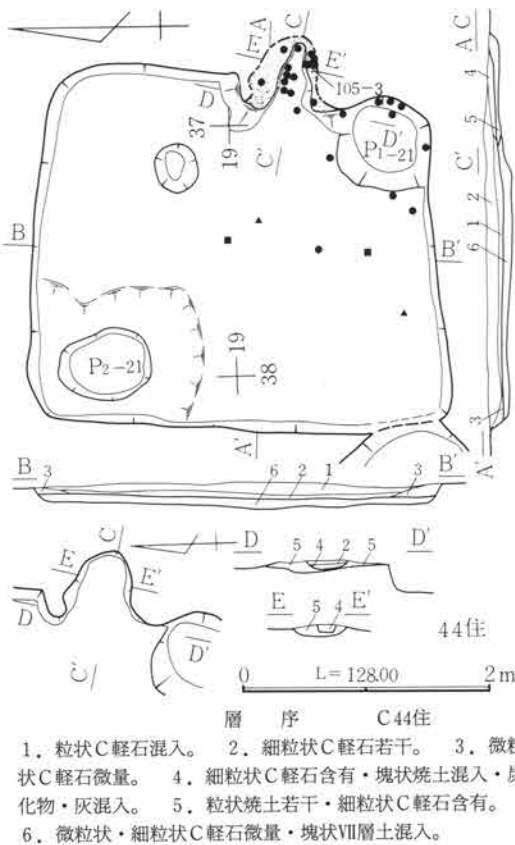
第103図 C区第43号住居跡・出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物



第104図 C区第43号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	C区第44号住居跡		位置	18・19-C-36~38グリッド内。			残存深度	約15cm
平面形態	梯形。	規模	3.85m×3.3m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-94度-南	
壁	斜位?残存不良なため詳細不明。			床面	平坦。浅い掘り方に造床。			
壁溝	未検出。			傍竈坑・貯蔵穴	P ₁ ・P ₂ 。P ₁ 隅丸正方形。75×75cm・深度-21cm			
柱穴	住居内及び住居周辺を平面精査を実施したが未確認。							
掘り方	全体的に凹凸状で浅く、部分的には底面が床面となるが、北西隅部周辺がやや窪む状態。							
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から63cm。				主軸方位	北-105度-南	
改築	不明。掘り方内には焼土が認められる。			形状	細い舌状を呈する。			
規模	全長 76cm・屋外長 33cm・屋内長 43cm・袖部幅115cm・燃烧部幅 27cm・煙道幅 12cm。							
焚口・燃烧部	遺存不良であり詳細は伴然としない。焚口部は、燃烧部寄りの部分に寄る。礫・瓦等による補強は認められない。							
	袖	残存状態からは、比較的しっかりしていたと考えられる。						
煙道	細く突出し、斜位に立ち上がっている。			掘り方	全体に広い舌状を呈する。袖は削り出し。			
遺物出土状態	カマド内にやや多く、羽釜片が多い。住居内では散在するが少量で床面直上層が多い。							



所見 当住居も中世紀以降の攪乱により遺存が非常に悪い。当住居は、カマドを東壁中央程に具備し、南東隅部に傍竈坑を備える。この傍竈坑内から少量の遺物が出土しているが、整理時に所在不明であった。又、北西隅部からは、貯蔵穴状の施設(P₂)が検出されたが、掘り方に伴うかは調査の所見では得られなかったが、覆土上面では床面は認められなかった。

出土遺物は全体に少ない。第105図-1はカマド覆土内からの出土である。住居の廃棄時期形状から9世紀後半から末頃と考えられる。

第105図 C区第44号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	C区第45号住居跡	位置	20・21-C-51・52	残存深度	約10cm
平面形態	正方形。	規模	2.42m×2.40m	構築基準辺	西壁
主軸方位	北-90度-南				
遺物出土状態	住居自体の遺存が不良のため詳細不詳。				

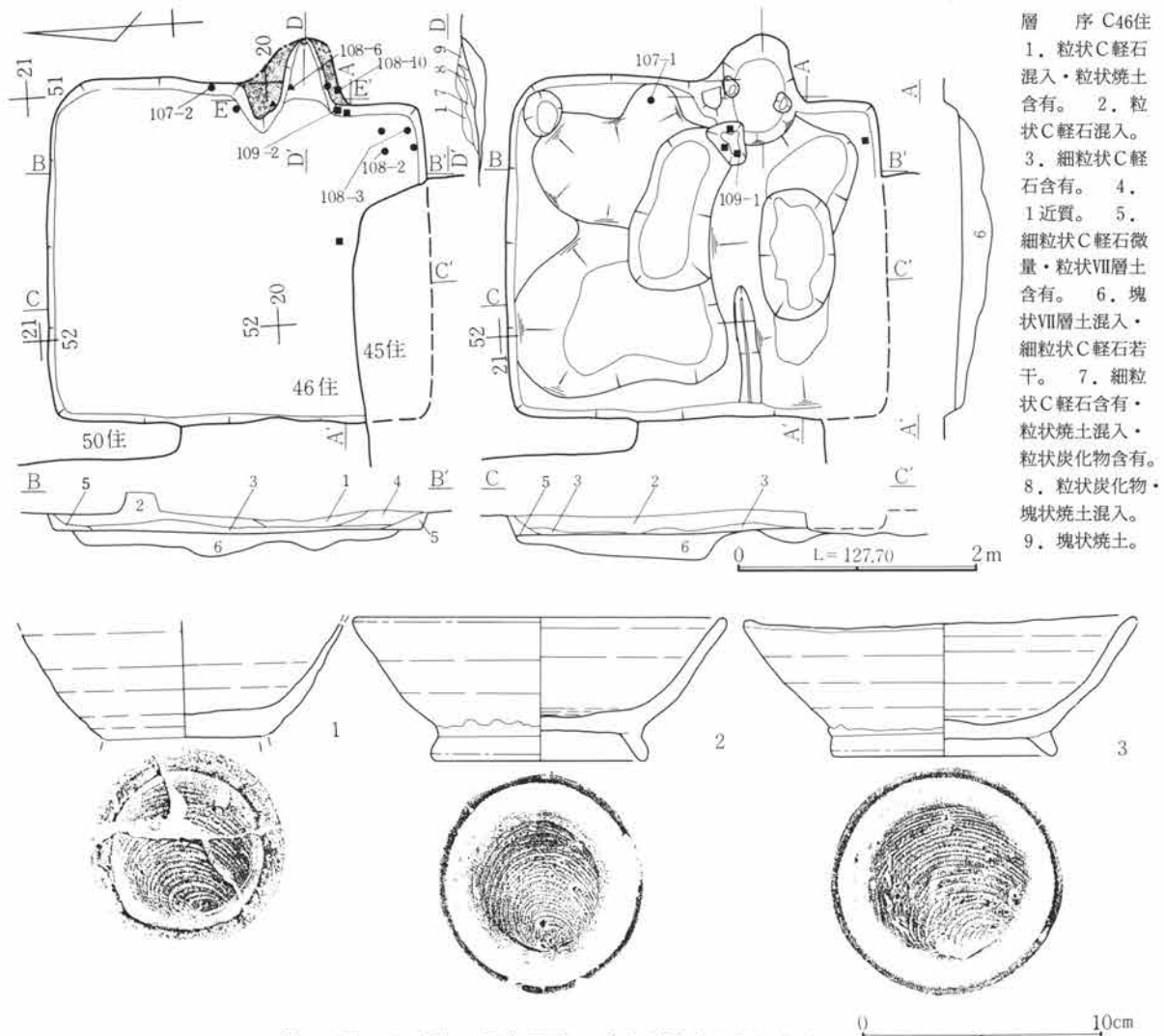


第106図 C区第45号住居跡・出土遺物実測図

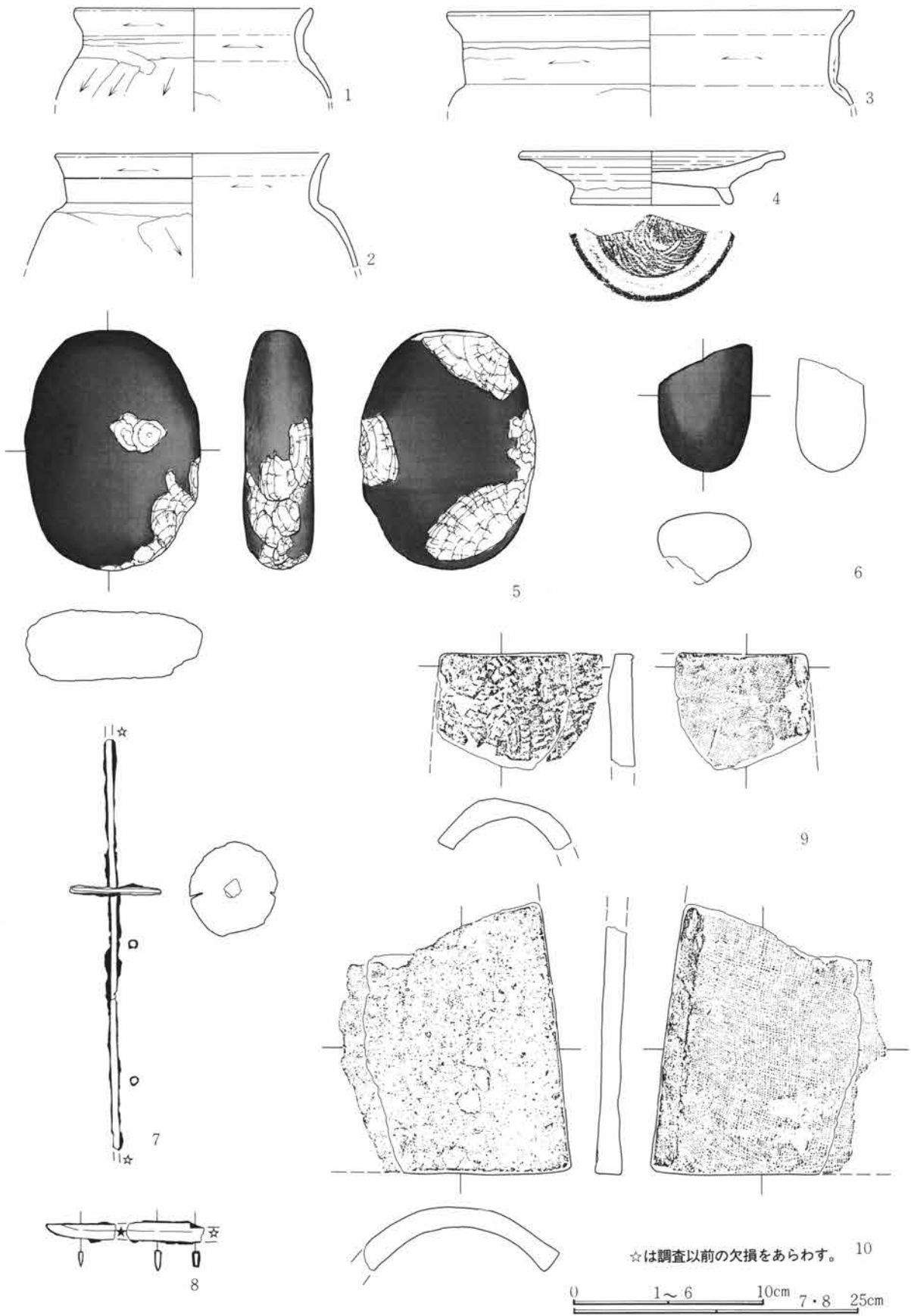
所見 当住居はC46住を切る。調査段階で調査自体の不手際により遺存を悪くしている。このカマドは痕跡程度にしか検出出来得ず、詳細は不分明である。然、住居南東部には多量の灰・炭化物が床面直上で検出され、カマドの使用に伴ない掻き出されたものであることが考えられ、カマドの使用は明らかに判断される。又、当該区では、最小規模の住居である。出土遺物には、D区の第IV段階の様相が認められることから、カマドは南東隅部に付設された可能性が強い。住居の廃棄は、遺物から10世紀末から11世紀前半と考えられる。

第4章 検出された遺構・遺物

遺構名称	C区第46号住居跡	位置	19・20-C-50~52グリッド内。	残存深度	約32cm
平面形態	矩形。	規模	2.87m×3.1m	構築基準辺	北乃至西壁 主軸方位 (北壁)北-93度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。	床面	ほぼ平坦。掘り方を埋設し造床。		
壁溝	未検出。	傍竈坑・貯蔵穴	未検出。(南東隅部に遺物が集中する)。		
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。				
掘り方	全体的に顕著である。北壁下は、南壁下に比較しやや顕著に認められる。				
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から56cm。	主軸方位	北-93度-南	
改築	有。掘り方燃焼部に補強材の据方を検出。	形状	舌状。		
規模	全長80cm・屋外長45cm・屋内長35cm・袖部幅100cm・燃焼部幅37cm。				
焚口・燃焼部	扇状を呈する焚口部は、燃焼空間と重複する部分が著しく、燃焼部先端側に器設部分が考えられる。礫・瓦による壁の補強はない。				
	袖	左袖は右袖に比較し大きい。補強材は認められなかった。			
煙道	未検出。燃焼部の立ち上りが煙道に延びる？	掘り方	長楕円形状で、補強材の据方を検出。		
遺物出土状態	カマド内・カマド周辺での出土が若干有ったのみである。カマド周辺は、床面直上。				

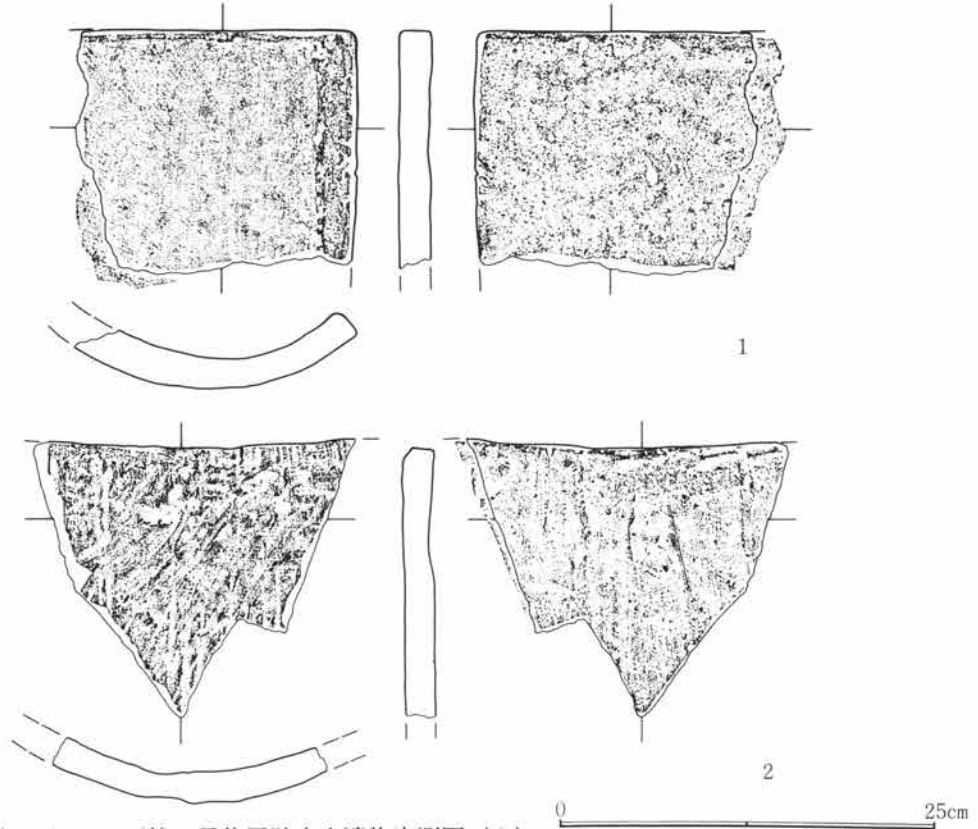


第107図 C区第46号住居跡・出土遺物実測図(1)



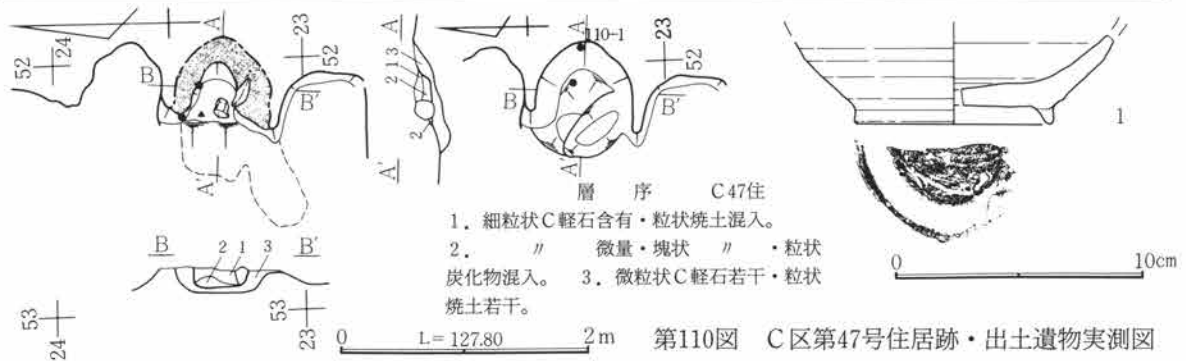
第108図 C区第46号住居跡出土遺物実測図(2)

第4章 検出された遺構・遺物



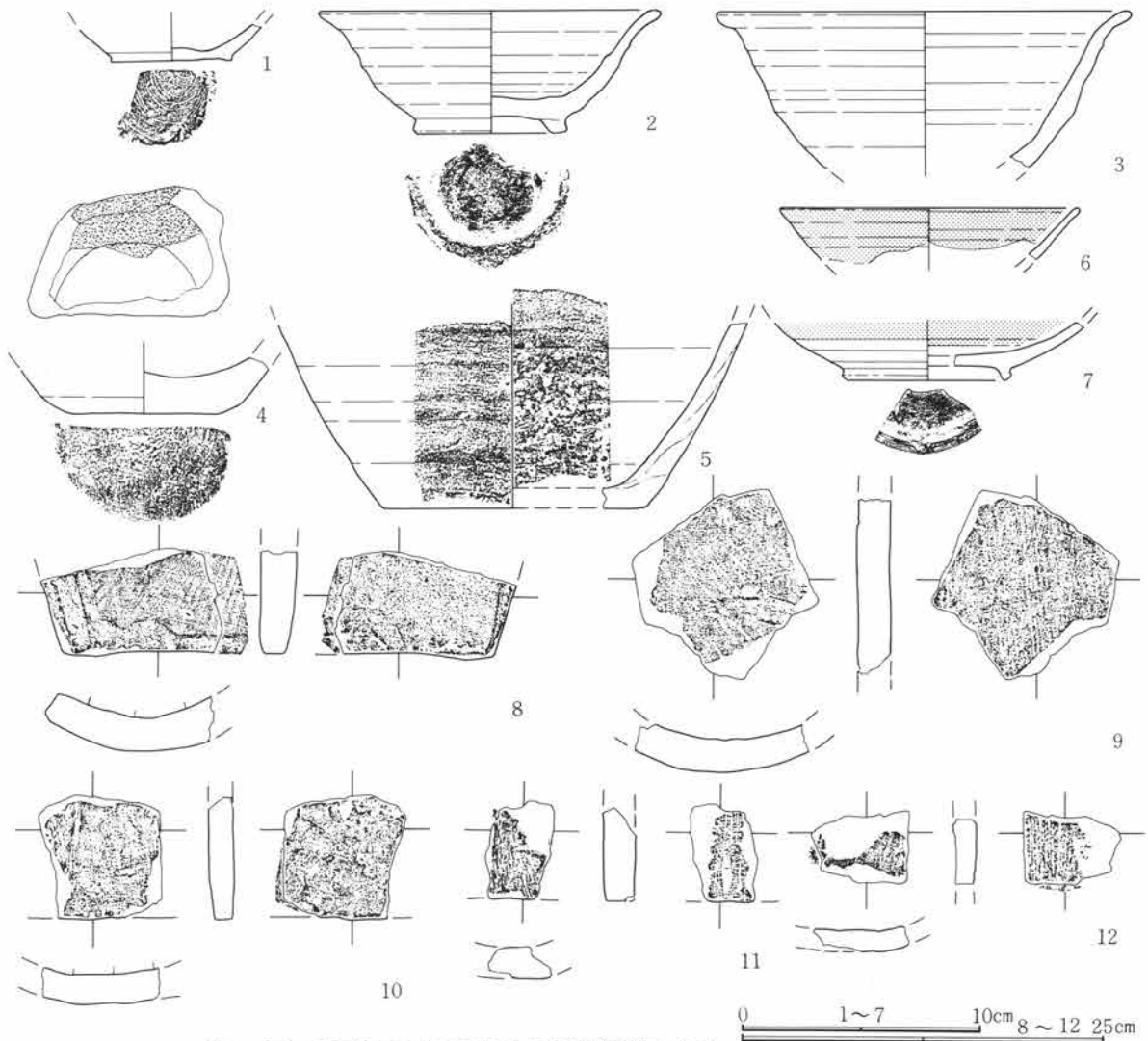
第109図 C区第46号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	C区第47号住居跡	位置	22・23-C-51・52グリッド内。	残存深度	約12cm
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から55cm。		主軸方位	北-94度-南
改築	不明。	形状	全体的に遺存が悪く馬蹄形状に残存する。		
規模	全長 80cm・屋外長113cm・屋内長 67cm・袖幅110+ α cm・燃烧部幅 34cm。				
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。				
	袖	左袖は19号住により一部破壊されている。			
煙道	立ち上がり部のみ、部分的に検出。	掘り方	両袖を削り出し、全体が馬蹄状に掘り込む。		
遺物出土状態	土器類が数点出土したのみである。				



第110図 C区第47号住居跡・出土遺物実測図

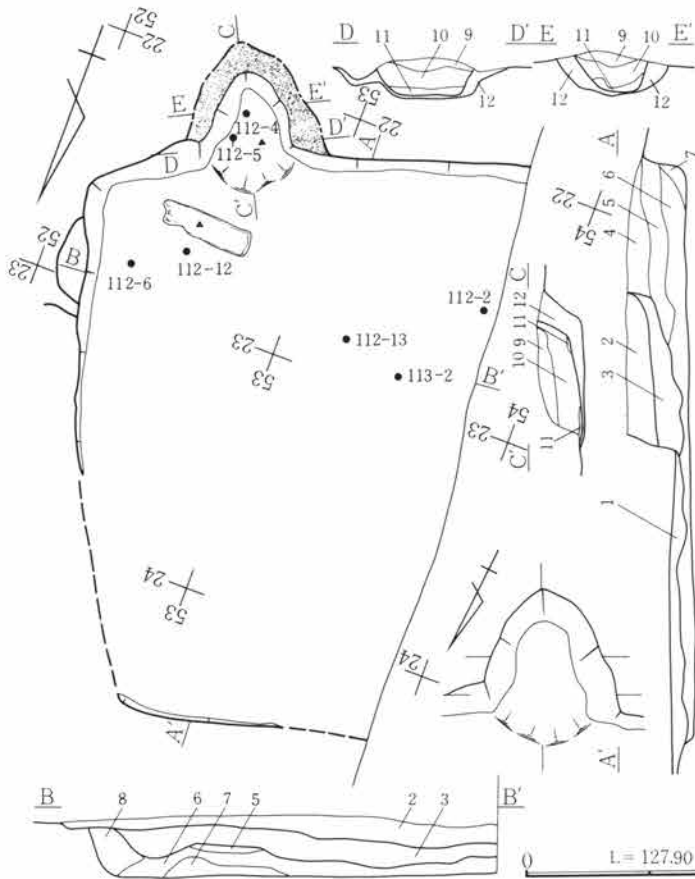
所見 当住居は19住に切られ、48住を切るが、調査の下手際から詳細は不明である。検出出来得た部分はカマド周辺のみである。カマドは、南東隅部にやや寄った位置で、この状況は、D区の住居分類では第Ⅲ段階が考えられ、この点から当住居は、10世紀中頃に廃棄された可能性が考えられる。



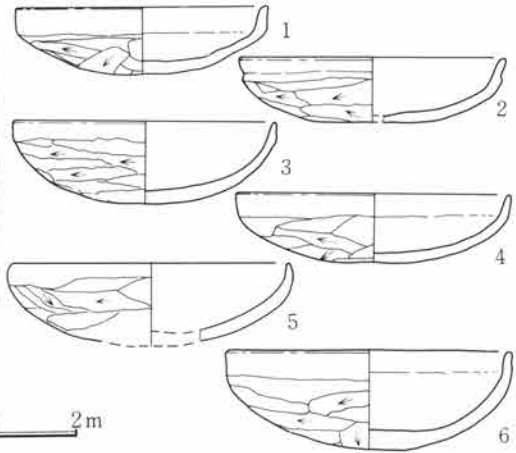
第111図 C区第48号住居跡出土遺物実測図(1)

遺構名称	C区第48号住居跡	位置	21~24-C-52・53グリッド内。			残存深度	約45cm	
平面形態	不明。規模	4.50m×3.50+αm	構築基準	不明壁。	主軸方位	北-158度-南位か		
壁	垂直に立ち上がる。		床面	VII層土を使用し平坦。				
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	部分的に層厚数cmの貼り床が認められた程度である。							
カマド	位置	南壁、住居南東隅部から82cm。			主軸方位	北-157度-南		
改築	不明。			形状	舌状を呈する。			
規模	全長 93cm・屋外長 55cm・屋内長 38cm・袖部幅 90cm・燃烧部幅 63cm。							
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。壁体の補強材は未検出。							
煙道	未検出。		袖	ほとんど無い状態。				
掘り方	未検出。		掘り方					広い舌状を呈し、底面は平坦。
遺物出土状態	床面直上で完形個体(第112図6・13)が検出されている。他は覆土上層が多い。							

第4章 検出された遺構・遺物

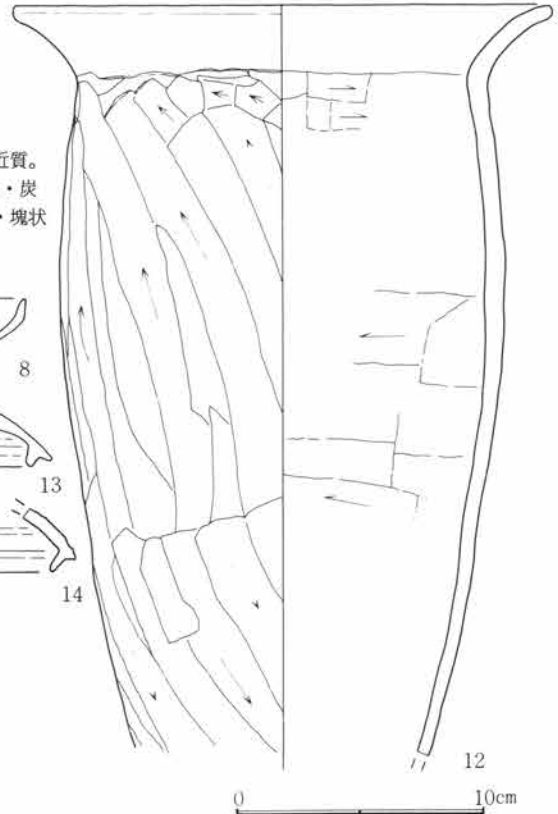
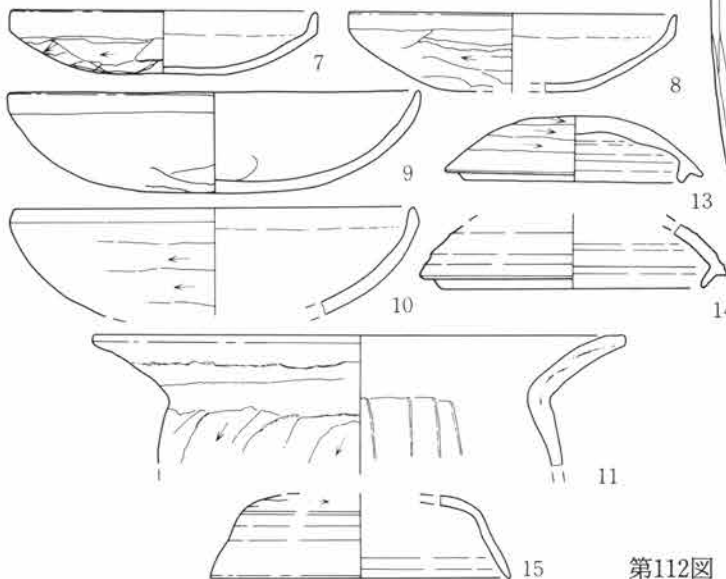


所見 当住居は19・47住に切られ西側は調査区外に延びる。カマドは南壁に具備し、住居の指向方向はやや北側に向いており、当遺跡の古期の様相が認められる。住居形状は末調査部がある為言及し得ないが、上層断面での覆土の堆積状態より正方形乃至矩形が考えられる。出土遺物は多く、完形品がやや多い。この遺物から、住居の廃棄年代は7世紀後半と考えられる。

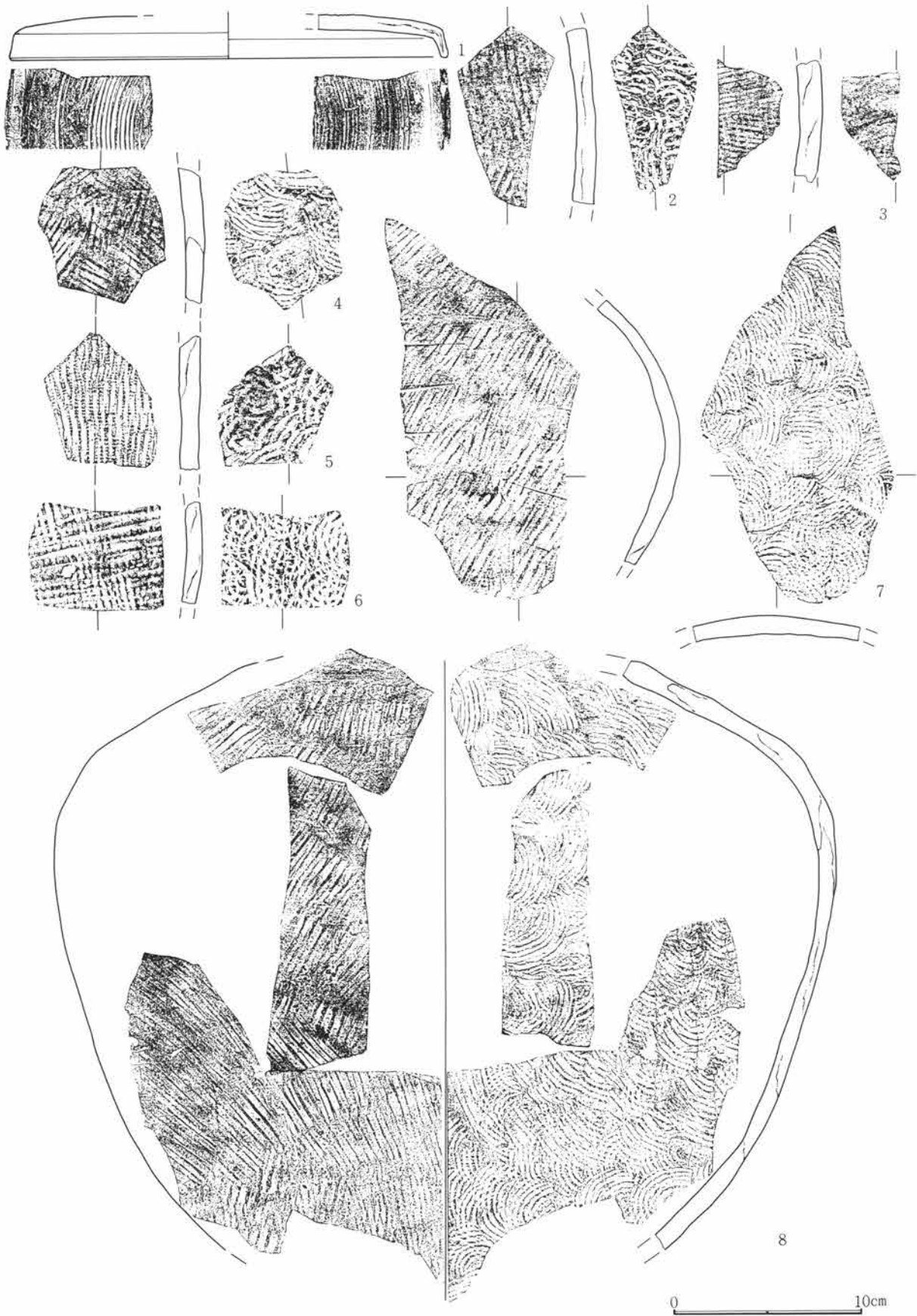


層序 C48住

1. C19住掘り方土（細粒状C軽石若干・粗粒状VII層土含有・粒状焼土若干）。2. C47住覆土（粒状C軽石多量・粒状焼土若干）。3. C47住掘り方土（細粒状C軽石微量・粒状焼土・炭化物若干）。4. 粒状C軽石多量。5. 粒状C軽石含有・粒状焼土若干。6. 細粒状C軽石若干・粒状炭化物混入・灰混入・粒状焼土含有。7. 微粒状C軽石若干・塊状VII層土含有。8. 7近質。9. 細粒状C軽石若干・粒状VII層土含有。10. 細粒状C軽石若干・粒状焼土・炭化物多量混入。11. 粒状炭化物・粒状VII層土若干。12. 粒状C軽石若干・塊状VII層土含有・粒状焼土・炭化物少量。



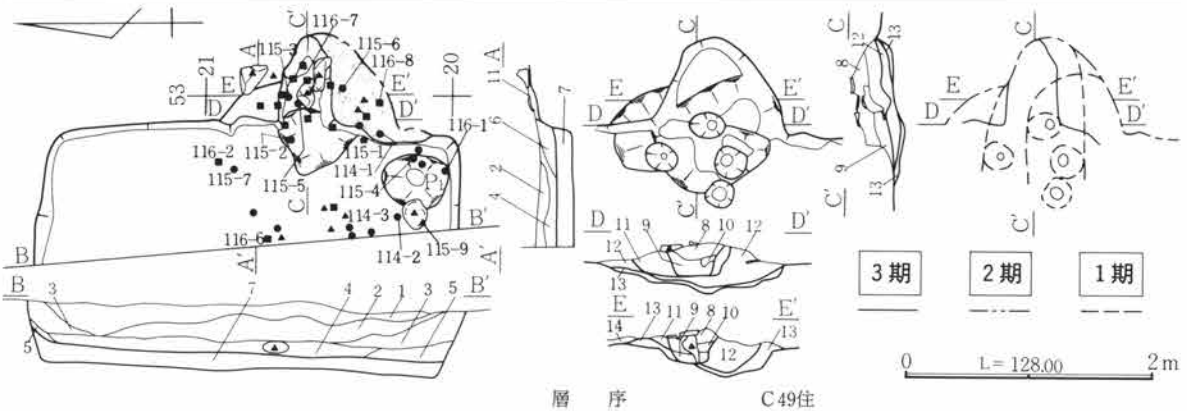
第112図 C区第48号住居跡・出土遺物実測図（2）



第113図 C区第48号住居跡出土遺物実測図(3)

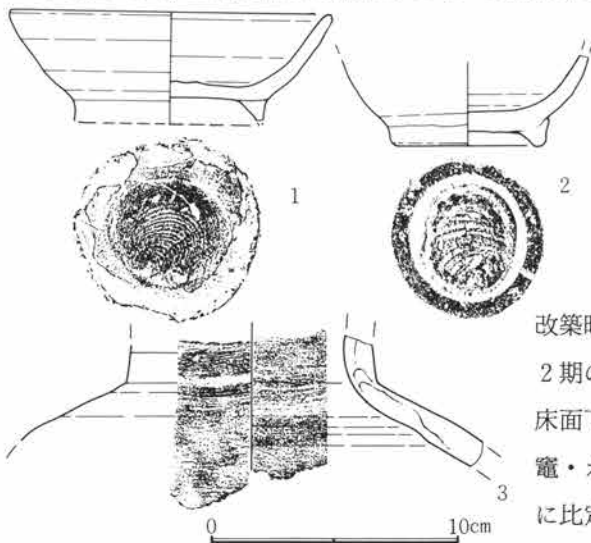
第4章 検出された遺構・遺物

遺構名称	C区第49号住居跡		位置	19~21-C-52・53グリッド内。		残存深度	約38cm
平面形態	不分明。	規模	1.05+αm×3.36m	構築基準辺	不分明壁。	主軸方位	北-92度-南位か
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	造床の層厚は厚いが平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P ₁ 。不整楕円。55×42cm・深度-22cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	全体的に平坦。未調査部は、検出部の状況からほぼ平坦に近い状態と思われる。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から70cm程。(最終時)			主軸方位	北-91度-南	
改築	有。大きな改築が2回認められる。		形状	舌状を呈する。			
規模	全長113cm・屋外長 69cm・屋内長 44cm・袖部幅 55cm・燃烧部幅 40cm・煙道部幅 21cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
	袖	最終次のものは無いが、二期のものには補強材が考えられる。					
煙道	暖やかに立ち上がる。		掘り方	二回の改修が認められ、図示は全体の図化。			
遺物出土状態	住居中央部では、全体的に覆土内が多いが、南東隅部は床面に近い。						



層序 C49住

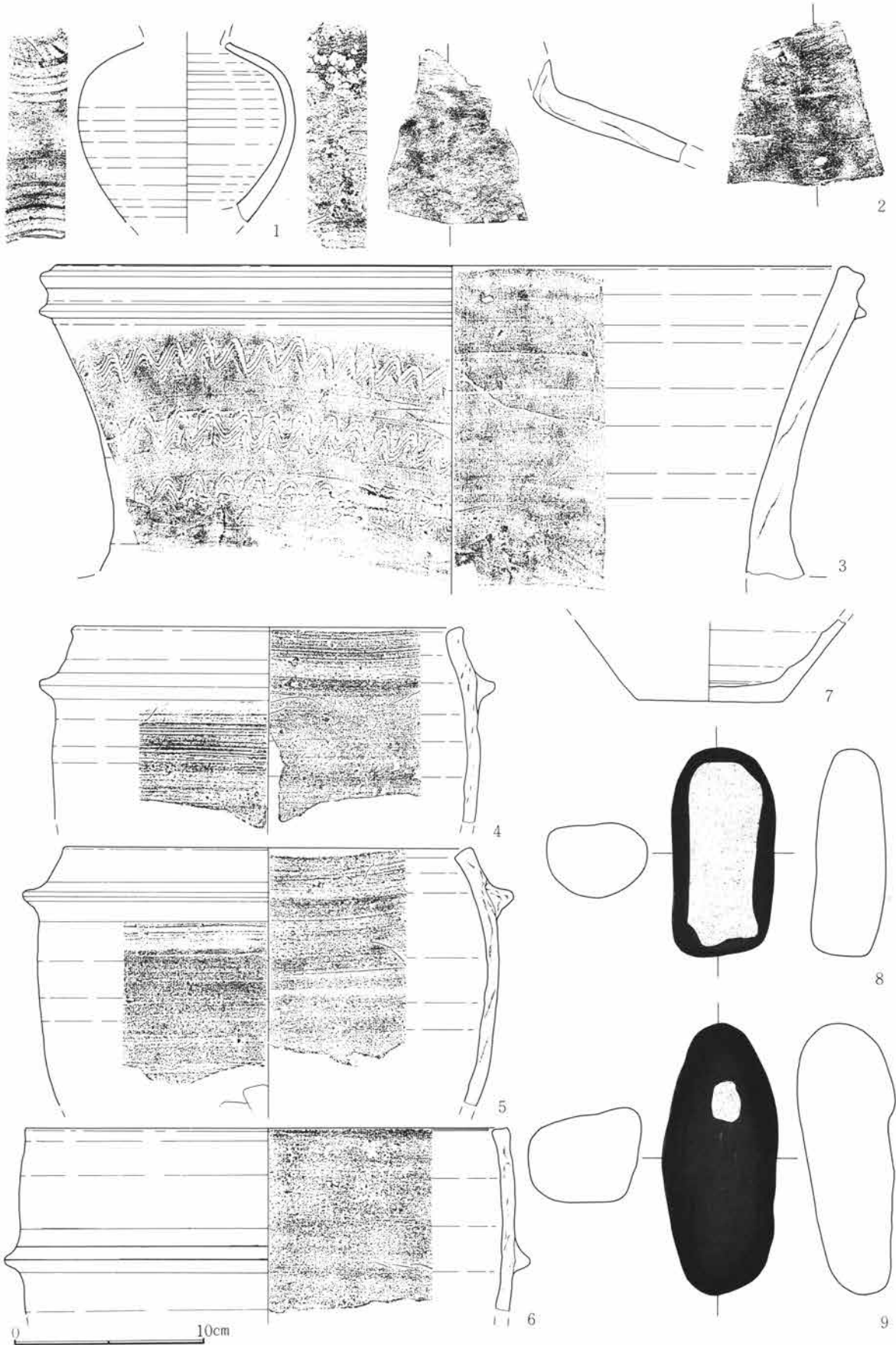
1. 粒状C軽石多量・粒状VII層土多量。 2. 粒状C軽石多量。 3. 細粒状C軽石含有・塊状VII層土若干。 4. 細粒状C軽石混入。
 5. 細粒状C軽石若干。 6. 細粒状C軽石若干・粒状焼土含有。 7. 細粒状C軽石少量・塊状VII層土含有・粒状VII層土混入。
 8. 粒状C軽石多量・粒状焼土含有。 9. 粒状C軽石含有・粒状焼土・炭化物多量。 10. 粒状VII層土含有灰青色粘質土。 11~13.
 細粒状C軽石・粒状VII層土・塊状・粒状焼土・粒状炭化物を混入する。各層はこれらの含有量により分層。11は炭化物が多い。12は全体的に焼土が多く、13は、夾雑量が全体的に少ない。 14. III層土に近い(住居1に近質)。



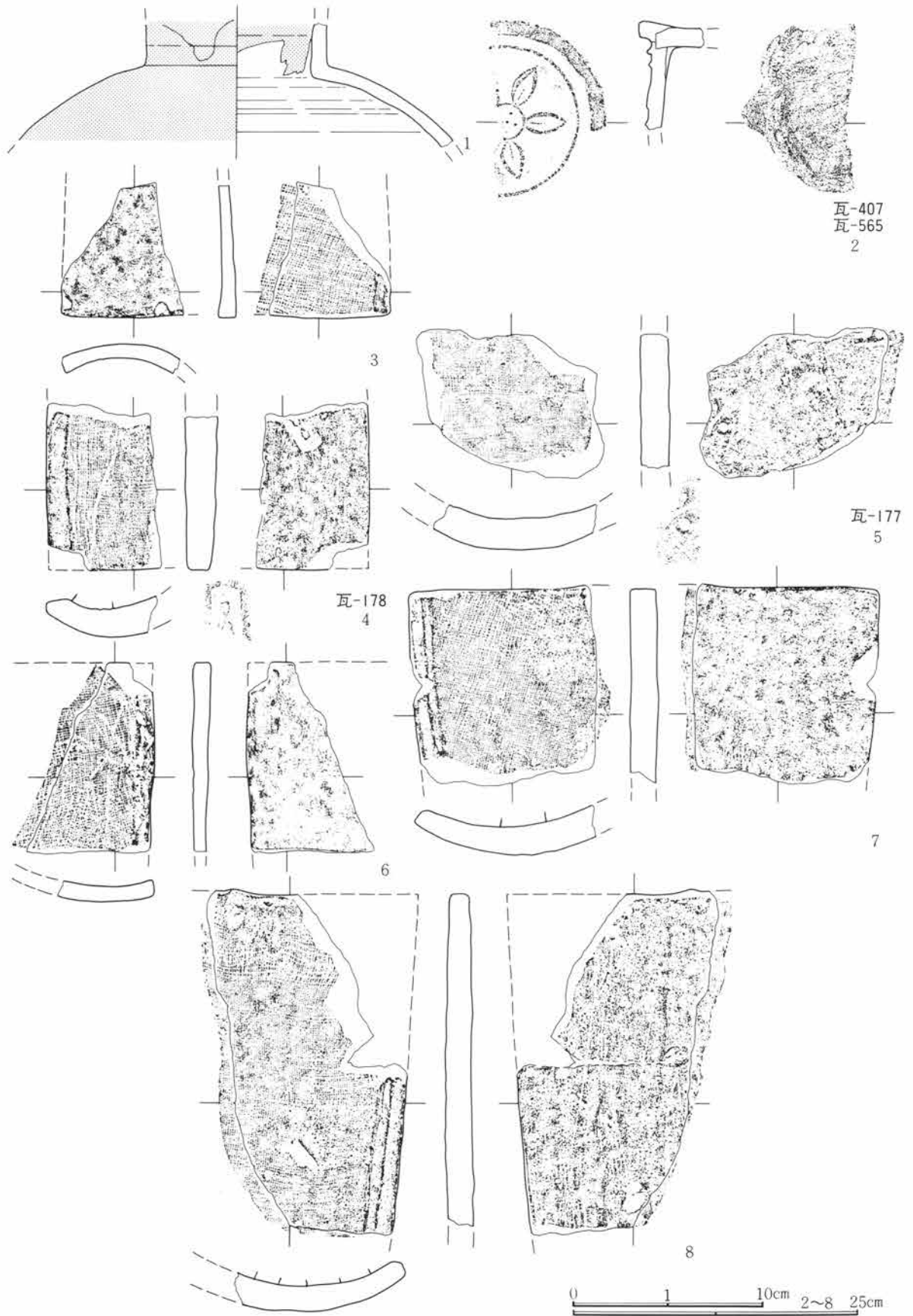
所見 当住居の西半分は調査外に延び、完掘出来なかった。

カマドは東壁中央より南東隅部寄りに具備し、傍竈坑を南東隅部直下に備えている。カマドは2回の改築が確認出来、改築毎にやや北側に移動している。構築頭初は、屋外への突出がやや少なく、1回目の改築時には屋外への突出を多くしている。第2回目の改築は、2期のカマドの左壁を利用している。住居全体の掘り方は、床面下20cm程に底面が在り平坦であった。住居の廃棄は、傍竈・カマド位置・出土遺物から、D区の住居分類の第II段階に比定出来ることから、10世紀前半と考えられる。

第114図 C区第49号住居跡・出土遺物実測図(1)

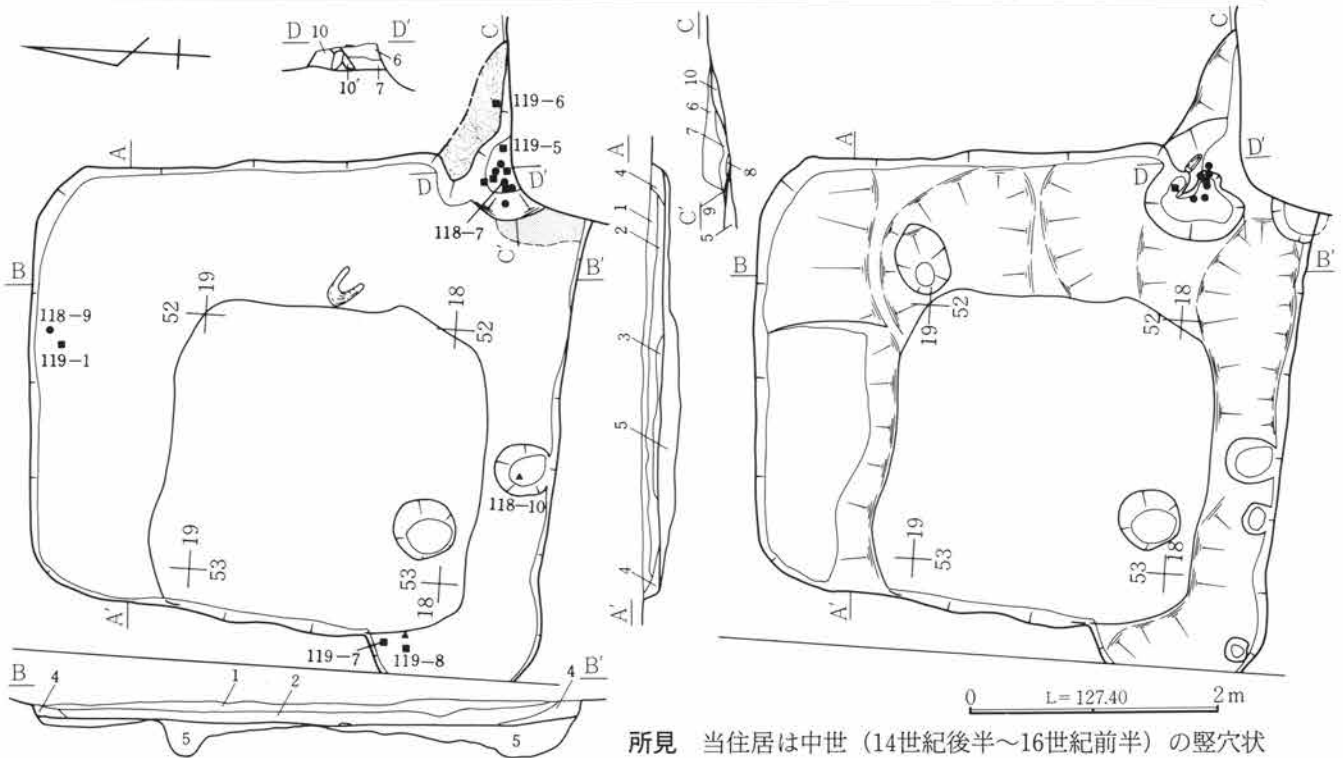


第115図 C区第49号住居跡出土遺物実測図(2)



第116図 C区第49号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	C区第50号住居跡		位置	17~19-C-51~53グリッド内。		残存深度	約18cm
平面形態	矩形。	規模	3.80m×4.50m	構築基準辺	北壁	主軸方位	北-86度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	ほぼ平坦か？			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	全体的に顕著で、東西方向に長い掘り込み状に認められる。北壁下では土坑状になる。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から10cm位か？			主軸方位	北-90度-南位か	
改築	有。左袖には改築以前の裾を残す。		形状	馬蹄形の燃焼部に細い溝状の煙道を備える。			
規模	全長140cm・屋外長 91cm・屋内長 49cm・袖部幅 ?cm・燃焼部幅 ?cm・煙道部幅 ?cm。						
焚口・燃焼部	扇状を呈する焚口部は、燃焼空間と重複する部分が著しく、燃焼部先端側に器設部分が考えられる。						
	袖	左袖のみ残存する。改築以前は礫を用い補強する。					
煙道	細い溝状と考えられる。		掘り方	左袖は若干の削出しが認められる。			
遺物出土状態	住居中央部やや東寄り、床面直上より「U」字状の鉄製鋏先が出土している。						



層序 C50住

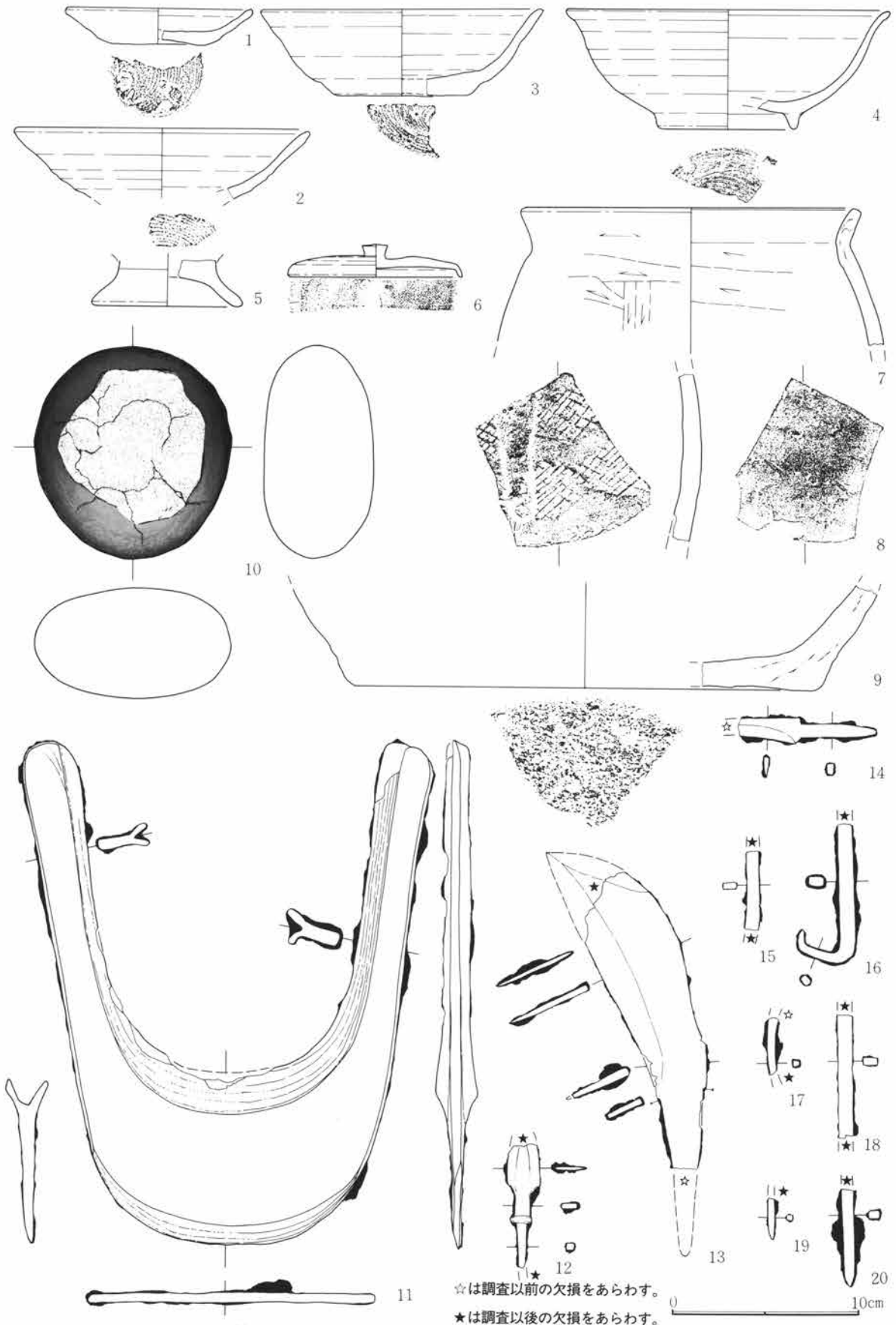
1. 粒状C軽石混入。 2. 細粒状C軽石若干・小塊状VII層土含有。 3. 微粒状C軽石含有。 4. 細粒状C軽石若干細粒状VII層土含有・灰含有。 5. 細粒状C軽石若干・塊状VII層土含有。 6. 1近質。 7. 細粒状C軽石含有・粒状焼土多量混入。 8. VII層土(塊状)。 9. 灰層(改築前)。 10. 粒状焼土含有・粒状炭化物若干(改築時貼土)。 10' 10' 近質であるが、粒状焼土の含有がやや少ない。

第117図 C区第50号住居跡実測図

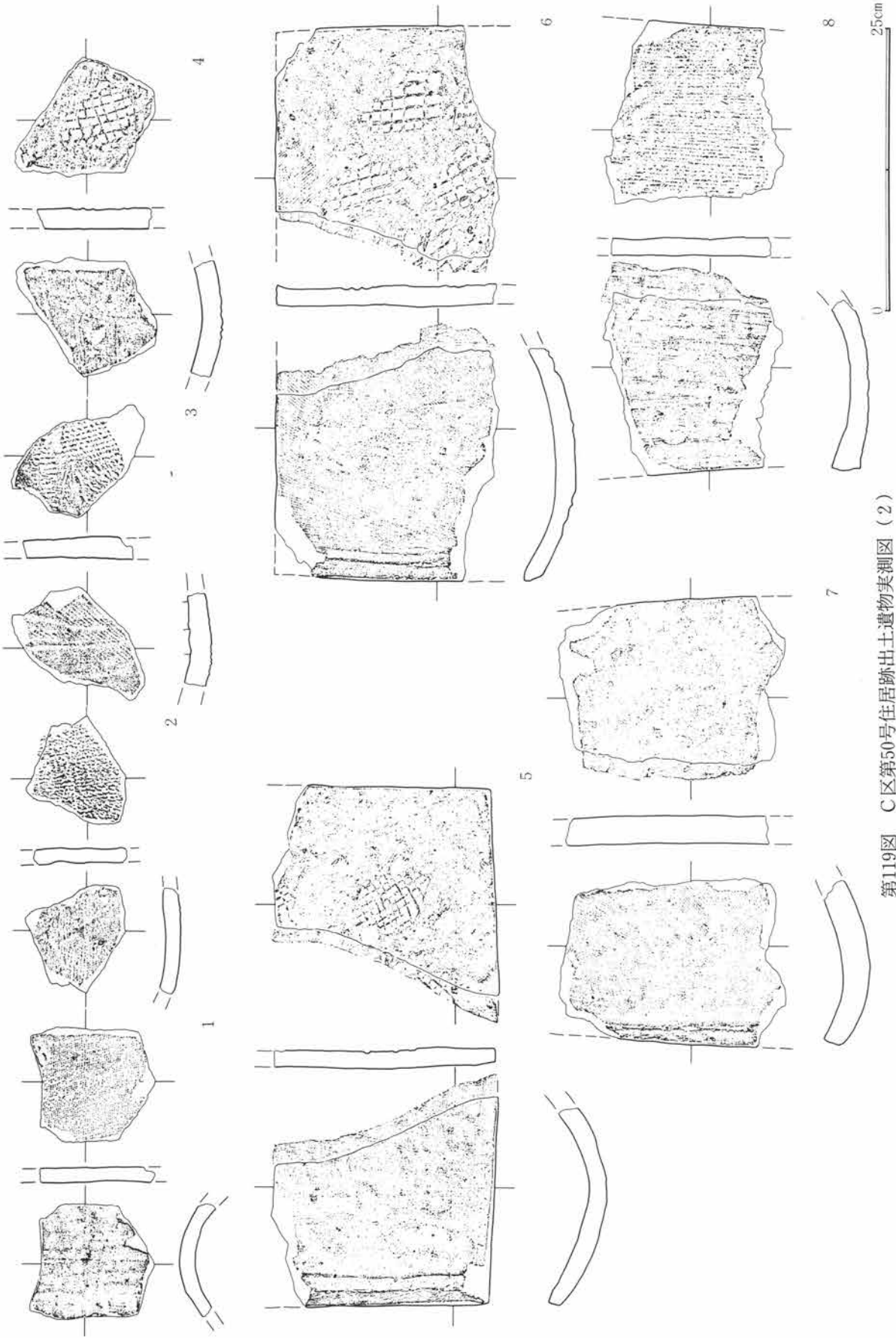
所見 当住居は中世(14世紀後半~16世紀前半)の竪穴状遺構が住居中央部を破壊し構築し、カマド部分も中世竪穴状遺構が破壊している。住居は横長方形を呈し、カマドは南東隅部から若干北寄りに具備しており、カマド形状は、D区の住居分類の第III段階以降の特徴が認められる。一方、住居形状は、D区の住居分類の第III乃至V段階の様相に対比出来る。出土遺物の様相では、「ホ」段階の様相が認めら

れる。この両者の点を勘案すれば、住居第V段階の様相と考えられる。掘り方では、南東隅部には傍竈坑状の掘り込みが認められる。このことから、11世紀前半代の存続は考えられる。

第4章 検出された遺構・遺物



第118図 C区第50号住居跡出土遺物実測図(1)

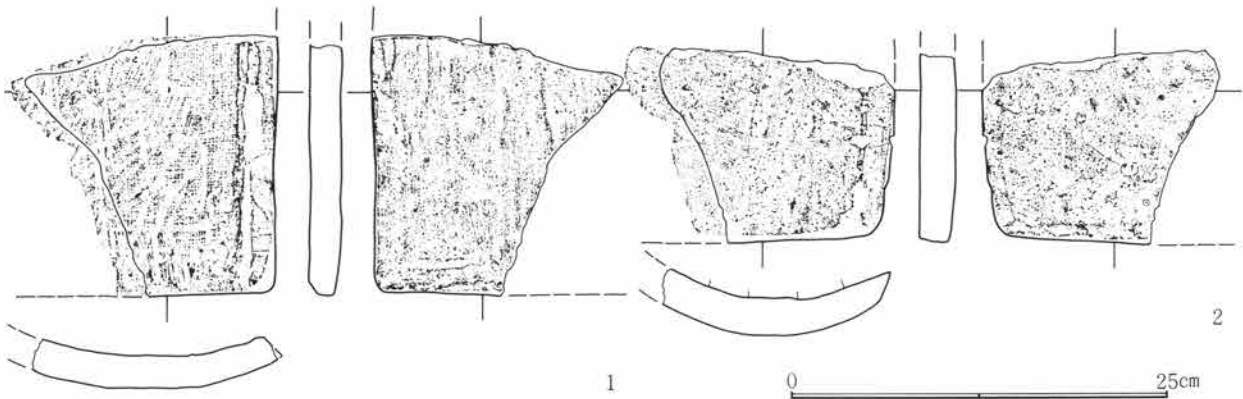


第119図 C区第50号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	C区第51号住居跡	位置	17・18-C-50・51グリッド内。	残存深度	約25cm
遺物出土状態	カマドは改築が認められる。C1号址・C50号住の破壊により詳細不詳。				

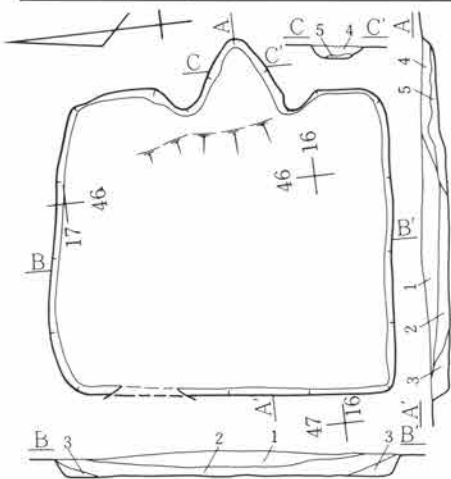


第120図 C区第51号住居跡・出土遺物実測図(1)

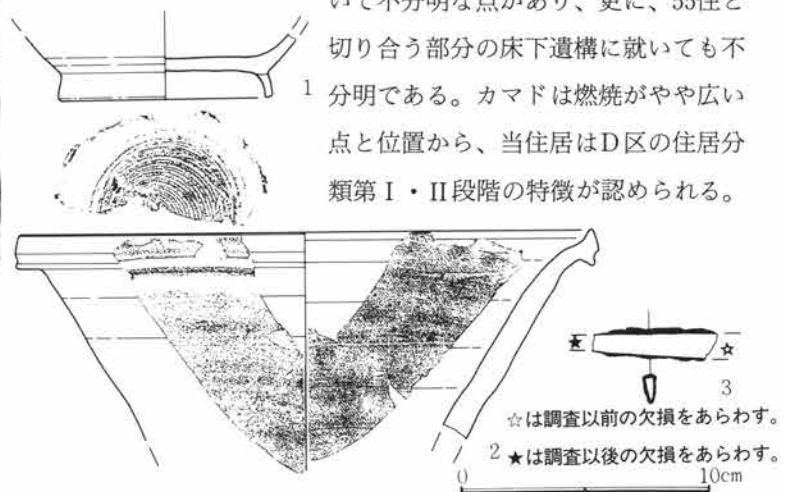


第121図 C区第51号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	C区第53号住居跡		位置	15~17-C-45・46グリッド内。		残存深度	約21cm
平面形態	矩形。	規模	2.44m×2.74m	構築基準辺	西乃至南壁	主軸方位	北-95度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦。造床無し。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無。床面にセクションベルトを設定し掘り下げを行なったが、小さい穴状のものが部分的に認められた。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から55cm。			主軸方位	北-92度-南	
改築	無。使用面は、掘り方で同一であった。			形状	舌状を呈する(逆「V」字状)。		
規模	全長 61cm・屋外長 40cm・屋内長 21cm・袖部幅136cm・燃烧部幅 52cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
	袖	左右共に削り出し、補強材等を用いず構築している。					
煙道	未検出。		掘り方	未検出。使用面自体が掘り方面。			
遺物出土状態	覆土内から微量の出土があったのみである。						



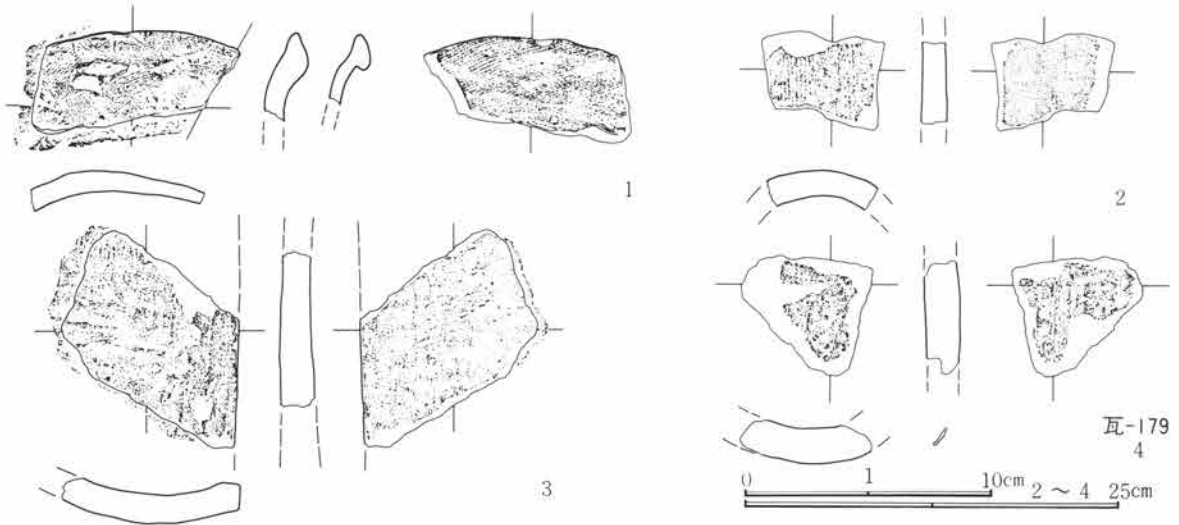
所見 当住居は55住を切り構築している。住居は矩形状を呈しカマドを東壁ほぼ中央に備えるが、全体に遺存が良好でない為詳細に就いて不明な点があり、更に、55住と切り合う部分の床下遺構に就いても不明である。カマドは燃烧がやや広い点と位置から、当住居はD区の住居分類第I・II段階の特徴が認められる。



- 層序 C53住
1. 粒状C軽石混入。 2. 細粒状C軽石少量。
 3. 微粒状C軽石若干・塊状VII層土含有。
 4. " 含有・粒状焼土含有。 5. 微粒状C軽石若干・粗粒状VII層土含有・粒状焼土・炭化物含有。
- 0 L=127.70 2m

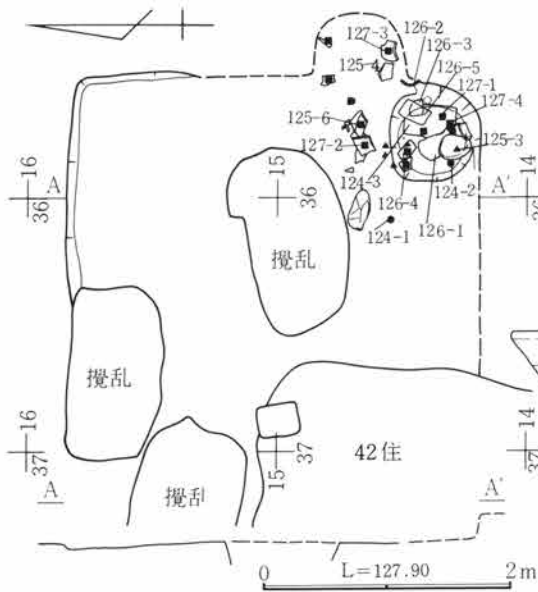
第122図 C区第53号住居跡・出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物



第123図 C区第53号住居跡出土遺物実測図(2)

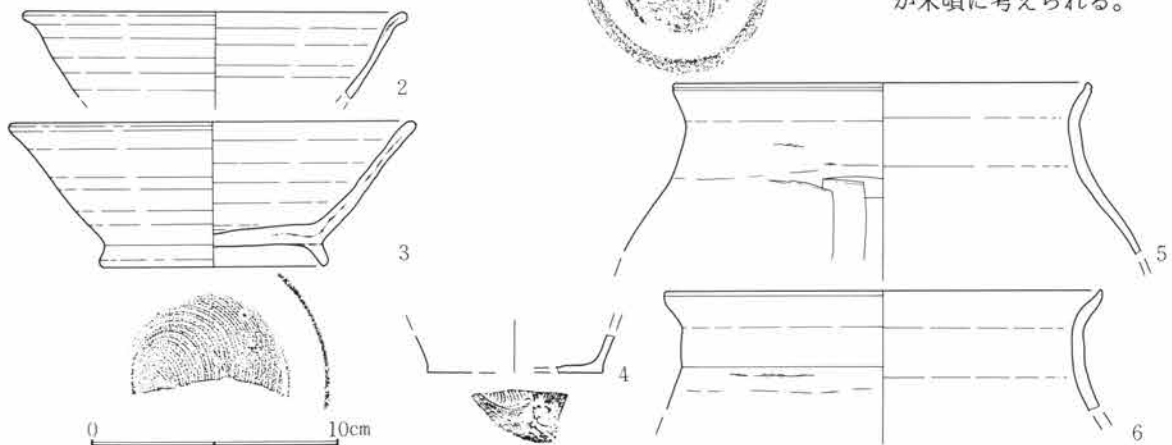
遺構名称	C区第54号住居跡	位置	14・15-C-35~36グリッド内。	残存深度	約5cm
遺物出土状態	調査自体の下手際・42号住・攪乱の破壊により詳細不詳。				



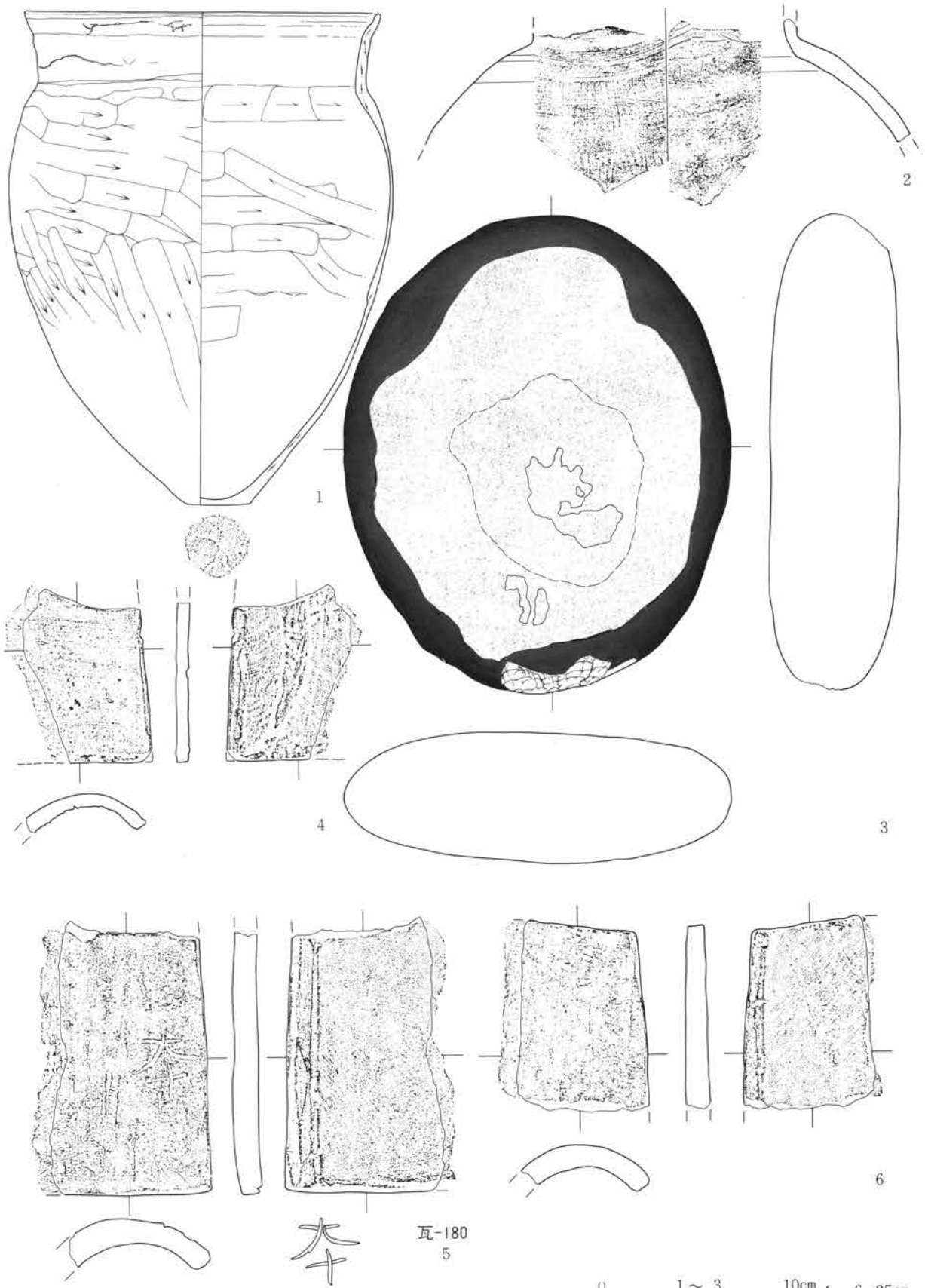
所見 当住居は、攪乱土坑・中世（14世紀後半～16世紀前半）の小遺構・中世以降の攪乱が著しく遺存状態は非常に悪かった。更に調査の下手際もあり、收拾のつかない状態にさせた部分もある。

住居は、正方形形状乃至縦長形状を呈すると考えられる。カマドは東壁中央より南東隅部に寄った位置で、南東隅部

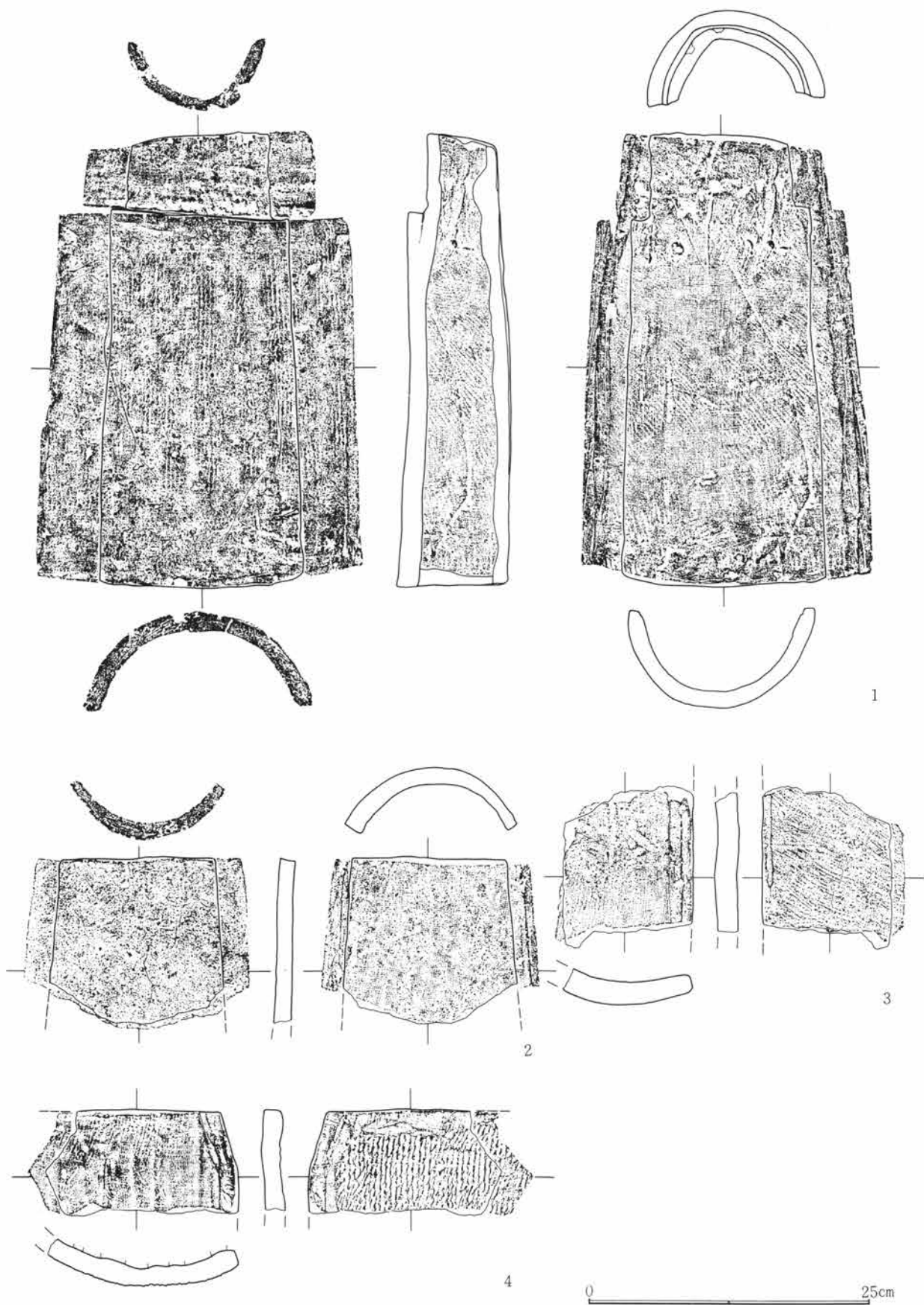
には傍竈坑を備える。この傍竈坑内からは完形の女瓦等の出土がある。住居の廃棄時期は、住居形状・遺物様相がD区第I段階に疑せられることから、9世紀後半か末頃に考えられる。



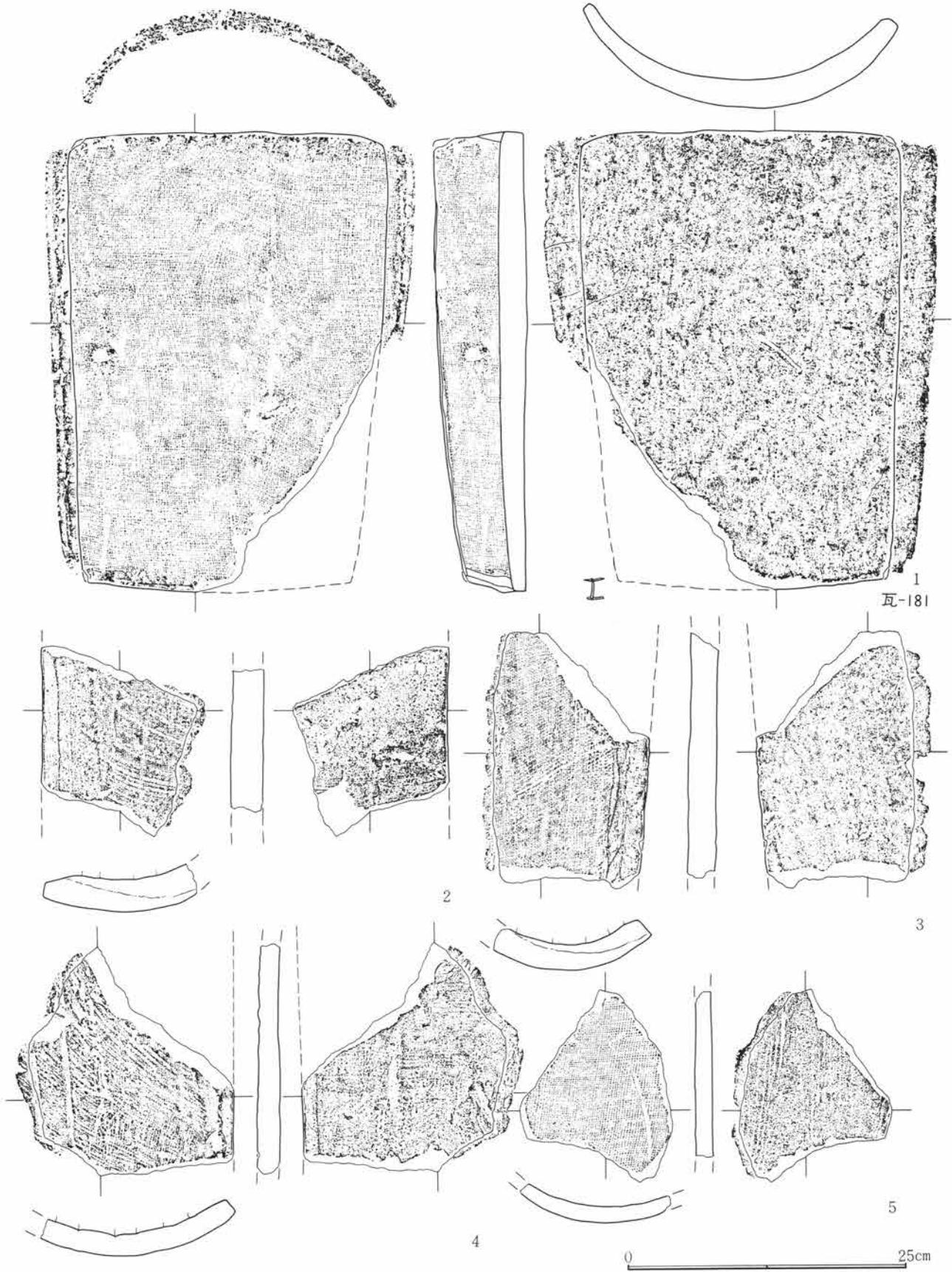
第124図 C区第54号住居跡・出土遺物実測図(1)



第125図 C区第54号住居跡出土遺物実測図(2)

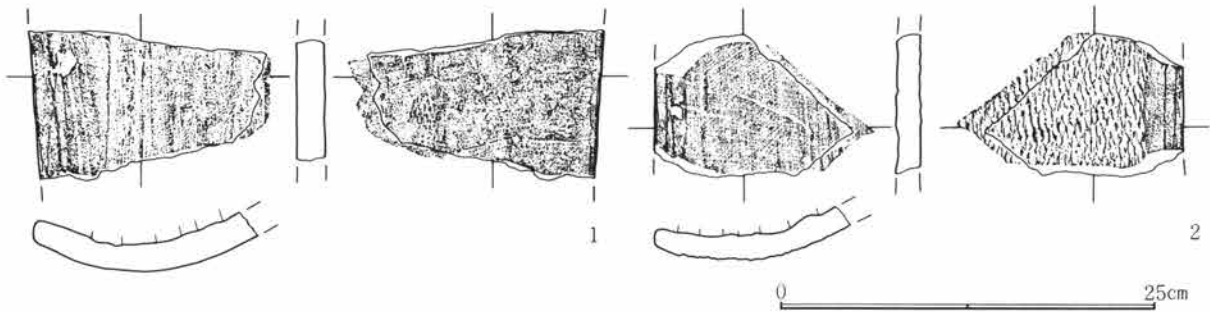


第126図 C区第54号住居跡出土遺物実測図(3)



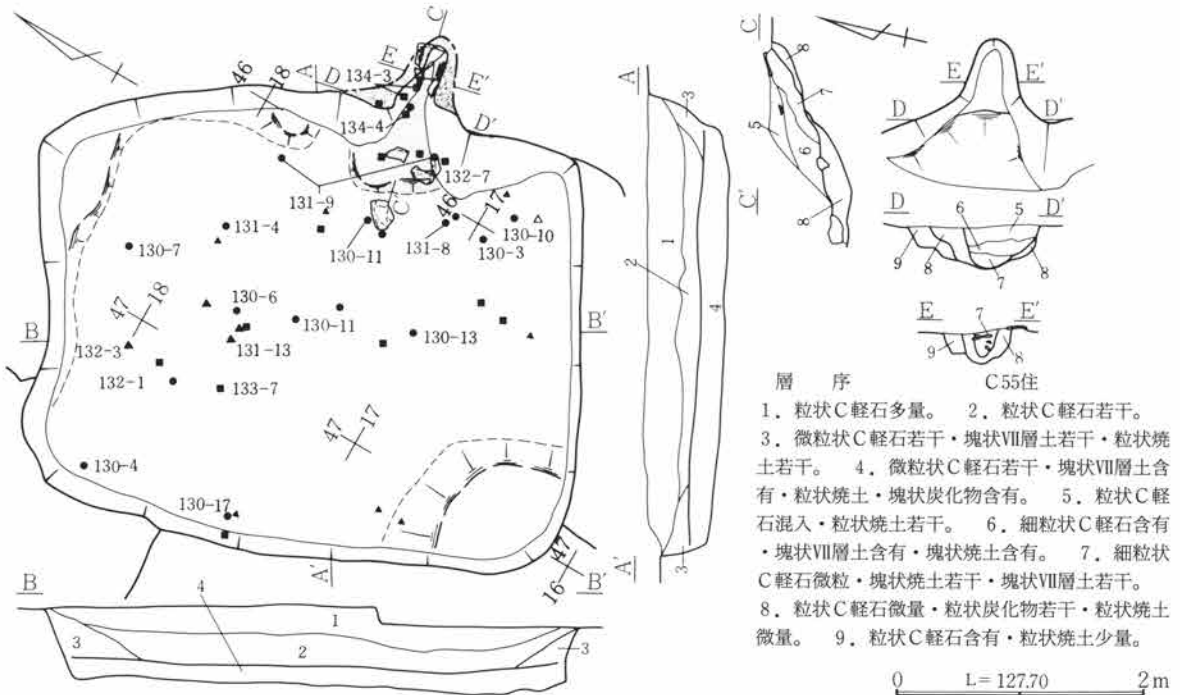
第127図 C区第54号住居跡出土遺物実測図(4)

第4章 検出された遺構・遺物



第128図 C区第54号住居跡出土遺物実測図(5)

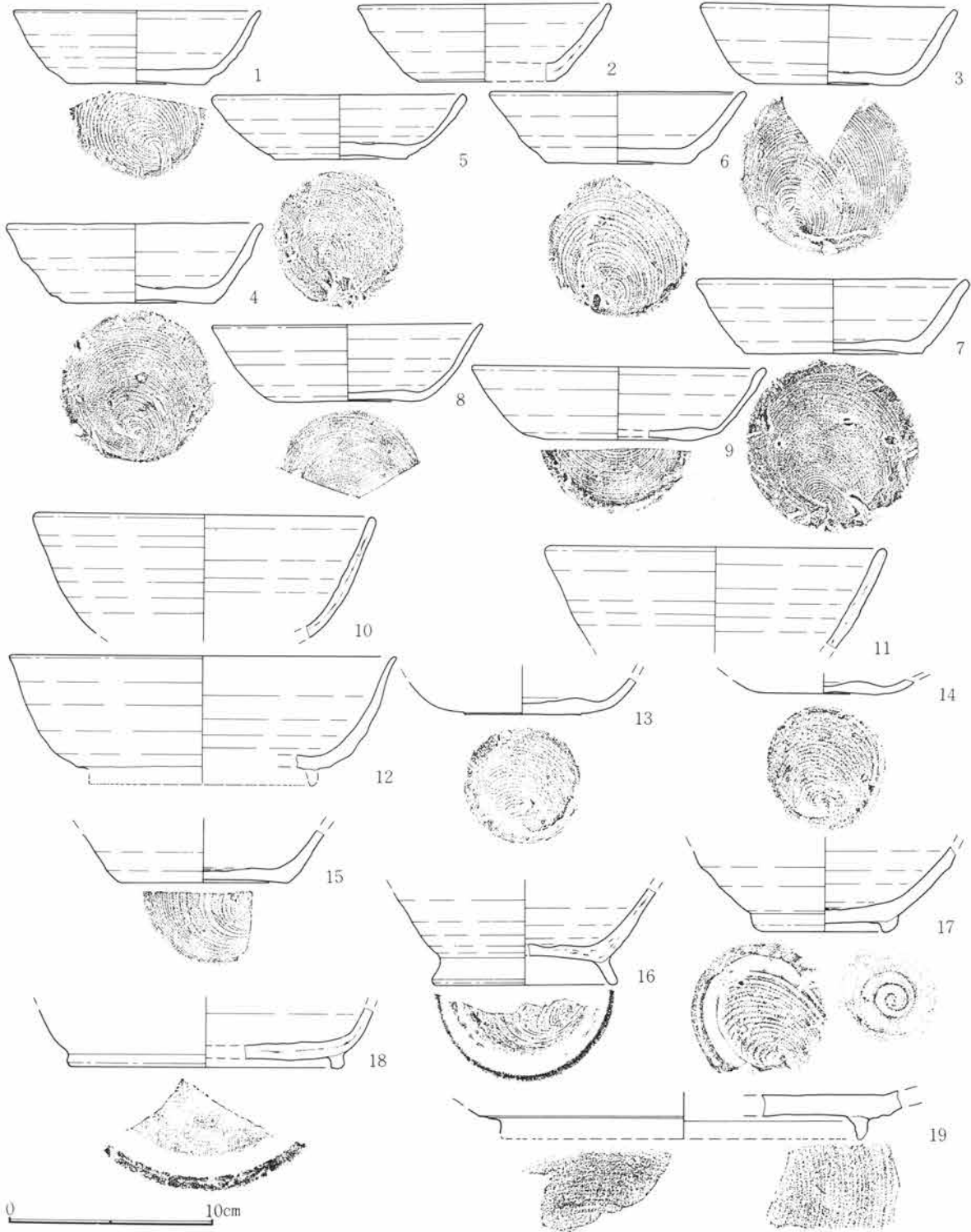
遺構名称	C区第55号住居跡		位置	16~18-C-45~47グリッド内。		残存深度	約42cm
平面形態	横長方形。	規模	3.72m×4.27m	構築基準辺	南壁	主軸方位	北-59度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	明らかな床面は検出出来ず、調査時に掘り方底面まで調査。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出、傍竈坑は存在した可能性が大きい。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	南西・北東隅が住居内に突入した状態で地山VII層土を削り出している。この上面が生活面。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から54cm。			主軸方位	北-77度-南	
改築	有。掘り方では改修以前が確認出来る。			形状	逆「Y」字状の如くの形状を呈し類例が少ない。		
規模	全長102cm・屋外長 54cm・屋内長 48cm・袖部幅210cm・燃烧部幅 70cm・煙道部幅 16cm。						
焚口・燃烧部	逆扇状を呈し、焚口部・燃烧空間は重複する部分が著しい、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。			袖	非常に大きい、礫・瓦等による補強材は認められなかった。		
煙道	先端部には、女瓦による天井部が残存する。		掘り方	燃烧部直下の掘り込みは改築以前のもの。			
遺物出土状態	全体的に掘り方底面に近い部分での出土が多い。						



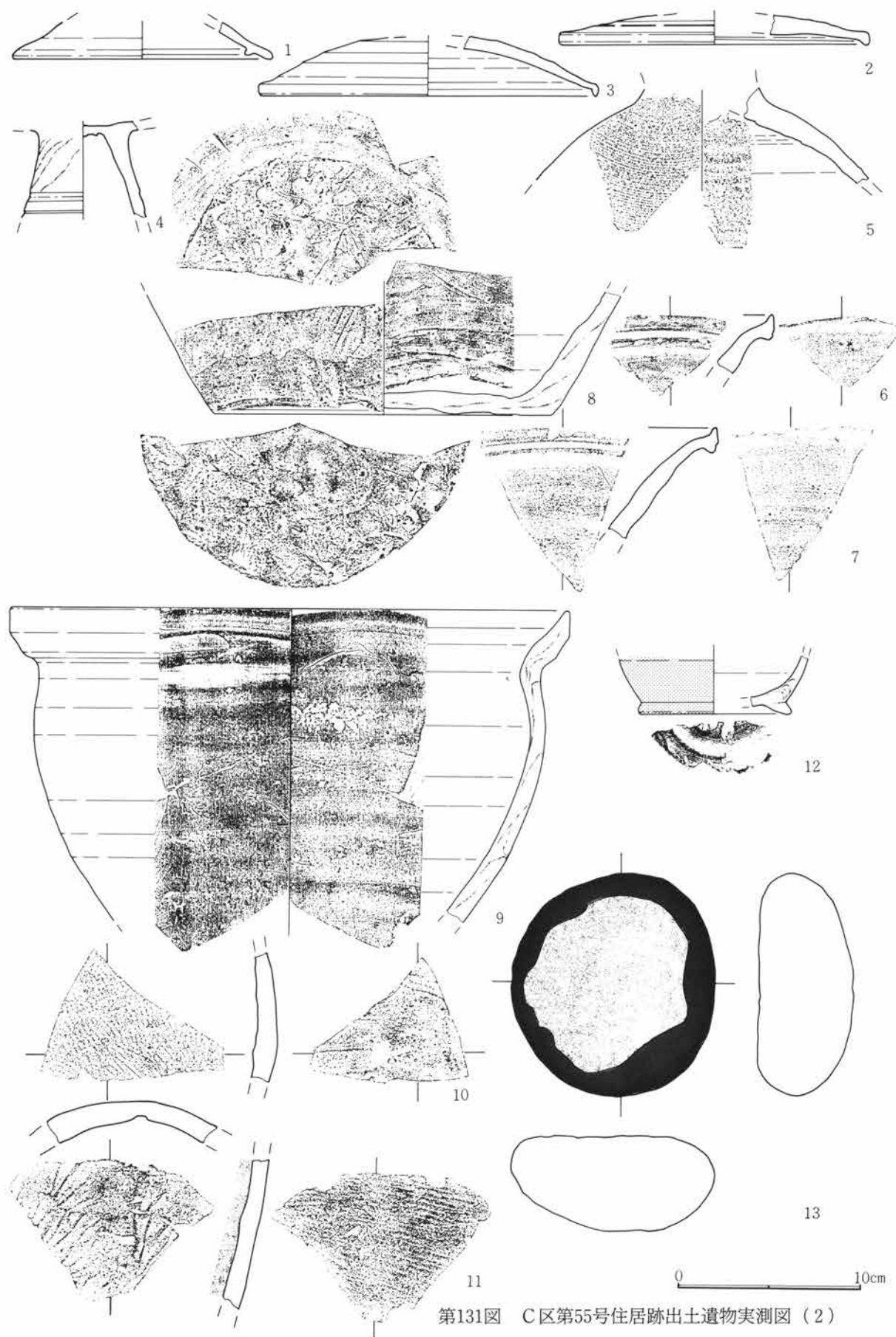
第129図 C区第55号住居跡実測図

所見 当住居は53住に切られている。住居は、調査段階で床面の露呈を行わず掘り方を露呈させた。この為傍竈等の施設は検出出来なかった。

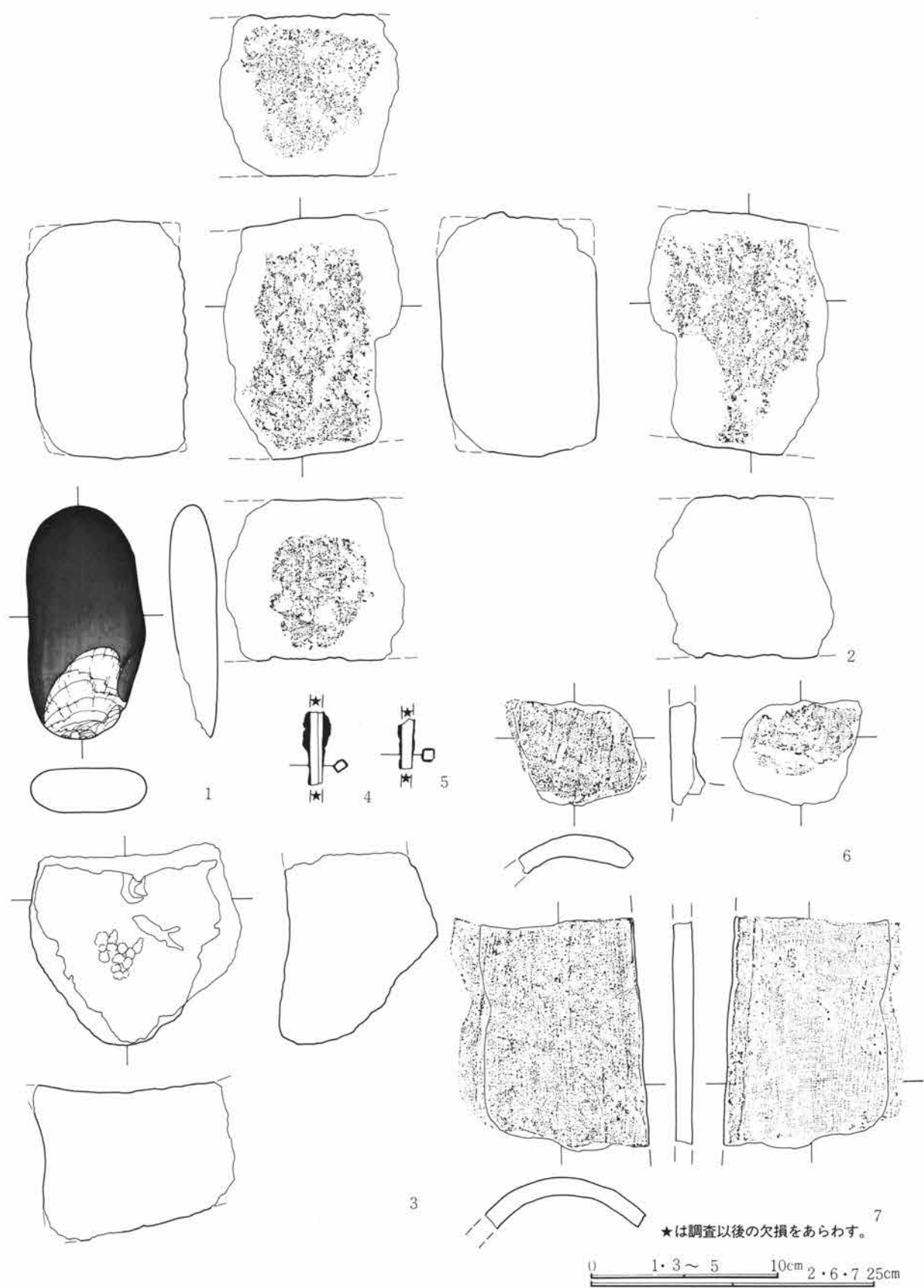
住居は東壁中央より南東隅部に寄った位置にカマドを具備する大型の住居である。カマドは屋外に細目に煙道部が突出する。袖幅は広く堅固な状態である。住居の廃棄時期は、出土遺物ではD区の第I段階の組成より古式の様相が認められることから、9世紀中頃と考えられる。



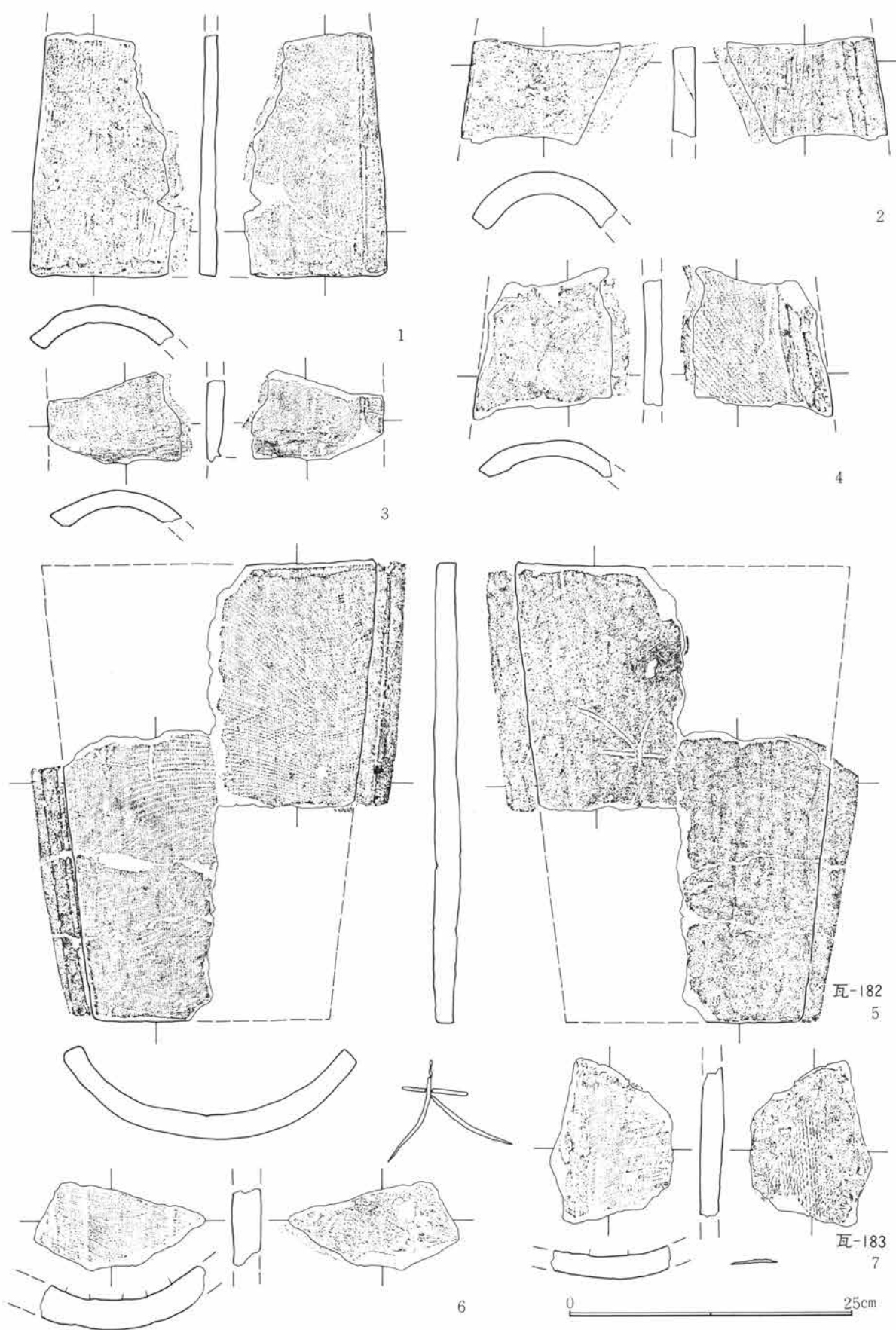
第130図 C区第55号住居跡出土遺物実測図(1)



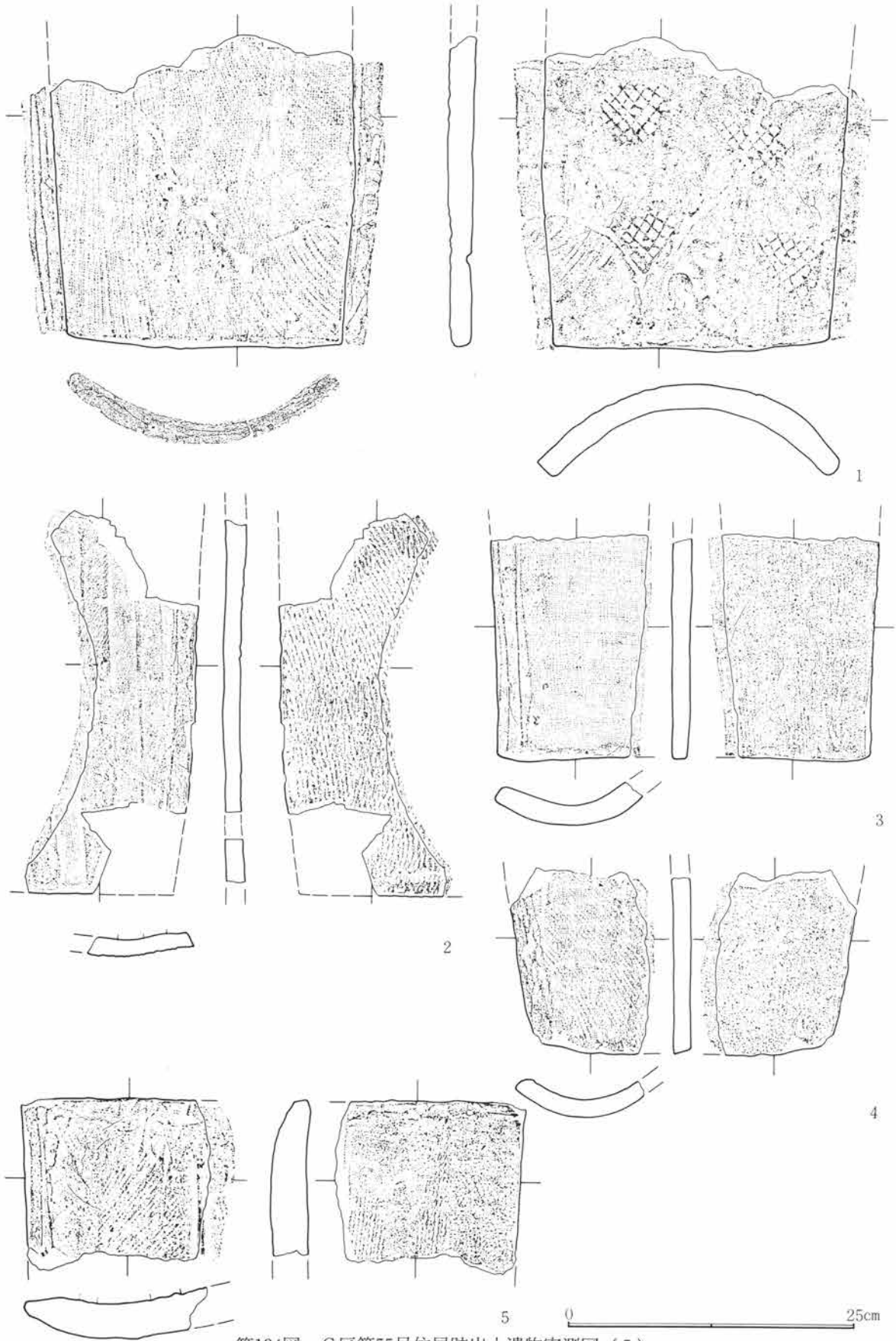
第131図 C区第55号住居跡出土遺物実測図(2)



第132図 C区第55号住居跡出土遺物実測図(3)

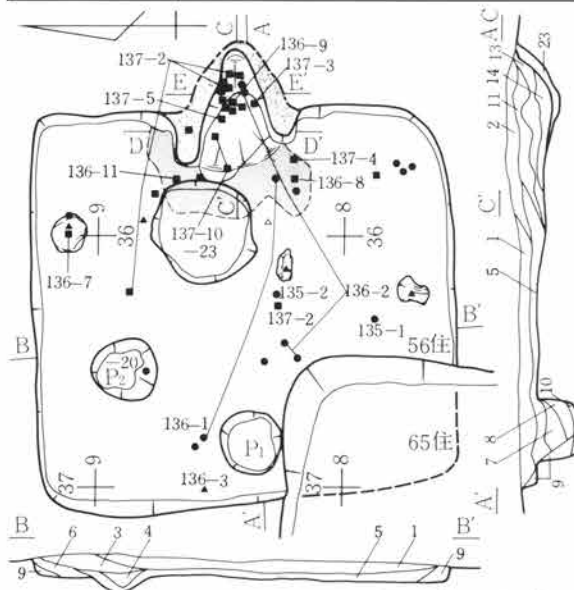


第133図 C区第55号住居跡出土遺物実測図(4)



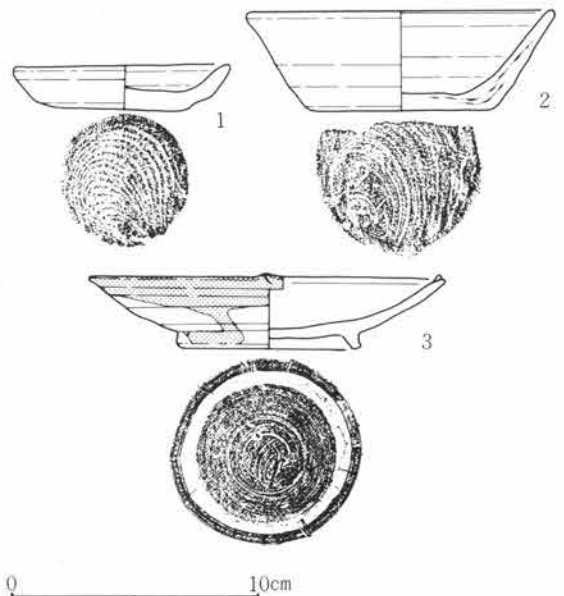
第134図 C区第55号住居跡出土遺物実測図(5)

遺構名称	C区第56号住居跡		位置	7～9-C-35～37グリッド内。		残存深度	約34cm
平面形態	正方形。	規模	3.23m×3.5m	構築基準辺	北壁	主軸方位	北-88度-南
壁	やや斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦。部分的に薄い貼床が有る。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P ₁ ・P ₂ 。不整円形。P ₁ 47×50cm・深度-30cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	部分的貼床をする程度で、ほぼ認められないに近い。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から80cm。				主軸方位	北-90度-南
改築	有。掘り方で、補強材の据え方を検出。						
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	舌状を呈し、細い煙道が具備する。			
規模	全長 94cm・屋外長 48cm・屋内長 46cm・袖部幅120cm・燃烧部幅 55cm・煙道部幅 25cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
煙道	細く、斜位に立ち上がる。		掘り方	補強材ピットの位置から改築時に右寄りに移動。			
遺物出土状態	住居内に散在するが、東側に床面直上層のものが多。						

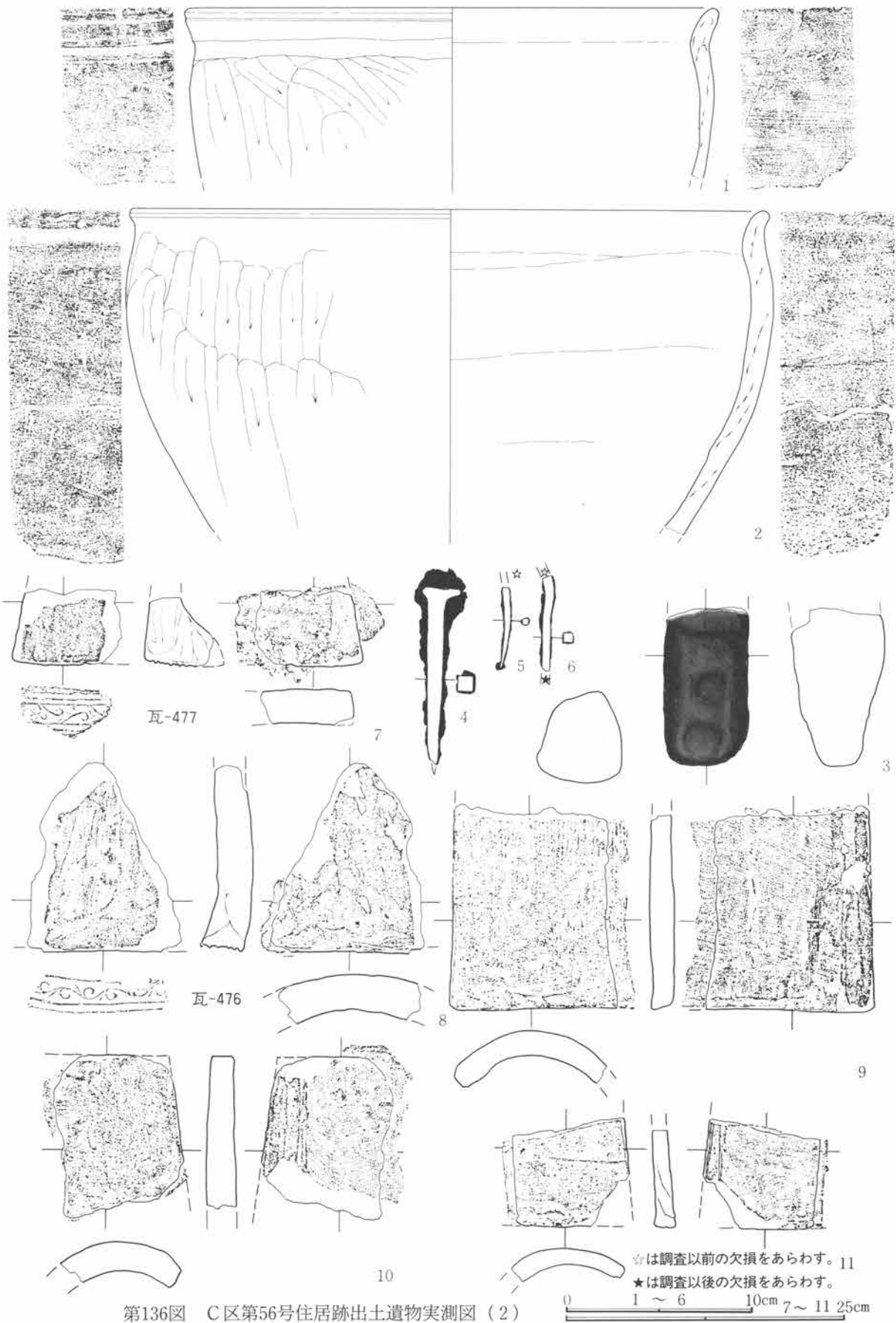


所見 当住居は63・64号住を切り65住に切られている。住居は正方形を呈し東壁中央にカマドを具備する。傍竈は認められず、P₁が西壁中央直で検出され貯蔵穴と考えられる。又、P₂・P₃は床面下で掘り方で検出された。この住居形状は前出の53住に類似し、D区の住居分類には該当するものが認められない。一方、出土遺物ではD区の第Ⅳ・Ⅴ段の様相が認められる。この点では、当該住居は11世紀前半以降に廃棄が考えられる。そして、当住居の如く、D区では認められなかった様相が存在する。

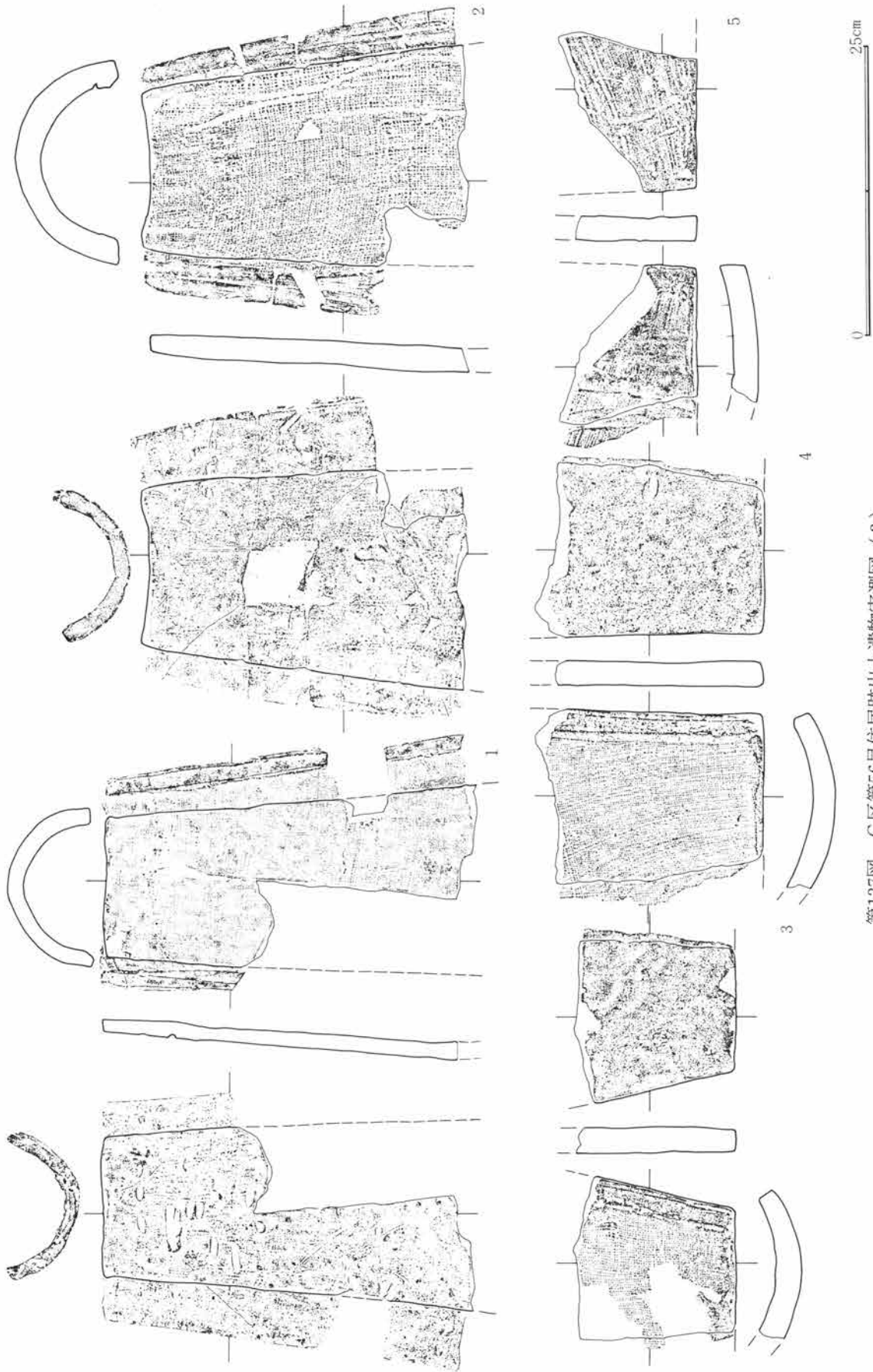
- 層序 C56住
1. 粒状C軽石多量・塊状Ⅶ層土微量。
 2. // 粒状焼土少量。
 3. // 混入・粒状・塊状Ⅶ層土多量。
 4. 粒状C軽石混入・粒状Ⅶ層土若干。
 5. 粒状C軽石含有。
 6. 3近質。
 7. 粒状C軽石混入・粒状Ⅶ層土微量。
 8. 細粒状C軽石微量。
 9. 細粒状C軽石微量・塊状Ⅶ層土多量。
 10. 9近質。
 11. 粒状C軽石含有・粒状焼土含有。
 12. 細粒状C軽石少量・塊状焼土少量。
 13. 灰白色粘土層(塊状焼土含有)。
 14. 塊状焼土・塊状Ⅶ層土の混土層。
 15. 灰白色粘土。
 16. 粒状C軽石若干・粒状焼土・塊状灰白色粘土混入。
 17. 灰白色粒土層。
 18. 濁淡黄褐色粘性土。
 19. 17同質。
 20. 14近質。
 21. 18近質(塊状Ⅶ層土含有)。
 22. 粒状C軽石微量・粒状焼土・粒状炭化物含有。



第135図 C区第56号住居跡・出土遺物実測図(1)

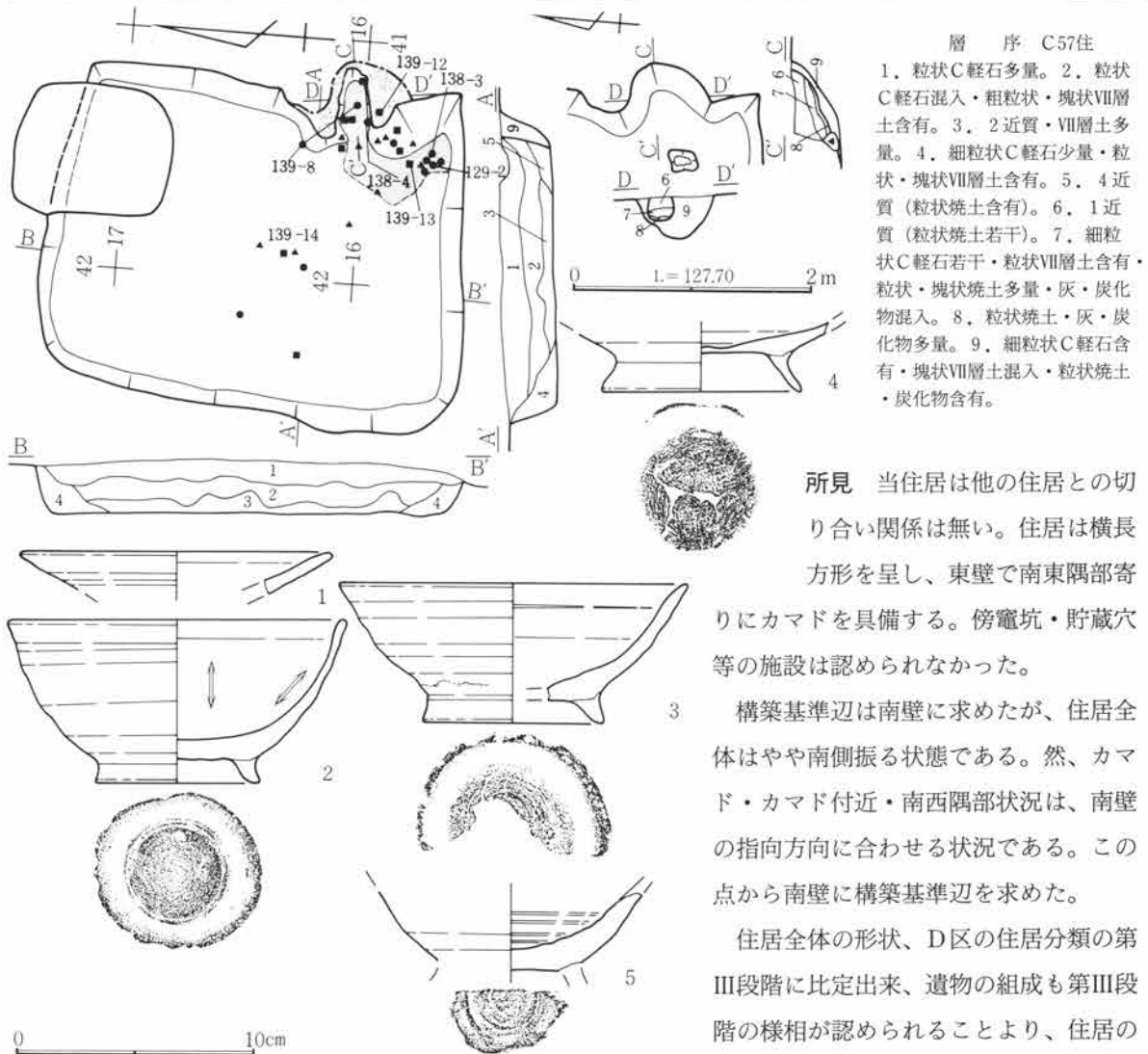


第136図 C区第56号住居跡出土遺物実測図(2)

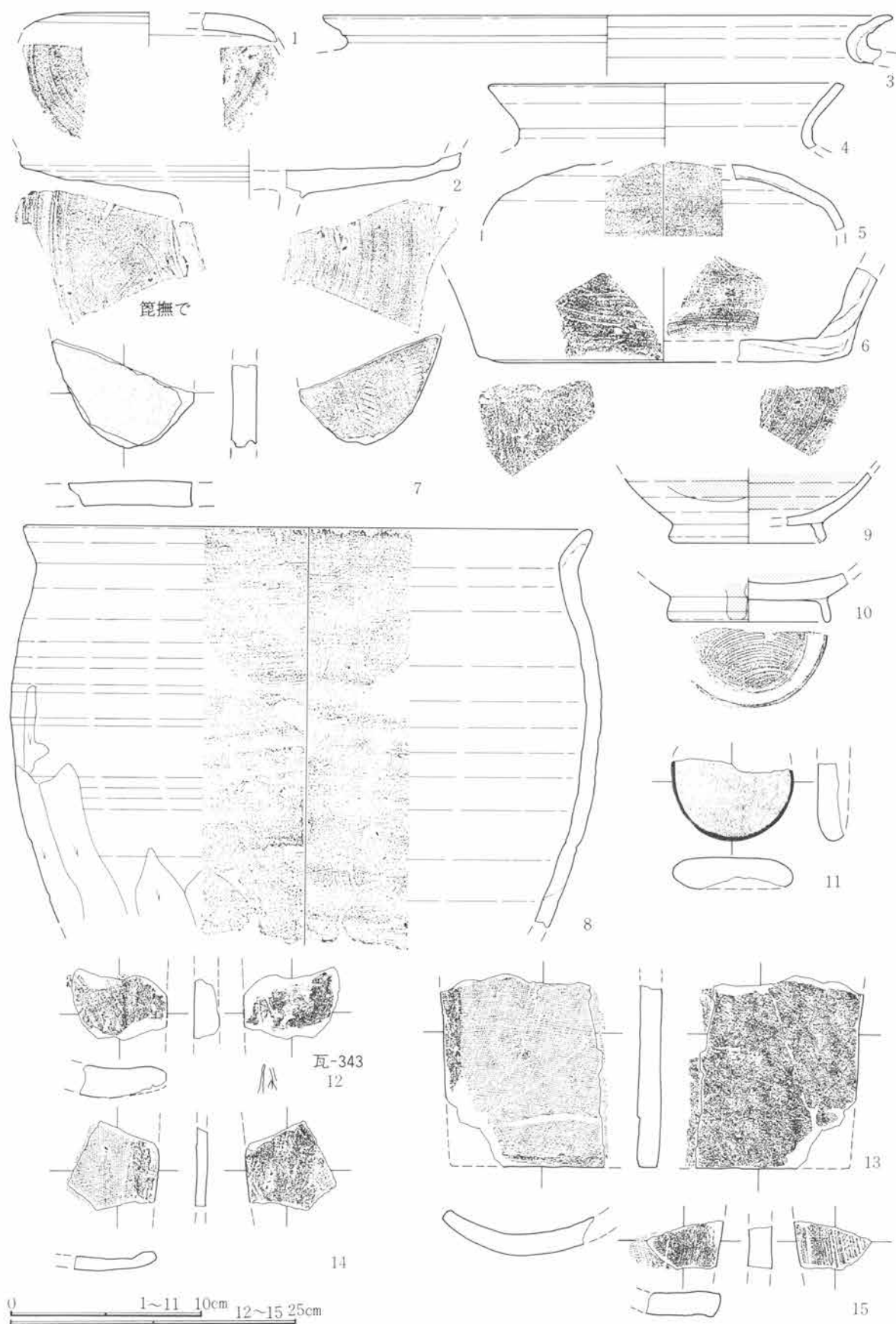


第137図 C区第56号住居跡出土遺物実測図(3)

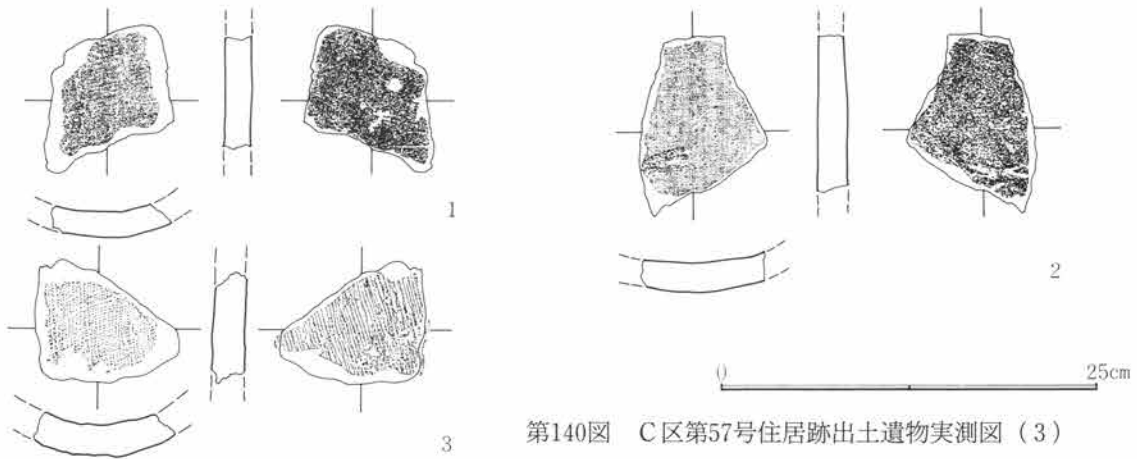
遺構名称	C区第57号住居跡		位置	15~17-C-41・42グリッド内。		残存深度	約43cm
平面形態	横長方形。	規模	2.75m×3.47m	構築基準辺	南壁	主軸方位	北-88度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦。地山VII層土を使用する。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	なし。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から10cm。				主軸方位	北-82度-南
改築	有。掘り方内に焼土を検出。			形状			
規模	全長 68cm・屋外長 20cm・屋内長 48cm・袖部幅130cm・燃烧部幅 24cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。補強材は未検出。						
	袖	堅固な状態で大きく、右袖下端は住居隅部に達している。					
煙道	立ち上がり部のみ検出。詳細不分明。			掘り方	瘤状に地山を削り出している。		
遺物出土状態	住居中央部で床面直上層から若干出土があり、他は南東隅部に集中する。						



第138図 C区第57号住居跡・出土遺物実測図(1)

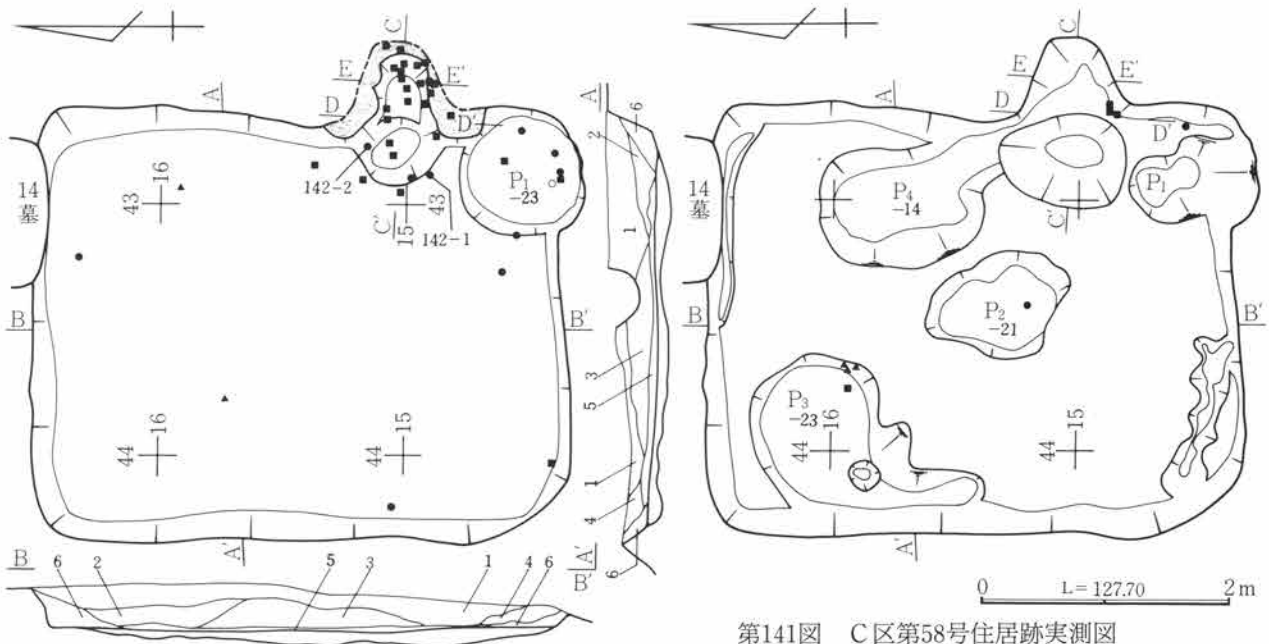


第139図 C区第57号住居跡出土遺物実測図(2)



第140図 C区第57号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	C区第58号住居跡			位置	14~16-C-42~44グリッド内。		残存深度	約43cm
平面形態	横長方形。	規模	3.47m×4.30m	構築基準辺	西乃至北壁	主軸方位	北-92度-南	
壁	斜位に立ち上がる。			床面	平坦。全体的に造床が認められる。			
壁溝	未検出。			傍竈坑・貯蔵穴	不分明。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	全体的に浅いが、部分的に土坑状のものが認められる。							
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から40~60cm。				主軸方位	北-94度-南	
改築	有。改築以前の燃焼部補強材(瓦)が残存。			形状	長方形指向の舌状を呈する。			
規模	全長114cm・屋外長 64cm・屋内長 50cm・袖部幅155cm・燃焼部幅 42cm。							
焚口・燃焼部	扇状を呈する焚口部は、燃焼空間と重複する部分が著しく、燃焼部中央に器設部分が考えられる。奥側天井は瓦を用いる。			袖	瘤状に近く、燃焼部が瓦を多用するが、瓦は一部に用いる。			
煙道	奥壁立ち上がり部のみ検出。			掘り方	焚口部直下に土坑状の掘り方が検出されている。			
遺物出土状態	カマド、南東隅部でやや多く検出されている。							



第141図 C区第58号住居跡実測図

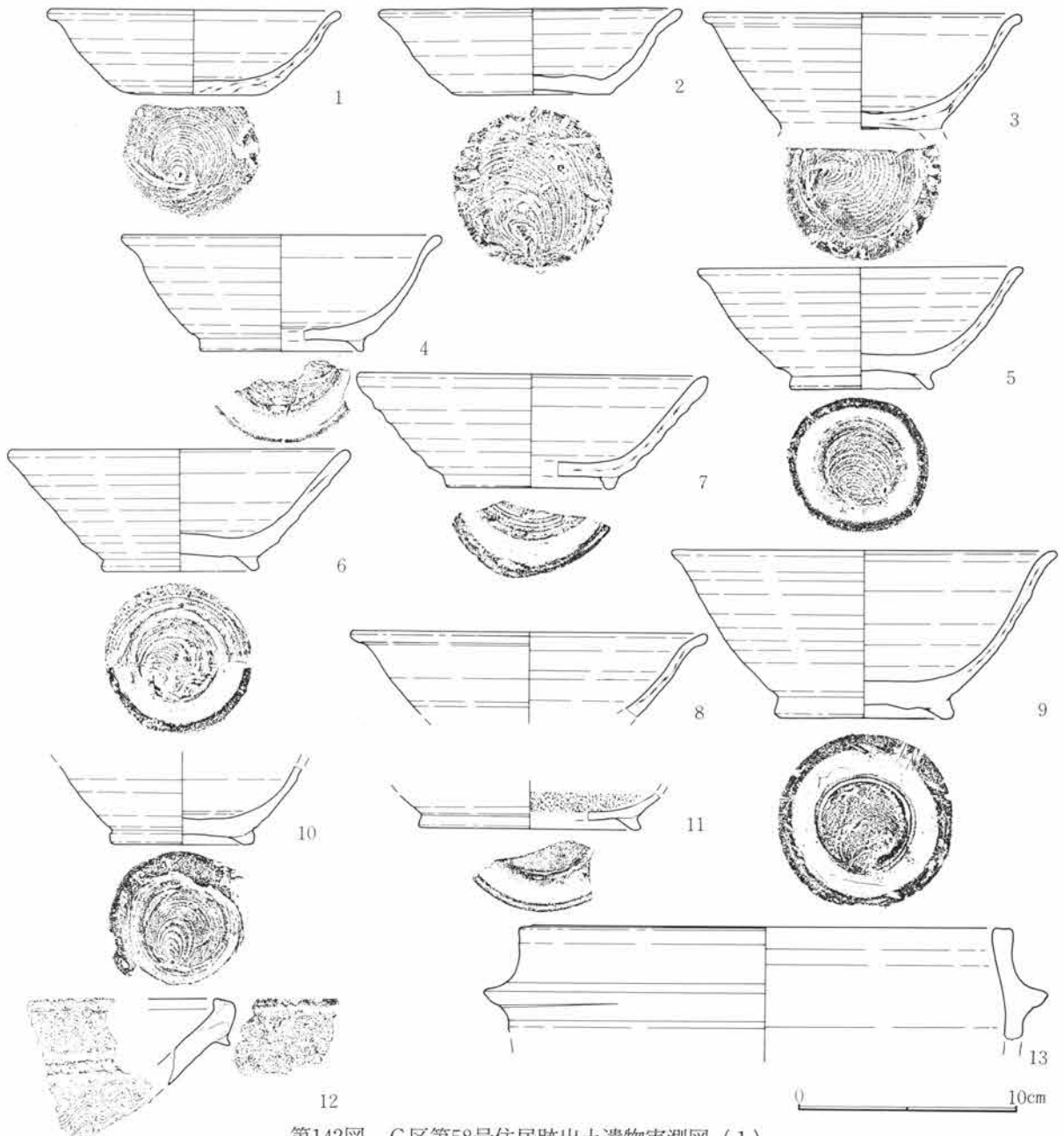
第4章 検出された遺構・遺物

層序 C58住

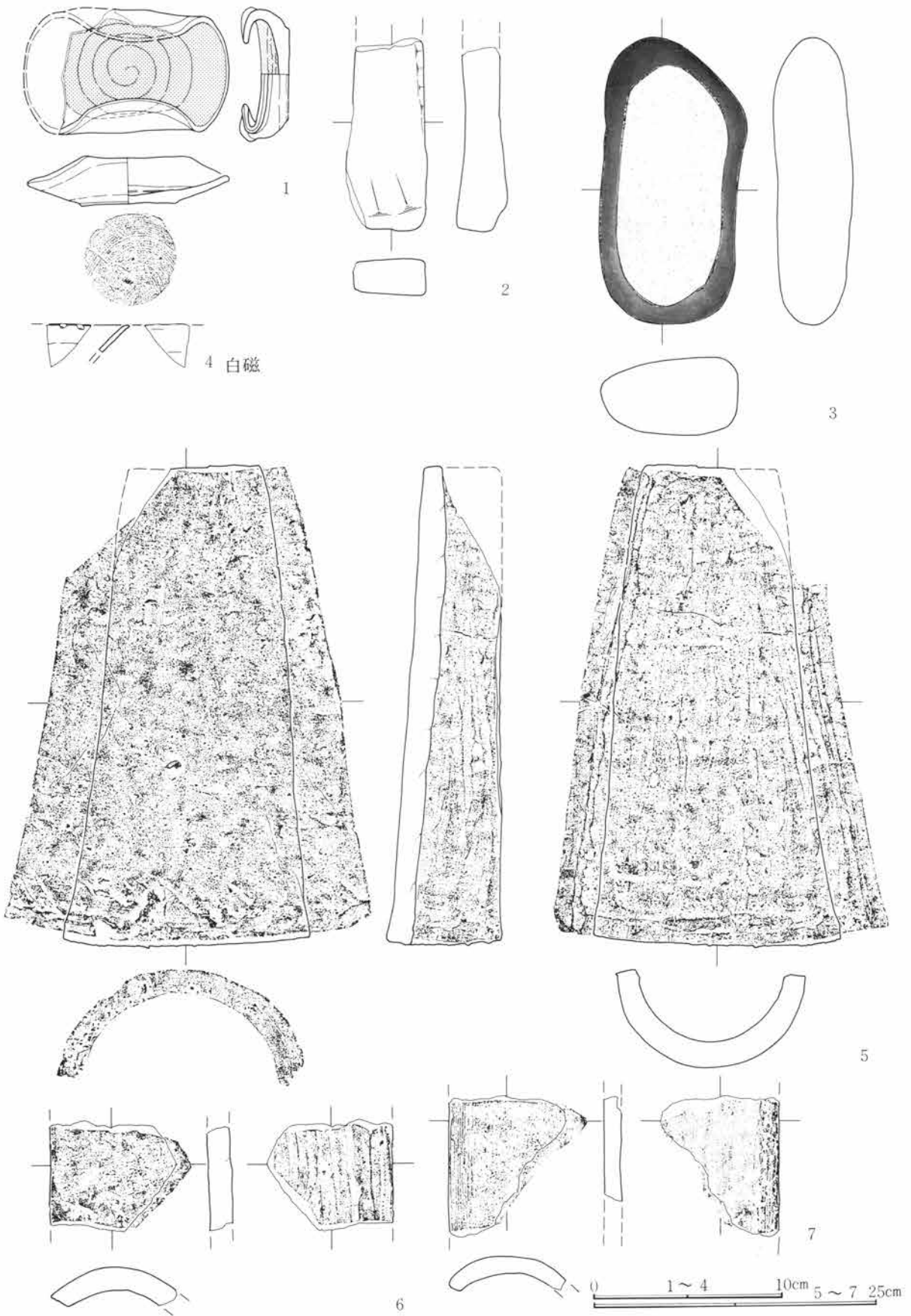
1. 粒状C軽石多量。
2. 粒状C軽石若干。
3. 粒状C軽石混入・塊状VII層土斑状混入。
4. 粒状C軽石混入・粒状VII層土多量。
5. 細粒状C軽石若干(硬質気味)。
6. 微粒状C軽石若干・粒状VII層土多量。
7. 粒状C軽石含有・粒状VII層土含有。
8. 粒状C軽石含有・粒状焼土含有。
9. 灰・炭化物。
10. 細粒状C軽石若干・塊状焼土・粒状焼土多量。

所見 当住居は横長方形の大型住居で、東壁の南東隅寄りにカマドを具備し、南東隅部には屋外に突出する状態で傍竈坑を備えている。この傍竈坑の南端は73住に切られている。掘り方は、床面下15cm程に底面が検出され、部分的に土坑状の掘り込みが検出されている。又北壁東半部及び南壁西半部には壁溝状の掘り込みが認められた。この掘り込みは前刊書中で述べたとおり住居の構築に伴うものと判断される。

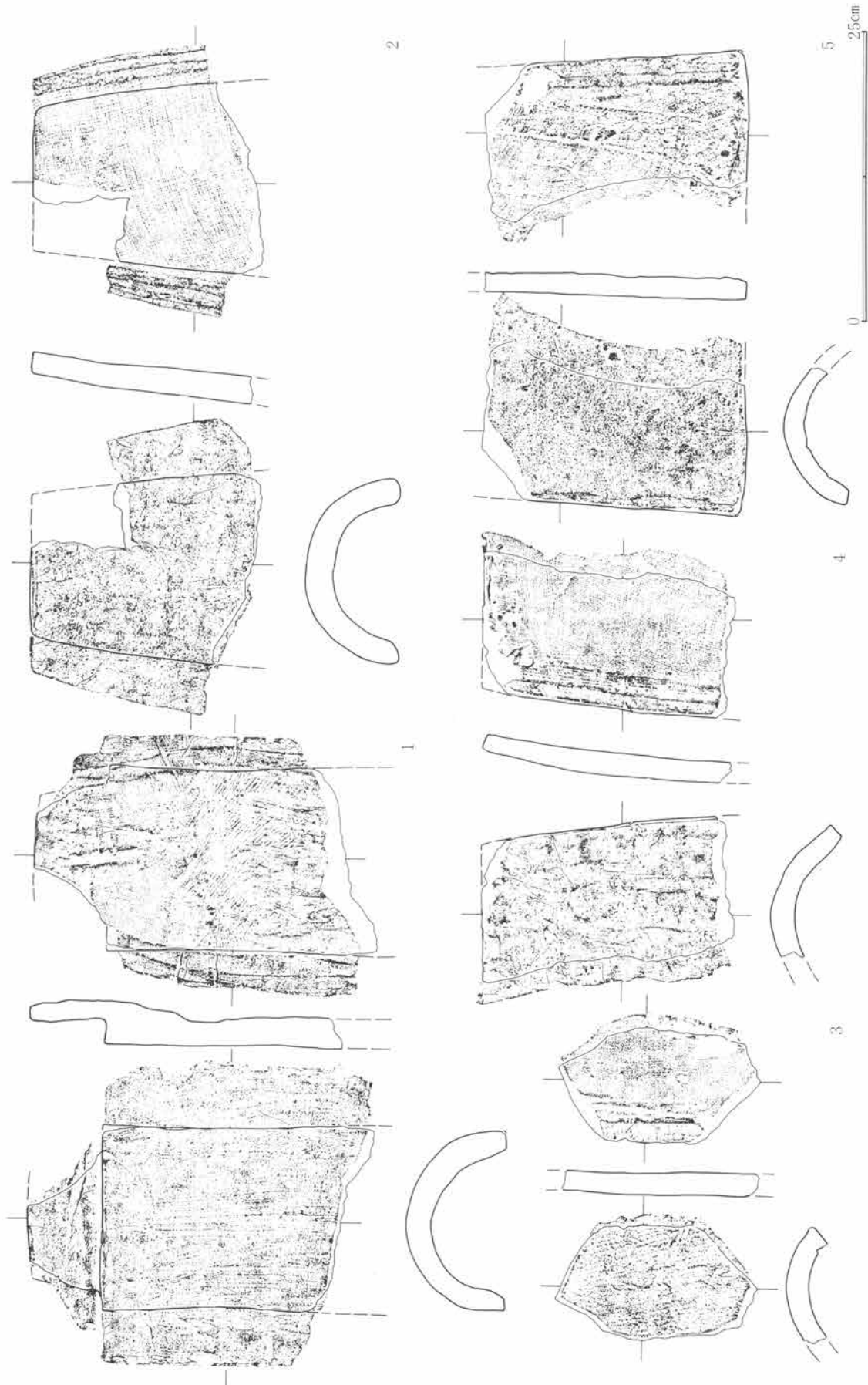
当住居の形状は、D区の住居分類の第I乃至II段階に対比される。出土遺物では、中国北方諸窯での焼造製の白磁碗片が出土している。他の遺物では須恵器・土師質土器の坏・碗の出土が多い。瓦では、カマド出土の男瓦(第143図-5)は紐作り成形である。これらの遺物様相は、D区の第II段階の様相に対比出来、住居形状を含めれば、当住居の廃棄時期は、10世紀前半頃と考えられる。



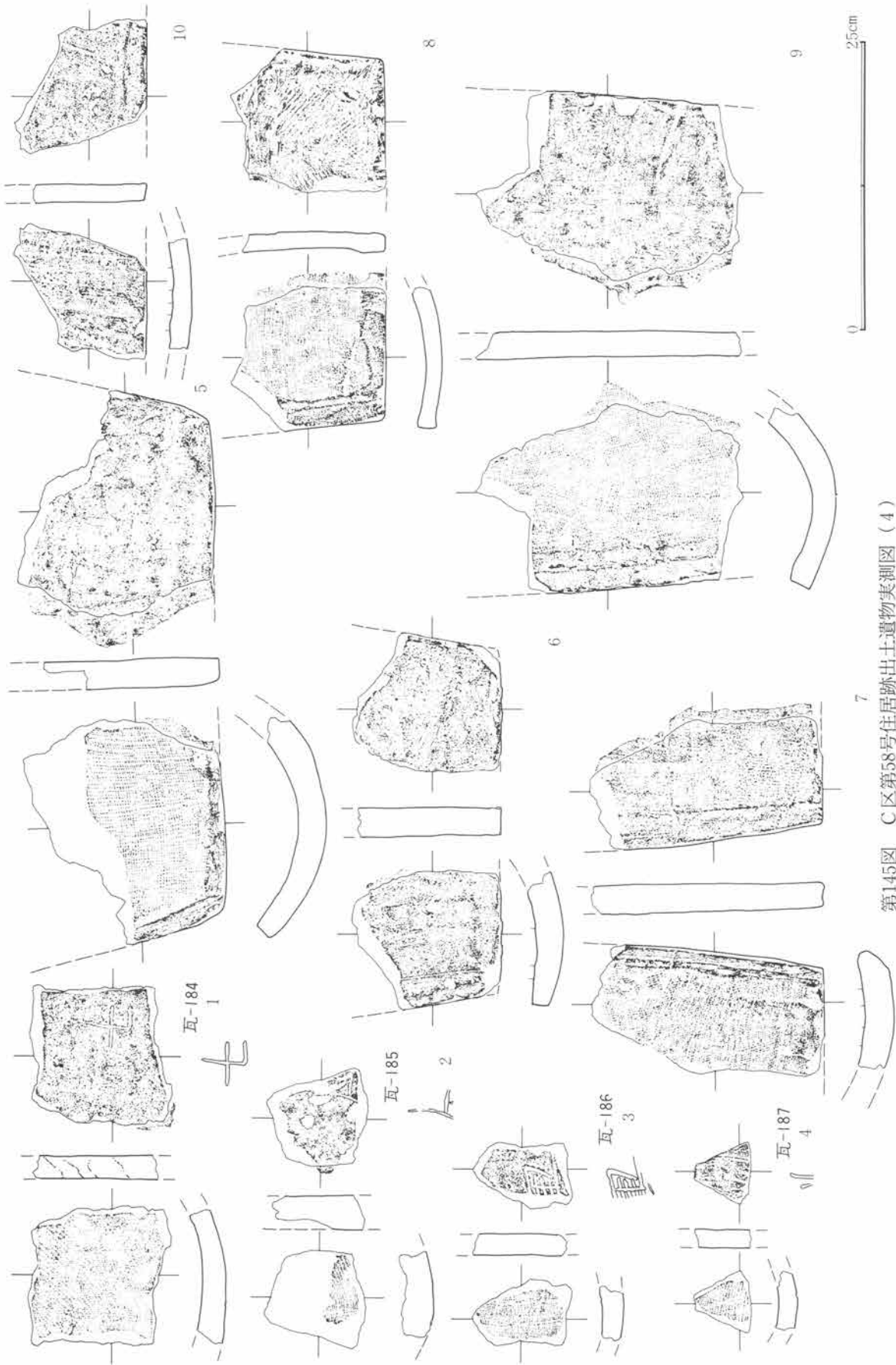
第142図 C区第58号住居跡出土遺物実測図(1)



第143図 C区第58号住居跡出土遺物実測図(2)

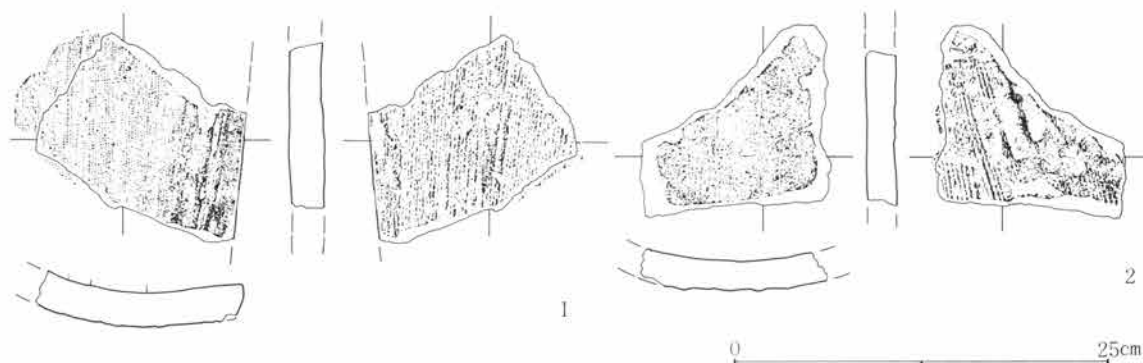


第144図 C区第58号住居跡出土遺物実測図(3)



第145图 C区第58号住居跡出土遺物実測図(4)

第4章 検出された遺構・遺物

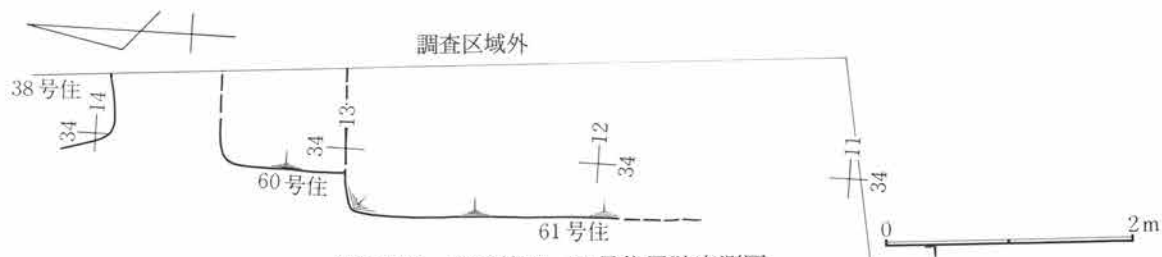


第146図 C区第58号住居跡出土遺物実測図(5)

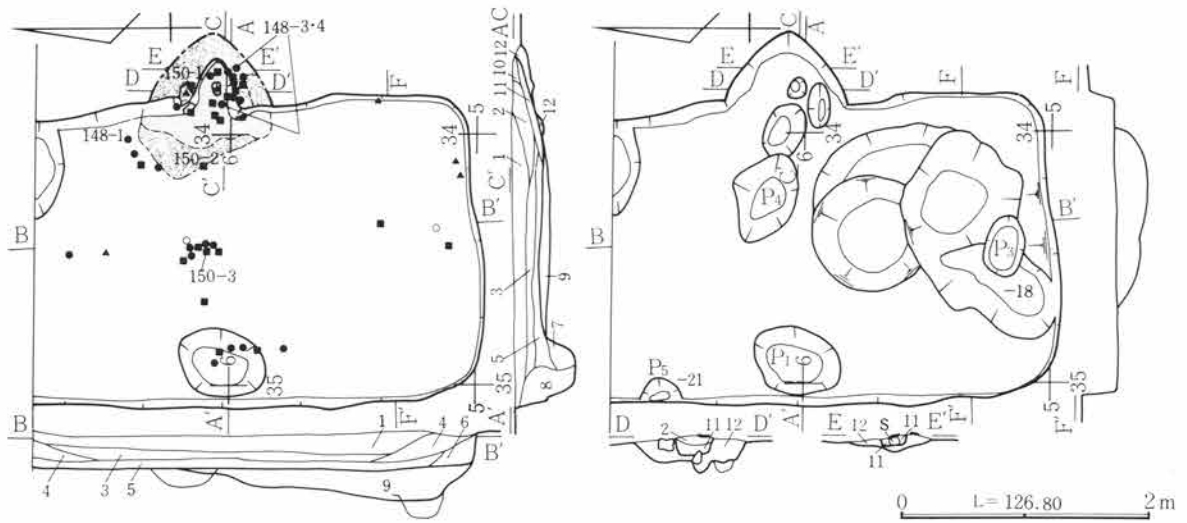
遺構名称	C区第62号住居跡		位置	7～9-C-33～35グリッド内。		残存深度	約23cm
平面形態	横長方形	規模	2.50m×3.37m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-90度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦。住居中央部以南を造床。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P ₁ ・P ₂ ?			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	住居中央部から南壁寄りに土坑状の掘り込みが認められたが、P ₅ は本跡のものではないのか?						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から158cm。			主軸方位	北-90度-南	
改築	有。掘り方埋土内に炭化物・焼土が混入。		形状	舌状を呈する。			
規模	全長 46cm・屋外長 38cm・屋内長 18cm・袖部幅 68cm・燃烧部幅 29cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部奥寄りに支脚が検出されている。		袖	瘤状で極僅かに認められ、瓦による補強が行なわれている。			
煙道	未検出。		掘り方	袖の補強材の据方が検出されている。			
遺物出土状態	大半が覆土内からの出土である。						

C区第59・60・61号住居跡に就いて。

この3軒の住居跡は、調査区東端で11～13-C-33～35グリッド内で確認された。北側には前出の38～41号住居が位置している。当該の3軒の住居が確認された部分は、中世以降の攪乱が非常に著しく、さらに昭和45年の調査のグリッドが重複している。この状況下で確認された住居を調査した結果、59号住居跡としたものは何らの痕跡も認められない程度で、図示した61号住の南側に覆土(恐らく掘り方の一部)が数cm程で所々に認められる程度で図化には至れなかった。一方、60・61号住居跡は、切り合う状態で認められたが、新旧関係を確認出来る程ではなかった。図示出来た部分は、数cmの高低差部分を図化したものである。又、この3軒の住居跡からの出土遺物は皆無である。これらのことより、住居形状・遺物様相等でのこれら3軒の住居に就いて記述することは不能である。

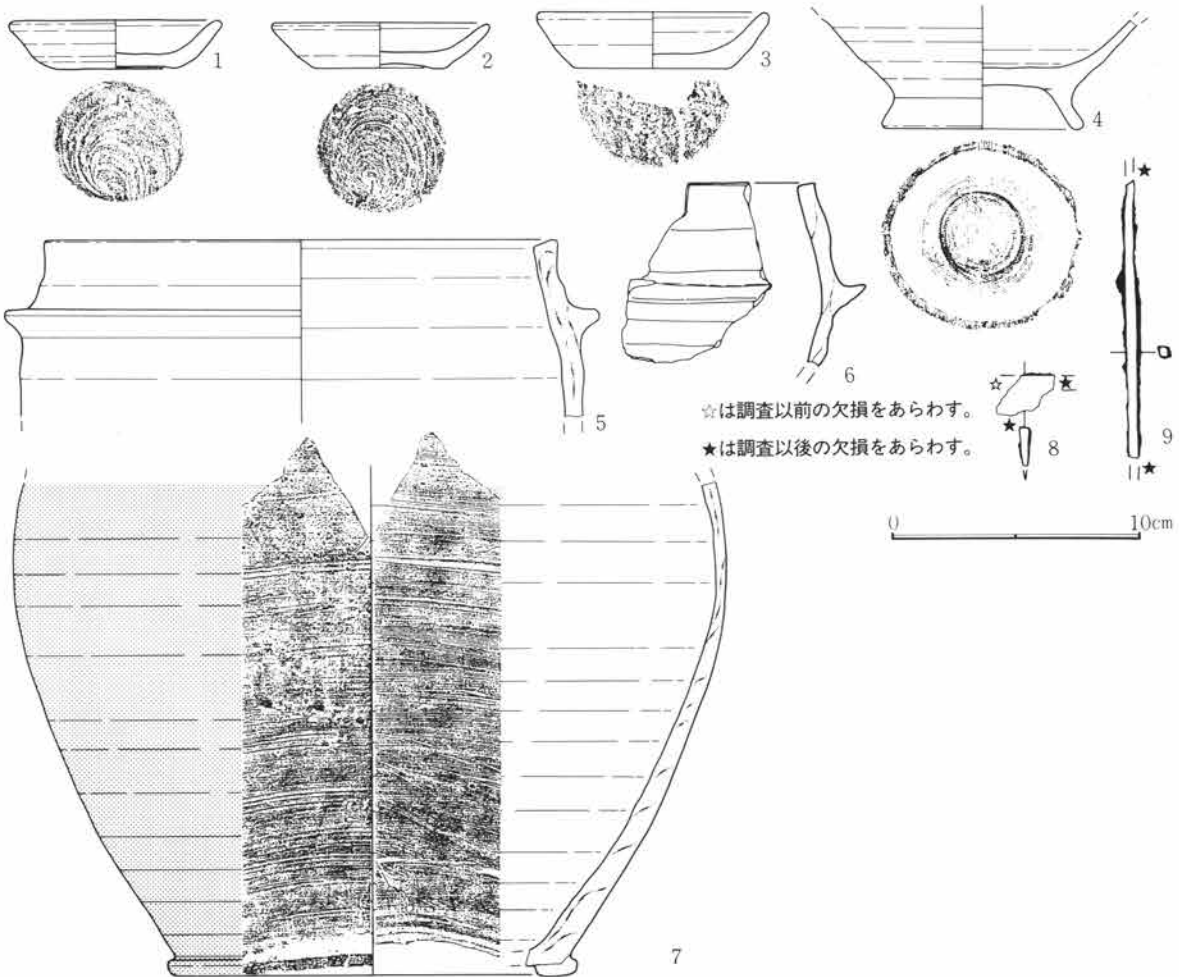


第147図 C区第60・61号住居跡実測図

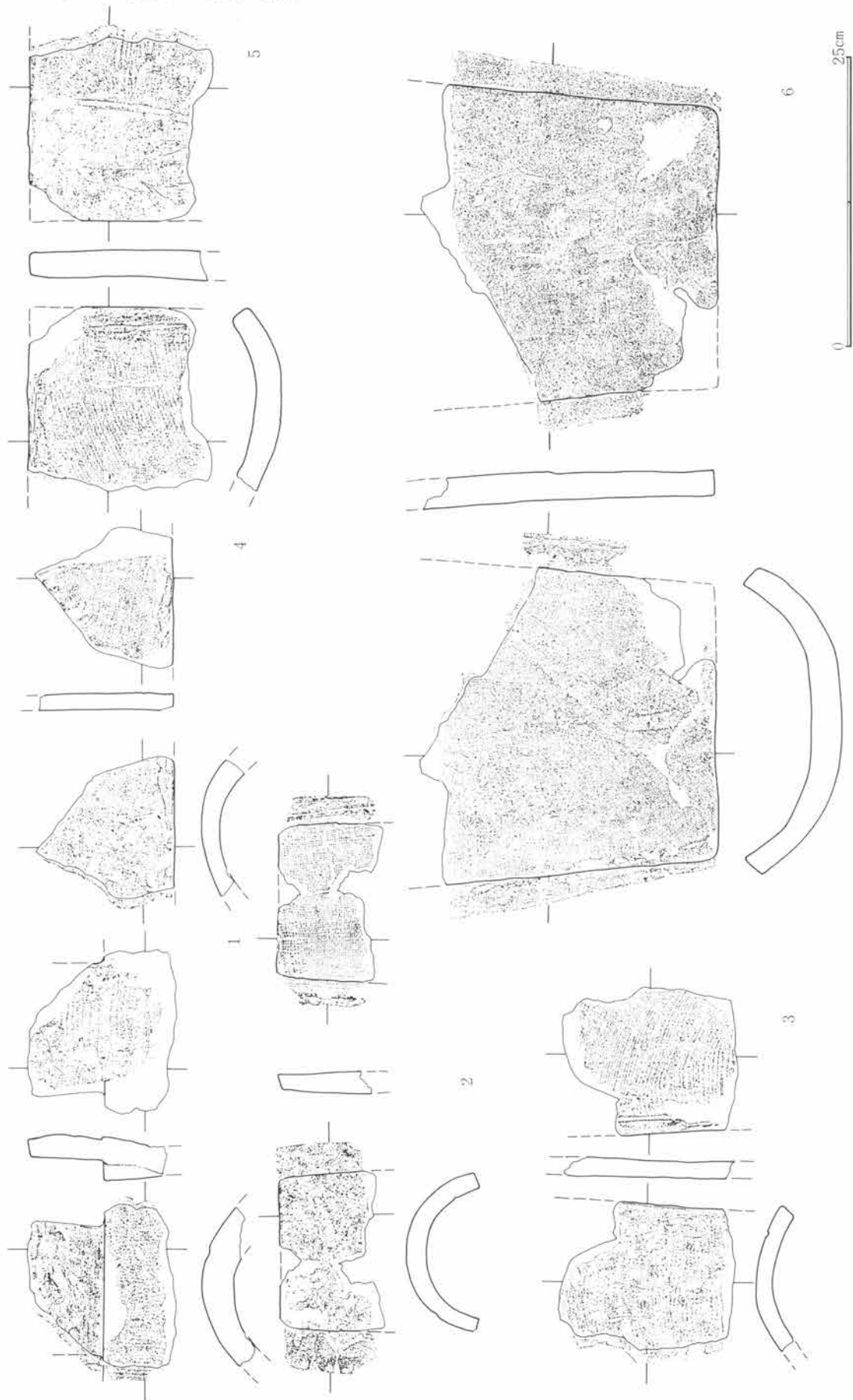


層序 C62住

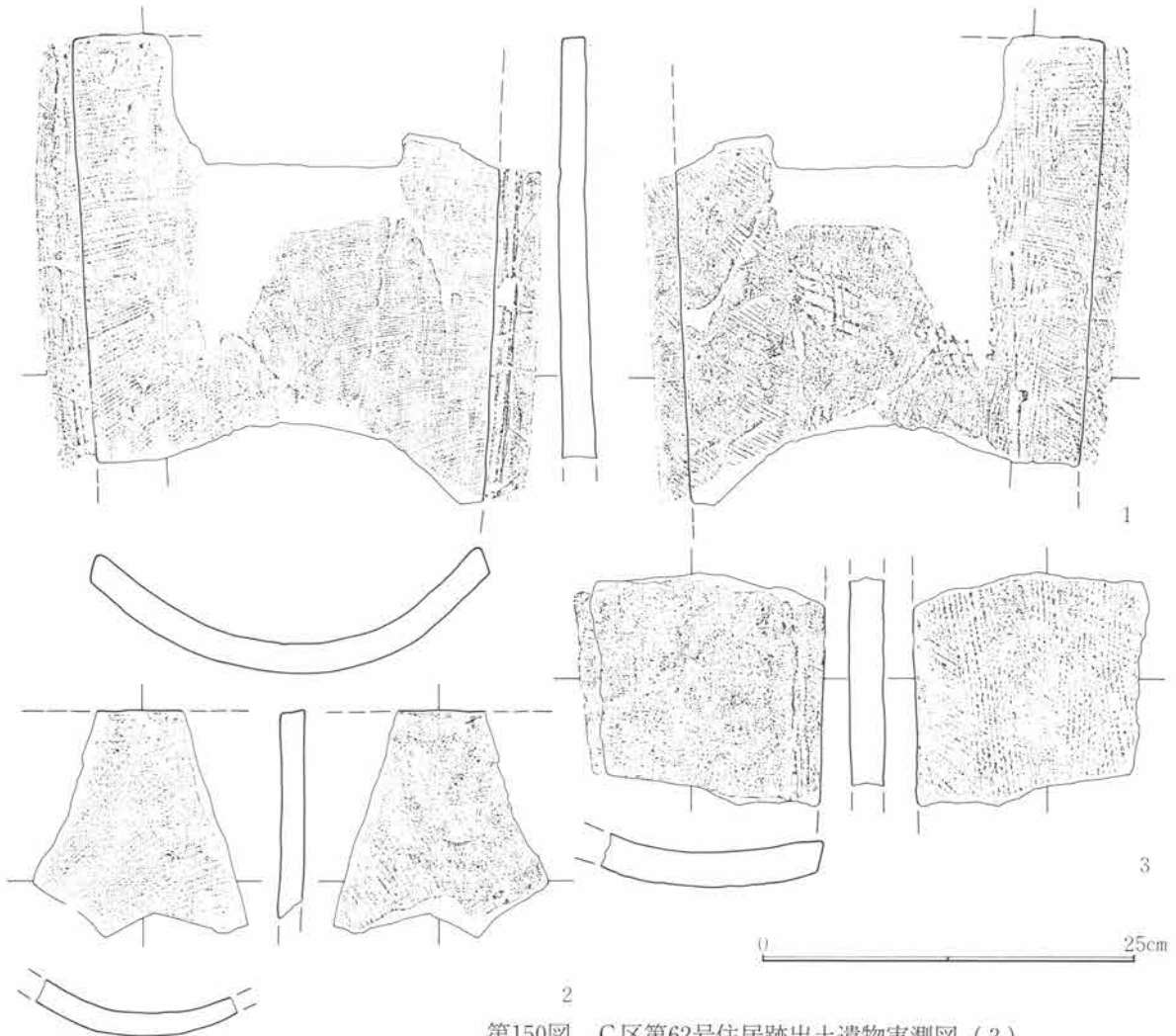
1. 粒状C軽石混入。 2. 細粒状C軽石含有。 3. 細粒状C軽石含有・粒状VII層土若干。 4. 細粒状C軽石若干・粒状VII層土含有・小塊状VII層土含有。 5. 微粒状C軽石微量。塊状VII層土含有・粒状炭化物含有。 6. 微粒状C軽石微量・塊状・粒状VII層土多量。 7. 粒状C軽石含有粘質土。 8. 黒色土（IVとV層土中間の土質）ハミス粒子含有。 9. 細粒状C軽石含有・塊状VII層土混入。
10. 細粒状C軽石含有・炭化物含有。 11. 細粒状C軽石少量・塊状焼土多量・塊状炭化物多量。 12. 粒状焼土・炭化物混入。



第148図 C区第62号住居跡・出土遺物実測図（1）



第149図 C区第62号住居跡出土遺物実測図(2)

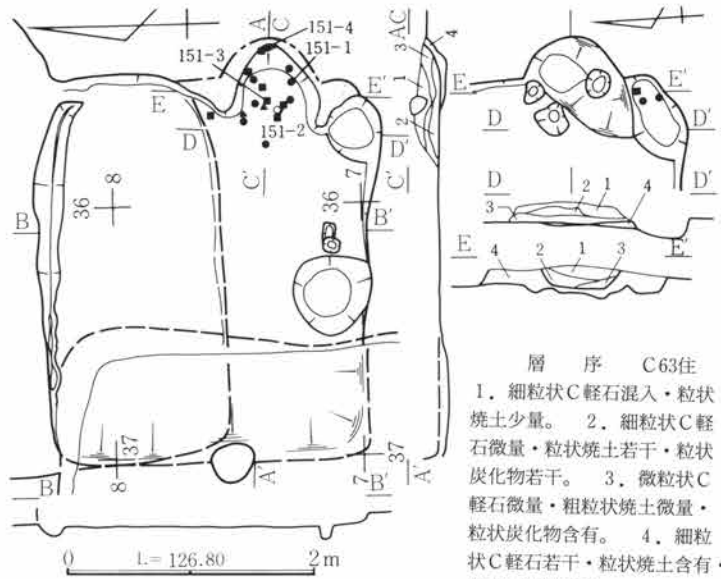


第150図 C区第62号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	C区第63号住居跡		位置	6～8-C-35～37グリッド内。			残存深度	約18cm
平面形態	縦長方形。	規模	3.0?m×2.70m	構築基準辺	不分明壁	主軸方位	北-90度-南位か	
壁	残存不良なため詳細不分明。		床面	平坦。造床は認められない。				
壁溝	北壁部で検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P ₁ 。P ₄ は貯蔵穴か? P ₁ 53×43cm・深度-10cm				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	他の住居と重複があるため詳細は不分明であるが、ほとんどない状態に近いと考えられる。							
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から30cm。				主軸方位	北-96度-南	
改築	有。改築は屋内側に向かい再構築している。			形状	全体的に遺存が悪く馬蹄形状に残存する。			
規模	全長 65cm・屋外長 35cm・屋内長 30cm・袖部幅150cm・燃烧部幅 62cm。							
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しいと考えられる。壁体の補強は改築以前の掘り方で据え方ピットを検出。							
煙道	立ち上がり部分が検出されているのみである。		掘り方	補強材据方ピットが2ヶ所検出されている。				
遺物出土状態	カマド部分のみでの出土であるが、カマドと直接的な係わりは明らかでない。							

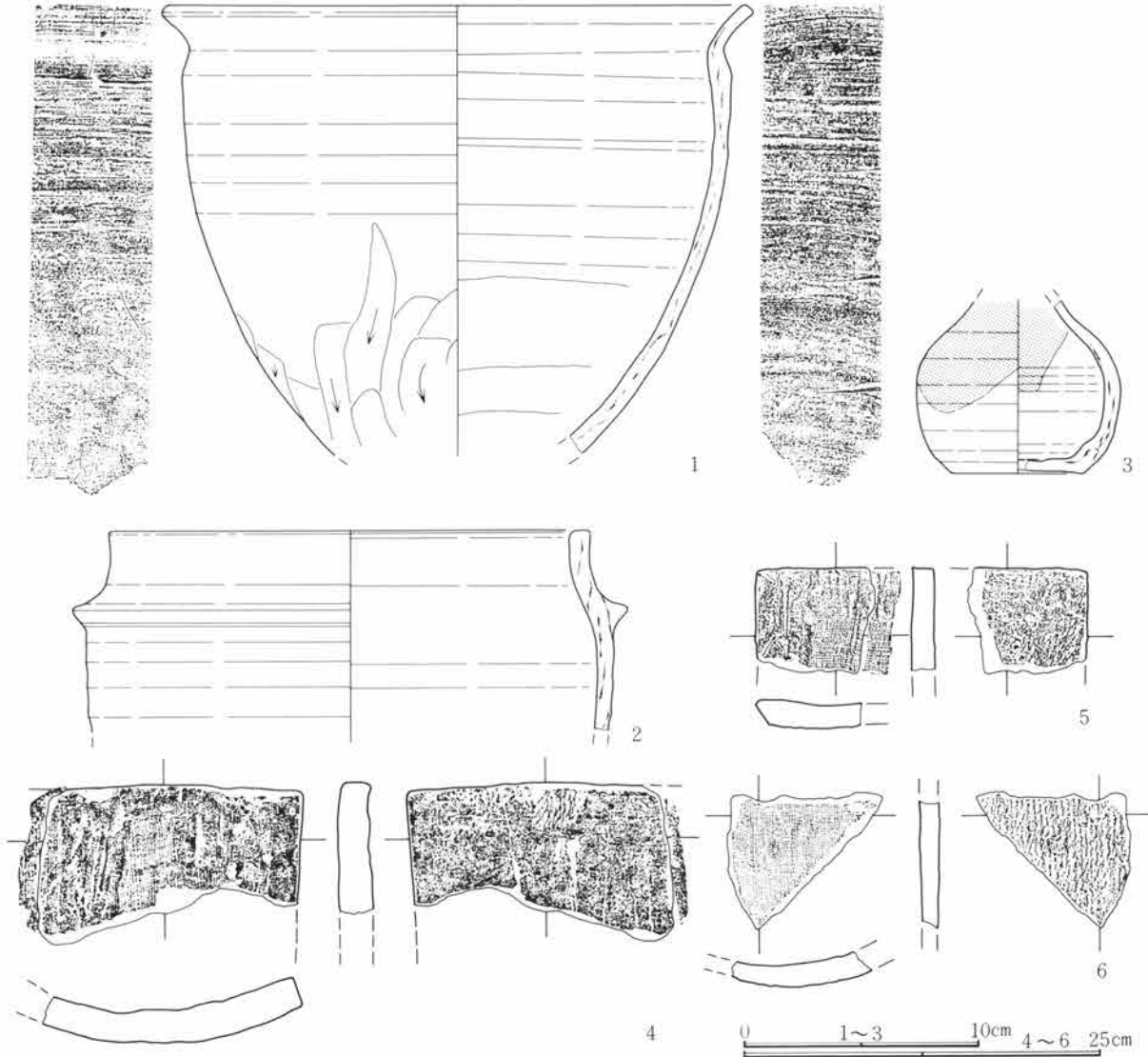
第4章 検出された遺構・遺物

所見 当住居は56・65住に切られ覆土の大半を失っているが、北壁側は床面に壁溝の痕跡が認められた。南壁側は65住の掘り方に痕跡が認められ住居形状の復原が出来た。住居は東壁南東隅部寄りにカマドを具備し、南東隅部直下には、カマド右袖と接する状態で傍竈を備えており、D区の住居分類の第I乃至II段階に対比される。出土遺物ではD区の第II段階の様相が認められる。この点から、当住居の廃棄時期は第II段階の10世紀前半と考えられる。



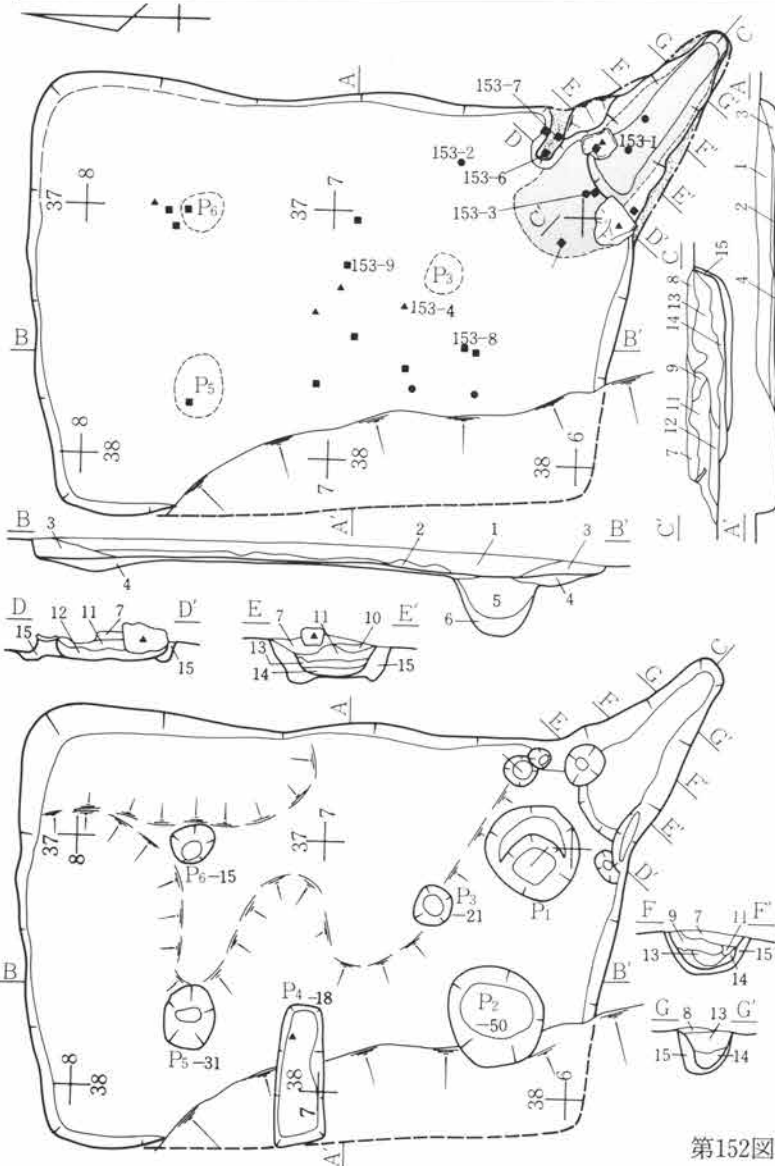
層序 C63住

- 1. 細粒状C軽石混入・粒状焼土少量。
- 2. 細粒状C軽石微量・粒状焼土若干・粒状炭化物若干。
- 3. 微粒状C軽石微量・粗粒状焼土微量・粒状炭化物含有。
- 4. 細粒状C軽石若干・粒状焼土含有・粒状炭化物若干。



第151図 C区第63号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	C区第65号住居跡		位置	5～8-C-36～38グリッド内。		残存深度	約16cm
平面形態	横長方形	規模	3.33m×4.83m	構築基準辺	西乃至東壁？	主軸方位	北-90度-南位か
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦。西側は薄く造床し、東側はⅦ層土を使用する。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P ₂ は床面下。80×80cm・深度-50cm			
柱穴	P ₃ ・P ₅ ・P ₆ か？						
掘り方	全体的に浅いが、南壁側から西壁側に多く認められる。P ₁ ・P ₂ は床面下での検出。						
カマド	位置	住居南東隅部。				主軸方位	北-131度-南
改築	有。掘り方右袖部の三日月状の掘り込みは瓦の据方。		形状	長い舌状を呈する。			
規模	全長184cm・屋外長129cm・屋内長 55cm・袖部幅121cm・燃烧部幅 60cm・煙道部幅 30cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。燃烧部はF-F'間までか？						
袖	左袖のみ検出されているが、形態上の特徴と考えられる。						
煙道	燃烧部との堺が分明ではない。		掘り方	ピット等からは2回の改修は考えられる。			
遺物出土状態	住居中央部で床面直上層中での出土が若干認められた。						



所見 当住居は64住を切り56住に切られる。尚、当住居は試掘時にトレンチで確認され、この折のトレンチにより西壁の大半を失っている。住居は、南東隅部に住居の対角線方向にカマドを具備する横長方形を呈するもので、出土遺物と共にD区の住居分類の第IV段階に対比される。又、住居床面では浅い柱穴の掘り込みが中央で検出されているが、上屋を支えられるかは疑問が残る。住居の廃棄は11世紀前半と考えられる。

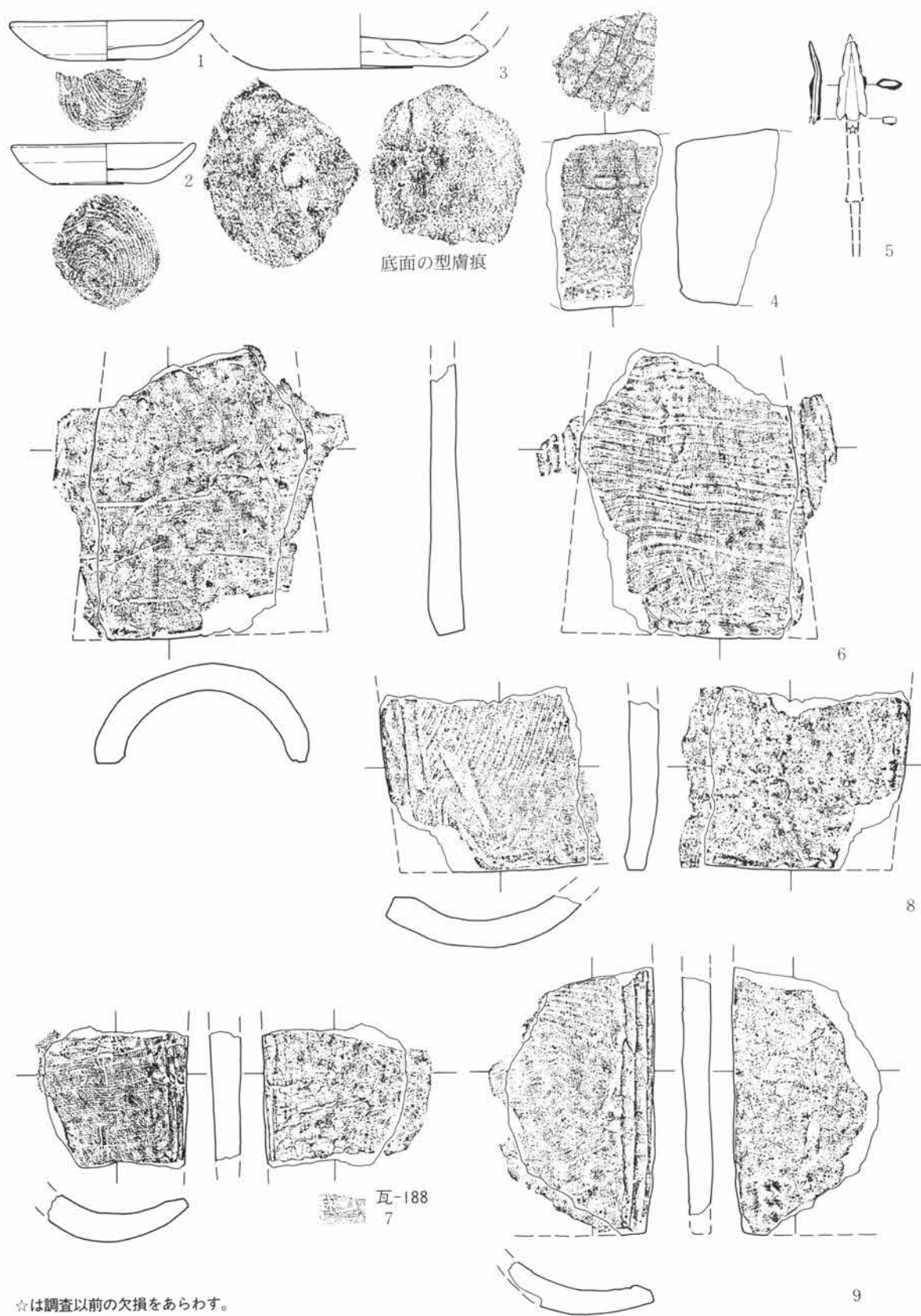
層序 C65住

1. 粒状C軽石混入。
2. 細粒状C軽石微量・粒状焼土混入。
3. 粒状C軽石多量・粒状・塊状Ⅶ層土含有。
4. 細粒状C軽石微量・塊状Ⅶ層土混入・粒状焼土含有。
5. 粒状C軽石少量・細粒状・塊状Ⅶ層土混入。
6. 5よりⅦ層土の混入多。
7. 粒状C軽石混入・粒状炭化物・焼土含有。
8. 細粒状C軽石含有・粒状・塊状焼土混入。
9. 橙褐色土(披熱土)。
10. 1近質。
11. 炭化物・焼土混入。
12. 灰・焼土多量・粒状Ⅶ層土混入。
13. 焼土(天井の崩壊土)。
14. 灰層。
15. 粒状焼土多量・塊状焼土含有・粒状炭化物含有。

0 L=127.20 2m

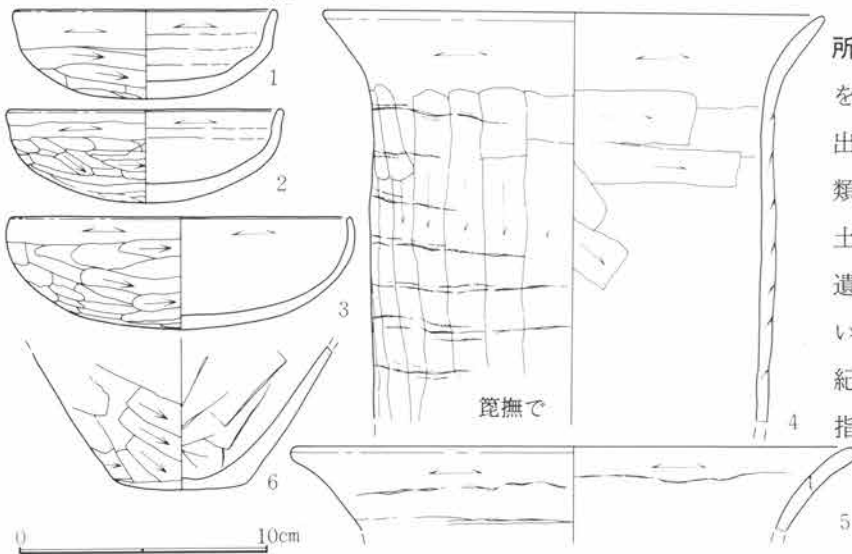
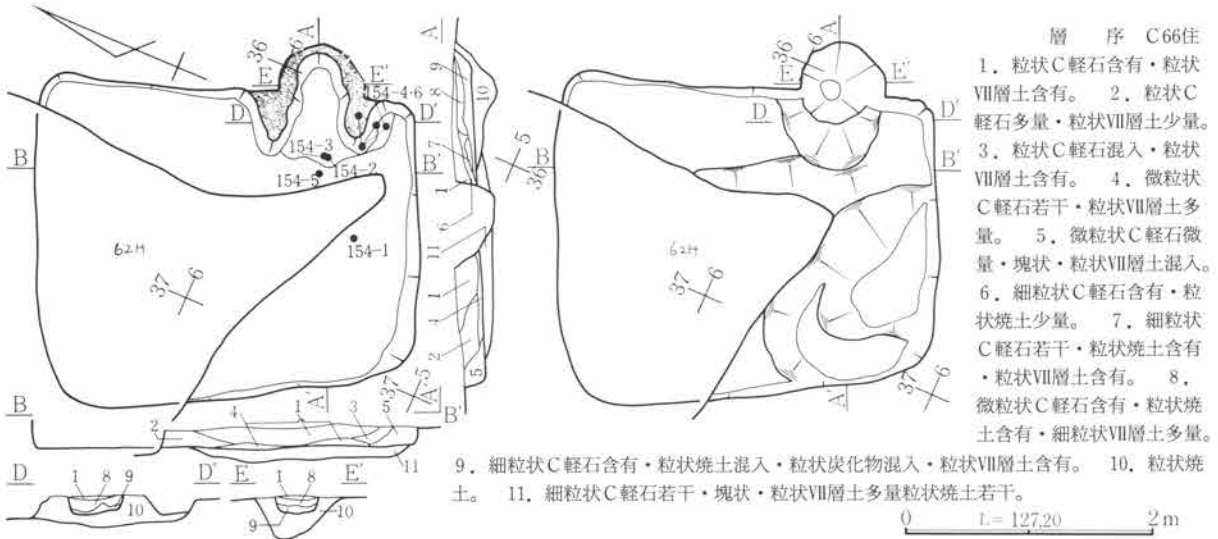
第152図 C区第65号住居跡実測図

第4章 検出された遺構・遺物



第153図 C区第65号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	C区第66号住居跡		位置	5～6-C-35～37グリッド内。		残存深度	約22cm
平面形態	横長方形	規模	2.50m×3.00m	構築基準辺	南壁	主軸方位	北-67度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦。南西隅からカマド前面にかけて造床。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	南西隅部で顕著で、深い掘り込みが認められる。カマド前面は比較的浅目。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から18cm。			主軸方位	北-68度-南	
改築	掘り方内の焼土・炭化物からは「有」。	形状	細い舌状を呈し、主体は屋内に設置。				
規模	全長 82cm・屋外長 35cm・屋内長 47cm・袖部幅125cm・燃烧部幅 45cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部中央やや奥壁寄りに器設部分が考えられる。						
煙道	未検出。	掘り方	円形土坑状の掘り方で、奥壁寄り深い。				
遺物出土状態	焚口部で、大小2個体の土師器坏が重なり底面直上から出土している。						

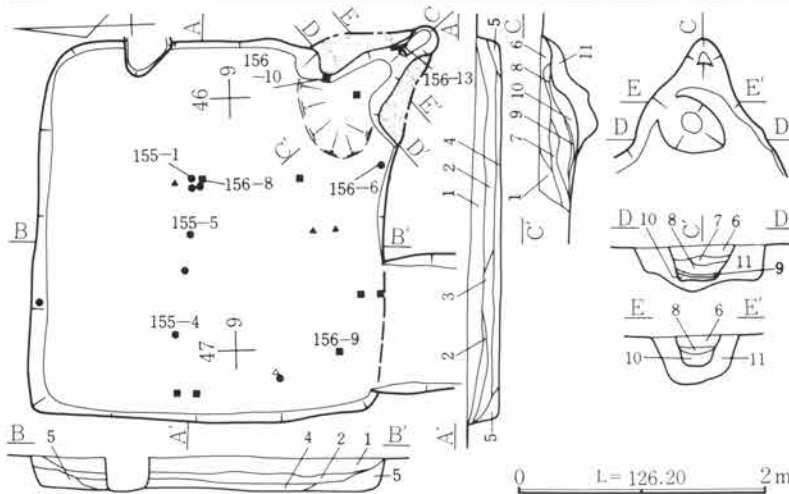


所見 当住居は65住に切れ大半を失っているが平面形状は復原出来た。住居形状はD区の住居分類の第III段階に対比されるが、出土遺物の様相が異っている。出土遺物は土師器坏類と甕が出土している。この出土遺物からは、7世紀中頃に比定出来る。又、住居の指向方では、他の住居より北側に振っている。この点は、当遺跡での8世紀以前の住居の特徴である。

第154図 C区第66号住居跡・出土遺物実測図

第4章 検出された遺構・遺物

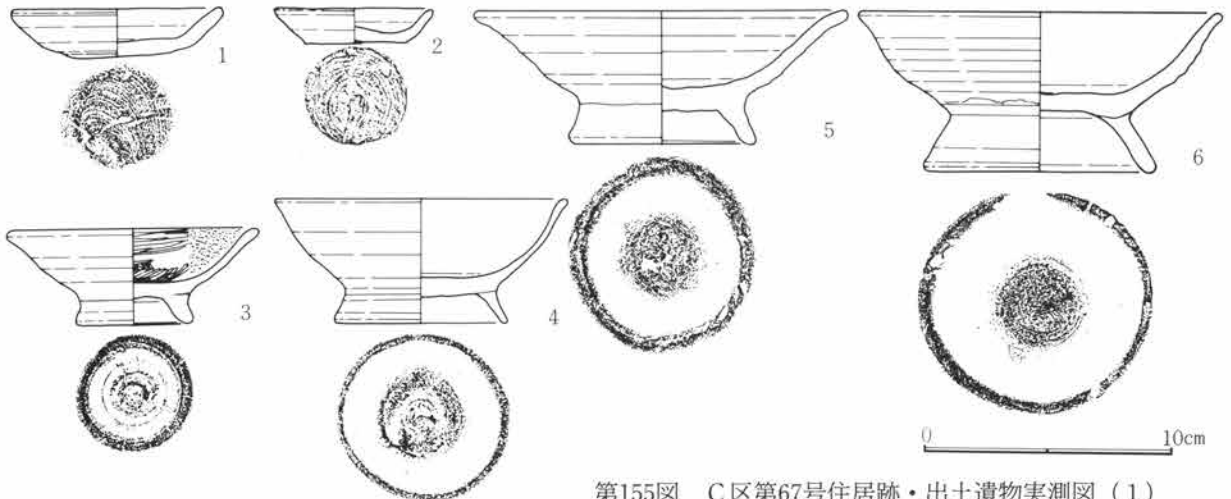
遺構名称	C区第67号住居跡		位置	8・9-C-45~47グリッド内。		残存深度	約23cm
平面形態	正方形(矩形)	規模	3.30m×2.73m	構築基準辺	西壁か?	主軸方位	北-95度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦。造床は確認出来たが、平面検出は不能であった。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周囲の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	平面精査を実施し、存否の確認のみを実施し、確認出来たが平面検出は実施しなかった。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から0cm。			主軸方位	北-140度-南	
改築	有。図示は改築以前の状態。		形状	細い舌状を呈し、先端が丸味を帯びる煙道を備える。			
規模	全長127cm・屋外長 80cm・屋内長 47cm・袖部幅110cm・燃烧部幅 42cm・煙道部幅 17cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。			袖	左袖内から瓦片が出土しているが、補強材とは考え難い。		
煙道	左側壁立ち上がり部に瓦による補強がある。		掘り方	三角形形状を呈する。			
遺物出土状態	全体的に少ないが、中央部にやや集中する。左波利片の出土がある。						



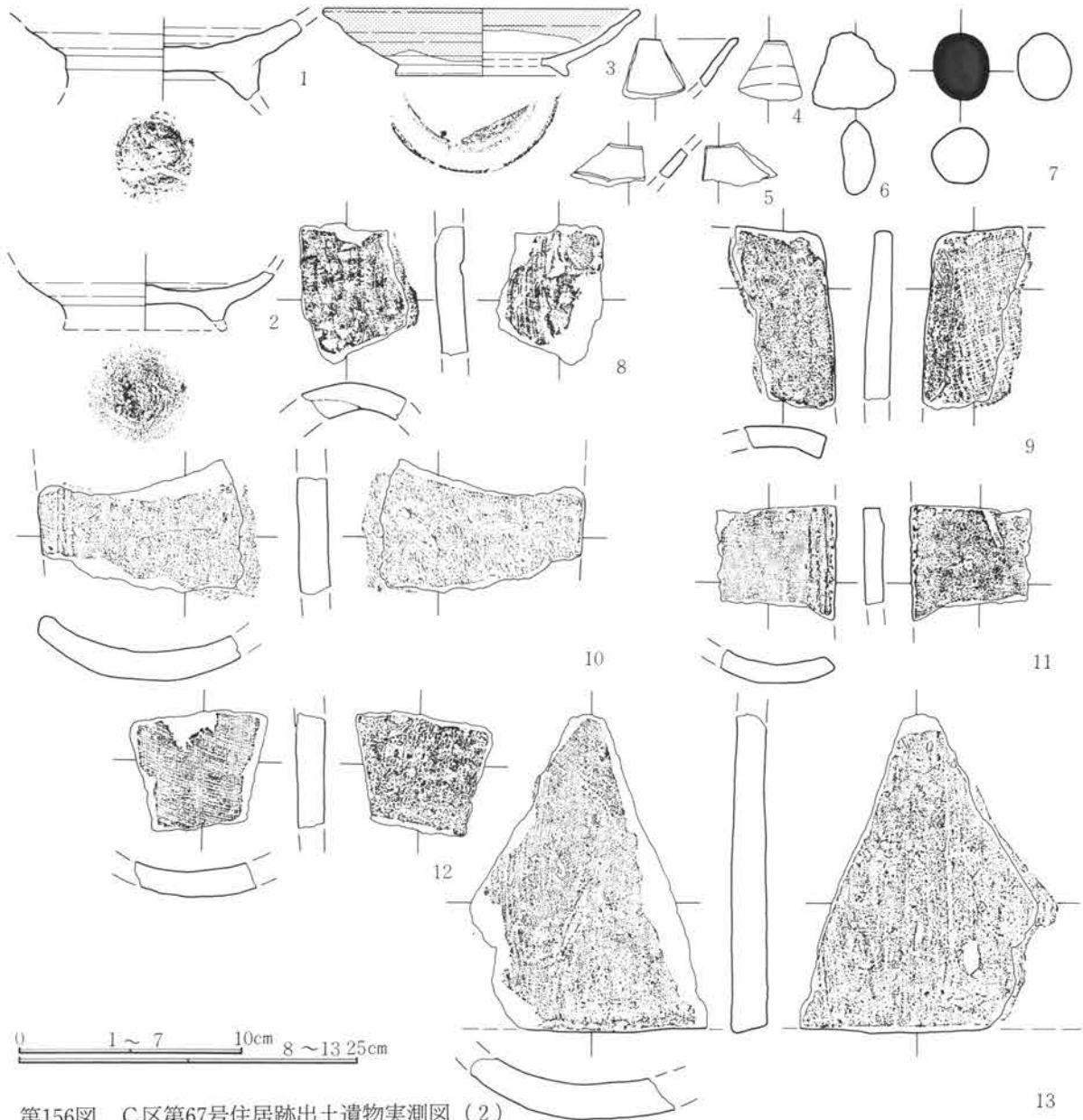
- 層序 C67住
1. 粒状C軽石含有。
 2. 粒状C軽石若干。
 3. 粒状C軽石若干・粒状VII層土含有。
 4. 細粒状C軽石微量・粗粒状VII層土若干。
 5. 微粒状C軽石微量。
 6. 細粒状C軽石混入・粒状焼土含有。
 7. 細粒状C軽石微量。
 8. 微粒状C軽石若干・粒状焼土混入。
 9. 灰・炭化物層。
 10. 細粒状C軽石微量・粒状C軽石多量・粒状焼土・塊状焼土含有。
 11. 細粒状C軽石含有。粒状焼土含有。

所見 当住居は南西隅部を攪乱に破壊されている。尚、周辺住居との切り合い関係では最も新しい住居で、71・99住等を切り構築している。

住居は南東隅部に住居の対角線方向にカマドを具備し、D区の住居分類・出土遺物様相では、第IV段階に對比される。この点から、当住居の廃棄時期は11世紀前半頃と考えられる。



第155図 C区第67号住居跡・出土遺物実測図(1)



第156図 C区第67号住居跡出土遺物実測図(2)

13



第157図 C区第68号住居跡出土遺物実測図(1)

所見 (68・70住) 68住は70住・69住を切り構築している。

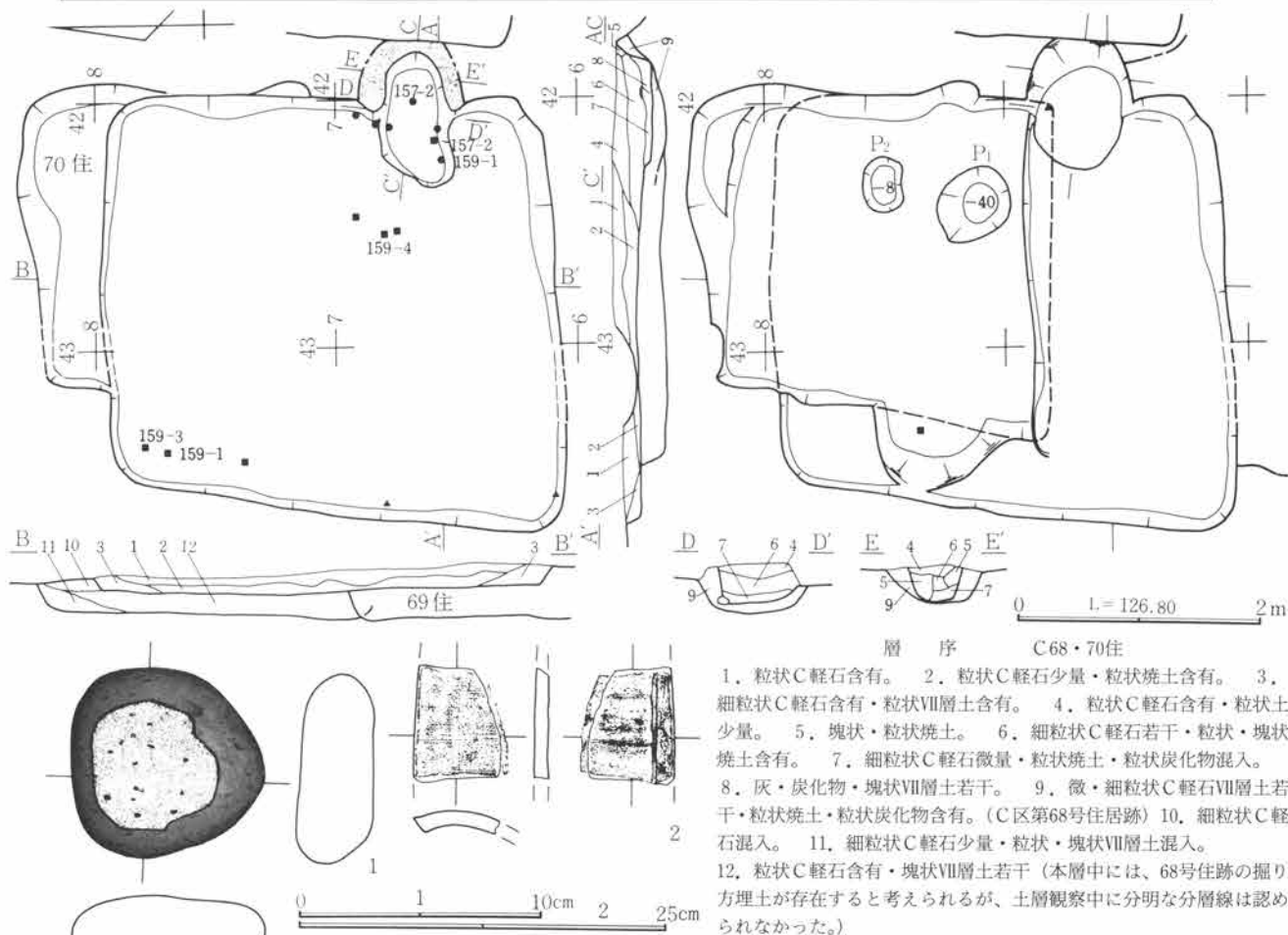
68住は東壁中央よりやや南東隅部寄りに具備する。傍竈坑は認められず、貯蔵穴等の施設は認められなかった。住居形状はD区のカテゴリの第III段階に対比される。然、当住居が切る69住は、縦長方形であるものの、D区のカテゴリの第III段階に対比される。出土遺物では、第IV段階に含まれる羽釜の出土があり、これらを勘案すると、当住居の廃棄は11世紀前半代に推定出来る。

70住は、上述の69住に切られカマドを含め大半が失われている。この為詳細は不明である。然、東壁は68住の東壁に重複している為カマドの痕跡も想定されるが、何ら認められなかった。

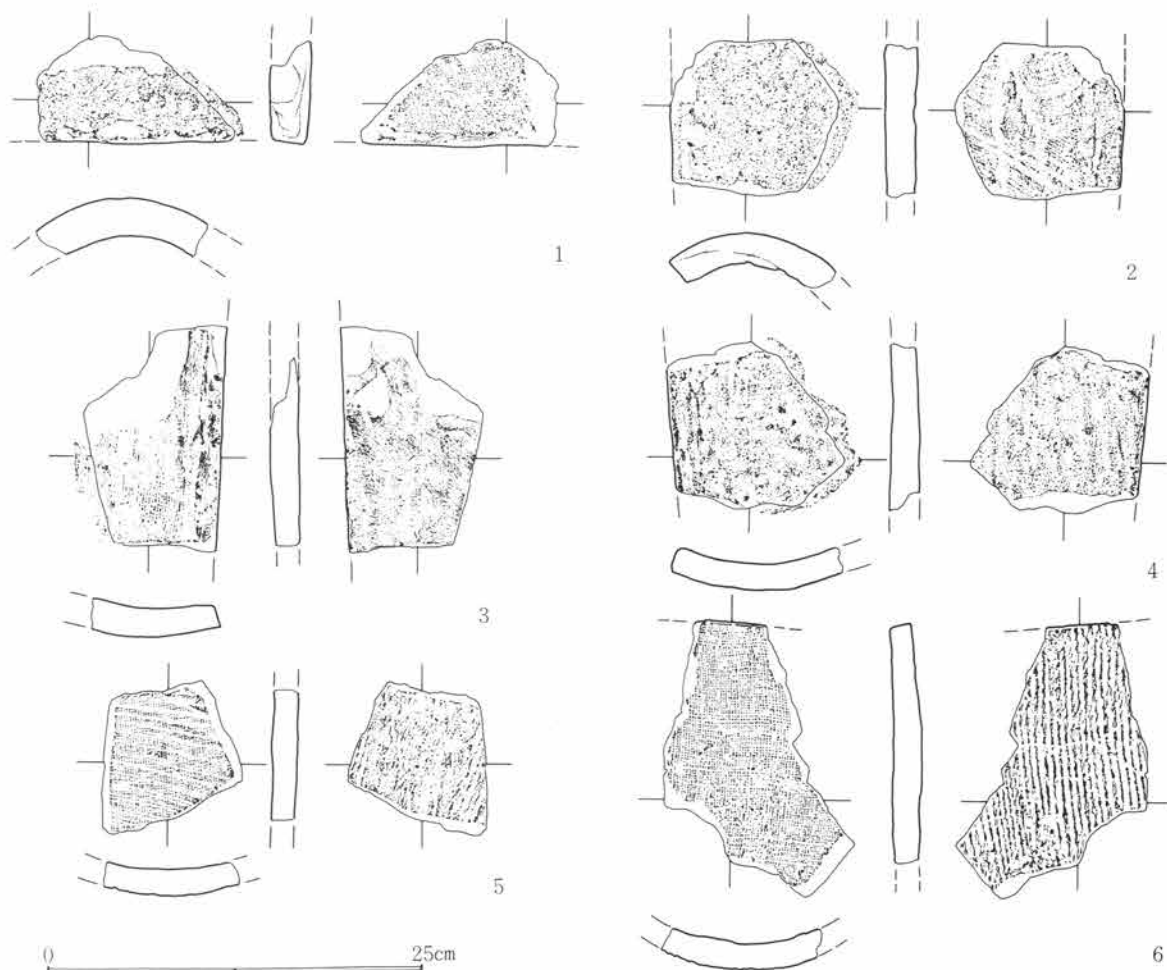
第4章 検出された遺構・遺物

遺構名称	C区第68号住居跡		位置	6・7-C-41~43グリッド内。		残存深度	約20cm
平面形態	梯形。	規模	3.5m×3.7m	構築基準辺	南乃至北壁	主軸方位	北-86度-南位か
壁	斜位に立ち上がる。		床面	平坦。造床があるが詳細不明。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	詳細不明。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から53cm。			主軸方位	北-90度-南	
改築	有。掘り方内に焼土粒が存在する。			形状	舌状。		
規模	全長110cm・屋外長40cm・屋内長70cm・袖部幅104cm・燃焼部幅48cm。						
焚口・燃焼部	扇状を呈する焚口部は、燃焼空間と重複する部分が著しく、燃焼部先端側に器設部分が考えられる。補強材は未検出。						
	袖	瘤状。掘り方での削り出しは認められなかった。					
煙道	未検出。		掘り方	楕円形状を呈する。補強材等の据方はない。			
遺物出土状態	西壁下で少量認められたが、他は覆土内から散漫な状態で出土している。						

遺構名称	C区第70号住居跡		位置	6~8-C-41~43グリッド内。		残存深度	約30cm
平面形態	梯形。	規模	2.75m×2.97m	構築基準辺	不分明壁	主軸方位	北-95度-南位か
平面形状は正方形基調か。C68・69号住の破壊により詳細不詳。							



第158図 C区第68・70号住居跡・第68号住居跡出土遺物実測図(2)



第159図 C区第68住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	C区第69号住居跡		位置	5・6-C-41~43グリッド内。		残存深度	約44cm
平面形態	縦長方形。	規模	3.1m×2.58m	構築基準辺	南壁	主軸方位	北-89度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦。南壁下から南西隅部にかけて造床。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P ₁ か。円形。径55cm(掘り方面)・深度-20cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	南壁下から南西隅部にかけて認められる。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から20cm。ほぼ南東隅部寄り。			主軸方位	北-85度-南	
改築	有。掘り方内に焼土が混入。		形状	舌状を呈する燃焼部に溝状の煙道を備える。			
規模	全長163cm・屋外長 91cm・屋内長 72cm・袖部幅120cm・燃焼部幅 60cm・煙道部幅 23cm。						
焚口・燃焼部	扇状を呈する焚口部は、燃焼空間と重複する部分が著しく、燃焼部先端側に器設部分が考えられる。補強材としてSが考えられる。						
	袖	左袖は比較的しっかりしているが、右袖は不鮮明である。					
煙道	長さ23cm程で垂直気味に立ち上がる。		掘り方	西壁自体にも及び、大きく深い。			
遺物出土状態	床面直上・直上層中の出土がややあるが、完存状態の土器類はない。						

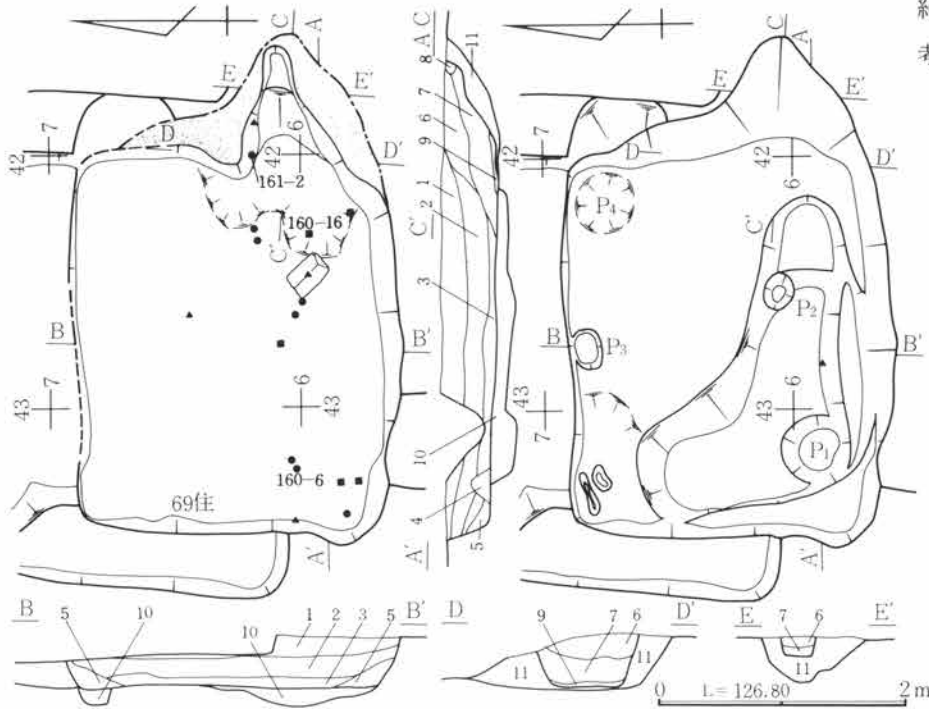
所見 当69号住は、68住に切られているが、覆土の上半程破壊されたに留まっている。

住居は、縦長方形を呈し、東壁南東隅部寄りに住居の指向方向に向かうカマドを具備している。カマド

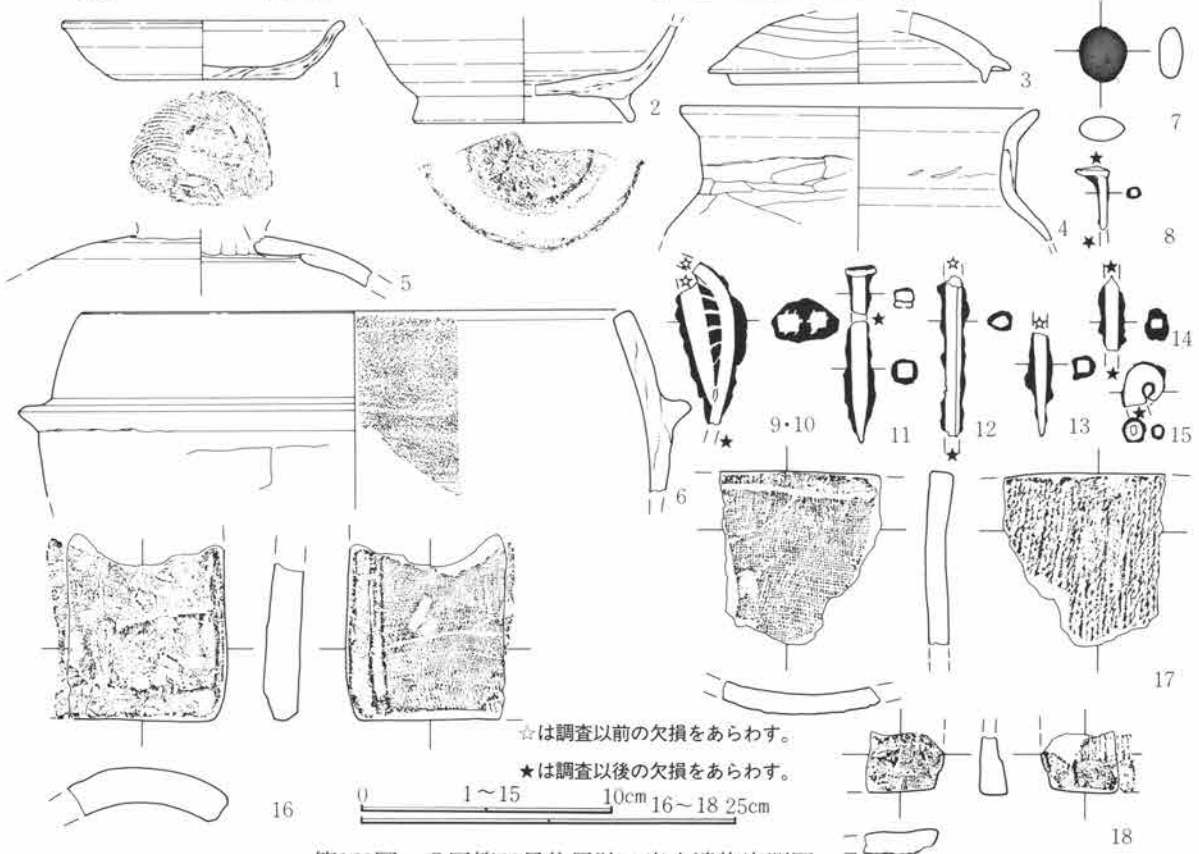
第4章 検出された遺構・遺物

は、右袖が住居南東隅にあっている。傍竈坑は検出されなかったが、掘り方底面で浅い皿状のP₁が検出されている。このP₁は位置的に68住のカマド直下であるが、本跡に確実に伴う。又、南西隅部では、掘り方調査時にP₁が検出されているが、貯蔵穴と考えられる施設と判断される。住居形状としてはD区の住居分類の第III段階に対比され、出土遺物の様相には第IV段階の様相が認められたことにより、当住居の廃棄は、10世

紀末から11世紀初頭頃と考えられる。



- 層序 C69住
1. 粒状C軽石多量・粒状VII層土多量。
 2. 粒状C軽石含有・粒状VII層土含有。
 3. 細粒状C軽石若干・細粒状VII層土含有。
 4. 塊状・粒状VII層土主体。
 5. 微粒状C軽石微量・塊状VII層土混入。
 6. 粒状C軽石含有・粒状焼土若干。
 7. 細粒状C軽石若干・粒状焼土混入・粒状炭化物含有。
 8. 塊状焼土。
 9. 灰・炭化物。
 10. 粒状C軽石微量・塊状・粗粒VII層土含有・粒状焼土若干。
 11. 微粒状C軽石若干・粒状焼土含有・粒状VII層土混入・粒状炭化物若干。

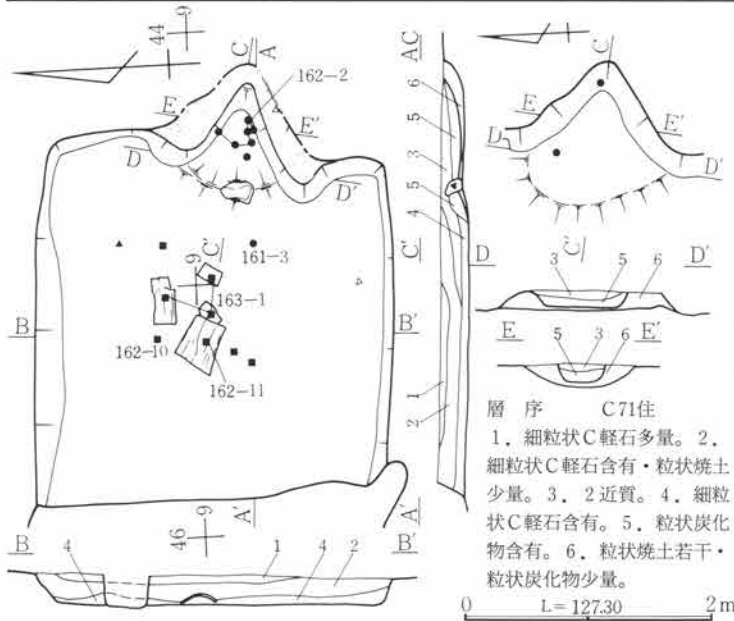


☆は調査以前の欠損をあらわす。

★は調査以後の欠損をあらわす。

第160図 C区第69号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	C区第71号住居跡		位置	8・9-C-44・45グリッド内。		残存深度	約23cm
平面形態	縦長方形。	規模	2.95+αm×2.82m	構築基準辺	南壁か	主軸方位	北-94度-南位か
壁	斜位に立ち上がる。		床面	平坦。造床は認められたが、調査不能。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	平面精査を実施し存在は確認したが、下位の住居の存在により確認のみに終わる。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から32cm。			主軸方位	北-100度-南	
改築	有。掘り方に焼土・炭化物を認める。		形状	三角形状を呈する。			
規模	全長 90cm・屋外長 50cm・屋内長 40cm・袖部幅160cm・燃烧部幅 55cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。底面直上で礫を検出。						
煙道	未検出。		掘り方	三角形状を呈し、小さな袖を削り出す。			
遺物出土状態	住居中央部で、床面直上から二点の完形瓦が出土している。						

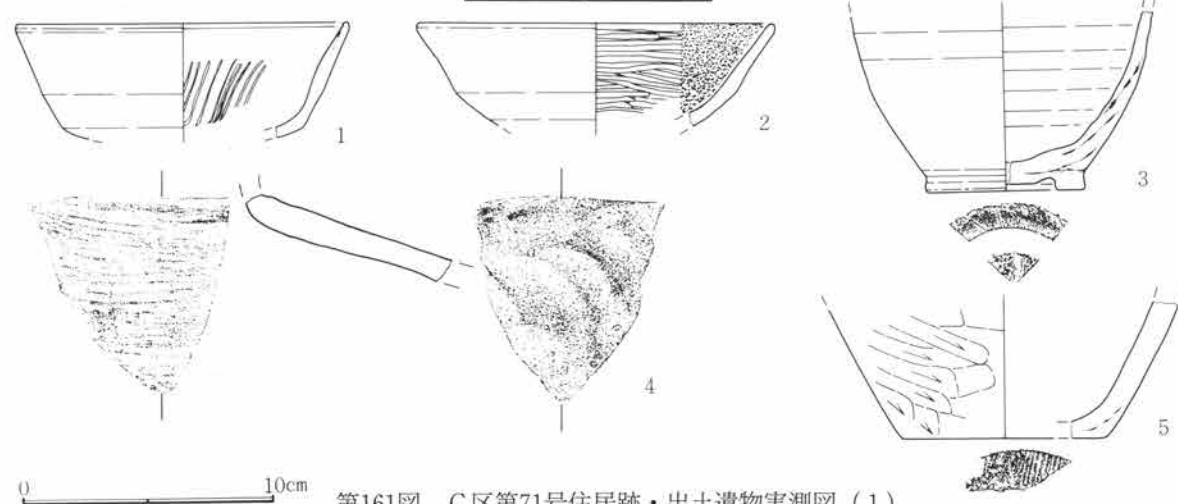


所見 当住居は67住に切れ、調査時の遺構確認時に於いて、住居群の切り合いの中で67住に次いで新しいと判断された住居跡である。

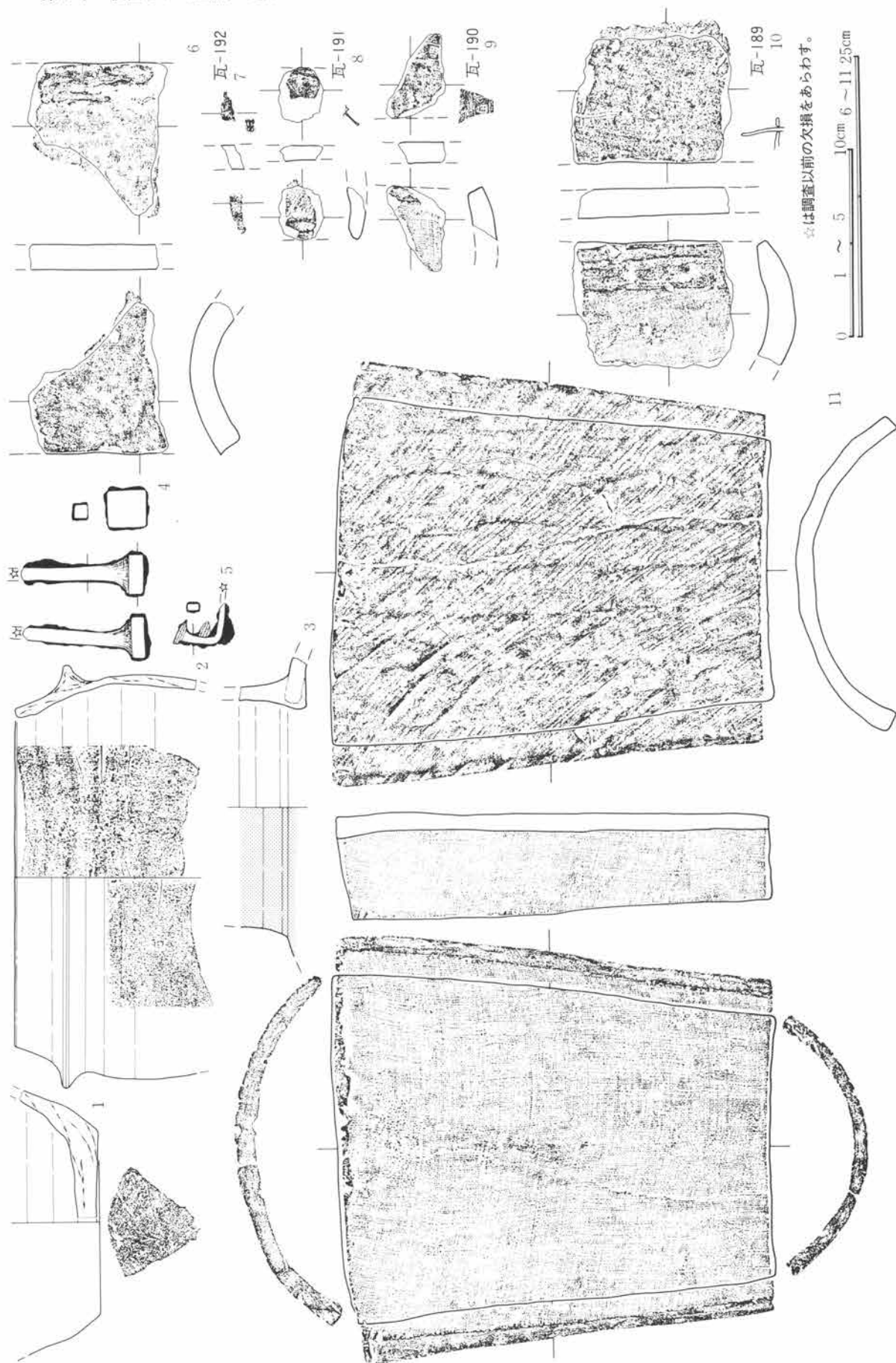
住居は、東壁ほぼ中央に「ハ」の字状に開く三角形状のカマドを具備する。然、周辺住居との切り合いが著しかった為、床面での施設等の検出作業は出来得なかった。この為、詳細に就いては不明である。出土遺物では、D区の住居分類に伴なう遺物分類中の第II・III段階が認められたが、時期を確実しえる状態ではない。

層序 C71住

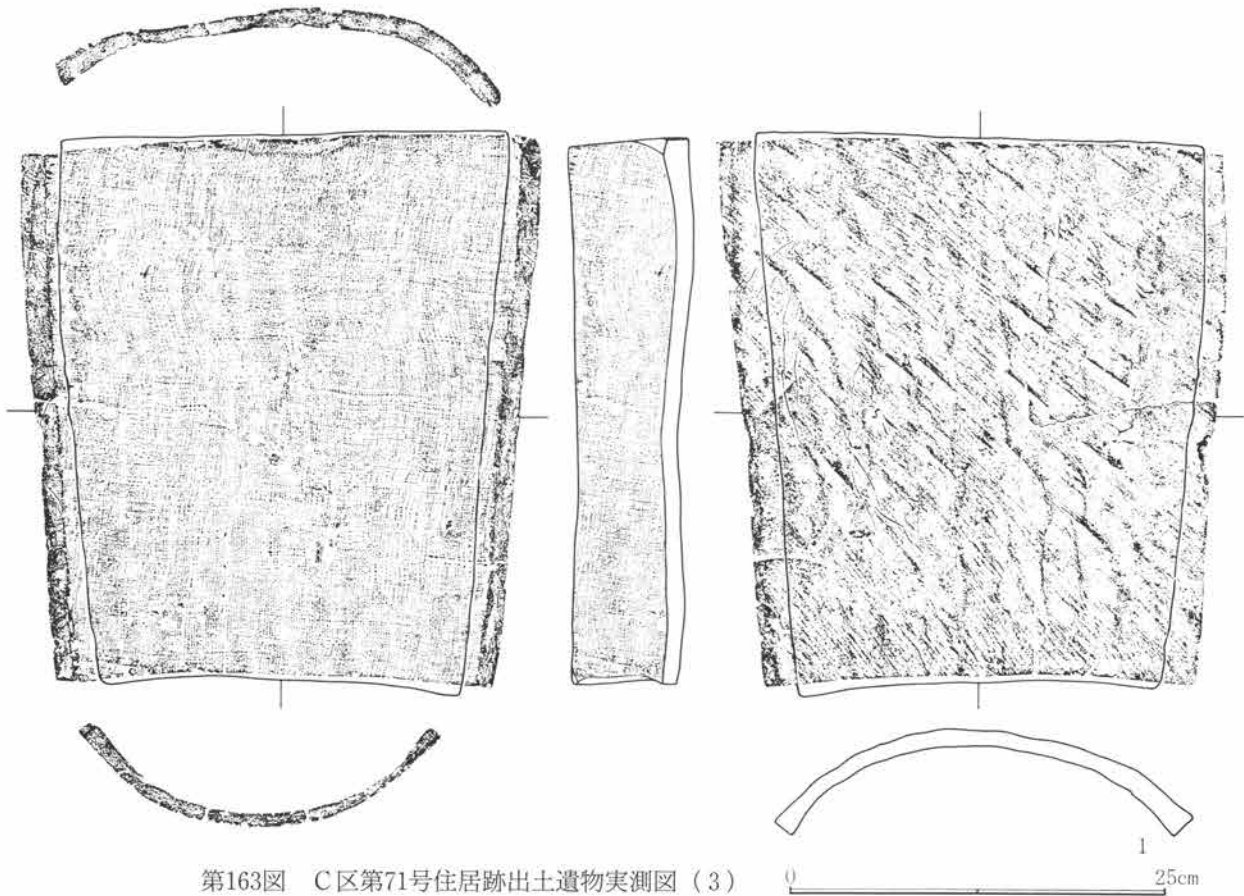
1. 細粒状C軽石多量。
2. 細粒状C軽石含有・粒状焼土少量。
3. 2近質。
4. 細粒状C軽石含有。
5. 粒状炭化物含有。
6. 粒状焼土若干・粒状炭化物少量。



第161図 C区第71号住居跡・出土遺物実測図(1)



第162図 C区第71号住居跡出土遺物実測図(2)

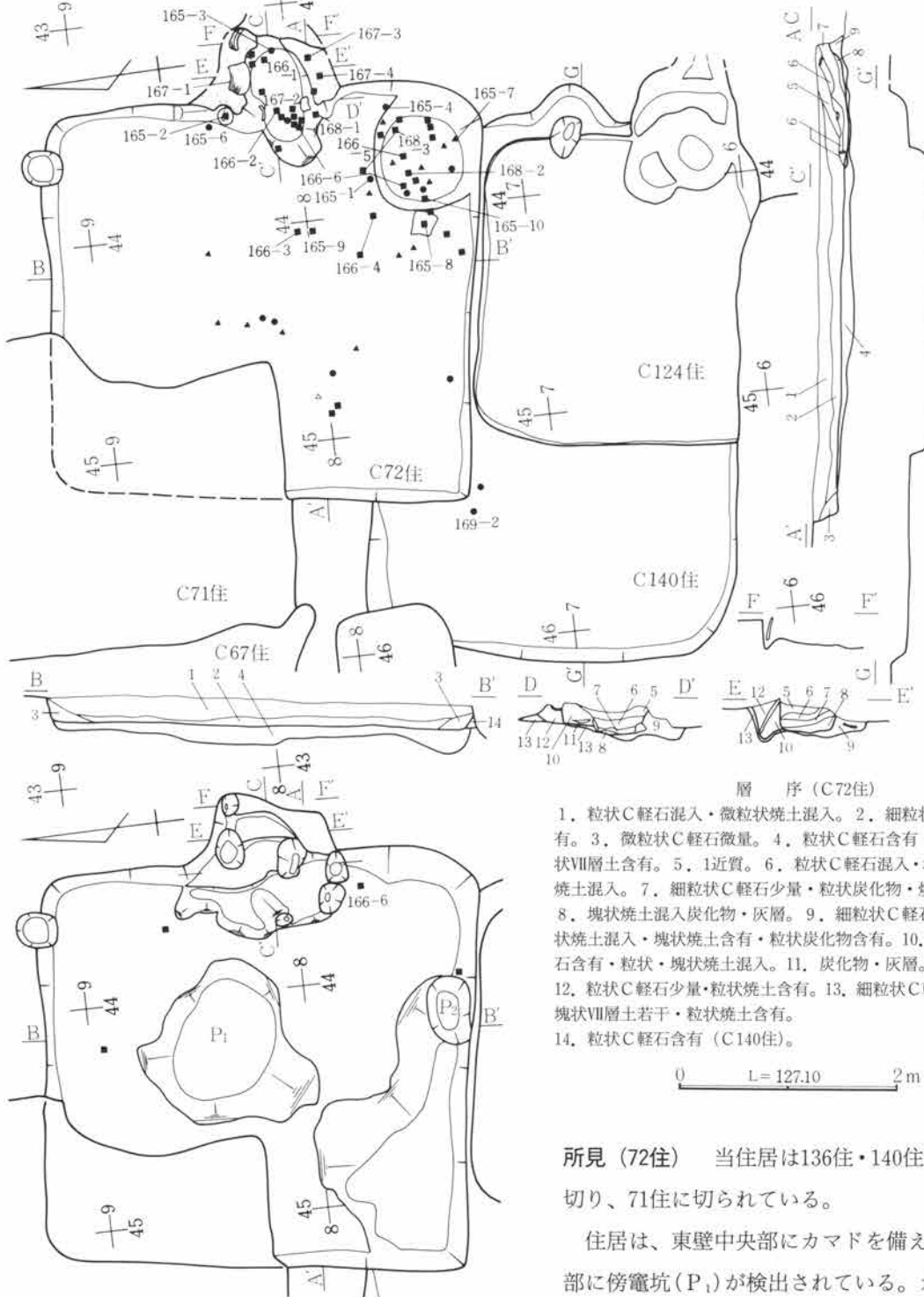


第163図 C区第71号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	C区第72号住居跡		位置	7～9-C-43～45グリッド内。			残存深度	約22cm
平面形態	正方形。	規模	3.86m×3.95m	構築基準辺	西壁か	主軸方位	北-100度-南位か	
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦。全体に造床。				
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P ₁ 。隅丸胴張正方形。95×90cm・深度-20cm				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	住居中央部に浅い皿状で土坑状の掘り込みが検出されたが、南西隅部周辺の140号住と重複。							
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から130cm。				主軸方位	北-87度-南	
改築	有。平断面から2回の改築が認められた。		形状	舌状を呈し、先端に細い煙道を具備する。				
規模	全長120+ α cm・屋外長50+ α cm・屋内長70cm・袖部幅130cm・燃烧部幅60cm・煙道部幅20cm。							
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。							
	袖	瘤状で、焚口側を瓦・礫で補強する。						
煙道	細く奥壁中位より屋外に向け延びる。			掘り方	図化は改築以前のものも含める。			
遺物出土状態	床面直上層中の出土と貯蔵穴内での出土が多い。							

遺構名称	C区第140号住居跡		位置	6・7-C-43～46グリッド内。			残存深度	約16cm
平面形態	縦長方形。	規模	4.93m×3.30m	構築基準辺	北壁か	主軸方位	北-98度-南	
壁	斜位に立ち上がる。		床面	大半が124号住に切られる。ほぼ平坦。				
			傍竈坑・貯蔵穴	未検出。				

第4章 検出された遺構・遺物



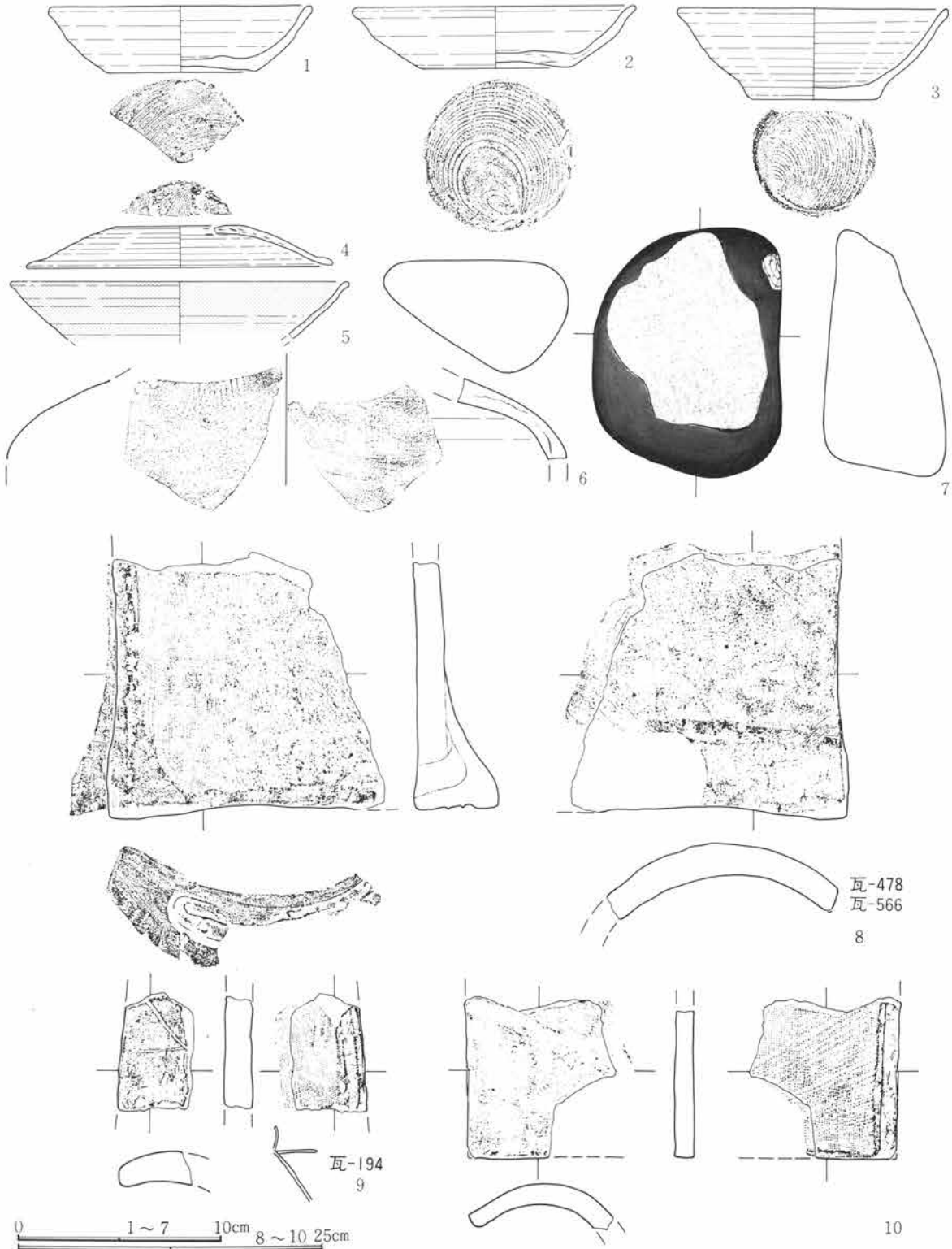
第164図 C区第72・140号住居跡実測図

所見 (72住) 当住居は136住・140住・154住を切り、71住に切られている。

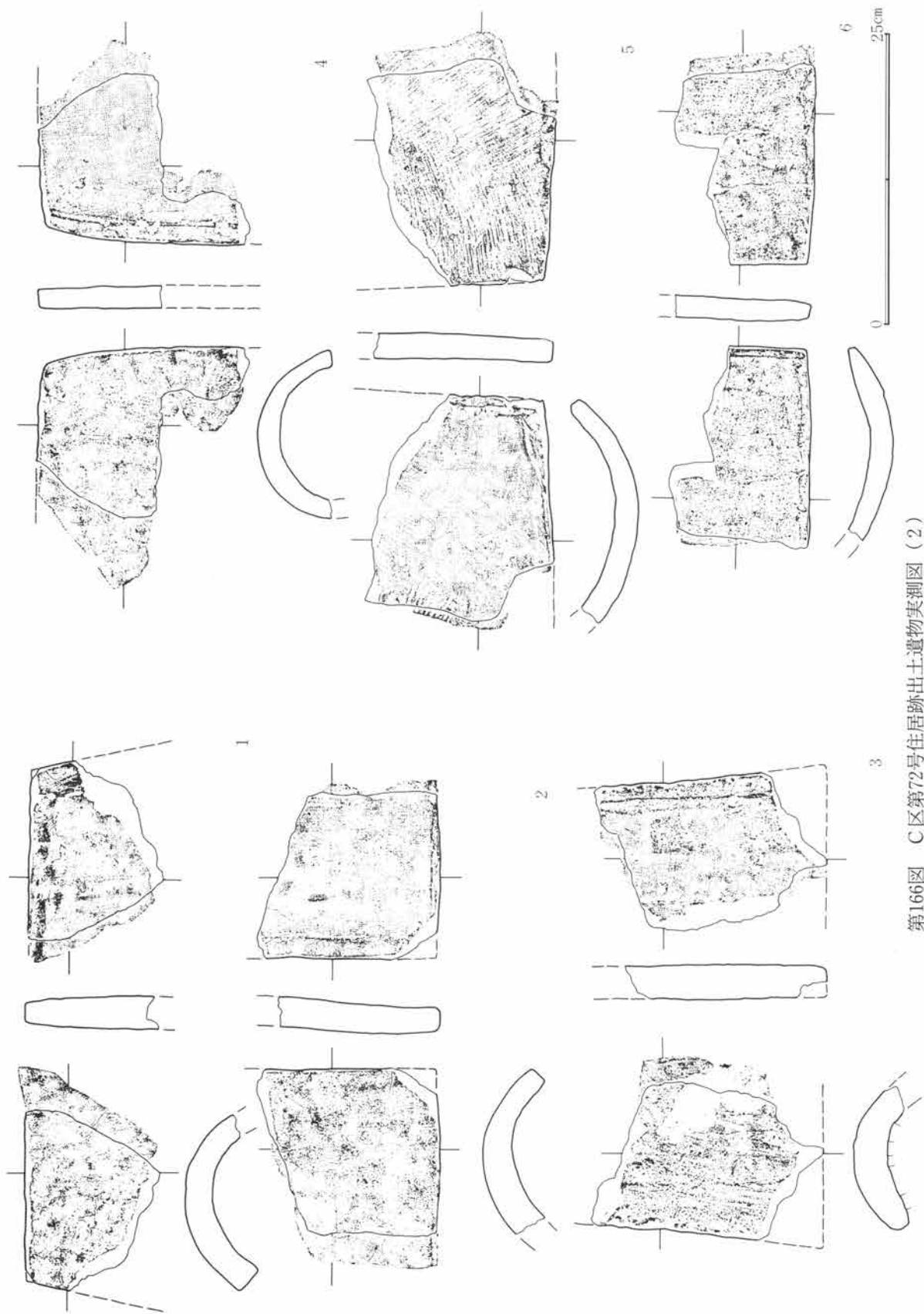
住居は、東壁中央部にカマドを備え、南東隅部に傍竈坑 (P₁) が検出されている。カマドは、改築が2回認められ、掘り方でその状況が顕著に認められる。廃棄時のものは、掘り方域全体の中央部で検出されている。これ以前のものは、燃烧部左側に瓦等により壁体を補強した状態のものと、燃烧部右壁側で、袖等の補強材の据え方ピットが屋内側で検出されている。この廃棄以前の新旧関係は調査時段階では検証されなかったが、右壁側の旧カマドは、屋内側で痕跡としてしか認められない点から、住居構築当初のものと考えられる。このことから、カマドは、南側から北側へそしてその中央部への移設順位が推定される。この状況はC47住でも認められている。

住居は上述した様に、D区の住居分類の第I段階の様相が認められるが、出土遺物の様相では第I段階を

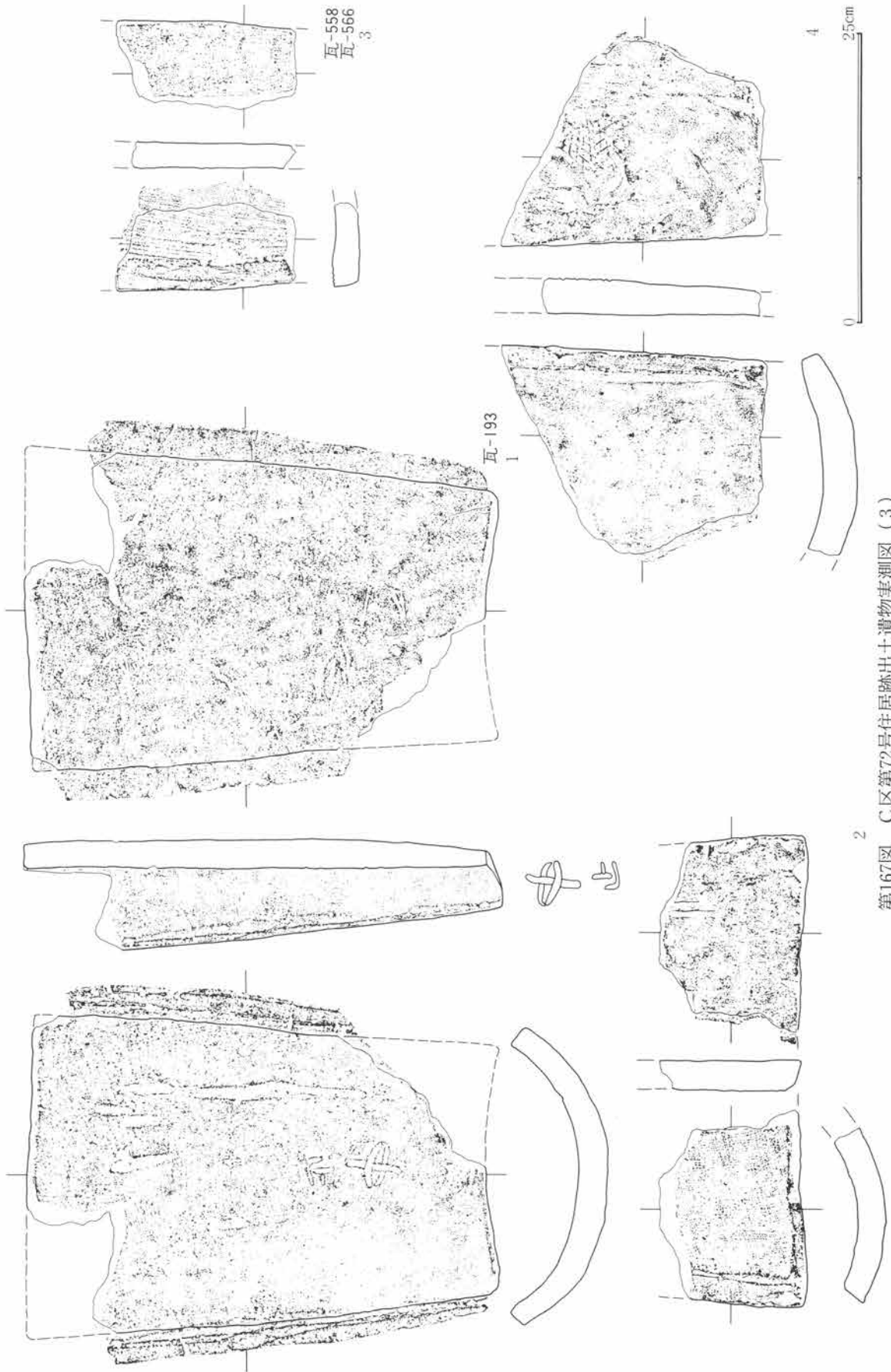
含むそれ以前と考えられるものも認められ、このことから、当住居は9世紀後半頃の廃棄と考えられる。
 所見(140住) 当住居は72・124住に切られ大半を逸している。カマドは124住に大半を破壊している。この
 為詳細は不明な点が多い。出土遺物では、宝相華文を毛刻りした金銅製飾り金具が特筆される。廃棄時期
 は、72住に切られる為9世紀前半と考えられる。所見(136住) カマドの痕跡が認められたのみである。



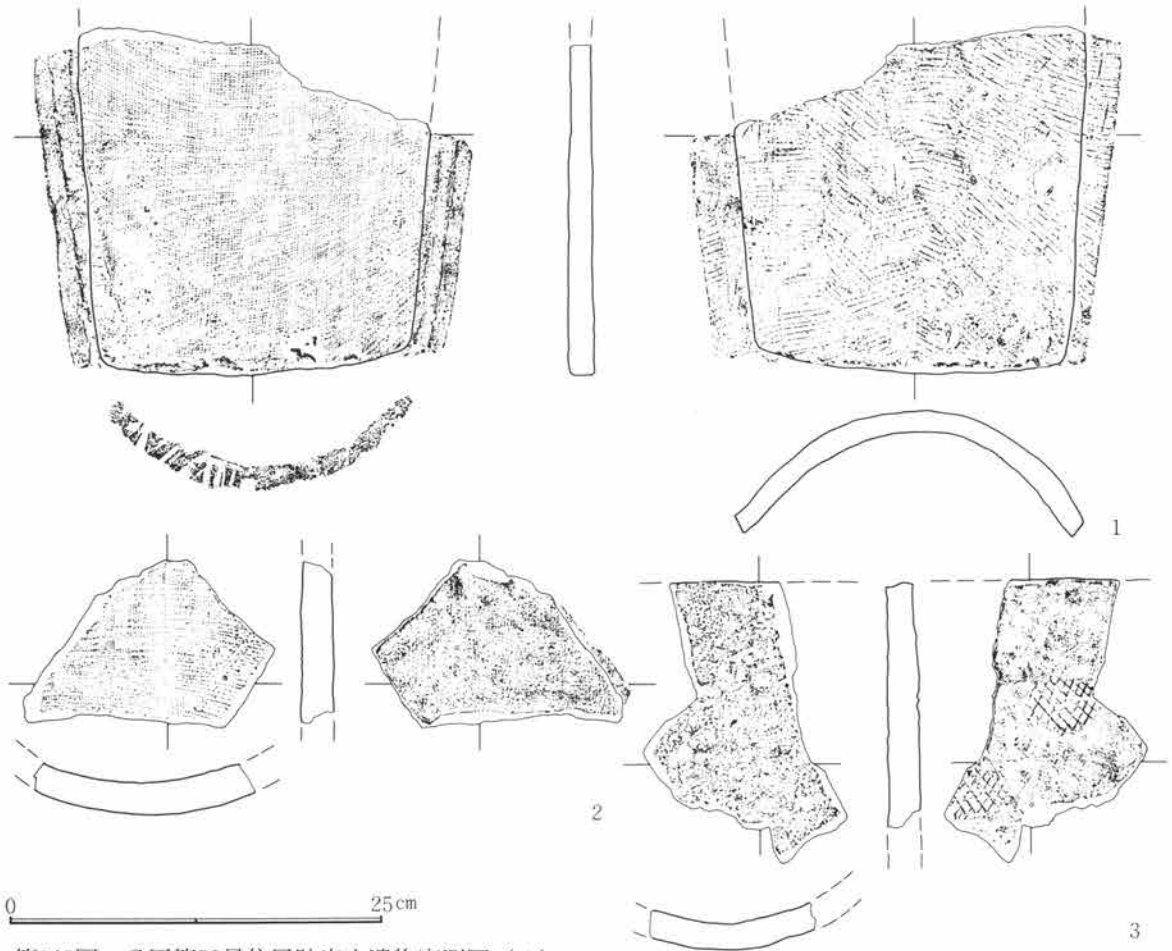
第165図 C区第72号住居跡出土遺物実測図(1)



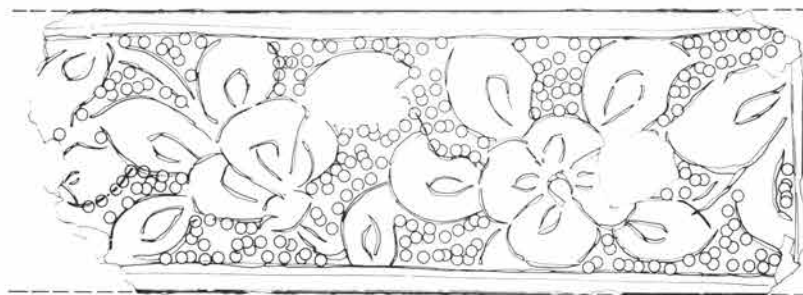
第166図 C区第72号住居跡出土遺物実測図(2)



第167図 C区第72号住居跡出土遺物美湖図(3)



第168図 C区第72号住居跡出土遺物実測図(4)

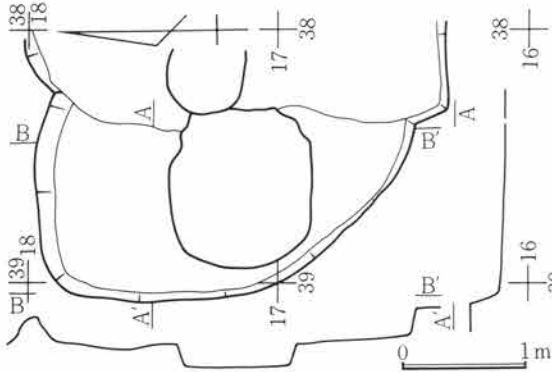


3 (× 2)



第169図 C区第140号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	C区第83号住居跡	位置	11・12—C—51・52グリッド内。	残存深度	約65cm
C89・100号住の破壊により詳細不詳。					

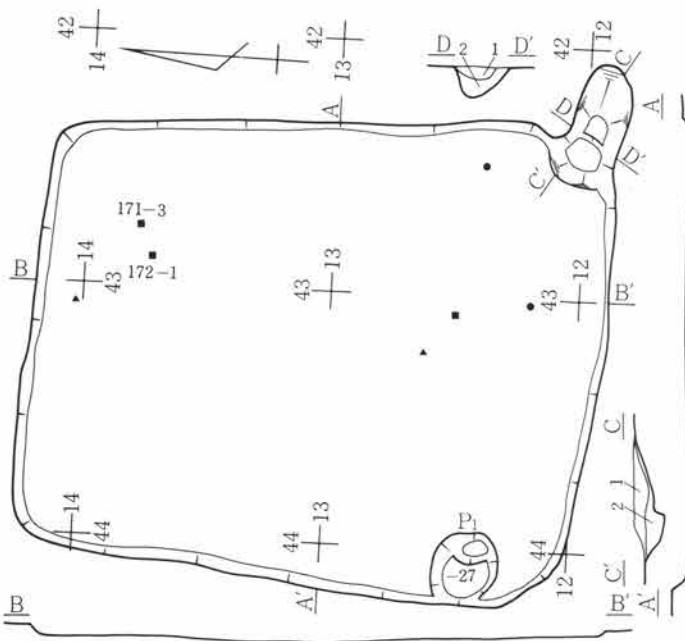


所見 当住居は、15号土拵墓（15世紀後半）と43住（11世紀前半）に切られており大半を失っている。この為詳細等に就いては不明である。

住居確認時、当住居の覆土上面には、5mm角程の炭化物粒と、白色の3mm角程の粒子が多く認められ、後者は焼骨であった。唯、動物の種が特定出来なかったが、中間地域での唯一の類例である。時期は不明である。

第170図 C区第83号住居跡実測図

遺構名称	C区第73号住居跡	位置	11~14—C—42~44グリッド内。	残存深度	約7cm
平面形態	横長方形。	規模	3.86m×4.55m	構築基準辺	東乃至北壁
壁	詳細不明。	床面	平坦。造床は認められたが不明。(下位の住居の存在により平面検出不能)。	主軸方位	北-94度-南位か
		傍竈坑・貯蔵穴	P ₁ 。円形状。54×50cm・深度-27cm。		



所見 当住居は67・143住を切り構築している。住居は全体に遺存が不良である。

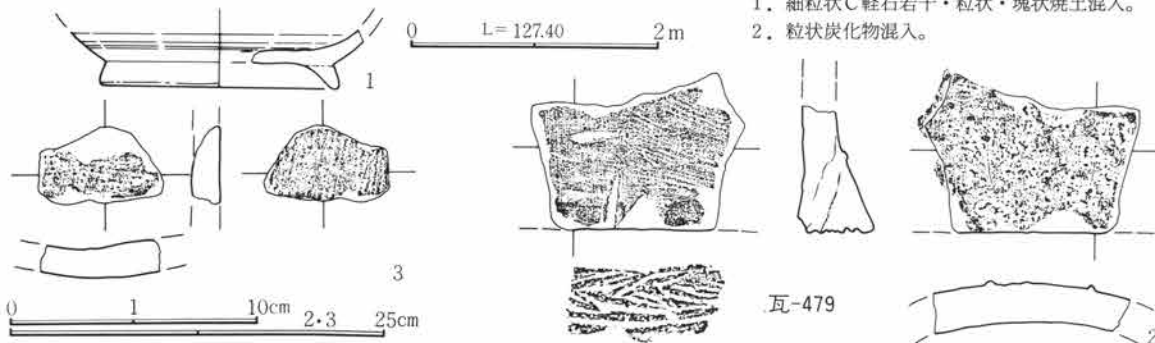
カマドは南東隅部に具備し、西壁南西部隅寄りの壁際で貯蔵穴（P₁）と思われるピットが検出されている。

カマドは遺存が非常に悪く図示したものは掘り方の底面付近の状態である。

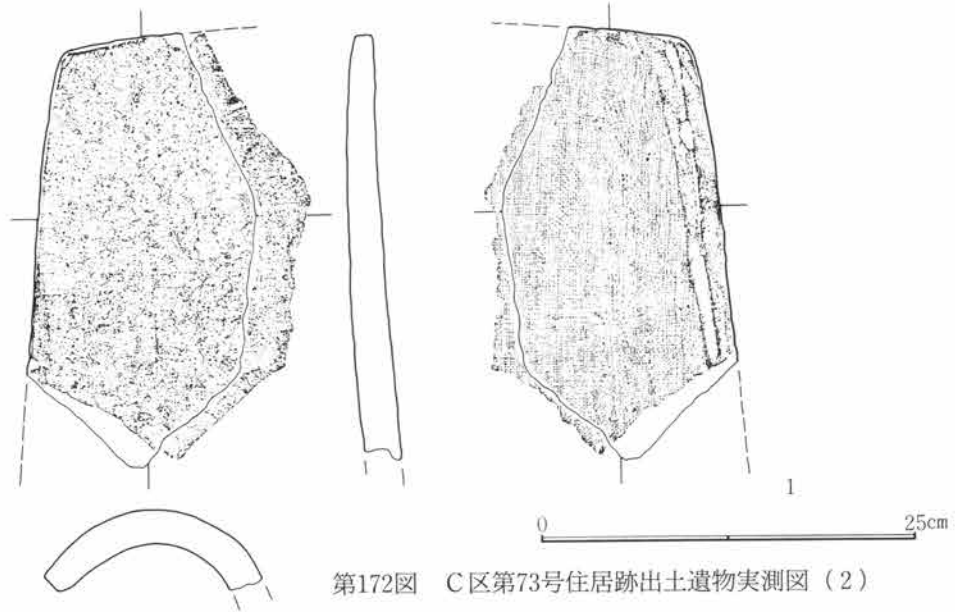
住居形状はD区の住居分類の第IV段階に対比されるが、出土遺物が非常に少ない為遺物からの追証は出来ないが、当住居が切る67住（9世紀前半）より新しいことは確実である。住居形状の示す11世紀前半代と考えられる。

層序 C73住

1. 細粒状C軽石若干・粒状・塊状焼土混入。
2. 粒状炭化物混入。

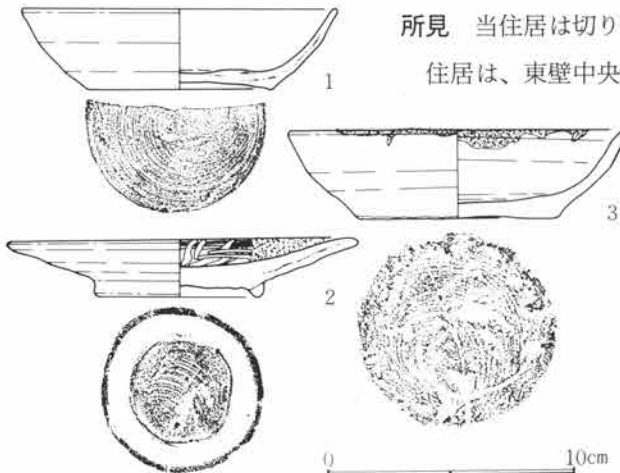


第171図 C区第73号住居跡・出土遺物実測図（1）



第172図 C区第73号住居跡出土遺物実測図(2)

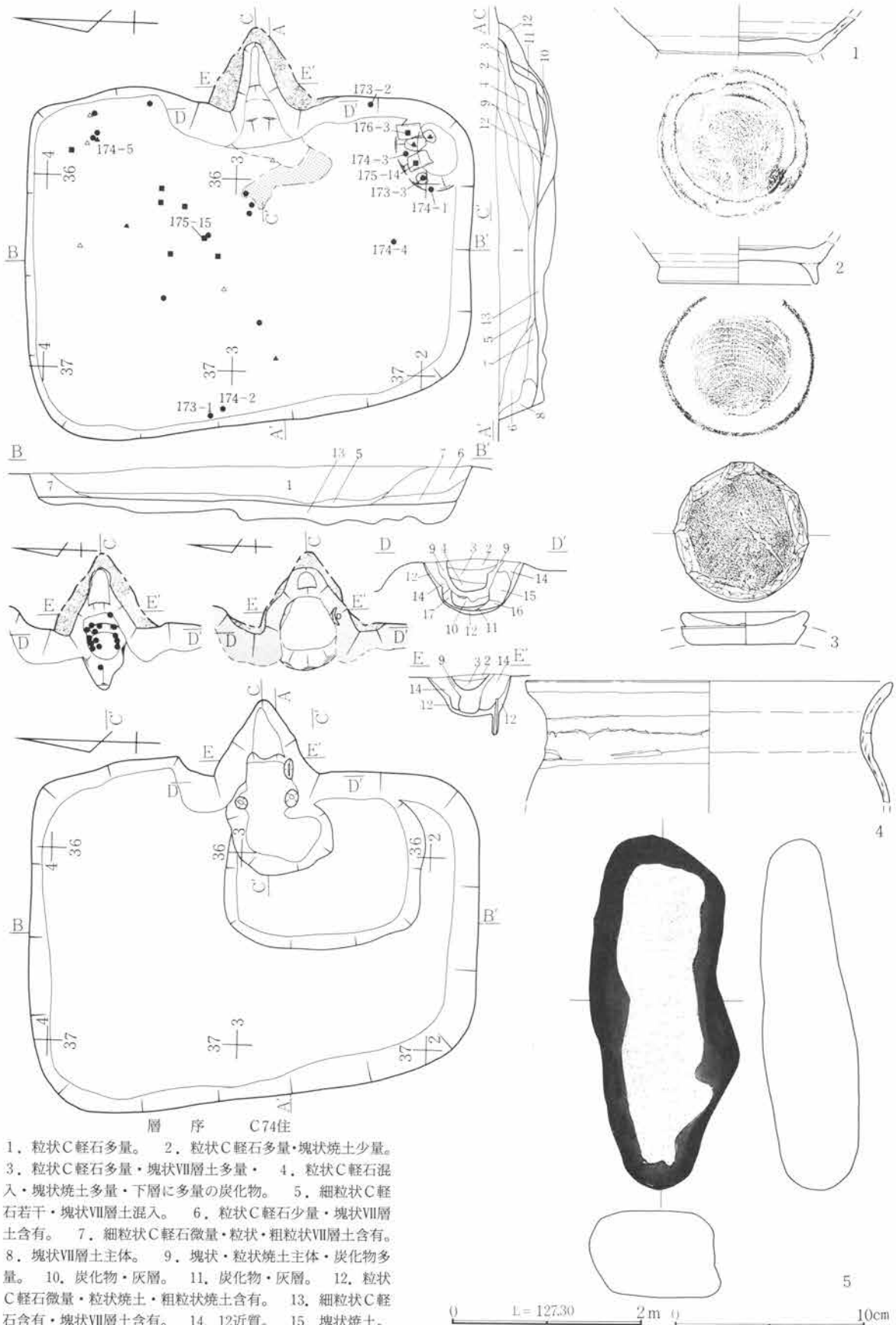
遺構名称	C区第74号住居跡		位置	1~4-C-35~37グリッド内。			残存深度	約46cm
平面形態	横長方形。	規模	3.15(3.65)m×4.69m	構築基準辺	北壁	主軸方位	北-89度-南	
壁	斜位に立ち上がる。		床面	平坦。全体に造床。				
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P ₁ 。楕円形。87×60cm・深度-8cm				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	南西部がやや深く、他の部分はほぼ同位程度に掘削されている。							
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から153cm。				主軸方位	北-84度-南	
改築	有。2回の改築が認められる。			形状	細い舌状を呈する(3期)。			
規模	全長109cm・屋外長 59cm・屋内長 50cm・袖部幅175cm・燃烧部幅 44cm・煙道部幅 25cm。							
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。1期に瓦を用いた補強材がある。							
	袖	左袖は大きく削り出されている。						
煙道	細目の溝状を呈し、奥壁は斜位に立ち上がる。			掘り方	1期の袖の補強材の据方を検出。			
遺物出土状態	住居中央部では覆土下層からの出土がやや多い。鉄器が5点出土いることが特筆される。							



第173図 C区第74号住居跡出土遺物実測図(1)

所見 当住居は切り合い関係の認められない単独住居跡である。

住居は、東壁中央にカマドを具備し、南東隅部には傍竈坑(P₁)を備える。カマドは2回の改築が認められ、第1回目の改築時に石燃烧部に瓦を据えている。又、掘り方全体の中では、両袖の先端に補強材の据え方ピットが検出されており、これも第1回目の改築時の所産と想定される。住居形態はD区の住居分類第I段階に対比されるが、出土遺物はこれより古い様相が認められ9世紀前半の廃棄と考えられる。

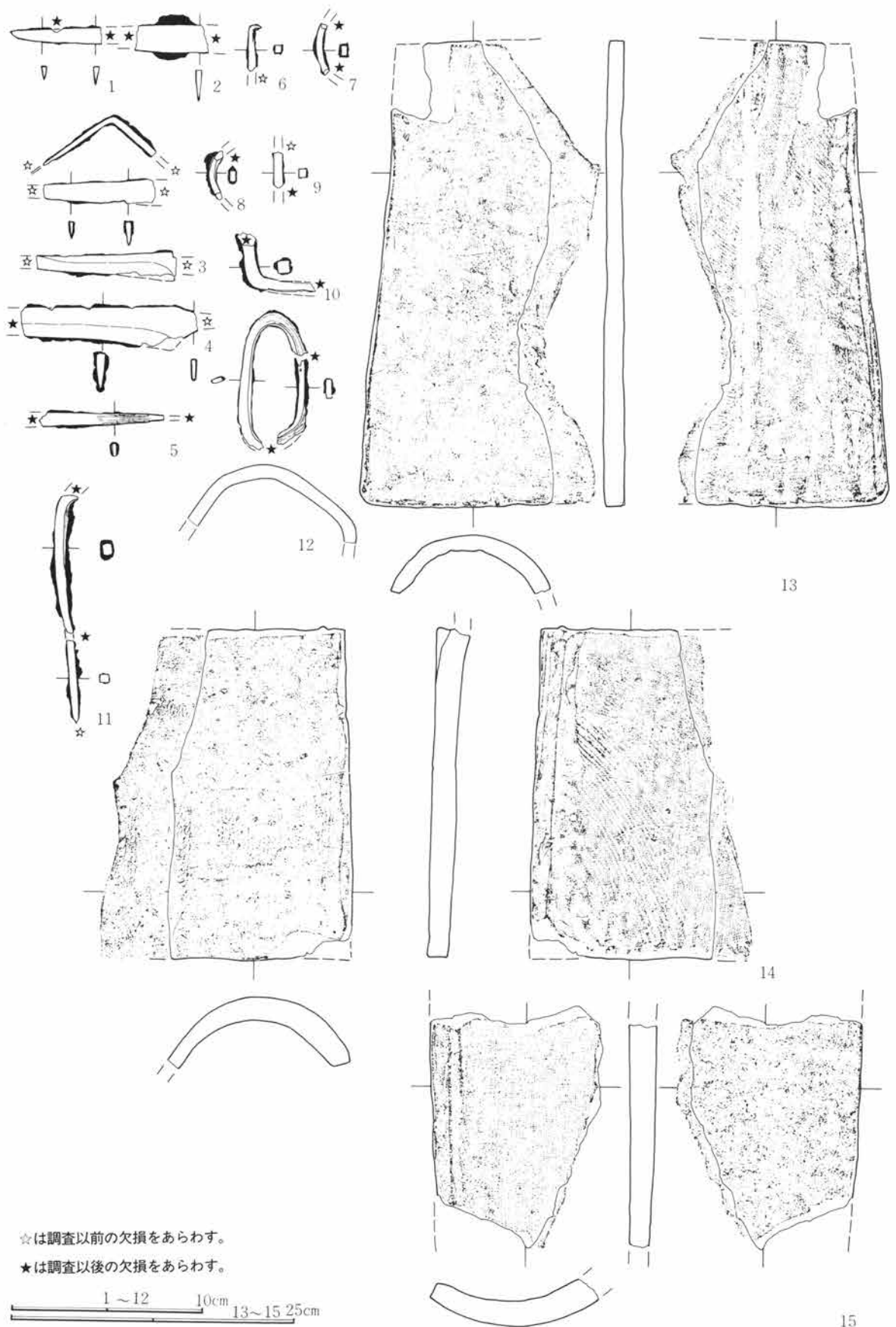


層序 C74住

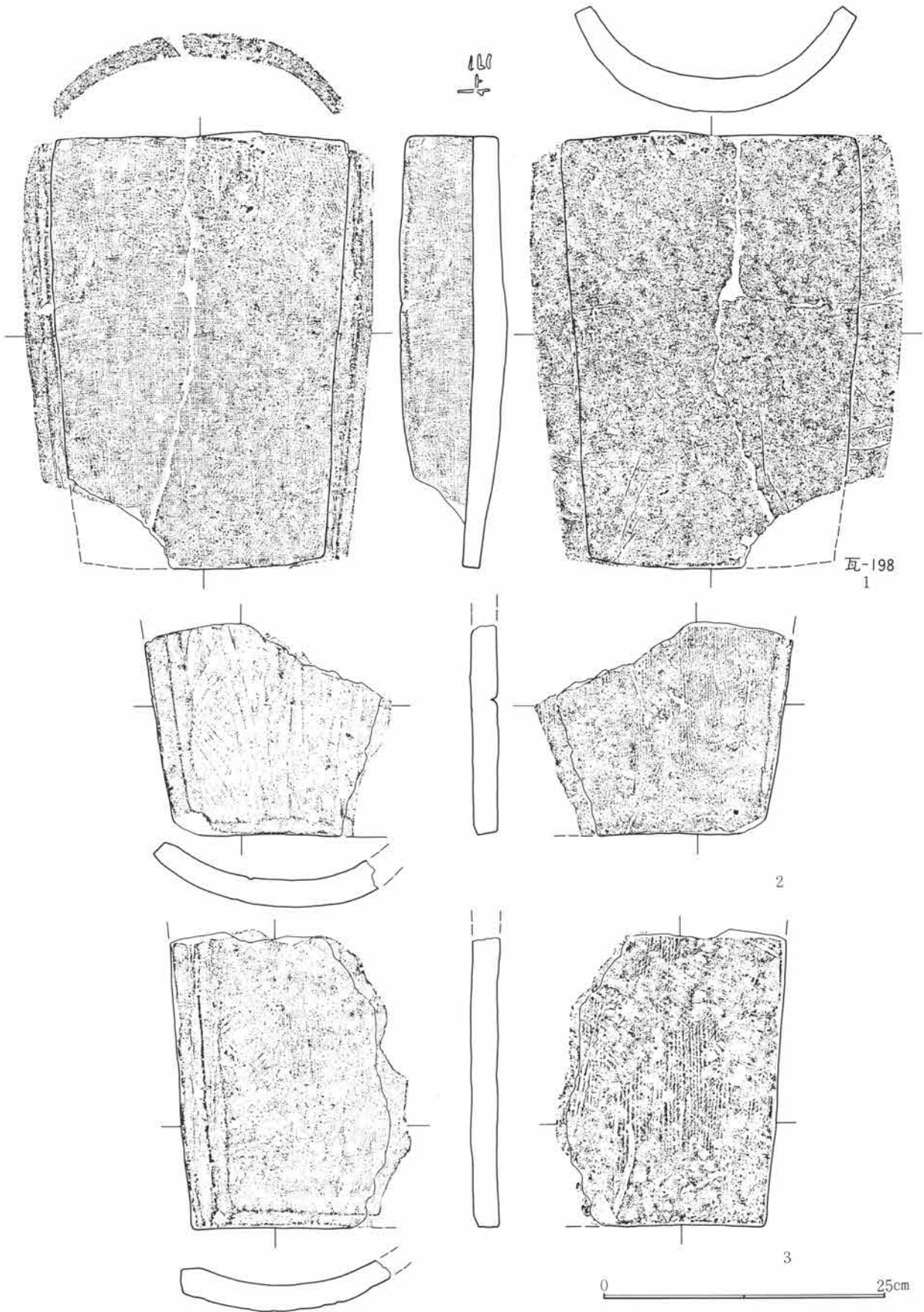
1. 粒状C軽石多量。 2. 粒状C軽石多量・塊状焼土少量。
 3. 粒状C軽石多量・塊状VII層土多量・ 4. 粒状C軽石混入・塊状焼土多量・下層に多量の炭化物。 5. 細粒状C軽石若干・塊状VII層土混入。 6. 粒状C軽石少量・塊状VII層土含有。 7. 細粒状C軽石微量・粒状・粗粒状VII層土含有。 8. 塊状VII層土主体。 9. 塊状・粒状焼土主体・炭化物多量。 10. 炭化物・灰層。 11. 炭化物・灰層。 12. 粒状C軽石微量・粒状焼土・粗粒状焼土含有。 13. 細粒状C軽石含有・塊状VII層土含有。 14, 12近質。 15. 塊状焼土。 16. 塊状VII層土・炭化物混土層。 17. 細粒状C軽石微量・塊状・粗粒状・粒状VII層土含有。

第174図 C区第74号住居跡・出土遺物実測図(2)

第4章 検出された遺構・遺物



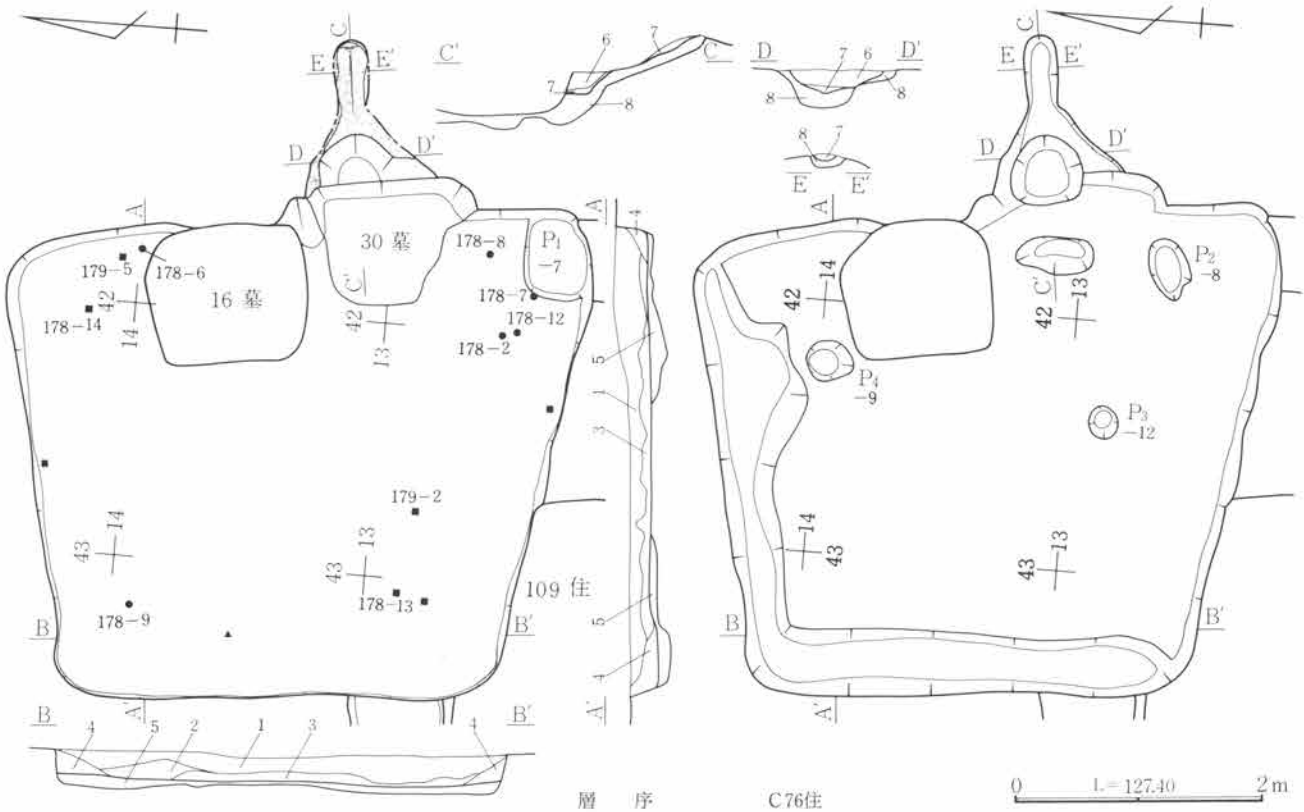
第175図 C区第74号住居跡出土遺物実測図(3)



第176図 C区第74号住居跡出土遺物実測図(4)

第4章 検出された遺構・遺物

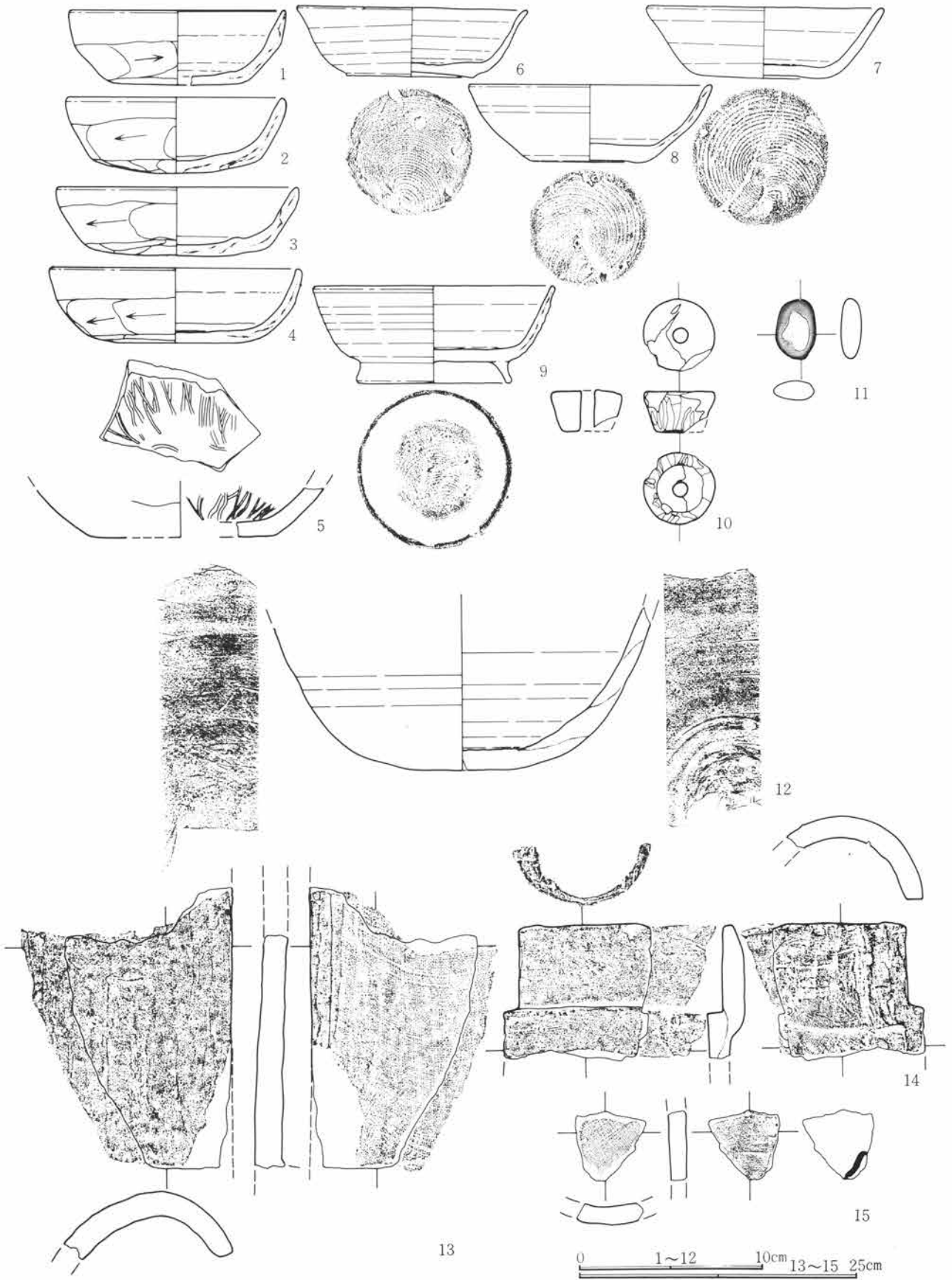
遺構名称	C区第76号住居跡		位置	12～14-C-41～43グリッド内。		残存深度	約22cm	
平面形態	梯形。	規模	3.80m×3.6・4.65m		構築基準辺	南壁	主軸方位	北-85度-南
壁	垂直気味に立ち上がる。		床面	平坦。造床は全面に及ぶ。				
壁溝	西・北壁下のは壁溝とは考え難い。		傍竈坑・貯蔵穴	P ₁ 。隅丸長方形。73×50cm・深度-7cm				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	基準構築辺の西壁から北壁にかけて幅員の広い溝状の掘り込みが認められている。							
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から95cm位か。				主軸方位	北-82度-南	
改築	不明。30号土塚墓の破壊により不明。		形状	広い舌状を呈し、細い溝状の煙道を備える。				
規模	全長163cm?・屋外長141cm・屋内長 22cm?・袖部幅 ?・燃烧部幅 60cm・煙道部幅 25cm。							
焚口・燃烧部	扇状を呈すると考えられ、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。詳細不明。							
	袖	左袖が痕跡程度に残存する。						
煙道	仰角20度程で立ち上がる。		掘り方	燃烧部の一部が残存するのみで詳細不明。				
遺物出土状態	住居内中央部での出土が少なく、四壁周辺での出土がやや有り床直で完形品が含まれる。							



1. 粒状C軽石含有。 2. 細粒状C軽石若干・粒状VII層土多量。 3. 2近質。 4. 微粒状C軽石微量・粒状VII層土混入。
 5. 細粒状C軽石含有・塊状・粒状VII層土混入。 6. 細粒状C軽石含有・粒状焼土含有・粒状VII層土含有。 7. 粒状焼土混入・粒状炭化物含有・灰混入。

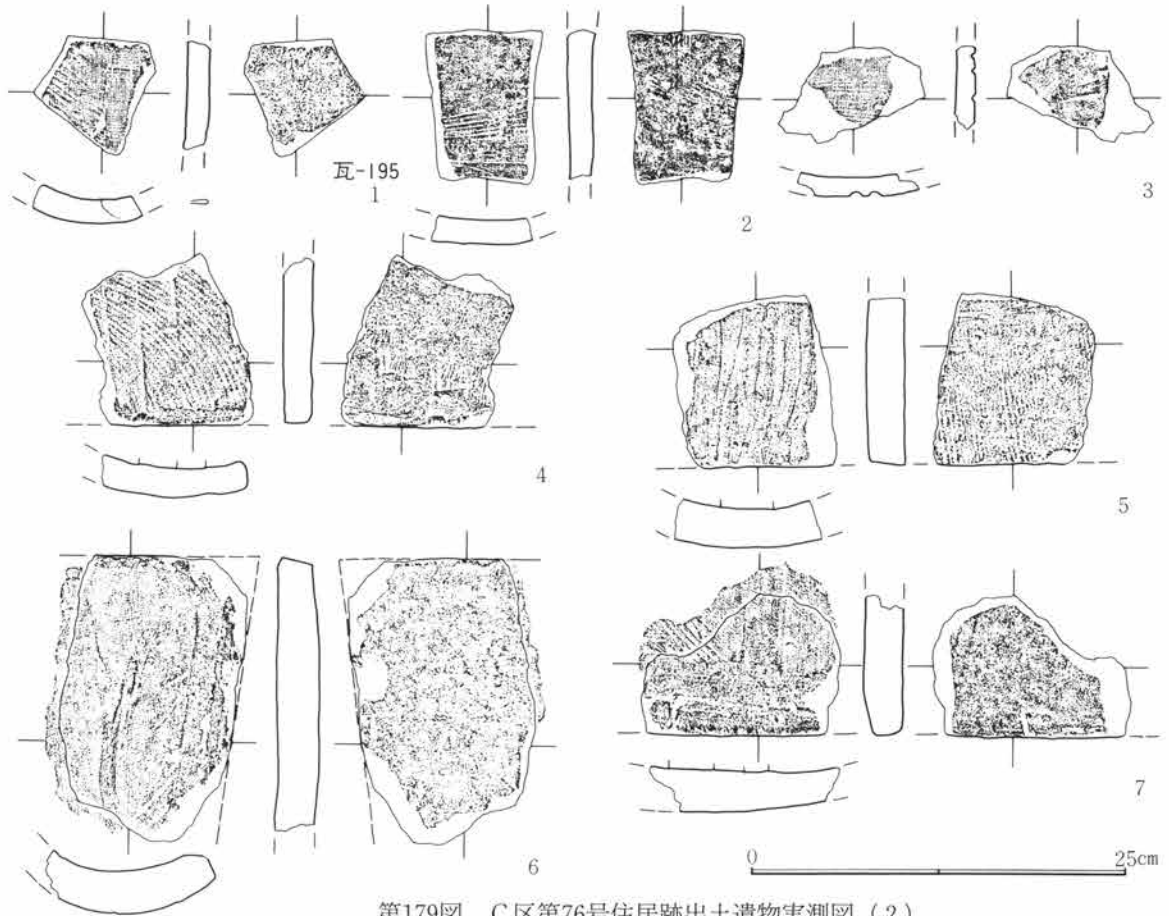
第177図 C区第76号住居跡実測図

所見 当住居は、16・30号土塚墓（15世紀後半～16世紀前）・73住に切られている。カマドはこの30号土塚墓により大半を失っている。住居は、カマドを東壁中央より若干南東隅部に寄り、南東隅部では傍竈坑(P₁)が検出されている。住居形状はD区の住居分類の第I段階に対比され、出土遺物は、第I段階より古い様相が認められることにより、当住居は、9世紀中頃の廃棄と考えられる。



第178図 C区第76号住居跡出土遺物実測図(1)

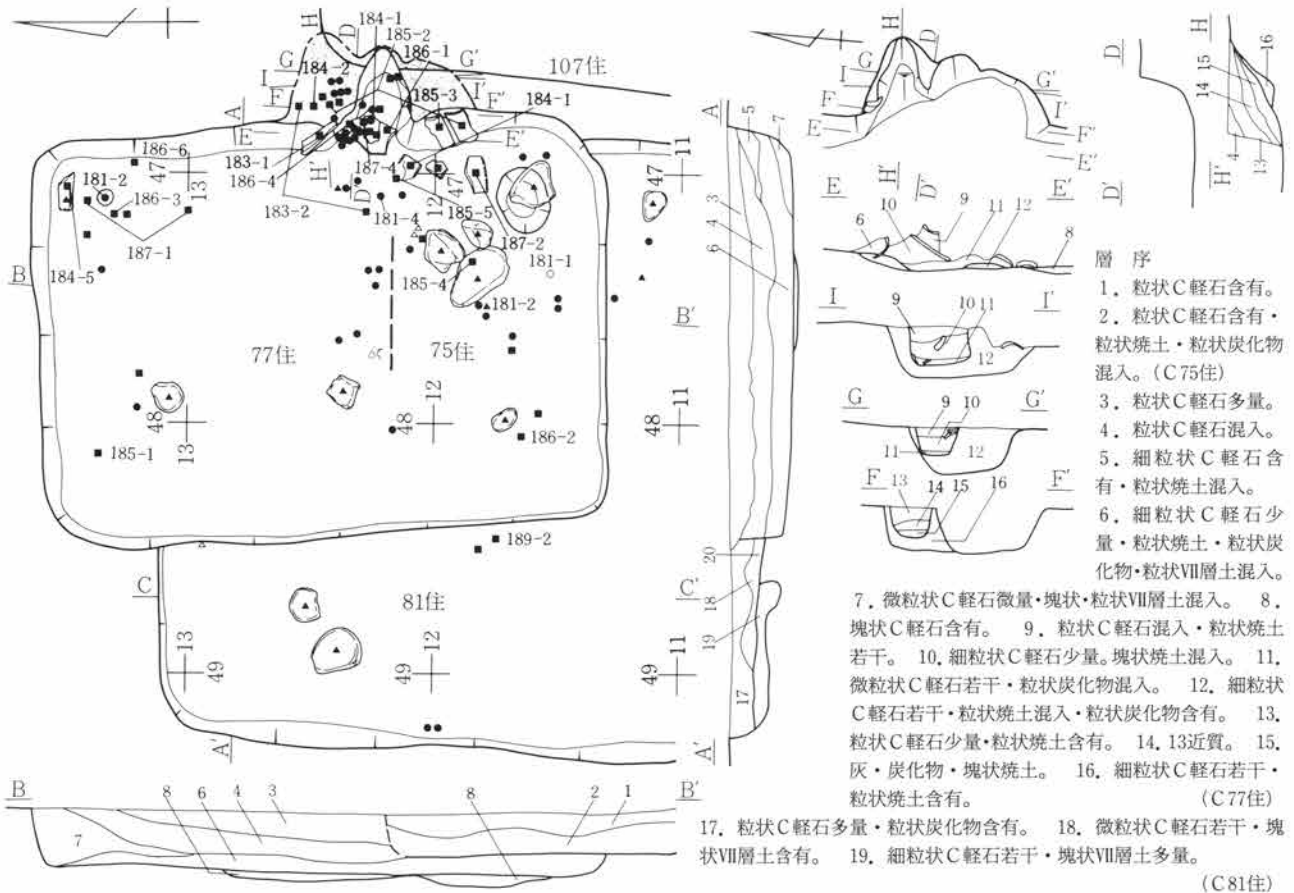
第4章 検出された遺構・遺物



第179図 C区第76号住居跡出土遺物実測図(2)

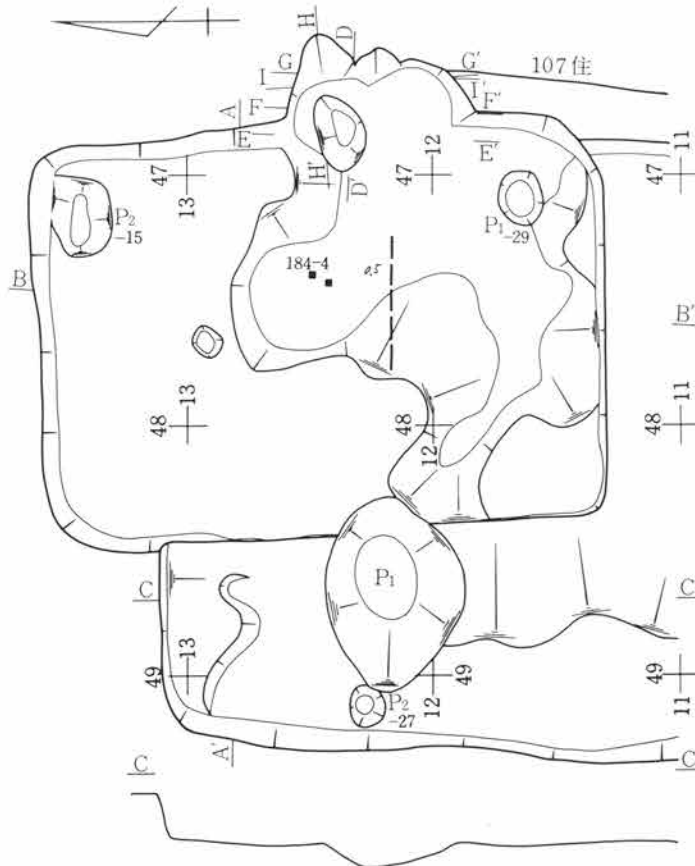
遺構名称	C区第77号住居跡		位置	11~13-C-46~48グリッド内。		残存深度	約50cm
平面形態	横長方形。	規模	3.32m×4.55m	構築基準辺	南乃至西壁	主軸方位	北-86度-南
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	平坦。南側半に造床が認められる。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P ₁ か。不整楕円形状。52×37cm・深度-29cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	南半部で顕著であるが、全体的に比較的浅い。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から125cm。			主軸方位	北-91度-南	
改築	有。2回の改修が認められる。			形状	細目の舌状を呈する。		
規模	全長 80cm・屋外長 53cm・屋内長 27cm・袖部幅103cm・燃烧部幅 44cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。			袖	ほとんど認められないが、瓦による補強が顕著である。		
煙道	立ち上がりの一部のみが検出されている。			掘り方	明らかな形状は把握されなかった。		
遺物出土状態	カマド周辺・カマド内に多い。他は覆土内から散漫に出土している。						

遺構名称	C区第81号住居跡		位置	10~13-C-46~49グリッド内。		残存深度	約25cm
平面形態	正方形か。	規模	4.86m?×4.20+αm	構築基準辺	不分明	主軸方位	北-92度-南位か
C区77号住の破壊により詳細不詳。							



0 L=127.50 2m

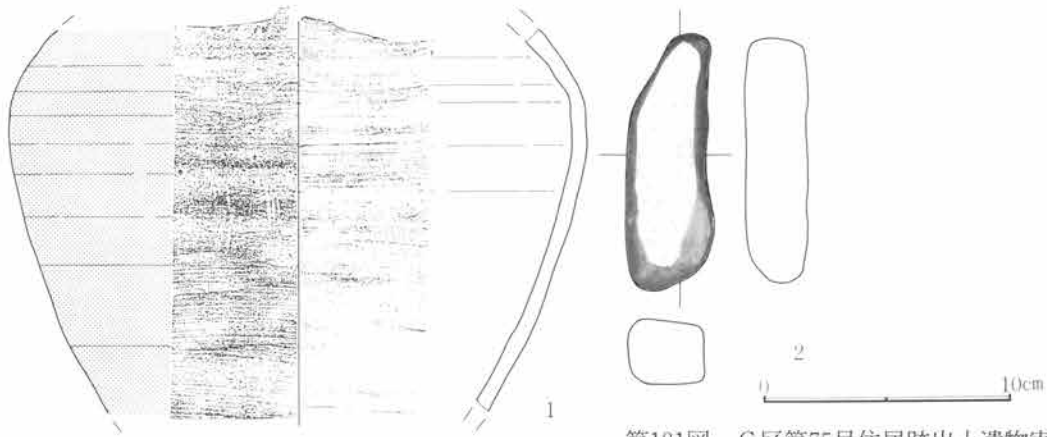
第180図 C区第75・77・81号住居跡実測図



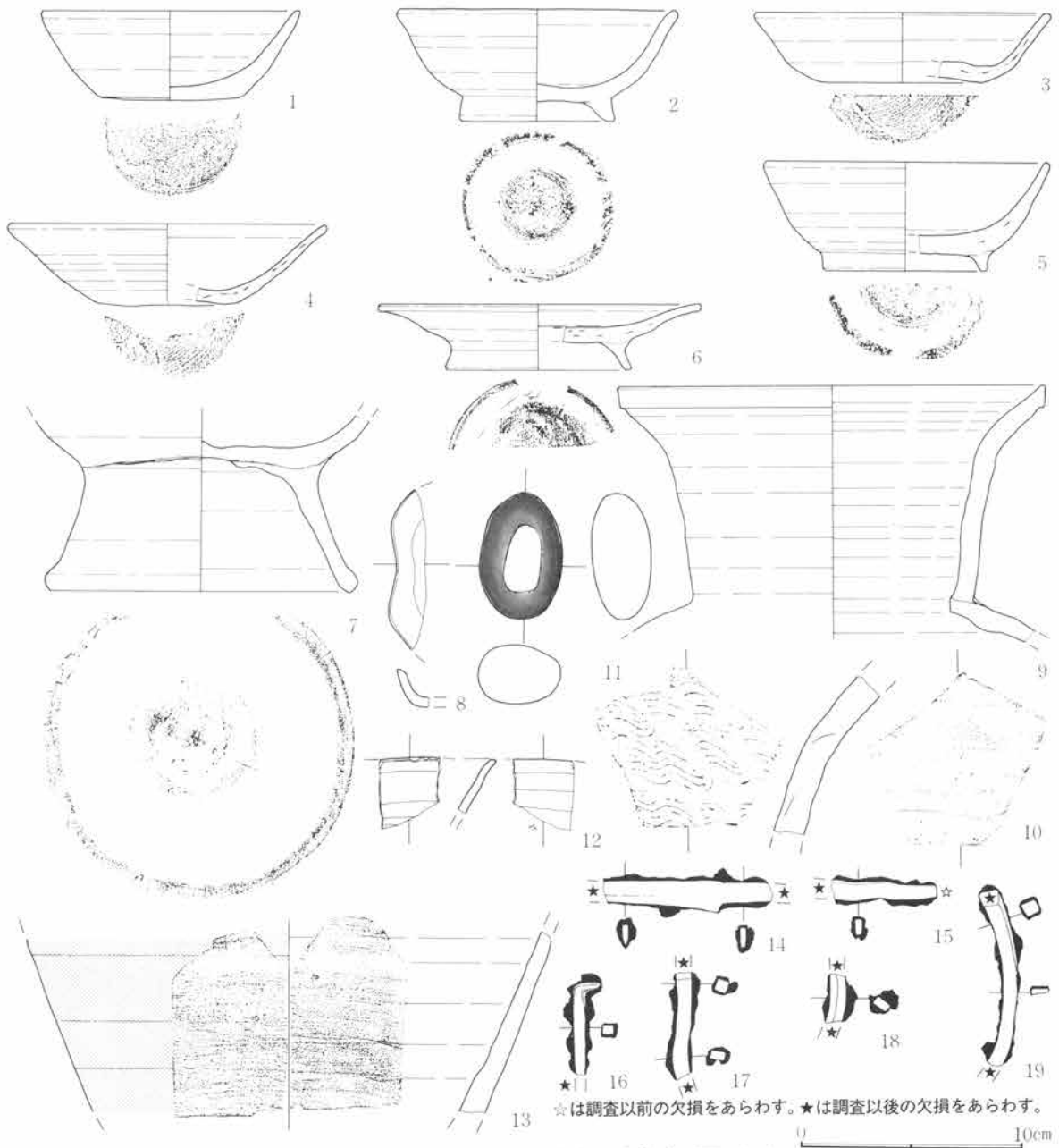
所見 (75住) 当住居は、調査の断層断面で確認された住居で、平面検出は調査の不手際で出来なかった。この為、形状・規模等も不明である。

所見 (77住) 当住居は上述の75住に切られ81住を切る。住居は横長方形を呈する大型の住居である。カマドは、東壁中央部よりやや南東隅部寄りに具備し、2回の改築が認められた。この中で、構築当初のカマドは東壁中央部に当り、第1回目の改築時に南東隅部側に移設し、廃棄時の第2回目の改築は両者の中央部に構築している。住居形状はD区の第I段階に対比され、出土遺物も同様な様相が認められる。このことから、当住居の廃棄は9世紀後半と考えられる。

所見 (81住) 当住居は上述の75・77住に切られており、大半を失っている。又、南壁側は農業用水路下に当り未調査となっており住居形状は不分明である。出土遺物には、9世紀前のものが多い。

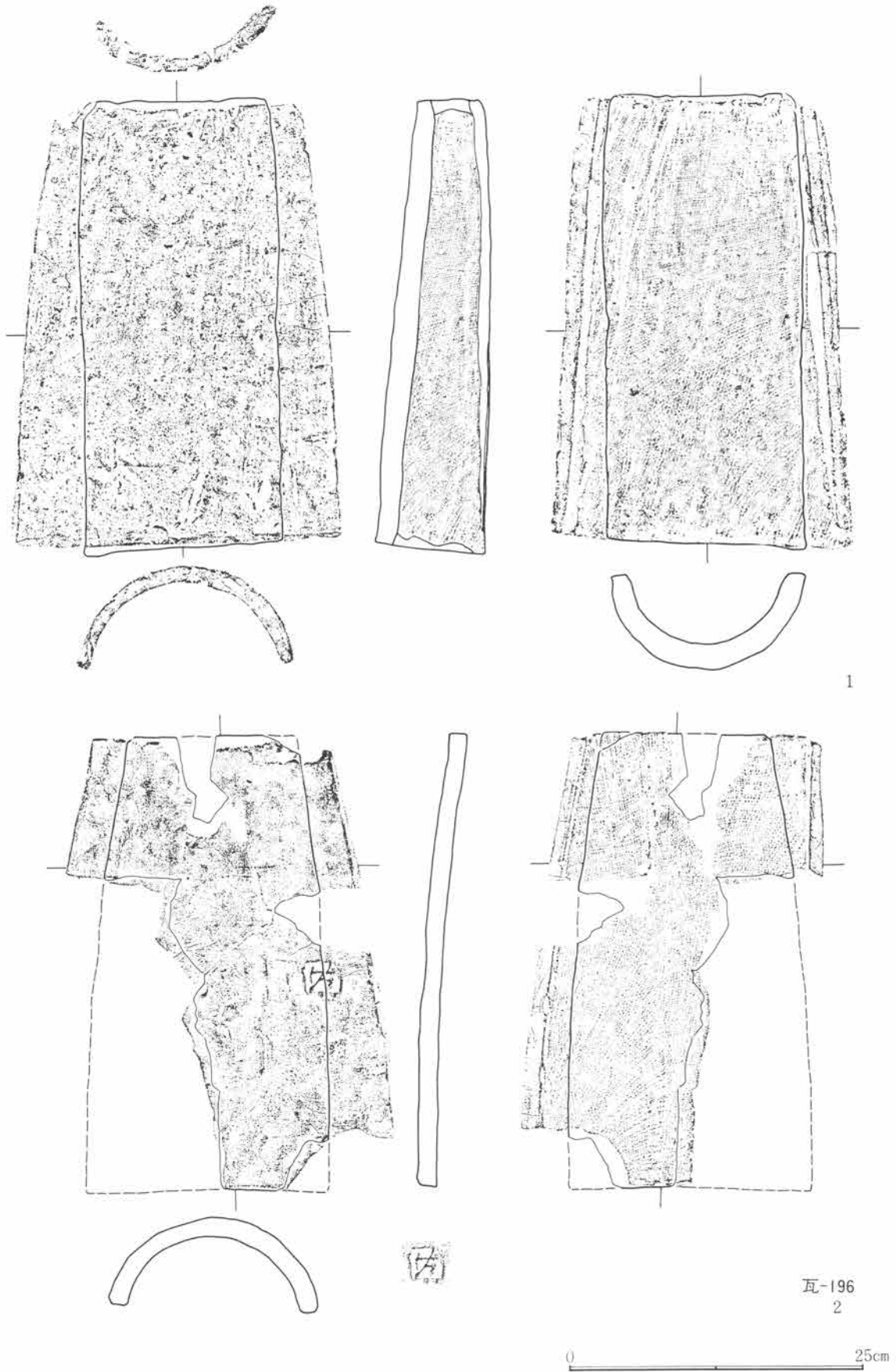


第181図 C区第75号住居跡出土遺物実測図

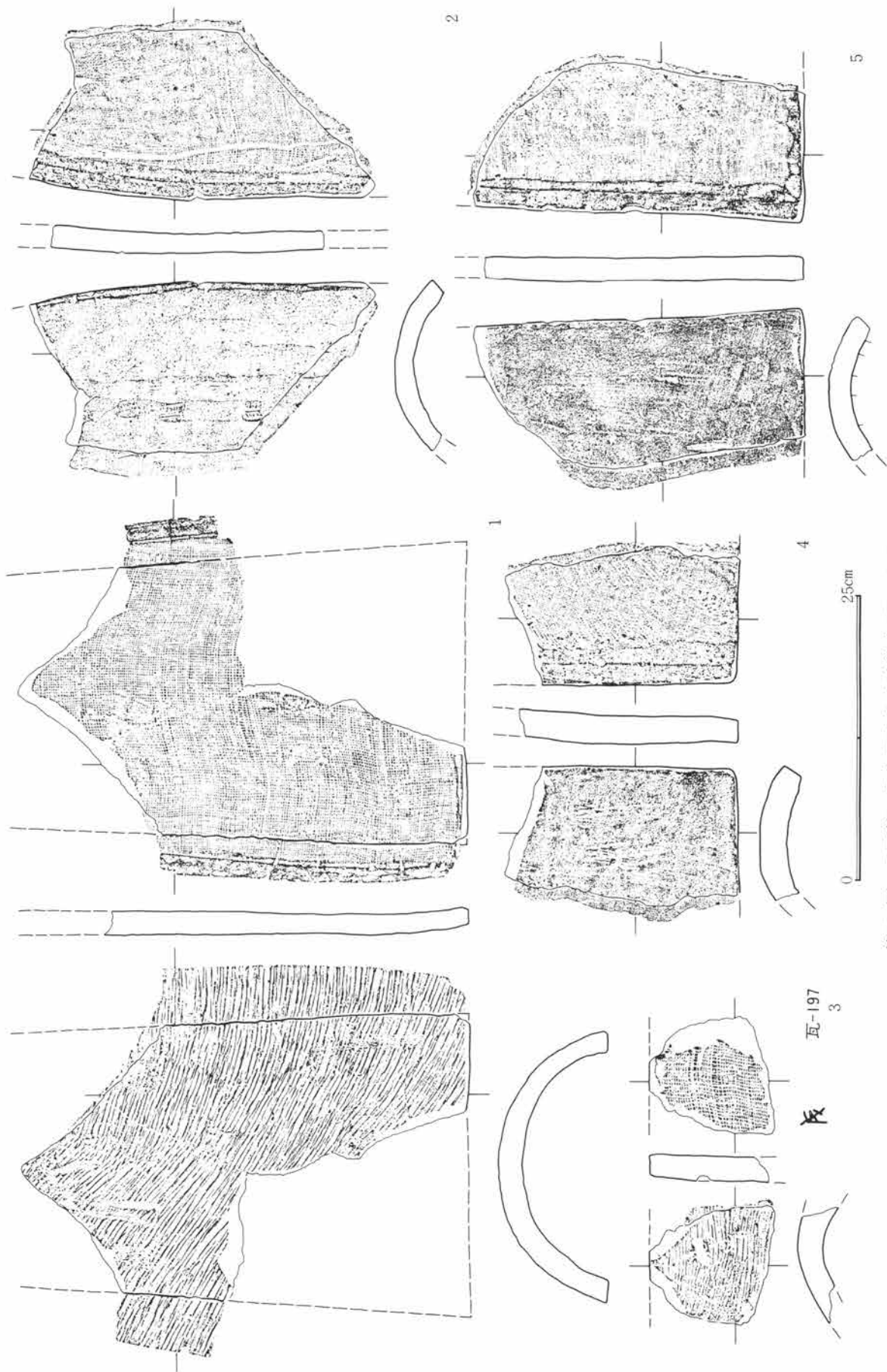


第182図 C区第77号住居跡出土遺物実測図（1）

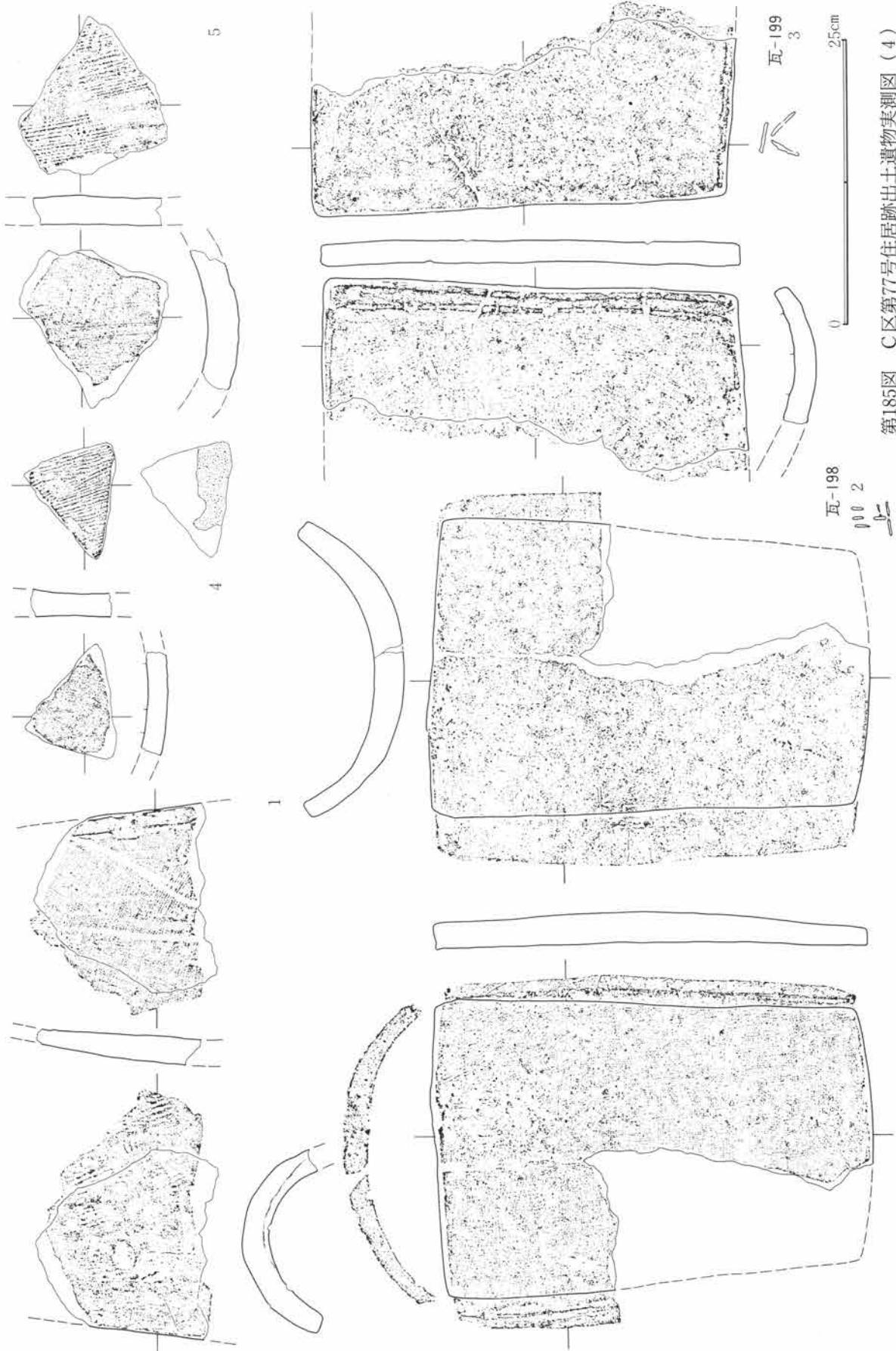
☆は調査以前の欠損をあらわす。★は調査以後の欠損をあらわす。



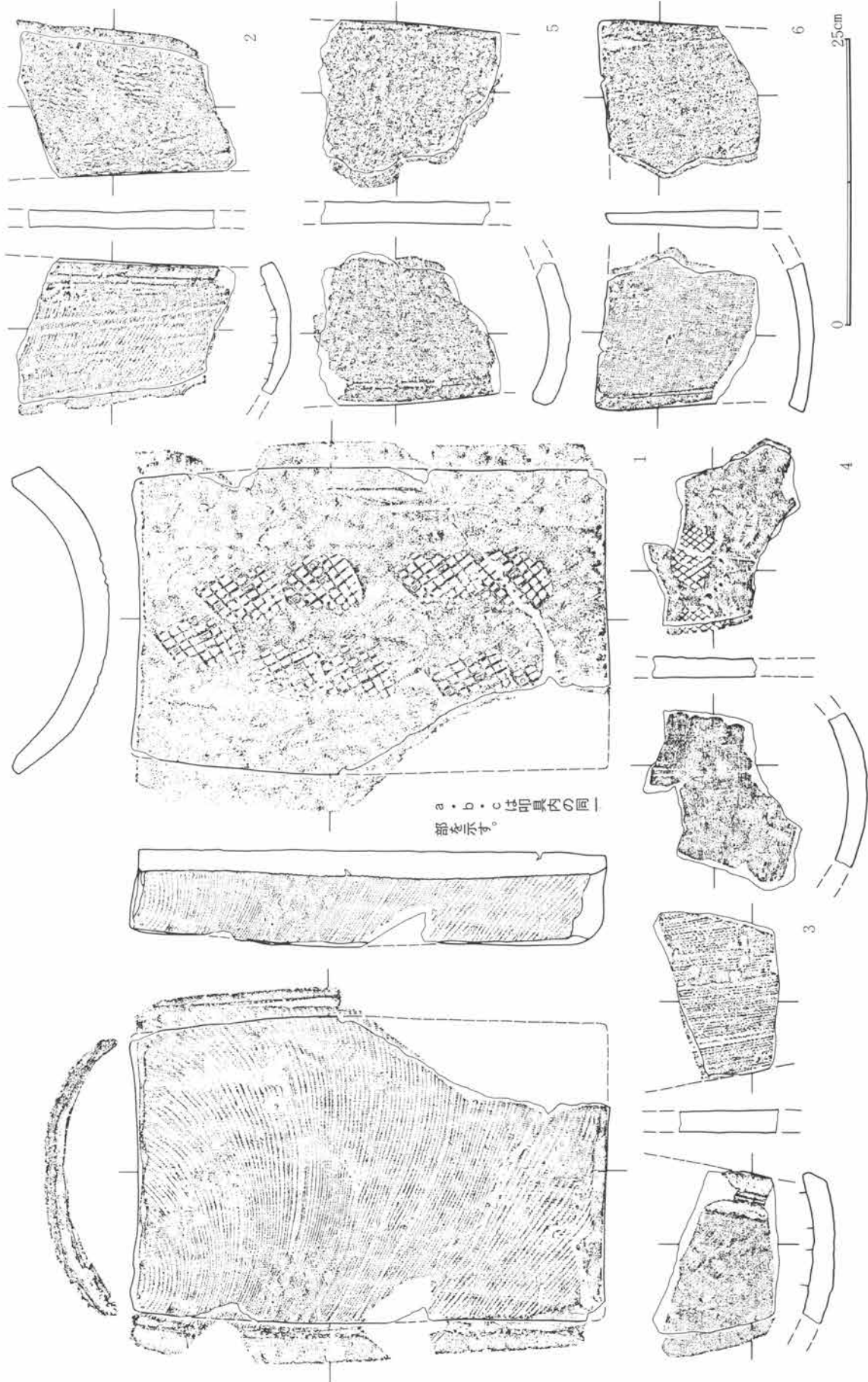
第183図 C区第77号住居跡出土遺物実測図(2)



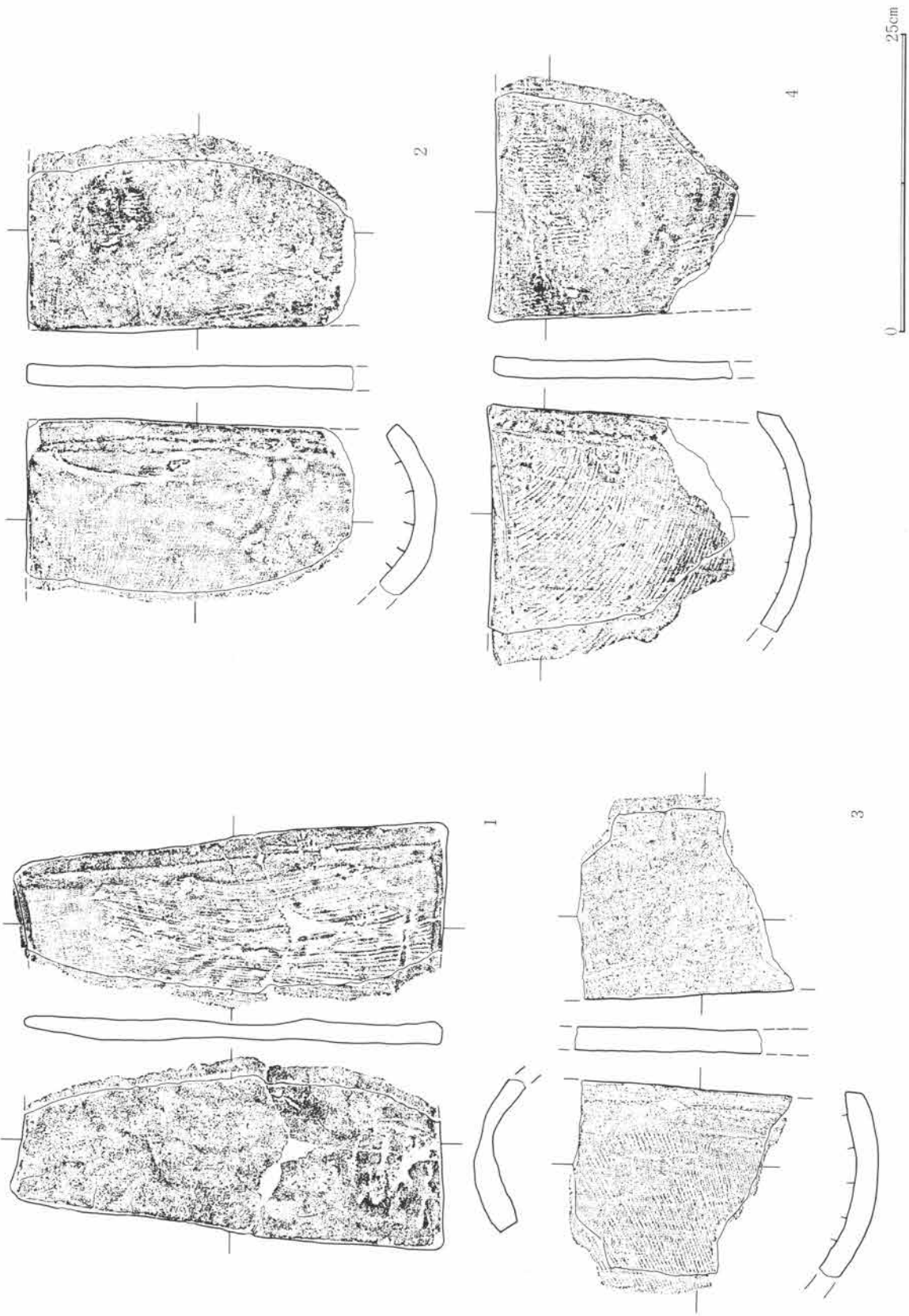
第184図 C区第77号住居跡出土遺物実測図(3)



第185図 C区第77号住居跡出土遺物実測図(4)

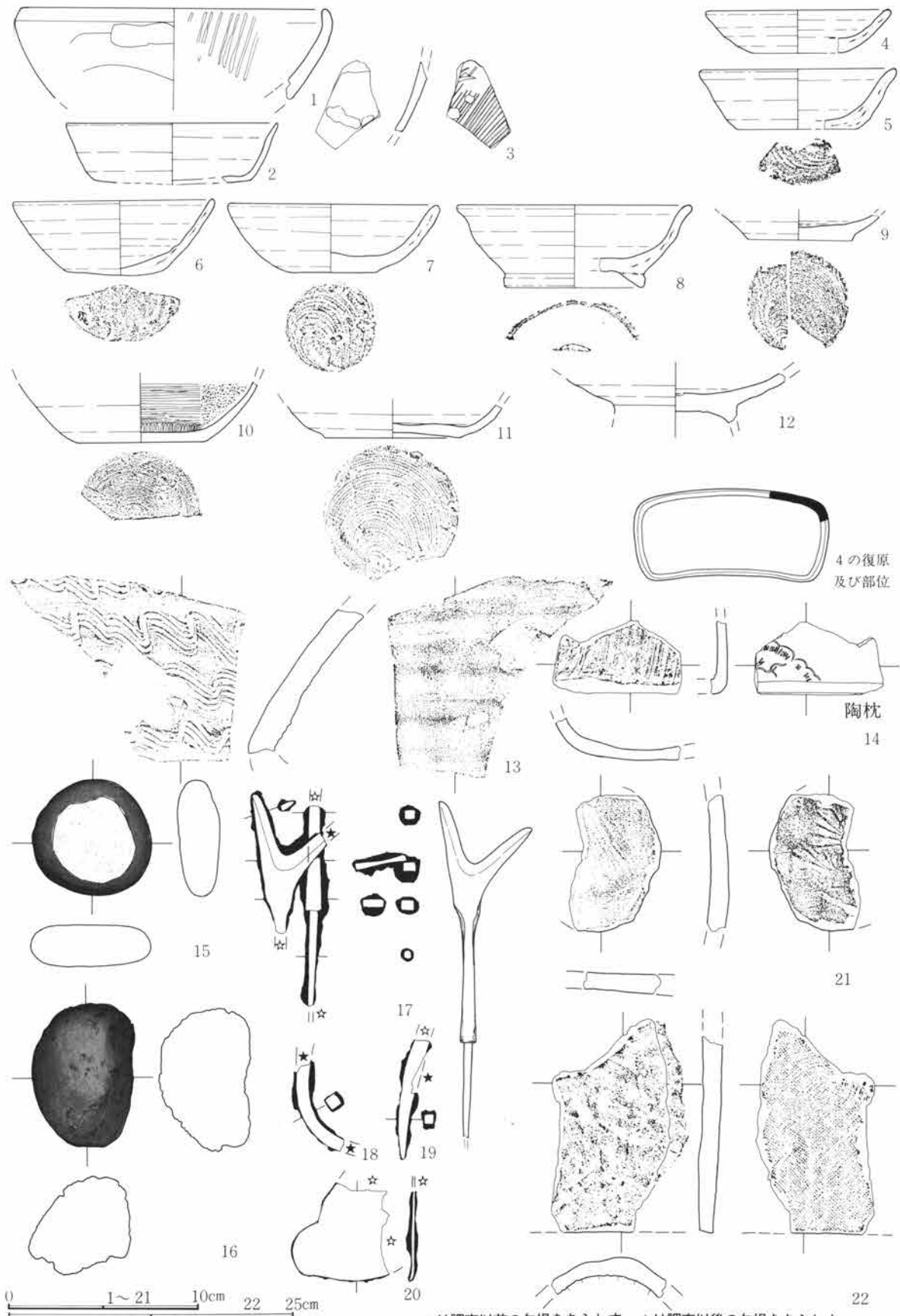


第186図 C区第77号住居跡出土遺物実測図(5)

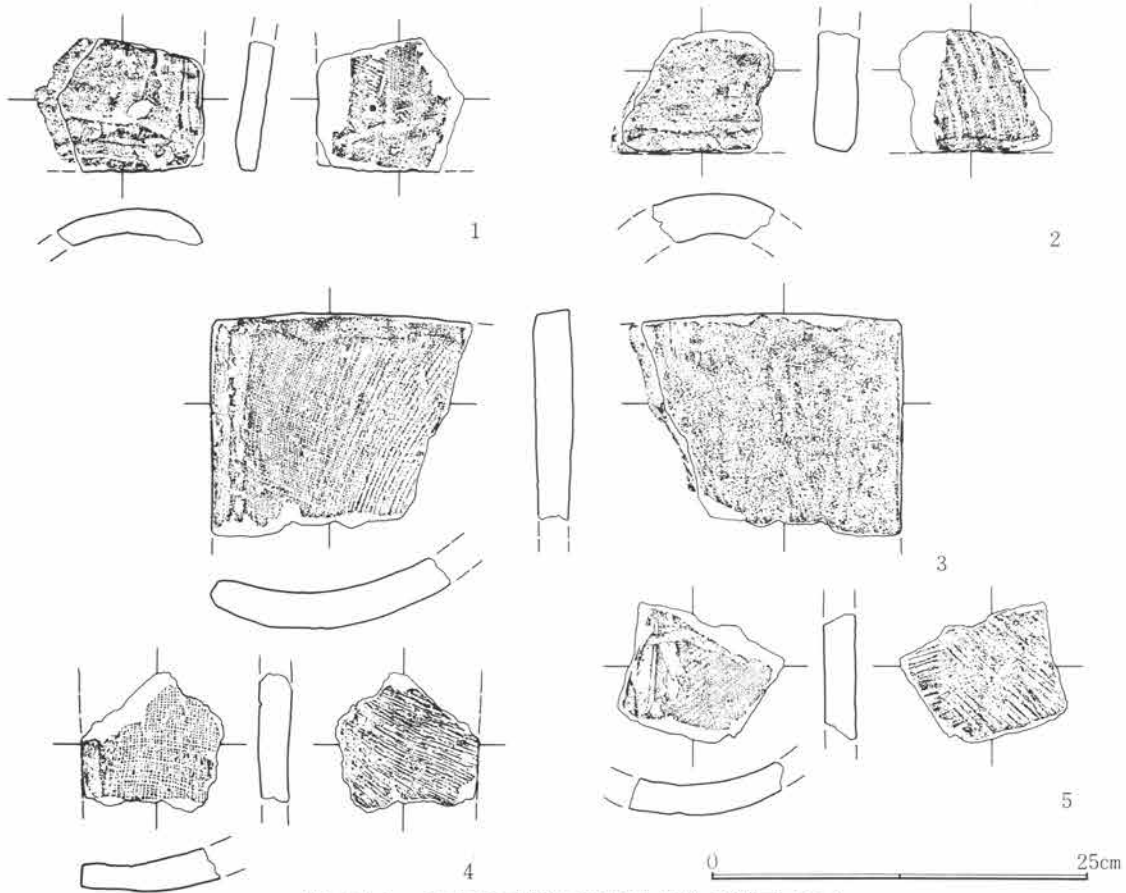


第187図 C区第77号住居跡出土遺物実測図(6)

第4章 検出された遺構・遺物



第188図 C区第81号住居跡出土遺物実測図(1)

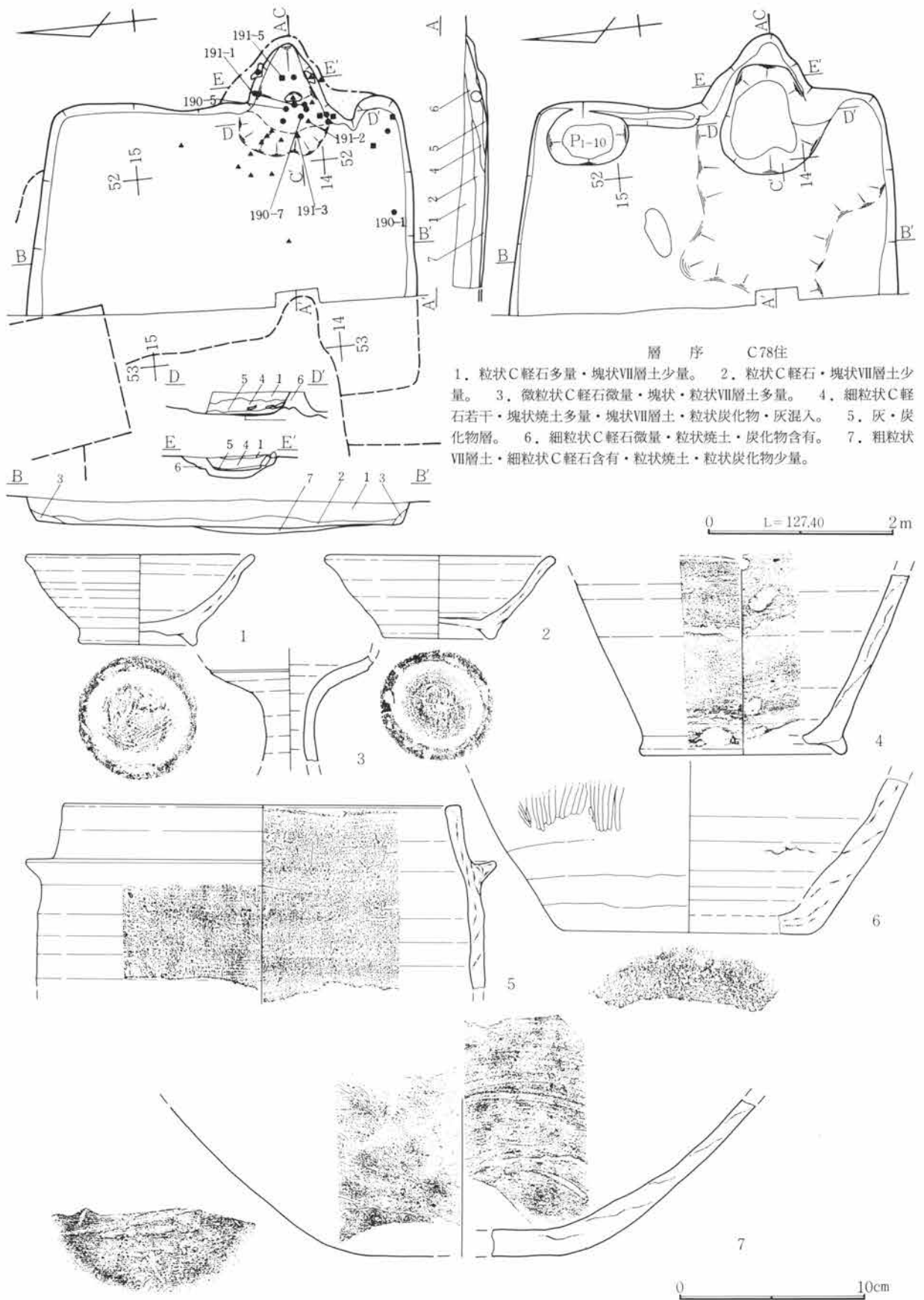


第189図 C区第81号住居跡出土遺物実測図(2)

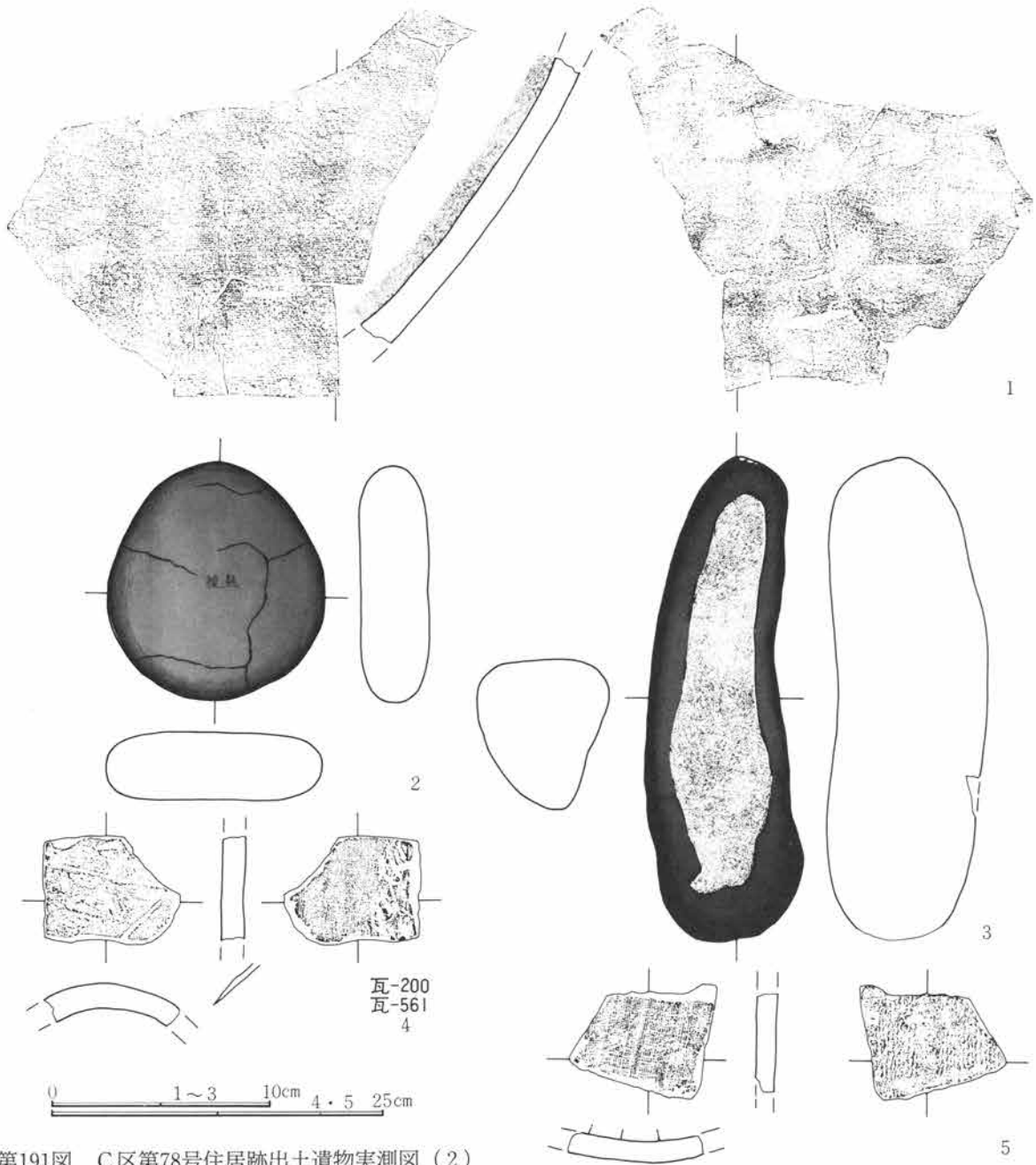
遺構名称	C区第78号住居跡		位置	13~15-C-51~53グリッド内。		残存深度	約27cm
平面形態	矩形。	規模	(3.08)m×(4.00)m	構築基準辺	北壁か	主軸方位	北-103度? -南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦。カマド前面に浅い造床。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P ₁ は用途不分明。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	カマド前面部分を中心に浅い皿状で認められている。また、東壁下で壁溝状の掘り込みも検出。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から30cm?			主軸方位	北-92度 -南	
改築	有。掘り方に図示したものが旧状に近いか?	形状	幅の広い舌状。				
規模	全長123cm・屋外長 62cm・屋内長 61cm・袖部幅143cm・燃烧部幅124cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。側壁の一部を土器・礫で補強。						
袖	右袖のみ顕著で、左袖はほとんど認められない。						
煙道	掘り方では、認められている。		形状	全体に広く燃烧部は不整形形状を呈する。			
遺物出土状態	カマド周辺で礫の出土が多く、カマド補強材と考えられる砂岩質のことが多い。						

所見 当住は、住に切られている。この住居は、中世掘立柱建物の検出に伴ない、調査区外に拡張した部分から検出された為調査実施は行なわなかった。この為、当住居は完全露呈を行なわなかった。住居は、東壁中央部より南東隅部に寄った位置にカマドを具備するが、南東隅部には傍竈坑が認められなかった。住居形状はD区の住居分類の第Ⅲ段階に対比され遺物も同様であることから、廃棄は10世紀中頃と考えられる。

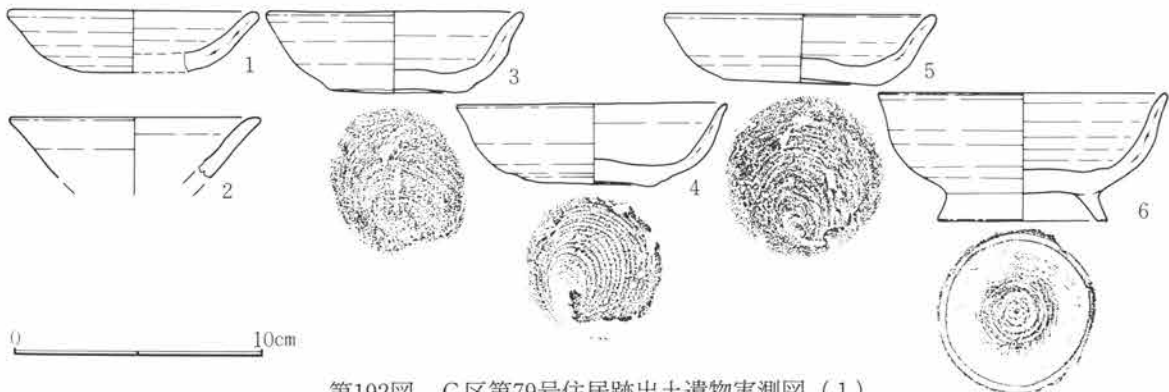
第4章 検出された遺構・遺物



第190図 C区第78号住居跡・出土遺物実測(1)



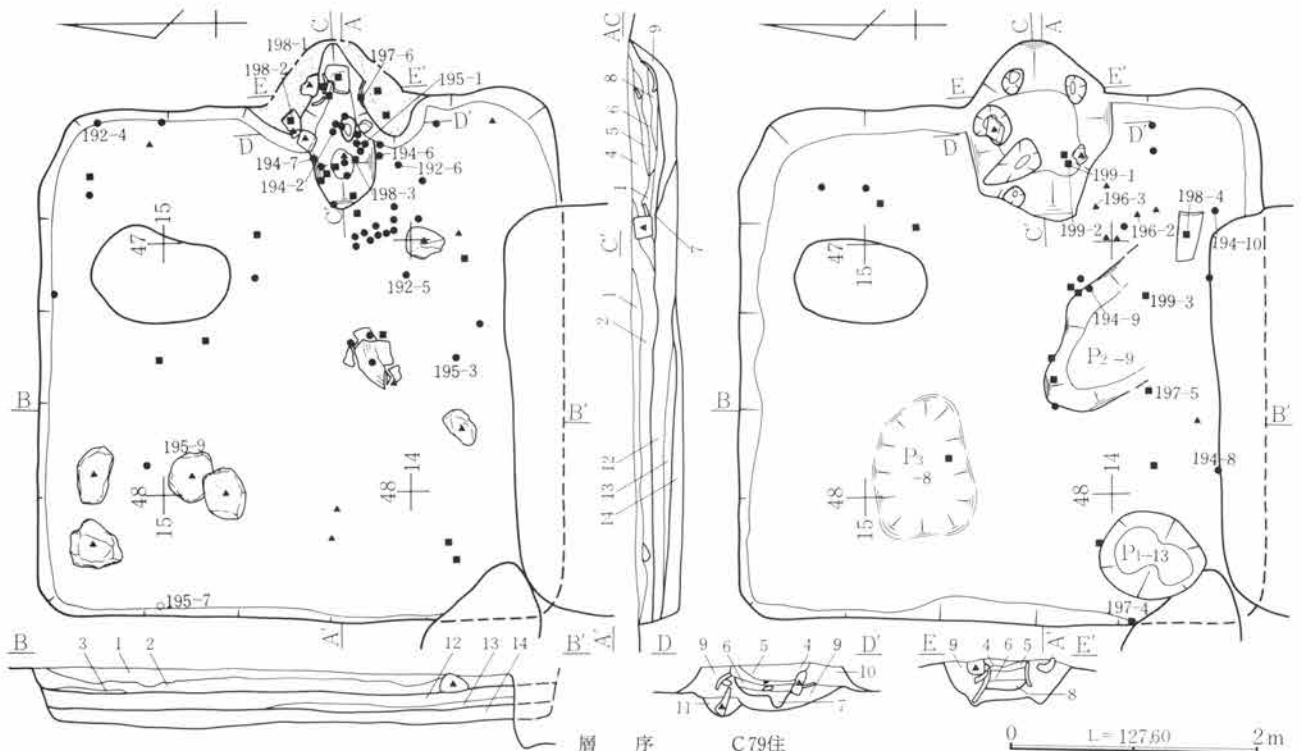
第191図 C区第78号住居跡出土遺物実測図(2)



第192図 C区第79号住居跡出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物

遺構名称	C区第79号住居跡		位置	13~15-C-46~48グリッド内。		残存深度	約21cm
平面形態	正方形。	規模	4.18m×4.08m	構築基準辺	北乃至西壁	主軸方位	北-91度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	床面は2面検出。両面共に平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	西側が西壁に向かい暖やかに傾斜する。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から1cm。			主軸方位	北-87度-南	
改築	有。掘り方左袖部の礫は改築以前の補強材。		形状	細い舌状を呈する。			
規模	全長130cm・屋外長 43cm・屋内長 87cm・袖部幅152cm・燃烧部幅 40cm・煙道部幅 18cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。両壁共に瓦・礫により補強。						
煙道	天井部(立ち上がり部)を瓦を利用している。		掘り方	全体的に方形状を呈する。			
遺物出土状態	カマド内での出土が多い。住居内では床面直上層での出土が多く、大きい礫の出土も多い。						

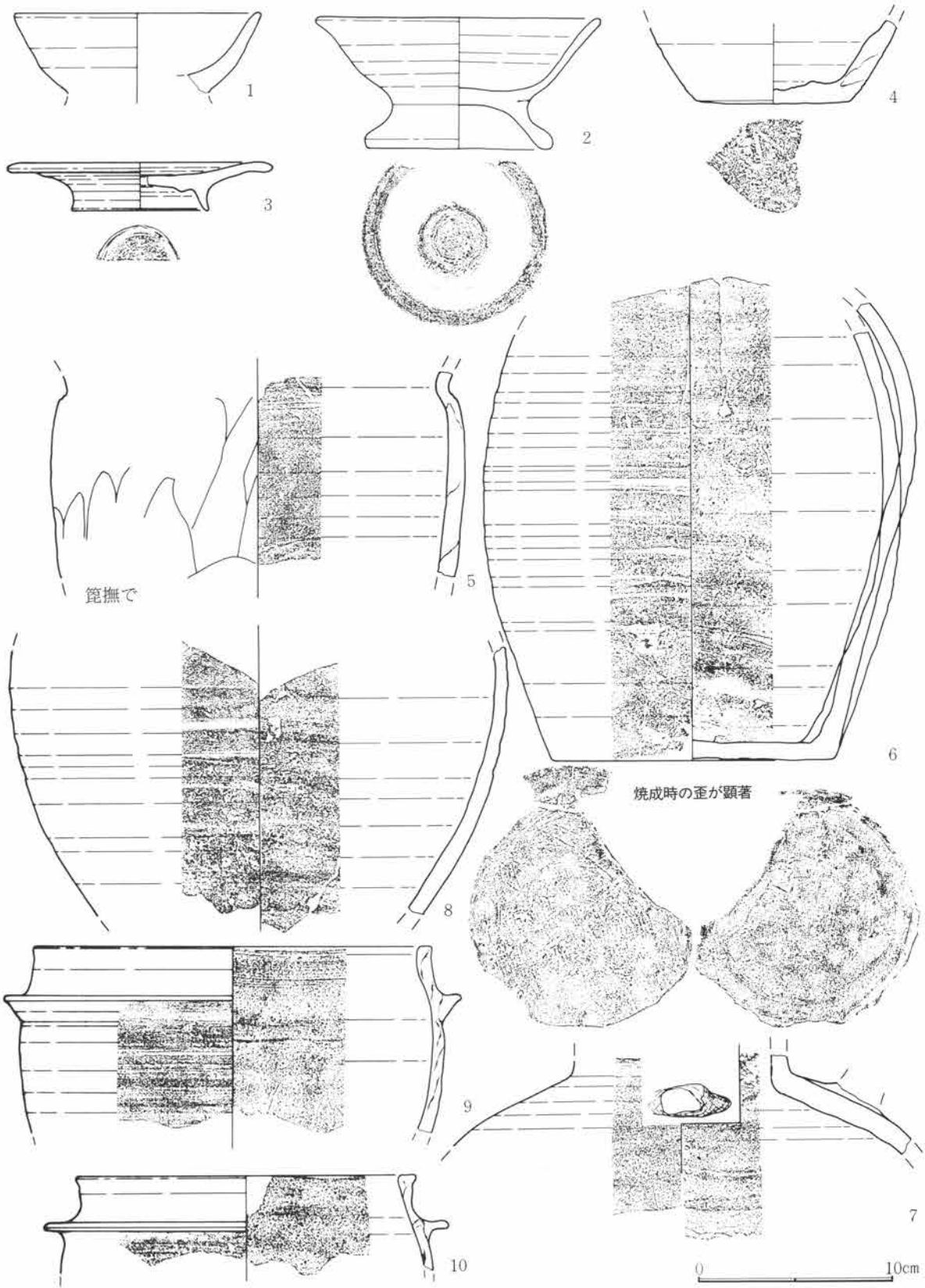


1. 細粒状C軽石多量。2. 細粒状C軽石混入・粒状焼土含有。3. 細粒状C軽石微量。4. 細粒状C軽石混入・粒状焼土・炭化物少量。5. 細粒状C軽石若干・粒状焼土含有。6. 細粒状C軽石若干・粒状焼土多量・粒状炭化物混入。7. 微粒状C軽石微量・粒状炭化物・灰・粒状焼土混入。8. 灰・炭化物層(粒状焼土含有)。9. 細粒状C軽石若干・粒状VII層土・粒状炭化物・粒状焼土少量。10. 細粒状C軽石少量・粗粒状VII層土少量・灰・粒状炭化物含有。11. 細粒状C軽石若干・塊状VII層土含有・粒状焼土若干。12. 粒状C軽石混入・粗粒状炭化物含有。13. 微粒状C軽石微量・粒状焼土・灰混入・粒状炭化物少量。14. 細粒状C軽石若干・粒状焼土・粒状VII層土少量。

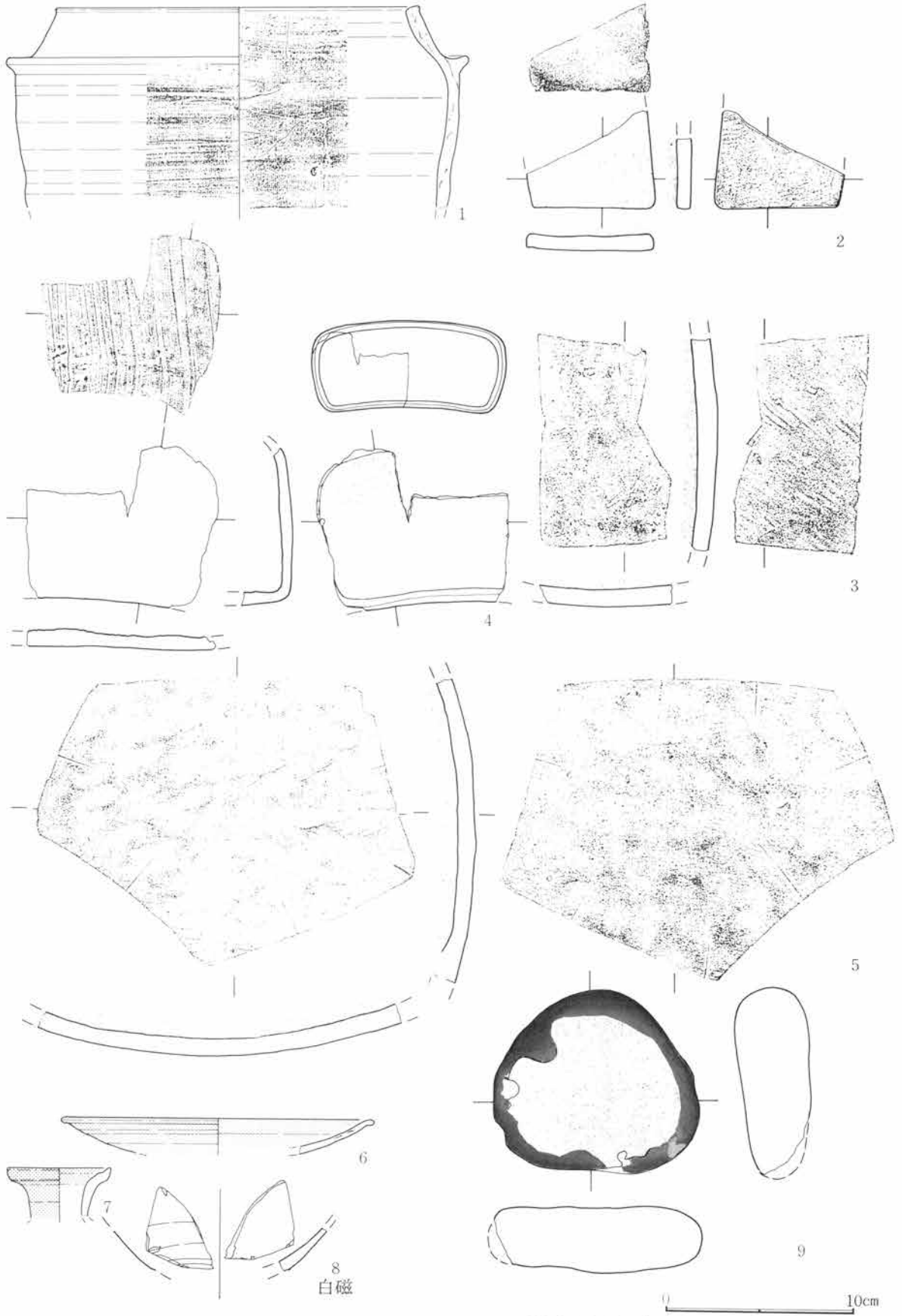
第193図 C区第79号住居跡実測図

所見 当住居は77住に切られている。住居は正形状を呈し、東壁中より若干南壁寄りにカマドを具備している。傍竈坑は、下位の85住と重複する為分明に出来なかったが、調査時に於いて皿状の窪みで検出されたが、确实とは断言し難い為、この部分は図から割愛した。カマドは1回の改築が認められる。改築以前のカマドは、燃烧部左壁を礫で補強している。改築はこの礫を埋設しており、全体に若干南へ移設しており、改

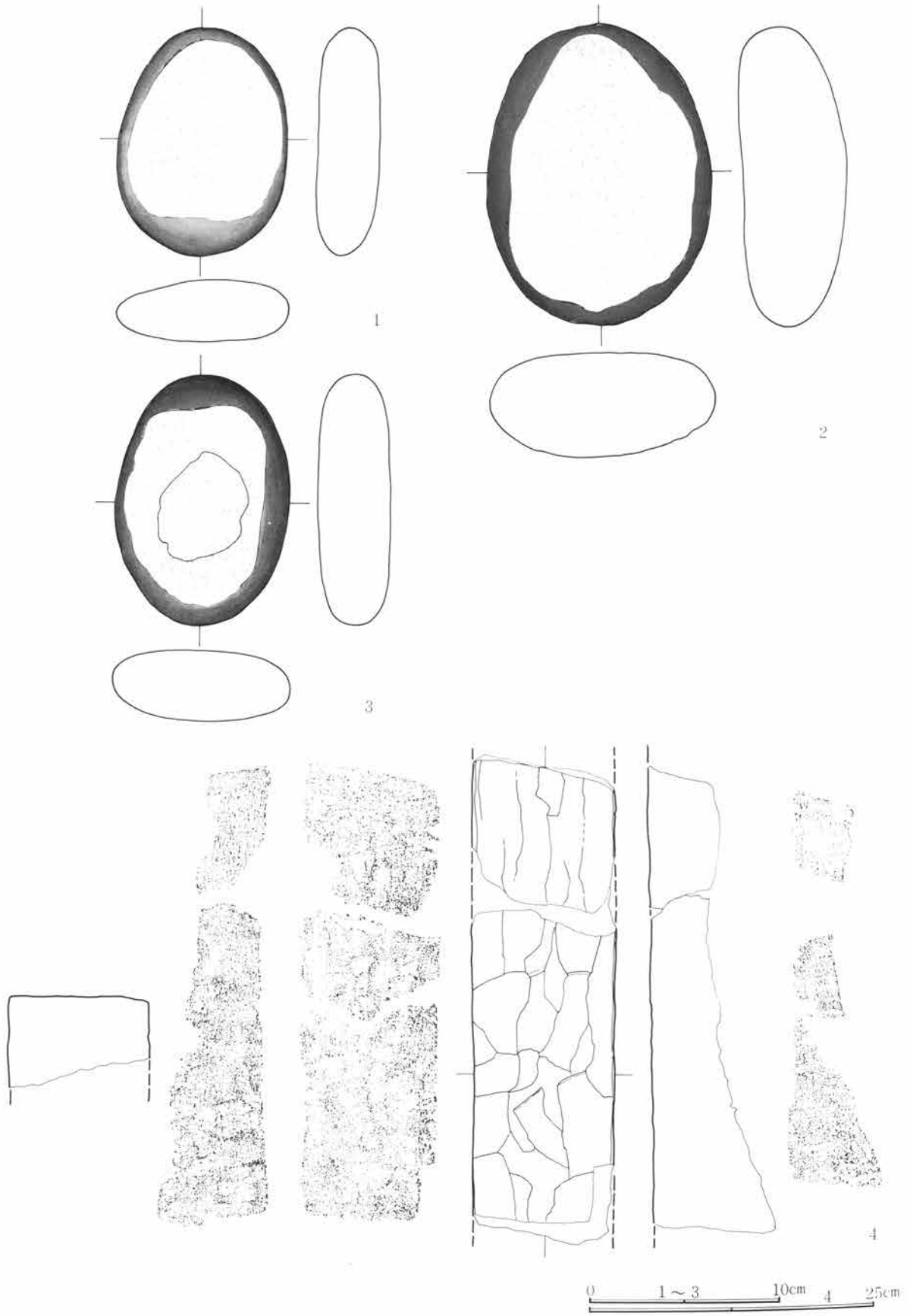
築以前はほぼ中央に具備している。住居様相は、D区の住居分類の第I段階に対比され、出土遺物では灰釉陶枕が特筆される。遺物様相も同様であることから、当住居の廃棄は9世紀後半頃と考えられる。



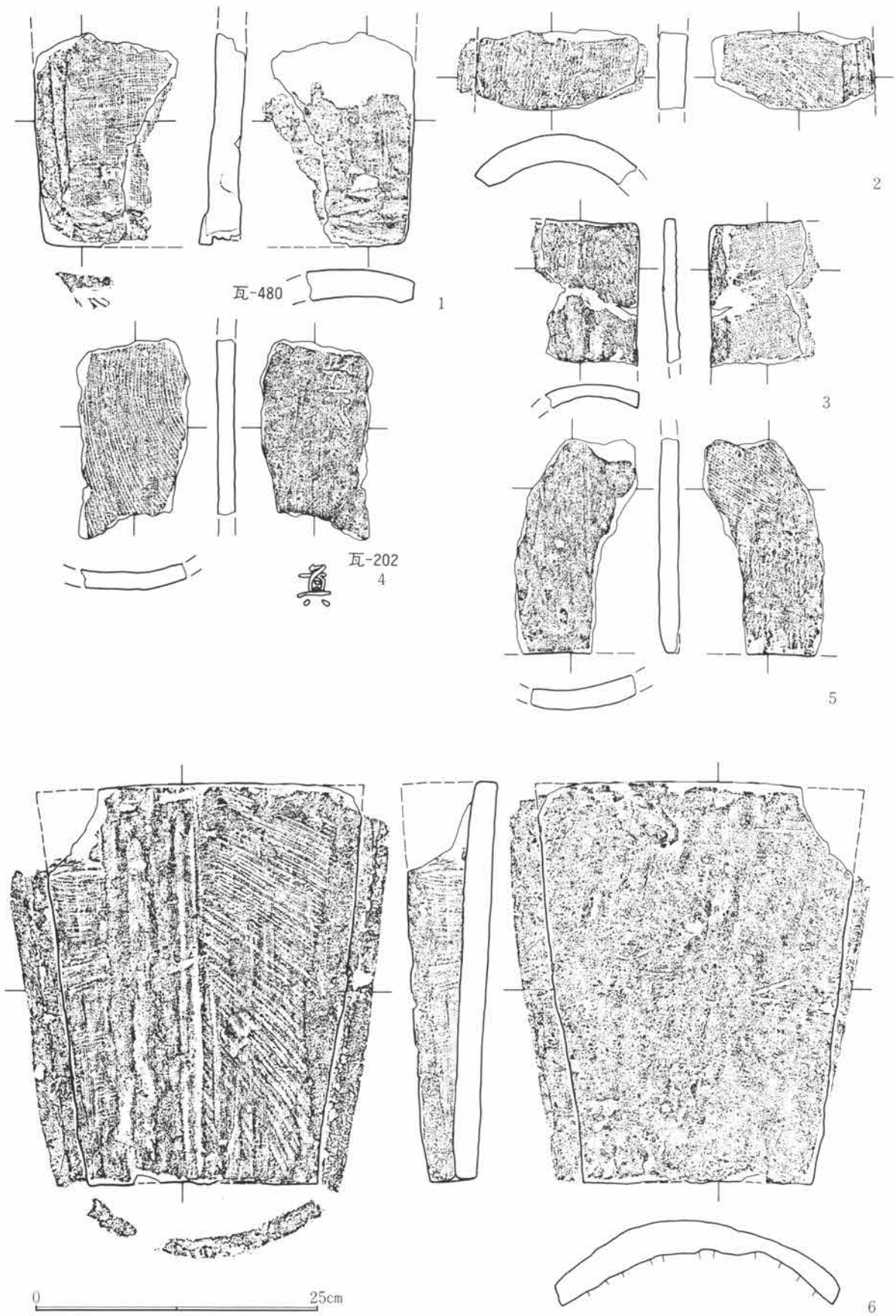
第194図 C区第79号住居跡出土遺物実測図(2)



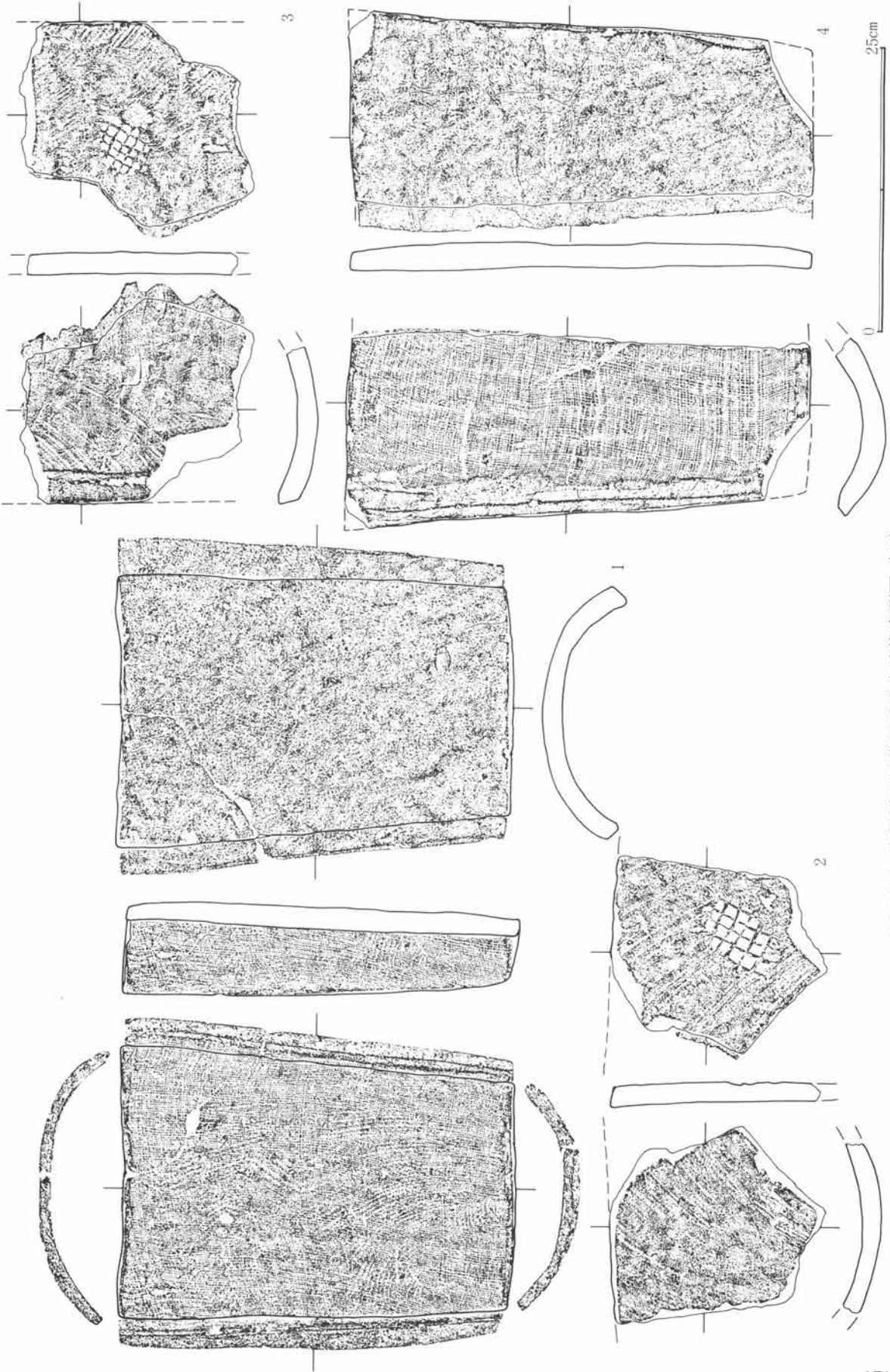
第195図 C区第79号住居跡出土遺物実測図(3)



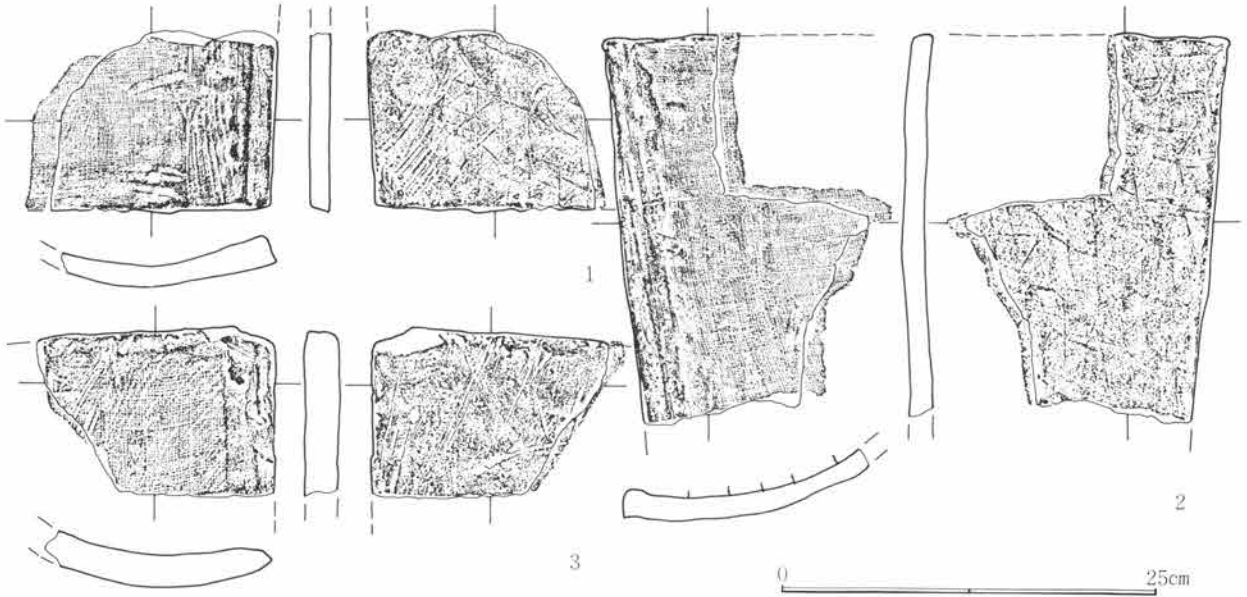
第196図 C区第79号住居跡出土遺物実測図(4)



第197図 C区第79号住居跡出土遺物実測図(5)

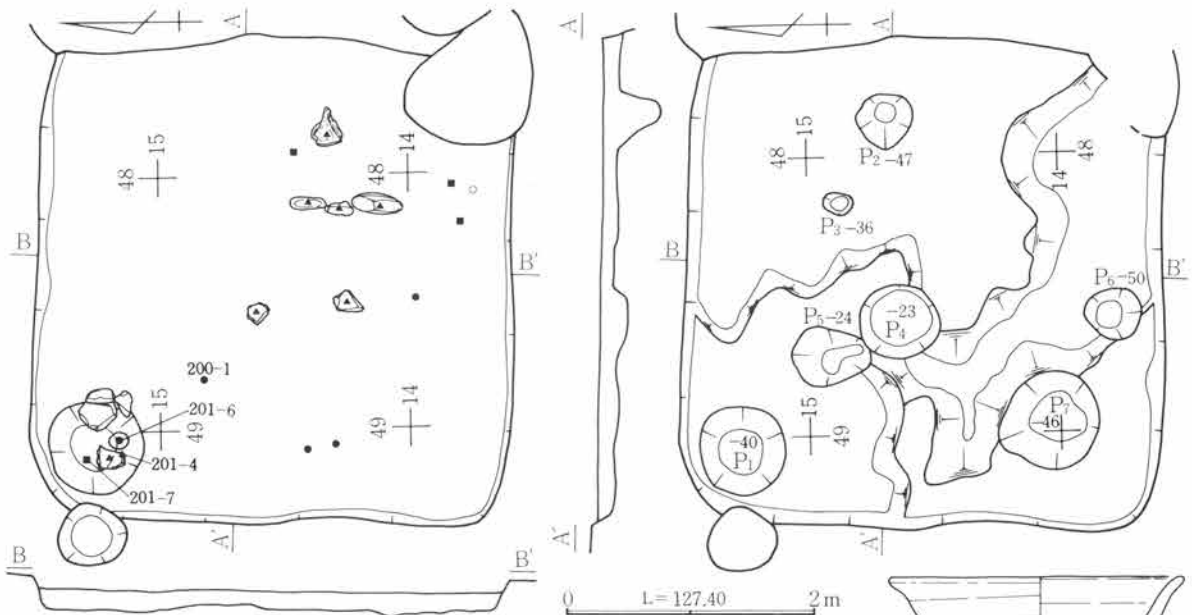


第198図 C区第79号住居跡出土遺物実測図(6)



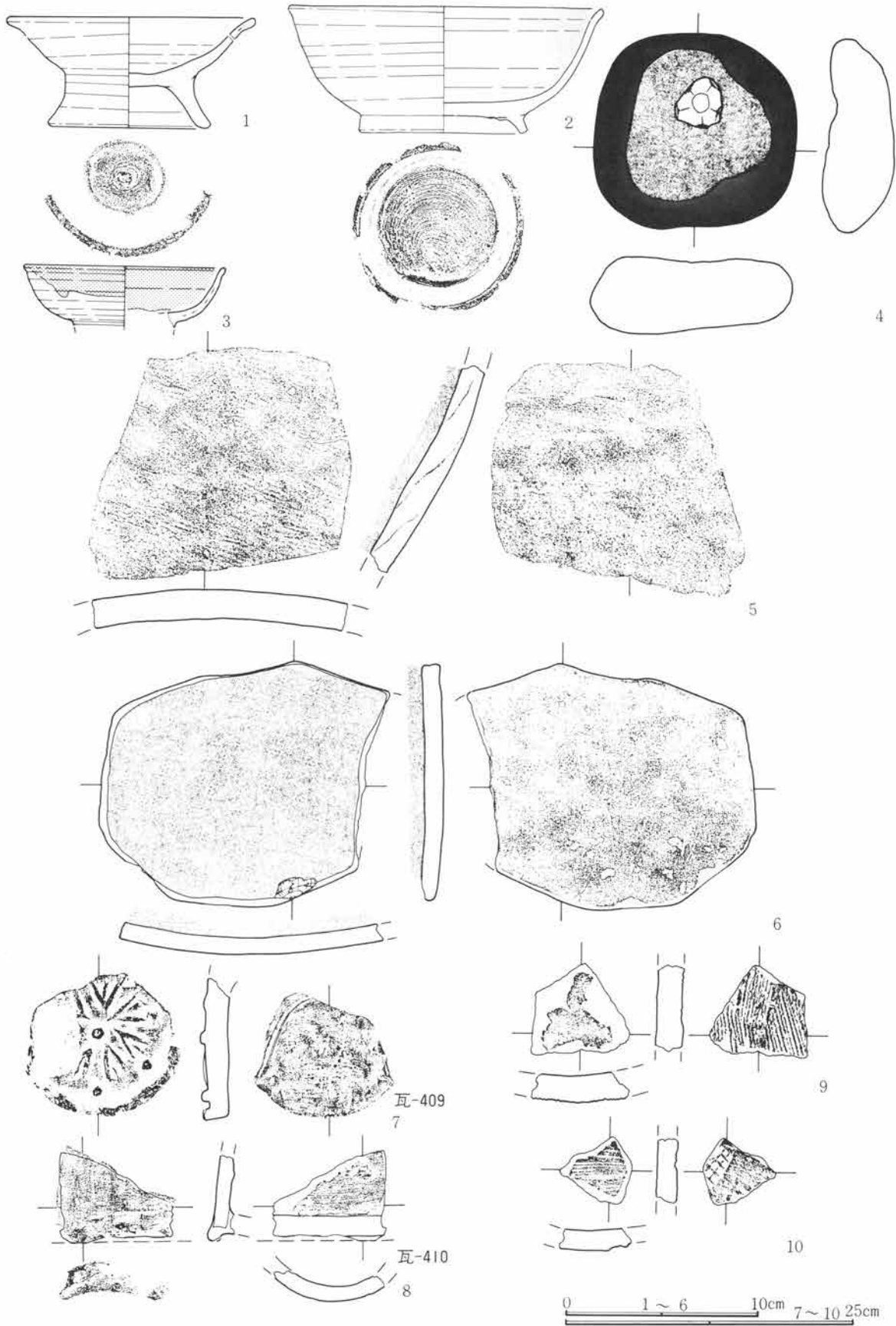
第199図 C区第79号住居跡出土遺物実測図(7)

遺構名称	C区第80号住居跡	位置	13~15-C-47~49グリッド内。			残存深度	約12cm
平面形態	矩形。	規模	4.87+αm×3.80m	構築基準辺	北壁?	主軸方位	北-94度-南
C79号住の破壊により詳細不詳。							



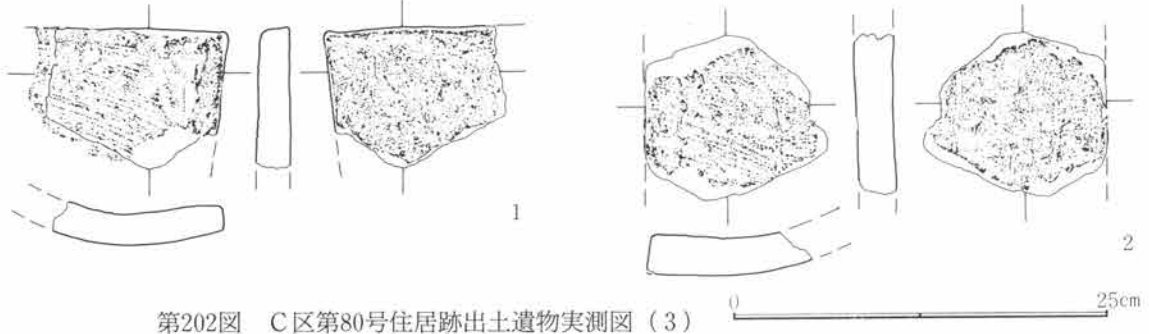
所見 当住居は79住に切られており、東壁全体及びカマドを失っている。更に、南東隅部は79号土坑が切り傍竈坑等施設の存否も詳かならない。然、北西隅部ではP₁が床面で検出されており、位置・形状・深度の点から貯蔵穴と考えられる。又、床面中央部周辺では、扁平な河原礫の側部を上位に向け、南北方向に配列設置しており、何らかの意図の元による所産と考えられるが、周辺部の床面状況等と礫周辺の床には変化が認められず不分明なものである。掘り方も顕著でピットの検出も多い。住居の廃棄時期は9世紀後半以前と考えられる。

第200図 C区第80号住居跡・出土遺物実測図(1)



第201図 C区第80号住居跡出土遺物実測図(2)

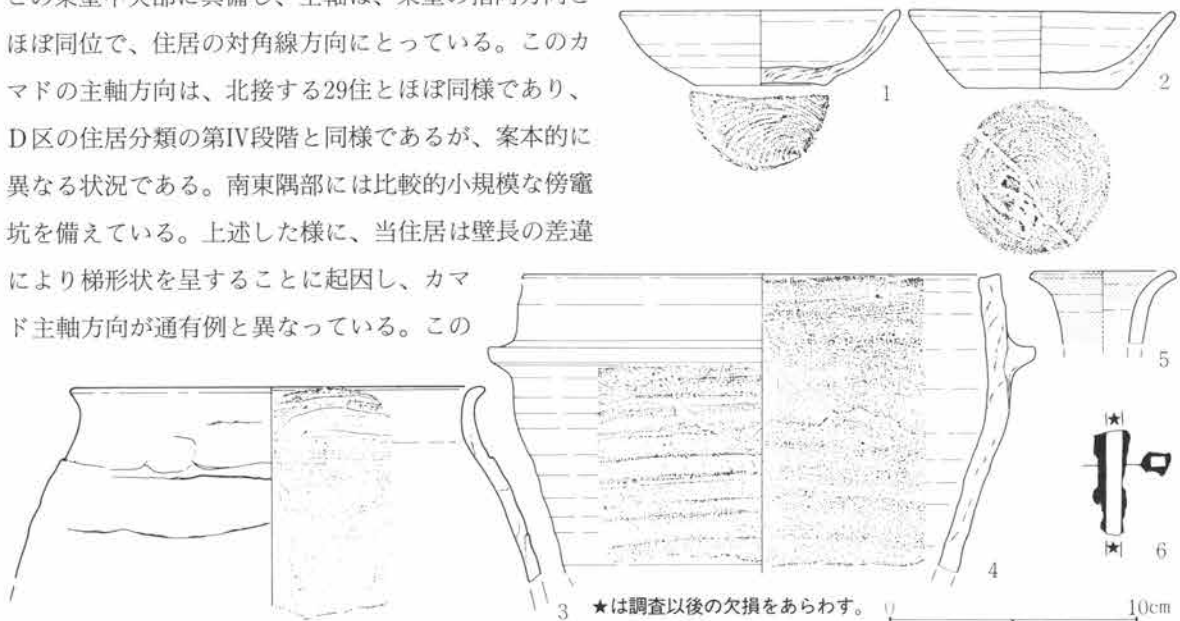
第4章 検出された遺構・遺物



第202図 C区第80号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	C区第82号住居跡		位置	20・21-C-45~47グリッド内。		残存深度	約15cm
平面形態	梯形。	規模	3.80(2.83)m×2.87m	構築基準辺	南壁か	主軸方位	北-93度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦。カマド前面に造床が認められた。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P ₁ 。楕円形。43×30cm・深度-18cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	カマド前面から南・北壁側にかけて検出され、北壁下ではピットを検出。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から70cm。			主軸方位	北-119度-南	
改築	有か。掘り方内で粒土を検出。		形状	舌状を呈し、円筒状に立ち上がる煙道を具備する。			
規模	全長 98cm・屋外長 75cm・屋内長 23cm・袖部幅120cm・燃烧部幅 46cm・煙道部幅 19cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。側壁は礫で補強されている。		袖	右袖は小さい。両袖共に礫により補強されている。			
煙道	立ち上がり部が円筒状を呈する。		掘り方	全体的に大きく舌状を呈する。			
遺物出土状態	全体に少なく覆土内では少量の土器類があったが、床面近辺では若干量であった。						

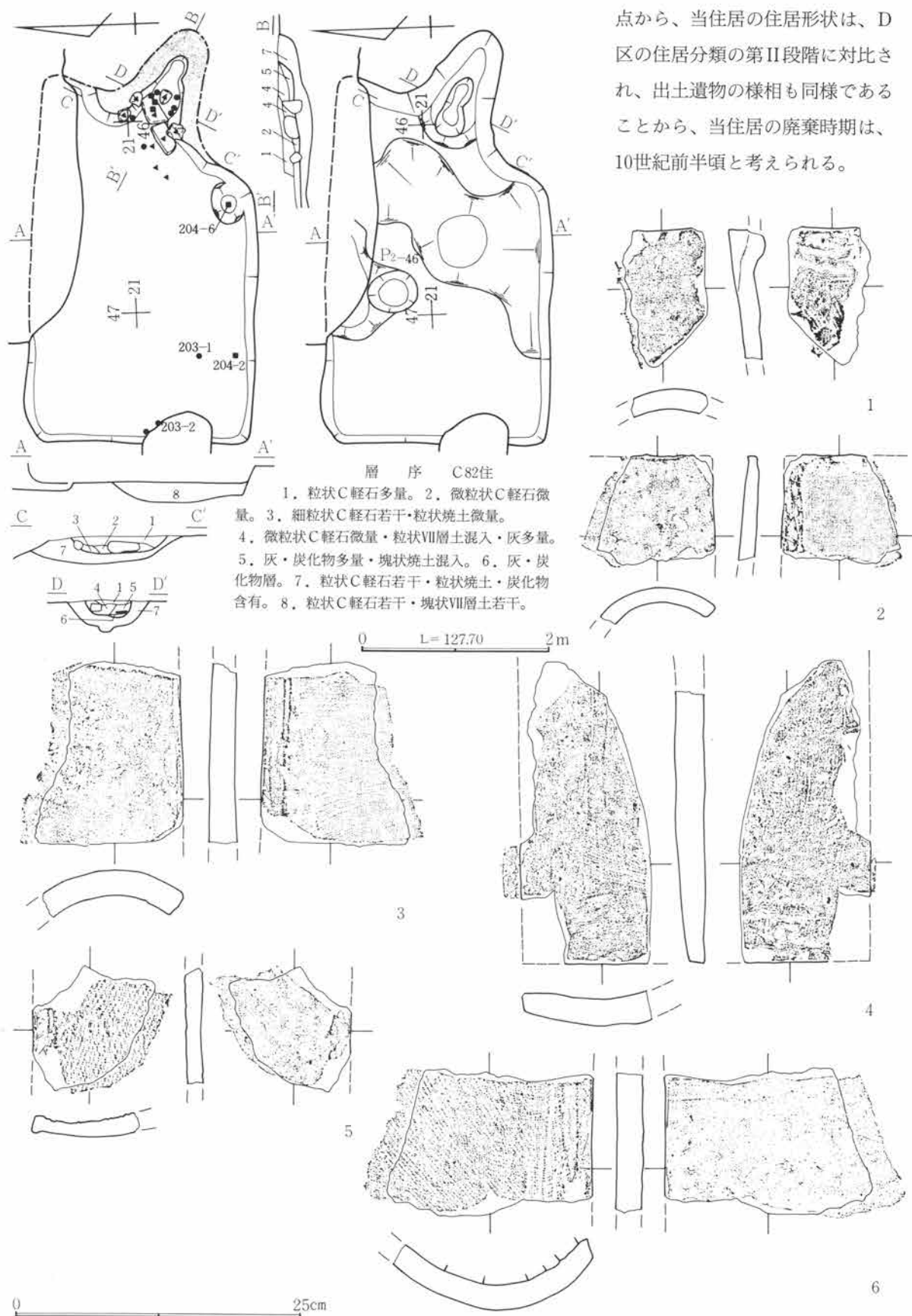
所見 当住居は29・18住に切られている。住居は北壁が長い梯形を呈し、東壁は著しく南向する。カマドはこの東壁中央部に具備し、主軸は、東壁の指向方向とほぼ同位で、住居の対角線方向にとっている。このカマドの主軸方向は、北接する29住とほぼ同様であり、D区の住居分類の第IV段階と同様であるが、案本的に異なる状況である。南東隅部には比較的小規模な傍竈坑を備えている。上述した様に、当住居は壁長の差違により梯形状を呈することに起因し、カマド主軸方向が通有例と異なっている。この



第203図 C区第82号住居跡出土遺物実測図(1)

第1節 南側調査区

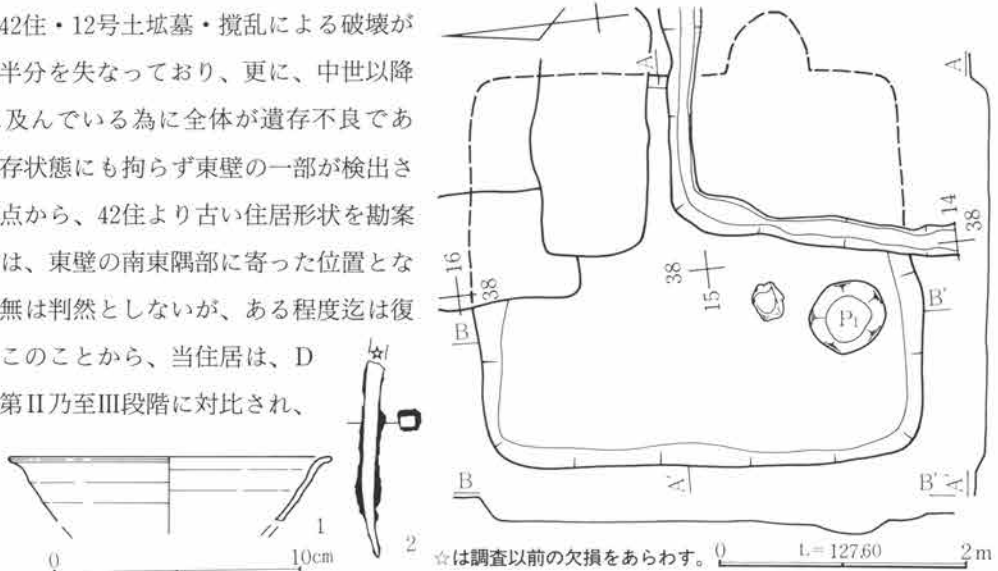
点から、当住居の住居形状は、D区
の住居分類の第II段階に対比さ
れ、出土遺物の様相も同様である
ことから、当住居の廃棄時期は、
10世紀前半頃と考えられる。



第204図 C区第82号住居跡・出土遺物実測図(2)

遺構名称	C区第84号住居跡	位置	14・15-C-37・38グリッド内。	残存深度	約17cm
平面形態	矩形(正方形)	規模	3.08m×3.60m	構築基準辺	西壁か
壁	斜位に立ち上がる。	床面	平坦。ほとんど造床は認められない。	主軸方位	北-84度-南位か
C区42住・C12墓の破壊により詳細不詳。		傍竈坑・貯蔵穴	P ₁ は貯蔵穴と確定し得ない。		

所見 当住居は42住・12号土塚墓・攪乱による破壊が著しく住居の東半分を失っており、更に、中世以降の攪乱が全体に及んでいる為に全体が遺存不良である。然、この残存状態にも拘らず東壁の一部が検出されている。この点から、42住より古い住居形状を勘案すれば、カマドは、東壁の南東隅部に寄った位置となり、傍竈坑の有無は判然とししないが、ある程度迄は復元可能である。このことから、当住居は、D区在住居分類の第II乃至III段階に対比され、住居の廃棄時期は10世紀代と考えられる。

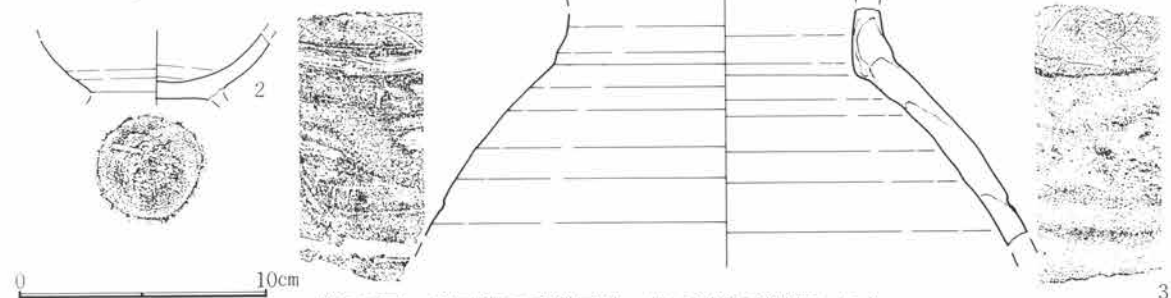


第205図 C区第84号住居跡・出土遺物実測図

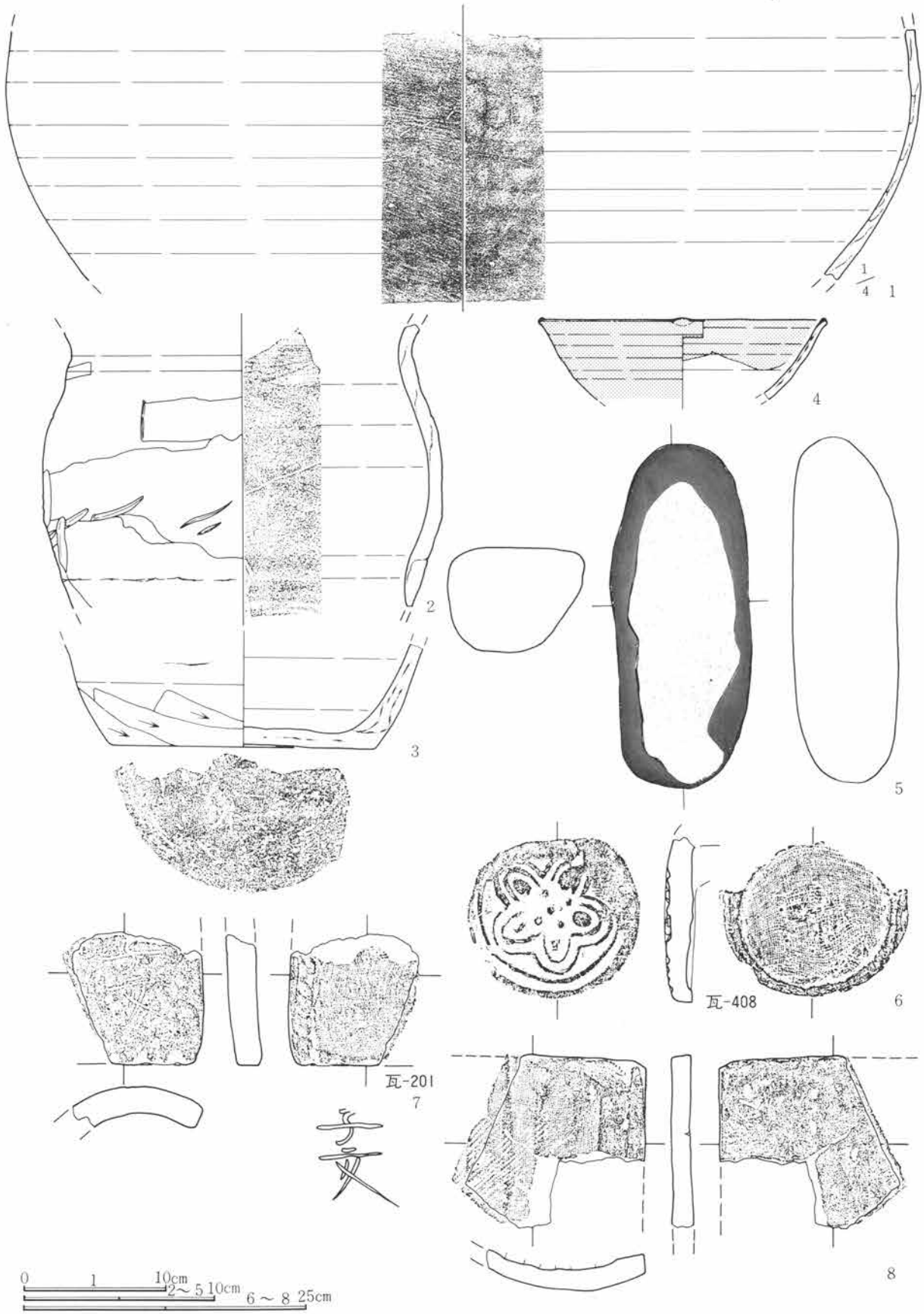
遺構名称	C区第85号住居跡	位置	12~14-C-46・47グリッド内。	残存深度	約32cm
C77・79・107号住の破壊により詳細不詳。					



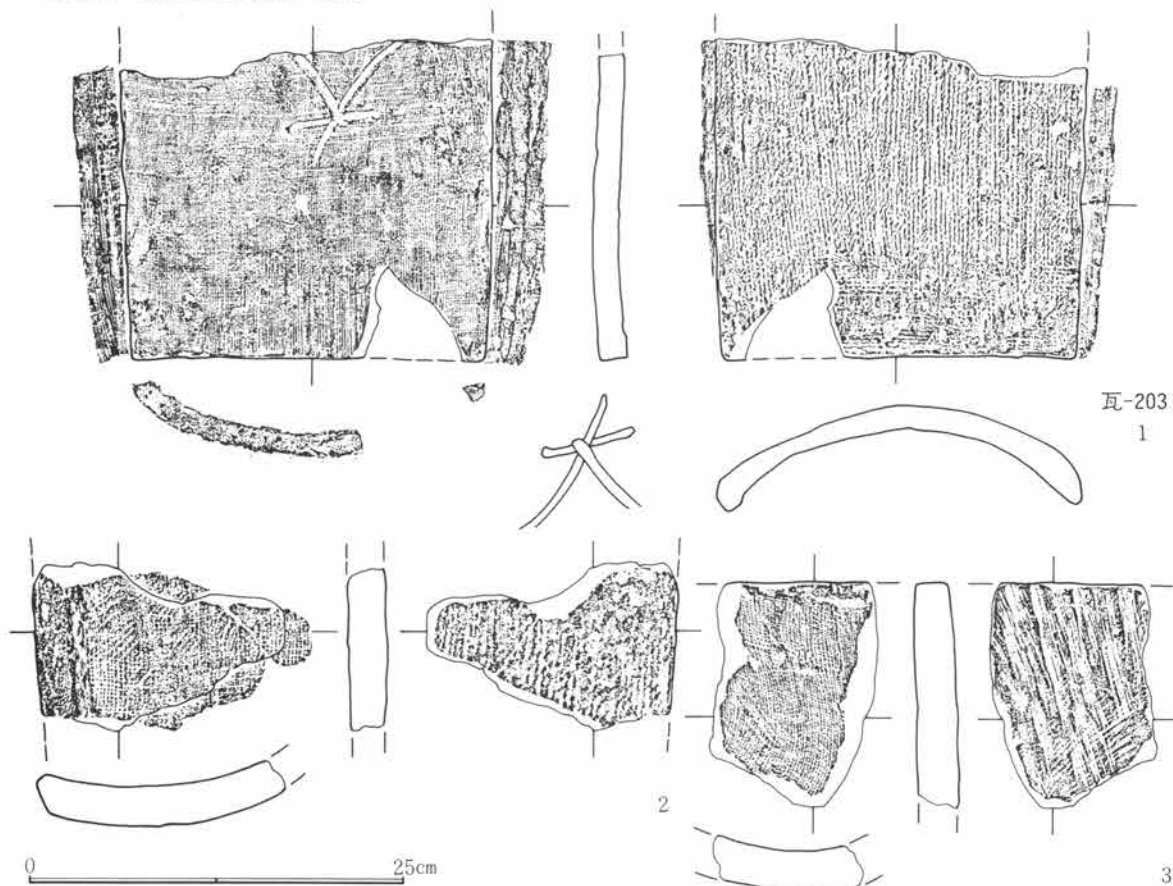
所見 当住居は77・79・107住に切れられ、住居の北東隅部周辺が残存する。この為、住居の詳細な状況は不明であるが、切り合い関係にある3軒の中で最も古いと考えられる107住(9世紀中頃)より古いと考えられるが、出土遺物には、前述した79住のものも含まれている可能性が濃いと考えられる。



第206図 C区第85号住居跡・出土遺物実測図(1)



第207図 C区第85号住居跡出土遺物実測図(2)

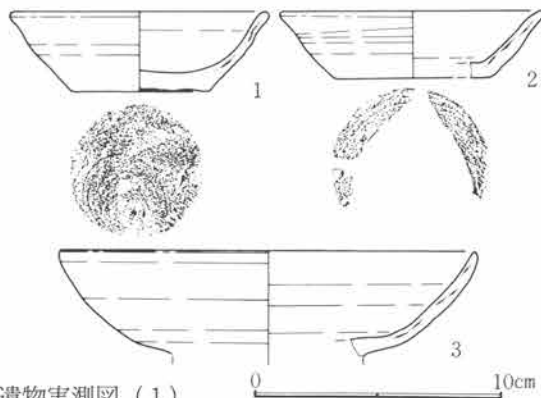


第208図 C区第85号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	C区第86号住居跡	位置	8～10-C-47～49グリッド内。	残存深度	約30cm
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から67cm。		主軸方位	北-90度-南
改築		形状	舌状を呈する。		
規模	全長 92cm・屋外長 39cm・屋内長 53cm・袖部幅120cm・燃烧部幅 30cm。				
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。両側壁を瓦で補強する。				
	袖	屋内側に大きく突出した状態でしっかりしている。			
煙道	未検出。	掘り方	下位の遺構により確実には検出出来なかった。		
遺物出土状態	カマド内で比較的多く出土している。他は礫1点と少量の土器類瓦類であった。				

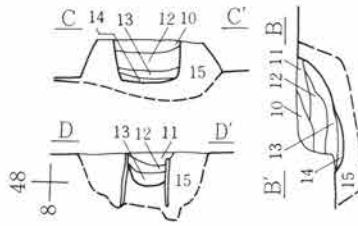
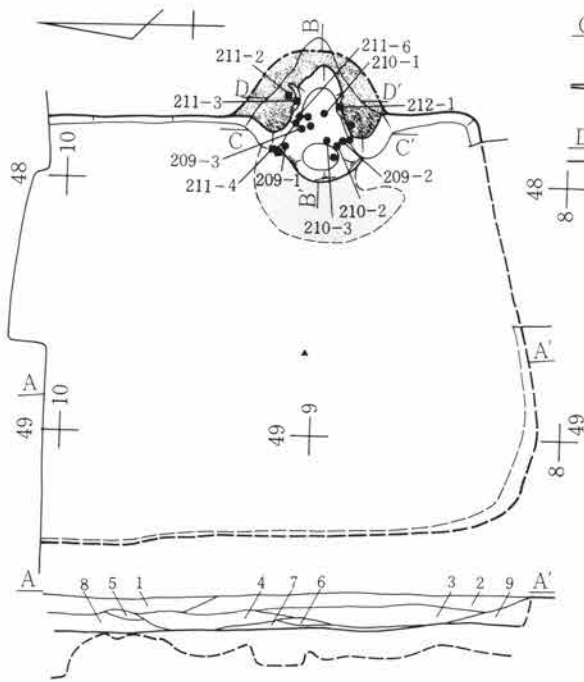
所見 当住居は調査段階で、平面精査が不完全のまま調査実施した不手際がある。この為、住居形状は不確実なことが考えられる。更に、下位には153・142・144・122・145住が確認されていた為、掘り方の検出は積極的に実施しなかった。図中の破線はこの理由による。

カマドは東壁南東隅部寄りに具備する。南東隅部では傍竈坑の存否の確認は行なわれていない。この為、住居形状での対比は行い難い。



第209図 C区第86号住居跡出土遺物実測図(1)

第1節 南側調査区



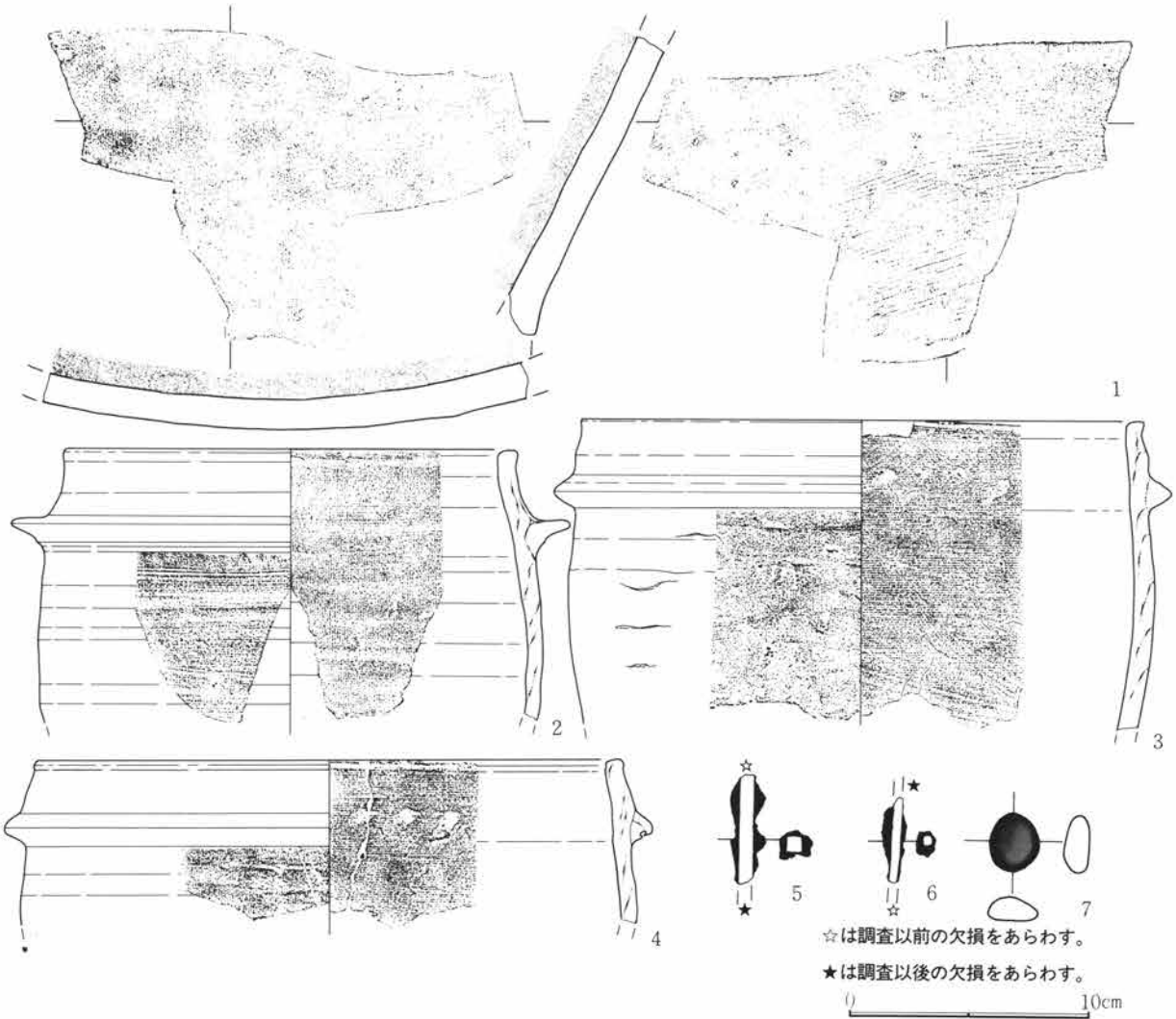
カマドの構造は、
燃焼部左右両奥壁寄
りの部分に瓦による
補強材が認められ
る。掘り方は確実な
状態で検出出来な

かった。住居の時期は10世紀末頃と思われる。

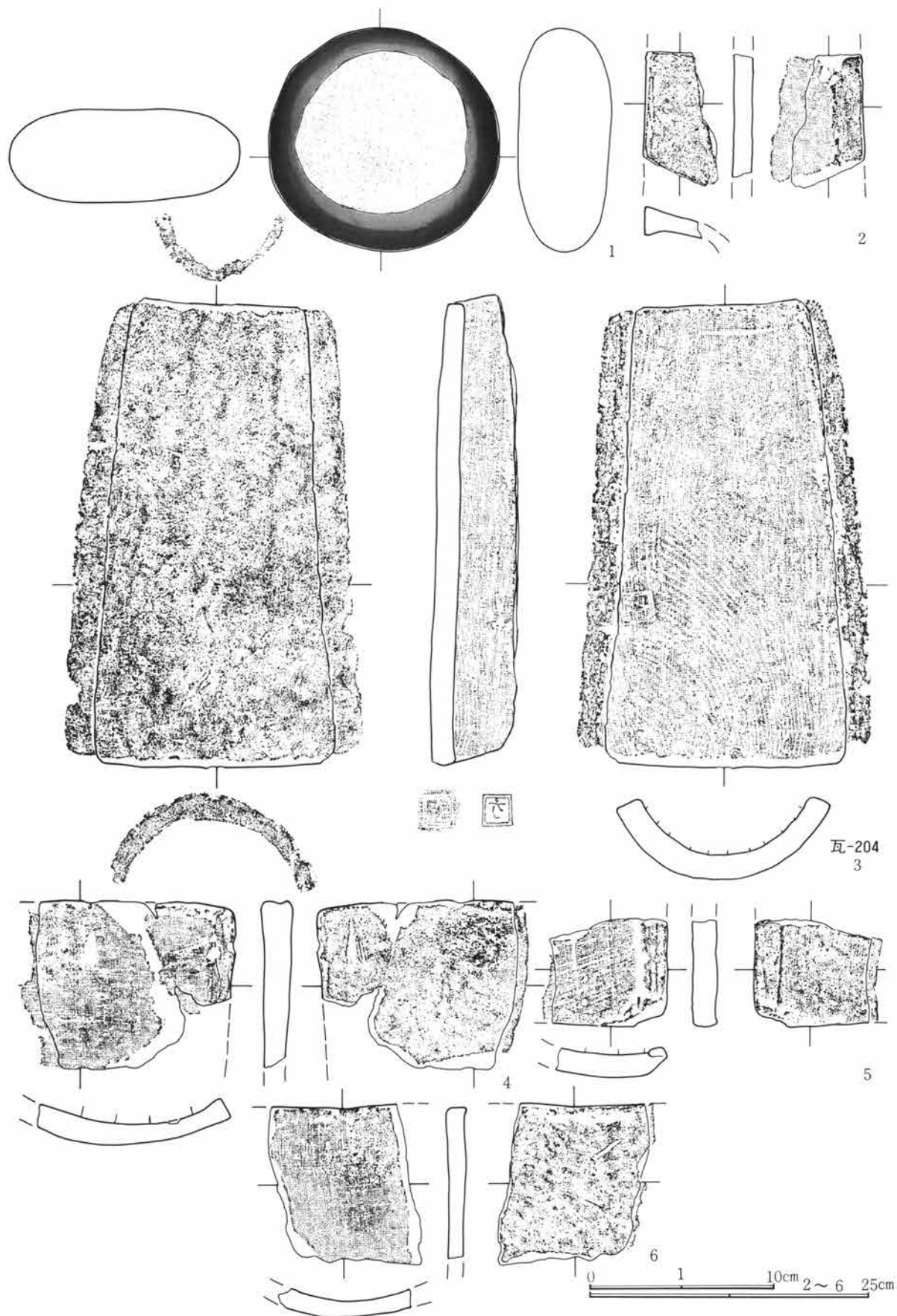
層序 C86住

1. 細粒状C軽石混入・粗粒状VII層土若干。
2. 細粒状C軽石若干。
3. 細粒状C軽石混入・粒状VII層土若干。
4. 細粒状C軽石混入・粗粒状炭化物混入。
5. 4近質。
6. 5同質。
7. 微粒状C軽石微量(有粘性硬質土)。
8. 3近質。
9. 細粒状C軽石混入・塊状砂質土(VII層土)若干。
10. 細粒状C軽石含有・粒状焼土混入・粒状炭化物少量。
11. 粒状C軽石若干・粒状焼土若干。
12. 細粒状C軽石含有・粒状焼土・粒状炭化物混入。
13. 微粒状C軽石微量・粒状焼土・灰・粒状炭化物混入。
14. 灰・炭化物層。
15. 細粒状C軽石含有・粒状焼土・炭化物含有。

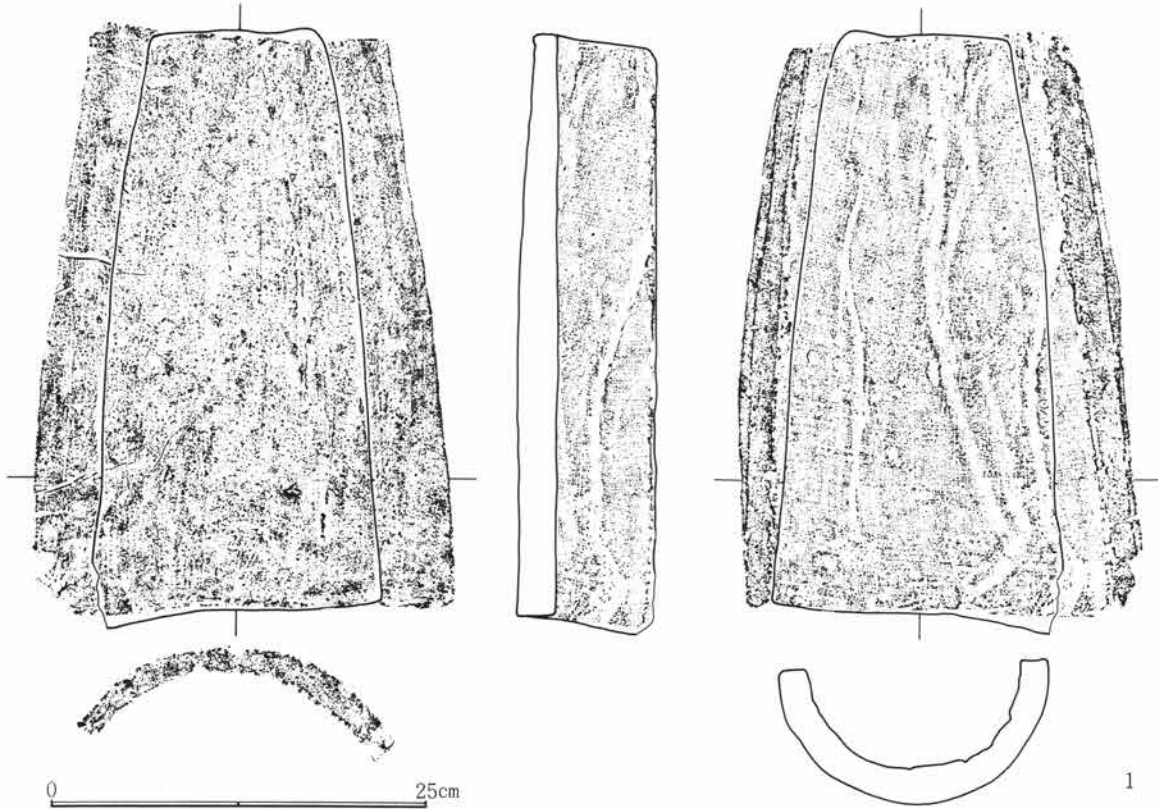
0 L=127.30 2m



第210図 C区第86号住居跡・出土遺物実測図(2)

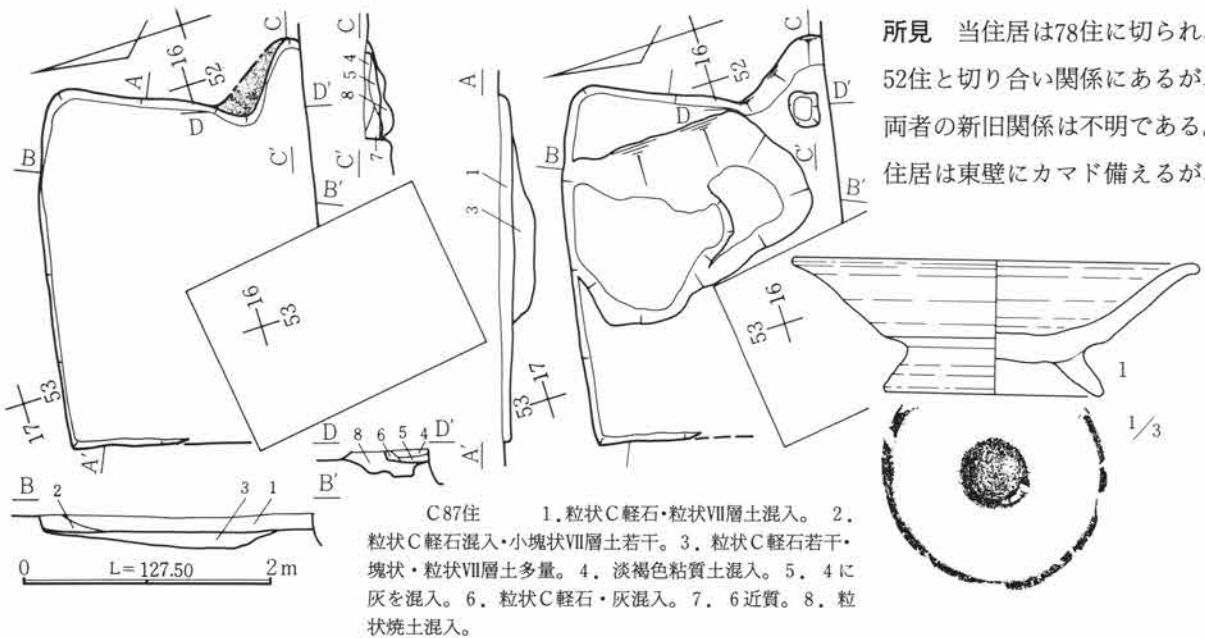


第211図 C区第86号住居跡出土遺物実測図(3)



第212図 C区第86号住居跡出土遺物実測図(4)

遺構名称	C区第87号住居跡	位置	15~17-C-51~53グリッド内。	残存深度	約13cm
試掘トレンチ・C78号住の破壊により詳細不詳。					



所見 当住居は78住に切れ、52住と切り合い関係にあるが、両者の新旧関係は不明である。住居は東壁にカマド備えるが、

C87住 1. 粒状C軽石・粒状VII層土混入。2. 粒状C軽石混入・小塊状VII層土若干。3. 粒状C軽石若干・塊状・粒状VII層土多量。4. 淡褐色粘質土混入。5. 4に灰を混入。6. 粒状C軽石・灰混入。7. 6近質。8. 粒状焼土混入。

第213図 C区第87号住居跡・出土遺物実測図

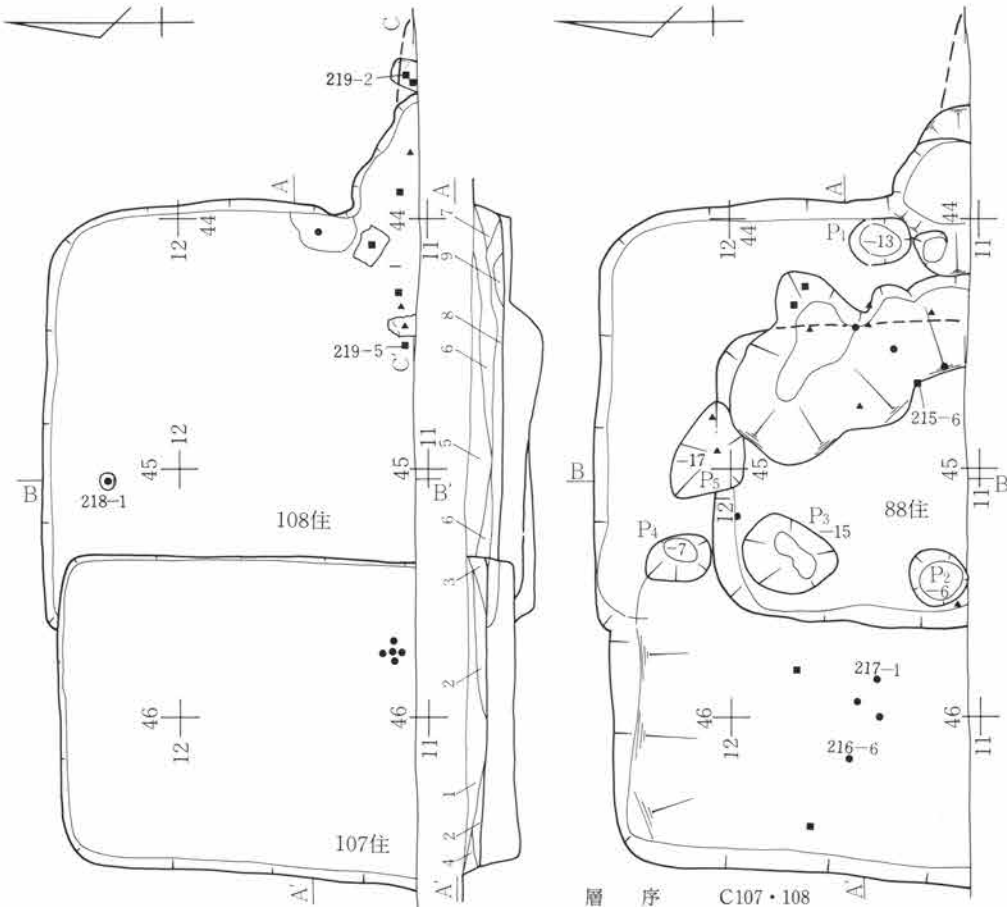
南壁側が87住に切れ失っている為傍竈坑・カマドの詳細な位置等不明な点が多い。出土遺物では、瓦片・土器類の破片が少量あった。時期を窺知し得る量ではなかった。

第4章 検出された遺構・遺物

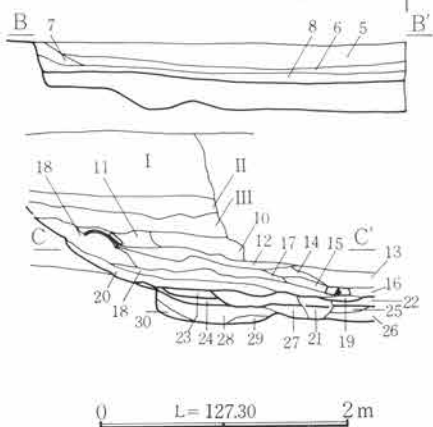
遺構名称	C区第88号住居跡	位置	11・12-C-44・45グリッド内。			残存深度	約15cm
C区第107・108号住の破壊により詳細不詳。							
遺構名称	C区第107号住居跡	位置	11・12-C-45・46グリッド内。			残存深度	約13cm
平面形態	横長方形。	規模	2.60m×2.86+ α m	構築基準辺	北乃至東壁	主軸方位	北-90度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦。造床全面に及ぶ。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	全体的に深い平坦に近い底面である。						
遺物出土状態	掘り方内から少量出土している。						
遺構名称	C区第108号住居跡	位置	11・12-C-43~45グリッド内。			残存深度	約29cm
平面形態	矩形か。	規模	3.38m×3.0+ α m	構築基準辺	北壁	主軸方位	北-93度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦。造床は全面に及ぶ。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	カマド周辺に土坑状で大きな掘り込みが認められたが、88号住の存在から確実視はし得ない。						
カマド	位置	東壁、住居北東隅部から213cm。未調部有り、詳細不分明。			主軸方位	北-90度-南位か	
改築	有。推定5面の底面を断面で確認している。			形状	幅広の舌状を呈し、先細り状の煙道を備える。		
規模	全長266cm・屋外長143cm・屋内長123cm						
焚口・燃焼部	扇状を呈する焚口部は、燃焼空間と重複する部分が著しく、燃焼部先端側に器設部分が考えられる。補強材等は認められなかった。						
	袖	瘤状の左袖のみを検出。右袖は未調査。					
煙道	仰角30度程で立ち上がる。長さ97cm以上。		掘り方				
遺物出土状態	カマド周辺で少量出土し、北壁下で須恵坏（第 図一 ）が床面直上で出土している。						

所見（108住）当住居は107住に切られ88住を切り構築しているが、住居の南半分程は、調査区内を横走る農業用水路の存在の為未調査部となっている。この状況は後述する107住・108住も同様である。住居は東壁にカマドを具備するが、上述の状況により、詳細な位置・傍竈坑等に就いては不分明である。然、水路の存在により、カマド縦断面は現地表から詳細な状況が看取された。この断面は、当該期の文化層も認められ、当時の生活面に近い部分のカマドの状況が看取されている。断面からは、2乃至3回の改築が認められ、煙道先端付近に何らかの意図により瓦を設置していたことが認められたが、天井等の施設は完全に崩壊していた。改築は、全体にどの程度の改築かは判然としなかったが、断面には、灰化物・灰層が間層をおき互層状態になっていた。この点では、ほぼ同位置での移設程度かと考えられる。掘り方では、88号住の存在により分明には出来なかったが、断面A-A'間では7cm程の埋土が認められており、造床は薄かったと考えられる。又、底面ではP₁・P₄・P₅の検出があったが性格等は不分明である。住居の廃棄時期は、住居形状では判然としない。唯、カマドの燃焼空間が広い点では古い様相が認められる。一方、当住居が切る107住が9世紀中頃と考えられ（出土遺物）ることからすれば、9世紀中頃以前と考えられる。又、出土遺物は、D区の住居分類の第I段階の様相が認められること等から勘案すれば、9世紀後半頃の住居と考えられるものの、遺構間の切り合い関係との整合性が無い、調査時の不手際によるものとする。

所見 (88住) 当住居は上述の108住と107住に切られている。尚、住居の南側は107住と同様である。



検出できた状況は掘り方であり、カマド等の施設は検出されなかった。恐らく、カマド等は未調査部に備えられていると考えられる。住居の時期は、調査の下手際により遺物での信頼度は薄い。107住に先行することから9世紀前半以前と考えられる。

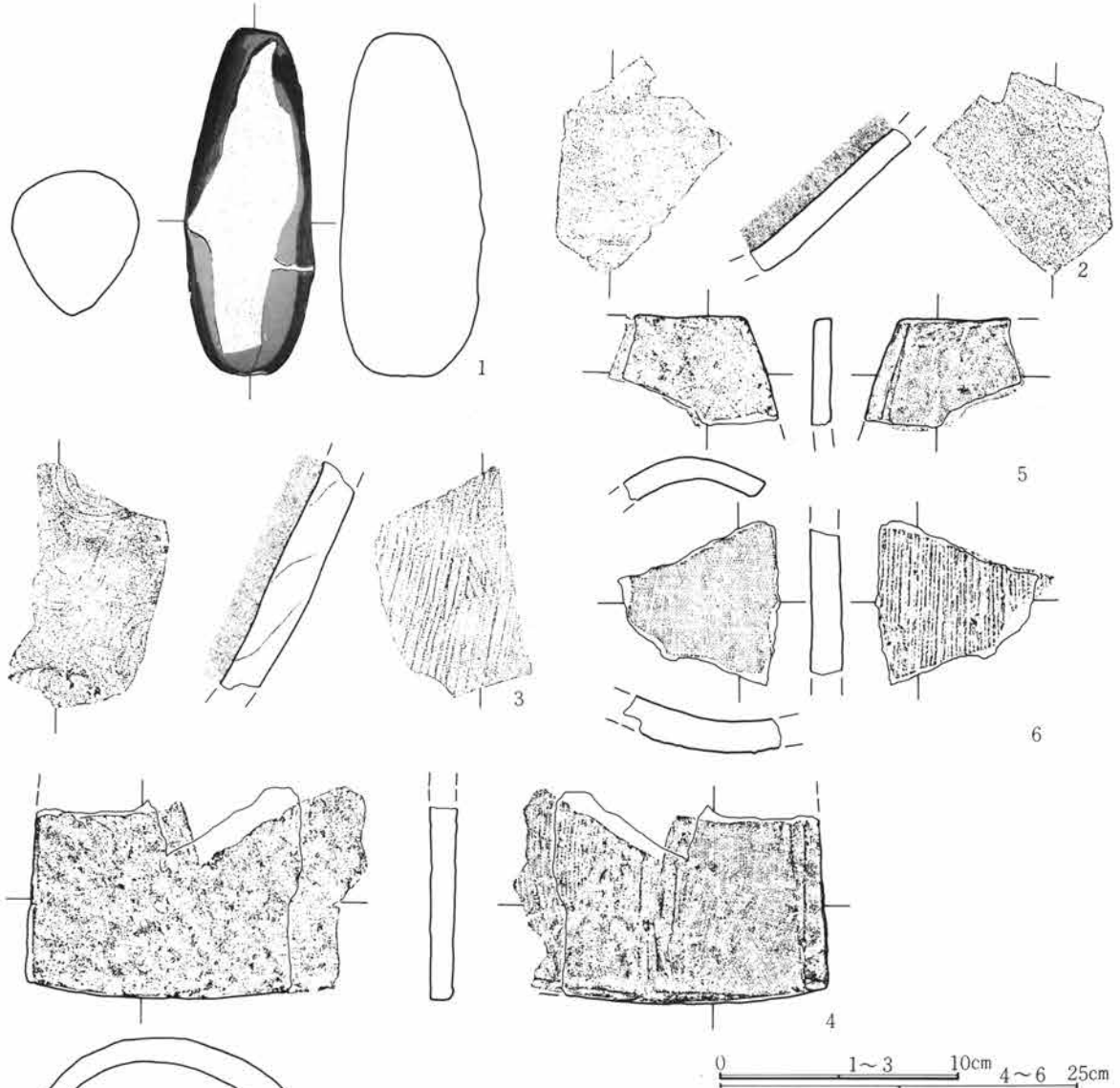


1. 細粒状C軽石含有・粒状焼土少量。
2. 微粒状C軽石微量・塊状・粒状焼土多量。
3. 細粒状C軽石微量。
4. 細粒状C軽石微量・塊状VII層土少量。(C107住)
5. 粒状C軽石多量・粒状焼土・粒状VII層土少量。
6. 粒状C軽石少量・粒状焼土少量・粒状炭化物微量。
7. 微粒状C軽石微量・粒状炭化物少量・粒状焼土少量・灰多量。
8. 細粒状C軽石含有・粒状炭化物少量・塊状焼土斑状混入。
9. 塊状VII層土。
10. 粒状C軽石混入・粒状焼土含有。
11. 粒状C軽石混入・粒状焼土混入。
12. 粒状C軽石混入・粒状焼土若干。
13. 粒状C軽石混入・粒状焼土若干。
14. 粒状C軽石混入・粒状焼土若干・粒状炭化物混入。
15. 粒状C軽石混入・細粒状焼土微量。
- 16, 15同質。
17. 粒状C軽石若干・粒状焼土混入。
18. 粒状C軽石若干・粒状焼土微量。
19. 炭化物・灰の互層。
20. 粒状C軽石微量・粒状炭化物微量。
21. 微粒状C軽石微量・塊状・粒状焼土混入・灰少量。
22. 灰層。
23. 細粒状C軽石若干・炭化物・灰多量(下面に焼土層)。
24. 21近質。
25. 細粒状C軽石若干・塊状焼土斑状混入。
26. 微粒状C軽石微量。
27. 細粒状C軽石少量・塊状焼土斑状混入。
28. 細粒状C軽石含有・塊状・粒状焼土多量・灰多量混入。
29. 微粒状C軽石若干・塊状VII層土多量。
- 30, 29同質。

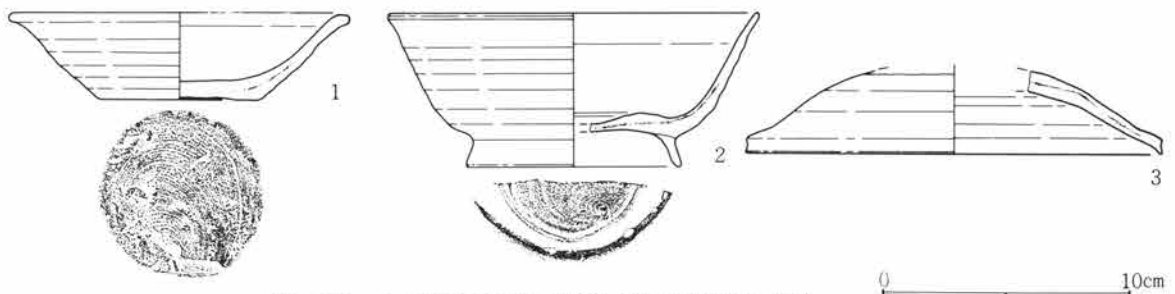


☆は調査以前の欠損をあらわす。★は調査以後の欠損をあらわす。

第214図 C区第88・107・108号住居跡・第88号出土遺物実測図(1)

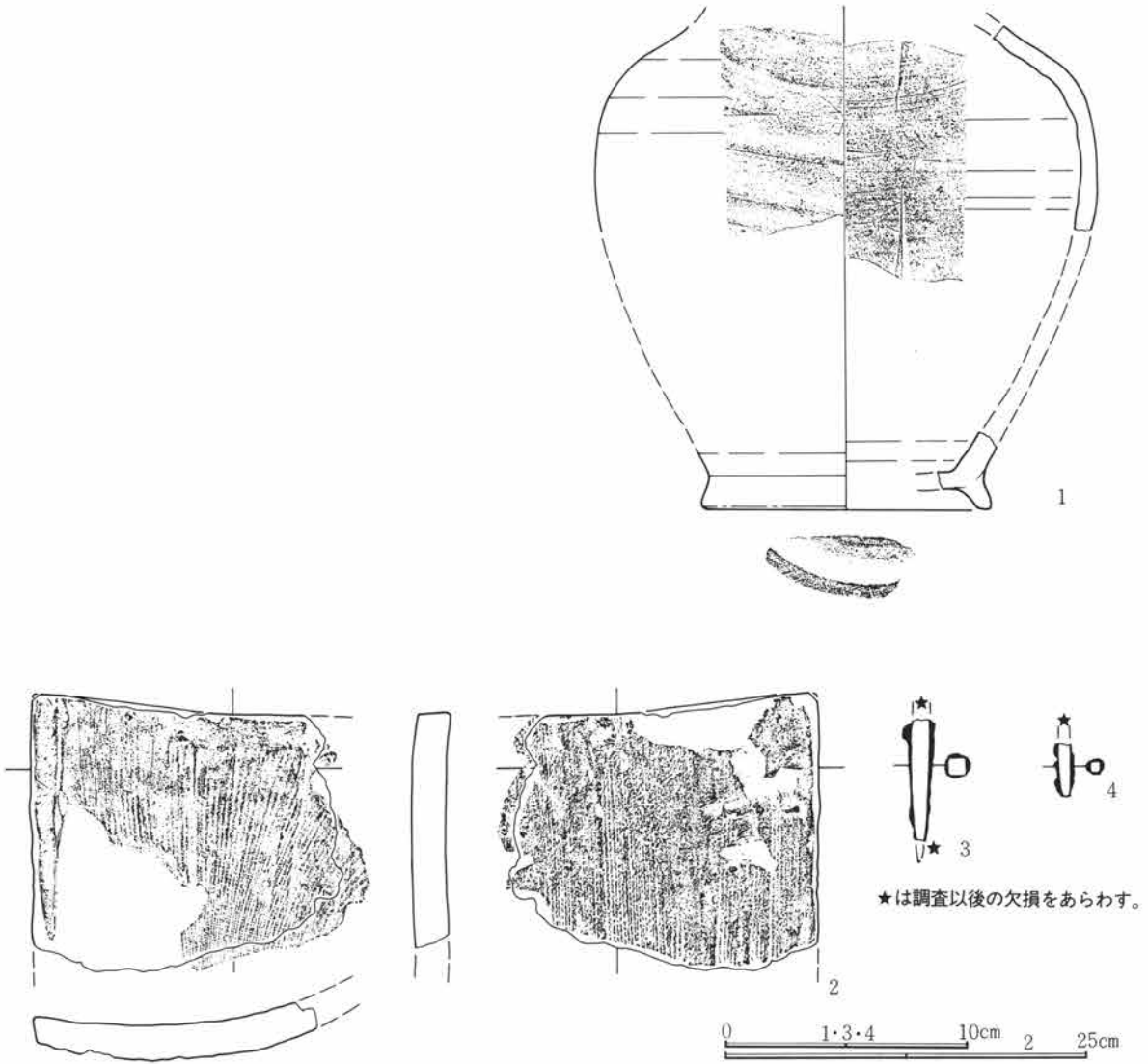


第215図 C区第88号住居跡出土遺物実測図(2)

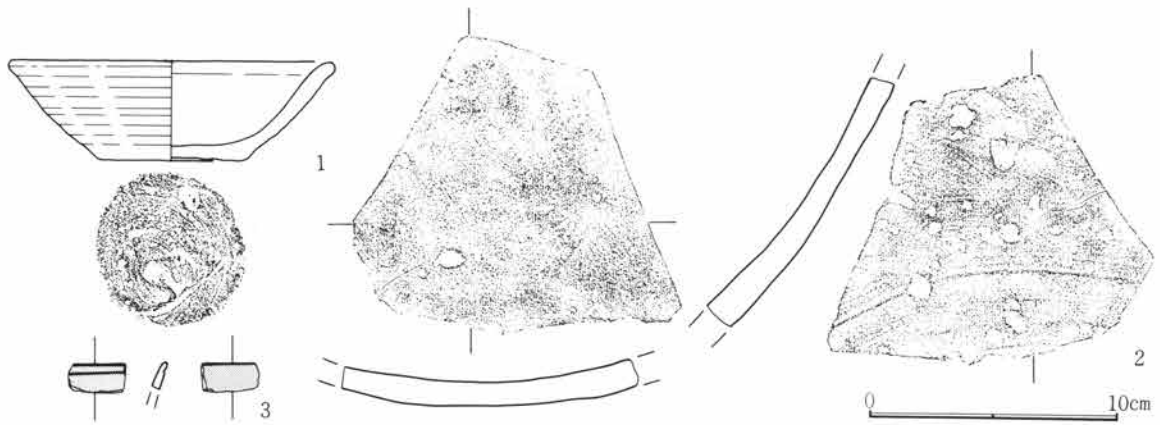


第216図 C区第107号住居跡出土遺物実測図(1)

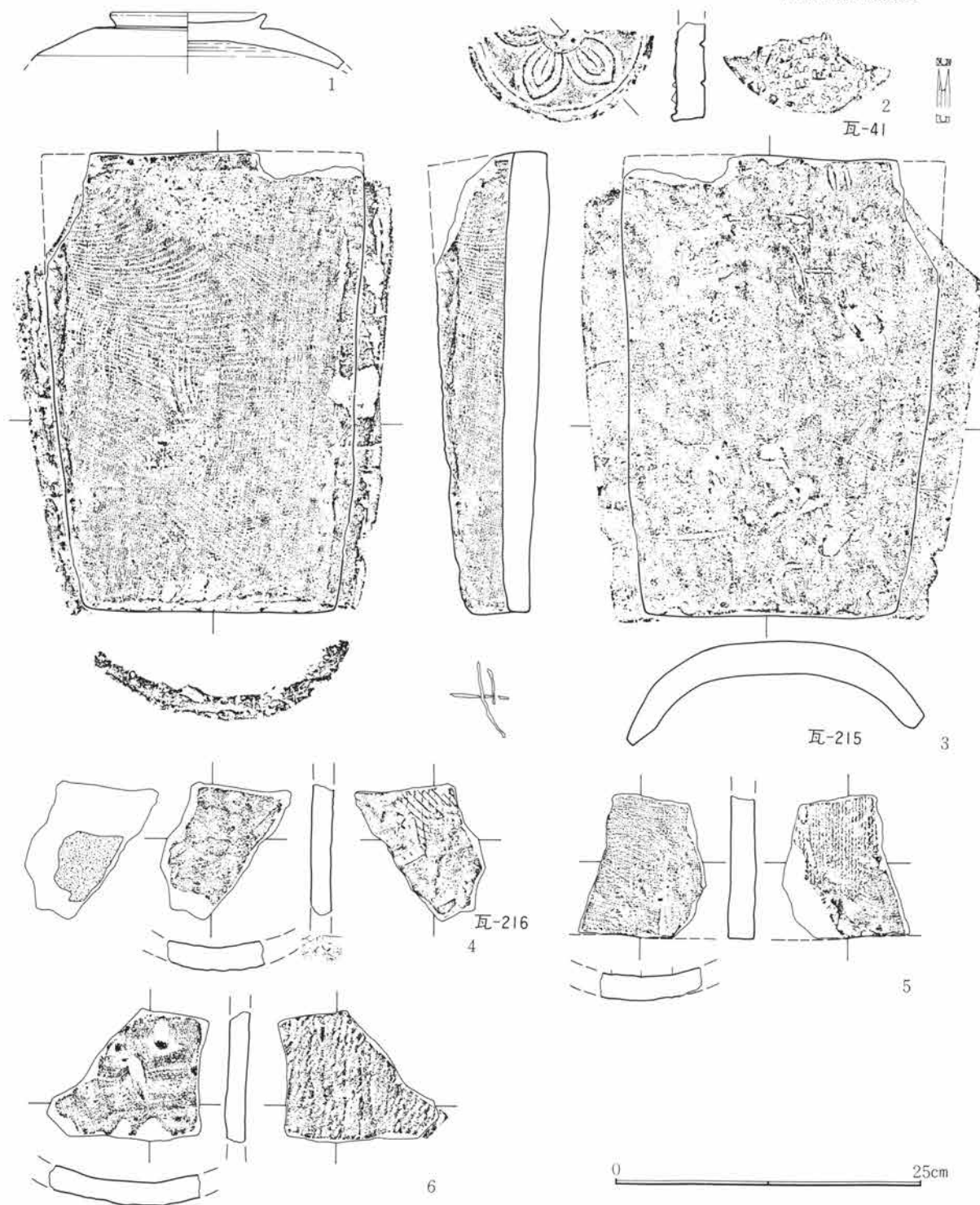
所見(107住) 当住居は前述の88住・108住を切り構築している。尚、南側の部分に就いては108住の所見で述べたとおりである。住居は、横長方形でも特に横に長い。カマドは、検出出来なかったが、調査段階での所見では水路下に存すると考えられる。この為住居形状には不明な点が多く、仮に南東隅部にカマドを備えたとしても出土遺物との整合性も著しく異なり、住居形状は特殊例と考えられる。出土遺物は非常に少ないが、図示した遺物からは9世紀中頃が考えられるが、遺構間の切り合い関係からも整合性がない。



第217図 C区第107号住居跡出土遺物実測図(2)



第218図 C区第108号住居跡出土遺物実測図(1)

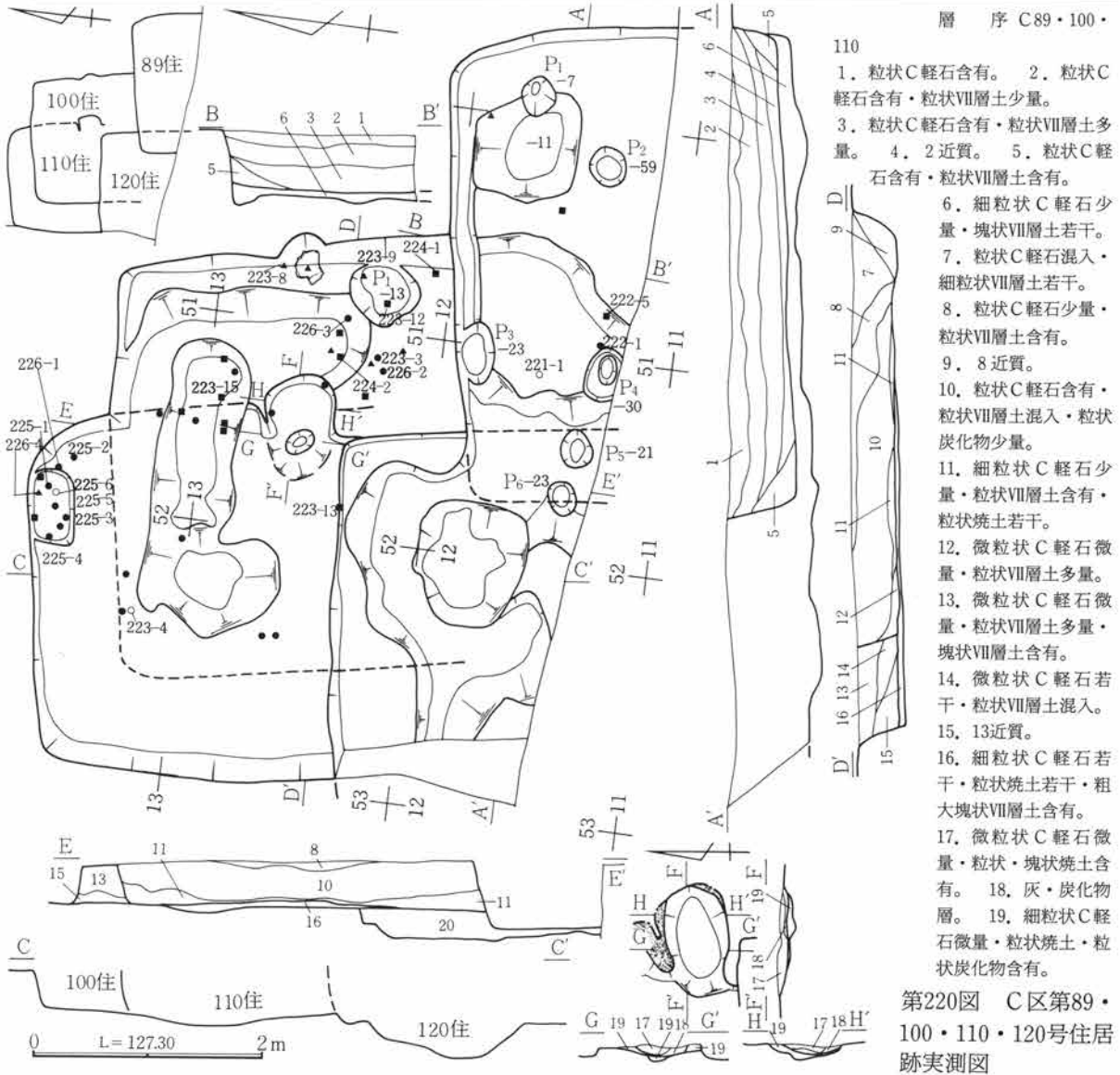


第219図 C区第108号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	C区第89号住居跡	位置	11・12-C-49~51グリッド内。	残存深度	約56cm
未調査部分が多いため詳細不詳。					

遺構名称	C区第100号住居跡	位置	11~13-C-50~52グリッド内。	残存深度	約37cm
C89号住の破壊により詳細不詳。					

遺構名称	C区第110号住居跡	位置	12・13-C-51・53グリッド内。	残存深度	約34cm
C100号住の破壊により詳細不詳。					
遺構名称	C区第120号住居跡	位置	11・12-C-51・52グリッド内	残存深度	約50cmか
89・100号住の破壊及び調査未了部分があるため、詳細不詳。					



所見 (89住) 当住居は100住・120住を切り構築している。尚、住居の大半は、調査区内を横走る農業用水路下に在り調査は未調査部を残している。又、当住居の南壁と思われる住居の立ち上がり、水路の南側で確認されたが、直接に同一住居であることを示す調査は得られなかったことから、一応別住居とした(127住)。調査は、調査区内の隅部に当り平面精査による新旧確認は困難を極めた。この為、これらの住居の新旧関係を明らかにする為掘り方面での検証を行なった。この為、図示したものは全て掘り方面でのもの、一軒単位の状態を現わした状態ではない。

住居は上述のとおり未調査部が大半であり、この部分にカマドの存在が考えられる。この為住居の詳細に就いては把握されなかった。掘り方では、北壁下で壁溝が検出されているが壁板材の据え方とは考え難く、

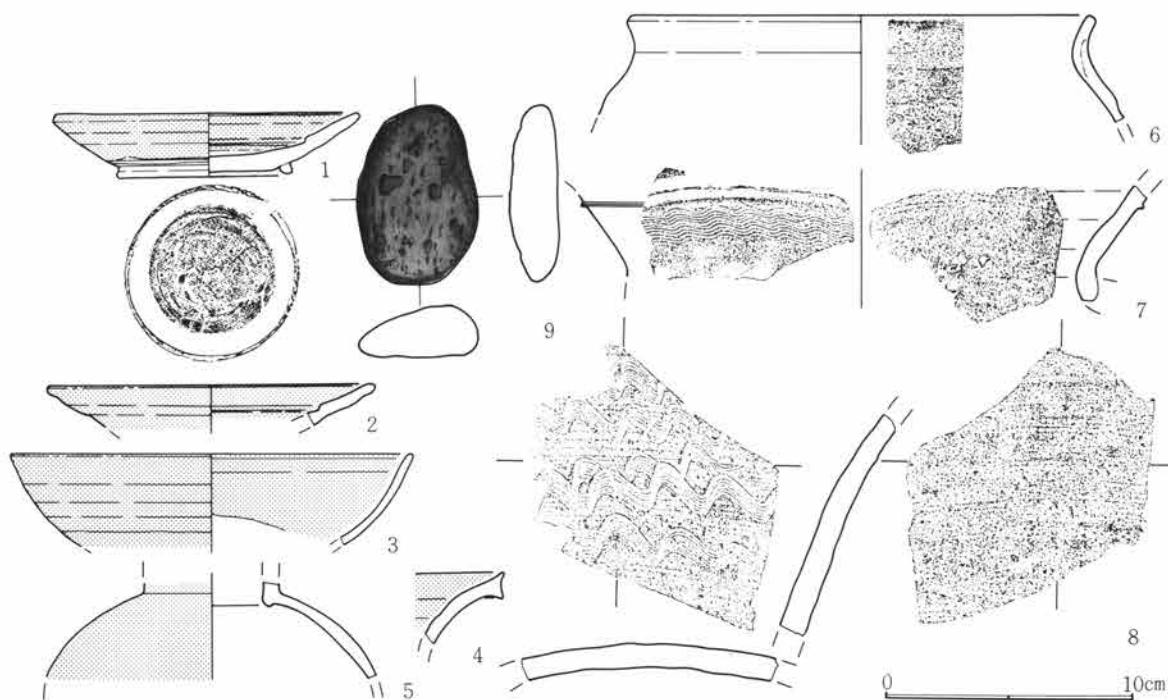
第4章 検出された遺構・遺物

住居構築に伴う所産と考えられる。住居の時期は出土遺物より10世紀後半頃の様相が認められる。

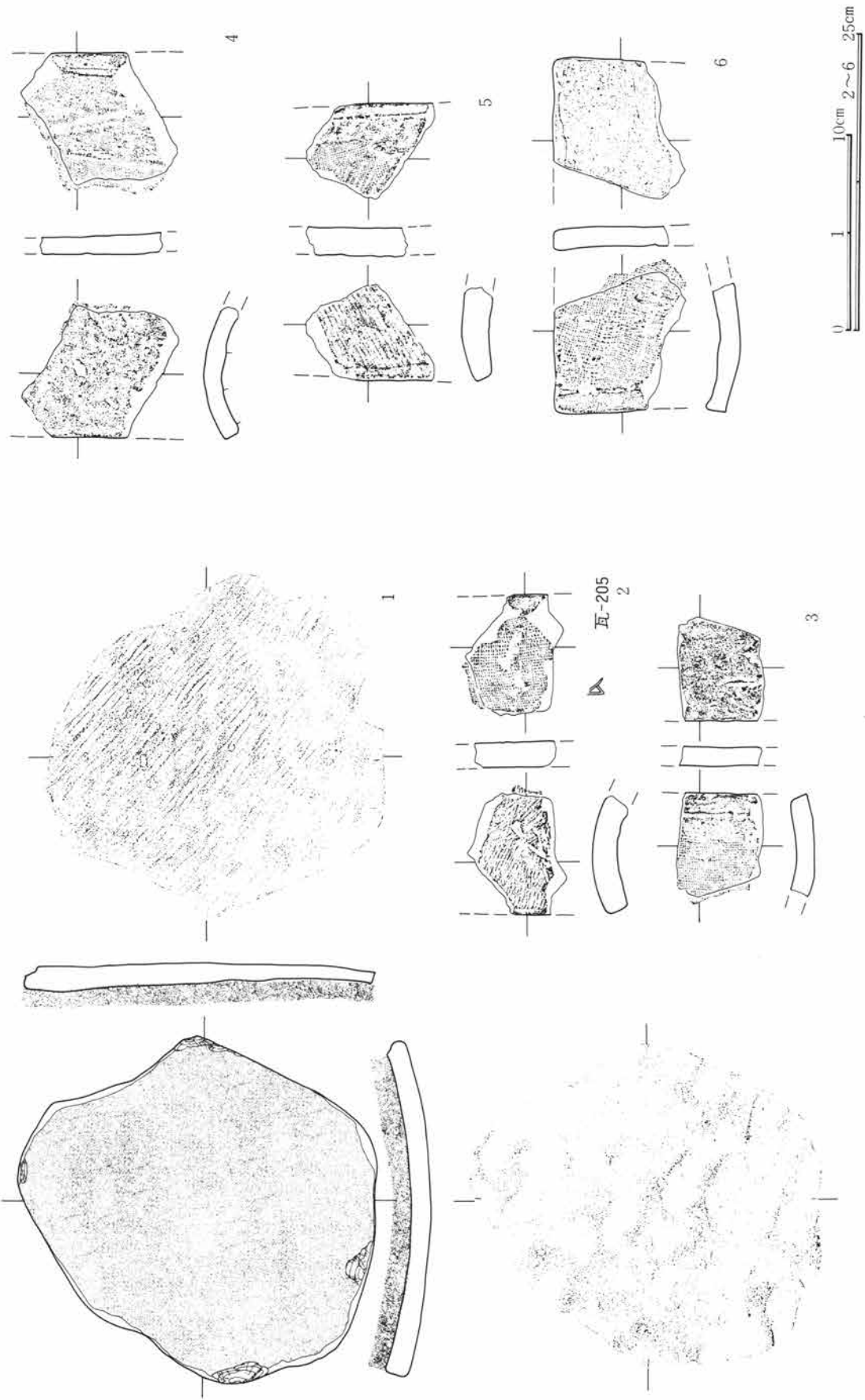
所見 (100住) 当住居は上述の89住に切られ、120住・110住を切り構築している。住居は残存状況・土層断面から横長方形を呈すると考えられるものの、カマドの位置に疑問がある。則、当住居を切る89住が10世紀後半に考えられることから、当住居はそれ以前に考えられる。この場合、D区の住居分類から類推すれば、第III・II段階の形状が想定される。然、当住居のカマドを東壁に想定すれば89住内であり、更に南側へ南東隅部の位置が想定される。この状況は、横長方形の住居としては異例となる。これらの点から、カマドを東壁とするのではなく、寧ろ、B10住の如く南カマドを考慮すべき状況と考えられる。然勿、調査時にこれを検証する証左は無かった。出土遺物では時期を確定するに足るものはなかったが、灰釉皿の年代観では10世紀代である。

所見 (120住) 当住居は89住・100住・110住に切られ、南側の未調査部は89住の状況と同様であり、北東隅部周辺が検出出来ただけの状況である。出土遺物も両住居に覆土の大半が失なわれており皆無に近しい状態であった。この為、詳細は疎か概略の把握も為し得なかった。時期は110住に先行する9世紀後半以前と考えられる。

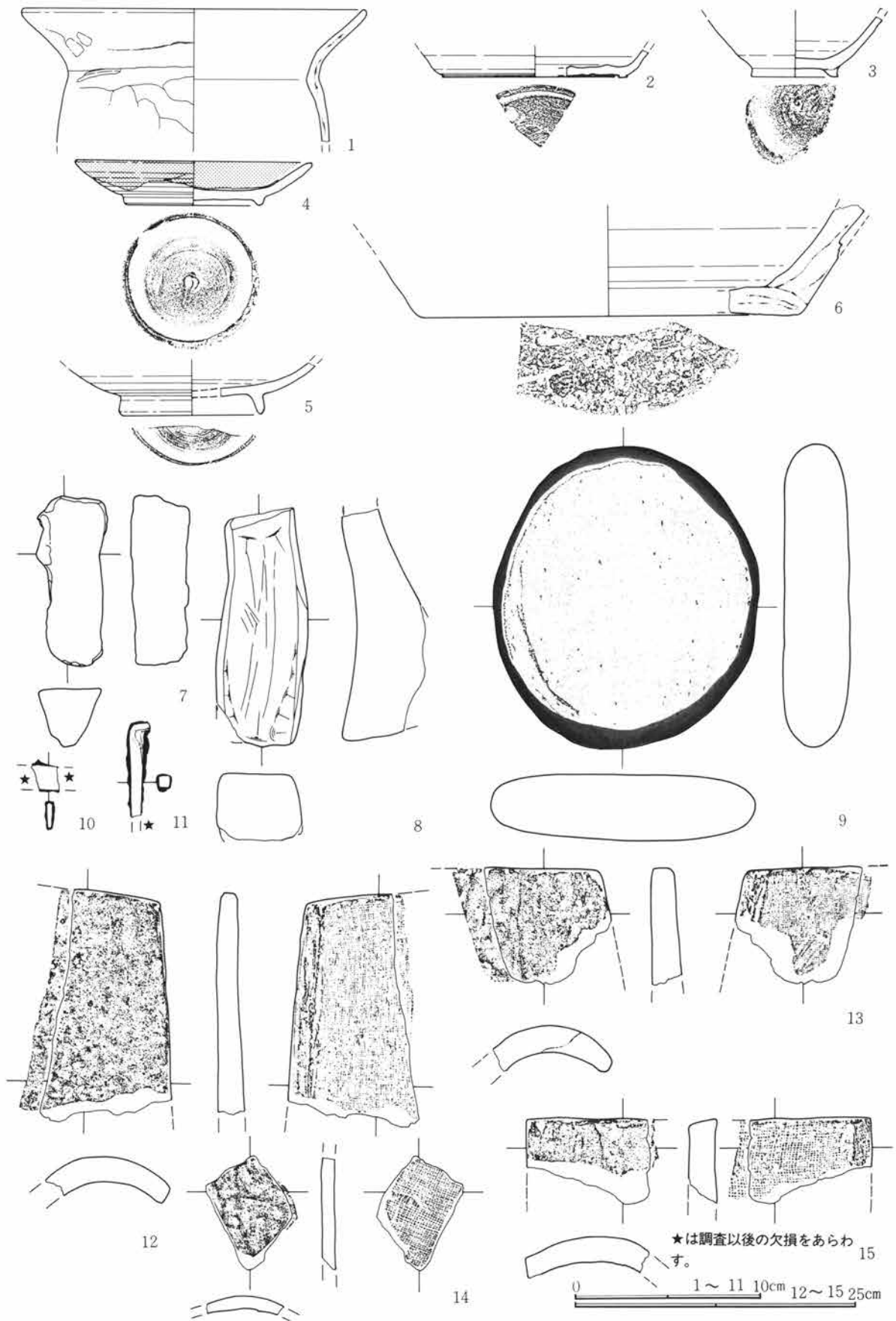
所見 (110住) 当住居は120住を切り構築し、100住・89住に切られている。この為住居の遺存は悪いが、カマドはおぼろげながらも検出されている。住居は横長方形を呈し、東壁にカマドを具備している。南東隅部は判然としなかったが、89住に切られていると考えられる。カマドは東壁中央よりやや南東隅部に寄った位置であったと考えられる。又、カマドは100住の破壊により大半が失なわれ、使用面は底面周辺が残存していたのみである（使用面の図は第220図右下端）。傍竈坑は判然としなかったが、北壁下北東隅部寄りで長方形を呈する貯蔵穴状の施設（P₁）が検出され、周辺部・覆土内から比較的多くの遺物が出土している。出土遺物は、覆土の大半が100住により失なわれておりP₁及び同周辺部からの出土であり、第225図に図示したものが一括で出土している。これらの遺物は、D区の住居分類の第II段階の様相に対比され、住居形状も同様と考えられる。このことから、当住居は10世紀前半頃の廃棄と考えられる。



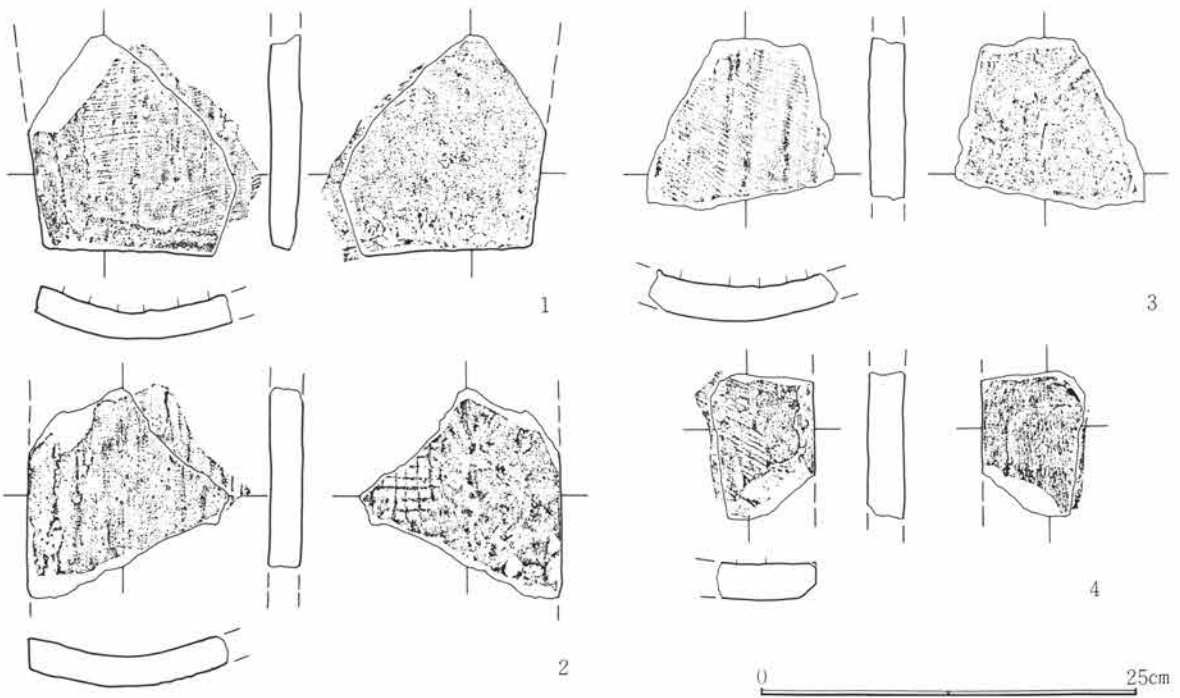
第221図 C区第89号住居跡出土遺物実測図(1)



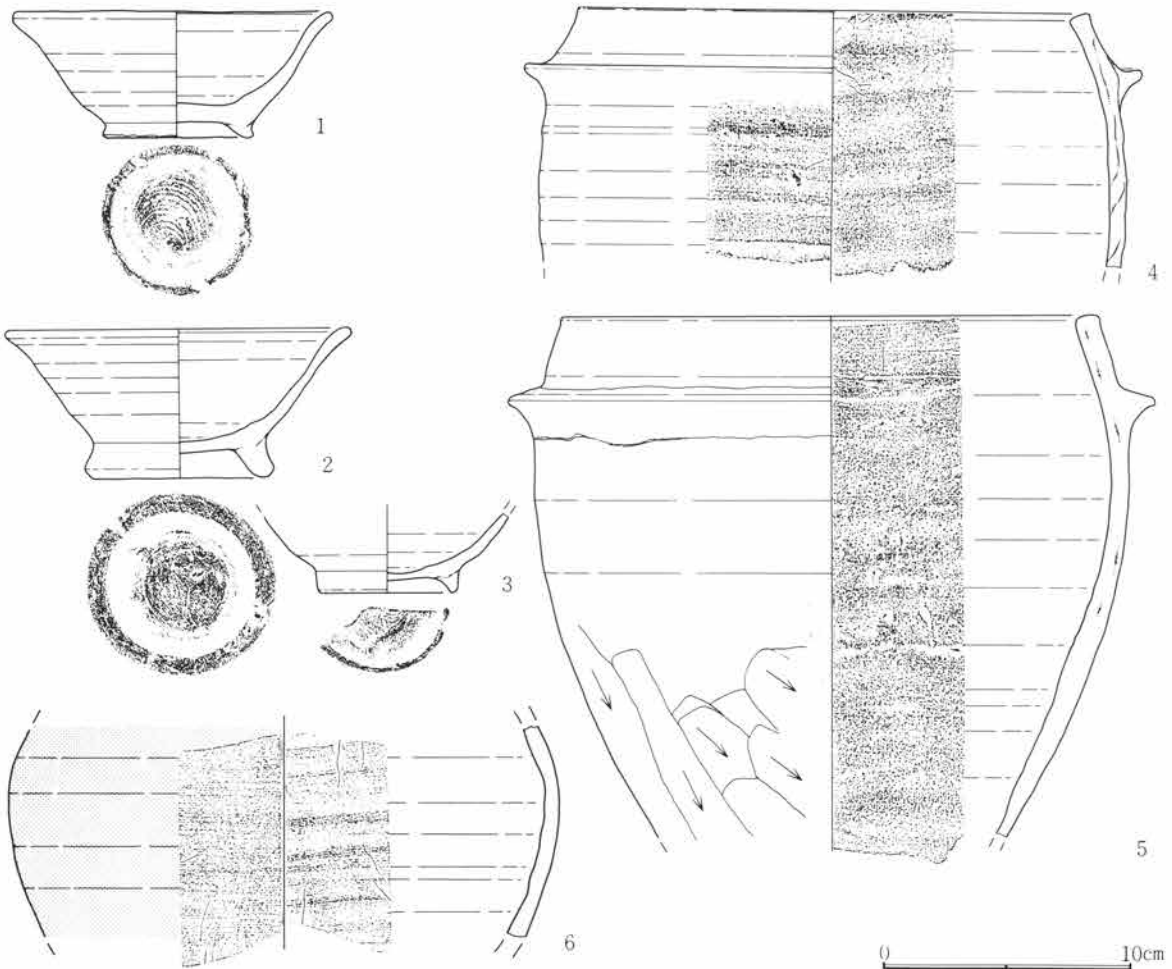
第222図 C区第89号住居跡出土遺物実測図(2)



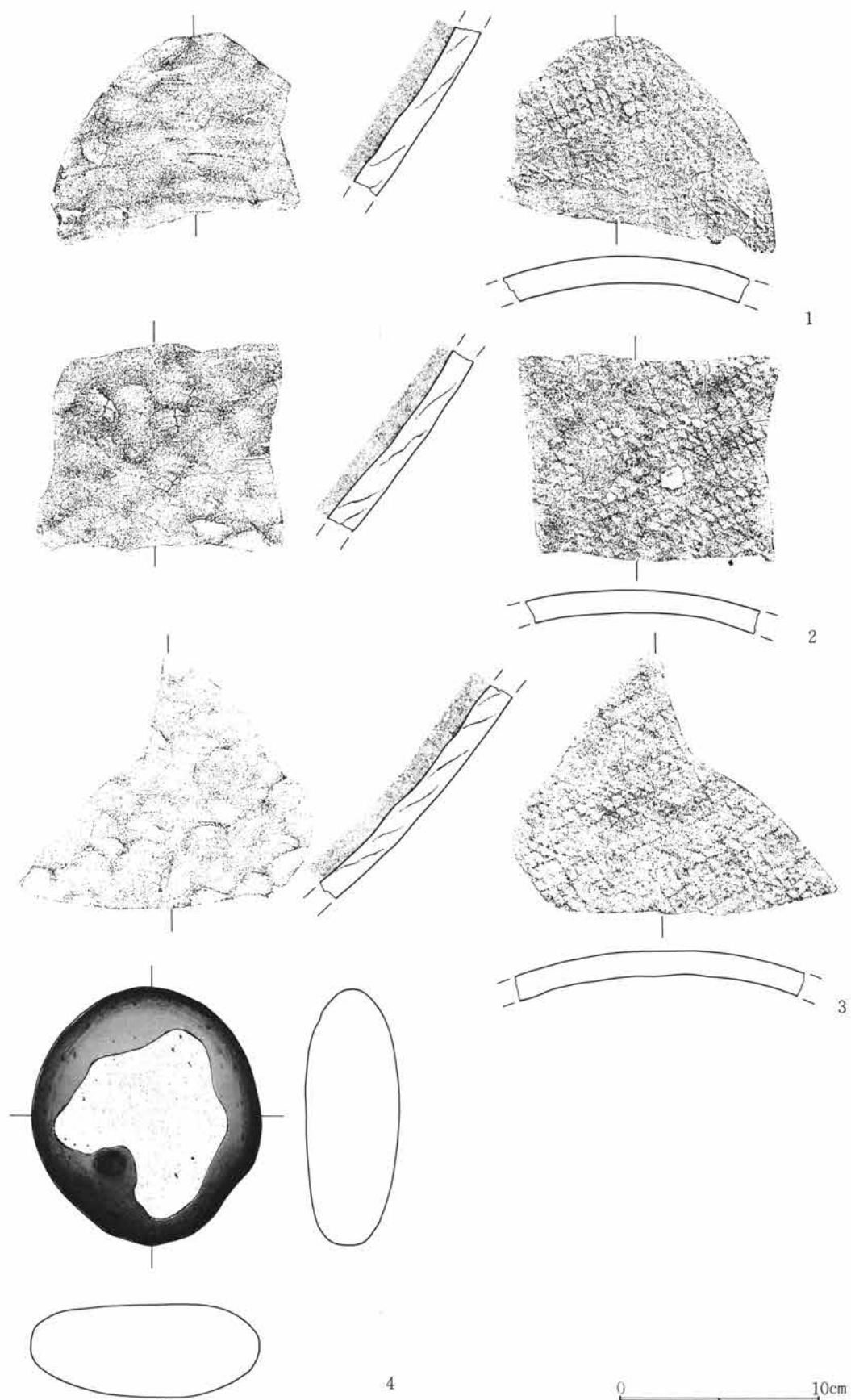
第223図 C区第100号住居跡出土遺物実測図(1)



第224図 C区第100号住居跡出土遺物実測図(2)

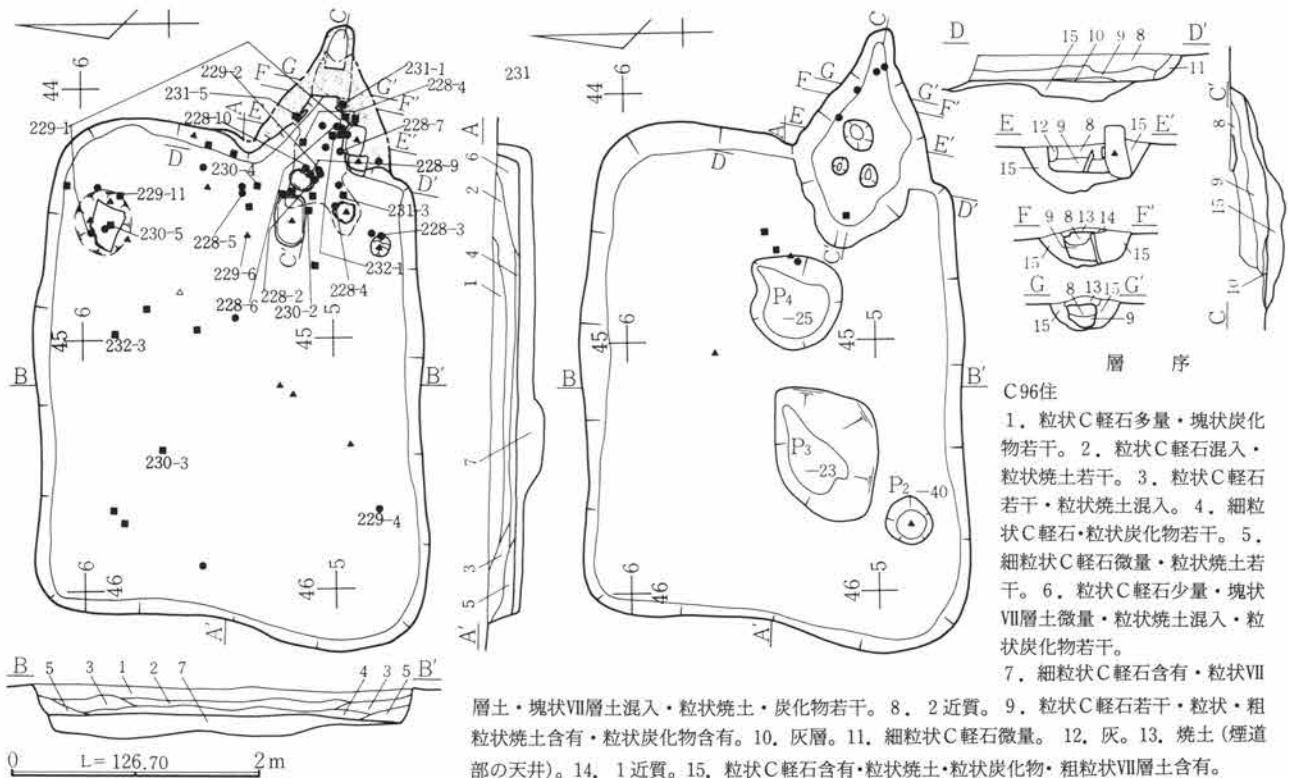


第225図 C区第110号住居跡出土遺物実測図(1)



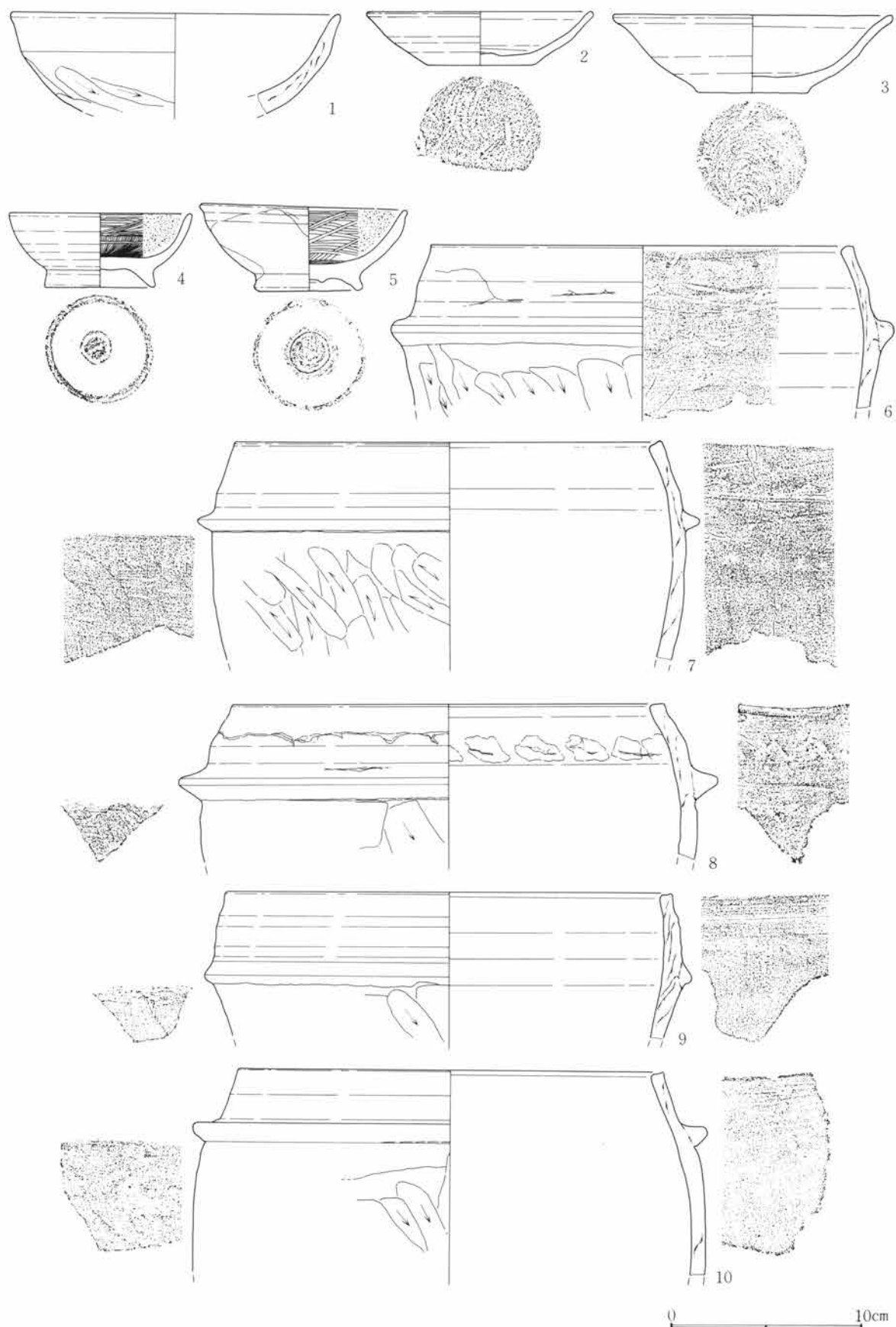
第226図 C区第110号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	C区第96号住居跡		位置	4～6-C-44～46グリッド内。		残存深度	約22cm
平面形態	縦長方形。	規模	3.9m×3.1m	構築基準辺	北乃至南壁	主軸方位	北-92度-南(北壁)
壁	斜位に立ち上がる。		床面	平坦。全面造床。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	全体的に南壁側が浅く北壁側が深い。土坑状のP ₃ ・P ₄ が検出され、柱穴状のP ₂ も検出されている。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から15cm。			主軸方位	北-103度-南	
改築	有。掘り方から焼土・炭化物を検出。	形状	片流れの箱状を呈し、煙道に向かいすぼんでいる。				
規模	全長115cm・屋外長103cm・屋内長 12cm・袖部幅138cm・燃烧部幅 40cm・煙道部幅 24cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。壁は礫・瓦で補強する。						
煙道	天井部が残存する。	袖	顕著でなく、無いに近い。右袖は礫(角柱加工)で補強する。				
掘り方	全体的に大きく不整楕円形状を呈する。						
遺物出土状態	カマド周辺に集中する傾向が看取される。全体的に覆土内での出土が多い。						

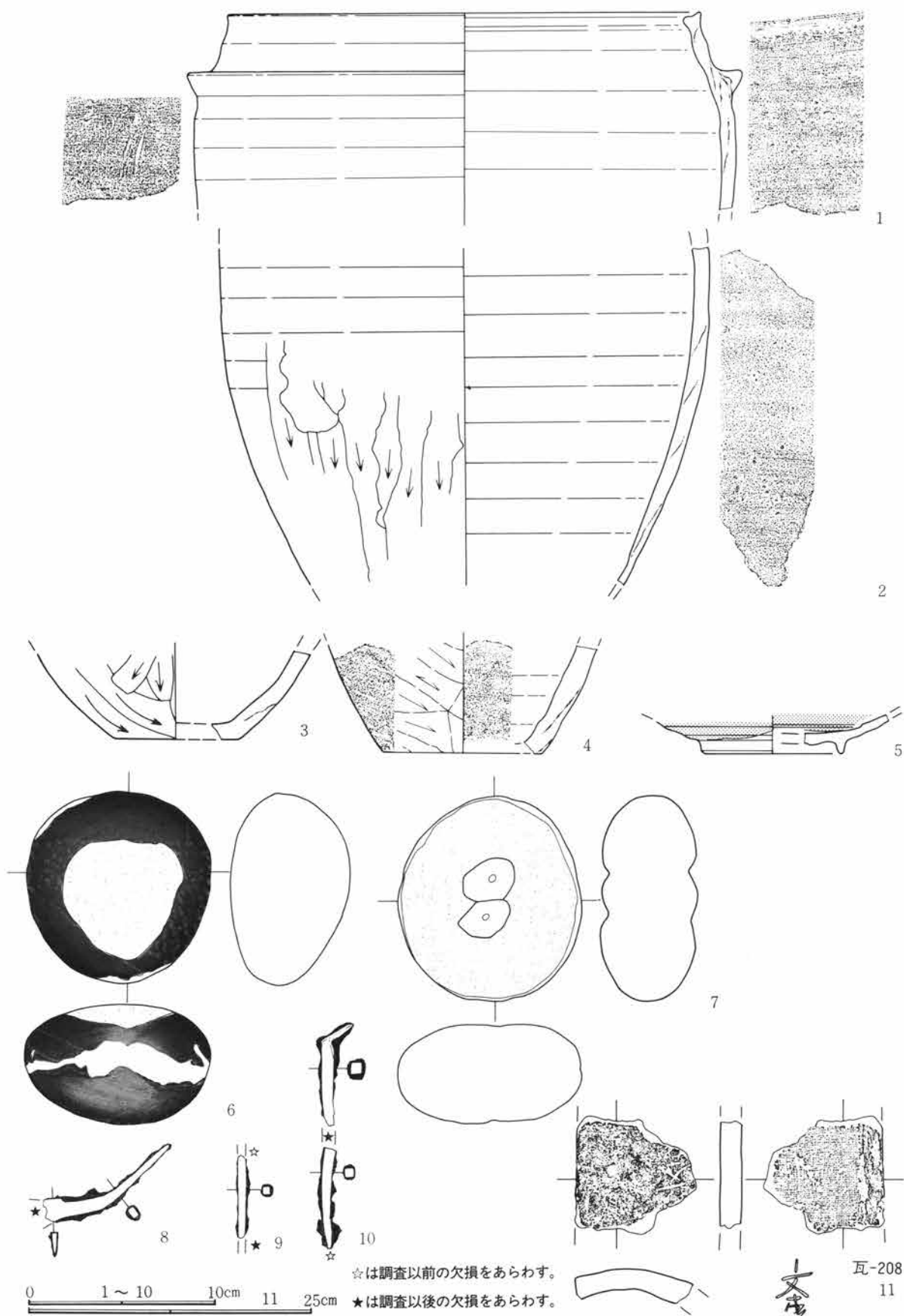


第227図 C区第96号住居跡実測図

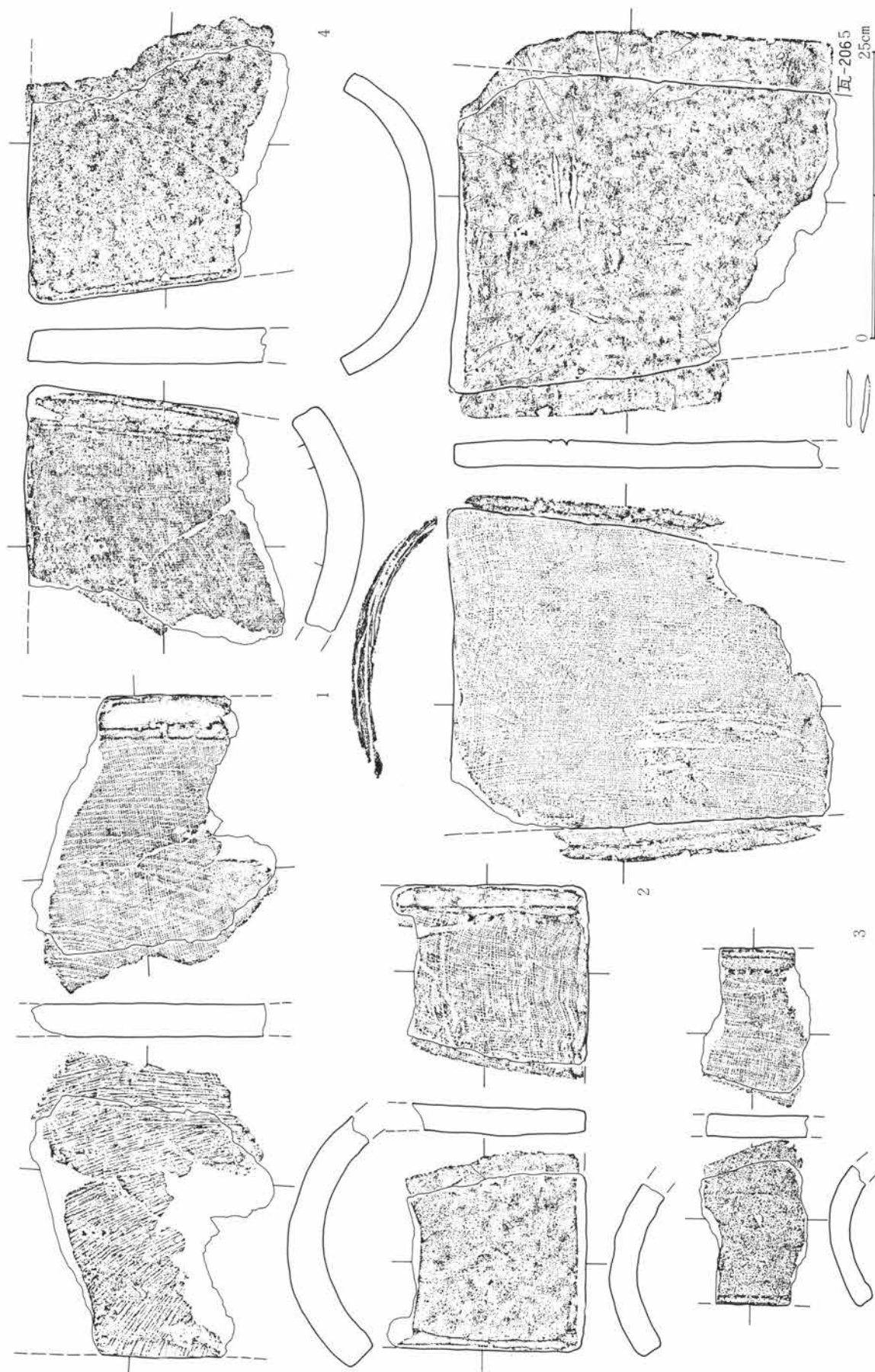
所見 当住居は、124住・140住・141住を切り構築している。住居は縦長方形を呈し南東隅部寄りにカマドを具備する為傍竈坑は検出されなかった。カマドは、燃烧部右壁を礫(地山土層中の砂岩質層の削り出し)と女瓦により補強している。南壁北東隅部寄りの部分で、床面が皿状に浅く窪む状態が認められ、この部分から瓦(第210図-1)が出土している。住居形状は、D区の住居分類の第II乃至III段階に対比され、D28住の形状に近似している。又、出土遺物では、住居分類の第III段階の様相が認められることから、当住居の廃棄は10世紀後半頃と考えられる。



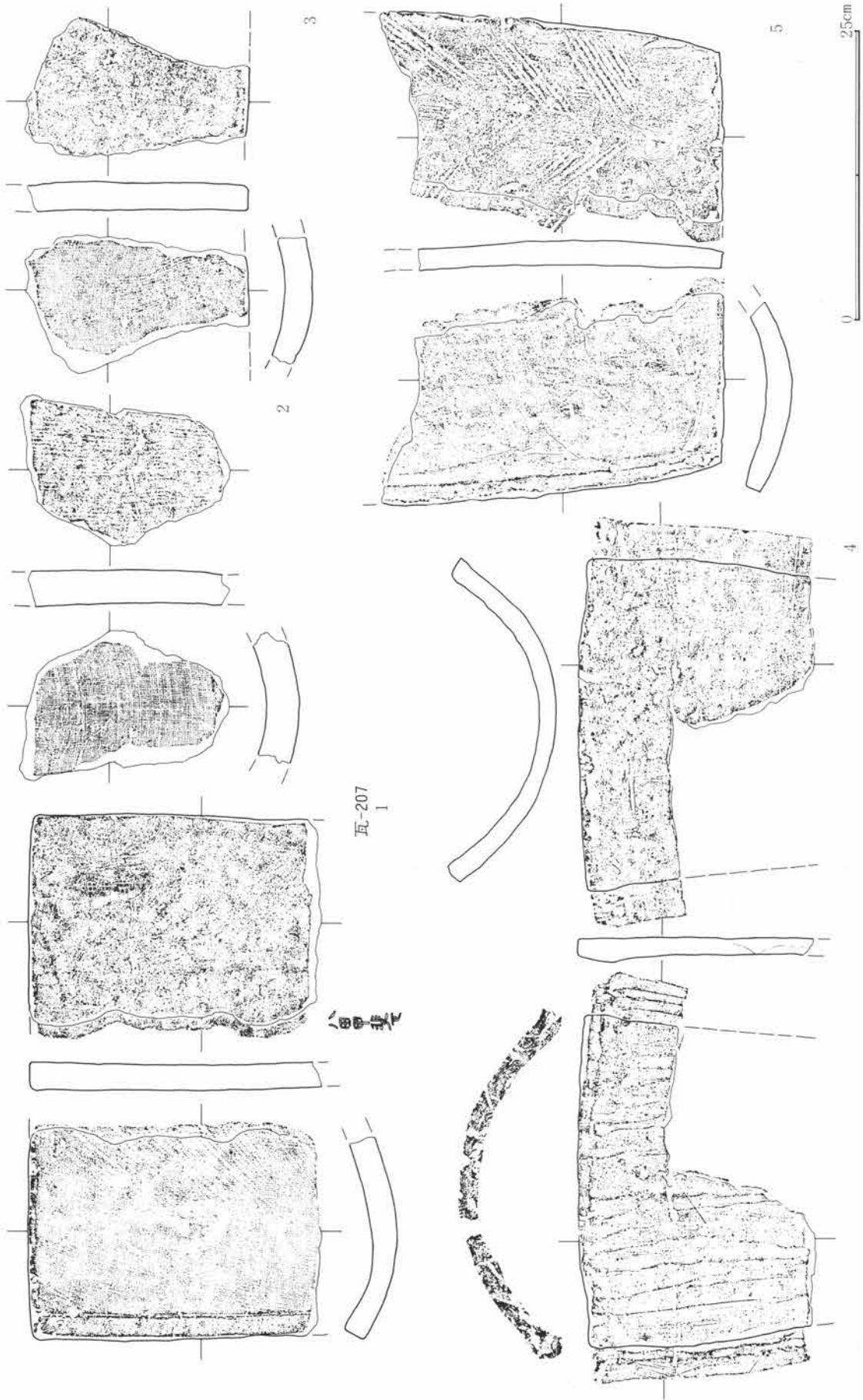
第228図 C区第96号住居跡出土遺物実測図(1)



第229図 C区第96号住居跡出土遺物実測図(2)

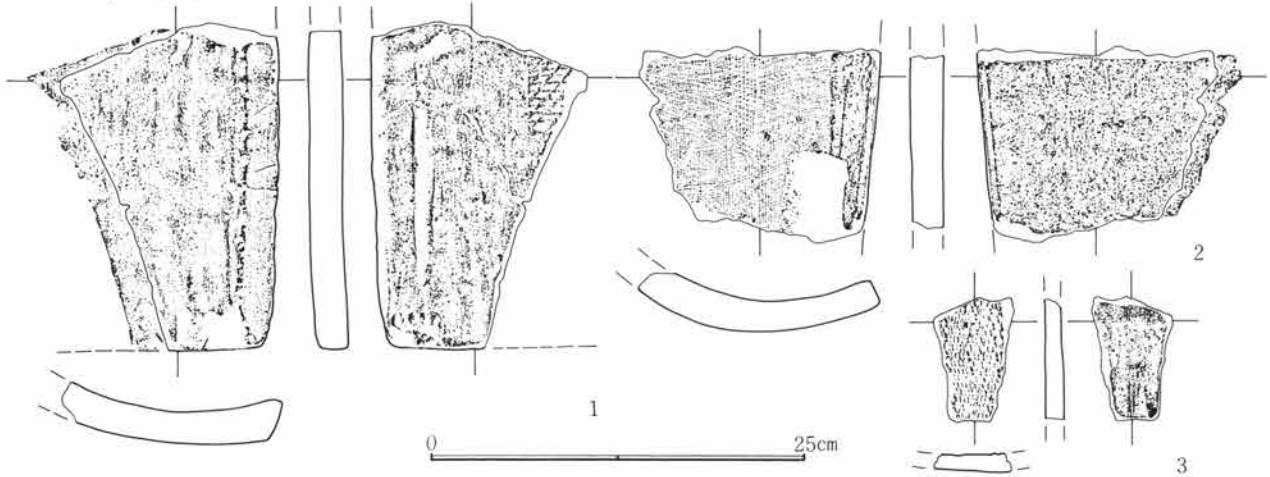


第230図 C区第96号住居跡出土遺物表測図(3)



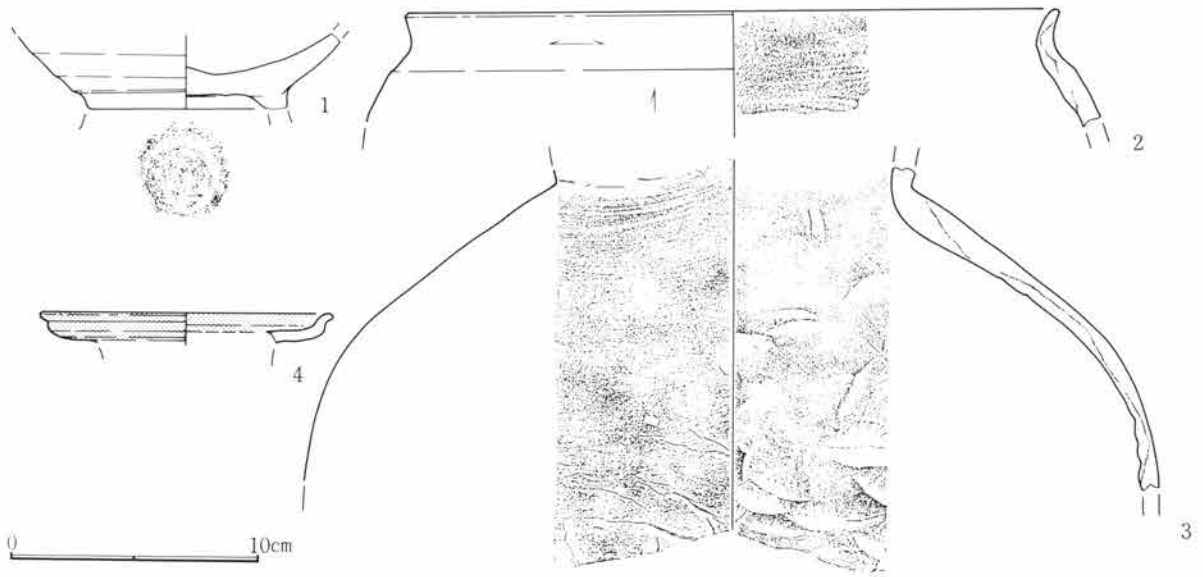
第231图 C区第96号住居跡出土遺物実測図(4)

第4章 検出された遺構・遺物



第232図 C区第96号住居跡出土遺物実測図(5)

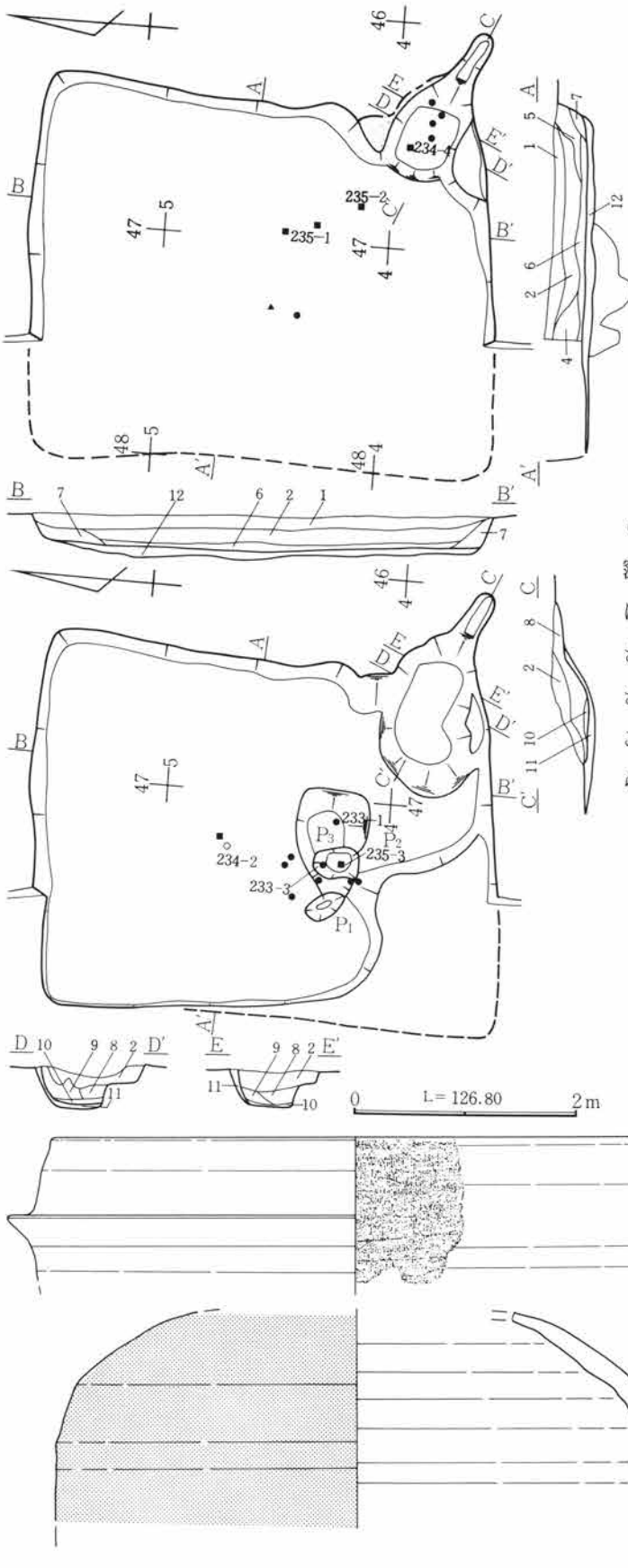
遺構名称	C区第97号住居跡		位置	3～5-C-46～48グリッド内。		残存深度	約30cm
平面形態	横長方形。	規模	3.1m×4.15m	構築基準辺	不分明。	主軸方位	北-90度-南位か
壁	斜位に立ち上がる。		床面	平坦。大半が造床。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	全体的に浅い。南西隅部は認められなかった。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部			主軸方位	北-117度-南	
改築	不分明。			形状	長方形の燃焼部に細長い煙道を具備する。		
規模	全長147cm・屋外長125cm・屋内長 22cm・袖部幅175cm・燃焼部幅 61cm・煙道部幅 18cm。						
焚口・燃焼部	扇状を呈する焚口部は、燃焼空間と重複する部分が著しく、燃焼部先端側に器設部分が考えられる。						
	袖	地山の削り出しが大半を占める。					
煙道	仰角32度程で立ち上がる。残存長48cm。			掘り方	焚口・燃焼部がやや顕著で楕円形状を呈する。		
遺物出土状態	少量の瓦・土器類が覆土内から出土している。						



第233図 C区第97号住居跡出土遺物実測図(1)

所見 当住居は148住・115住を切る。尚、試掘調査時に確認された住居跡で、この折のトレンチで西壁側を著しく失っている。

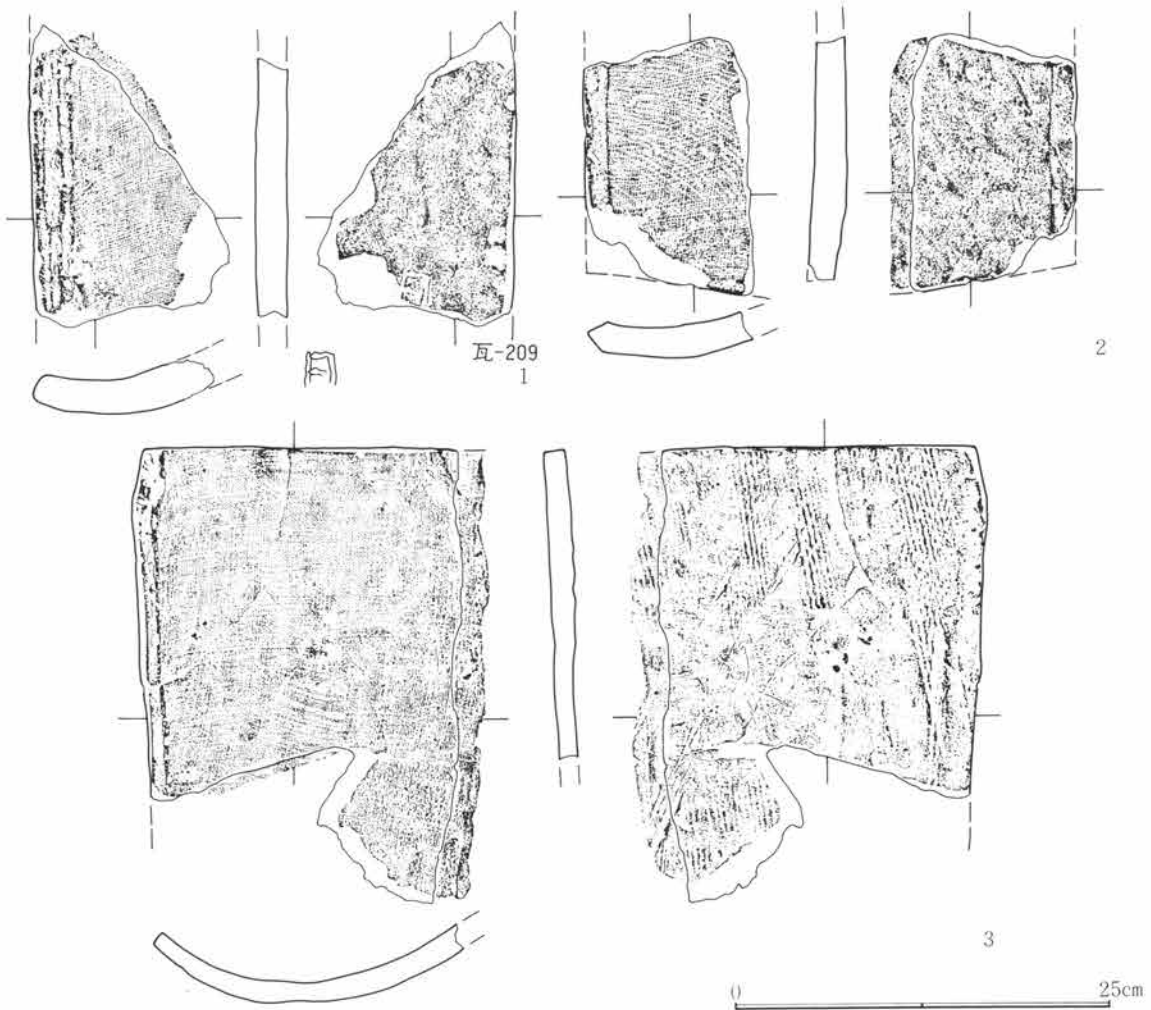
住居は横長形状を呈し、南東隅部にカマドを備えている。貯蔵穴等の施設は検出されていない。カマドは、住居の対角方向に主軸をとる。燃烧空間は幅が広く、煙道は燃烧部底面から25cm程立ち上がった部位より屋外に細く突出している。尚、袖・燃烧部等には補強材が用いられていない。住居の掘り方は、床面下6cm程に底面が検出され、全体に浅く皿状に窪んだ状態である。これらの状態から当住居は、D区の住居分類の第IV乃至V段階に対比される。出土遺物は少なく、住居形状に対比されるもの第233図-2のみ1点である。このことから、当住居は11世紀中頃の廃棄と考えられる。



層序 C97住

1. 粒状C軽石混入。 2. 細粒状C軽石若干。
3. 細粒状C軽石若干・粒状焼土微量。 4. 粗粒状C軽石混入。 5. 粒状C軽石若干・粒状焼土混入。
6. 微粒状C軽石微量。 7. 3近質。 8. 粒状C軽石含有・粒状焼土含有。
9. 微粒状C軽石若干・粒状焼土少量。 10. 細粒状C軽石微量・粒状炭化物含有。
11. 細粒状C軽石若干。 12. 細粒状C軽石微量・塊状VII層土多量。

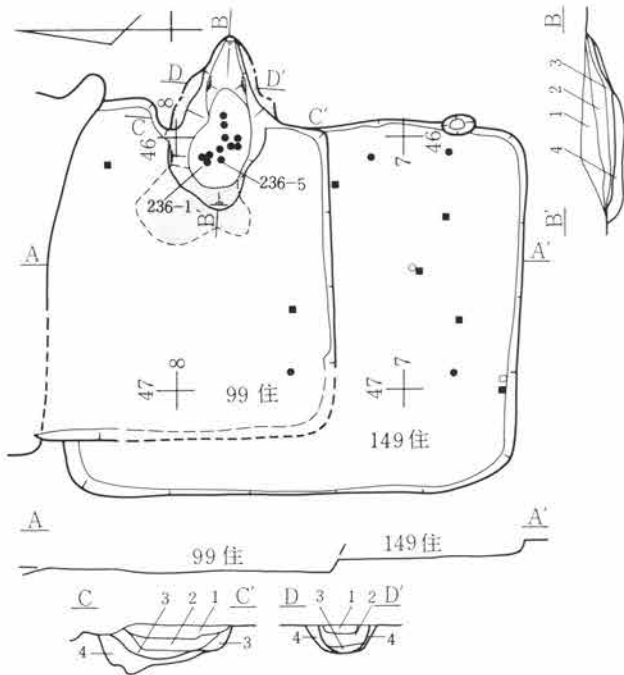
第234図 C区第97号住居跡・出土遺物実測図(2)



第235図 C区第97号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	C区第99号住居跡		位置	7・8-C-45~47グリッド内。			残存深度	約26cm
平面形態	矩形か？。	規模	2.7m×2.2+αm	構築基準辺	不分明	主軸方位	北-91度-南位か	
壁	斜位に立ち上がる。		床面	平坦。(下位に117住の存在により造床は不分明)				
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	下位の117号住の存在により詳細は不分明であるが、部分的に認められている。							
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から40cm。				主軸方位	北-95度-南	
改築	有。掘り方の状況(土層断面)から。			形状	舌状を呈する。			
規模	全長135cm・屋外長 75cm・屋内長 60cm・袖部幅100cm・燃烧部幅 47cm・煙道部幅 15cm?。							
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。							
	袖	左袖のみ検出出来たが、右袖は未構築と考えられる。						
煙道	立ち上がり部のみ検出されている。			掘り方	断面では明らかな所見を得たが、平面検出不能。			
遺物出土状態	カマド内にやや多いが、覆土内では量的に少なかった。							

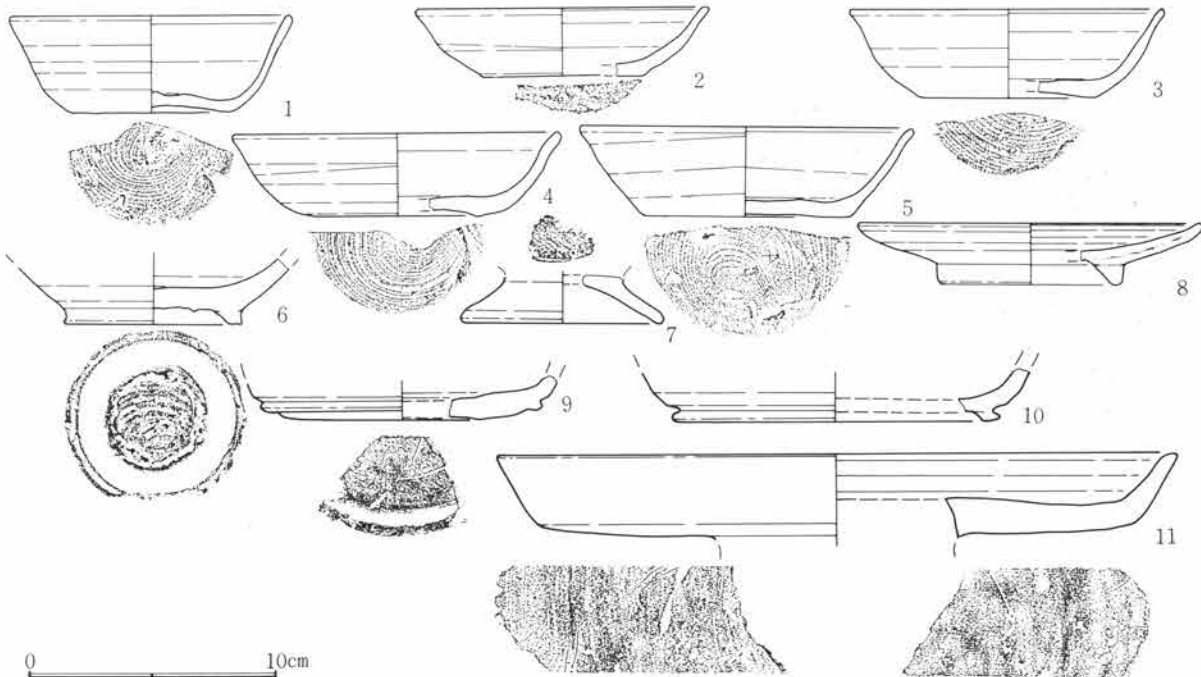
遺構名称	C区第149号住居跡		位置	6～8-C-45～47グリッド内。		残存深度	約10cm
平面形態	横長方形。	規模	3.00m×3.8m	構築基準辺	西壁か	主軸方位	北-90度-南
壁	垂直に立ち上がる。		床面	平坦。南西隅部周辺では地山土を使用する。さらに下位の			
116号住の存在や99号住の破壊により詳細不詳			傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			



層序 (C99住)

1. 粒状C軽石多量。
2. 粒状C軽石少量・塊状焼土・粒状炭化物含有・地山砂質土混入。
3. 粒状焼土混入灰層。
4. 細粒状C軽石若干・粒状焼土・粒状炭化物含有。

0 L=126.80 2m



第236図 C区第99号住居跡・出土遺物実測図(1)

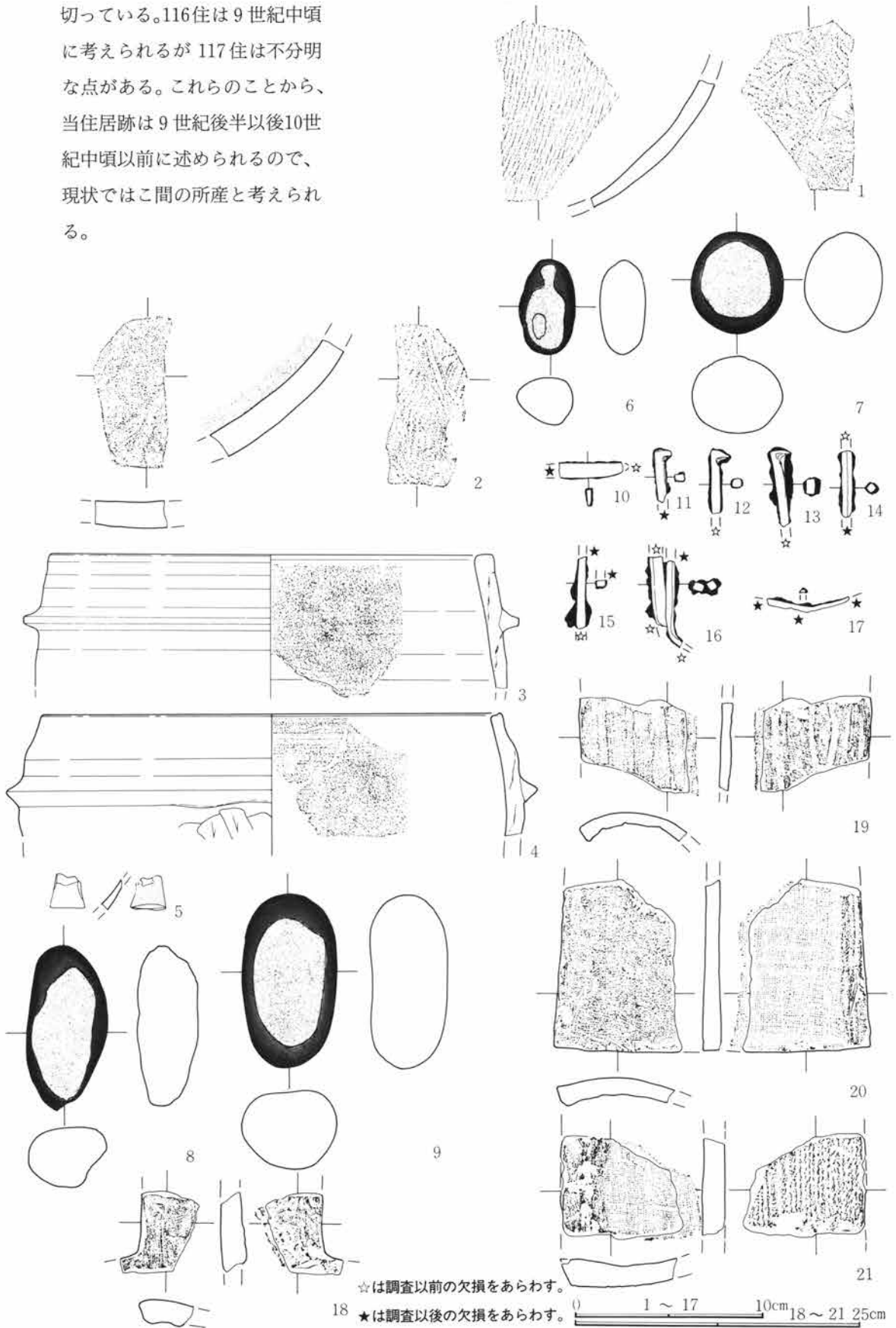
所見 (99住) 当住居は67住に切れ149住・117住・116住を切る。尚、当住居周辺は住居跡の密集が著しく、調査は困難を極めた。そして、部分的に新旧関係の確認の為サブトレンチを設定したことにより住居の一部を失っているものがある。

住居は67住の破壊により形状は不明である。カマドは、南東隅部に寄っており、傍竈坑が認められないことから住居は横長方形のD区の住居分類の第II乃至III段階に対比されることが考えられる。カマドは、補強材等が認められず、煙道は斜位に立ち上がっている。しかし、出土遺物の様相は9世紀中頃の様相が認められる。

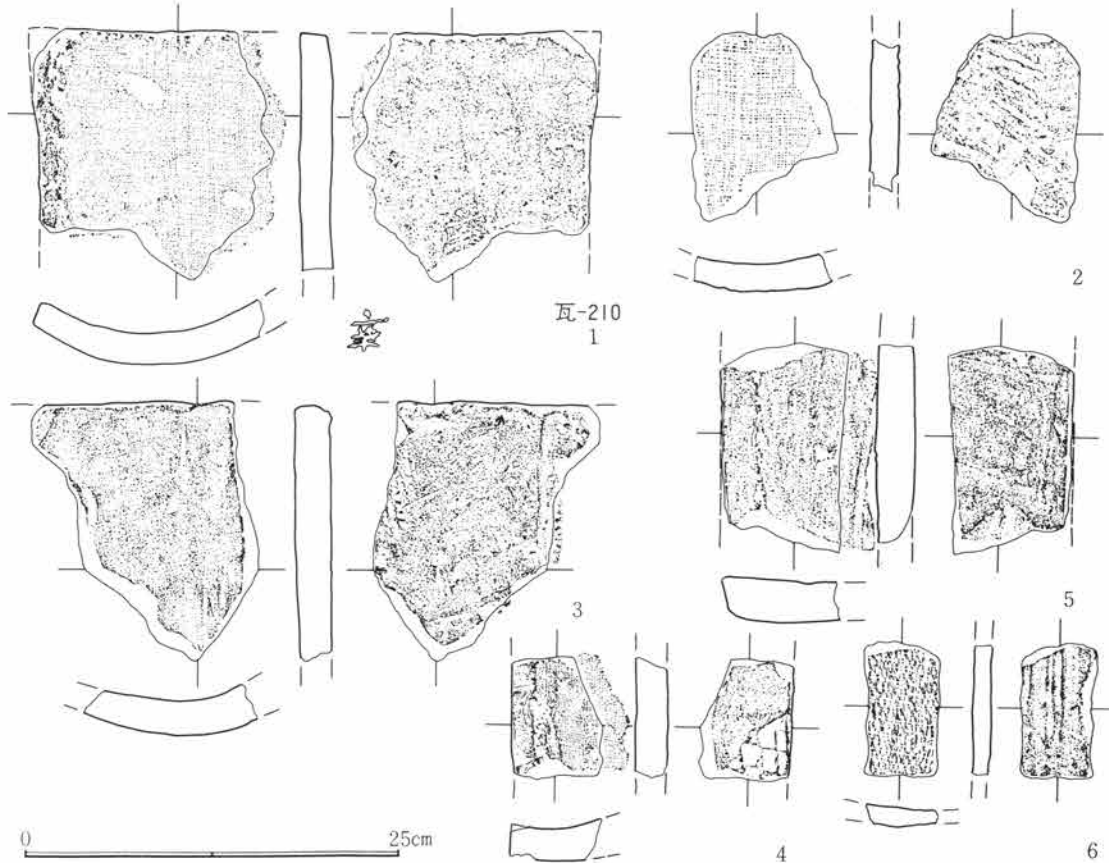
所見 (149住) 当住居116住を切り99住に切れカマド等を失っている。この為詳細は不明であるが、住居跡の相互間の新旧関係から推定してみたい。則、99住が10世紀後半頃で当住居を

第4章 検出された遺構・遺物

切っている。116住は9世紀中頃に考えられるが117住は不明な点がある。これらのことから、当住居跡は9世紀後半以後10世紀中頃以前に述べられるので、現状ではこの間の所産と考えられる。



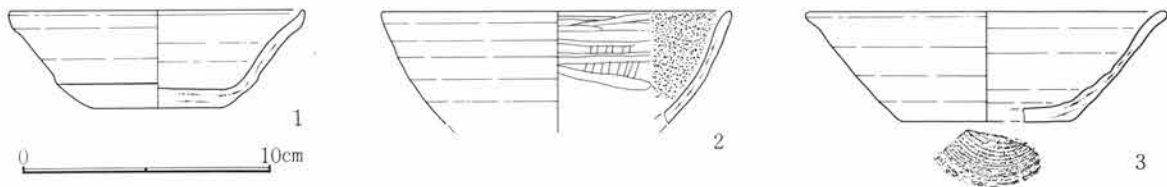
第237図 C区第99号住居跡出土遺物実測図(2)



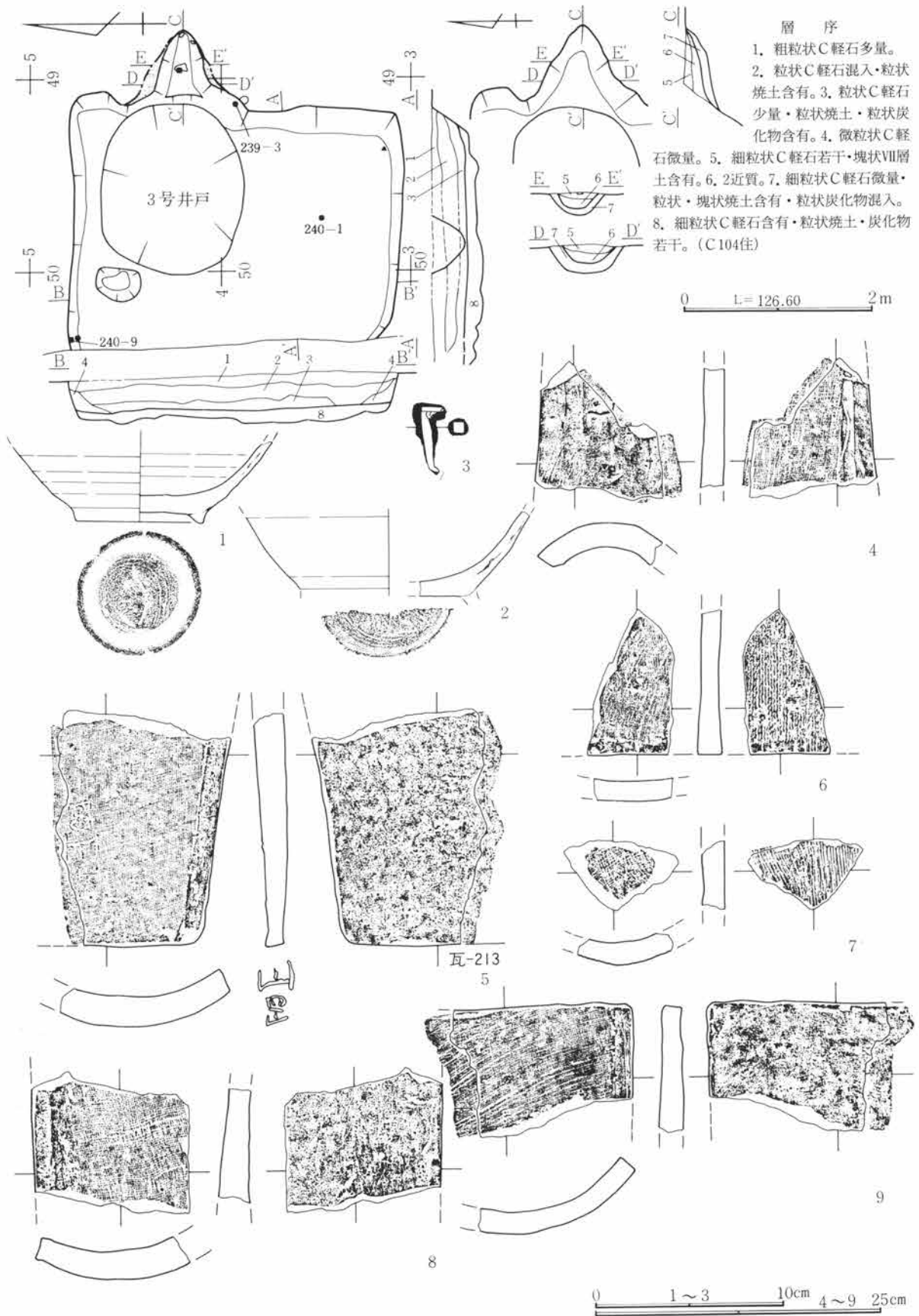
第238図 C区第99号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	C区第104号住居跡		位置	3・4-C-48~50グリッド内。			残存深度	約36cm
平面形態	横長方形	規模	2.65+αm×3.42m	構築基準辺	不分明壁	主軸方位	北-91度-南位か	
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦。全体的に造床が認められる。				
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	全体的にやや大き目の凹凸が認められる。							
遺物出土状態	遺物は覆土内での破片がやや多い。カマドは3号井戸(15世紀)に半分破壊されている。							

所見 当住居は3号井戸(16世紀前半)にカマドを破壊されており、115住・128住を切り構築している。住居は西壁部が調査区域外になり完掘が出来なかったが、横長形状であることは判断される。カマドは東壁北東隅寄りに具備し傍竈坑は認められなかった。このカマドの付設状態は当該区では48住に類例があるものの所産時期に著しい差違がある。出土遺物当遺跡での通有例に同様であり、D区の住居分類の出土遺物では第II・III段階に対比される。住居の廃棄はこの遺物の示す10世紀中頃と考えられる。

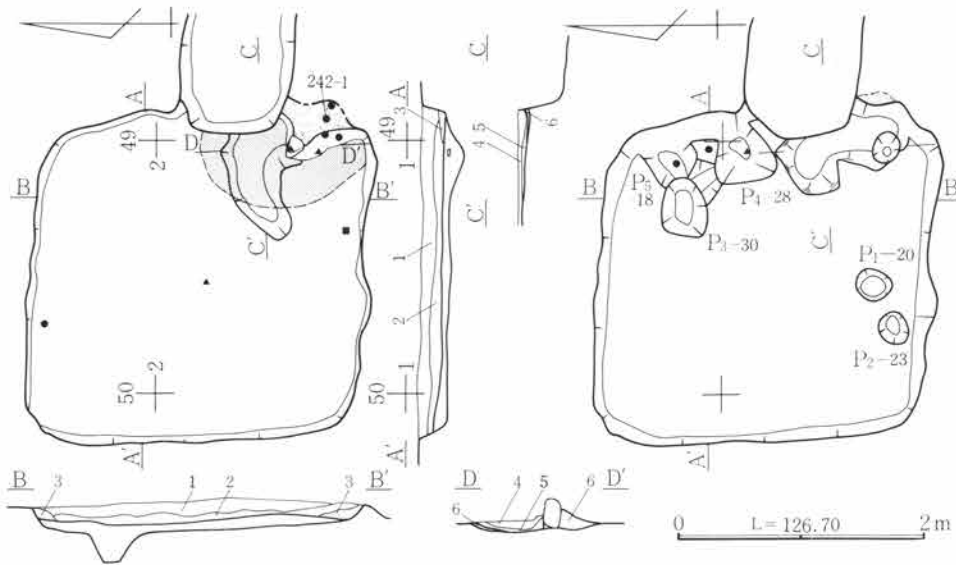


第239図 C区第104号住居跡出土遺物実測図(1)



第240図 C区第104号住居跡・出土遺物実測図(2)

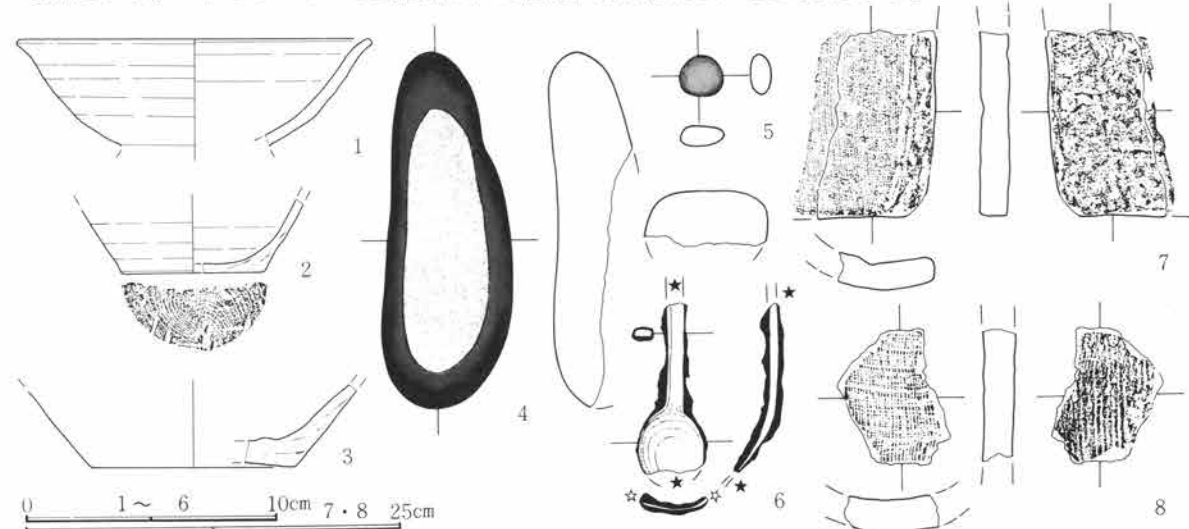
遺構名称	C区第105号住居跡		位置	1・2-C-48~50グリッド内。		残存深度	約18cm
平面形態	正方形。	規模	2.67m×2.70m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-89度-南
壁	詳細不分明。		床面	平坦。全面造床。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。床面・掘り方面・住居屋外周辺を精査したが確認出来なかった。P ₁ ・P ₂ は入口の施設か。						
掘り方	全体には平坦気味であるが、北東部でP ₃ ~P ₅ を検出。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から26cm。遺存不良なため詳細不分明。			主軸方位	北-90度-南位か	
遺物出土状態	全体的に非常に遺物が少なく、床面直上での出土はなかった。						



層序
 1. 粒状C軽石含有。
 2. 粒状C軽石少量。
 3. 微粒状C軽石微量・粒状炭化物含有。
 4. 粒状C軽石混入・粒状焼土若干。5. 灰・炭化物層（粒状C軽石微量・粗粒状VII層土微量）（C105住）

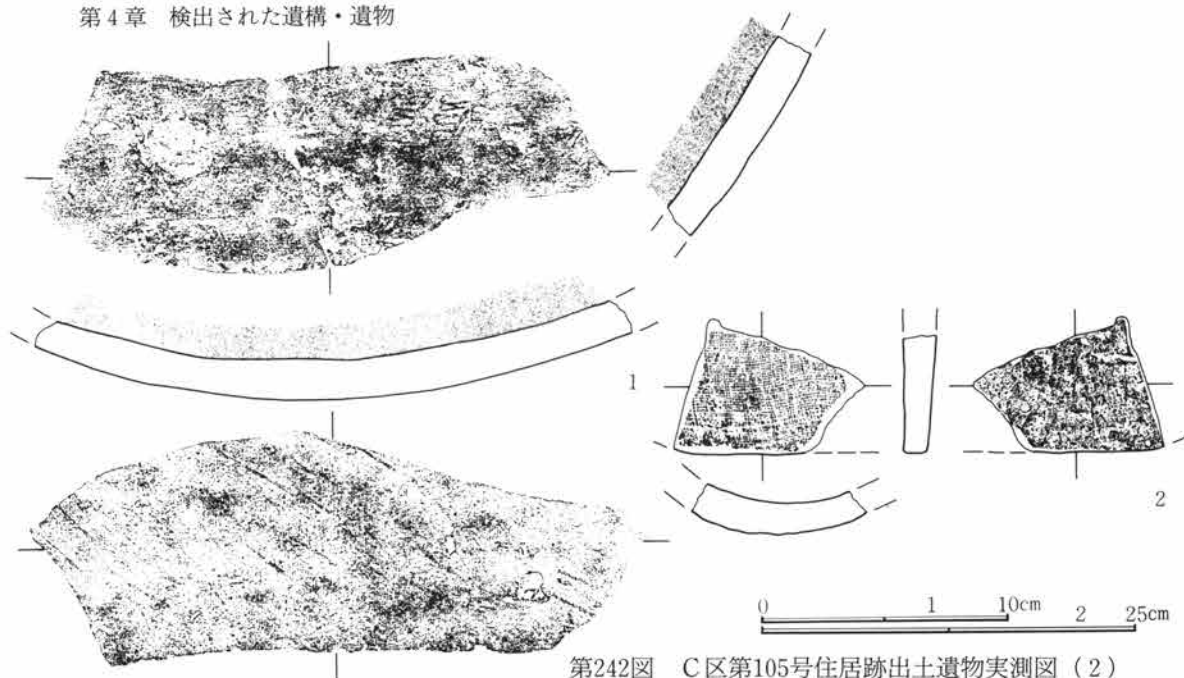
所見 当住居は、138住を切り構築している。カマドは攪乱に大半を破壊されているものの右壁側が残存していた。

住居は小型の矩形状を呈し、東壁南東隅部寄りにカマドを備えている。傍竈坑は認められなかった。カマドは燃焼部右壁及び右袖が残存していた。右袖は先端部は礫による補強が認められたが、他の部分では補強材等は認められなかった。住居形状はD区の住居分類の第Ⅲ段階に対比される。然、傍竈坑は住居が小型である故に付設されなかった可能性も考慮される。出土遺物は全体に少なかったが、第Ⅱ乃至Ⅲ段階の様相が窮知される。これらのことから当住居は、10世紀中頃の廃棄されたと考えられる。



第241図 C区第105号住居跡・出土遺物実測図(1) ☆は調査以前の欠損をあらわす。★は調査後の欠損をあらわす。

第4章 検出された遺構・遺物



第242図 C区第105号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	C区第106号住居跡	位置	6・7-C-49・50グリッド内。	残存深度	約8cm
カマド	位置	東壁。詳細位置は不明。		主軸方位	北-101度-南
改築	有。改築は旧状を利用している。		形状	全体的に遺存が悪く馬蹄形状に残存する。	
規模	全長 78cm・屋外長 62cm・屋内長 16cm・袖部幅 72cm・燃烧部幅 38cm。				
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。壁は瓦・礫により補強する。				
	袖	地山砂岩質土を切り出し補強する。			
煙道	未検出。立ち上がり部は瓦を用いる。		掘り方	楕円形状を呈する。補強材の据方を検出。	
遺物出土状態	カマド部のみで検出。瓦を多用し、左袖部床面直上で土師器坏(246-1)を検出。				
遺構名称	C区第121号住居跡	位置	8・9-C-50~52グリッド内。	残存深度	約16cm
カマド	位置	東壁、詳細位置は不明。		主軸方位	北-97度-南
改築	有。掘り方内で焼土粒子を検出。		形状	全体的に遺存が悪く馬蹄形状に残存する。	
規模	全長 96cm・屋外長 65cm・屋内長 31cm・袖部幅145+ α cm・燃烧部幅 58cm。				
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。				
	袖	瘤状で屋内に突出する。			
煙道	未検出。		掘り方	検出平面形状より1回り大きい状態。	
遺物出土状態	カマド周辺で少量が出土しているのみ。				
遺構名称	C区第127号住居跡	位置	9・10-C-51・52グリッド内。	残存深度	約7cm
調査区際での検出のため詳細等不明な点が多い。					
遺構名称	C区第128号住居跡	位置	6-C-50~53グリッド内。	残存深度	約20cm
128号住及び4号井戸の破壊により詳細不詳。133号住を切る。					
遺構名称	C区第129号住居跡	位置	7・8-C-50~52グリッド内。	残存深度	約22cm
121号住及び4号井戸の破壊により詳細不詳。					

遺構名称	C区第133号住居跡	位置	6-C-50グリッド内。	残存深度	約11cm
129号住及び4号井戸の破壊により詳細不詳。南東隅部の南壁部がオーバーハングしている。					

所見 (106住) 当住居は4号井戸(10世紀後半)・128住に切られる。133住・139住は確実には言及し難いが、調査時の所見からは当住居が切っている。住居は上述の状況から遺存状態が非常に悪く、カマド周辺が残存するのみであった。カマドは東壁に構築されているが、南東隅部側を128住に切られている為詳細な位置は不明である。カマドの構造は、燃焼部四隅に地山削り礫(地山土層中の砂岩質の砂質土層を削出したもの)を据え置き、側壁を瓦を用い補強している。袖は、この地山削り礫を利用する程度の小規模のものである。出土遺物はカマド部にほぼ限定される。この中で第246図-1はカマド左袖の傍らから床面直上で出土している。住居の廃棄時期は、住居形状が不明な点と遺物が少ない点から明確に言及し難いが、9世紀中頃乃至前半と考えられる。

所見 (121住) 当住居は129住・127住に切れ、145住を切り構築している。又、北接して農業用水路が横走していた為北側は未調査である。これらの状況から当住居の詳細は不明なことが多い。住居は東壁にカマドを具備し傍竈坑を備える。カマドは燃焼部がやや広い。上述した如く、当住居は遺存状況が悪い為住居形状からの時期は不確定面がある。然、傍竈坑の存在から10世紀前半以前と考えられ、出土遺物には、これより新しい状況があるものの、これらは、当住居を切る129住・127住に帰属する可能性があることから勘案すれば、当住居は、D区の住居分類の第II段階以前の形状で、10世紀前半以前の住居と考えられる。

所見 (127住) 当住居は121住を切る。遺存状態が不良(調査の不手際にも原因する)である為詳細は不明である。出土遺物も判然としないが、121住として図示した中に含まれる可能性がある。住居の時期は、切り合い関係から10世紀以降であることが考えられる。

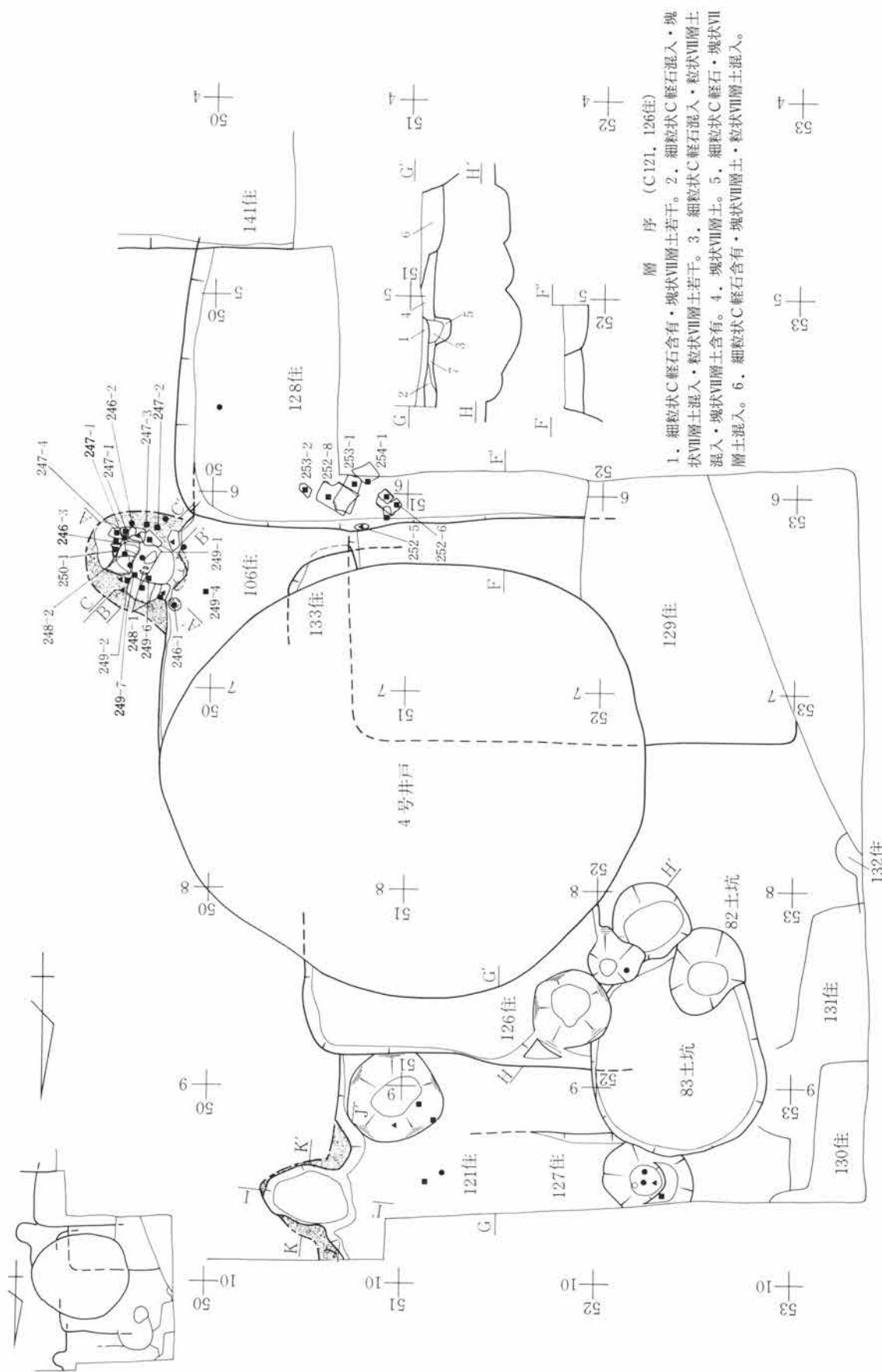
所見 (129住) 当住居は121住を切り、4号井戸に大半を破壊され失なわれている。尚、西接する土坑との切り合いは不明である。住居の時期は10世紀以降と考えられる。

所見 (128住) 当住居は106住を切り104住に切られる。尚、住居の大半は調査区域外に延びる為未調査部が大半である。検出部は東壁の部分と北壁の部分で、検出長(北壁)4.2mを測ることから大型に類する住居と考えられる。時期は出土遺物から9世紀後半と考えられる。

所見 (133住) 当住居も4号井戸に大半を切れ失なわれており。更に、106住・139住に切られている。この為、遺存は最悪でありであり、極一部が残存するに過ぎない。又、前述の129住と同一住居の可能性もあるが、事実確認が出来なかったことから別の遺構とした。時期は、出土遺物等皆無であった為不明である。

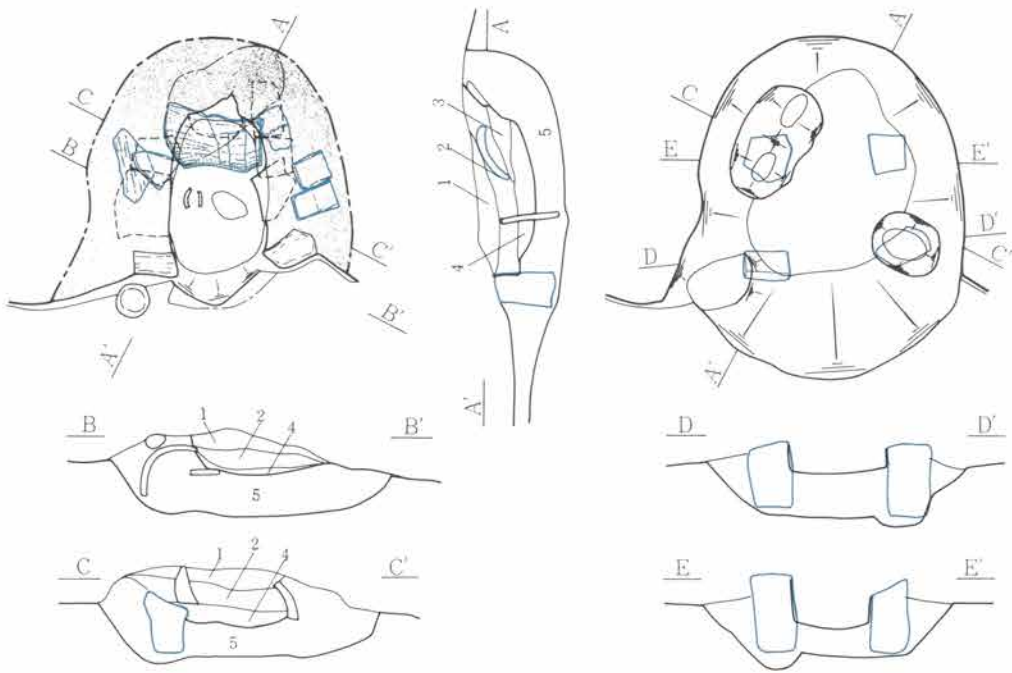
所見 (139住) 当住居は133住を切り128住に切れ4号井戸にも北西隅部を切れ失なっている。又、住居の西半部は、他の住居との切り合いが想起されることから未調査のままとし、調査検出出来た部分は、住居の極一部である。然、128住内で出土した瓦は、その出土状況からカマドを想起させるに足る状況である。この点では、当住居が128住を切るののであるが、調査には検証出来なかった。出土遺物は皆無に近い点から遺物での時期判断が出来かねるが、106住より古とすれば、9世紀代に想定される。確実な時期は言及しかねる。

所見 (130・131・132住) これら3軒の住居は、拡張部の西端で確認された住居跡で、工事に伴う破壊から免れることから調査実施は行わず確認だけに留めた。唯、一応便宜上住居番号を付した。これら3軒の住居跡は、切り合い関係が認められ、130住は131住を切り構築し、131住は132住を切り構築している。時期的なことは未調査であることから言及出来ないが、3基の中で最新と考えられる130住は、カマドの位置等から10世紀代であることは推定できる。



0 L=126.70 2 m

第243図 C区第106・121・127・128・129・133・132・131・130号住居跡実測図

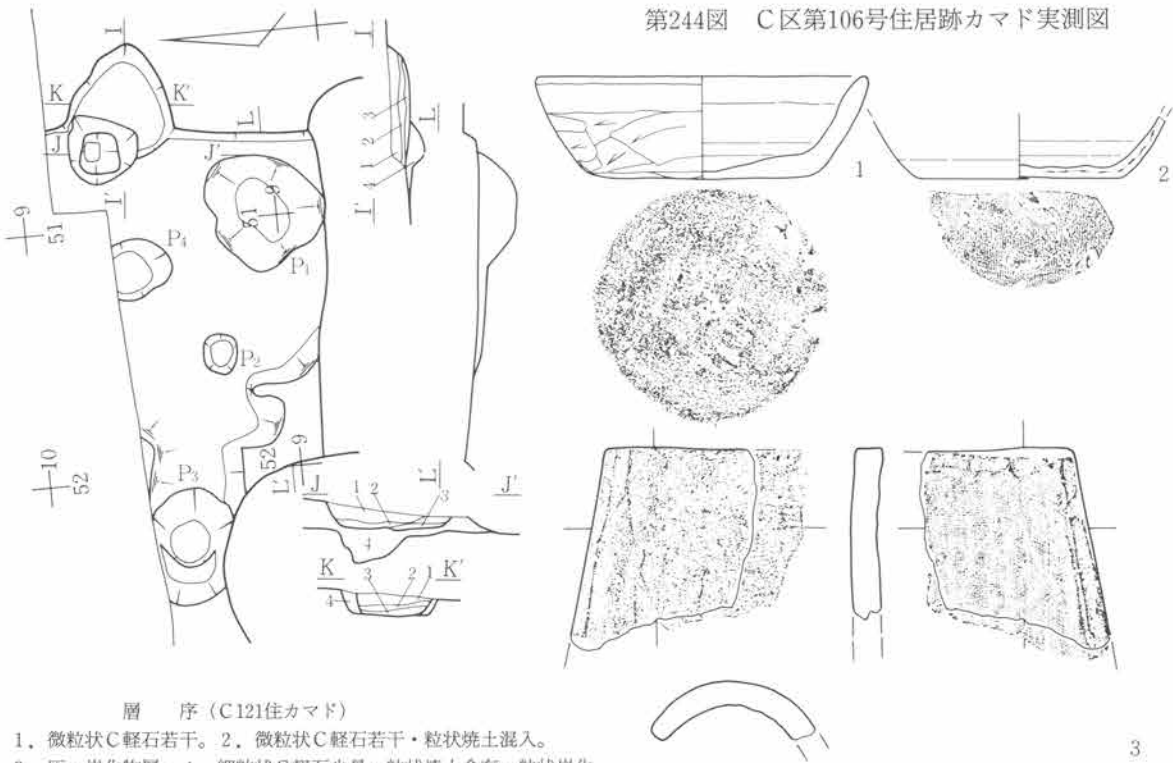


層序 (C106住カマド)

1. 微粒状C軽石混入・粗粒状焼土微量。2. 細粒状C軽石微量・粒状焼土少量。3. 細粒状C軽石微量・粒状焼土多量。4. 灰・塊状焼土の混土層。5. 細粒状C軽石少量・粒状焼土・粒状炭化物少量。

0 L=126.60 1m

第244図 C区第106号住居跡カマド実測図



層序 (C121住カマド)

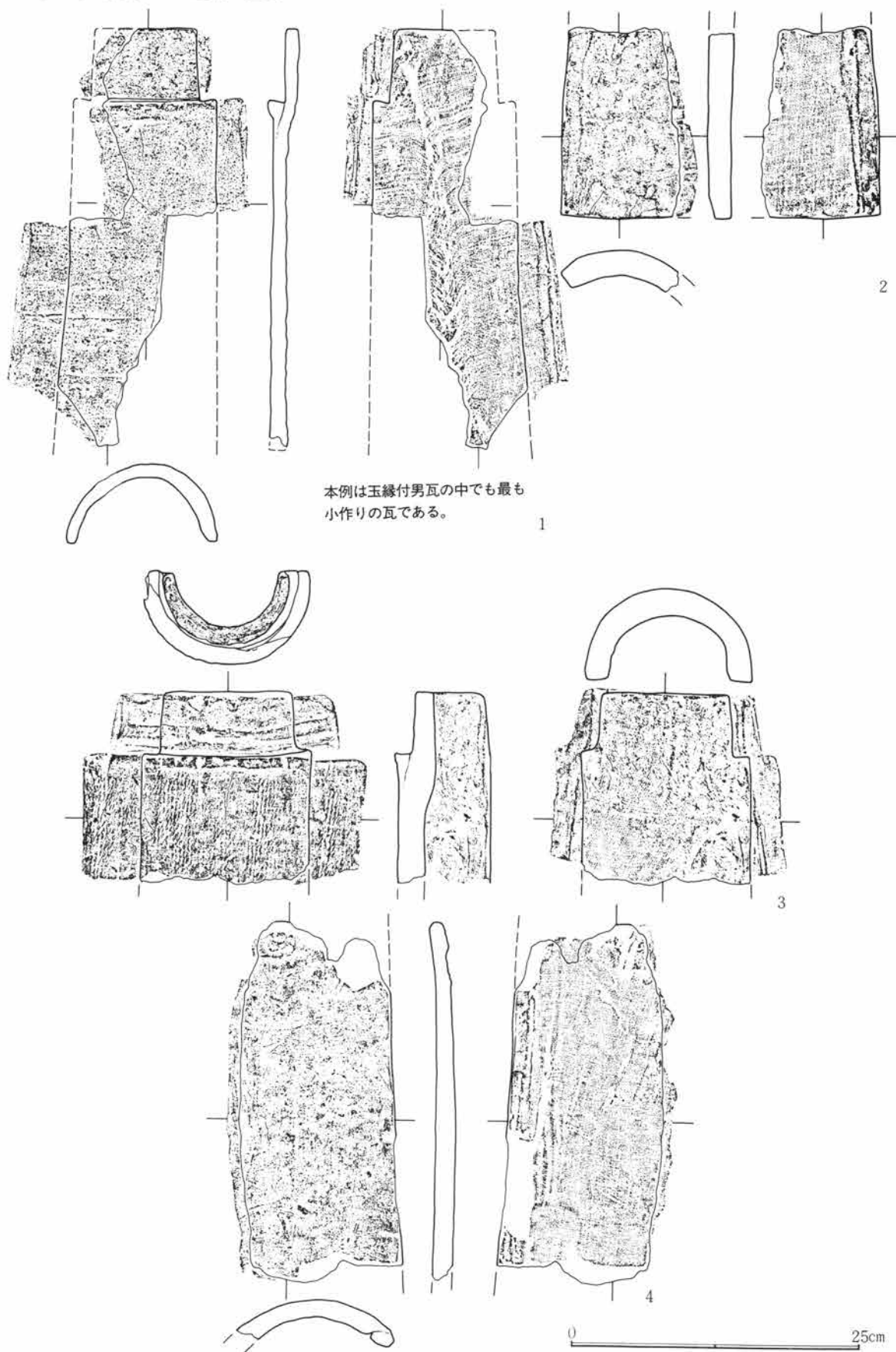
1. 微粒状C軽石若干。2. 微粒状C軽石若干・粒状焼土混入。3. 灰・炭化物層。4. 細粒状C軽石少量・粒状焼土含有・粒状炭化物少量。5. 細粒状C軽石若干・塊状VII層土含有・粒状焼土若干。

0 L=126.60 2m

0 1.2 10cm 3 25cm

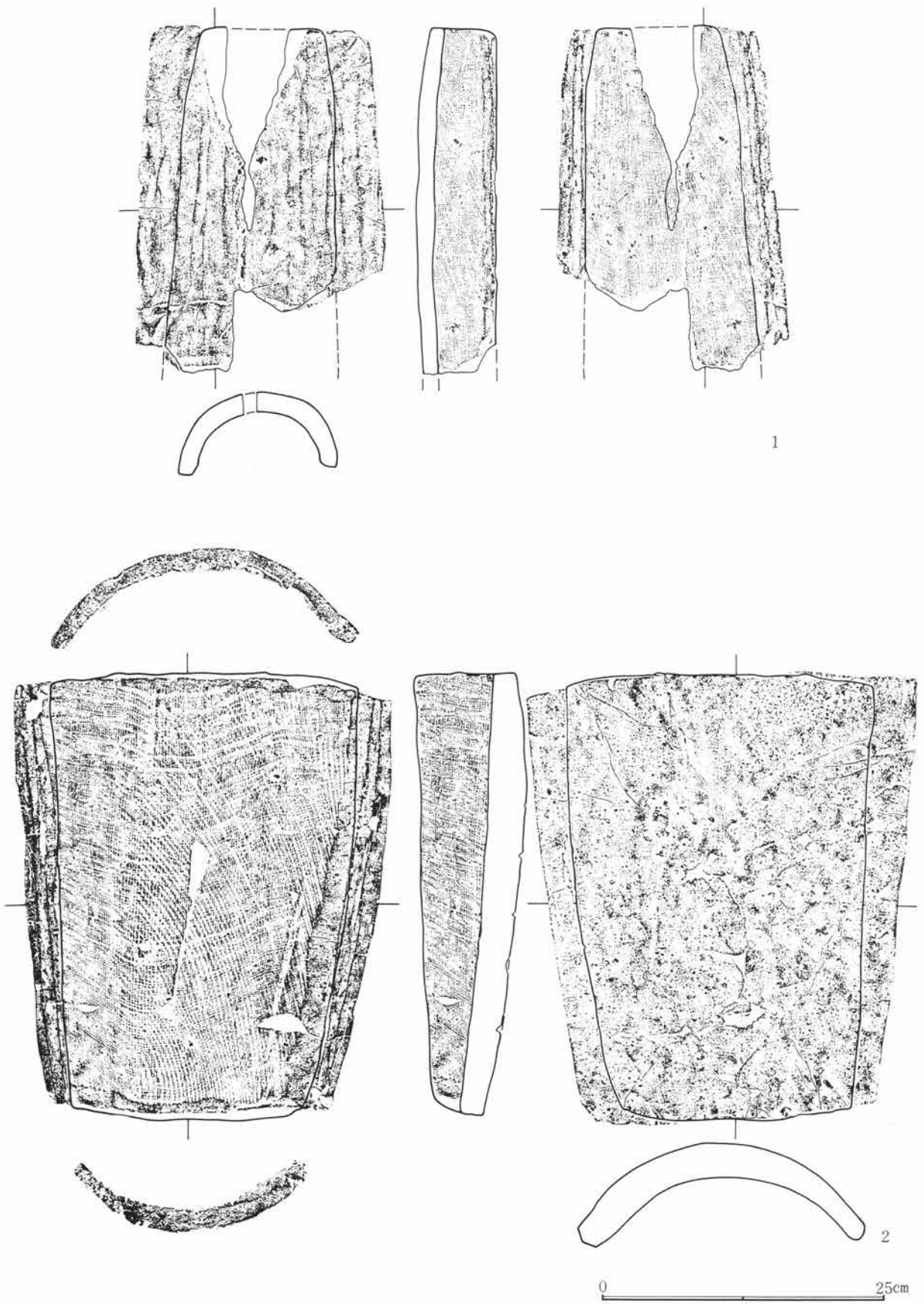
第245図 C区第121号住居跡掘り方実測図

第246図 C区第106号住居跡出土遺物実測図 (1)

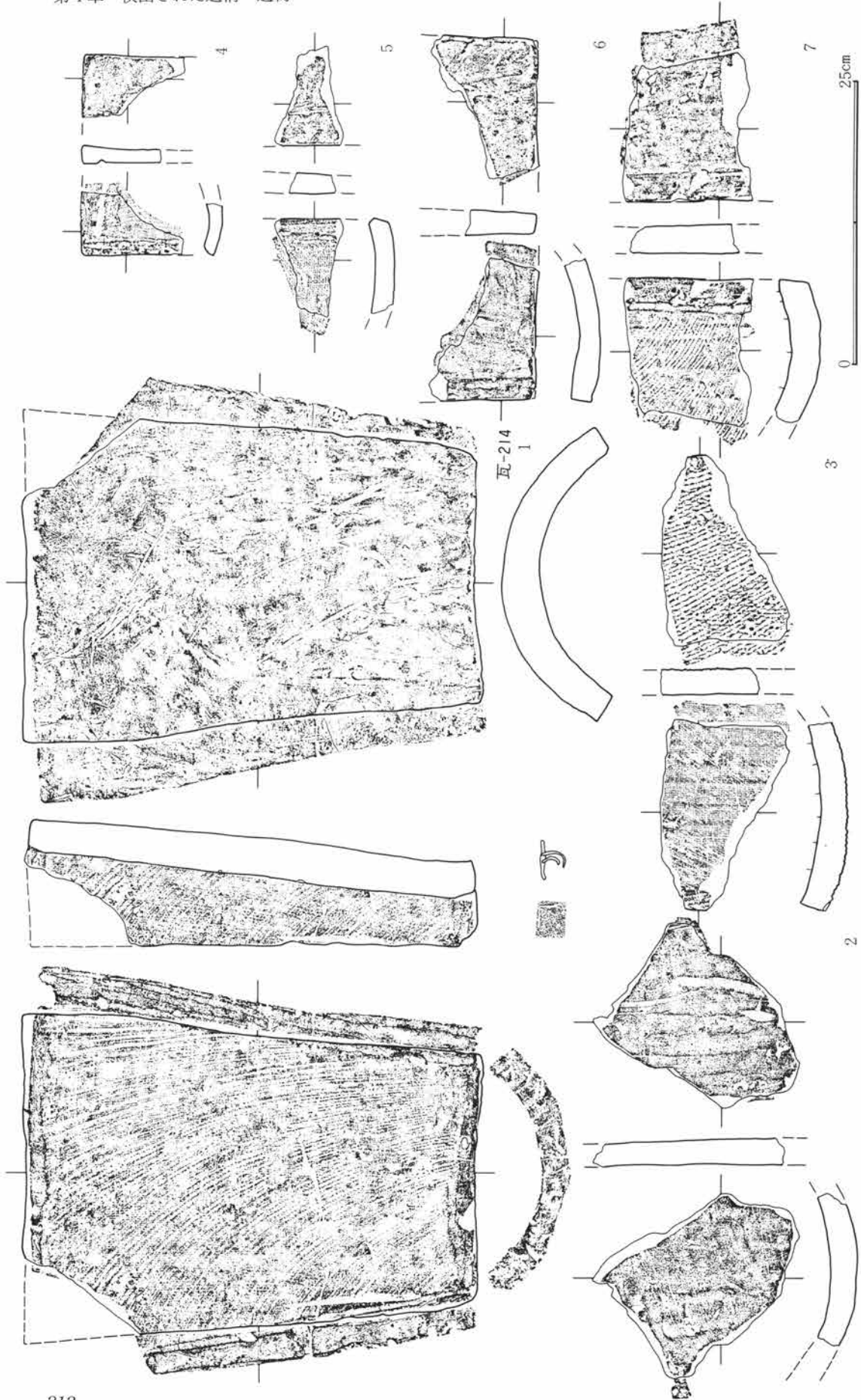


本例は玉縁付男瓦の中でも最も小作りの瓦である。

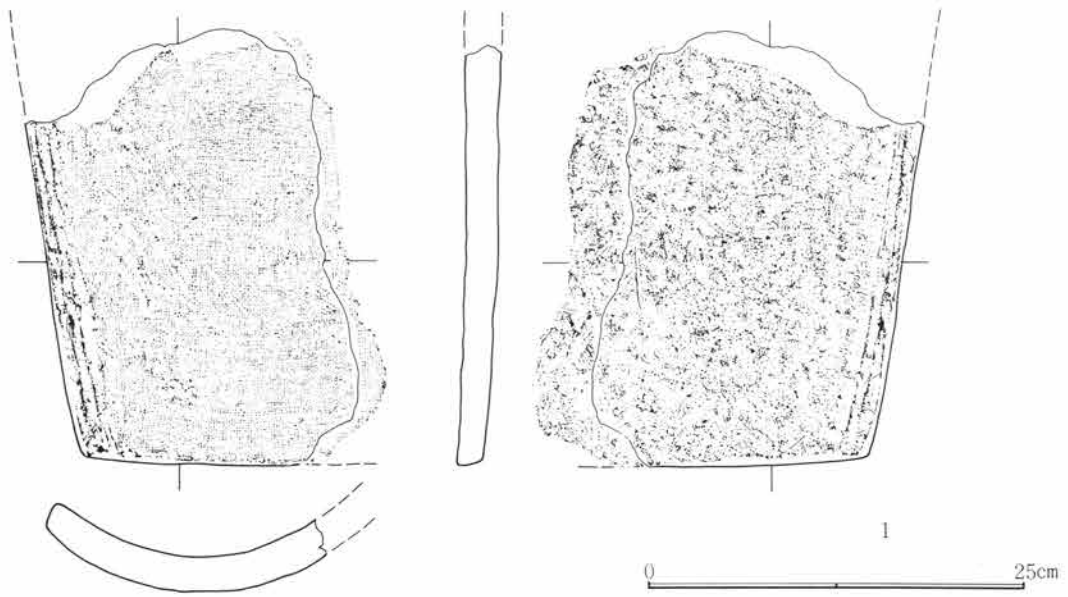
第247図 C区第106号住居跡出土遺物実測図(2)



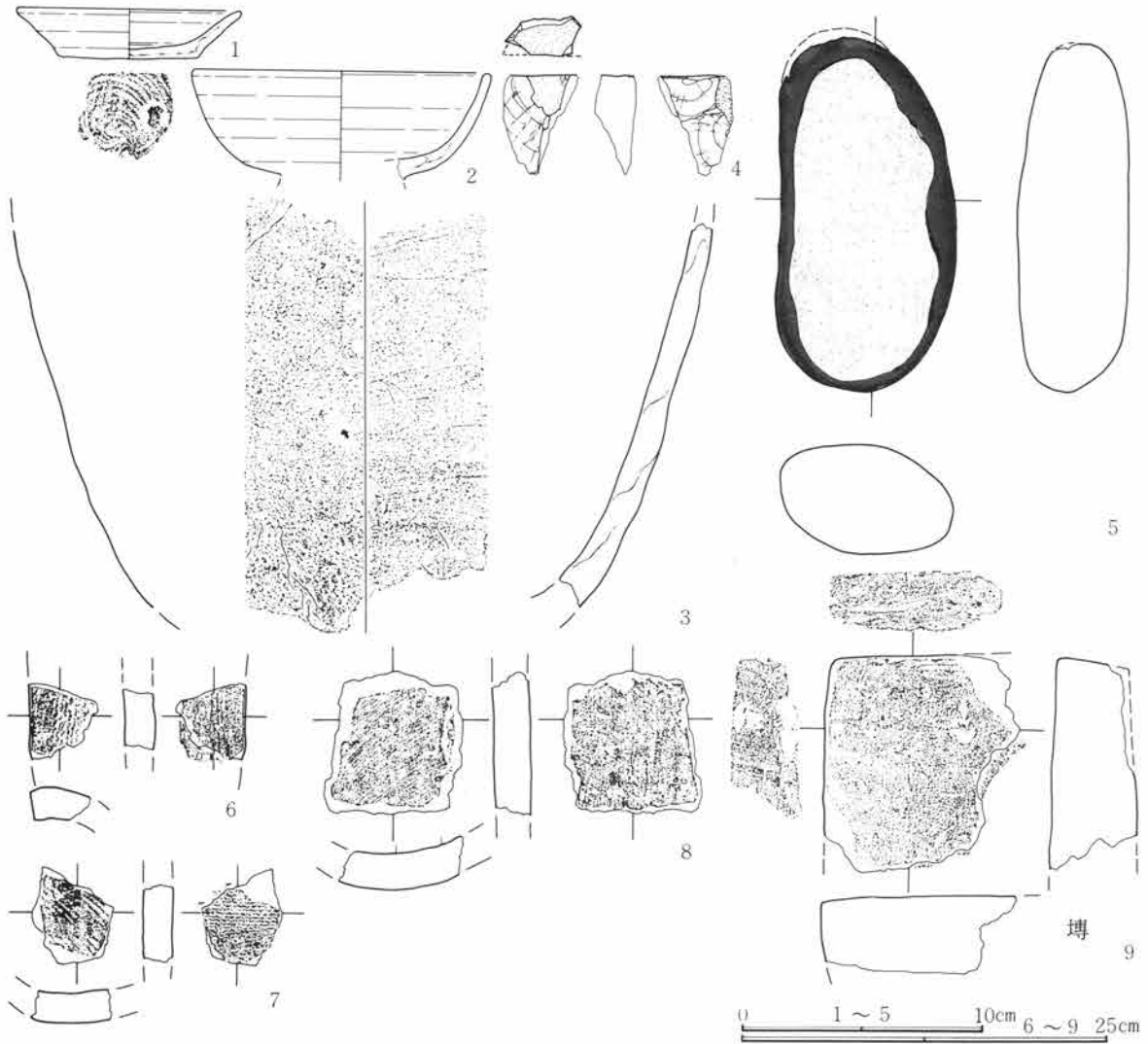
第248図 C区第106号住居跡出土遺物実測図(3)



第249図 C区第106号住居跡出土遺物実測図(4)

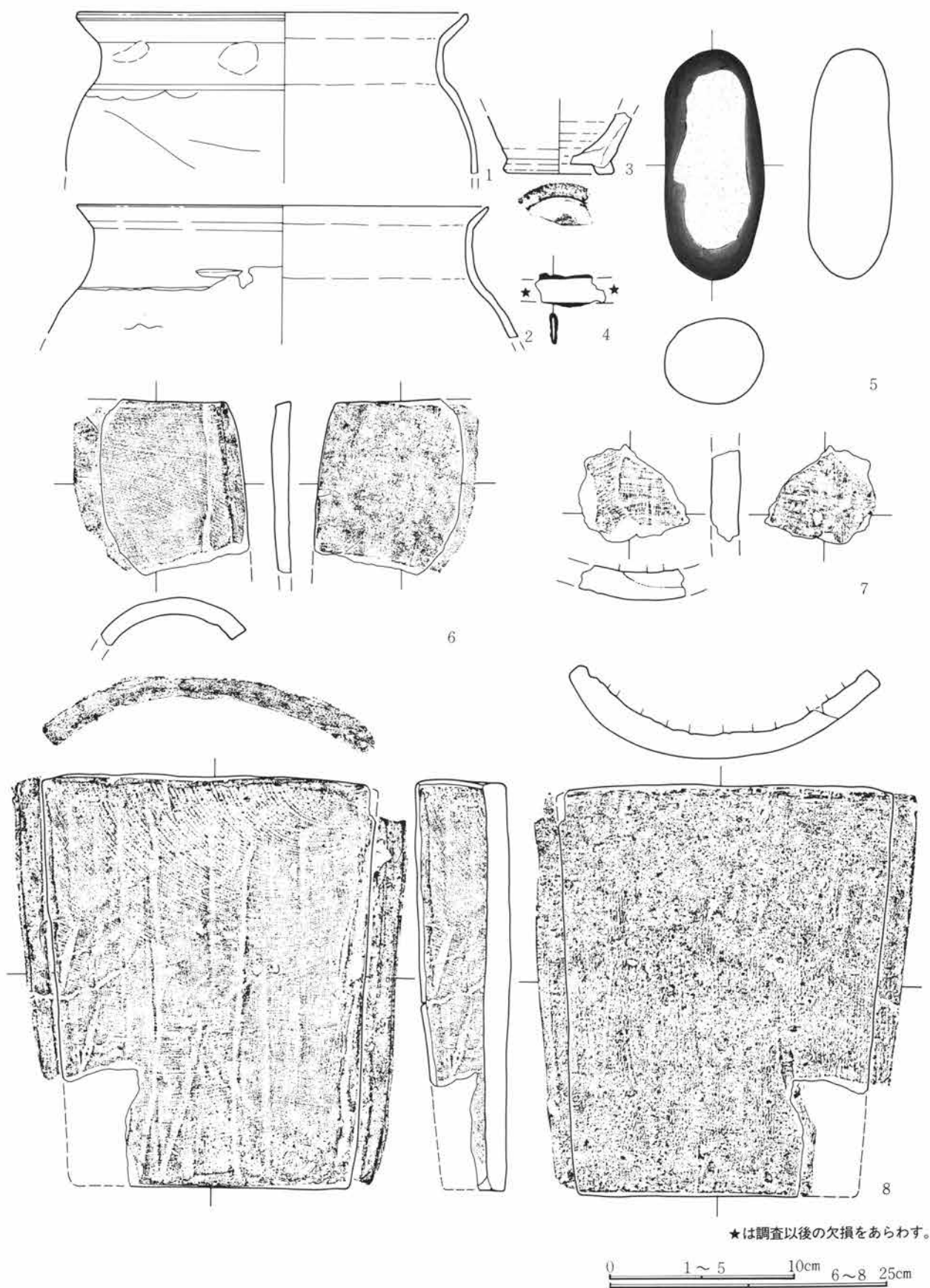


第250図 C区第106号住居跡出土遺物実測図(5)

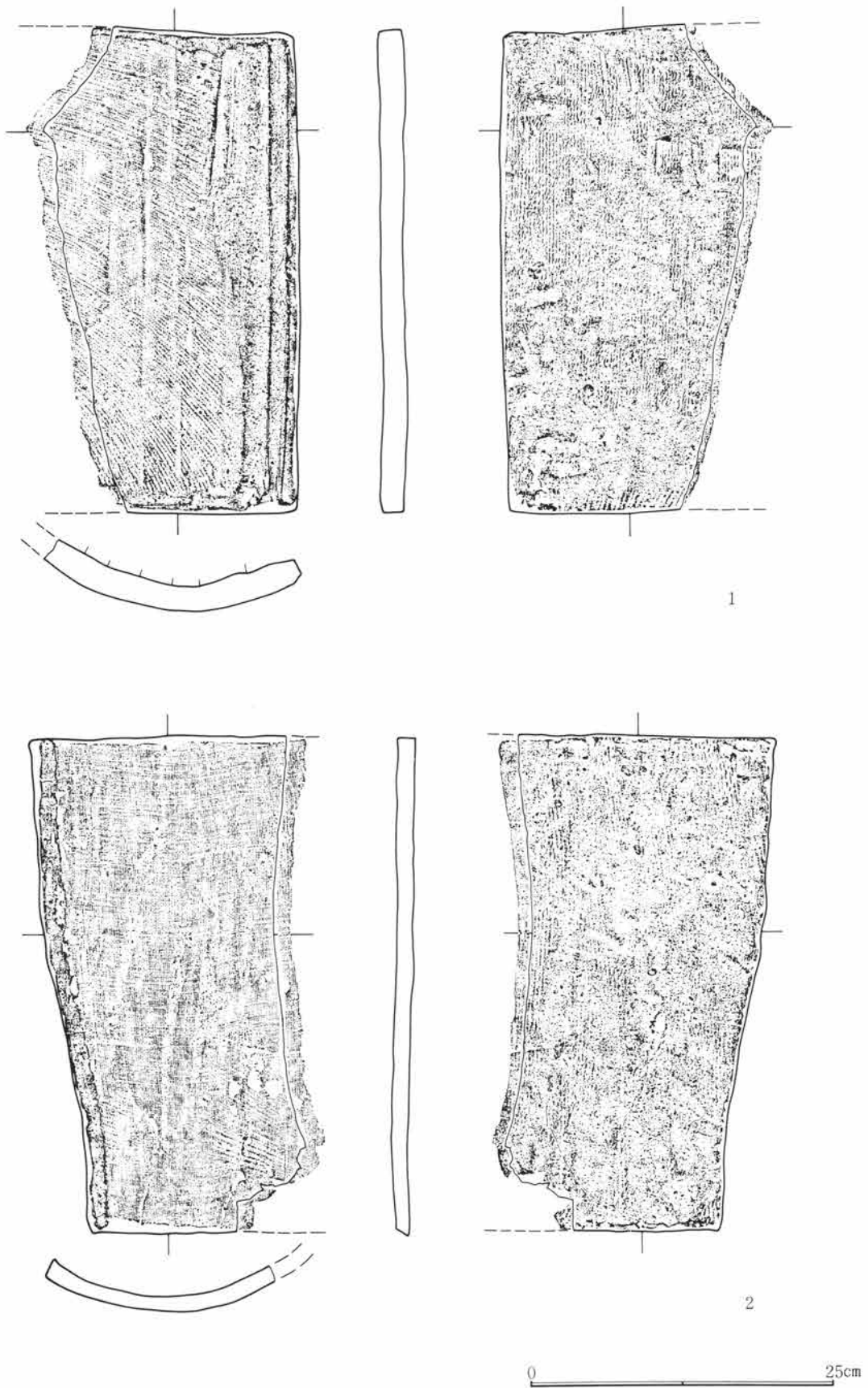


第251図 C区第121号住居跡出土遺物実測図

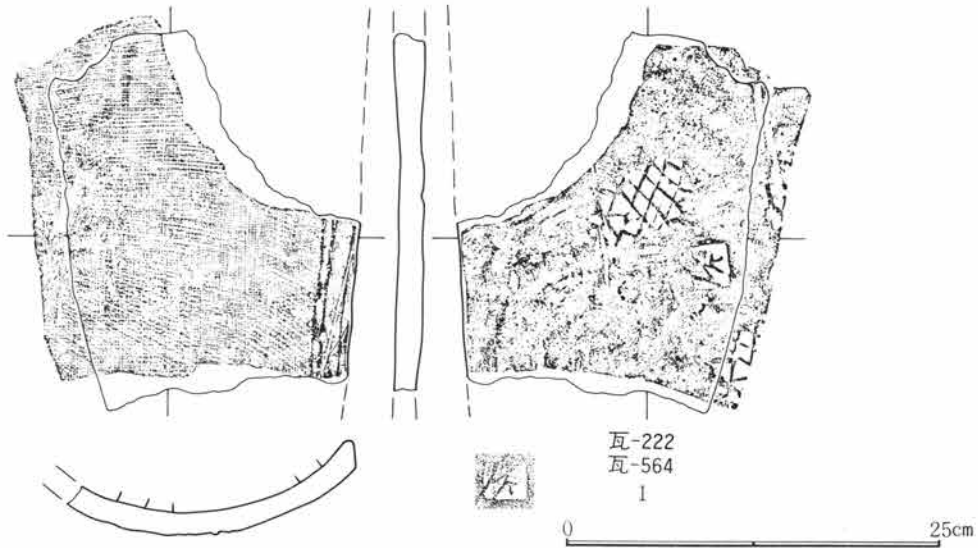
第4章 検出された遺構・遺物



第252図 C区第128号住居跡出土遺物実測図(1)



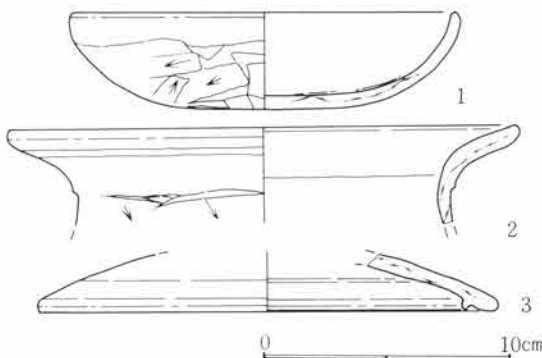
第253図 C区第128号住居跡出土遺物実測図(2)



第254図 C区第128号住居跡出土遺物実測図(3)

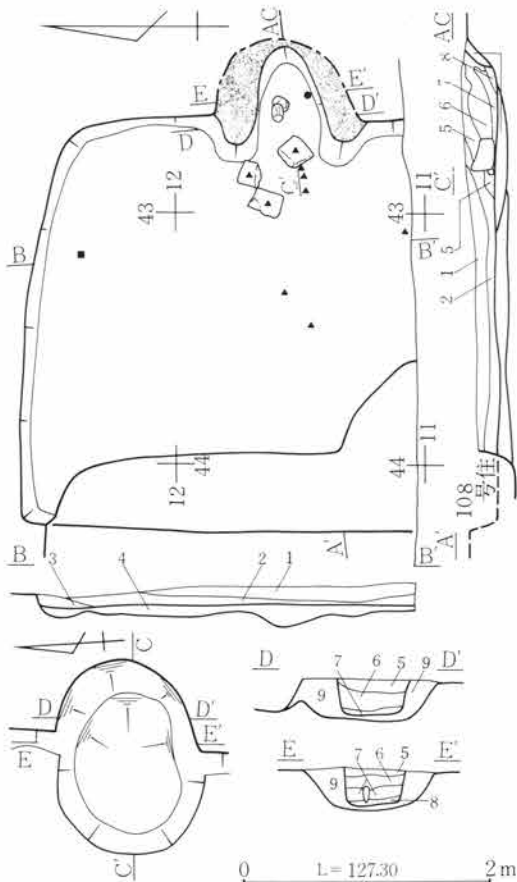
遺構名称	C区第109号住居跡		位置	11・12-C-42~44グリッド内。			残存深度	約30cm
平面形態	正方形か。	規模	3.30m×3.15+αm		構築基準辺	西壁か	主軸方位	北-90度-南程か
壁	垂直に立ち上がる。		床面	平坦。造床は全体に及ぶ。				
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	部分的な凹凸が認められるものの全体的には平坦である。							
カマド	位置	東壁。住居北東隅部から97cm。				主軸方位	北-87度-南	
改築	有。掘り方内から焼土粒子を検出。			形状	舌状を呈する。			
規模	全長 95cm・屋外長 56cm・屋内長 39cm・袖部幅137cm・燃焼部幅 50cm。							
焚口・燃焼部	扇状を呈する焚口部は、燃焼空間と重複する部分が著しい、燃焼部中央に石製の支脚が検出されている。							
	袖	両袖ともに造り出されて屋内への突出長はやや長い。						
煙道	立ち上がり部の一部が検出。			掘り方	楕円形状で大きく、土坑状になっている。			
遺物出土状態	全体に少なく、砂岩質のカマド焚口部等の補強材の破片が多い。							

所見 当住居は108住に切られ143住を切る。住居の南壁は調査区内を東西に横走する農業用水路下にあり調査不能であった。この為詳細な不分明な点がある。住居は東壁にカマドを具備する。傍竈坑は上述の状況もあり未確認である。カマドは、両袖・燃焼部には補強材が認められなかったが、焚口部には、地山砂岩質の削石が3点出土しており、これが補強に用いられていた可能性が有るものの、カマド本体からは遊離していた為使用部位の確定は出来得ない。出土遺物は北壁下で瓦片が出土した程度で帰属時期を確定し得るものではなく、又、



第255図 C区第109号住居跡出土遺物実測図

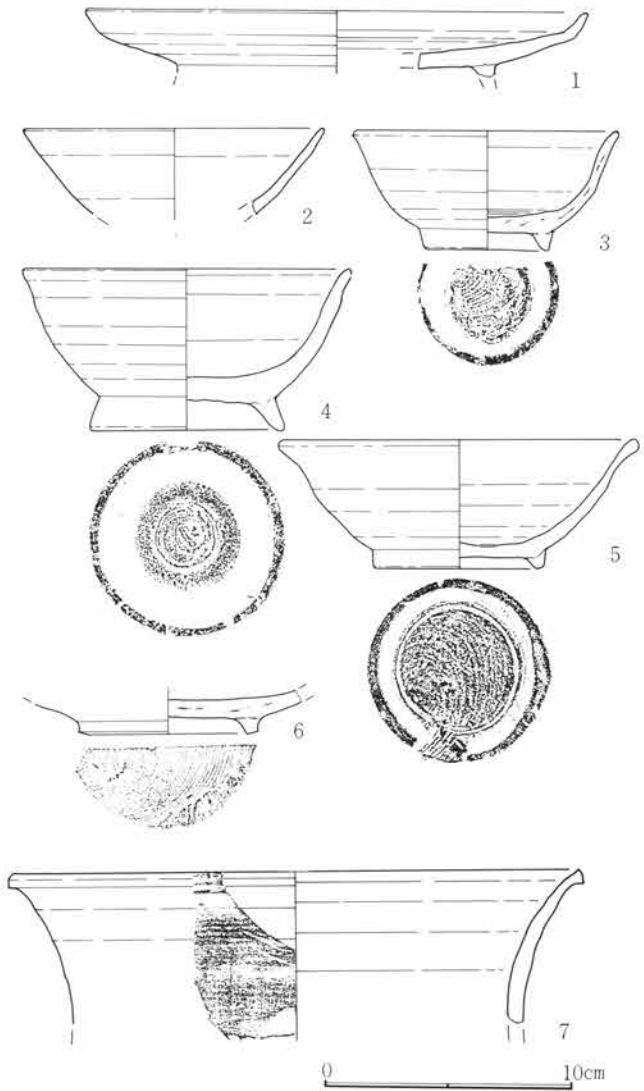
住居の形状からも判断し難い。唯、本跡と他の住居との新旧関係からは、9世紀前半以前で、8世紀前半以降に考えられる。



層序 C109住

1. 粒状C軽石混入・粒状焼土多量。
2. 粒状C軽石含有。
3. 粒状C軽石混入・粒状VII層土多量。
4. 粒状C軽石少量・粗粒状VII層土混入。
5. 細粒状C軽石若干・粒状焼土含有。
6. 細粒状C軽石若干・塊状・粒状焼土多量。
7. 微粒状焼土微量・塊状・粒状焼土若干・粒状炭化物混入。
8. 灰・炭化物層。
9. 粒状C軽石少量・粒状焼土若干。

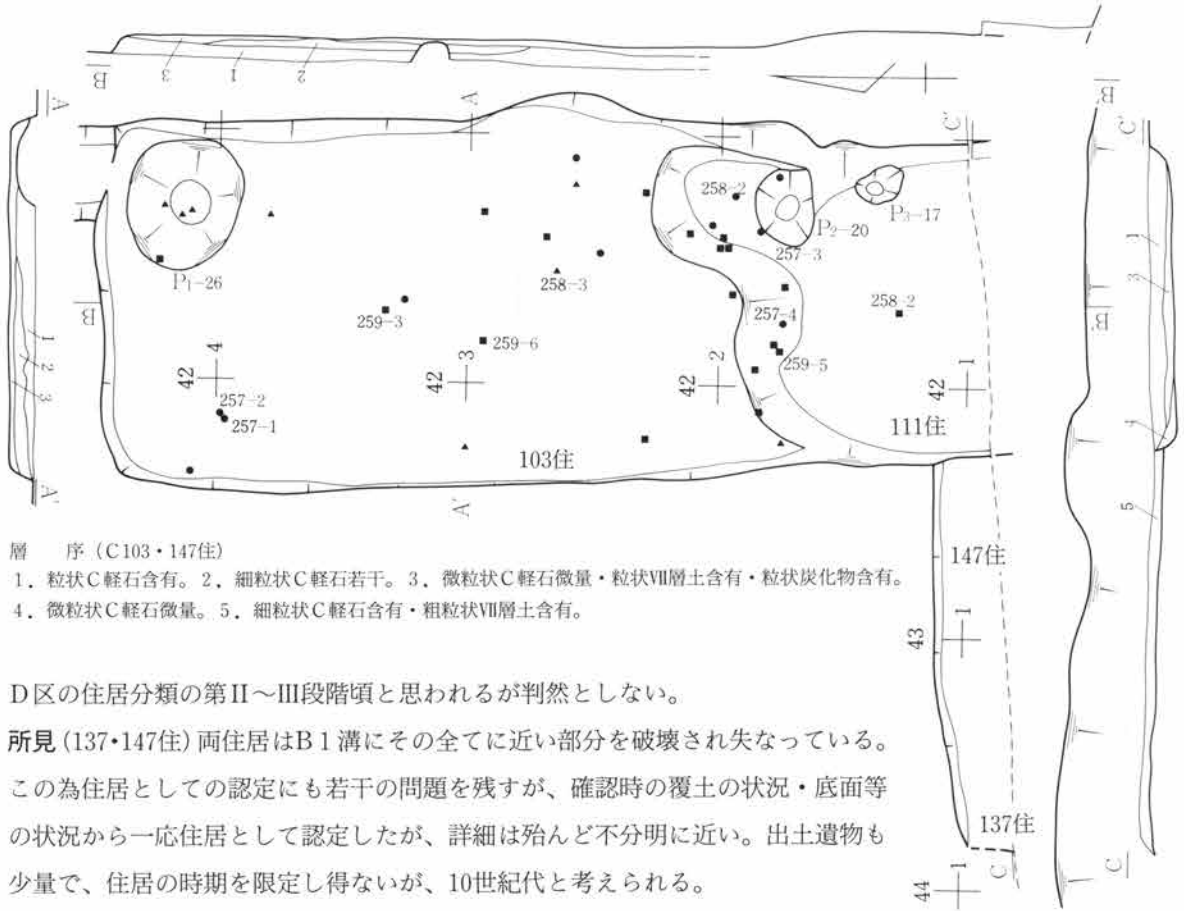
第256図 C区第109号住居跡実測図



第257図 C区第103号住居跡出土遺物実測図(1)

遺構名称	C区第103号住居跡	位置	0～4-C-41～42グリッド内。	残存深度	約20cm
平面形態	長横長方形	規模	2.94m×7.10+αm	構築基準辺	東壁か
B1溝の破壊により詳細不詳。					
遺構名称	C区第147号住居跡	位置	1・2-C-42・43グリッド内。	残存深度	約8cm
B1溝・C103号住の破壊により詳細不詳。					

所見 (103・111住) 両跡は、B1溝に切られ、南側111住はB1溝に切られている。溝の重複は東壁寄りではあるものの、推定されるカマドの構築壁(東壁)は破壊されていない。又、カマドが南壁であったとしても、住居が南北方向に長い。確認時は両者が各々の存在と考えたが、調査所見では同一遺構である可能性が認められた。然、両者が個別としても、同一遺構としても、具体的な検証は出来得ていない。一方、先述した12号溝の南端にあたる部分は、当両跡の東側に同じ指向方向をもって検出されており、底面の状況も通常の溝とは異なる状況が認められている。この点では両跡との共通点も認められる。所見としては、当該の両跡は、住居ではない可能性が考えられる。この点から両跡は竪穴状の特殊遺構と考えられる。時期は出土遺物から

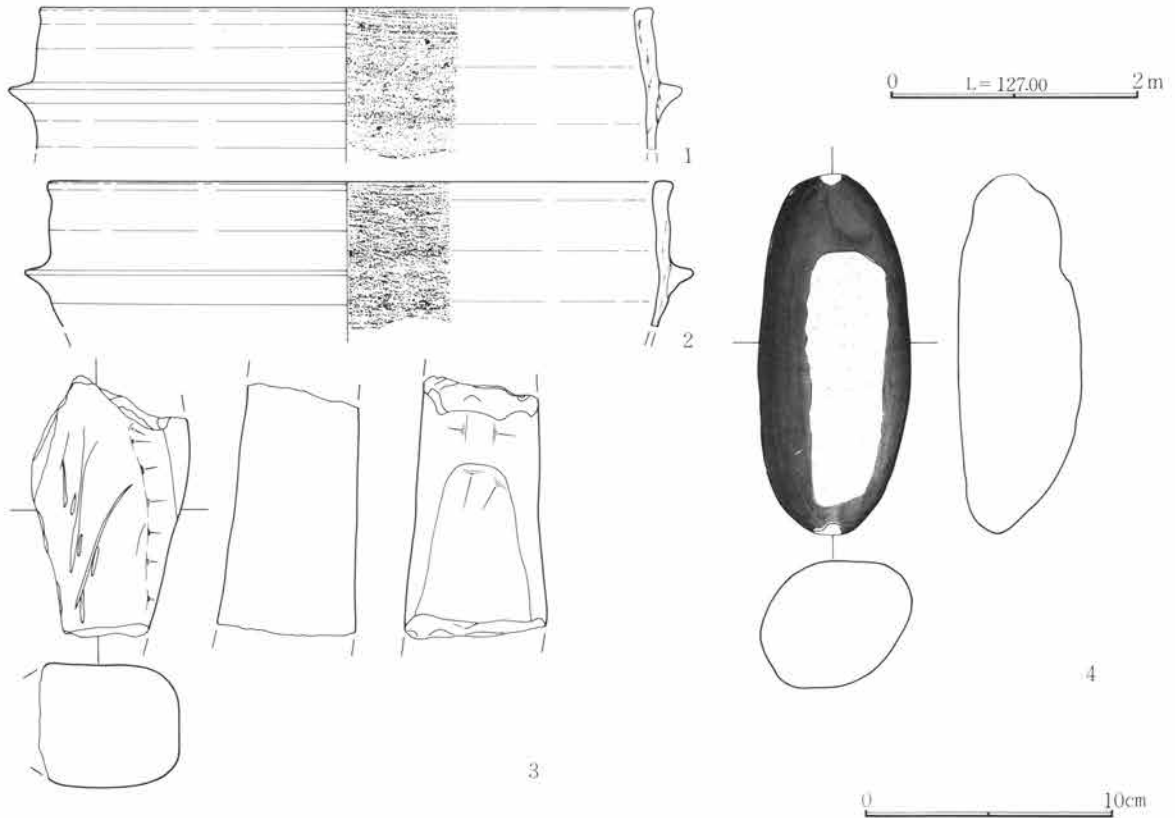


層序 (C103・147住)

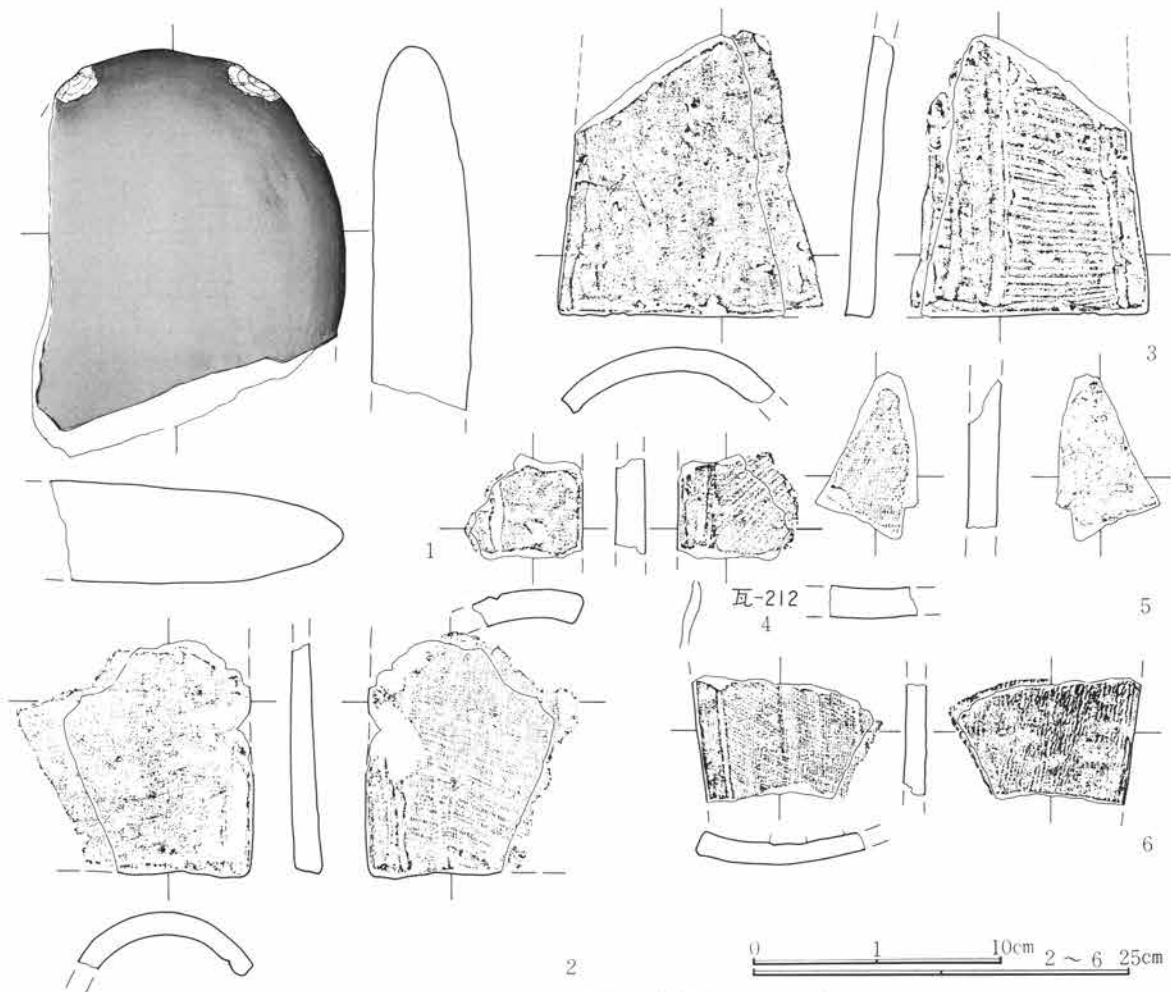
1. 粒状C軽石含有。2. 細粒状C軽石若干。3. 微粒状C軽石微量・粒状VII層土含有・粒状炭化物含有。
4. 微粒状C軽石微量。5. 細粒状C軽石含有・粗粒状VII層土含有。

D区の住居分類の第II～III段階頃と思われるが判然としない。

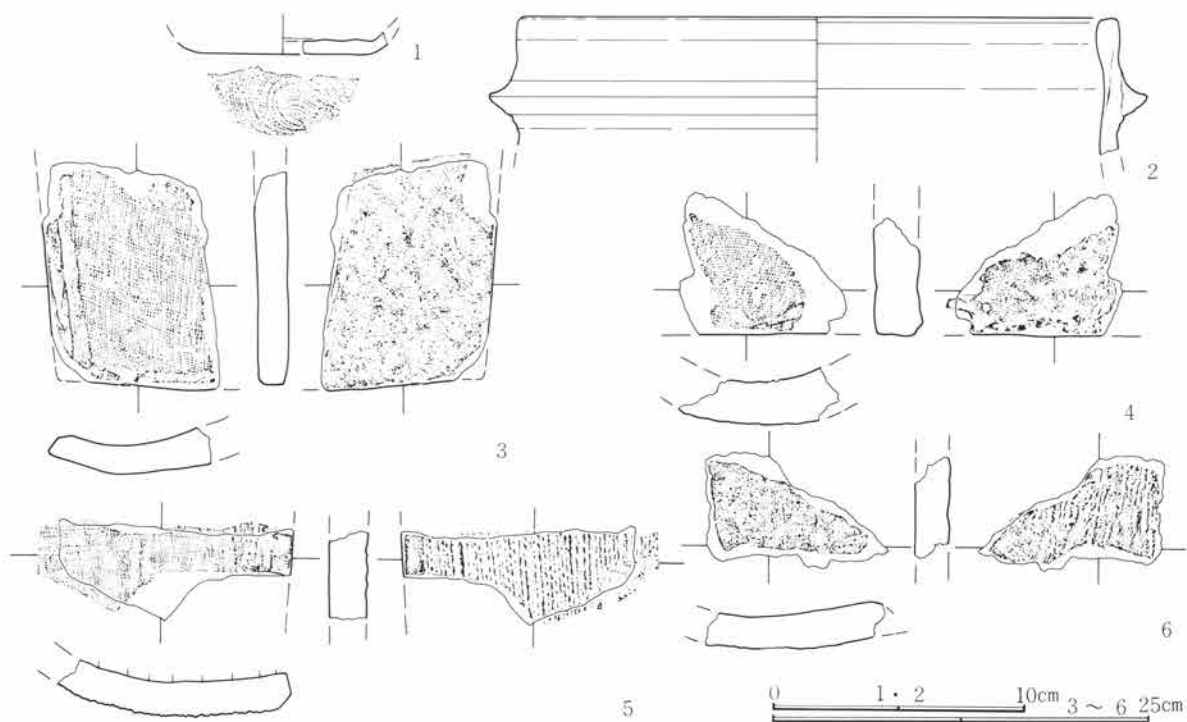
所見 (137・147住) 両住居はB1溝にその全てに近い部分を破壊され失っている。この為住居としての認定にも若干の問題を残すが、確認時の覆土の状況・底面等の状況から一応住居として認定したが、詳細は殆んど不分明に近い。出土遺物も少量で、住居の時期を限定し得ないが、10世紀代と考えられる。



第258図 C区第103・147号住居跡・第103号住居跡出土遺物実測図(2)



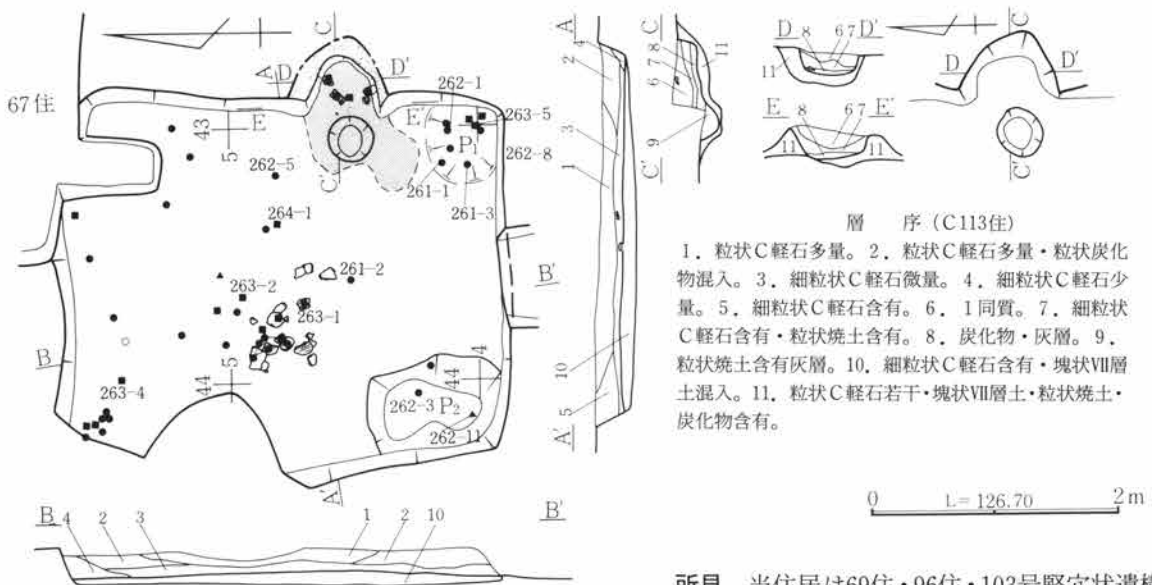
第259図 C区第103号住居跡出土遺物実測図(3)



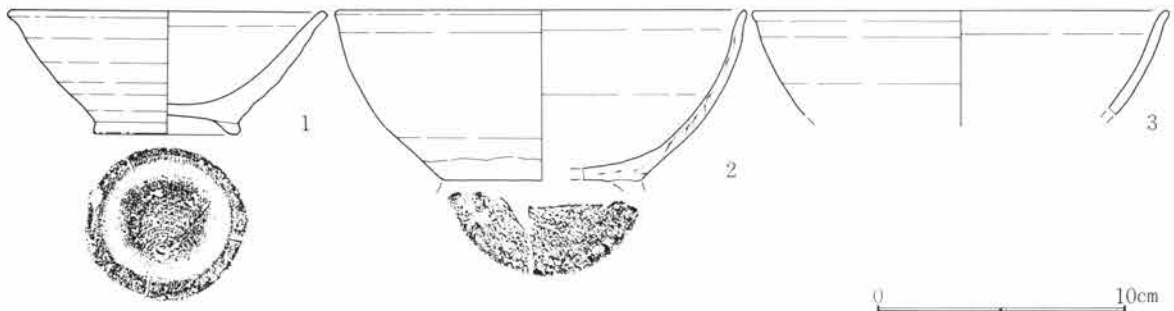
第260図 C区第111号住居跡出土遺物実測図

第4章 検出された遺構・遺物

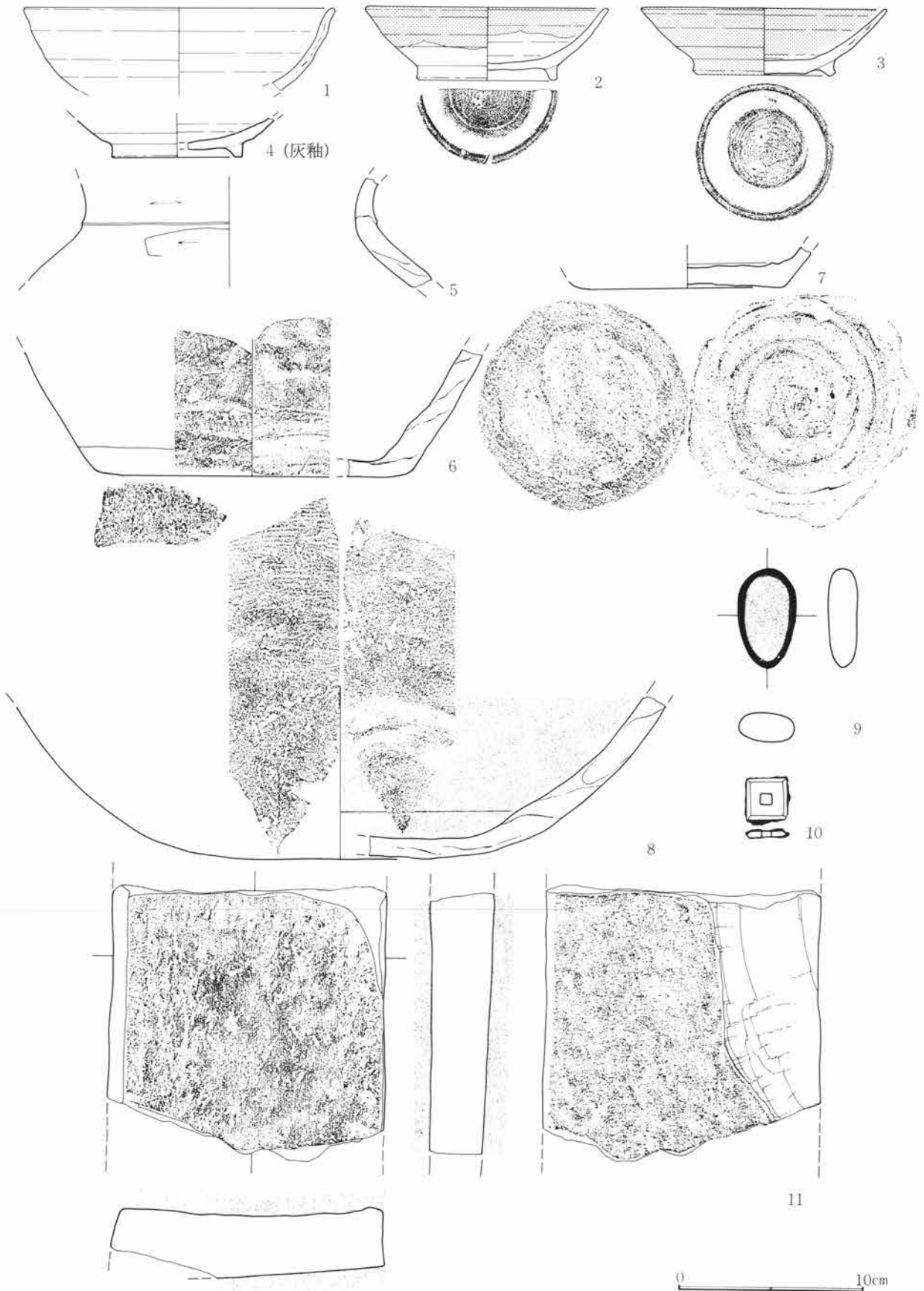
遺構名称	C区第113号住居跡		位置	3～5-C-42～44グリッド内。		残存深度	約20cm
平面形態	矩形。	規模	3.58m×3.10m	構築基準辺	東壁か	主軸方位	北-90度-南
壁	斜位に立ち上がる。		床面	平坦。全面造床。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P ₁ 。円形で皿状に窪む。径58cm・深度—8cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	底面は平坦である。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から83cm。				主軸方位	北-91度-南
改築	有。掘り方より焼土を検出。		形状	馬蹄形状。			
規模	全長 84cm・屋外長 34cm・屋内長 50cm・袖部幅 93cm・燃焼部幅 50cm。						
焚口・燃焼部	扇状を呈する焚口部は、燃焼空間と重複する部分が著しく、燃焼部先端側に器設部分が考えられる。			袖	小さく瘤状。		
煙道	未検出。		掘り方	左袖を小さく削り出し、馬蹄形状を呈する。			
遺物出土状態	床面直上出土の遺物が少ない。傍竈坑内での出土がやや目立つ。						



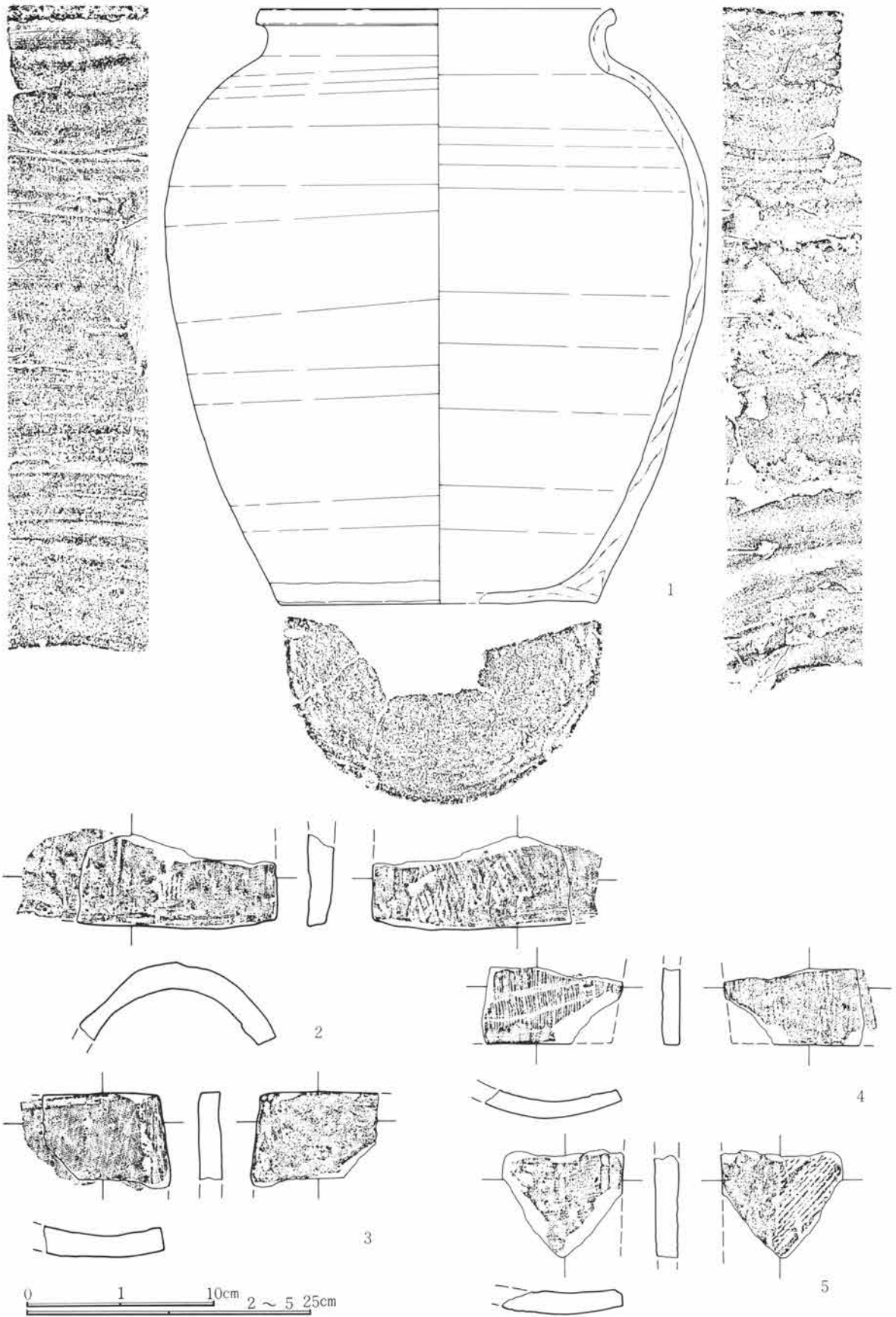
所見 当住居は69住・96住・103号竪穴状遺構に切られている。住居は、東壁中央よりやや南東隅部寄りに具備し、燃焼空間はやや広い。南東隅部には傍竈坑を備えている。住居形状はD区の住居分類の第I乃至II段階に対比され、出土遺物は、第II乃至第3段階様相が認められることから、当住居の廃棄は10世紀中頃と考えられる。



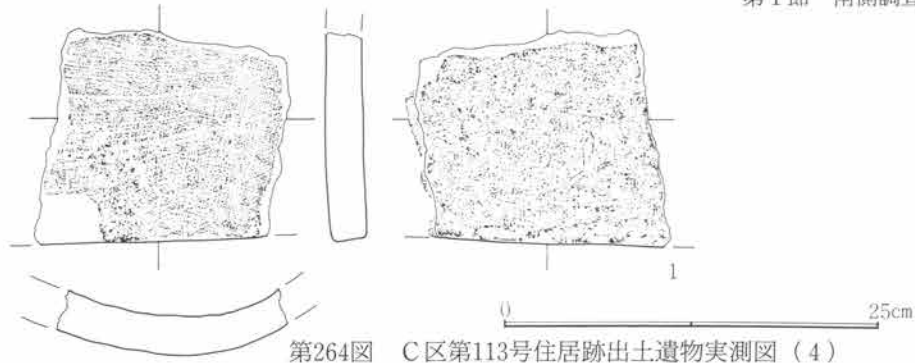
第261図 C区第113号住居跡・出土遺物実測図(1)



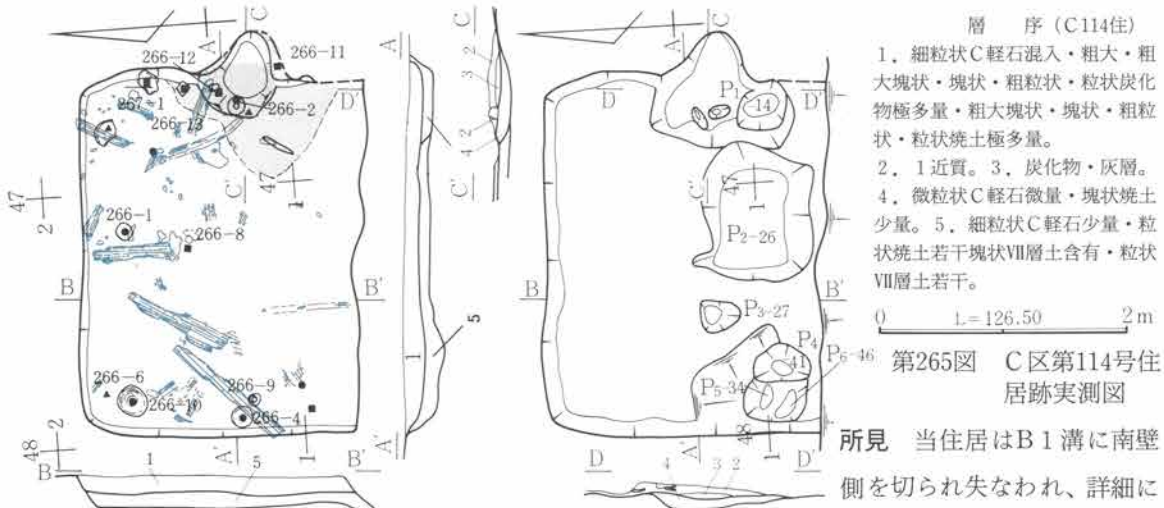
第262図 C区第113号住居跡出土遺物実測図(2)



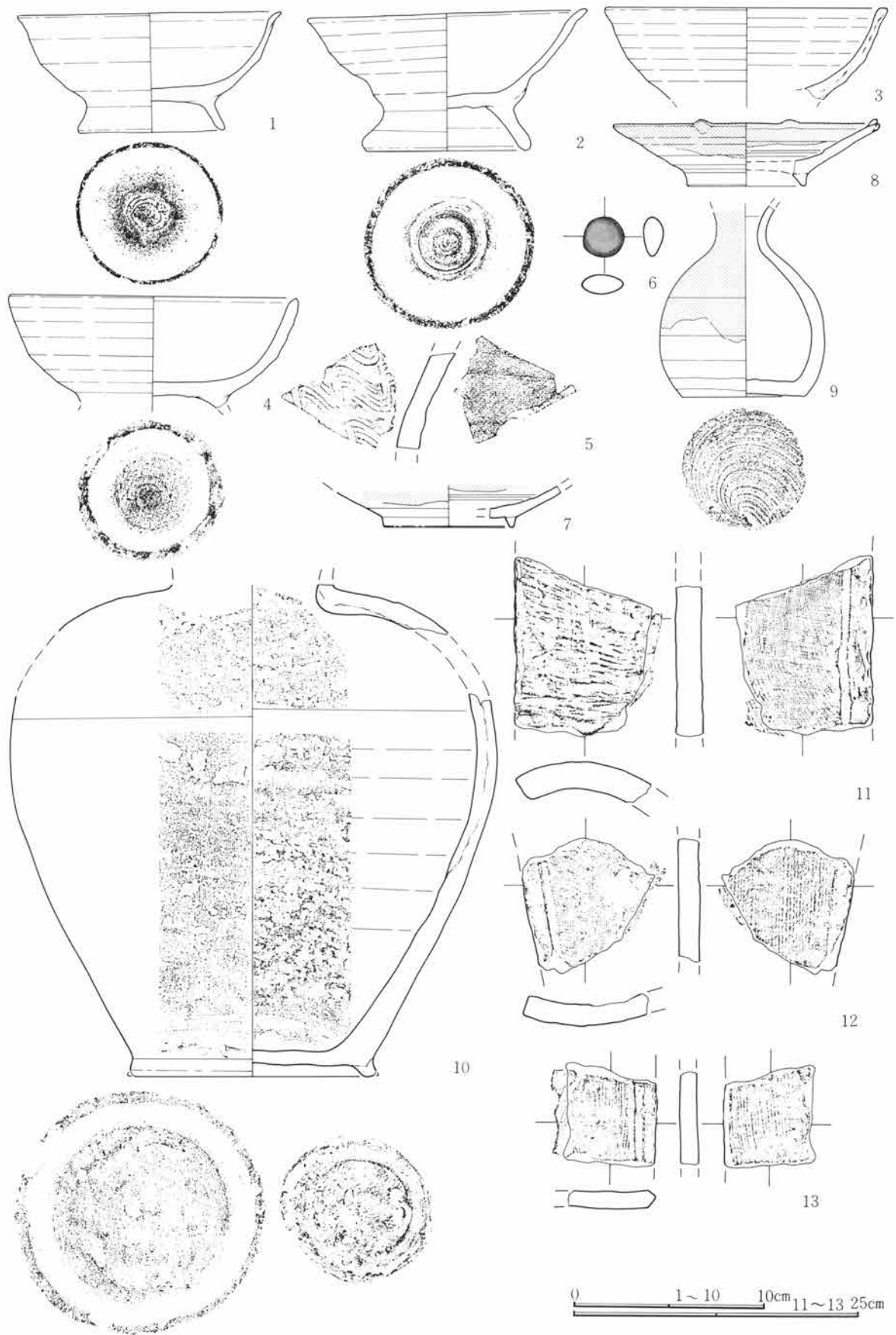
第263図 C区第113号住居跡出土遺物実測図(3)



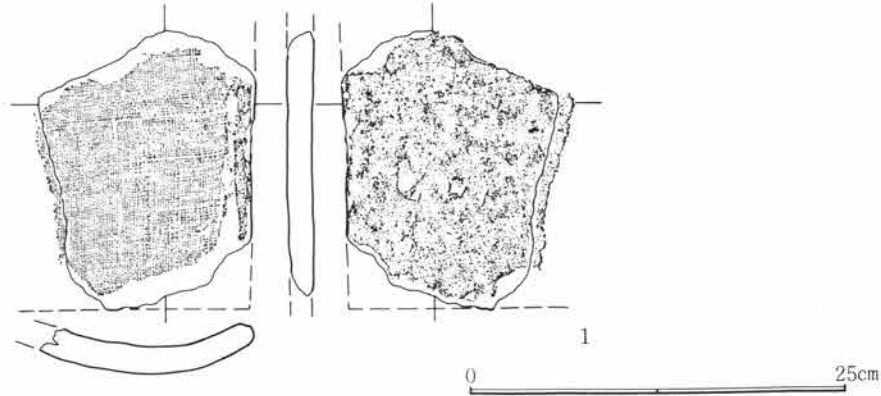
遺構名称	C区第114号住居跡		位置	0～2-C-46～49グリッド内。		残存深度	約12cm
平面形態	不詳。	規模	2.92m×2.30+αm	構築基準辺	西乃至北壁	主軸方位	北-93度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦。全面掘り方底面より10cm程造床。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	土坑状の掘り込み (P ₂) (不整長方形) と柱穴状の掘り込み (P ₃ ～P ₆) を検出。						
カマド	位置	東壁。			主軸方位	北-100度-南	
改築	有。掘り方より焼土検出。			形状			
規模	全長 69cm・屋外長 36cm・屋内長 33cm・袖部幅 69cm・燃烧部幅 42cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
	袖	ほとんど認められない。					
煙道	未検出。			掘り方	焚口部側が顕著で小ピットを検出。		
遺物出土状態	完形品 (226図-1～4・226図-8～10) は床面直上で出土し、使用時を留めている。						



就いては不明な点がある。住居は東壁に燃烧空間のやや広いカマドを具備する。傍竈坑は未確認である。尚、本住居は、覆土内から多量焼土・炭化材・炭化物が出土しており火災住居と考えられる。そして、被熱の認められない覆土等があり、更に、焼土・炭化材の多くが床面から遊離していることから、火災発生から鎮火までの間の状況を現わしており、消火作業には土を用いたと考えられる。出土遺物は、北西隅部から須恵器瓶が床面直上から正位で出土し、他にも床面直上出土遺物が多い。廃棄時期は10世紀中頃と考えられる。

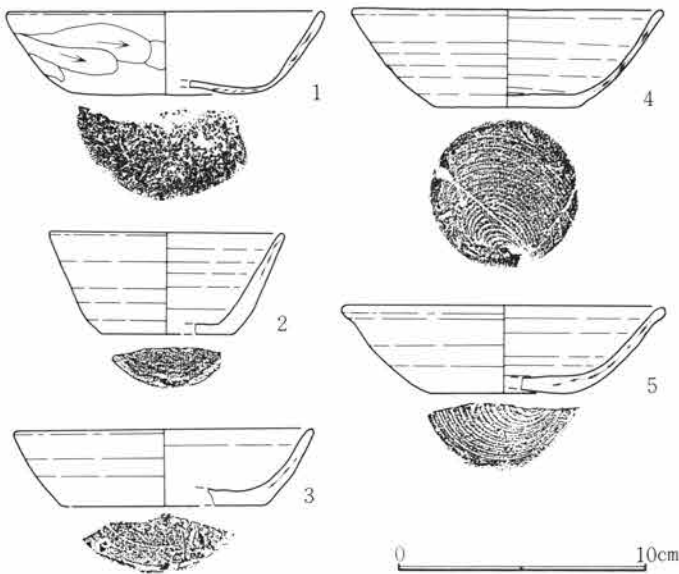


第266図 C区第114号住居跡出土遺物実測図(1)



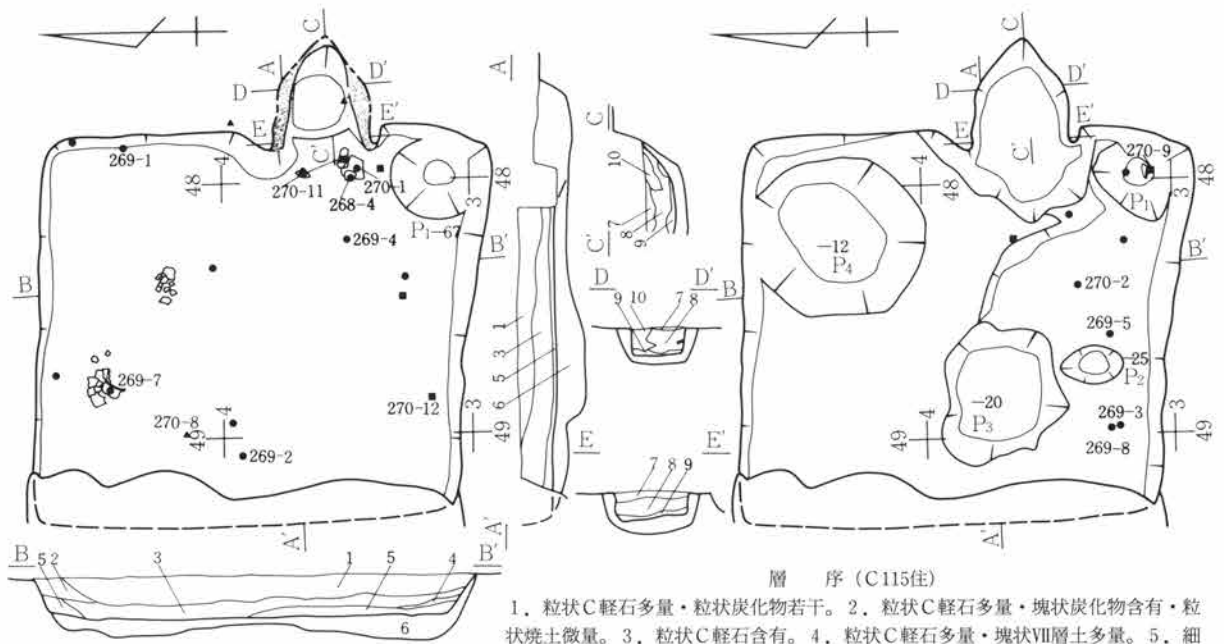
第267図 C区第114号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	C区第115号住居跡		位置	2～4-C-47～49グリッド内。		残存深度	約32cm
平面形態	矩形か。	規模	2.91+αm×3.58m	構築基準辺	北壁か	主軸方位	北-92度-南位か
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦。全面に造床を認める。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P ₁ 。円形。径65cm・深度-67cm。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	南壁寄りが一段低く、土坑状の掘り込み(P ₂ ～P ₄)が検出されている。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から80cm。			主軸方位	北-95度-南	
改築	有。掘り方内から焼土を検出。			形状	舌状を呈する。		
規模	全長108cm・屋外長 64cm・屋内長 42cm・袖部幅135cm・燃烧部幅 49cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
	袖	左袖が右袖より大きい。					
煙道	未検出。			掘り方	舌状を呈す。		
遺物出土状態	比較的床面直上が多い。						



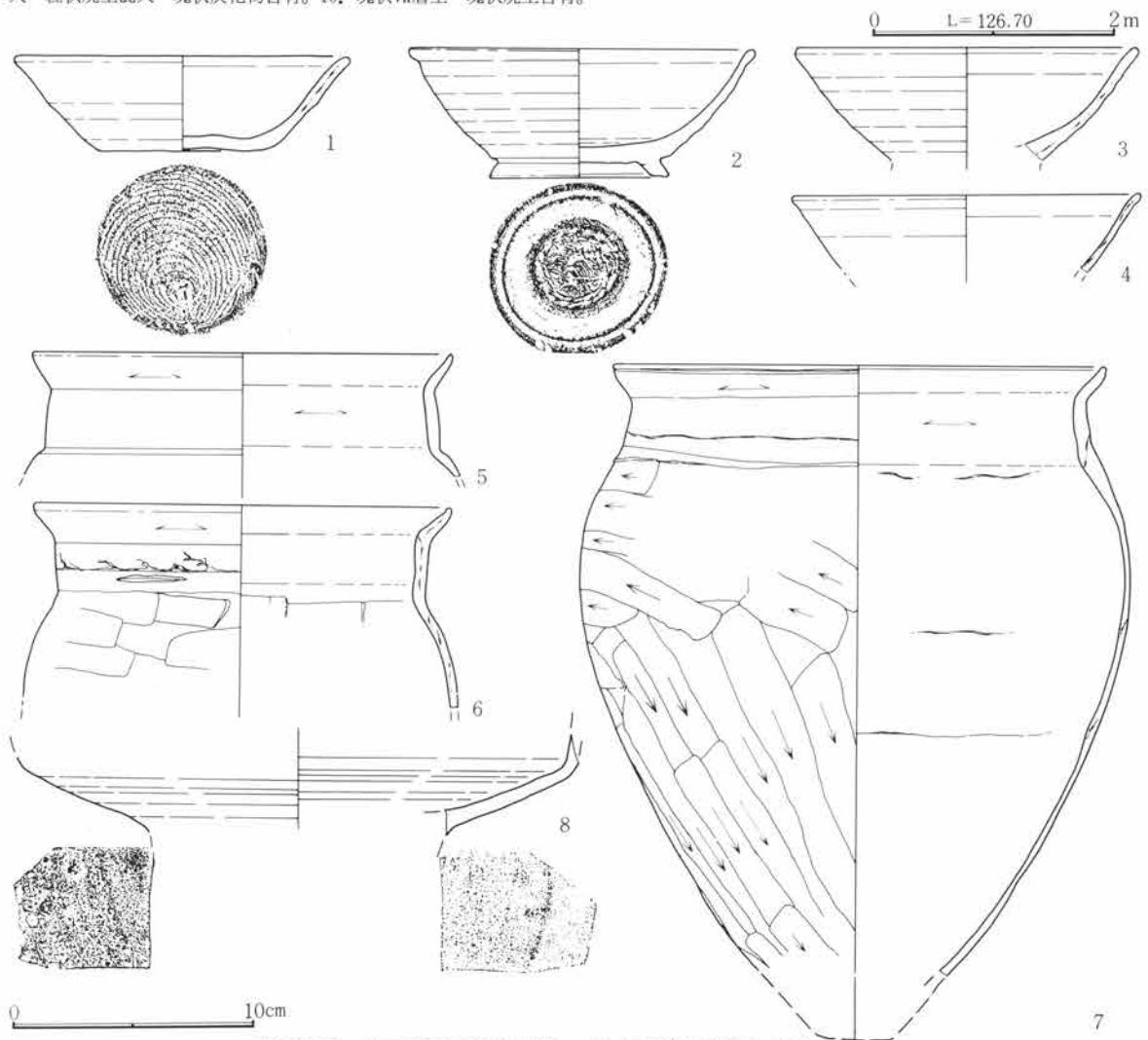
第268図 C区第115号住居跡出土遺物実測図(1)

所見 当住居は104住・97住に切られる。住居は東壁中央よりやや南東隅部寄りにカマドを具備し、カマドと南東隅部間に傍竈坑を備える。西壁は104住の破壊により失われている。カマドは、燃烧空間が広く大きい。袖及び燃烧部には補強材等は認められない。掘り方では北東隅部で土坑状の掘り込みが検出され、南壁下では顕著な掘り方が検出されている。住居形状はD区の住居分類の第I段階に対比され、出土遺物も第I・II段階の様相が認められる。このことから当住居跡の廃棄は10世紀初頭から前半にかけてと考えられる。

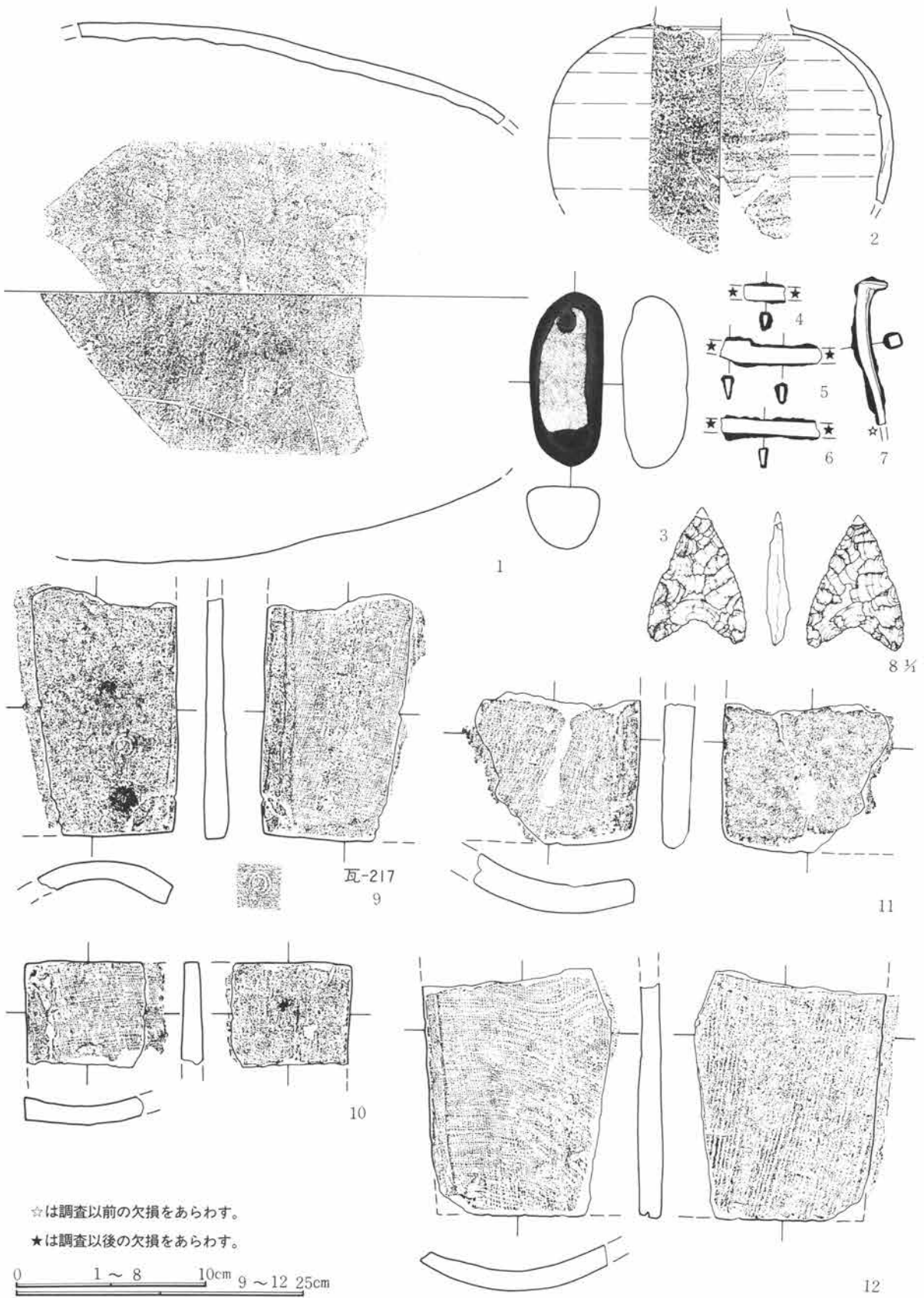


層序 (C115住)

1. 粒状C軽石多量・粒状炭化物若干。
2. 粒状C軽石多量・塊状炭化物含有・粒状焼土微量。
3. 粒状C軽石含有。
4. 粒状C軽石多量・塊状VII層土多量。
5. 細粒状C軽石含有。
6. 細粒状C軽石含有・塊状VII層土含有。
7. 粒状C軽石混入。
8. 粒状C軽石混入・塊状焼土多量。
9. 粒状C軽石混入・粒状焼土混入・塊状炭化物含有。
10. 塊状VII層土・塊状焼土含有。



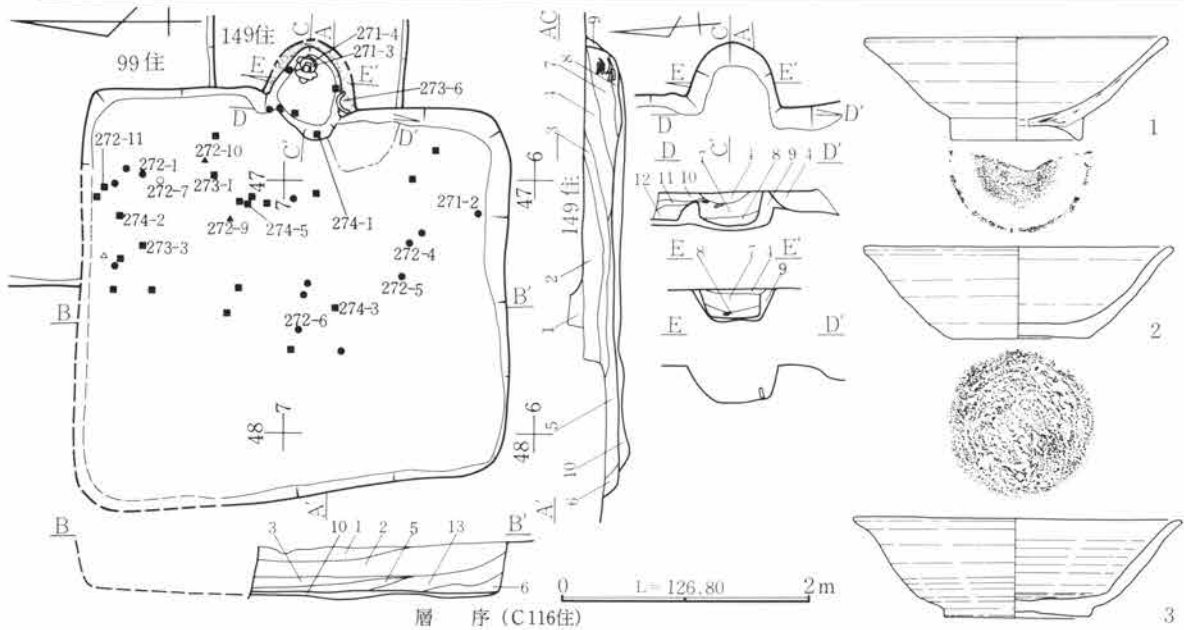
第269図 C区第115号住居跡・出土遺物実測図(2)



第270図 C区第115号住居跡出土遺物実測図(3)

第4章 検出された遺構・遺物

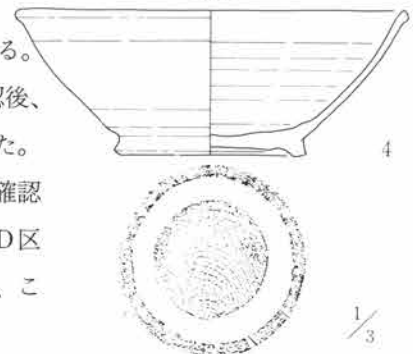
遺構名称	C区第116号住居跡		位置	6・7-C-46~48グリッド内。		残存深度	約35cm	
平面形態	正方形(矩形)	規模	3.30m × $\frac{2.95}{3.30}$ m		構築基準辺	北乃至西	主軸方位	北-90度-南位か
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	平坦。全体に薄い造床が認められる。				
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	全体的には平坦で床面よりやや下がった程度で底面が検出されている。							
カマド	位置	東壁、ほぼ中央住居南東隅部から120cm。			主軸方位	北-89度-南		
改築	有。掘り方内から焼土を検出。			形状	馬蹄形状を呈する。			
規模	全長 74cm・屋外長 42cm・屋内長 32cm・袖部幅 93cm・燃烧部幅 52cm。							
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。右壁を瓦で補強する。							
	袖	小さく瘤状で、燃烧部にかけて瓦で補強する。						
煙道	未検出。		掘り方	半円形状を呈し、袖部を若干削り出す。				
遺物出土状態	272-2・7は床面直上の出土で、他は覆土内が多い。							



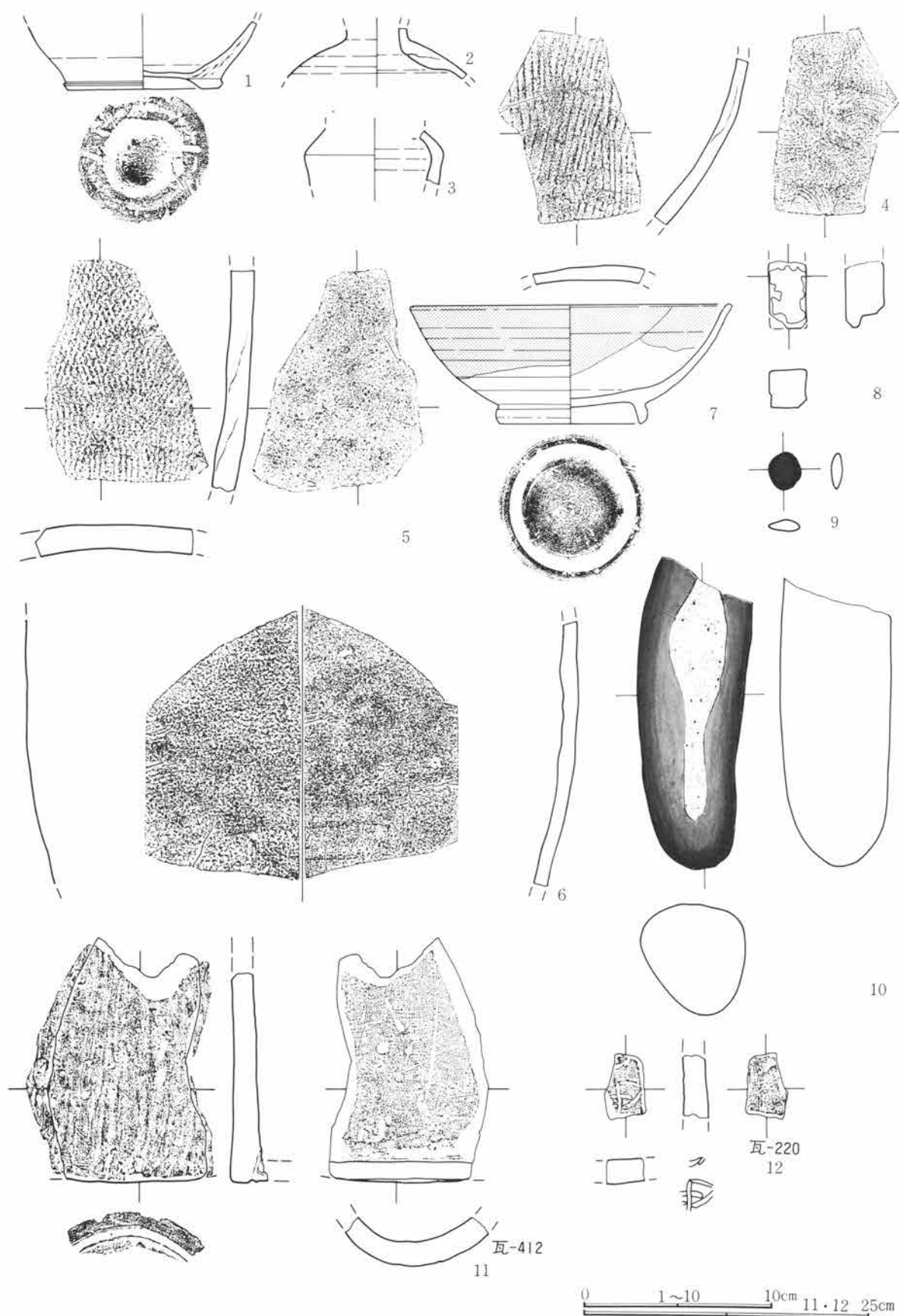
- 層序 (C116住)
1. 粗・細粒状C軽石多量。
 2. 粗・細粒状C軽石含有・粒状焼土含有。
 3. 粒状C軽石少量。
 4. 粒状C軽石含有・粒状焼土混入。
 5. 細粒状C軽石混入・粒状焼土混入。
 6. 微粒状C軽石微量・塊状粒状VII層土混入。
 7. 細粒状C軽石含有・塊状・粒状焼土混入・塊状VII層土若干・粒状炭化物含有。
 8. 炭化物・灰層。
 9. 粒状C軽石少量・粗粒状手含有・粒状炭化物含有。
 10. 粒状C軽石多量・粒状焼土多量・粒状炭化物若干。
 11. 粒状C軽石若干・粒状焼土微量。
 12. 粒状C軽石微量・塊状炭化物含有。

第271図 C区第116号住居跡・出土遺物実測図(1)

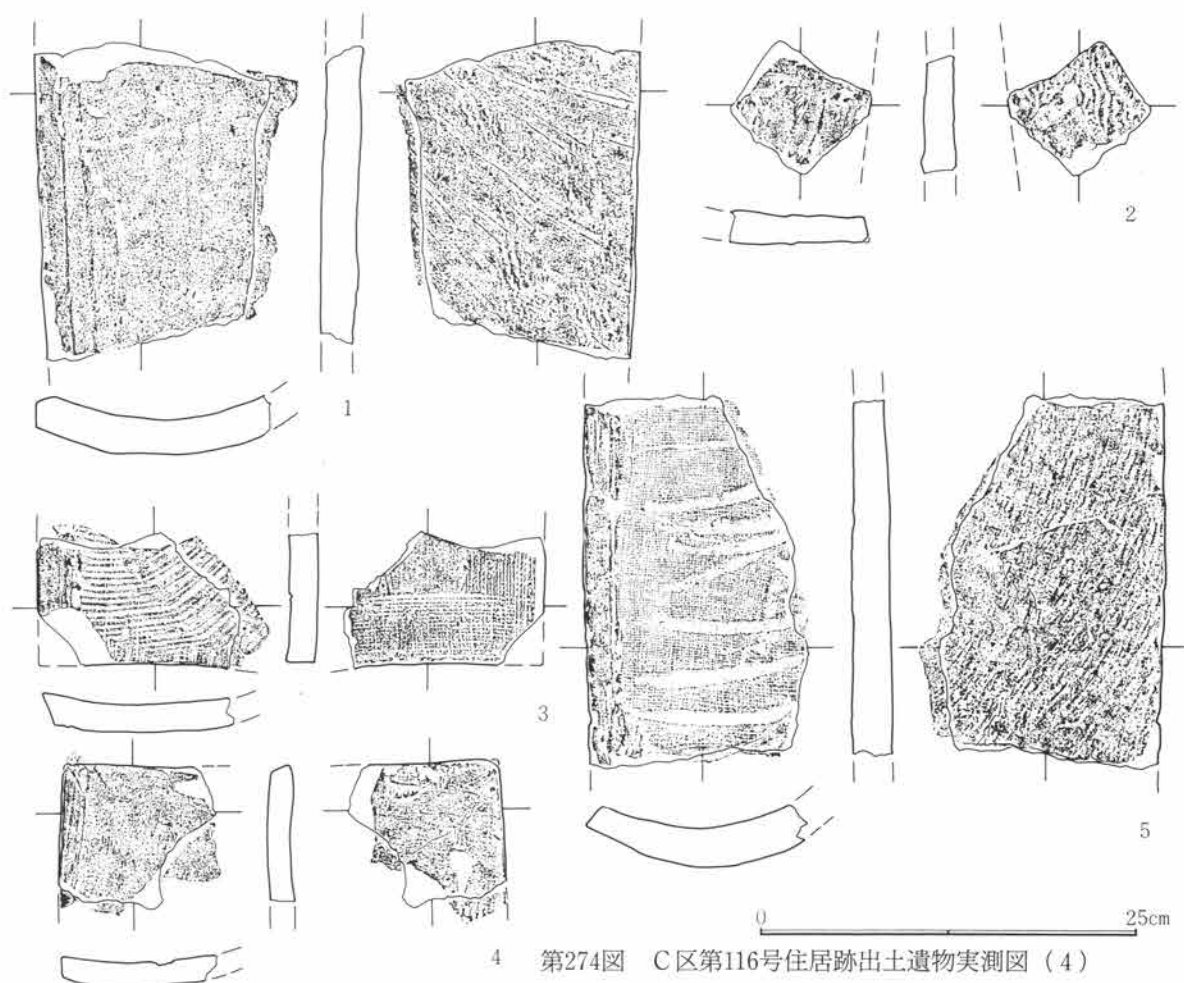
所見 当住居は144住・152住を切り、99住・149住・148住に切られている。当住居も周辺住居と切り合いが非常に著しく、平面精査による新旧確認後、サブトレンチを設定し確認の追証を行なったが結果は判然としなかった。住居は東壁中央部に燃烧空間の広いカマドを具備している。傍竈坑は確認し得なかったが、その付設は考慮される場所である。出土遺物は、D区の住居分類による結果の第I段階の様相が認められる。住居の廃棄は、この遺物の示す9世紀末10世紀初頭頃と考えられる。



第1節 南側調査区



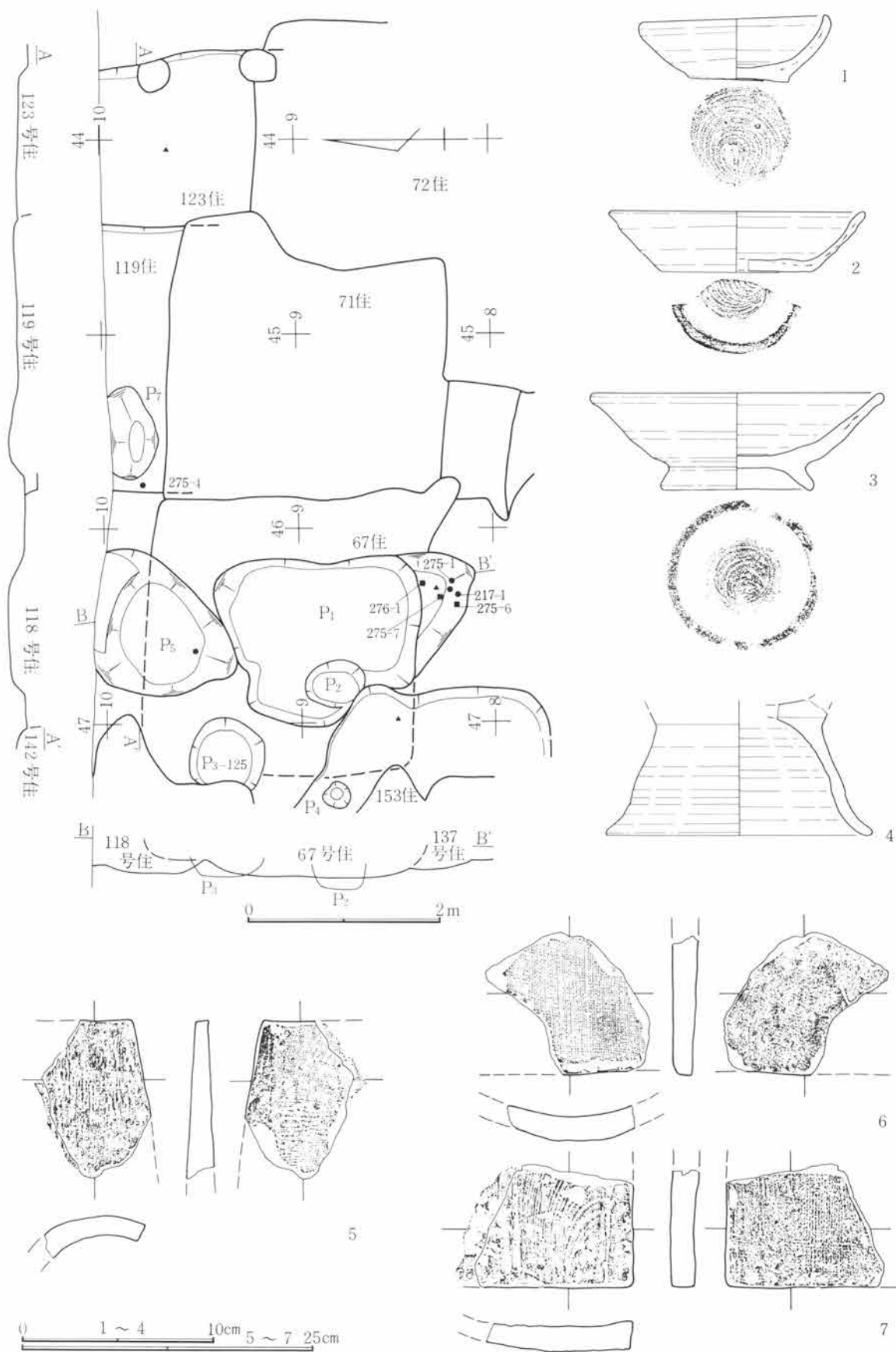
第272図 C区第116号住居跡出土遺物実測図(2)



4 第274図 C区第116号住居跡出土遺物実測図(4)

遺構名称	C区第137号住居跡	位置	7・8-C-46・47グリッド内。	残存深度	約21cm
67号住の被壊により詳細不詳。					
遺構名称	C区第118号住居跡	位置	9・10-C-45・46グリッド内。	残存深度	約20cm
67・142号住の破壊により詳細不詳。					
遺構名称	C区第119号住居跡	位置	9・10-C-45・46グリッド内。	残存深度	約25cm
71・118号住の破壊により詳細不詳。					
遺構名称	C区第123号住居跡	位置	9・10-C-43・44グリッド内。	残存深度	約23cm
71・72・119号住の破壊により詳細不詳。					

所見 (137・118・119・123住) これらの住居は調査区内を横走る農業用水路の直下から南にかけ、67住・71住・72住の3軒の住居に切られ残存する住居である。この4軒の住居は、平面精査時に確認されているが、極限定された範囲の中での状況であり確実性にはやや乏しい観がある。然、平面精査は調査時に於いて最も慎重に行なっている為、この時に得た新旧関係を示す状況所見を重要視した。そして、この平面精査時の所見とほぼ同様に断面でも確認されているが、掘り方内での差違も考慮されるところである。新旧関係は、118住が119住を切り、119住は123住を切っている。137住は67住に切られており、99住・152住・153住と重複するが、この3者での新旧関係は不明である。詳細に就いては記述が能わなかった。

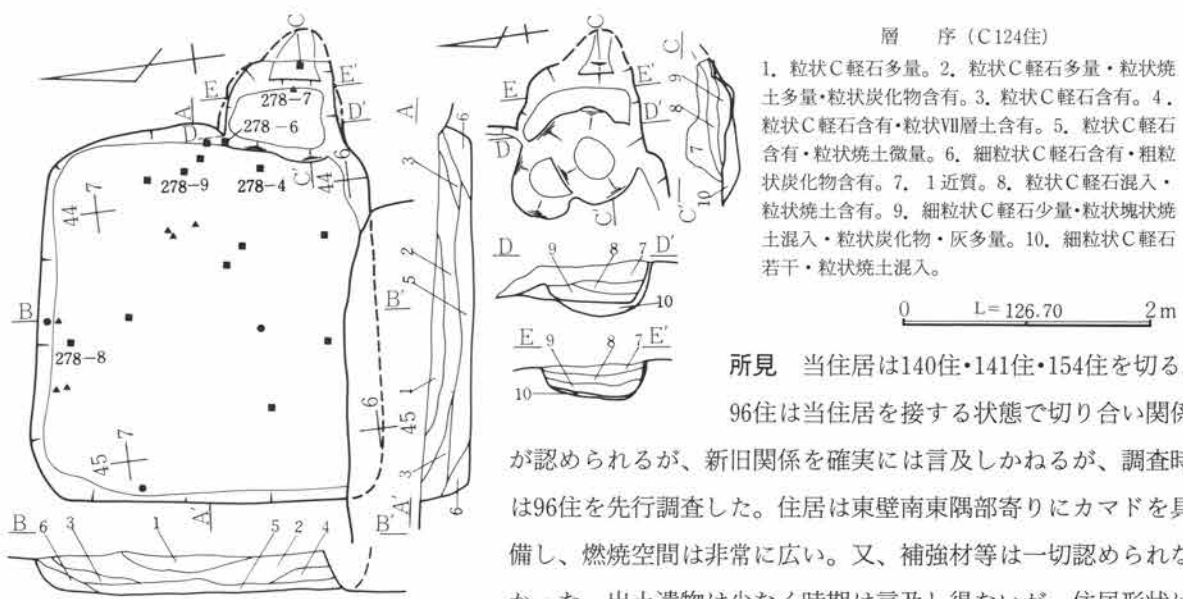


第275図 C区第107・119号住居跡・出土遺物実測図(1)



第276図 C区第107号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	C区第124号住居跡		位置	5~7-C-43~45グリッド内。		残存深度	約38cm
平面形態	矩形。	規模	3.00m×(2.8)m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-97度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦。中央部に造床が認められたが分明に出来なかった。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	下位の140号住居の存在により平面露呈を行なった状態のものは不確実なため削除した。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から10cm。			主軸方位	北-100度-南	
改築	有か。掘り方より焼土を検出している。		形状	箱状の燃焼部に舌状の煙道が屋外に延びる。			
規模	全長136cm・屋外長 74cm・屋内長 62cm・袖部幅100cm・燃焼部幅 85cm・煙道部幅 50cm位						
焚口・燃焼部	扇状を呈する焚口部は、燃焼空間と重複する部分が著しく、燃焼部先端側に器設部分が考えられる。						
	袖	未検出。瓦を検出しているが、底面より遊離している。					
煙道	68号住の際に破壊している。			掘り方	使用時の平面形状とほぼ同様である。		
遺物出土状態	全体に覆土内からの出土が多い。床直・床直層出土の遺物は少なかった。						

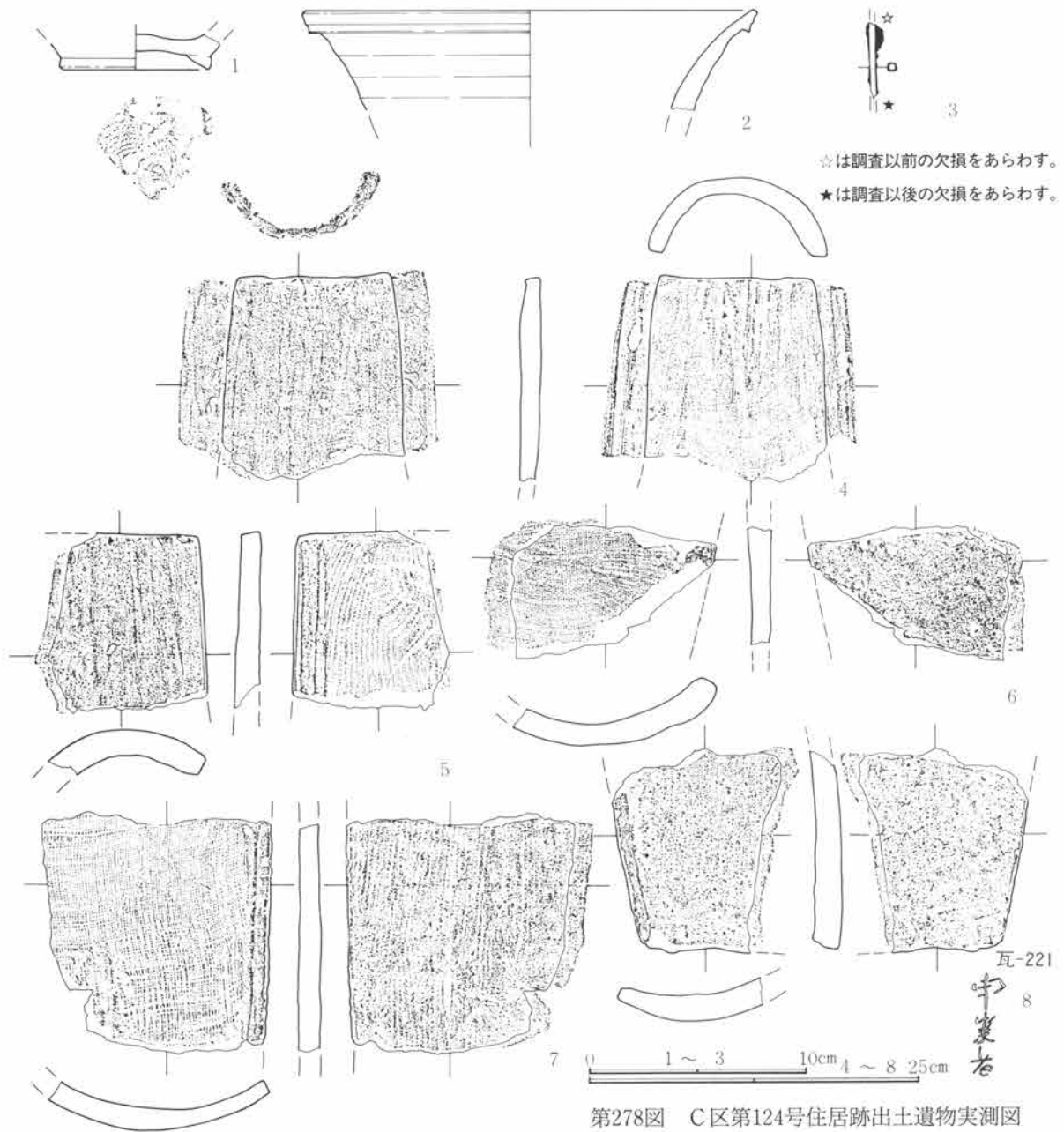


第277図 C区第124号住居跡実測図

層序 (C124住)

1. 粒状C軽石多量。
2. 粒状C軽石多量・粒状焼土多量・粒状炭化物含有。
3. 粒状C軽石含有。
4. 粒状C軽石含有・粒状Ⅶ層土含有。
5. 粒状C軽石含有・粒状焼土微量。
6. 細粒状C軽石含有・粗粒状炭化物含有。
7. 1近質。
8. 粒状C軽石混入・粒状焼土含有。
9. 細粒状C軽石少量・粒状塊焼土混入・粒状炭化物・灰多量。
10. 細粒状C軽石若干・粒状焼土混入。

所見 当住居は140住・141住・154住を切る。96住は当住居を接する状態で切り合い関係が認められるが、新旧関係を確実には言及しかねるが、調査時は96住を先行調査した。住居は東壁南東隅部寄りにカマドを具備し、燃焼空間は非常に広い。又、補強材等は一切認められなかった。出土遺物は少なく時期は言及し得ないが、住居形状はD区の第Ⅲ段階に対比され10世紀中頃と考えられる。

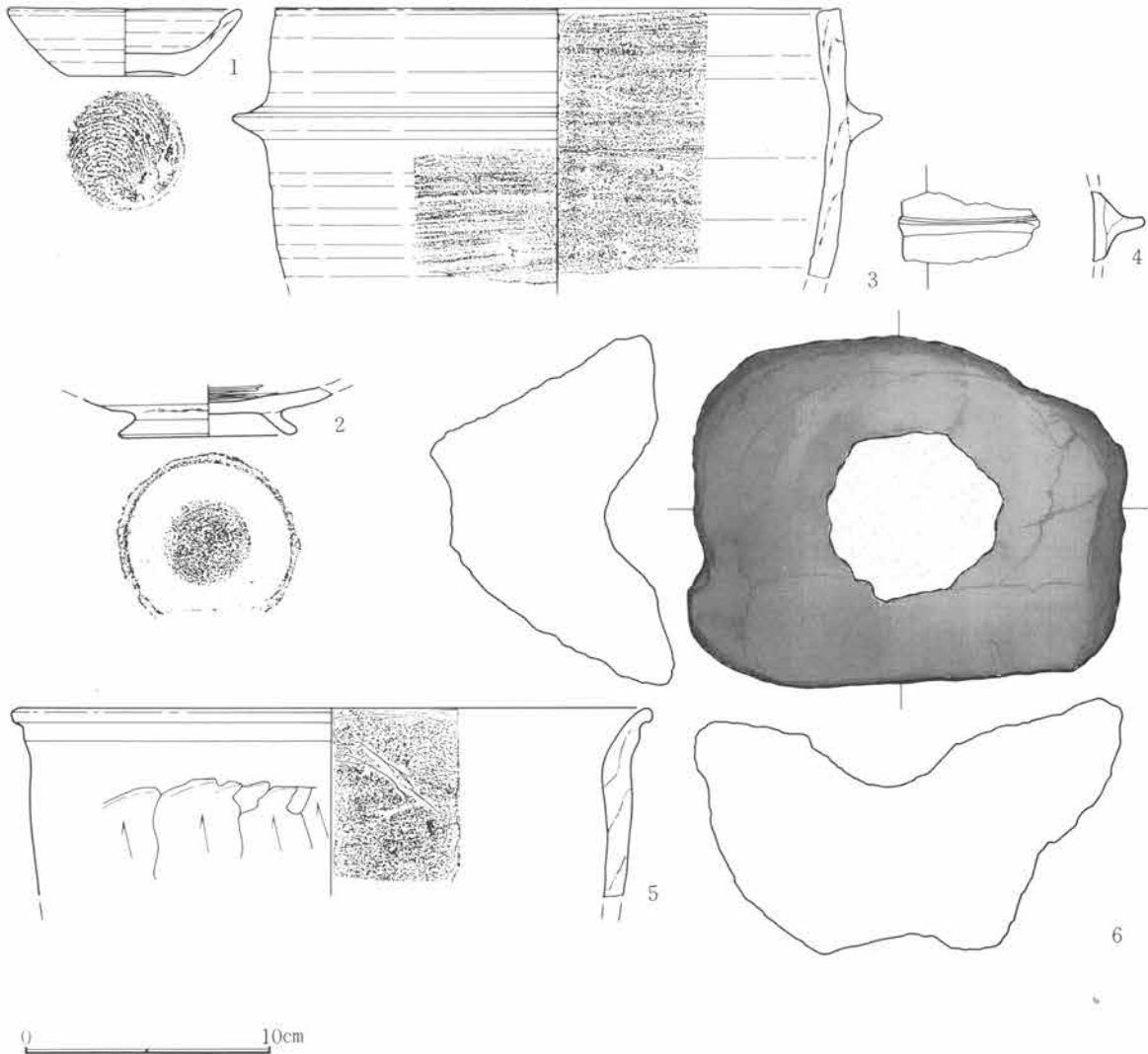


第278図 C区第124号住居跡出土遺物実測図



第279図 C区第134号住居跡実測図

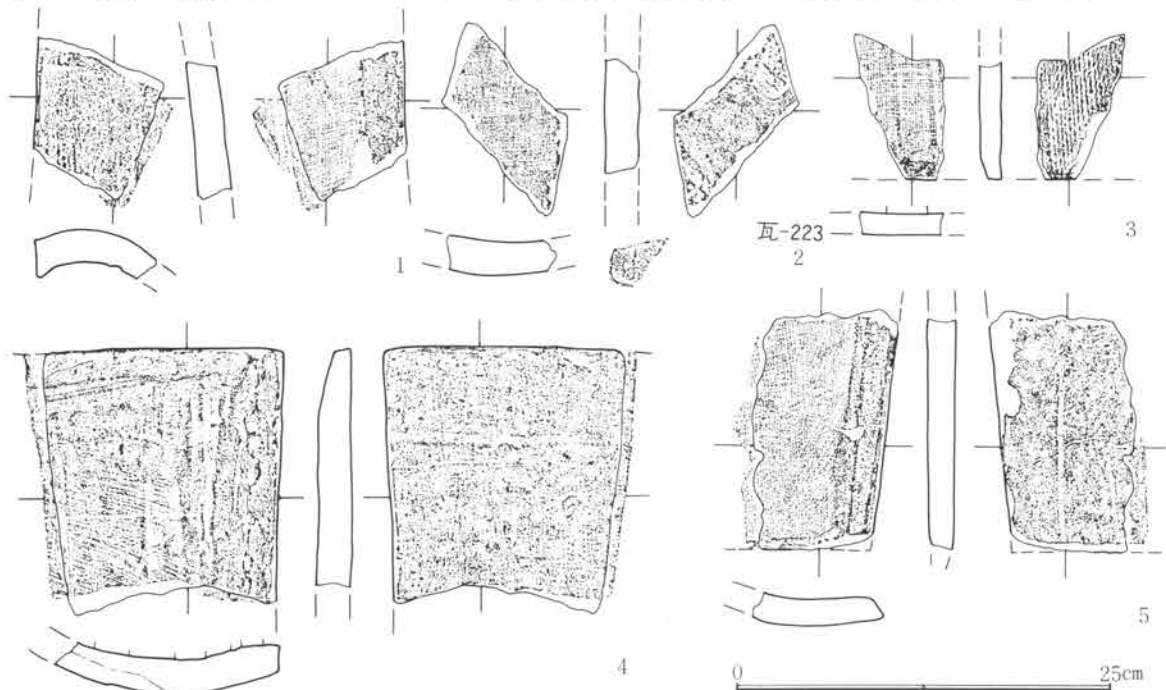
遺構名称	C区第134号住居跡		位置	1・2-C-42・43グリッド内。		残存深度	約14cm
平面形態	矩形。	規模	2.16m×1.89m	構築基準辺	西乃至南壁	主軸方位	北-95度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦。全面造床。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P ₃ か。(不分明)			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	全体に床面より10cm程下位に底面が検出され、土坑状・柱穴状の掘り込みが検出されている。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から5cm。			主軸方位	北-89度-南	
改築	有。掘り方で焼土・炭化物を検出。		形状	細い舌を呈し、先端に細い煙道を具備する。			
規模	残存長63cm・屋外残存長55cm・屋内長8cm・袖部幅60cm・燃烧部幅40cm・煙道部幅18+ α cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
	袖	左袖のみ瘤状に認められるが、右袖は顕著ではない。					
煙道	細く45度程の仰角で立ち上がる。		掘り方	右袖に袖の補強材の据方を検出。			
遺物出土状態	床面直上の遺物がやや多い。掘り方内のものには、C135号住のものを含む可能性がある。						



第280図 C区第134号住居跡出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物

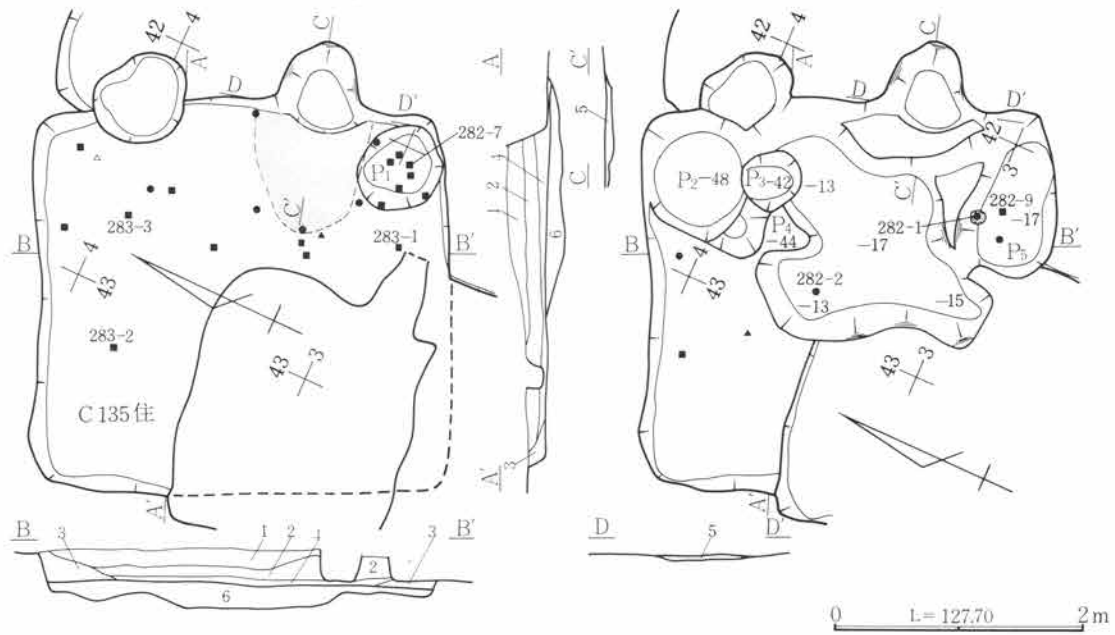
所見 当住居は112・135・151住を切り構築しているが、103住との新旧関係は不明である。住居は小型で南東隅部にカマドを具備するが、その主軸方向は住居の指向方向とほぼ同様である。カマドはやや小規模であるが、煙道部は長く家外に突出したと考えられる。住居形状はD区の第Ⅲ乃至Ⅳ段階に対比され、出土遺物は第Ⅳ段階の様相が認められることから、住居の廃棄は10世紀末～11世紀前初頭頃と考えられる。



第281図 C区第134号住居跡出土遺物実測図(2)

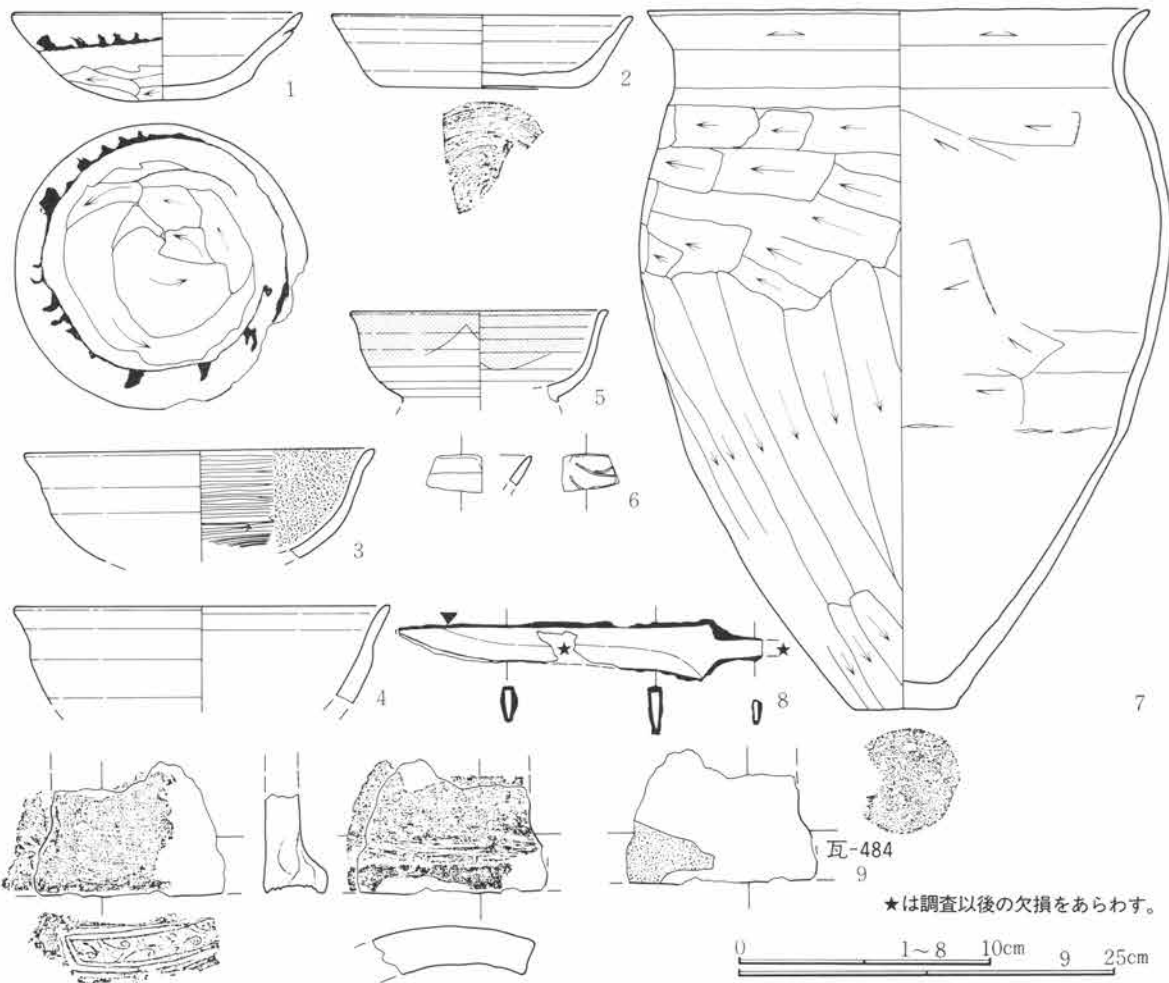
遺構名称	C区第135号住居跡		位置	1～3-C-41～43グリッド内。		残存深度	約32cm
平面形態	正方形。	規模	3.16m×3.30m	構築基準辺	北壁か	主軸方位	北-63度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦。東側で造床が顕著。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P ₁ 。円形状。径70cm・深度-14cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	カマド前面に不整形の掘り込みが検出されている。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から46cm。			主軸方位	北-75度-南	
改築	有か。掘り方内より焼土を検出。		形状	遺存不良で馬蹄形状に残存する。			
規模	全長 74cm・屋外長 48cm・屋内長 26cm・袖部幅 67cm・燃烧部幅 58cm(掘り方)。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
	袖	未検出。					
煙道	未検出。		掘り方	不整形円形を呈する土坑状。			
遺物出土状態	傍竈坑内よりほぼ完形の土師器甕が出土している。						

所見 当住居は103号竪穴状遺構と134住に切られ150住を切り構築している。住居は東壁中央よりやや南東隅部寄りにカマドを具備し、南東隅部には傍竈坑を備えている。カマドは103跡に上面を削平されている為遺存状況は悪い。傍竈坑内からは土師器甕(第282図-7)が出土している。住居形状はD区の第Ⅰ段階に対比され、出土遺物の様相も同様である。このことから、住居の廃棄は9世紀後半と考えられる。

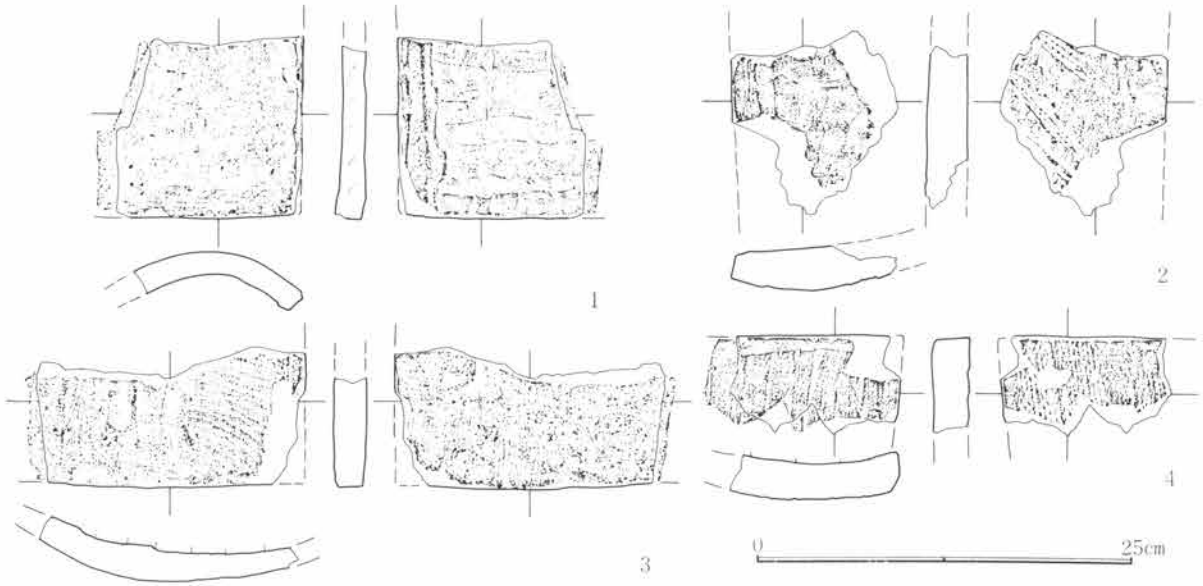


層序 (C135住)

1. 粗・細粒状C軽石多量。2. 粒状C軽石混入。3. 粒状C軽石含有。4. 細粒状C軽石若干・粒状焼土少量。



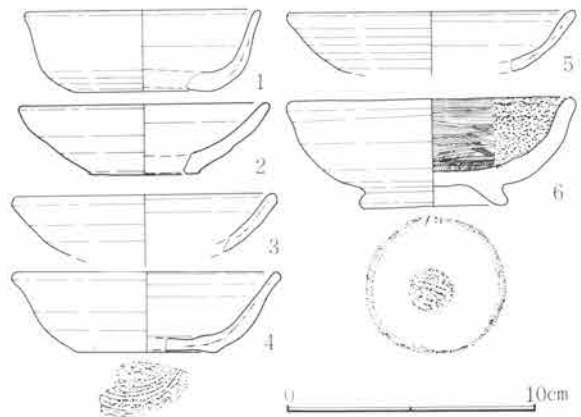
第282図 C区第135号住居跡・出土遺物実測図(1)



第283図 C区第135号住居跡出土遺物実測図(2)

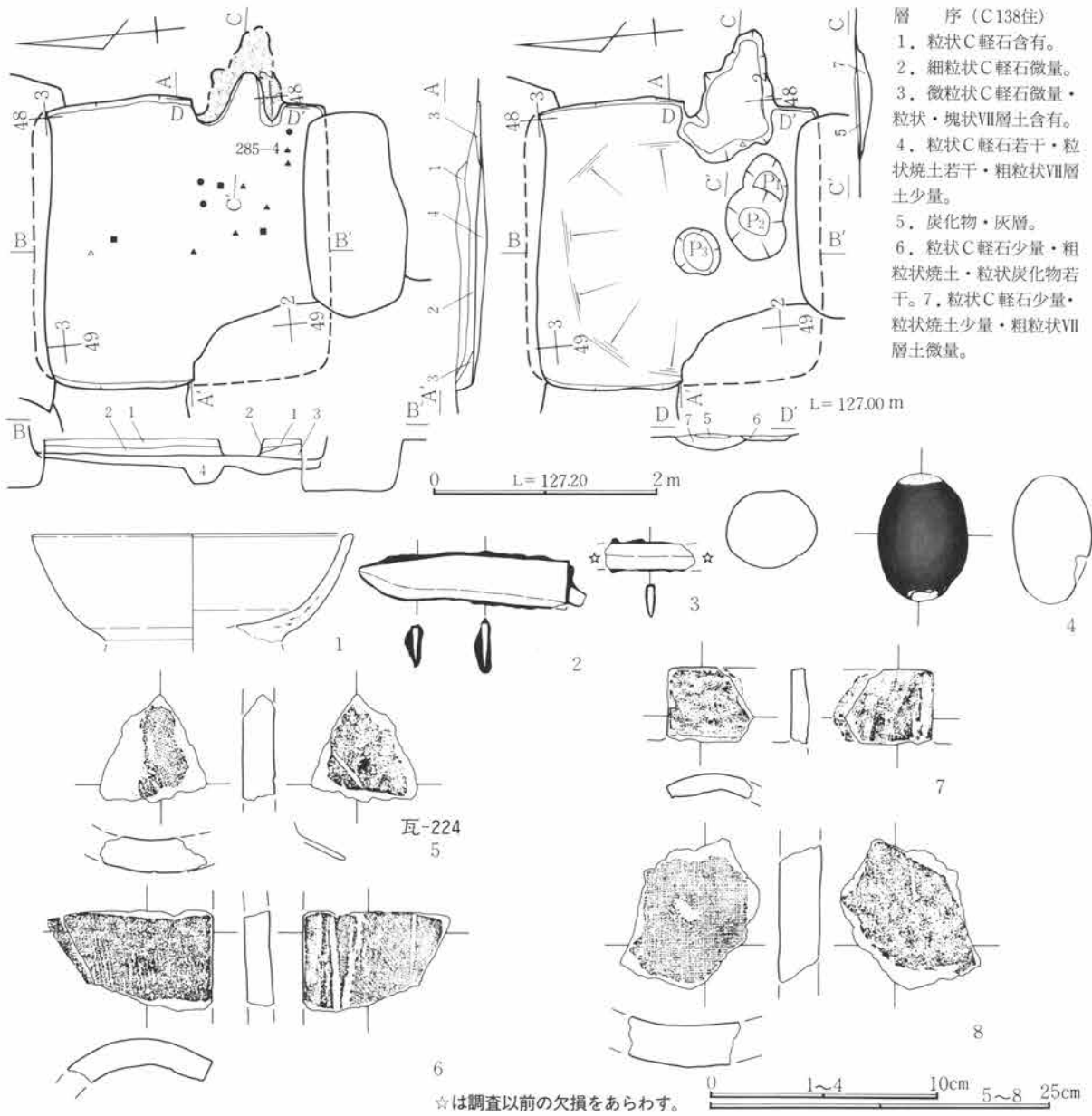
遺構名称	C区第138号住居跡		位置	1～3-C-47～49グリッド内。			残存深度	約18cm
平面形態	正方形。	規模	2.55m×2.45+αm	構築基準辺	不分明	主軸方位	北-96度-南	
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	平坦。大半が造床。				
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	住居中央に向け、浅く皿状に窪ぼむ。							
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から33cm。				主軸方位	北-97度-南	
改築	有。掘り方内から焼土を検出。			形状	残存不良なため形状・詳細不分明。			
規模	全長46+αcm・屋外長25+αcm・屋内長 21cm・袖部幅 84cm・燃烧部幅 26cm。							
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。			袖	屋内に舌状に突出する。			
煙道	未検出。			掘り方	残存不良なため不整形状を呈する。			
遺物出土状態	カマド前方で、床面直上での出土が多い。							

所見 当住居は105住・138住に切られる。住居は東壁中央よりやや南東隅部寄りにカマドを具備する。傍竈坑は認められなかった。カマドは、試掘トレンチにより上面を失っている。焚口・燃烧部には補強材は認められなかった。掘り方は、床面下に浅く皿状に検出され、土坑状のP₁～P₃が検出されたが、性格等は不分明である。住居形状は、D区の住居分類の第Ⅲ段階に対比され、出土遺物は同様に第Ⅲ段階の様相が認められることから、当住居の廃棄は10世紀中頃から後半と考えられる。

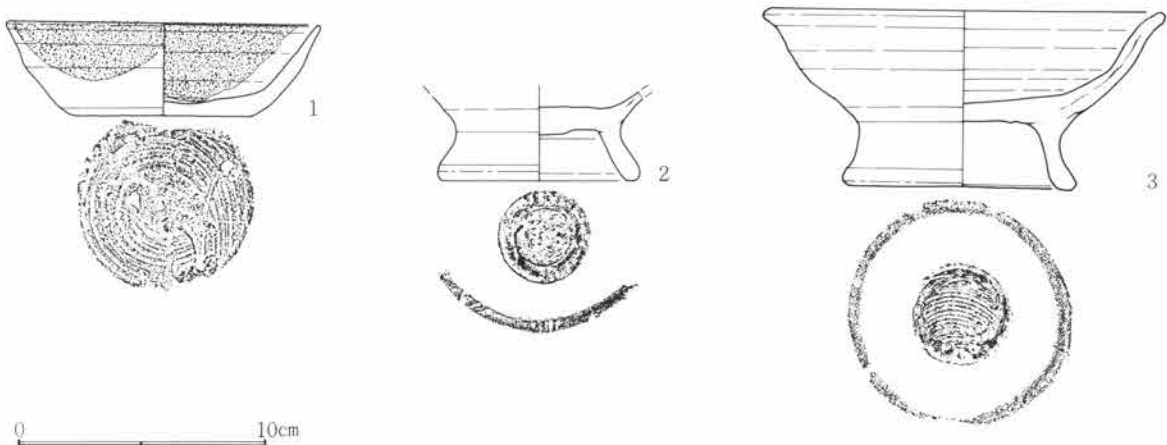


第284図 C区第138号住居跡出土遺物実測図(1)

第1節 南側調査区

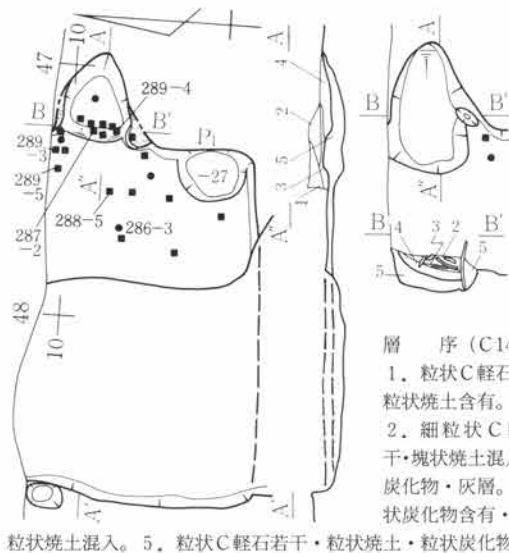


第285図 C区第138号住居跡・出土遺物実測図(2)



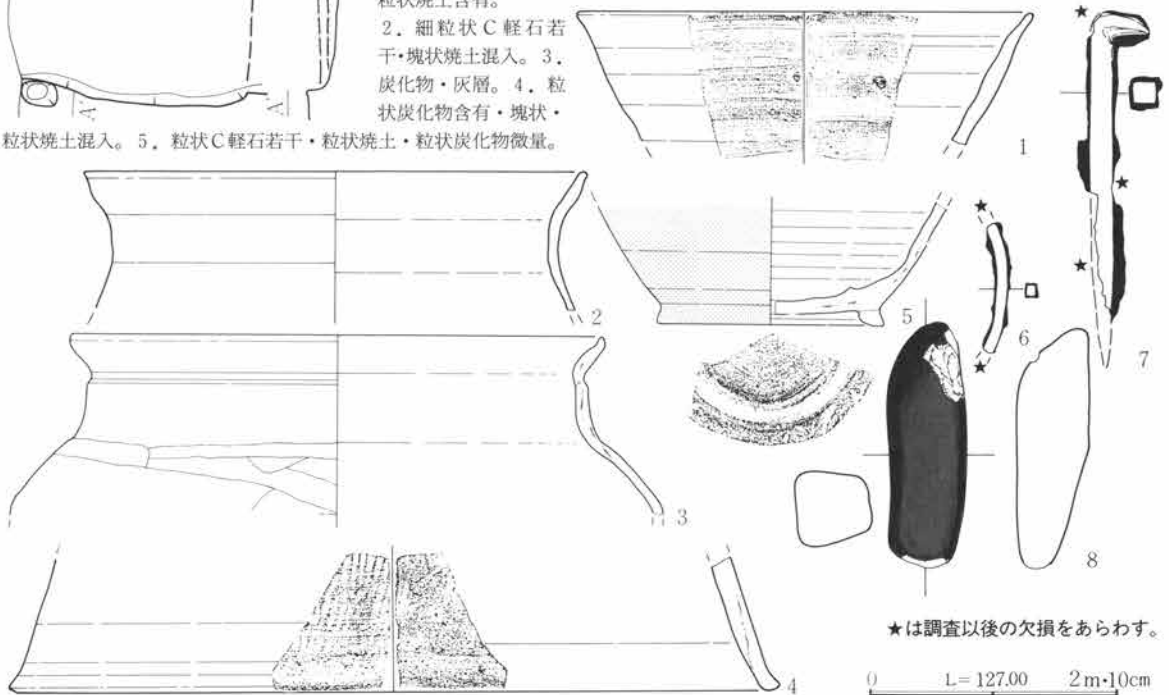
第286図 C区第142号住居跡出土遺物実測図(1)

遺構名称	C区第142号住居跡			位置	9・10-C-46~48グリッド内。			残存深度	約17cm
平面形態	正方形か。	規模	2.85m×1.93+ α m		構築基準辺	不明	主軸方位	北-88度-南位か	
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。			床面	平坦（残存部が少ない）。造床有り。				
壁溝	未検出。			傍竈坑・貯蔵穴	P ₁ 。楕円形状。56×42cm・深度-27cm				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。								
掘り方	詳細不分明。								
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から80cm。					主軸方位	北-93度-南	
改築	有。掘り方内で焼土を検出。			形状	舌状を呈する。				
規模	全長 72cm・屋外長 72cm・屋内長 0cm・袖部幅80+ α cm・燃烧部幅 50cm。								
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。								
				袖	右袖のみを検出。左袖部は未調査。男瓦で補強する。				
煙道	未検出。			掘り方	長楕円形状を呈する。				
遺物出土状態	カマド焚口周辺での瓦の出土が多い。傍竈坑での出土は皆無。								



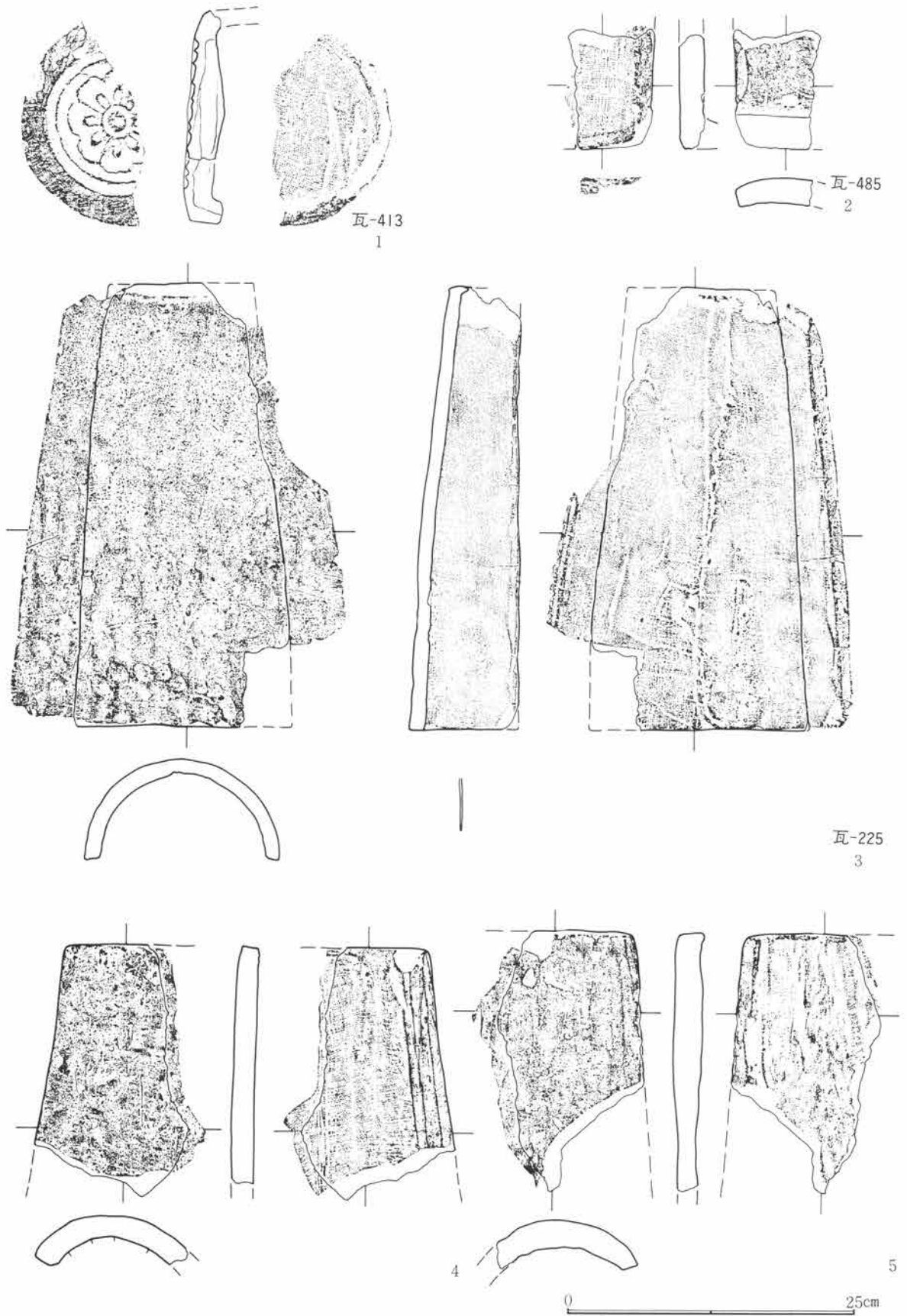
層序 (C142住)
 1. 粒状C軽石若干・粒状焼土含有。
 2. 細粒状C軽石若干・塊状焼土混入。3. 炭化物・灰層。4. 粒状炭化物含有・塊状・粒状焼土混入。5. 粒状C軽石若干・粒状焼土・粒状炭化物微量。

所見 当住居は86住に切られ、試掘トレンチにより失っている部分も多く、調査区内を横走る農業用水路により住居の北壁側は未調査部分がある。カマドは東壁に具備するが詳細な位置は不分明である。構造は、左袖が未調査部にかかるが右袖は瓦による補強が認められる。燃烧部での補強材は認められない。傍竈坑は東壁で南東隅部寄りに具備する。住居形状はD区の種類第I・II段階に対比され、遺物も同様である。



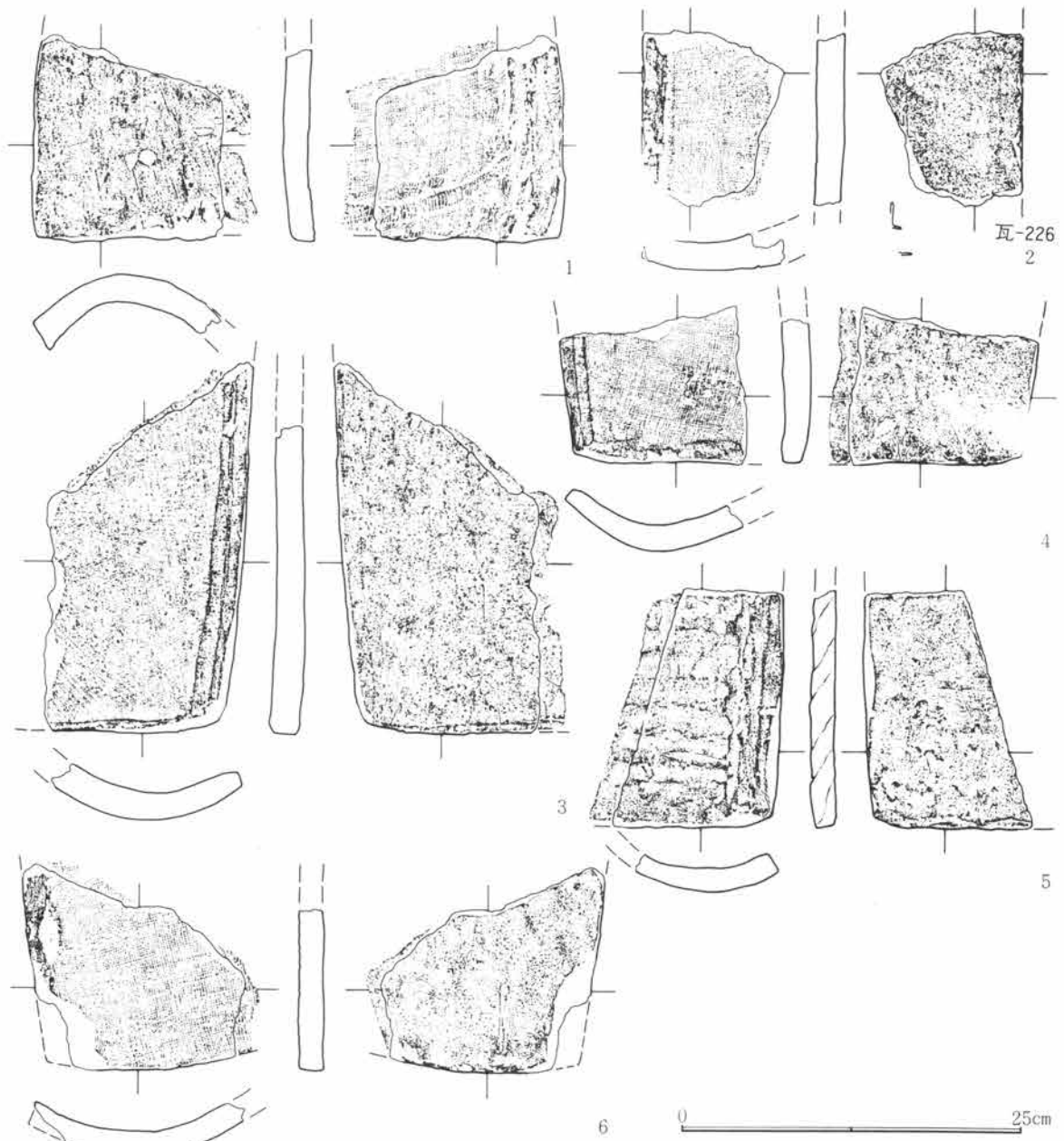
★は調査以後の欠損をあらわす。

第287図 C区第142号住居跡・出土遺物実測図(2)



第288図 C区第142号住居跡出土遺物実測図(3)

第4章 検出された遺構・遺物

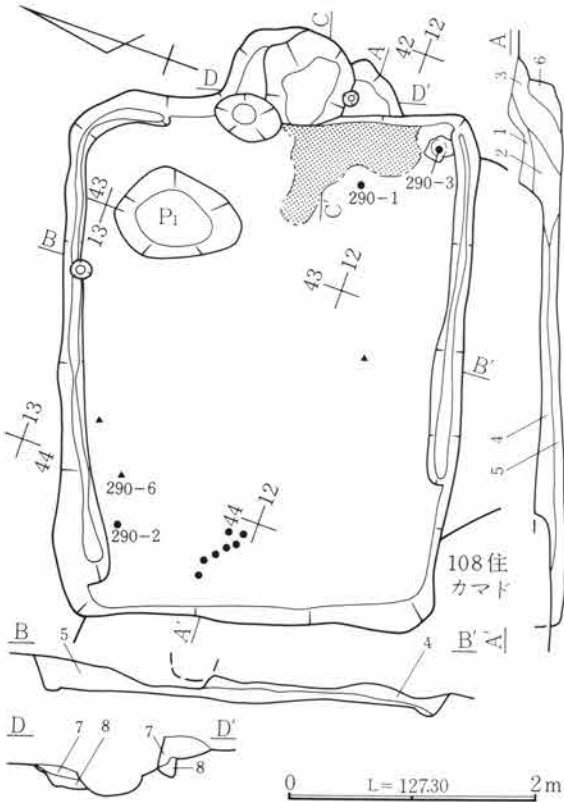


第289図 C区第142号住居跡出土遺物実測図(4)

遺構名称	C区第143号住居跡		位置	11~13-C-42~44グリッド内。		残存深度	約44cm
平面形態	縦長方形。	規模	4.08m×3.37m	構築基準辺	北壁	主軸方位	北-72度-南
壁	斜位に立ち上がる。		床面	平坦。造床は認められなかった。			
壁溝	北・南壁下で検出。幅15~25cm。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	住居内・屋外周辺を精査したが認められなかった。						
掘り方	認められなかったが、北・南壁下の壁溝のみが掘り方の状態である。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から50cm。遺存不良なため詳細不分明。			主軸方位	北-72度-南程か	
遺物出土状態	他の住居跡による破壊が著しく、残状状況が不良であるため遺物量が少ない。						

所見 当住居は109住・73住・85住に切られる。この為住居の遺存は不良である。住居は、主軸を北側に20度

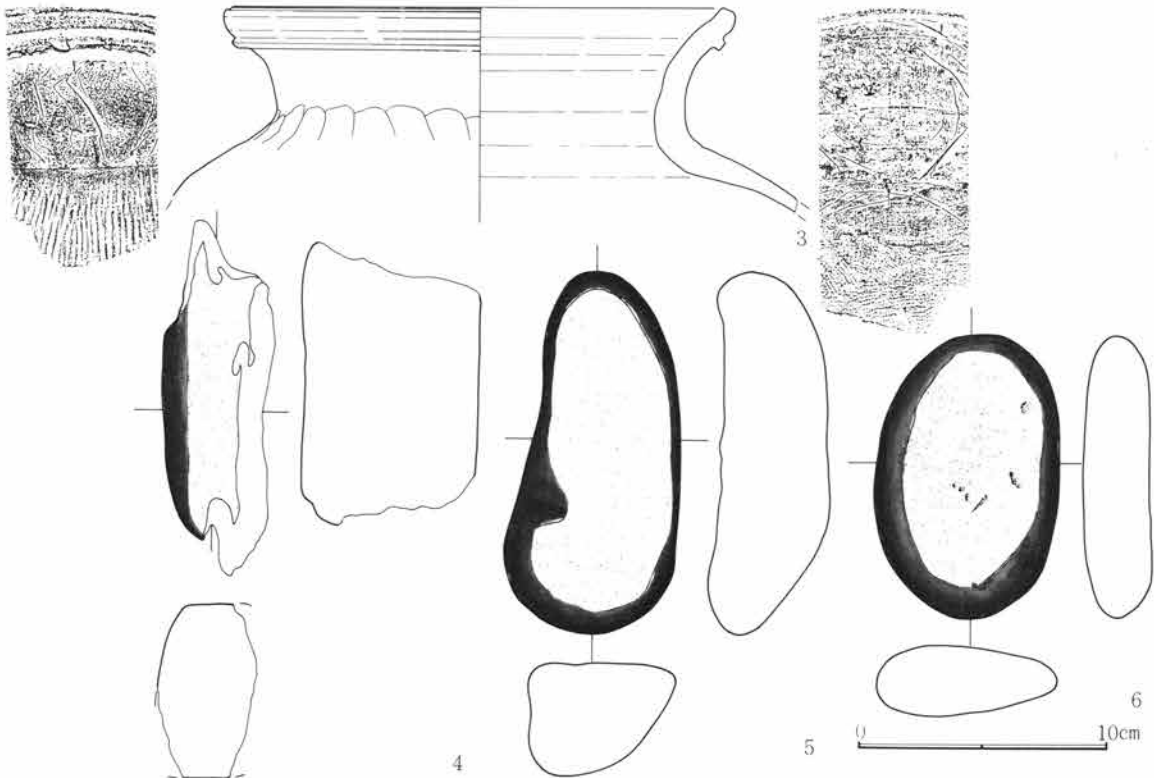
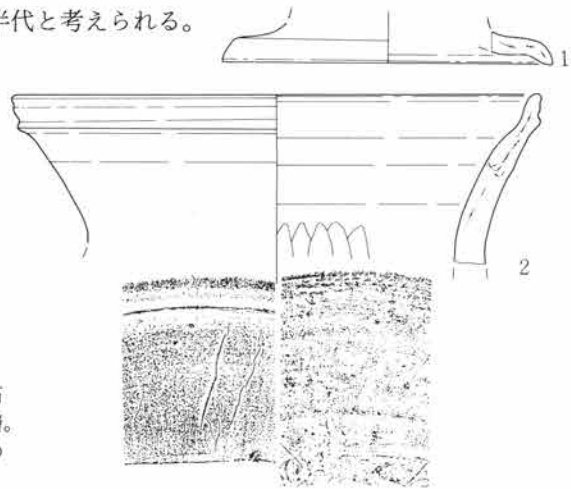
第1節 南側調査区



層序 (C143住)

1. 粒状C軽石多量・粒状焼土混入。
2. 濁灰褐色シルト (粘質土)・塊状焼土の混土層。
3. 濁灰褐色土シルトの被熱焼土。
4. 粒状C軽石少量・粒状焼土微量。
5. 細粒状C軽石微量。
6. 3近質。
7. 焼土層。
8. 粒状C軽石混入・粒状焼土混入。
9. 塊状焼土 (濁灰褐色シルトの被熱焼土) (3近質)。

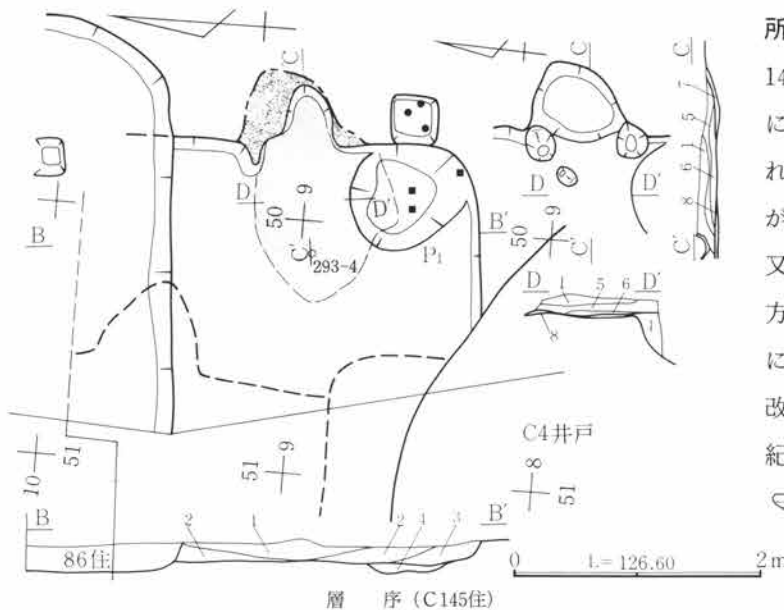
程向かい8世紀以降の住居跡と異なっている。カマドは東壁中央に具備するものの、残存は不良で詳細に就いては不明である。壁溝は南壁下・北壁及北東隅部で検出されている。この壁溝の調査時の所見としては、壁板材等の痕跡を示す状況は認められなかった。このことから、壁溝は壁板材の設置に伴う掘り方等ではないことも示唆される。出土遺物は少量で、南東隅部に須恵器甕 (第290図-3)が逆位で設置されていた。他は少量の土師器甕片のみであった。住居の廃棄時期は7世紀後半代と考えられる。



第290図 C区第143号住居跡・出土遺物実測図

所見 (144住) 当住居は86住・116住・117住・145住・152住・153住・184住に切られている。更に、試掘調査時のトレンチにより住居は非常に遺存が悪かった。住居は東壁が最も長く梯形状を呈する。これにより南壁はほぼ東西方向に、北壁は北側へ20度程偏向した状況になっている。然し、屋内では支柱穴が長方形配置となり、住居形状なりの配置となっている。この長方形配置の指向方向に対応する壁は西壁しか認められず他の壁は異なった方向へ指向している。このことから、住居構築時には、南壁のみが方向を意識して構築されたと判断される。この点から元来の主軸はこの西壁乃至支柱穴間の指向方向に求められる。又、支柱穴は6本検出されており、P₁とP₅・P₂とP₆が各々近接していることから、元来の支柱穴は深度の点から勘案すればP₁～P₄に求められ、P₅・P₆は、P₁・P₂の補助柱穴か上屋の建替え時に新たに掘削されたものと考えられる。一方、北壁下で検出されたP₁₁・P₁₂とP₁₃・P₁₅は、前者が支柱穴の指向方向に従うものの後者は北壁に沿った形で掘削されている。更に北西隅部のP₇はP₁₁・P₁₂の延長線上にあること等から勘案すれば、北壁は改修された可能性が想起される。これらの事から、当住居は建替えられた可能性が非常に濃厚であることが考えられる。出土遺物は、原位置で出土したものは少ない。当住居は出土遺物等から7世紀後半と考えられる。

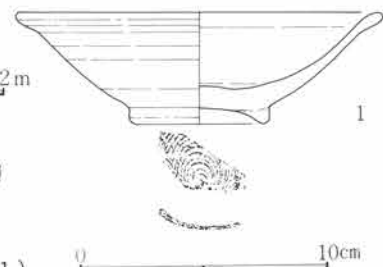
遺構名称	C区第145号住居跡		位置	8・9-C-49・50グリッド内。		残存深度	約13cm
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から94cm。			主軸方位	北-87度-南位か	
改築	有。掘り方内より焼土を検出。			形状	全体的に遺存が悪く不整形形状に残存する。		
規模	全長 76cm・屋外長 46cm・屋内長 30cm・袖部幅106cm・燃烧部幅 40cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
	袖	左袖のみ検出。掘り方では補強材の掘方を検出している。					
煙道	未検出。	掘り方	ほとんど無く、床の造床は貼床に近い。				
遺物出土状態	傍竈坑内より瓦3点を検出し、カマド前面で灰釉瓶が床面より6cm程遊離して出土。						



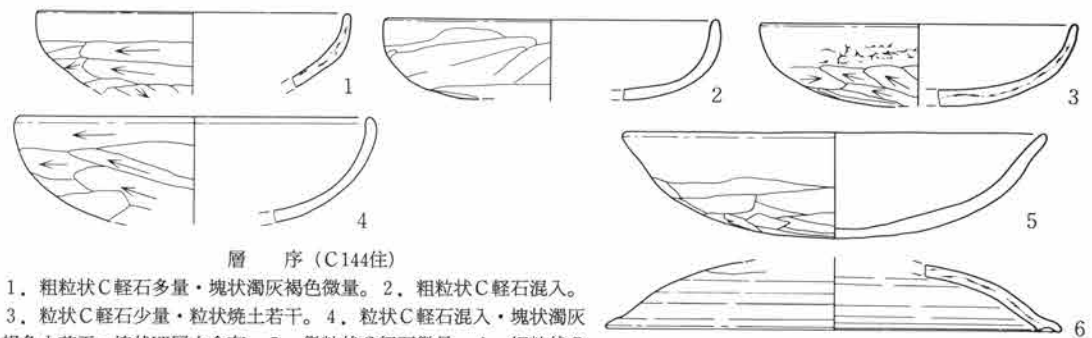
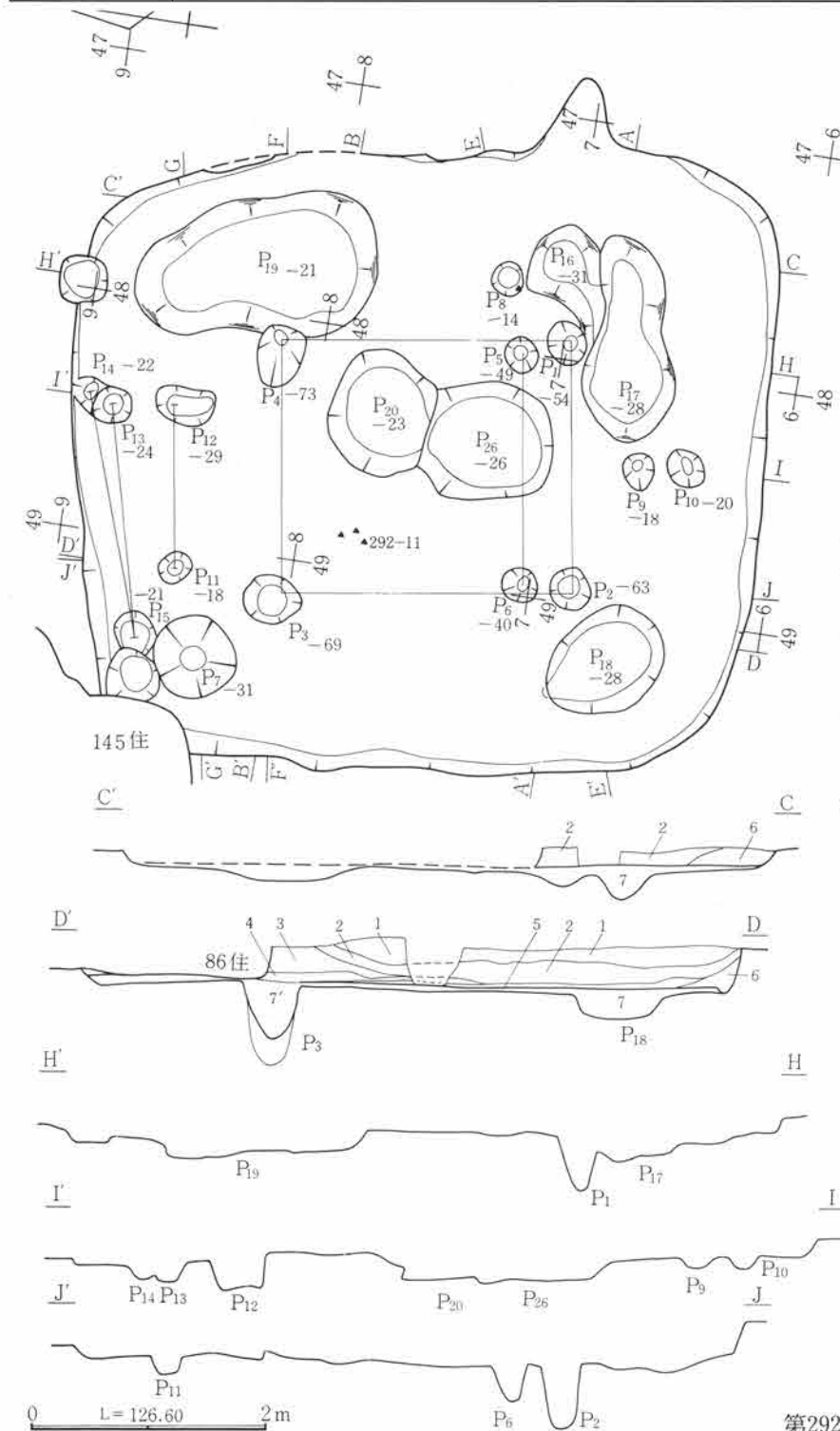
1. 粒状C軽石混入。2. 粒状C軽石含有・粗粒状VII層土含有。3. 細粒状C軽石若干。
4. 細粒状C軽石子・塊状VII層土混入・粒状VII層土含有。5. 粒状C軽石若干・塊状VII層土混入・粒状炭化物含有。6. 炭化物・灰層。7. 細粒状C軽石若干・粗粒状焼土含有・粒状炭化物若干。8. 粒状炭化物・粒状焼土含有粘質土(硬質)。

第291図 C区第145号住居跡・出土遺物実測図(1)

所見 当住居は86住・121住に切れ、144住を切り構築している。住居は東壁にカマドを具備するが北西隅が失われている為詳細な位置は不分明であるが、検出された傍竈坑に偏在している。又、カマド掘り方には袖補強材の据え方が検出されており、廃棄時のカマドには袖補強材が認められないことから改築が確認出来る。住居の廃棄は9世紀末か10世紀初頭と考えられる。

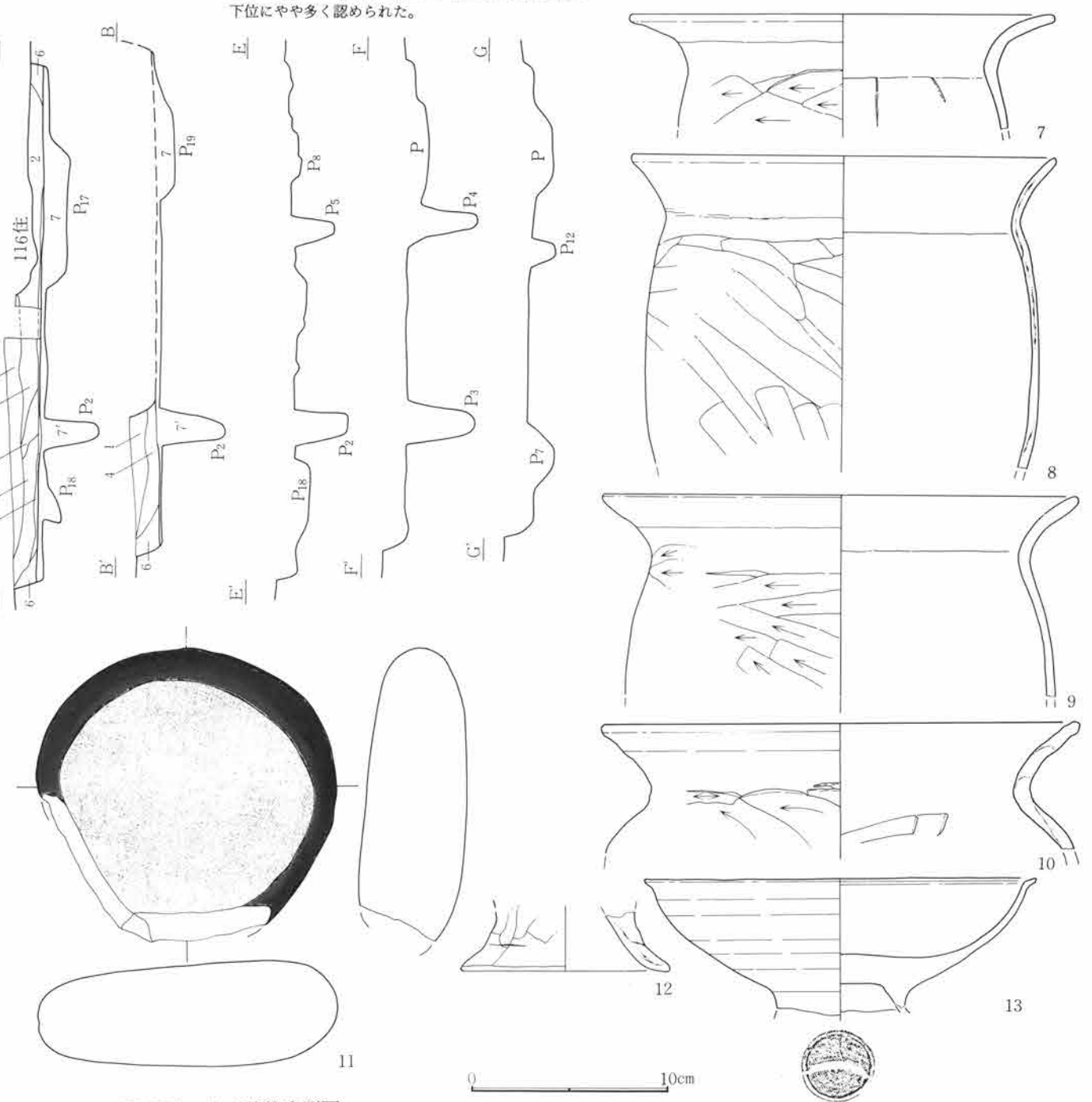


遺構名称	C区第144号住居跡	位置	6～9-C-46～49グリッド内。	残存深度	約33cm
平面形態	梯形。	規模	5.20m×5.80m	構築基準辺	西壁
壁	斜位気味に立ち上がる。	床面	平坦？全体に薄い造床がある。		
壁溝	未検出。	貯蔵穴	P ₇ か。円形。径55cm・深度-31cm		
柱穴	支柱穴P ₁ ～P ₄ ・支柱補助穴P ₅ ・P ₆ ・P ₉ ・P ₁₀ は入口施設用か？P ₁₁ ～P ₁₅ は補助柱か。ピットの指向方向は81度。				
掘り方	全体的に薄いのが部分的に土坑状のものが認められる (P ₁₆ ～P ₂₀ ・P ₂₆)。				
遺物出土状態	住居の切り合いが非常に著しかった為詳細な状況は把握出来なかった。				

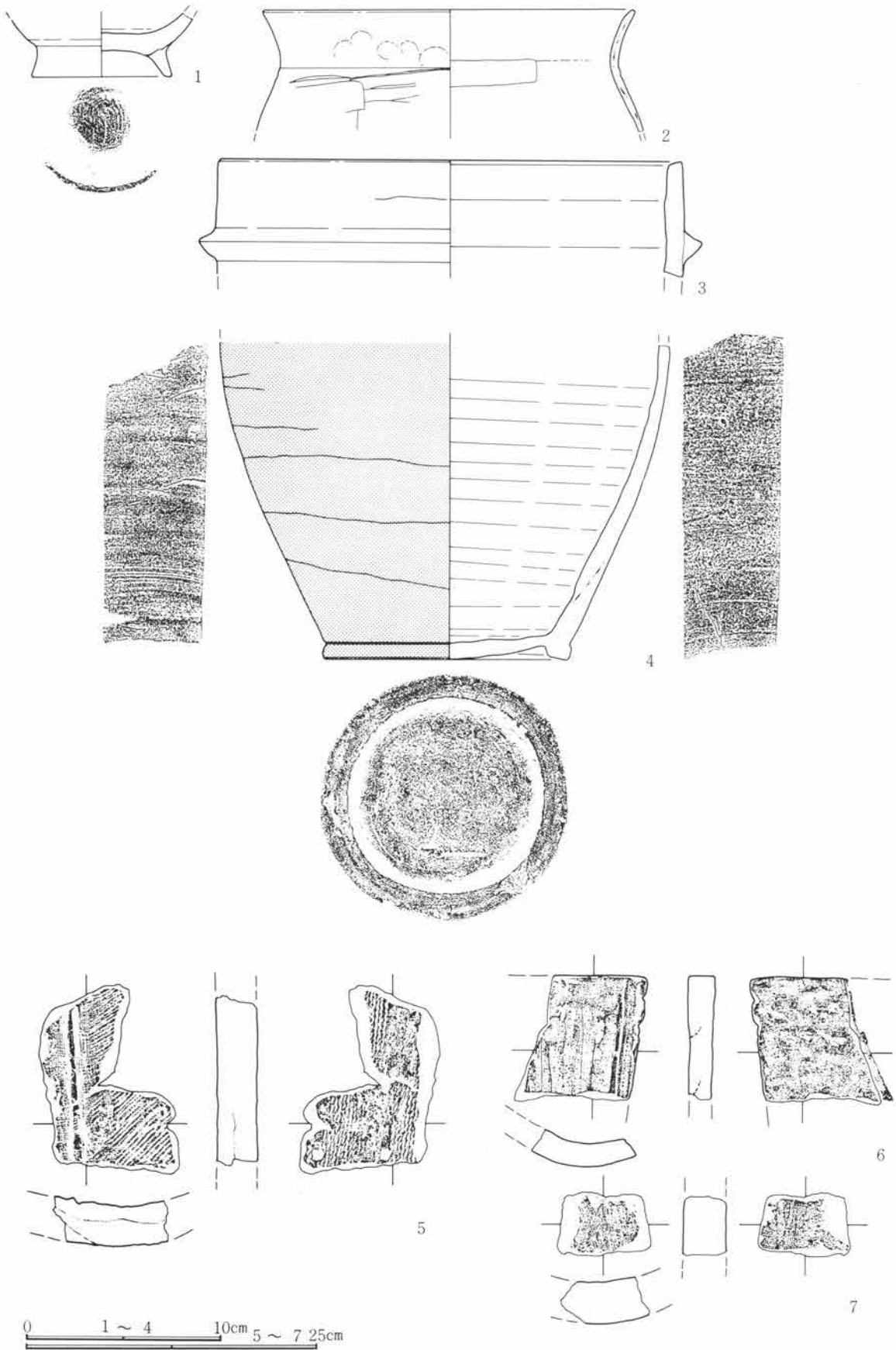


層序 (C144住)

1. 粗粒状C軽石多量・塊状濁灰褐色微量。
 2. 粗粒状C軽石混入。
 3. 粒状C軽石少量・粒状焼土若干。
 4. 粒状C軽石混入・塊状濁灰褐色土若干・塊状VII層土含有。
 5. 微粒状C軽石微量。
 6. 細粒状C軽石若干。
 7. 粒状C軽石含有・塊状VII層土含有・粒状VII層土含有・粒状焼土若干。
- 7'. 断ち割りによる土層観察は実施しなかったが、調査時の観察では、塊状VII層土・粒状VII層土が柱穴内の下位にやや多く認められた。



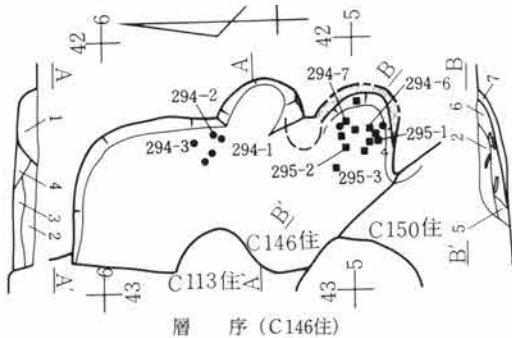
第292図 C区第144号住居跡・出土遺物実測図



第293図 C区第145号住居跡出土遺物実測図(2)

第4章 検出された遺構・遺物

遺構名称	C区第146号住居跡	位置	4～6-C-42グリッド内。	残存深度	約18cm
カマド	位置	東壁、位置の詳細不明。		主軸方位	北-92度-南位か
改築	有。掘り方内で焼土・灰化物を検出。		形状	全体的に遺存が悪く馬蹄形状に残存する。	
規模	全長 73cm・屋外長 22cm・屋内長 51cm・袖部幅120cm?・燃烧部幅56cm?。				
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。右壁を礫で補強する。				
	袖	屋内に長く突出する。左袖は不明。			
煙道	未検出。	掘り方	楕円形を呈する土坑状。		
遺物出土状態	カマド内でやや瓦片が多い。東壁でやや集中して出土している。				

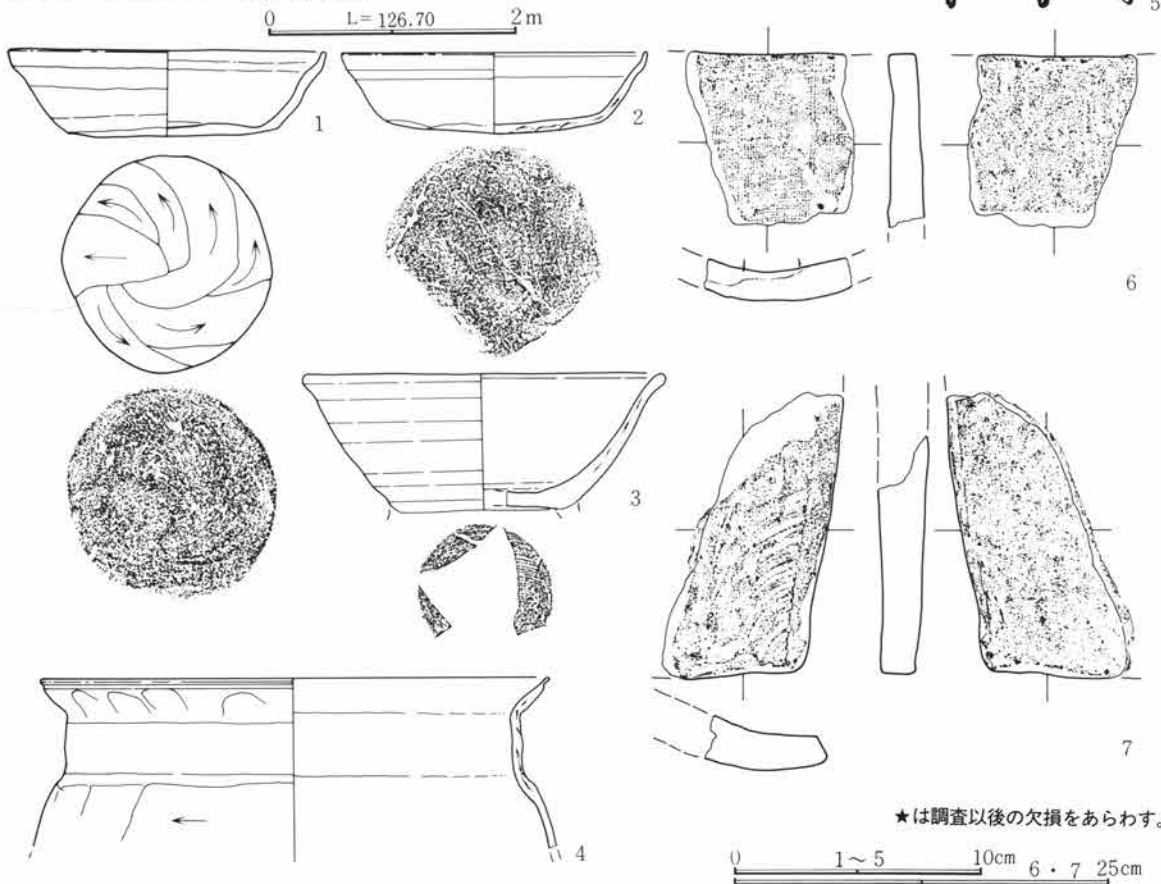


層序 (C146住)

1. 粒状C軽石多量(C号土坑覆土)。
2. 粒状C軽石混入。
3. 粒状C軽石若干。
4. 微粒状C軽石微量。
5. 微粒状C軽石若干・塊状焼土含有。
6. 炭化物・灰層。
7. 細粒状C軽石若干・粒状焼土少量・粒状炭化物若干。

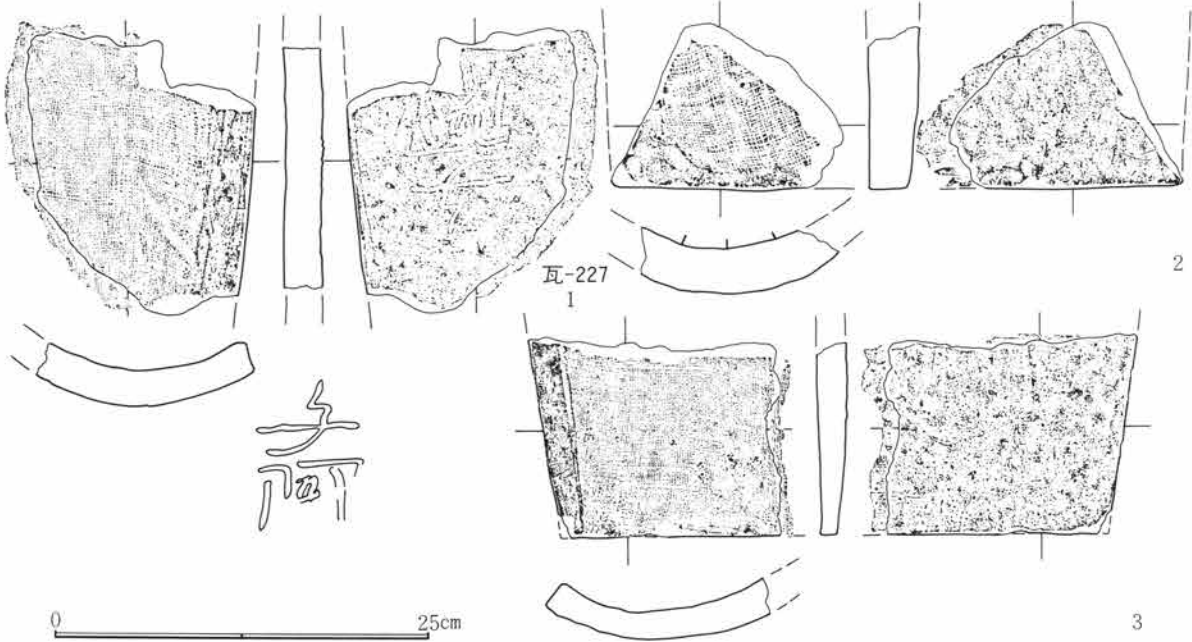
所見 当住居は113住・150住に切られている。この他にも重複が認められる住居はあるが、新旧関係は検証出来なかった。この為住居の遺存は非常に悪い。住居は北東隅部と東壁の部分及びカマドが残存するのみである。このことから住居形状等の詳細に就いては殆ど不明である。カマドは規模に対して燃烧空間が広い傾向が看取出来る。補強材等は認められなかった遺物の出土がやや多い。住居の廃棄時期は、出土遺物から

9世紀後半と考えられる。



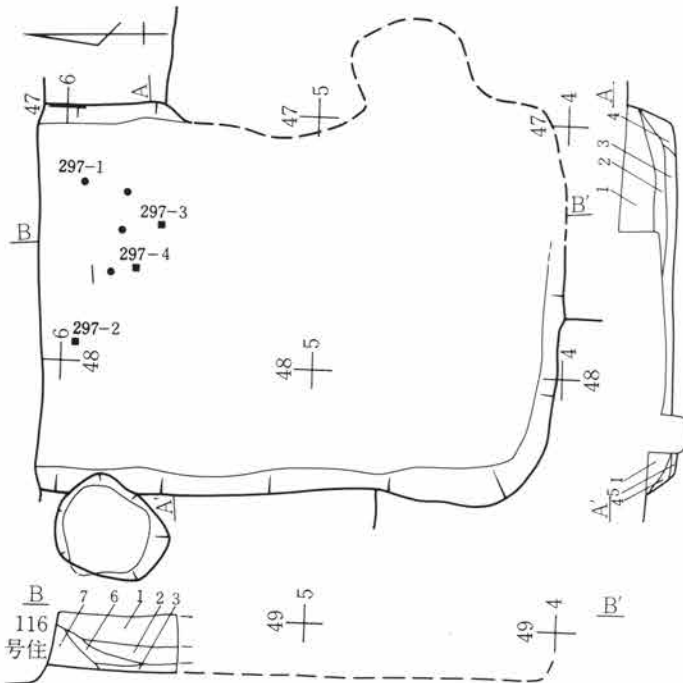
★は調査後の欠損をあらわす。

第294図 C区第146号住居跡・出土遺物実測図(1)



第295図 C区第146号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	C区第148号住居跡	位置	4~6-C-46~48グリッド内。	残存深度	約46cm
平面形態	横長方形。	規模	3.08m×4.20+αm	構築基準辺	西壁か
壁	斜位気味に立ち上がる。	床面	平坦。地山Ⅶ層土を使用し造床は認められない。	主軸方位	北-90度-南位か
C97号住・トレンチの破壊により詳細不詳。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。		

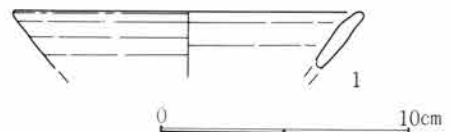


層序 (C148住)

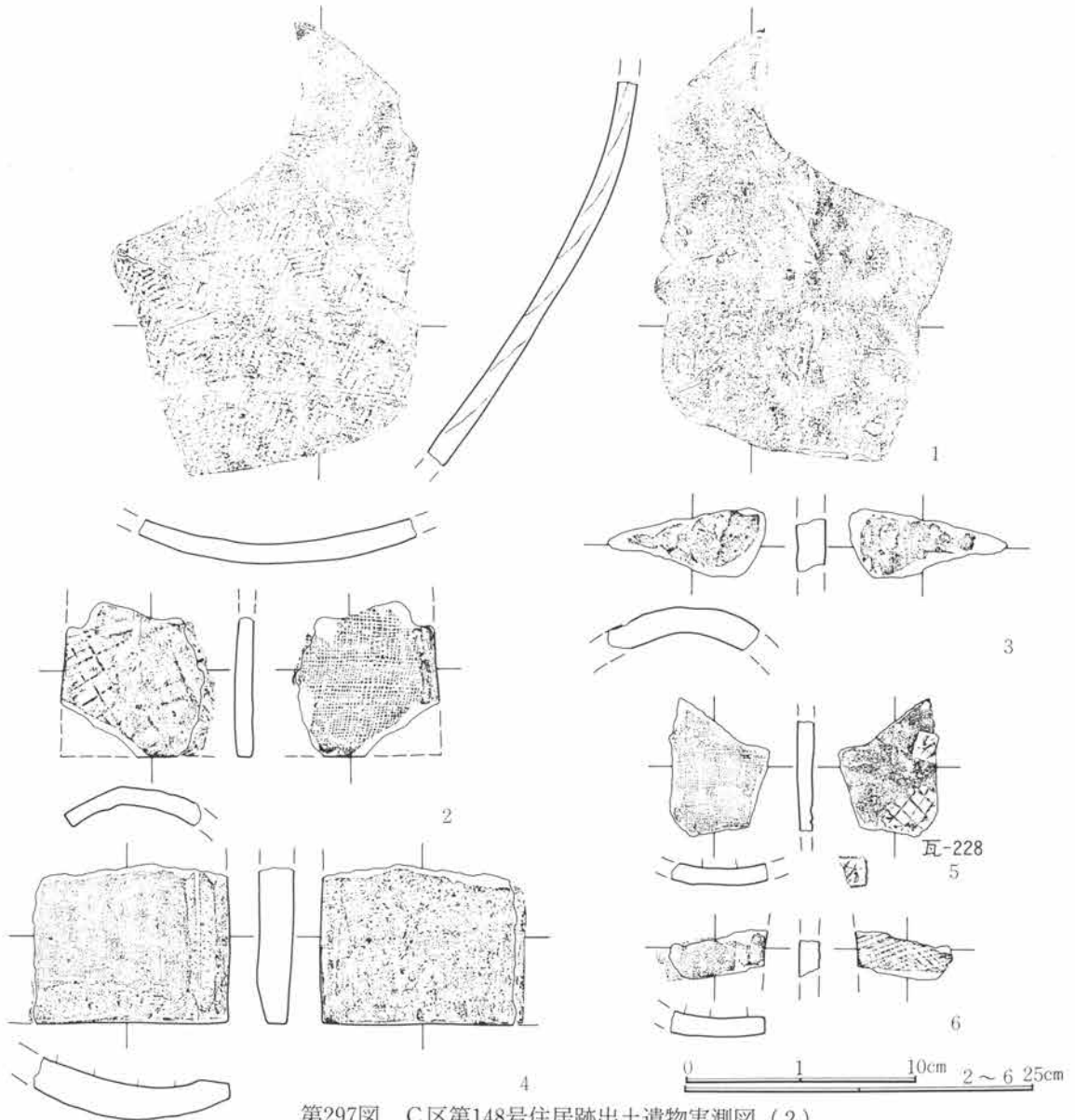
1. 粗粒状C軽石多量。
2. 粗粒状C軽石混入・粒状炭化物・粒状炭化物含有。
3. 粒状C軽石若干。
4. 細粒状C軽石含有。
5. 微粒状C軽石微量。
6. 4近質。
7. 粗粒状C軽石混入。

0 L=126.80 2m

所見 当住居は114住を切り構築し、97住に南東部で切られカマドを失っている。住居は東壁にカマドを備えたかと推定され、97住の掘り方に若干の被熱部が認められた。この被熱部をカマドの位置と判断し図上の推定線で示した。又、試掘調査時のトレンチによる破壊も顕著であることから、住居の遺存は甚だ悪い。このカマド推定位置からの住居形状はDの住居分類の第Ⅲ段階に対比され、当住居と重複する115住より新しい様相として考えられる。出土遺物は非常に少なく瓦類が若干有り土器類は微量であった。これらのことから、当住居は、推定形状から10世紀中頃以降と考えられる。



第296図 C区第148号住居跡・出土遺物実測図(1)

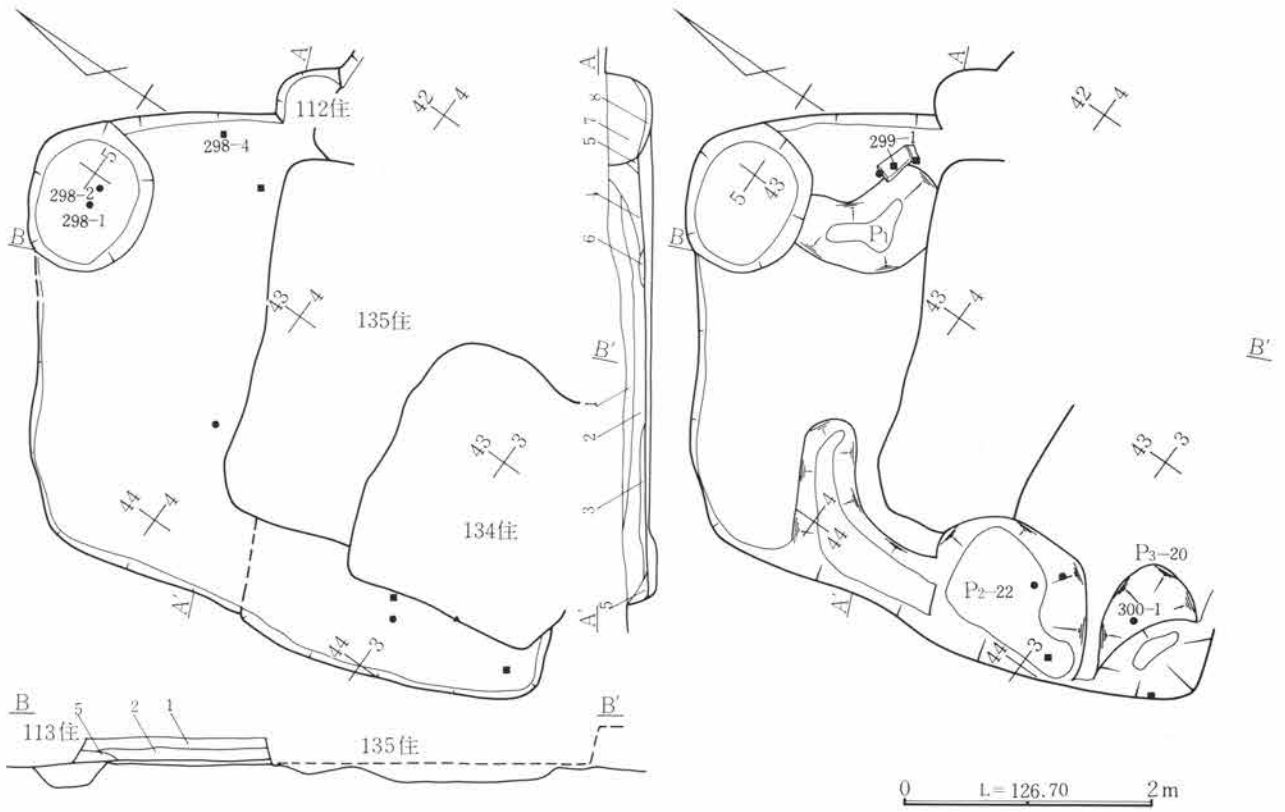


第297図 C区第148号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	C区第150号住居跡	位置	3～5-C-42～44グリッド内。			残存深度	約28cm
平面形態	不分明。	規模	3.92m×1.86+αm	構築基準辺	北壁か	主軸方位	北-58度-南
壁	C103・134・135号住の破壊により詳細不詳。						
遺構名称	C区第151号住居跡	位置	2・3-C-43グリッド内。			残存深度	約20cm
	C134・135・150号住の破壊により詳細不詳。						

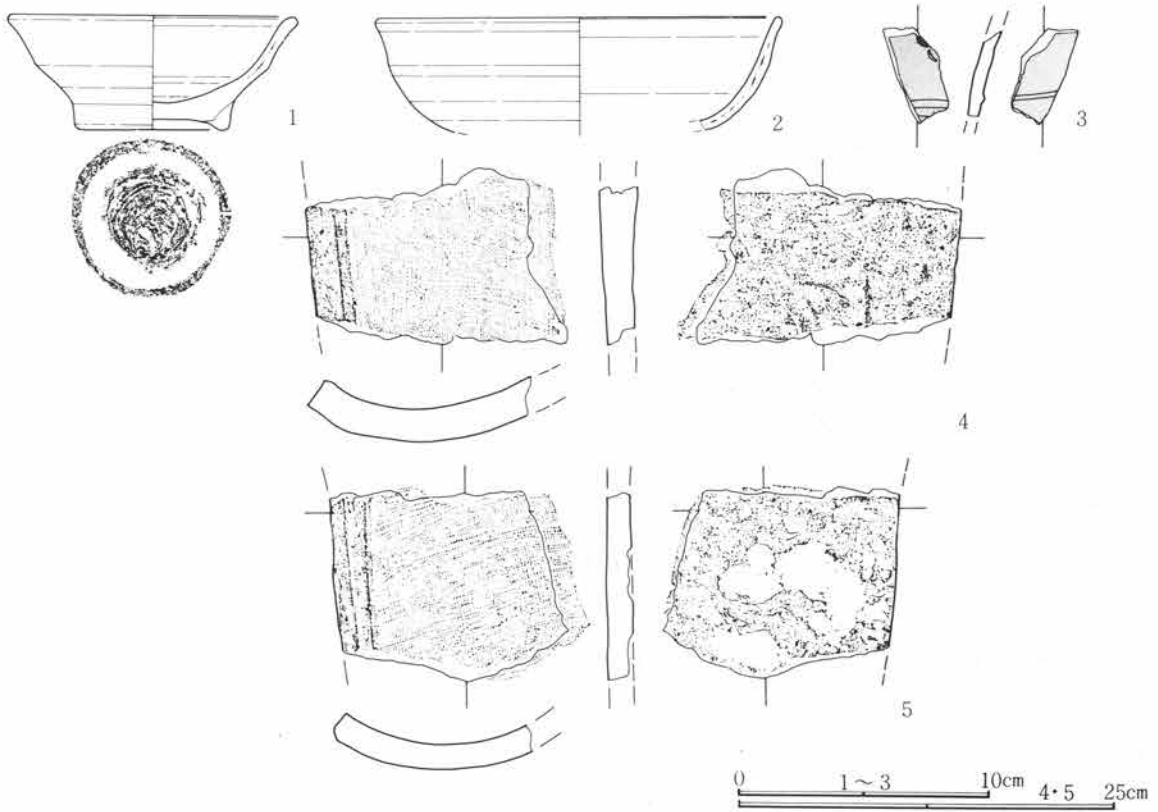
所見 (112住) 当住居は北東隅部の極部分的な検出で、詳細はおろか概要も不明である。

所見 (150住・151住) この兩住居は134住・135住・103住に切られ大半を失ないカマドの確認出来なかった。住居は、確認時に西壁が著しく段を有する如く切り合い状態として認められることより2軒扱いとした。然、調査段階では明瞭な床面や立ち上がりも認められなかった。この状況から、1軒とも考えられたが、確認時の状況を考慮し、1応2軒扱いとした。又、151住の部分は135住・134住の一部とも思われたが、掘り方面では兩住居の立ち上がりが認められていた一応上述のとおりとした。時期は兩者共10世紀代と思われる。

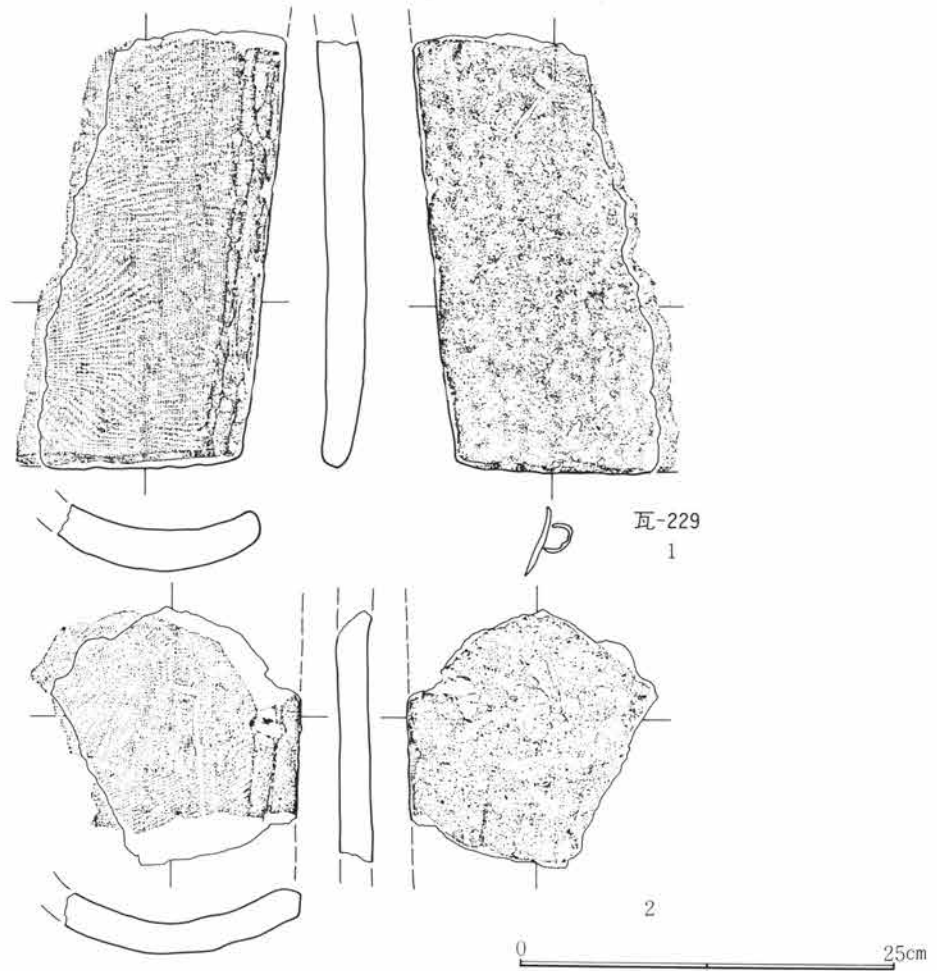


層序 (C150・151住)

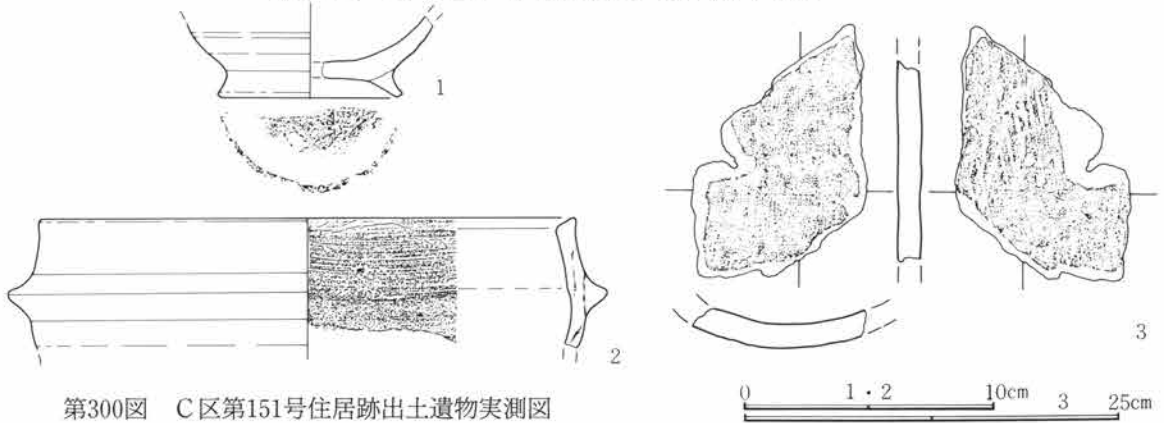
1. 粒状C軽石多量。2. 粒状C軽石含有。3. 細粒状C軽石微量・粒状焼土少量。4. 細粒状C軽石混入・粒状焼土含有。5. 微粒状C軽石微量・塊状VII層土若干・粗粒状VII層土若干。6. 塊状VII層土。7. 粒状C軽石混入。8. 粒状C軽石若干。(7・8層112住覆土)



第298図 C区第150・151号住居跡・第150号住居跡出土遺物実測図(1)



第299図 C区第150号住居跡出土遺物実測図(2)



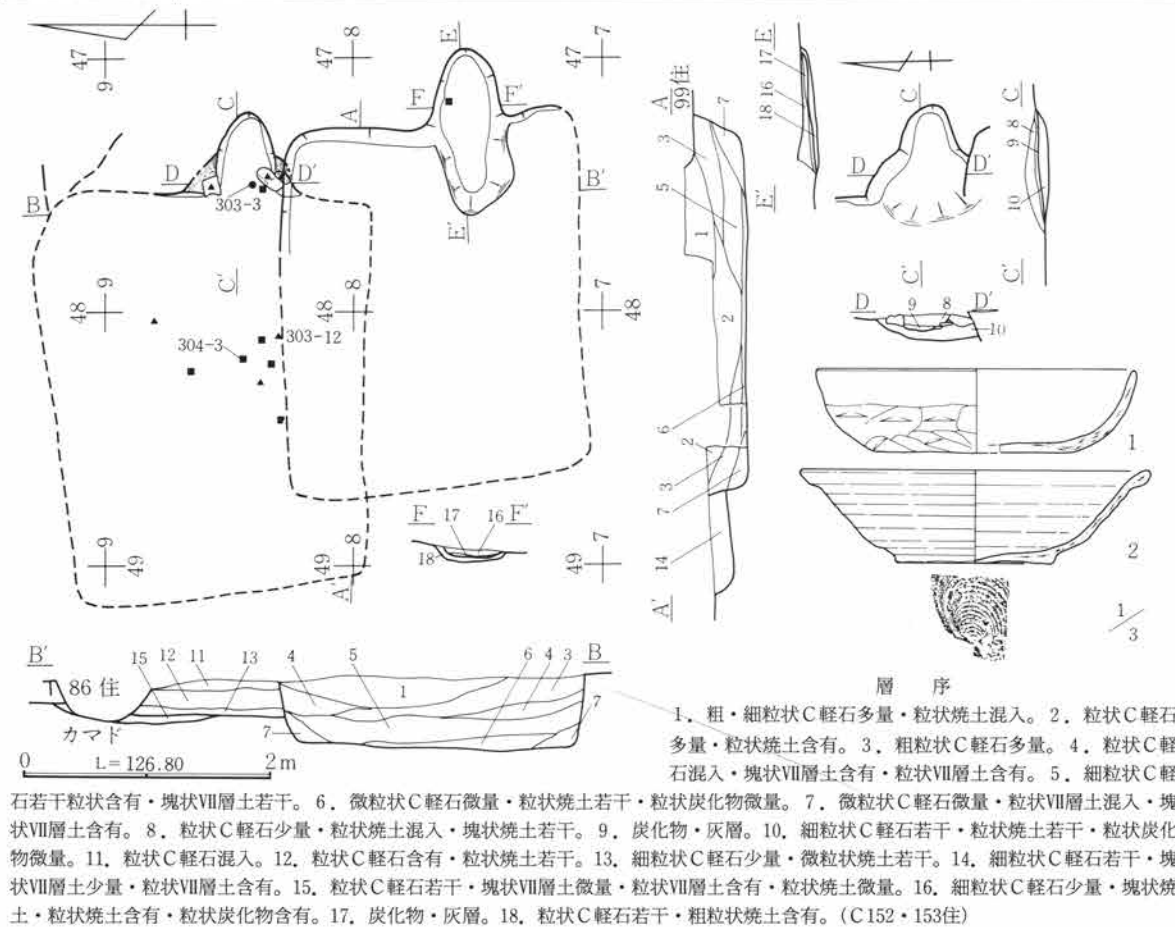
第300図 C区第151号住居跡出土遺物実測図

所見(152住) 当住居は153住・144住・117住を切り構築し、86住・116住に切られている。又、試掘時のトレンチにより破壊され、住居の重複関係が非常に著しかったことなど、調査の不利もあり住居の遺存は非常に悪く、同様に153住も遺存が非常に悪い。住居は土層観察断面より縦長形状であることが確認されたが、詳細は不明で、傍竈坑の存否自体も不明である。出土遺物も非常に少なく時期は限定出来ない。

所見(153住) 当住居も上述如く遺存が非常に悪い。住居は縦長形状であることが土層観察断面で確認出来た。カマドは東壁に具備し、左右両袖は礫による袖補強されている。傍竈坑は152住に切られる為末確認であった。出土遺物は少量出土したが、重複が顕著なことから帰属に問題もある。9世紀代の住居と思われる。

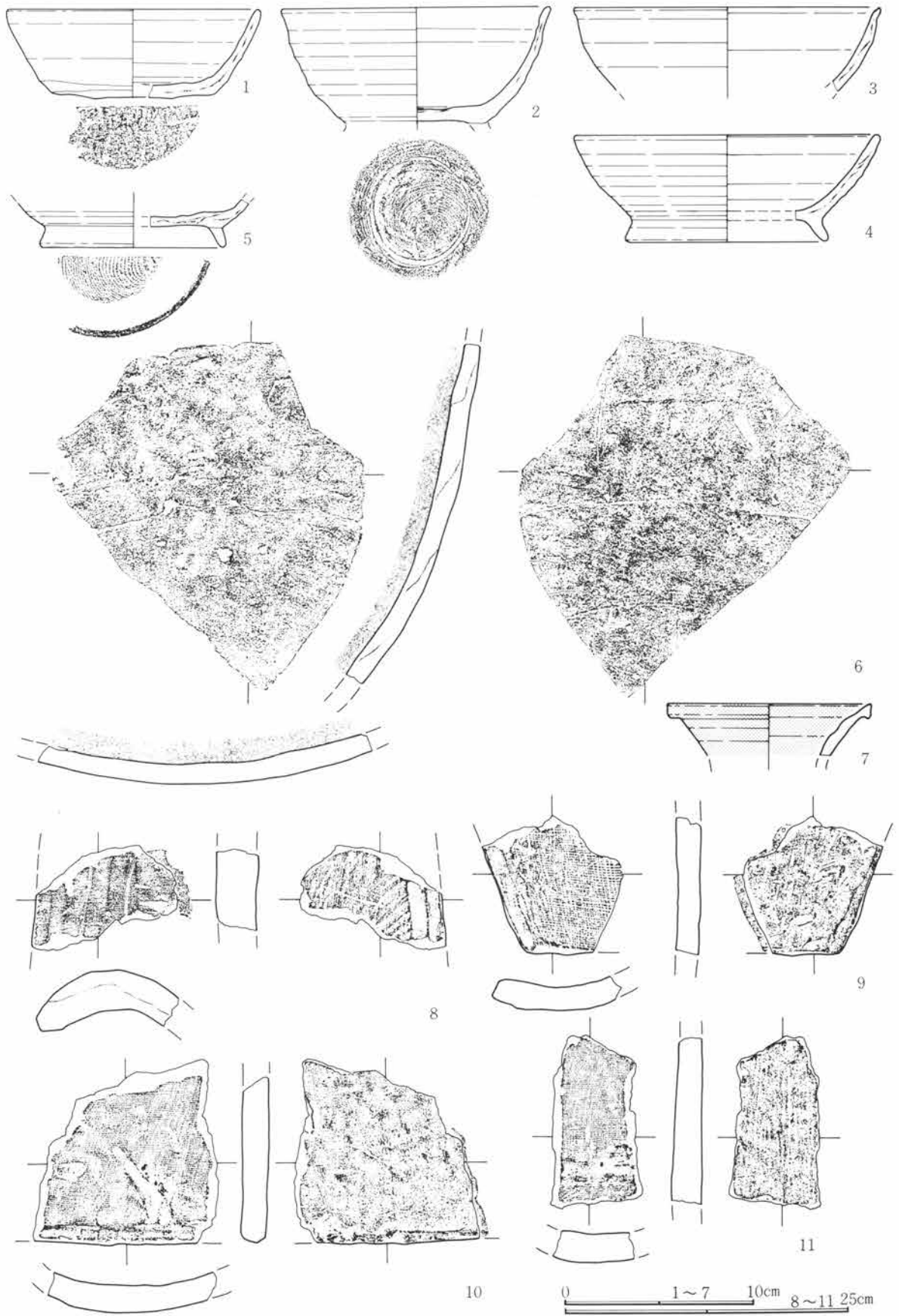
遺構名称	C区第152号住居跡		位置	7・8—C—46~48グリッド内。		残存深度	約47cm
平面形態	縦長方形。	規模	2.9m×2.38m	構築基準辺	不明	主軸方位	北-90度-南位か
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	平坦。造床は住居の切り合いが著しいため不明。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居の切り合いが著しいため、精査自体実施しても不明に終る。						
掘り方	不明。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から30cm位。遺存不良なため詳細不明。			主軸方位	北-90度-南	
遺物出土状態	詳細不明。						

遺構名称	C区第153号住居跡		位置	7~9—C—47~49グリッド内。		残存深度	約28cm
平面形態	縦長方形。	規模	3.20m×2.7?m	構築基準辺	不明	主軸方位	北-90度-南位か
壁	詳細不明。		床面	平坦。北東隅部で認められたが、詳細不明。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居の切り合いが著しいため、平面精査を実施しても不明に終る。						
掘り方	北東隅部で認められたが、平面検出は不能であった。						
カマド	位置	東壁。遺存不良なため詳細不明。			主軸方位	北-90度-南	
遺物出土状態	中央部で覆土内から瓦・礫が出土している。						

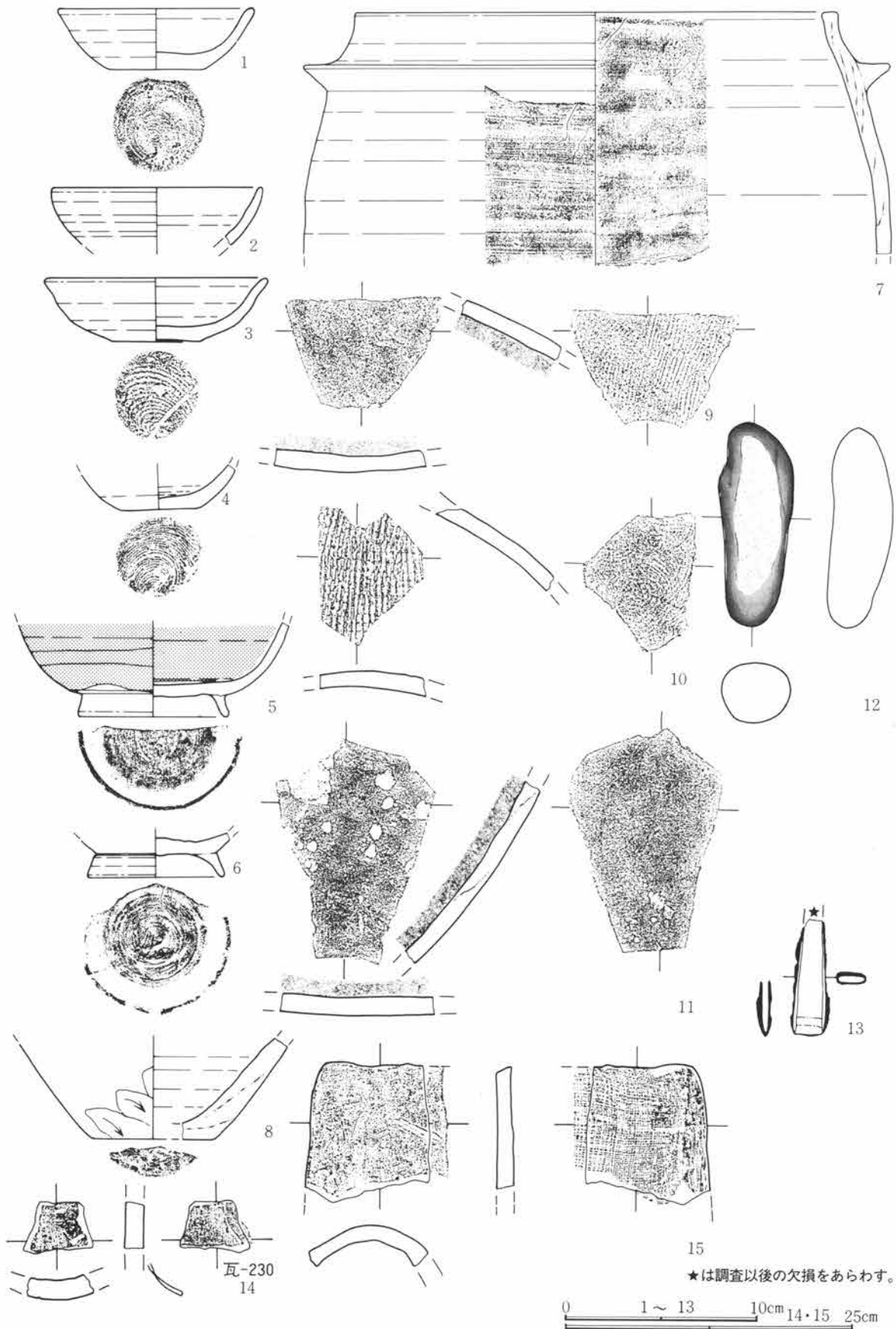


第301図 C区第152・153号住居跡・第152号住居跡出土遺物実測図(1)

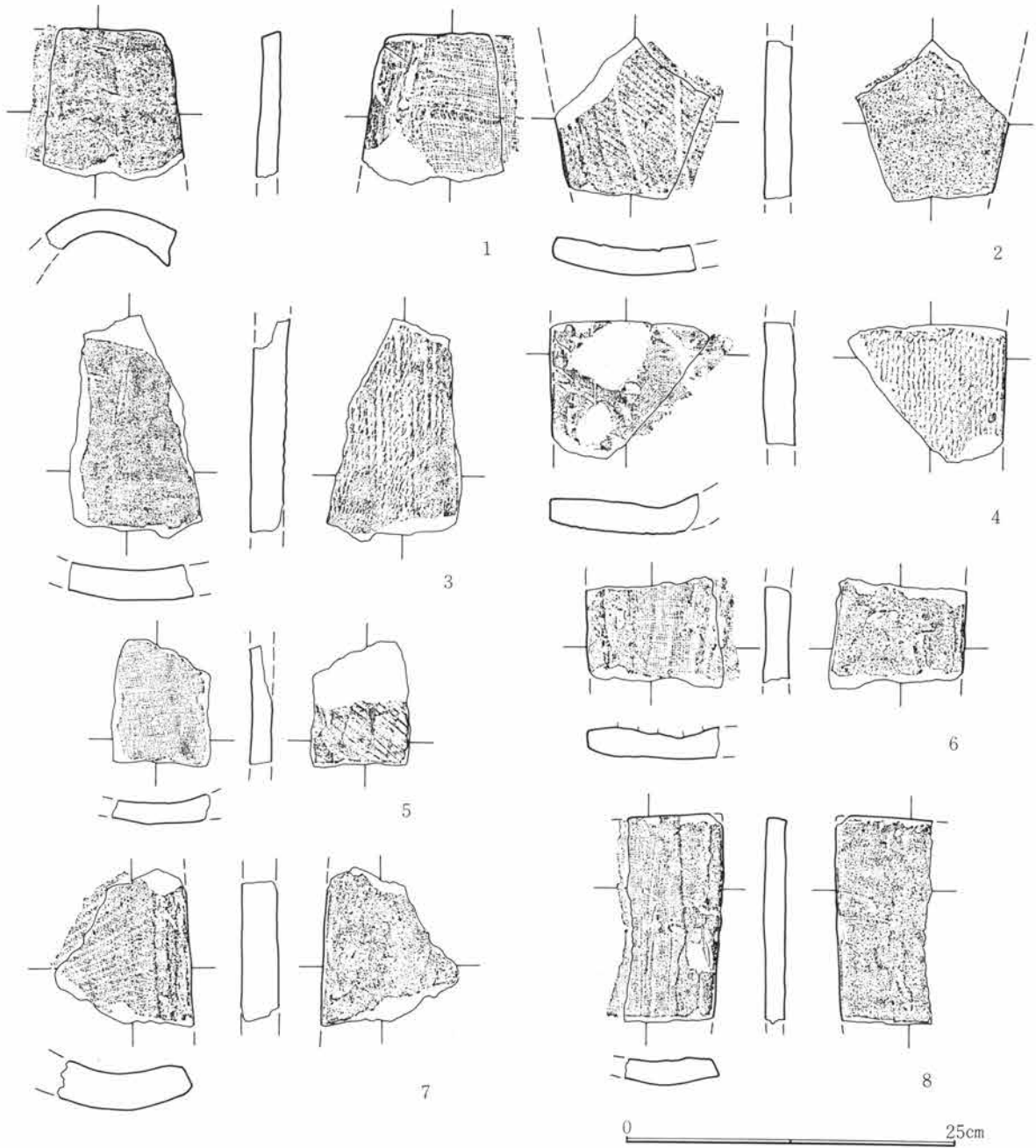
第4章 検出された遺構・遺物



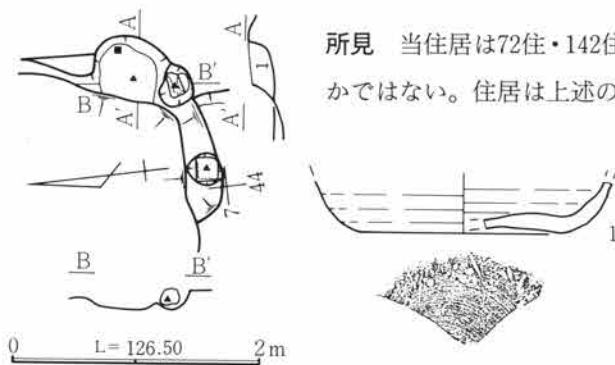
第302図 C区第152号住居跡出土遺物実測図(2)



第303図 C区第153号住居跡出土遺物実測図(1)



第304図 C区第153号住居跡出土遺物実測図(2)

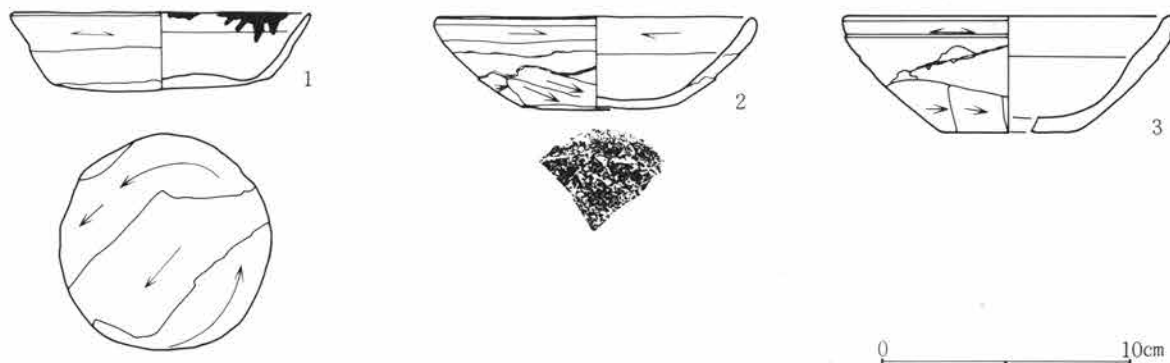


第305図 C区第154号住居跡・出土遺物実測図

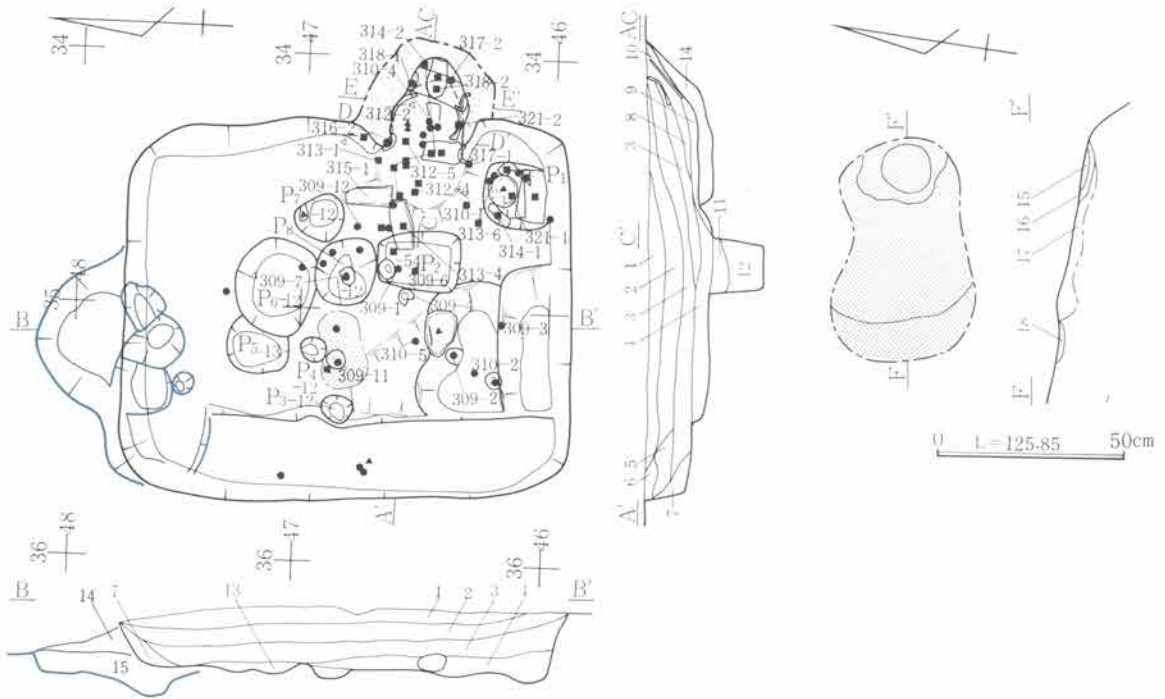
所見 当住居は72住・142住に確実に切られるが、140住・136住との関係は明らかではない。住居は上述の2軒の住居により大半が破壊消滅しておりカマドが痕跡程度に検出されたのみである。カマドは地山砂岩質の削り出し材を右壁側に2ヶ所据えているが、袖か燃焼部かの判断は出来かねるが、図中奥側は恐らく燃焼部右奥には相当すると思われる。又、住居内のカマドの位置も不明である。出土遺物は2点有り細片であった。

遺構名称	B区第1号住居跡		位置	45~47-B-33~35グリッド内。		残存深度	約50cm	
平面形態	横長方形(矩形)	規模	3.0m×3.60m	構築基準辺	西乃至南壁	主軸方位	北-88度-南	
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	鍛冶に伴なう土坑状の施設により凹凸がある。				
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P ₁ 。隅丸方形。50×40cm・深度-22cm				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	掘り方と生活面が判然としない部分がある。							
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から55cm。			主軸方位	北-99度-南		
改築	有。場所自体を北壁から東壁に移設。			形状	舌状。(瓦を多用する)			
規模	全長 83cm・屋外長 50cm・屋内長 33cm・袖部幅113cm・燃烧部幅 57cm。							
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。壁体は瓦を用いる。							
	袖	男瓦を左右各々1枚(完形)づつ用いている。						
煙道	男を用いているが、元位置ではない。			掘り方	瓦の据方が明確に認められる。			
遺物出土状態	底面(床面)での完形品の出土が多く、瓦自体ほぼ完形に近いものも含め12枚出土。							

所見 当住居は住居の切り合いが無い単独住居である。住居は北壁・東壁に各々1基づつかマドを備えるが、併存ではなく、北壁カマドは構築当初のもので、東壁カマドは移設後のものである。更に両者の使用時の床面は異なっており、前者段階ではほぼ掘り方面と同様であり、移設後は貼り床を施している。則、住居には2時期に分別される。便宜上古期・新时期とした。古期の床面では、中央やや西壁寄りに還元焰～酸化焰による被熱部が瓢形状に検出されている。又、大小7ヶ所に土坑状の掘り込みが認められた。(P₂~P₈)。これらの内でP₂は平面形状が長形状で壁の四隅は鋭い稜を有している。又、深度ではP₂が最深で床面下54cm程に底面があり覆土最下層は微粒土の堆積がありそれを埋める状態で12層土の堆積が認められた。この状況はP₂が使用時には水が滲えられていたことが考えられる。西壁下にはベット状の平坦面が認められたが、中央全体が掘り込まれていることに起因し、ここに中央部と画する何らかの意義があると考えられる。更に南西隅部には掘り込みが認められる。出土遺物では、スラグ・羽口等が特筆出来る。この古期段階のカマドは、前述した様に北壁に付設しているが、推定される時期の住居としては唯一例で違例な住居である。この北壁にカマドを具備することは、上述した住居床面での状況に強く係わる所産と考えられる。特に西壁下のベット状の有り方や、炉床と考えられる被熱面、水を滲えたと考えられるP₂等の存在、更に、出土遺物中にスラグ・羽口等が認められることなどからも、特殊な状況下による所産と判断される。そして、この特殊状況とは、上述の内容から屋内小鍛冶であることが考えられる。このことは、住居内中央からやや南壁寄り新时期



第306図 B区第1号住居跡出土遺物実測図(1)

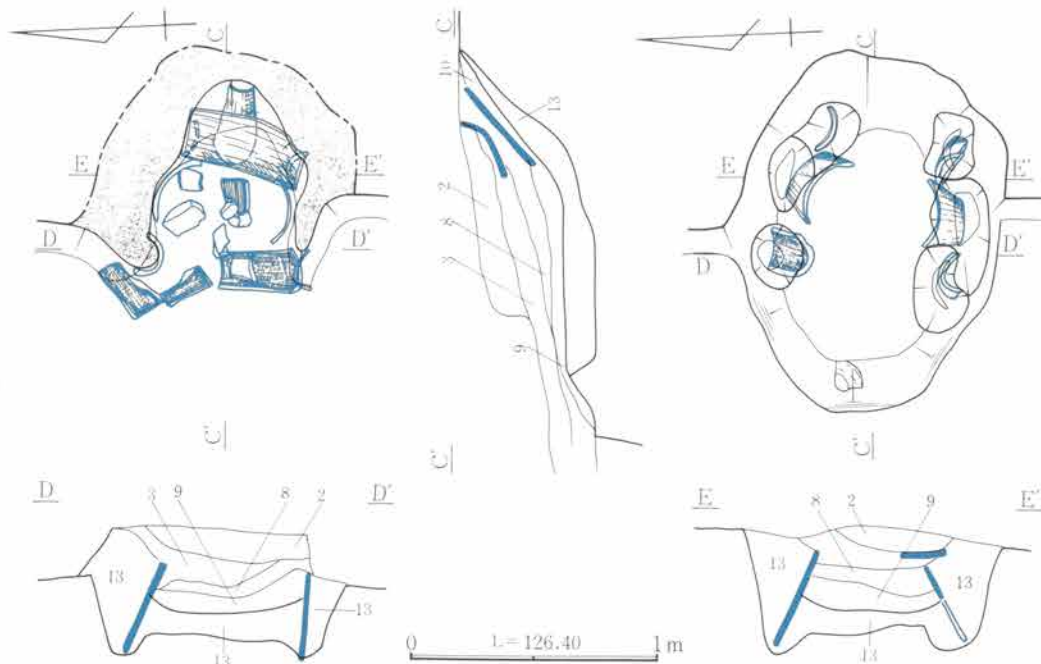


層序 (B1住)

1. 粒状C軽石多量・細粒状VII層土含有・粒状炭化物含有。
2. 粒状C軽石混入・粒状VII層土含有・粒状炭化物含有・粒状焼土少量。
3. 粒状C軽石多量・粒状炭化物混入。
4. 粒状C軽石混入・塊状・粒状VII層土混入・粗粒状・粒状炭化物多量(やや硬質)。
5. 塊状IV・VII層土。
6. 2近質。
7. 細粒状C軽石若干・塊状VII層土・粒状VII層土含有。
8. 細粒状C軽石少量・塊状焼土・粒状焼土混入・粒状炭化物若干。
9. 炭化物・灰層。
10. 微粒状C軽石微量・粗粒状焼土混入。
11. 細粒状C軽石含有・塊状VII層土混入。
12. 微粒状C軽石微量・灰・炭化物混入(弱粘性)。
13. 4近質。
14. 微粒状C軽石少量・粒状焼土含有・粒状炭化物若干。
15. 黑色硬質被熱塊状土層。
16. 濁赤褐色被熱土層。
17. 濁赤橙褐色土被熱土層。
18. 微粒状C軽石含有粘性黒褐色土層(若干被熱)。

0 L=126.40 2m

第307図 B区第1号住居跡実測図

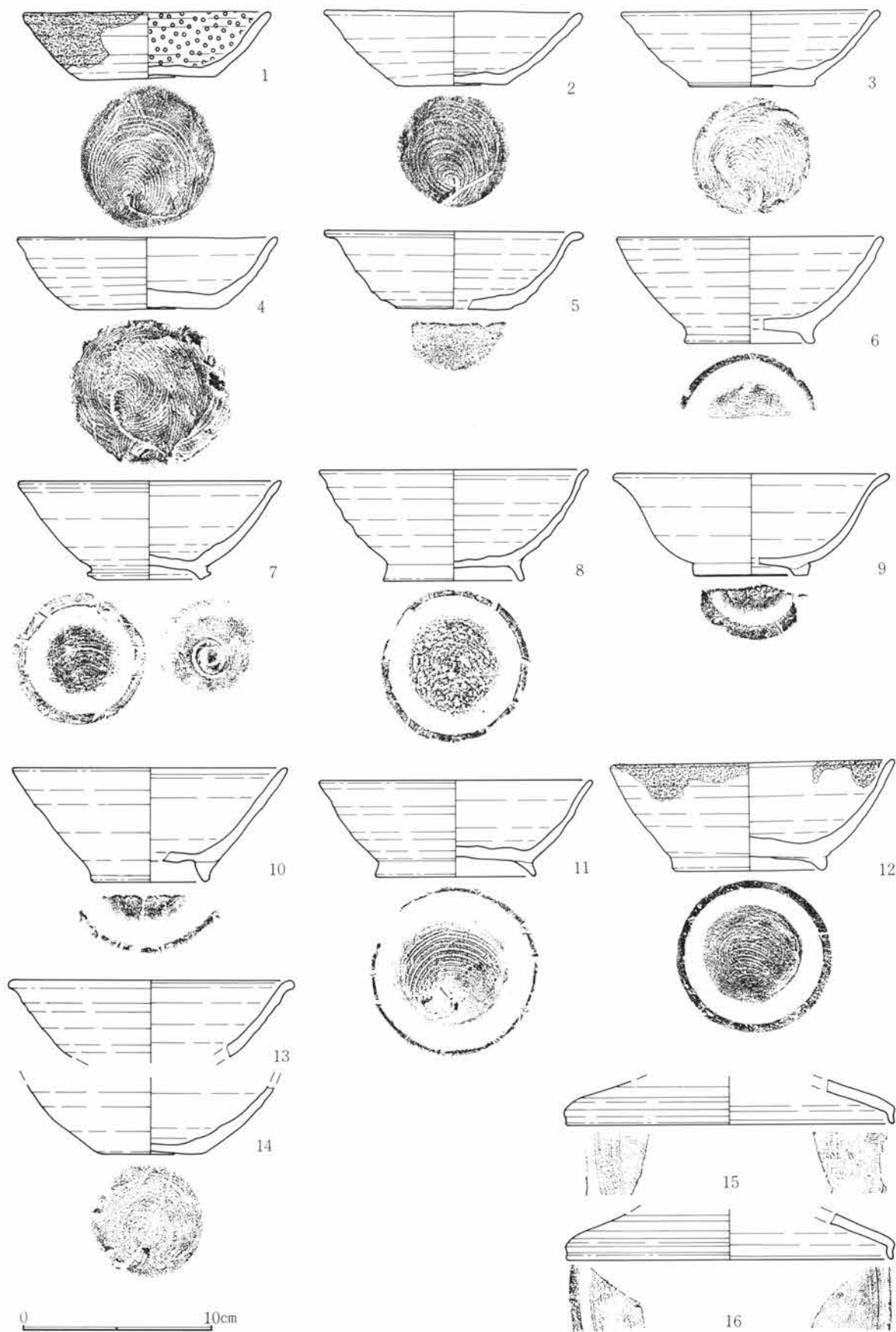


第308図 B区第1号住居跡カマド実測図

のカマドでは東壁中央より南東隅部寄りに付設されている。左右両袖・焚口・燃焼部・煙道には完形の男瓦・女瓦を用いた堅固な構造に作られている。この男瓦・女瓦の合計数は8枚である。この枚数は調査区全体からも最多数のカマドである。又、このカマド移設に伴ない傍竈坑の付設も考慮される。傍竈坑は南東隅部で南壁下で検出され、上面は完形の女瓦と偏平河原円礫を主体に蓋われた状態になっている。この状況から傍竈坑は開口状態ではなかったと判断される。出土遺物は上述の小鍛冶に係わる遺物と、カマド内の瓦が特筆される。カマド内出土に加えて住居内から4枚の完形品が出土しており、カマド内を含める合計数12枚となりこれ程の出土量が有った住居は、調査区全体の住居跡の中でも唯一突出している。このことは、当住居が小鍛冶であることと、印章型の如くの特製品の製作に係っている。このことからの特殊は要因に起因すると考えられるものの、同様に小鍛冶施設を具備する住居（B40住・G・住等）では、瓦を多量に出土するという事は無い。これらの点では、小鍛冶を伴う住居の本来の特殊性は、製作された製品にあると考えられ、その製品も極限された物が、製作するものを特定されうる状況、即、外的要因による規制である。この外的要因は、中間地域という立地状件（尼寺々地）から、製作された銅印は「官この為のもよであつはことが推量される。この「官」とは、具体的には「国分尼寺」と類推出来、これが元来の特殊状況であつて単に小鍛冶という状況ではないと考えられる。結論的に言えば、当住居（小鍛冶施設）は、国分尼寺に直接係わったことが推定される。住居の時期は、上述した様に長期間の使用が考えられることと、出土遺物にD区の第I段階以前の様相と第II段階の様相が認められ、住居形状も第I乃至II段階に対比されることから、当住居は9世紀中頃から10世前半頃の存続が考えられる。

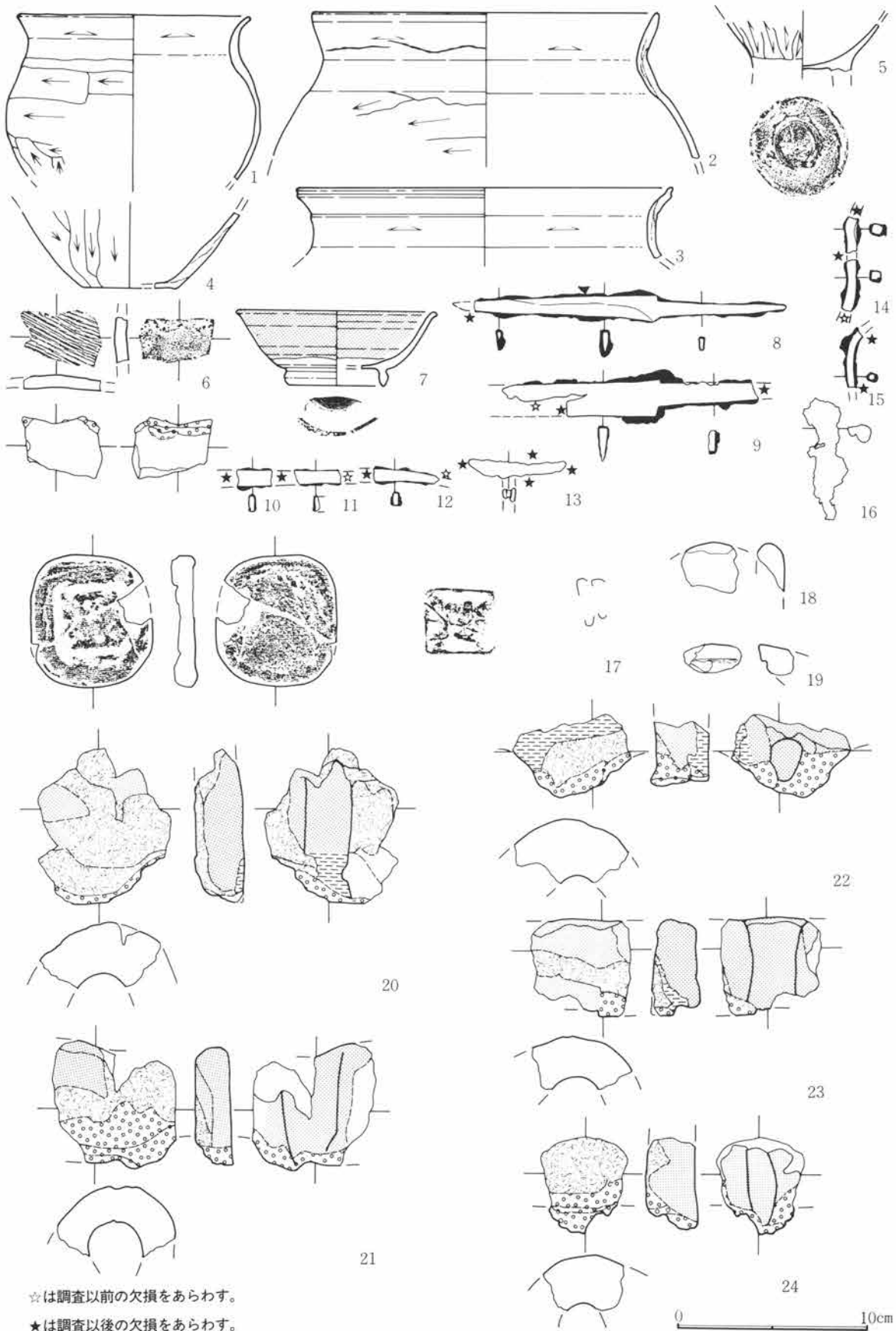
床面直上出土の礫（偏平河原石）は、表面が叩き等による傷・敲打痕が認められる。この事から、この礫は小鍛冶に伴う台石であることが考えられる。一方、前述した出土遺物以外で特筆出来るものに、銅印鑄型が上げられる。この銅印鑄型は3点出土しており、印面側のものが状態が良く他は鈕の部分の破片と考えられる。印面側の鑄型は極度に隅の丸い隅丸形状を呈し、シルト質の土を用いた土製である。この為、出土後の洗滌等による若干の磨滅もあるが、鑄出時に表面の剝落があり文字の判読は出来ず、更に、文字数に就いても判断出来ない様な状態である。（第5章第二節第1項特殊遺物を参照）この他の出土遺物で（特に古期に帰属すると限定されるものは少ない）、須恵器坏（第309図一1・11）の内外面がすすけており、特に1は鉄錆状になった鉄分の融着が顕著に認められることから取瓶と考えられる。この様に、小鍛冶を具体的に示す遺構（施設）・遺物から、確実な小鍛冶住居であることが判断され、当住居の古期の段階は、屋内小鍛冶の住居（施設乃至遺構）である。新期では、床面と考えられた面は確実には検出来なかった。然、住居の土層観察断面には、カマドの底面の延長上に床面と考えられる面が認められた。唯し、この床面状の面は、カマド底面の土面からであり、カマド底面の9層は古期小鍛冶施設の底面に流入する状態であることから、カマドの移設後も小鍛冶としての機態が移設後も備なわっていたことになる。又、一方では上述した様に新期カマド廃棄直前には小鍛冶施設を埋設した可能性を示すのが床状の存在である。このことから、この新期の段階は更に前後の小段階に分別される。このことは、当住居（施設乃至遺構）は、3段階の小時期の設定がなされる。古・新期の当住居の構造上の変化は、上述の小鍛冶施設の埋設により大きな変化を遂げるが、カマドの移構造・傍竈坑等の細部での変化も窺える。古期のカマドは土層観察断面から破壊したと考えられ詳細は不明であるが、袖部乃至燃焼部焚口寄りの部分に補強材の据え方と考えられる掘り込みが認められる。

第4章 検出された遺構・遺物

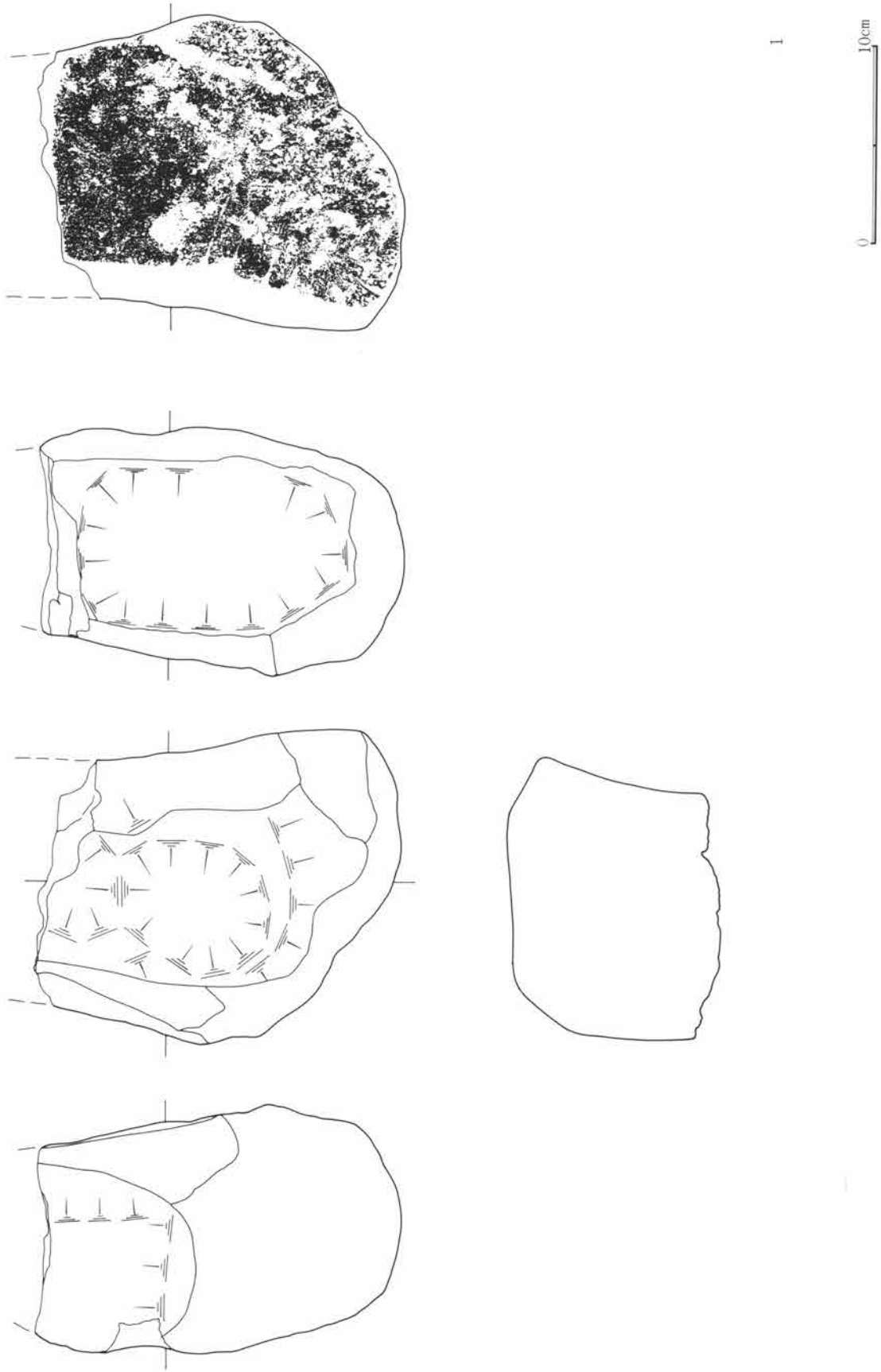


第309図 B区第1号住居跡出土遺物実測図(2)

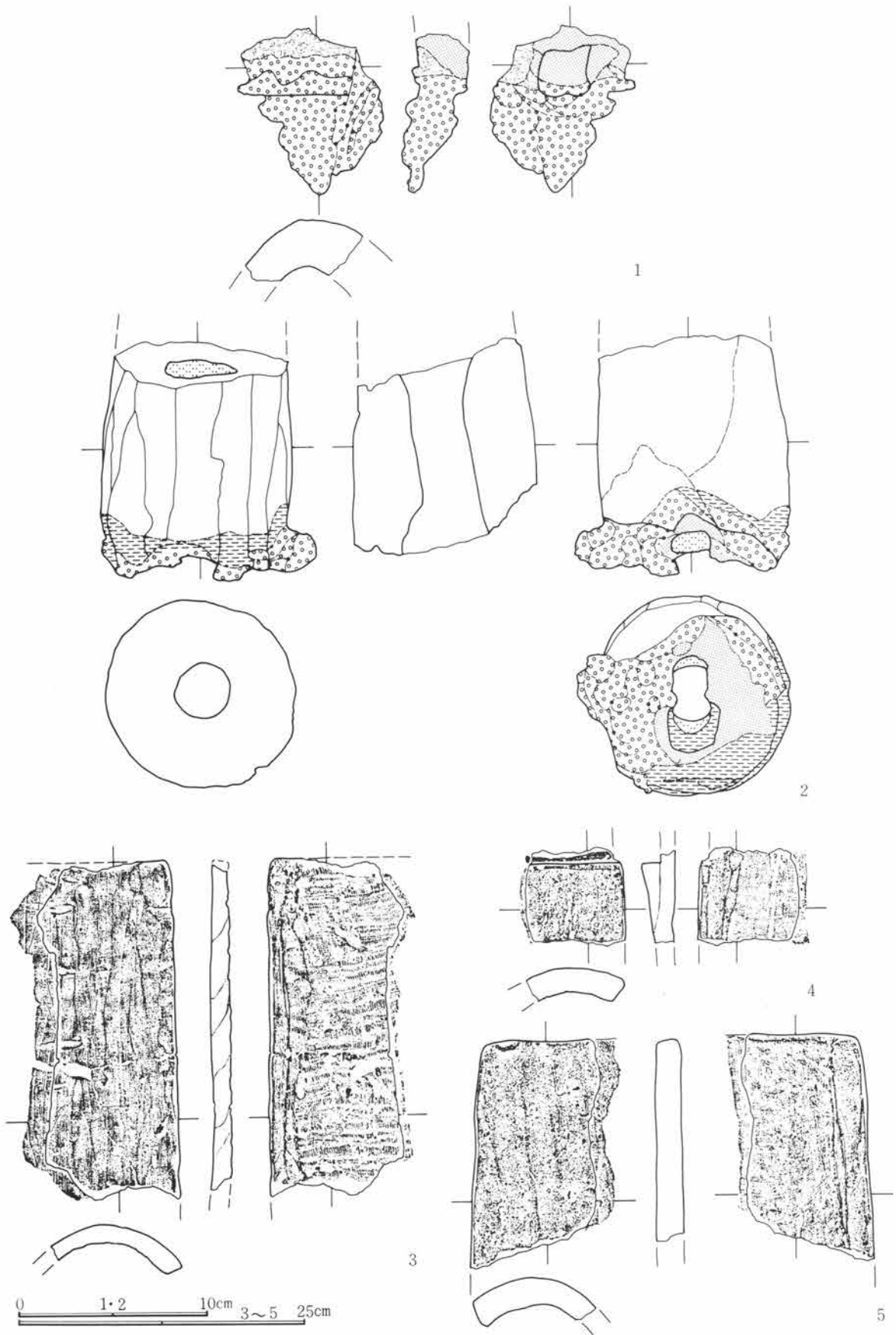
第1節 南側調査区



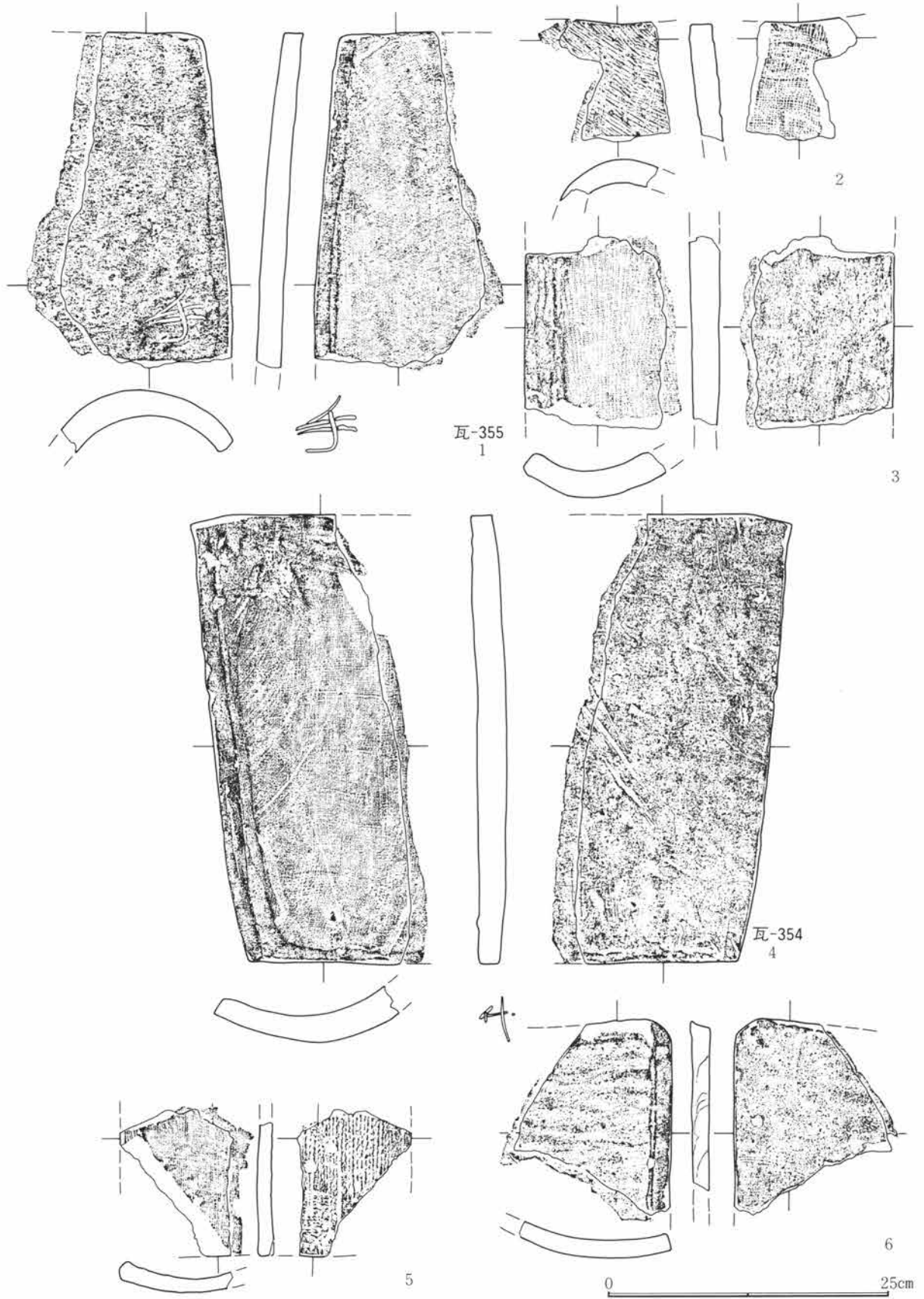
第310図 B区第1号住居跡出土遺物実測図(3)



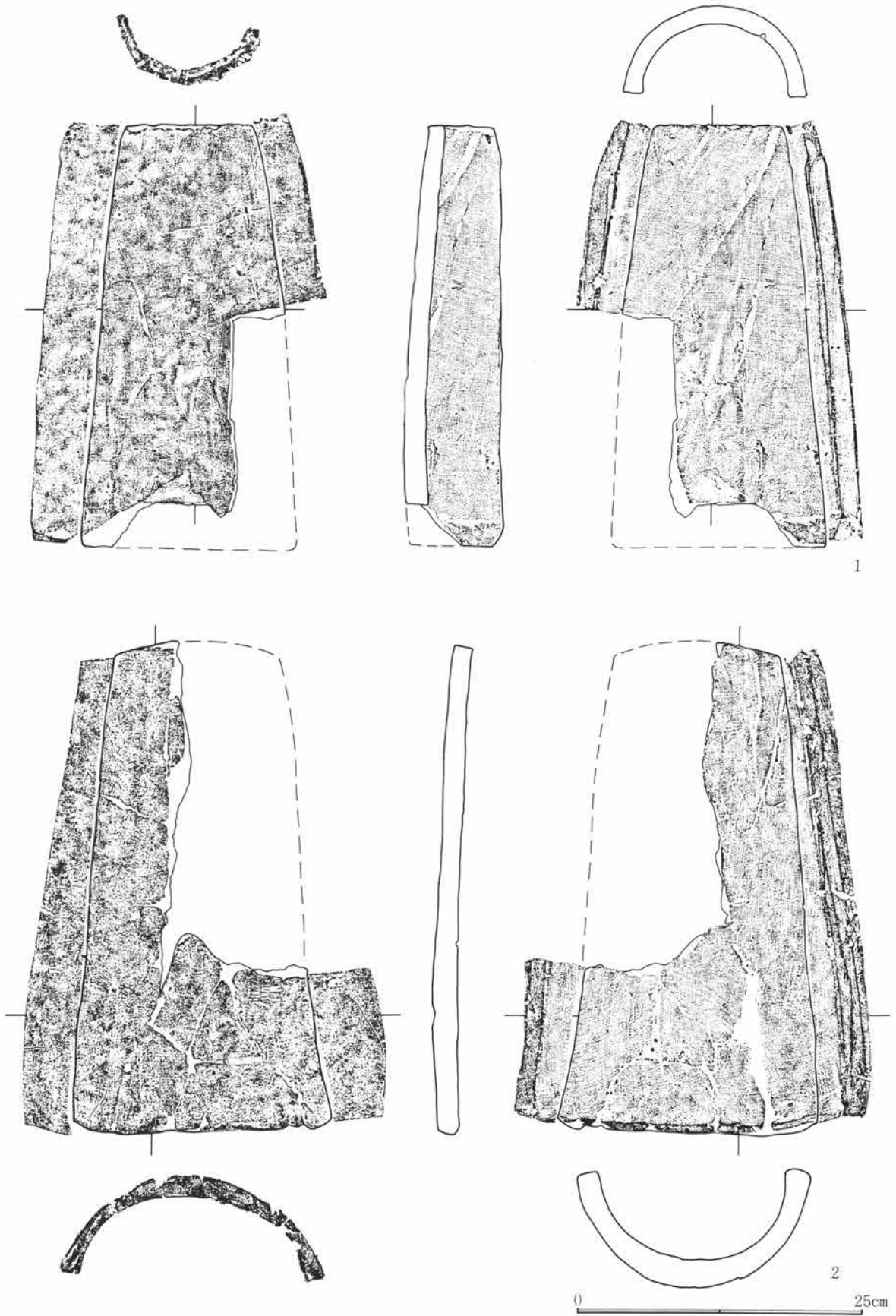
第311図 B区第1号住居跡出土遺物実測図(4)



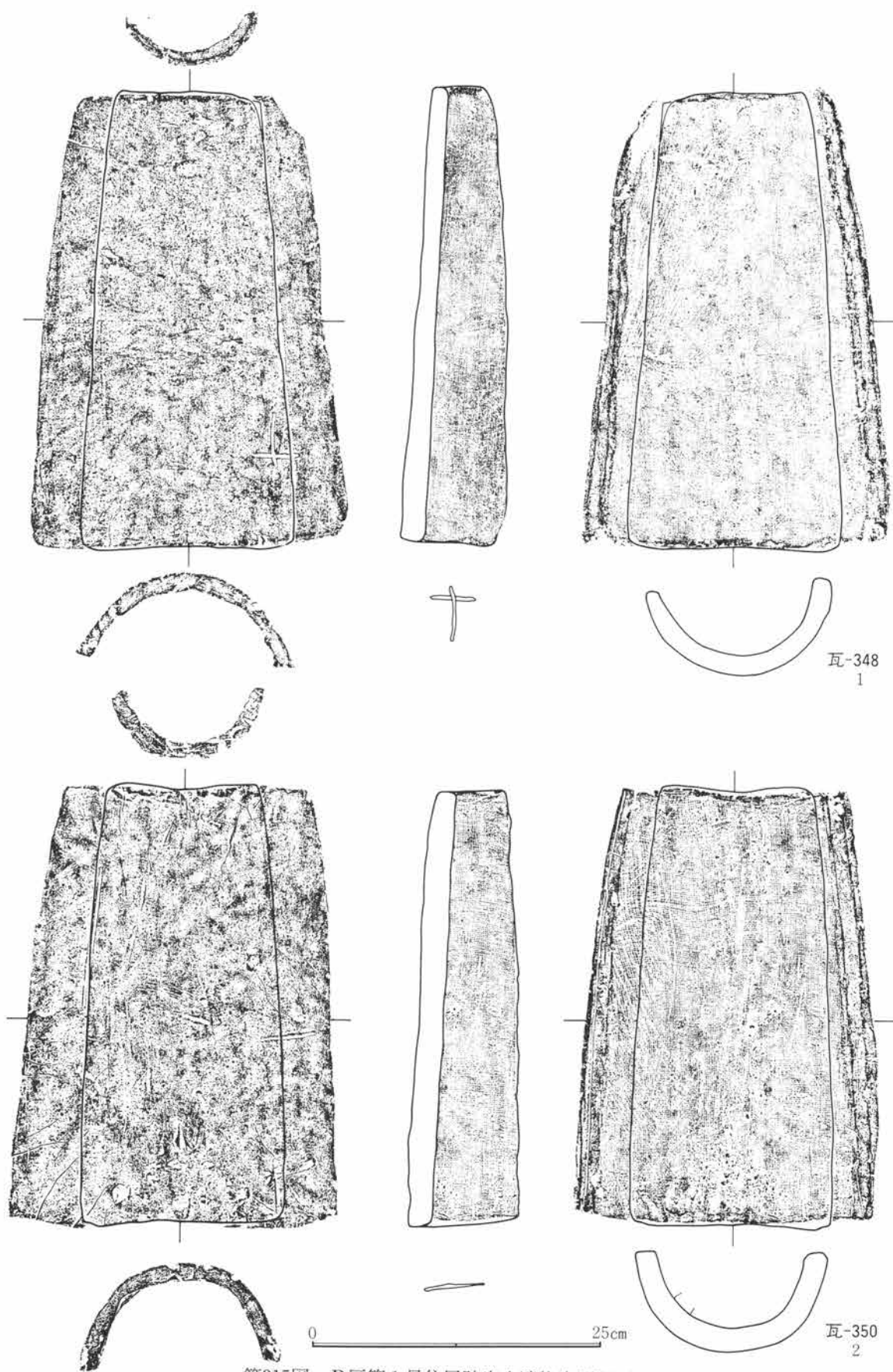
第312図 B区第1号住居跡出土遺物実測図(5)



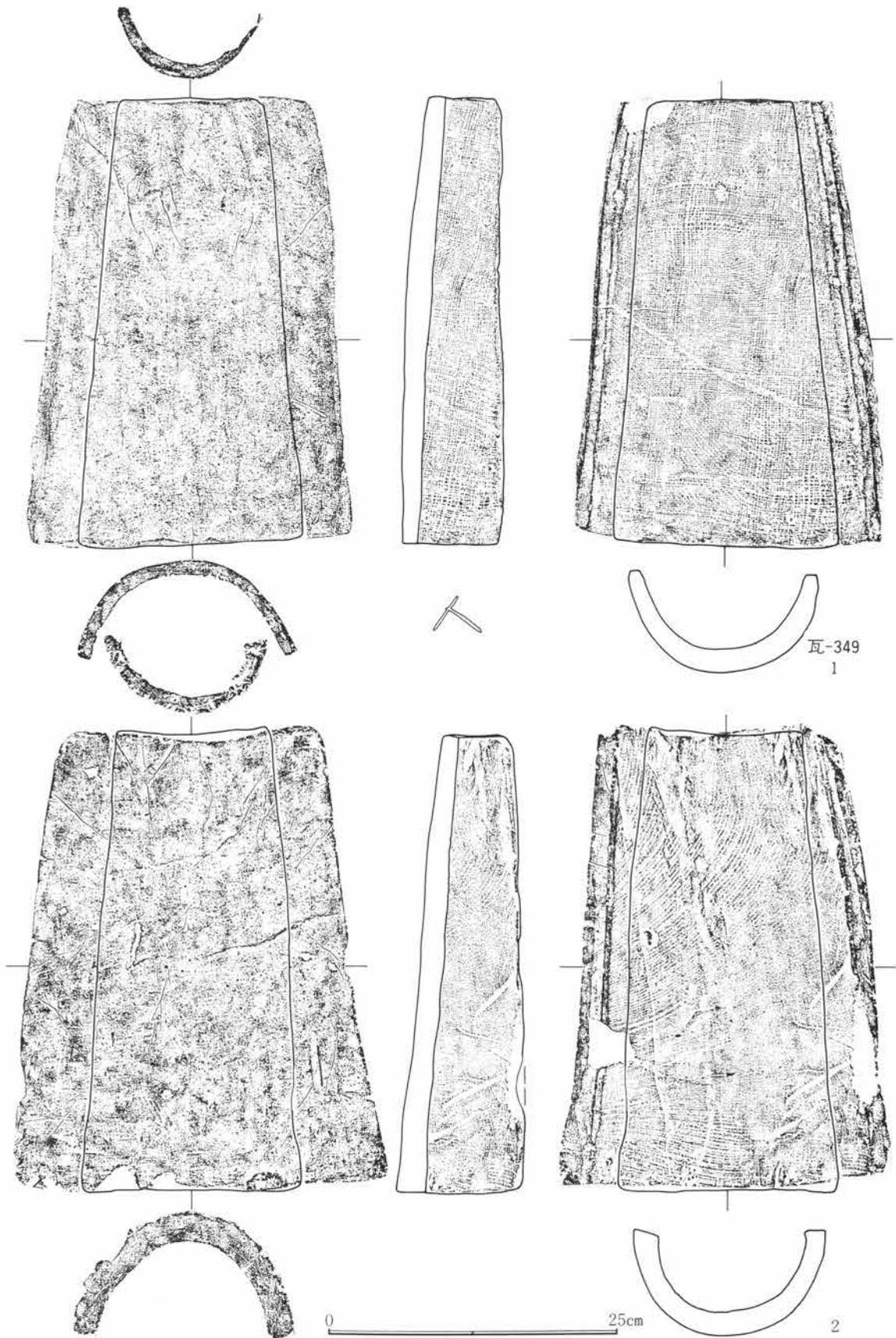
第313図 B区第1号住居跡出土遺物実測図(6)



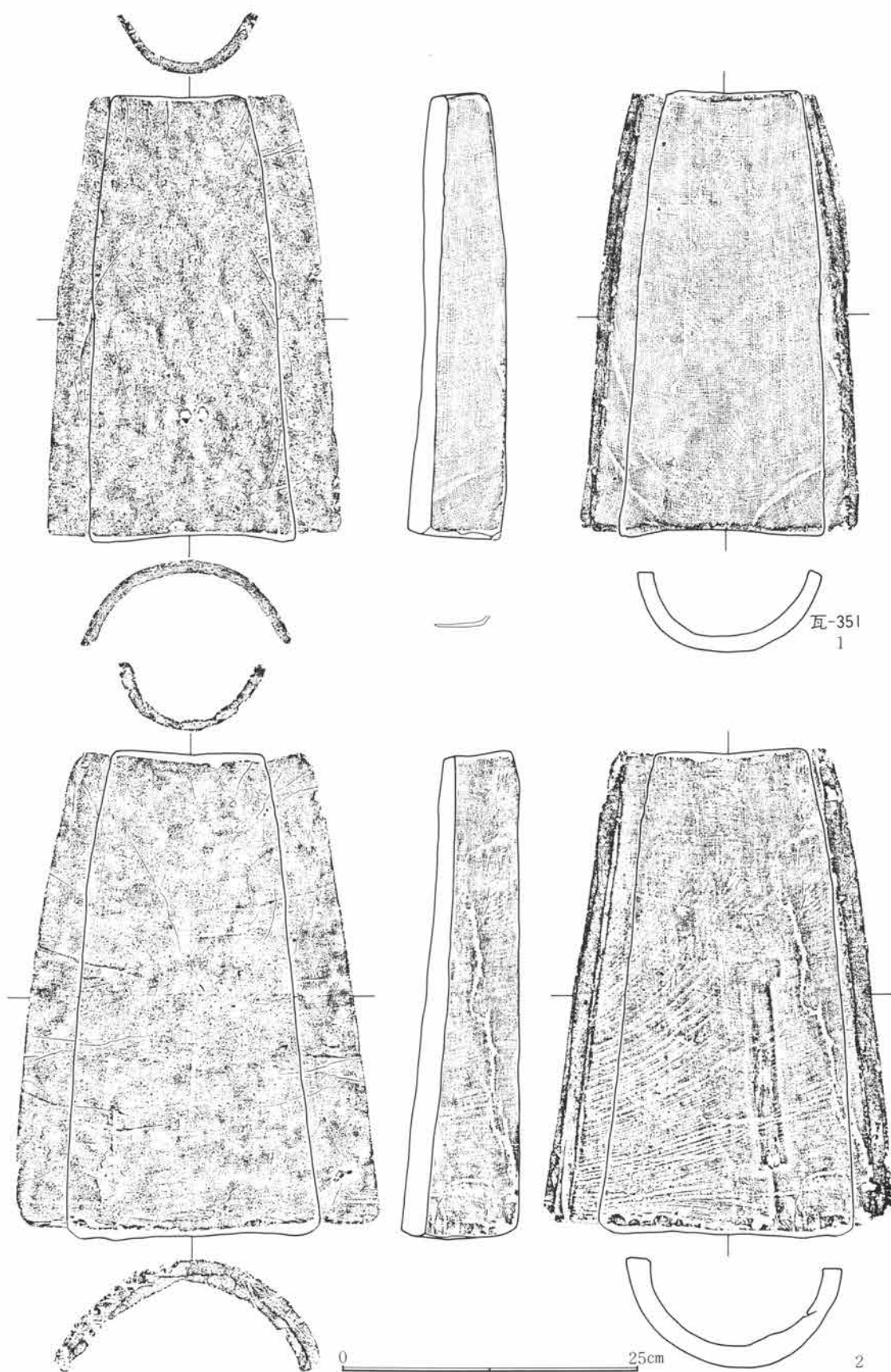
第314図 B区第1号住居跡出土遺物実測図(7)



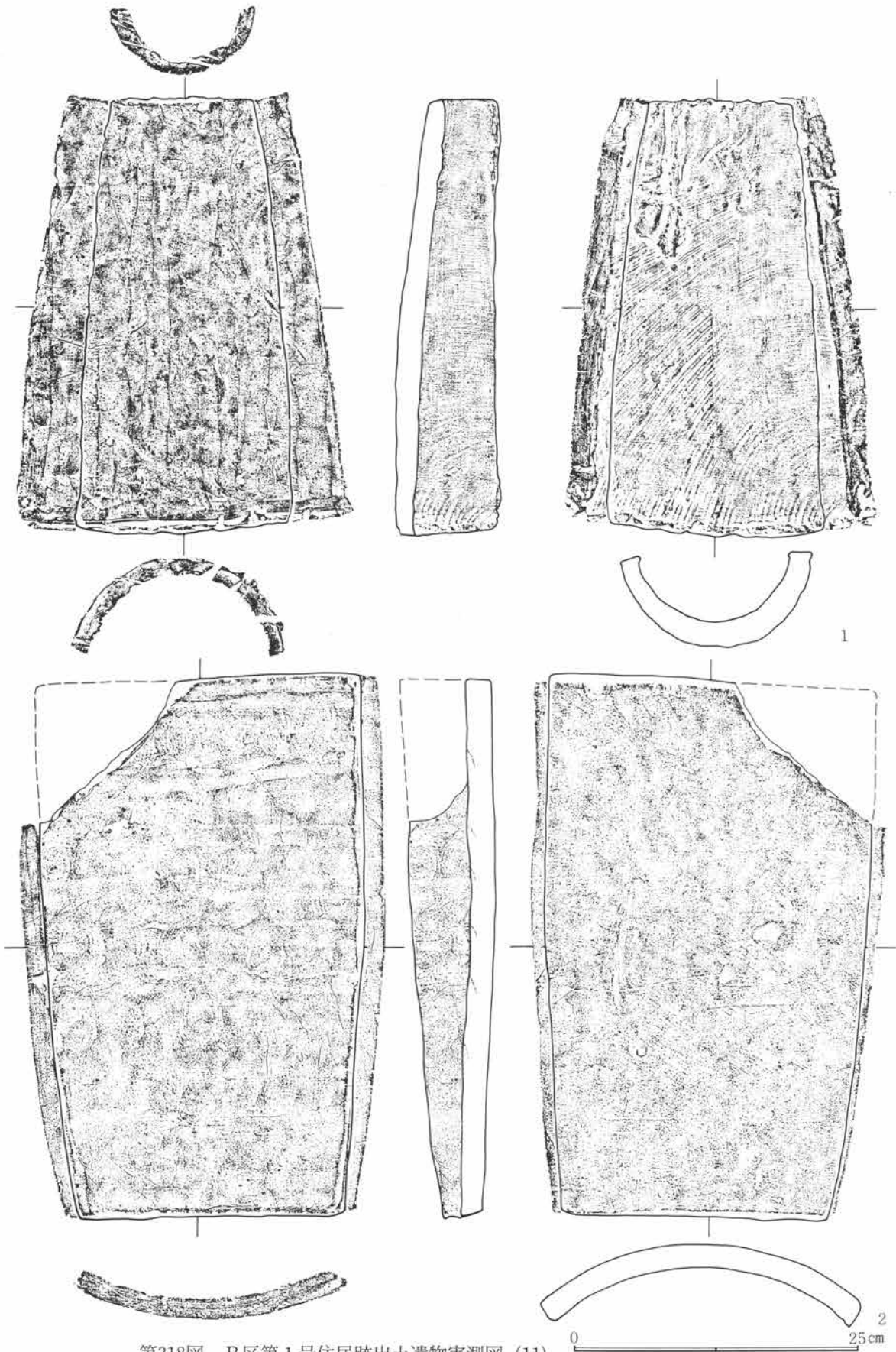
第315図 B区第1号住居跡出土遺物実測図(8)



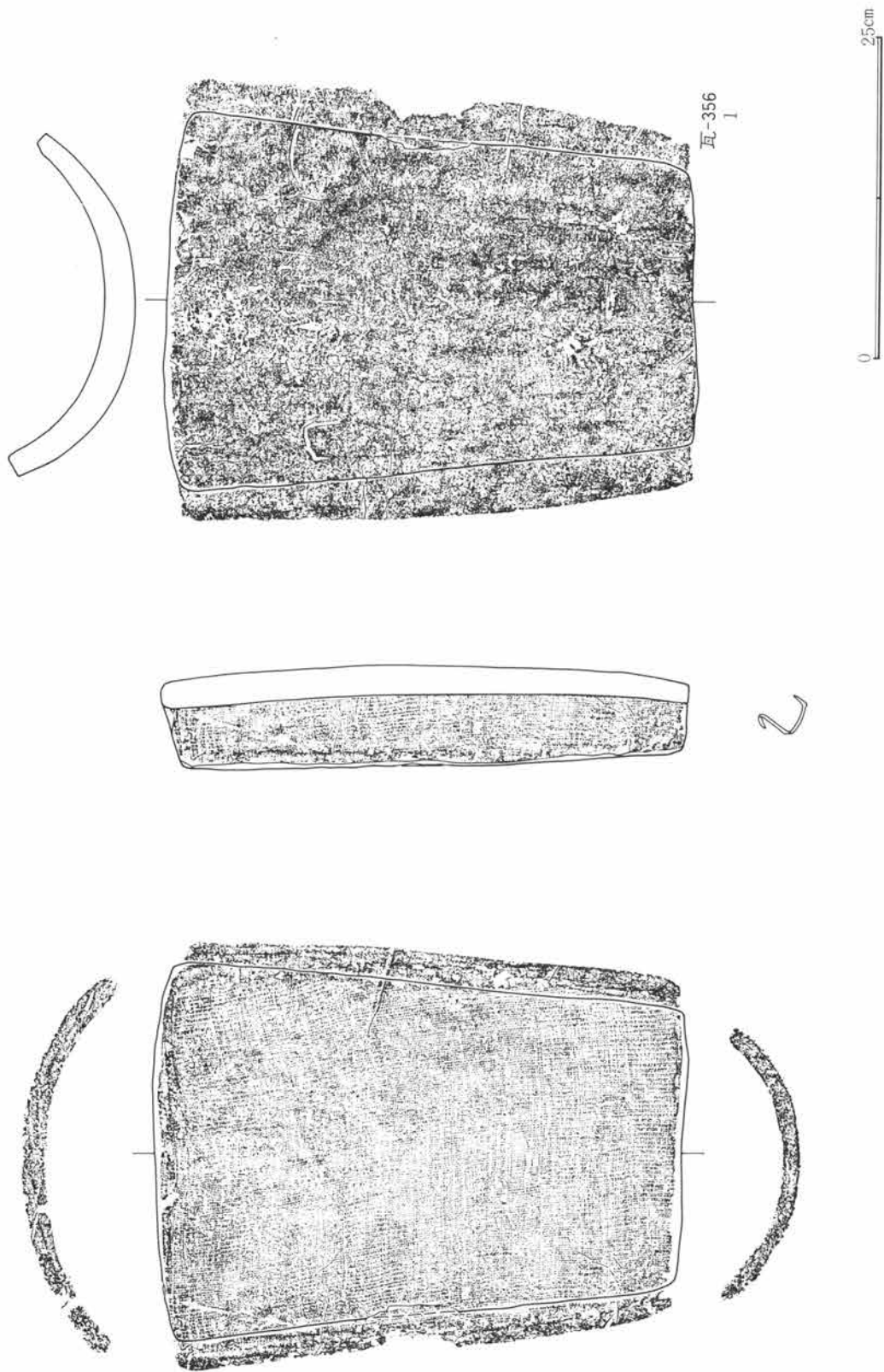
第316図 B区第1号住居跡出土遺物実測図(9)



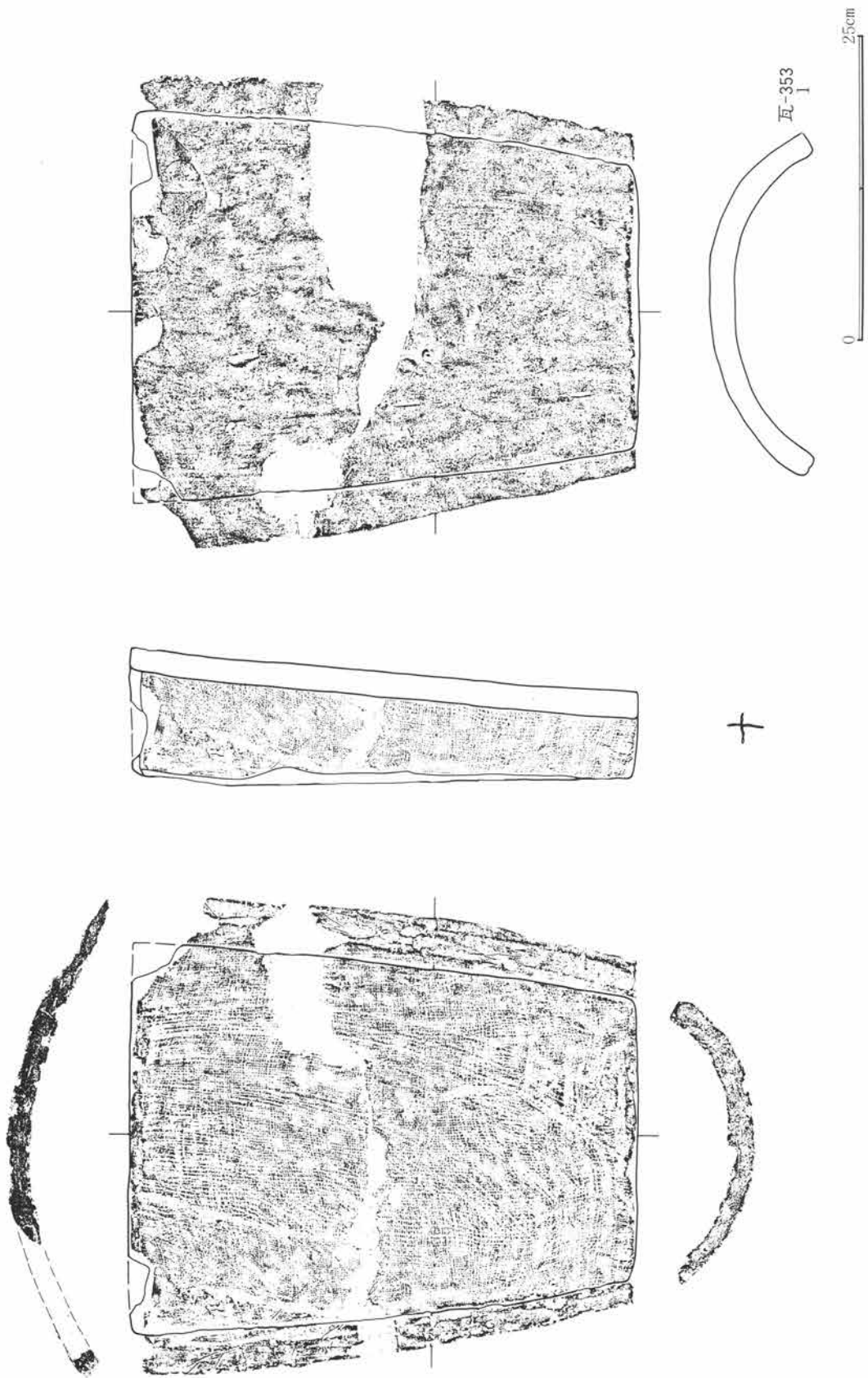
第317図 B区第1号住居跡出土遺物実測図 (10)



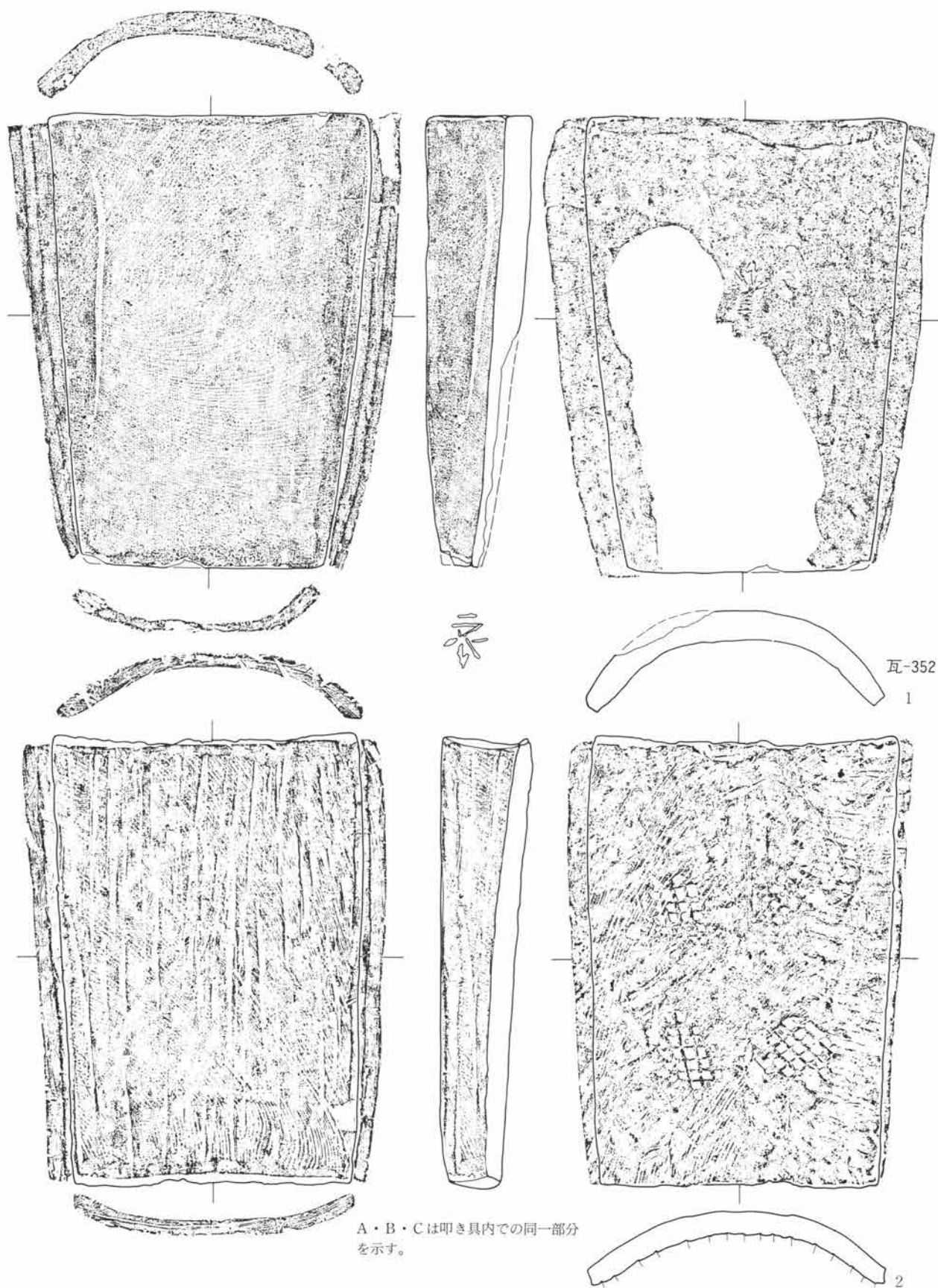
第318図 B区第1号住居跡出土遺物実測図 (11)



第319図 B区第1号住居跡出土遺物実測図(12)

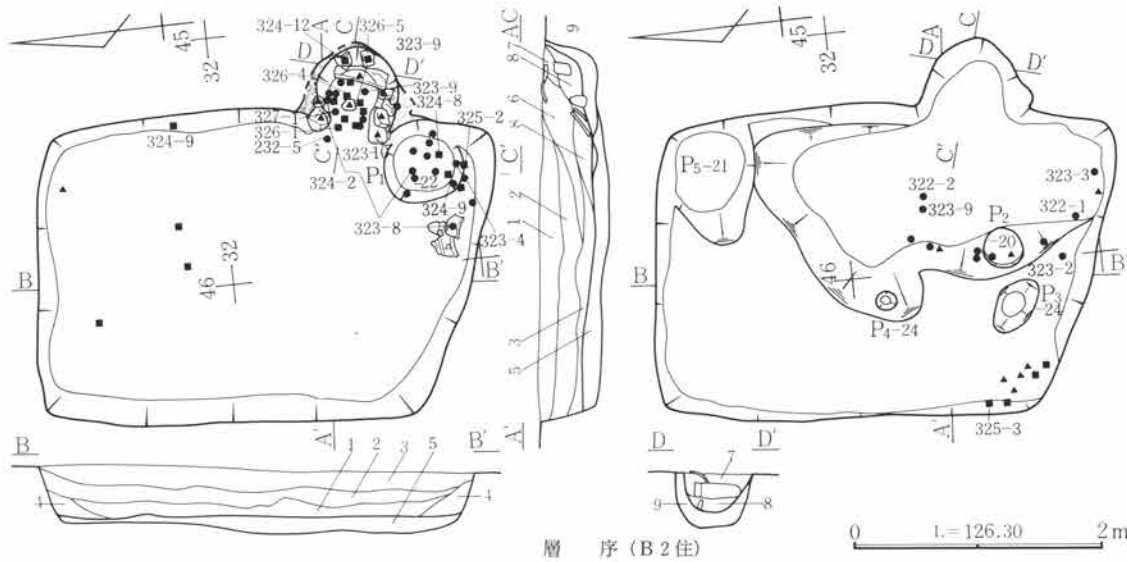


第320図 B区第1号住居跡出土遺物実測図 (13)



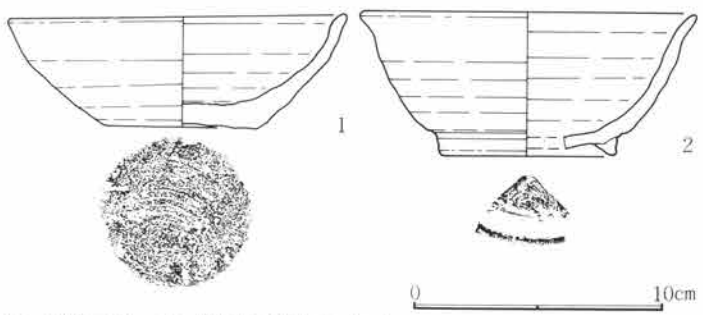
第321図 B区第1号住居跡出土遺物実測図(14)

遺構名称	B区第2号住居跡		位置	30～32-B-45～46グリッド内。		残存深度	約42cm
平面形態	横長方形。	規模	2.5m×3.62m	構築基準辺	西壁壁	主軸方位	北-95度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦。全面造床。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P ₁ 。隅丸胴張り方形。63×55cm・深度-22cm。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	北東隅部に土坑状のP ₅ が検出され、カマド前面がやや深く掘り込まれている。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から60cm。			主軸方位	北-105度-南	
改築	有。掘り方内より焼土を検出。		形状	馬蹄形状。			
規模	全長 73cm・屋外長 53cm・屋内長 20cm・袖部幅108cm・燃烧部幅 44cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。壁は礫により補強される。						
煙道	未検出。		掘り方	全体に舌状を呈しするが、礫の据方はない。			
遺物出土状態	カマド・傍竈坑内より多く検出される。						

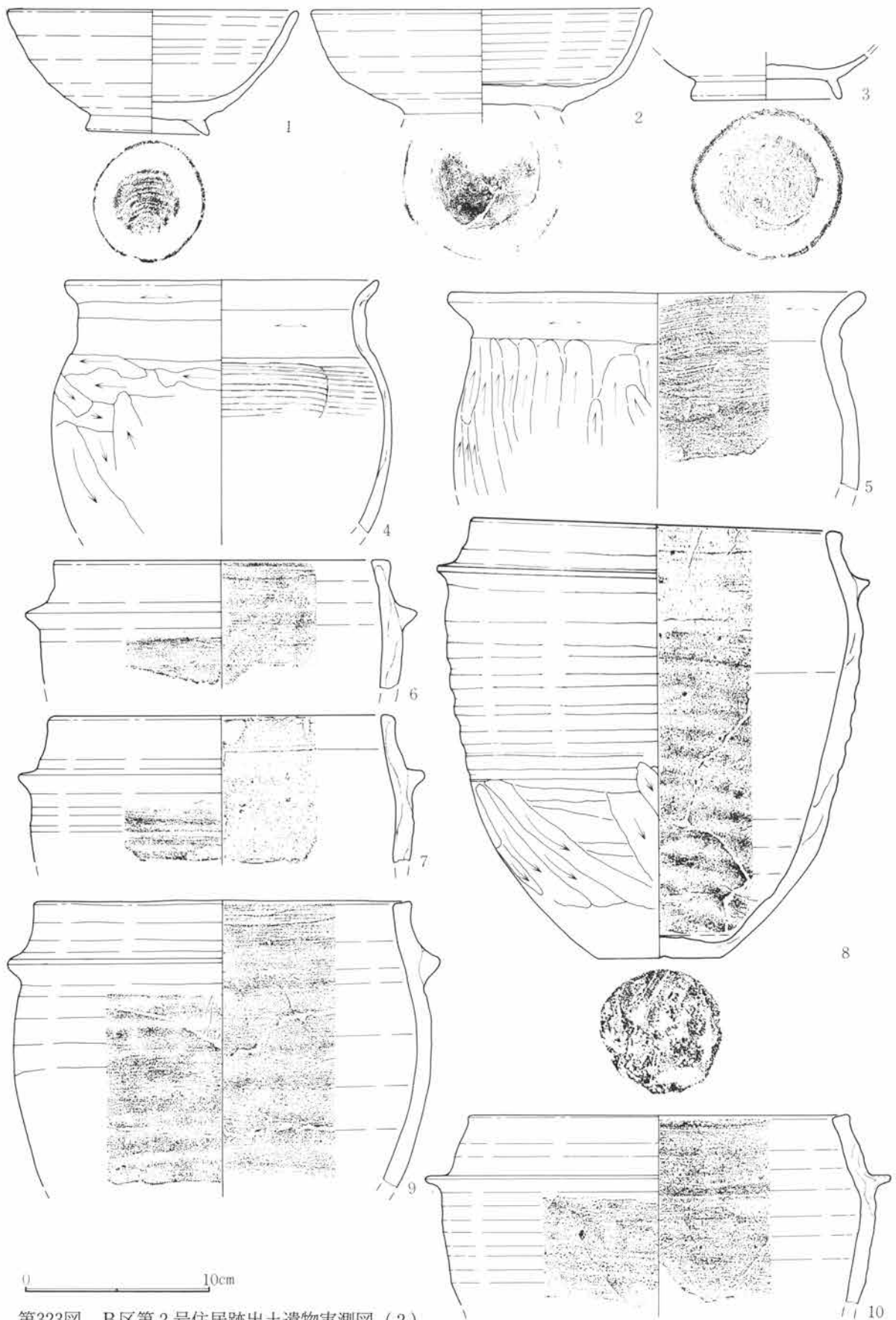


1. 粗・細粒状C軽石多量。2. 粒状C軽石混入。3. 粒状C軽石少量。4. 微粒状C軽石微量。5. 粒状C軽石少量・粒状炭化物含有・塊状VII層土含有。6. 粒状C軽石混入・粒状焼土若干。7. 細粒状C軽石微量。8. 微粒状C軽石微量・粒状焼土・粒状炭化物含有。9. 粒状C軽石少量・粒状焼土少量・粗粒状VII層土含有。

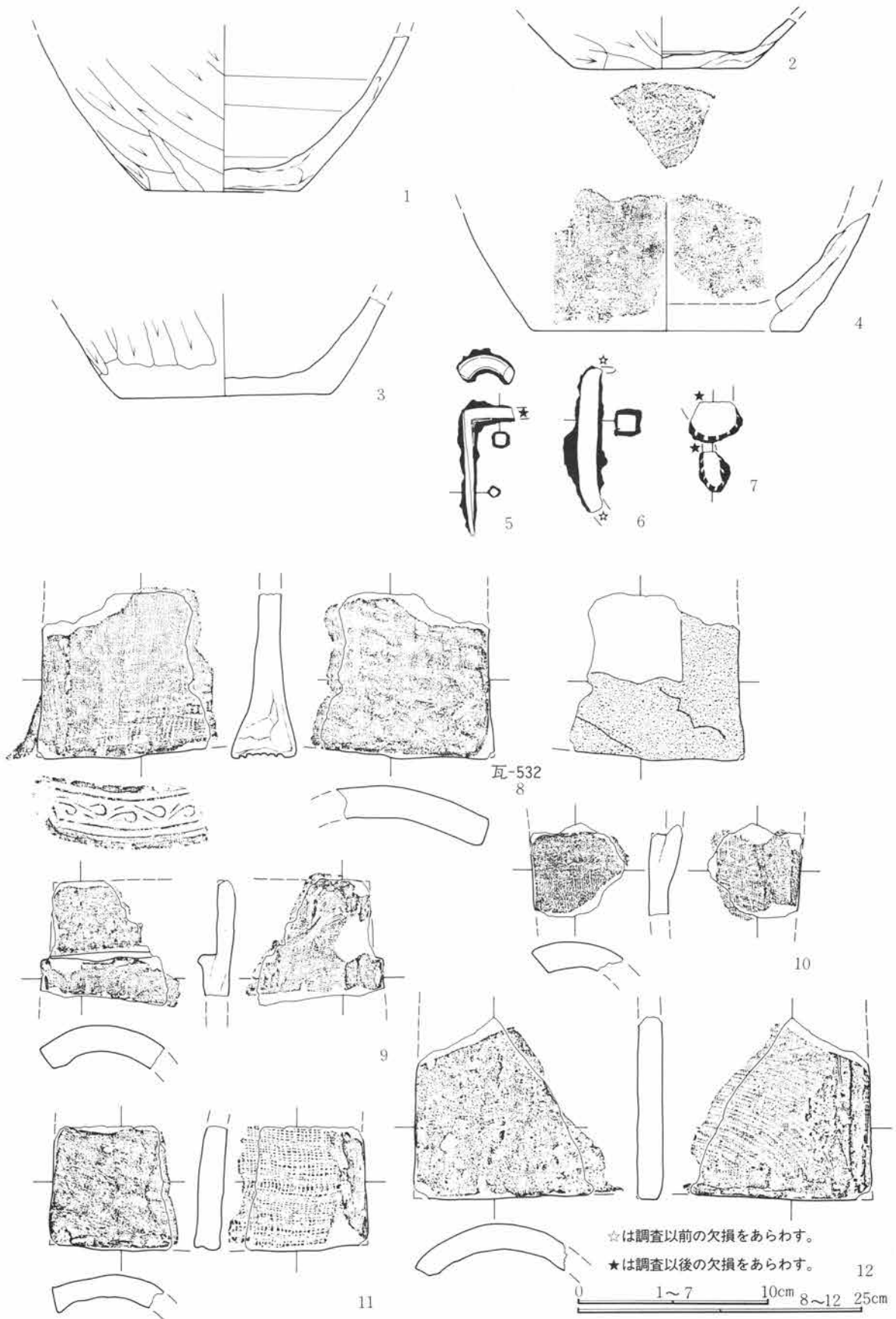
所見 当住居は21住を切り構築している。住居は梯形状を呈し東壁中央よりやや南東隅部寄りにカマドを具備し、南東隅部の東壁下に傍竈坑を備えている。カマドは比較的燃烧空間が広く、両袖・燃烧部・煙道立ち上がり部を地山砂岩質土の削り出材を用い補強しており、煙道の立ち上がり周辺を瓦を用い補強している。掘り方では北東隅部に土坑状の掘り込みが検出されている。住居形状はD区のカマドの第一段階に対比され、出土遺物の様相も同様であり、廃棄は十世紀前半頃と考えられる。



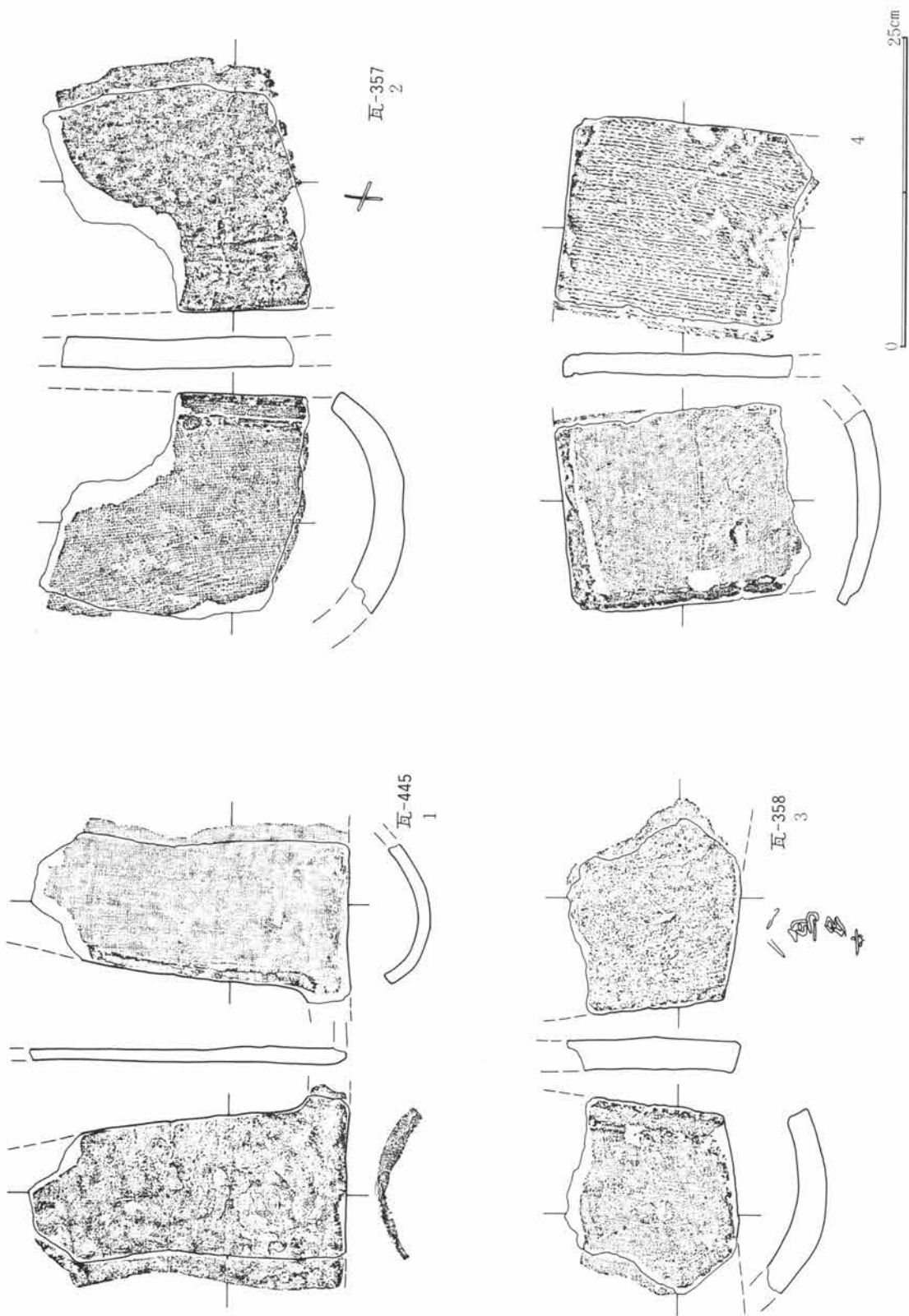
第322図 B区第2号住居跡・出土遺物実測図(1)



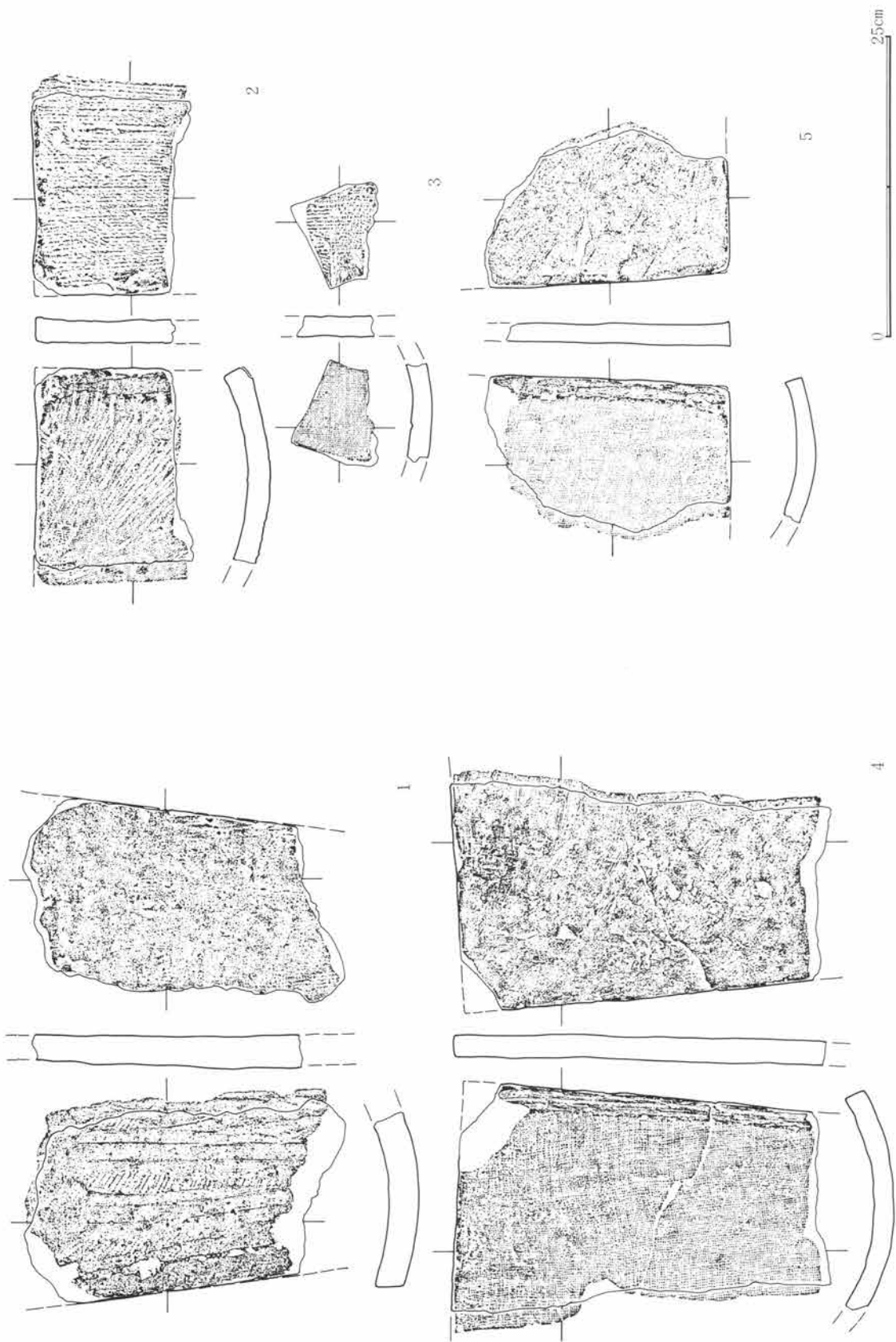
第323図 B区第2号住居跡出土遺物実測図(2)



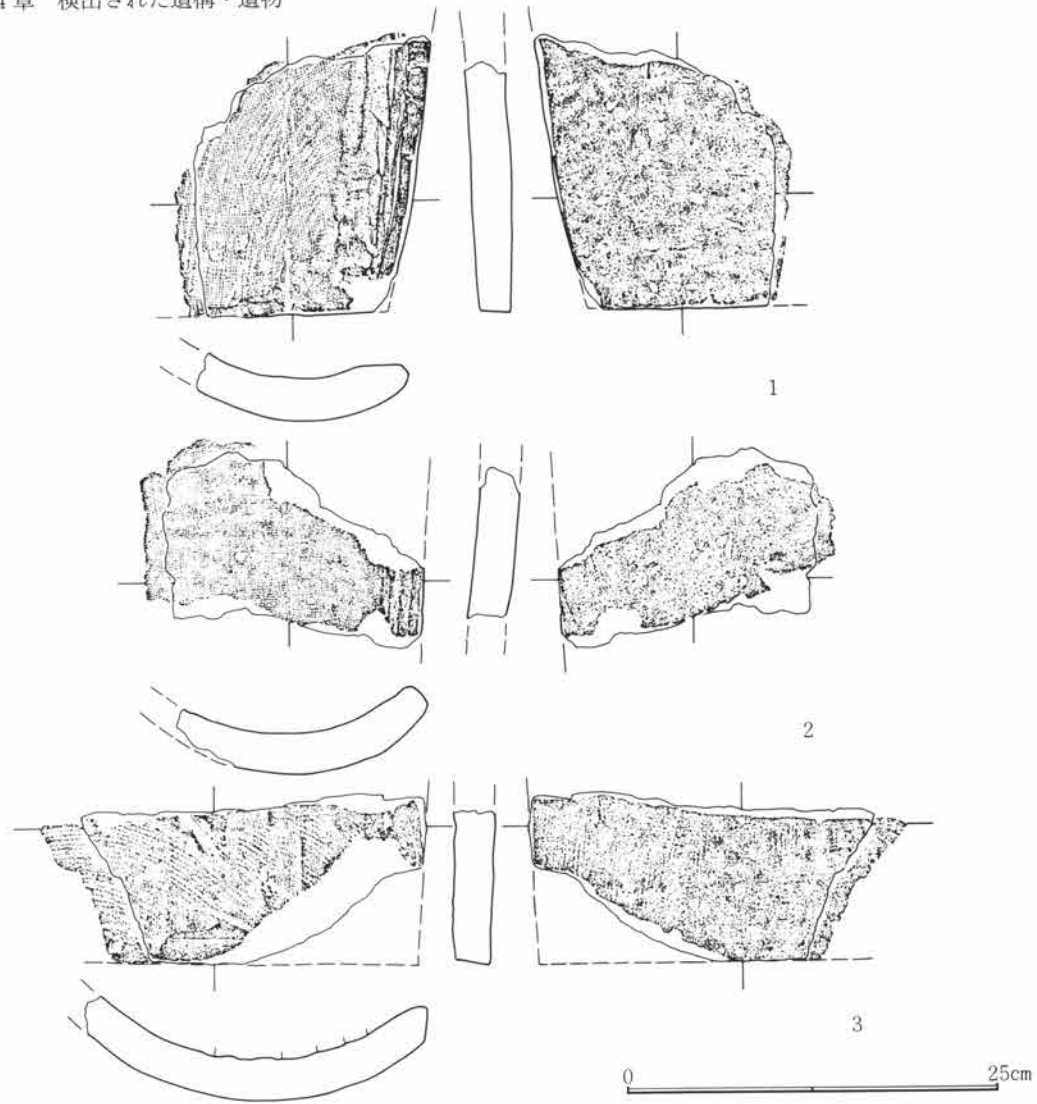
第324図 B区第2号住居跡出土遺物実測図(3)



第325図 B区第2号住居跡出土遺物実測図(4)



第326図 B区第2号住居跡出土遺物実測図(5)

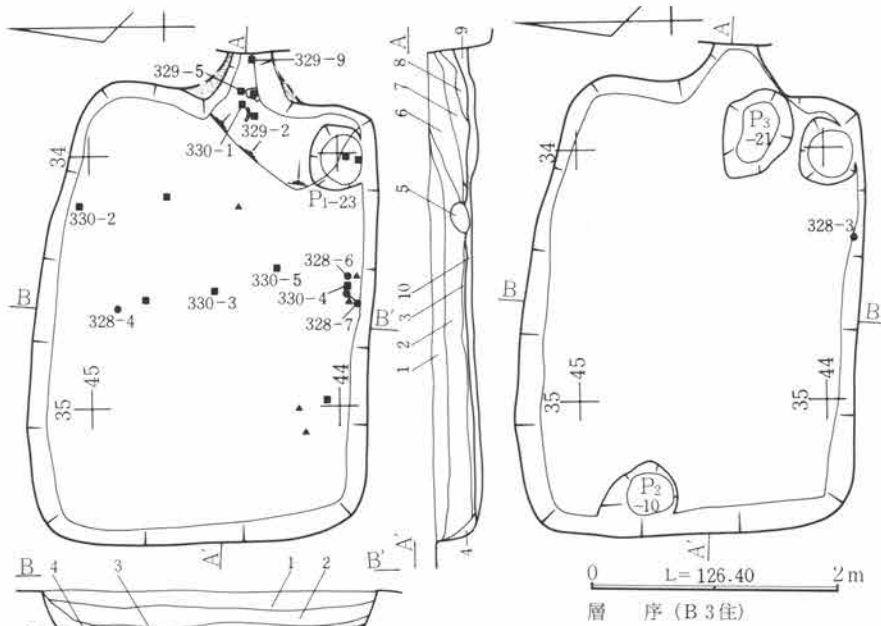


第327図 B区第2号住居跡出土遺物実測図(6)

遺構名称	B区第3号住居跡		位置	43~45-B-33~35グリッド内。			残存深度	約30cm
平面形態	縦長方形。	規模	3.7m×2.72m	構築基準辺	南壁	主軸方位	北-95度-南	
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦。全面に浅い造床が認められる。				
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P ₁ 。隅丸胴張り方形。52×41cm・深度-23cm				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	全面平坦である。P ₂ は、生活面検出したが、用途等不分明。							
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から55cm。				主軸方位	北-94度-南	
改築	有。掘り方内より焼土を検出。			形状	細い舌状を呈する。			
規模	全長50+ α cm・屋外長32+ α cm・屋内長 18cm・袖部幅118cm・燃烧部幅 40cm。							
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。							
	袖	左袖が若干認められる程度である。補強材は認められなかった。						
煙道	未検出。		掘り方	半円形状が想定される。				
遺物出土状態	全体に散漫であるが床面直上のものがやや多い。							

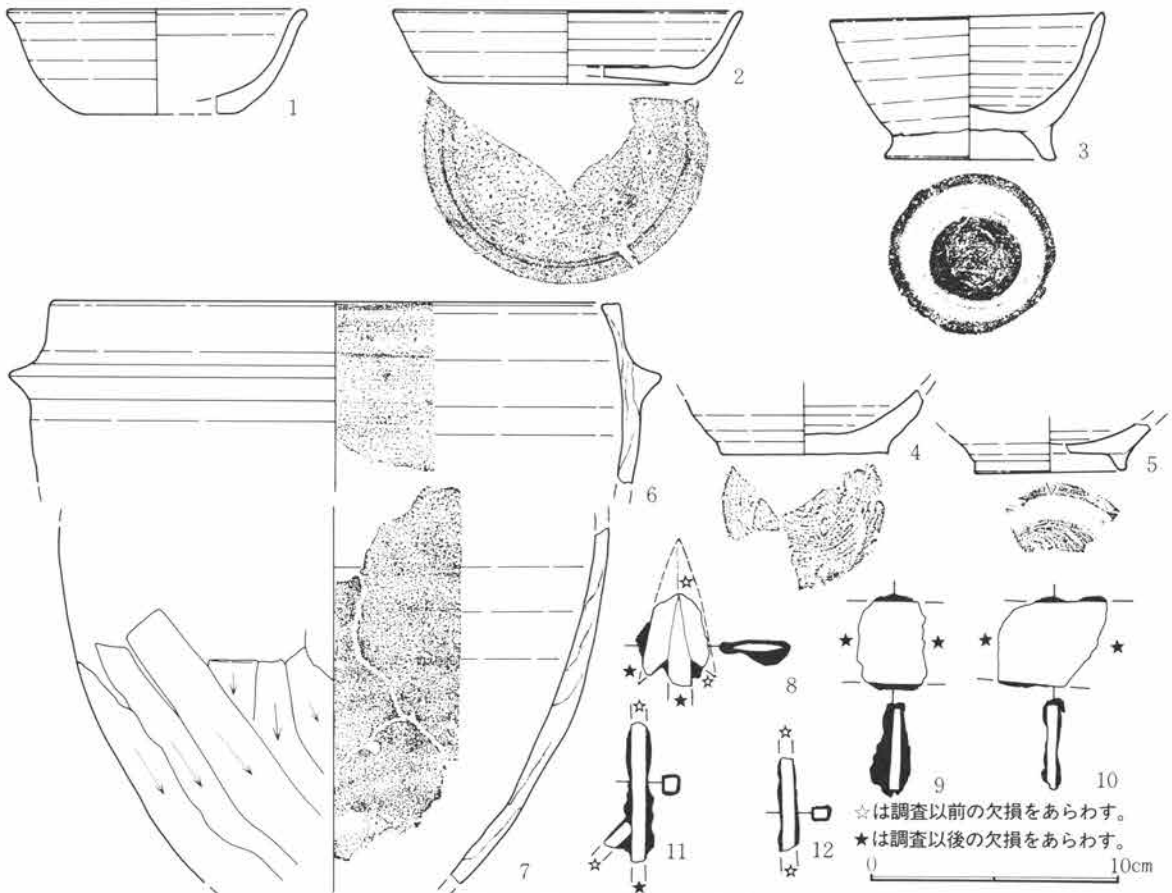
第1節 南側調査区

所見 当住居は2住にカマド煙道部先端側を切られている。住居は縦長形状を呈し、東壁中央部にカマドを具備し、南東隅部に傍竈坑を備える。カマドは燃焼空間の比較的狭く袖は左袖が瘤状程度に認められ、左袖は認められなかった。又、補強材等も認められなかった。掘り方は特徴的な状況等は認められず、床面下5cm程下位でほぼ平坦な底面が検

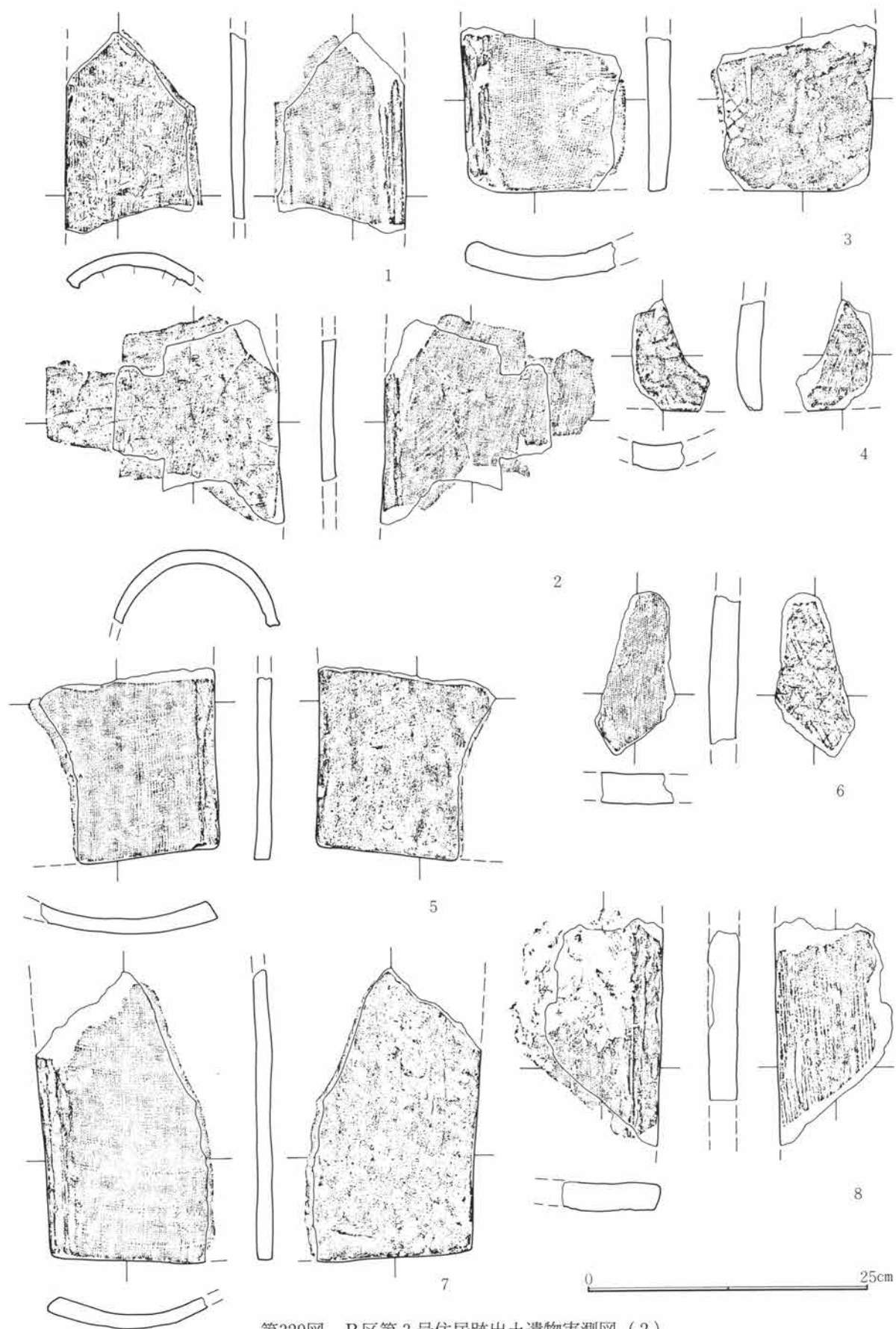


1. 粗・細粒状C軽石多量・細粒状VII層土少量。
2. 粒状C軽石含有・塊状VII層土混入・粒状炭化物少量・粒状焼土含有。
3. 粒状C軽石少量粗粒状VII層土混入。
4. 微粒状C軽石若干。
5. 礫。
6. 細粒状C軽石混入。
7. 微粒状C軽石若干・塊状焼土混入。
8. 微粒状C軽石微量・粒状炭化物混入。
9. 微粒状C軽石微量・粒状焼土含有・粒状炭化物微量。

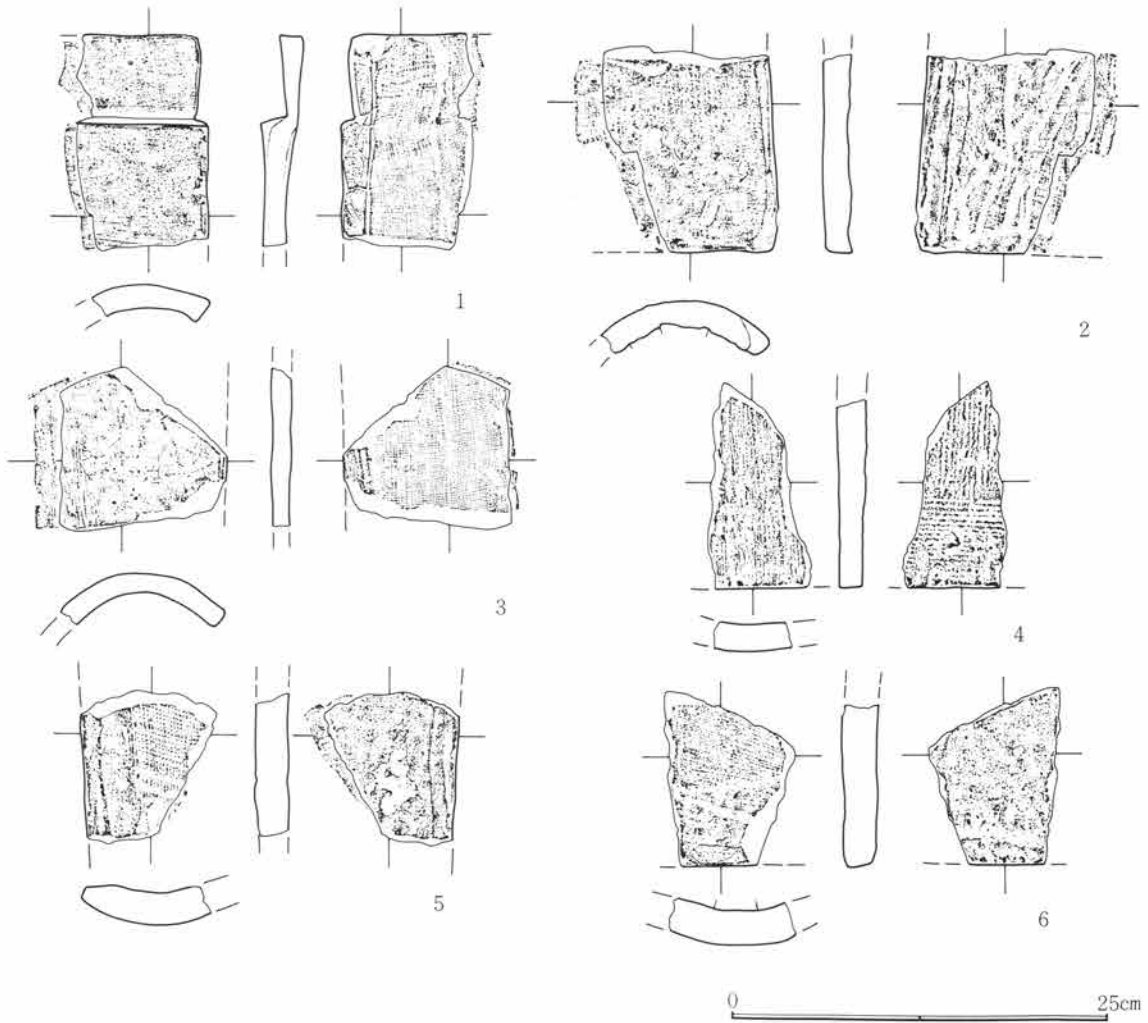
出された。住居形状はD区の住居分類に対比しても該当するものが認められないが、傍竈坑の存在から第II段階以前に想定できる。一方遺物は第I・II段階の様相であることから10世紀前半以前の廃棄と考えられる。



第328図 B区第3号住居跡・出土遺物実測図(1)



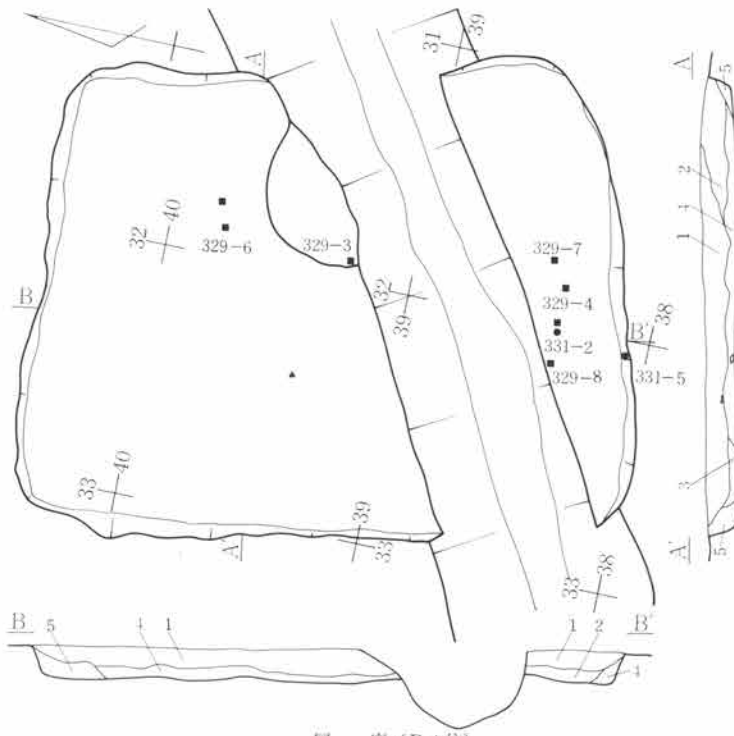
第329図 B区第3号住居跡出土遺物実測図(2)



第330図 B区第4号住居跡・出土遺物実測図(1)

遺構名称	B区第4号住居跡		位置	37~40-B-30~33グリッド内。			残存深度	約25cm
平面形態	梯形。	規模	3.7m×4.3・5.0m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-79度-南	
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦。				
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未分明。				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	下位の16号住居の存在により不明。							
遺物出土状態	全体に少なく、床面直上での出土は皆無に近い。							

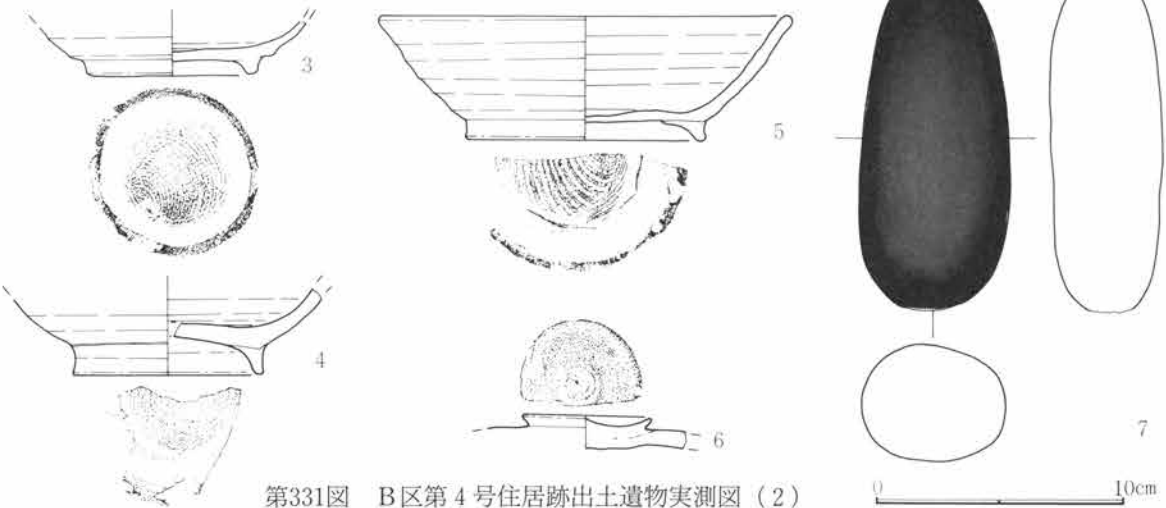
第4章 検出された遺構・遺物



層序 (B4住)

1. 粒状C軽石含有・粒状炭化物少量・粒状焼土含有。
2. 粒状C軽石含有・粒状炭化物少量。
3. 粒状C軽石少量。
4. 粒状C軽石若干・粒状炭化物少量・粒状焼土少量。
5. 粒状C軽石含有・粒状焼土微量・粒状炭化物微量。

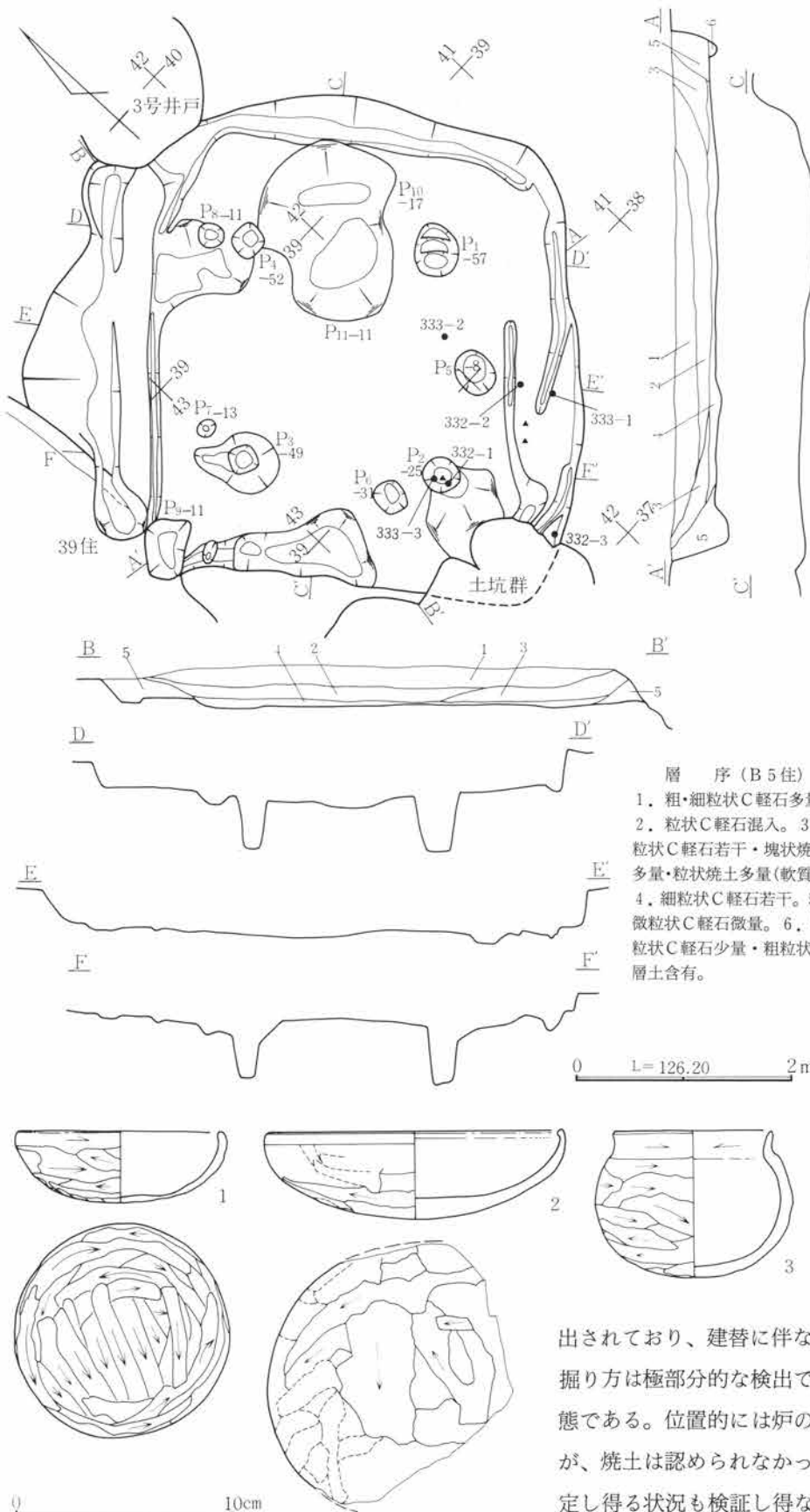
0 1 = 126.20 2m



第331図 B区第4号住居跡出土遺物実測図(2)

所見 当住居は16住を切り、B6溝(中世)に切られカマドを失ったと考えられる。この為、住居の詳細に就いては不分明な点が多い。又、南東隅部周辺は、下位の16住の存在もあり、検出壁としたものは掘り過ぎている可能性がある。住居は遺物から10世紀前半以前と考えられる。

遺構名称	B区第5号住居跡	位置	37~39-B-41~43グリッド内。			残存深度	約35cm
平面形態	正方形(矩形)。	規模	4.32m×3.9(5.1)m	構築基準辺	北西壁	主軸方位	北-50度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦。地山VII層土を使用し、造床は一部にしかない。			
壁溝	全周。幅10~20cm。		傍竈坑・貯蔵穴	P ₉ か。不分明。			
柱穴	P ₁ ~P ₄ が支柱穴で、P ₇ ・P ₈ は、P ₃ ・P ₄ の補助柱穴か。						
掘り方	P ₁₀ ・P ₁₁ 及びP ₂ ・P ₄ 周辺で部分的に認められた。						
遺物出土状態	P ₂ の部分で、柱材が想定される位置から完形個体(333-3)等の出土がある。						

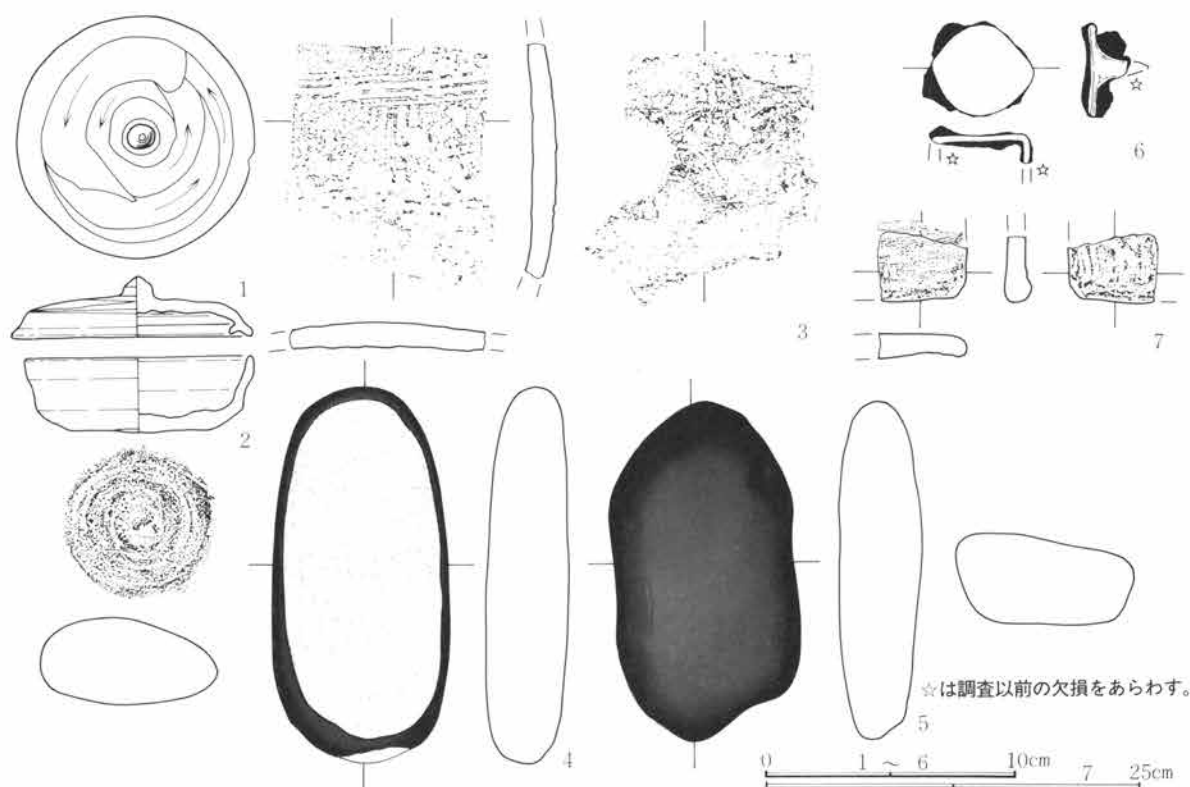


所見 当住居は39住・土坑群に切られている。住居は上記二者に切られるものの、図示したとおり顕著な状態ではない。にもかかわらず、残存部ではカマド及びカマドの痕跡は認められない。北壁は著しく歪んだ状態となっており、壁溝が二重に検出されており同様に南壁も二重の状態になっている。又東西両壁下でも壁溝が認められるものの、西壁側は土坑群による破壊が及んでいる為詳細は不明であるが、孰れの壁下でもカマドの痕跡が認められなかった。そして、上述した壁の状況は建替のあったことを示していると考えられる。支柱穴は4本(P₁~P₄)検

- 層序 (B5住)
1. 粗・細粒状C軽石多量。
 2. 粒状C軽石混入。3. 粒状C軽石若干・塊状焼土多量・粒状焼土多量(軟質)。
 4. 細粒状C軽石若干。5. 微粒状C軽石微量。6. 細粒状C軽石少量・粗粒状VII層土含有。

出されており、建替に伴う支柱穴の新設は無い。掘り方は極部分的な検出でP₁₀・P₁₁の土坑状の状態である。位置的には炉の占有部位と考えられるが、焼土は認められなかったが、炉址を完全に否定し得る状況も検証し得なかった。住居の時期は7世紀前半から中頃と考えられる。

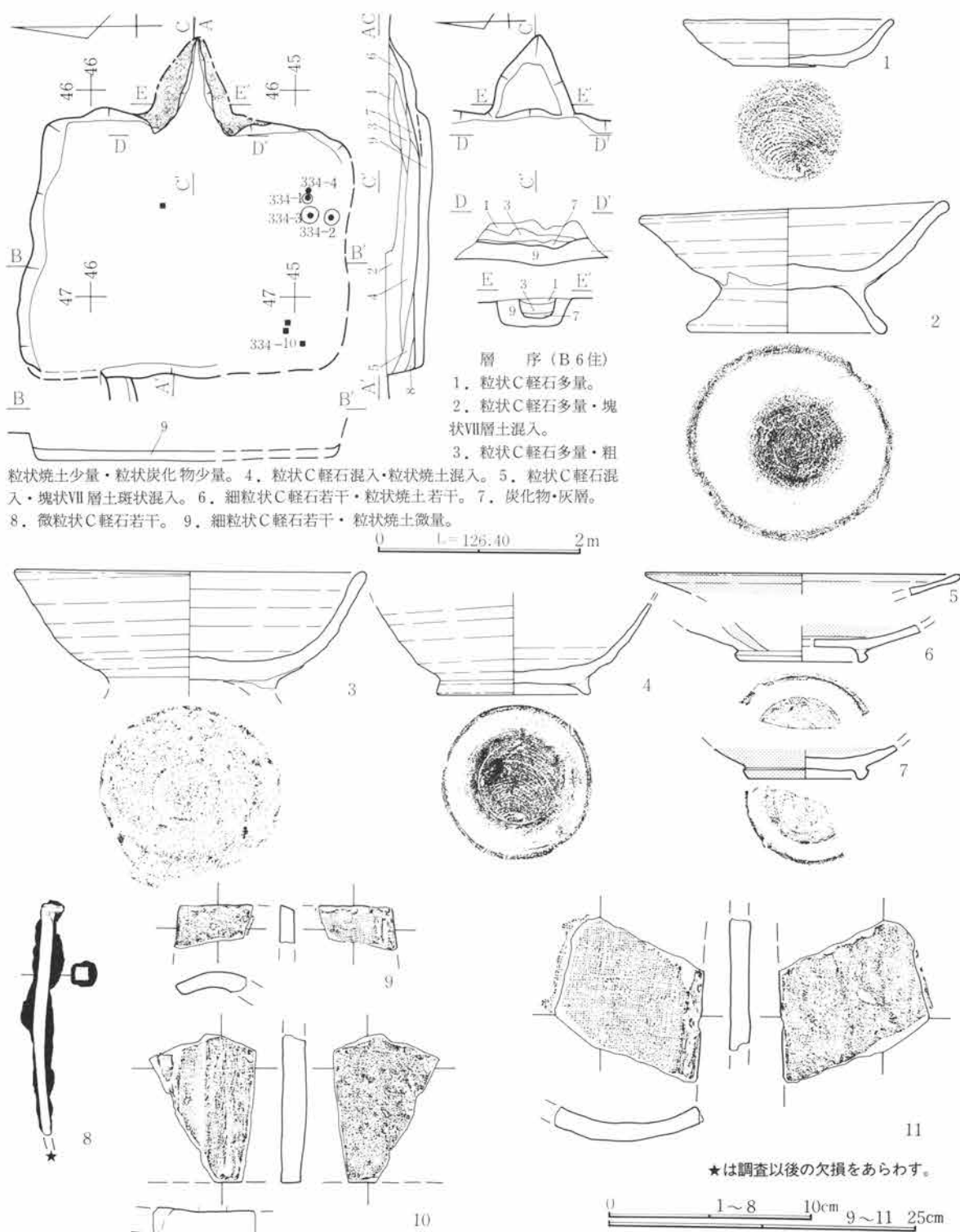
第332図 B区第5号住居跡・出土遺物実測図(1)



第333図 B区第5号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	B区第6号住居跡	位置	44~46-B-45~47グリッド内。			残存深度	約30cm
平面形態	横長方形(矩形)。	規模	2.6m×3.2m	構築基準辺	西壁か	主軸方位	北-86度-南
壁	斜位に立ち上がる。		床面	平坦。全面に造床が認められる。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	全面平坦である。カマド部でも住居壁の立ち上がりが検出されている。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から90cm。			主軸方位	北-90度-南	
改築	不明。			形状	細い舌状を呈する。		
規模	全長110cm・屋外長77cm・屋内長33cm・袖部幅125cm・燃烧部幅36cm・煙道部幅12cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。			袖	小さく瘤状を呈する。補強材等は認められなかった。		
煙道	細く仰角30度程で立ち上がる。			掘り方	三角形状を呈する。		
遺物出土状態	南壁下床面直上で3点の完形個体が出土している。この部分に傍竈坑が想定される。						

所見 当住居は、7住・27住・30住・31住・33住と重複する。又、北側のB1溝・中世遺構・攪乱等により周辺住居は遺存悪く、平面精査による遺構の新旧関係の確認は全うできなかった。上述の一連の住居も調査段階では新旧関係は詳らかではなかった。この状況下での当住居の検出は実態不明な部分がある。当住居内での出土位置のある第334図-1~4は、27住のに帰属する可能性もあり、調査時の不手際に原因する。唯、住居形状では、C区の水路以南の67住に切られる71住に類似性が検出され、71住が、他の住居を切る点から、住居形状での検証は机上では妥当性があると思われる。詳細は上述の点から言及しかねる。

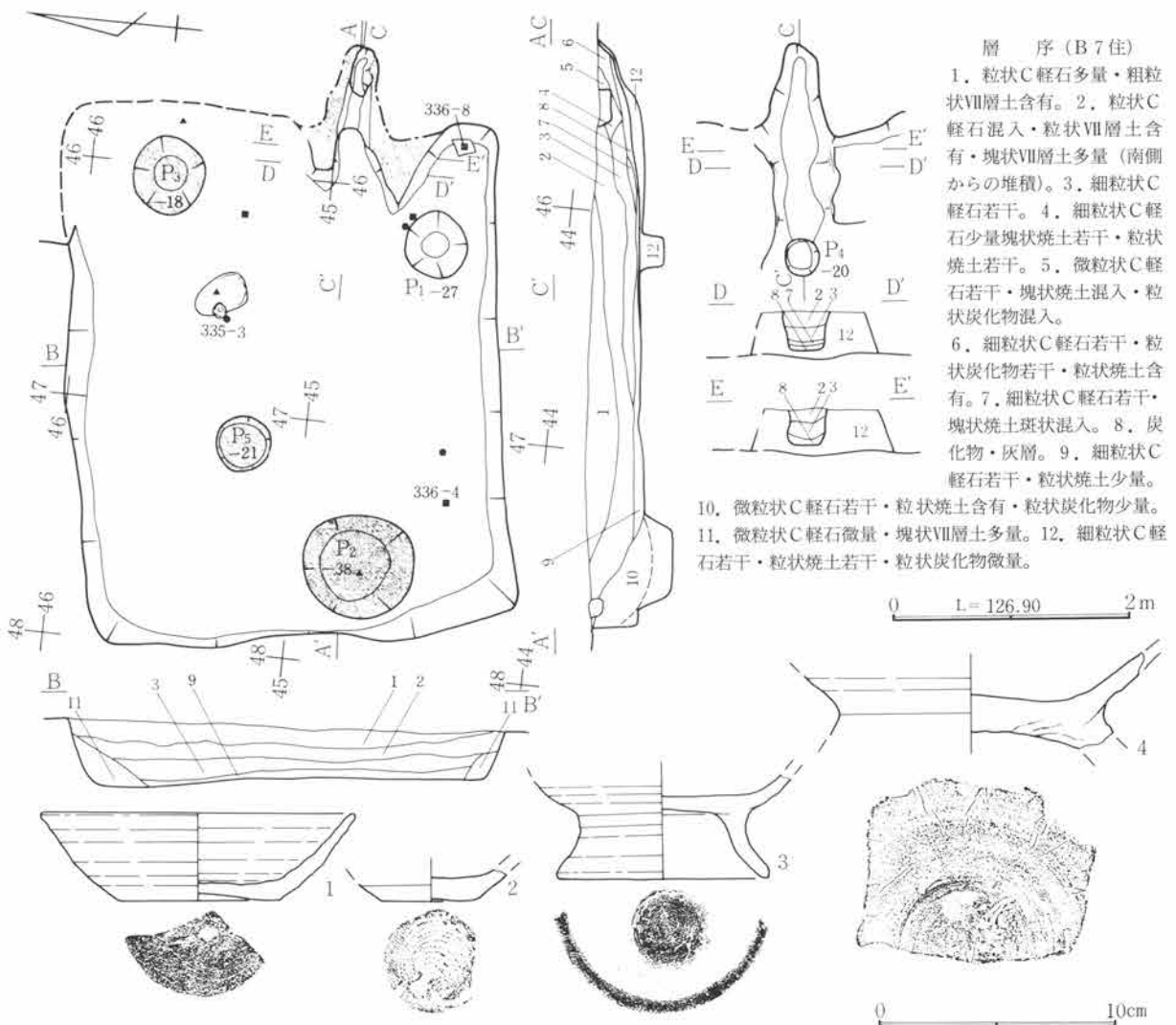


第334図 B区第6号住居跡・出土遺物実測図

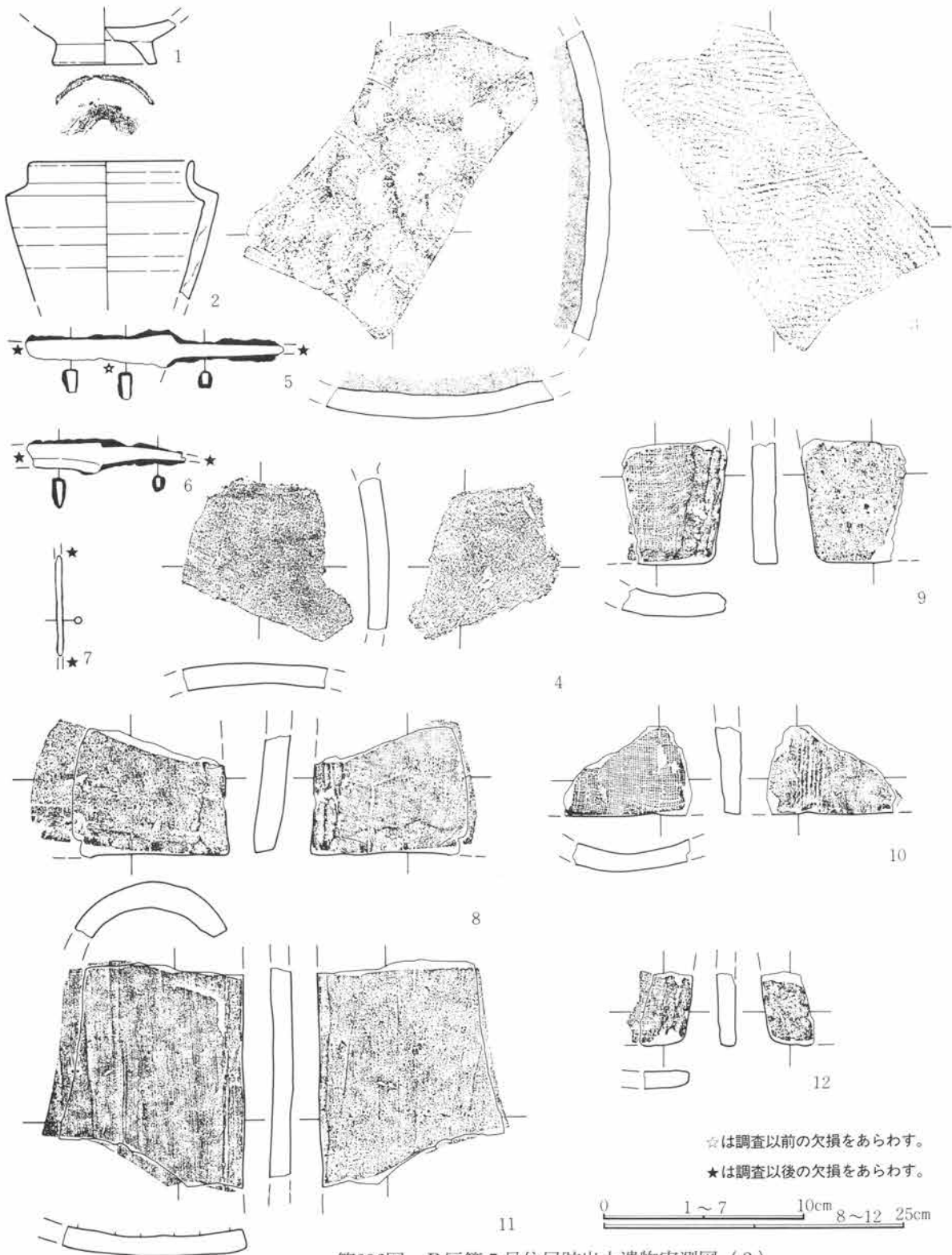
所見 当住居は前述した6住と重複関係にある。又、27住と重複関係にあるが、調査段階では当住居を先行調査させた。しかし、出土遺物を見る範囲においてはその新旧関係は判然としない。一方、調査時の土層観察断面では、27住に伴う貼り床等は認められず、壁の立ち上がりとも思われる所見も得られなかった。だが、周辺住居の床面・掘り方底面はほぼ同位面であることから、これに起因して床面の標高差違が認められず、調査時に看過した可能性がある。唯、調査時には、当住居が27住を切るという認識で調査実施した。

第4章 検出された遺構・遺物

遺構名称	B区第7号住居跡		位置	44~46-B-45~48グリッド内。		残存深度	約46cm
平面形態	縦長方形。	規模	4.48m×3.6m	構築基準辺	南壁	主軸方位	北-82度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦。地山VII層土を使用し、造床は認められない。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P ₁ ・P ₂ か?詳細不明。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	認められなかった。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から40cm。			主軸方位	北-88度-南	
改築	有。掘り方内より焼土を検出。			形状			
規模	全長128cm・屋外長59cm・屋内長69cm・袖部幅150cm・燃烧部幅35cm・煙道部幅15~26cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
	袖	右袖が極度に大きい。補強材は認められない。					
煙道	細く仰角20~60度程で立ち上がる。			掘り方	細い舌状を呈する。		
遺物出土状態	全体に出土量が少ない。						



第335図 B区第7号住居跡・出土遺物実測図(1)



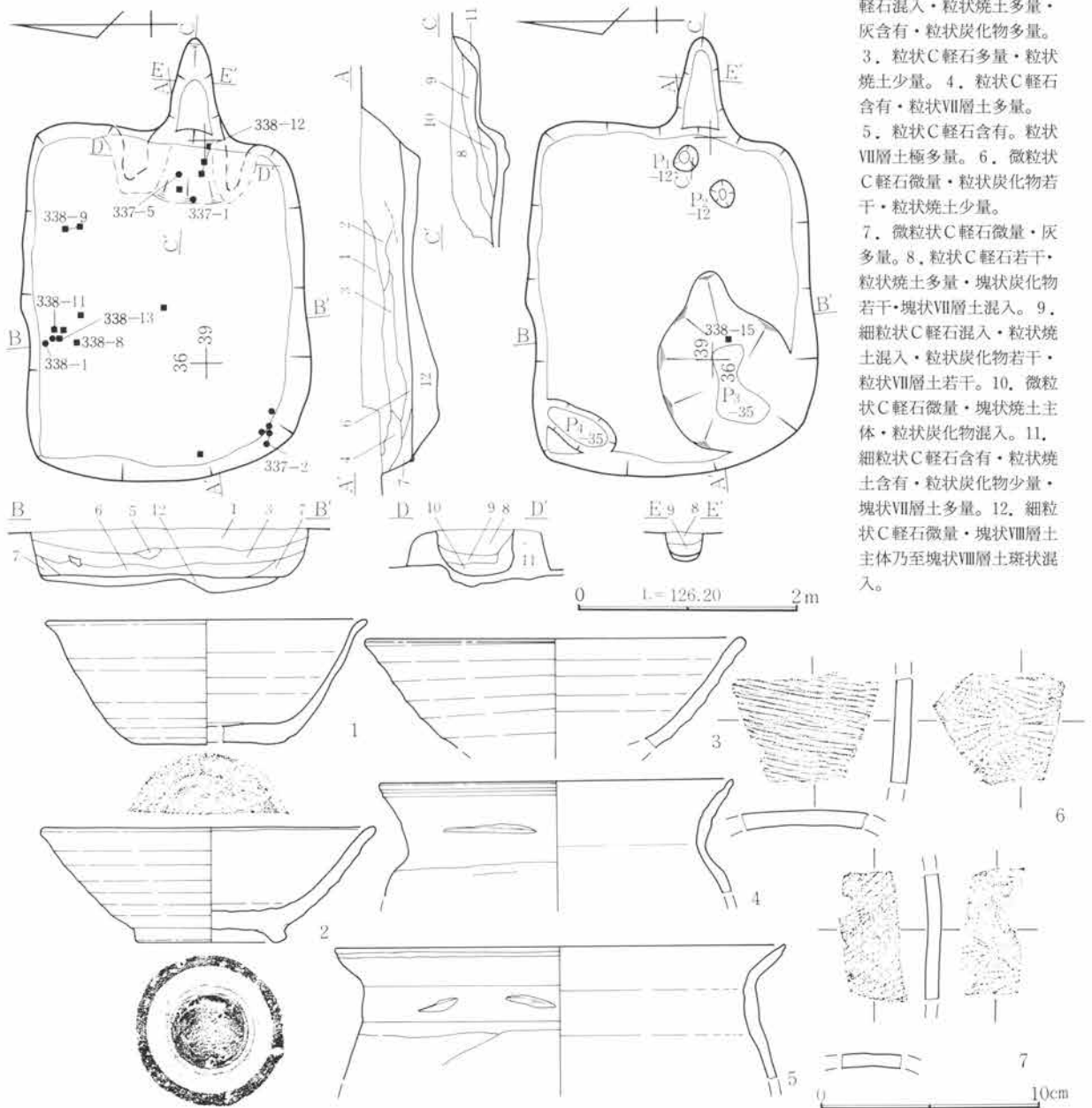
第336図 B区第7号住居跡出土遺物実測図(2)

所見 当住居は18住を切り構築している。住居は縦長形状を呈し、カマドは南東隅にやや寄った位置に構築している。傍竈坑は認められなかったが、下位の18住の存在により分明に為し難かった。カマドは、東壁に構築されているが、下位の18住のカマドと完全に重複しており、調査の下手際もあり平面検出は出来ず、断面での検証しか出来得なかった。この断面での状況と、カマド範囲確認時に於ける状況を勘案し図上に推

第4章 検出された遺構・遺物

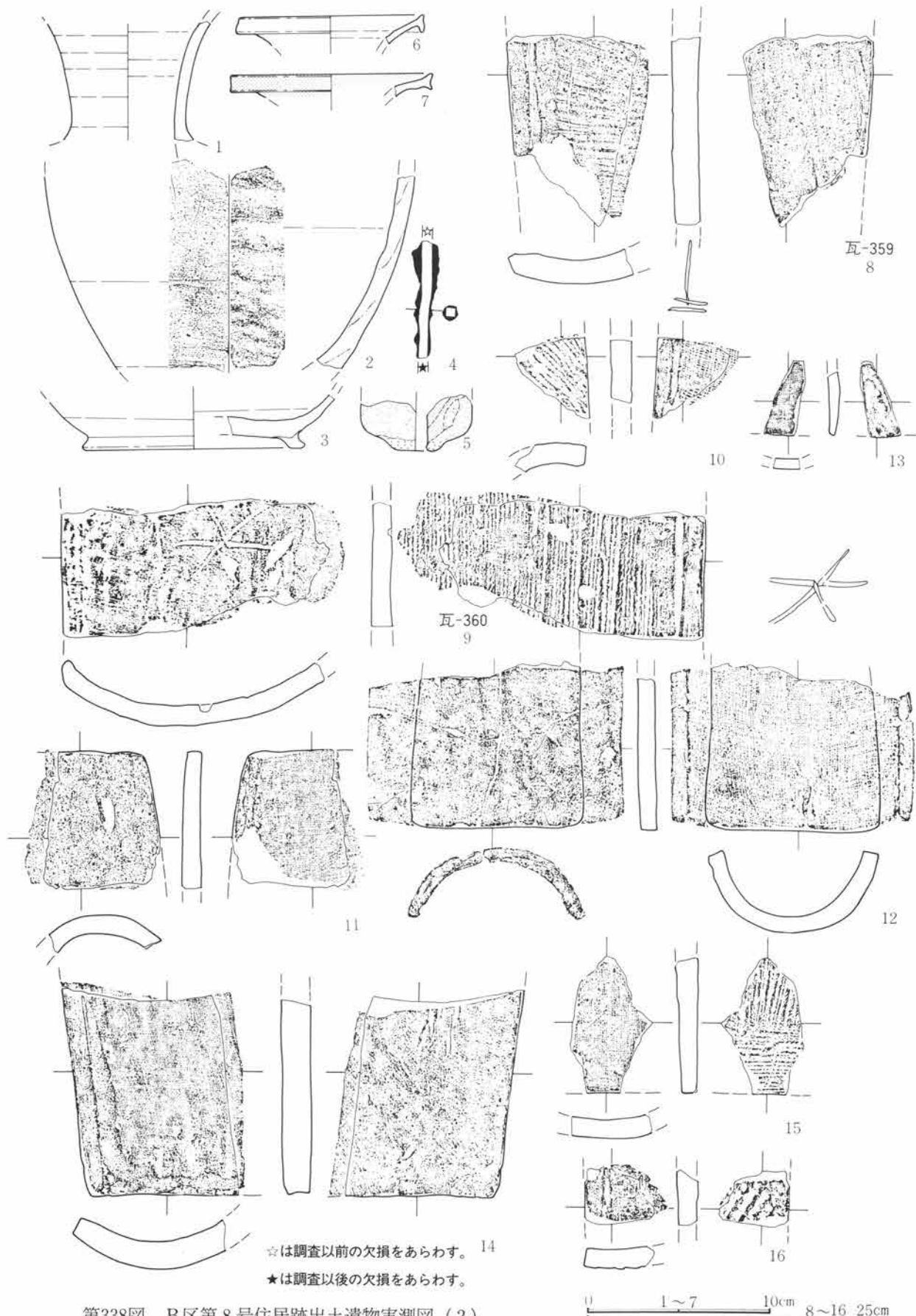
遺構名称	B区第8号住居跡		位置	38・39-B-34~36グリッド内。			残存深度	約40cm
平面形態	縦長方形。	規模	3.25m×2.55m	構築基準辺	北壁	主軸方位	北-90度-南	
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	ほぼ平坦。全面に造床が認められる。				
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	南西隅部に土坑状の掘り込みが検出された。							
遺物出土状態	部分的に集中するが、床面直上での出土は皆無に等しい。							

定線で図示したのが当住居のカマドである。住居の廃棄は、住居形状がD区のカテゴリの第Ⅲ段階に対比され、出土遺物も同様な為当住居は10世紀中頃と考えられる。



- 層序(B8住)
1. 粗・細粒状C軽石多量・粒状焼土含有。
 2. 粒状C軽石混入・粒状焼土多量・灰含有・粒状炭化物多量。
 3. 粒状C軽石多量・粒状焼土少量。
 4. 粒状C軽石含有・粒状Ⅶ層土多量。
 5. 粒状C軽石含有。粒状Ⅶ層土極多量。
 6. 微粒状C軽石微量・粒状炭化物若干・粒状焼土少量。
 7. 微粒状C軽石微量・灰多量。
 8. 粒状C軽石若干・粒状焼土多量・塊状炭化物若干・塊状Ⅶ層土混入。
 9. 細粒状C軽石混入・粒状焼土混入・粒状炭化物若干・粒状Ⅶ層土若干。
 10. 微粒状C軽石微量・塊状焼土主体・粒状炭化物混入。
 11. 細粒状C軽石含有・粒状焼土含有・粒状炭化物少量・塊状Ⅶ層土多量。
 12. 細粒状C軽石微量・塊状Ⅷ層土主体乃至塊状Ⅷ層土斑状混入。

第337図 B区第8号住居跡・出土遺物実測図(1)

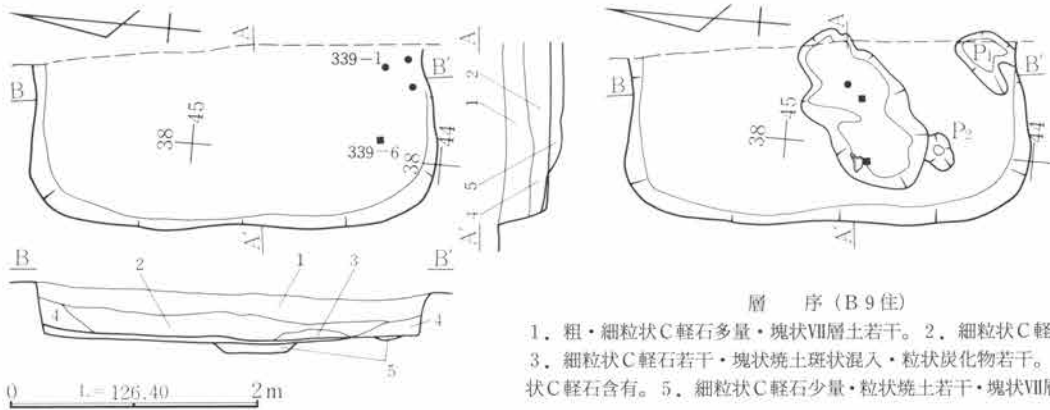


第338図 B区第8号住居跡出土遺物実測図(2)

☆は調査以前の欠損をあらわす。
★は調査以後の欠損をあらわす。

第4章 検出された遺構・遺物

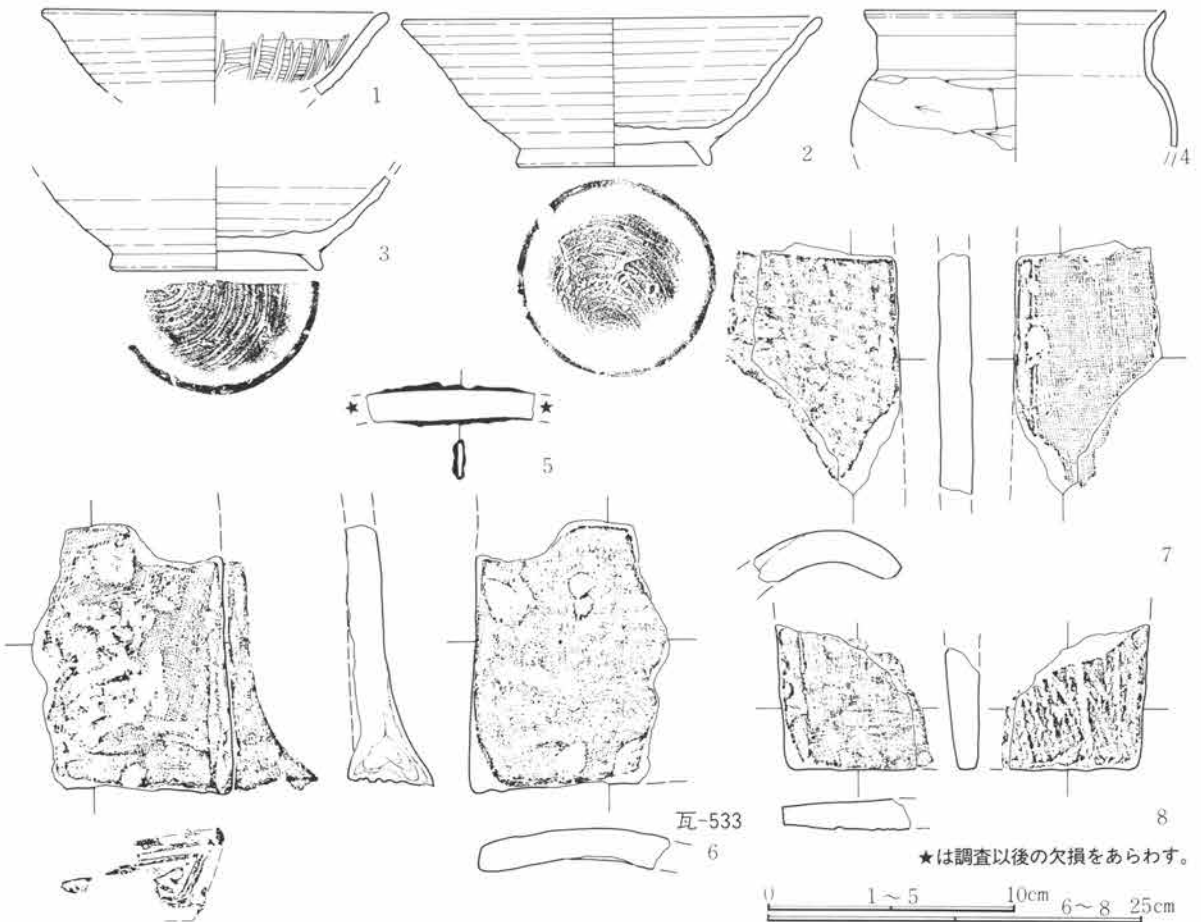
遺構名称	B区第9号住居跡	位置	44・45-B-37・38グリッド内。	残存深度	約30cm
試掘トレンチの破壊により詳細不詳。					



層序 (B9住)

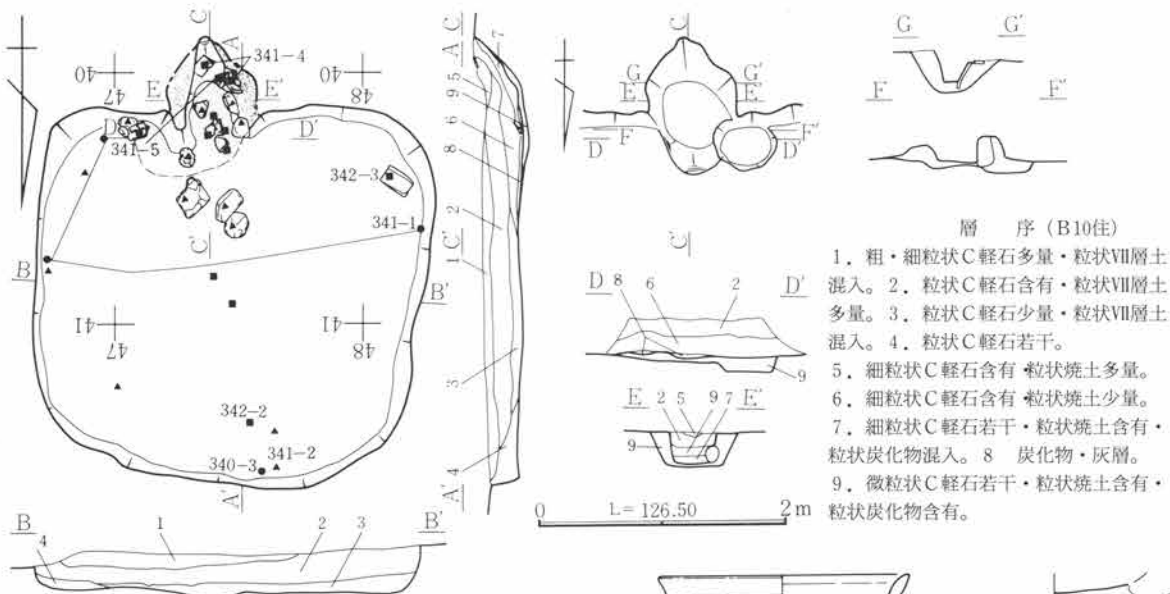
1. 粗・細粒状C軽石多量・塊状Ⅶ層土若干。
2. 細粒状C軽石若干。
3. 細粒状C軽石若干・塊状焼土斑状混入・粒状炭化物若干。
4. 細粒状C軽石含有。
5. 細粒状C軽石少量・粒状焼土若干・塊状Ⅶ層土若干。

所見 当住居は、昭和54年度に実施した試掘調査時のトレンチにより住居の東側半分を失っている。この為詳細に就いては大半が不明である。然、出土遺物のみを見る範囲に於いては、D区の住居分類の第I段階の遺物様相が強く認められることから、住居は、東壁中央にカマドを備え、南東隅部には傍竈坑を備えていたと類推できる。又、失われた東半分は少なくともトレンチ幅内に納まることからすれば、当住居は横長方形乃至矩形を呈していたと考えられる。上述の点から住居は9世紀後半頃の廃棄と考えられる。

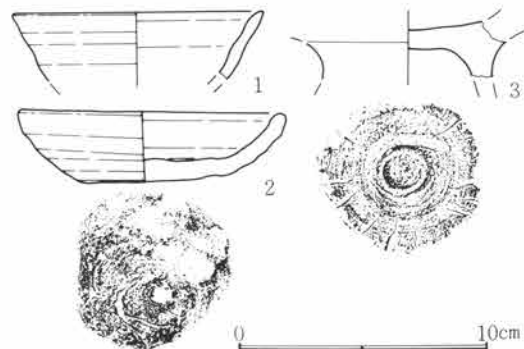


第339図 B区第9号住居跡・出土遺物実測図

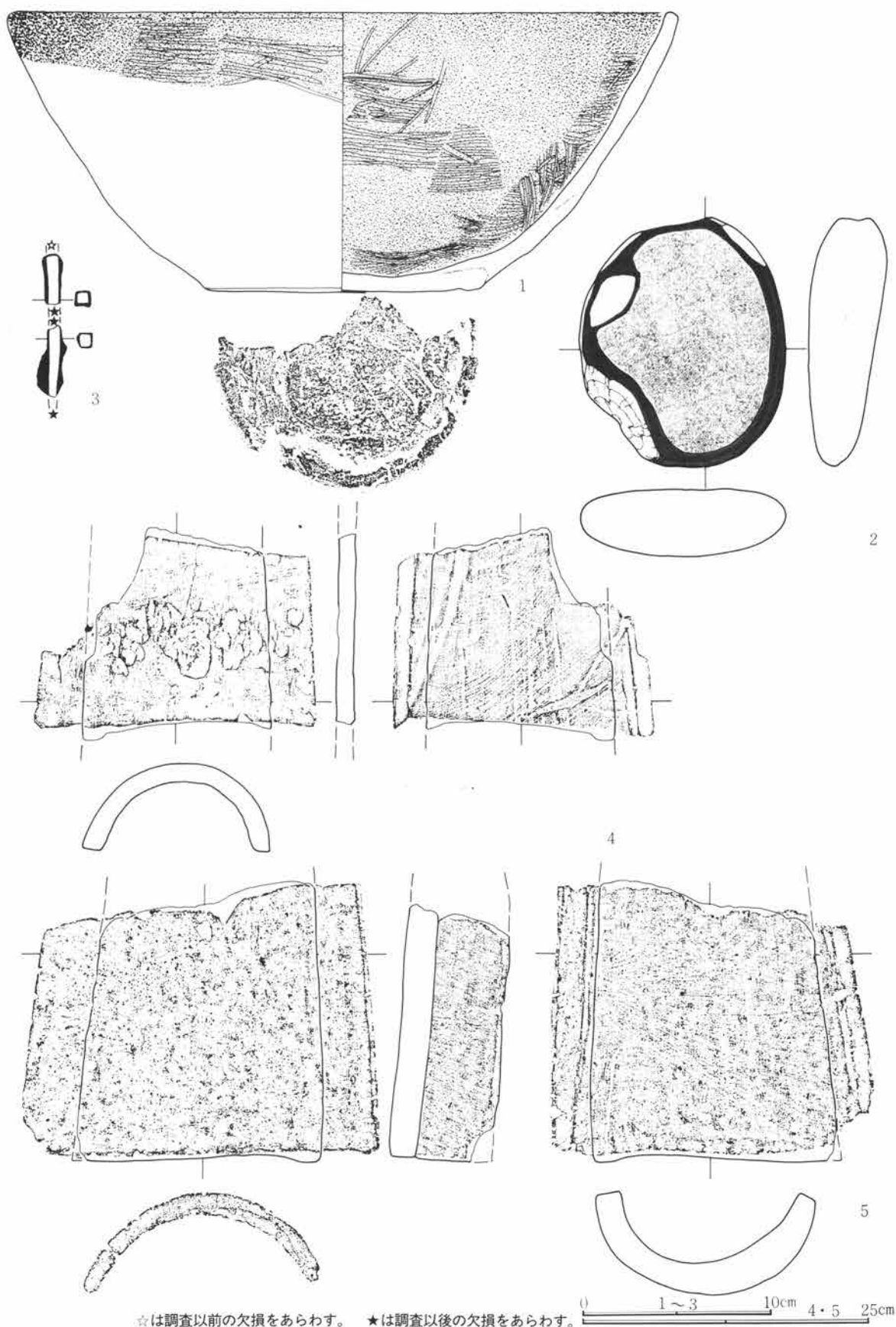
遺構名称	B区第10号住居跡		位置	39~41-B-46~48グリッド内。		残存深度	約30cm
平面形態	正方形基調。	規模	3.0m×3.15m	構築基準辺	東壁	主軸方位	南-3度-北
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	やや大きな単位で凹凸がある。造床は認められなかった。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	未検出。						
カマド	位置	南壁、住居南東隅部から84cm。			主軸方位	北-172度-南	
改築	有。掘り方内から焼土を検出。			形状	舌状を呈する。礫・瓦による補強が顕著。		
規模	全長 88cm 屋外長 60cm 屋内長 22cm 袖部幅 90cm 燃烧部幅 34cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。			袖	左袖が大きく、右袖は礫により補強される。		
煙道	仰角56度程で立ち上がる。			掘り方	五角形状を呈する。		
遺物出土状態	カマド左袖周辺で、床面直上に遺物が群在し、東壁下で床直出土のものがある。						



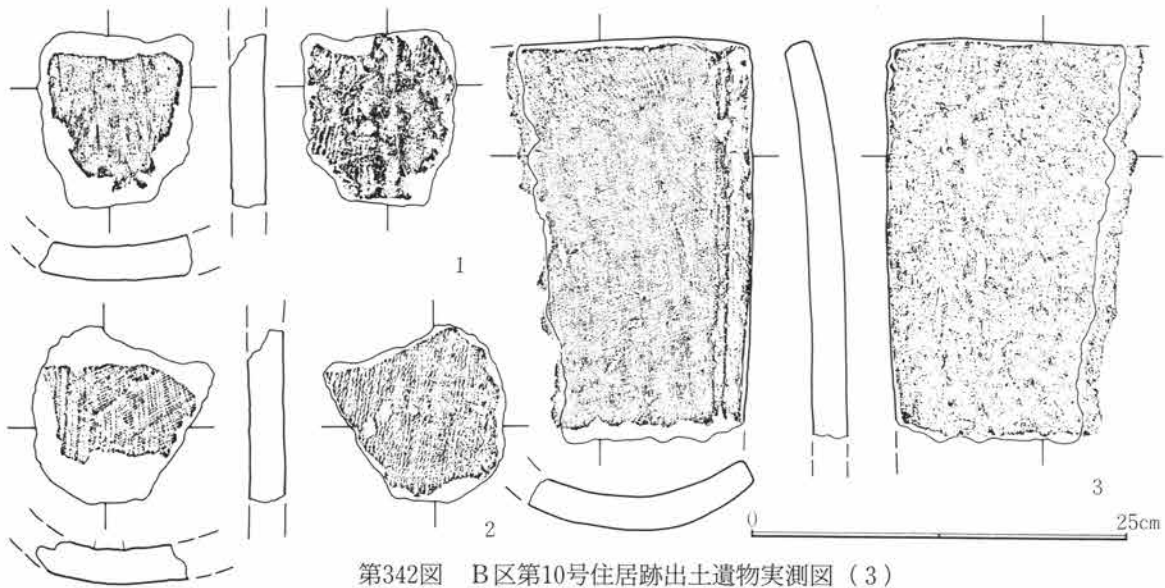
所見 当住は切り合い関係のない数少ない単独住居である。住居は南壁に南東隅部寄りにカマドを具備する南カマドの住居で、C48住と当住居のみの希少例であるが、C48住と当住居では所産年代に大きな違いがあり、平安期の住居としては、南カマドを検出した唯一例である。唯、先述したC103・111住も考慮されるが、実態を伴なう例としては唯一例である。カマドは、西側(右壁)に補強材を用い、袖部では地山砂岩質土の削り出材を用い、燃焼部では瓦を用いている。又、カマド掘り方の右袖部下では、傍竈坑状の掘り込みが検出されているものの、出土遺物等は皆無である。住居形状では、D区の住居分類に対比されるものではなく、出土遺物の様相のみが第II乃至III段階に対比できる。この点から、当住居は10世紀後半代頃の廃棄と考えられる。



第340図 B区第10号住居跡・出土遺物実測図(1)



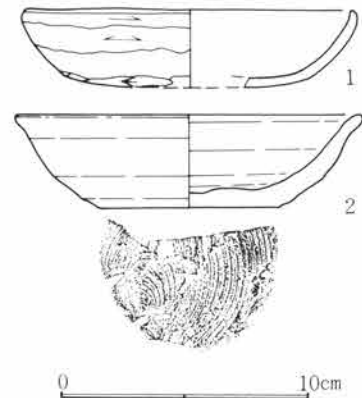
第341図 B区第10号住居跡出土遺物実測図(2)



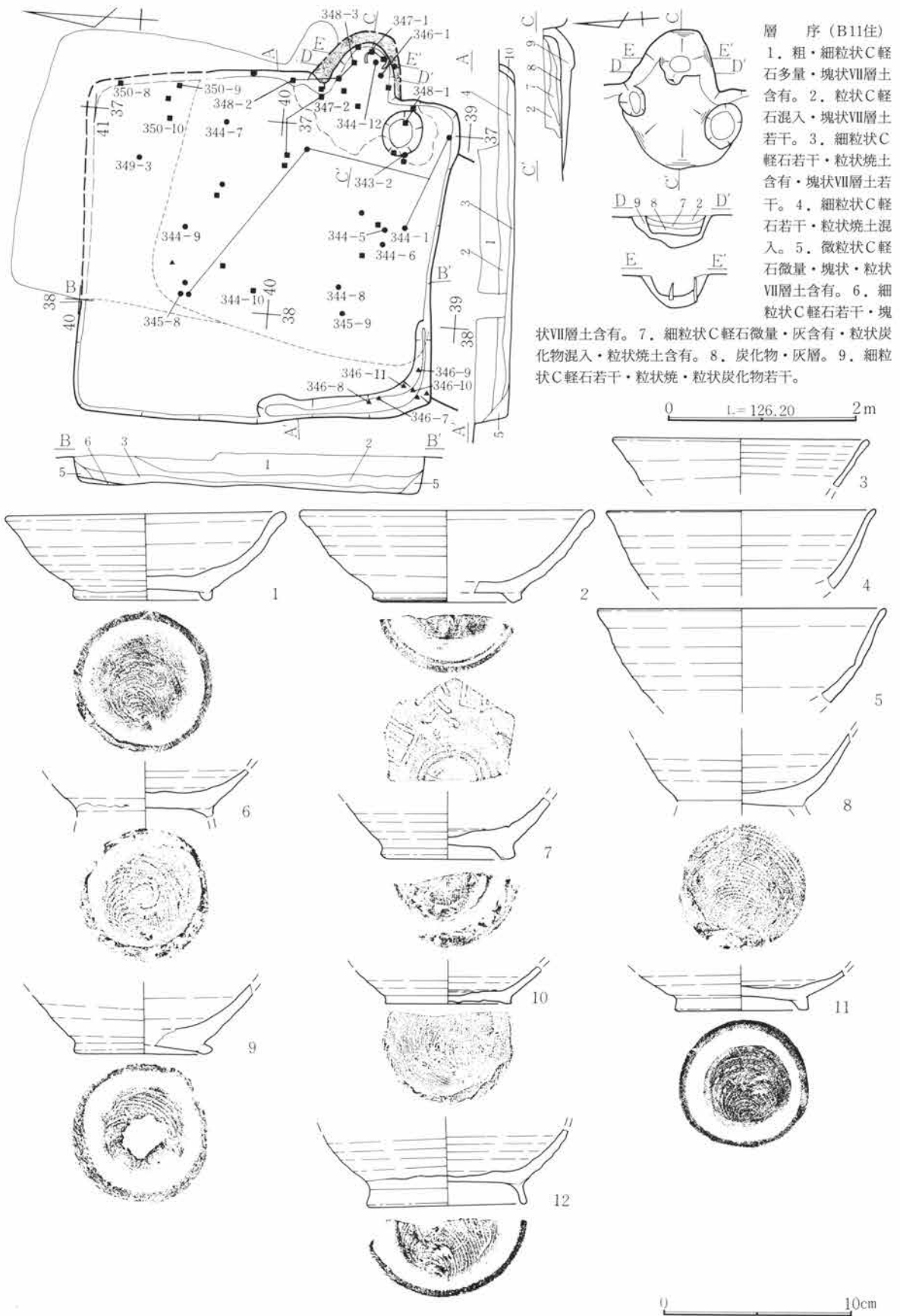
第342図 B区第10号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	B区第11号住居跡		位置	39～41-B-36～38グリッド内。		残存深度	約37cm
平面形態	正方形。	規模	3.68m×3.72m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-91度-南
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	平坦。浅い造床が南東隅部で認められた。			
壁溝	南西隅部で検出。幅12～23cm。		傍竈坑・貯蔵穴	P ₁ か。楕円形。47×40cm・深度-15cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	南東隅部で浅く認められた。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から59cm。			主軸方位	北-97度-南	
改築	有。掘り方内より焼土を検出。			形状	馬蹄形状で、全体に大きい。		
規模	全長 60cm・屋外長 47cm・屋内長 13cm・袖部幅140cm・燃烧部幅 64cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。右奥壁を瓦で補強。						
	袖	右袖は殆ど認められず、左袖が瘤状に認められた。					
煙道	未検出。		掘り方	左袖下に補強材の据方を検出(改築前)。			
遺物出土状態	カマド周辺でやや多い。床面直上での出土は少ないが、直上層での出土はやや多い。						

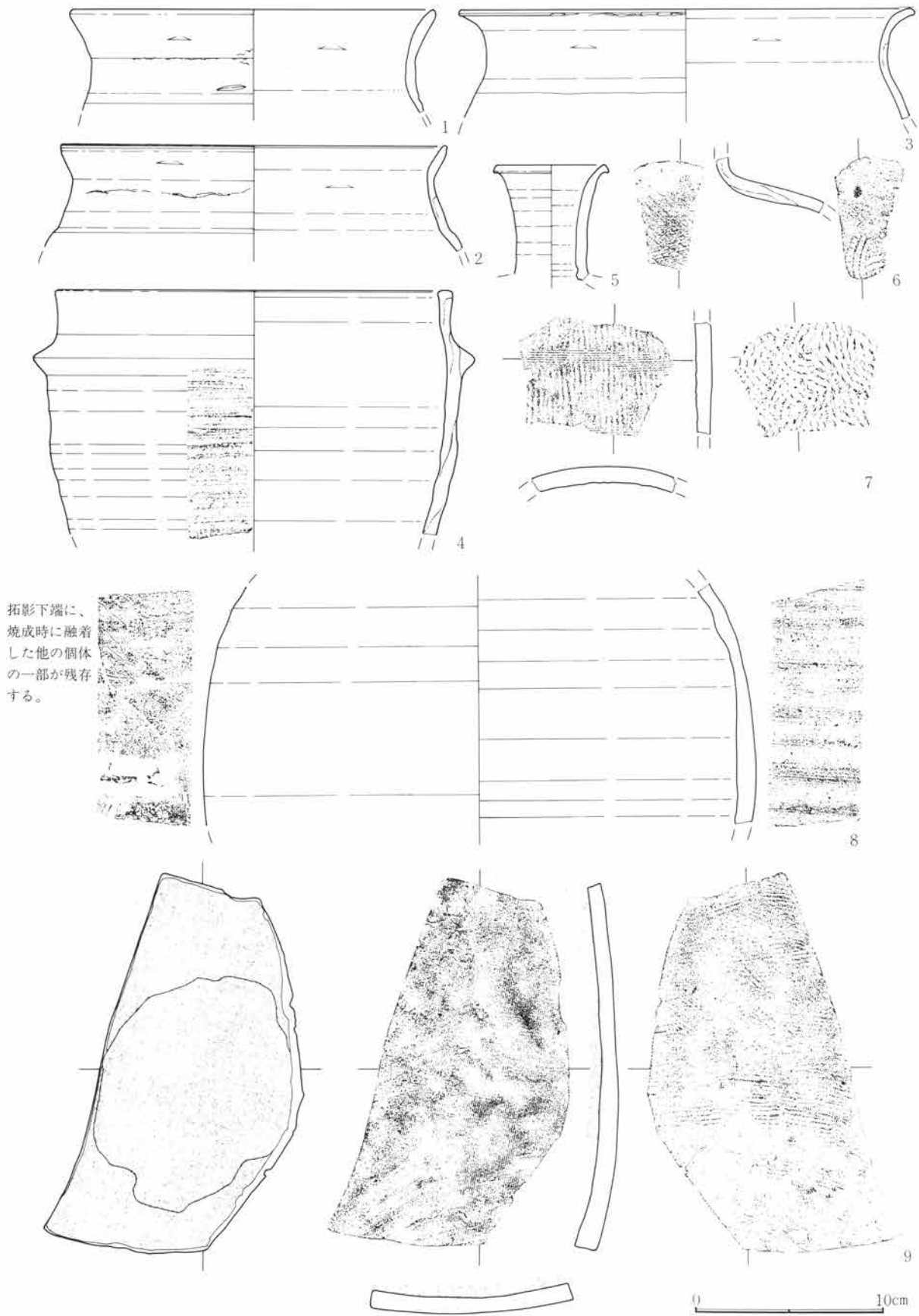
所見 (B11住) 当住居は調査段階では3軒の切り合い状態という認識で調査着手した。これは当住居の南壁を直線走行すると仮定したためであるが、土層観察断面からは詳細は判断されなかった。又、東壁は、B12住と想定した西壁とほぼ平行する状態で検出されている。然し、カマドは、その指向方向がB11住の南壁(南東隅寄りの部分)に対しほぼ平行する状態である。更に、床面と認定した面も両者の差はないことなどから判断が非常に困難な状態である。だが、カマド左袖の立ち上がりの状態・南壁と南西隅部の壁溝等の状況から、調査時に確認した、B11・12号住居は同一の住居であると考えられる。上述した状況は図上に破線により図示した。住居の廃棄は、住居形状がD区の第II段階に対比され出土遺物も同様であることから、10世紀前半と考えられる。



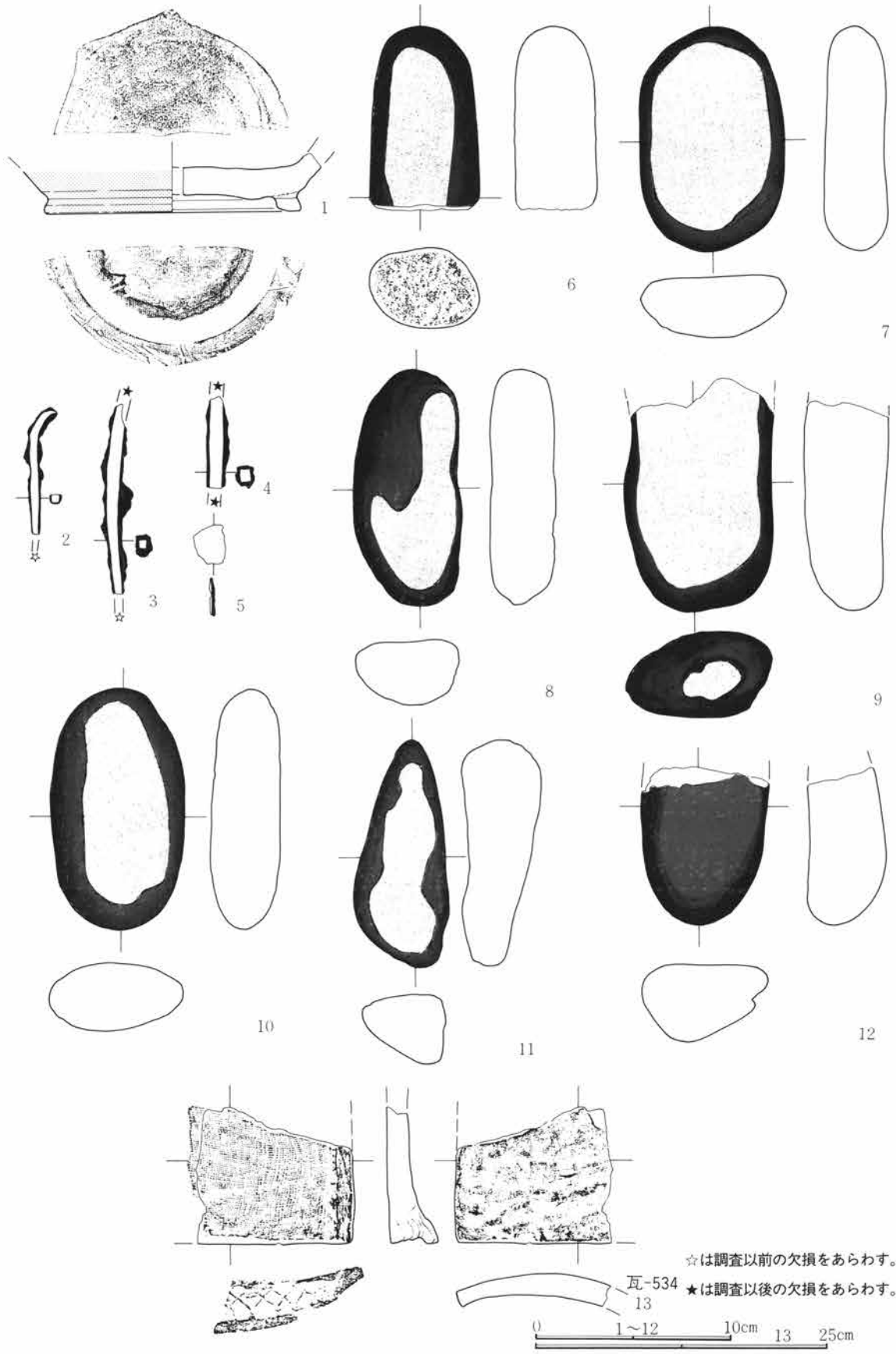
第343図 B区第11号住居跡出土遺物実測図(1)



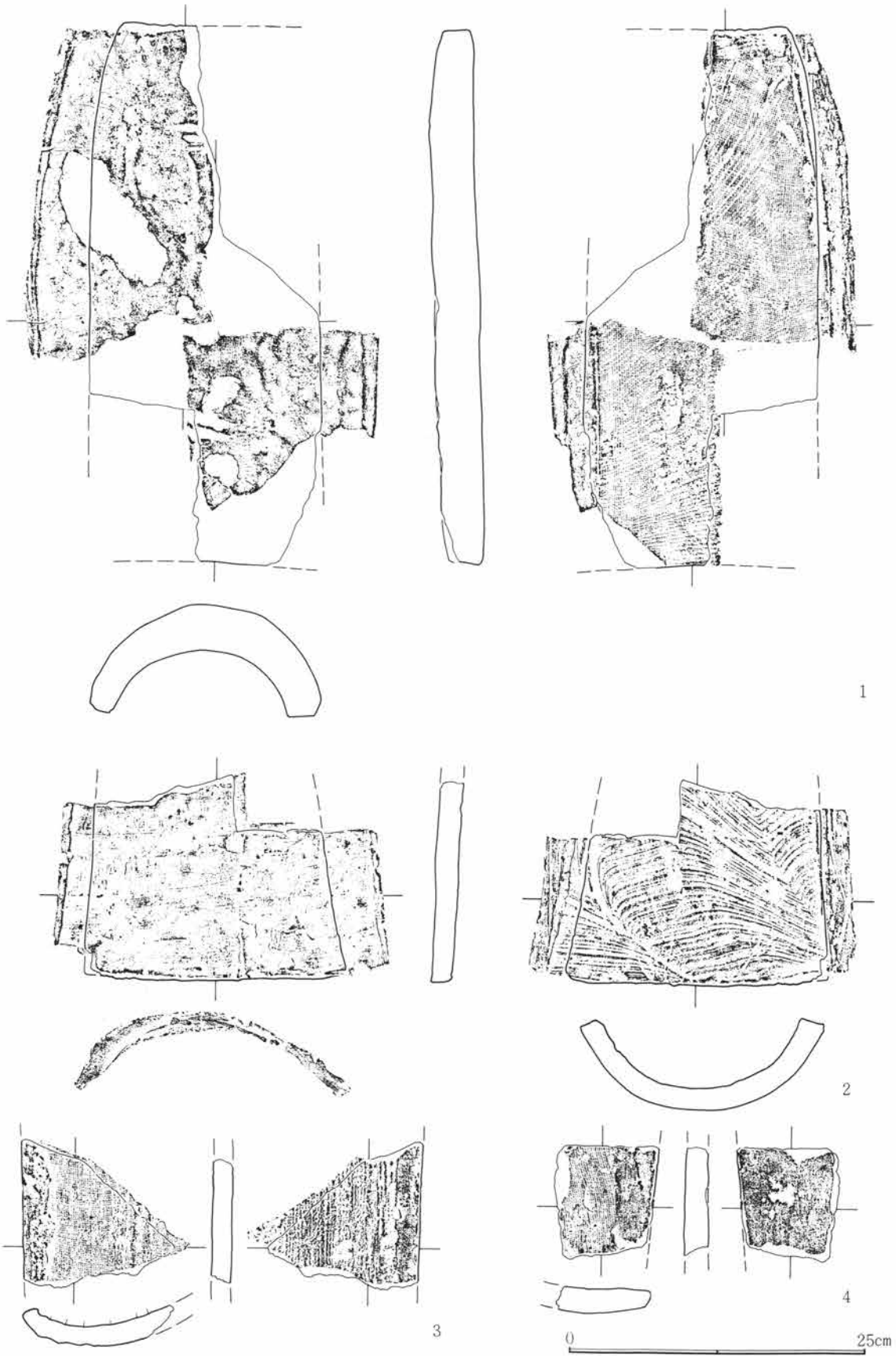
第344図 B区第11号住居跡・出土遺物実測図(2)



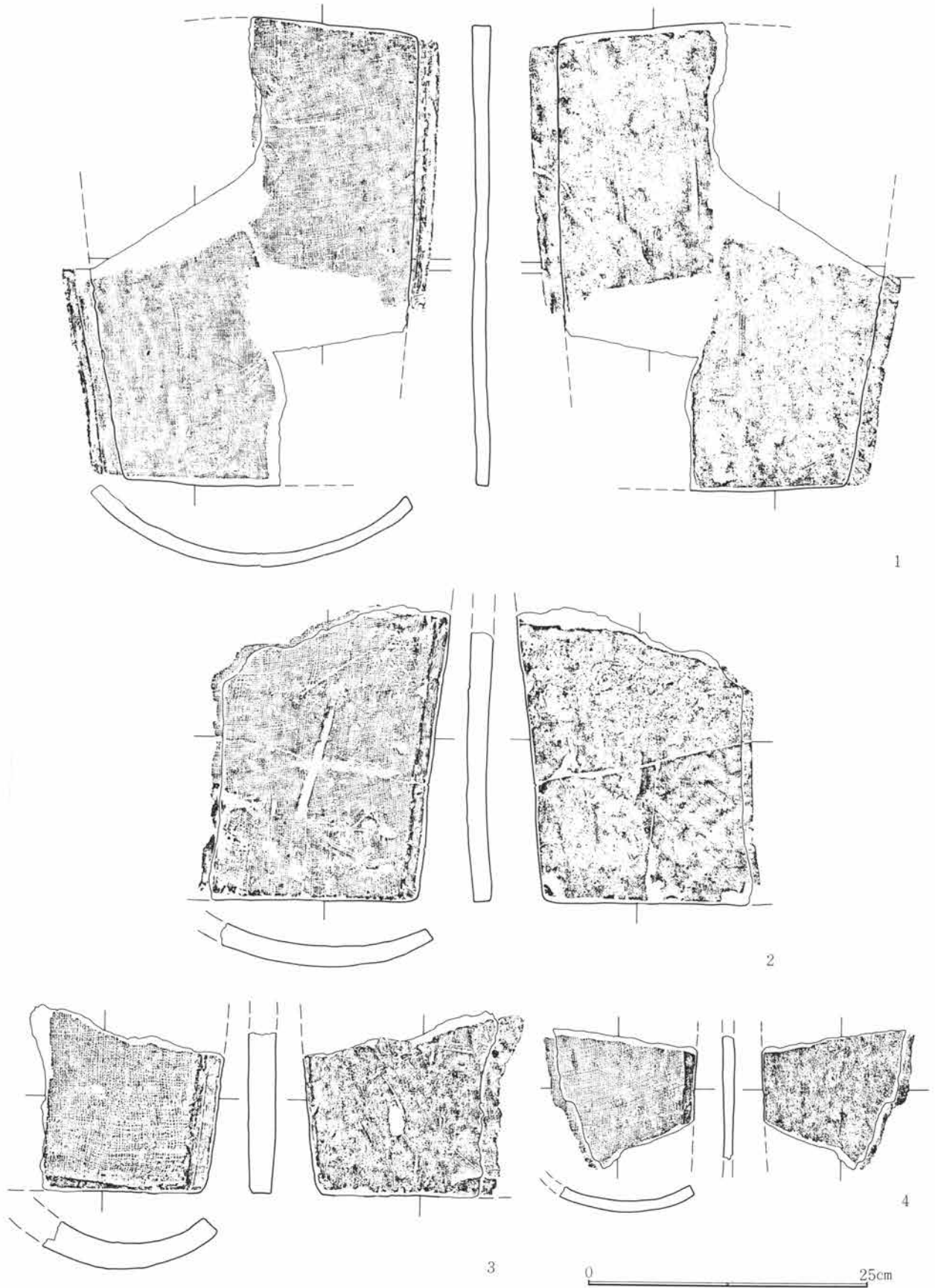
第345図 B区第11号住居跡出土遺物実測図(3)



第346図 B区第11号住居跡出土遺物実測図(4)

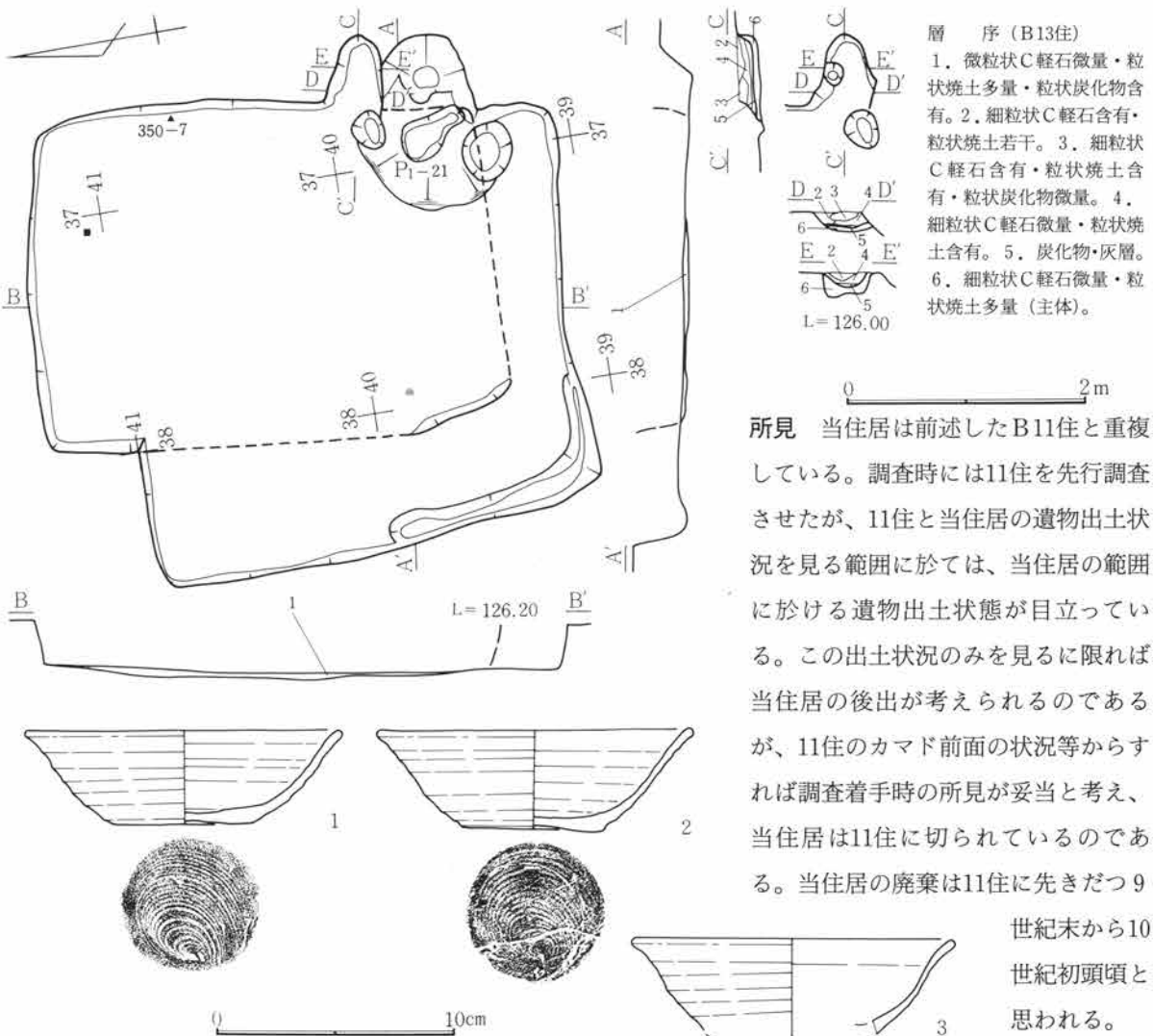


第347図 B区第11号住居跡出土遺物実測図(5)

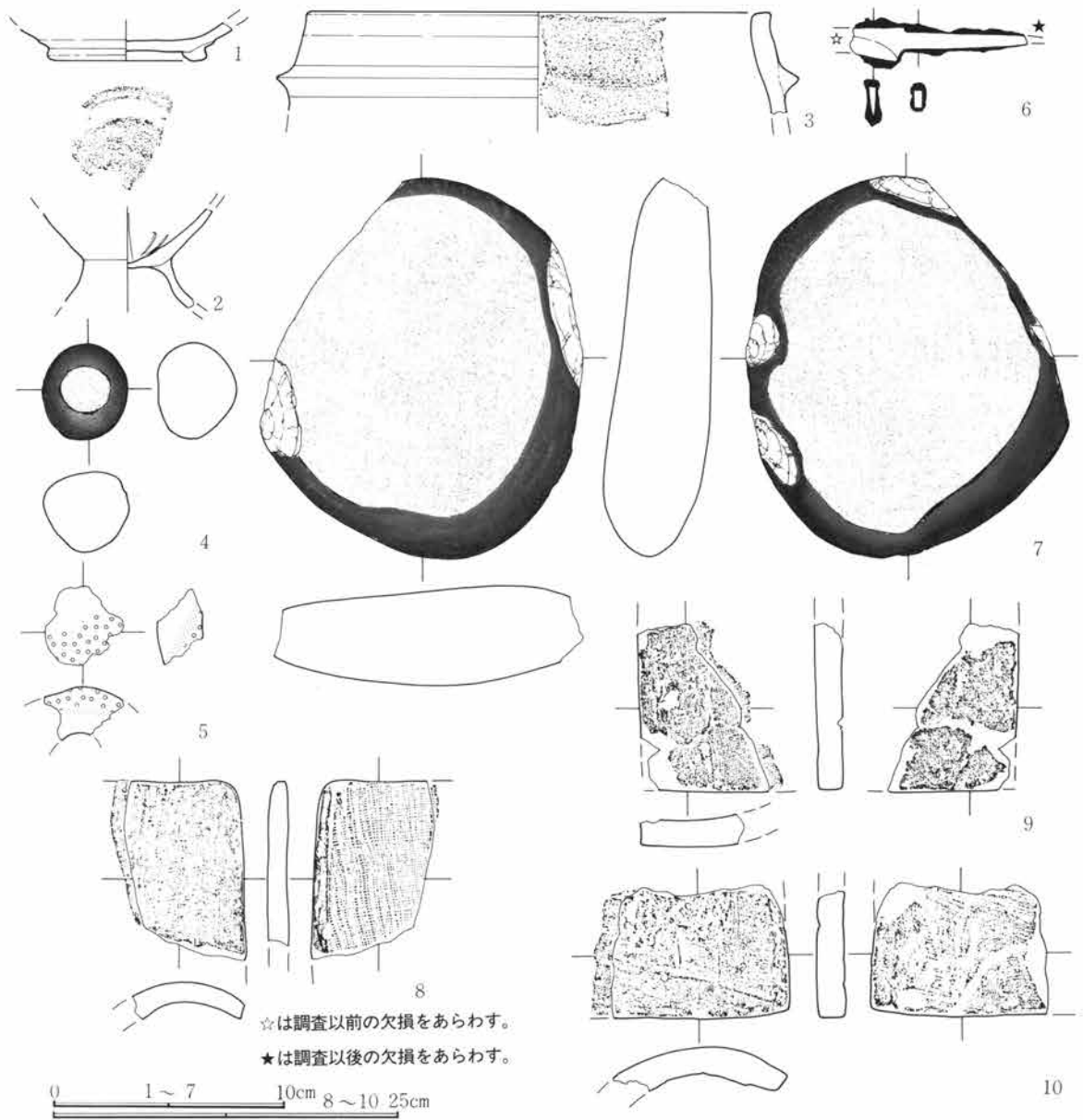


第348図 B区第11号住居跡出土遺物実測図(6)

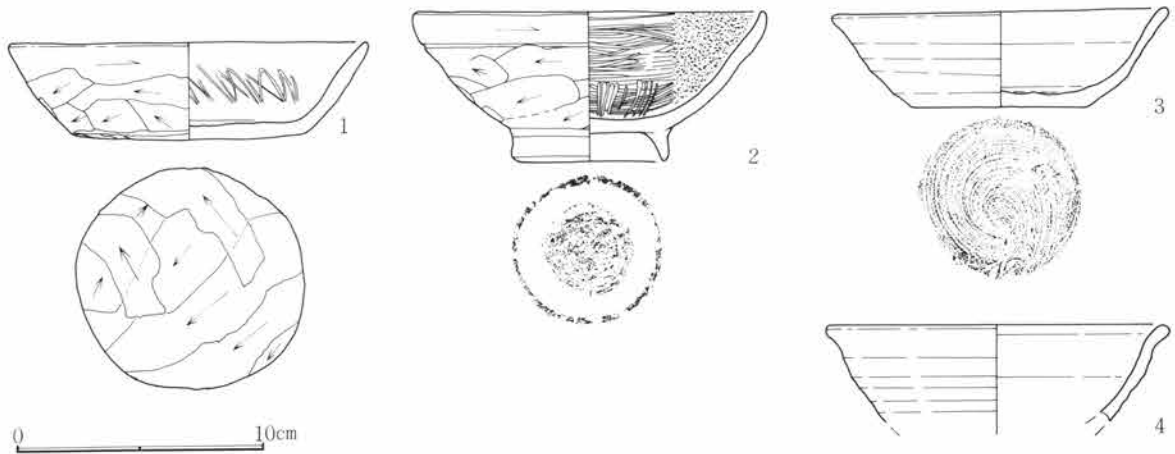
遺構名称	B区第13号住居跡		位置	39~41-B-36~38グリッド内。			残存深度	約36cm
平面形態	横長方形。	規模	2.84m×(3.84)m	構築基準辺	不分明	主軸方位	北-96度-南位か	
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦。全体に浅い造床が認められた。				
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P ₁ か。不整形。60×30cm・深度-21cm				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	全体に浅く、窪んだ状態で中央を主体に認められた。							
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から50cm程か。				主軸方位	北-100度-南	
改築	有。掘り方から多量の焼土を検出。			形状	舌状。			
規模	全長 60cm・屋外長 60cm・燃烧部幅 70cm程か。							
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。補強材等は未検出。							
	袖	左袖は殆ど認められない。						
煙道	未検出。			掘り方	使用形状と殆ど変わらない。			
遺物出土状態	出土遺物は少なかった。							



第349図 B区第13号住居跡・出土遺物実測図 (1)

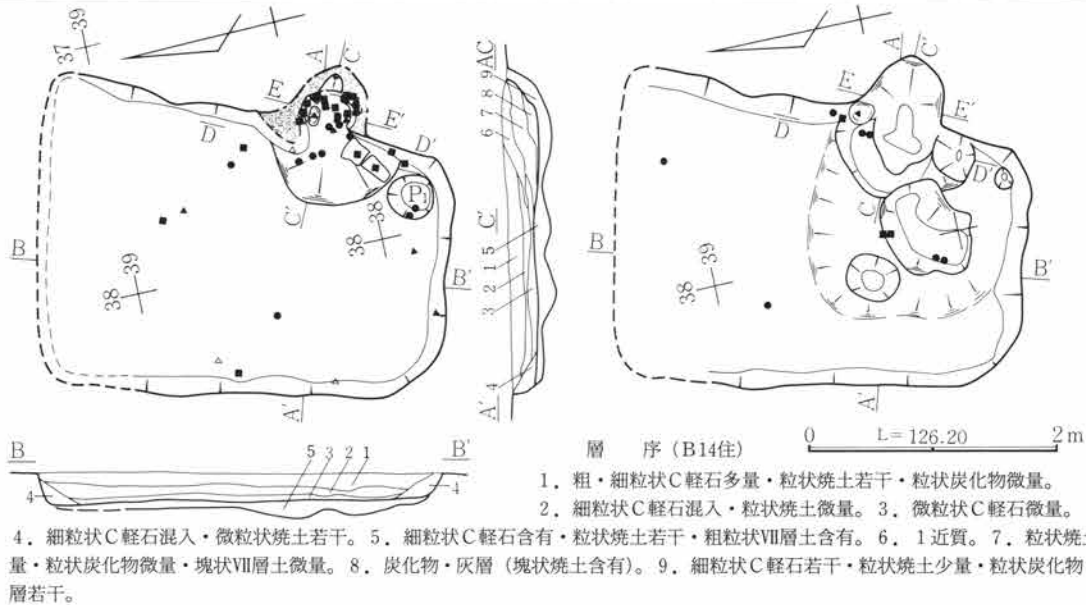


第350図 B区第13号住居跡出土遺物実測図(2)

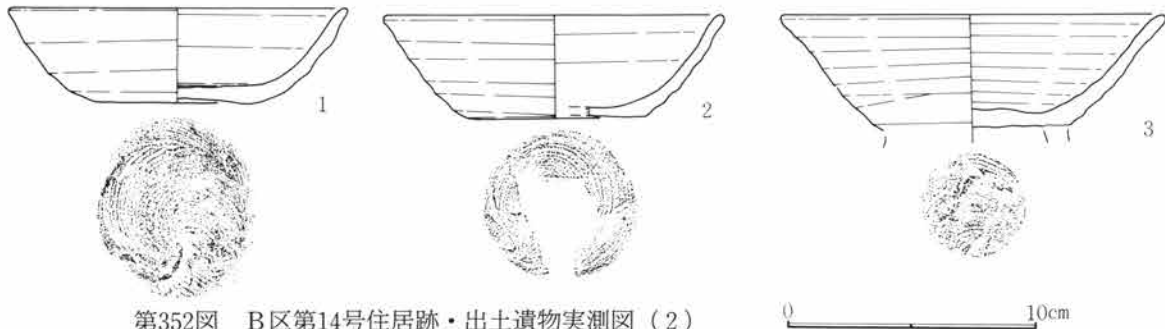


第351図 B区第14号住居跡出土遺物実測図(1)

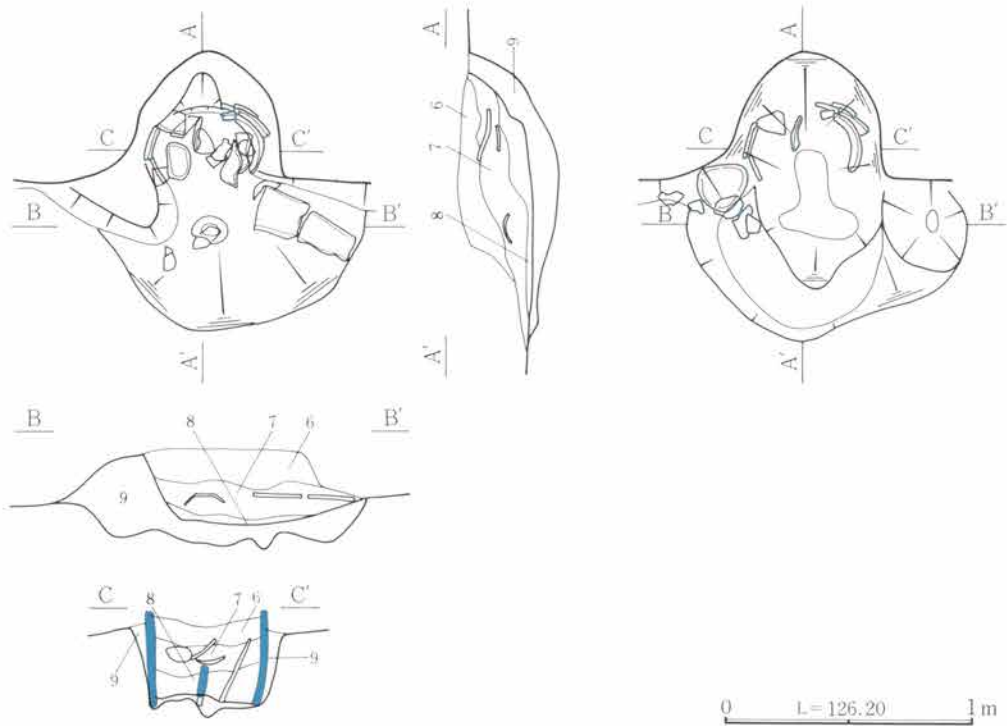
遺構名称	B区第14号住居跡		位置	37～39—B—37・38グリッド内。		残存深度	約33cm
平面形態	横長方形。	規模	3.50m×4.90m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-105度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦。全面に造床が認められた。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P ₁ 。楕円形。55×48cm・深度—8cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	土坑状の掘り込みP ₂ ・P ₃ を検出。他の部分の底は全体に平坦。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から100cm。			主軸方位	北-115度-南	
改築	有。掘り方内から焼土を検出。		形状	円形状（焚口部全体を含めれば瓢形状を呈する）。			
規模	全長 95cm・屋外長 60cm・屋内長 35cm・袖部幅140cm・燃烧部幅 57cm・煙道部幅 23cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。壁を瓦で補強する。						
	袖	断面で左袖を確認。右袖は未確認。					
煙道	一部を検出。仰角56度程で立ち上がる。		掘り方	焚口は扇状・燃烧部は楕円形状を呈する。			
遺物出土状態	床直遺物は皆無に近く、床面直上での出土がややある。						



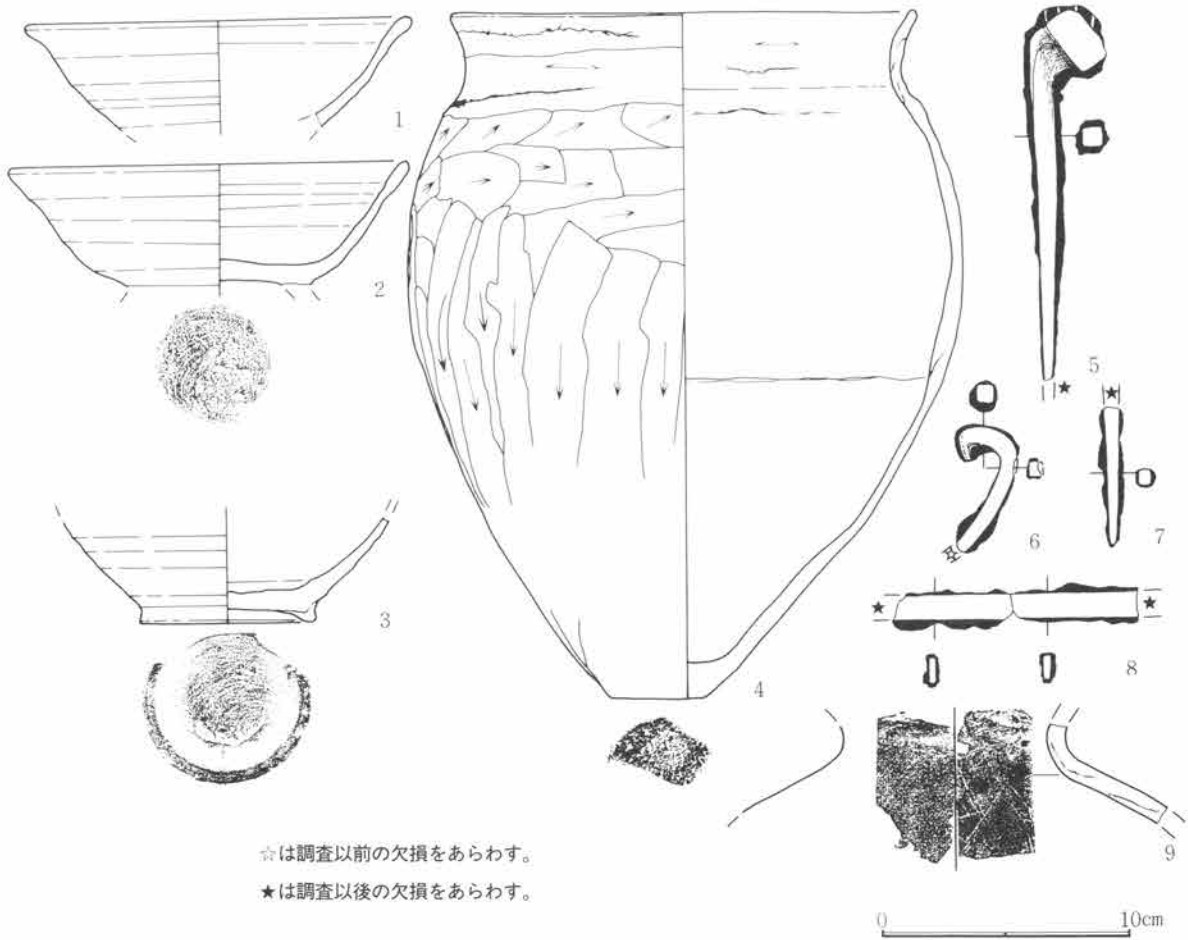
所見 当住居はB11住に切られている。住居は横長方形を呈し、東壁中央よりやや南東隅部に寄った位置にカマドを具備し、更に南東隅部下には傍竈坑を備えており、D区の住居分類の第II段階に対比し得る。カマドは、瓦を多く用いている。この瓦の中には完形瓦が一点含まれている。出土遺物では、やはりD区の第I・II段階の様相が認められることから、当住居も13住に近い9世紀末から10世紀初頭と考えられる。



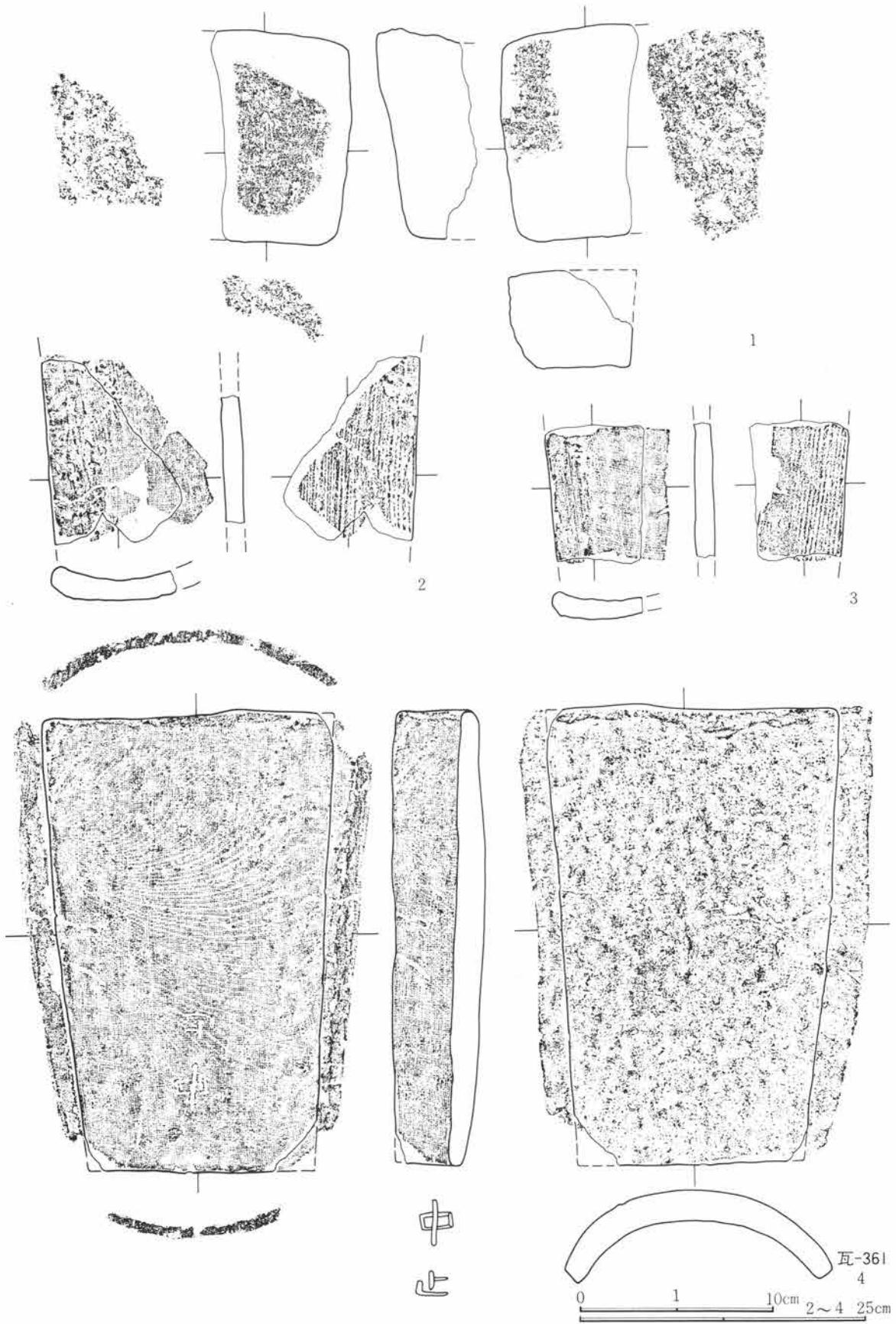
第352図 B区第14号住居跡・出土遺物実測図(2)



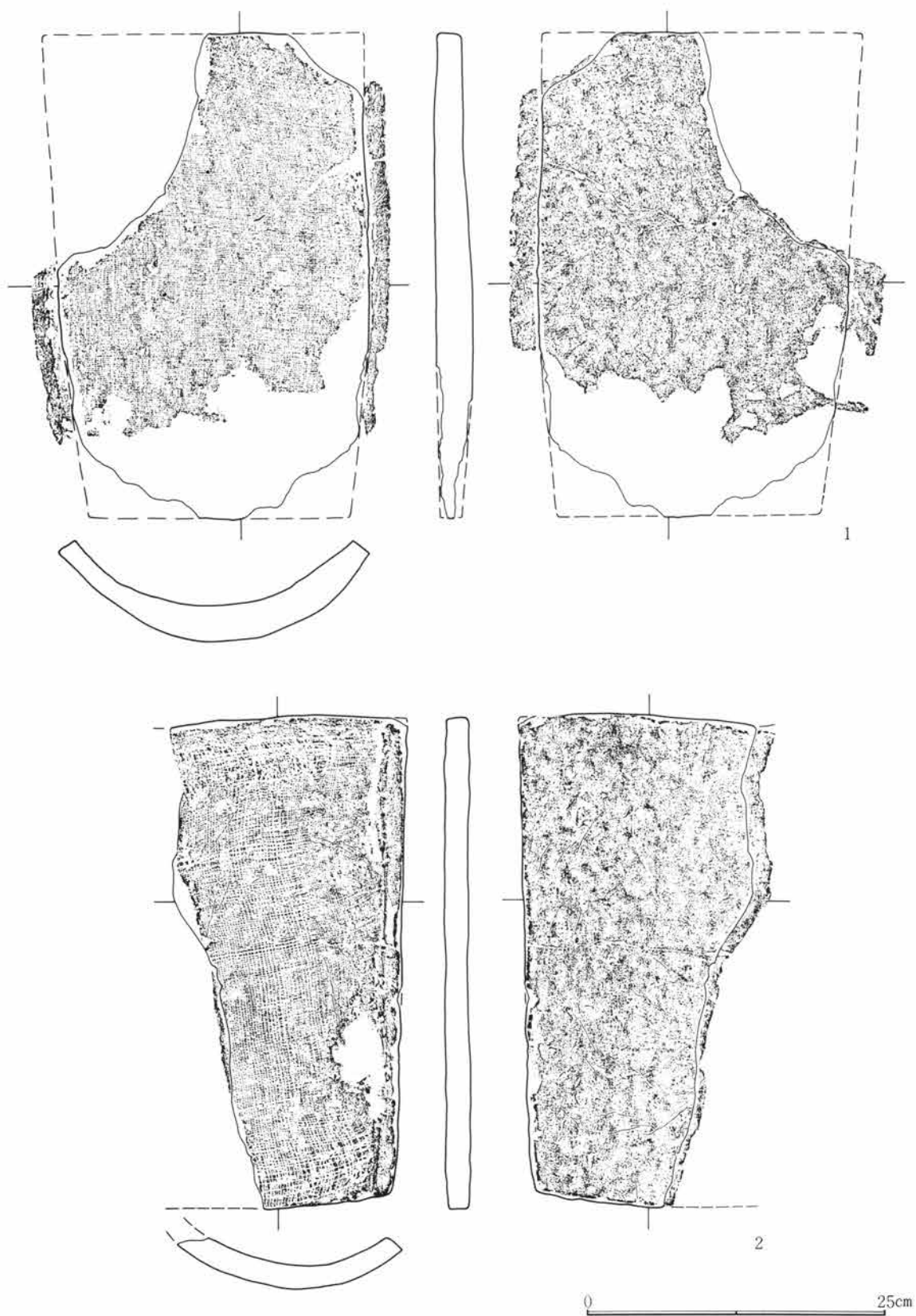
第353図 B区第14号住居跡カマド実測図



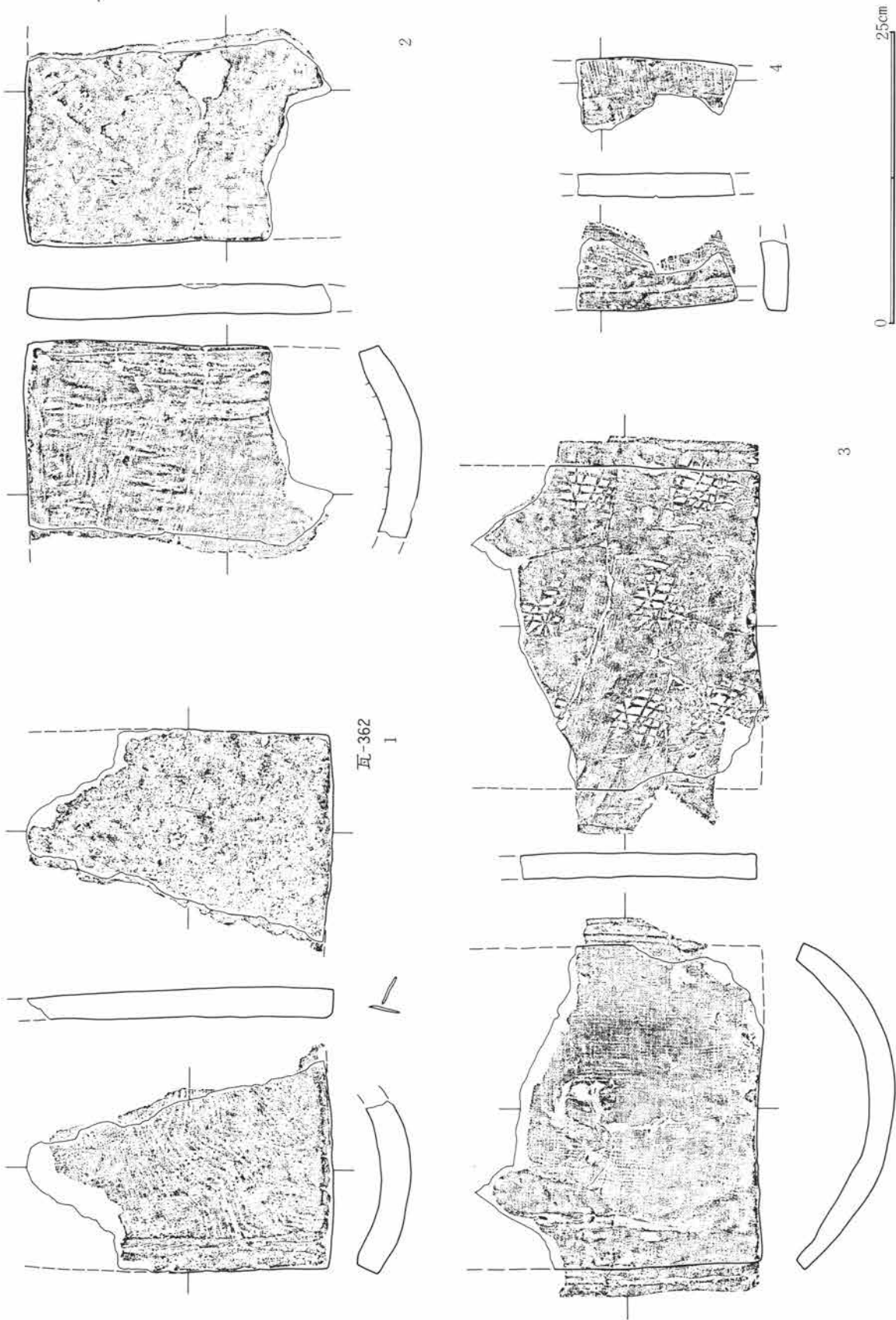
第354図 B区第14号住居跡カマド・出土遺物実測図(3)



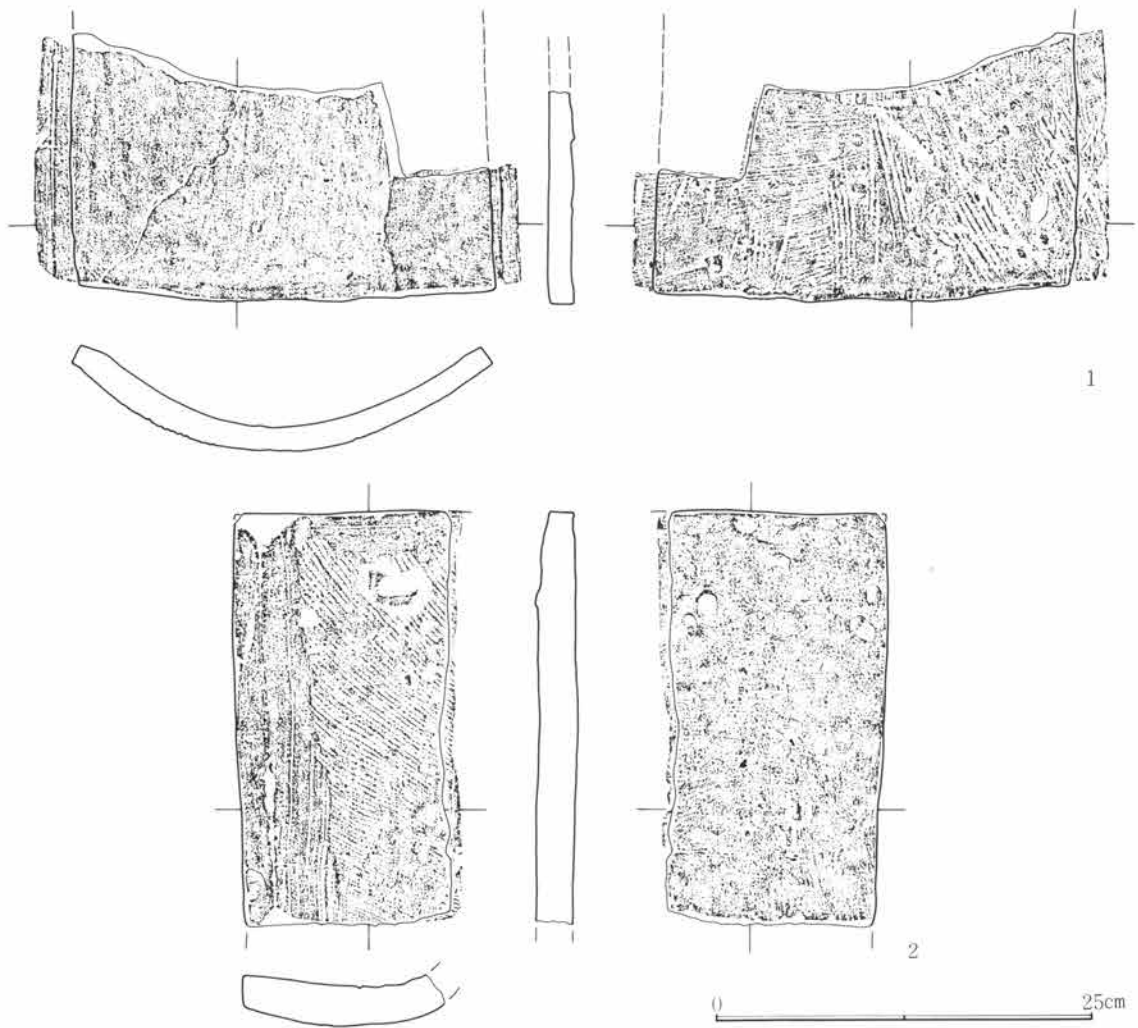
第355図 B区第14号住居跡出土遺物実測図(4)



第356図 B区第14号住居跡出土遺物実測図(5)

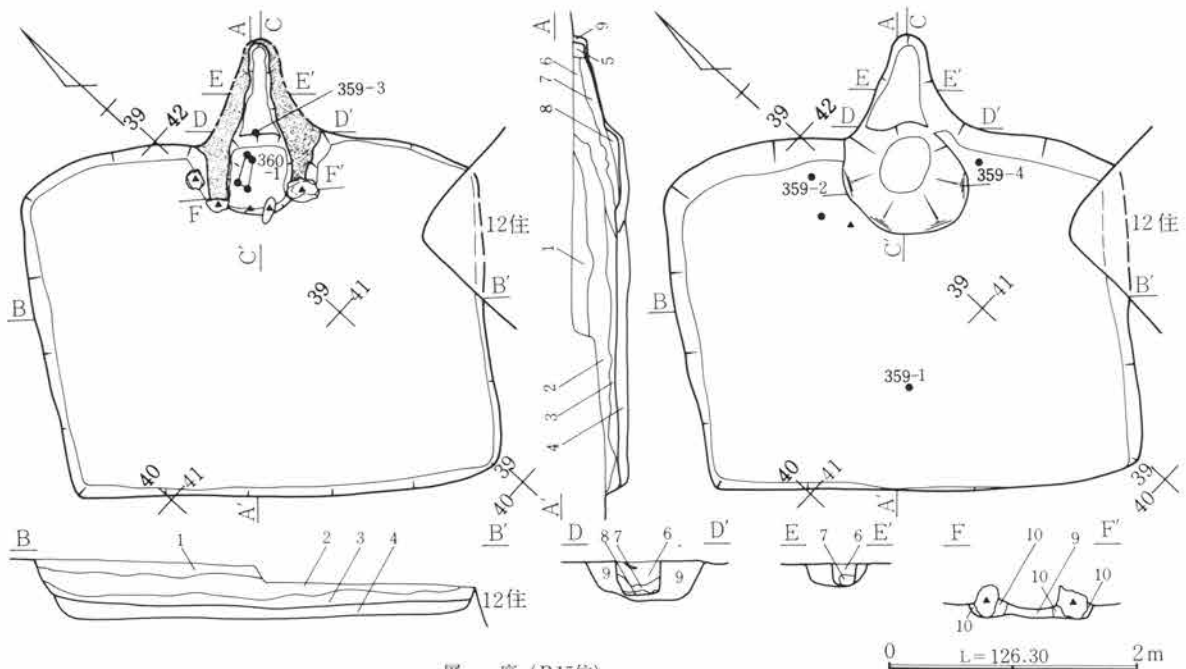


第357図 B区第14号住居跡出土遺物実測図(6)



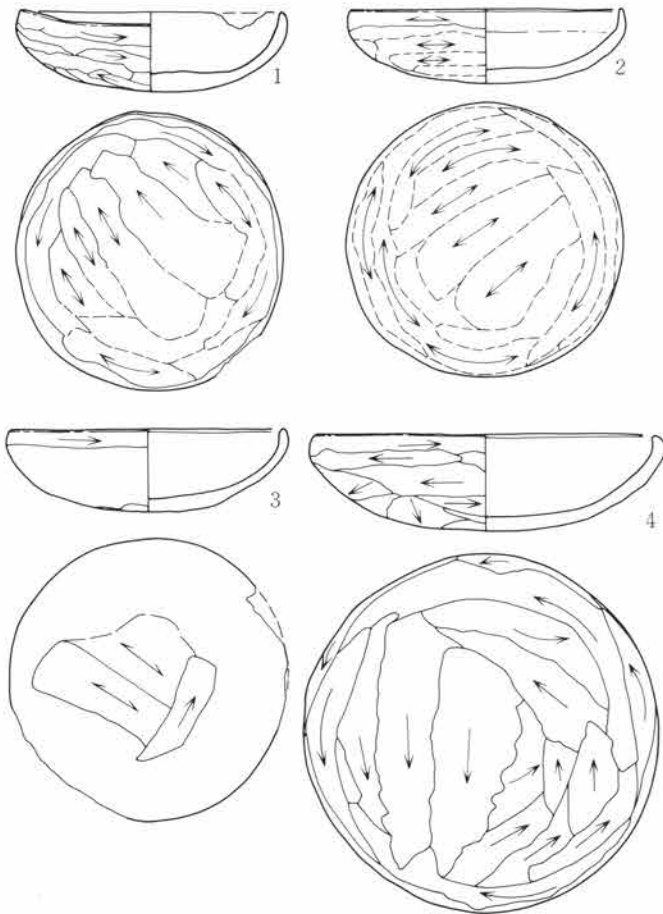
第358図 B区第14号住居跡出土遺物実測図（7）

遺構名称	B区第15号住居跡		位置	40～42-B-38～40グリッド内。			残存深度	約34cm
平面形態	横長方形。	規模	2.78m×3.65m	構築基準辺	西壁か	主軸方位	北-46度-南	
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦。全面に浅く造床が認められる。				
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	平坦。全体に造床を行なう。柱穴等の施設は未検出。							
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から110cm。				主軸方位	北-47度-南	
改築	有。礫の据方・掘り方埋土で確認。			形状	細い舌状を呈し、燃烧部は方形形状を呈する。			
規模	全長136cm・屋外長 77cm・屋内長 59cm・袖部幅118cm・燃烧部幅 48cm・煙道部幅18～26cm。							
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。			袖	屋内に長く突出し、先端部に礫を据える。			
煙道	細く屋外に突出する。			掘り方	全体的には瓜状を呈する。			
遺物出土状態	覆土内に瓦が混入するが、25号住の遺物と考えられる。							



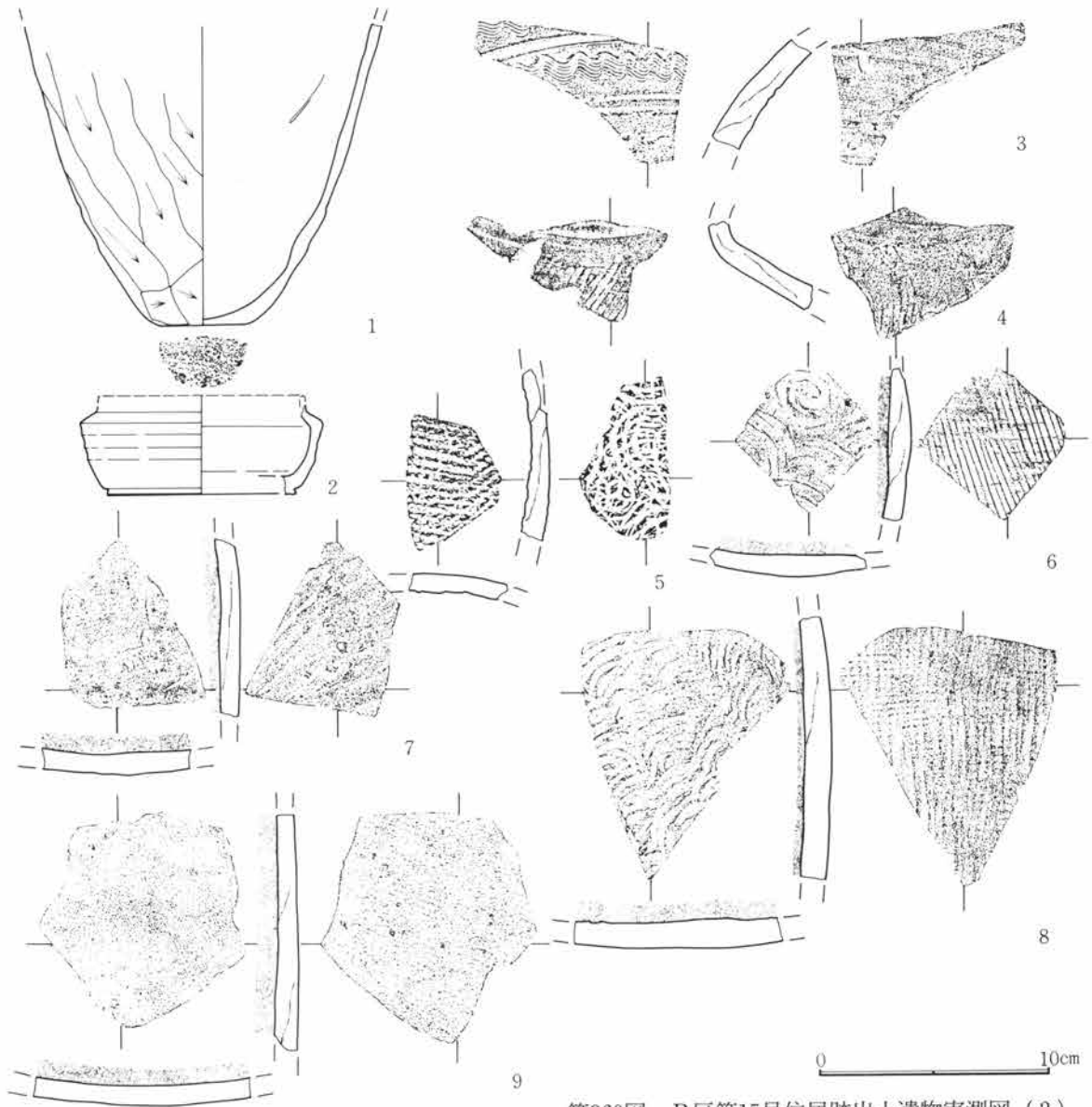
層序 (B15住)

1. 粗・細粒状C軽石多量。2. 粒状C軽石混入。3. 細粒状C軽石若干・灰含有・粒状焼土少量。4. 細粒状C軽石含有・粒状焼土少量・粗粒状VII層土含有。5. 粒状C軽石混入・灰含有・粒状焼土含有。6. 細粒状C軽石若干・粒状焼土混入・粒状炭化物含有。7. 細粒状C軽石微量・塊状焼土混入・粒状焼土多量・灰多量。8. 炭化物・灰層。9. 微粒状C軽石微量・粒状焼土・粒状炭化物・灰の混土層。10. 微粒状C軽石微量・粒状焼土主体。

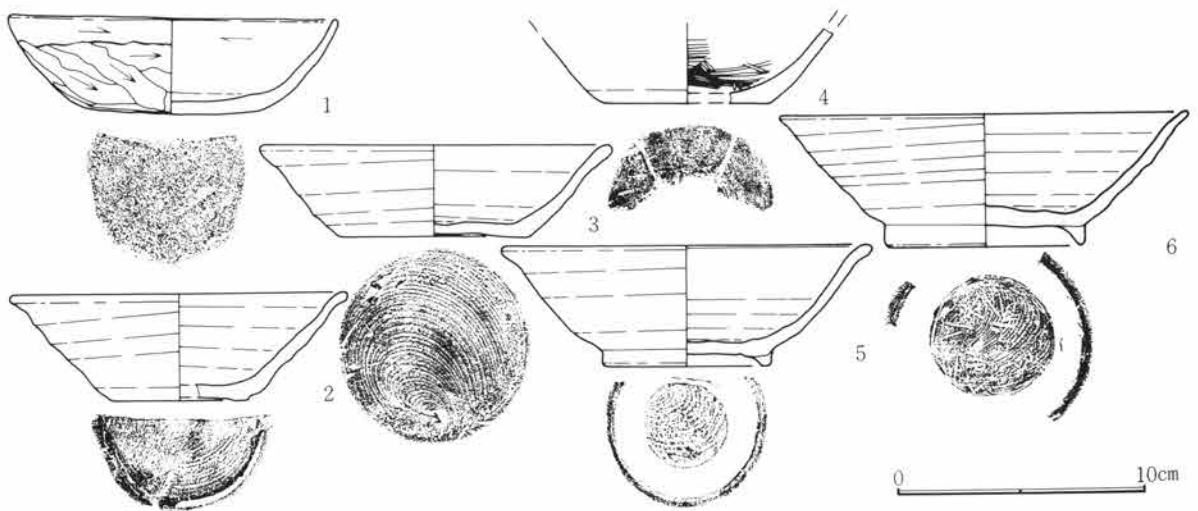


所見 当住居は24住・25住と重複し、24住を切ることは調査着手以前に判明していたが、25住との切り合い関係は判断されなかった。唯、25住のカマドと考えられる状況等はその一切が調査段階では認められなかった。然し、それは25住が住居としての前提であって土坑等の小規模遺構としての認識が無かった点にある。上述の状況では、詳細には言及し兼ねる。住居は東壁のほぼ中央にカマドを具備している。主軸方向は北側に45度も振っている点と、出土遺物の様相からは、当住居は、D区の第I段階以前の所産なることが明らかであることから、出土遺物の様相で当住居の廃棄時期を推定すると、7世紀後半から末頃と考えられる。

第359図 B区第15号住居跡・出土遺物実測図(1)

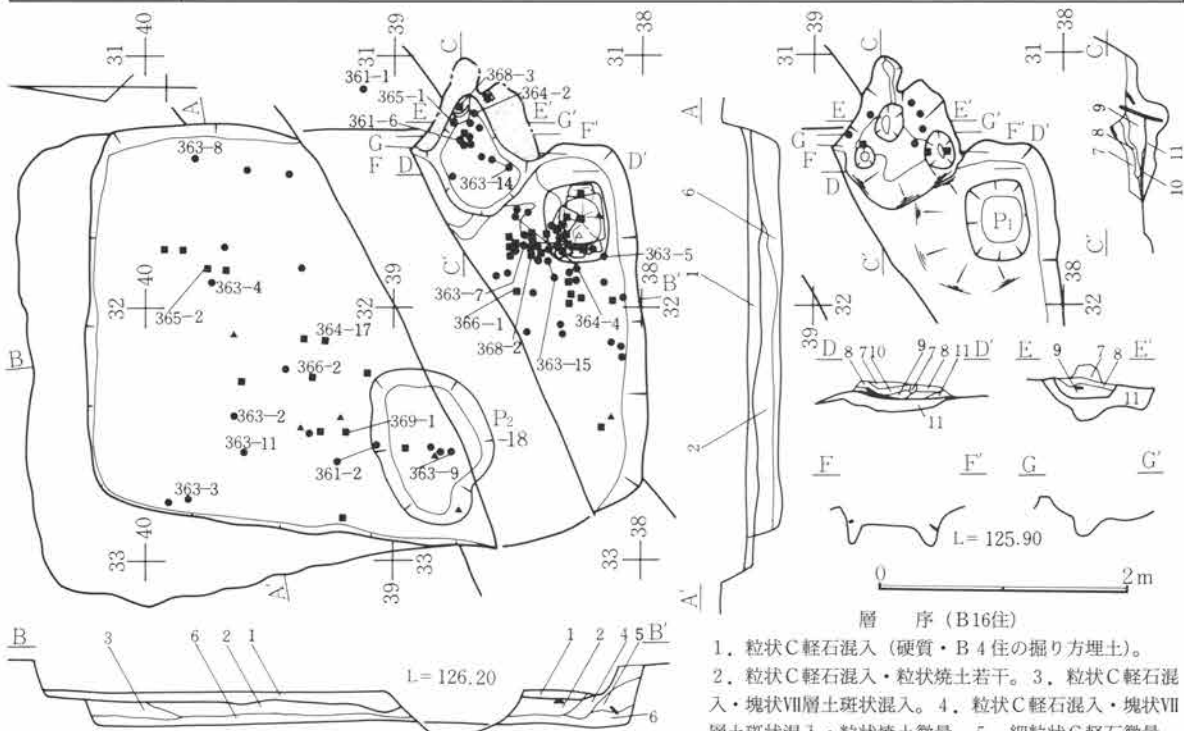


第360図 B区第15号住居跡出土遺物実測図(2)



第361図 B区第16号住居跡出土遺物実測図(1)

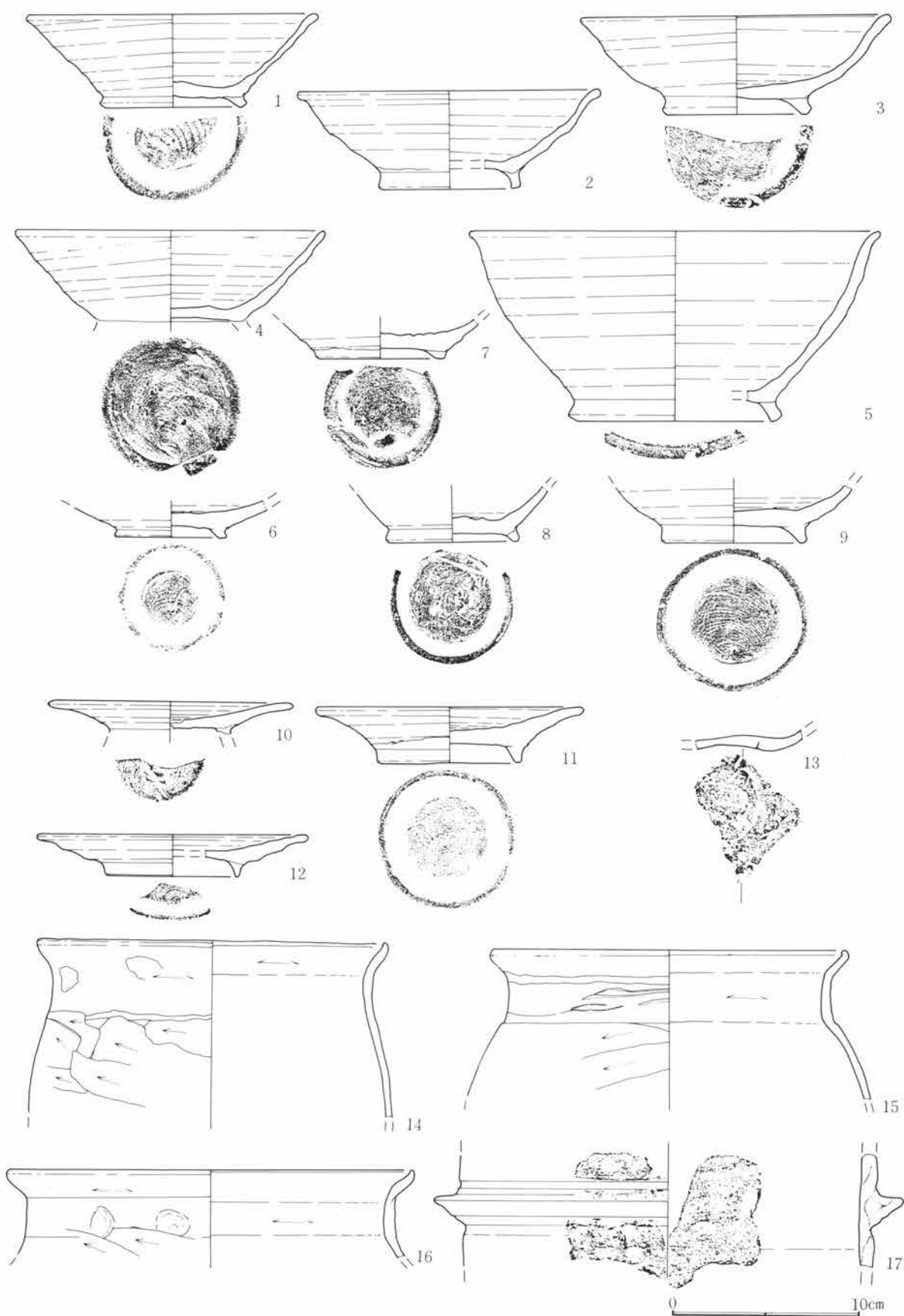
遺構名称	B区第16号住居跡		位置	37~40-B-31・32グリッド内。		残存深度	約20cm
平面形態	横長方形。	規模	3.1m×4.38m	構築基準辺	北壁	主軸方位	北-93度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦。造床は極部分的に認められた。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P ₁ 。隅丸胴張り長方形。62×50cm・深度-14cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	中央西壁寄りて土坑状のP ₂ が検出された。又、南東隅部の傍竈坑周辺で認められた。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から50cm。			主軸方位	北-91度-南	
改築	有。袖補強材の据方を検出(改築以前)。		形状	三角形状(基調は舌状)。			
規模	全長100cm・屋外長 34cm・屋内長 46cm・袖部幅110cm・燃烧部幅 42cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。奥壁を瓦で補強する。						
	袖	瘤状で小さいが、6号溝の破壊で不明な部分がある。					
煙道	未検出。		掘り方	改築以前の袖補強材の据方を検出。			
遺物出土状態	遺物の出土量は多く、床面直上での出土が多い。						



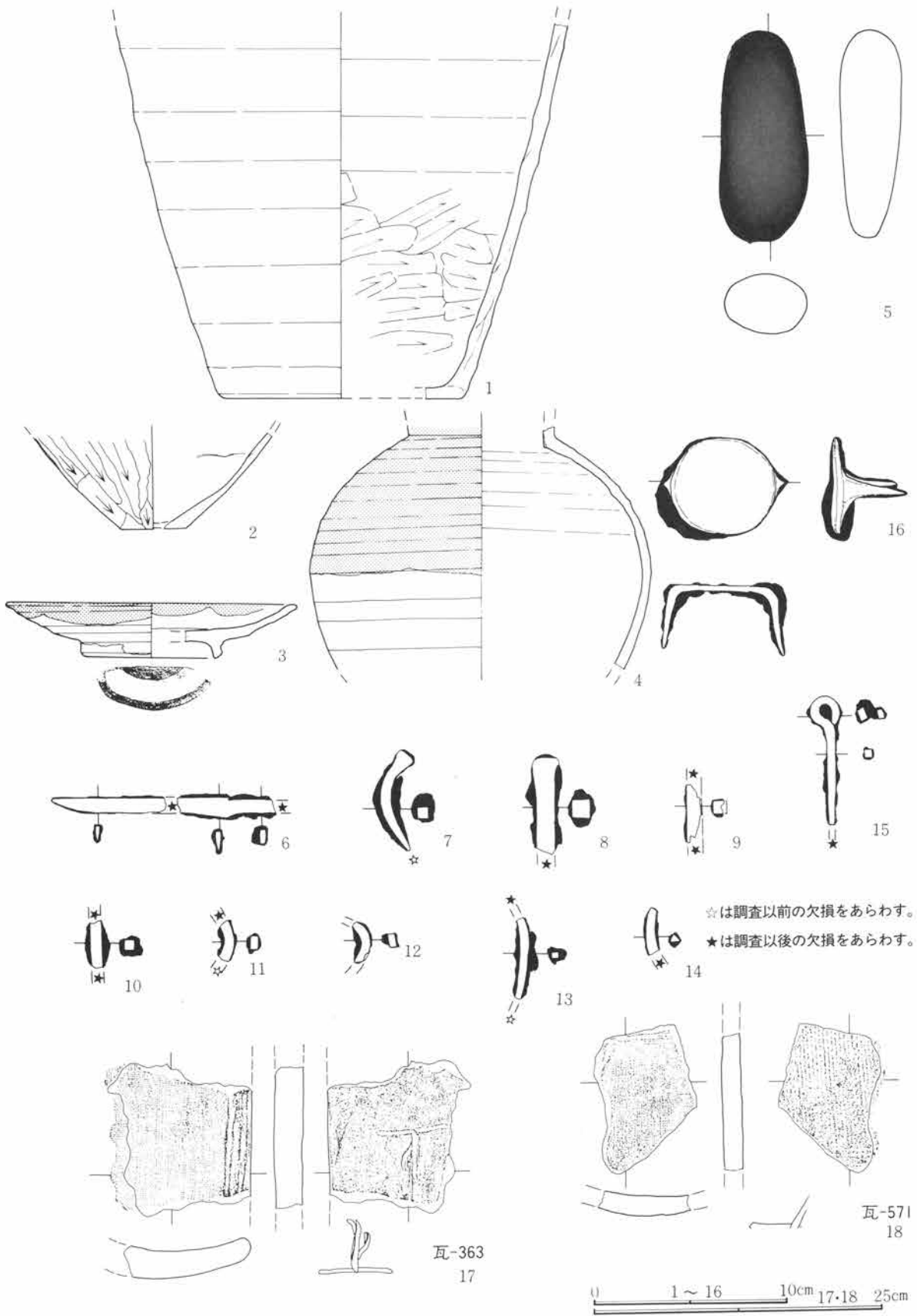
層序 (B16住)
 1. 粒状C軽石混入(硬質・B4住の掘り方埋土)。
 2. 粒状C軽石混入・粒状焼土若干。3. 粒状C軽石混入・塊状VII層土斑状混入。4. 粒状C軽石混入・塊状VII層土斑状混入・粒状焼土微量。5. 細粒状C軽石微量。
 6. 細粒状C軽石微量・粒状焼土若干・塊状炭化物混入(硬質)。7. 粒状C軽石混入・塊状焼土混入・塊状VII層土含有。8. 粒状C軽石微量・塊状焼土若干・粒状炭化物含有・塊状VII層土含有。9. 微粒状C軽石微量・粒状炭化物極多量・塊状焼土含有。10. 炭化物・灰層。
 11. 8近質。12. 微粒状C軽石若干・粒状焼土少量・粒状炭化物少量。

第362図 B区第16号住居跡実測図

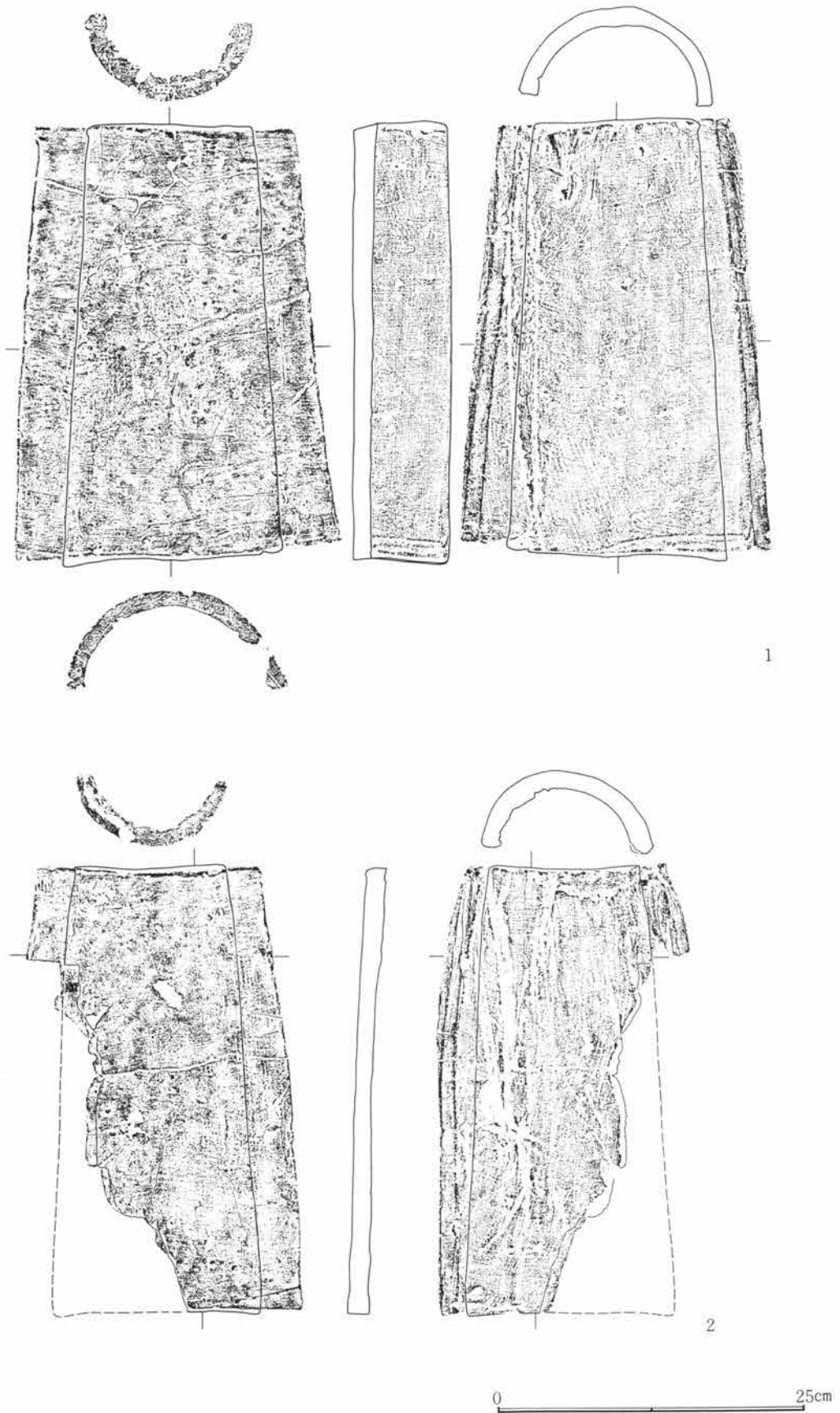
所見 当住居は4号住に切れ、更に、B6溝(14世紀後半から15世紀末)に切られておりカマドの左袖側を破壊している。住居は東壁南東隅部寄りにカマドを具備し、南東隅部下には傍竈坑を備えている。カマドは左袖側がB6溝に破壊されている為遺存は不良である。補強材は燃烧部奥壁部に瓦が据えられていた。又、掘り方では両袖の下の位置に、補強材の据え方と考えられる掘り込みが検出されており、カマドに改築があったことが考えられる。傍竈坑は上面に瓦が蓋う状態で検出されており、当住居も傍竈坑が開口していなかったことが確認出来る。住居の廃棄は、形状・出土遺物から9世紀後半代と考えられる。



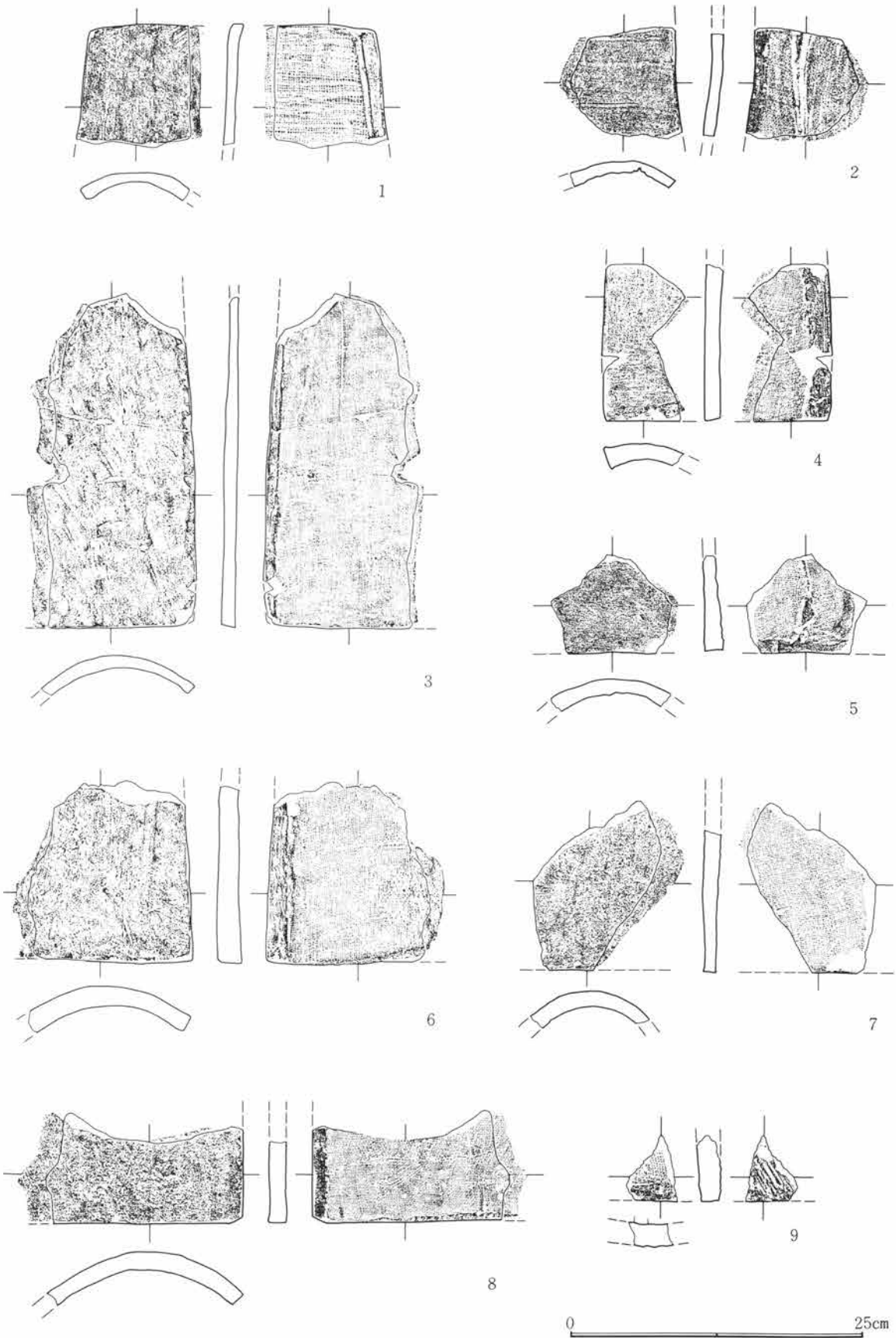
第363図 B区第16号住居跡出土遺物実測図(2)



第364図 B区第16号住居跡出土遺物実測図(3)



第365図 B区第16号住居跡出土遺物実測図(4)

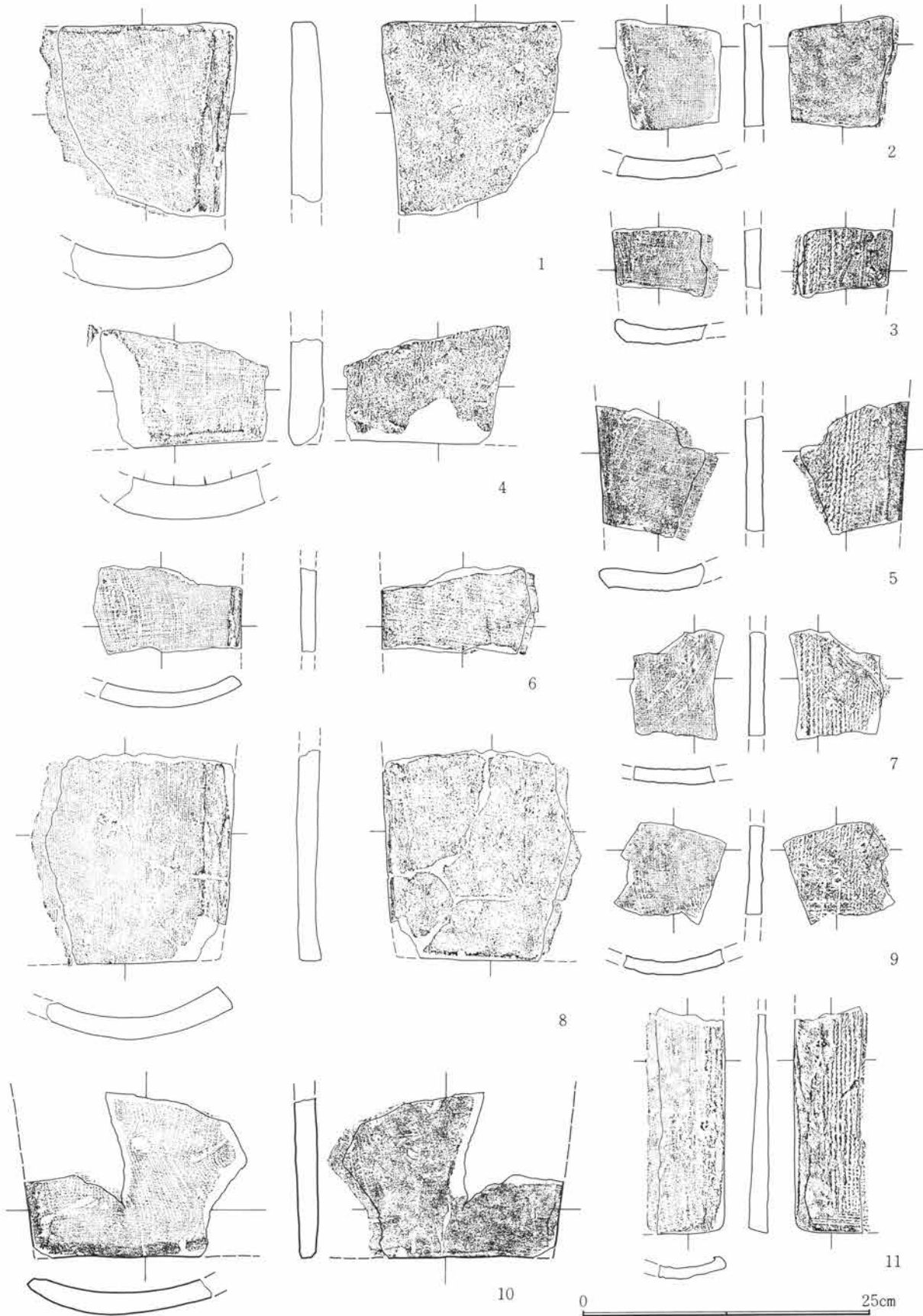


第366図 B区第16号住居跡出土遺物実測図(5)



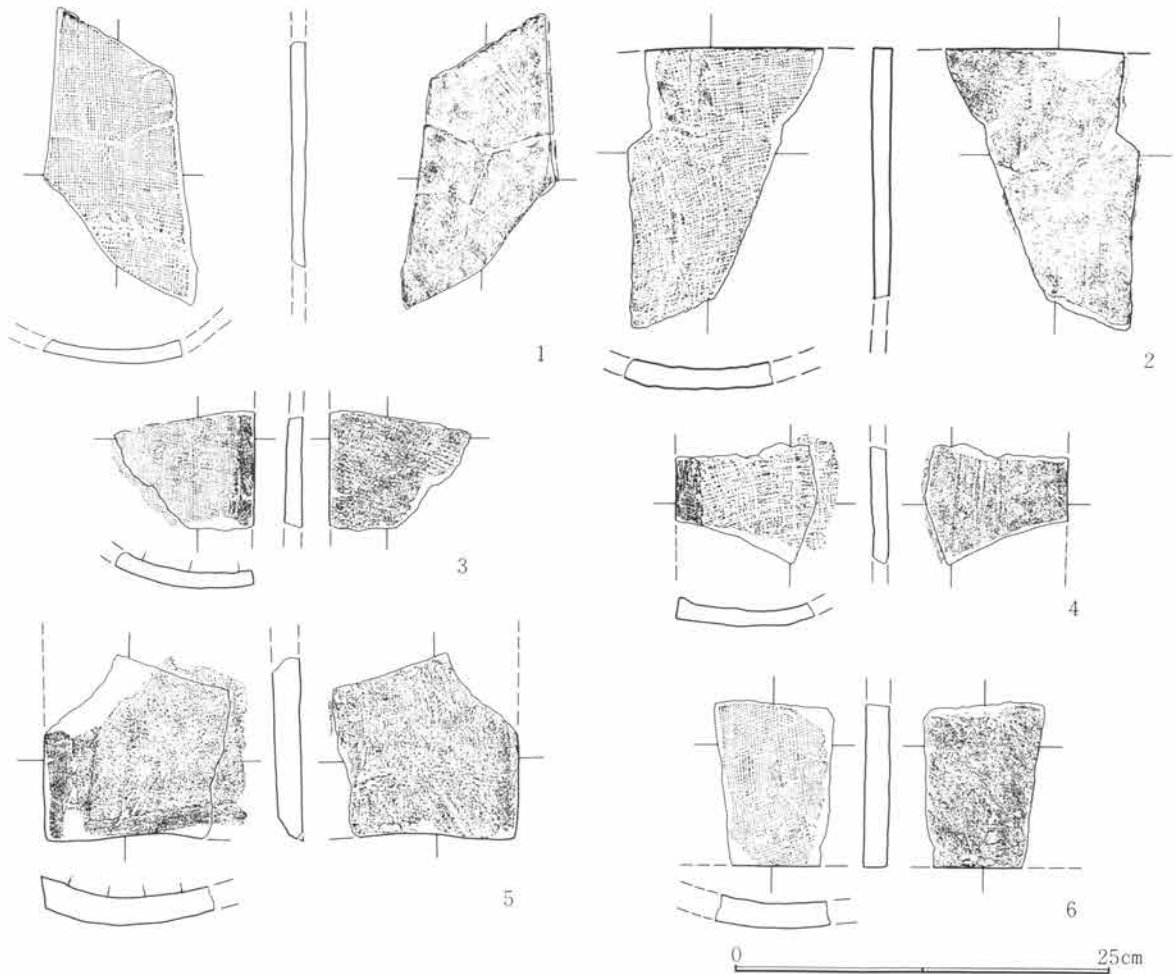
第367図 B区第16号住居跡出土遺物実測図(6)

第1節 南側調査区



第368図 B区第16号住居跡出土遺物実測図(7)

第4章 検出された遺構・遺物

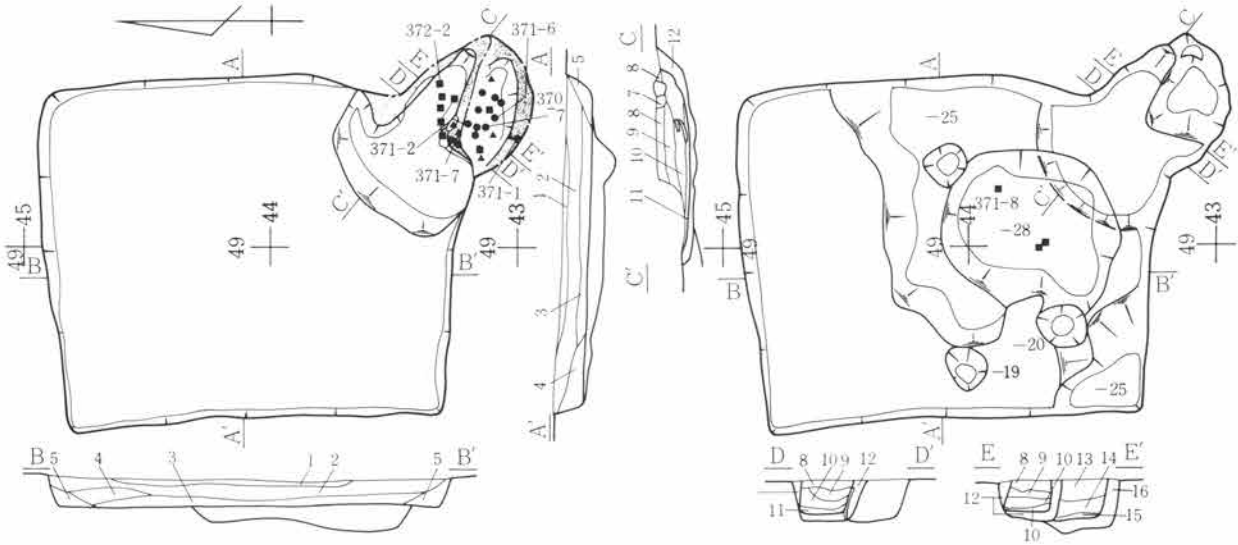


第369図 B区第16号住居跡出土遺物実測図(8)

遺構名称	B区第17号住居跡		位置	43・44-B-48・49グリッド内。			残存深度	約17cm
平面形態	横長方形(矩形)。	規模	2.7m×3.5(3.0)m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-90度-南	
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦。全面に造床が認められる。				
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	南側に顕著に認められる。P ₁ ~P ₃ は20前後の深度があるが用途等は不明。							
カマド	位置	東壁、住居南東隅部。				主軸方位	北-130度-南	
改築	有。掘り方内より焼土を検出。		形状	舌状を呈し、火床は平坦。				
規模	全長147cm・屋外長 72cm・屋内長 75cm・袖部幅110cm・燃烧部幅 38cm・煙道部幅 17cm。							
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。		袖	左袖は大きい右袖は小さい。右袖壁を瓦で補強する。				
煙道	仰角60度程で立ち上がる。		掘り方	住居の掘り方と共に掘削されている。				
遺物出土状態	覆土内で少量の瓦類・土器類が出土しているのみである。							

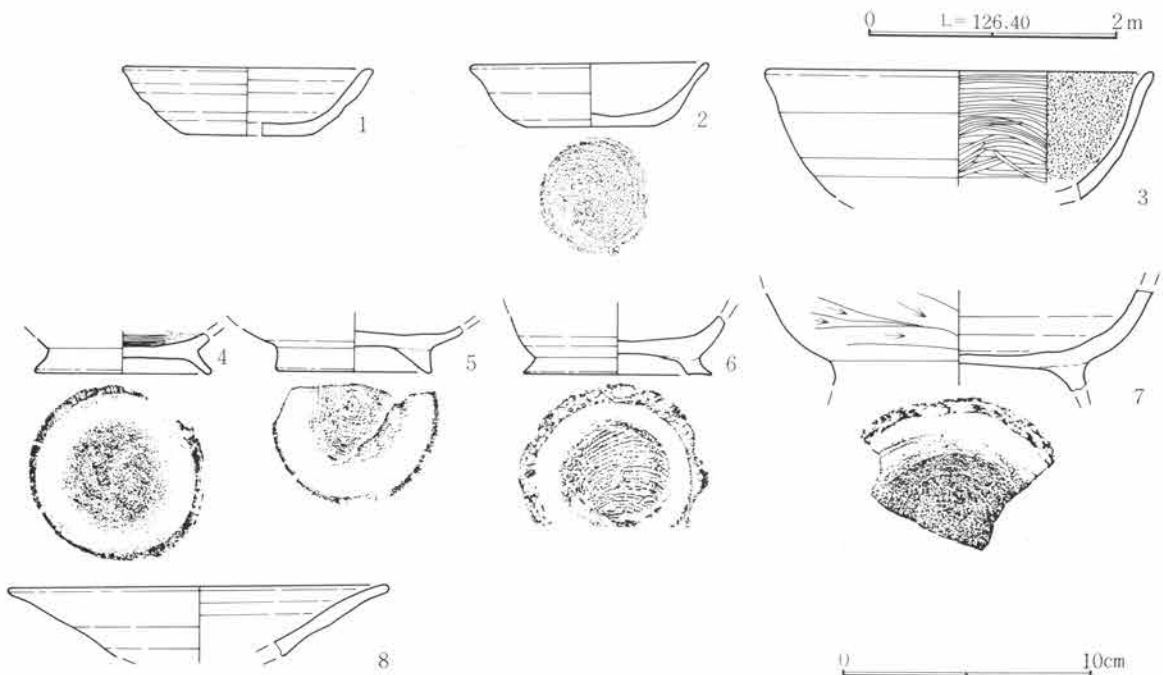
所見 当住居は切り合い関係の認められない単独住居である。住居は南東隅部にカマドを具備する横長方形

住居である。カマドは南東隅部で1回の改築が認められる。住居廃棄時のものは図上左側で、改築以前のものは図上右側で、燃烧部左壁・左袖は改築時に破壊され失なわれている。改築以前のカマドは、袖・燃烧部等の顕著な補強材は認められず、覆土内に瓦・土器等が多く出土したのみである。改築後のカマドは、右燃烧側壁を瓦により補強しているが、他の部位では認められなかった。住居の掘り方は、住居の対角線南東半部で顕著で、断面A-A'付近には柱穴状の掘り込みが検出されたが、柱穴としての認定は出来なかった。又、南西隅部ではやや深い部分があったものの、貯蔵穴と認定し得る形状ではなかった。住居の廃棄は、住居形状がD区の第IV段階に対比される点と、出土遺物も同様なことから11世紀前半代に比定される。

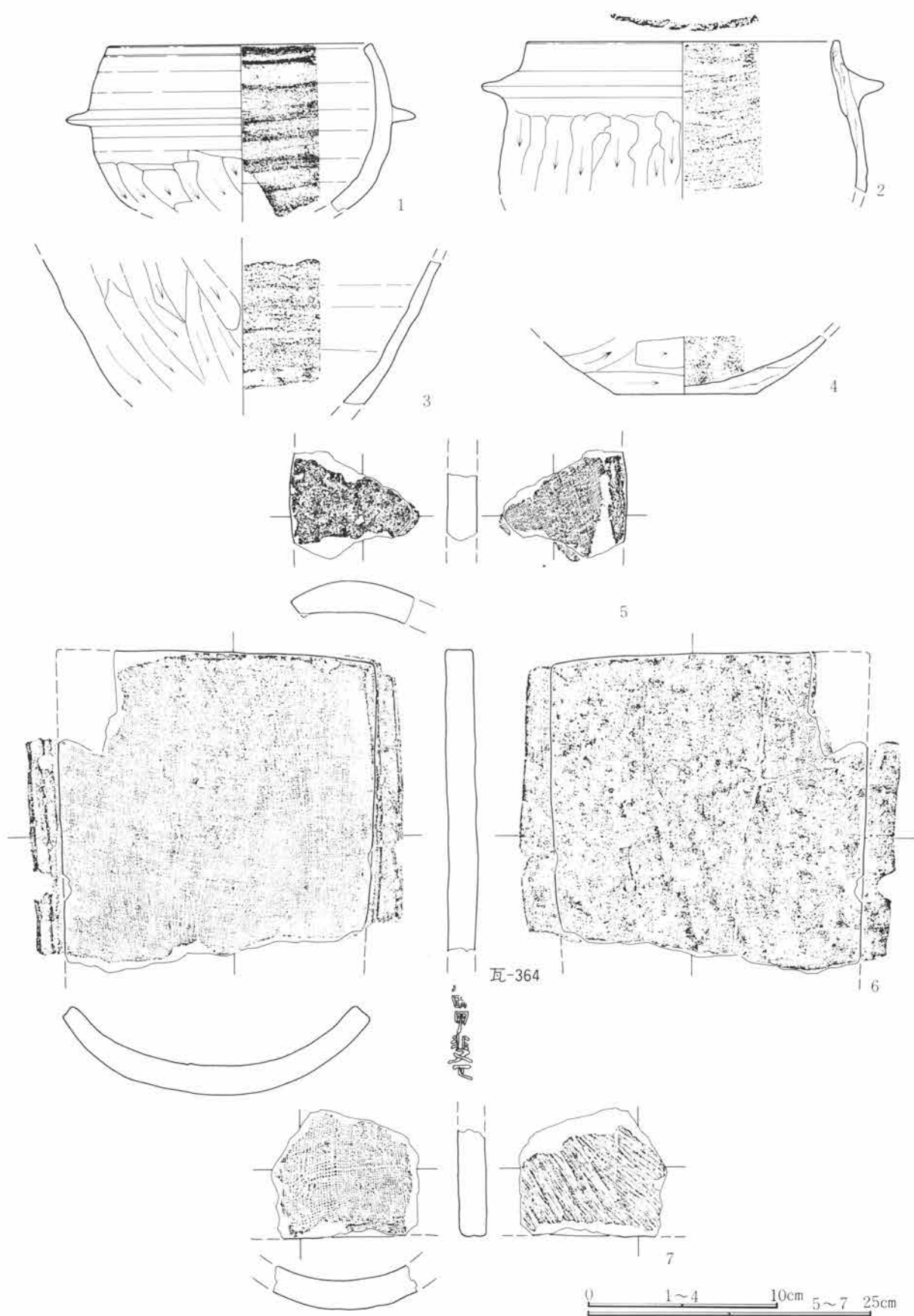


層序 (B17住)

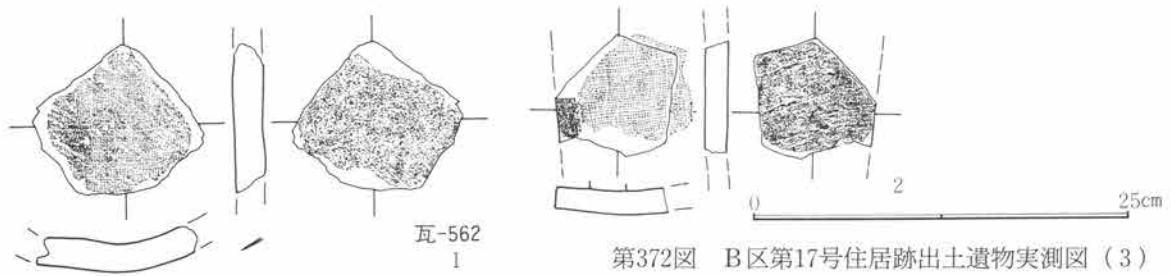
1. 粗・細粒状C軽石混入。2. 粒状C軽石混入。3. 細粒状C軽石若干。4. 細粒状C軽石微量。5. 細粒状C軽石少量。6. 細粒状C軽石少量・粒状焼土若干・塊状VII層土含有・粒状VII層土若干。7. 塊状焼土。8. 粒状C軽石混入・塊状VII層土含有。9. 粒状C軽石含有・塊状焼土少量・塊状VII層土少量。10. 細粒状C軽石若干・塊状焼土多量・粒状焼土多量・粒状炭化物含有。11. 炭化物・灰層。12. 細粒状C軽石微量・粒状焼土若干・粒状炭化物若干。13. 細粒状C軽石含有・粒状焼土少量。14. 細粒状C軽石若干・粒状炭化物含有・粒状焼土混入。15. 炭化物・灰層。16. 細粒状C軽石含有・粒状焼土混入・粒状炭化物含有・塊状VII層土若干。



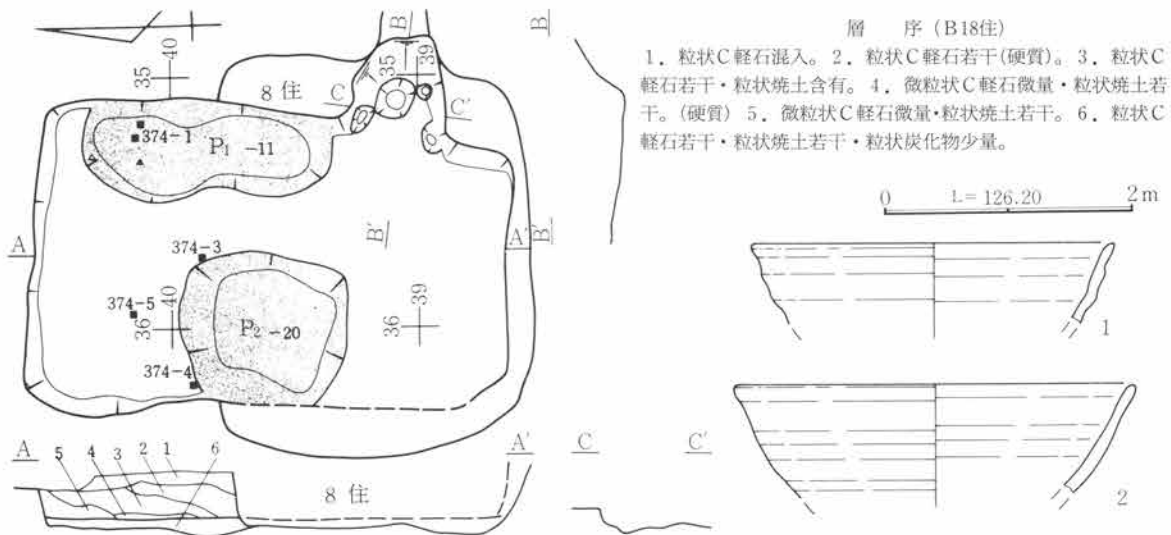
第370図 B区第17号住居跡・出土遺物実測図(1)



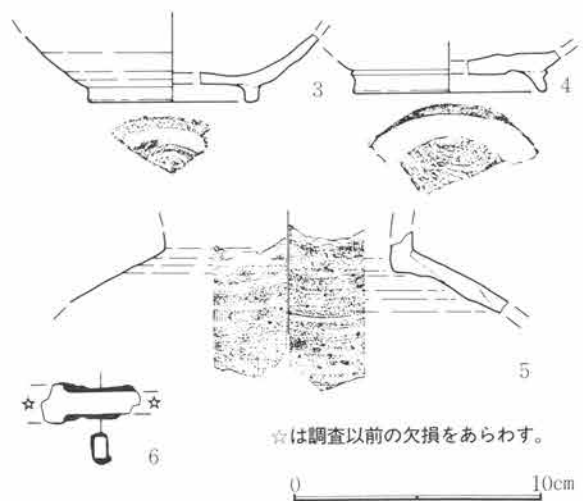
第371図 B区第17号住居跡出土遺物実測図(2)



遺構名称	B区第18号住居跡		位置	38~40-B-34~36グリッド内。		残存深度	約38cm
平面形態	横長方形。	規模	2.53m× 3.8m	構築基準辺	北壁か	主軸方位	北-95度-南
壁	斜位に立ち上がる。		床面	平坦?。造床有り。8号住の破壊により詳細不分明。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	東・西両壁下で土坑状の掘り込みを検出。						
遺物出土状態	床直遺物なく、8号住の破壊により覆土内でやや出土した程度である。						

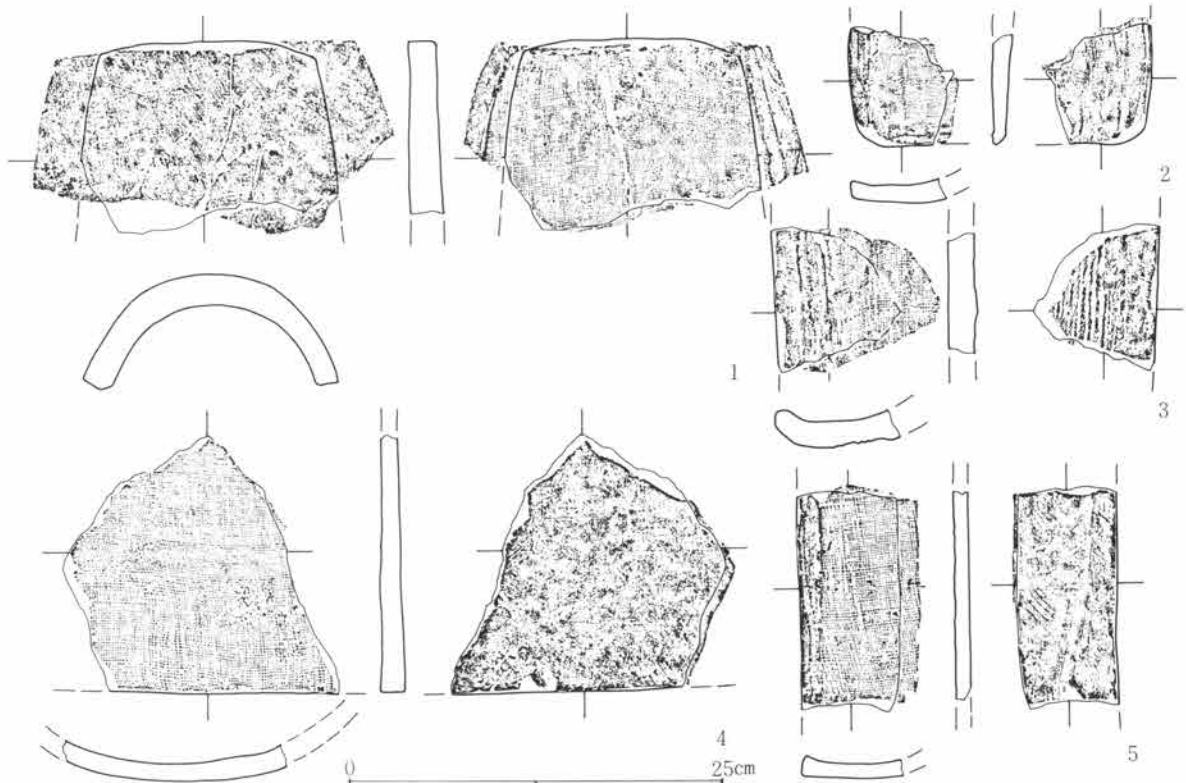


所見 当住居は前述したB 8住に切られ、住居の大半が重複した状態となっている。住居は東壁南東隅部寄りにカマドを具備する横長形状を呈する。カマドは、B 7住のカマドと重複しており、B 7住の攪乱が顕著であった為使用面は既に失なわれており、図示したものは掘り方図である。掘り方には、両袖先端部と思われる位置に補強材の据え方が検出されているが、補強材自体の痕跡は認められなかった。住居の掘り方は、東西両壁下に土坑状の掘り込みが認められ全体に6 cm前後の埋設が認められた。住居の廃棄は、住居形状がD区の第II段階に対比される点と、出土遺物の様相も同じであることから、10世紀前半～中頃と思われる。



第373図 B区第18号住居跡・出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物

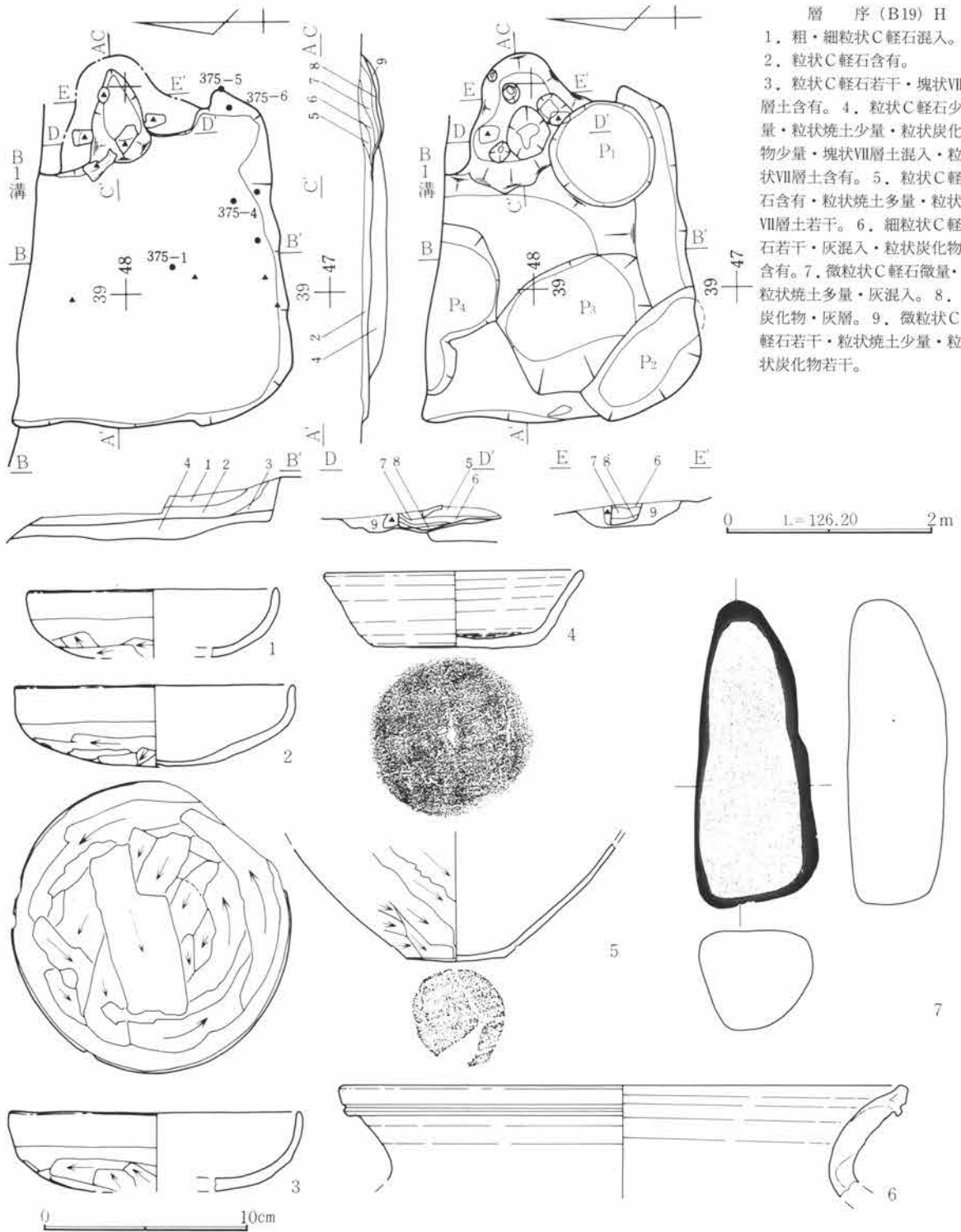


第374図 B区第18号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	B区第19号住居跡	位置	47・48-B-37~39グリッド内。			残存深度	約33cm	
平面形態	不分明。	規模	3.23m×	Xm	構築基準辺	不分明	主軸方位	北-90度-南位か
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	平坦。全面造床。				
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。P ₁ は本跡より古期の土坑か？				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	土坑状の掘り込みが多く、P ₂ はオーバーハングする。							
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から60cm。			主軸方位	北-78度-南		
改築	有。掘り方内より焼土を検出。			形状	舌状を呈し、燃烧部は屋内に主体が在る。			
規模	全長 90cm・屋外長 40cm・屋内長 50cm・袖部幅160+αcm・燃烧部幅 50cm。							
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。部分的に壁を礫で補強。		袖	大きく屋内側に突出する。				
煙道	未検出。		掘り方	大きく土坑状に掘られ、礫の据方を検出。				
遺物出土状態	南壁寄りやや多い。全体的には量が少ない。							

所見 当住居はB1溝に北側を切られ失っており、更に、試掘調査時のトレンチにより、覆土の大半を逸した為遺存状態は不良である。この為、住居形状は不分明である。カマドは東壁に具備するものの、位置関係は前述のとおり検証出来なかった。構造は、両袖・左燃烧部に地山砂岩質土を利用した補強材を据えており、掘り方でも据え方が検出されている。住居の掘り方は、全体に土坑状の掘り込みが多く、南西隅部で検出されたP₂は、南壁下がオーバーハングしていた。南東隅部のP₁は、カマド袖下であり、傍竈坑とは異なるものと考えられる。住居の廃棄は、出土遺物から8世紀中頃と考えられる。

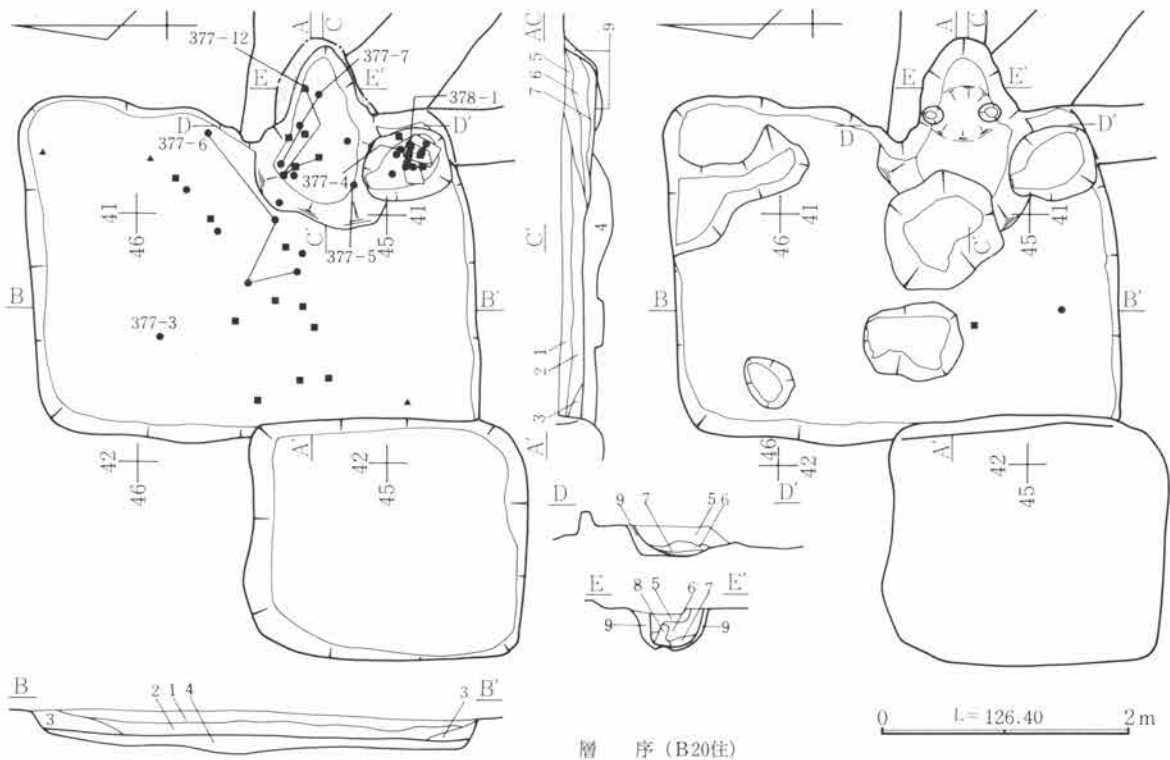
第1節 南側調査区



第375図 B区第19号住居跡・出土遺物実測図

第4章 検出された遺構・遺物

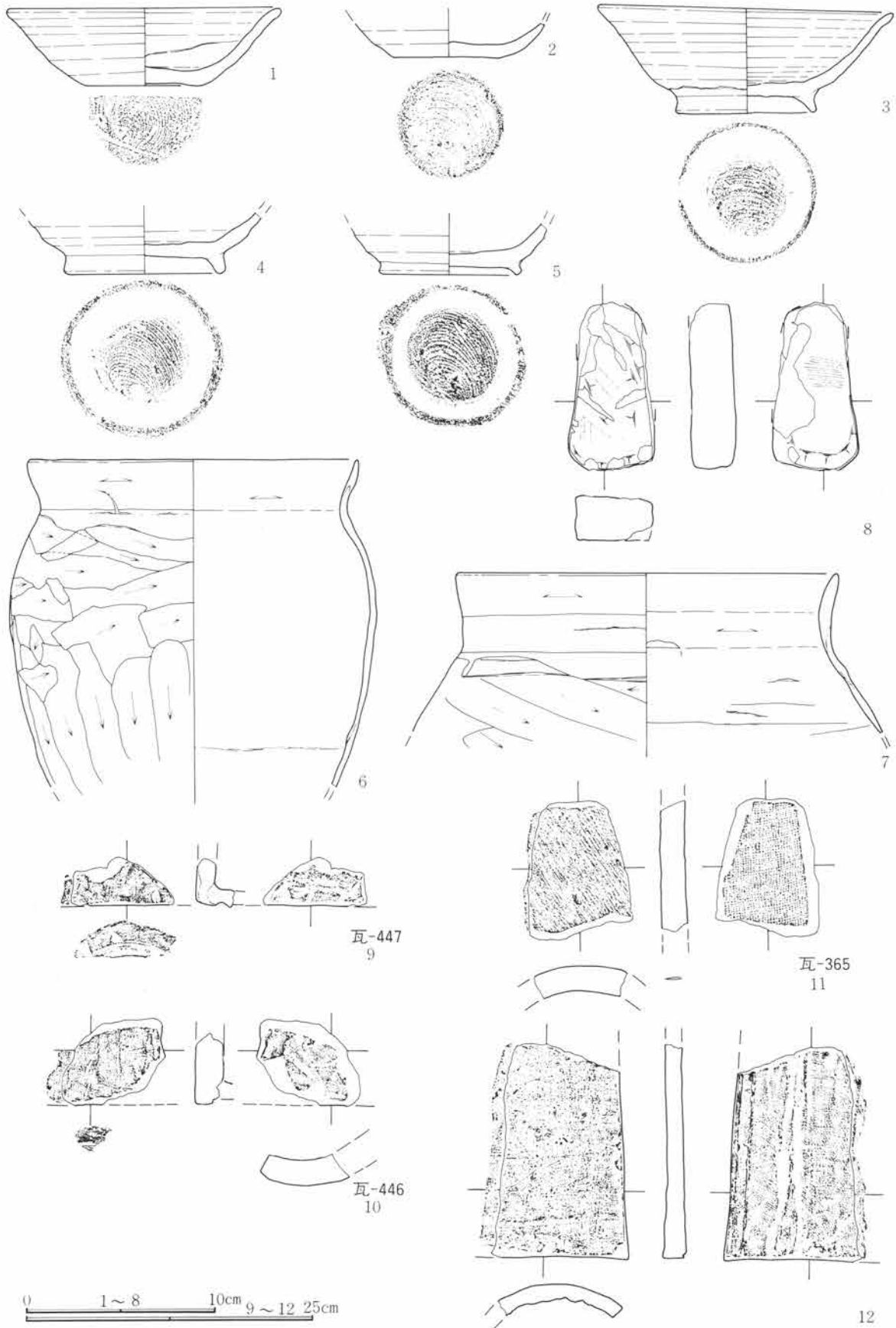
遺構名称	B区第20号住居跡		位置	44~46-B-40・41グリッド内。		残存深度	約18cm
平面形態	横長方形。	規模	2.68m×3.55m	構築基準辺	北乃至西壁	主軸方位	北-88度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦。全体に造床が認められる。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P ₁ 。隅丸長方形。70×55cm・深度-28cm。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	土坑状の掘り込み (P ₂ ~P ₅) が認められている。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から60cm位か。			主軸方位	北-88度-南	
改築	有。掘り方内から灰・焼土を検出。		形状	舌状を呈する。			
規模	全長143cm・屋外長 53cm・屋内長 90cm・袖部幅160cm・燃烧部幅 55cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
	袖	右袖は顕著な造作でなく瘤状である。					
煙道	未検出。立ち上がり仰角60度程。		掘り方	燃烧部で改築以前の補強材の据方を検出。			
遺物出土状態	床面直上層での出土が多い。傍竈坑内での出土も多く、瓦の完形品を含んでいる。						



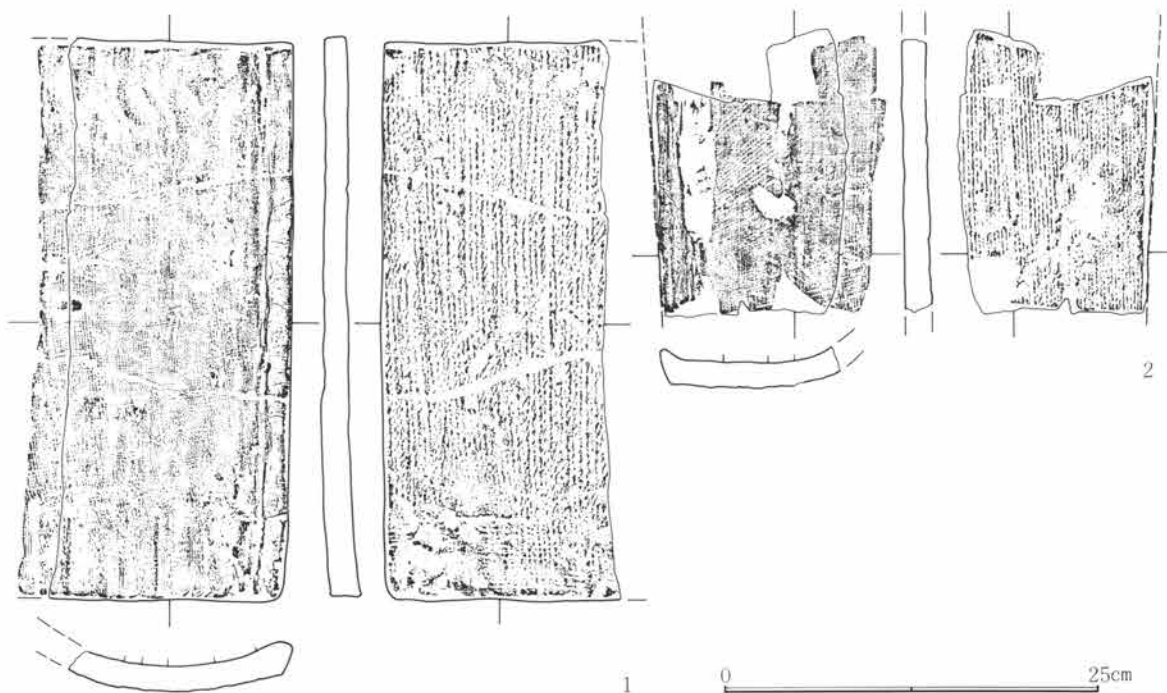
1. 粒状C軽石混入。2. 細粒状C軽石若干。3. 微粒状C軽石微量。4. 細粒状C軽石少量・塊状VII層土含有・粒状VII層土・粒状焼土少量・粒状炭化物・灰層若干。5. 粒状C軽石混入・粒状焼土多量。6. 細粒状C軽石少量・粒状焼土多量・粒状炭化物含有・灰混入。7. 炭化物・灰層。8. 青紫灰色粘質土。9. 炭化物・灰混入砂質土層。

第376図 B区第20号住居跡実測図

所見 当住居は81号土坑（近世所産）に切られている。住居は横長形状を呈し東壁中央より南東隅部寄りにカマドを具備しており、南東隅部に傍竈坑を備えている。カマドは、掘り方のみに燃烧部両側壁の補強材据え方が認められており、改築があったことを示している。傍竈坑は比較的深く遺物はやや多い。住居の掘り方は、土坑状の掘り込みがあり、全体に7cm前後の埋設土を施こし床面を構築している。住居の廃棄は、D区の住居分類の第II段階に対比され、出土遺物も同様であることから、10世紀前半から中頃と考えられる。

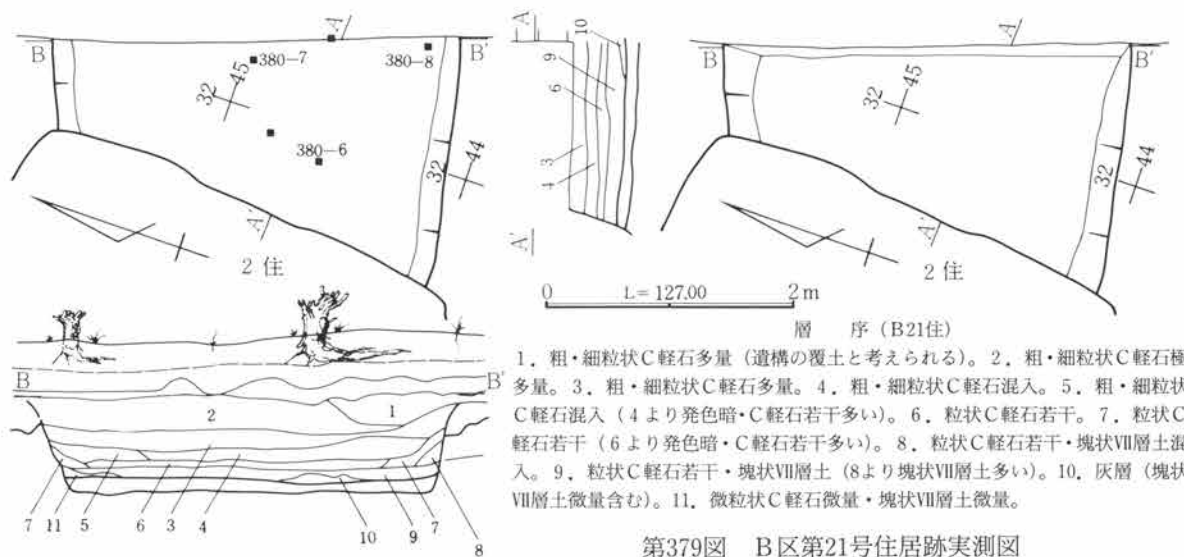


第377図 B区第20号住居跡出土遺物実測図(1)



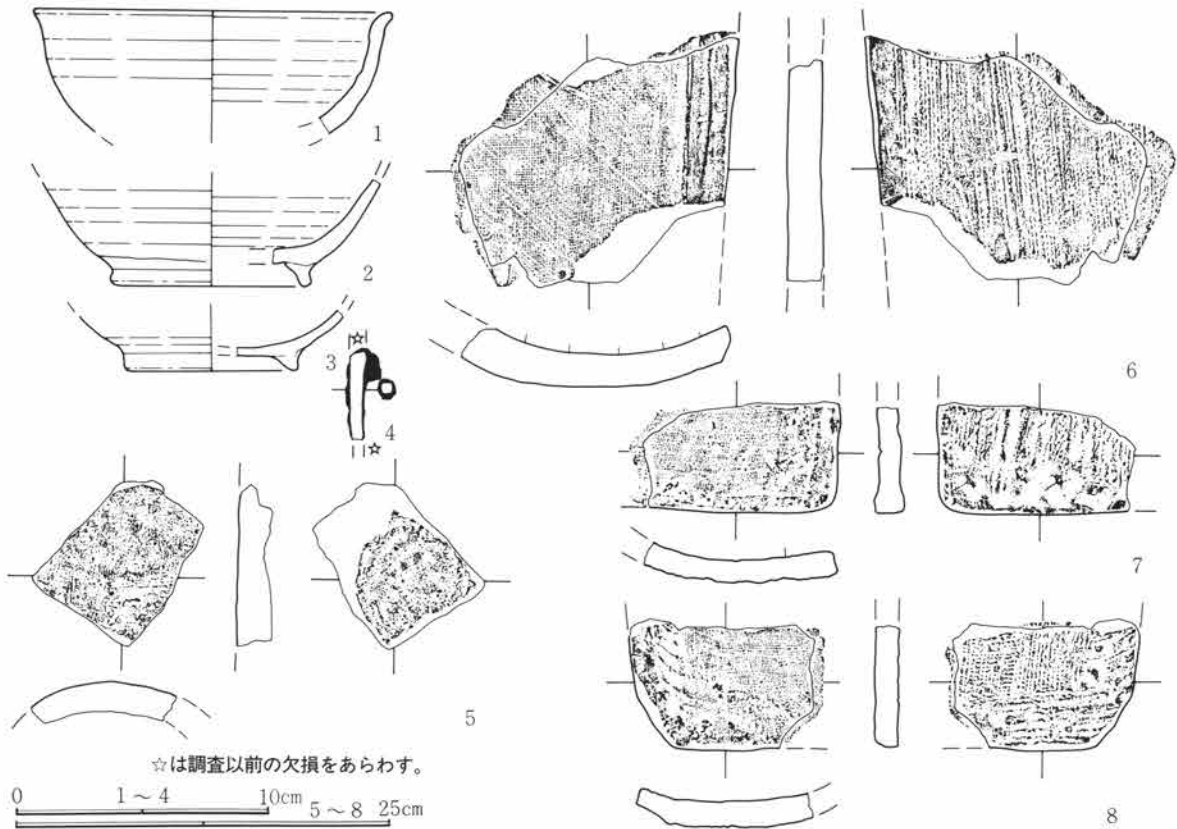
第378図 B区第20号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	B区第21号住居跡	位置	44・45-B-31・32グリッド内。			残存深度	約40cm
平面形態	不分明。	規模	2.0+αm×3.20m	構築基準辺	不分明	主軸方位	北-80度-南位か
B1号住の破壊・東側が調査域外に延びるため詳細不詳。							



第379図 B区第21号住居跡実測図

所見 当住居は、西壁側がB 2住に切られ失われており、更に、東壁側は調査区域外に延びている為住居の形状・詳細に就いては不分明である。当住居を切るB 2住は、横長方形を呈するD区住居分類の第II段階の様相を呈することより、当住居は、これ以前乃至第II段階の古い様相の住居であることが類推出来、当住居の出土遺物の様相がD区の第IからII段階に対比されることから、第I段階の住居形状であることが推察され、南北長が他例の住居にほぼ等しいことから、小規模の横長方形か、正方形を呈する住居であったと想定される。又、土層断面・残存形状からは前者に妥当性があり、9世紀後半頃の住居と思われる。

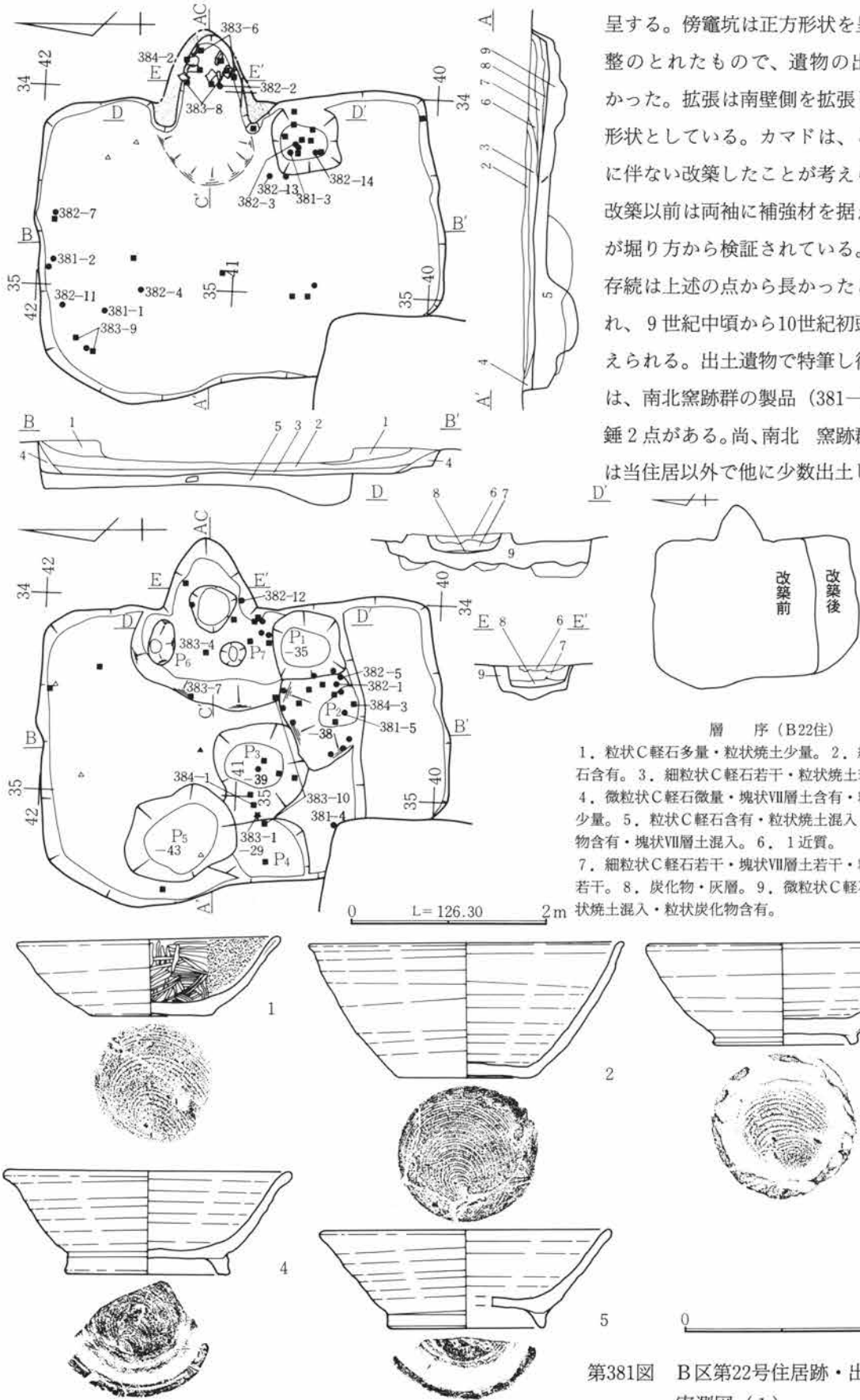


第380図 B区第21号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	B区第22号住居跡		位置	33～35-B-39～42グリッド内。		残存深度	約25cm
平面形態	横長方形。	規模	3.0m×4.16m	構築基準辺	不分明	主軸方位	北-85度-南位か
壁	垂直に立ち上がる。		床面	平坦。拡張部は造床が認められないが、他は全面造床。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P ₁ 。正方形。一辺65cm・深度-35cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	土坑状の掘り込みが多く、深度も深い。これらは改築以前のもので、旧形状は正方形である。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から165cm。旧状は65cm。			主軸方位	北-85度-南	
改築	有。両袖補強材の据方を検出。		形状	舌状を呈し規模も大きい。			
規模	全長150cm・屋外長 66cm・屋内長 84cm・袖部幅128cm・燃烧部幅 63cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。左壁を瓦で補強する。						
	袖	右袖先端部を瓦で補強する。					
煙道	未検出。		掘り方	改築以前の補強材の据方を検出。			
遺物出土状態	掘り方内での出土が多く、特にP ₂ に集中している。						

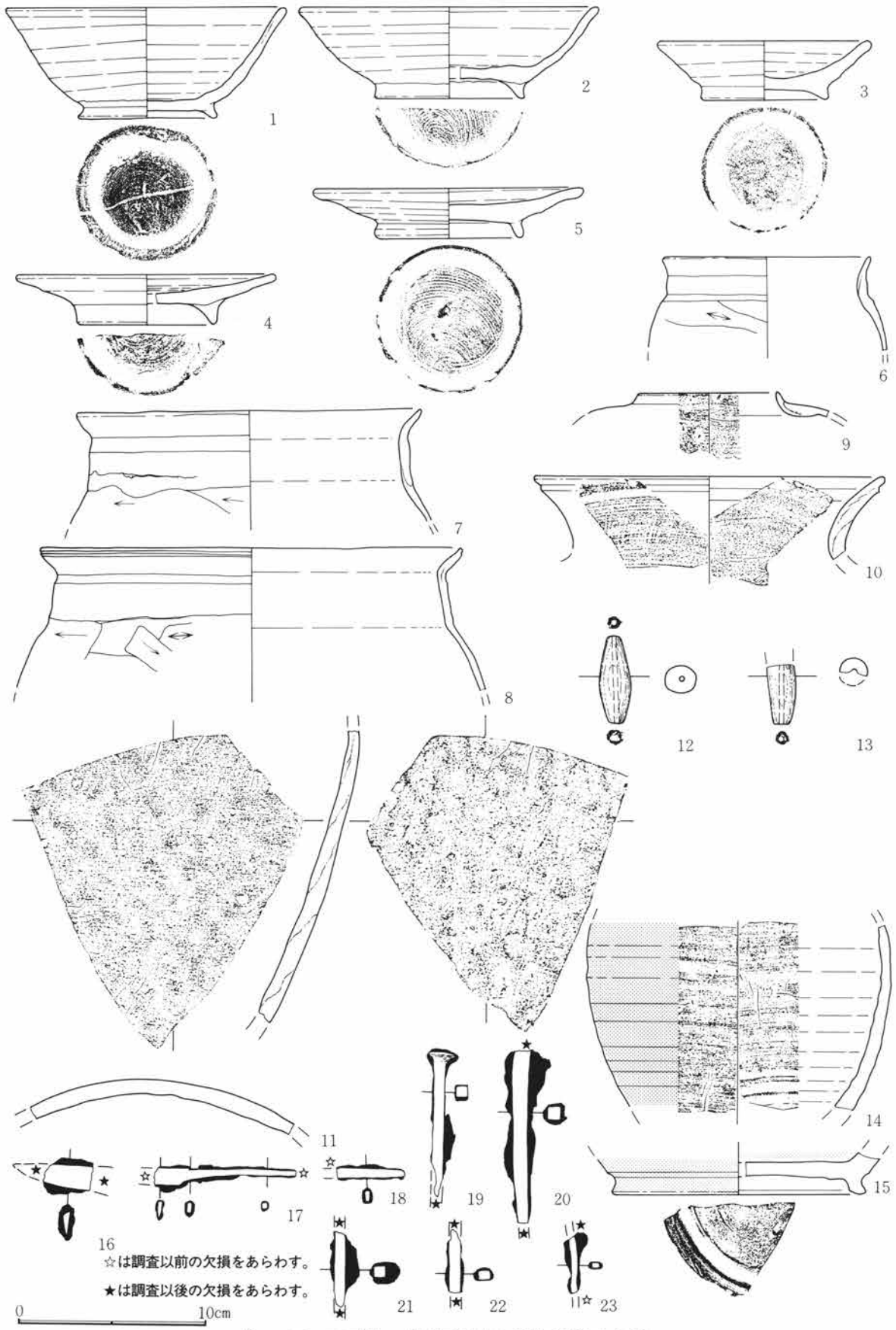
所見 当住居はB18住と重複し、B23住を切り構築しているが、18住との新旧関係は調査段階では検証出来なかった。住居は東壁中央より北東隅部寄りにカマドを具備する。傍竈坑は掘り方内から検出されている。これは、住居の拡張に伴ない埋設されたもので、カマドの位置が北東隅寄りであるのは、住居の拡張改築以前の位置として、移設しなかったことに原因している。又、この拡張改築に伴ない、床面が上降している。住居の拡張改築以前は、カマドを東壁中央に備え、傍竈坑を南東隅部に備えている。住居形状は正形状を

第4章 検出された遺構・遺物

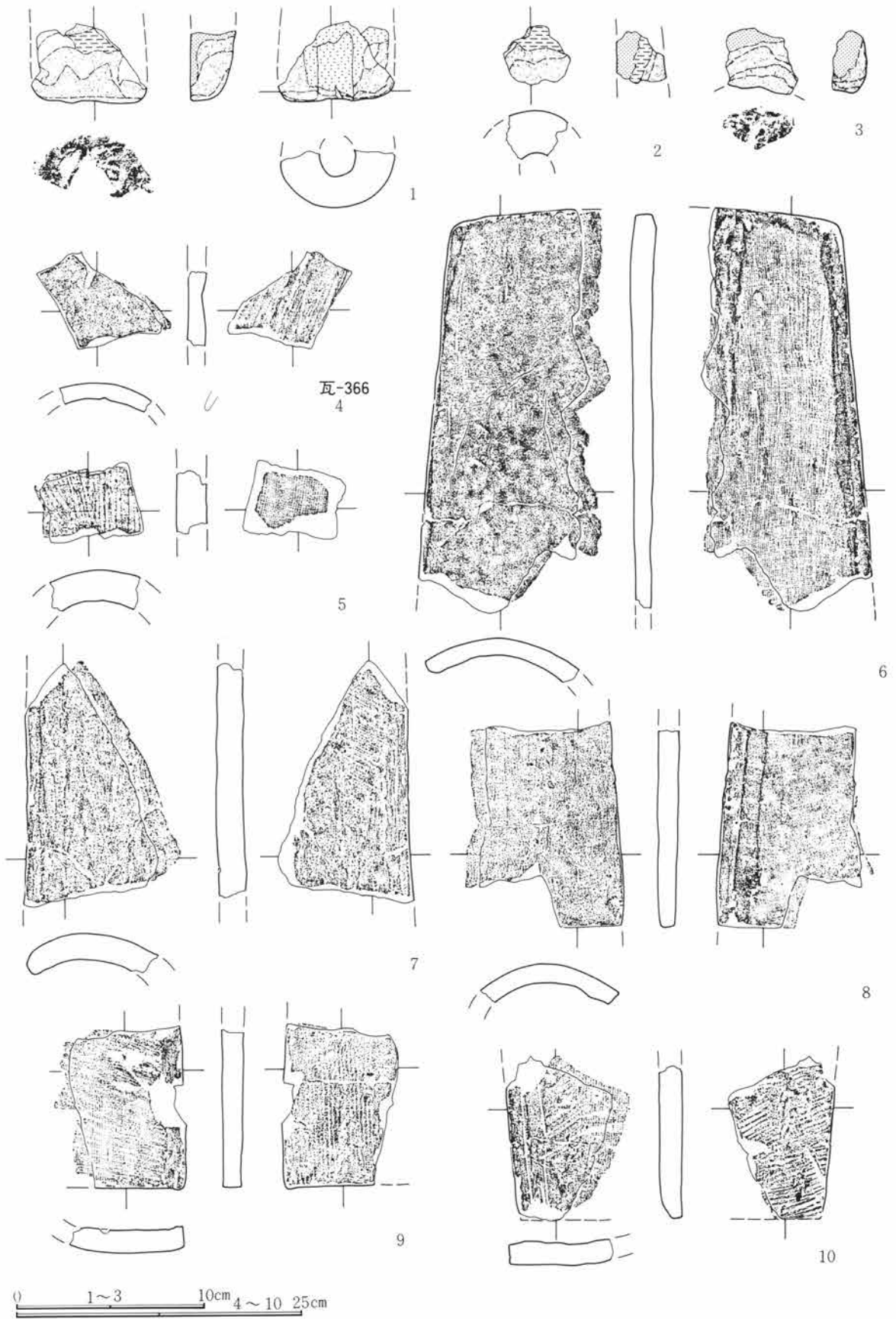


呈する。傍竈坑は正方形を呈する均整のとれたもので、遺物の出土が多かった。拡張は南壁側を拡張し横長形状としている。カマドは、この拡張に伴ない改築したことが考えられる。改築以前は両袖に補強材を据えた痕跡が掘り方から検証されている。住居の存続は上述の点から長かったと考えられ、9世紀中頃から10世紀初頭頃と考えられる。出土遺物で特筆し得るものは、南北窯跡群の製品 (381-2) と土錘2点がある。尚、南北窯跡群の製品は当住居以外で他に少数出土している。

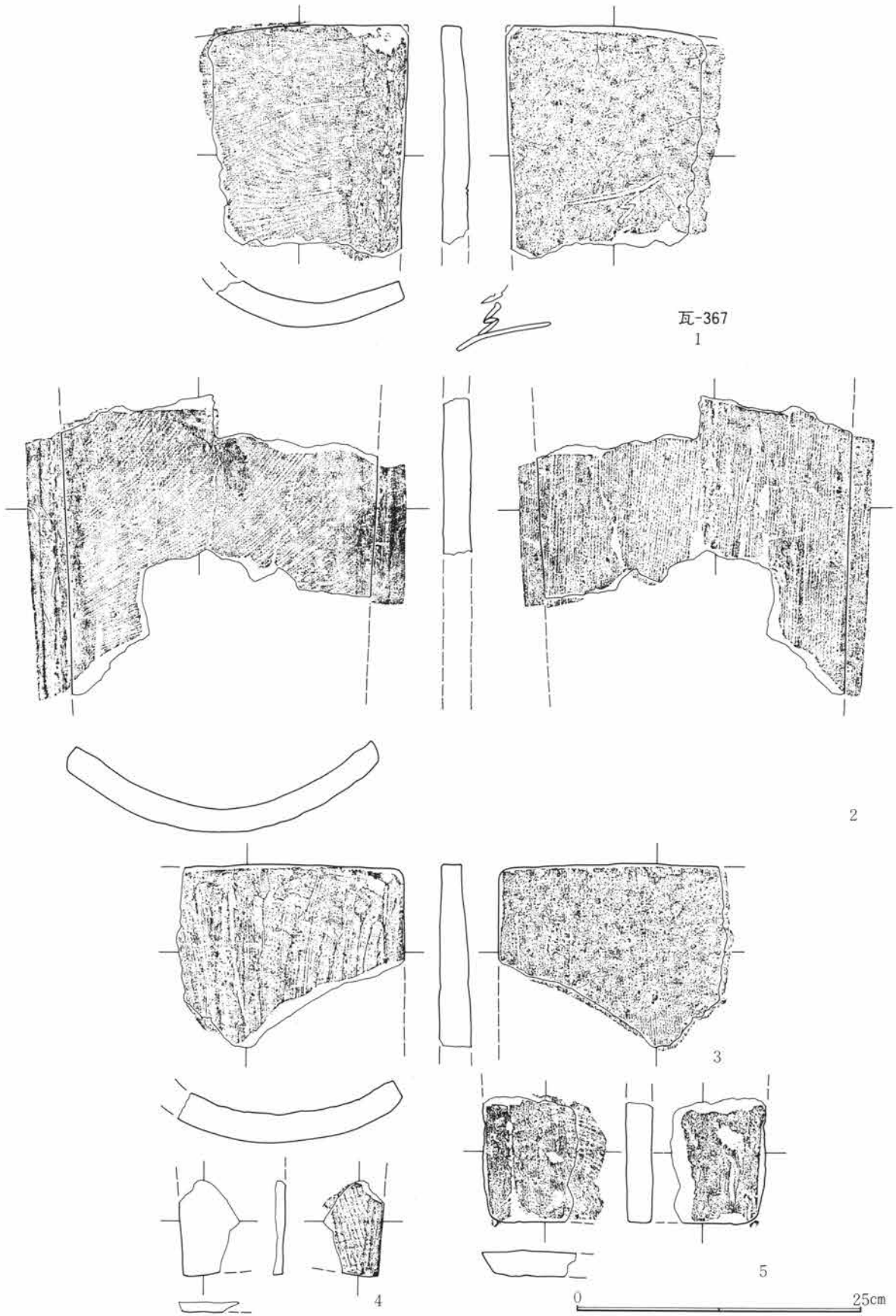
第381図 B区第22号住居跡・出土遺物実測図(1)



第382図 B区第22号住居跡出土遺物実測図(2)



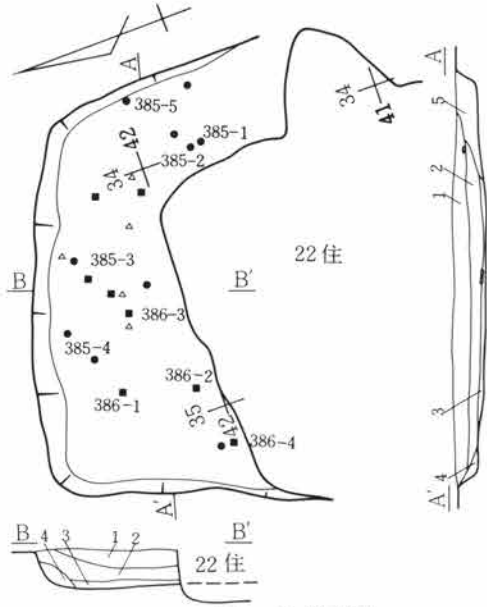
第383図 B区第22号住居跡出土遺物実測図(3)



第384図 B区第22号住居跡出土遺物実測図(4)

第4章 検出された遺構・遺物

遺構名称	B区第23号住居跡		位置	40~42-B-33~35グリッド内。		残存深度	約26cm
平面形態	不明。	規模	2.4+αm×3.59m	構築基準辺	西乃至北壁	主軸方位	北-105度-南
B22号住の破壊により詳細不詳。							

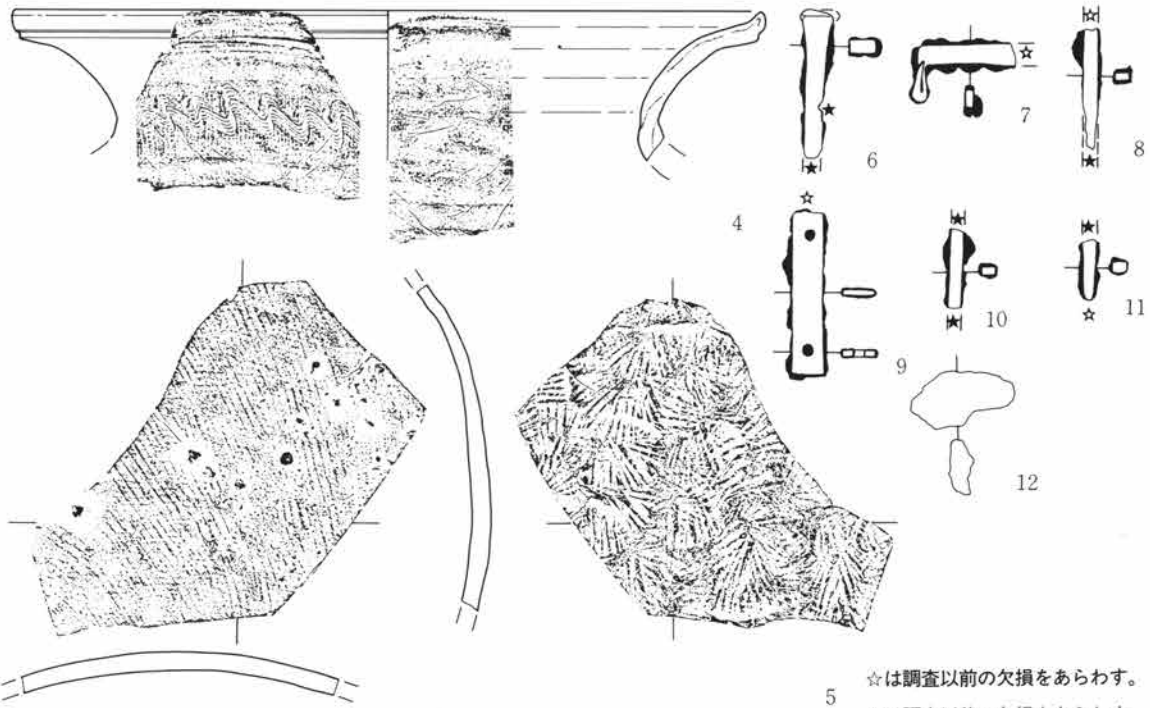
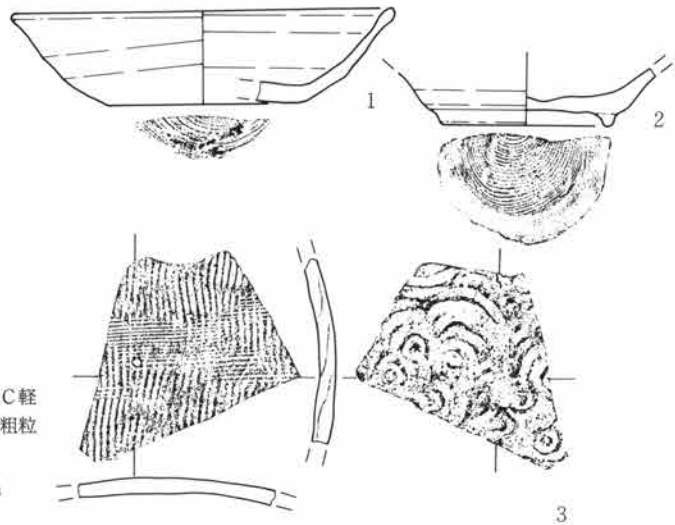


層序 (B23住)

1. 粗・細粒状C軽石多量・小塊状VII層土混入。2. 粒状C軽石多量。3. 粒状C軽石混入。4. 粒状C軽石少量。5. 粗粒状C軽石多量。

0 L=126.20 2m

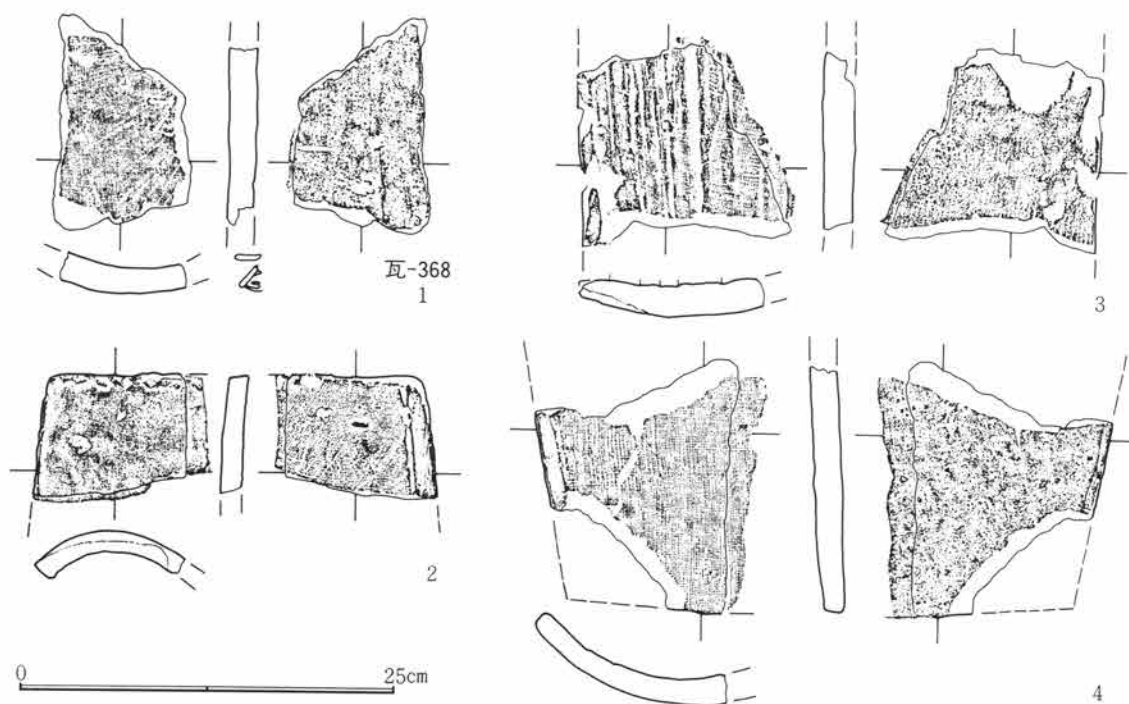
所見 当住居は前述のB22住に切られ住居の大半を失っており、試堀トレンチの攪乱もあり、住居は非常に遺存が悪い。住居形状等の詳細は、上述の状況から不明であるが、住居の時期は、B22住より古いことは判断され、出土遺物等を勘案すれば、9世紀中頃以前と考えられる。



☆は調査以前の欠損をあらわす。
★は調査以後の欠損をあらわす。

0 10cm

第385図 B区第23号住居跡・出土遺物実測図(1)



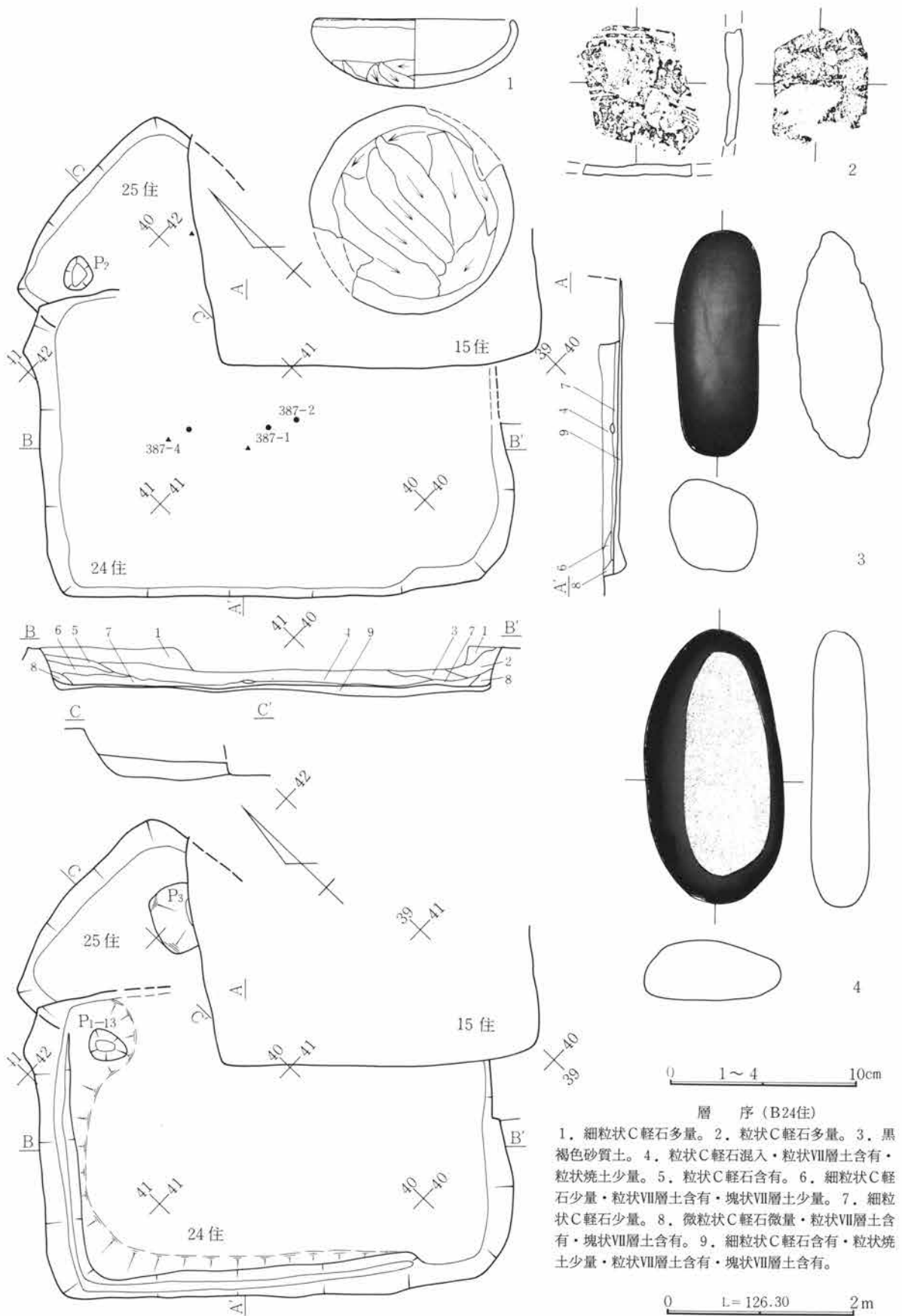
第386図 B区第23号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	B区第24号住居跡		位置	39～42-B-39～41グリッド内。			残存深度	約43cm
平面形態	横長方形。	規模	3.2m×5.0m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-45度度-南	
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦。全面に浅い造床が認められた。				
壁溝	未検出。北・西壁下で検出。幅25cm程。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	全体に浅く、北東隅部でP ₁ を検出し、P ₁ 周辺が皿状に浅く掘り窪められている。							
遺物出土状態	全体に少なく、床面直上出土遺物は皆無であった。							

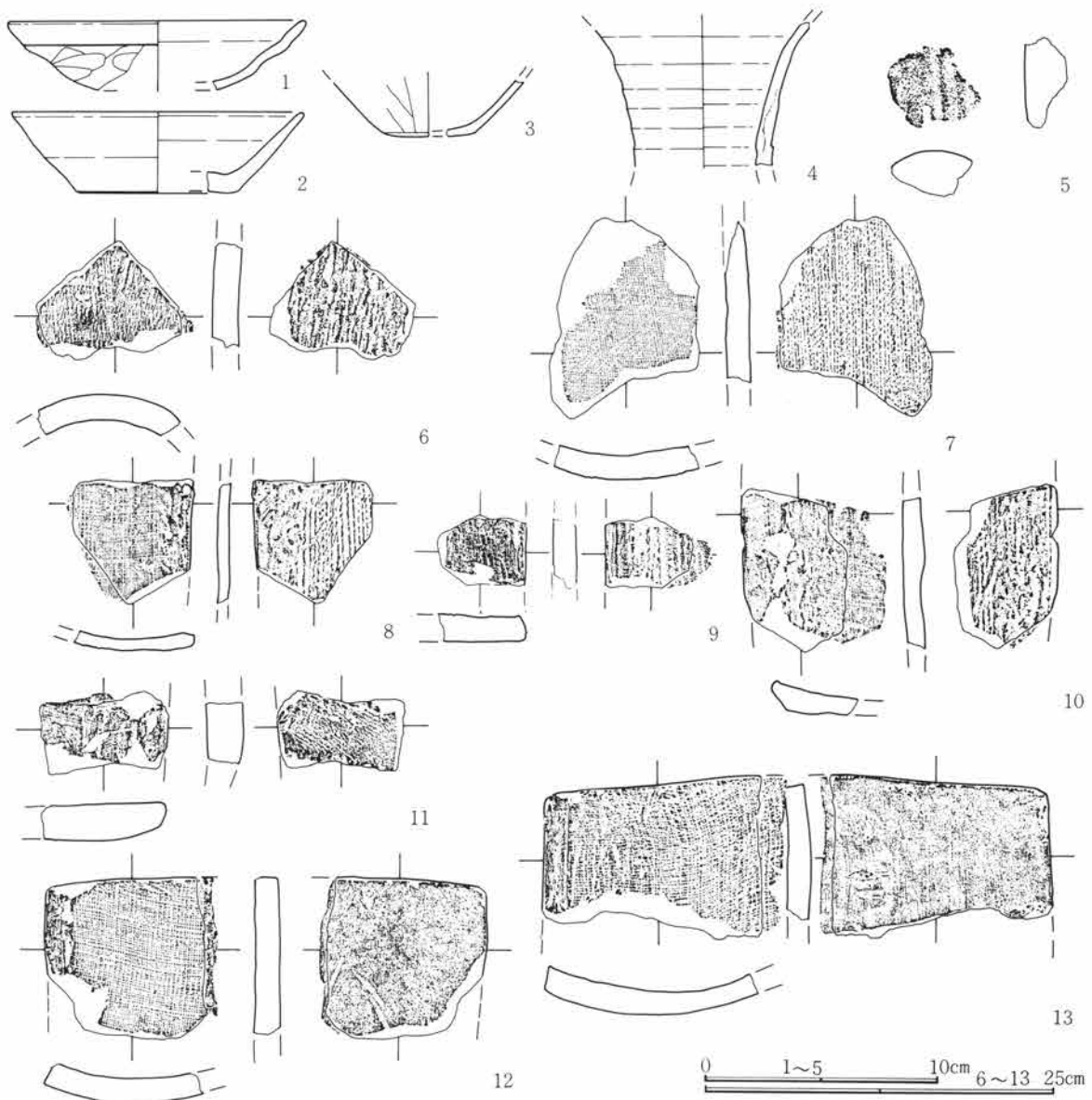
遺構名称	B区第25号住居跡		位置	41・42-B-39・40グリッド内。			残存深度	約40cm
平面形態	不明。	規模	1.6+αm×2.43m	構築基準辺	北壁か	主軸方位	北-88度-南位か	
調査の失敗により詳細不詳。								

所見 (B24住) 当住居は前述したB15住に切られている。又、B25住と重複するがB15住・当住居調査着手段階では未確認状態であったが、B15住調査時には、B25住のカマドと思われる証左等は認められなかった。一方、当住居の調査時にもB15住のカマド等の証左は何ら認められなかった。然し、B25住の指向方向は、B15住・当住居の指向方向より新しい等色であることから、机上では、B25住が両住居を切ることが推定される。然乍ら、B25住のカマドが認められなかったことから、B25住としたものは、住居でなかった可能性も考慮されるところである。

B25住は、B15住に東側を破壊されており、この破壊に伴ないカマドは失われたものと考えられる。住居形状は横長形状を呈し、住居の指向方向は北-45度-東にとり、当遺跡では7世紀末以前の特徴が認められる。掘り方は全体に浅く0～7cm程度で、北西壁下から南西壁下にかけて壁溝が検出されているが、壁板材の痕跡は認められなかった。出土遺物は全体に僅少で、住居中央部床面直上層中から土師器杯(第387図-1)が出土している。住居の時期は、この遺物とB15住に切られることから7世紀中頃と思われる。



第387図 B区第24・25号住居跡・第24号住居跡出土遺物実測図



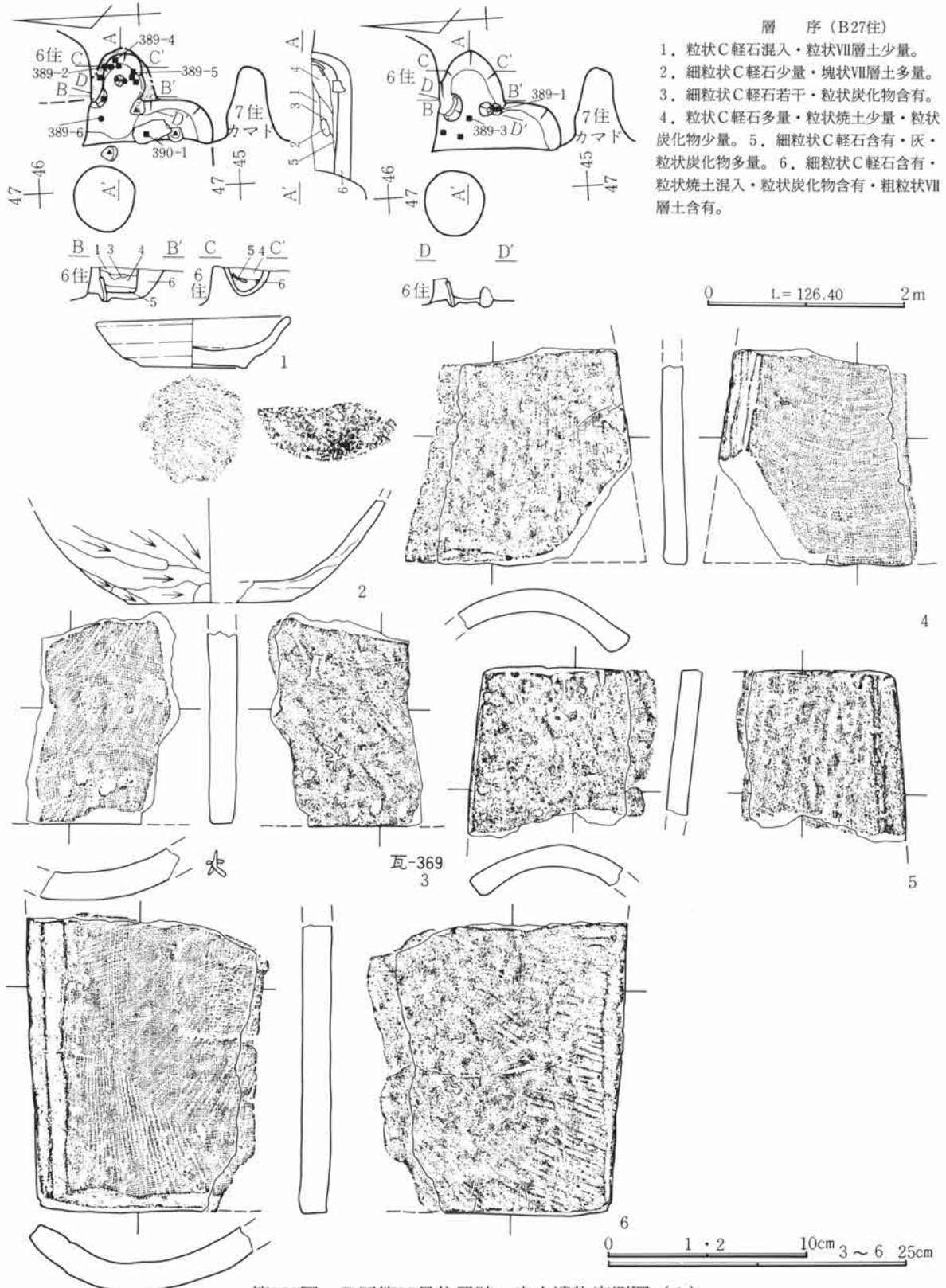
第388図 B区第25号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	B区第27号住居跡		位置	45-B-46グリッド内。		残存深度	約25cm
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から50cm。			主軸方位	北-94度-南程か	
改築	不明。掘り方内より焼土を検出している。			形状	馬蹄形状を呈する。		
規模	全長 60cm・屋外長 45cm・屋内長 15cm・袖部幅70+ α cm・燃焼部幅 42cm。						
焚口・燃焼部	扇状を呈する焚口部は、燃焼空間と重複する部分が著しく、燃焼部先端側に器設部分が考えられる。				袖	左袖は瓦で補強し、右袖は礫で補強する。	
煙道	未検出。			掘り方	瓦・礫の据方を検出している。		
遺物出土状態	カマド奥壁寄り出土した瓦は壁の補強材と考えられる。						

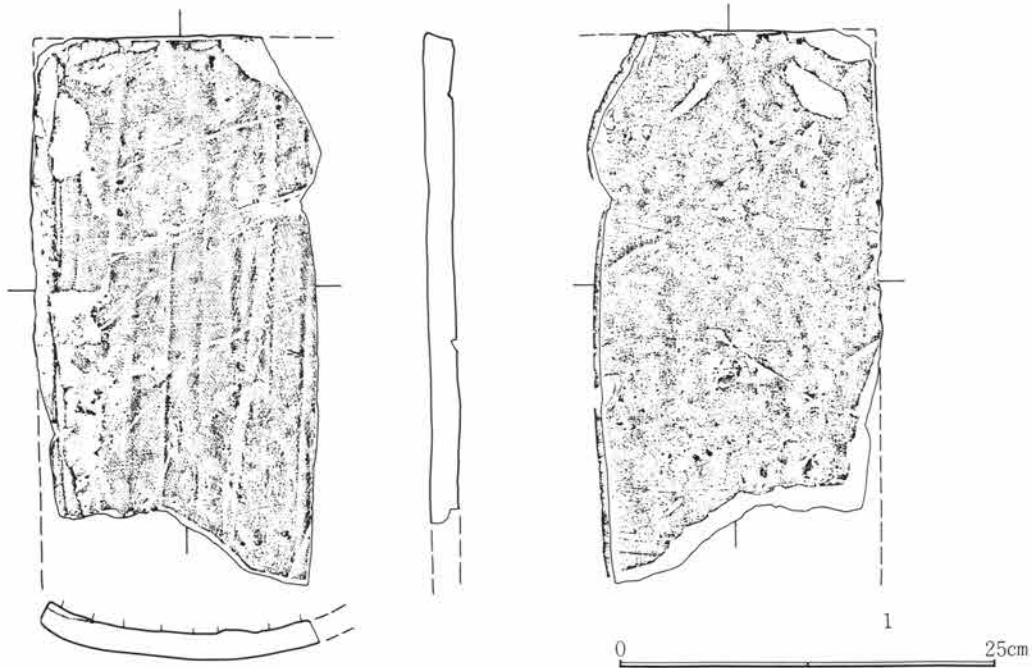
所見 当住居は、B 6・7住調査着手時点では当住居が両者に切られるものと思われ、調査もB 6・7住を先行させたが、整理事業実施時の本稿執筆中、この三者の新旧関係に疑問を感じ、遺物・出土遺物状態を勘案した結果、当住居が両者に先行するであろうことが判断された。この為当住居の遺物は三軒の住居に分別

第4章 検出された遺構・遺物

されている。調査・整理を含め筆者の不幸に原因している。尚、当住居の遺物を巻末に再編してあるので御参照願いたい。当住居は上述のとおりのものである為詳細は不明である。然し、カマド位置が明らかなことから住居形状はD区の第Ⅲ段階に対比され、遺物も同様である。住居の廃棄時期は、10世紀末頃と思われる。



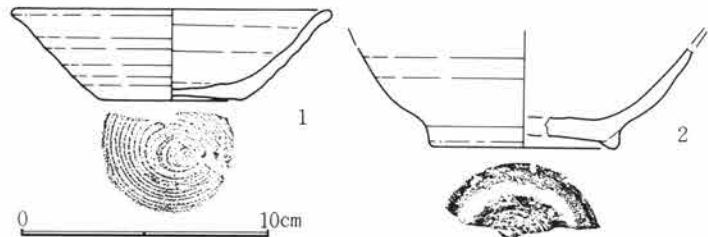
第389図 B区第27号住居跡・出土遺物実測図(1)



第390図 B区第27号住居跡出土遺物実測図(2)

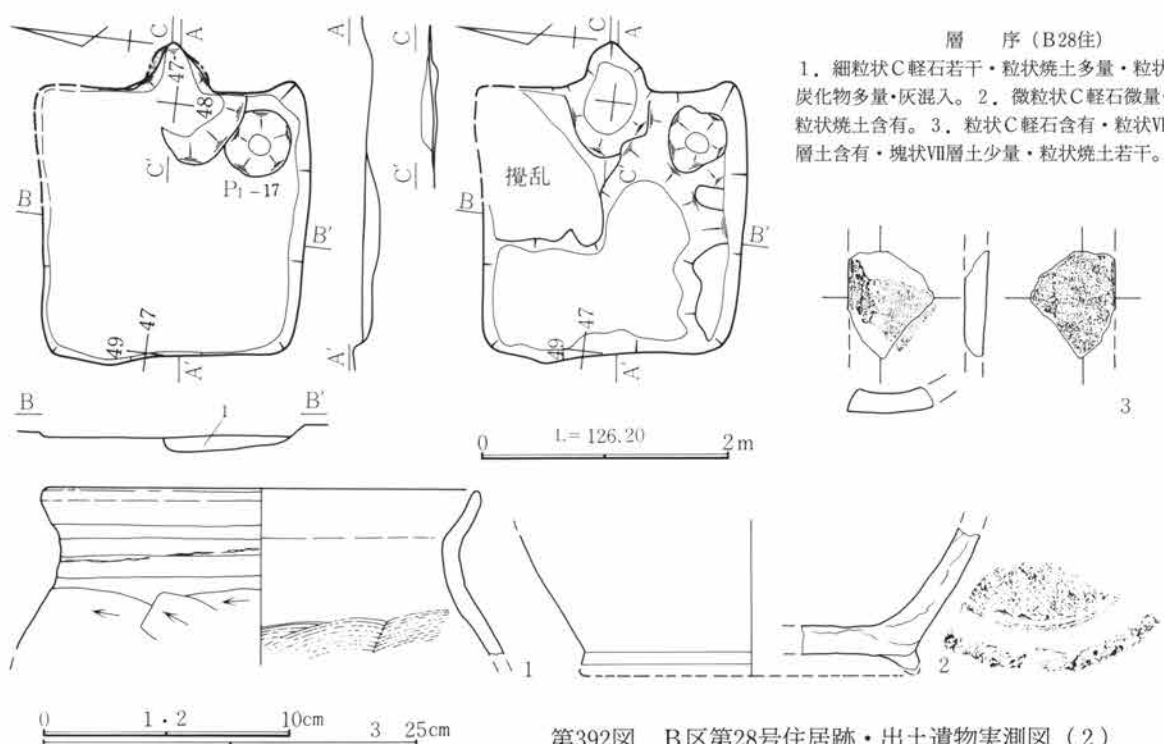
遺構名称	B区第28号住居跡		位置	46・47-B-47~49グリッド内。		残存深度	約10cm
平面形態	正方形。	規模	3.15m×3.20m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-84度-南
壁	斜位気味に立ち上がる？。		床面	平坦。造床が全体の $\frac{3}{4}$ に及ぶ(一部攪乱により不分明)。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P ₁ 。円形。径57cm・深度-17cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	南壁下及び西壁下で顕著で、西壁下では土坑状を呈する。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から65cm。			主軸方位	北-79度-南	
改築	有。掘り方より焼土を検出。			形状	短かい舌状を呈する。		
規模	全長 95cm・屋外長 35cm・屋内長 60cm・袖部幅 70cm・燃烧部幅 38cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。			袖	認められない。		
煙道	未検出。			掘り方	長楕円形状の土坑状を呈する。		
遺物出土状態	覆土内から少量の土師器片が出土している。						

所見 当住居は、B32住を切り構築しているが、B35住との新旧関係の把握は出来なかった。又、住居周辺は中世以降の攪乱が顕著であった為住居の遺存状態は非常に悪かった。住居は正形状を呈し、東壁中央部にカマドを具備し、南東隅部に傍竈坑を備えている。カマドは遺存が非常に悪い。各部分には補強材等の痕跡は認められなかった。住居の廃棄は、住居形状がD区の第I段階に対比されることから、9世紀後半頃と考えられる。



第391図 B区第28号住居跡出土遺物実測図(1)

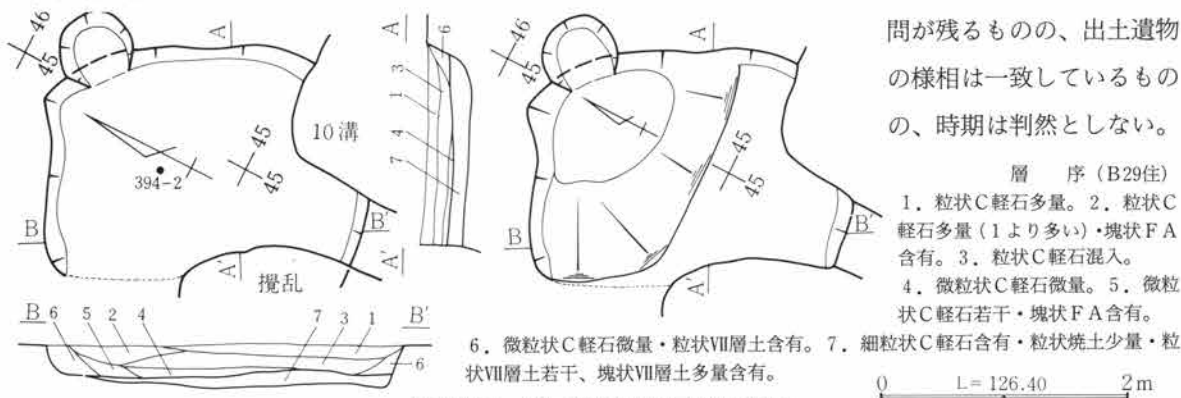
第4章 検出された遺構・遺物



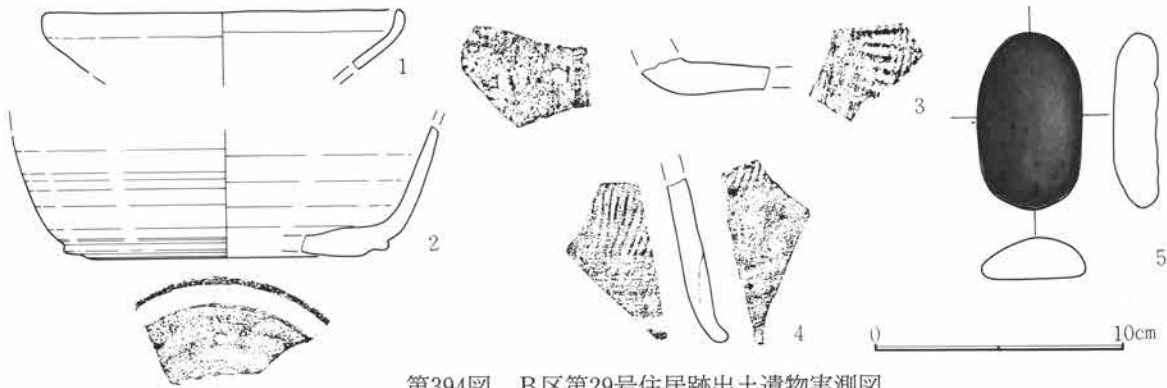
第392図 B区第28号住居跡・出土遺物実測図(2)

遺構名称	B区第29号住居跡		位置	44・45-B-44・45グリッド内。		残存深度	約22cm
平面形態	横長方形。	規模	1.8+αm×2.57m	構築基準辺	不分明	主軸方位	北-60度-南位か
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	南西隅部がやや高まる。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	北東隅部が大きく窪む。全体に造床が深い。						
遺物出土状態	覆土内から少量の土器・瓦類があるのみである。						

所見 当住居は、B10溝(近世～近代)・攪乱(昭和35年以降)に南東隅部・南西隅部を破壊されておりカマドを失っている。又、北西側ではB31住と重複しているが、調査時点での新旧関係は判然としなかった。この為、当住居の西側に就いての詳細は不明である。住居は、上述のとおり遺存状態が悪く詳細は不明である。住居の指向方向が東から北に向かうため、古い様相も看取されるが、検出部にカマドが無いことから疑問が残るものの、出土遺物の様相は一致しているものの、時期は判然としない。



第393図 B区第29号住居跡実測図



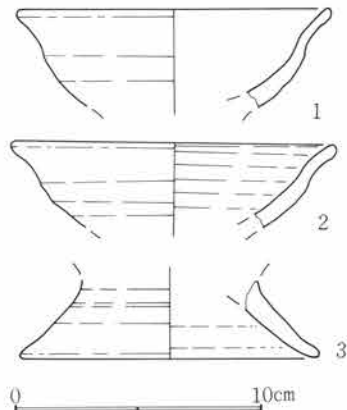
第394図 B区第29号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	B区第30号住居跡		位置	46~48-B-45~47グリッド内。		残存深度	約22cm
平面形態	正方形。	規模	2.28m × 2.6m	構築基準辺	不分明	主軸方位	北-88度-南位か
壁	斜位に立ち上がる。		床面	平坦。造床は認められなかった。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P ₁ 。円形状。径48cm・深度-24cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	未検出。						
遺物出土状態	覆土内から少量の土師器甕・坏・羽釜・瓦等の出土がある。						

遺構名称	B区第32号住居跡		位置	46・47-B-47グリッド内。		残存深度	約5cm
平面形態	不分明。	規模	-m × -m	構築基準辺	不分明	主軸方位	北-80度-南程か
B28号住等の破壊により詳細不詳。							

遺構名称	B区第34号住居跡		位置	46・47-B-46・47グリッド内。		残存深度	約5cm
平面形態	不分明。	規模	-m × 3.67?	主軸方位	不分明	主軸方位	北-79度-南程か
B30号住等の破壊により詳細不詳。							

所見 (B30住) 当住居跡は中世以降の攪乱により遺存が非常に悪かった。B6住・34住と重複し、B34住を切るものの、B6住との新旧関係は判然としなかった。住居は、北壁のみが検出され、床面は判然としなかった。カマドは、被熱部が若干検出された為これをカマドと考え図示した。又、傍竈坑と思われるピット(P₁)



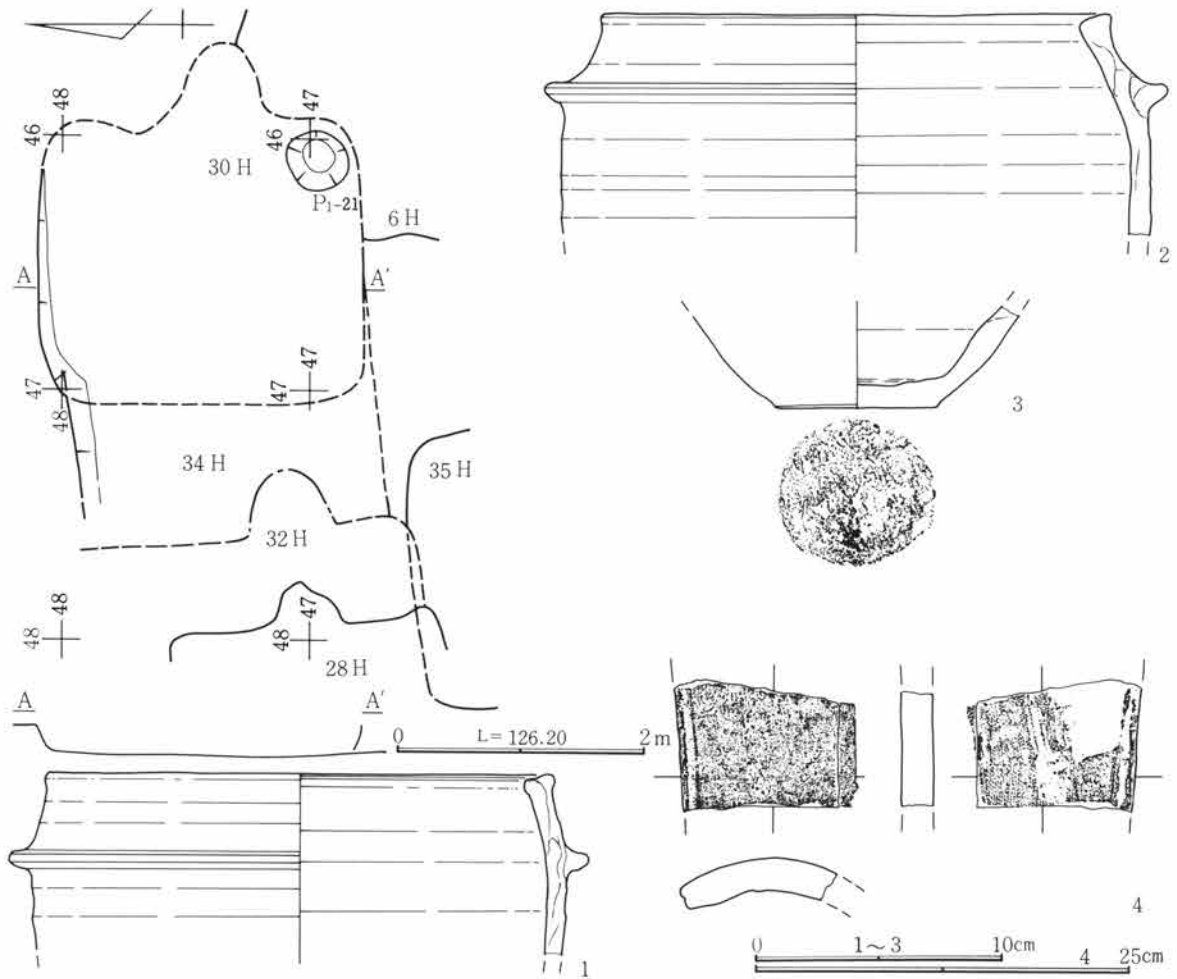
第395図 B区第30号住居跡出土遺物実測図(1)

が検出された。深度が比較的深い為疑問もある。この図示した住居形状は、D区の第II乃至III段階の状態であり、出土遺物が第II段階の様相が認められることから、当住居は10世紀前半~中頃の廃棄と思われる。

(B32住) 当住居は上述B30住同様に遺存状態は非常に悪く、壁・床面が検出出来なかったが、覆土の一部が残存することと、B34住内に被熱部・焼土が検出されたことから、この部分をカマドと想定した住居である。南東隅部周辺は地山土が検出されていることから立ち上がりはこの部分と考えられる。この住居形状はD区の住居分類の第II乃至III段階に対比されるが、B28住との新旧関係に矛盾があることから、カマド位置はさらに北側に想定される。住居の廃棄時期は9世紀代と考えられる。

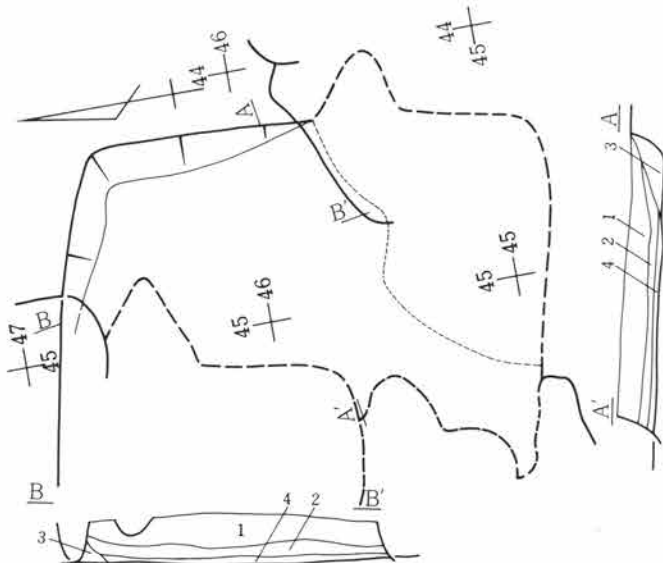
(B34住) B30住・32住に切られ詳細は不明である。

第4章 検出された遺構・遺物



第396図 B区第30号住居跡・出土遺物実測図(2)

遺構名称	B区第31号住居跡	位置	44~46-B-44・45グリッド内。	残存深度	約28cm
平面形態	正方形か？	規模	2.26+αm×3.86m	構築基準辺	不分明
		主軸方位	北-92度-南位か		
B6・7・27・29・33号住及び攪乱の破壊により詳細不詳。					



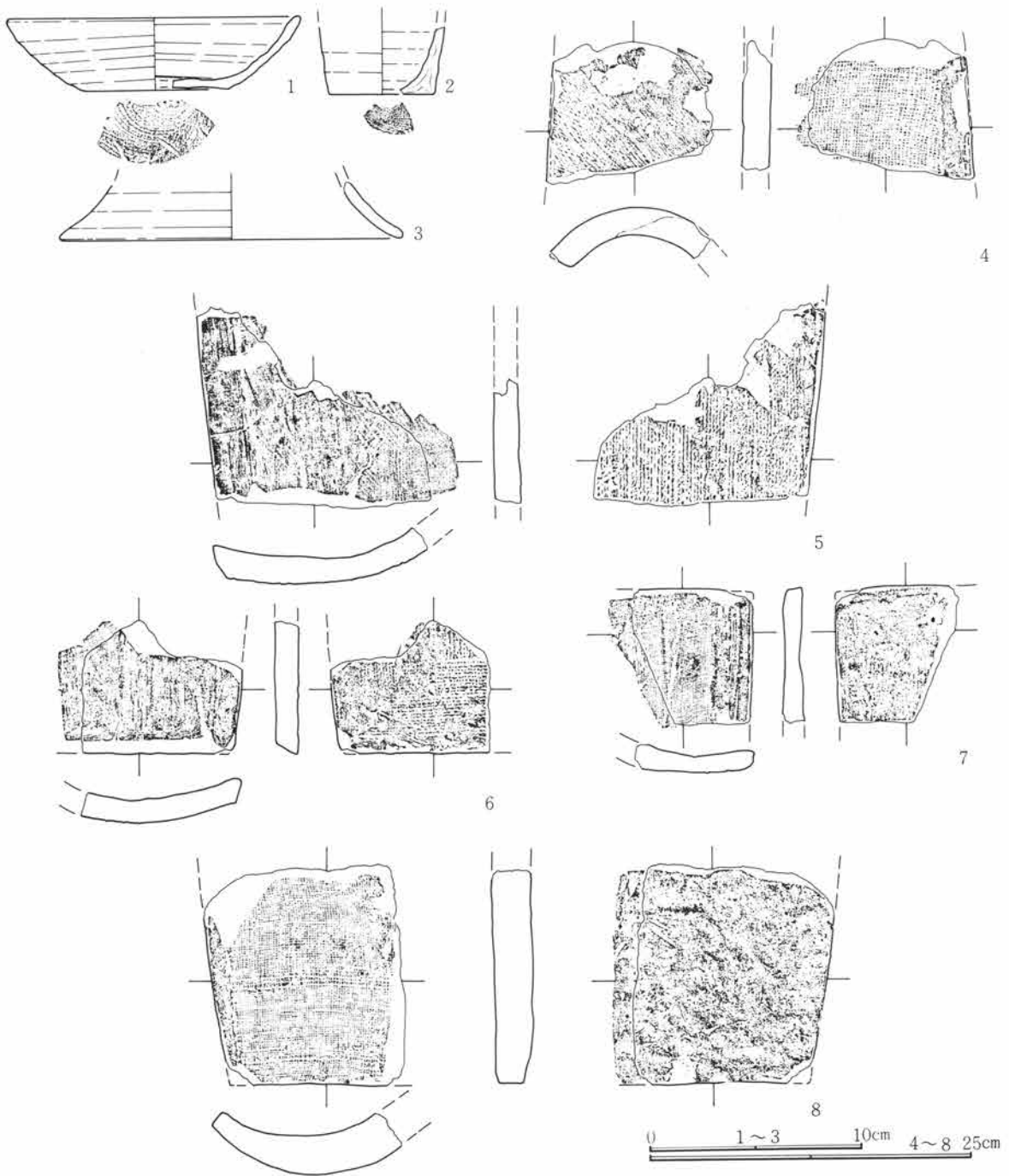
所見 当住居は、B6・7・27住に切られているが、B29住との新旧関係は不明である。住居は北東隅部から中央部が残存するのみで遺存が悪い。この為詳細は不明であるが、出土遺物は、D区の第II段階の様相が認められるものの、他の住居との新旧関係から疑問が残り時期は判然としない。

層序 (B31住)

1. 粒状C軽石多量。2. 粒状C軽石混入。3. 細粒状C軽石微量・粒状VII層土若干・塊状FA含有。4. 細粒状C軽石若干・粒状焼土若干。

0 L=126.30 2m

第397図 B区第31号住居跡実測図

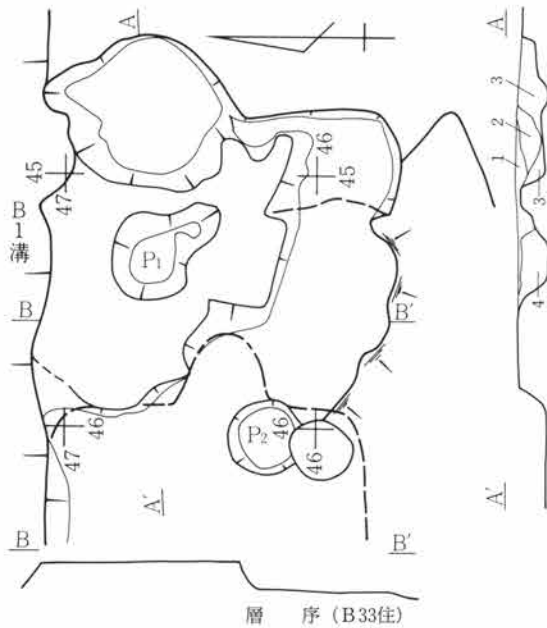


第398図 B区第31号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	B区第33号住居跡		位置	45~47-B-44~46グリッド内。			残存深度	約0cm
平面形態	不分明。	規模	2.3+αm × 2.8m	構築基準辺	不分明	主軸方位	北-90度-南位か	
B1溝・B6・34号住の破壊により詳細不詳。								

所見 当住居はB1溝（14世紀後半～16世紀前半）・B6・34住に切られ、更に、中世以降の攪乱が非常に著しかった為遺存は極めて悪い。この為詳細は不分明であり、図示した状態は掘り方の状態である。この状態の中で、カマド位置がある程度判断され、D区の住居分類に対比すると第I段階に対比されるものである。然し、出土遺物が皆無であった為言乃は出来かねるが、9世紀後半以前の住居と考えられる。

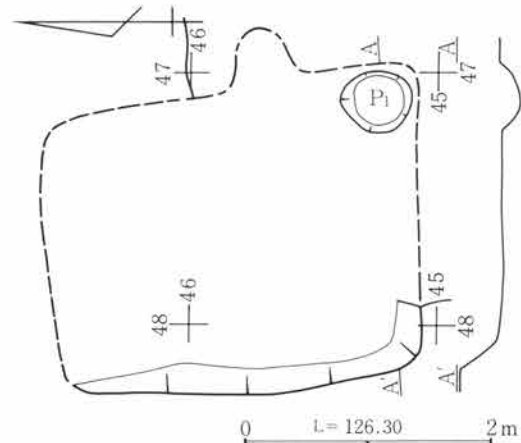
第4章 検出された遺構・遺物



層序 (B33住)
 1. 粒状C軽石多量・粒状焼土若干。2. 粒状C軽石混入。3. 粒状C軽石混入・粒状焼土若干・塊状焼土混入。4. 粒状C軽石混入・粒状焼土多量・粒状炭化物含有。

第399図 B区第33号住居跡実測図

所見 当住居はB7住に切られ、更に、試堀時のトレンチに破壊されている為遺存は悪い。住居は、南西部・西側が検出されたのみである。又、P₁としたものは、位置的に傍竈坑と思われるが、深度がやや深い為疑問が残る。出土遺物は皆無であるが、想定住居形状から10世紀前半以前と考えられる。



第400図 B区第35号住居跡実測図

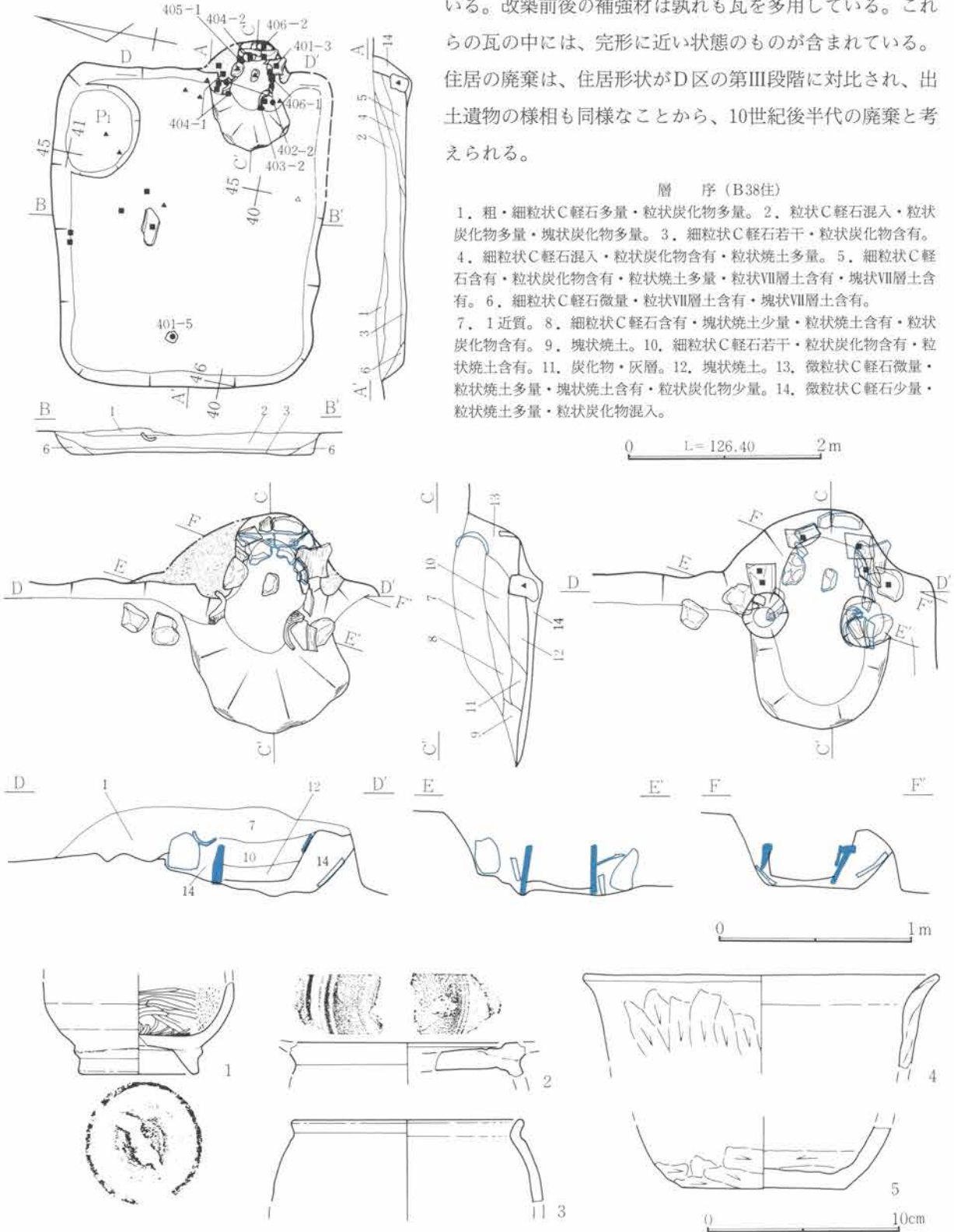
遺構名称	B区第35号住居跡	位置	45・46-B-46~48グリッド内。	残存深度	約34cm
平面形態	横長方形。	規模	(2.35)m×(3.1)m	構築基準辺	不分明
壁	斜位に立ち上がる。	床面	平坦。造床は認められなかった。	主軸方位	北-90度-南位か
壁溝	未検出。	傍竈坑・貯蔵穴	P ₁ 。円形状。径50cm・深度-14cm		
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。				
掘り方	地山VII層土中に構築底面があり、この面を床面としているため認められなかった。				
遺物出土状態	覆土内から土器類・瓦類が出土している。				

遺構名称	B区第38号住居跡	位置	39~41-B-44~46グリッド内。	残存深度	約34cm	
平面形態	縦長方形(矩形)。	規模	3.23m×2.80m	構築基準辺	北壁か	
壁	斜位気味に立ち上がる。	床面	平坦。一部に造床が認められた。	主軸方位	北-78度-南	
壁溝	未検出。	傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。					
掘り方	P ₁ が土坑状で北壁下で検出されたのみである。					
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から約30cm。	形状	馬蹄気味の舌状。	主軸方位	北-95度-南
改築	有。旧態を利用し壁面を改修している。		形状	馬蹄気味の舌状。		
規模	全長110cm・屋外長 33cm・屋内長 77cm・袖部幅100cm・燃烧部幅 27cm。					
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。壁を礫・瓦で補強する。					
煙道	未検出。	袖	両袖共に礫・瓦で補強し、屋内へ突出する。			
掘り方	屋外部は半円形状を呈する。					
遺物出土状態	カマド内で補強材に瓦・土器を多用しており、改築前も瓦を壁材に多用する。					

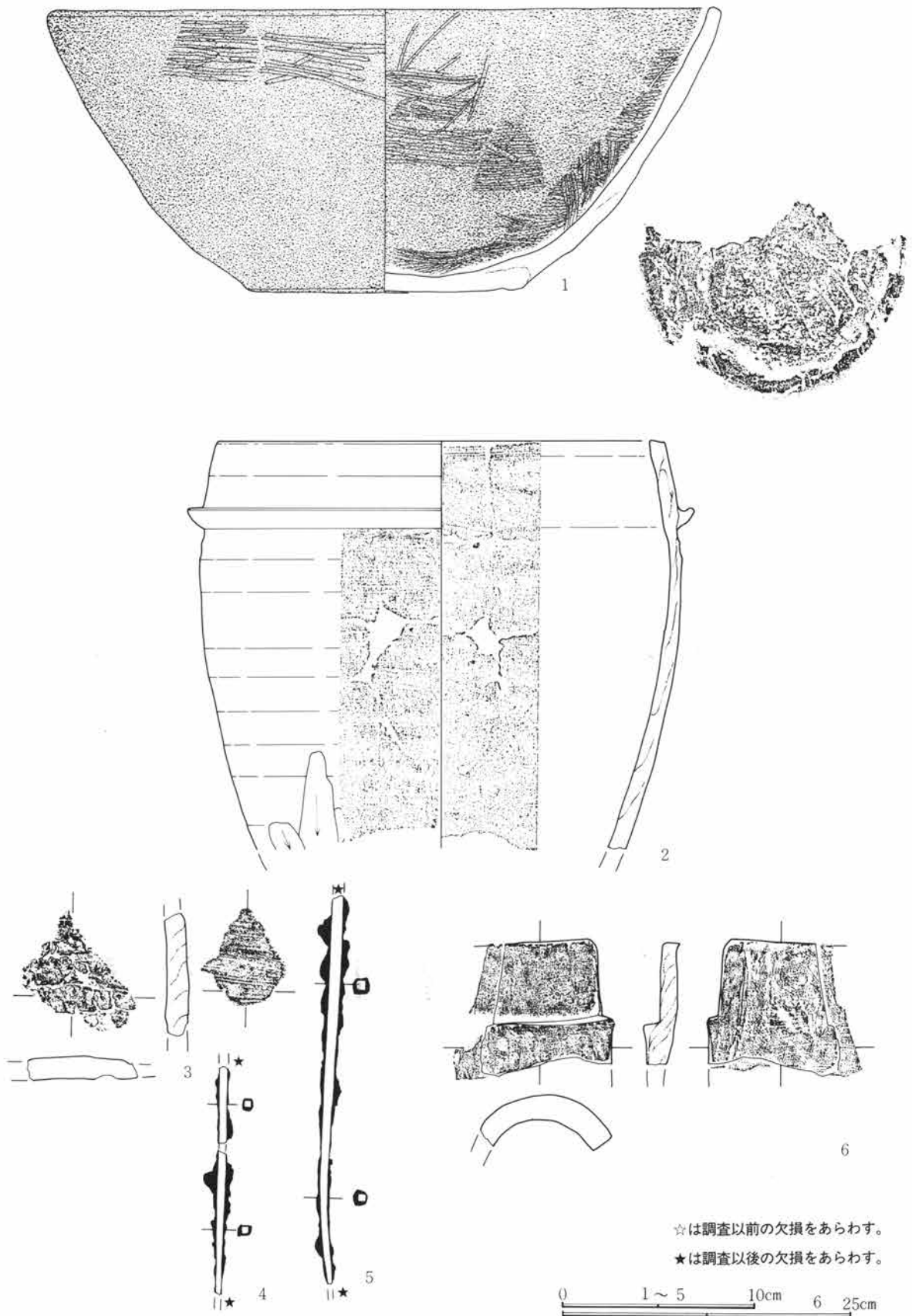
所見 当住居はB39住に切られている。更に、調査時の不手際により南東隅部を逸している。住居は縦長方形を呈し、東壁中央より南東隅部寄りにカマドを具備する。傍竈坑は未確認であったが、恐らく付設しなかったと考えられる。カマドは改築が認められ、掘り方には、改築以前の補強材が据えたままで検出されている。改築前後の補強材は孰れも瓦を多用している。これらの瓦の中には、完形に近い状態のものが含まれている。住居の廃棄は、住居形状がD区の第Ⅲ段階に対比され、出土遺物の様相も同様なことから、10世紀後半代の廃棄と考えられる。

層序 (B38住)

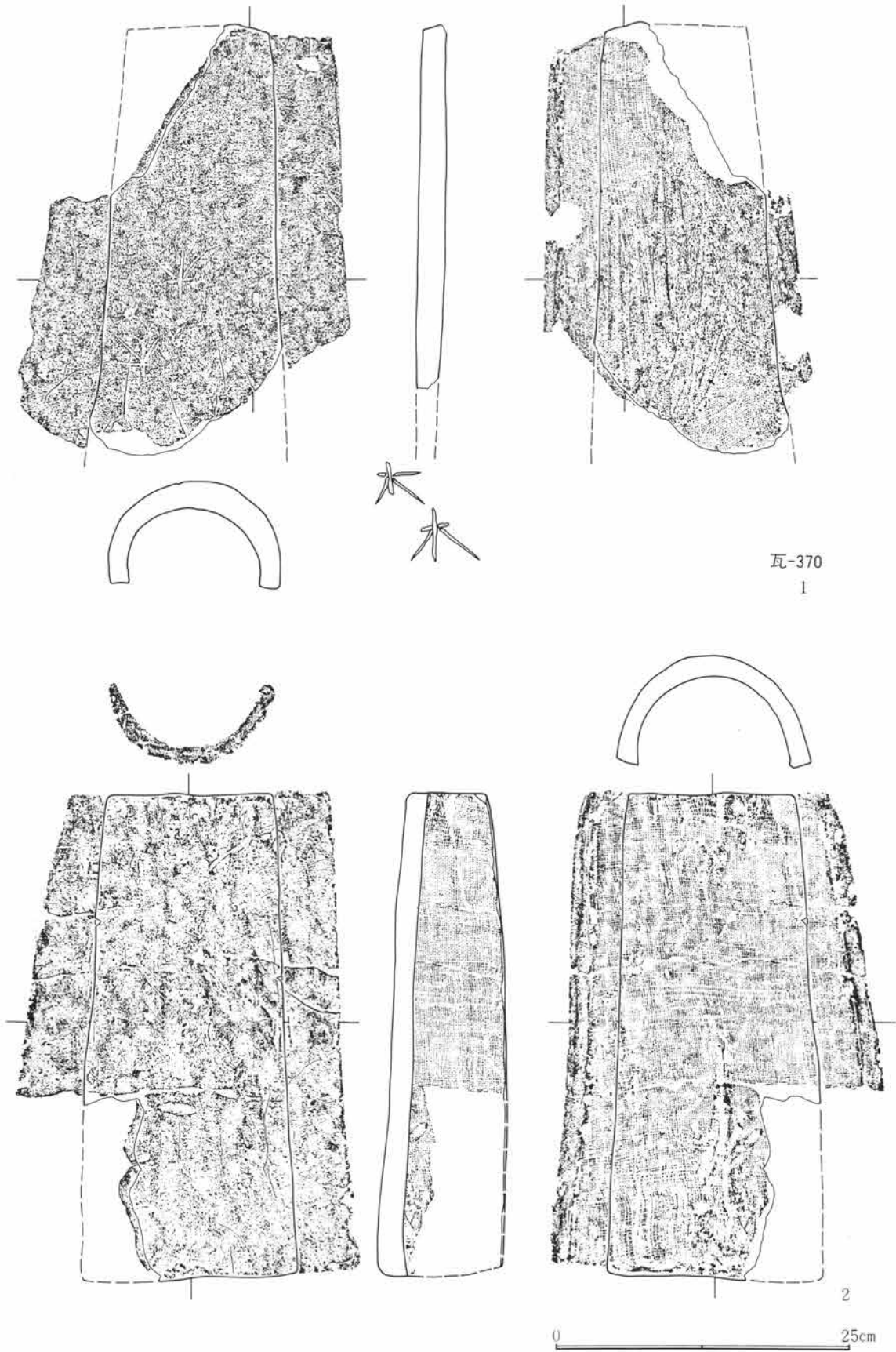
1. 粗・細粒状C軽石多量・粒状炭化物多量。
2. 粒状C軽石混入・粒状炭化物多量・塊状炭化物多量。
3. 細粒状C軽石若干・粒状炭化物含有。
4. 細粒状C軽石混入・粒状炭化物含有・粒状焼土多量。
5. 細粒状C軽石含有・粒状炭化物含有・粒状焼土多量・粒状Ⅶ層土含有・塊状Ⅶ層土含有。
6. 細粒状C軽石微量・粒状Ⅶ層土含有・塊状Ⅶ層土含有。
7. 1近質。
8. 細粒状C軽石含有・塊状焼土少量・粒状焼土含有・粒状炭化物含有。
9. 塊状焼土。
10. 細粒状C軽石若干・粒状炭化物含有・粒状焼土含有。
11. 炭化物・灰層。
12. 塊状焼土。
13. 微粒状C軽石微量・粒状焼土多量・塊状焼土含有・粒状炭化物少量。
14. 微粒状C軽石少量・粒状焼土多量・粒状炭化物混入。



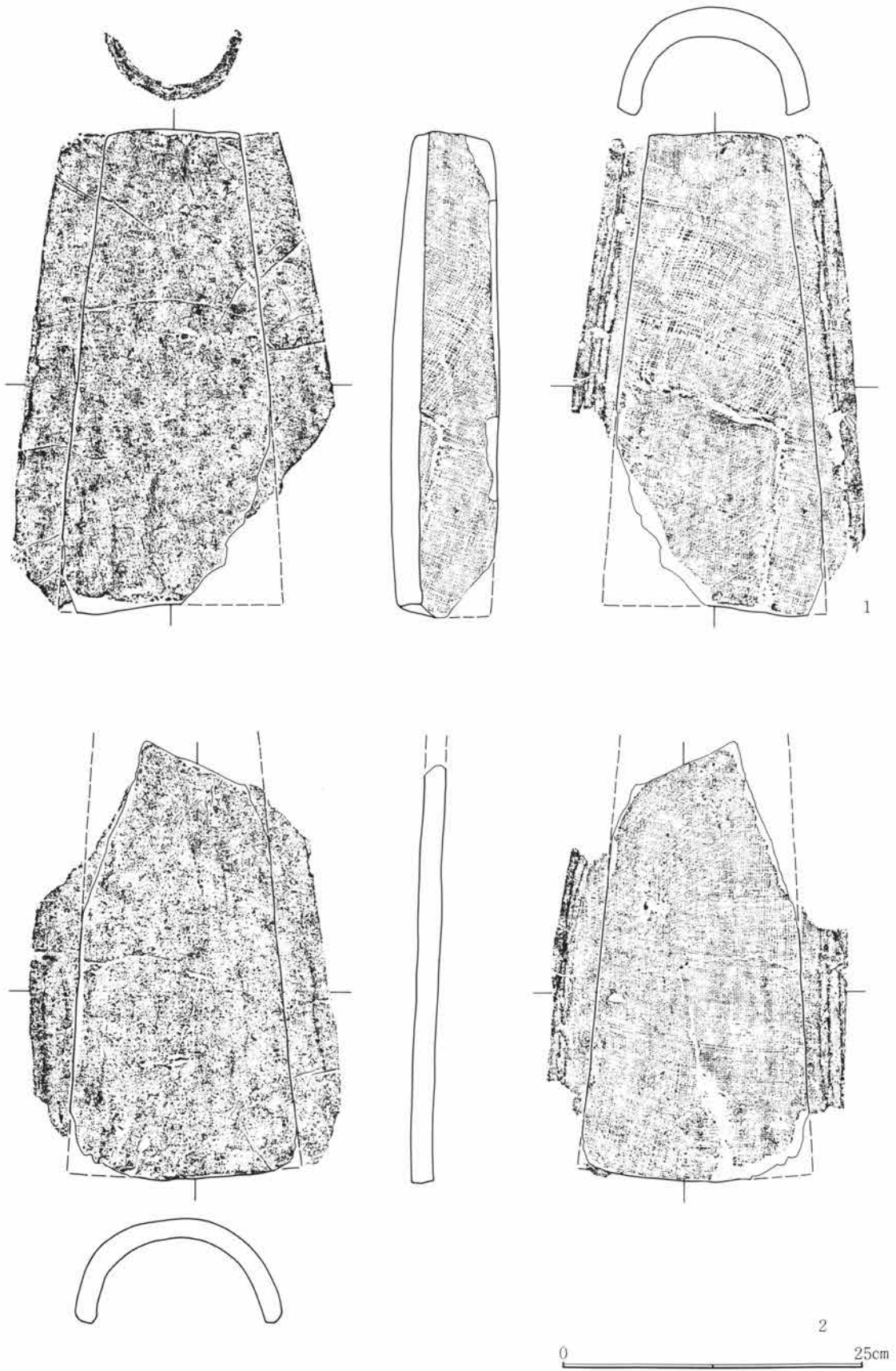
第401図 B区第38号住居跡・カマド・出土遺物実測図(1)



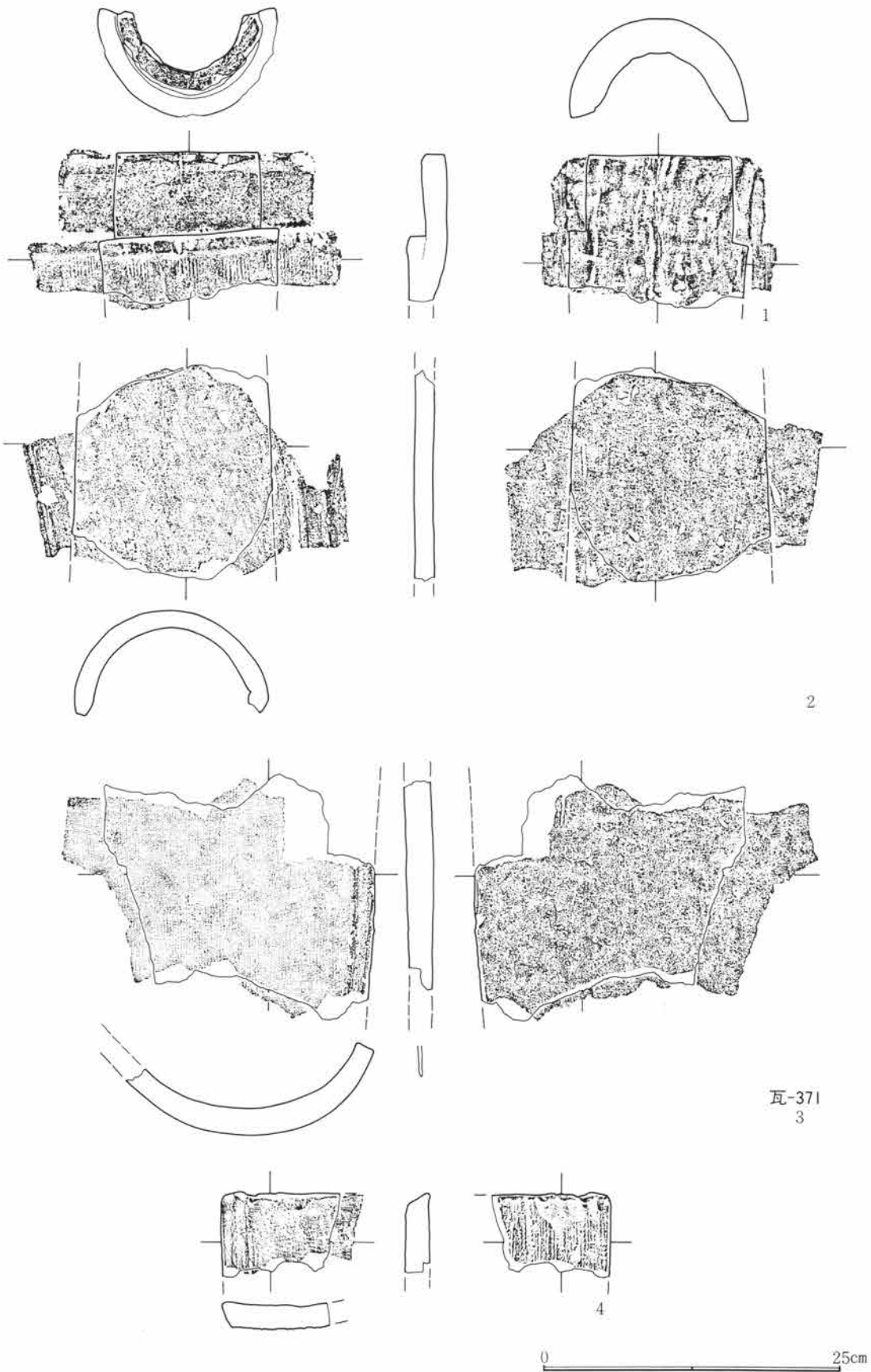
第402図 B区第38号住居跡出土遺物実測図(2)



第403図 B区第38号住居跡出土遺物実測図(3)

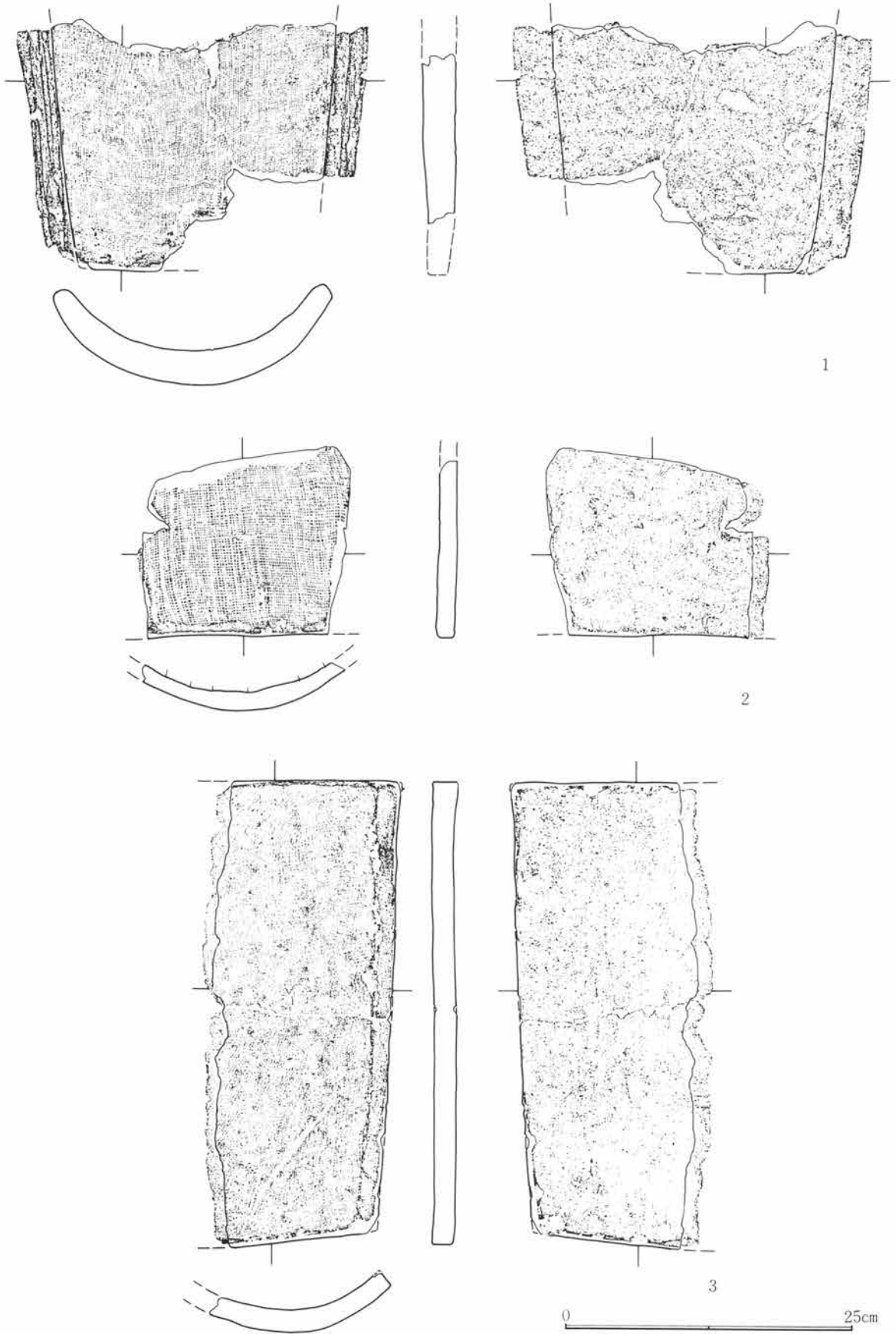


第404図 B区第38号住居跡出土遺物実測図(4)



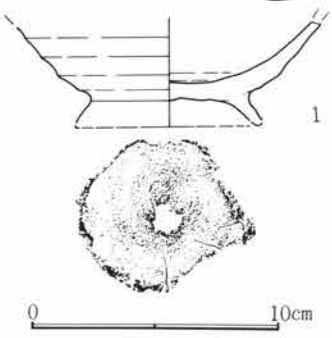
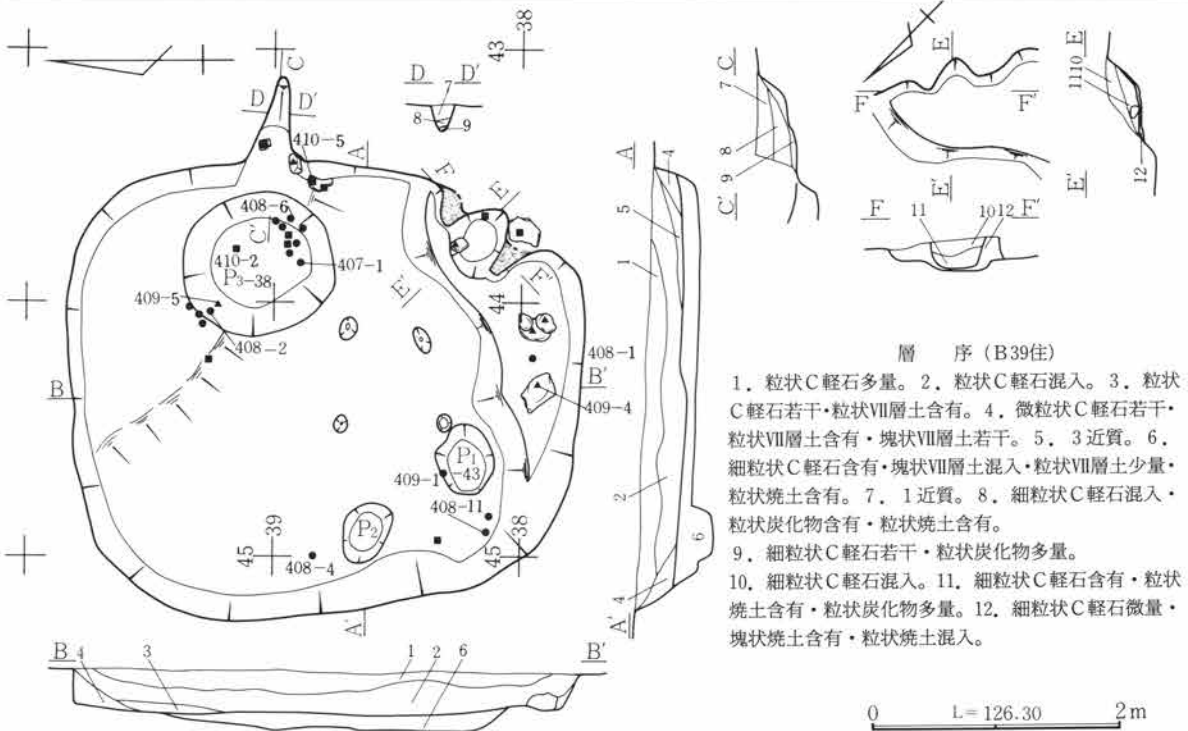
瓦-371
3

第405図 B区第38号住居跡出土遺物実測図(5)



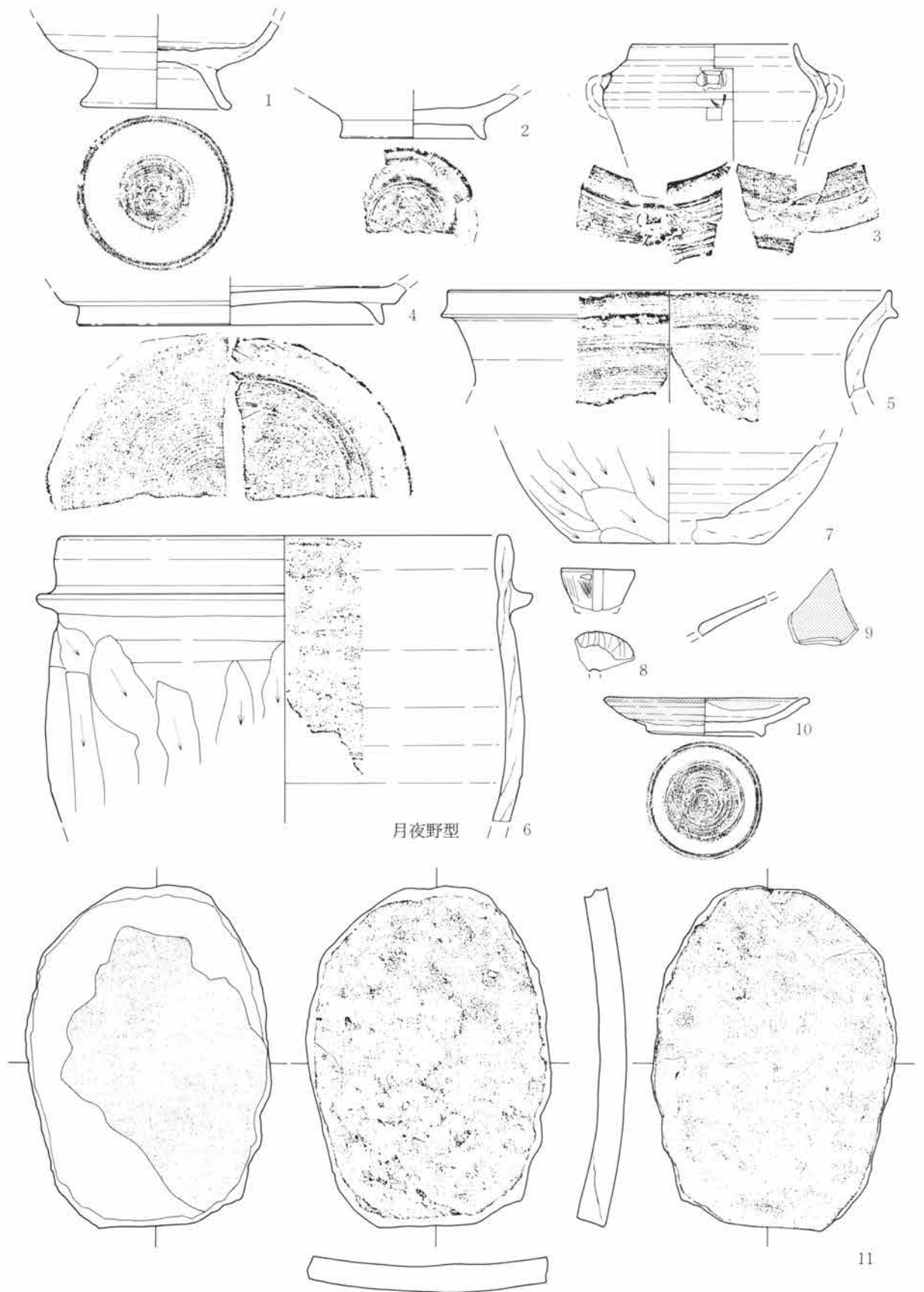
第406図 B区第38号住居跡出土遺物実測図(6)

遺構名称	B区第39号住居跡		位置	37~39-B-43~45グリッド内。		残存深度	約33cm
平面形態	隅丸方形。	規模	3.65m×4.12m	構築基準辺	不分明	主軸方位	北-94度-南位か
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	東壁側がやや高く、西側が一段低い。大半が造床。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	北東・南東隅部周辺を掘り残こし、三角形状に掘削されている。P ₃ の土坑状の掘り込を検出。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部寄り。			主軸方位	北-136度-南	
改築	有。位置の据え変えを行なう。			形状	Aカマドは舌状。Bカマドは細い舌状を呈する。		
規模	(Aカマド) 全長 57cm・屋外長 7cm・屋内長 50cm・袖部幅104cm・燃烧部幅 40cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
			袖	右袖が屋内に長く突出する。			
煙道	未検出。		掘り方	小さい土坑状で、鶏卵状を呈する。			
遺物出土状態	掘り方内での出土がやや多。						



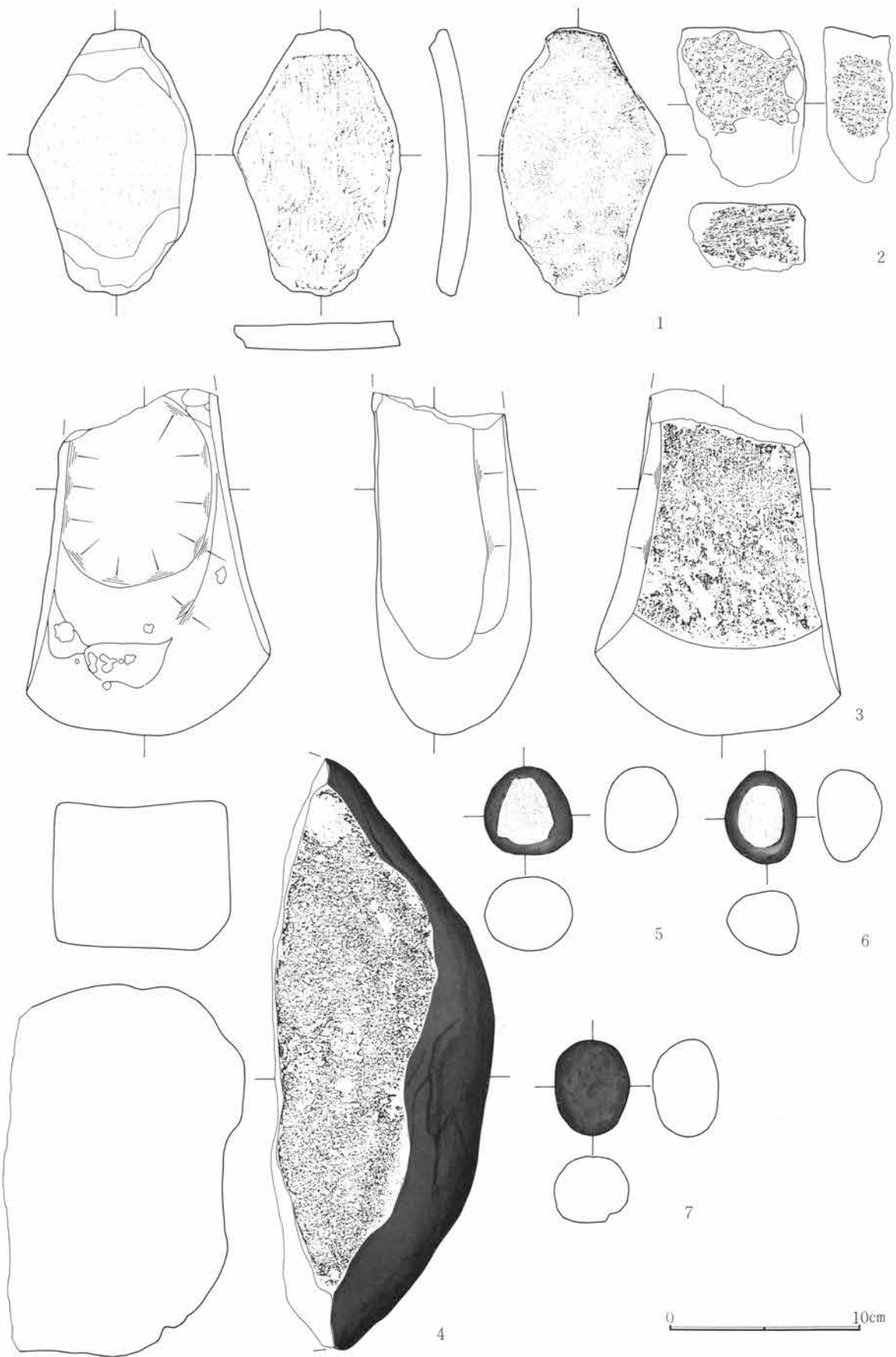
第407図 B区第39号住居跡・出土遺物実測図(1)

所見 当住居はB38住を切り構築している。住居は、四隅部が強い丸味を帯びる。カマドは東壁で2ヶ所検出されている。この二者の内北東隅寄りのは、袖が失なわれており、移設に伴ない廃棄されたものと考えられ、南東隅部のカマドは移設されたものと考えられる。図示した住居平面図は掘り方の状態を示したが、カマド前面のP₁は、掘り方で検出されているが、P₂は判然としなかった。住居の廃棄時期は、住居形状がD区の住居分類の第V段階に対比されるが、出土遺物の様相は夾雑した状態で遺存良好なものは皆無であった。この点から、住居形状を優先し11世紀中頃と考える。

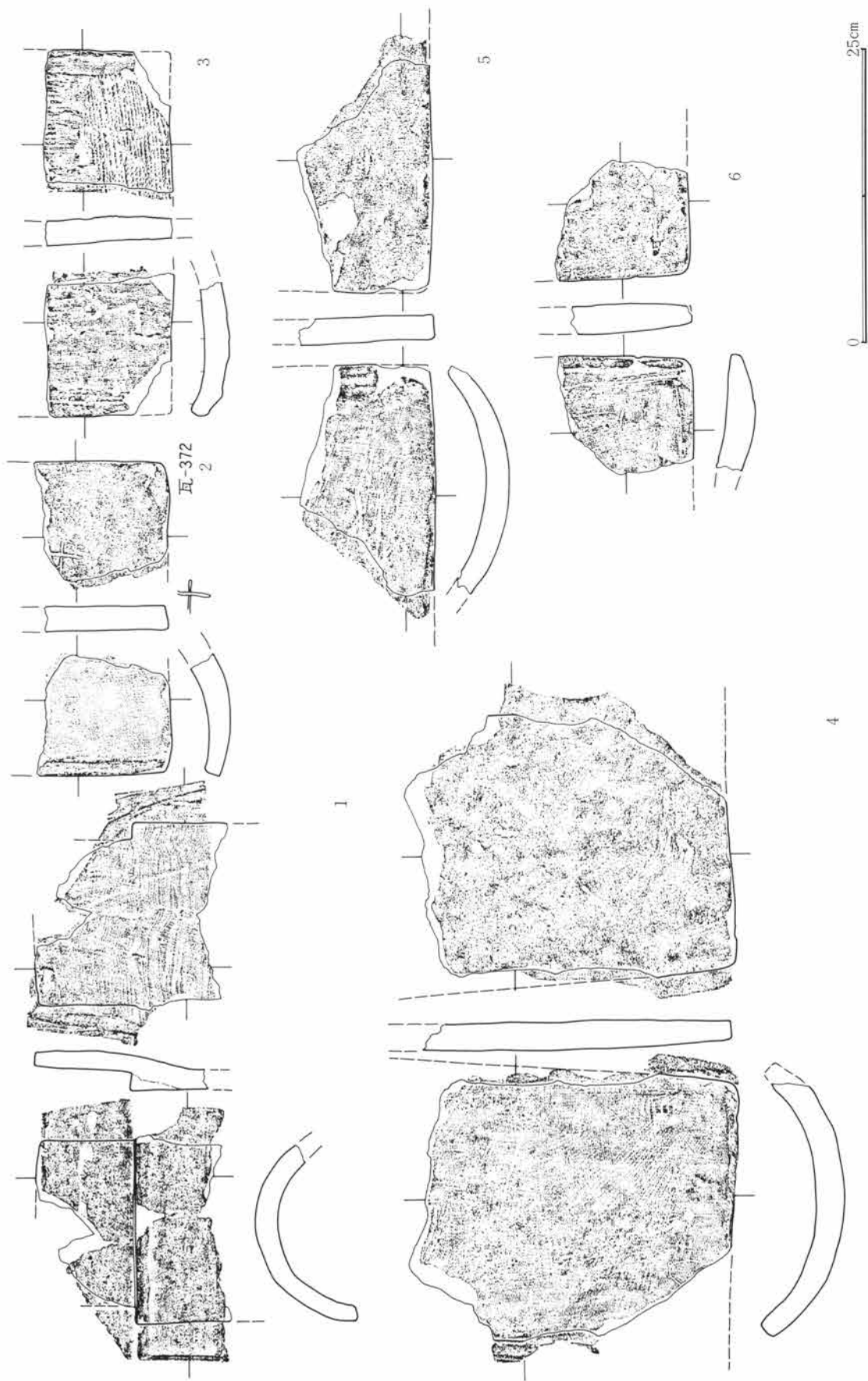


第408図 B区第39号住居跡出土遺物実測図(2)

第1節 南側調査区



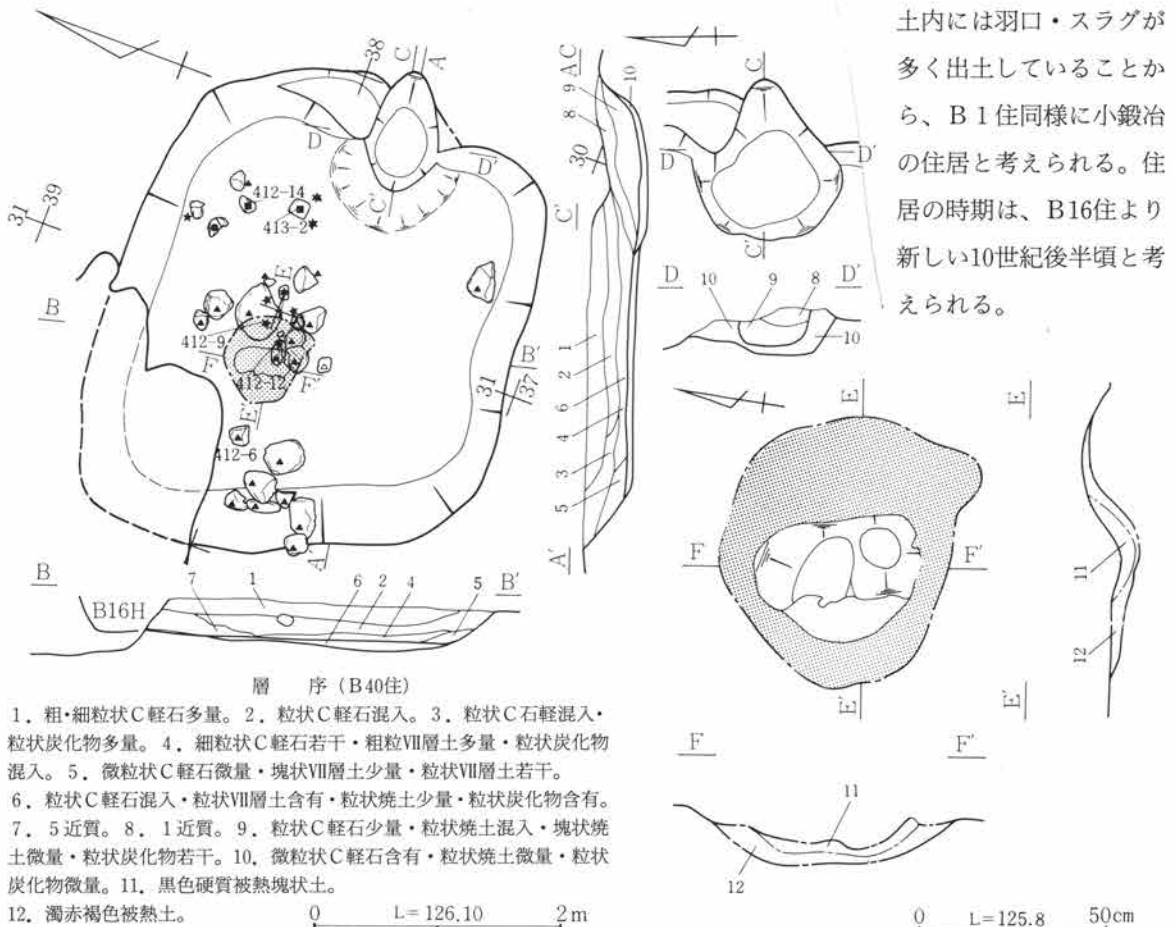
第409図 B区第39号住居跡出土遺物実測図(3)



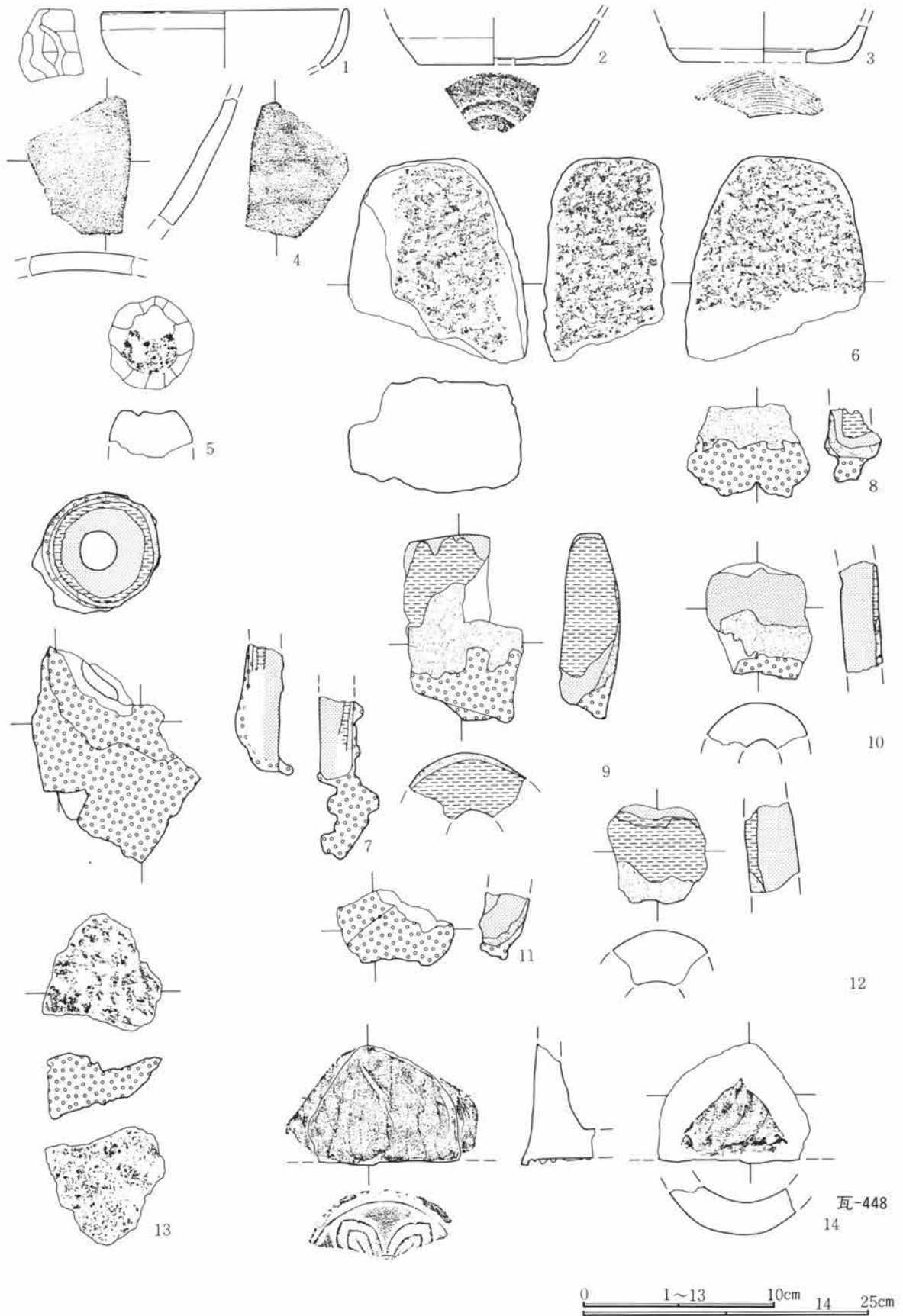
第410図 B区第39号住居跡出土遺物実測図(4)

遺構名称	B区第40号住居跡		位置	37・38-B-30~32グリッド内。		残存深度	約34cm	
平面形態	不整形。	規模	(3.7)m×3.3m	構築基準辺	北壁	主軸方位	北-87度-南	
壁	斜位に立ち上がる。		床面	平坦。浅い造床が認められた。				
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	南側で大きく皿状に窪む状態。							
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から80cm。			主軸方位	北-79度-南		
改築	不分明。(有か)			形状				
規模	全長 95cm・屋外長 43cm・屋内長 52cm・袖部幅115cm・燃烧部幅 53cm。							
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。							
				袖	瘤状で小さい。補強材等は認められなかった。			
煙道	仰角60度程で立ち上がる。			掘り方	不整形(三角形状)の土坑状を呈する。			
遺物出土状態	礫の出土が多い。孰れも覆土中での出土である。							

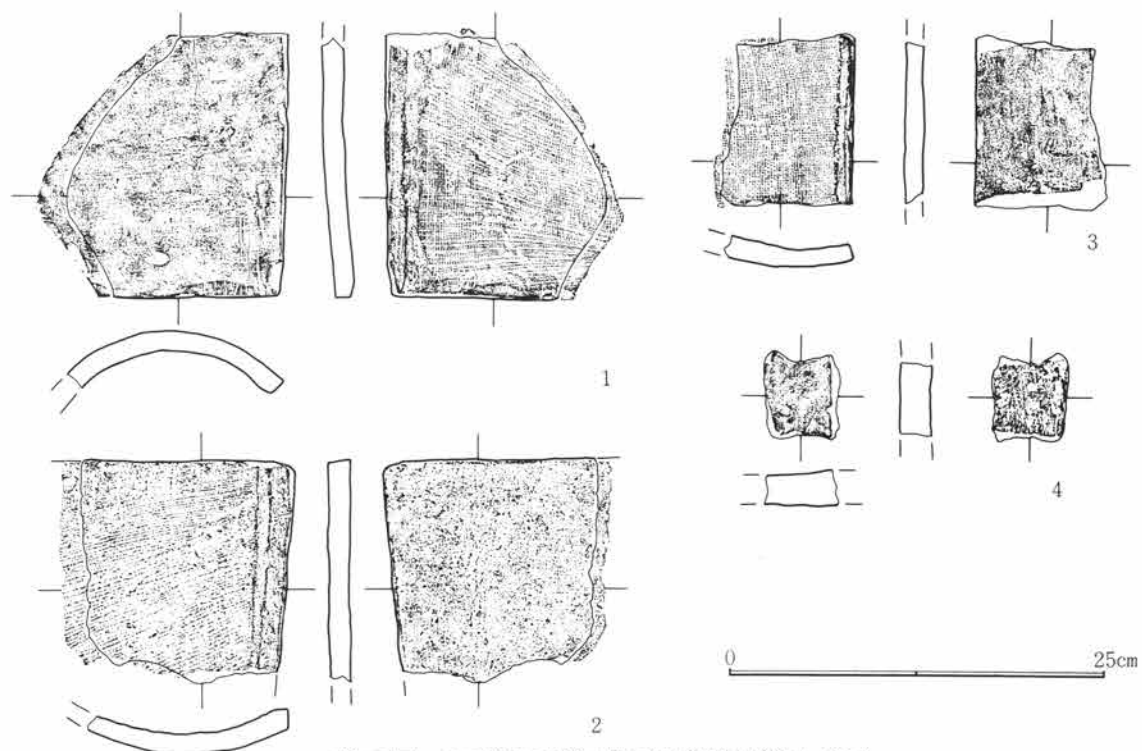
所見 当住居はB16住と重複しているがその新旧関係は分明ではない。住居は、B39住同様に四隅が強い丸味を帯びている。形状は縦長形状を呈し東壁中央にカマドを具備するが、傍竈坑は未検出であった。又、床面中央よりやや北西隅部に寄って地床炉が検出された。この地床炉は先述したB1住と同様のもので、覆



第411図 B区第40号住居跡・炉床実測図



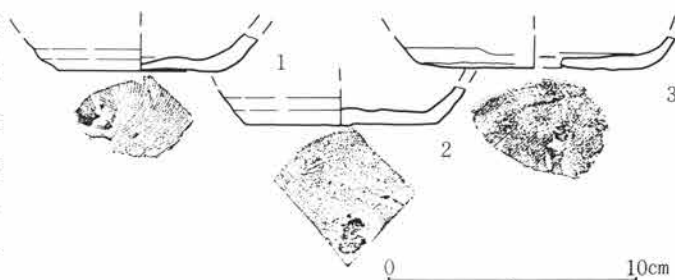
第412図 B区第40号住居跡出土遺物実測図(1)



第413図 B区第40号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	B区第41号住居跡		位置	35・36-B-44~46グリッド内。		残存深度	約16cm
平面形態	縦長方形か？。	規模	3.5m×1.68+αm	構築基準辺	不明	主軸方位	北-90度-南位か
壁	斜位に立ち上がる。		床面	平坦。全面に造床が認められた。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	3ヶ所に柱穴状の掘り込み (P ₁ ・P ₃ ・P ₄) と、土坑状のP ₂ を検出している。						
カマド	位置	東壁。			主軸方位	北-90度-南	
改築	有。掘り方より焼土を検出。		形状	細い舌状。			
規模	全長 60cm・屋外長 40cm・屋内長 20cm・袖部幅75+αcm・燃烧部幅 35cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
			袖				
煙道	仰角20度程で立ち上がる。		掘り方	不整楕円形状を呈する土坑状である。			
遺物出土状態	全体に遺物の量は少なく、覆土内から少量の土器類と瓦類が出土している。						

所見 当住居は、住居の南側半分程が、調査区内を東西に横走る農道下に当たり、完全露呈が出来なかった住居である。この為住居全体の詳細に就いては不明な部分が多い。住居形状は上述のとおり不明であるが、カマドは東壁に具備している。掘り方は、床面下5cm程で平坦な底面が検出されており、部分

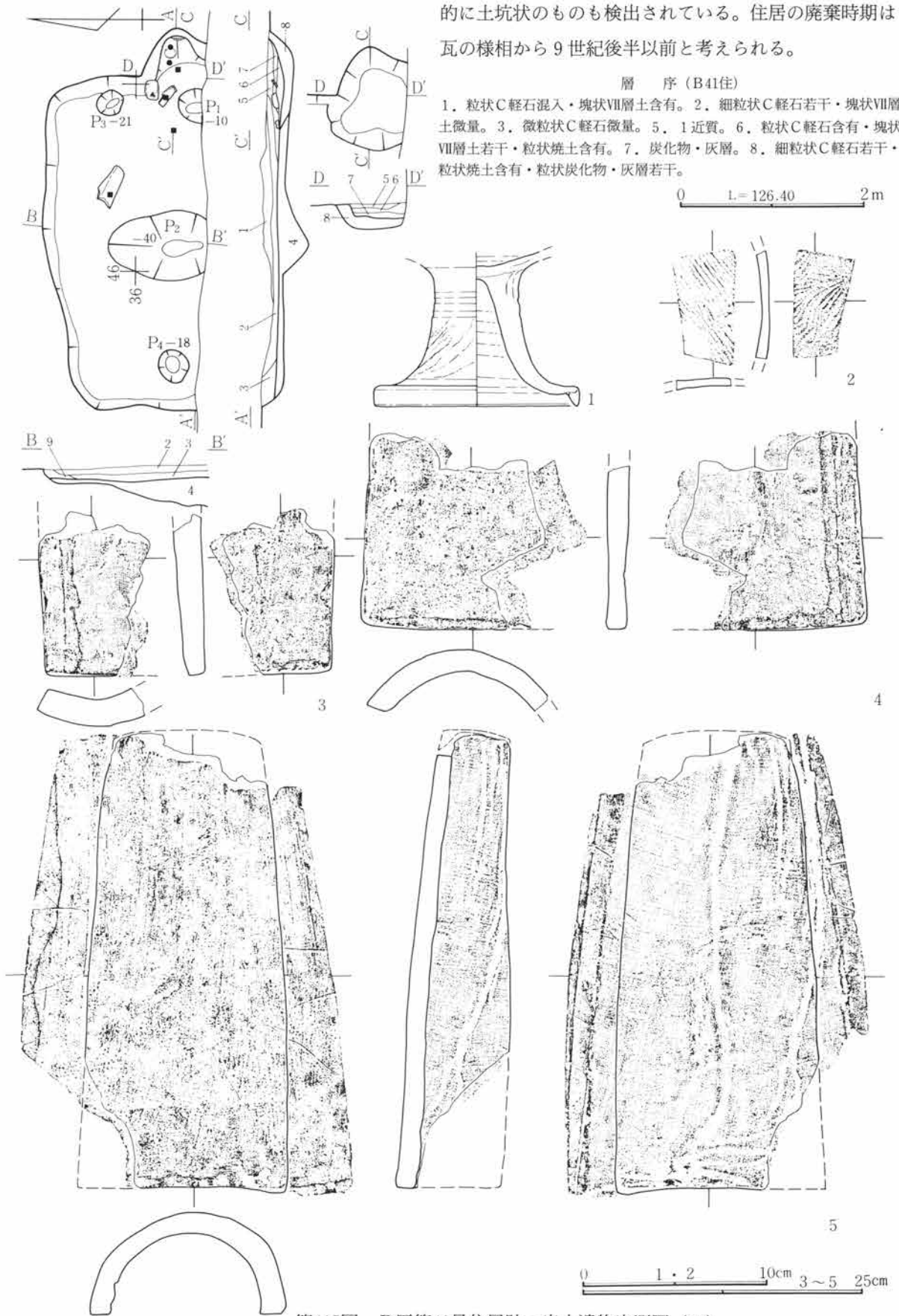


第414図 B区第41号住居跡出土遺物実測図(1)

的に土坑状のものも検出されている。住居の廃棄時期は瓦の様相から9世紀後半以前と考えられる。

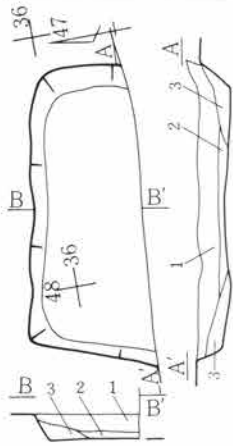
層序 (B41住)

1. 粒状C軽石混入・塊状VII層土含有。
2. 細粒状C軽石若干・塊状VII層土微量。
3. 微粒状C軽石微量。
5. 1近質。
6. 粒状C軽石含有・塊状VII層土若干・粒状焼土含有。
7. 炭化物・灰層。
8. 細粒状C軽石若干・粒状焼土含有・粒状炭化物・灰層若干。



第415図 B区第41号住居跡・出土遺物実測図(2)

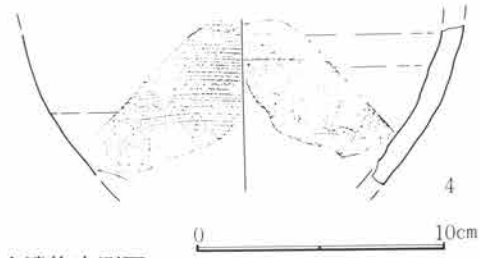
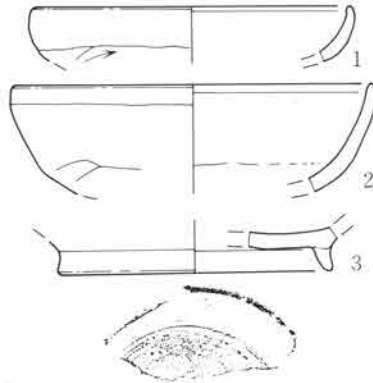
遺構名称	B区第42号住居跡		位置	35・36-B-47・48グリッド内。		残存深度	約22cm
平面形態	不明。	規模	2.4m×1.0+αm	構築基準辺	西壁か	主軸方位	北-110度-南
壁	斜位に立ち上がる。		床面	平坦。造床は認められなかった。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	認められなかった。						
遺物出土状態	少量の土器類・瓦類の出土がある。						



- 層序 (B42住)
1. 粒状C軽石混入。
 2. 細粒状C軽石含有。
 3. 微粒状C軽石微量。

0 L=126.40 2m

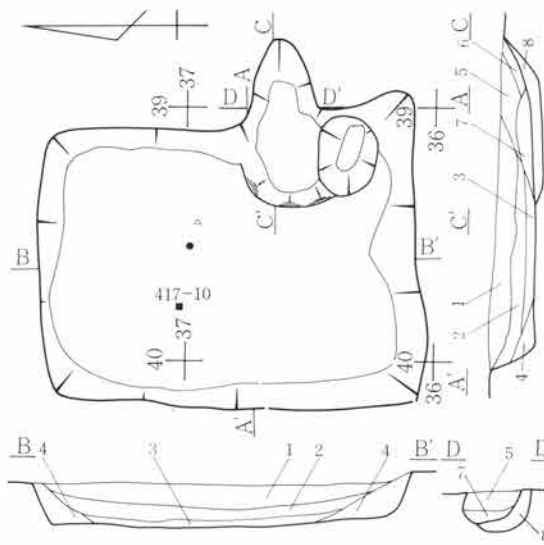
所見 当住居は前述B41住同様に、住居の大半が調査区内を東西に横走る農道下に当り、完全露呈が出来なかった。この為、住居の詳細に就いては不明である。検出部では、北西隅部が鋭く、北東隅部は丸味を帯びている。この内、前者の状況は、北壁乃至西壁が構築基準辺と考えられる。出土遺物は検出部が僅かであったことから少なく、図示したものが作図可能なものであった。上述の状況から、住居の時期は不明である。



第416図 B区第42号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	B区第44号住居跡		位置	36・37-B-38~40グリッド内。		残存深度	約35cm
平面形態	横長方形。	規模	2.4m×3.0m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-90度-南
壁	斜位に立ち上がる。		床面	平坦。造床は認められなかった。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P ₁ 。楕円形。62×48cm・深度-22cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	未検出。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から60cm。				主軸方位	北-92度-南
改築	有。掘り方内より焼土を検出。			形状	舌状か？調査不備により使用面の検出出来ず。		
規模	全長123cm・屋外長 60cm・屋内長 63cm・袖部幅100cm・燃烧部幅 40cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。			袖	補強材等はなかった。		
煙道	仰角20度程で立ち上がる。			掘り方	長楕円形を呈する。		
遺物出土状態	床面直上で数点の土器・鉄器・瓦が出土し、他は覆土内から少量出土している。						

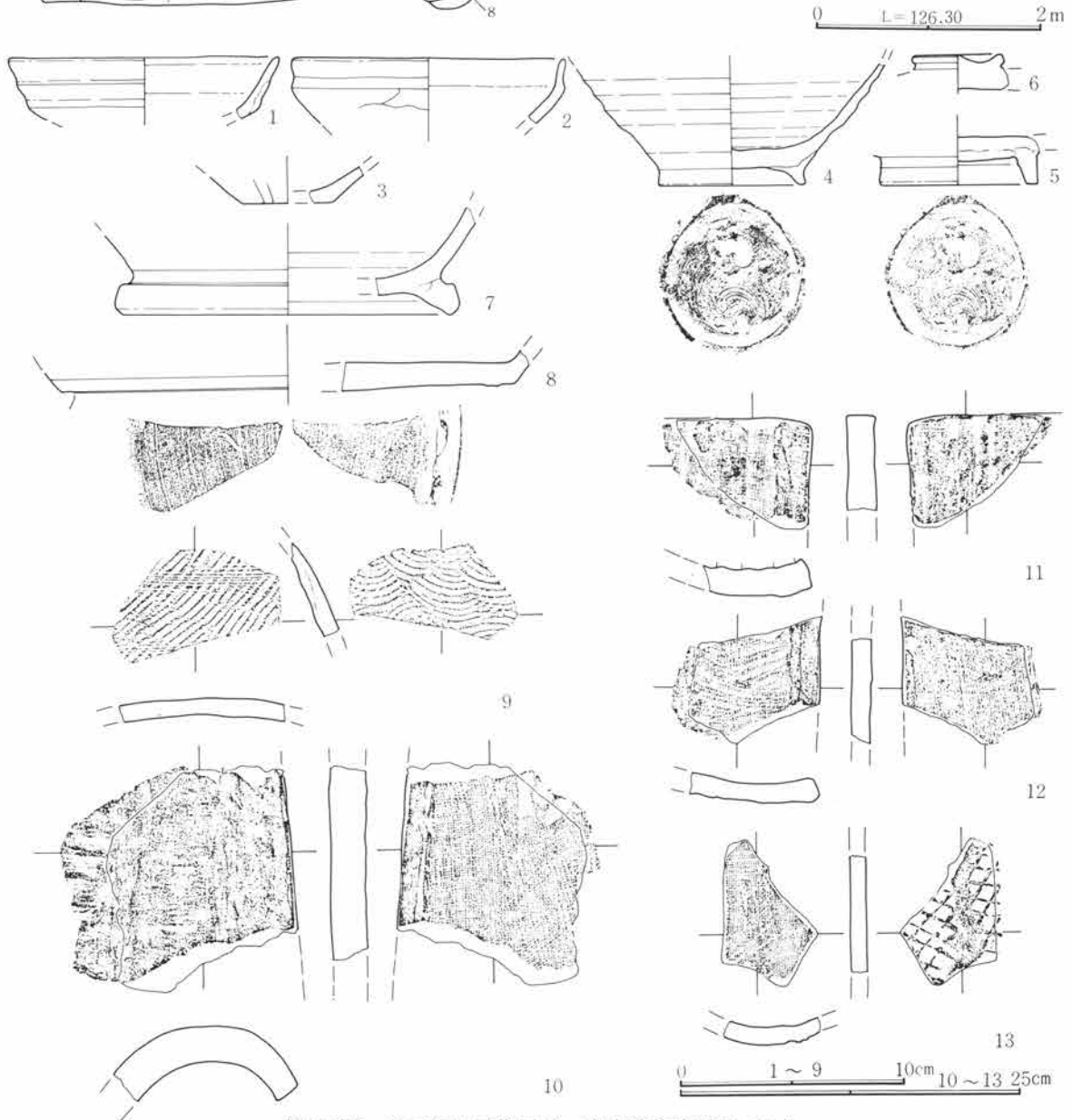
所見 当住居は切り合関係の無い単独住居である。住居の南壁部は、調査区内を東西に横走る農道の調査区法面に接していた。住居は、東壁中央よりやや南東隅部寄りに具備する。又、傍竈坑はカマド右袖に接す



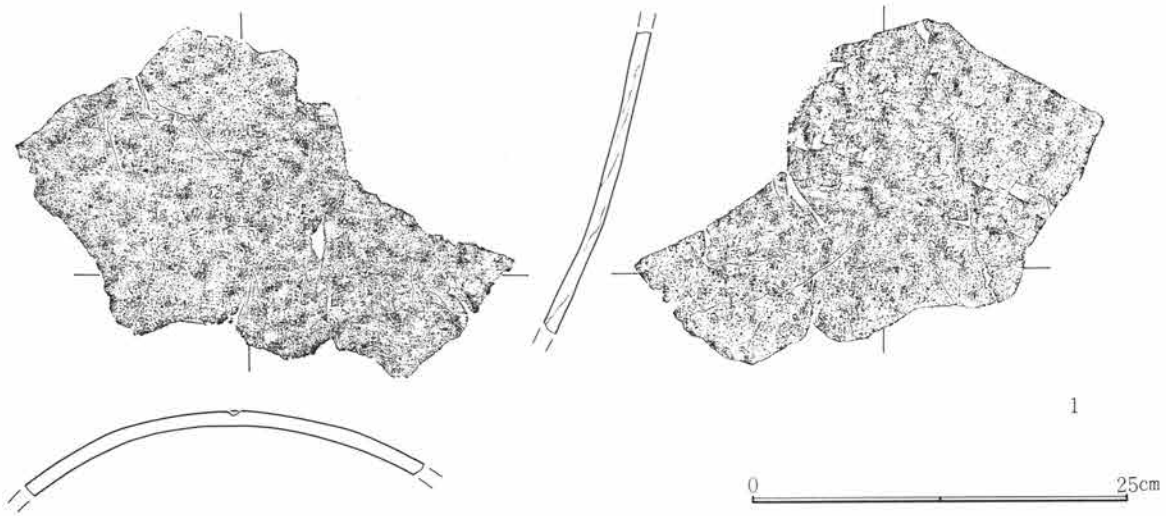
る状態で検出されている。カマドは、調査時の不手際により、使用面での図化が為されなかった。図示した状態は掘り方図である。又、カマドの各部位には補強材は検出されなかった。一方、住居の掘り方は、床面を地山土を使用していた為認められなかった。住居の廃棄は、住居形状がD区の住居分類の第II段階に対比され、出土遺物の中にも同様な状況が看取されることから、住居は、10世紀前半代の廃棄と考えられる。

層序 (B44住)

1. 粗・細粒状C軽石混入。2. 粒状C軽石含有。3. 粒状C軽石若干。
4. 微粒状C軽石微量。5. 粒状C軽石混入・塊状焼土混入。6. 粒状C軽石若干・粒状炭化物含有・粒状焼土含有。7. 細粒状C軽石含有・塊状焼土混入。8. 粒状C軽石若干・粒状焼土含有・粒状炭化物若干。

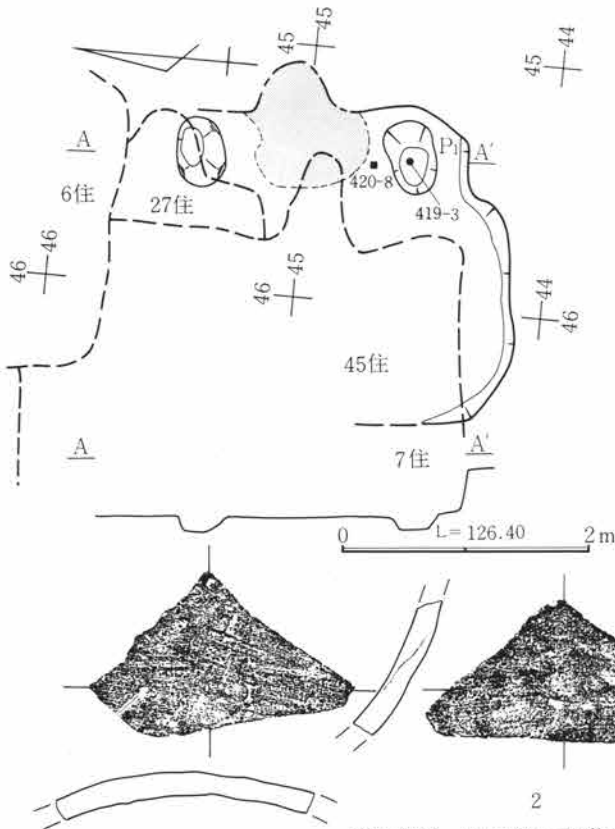


第417図 B区第44号住居跡・出土遺物実測図(1)

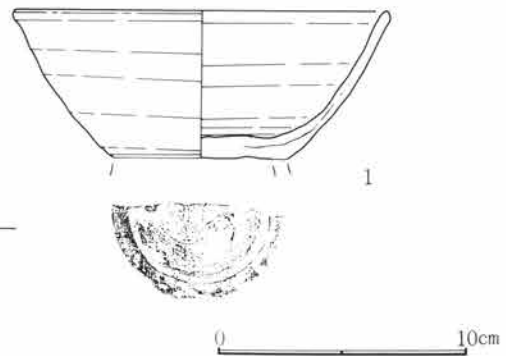


第418図 B区第44号住居跡出土遺物実測図(2)

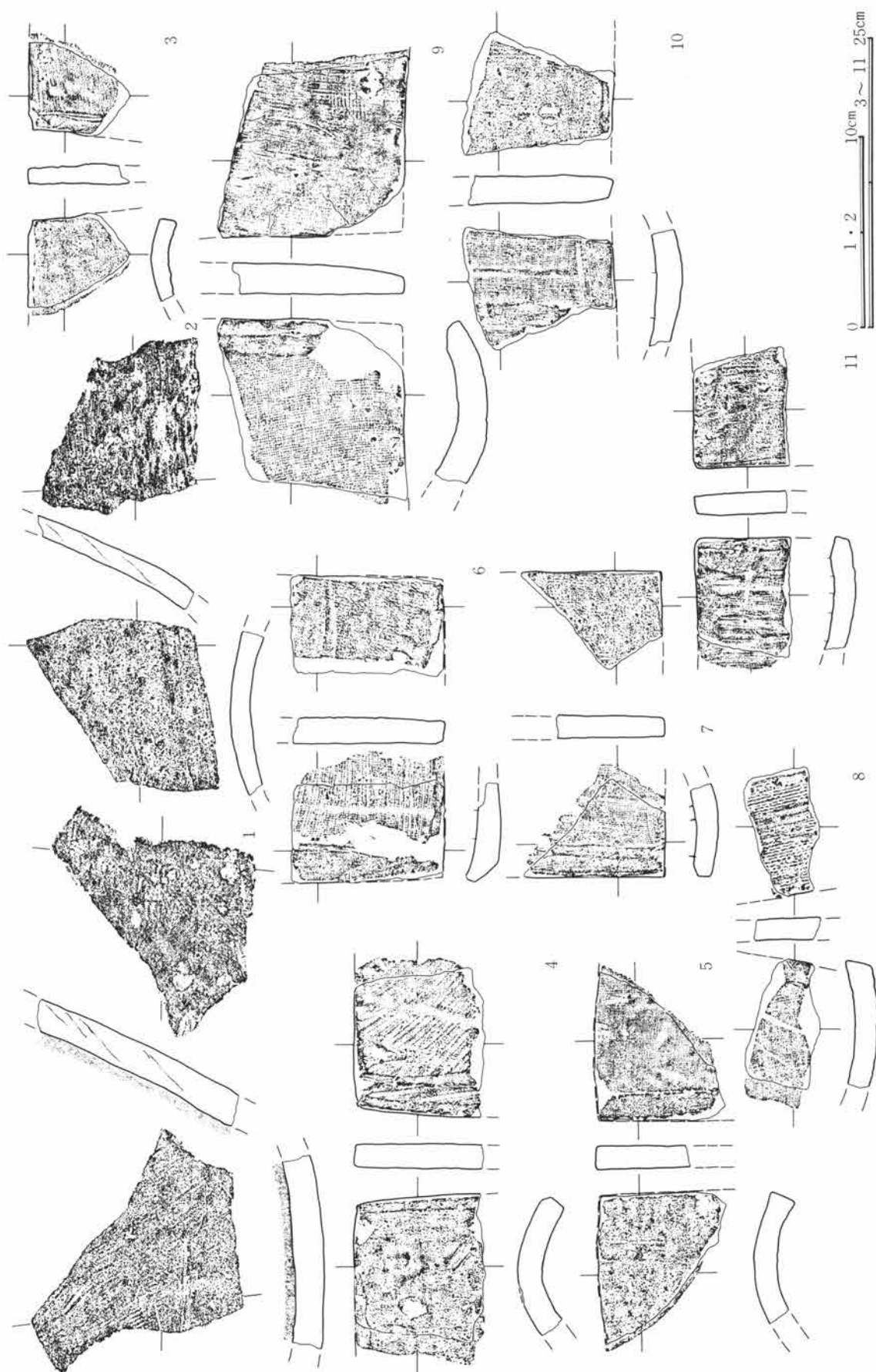
遺構名称	B区第45号住居跡		位置	44・45-B-45・46グリッド内。			残存深度	約50cm
平面形態	横長方形。	規模	3.72m×3.3+αm	構築基準辺	不分明	主軸方位	北-80度-南程か	
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	平坦。(造床等は不分明であるが、無いと考えられる。)				
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P ₁ 。楕円形。85×60cm・深度-9cm				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	未検出。ほぼなかったと考える。							
遺物出土状態	傍竈坑内より壺が1点出土している。							



所見 当住居は、B7・27住に切られている。住居は、この二者の切り合いによる破壊・中世以降の攪乱により遺存は非常に悪く、南壁側で覆土が残存していたので、カマド部周辺は、その痕跡が認められる程度であった。住居は、図示したとおりで、カマドを東壁中央に具備し、傍竈坑を備える。この形状はD区の第II段階に対比され、出土遺物も同様であることから、住居の廃棄は、10世紀前半代と思われる



第419図 B区第45号住居跡・出土遺物実測図(1)



第420図 B区第45号住居跡出土遺物実測図(2)

井戸跡

今次の報告区では2基の井戸跡が検出されている(中世所産の井戸跡は除く)。前刊第3分冊では2基の井戸跡を報告したが、D区2号井戸跡は完成なく廃棄されている。廃棄時期は9世紀中頃から後半と考えられる。D区1号井戸跡は 世紀 半頃に廃棄されている。この両者は、廃棄に伴う祭祀を行なった痕跡がある。D区2号井戸跡では、井戸全体を生活面まで埋設後中央部に土師器甕に須恵器皿を蓋に転用したものを埋納しており、甕内には有機質の何らかのものを納た可能性がある。一方、D区1号井戸では、同様に生活面近くまで一端埋設し、尼寺の堂宇の大棟に葺かれたと考えられる鬼瓦を逆位にして埋納している。この様にD区の井戸跡では廃棄・埋設に伴ない祭祀行為を確実にこなっており、今次の報告対称となるC区4号井戸跡・B区第1号井戸跡でも同様な祭祀行為が行なわれたことが窺われ、特に、B区第1号井戸跡では、顕著な状況として検出されている。以下、この二基の井戸跡に就いての所見を記述する。

C区第4号井戸跡所見

当井戸跡は、C区106住・129住・133住・139住・145住を切り構築している。規模は径5.0mを測り円形状を呈す大形の井戸跡で、同様な規模を有する井戸跡としてG区2号井戸が上げられる。

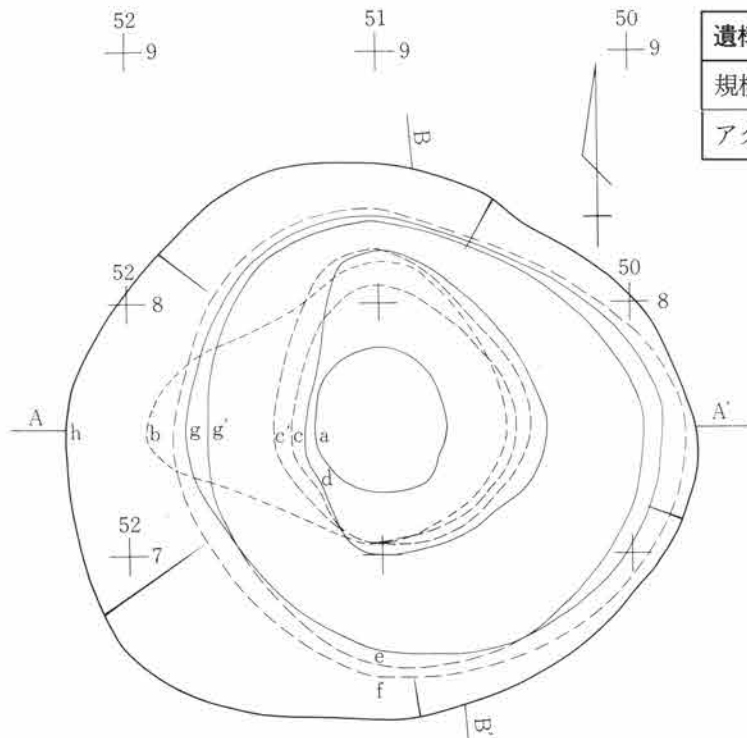
覆土上層には多くの炭化物層が認められたが、建物の部材・樹木が炭化した状態とは異なり、カマドで認められる「灰・炭化物層」と同様な在り方であった。この炭化物層は土層断面図中に図示したが、単一なものではなく、層に分別される状態であり間層も認められた。然、この間層も炭化物が全たく認められないという状態ではなく、含有される量が少ないという程度であった。この上層での炭化物の堆積はG2号井戸跡でも認められたが、B軽石層の直下に薄く一層として検出されただけであり、その堆積状況は異なると判断される。当井戸跡のこの炭化物層は、通有表現では「レンズ状堆積」とされるが、井戸跡の場合、埋設後の沈下現象が顕著であり、D区第2号井戸跡の場合は、この現象により土器が当初の埋納面より下位で破損した状態で出土している。炭化物は、この沈下に伴ないレンズ状になったものも解され、埋設時はほぼ平坦な状態で、生活面とほぼ同位の面にあったものと考えられる。恐らく、当井戸跡廃棄以後の住居が当井戸跡の重複が無いことから、目印的なものであった可能性がある。又、この炭化物自体が埋設終了時の祭祀行為である可能性も示唆されるところであろう。この他、祭祀を示唆する状況として、確認面下2.6m程の中央部で、人為層中(埋設土中)で地山土中に含まれる礫が中央部で出土し、周辺及び上下層中からの遺物の出土が非常に少なかった。この出土状況からは、何らの意図の元に置かれた可能性がある。然、上述した如く、覆土自体の沈下現象もあることから、元来はより上位で行なわれた可能性が強いが、やはり単独での出土自体にその意義は内在すると考えられる。

井戸は、断面に確認面直下でオーバーハングする部分が認められる。これは、井戸内に水が湛えられている時の水位により生じたものと考えられ、水位は最低で2.1m程の増減があったことが判断される。又、この水位幅での容積量は41kl程であり、これ程迄に水を必要とする要因が想起され、他例の井戸跡と比較しても貫きんじた状態である。当井戸が廃棄される時期はD区の第Ⅲ段階に出土遺物の様相が対比されることから、10世紀後半頃と考えられる。この段階は9世紀後半頃から増加した住居数が減小段階に至った頃であるが、住居数はまだ多い。又、少なくとも存続期間を考慮しても10世紀中頃が上限と考えられる。これらのことから、単に住居数が多いという要因だけで大規模な井戸の構築を創意をさせるにはやや要因不足と思われる。一方、位置的には、僧寺・尼寺にも近接する部分でもあることから、この国分2寺に係わるものと思わ

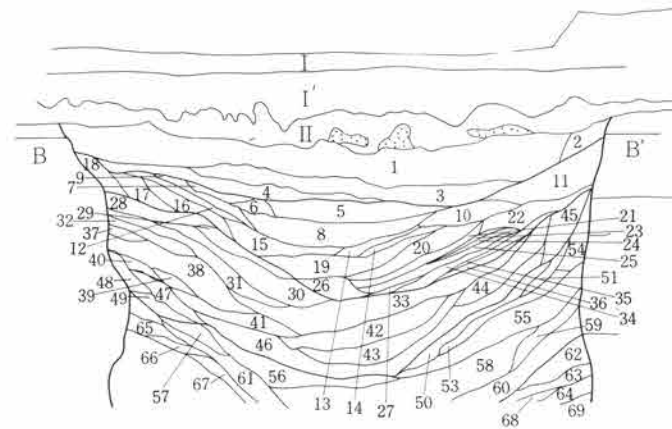
第4章 検出された遺構・遺物

れるが、規模的にかなりな部分に水を補給出来たことが考えられる。

井戸の施設等は無ら確認されていない。井筒も地山井筒木材等の痕跡も一切認められなかった。



遺構名称	C区第4号井戸		位置	7~9-C-49~52グリッド内			平面形態	不整形
規模(m)	地上径 5.0	最細径 1.0	最大径 5.0	深度4.47	湧水位深度	夏期 5.3	・ 冬期 6.5	
アグリ部最大径	夏期 1.8 ・ 冬期 2.3		湧水層	12・16層		耐水層	14・17層	

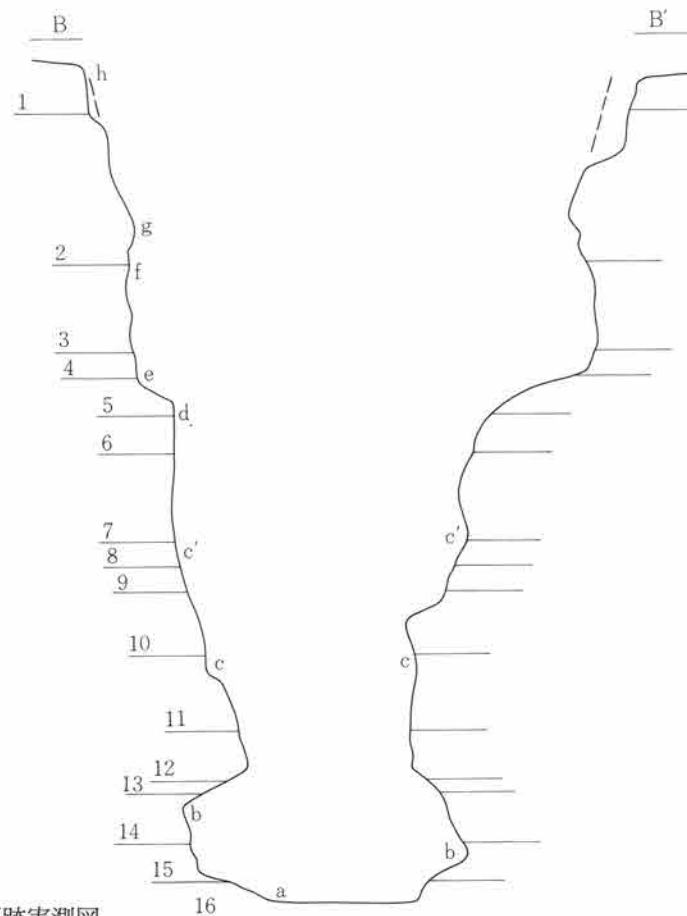
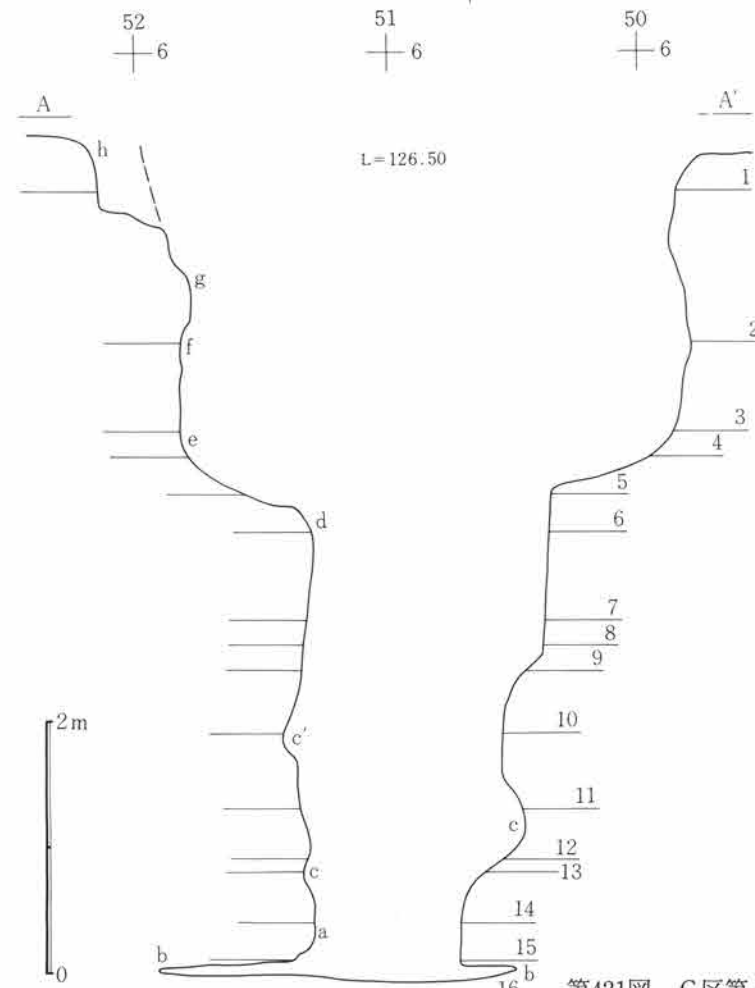


層序 (C4号井戸)

1. III層土。
2. VII層土斑状混入。
3. 粒状C軽石混入。
4. 微粒状C軽石混入。
5. 粒状C軽石微量・粗粒状炭化物混入。
6. 粗粒状・塊状焼土斑状混入。
7. 塊状VI層土斑状混入。
8. 炭化物・焼土・灰の混土層。
9. 灰混入。
10. 粒状C軽石微量。
11. 粒状C軽石混入。
12. 灰混入。
13. 炭化物層。
14. 炭化物・焼土・塊状III層土若干。
15. 粒状焼土・灰混入。
16. 粒状C軽石若干・粒状VII層土混入・粒状炭化物若干。
17. 粒状C軽石微量。
18. 灰混入。
19. 炭化物主体・塊状焼土混入・灰含有。
20. 粒状C軽石若干・炭化物・塊状焼土含有。
21. 炭化物主体・塊状焼土含有。
22. 粒状C軽石若干。
23. 微粒状C軽石微量。
24. 炭化物層。
25. 粒状焼土・粒状炭化物混入。
26. 粒状焼土・粒状炭化物若干。
27. 微粒状C軽石微量。
28. 粒状炭化物混入。
29. 微粒状C軽石微量。
30. 粒状C軽石混入。
31. 炭化物多量・粒状炭化物斑状混入・粒状焼土含有。
32. 粒状C軽石若干・粒状炭化物含有。
33. 粗粒状焼土主体・粒状炭化物含有。
34. 灰・粒状焼土・粒状炭化物含有。
35. 炭化物層。
36. 34同質。
37. 粒状焼土含有。
39. 塊状焼土・粒状炭化物含有。
40. 微粒状C軽石微量。
41. 粒状C軽石多量。
42. 塊状焼土主体・粒状炭化物含有。
43. 微粒状C軽石微量・塊状焼土若干。
44. 43近質。
45. 粒状C軽石混入。
46. 粒状C軽石微量。
47. 粒状C軽石微量・塊状淡褐色土・塊状焼土混入。
48. 塊状淡褐色土主体・塊状III層土含有。
49. 微粒状C軽石微量。
50. 炭化物主体・塊状焼土若干。
51. 微粒状C軽石微量・灰混入。
53. 塊状焼土含有。
54. 粒状C軽石若干。
55. 炭化物・灰・塊状焼土。
56. 炭化物・塊状焼土含有。
57. 淡褐色土含有。
58. 粒状C軽石微量。
59. 粒状C軽石微量。
60. 58近質。
61. 淡褐色土混入。
62. 塊状淡褐色土主体。
63. 微粒状C軽石微量。
64. 62同質。
65. 61同質。
66. 63同質。
67. 64同質。
68. 61同質。
69. 61同質。

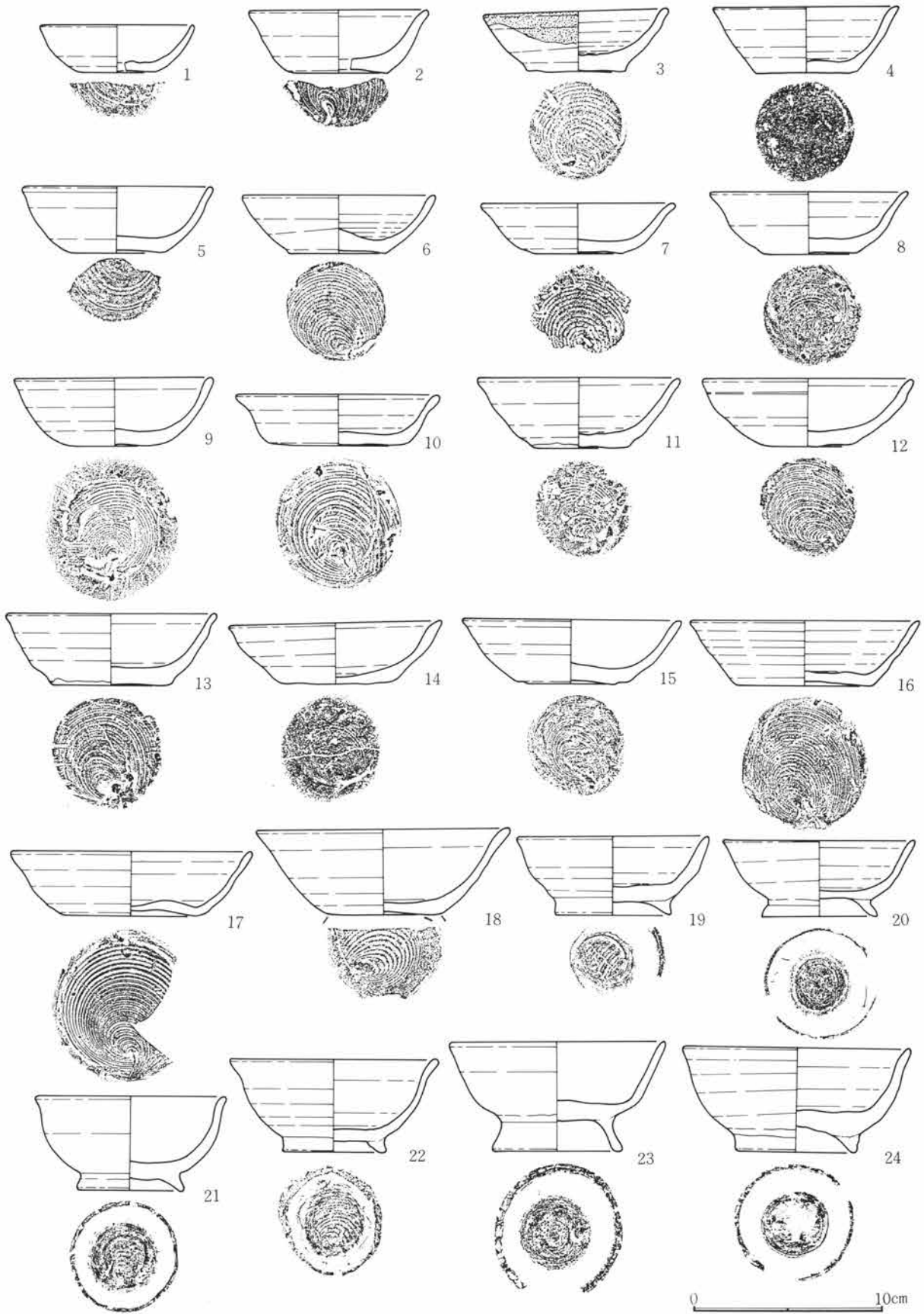
地山層序

1. VII層土。
2. 灰色シルト。
3. 褐灰色火山灰。
4. 灰褐色粗・細砂。
5. 褐色色砂質シルト。
6. 灰色軽石粒。
7. 灰色砂質シルト。
8. 褐灰色軽石小礫混入火山灰砂。
9. 灰色シルト。
10. 灰色細砂。
11. 褐灰色火山灰。
12. 灰褐色シルト。
13. 褐灰色細砂。
14. 灰褐色軽砂。
15. 褐灰色細砂。
16. 灰色粗砂。

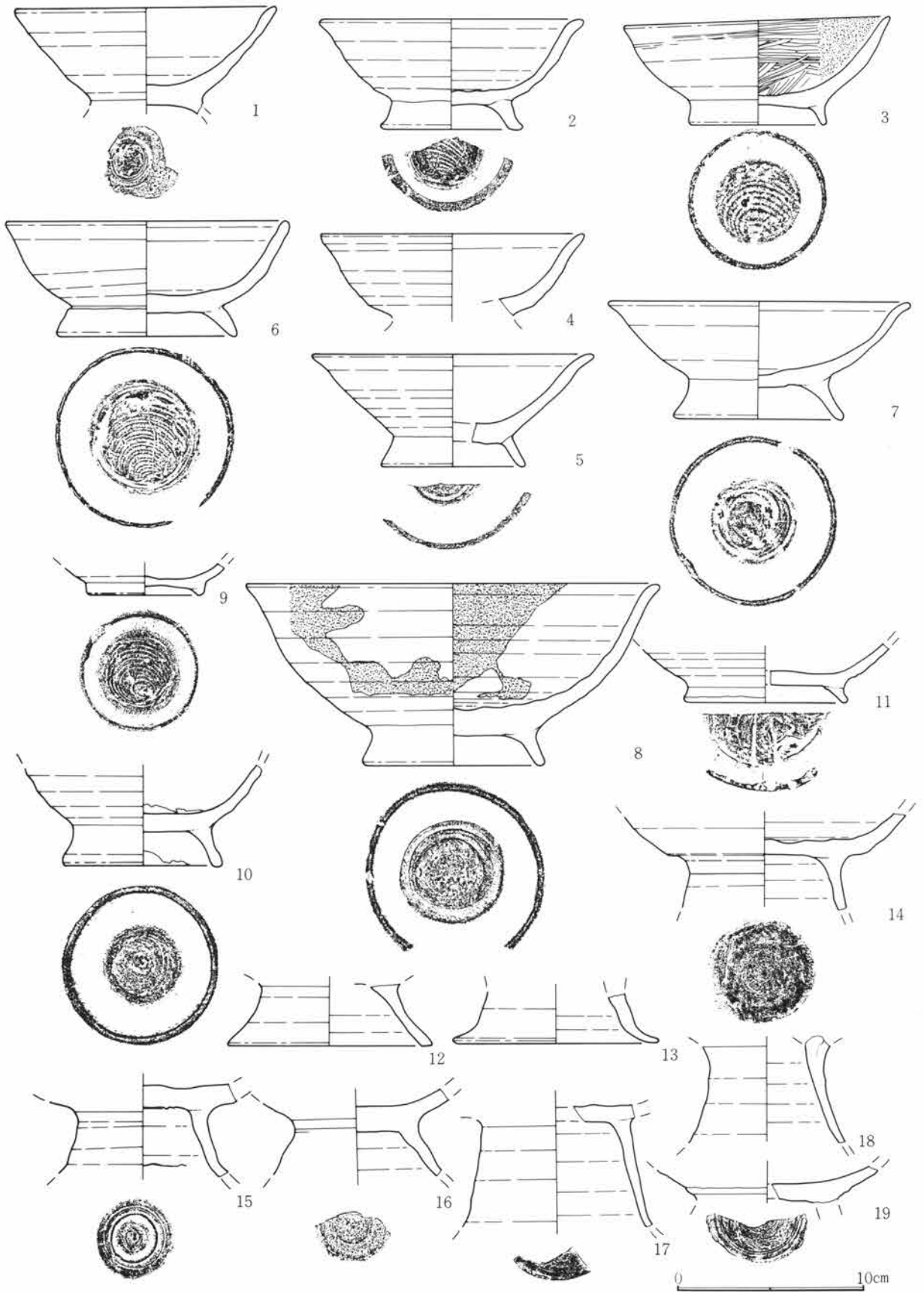


第421図 C区第4号井戸跡実測図

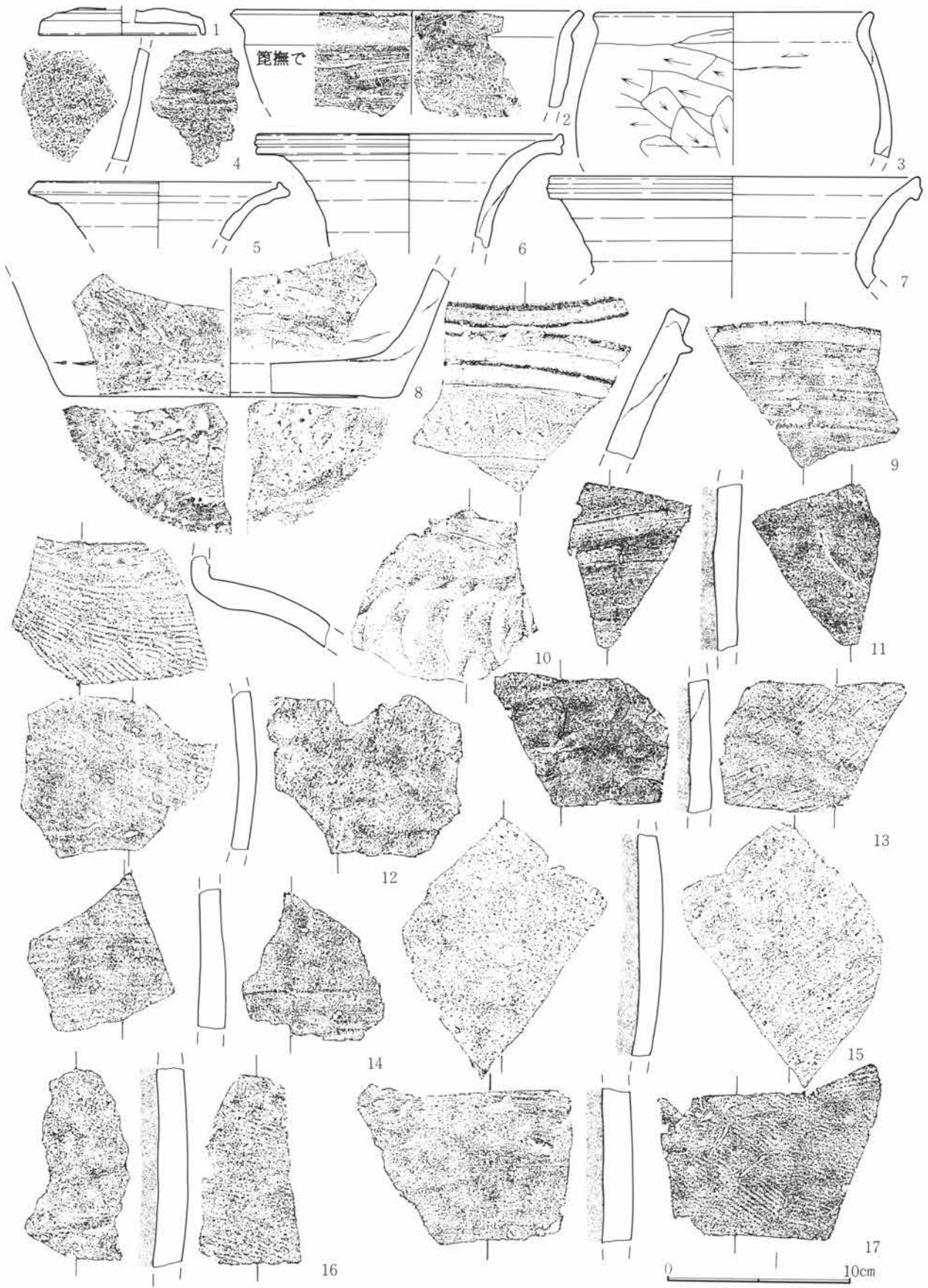
第1節 南側調査区



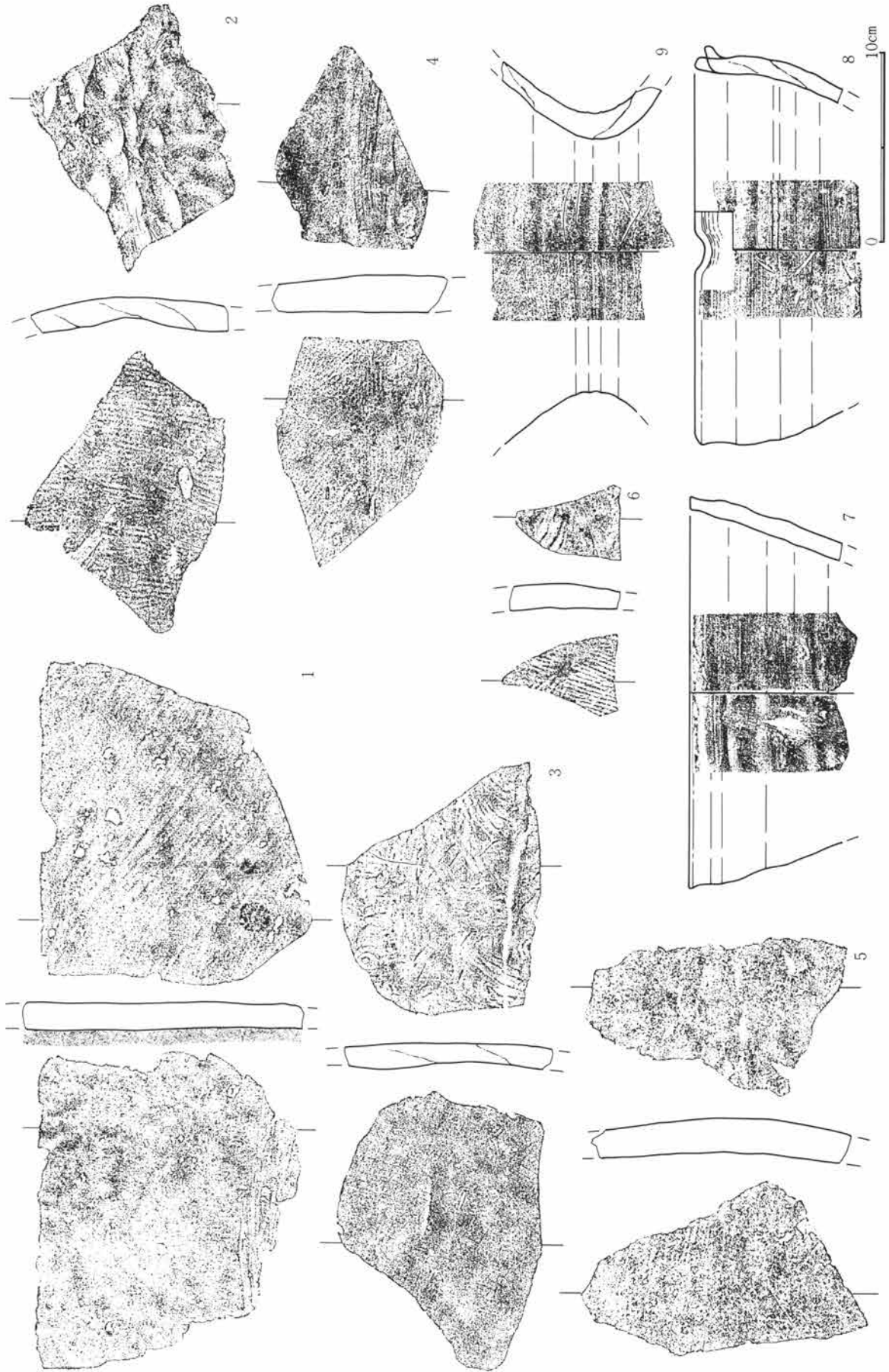
第422図 C区第4号井戸跡出土遺物実測図(1)



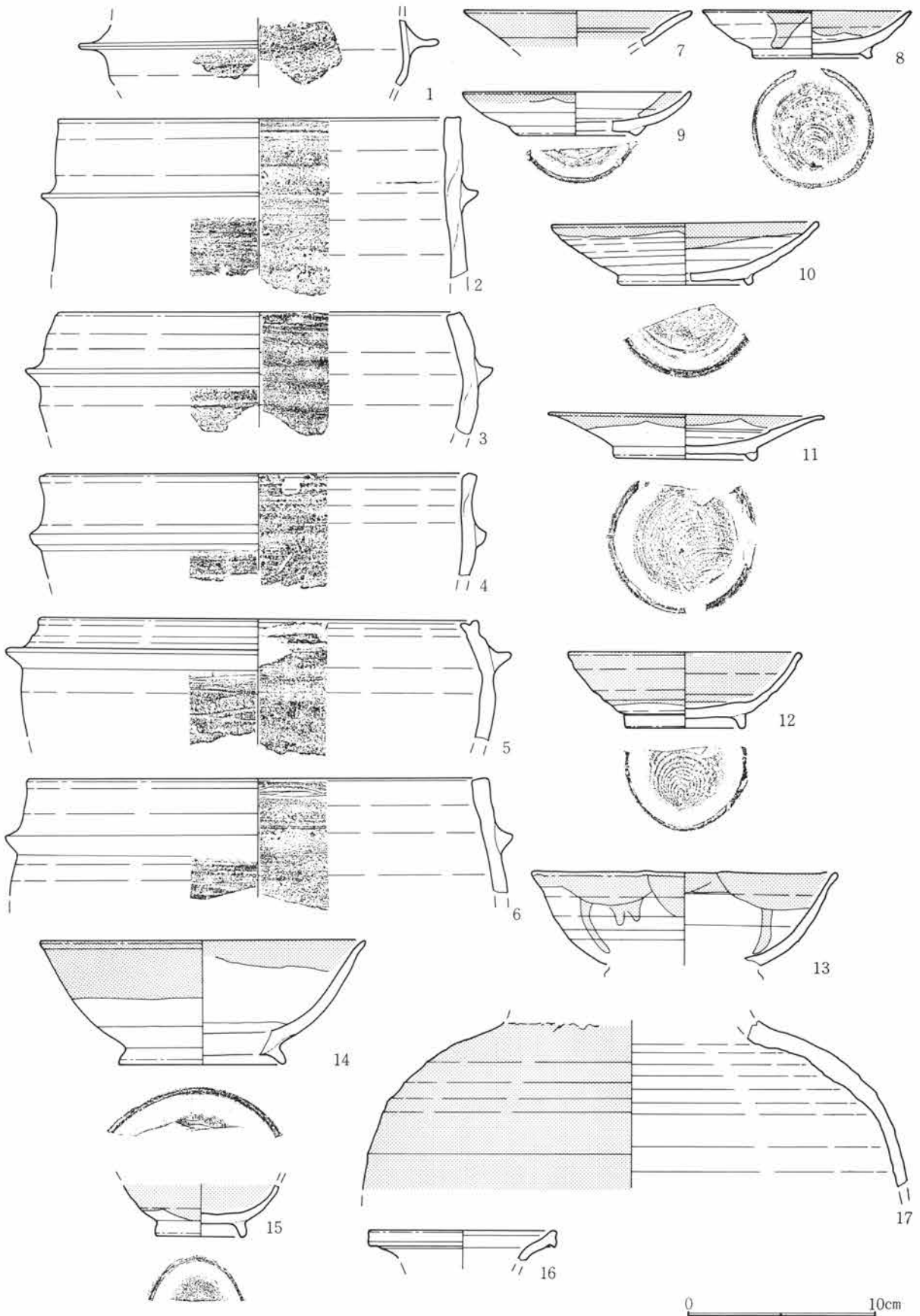
第423図 C区第4号井戸跡出土遺物実測図(2)



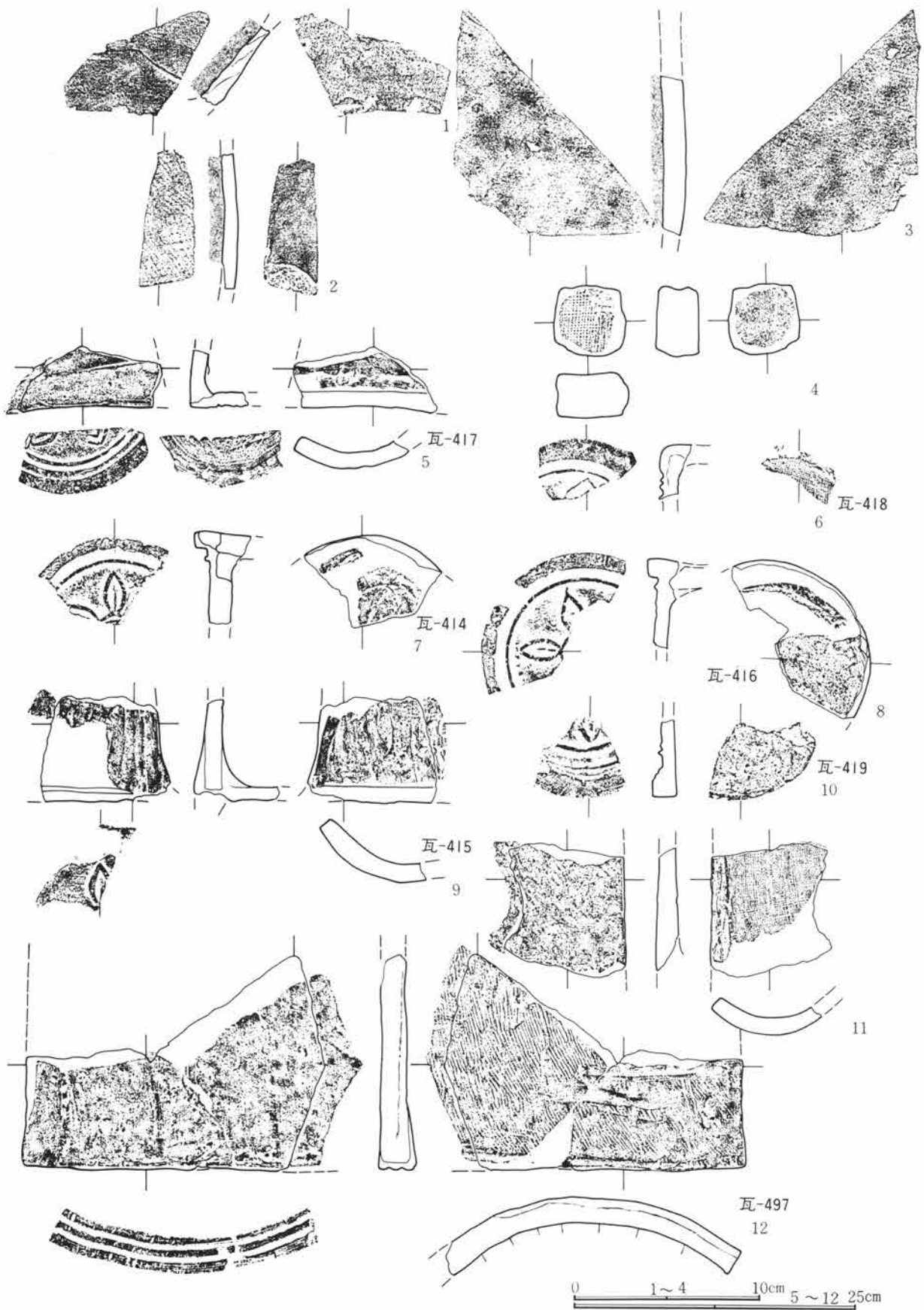
第424図 C区第4号井戸跡出土遺物実測図(3)



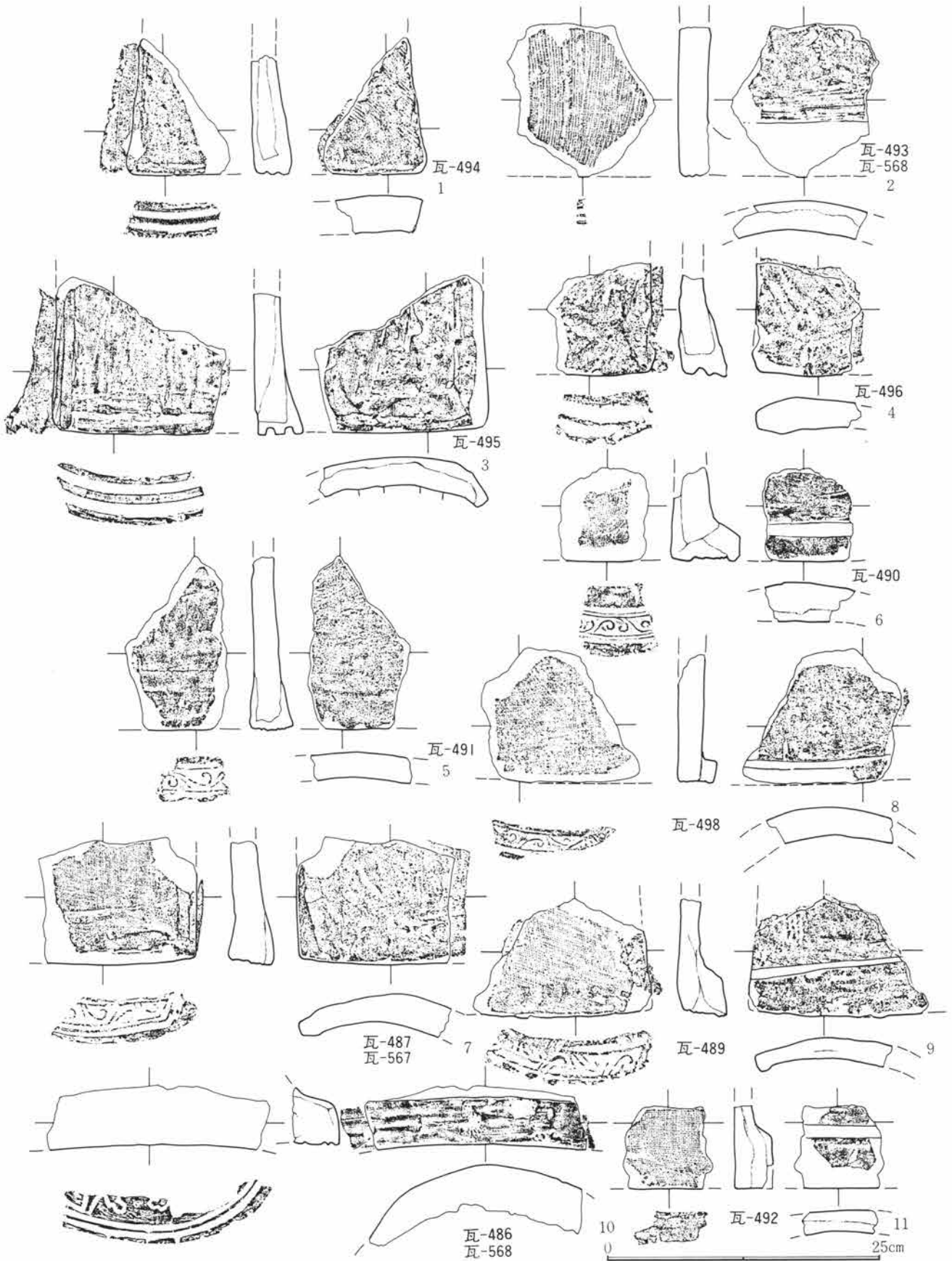
第425図 C区第4号井戸跡出土遺物実測図(4)



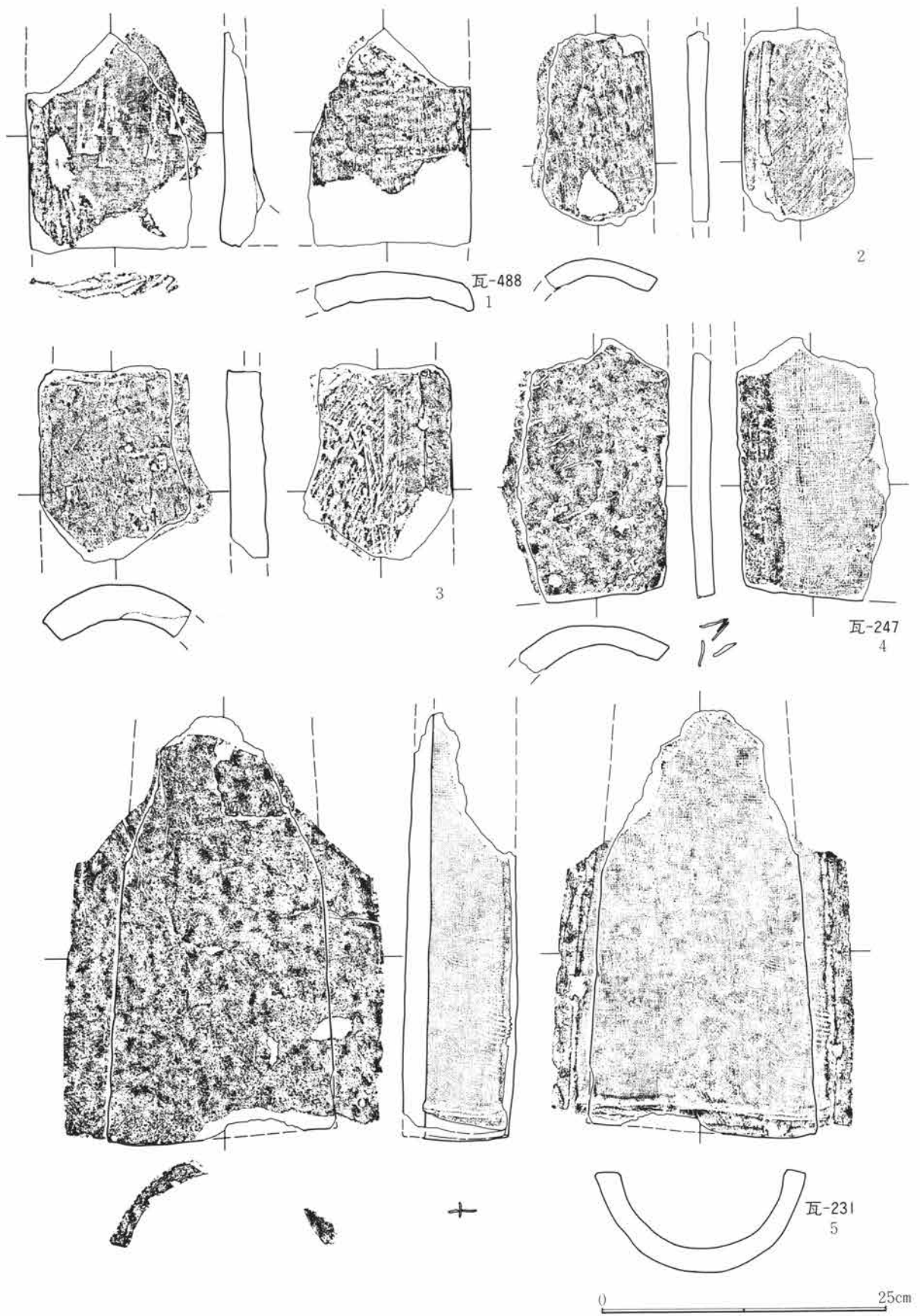
第426図 C区第4号井戸跡出土遺物実測図(5)



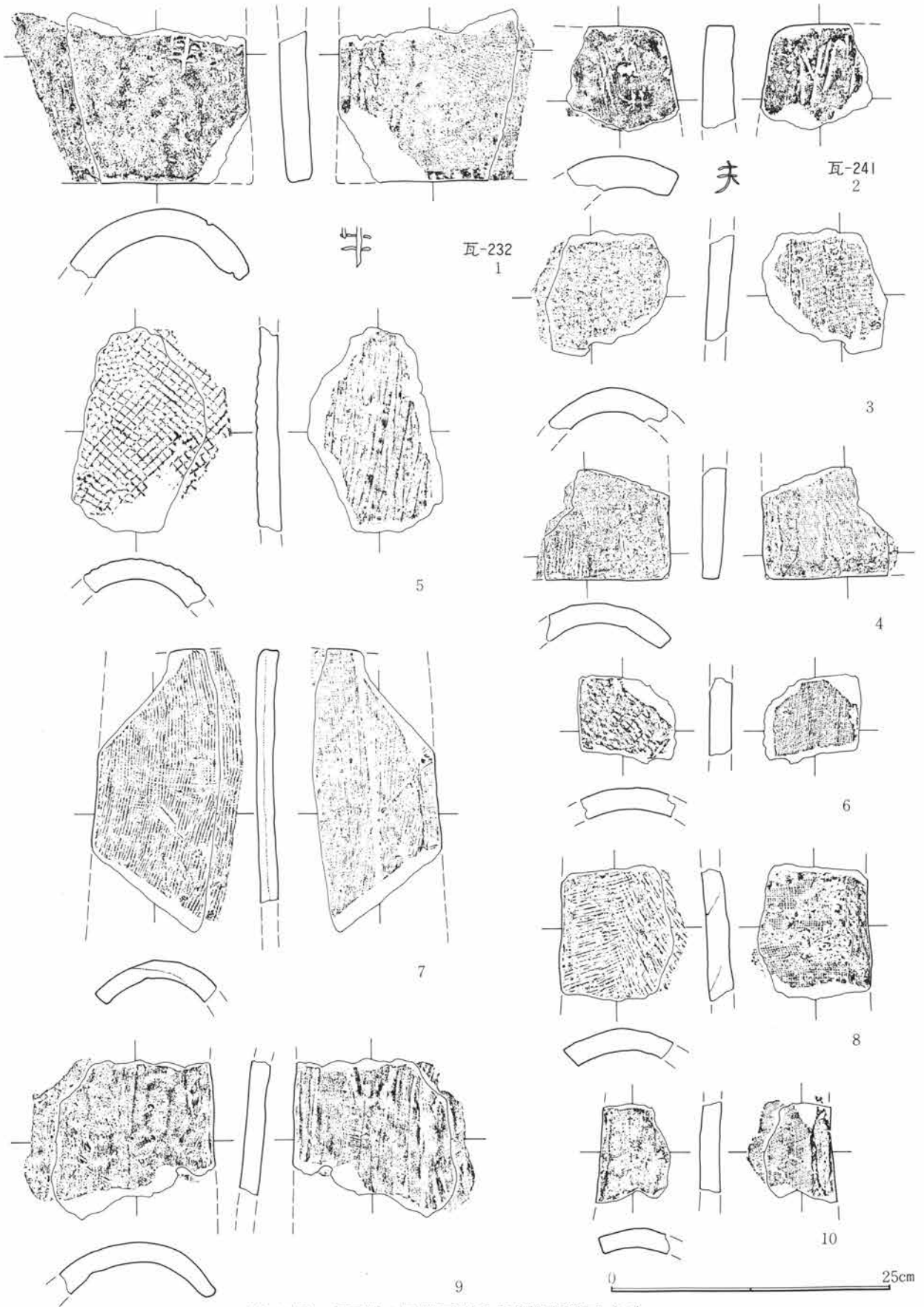
第427図 C区第4号井戸跡出土遺物実測図(6)



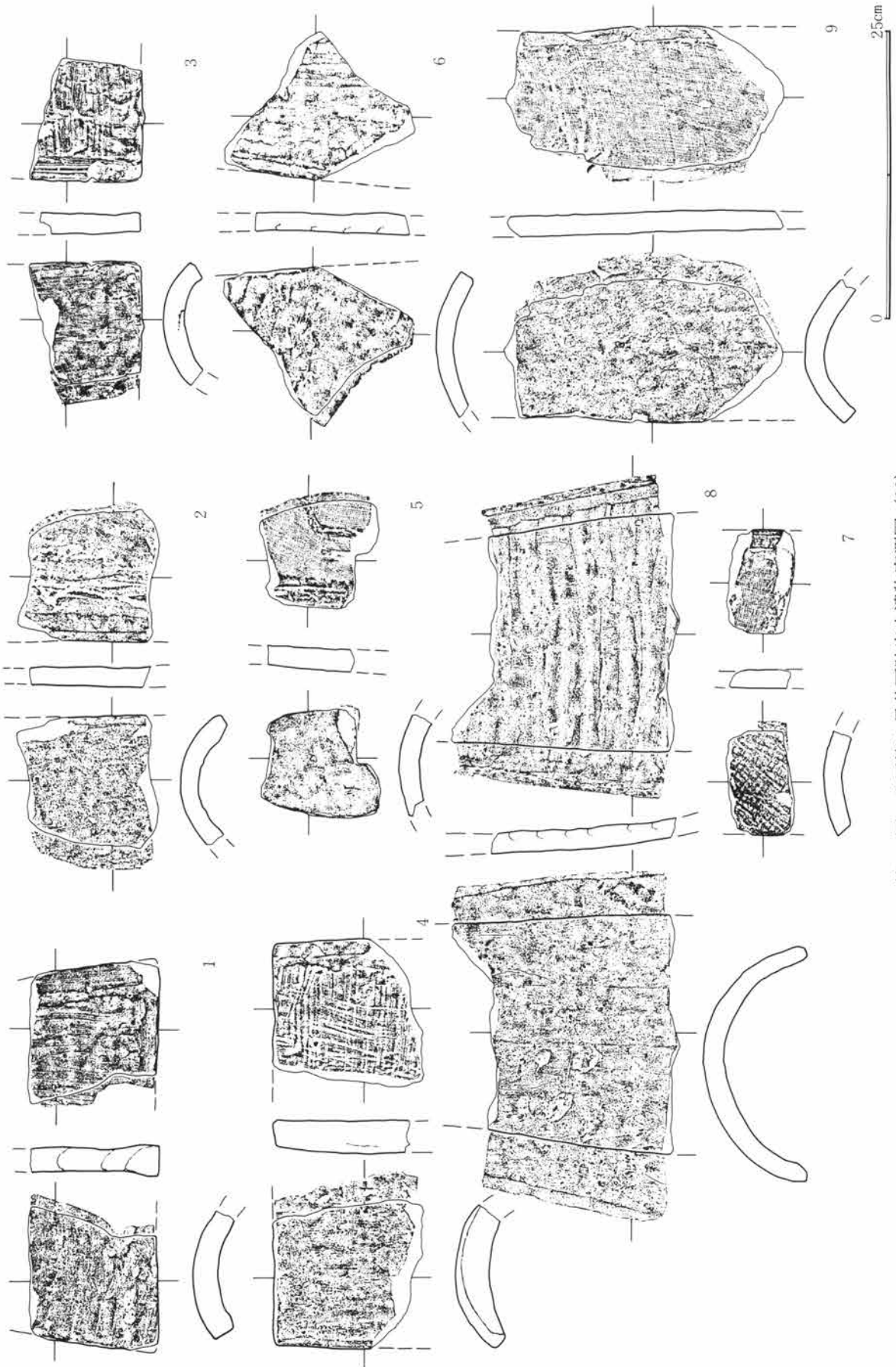
第428図 C区第4号井戸跡出土遺物実測図(7)



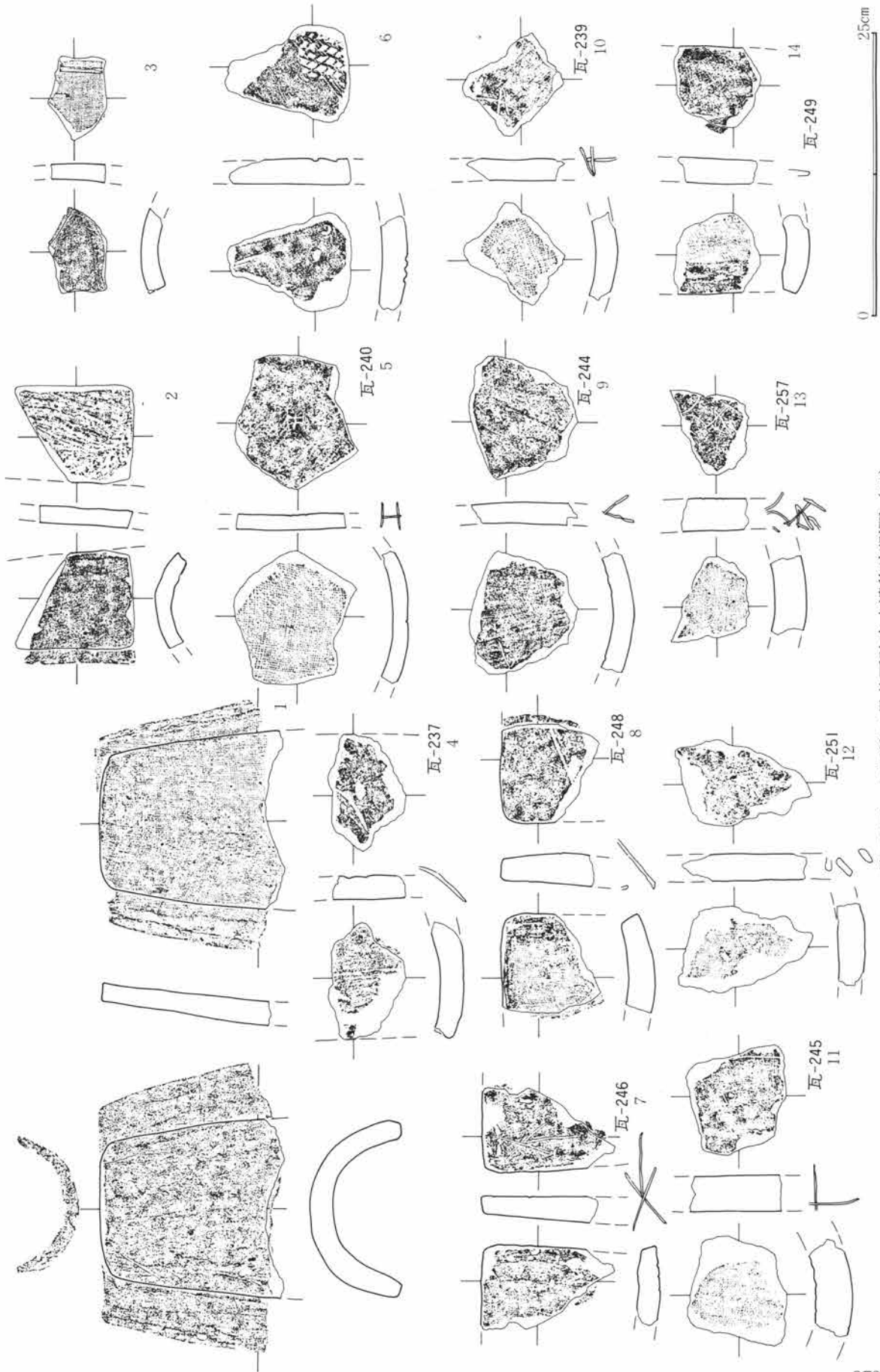
第429図 C区第4号井戸跡出土遺物実測図(8)



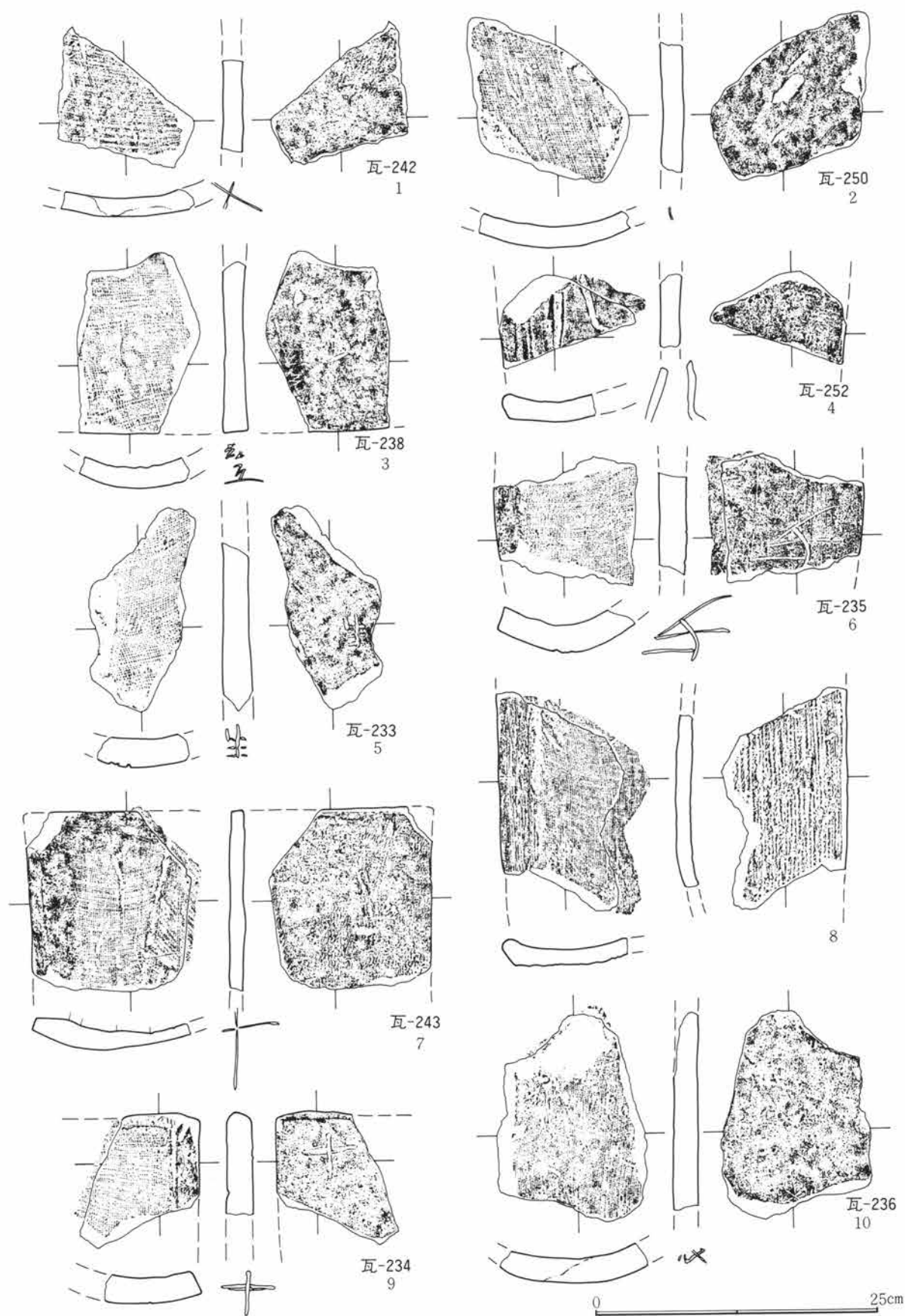
第430図 C区第4号井戸跡出土遺物実測図(9)



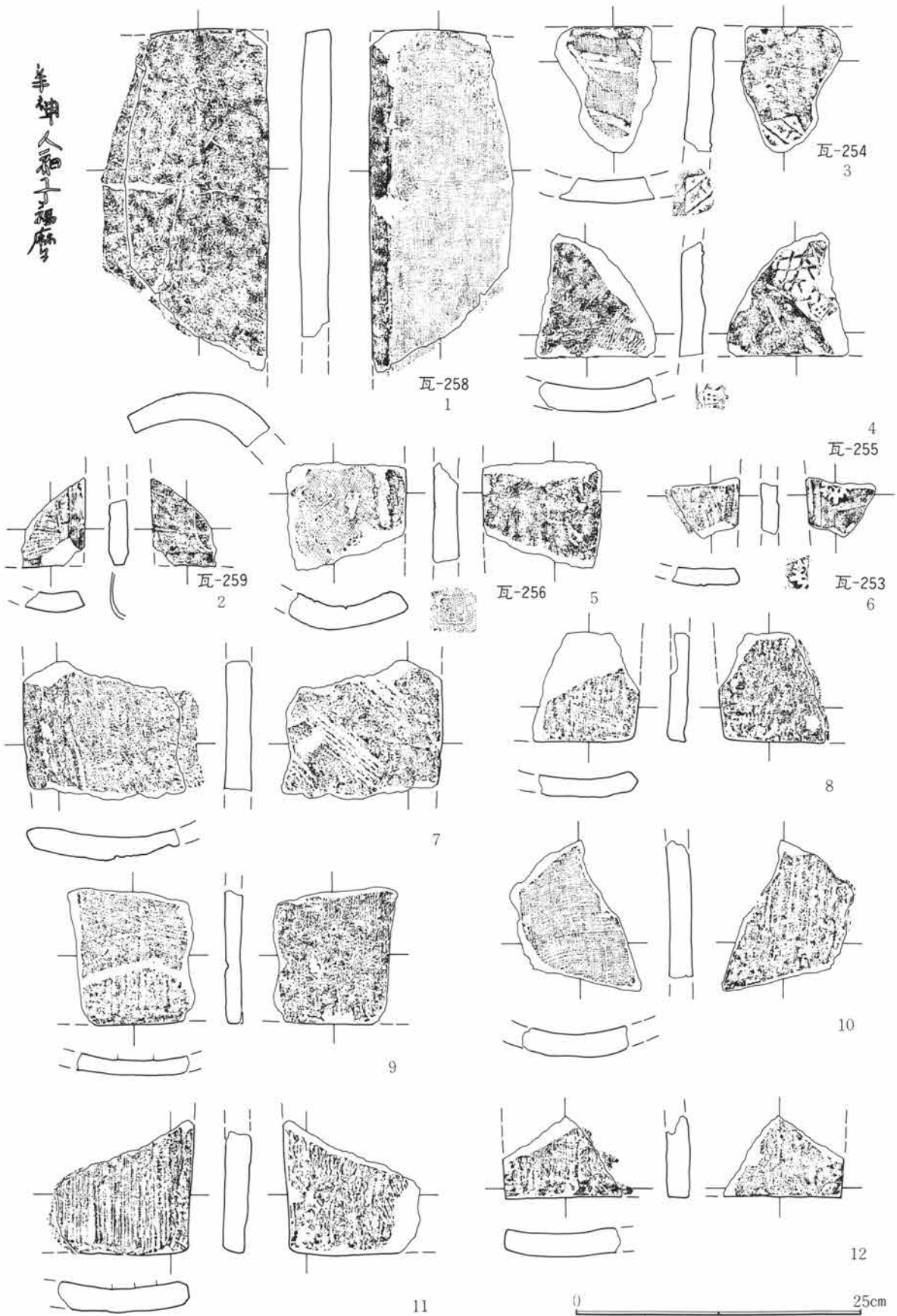
第431図 C区第4号井戸跡出土遺物実測図(10)



第432図 C区第4号戸跡出土遺物実測図(11)

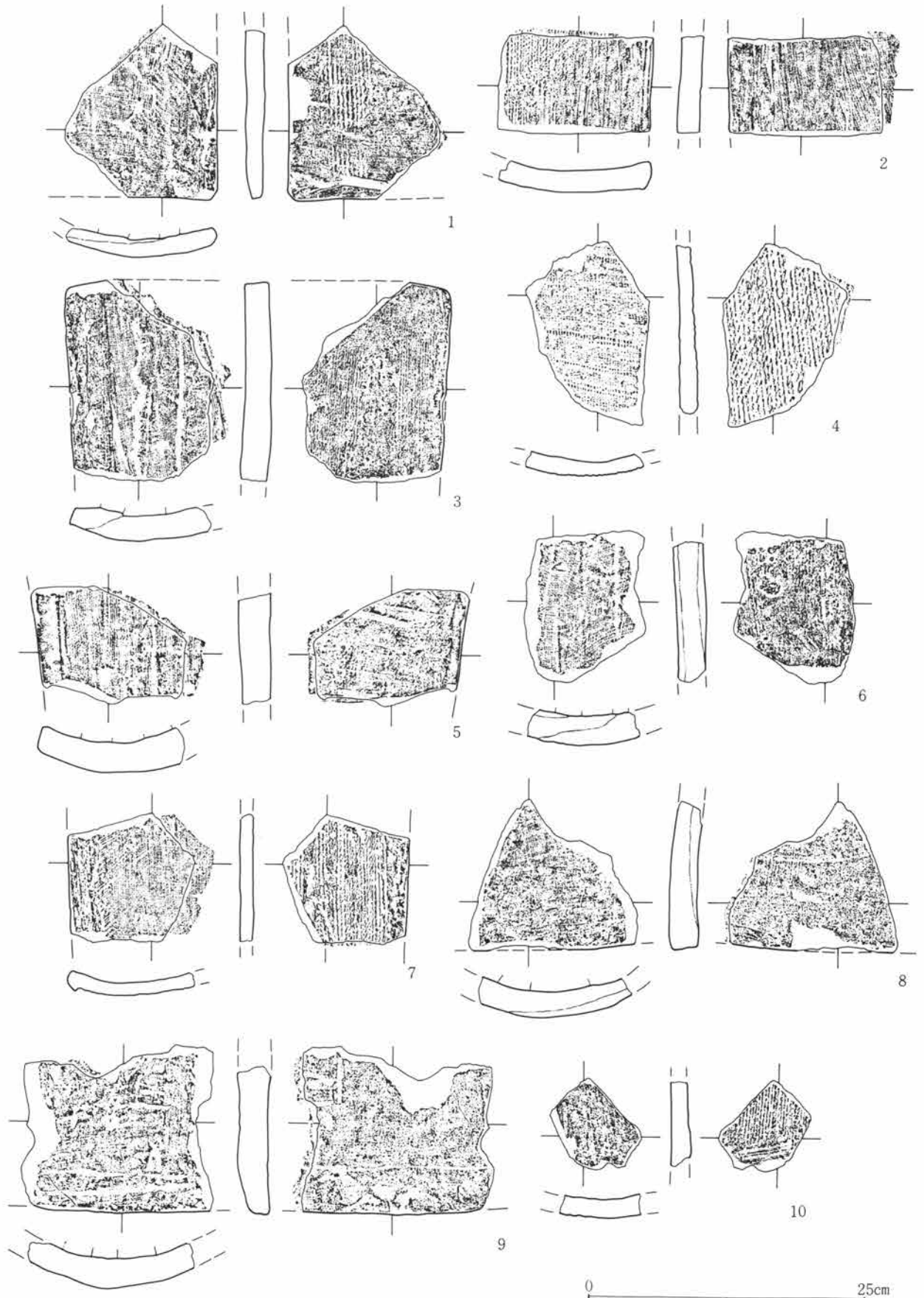


第433図 C区第4号井戸跡出土遺物実測図(12)

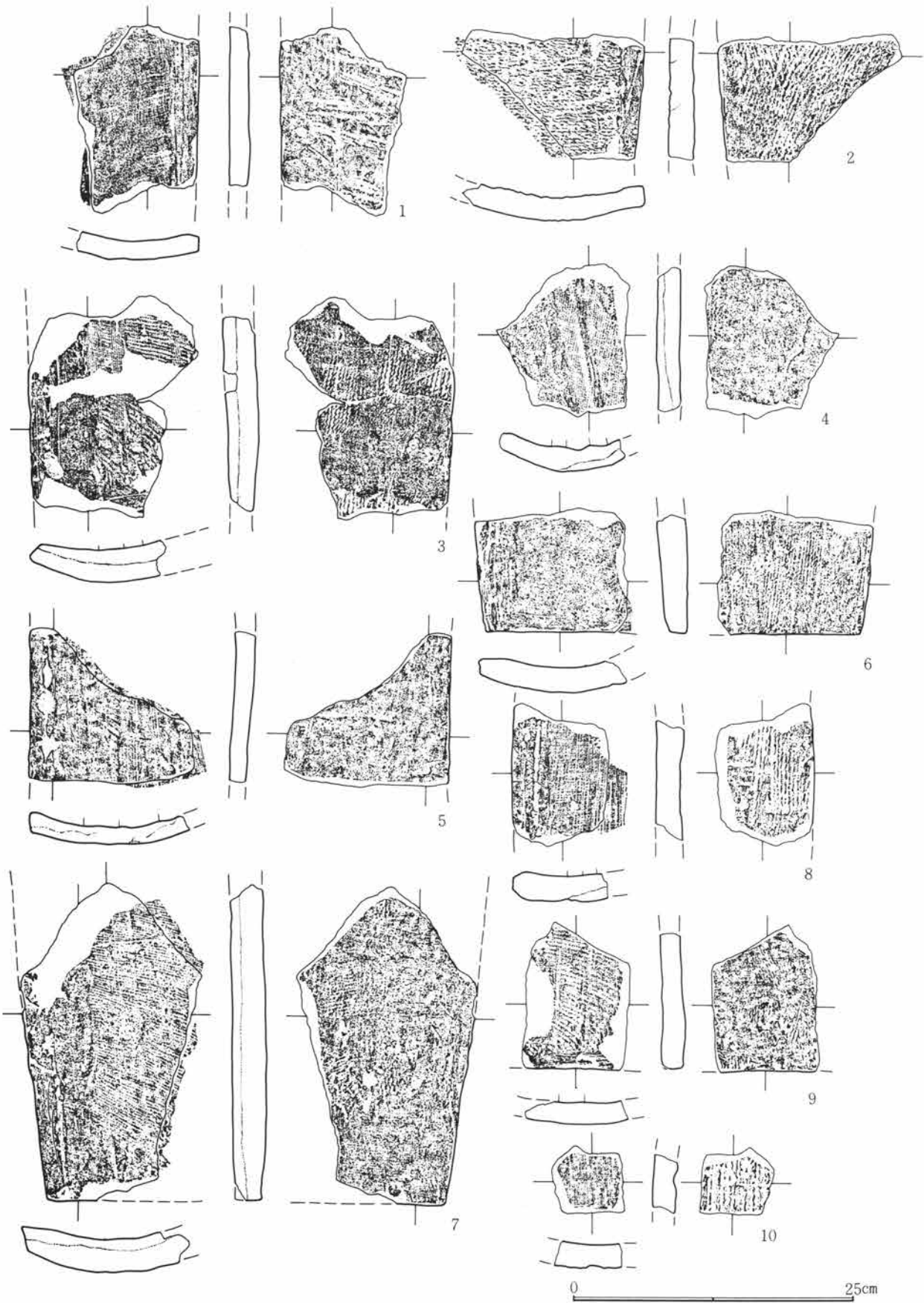


第434図 C区第4号井戸跡出土遺物実測図(13)

第4章 検出された遺構・遺物

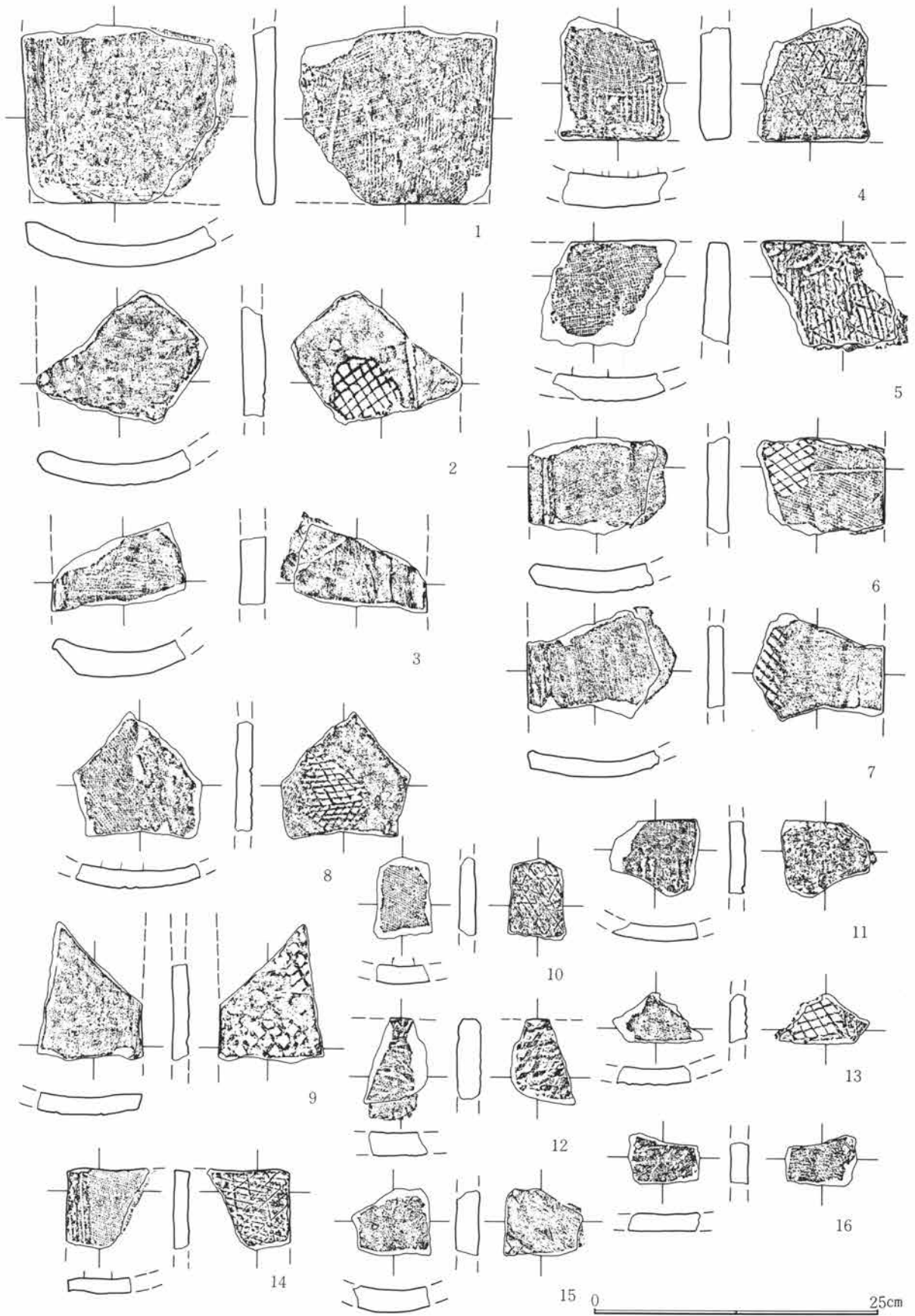


第435図 C区第4号井戸跡出土遺物実測図(14)

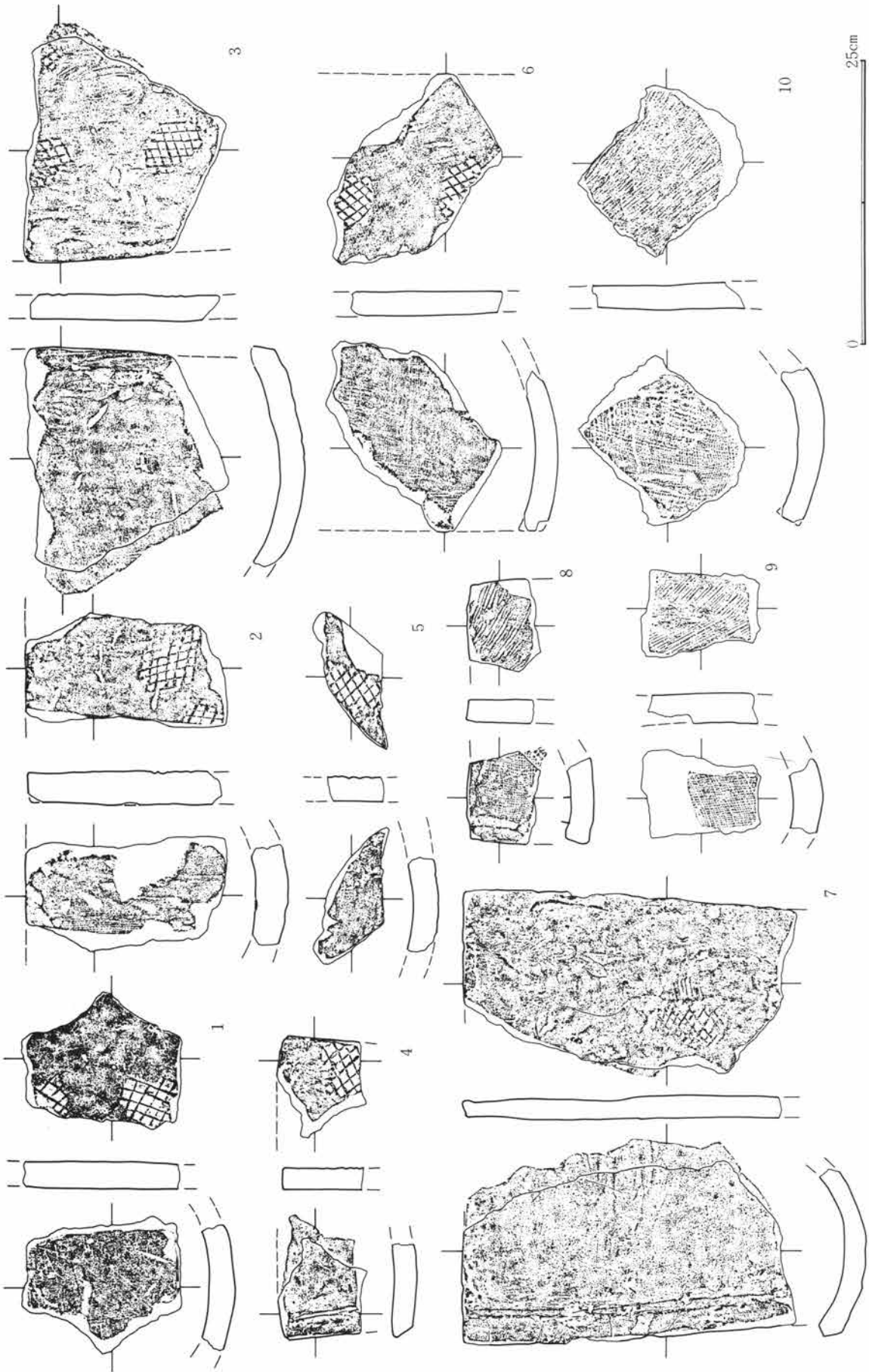


第436図 C区第4号井戸跡出土遺物実測図 (15)

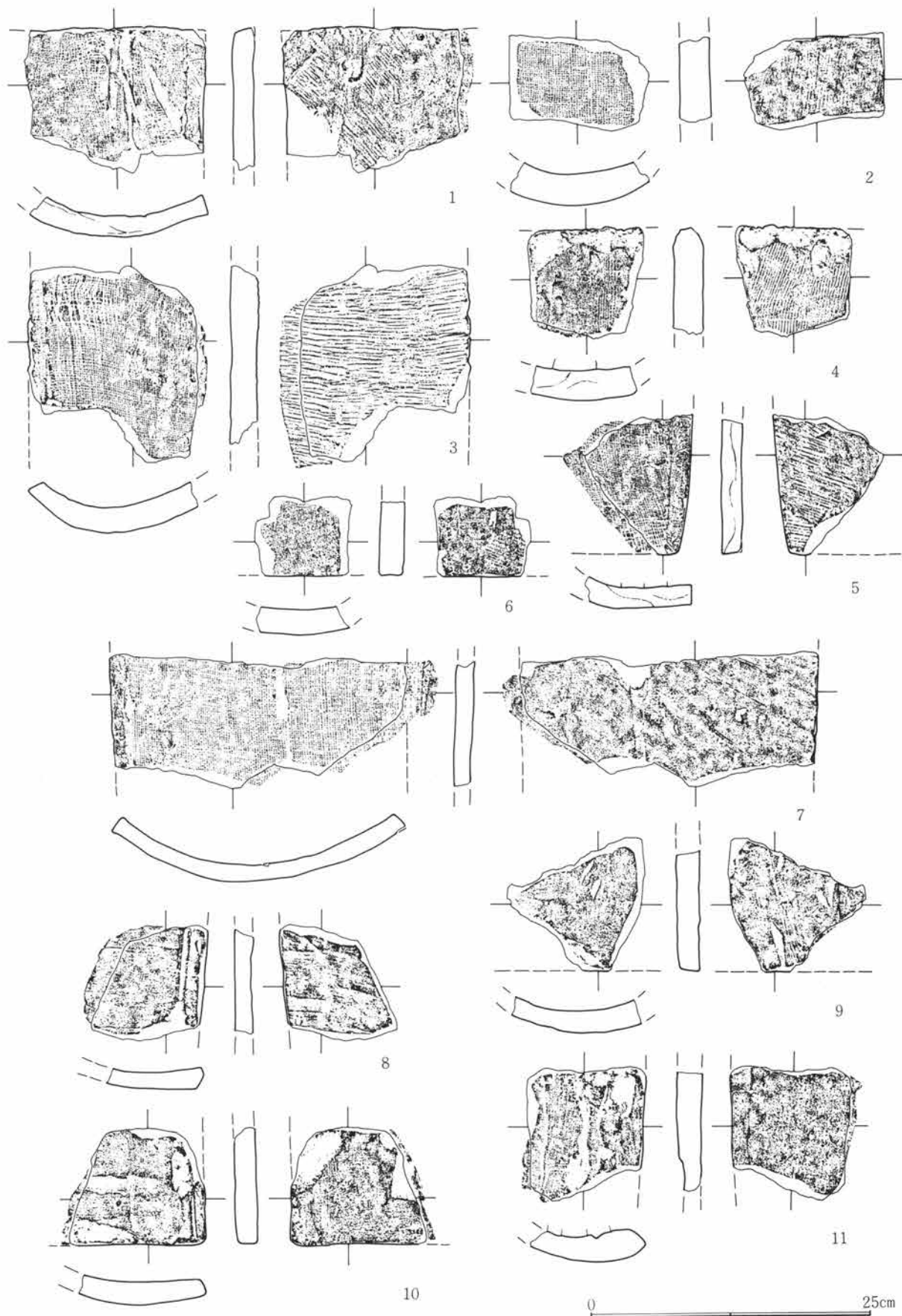
第4章 検出された遺構・遺物



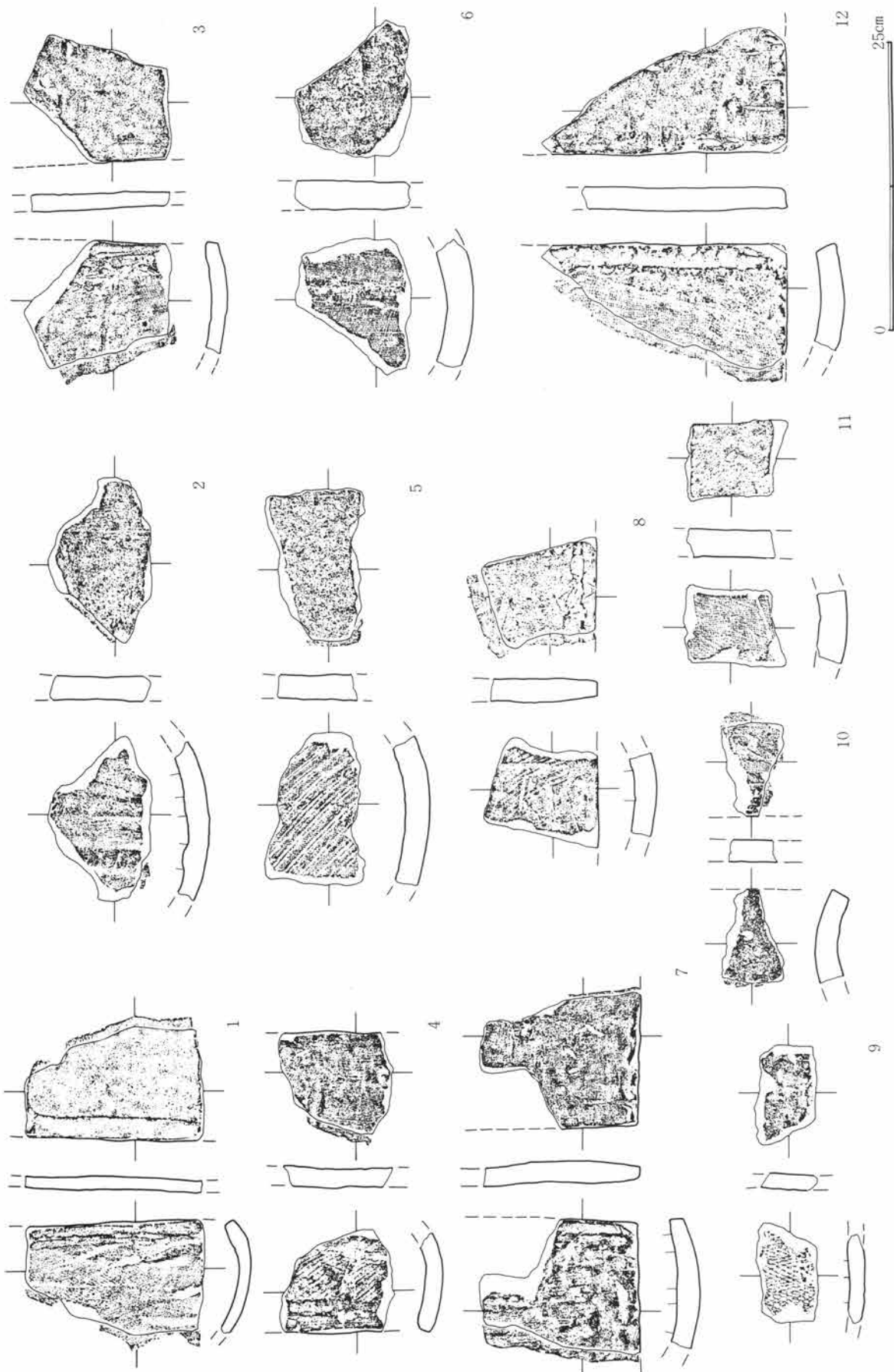
第437図 C区第4号井戸跡出土遺物実測図(16)



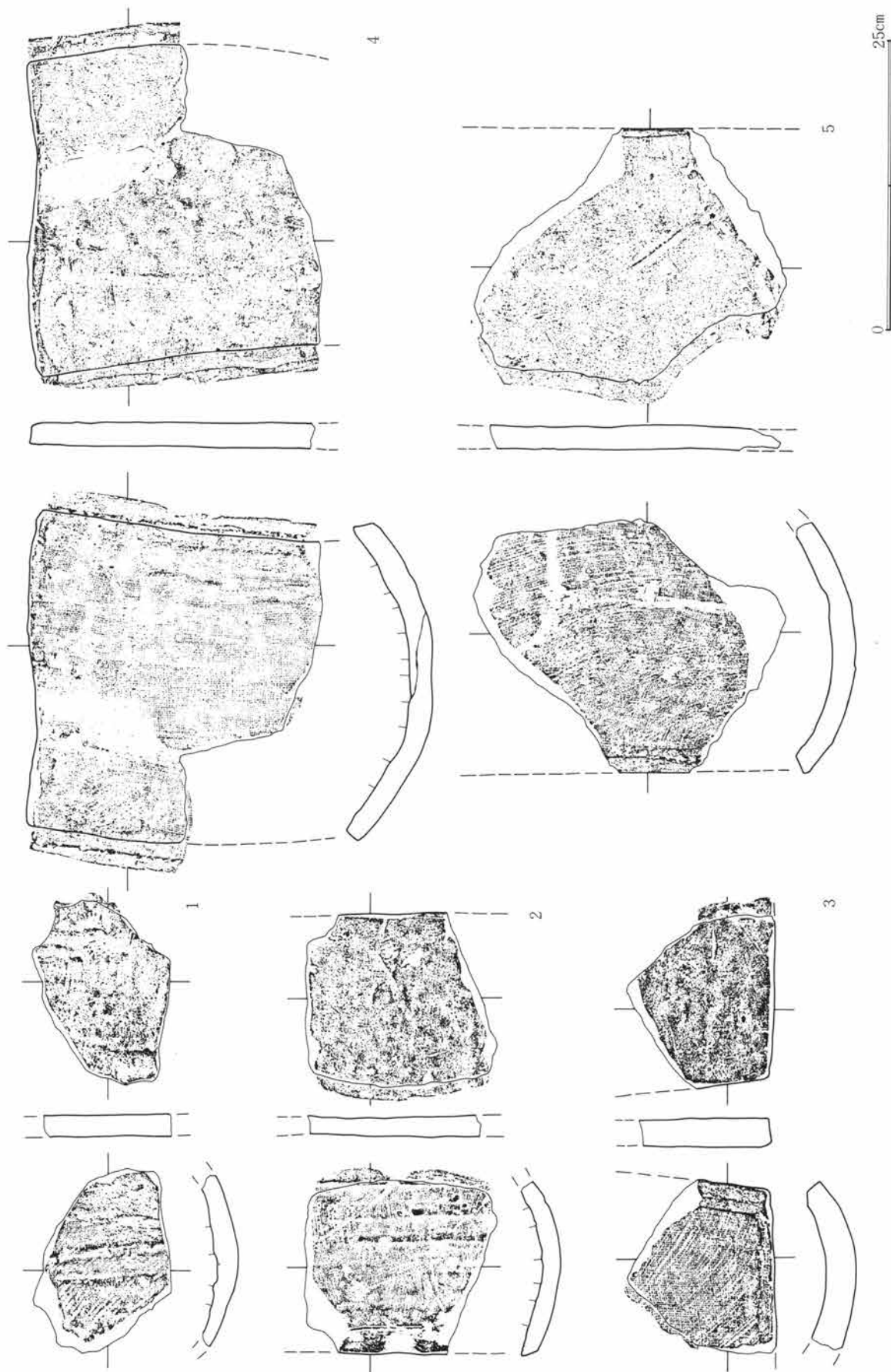
第488図 C区第4号井戸跡出土遺物美測図(17)



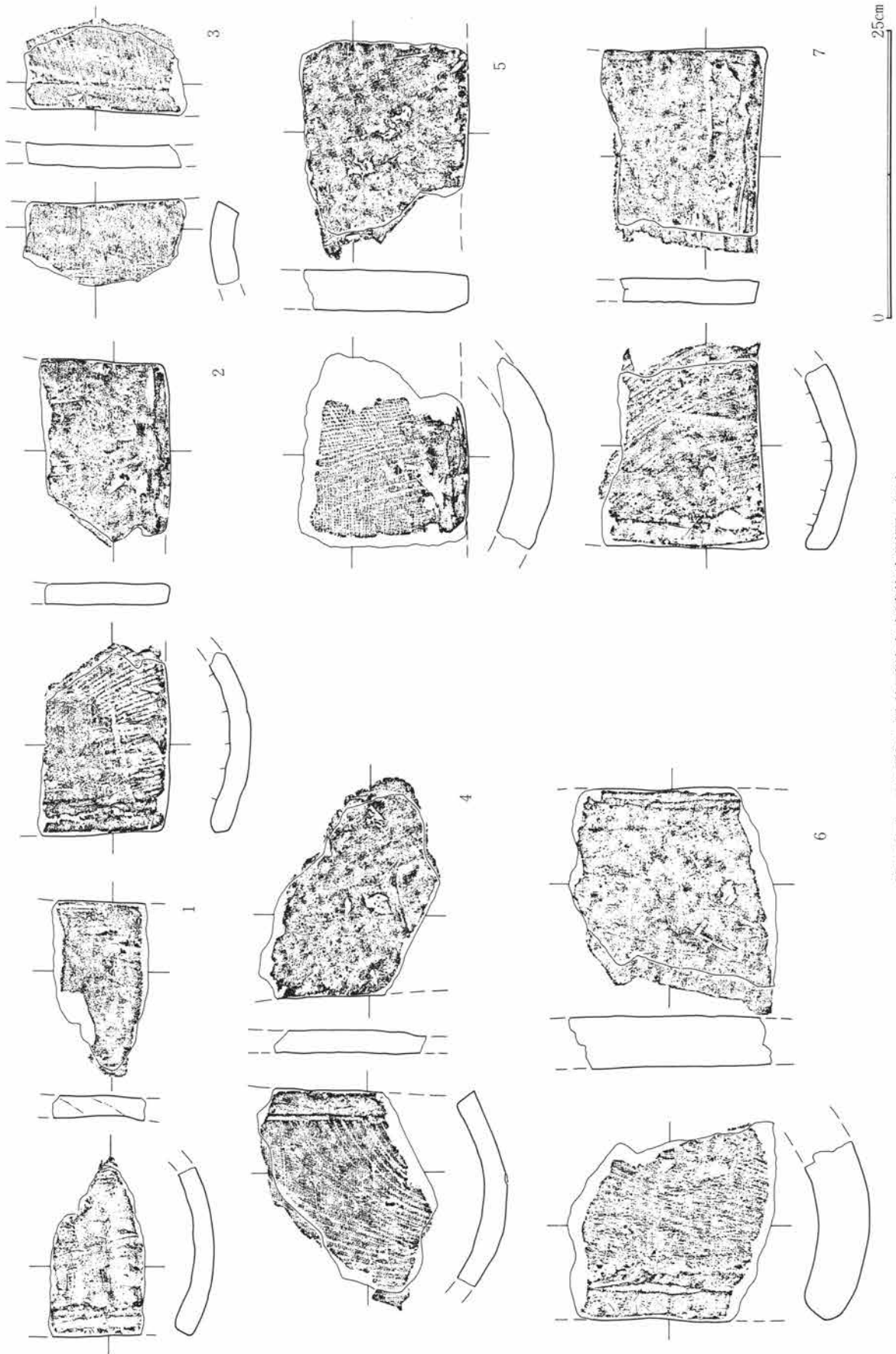
第439図 C区第4号井戸跡出土遺物実測図 (18)



第440図 C区第4号井戸跡出土遺物実測図(19)

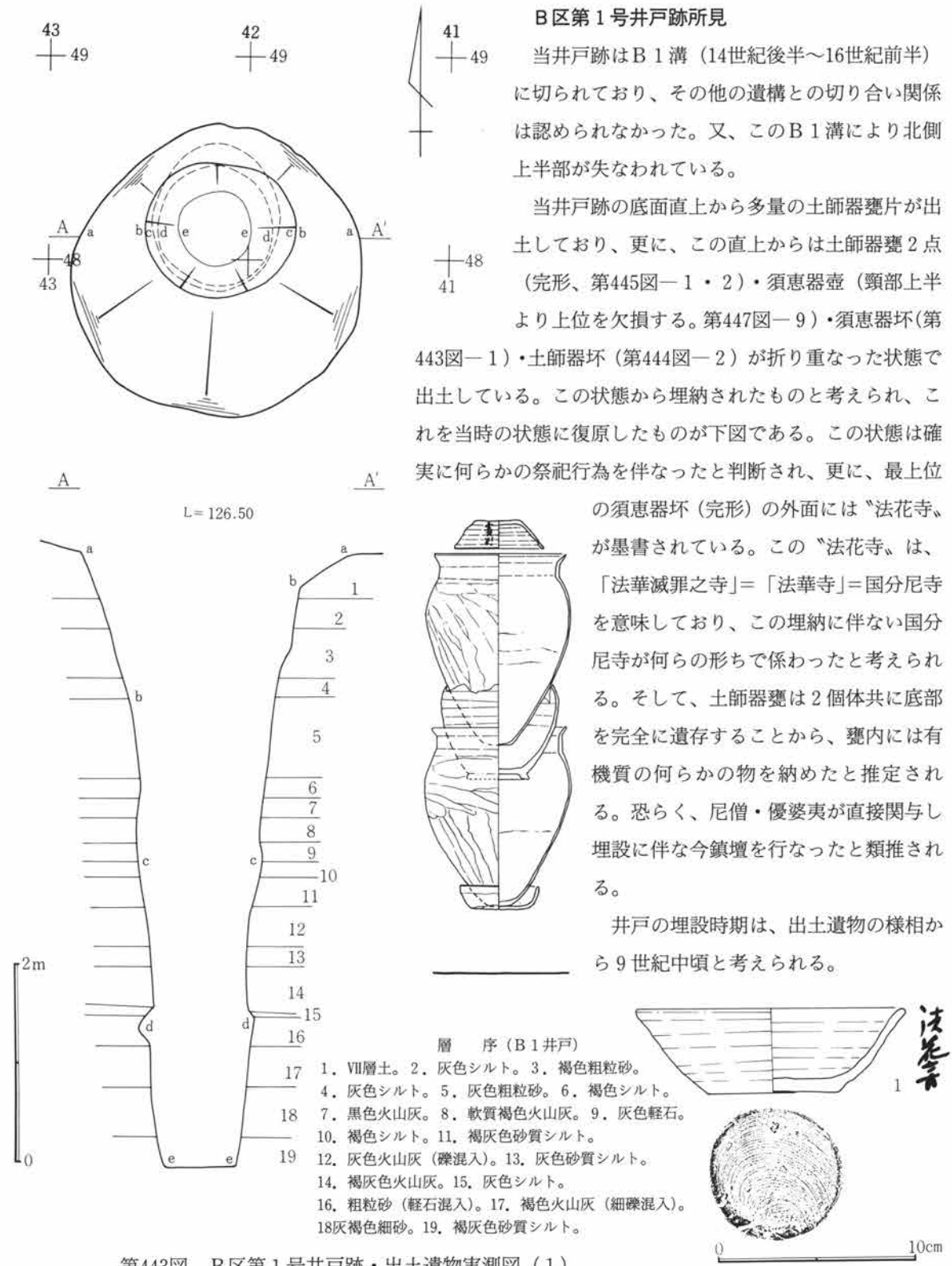


第441図 C区第4号井戸跡出土遺物実測図(20)



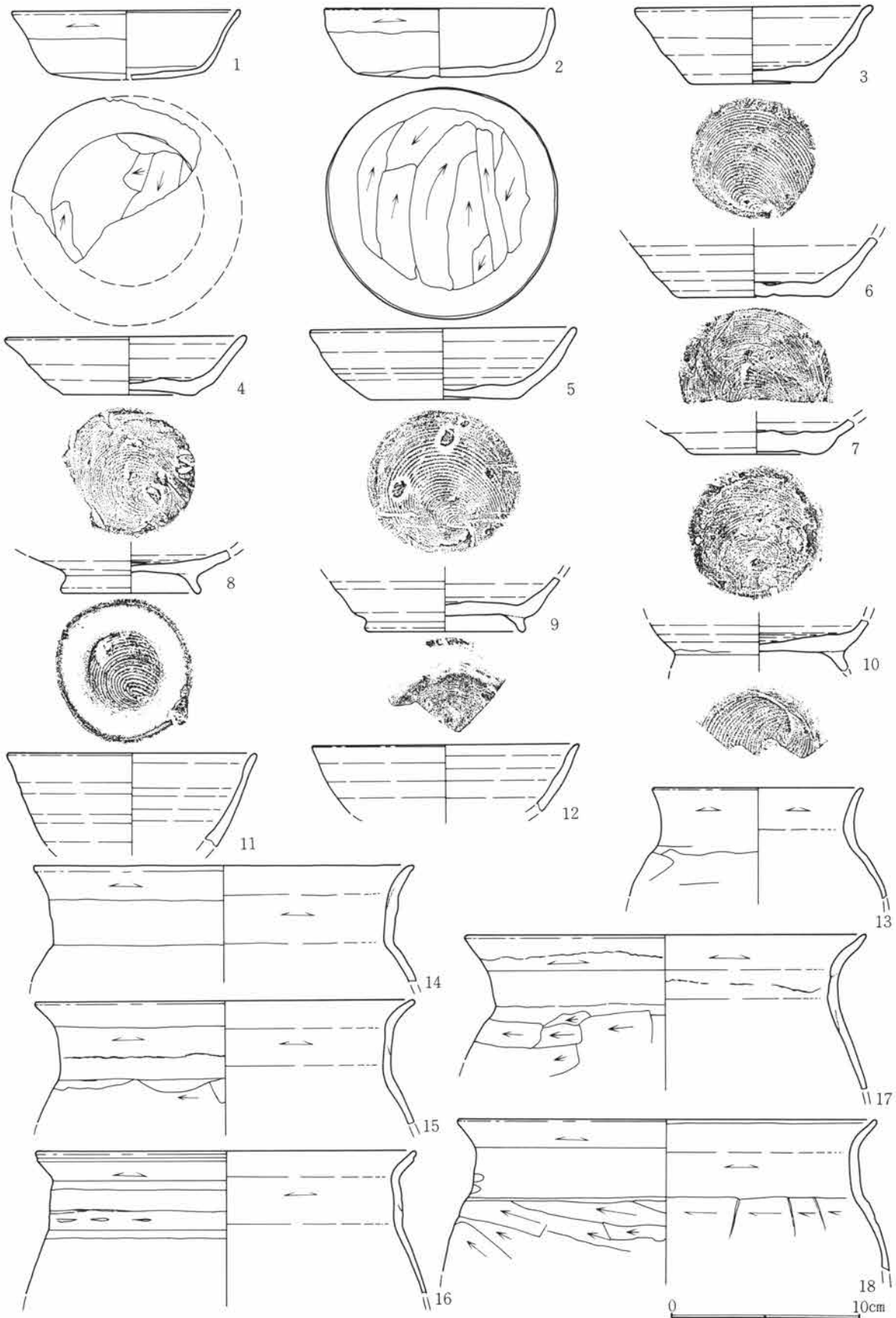
第442図 C区第4号戸跡出土遺物実測図 (21)

遺構名称	B区第1号井戸			位置	48・49-B-41・42グリッド内。		平面形態	円形。
規模(m)	地上径 2.8	最細径1.21	最大径 2.8	深度6.37	湧水位深度	夏期 3.5 ・ 冬期 5.0		
アグリ部最大径	夏期 1.2 ・ 冬期1.48		湧水層	11・17層		耐水層	13・18層	

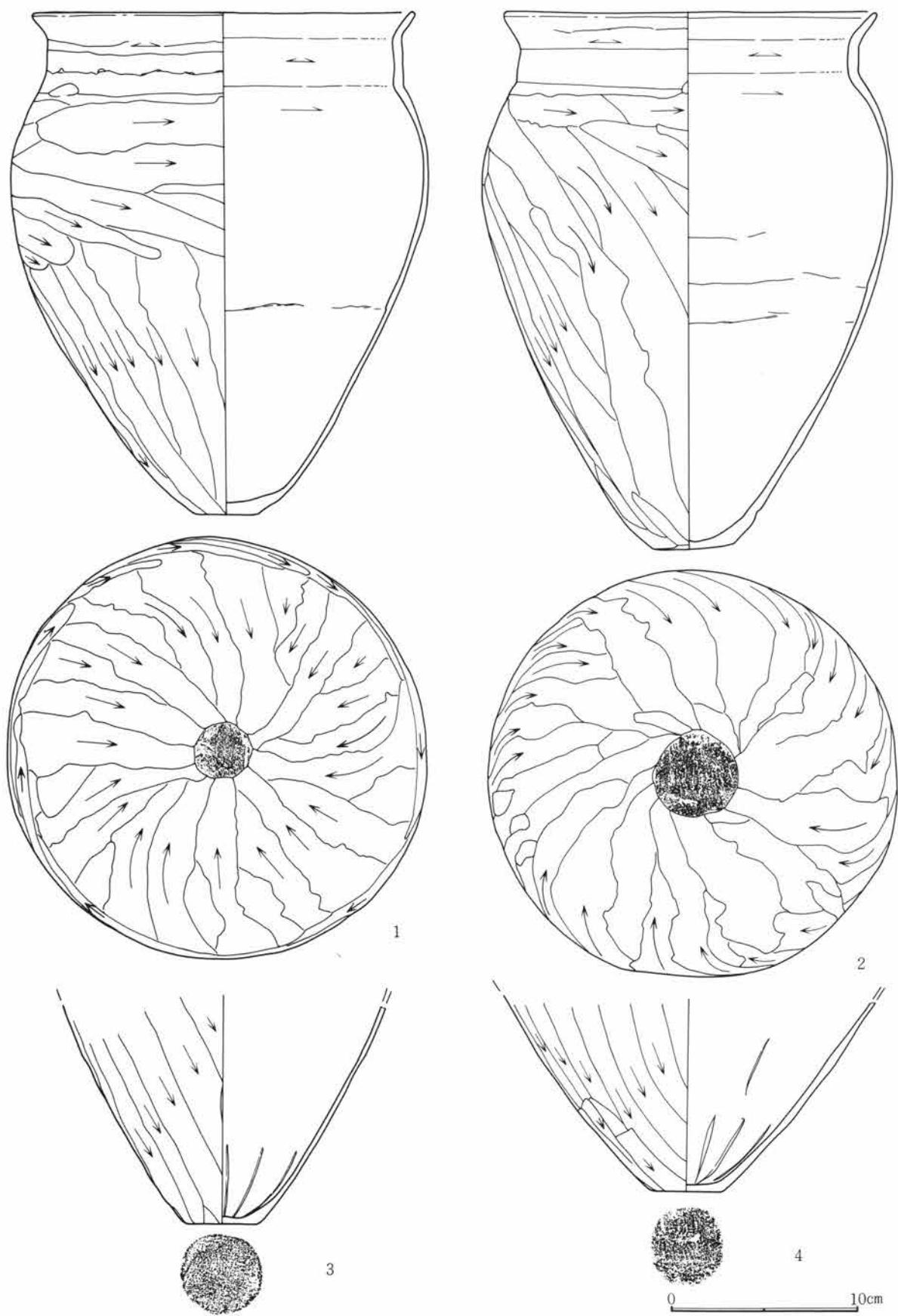


第443図 B区第1号井戸跡・出土遺物実測図(1)

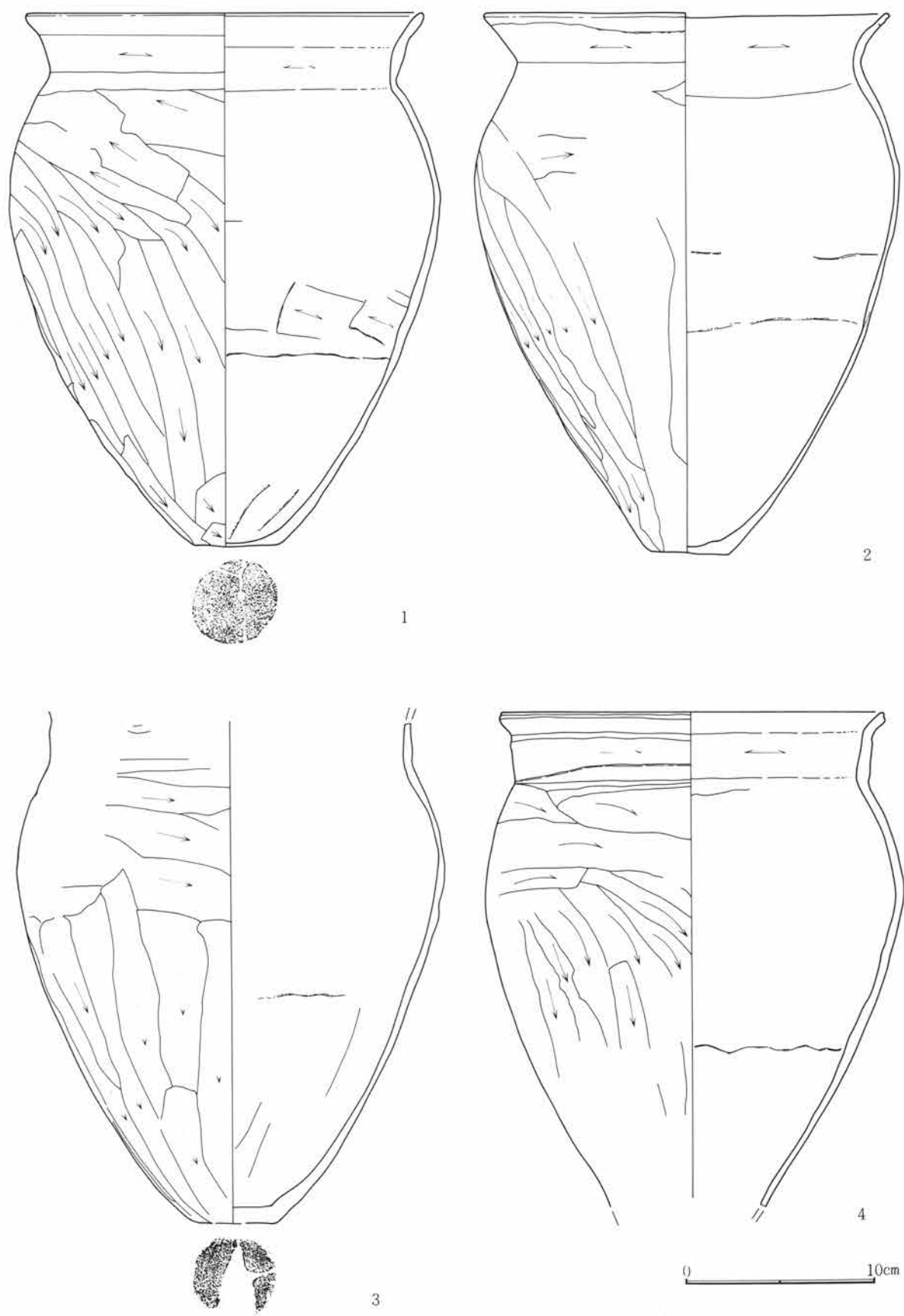
第1節 南側調査区



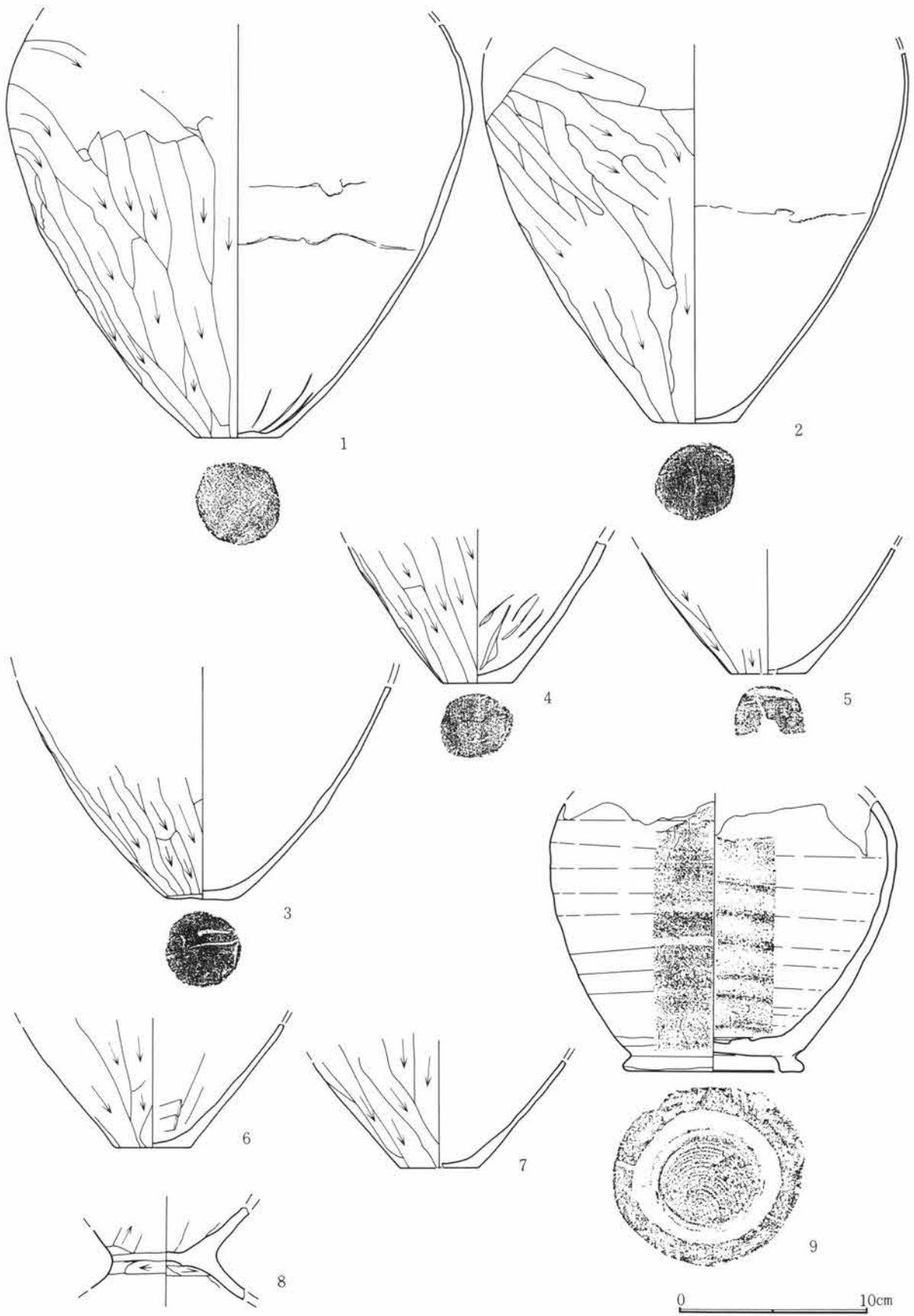
第444図 B区第1号井戸跡出土遺物実測図(2)



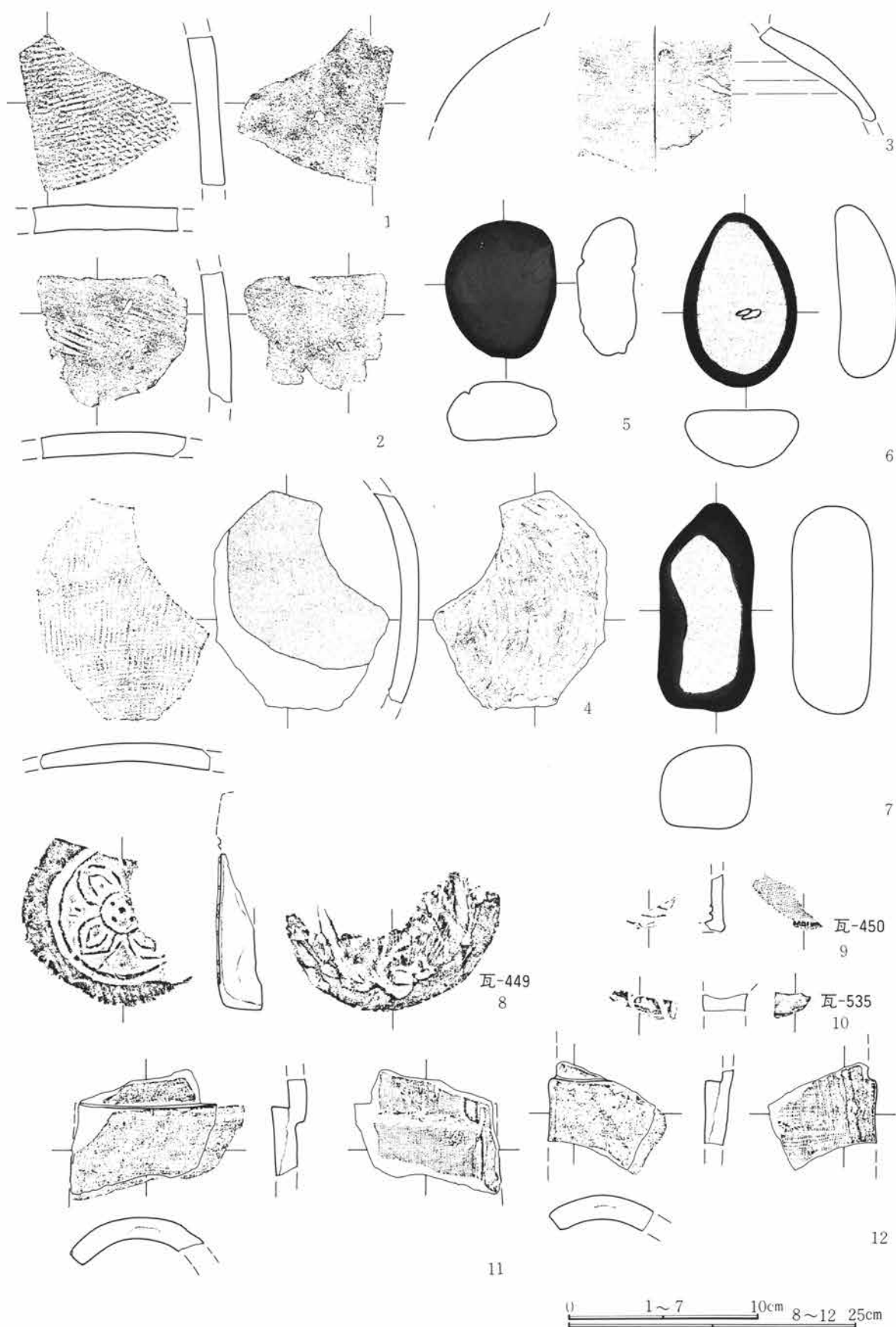
第445図 B区第1号井戸跡出土遺物実測図(3)



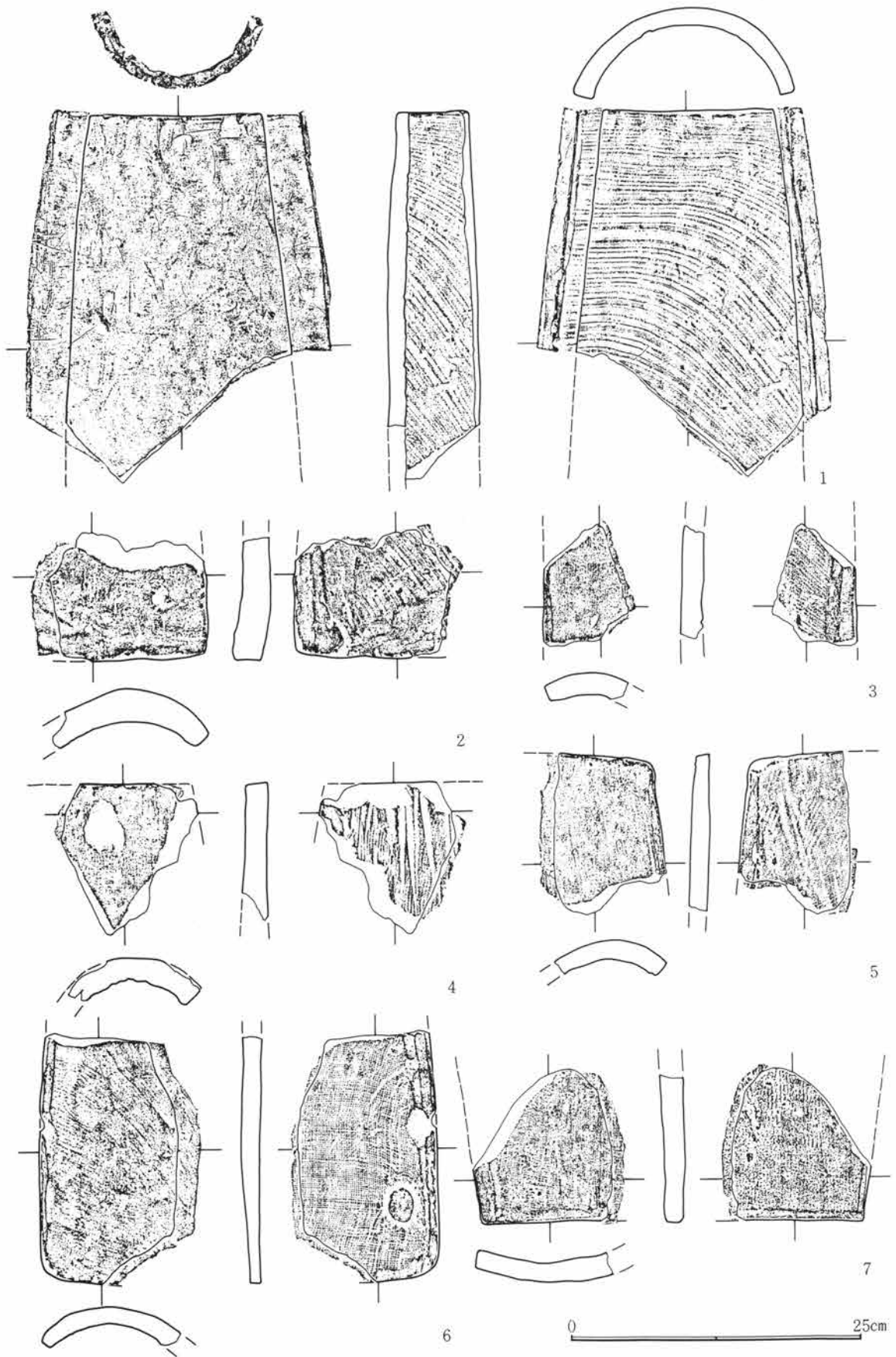
第446図 B区第1号井戸跡出土遺物実測図(4)



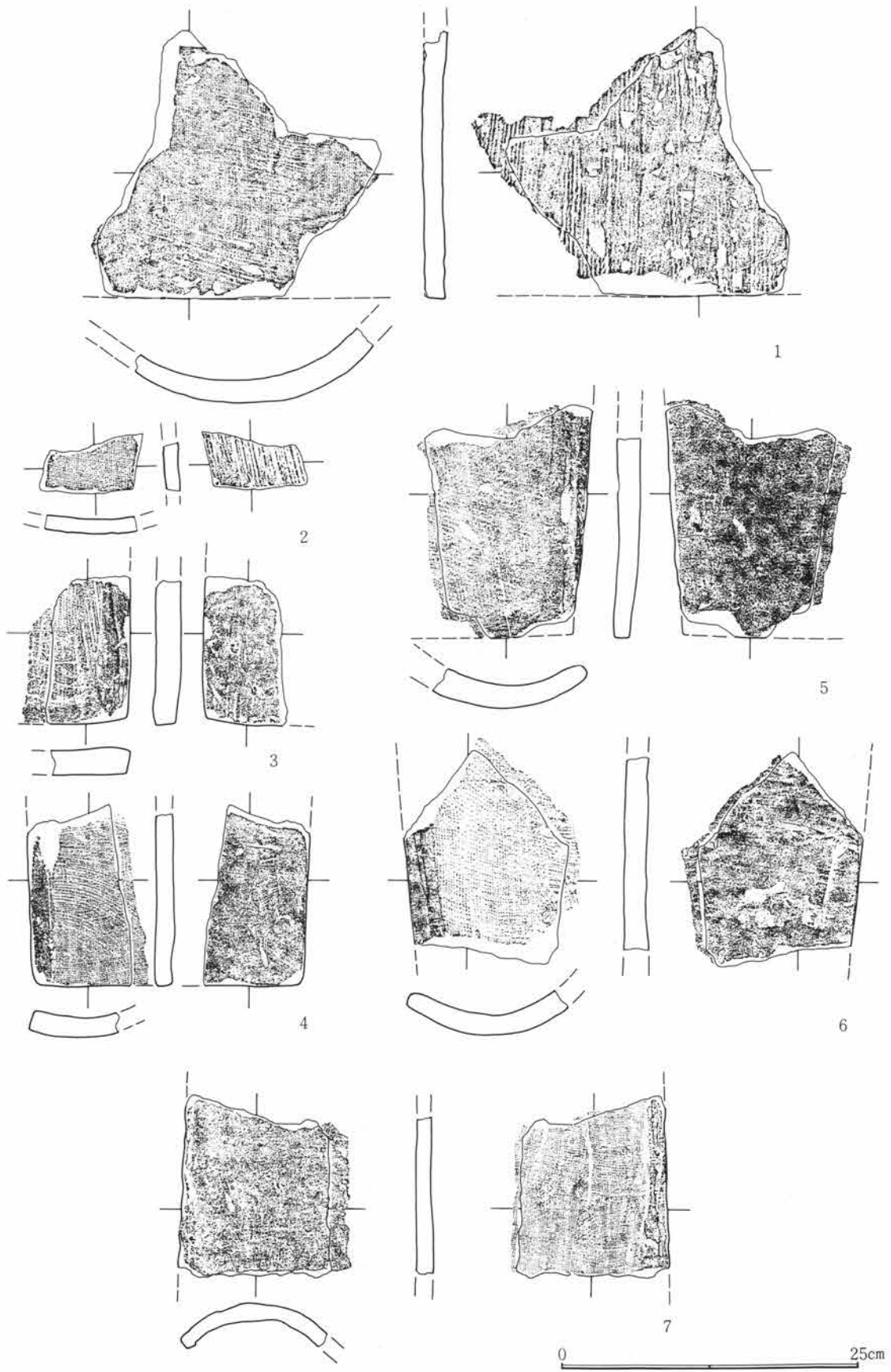
第447図 B区第1号井戸跡出土遺物実測図(5)



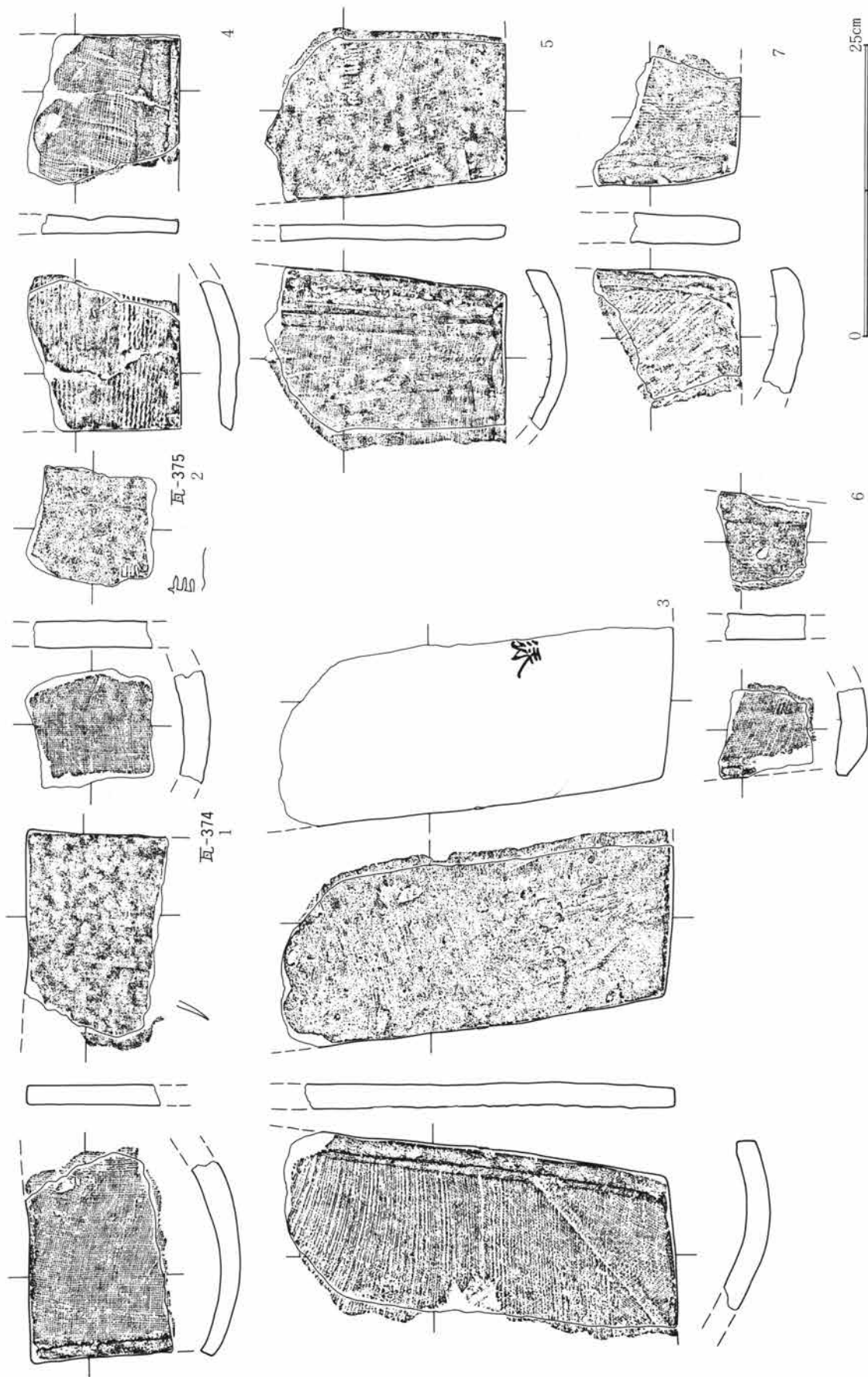
第448図 B区第1号井戸跡出土遺物実測図(6)



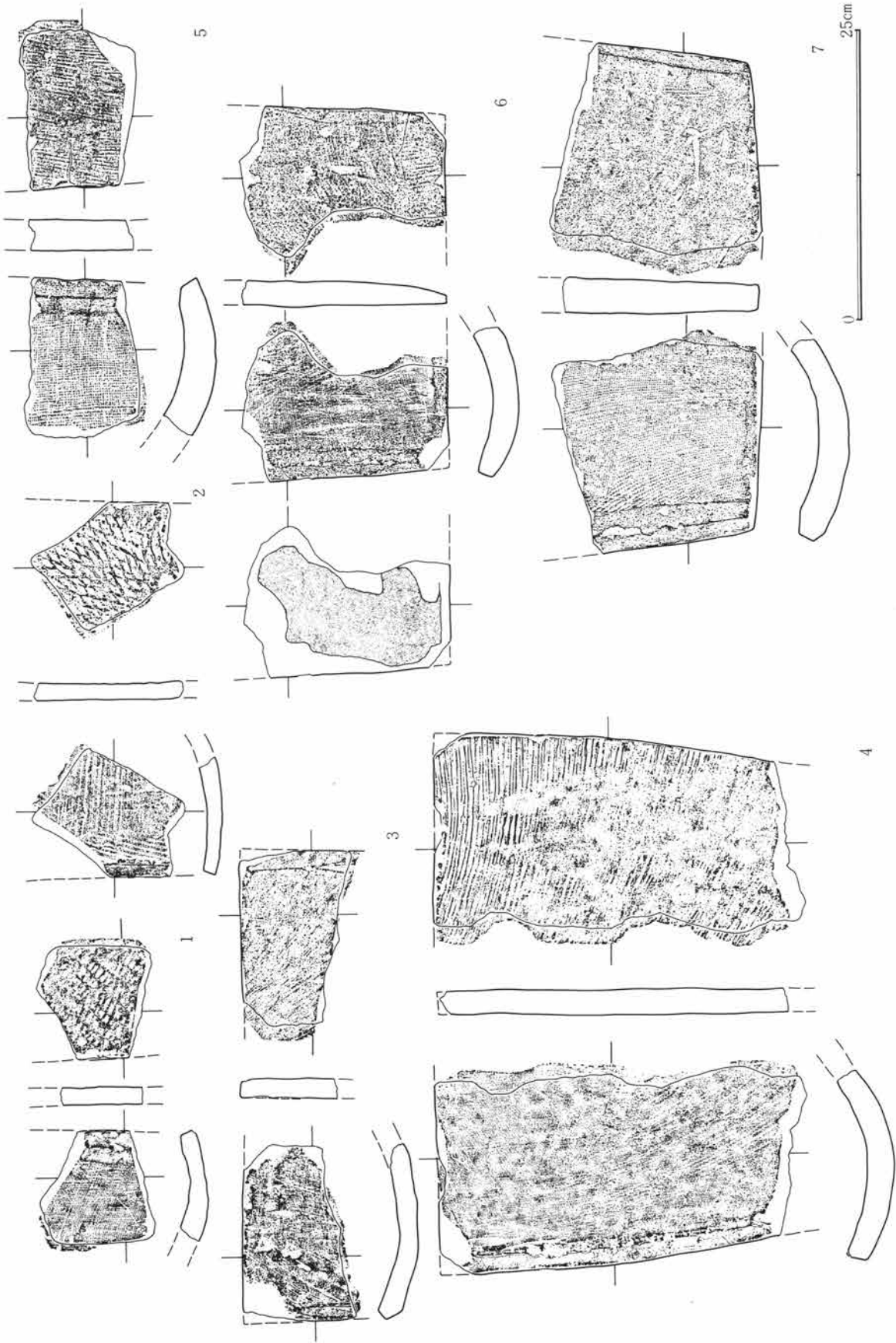
第449図 B区第1号井戸跡出土遺物実測図(7)



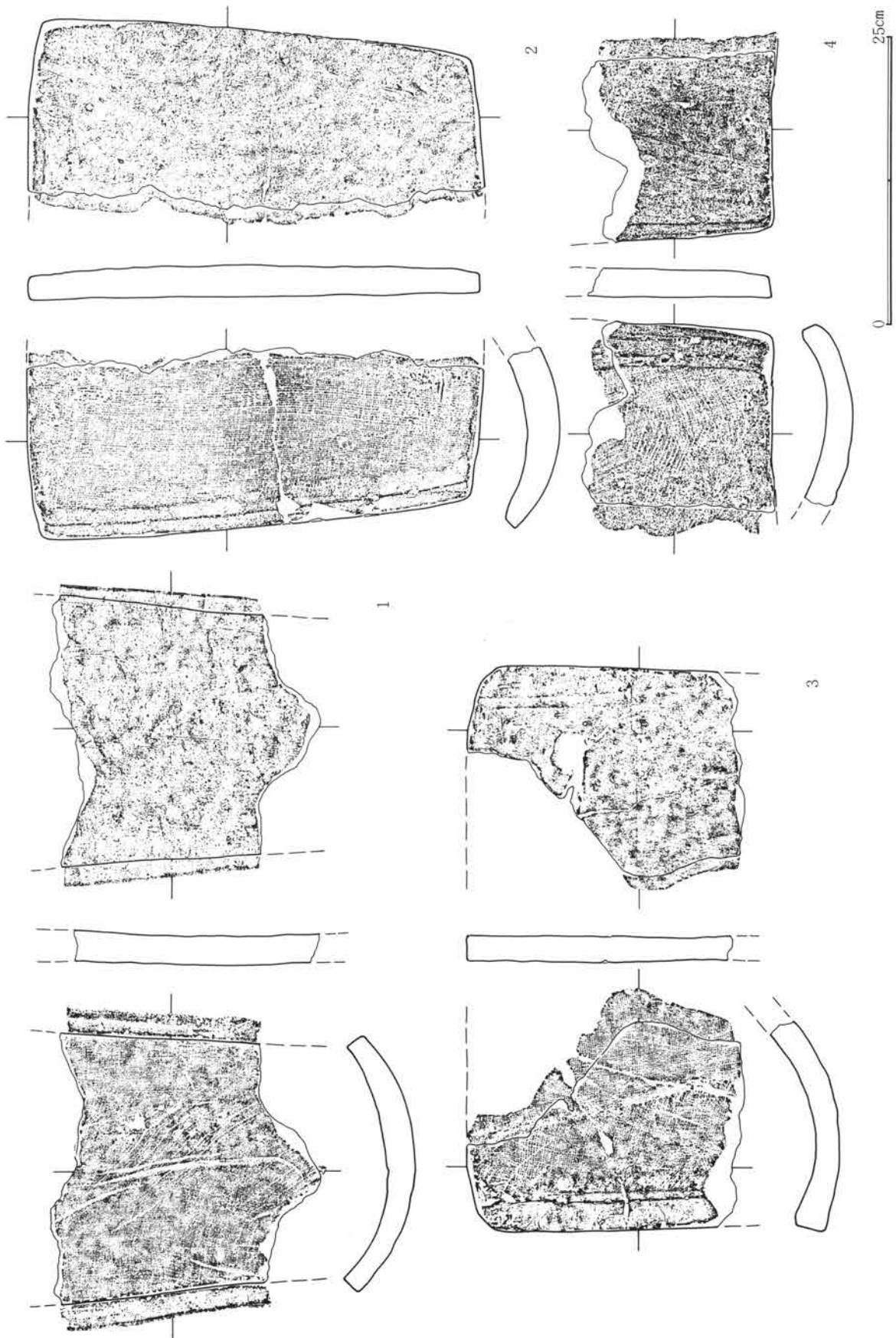
第450図 B区第1号井戸跡出土遺物実測図(8)



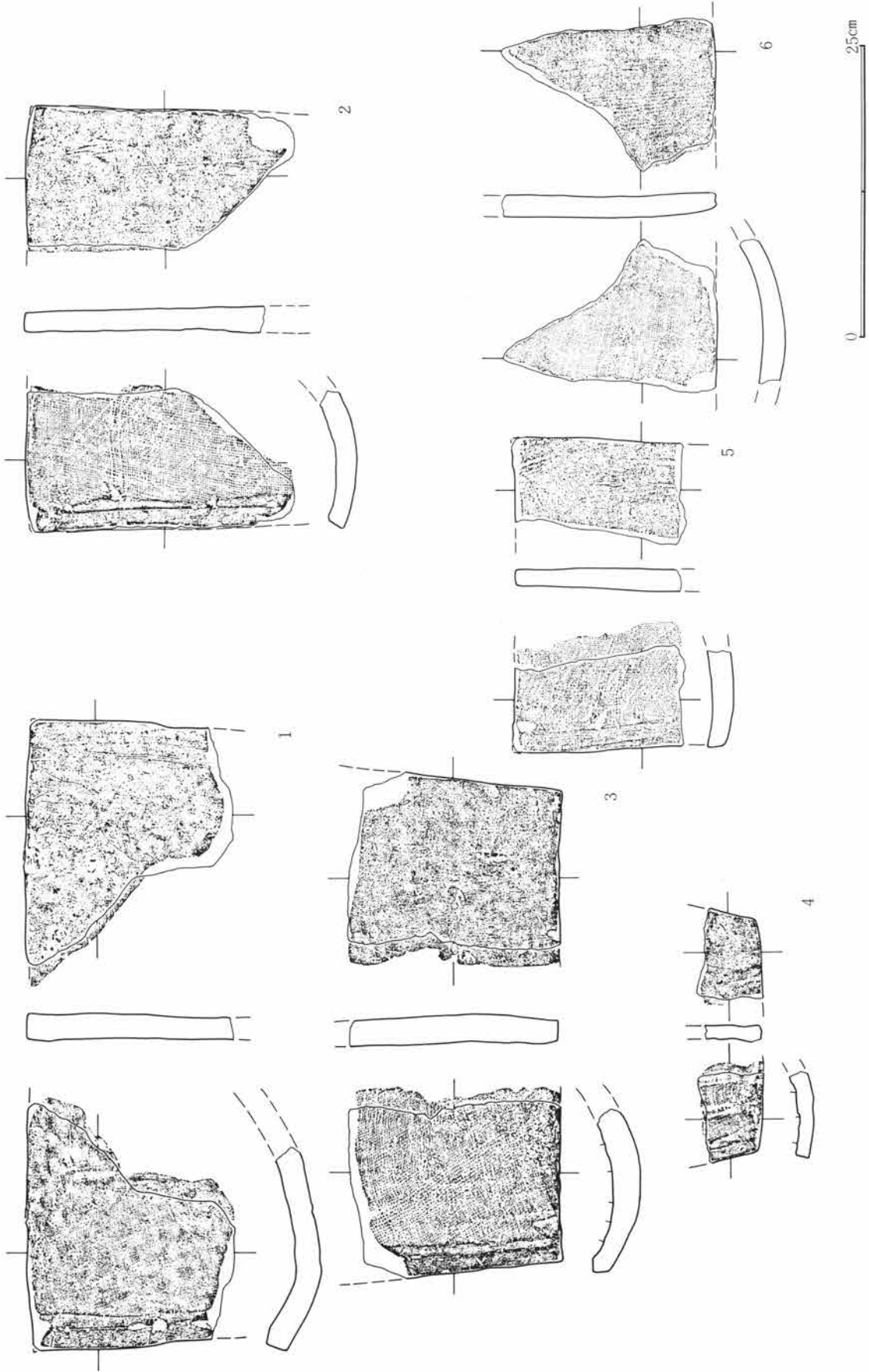
第451図 B区第1号井戸跡出土遺物実測図(9)



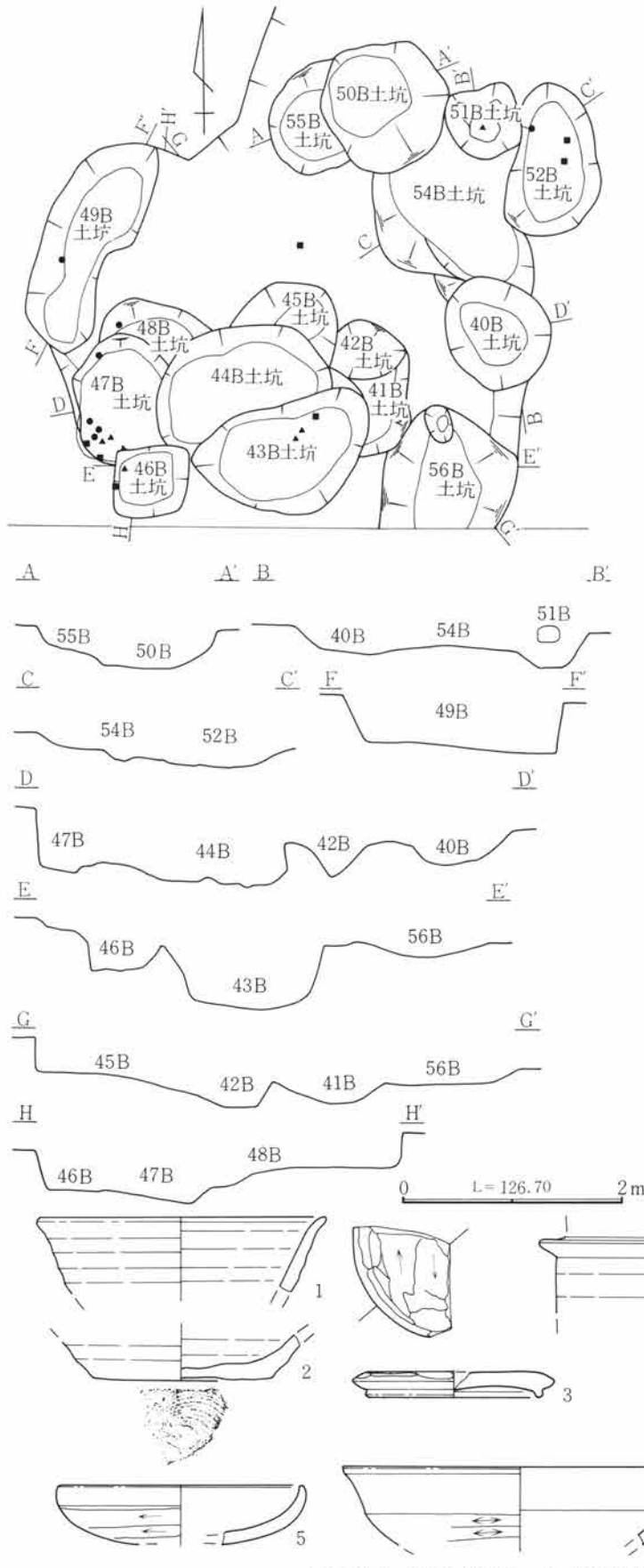
第452図 B区第1号井戸跡出土遺物実測図(10)



第453図 B区第1号井戸跡出土遺物実測図(11)



第454図 B区第1号井戸跡出土遺物実測図(12)



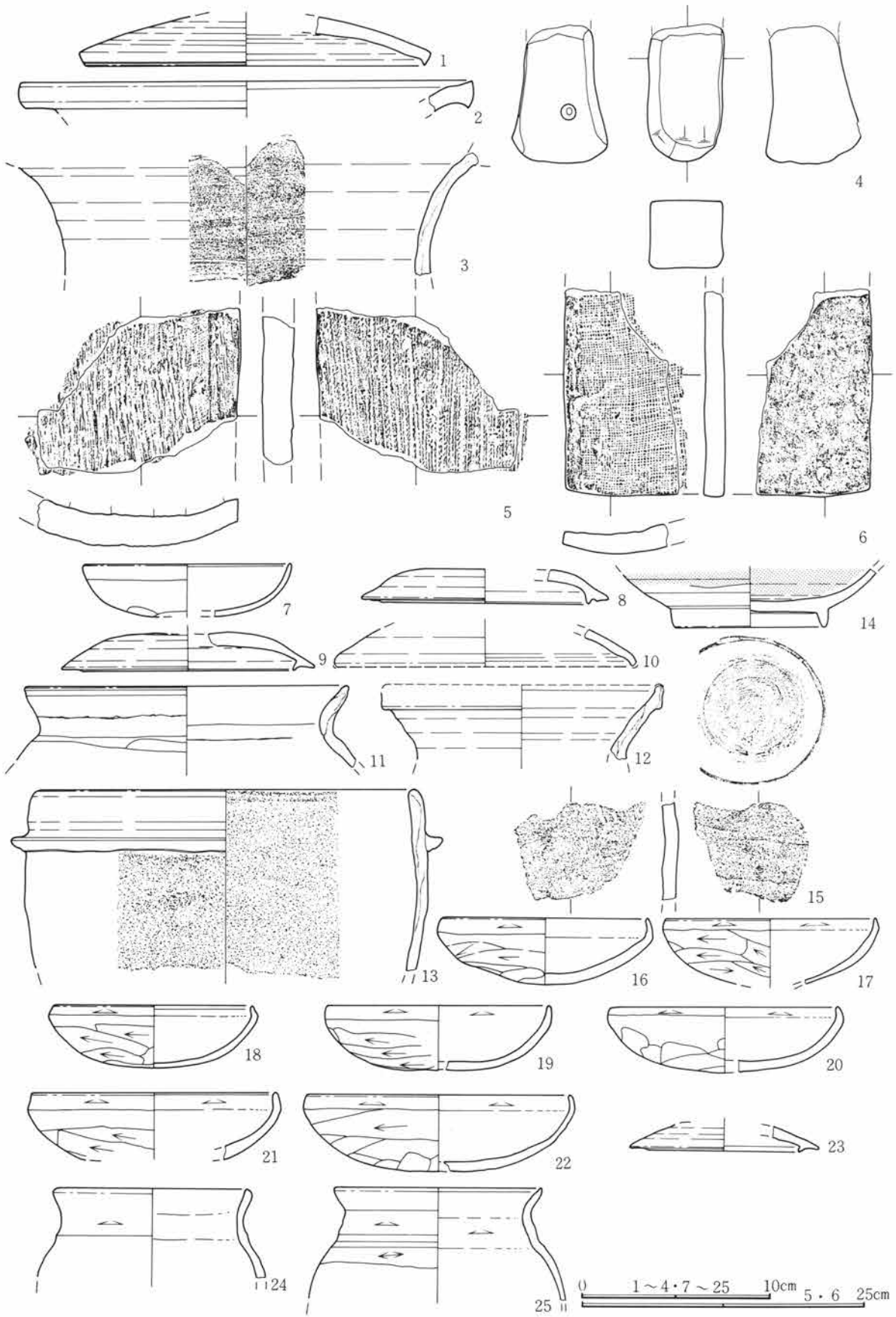
第455図 B区土坑群・出土遺物実測図(1)

土 坑

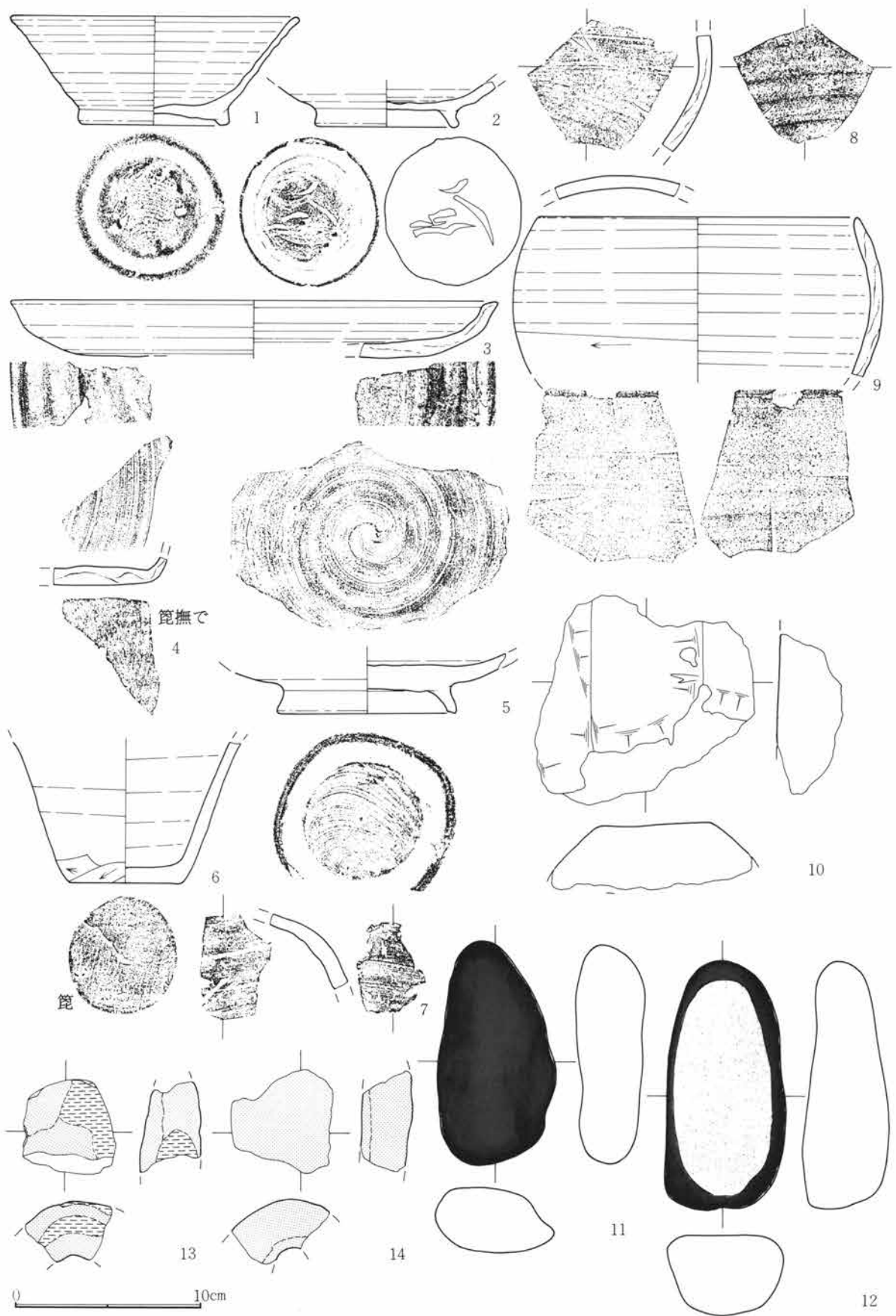
土坑は住居数に比較し少なく、32基が検出されている(時期不明なものは割合してあるが、規模等に就いては第1分冊中の一覧表にして示してある)。この中には、通常「ピット」として扱われるものも含まれている。

検出された土坑は、規模で大・中・小・その他の四者に分類され、この中で小は上述のピットとして扱われるものである。大は、円形基調・楕円形基調の二者がある。中は大半が円形基調で隅丸方形状のものがある。その他としたものは長方形基調・不整形がある。この中で長方形基調のものはC区第17号・52号土坑がある。この両者の内C17坑は、調査時の不手際により北側半分を失っている。

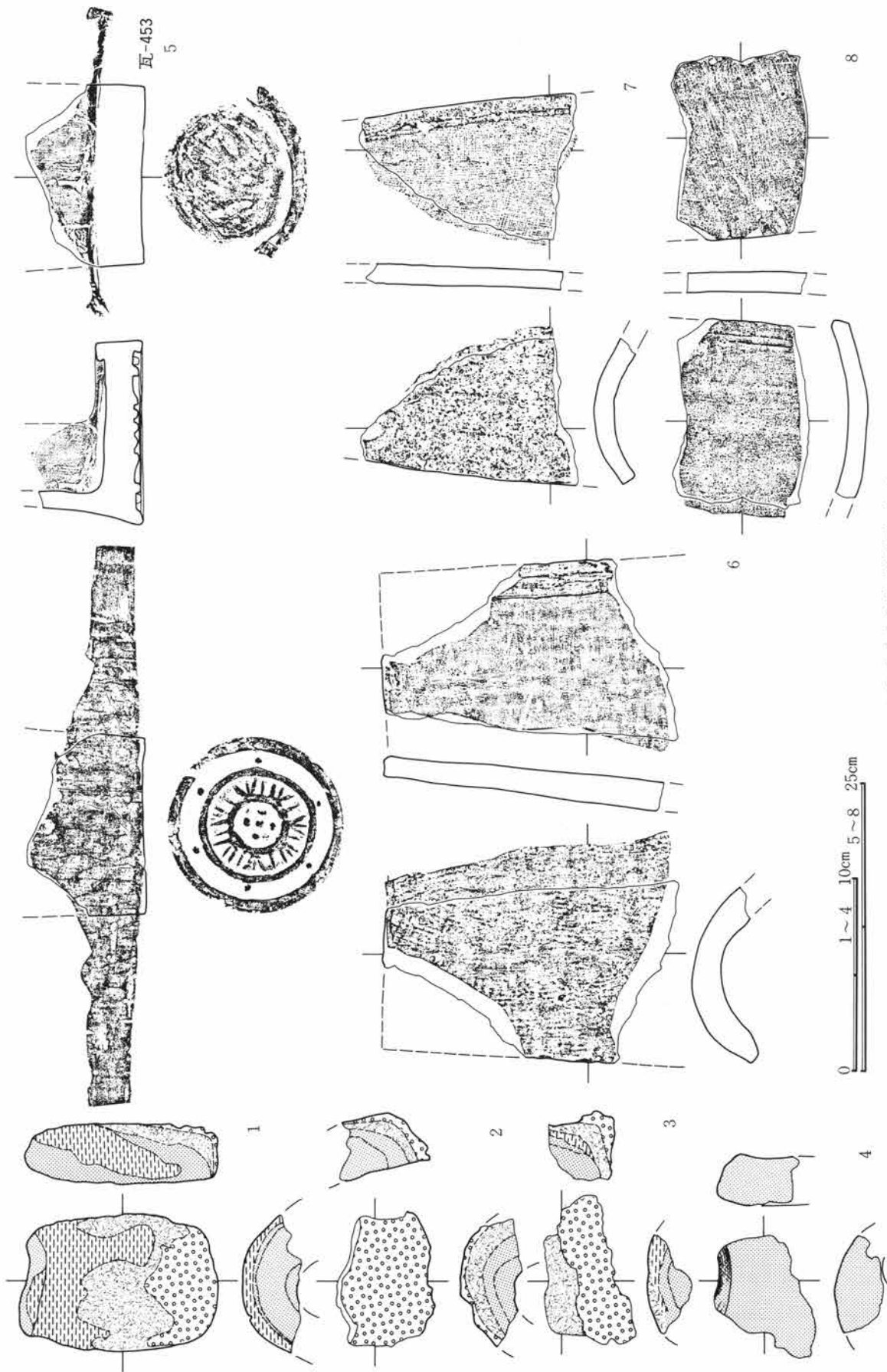
これらの土坑は、住居の検出されなかった部分から検出されている。これと同様な状況は他の区でも認められ、土坑の検出される部分は住居の存在が非常に希薄である。然し、住居が多く検出される部分で少ない点は、住居と重複により失われたか、重複により単に見落した可能性も有りうるが、住居間での検出状態が非常に少ない点からは積極的なこととは考え難く、寧ろ土坑構築の占地条件による所産と考えられる。



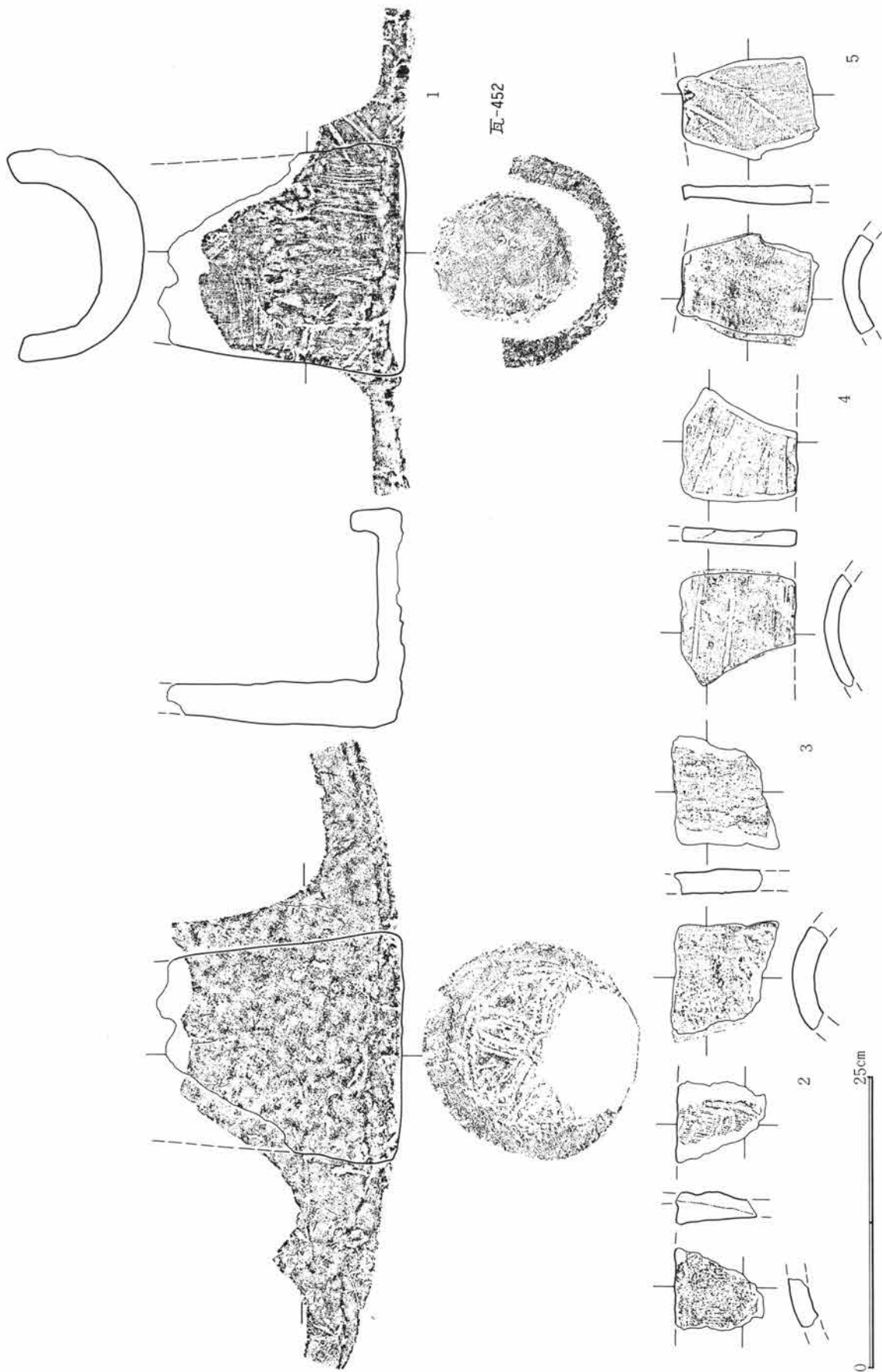
第456図 B区土坑群出土遺物実測図(2)



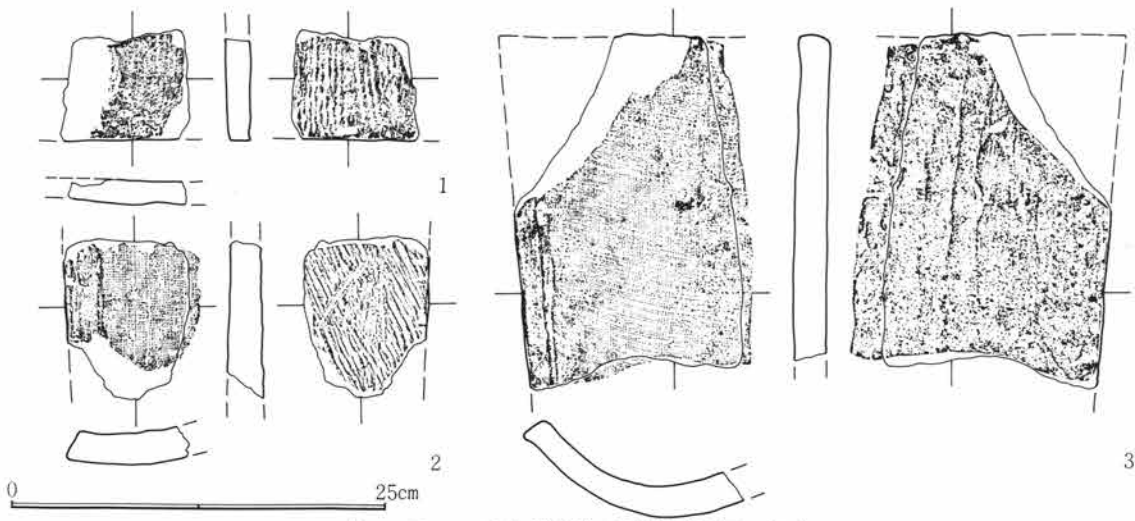
第457図 B区土坑群出土遺物実測図(3)



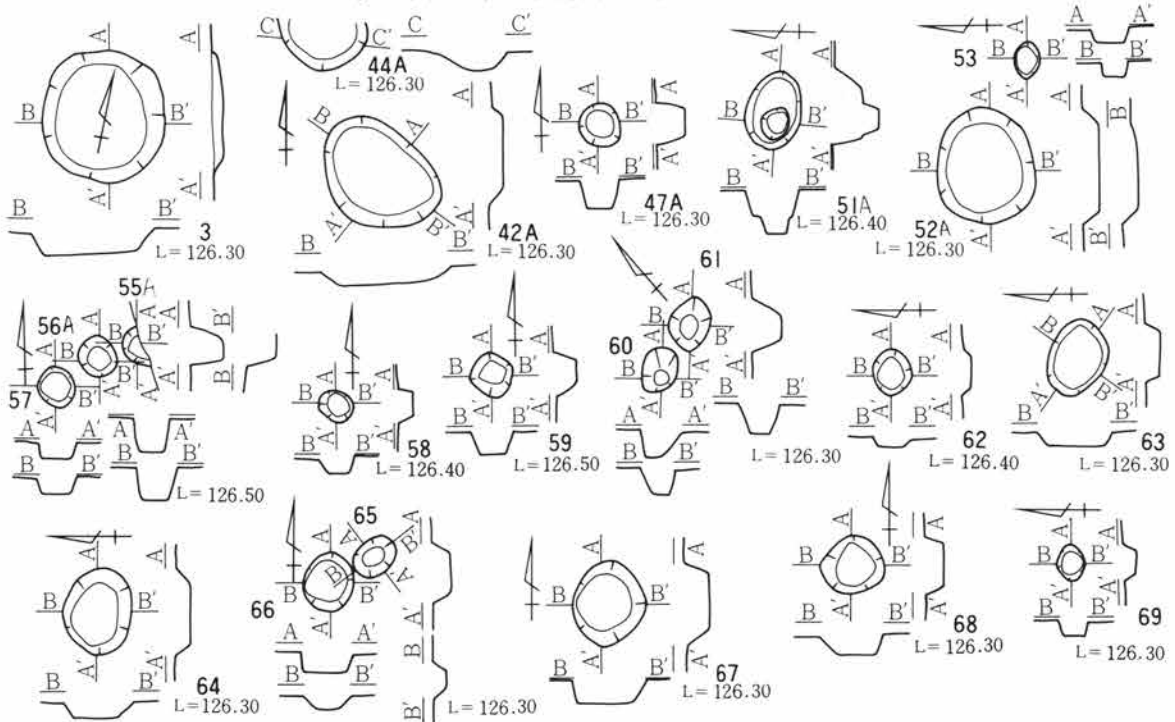
第458図 B区土坑群出土遺物実測図(4)



第459図 B区土坑群出土遺物実測図(5)



第460図 B区土坑群出土遺物実測図(6)



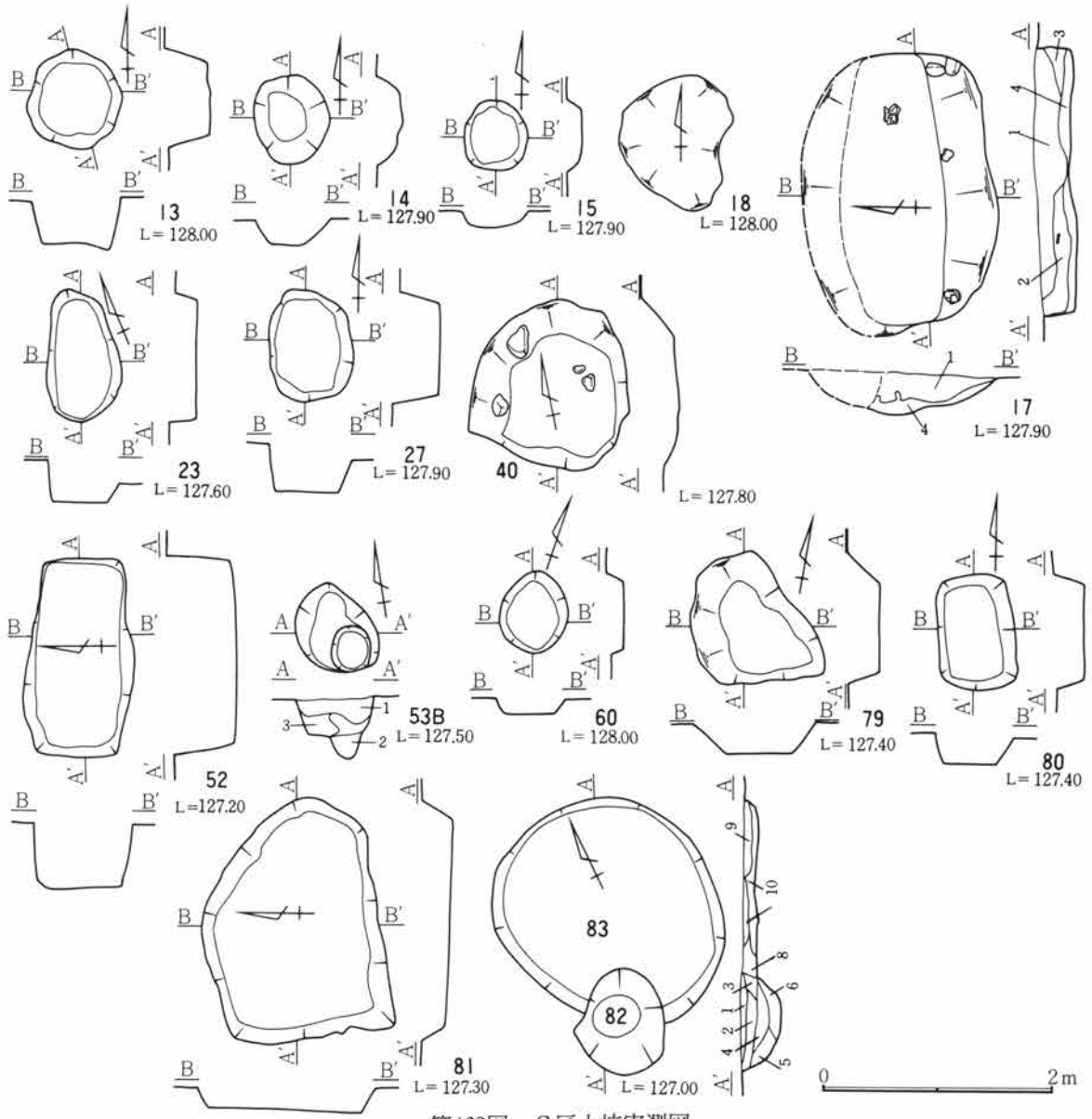
第461図 B区土坑実測図(1/60)

C区第17号土坑に就いて

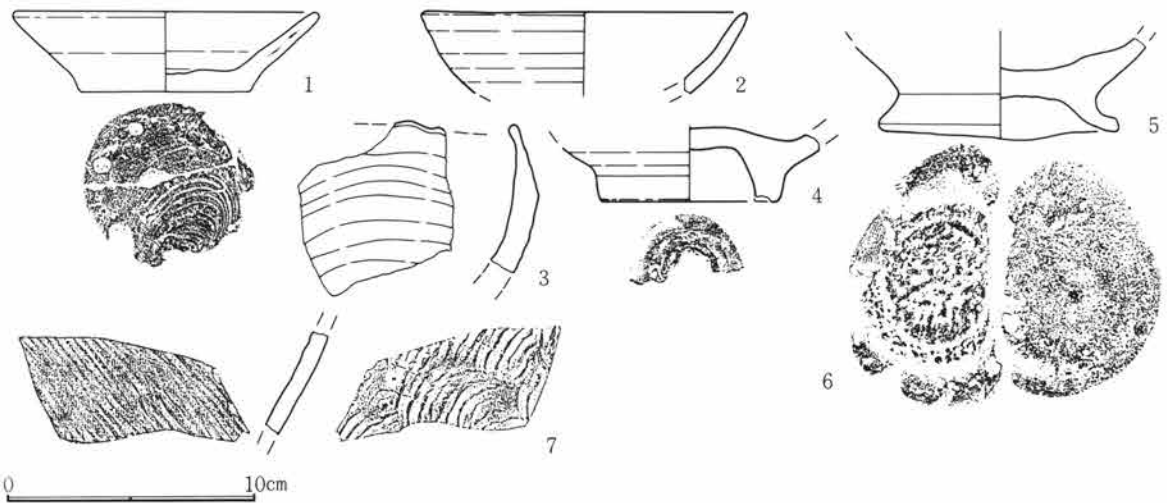
C区第17号土坑(以下C17坑と略記)はC区第10号溝状遺構を切り構築している。然し、調査段階で、C10溝を先行調査した為、本土坑の北側半分を失ってしまった。図示した平面図は断面図等から復元した状態である。

形状は長方形基調で軸長2.30mを測る。底面は平坦で、東西両壁は底面からほぼ垂直に立ち上り、南壁は緩やかに立ち上がる。覆土は、1層土の堆積が底面直上まで達しており、全体的に一括して落ち込むかの状態で、1層土堆積以前には空洞状の状態であったかの如くである。この状態から、棺等の存在が想起されるものの、木質・有機質等の残存が無かったことから言及はしかねるが、土塚墓であった可能性が考えられる。出土遺物は、融変した土師質土器足高々台碗が6个体出土している。これは非常に高い高熱を受けたと考えられ、一部にはスラグ状のものが融着している。時期は10世期後半以降と考えられる。

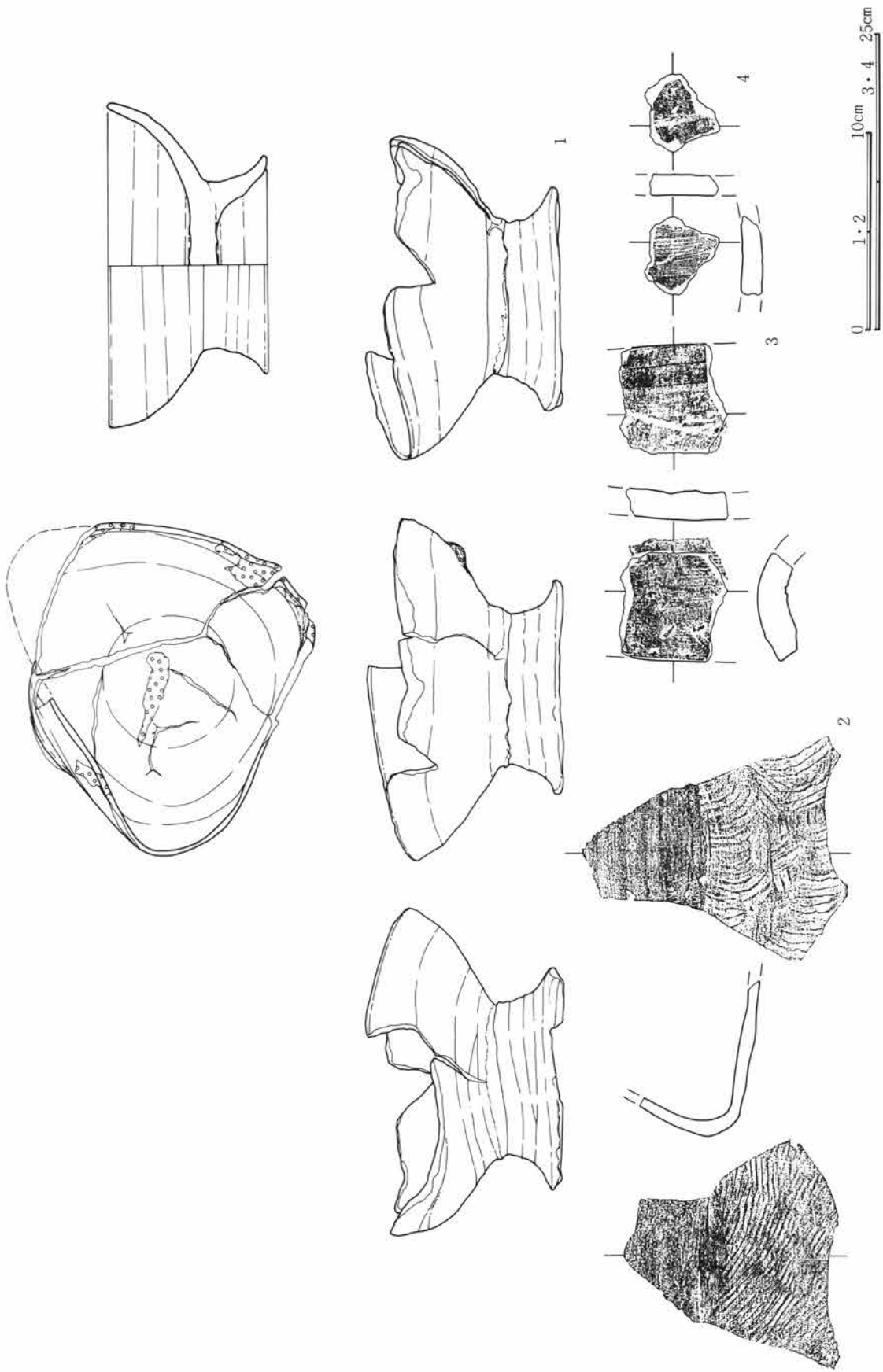
第4章 検出された遺構・遺物



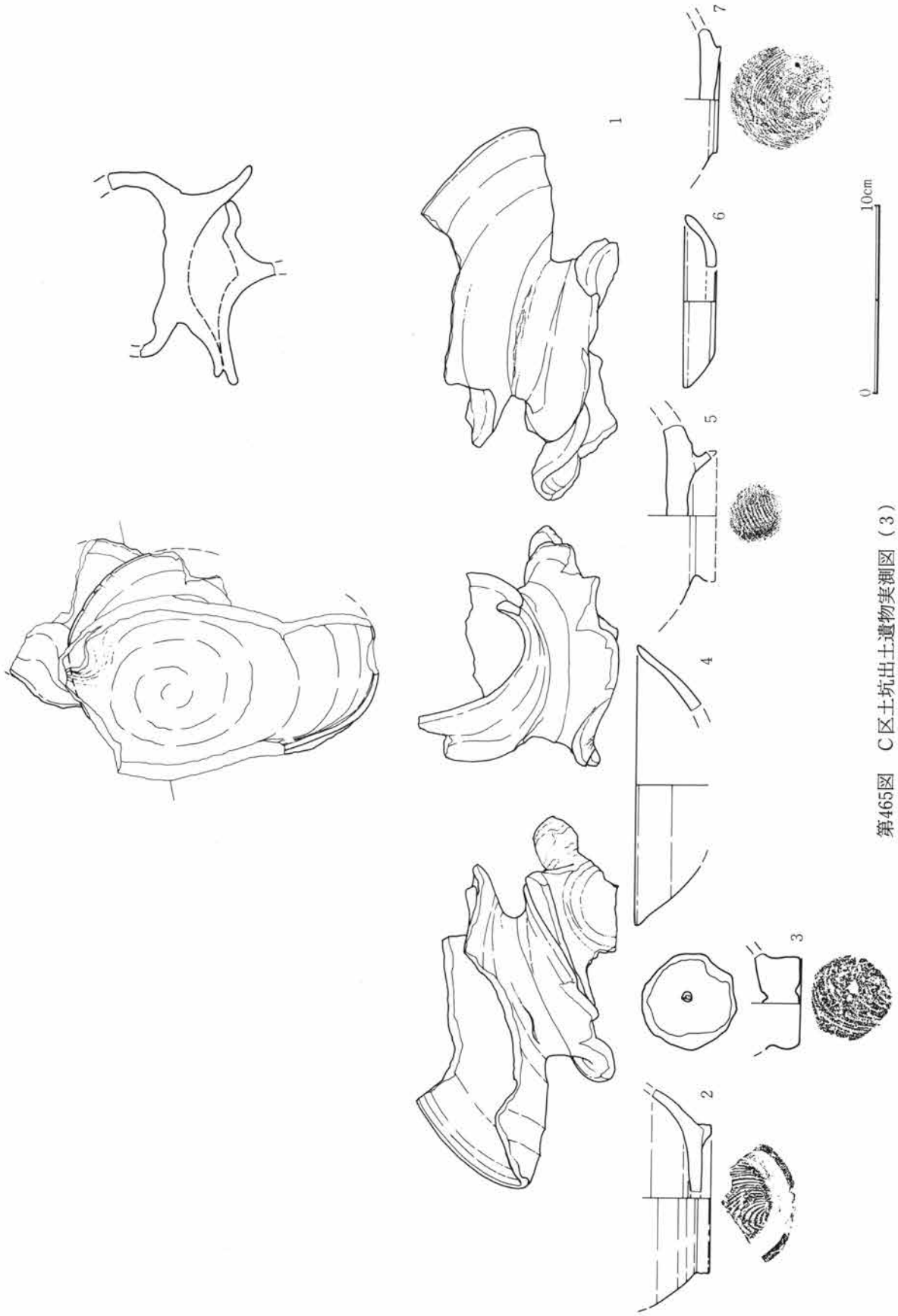
第462図 C区土坑実測図



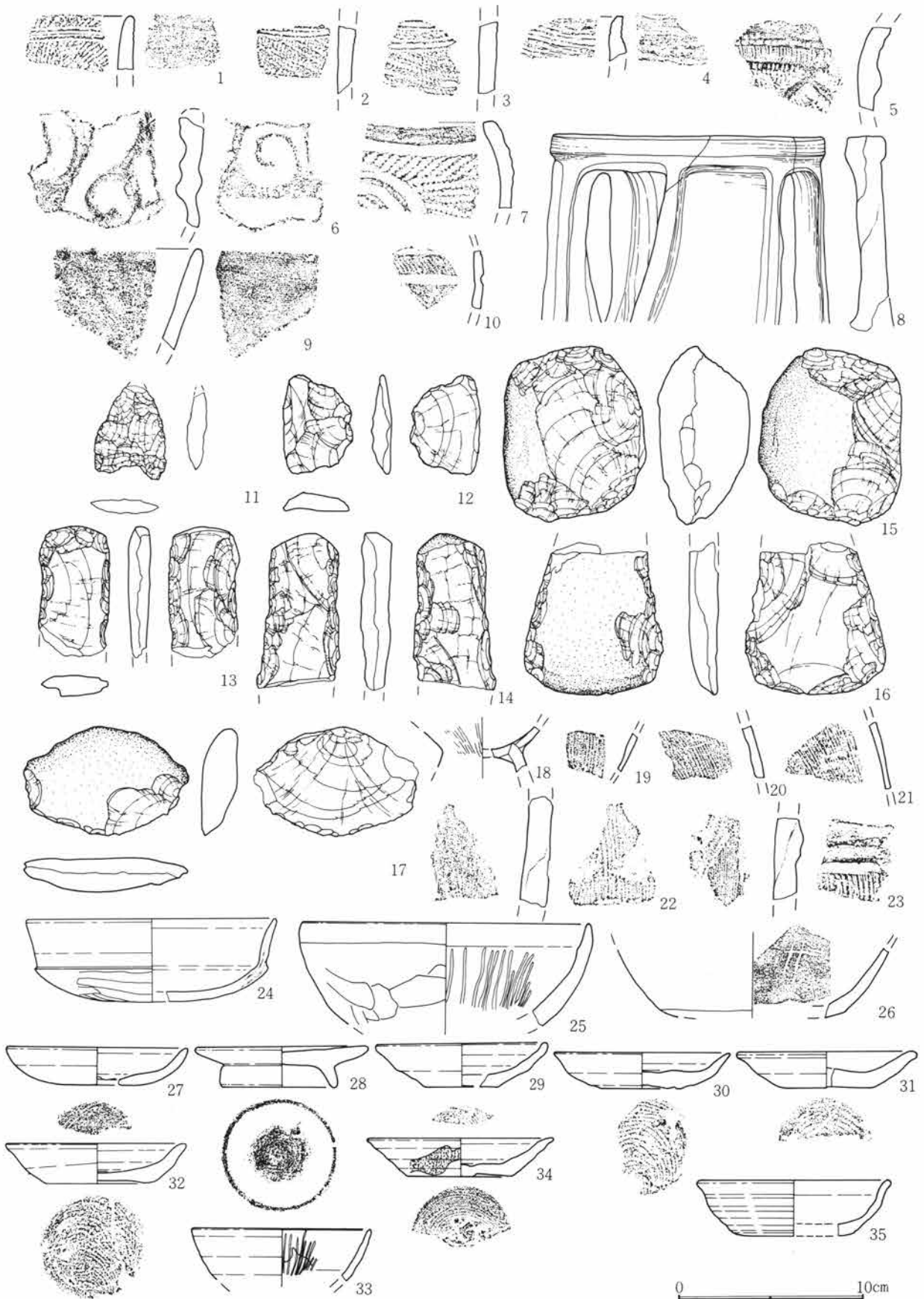
第463図 C区土坑出土遺物実測図(1)



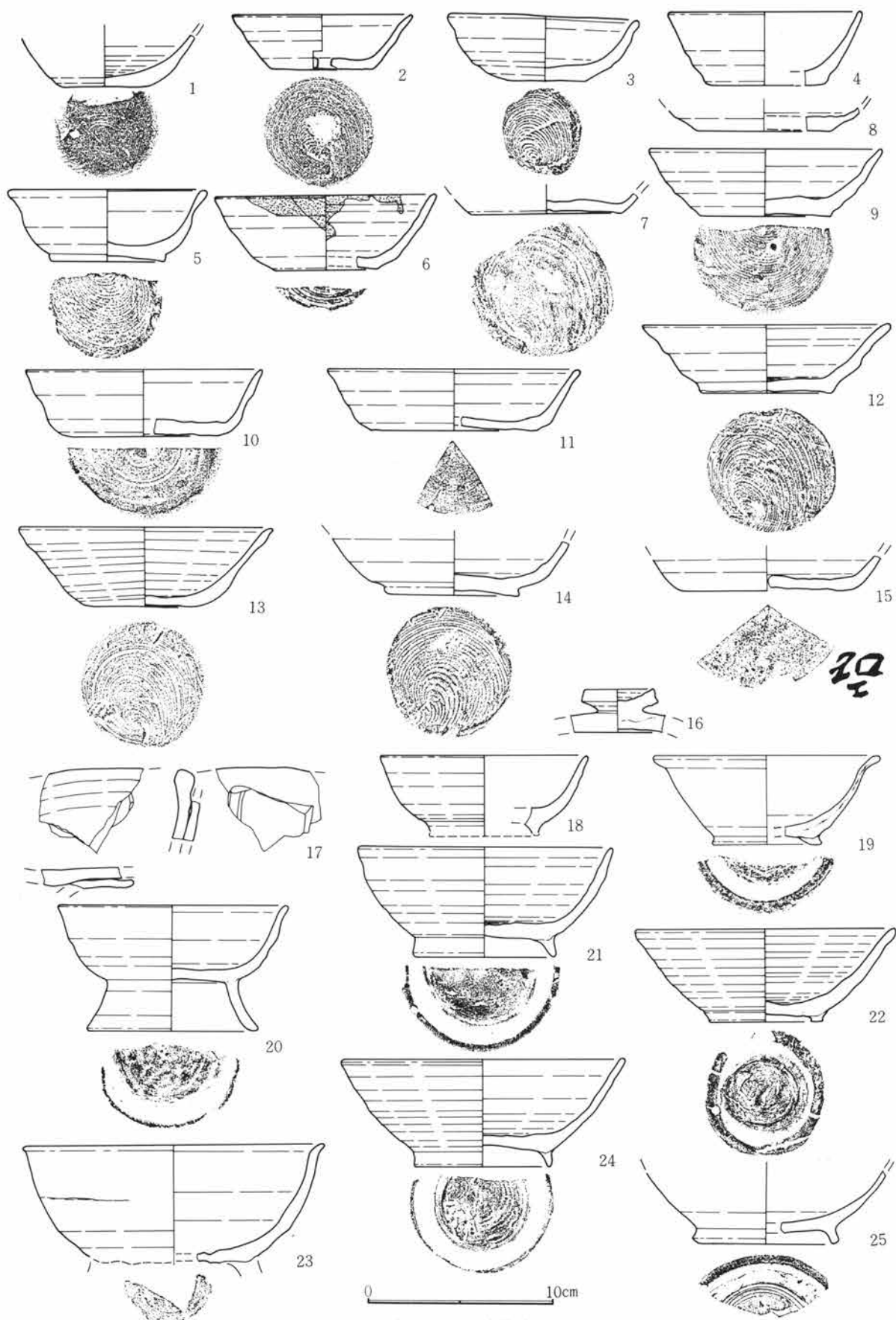
第464図 C区土坑出土遺物実測図(2)



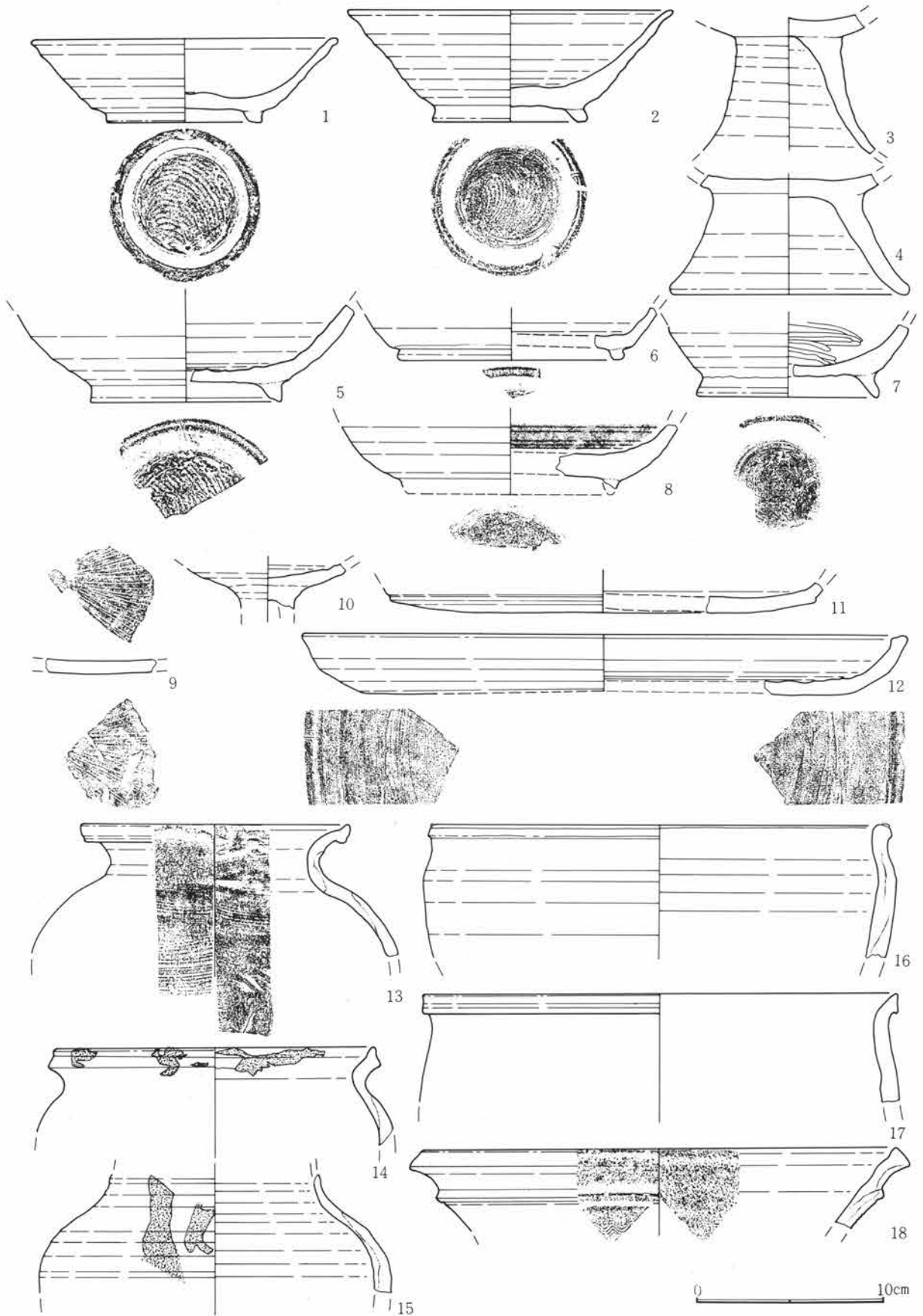
第465図 C区土坑出土遺物実測図(3)



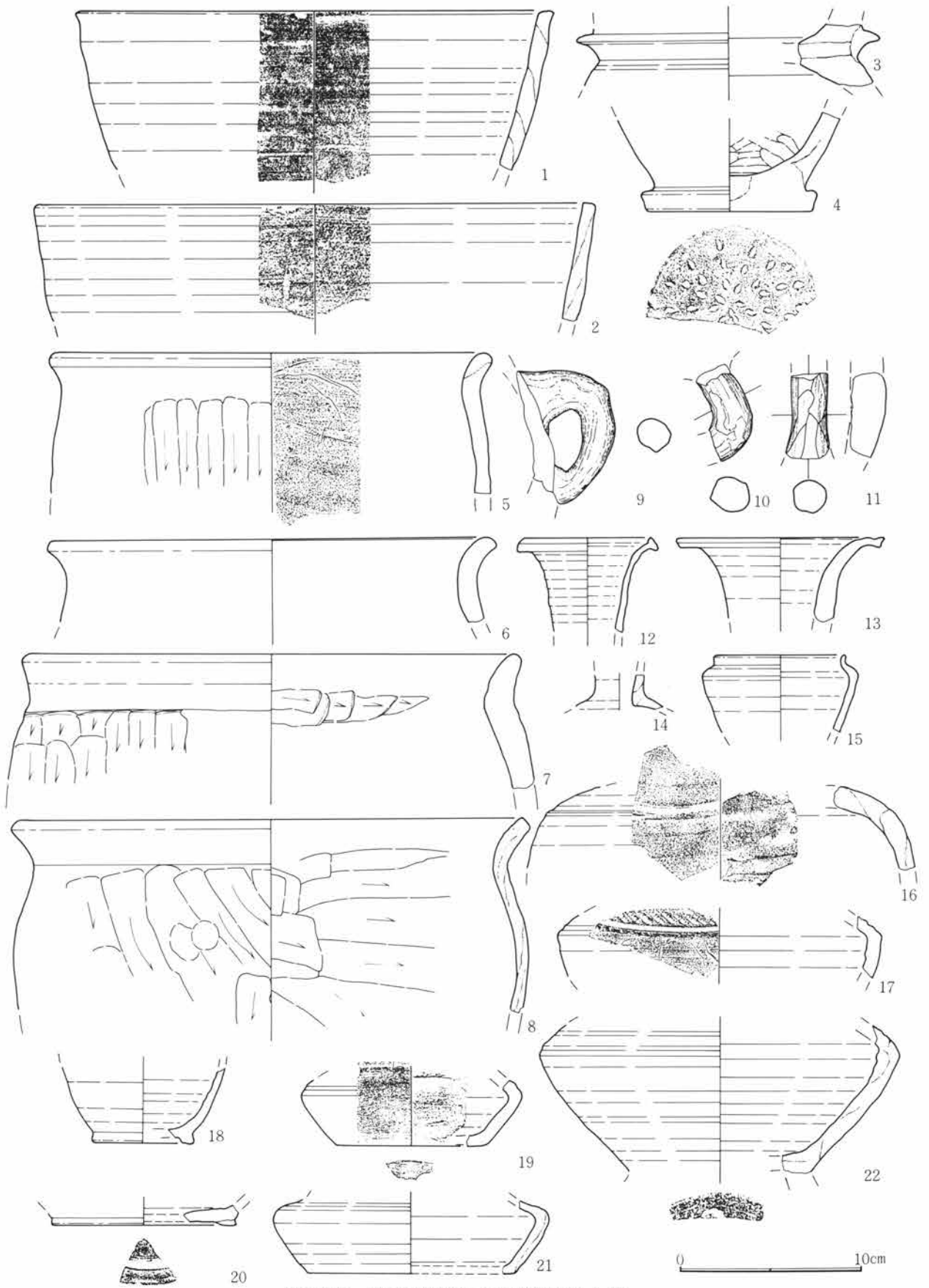
第466図 C区遺構外出土遺物実測図(1)



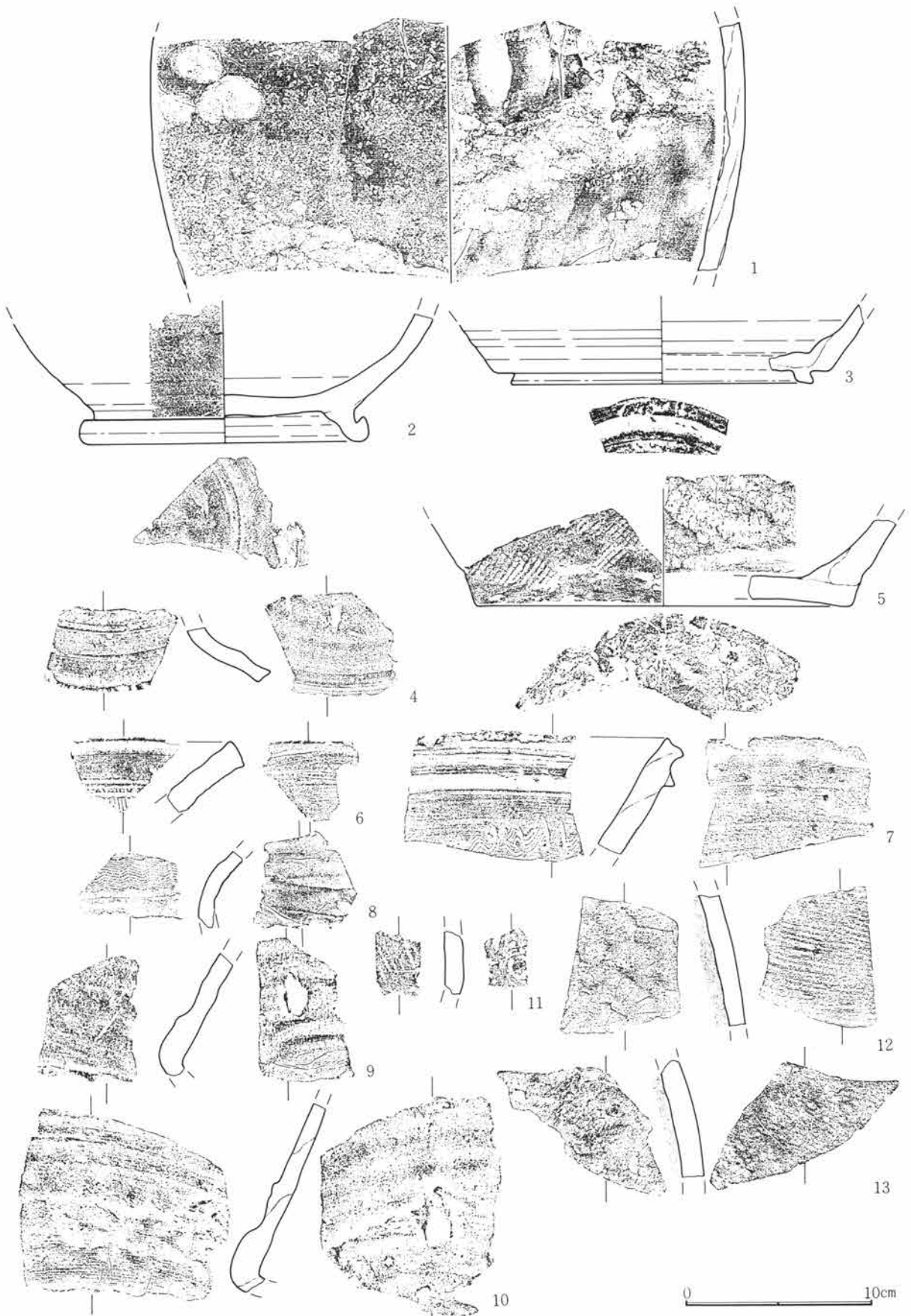
第467図 C区遺構外出土遺物実測図(2)



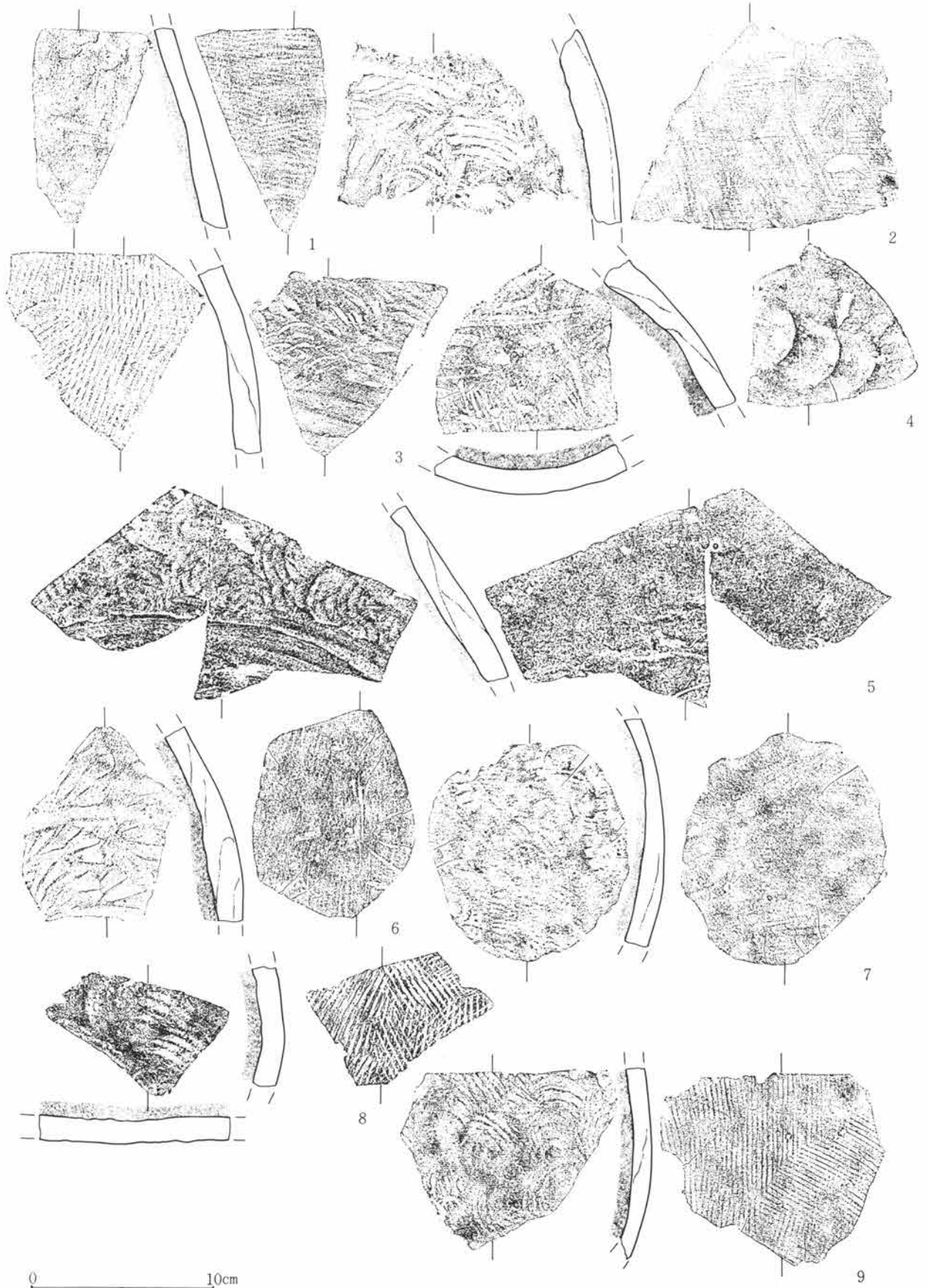
第468図 C区遺構外出土遺物実測図(3)



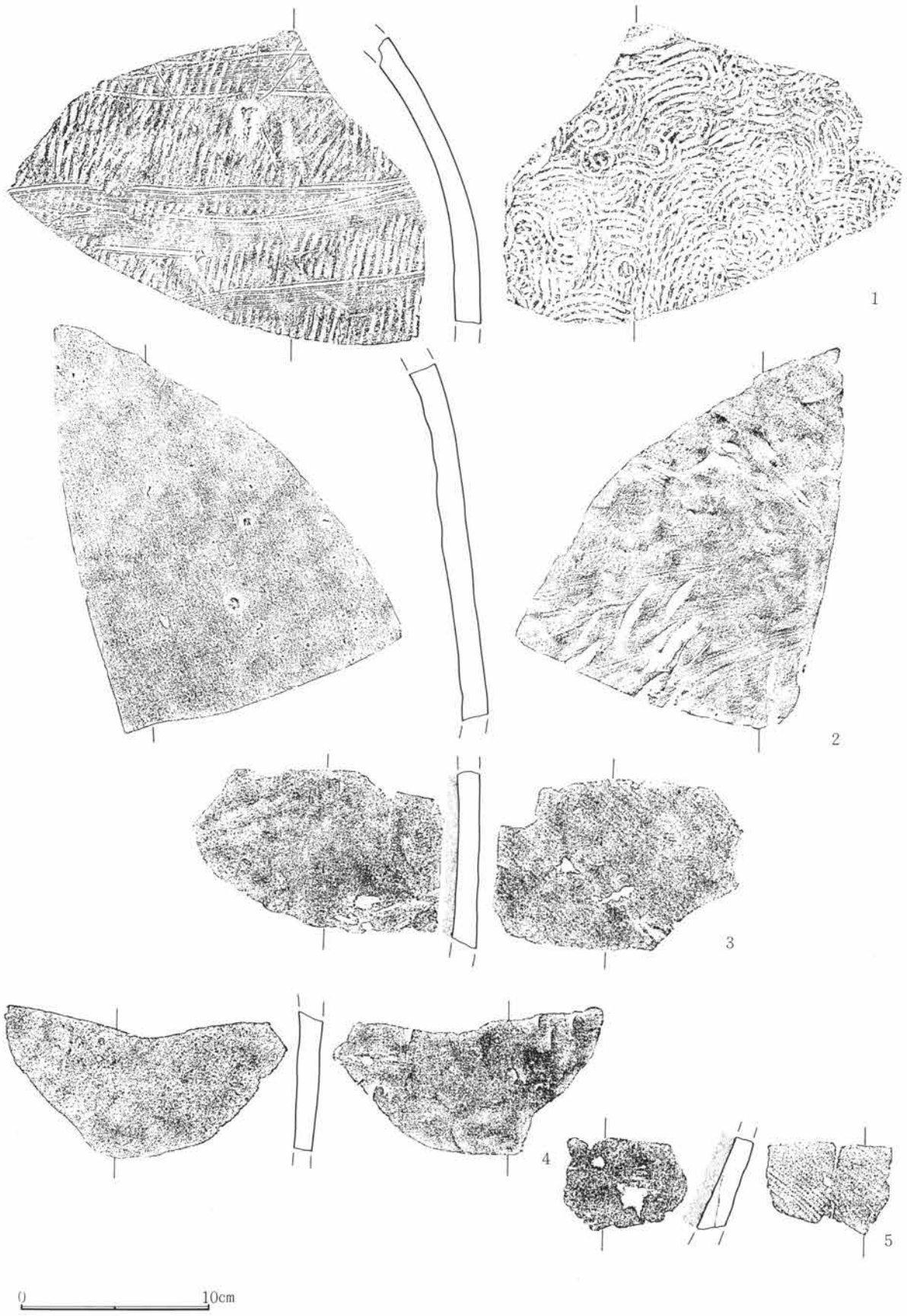
第469図 C区遺構外出土遺物実測図(4)



第470図 C区遺構外出土遺物実測図(5)

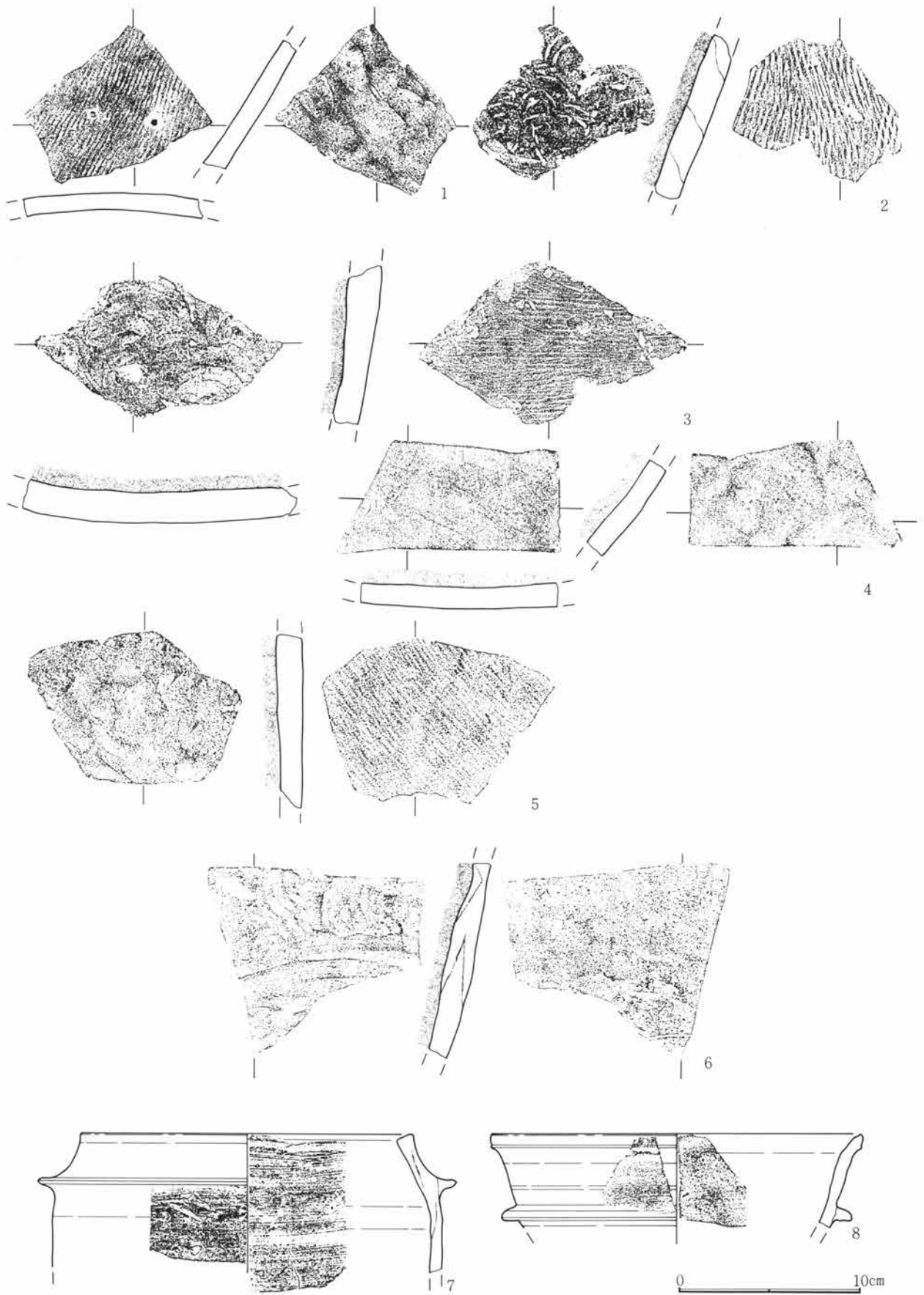


第471図 C区遺構外出土遺物実測図(6)



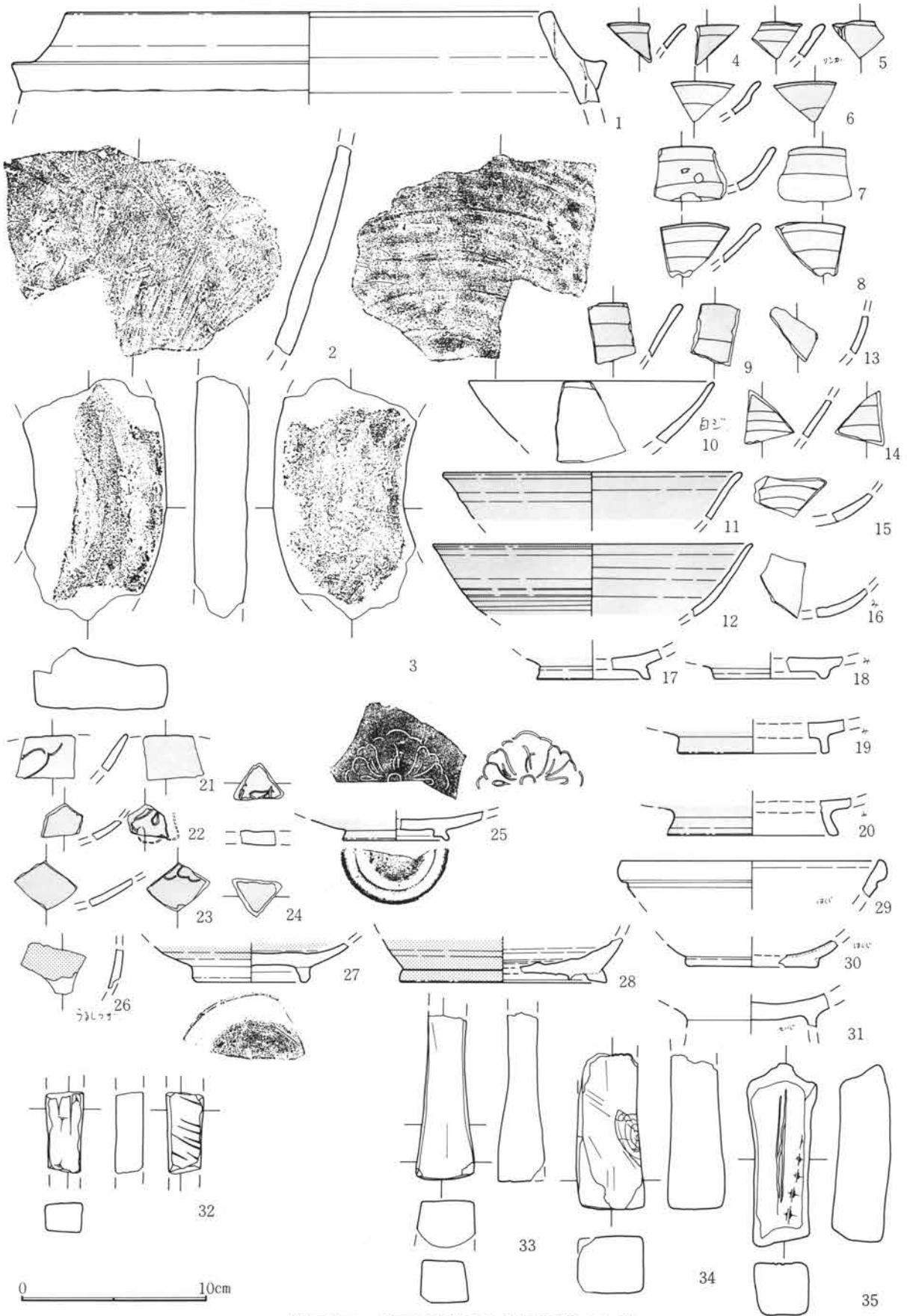
第472図 C区遺構外出土遺物実測図(7)

第4章 検出された遺構・遺物

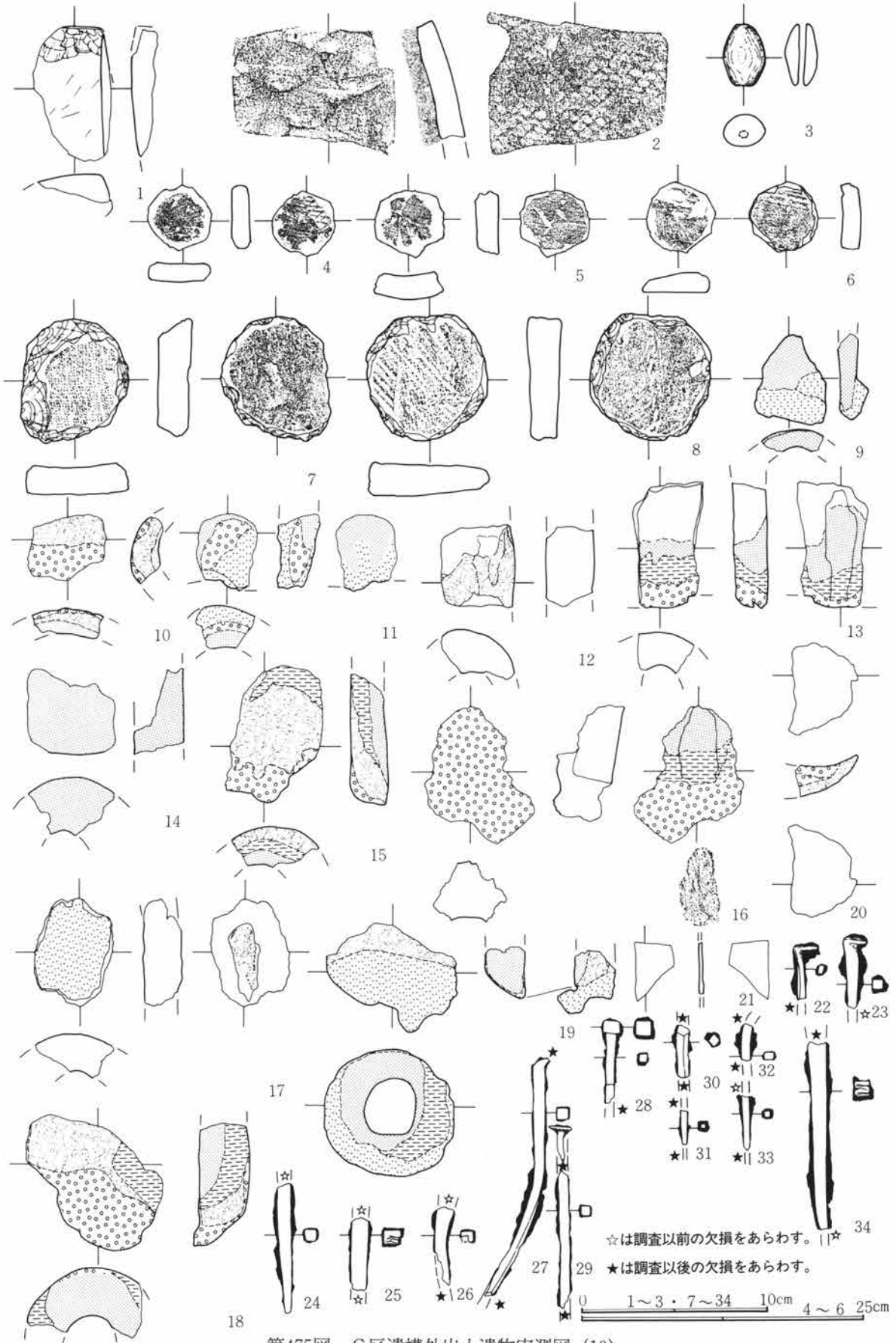


第473図 C区遺構外出土遺物実測図(8)

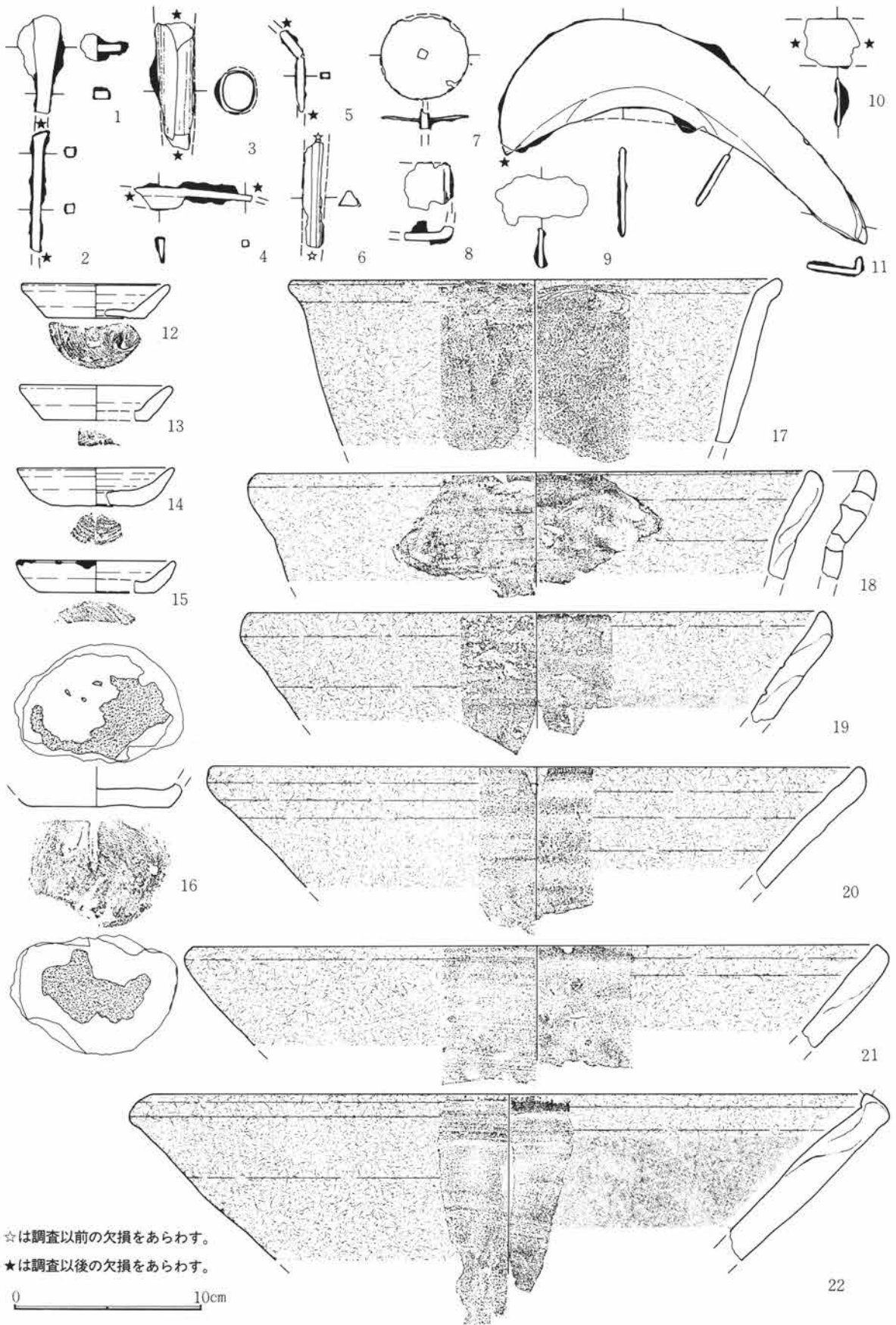
第1節 南側調査区



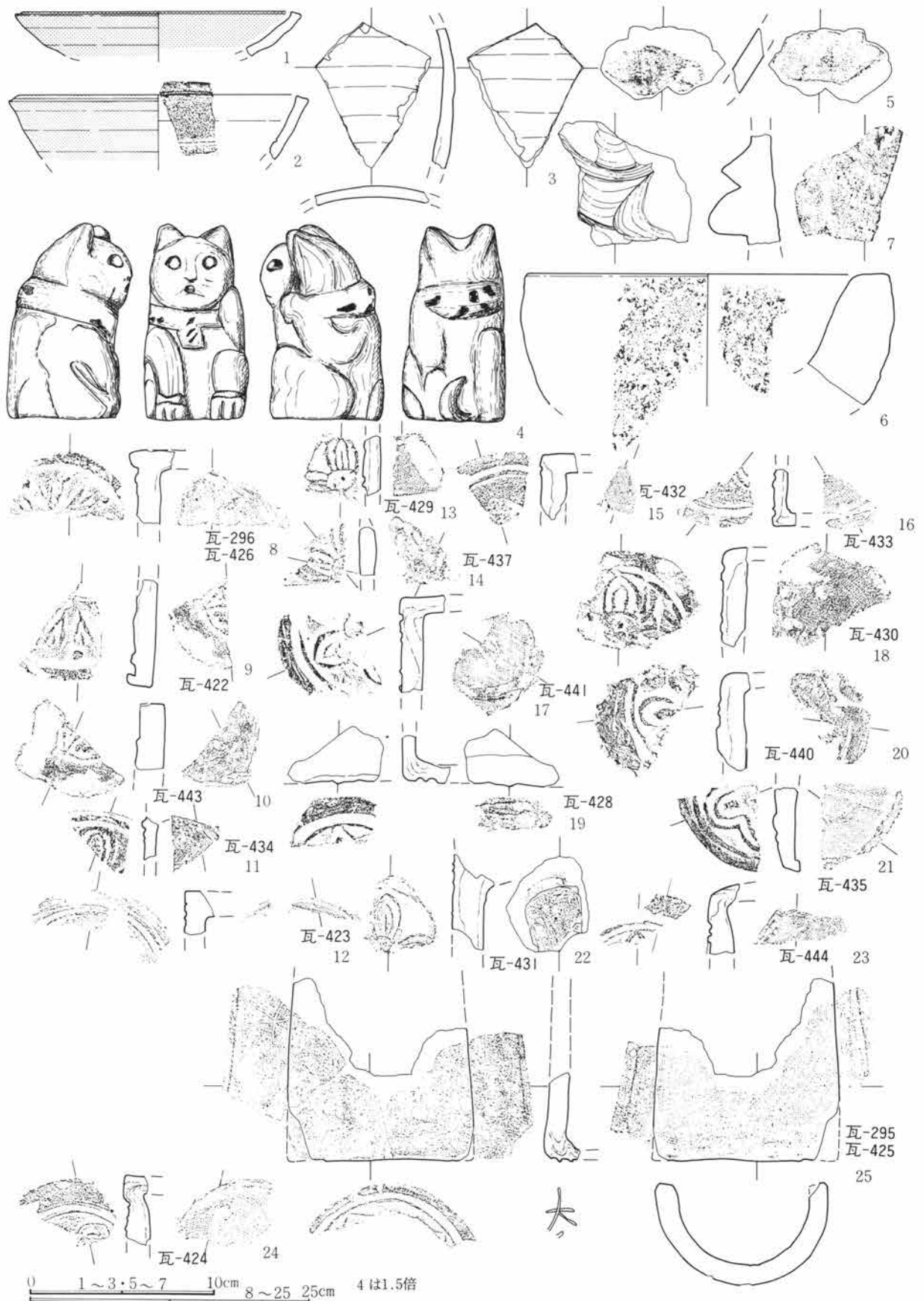
第474図 C区遺構外出土遺物実測図(9)



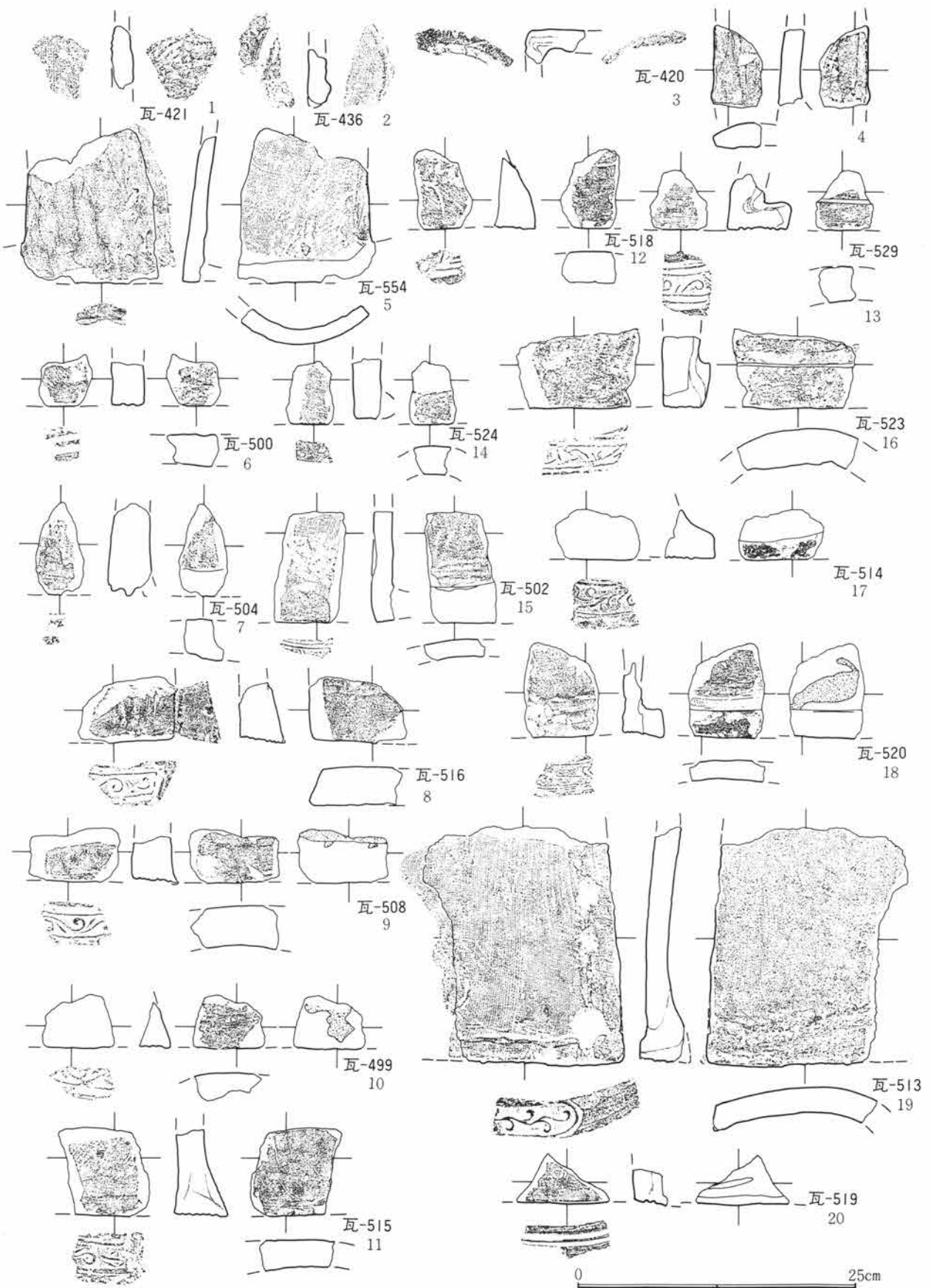
第475図 C区遺構外出土遺物実測図 (10)



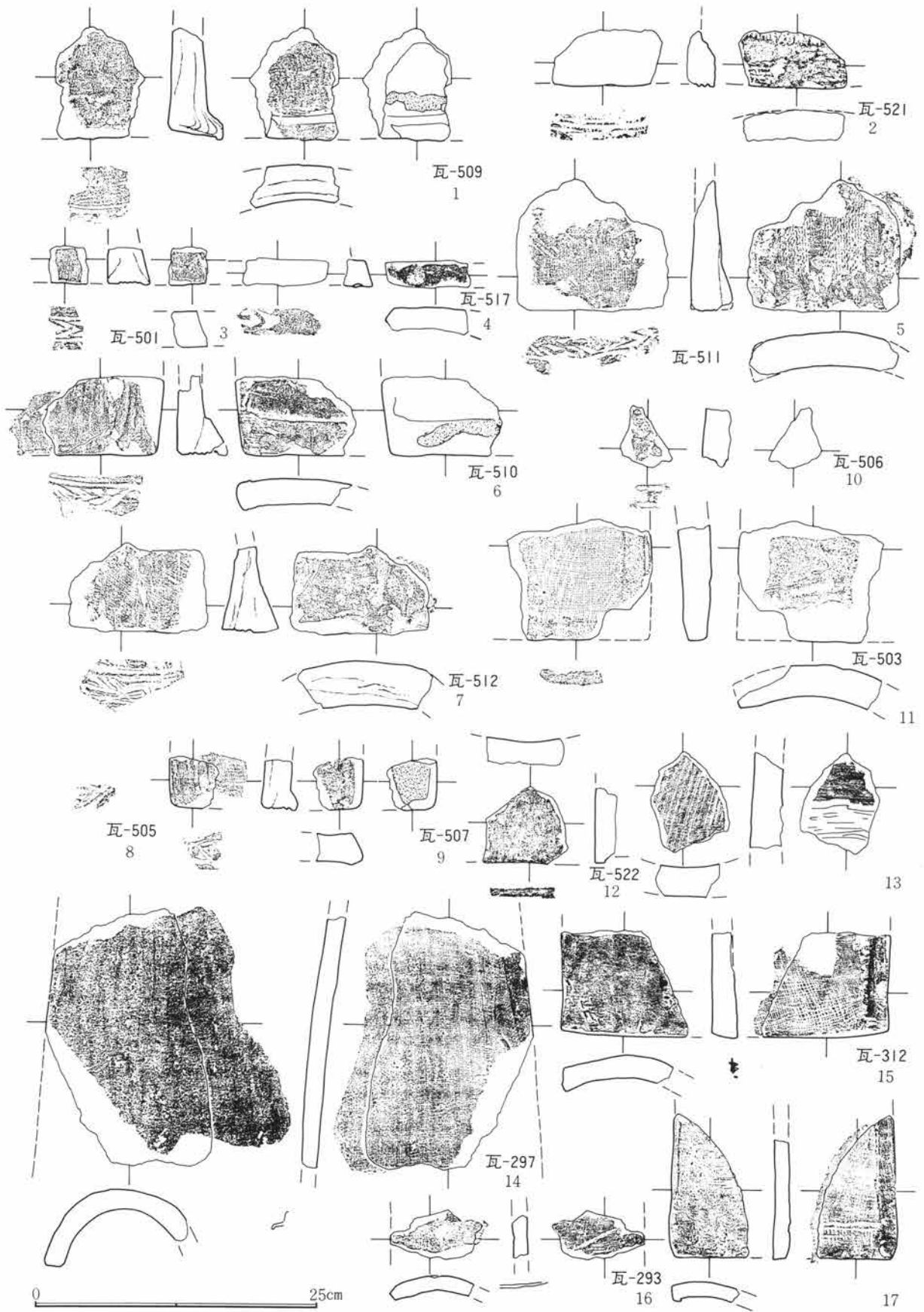
第476図 C区遺構外出土遺物実測図(11)



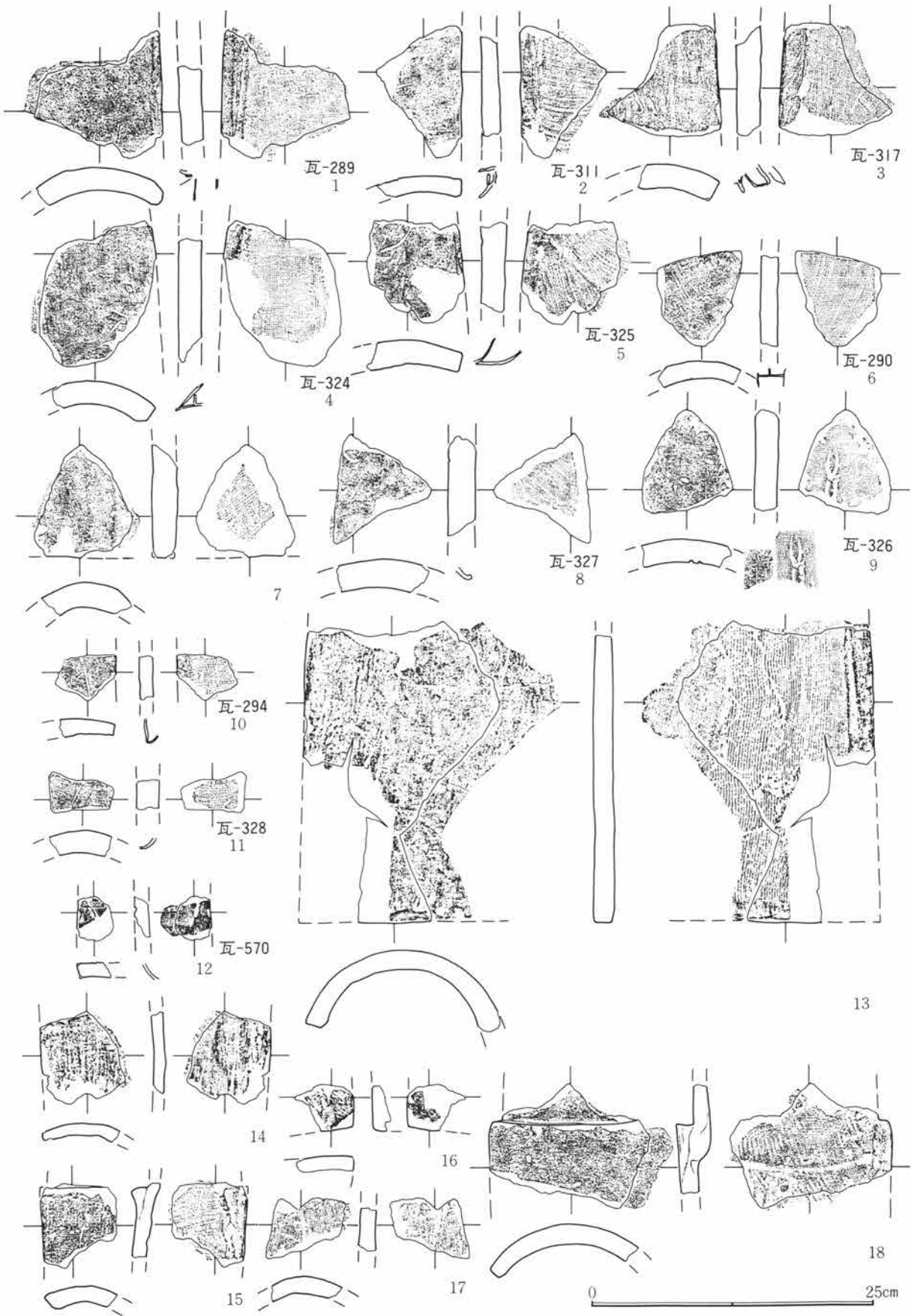
第477図 C区遺構外出土遺物実測図 (12)



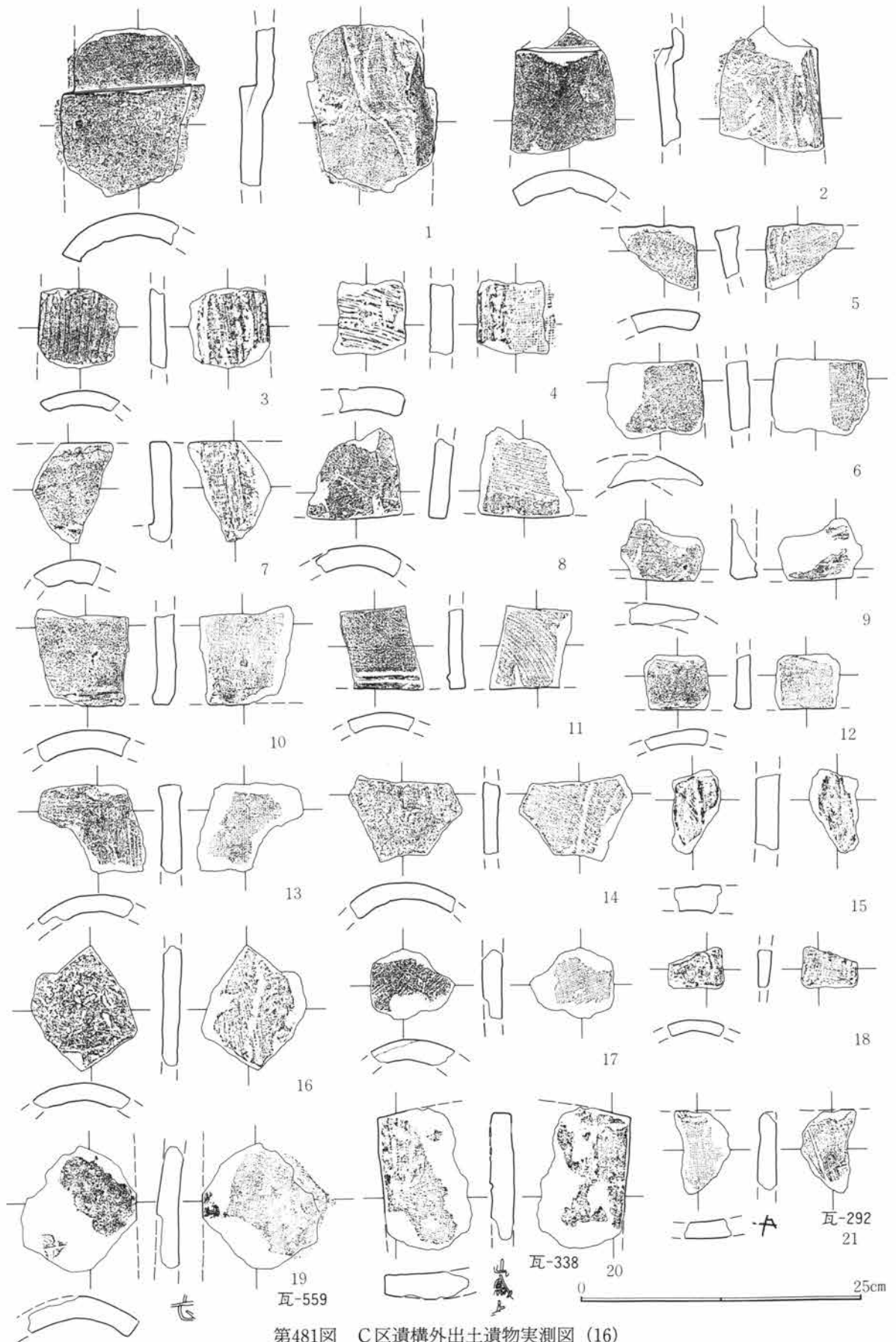
第478図 C区遺構外出土遺物実測図(13)



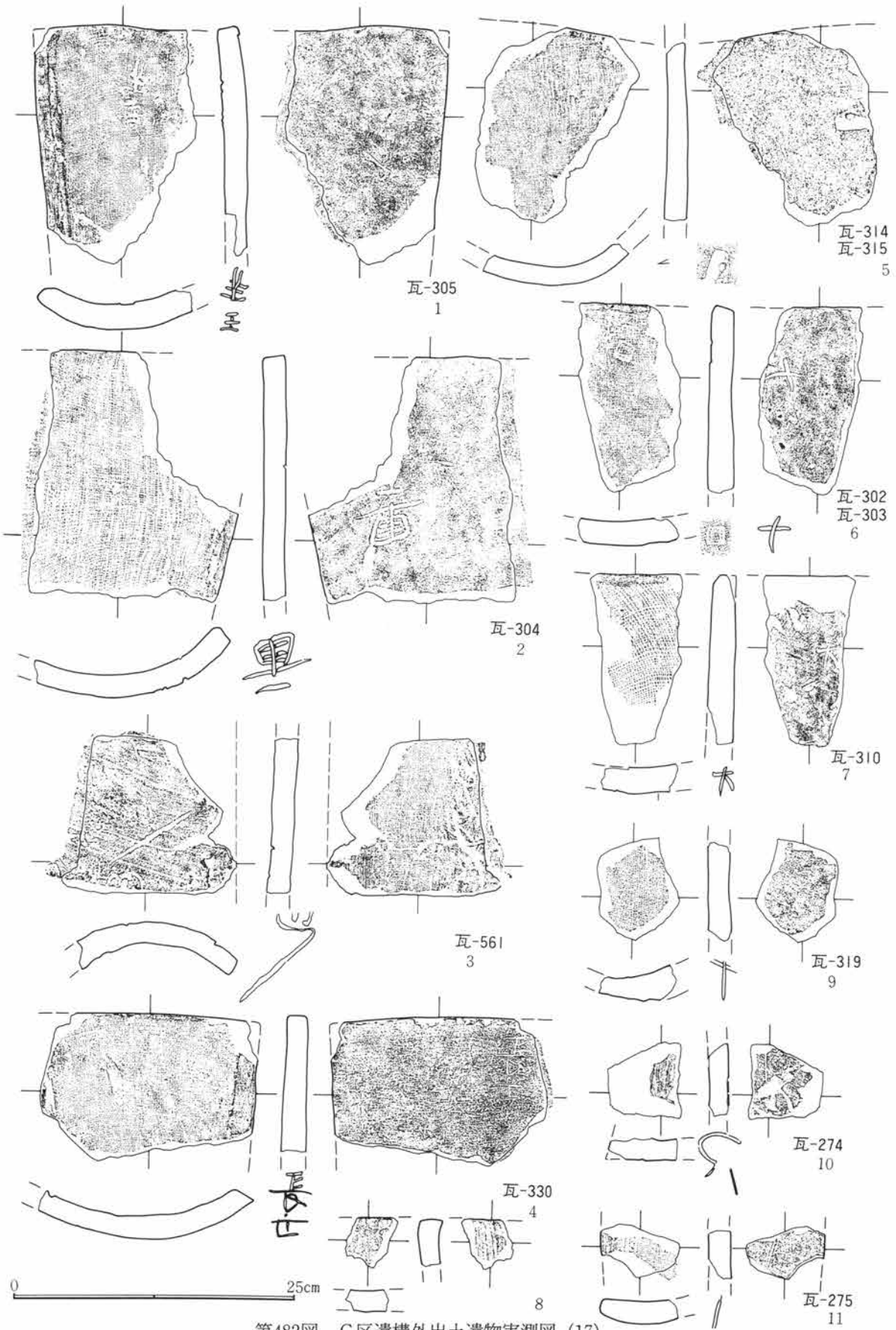
第479図 C区遺構外出土遺物実測図(14)



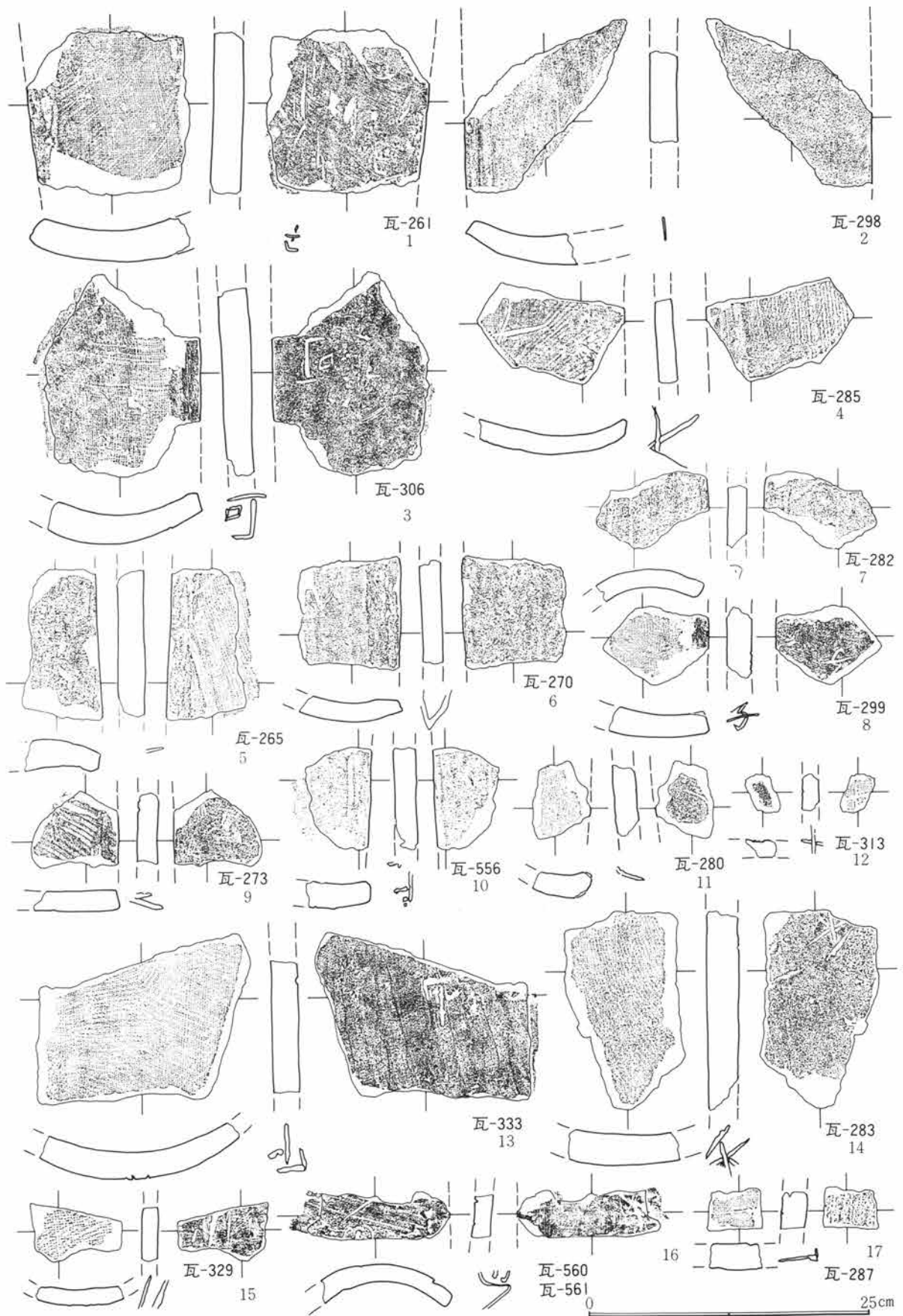
第480図 C区遺構外出土遺物実測図(15)



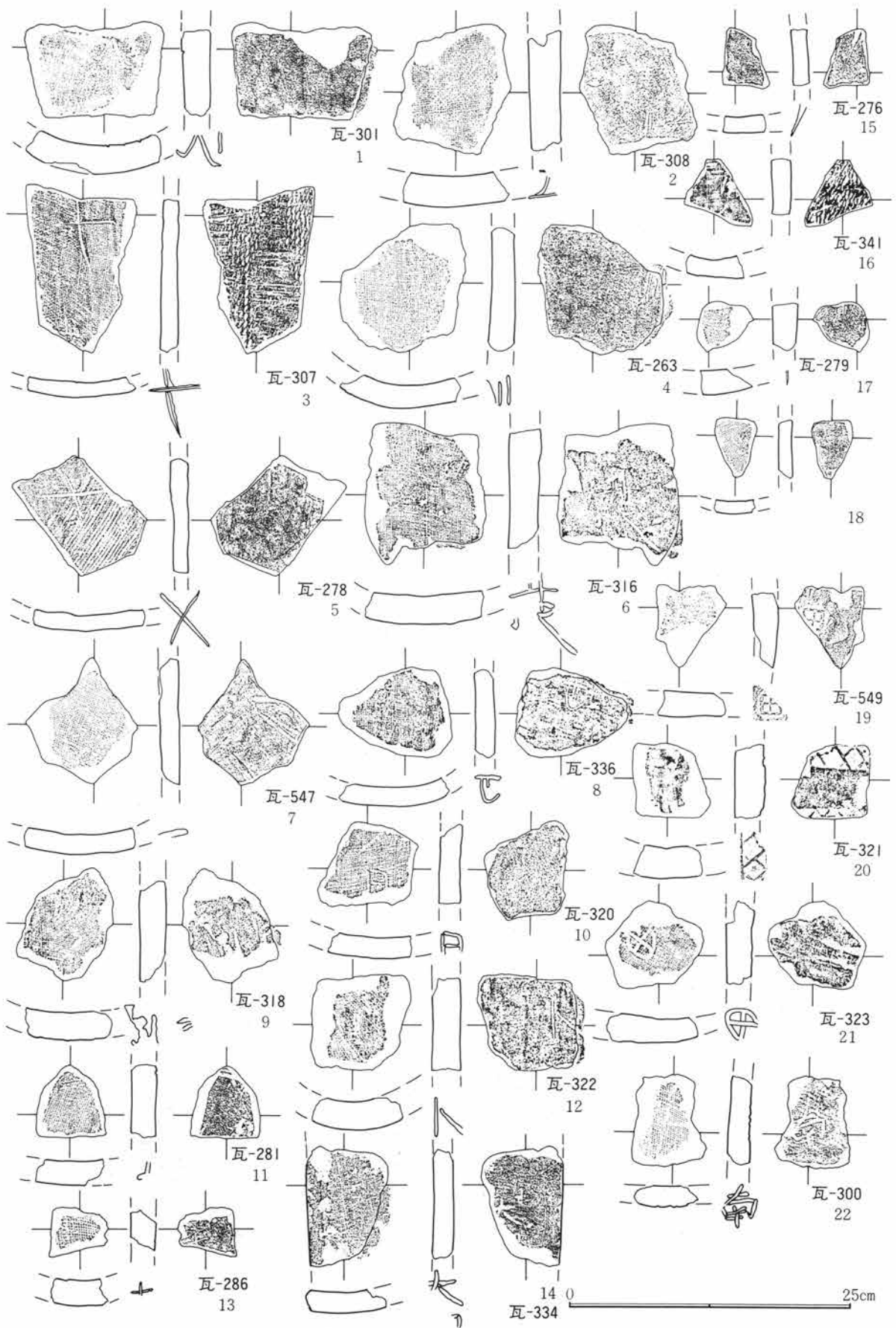
第481図 C区遺構外出土遺物実測図 (16)



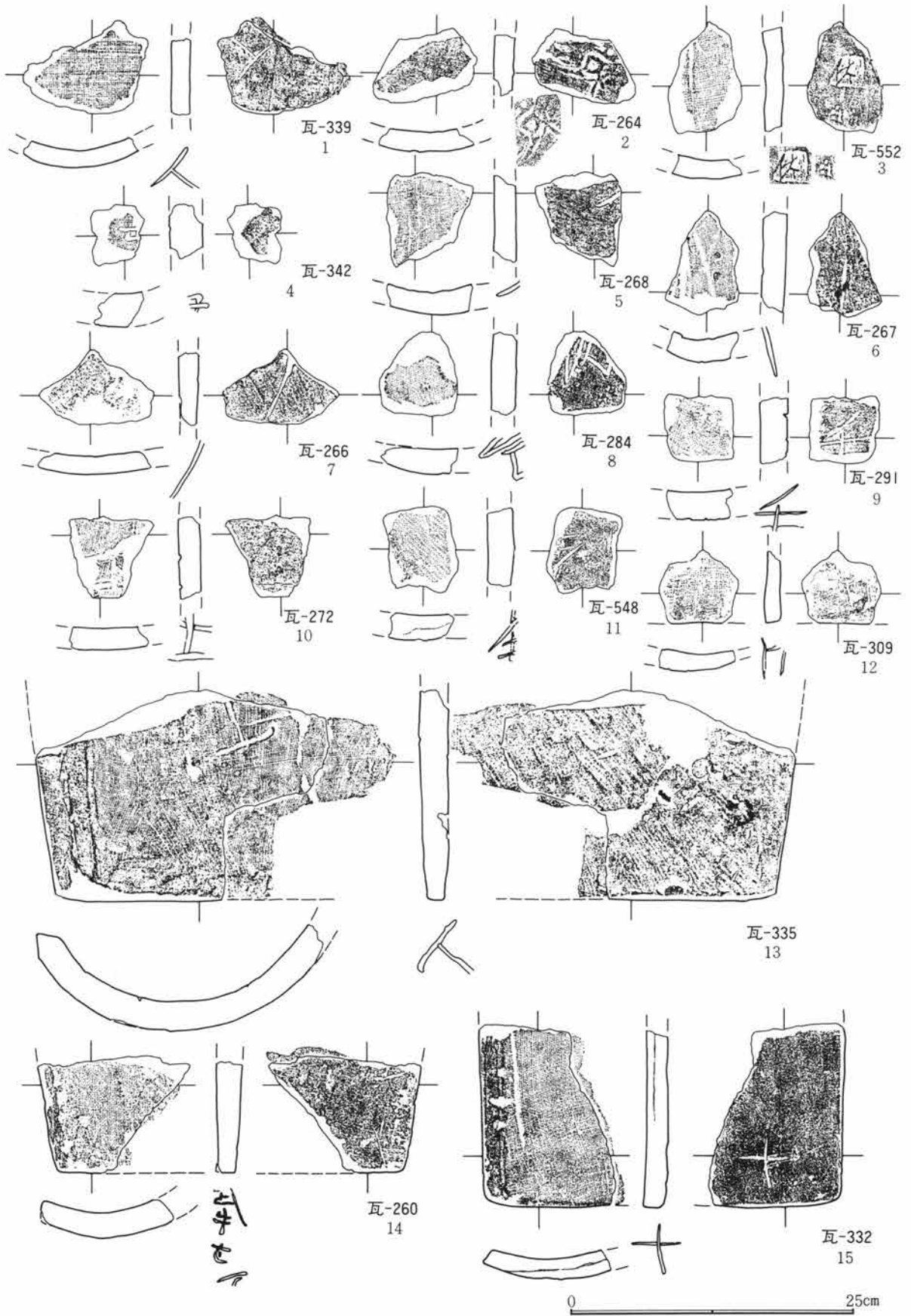
第482図 C区遺構外出土遺物実測図 (17)



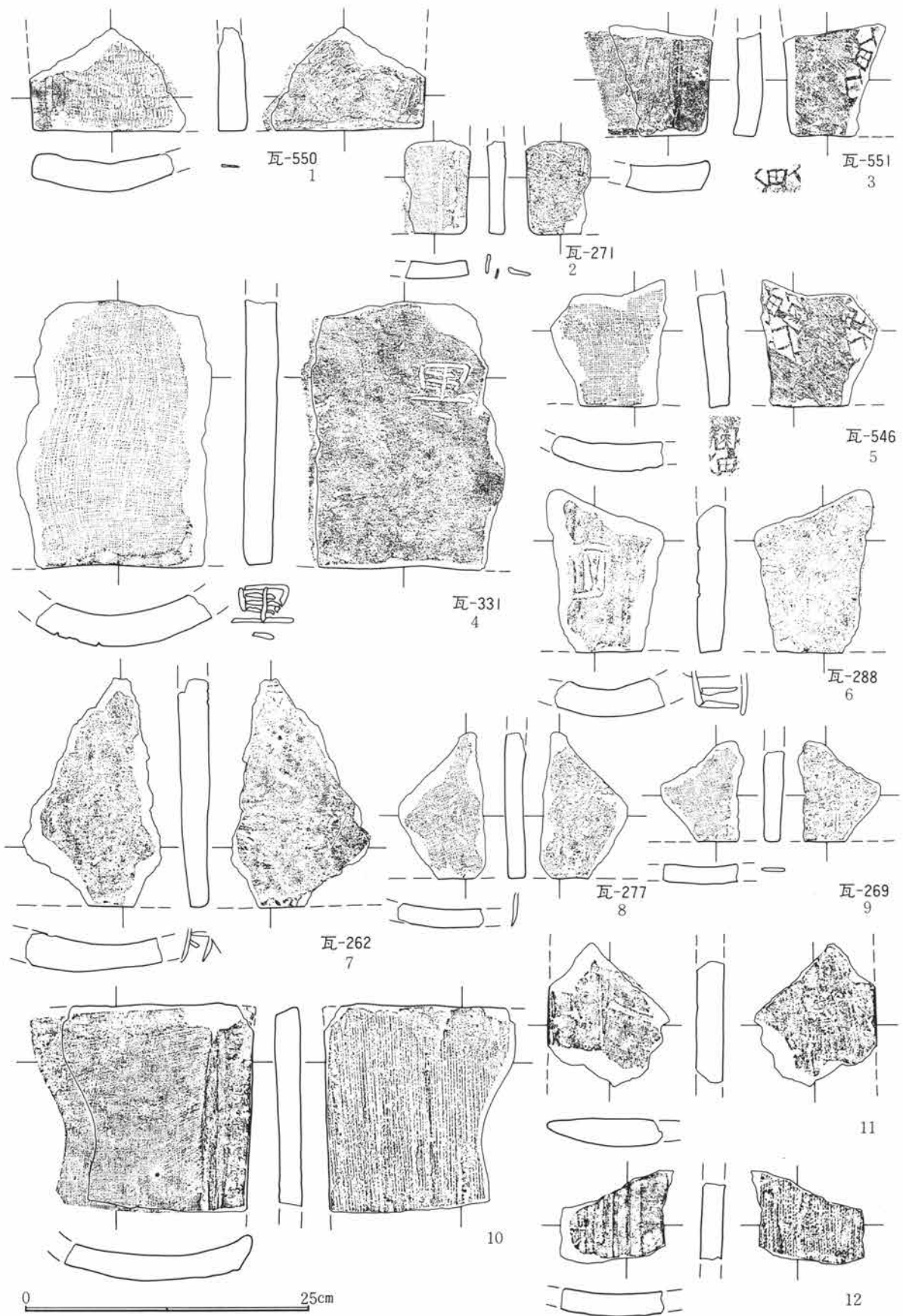
第483図 C区遺構外出土遺物実測図(18)



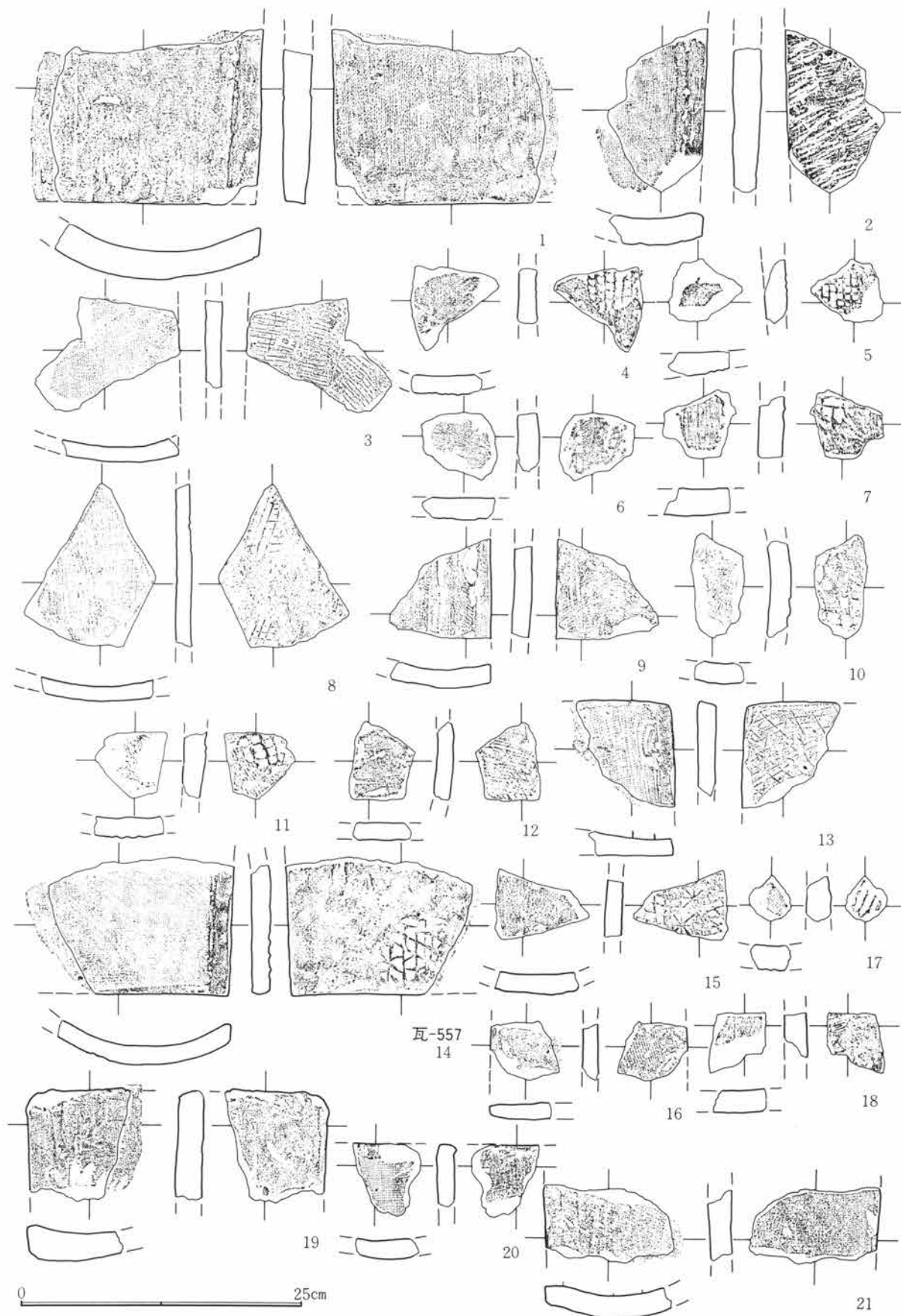
第484図 C区遺構外出土遺物実測図 (19)



第485図 C区遺構外出土遺物実測図 (20)

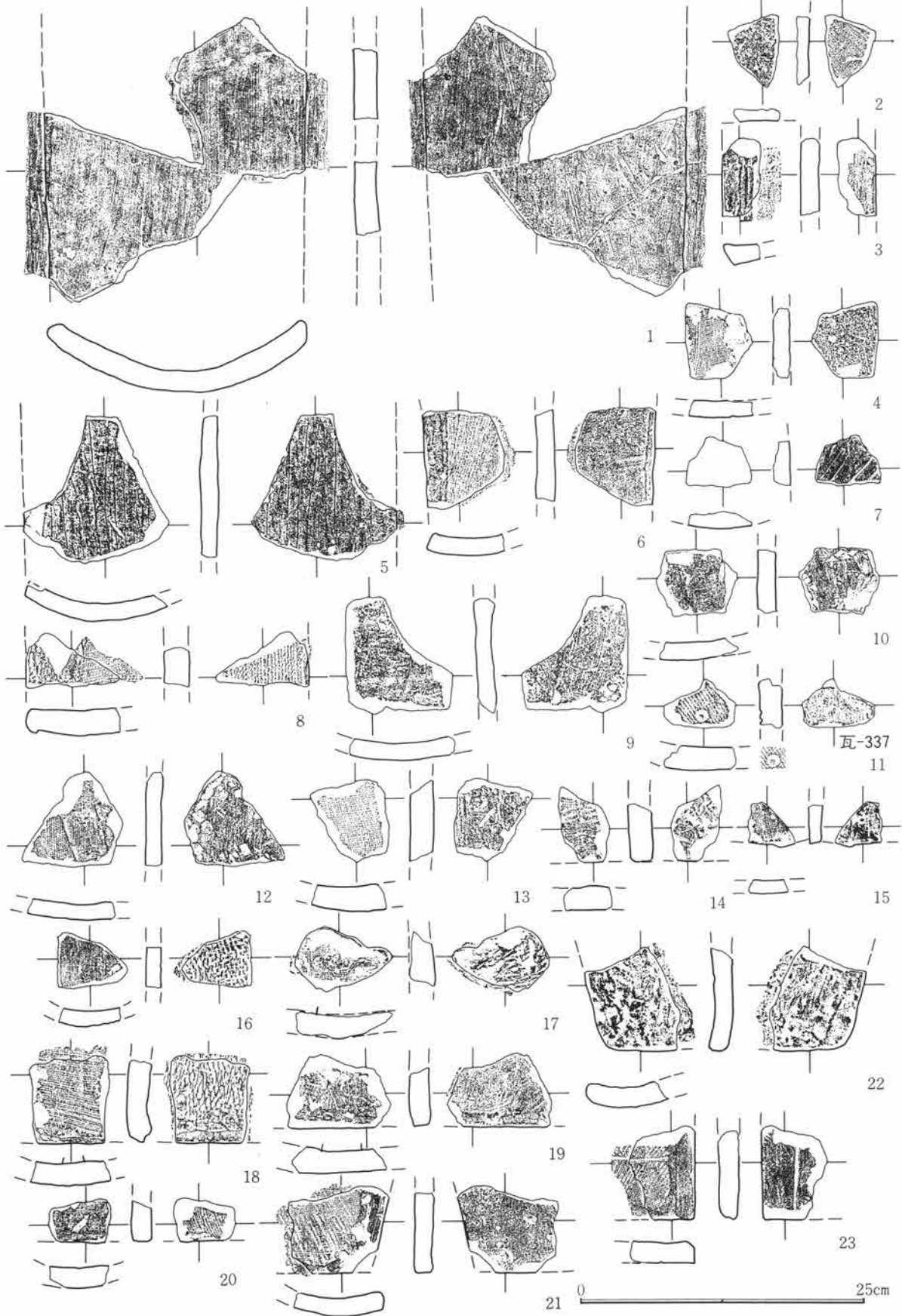


第486図 C区遺構外出土遺物実測図 (21)



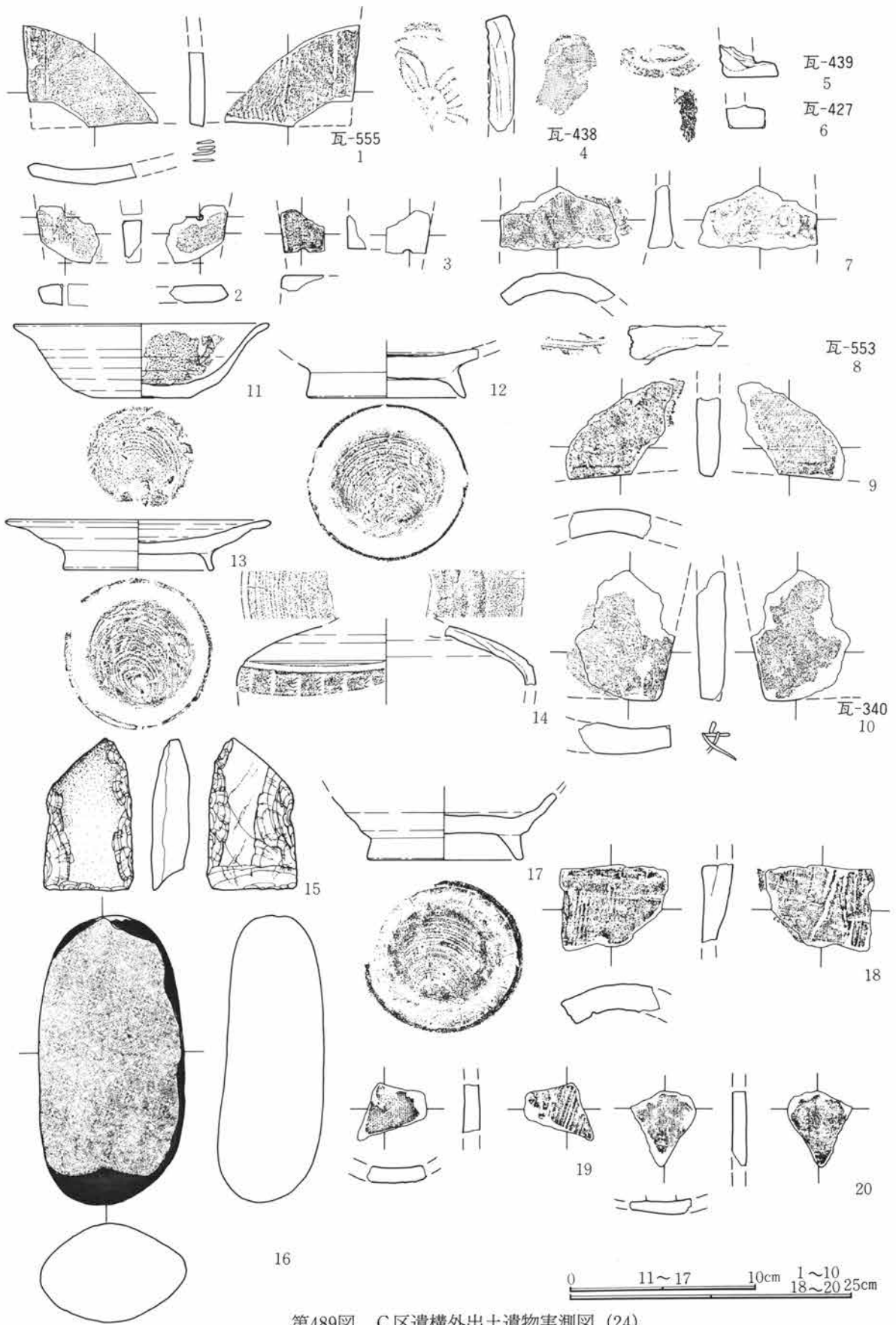
第487図 C区遺構外出土遺物実測図 (22)

第1節 南側調査区

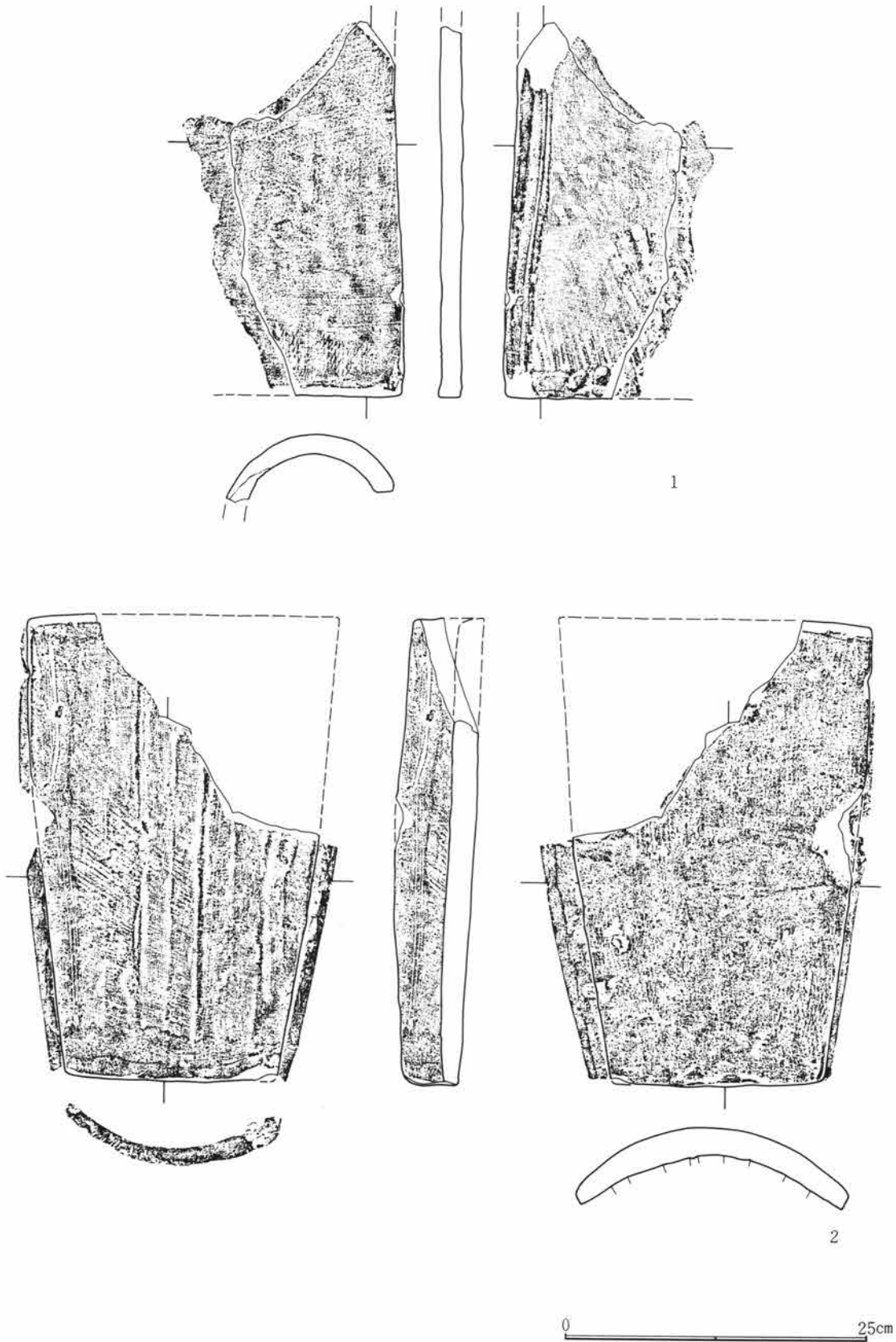


第488図 C区遺構外出土遺物実測図 (23)

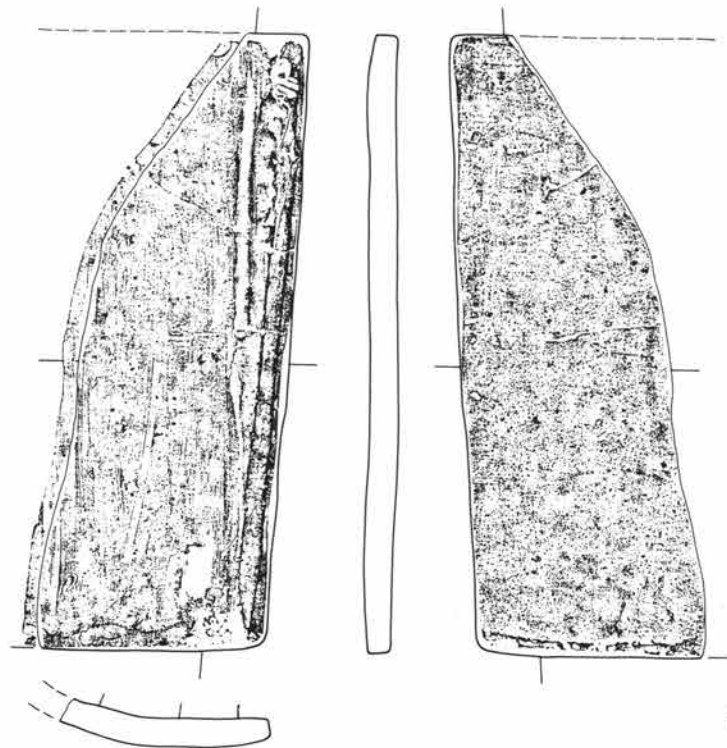
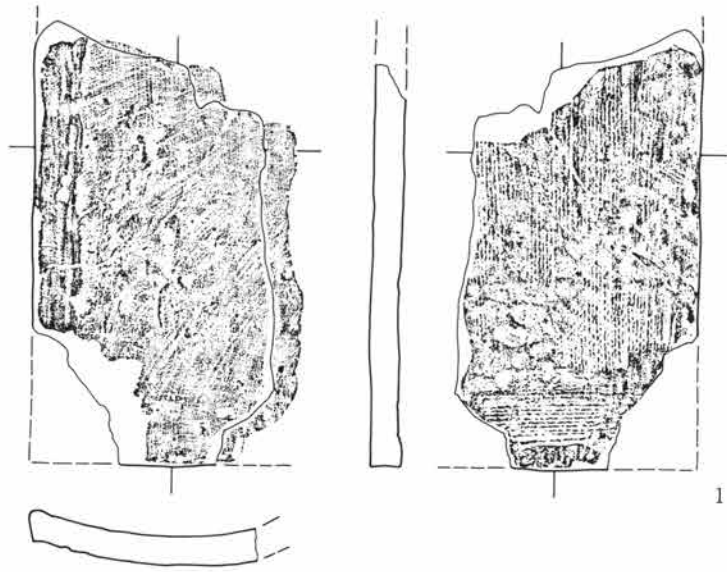
第4章 検出された遺構・遺物



第489図 C区遺構外出土遺物実測図 (24)

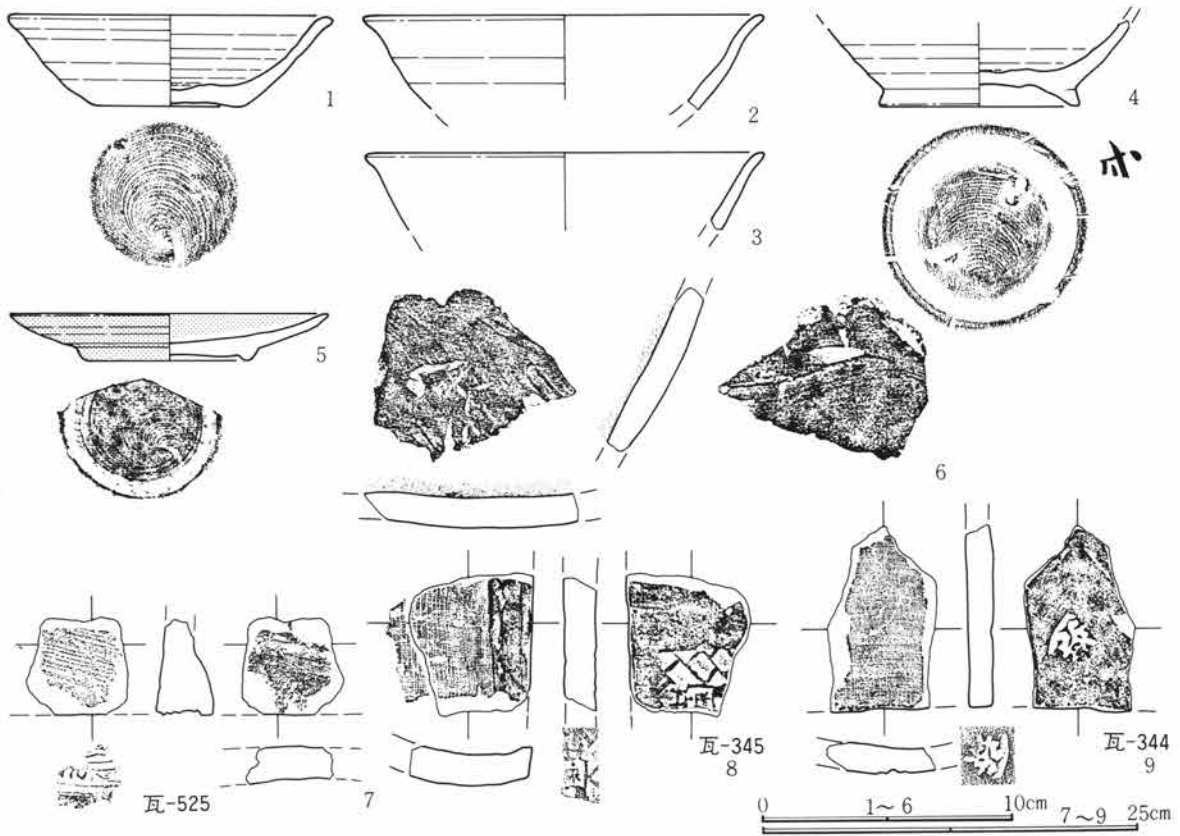


第490図 C区遺構外出土遺物実測図(25)

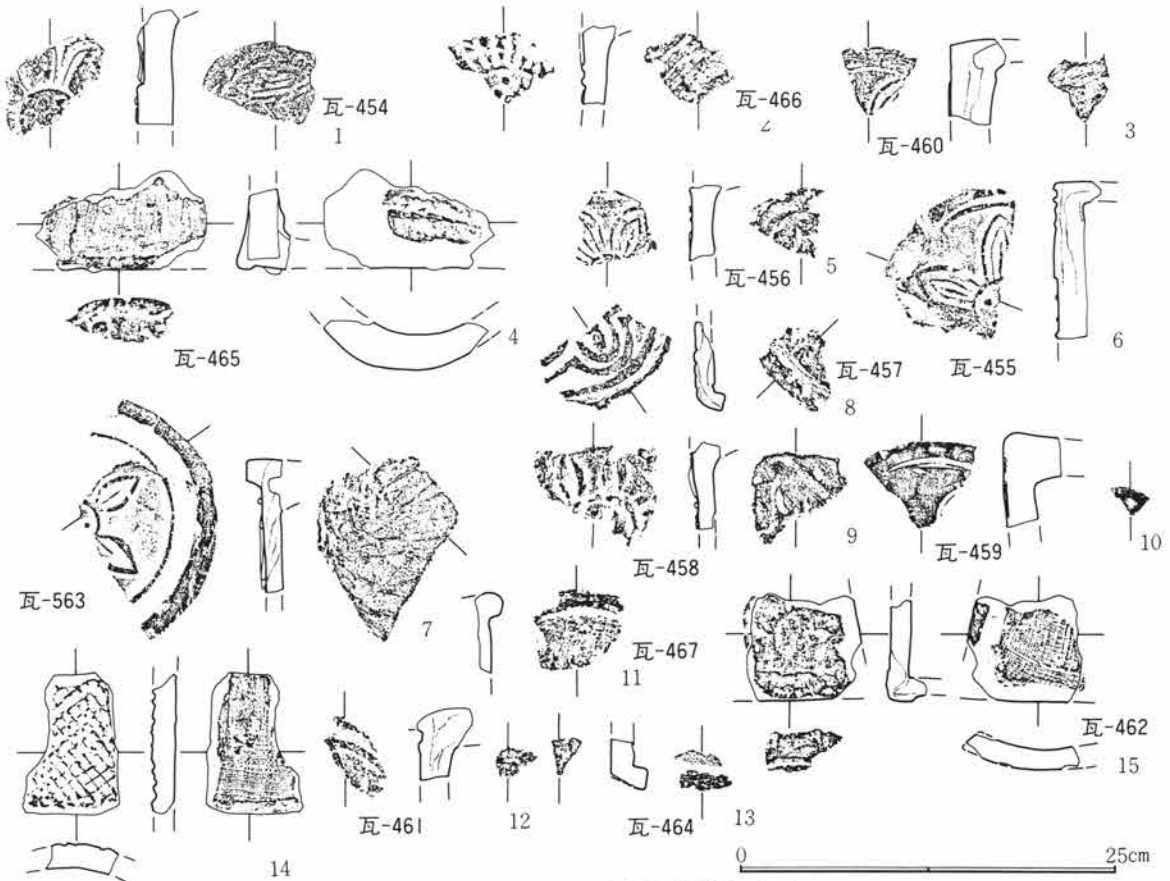


0 25cm

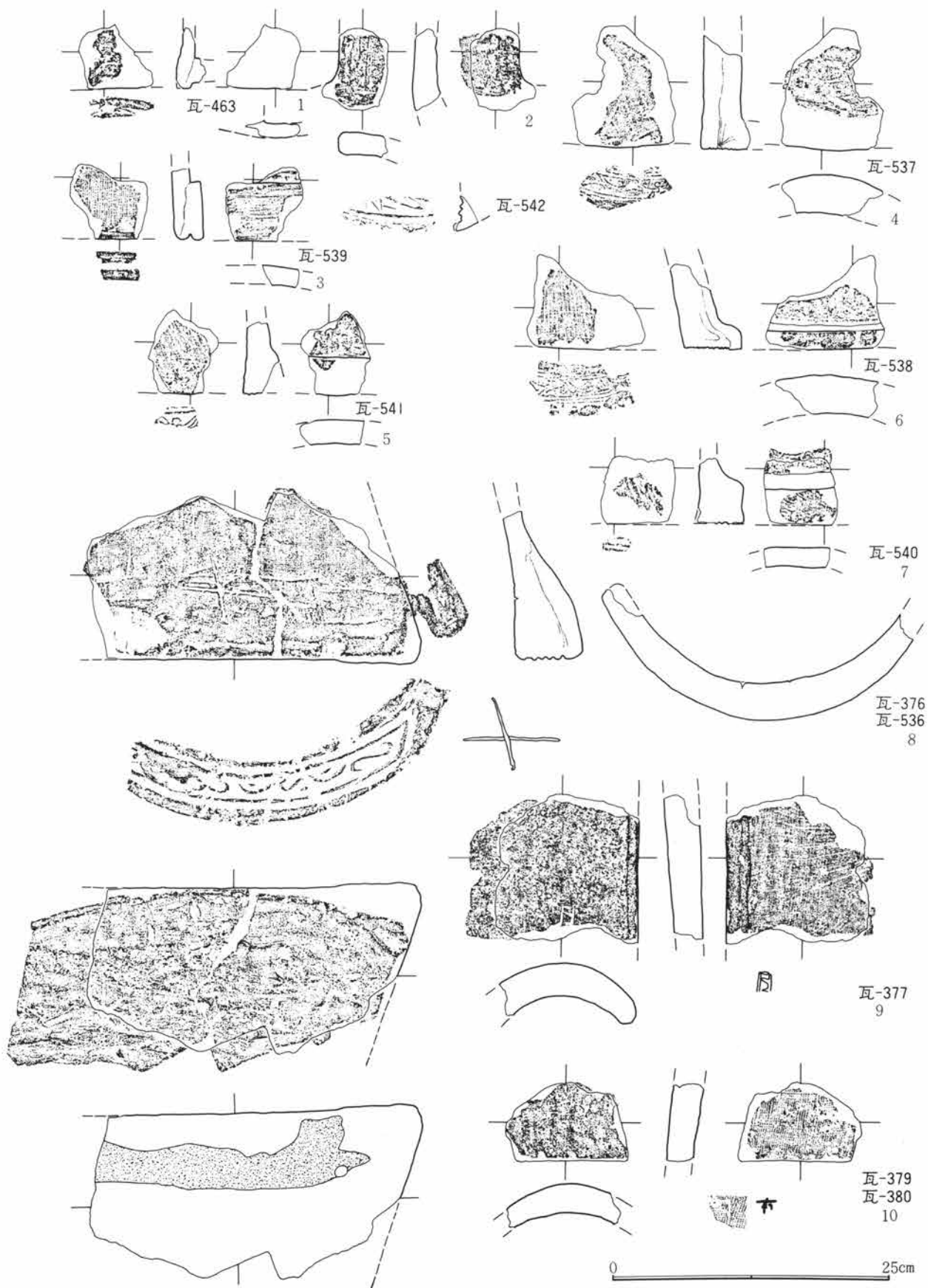
第491図 C区遺構外出土遺物実測図 (26)



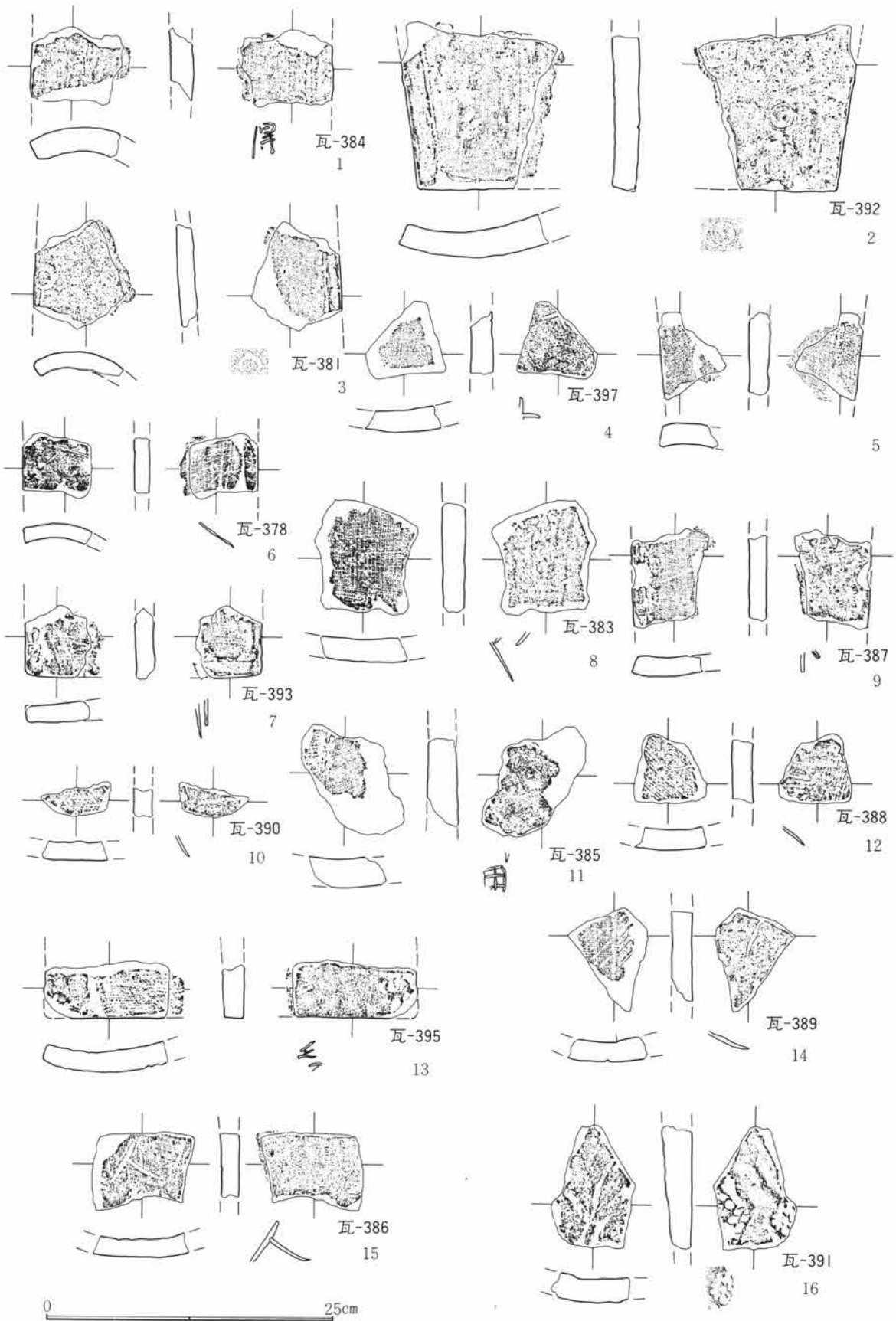
第492図 C区遺構外出土遺物実測図(27)



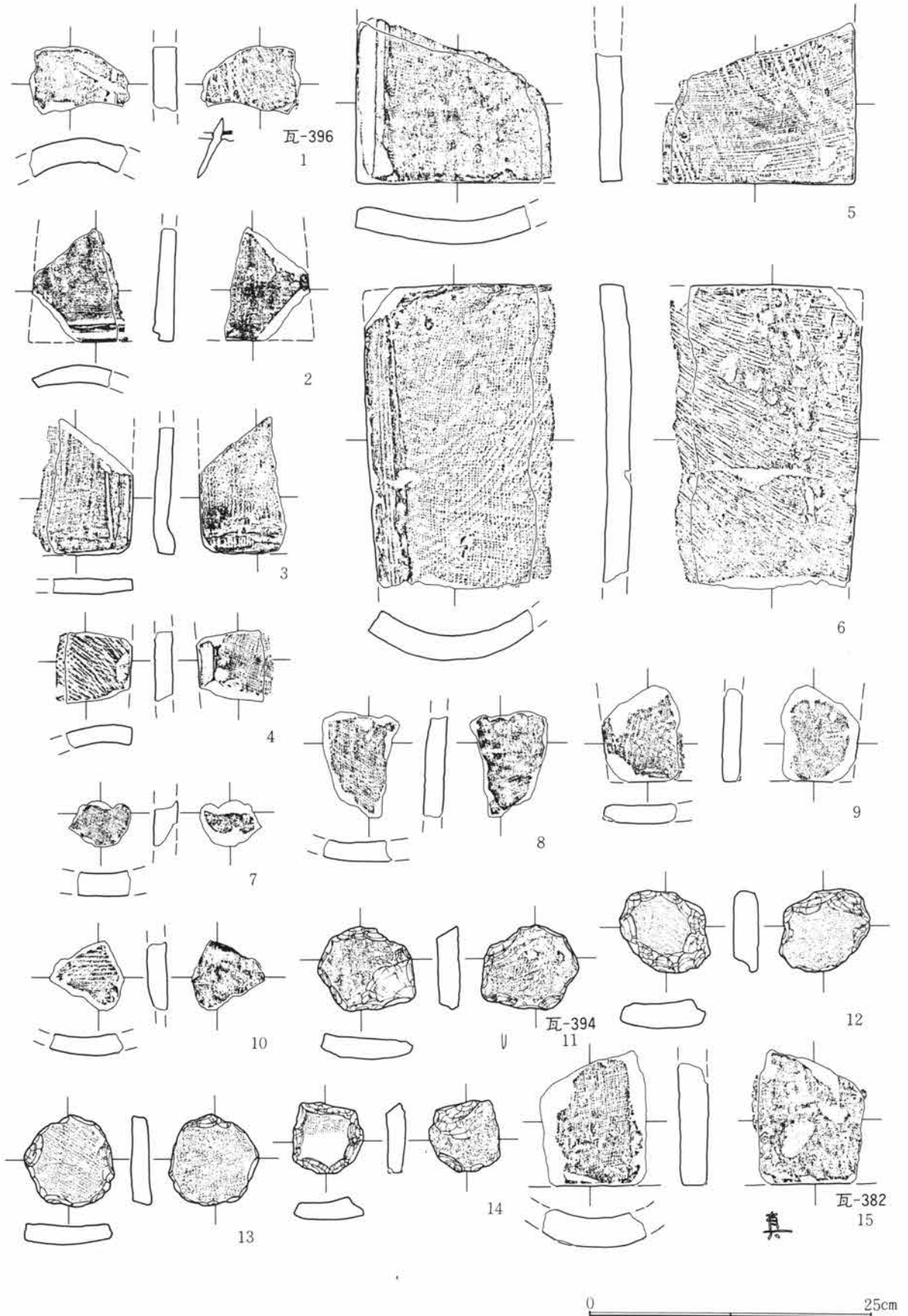
第493図 B区遺構外出土遺物実測図(1)



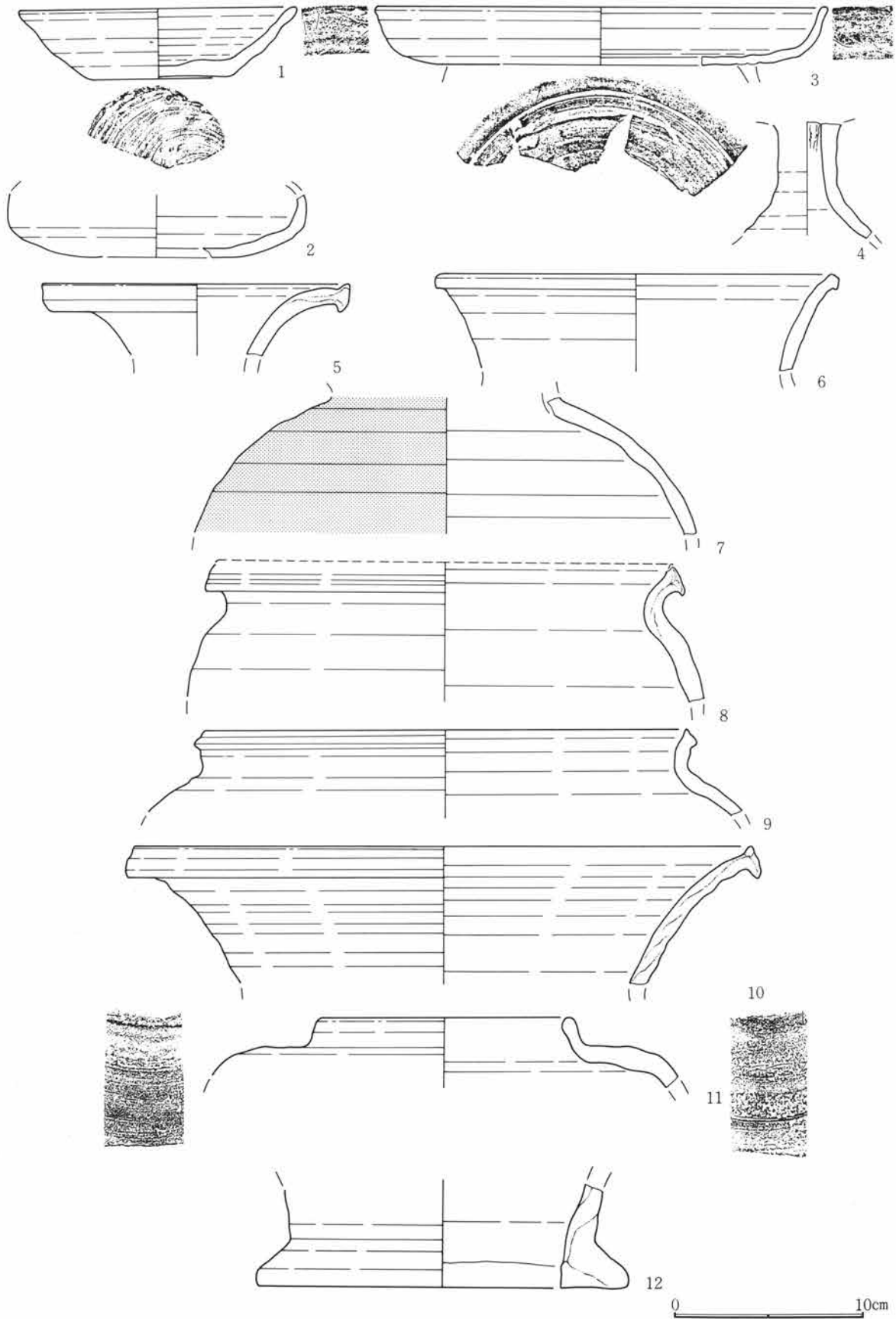
第494図 B区遺構外出土遺物実測図(2)



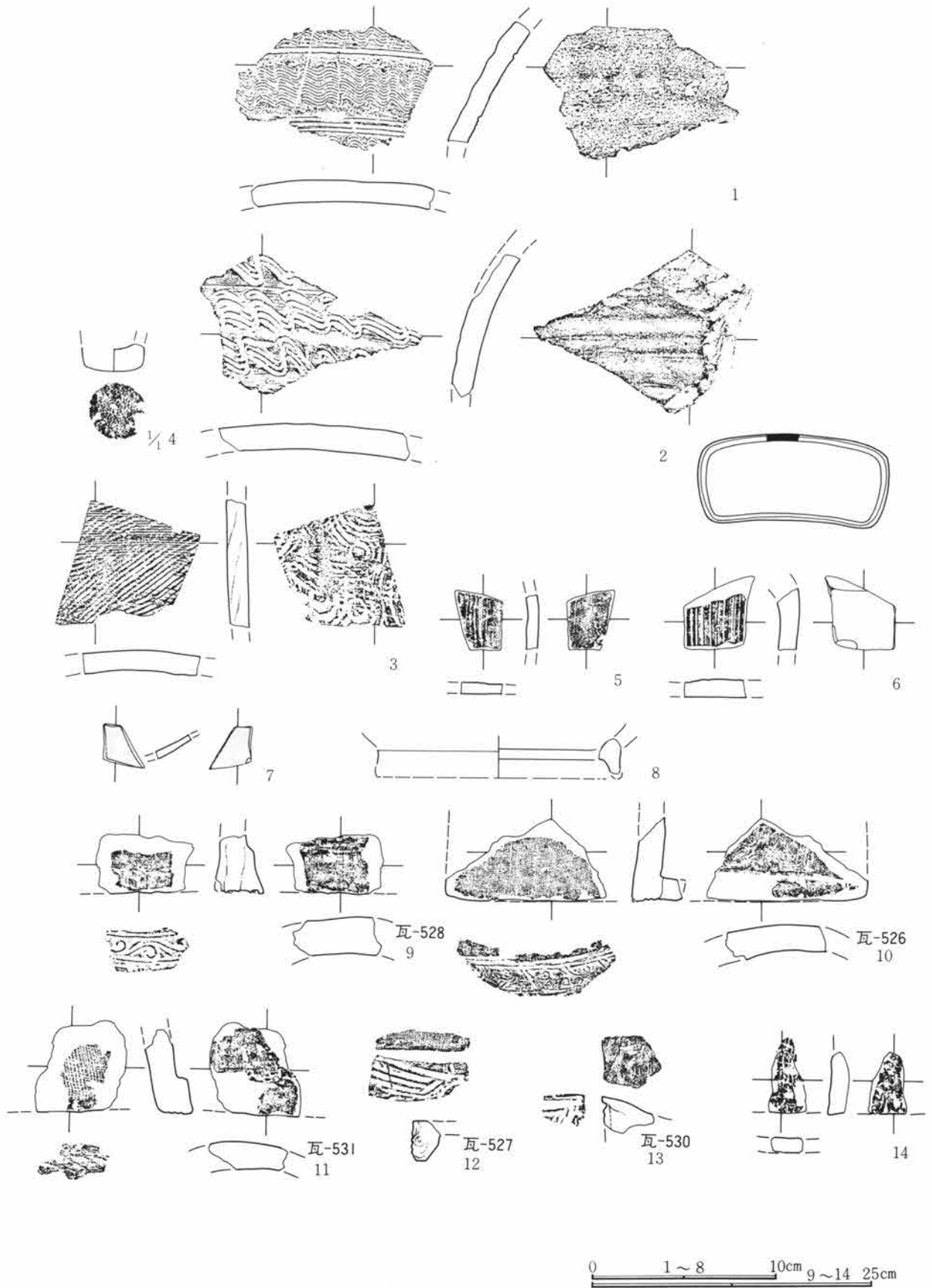
第495図 B区遺構外出土遺物実測図(3)



第496図 B区遺構外出土遺物実測図(4)



第497図 B区遺構外出土遺物実測図(5)



第498図 B区遺構外出土遺物(6)

文字瓦類

文字瓦類は出土した瓦の中から漏なく掲載した。その数は225点でその他を含め合計287点になる。その他のものとは、文字の一部か成・整形時に伴う筥傷等によるものか判断出来得なかったものや、特殊な記号状のものも含めている。又、文字瓦と判断した瓦の中には大半が欠損し一部分が残存するものも含まれている。この中で推定判読可能なもの不可能のものがあり、可能な限り判読を試み、判読出来得たものはその読を右欄に記し、判読出来得なかったものは「判読不能」と記した。

文字瓦には、筥描・刻印の二者がある。筥描文字は183点あり、刻印文字は42点である。この内前者で複数の文字を記すものは26点で、一文字を記すものは67点、文字数不分明は132点である。後者では既出例から推定すると、一文字と二文字の二者があるが三文字以上のものは無い。又、既出例では国分僧寺出土と伝えるものに、下野八幡瓦窯焼造の「国分寺」刻印の文字と同範のものが唯一知られるが、一点のみが国を越えてのことであることから非常に特殊な存在しか扱えず、これ以外では皆無である。

その他の中では記号状のものがあり、一応文字瓦扱いにしたが、その記号が何を示すのか不分明であり、何らかの工具等の先端を押捺するものもある。

上述した筥描・刻印の二者は文字瓦を大きく二分するが、この両者を併記するものが1点ある。この二者併記のものは、孰れも刻印は同じものであり、筥描きされる文字が異なるのみである。

筥描で複数文字を記すものは最高7文字で最低で2文字である。然し、二文字以上のもので破片化しているものは二文字以上筥描された可能性がある。特に、文字間隔の狭い接する状態のものはその該然性が高いと考えられる。

以下の表は、文字瓦類を産地等を加味し示したもので、前刊第3分冊で報告したD区も含んでいる。

瓦当瓦類

当項は、前掲の当種のもものが縮尺1:5であった為、瓦当文様を考求するにあたり、同範関係の認定・細部特徴等が判読出来難いことを考慮し、ここで拓影を1:2で図示し、併せて、既存の遺存状態の良好なものと同範関係の認定出来たものを1:4でその部分が判読出来る様に図示した。尚、瓦番号(ゴチック)は本文中の各図中のものと一致する。

瓦当文を有する鑑瓦・宇瓦類は総数140点が出土しており、内訳は鑑瓦66点・宇瓦74点を数える。この数値には、瓦当部を欠損するもの(譬ば男瓦部分のみが残存する鑑瓦)も含まれている。この瓦当部を欠損するものは本項から除外してある。

出土した瓦当瓦類の様相は、大きく二者に分別され、更に、各々を二者に分類される。前者は、国分寺系瓦意匠と、国分寺系意匠出現以前のものであり、後者は、寺井庵寺(太田市)系の複弁8葉面違鋸齒文蓮華文鑑瓦(所謂「川原寺式」と呼称されるものであるが、型式名上は同じであるものの、中房・蓮弁の肉置等細部では非常に異なっており「川原寺式」とは呼称し得ない。表現とすれば「川原寺式」に意匠の淵源がある。になる)に類似すると考えられるもの与其他複弁系の一括した複弁系である。山王・秋間系鑑瓦(山王・秋間系複弁七葉鑑瓦は大江氏により提唱されたが、これに先行する単弁七葉蓮華文鑑瓦及び、「山王・秋間系複弁七葉鑑瓦」の後出種を指す)の二者がある。前者の国分寺系瓦には、創建段階の新造堂宇の為に焼造された瓦と、後の補修・葺き替え瓦の二者がある。ここで言う「創建段階瓦」とは、国分寺統一創建意匠に意匠上の系列種で、統一創建意匠に類似する意匠のものを指し用いている。

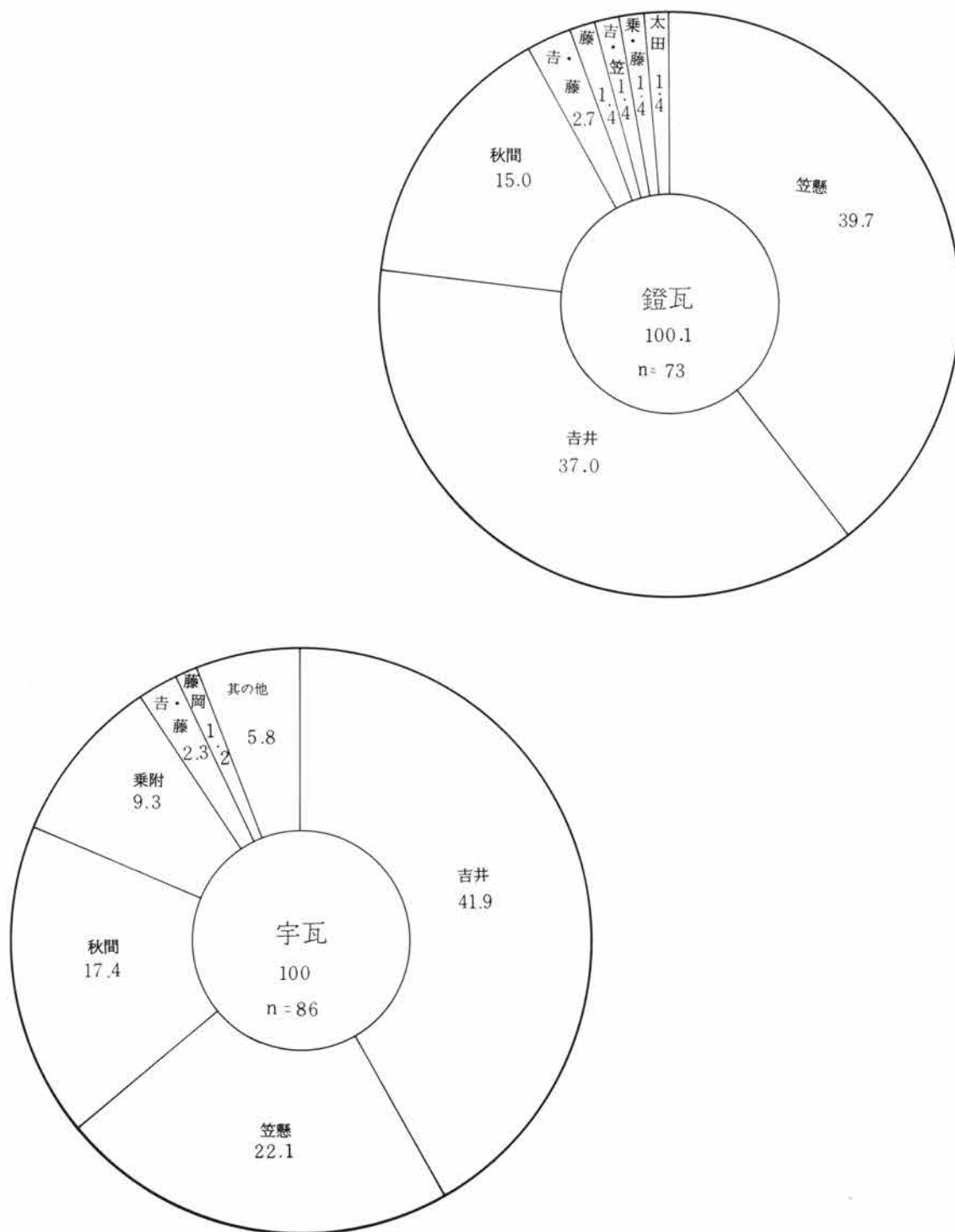
上述した四者の中で前二者は、主として鑑瓦を用いたが、これらの鑑瓦と組瓦とされる宇瓦がある。この前二者に組瓦と宇瓦の瓦当意匠は、重弧文系と考えられるが、一部のものを除きその組瓦は不分明であるこ

第4章 検出された遺構・遺物

とから、これに組瓦と思われる等を含めた重弧文系の宇瓦は別扱いとして一括した。

又、同范関係が認めなかったり、出来得ない手描表出の意匠・細片は項末に一括して掲載した。

次図は鏡瓦・宇瓦を産地別に表わしたもので前刊第3分冊のD区のものも含めている。次項以降の表は当該瓦を一覧にしたものである。



第499図 鏡・宇瓦産地別組成図

第 表 瓦当瓦観察表

瓦No.	出土地	種別	内区・中房・外区	掲載回	焼造地	摘 要
466	B 外	鏡瓦	複弁か。二重蓮子・素文。	493	太田	器面の荒れが著しい。複弁と考えられるが、弁・間弁の区別が出来ない。既出例からは、寺井廃寺の創建意匠である面連鋸歯文複弁蓮華文と考えられるが、同範認定は出来なかった。
413	C142住	鏡瓦	複弁4葉蓮華文・環状中房・素文	288	吉井・藤岡	弁・子葉は沈線刻りされている。類例は少なく、類例は僧寺既出のものを合成させたものである。組み瓦は不分明。
454	B 外	鏡瓦	単弁8葉蓮華文・1+6・素文。	493	秋間	放光寺跡(山王廃寺)の創建意匠群中最古に擬せられる意匠で、後出型は複弁7葉となる。この8葉のものは、上植木・金井廃寺の単弁8葉と比較すると、肉置きがやや浅く、間弁が独立している点等から、上植木・金井単弁8葉より後出するものと考えられる。組瓦は重弧文。
404	C22住	鏡瓦	複弁7葉蓮華文・殊点中房・素文	67	秋間	中心に殊点中房を配する点は、国分寺系瓦に認められる。又、弁間の殊点文は、均整がとれていない為、弁間に施されるものは、7つの中の5つであり、2ヶ所はずれており、同様に弁自体も中房からはずれた形で配されている。 瓦405・410は、同範と考えられるが、部位の認定は出来なかった。 既出例は放光寺跡に多く、国府政庁部分でもやや多い。
405	C24住	鏡瓦	文・弁間に殊文を配する。	73		
409	C80住	鏡瓦	各弁は元来複弁を抽象化したもので、子葉は有軸素弁・単弁を思わせるが、放光寺跡創建意匠群中の複弁7葉蓮華文に祖型がある。	201		
410	C80住	鏡瓦	たもので、弁間に間弁を配する。	201		
422	C 外	鏡瓦	意匠は複弁7葉が抽象化されたもので弁間に間弁を配する。	477		
426	C 外	鏡瓦	は8ヶ所の殊文帯を配する。	477		
453	B土坑群	鏡瓦	複弁7葉蓮華文・1+4・外区は6ヶ所の殊文帯を配する。 意匠は複弁7葉が抽象化されたもので弁間に間弁を配する。	458	秋間	上述2例同様に放光寺跡での既出例がやや多い。又、瓦404等と同様に抽象化された複弁7葉であり、山王・秋間系に祖型が求められる。 組み瓦は不分明である。
443	D 外	鏡瓦	単弁9葉蓮華文・1+4・外区は8ヶ所の殊文帯を配する。	477	秋間	抽象化された意匠であるが、内区・外区・中房等の配置は瓦453に類似する。弁数9は、7弁に通ずる奇数配分である点から、国分寺系の単弁5葉に含まれる系列とは考え難い。
401	C12溝	鏡瓦	単弁5葉蓮華文・1+5・重圏	19	笠懸	国分寺統一創建意匠中最古の意匠である。同類の意匠も多いが、弁の肉置・全体のバランス等創建意匠群中最も均整がとれている。この同範の器面は、梨子地状の器肌であるが、通有に、この器面は「離砂」により生ずるとされている。しかし、筆者の管見の及ぶ範囲では、器面・文様に砂の付着した類例は未見である。だが、この離砂自体、通有の「砂」ではなく、生地土の細粒等も考慮されるが、これも付着した類例も未見である。この点等から、瓦自体木製以外であったことも考慮される。
411	C108住	鏡瓦	弁全体は片切り状に刻ざまれ、	219		
424	C 外	鏡瓦	圏線も片切表出である。	477		
442	C 外	鏡瓦		717		
470	C 外	鏡瓦		717		
471	C 6溝	鏡瓦	単弁5葉蓮華文・1+5・重圏	11	笠懸	創建意匠の一群に含まれるが、瓦401等の如く、文様の表出には片切・全体バランス等に精緻さが認められず、401等に後出するか、401等を祖型にし写されて用いたかが考えられ、同様に、創建期の類例は、本例と同様な状況下での製品が多い。
429	C 外	鏡瓦	文様は、沈線状で、片切ではない。	477		
438	C 外	鏡瓦		489		
412	C116住	鏡瓦	単弁5葉蓮華文・1+5・素文。	272	笠懸	内区の文様構成は、上述2者と同様であるが、外区の構成が素文になっている。創建意匠群中外区の素文は本例を含め多い。
460	B 外	鏡瓦	面径はやや小さい。	493		
418	C 4井	鏡瓦	単弁5葉蓮華文・1+5・素文	427	笠懸	前例同様に創建意匠群中文様が不均整で外区が素文である。
403	C11住	鏡瓦	単弁5葉蓮華文・1+5・左偏	33	吉井	内区径は前二者とほぼ同じ位であるが、外区幅がやや広い。外区の唐草は字瓦523と同様に間断なく連続するもので、この両者で組瓦になる可能性がある。
431	C 外	鏡瓦	行唐草。	477		
456	B 外	鏡瓦		493		
435	C 外	鏡瓦	単弁5葉蓮華文・1+4・素文。	477	笠懸	創建意匠群中内区径が最大の一群である。中房は、1+4で後出型の中房は本例同様に1+4が主体となる。肉置きも低く、全体に偏平な感を受ける。
455	B 外	鏡瓦		493		
398	C 6溝	鏡瓦	単弁5葉蓮華文・1+4・素文	11	笠懸	前例同様に創建意匠群中内区径が最大の一群である。
414	C 4井	鏡瓦	単弁5葉蓮華文・1+4・素文。	427	吉井	創建意匠群とやや異なる蓮弁で、外郭線と軸により構成される。創建意匠群を「単弁5葉蓮華文」と設定しても、蓮弁の形状が、左記の表出になっており、創建意匠群とは異なる。又、中房は、創建意匠群中の後出の一群同様に、1+4である点は変りがない。文様の彫り込みも後出群中とやや異なり、箱彫り状になる点等、創建意匠群とは違質である。
415	C 4井	鏡瓦	蓮弁は、外郭線と軸により構成し、創建意匠群とする一群の蓮弁は、二重線と軸による表出である。	427		
416	C 4井	鏡瓦		427		
406	C28住	鏡瓦		86		
407	C49住	鏡瓦		116		
563	B 外	鏡瓦		493		
565	C79住	鏡瓦		716		
408	C85住	鏡瓦	単弁5葉蓮華文・1+4・素文。	207		
435	C 外	鏡瓦		477		
451	B土坑群	鏡瓦		717		
457	B 外	鏡瓦		493		
425	C 外	鏡瓦	単弁5葉蓮華文・殊点・素文。	477	笠懸	単弁5葉であるが、均整が崩れている。弁間に間弁を配する。
430	C 外	鏡瓦	単弁4葉蓮華文・1+4・素文。	477	吉井	単弁4葉は5葉の後出型式であり類例は非常に多く、県下全域に及んでいるが、逆に同範の類例は少なく小単位の焼造が考えられる。
441	C 外	鏡瓦		477		
469	C 外	鏡瓦	単弁4葉蓮華文・殊点・素文。	717	吉井	弁端が尖がり、弁間にT字状の間弁を配する。類例はやや多い。
444	C 外	鏡瓦	単弁4葉蓮華文・殊点・重圏文。	477	吉井	前例同様であるが、軸が無く素弁状である。
419	C 4井	鏡瓦	単弁8葉蓮華文・1+4・素文。	427	吉井	この8葉の一群は6範種知られているが、その中でも均整のとれた蓮弁配置である。
458	B 外	鏡瓦	単弁8葉蓮華文・1+4・素文。	493	吉井	この8葉の一群中最も均整が崩れている。

第4章 検出された遺構・遺物

425	C 外	鏡瓦	単弁5葉蓮華文・不明・素文か。	477	笠懸	瓦401等の同範と思われるが、確定出来なかった。
468	C 外	鏡瓦	単弁5葉蓮華文・1+5・素文。	717	笠懸	創得意匠の一群に含まれる。瓦401等の一群同様で、瓦417に類似するが同範ではない。既存の創得意匠群（完形乃至完形に類するもの）中には同範が認められなかった。
449	B 1井	鏡瓦	単弁4葉蓮華文・1+4・素文	448	藤岡	瓦430に類するが管見に及ぶ範囲では同範認定出来るものはなかった。
434	C 外	鏡瓦	単弁4葉乃至5葉蓮華文。	477	秋間	秋間窯跡群の焼造品には4・5葉があり、弁間に珠点文を施す事例が多い。
424	C 外	鏡瓦	単弁5葉蓮華文か。	477	笠懸	肉置きが低く、面径が大きい点で瓦389に同範と思われるが、同範の特定が出来なかった。
459 399	B 外 C 9溝	鏡瓦 鏡瓦	単弁4葉乃至5葉蓮華文。	493 14	笠懸	文様の陰・陽が逆しまた意匠である。両者共に蓮弁の一部が残存している。両者共に蓮弁の配置・弁間のとり方から4葉と考えられる。
400	C 12溝	鏡瓦	単弁4葉蓮華文か。	19	笠懸	周縁のみの残存。残存部は幅が広いことから単弁4葉蓮華文が考えられる。
402	C 18溝	鏡瓦	単弁5葉蓮華文・1+5・重圏か	17	笠懸	外区・周縁部が残存する。外区の状態は片切状になっていることから、創建統一意匠たる瓦401と考えられる。
420	C 外	鏡瓦		478	乗・藤	外区・周縁部が残存する。外区はやや狭く、秋間系の国分寺意匠群に類する。
421	C 外	鏡瓦	不明。	478	吉井	器面の粗れが著しく詳細不詳。
427	C 外	鏡瓦	単弁5葉蓮華文か。	489	笠懸	器面の調整から瓦455・398と考えられる。
436	C 外	鏡瓦	不明。	478	吉井	面径が非常に大きい。外区・周縁が残存する。
439	C 外	鏡瓦	単弁4葉乃至5葉蓮華文。	489	吉・藤	蓮弁の一部・外区界線・周縁が残存する。
445	B 2住	鏡瓦	不明。	325	吉井	周縁部分のみ残存。意匠等詳細不明。
446	B 20住	鏡瓦	不明。	377	吉井	外区・周縁部分残存。意匠は単弁4葉蓮華の可能性もある。
447	B 20住	鏡瓦	不明。	377	吉井	外区・周縁部分残存。意匠等詳細不明。
450	B 1井	鏡瓦	単弁4葉蓮華文か。	448	吉井	外区周辺・内区の一部が残存する。文様の一部はT字状の間弁。
461	B 外	鏡瓦	単弁4葉蓮華文か。	493	笠懸	外区・界線・蓮弁の一部が残存する。肉置きは低い。
462	B 外	鏡瓦	不明。	493	吉井	周縁・外区の一部が残存する。意匠等詳細不明。
463	B 外	鏡瓦	不明。	493	吉・笠	周縁のみ残存。意匠等詳細不明。


字瓦類

瓦No.	出土地	種別	内区・中房・外区	掲載図	焼造地	摘	要
481	C 89住	字瓦	右偏行唐草文・珠文。	707	笠懸	国分寺創建統一意匠。最古の国分寺系瓦で、瓦401等と組み瓦を構成する。文様は肉置きが良く国分寺系字瓦意匠中最も麗美である。器面は、梨子地状のものや板目の二者がある。前者は、鏡瓦401と同様である。後者は、通有の瓦範と同様に木型であることが判断される。前者は、離砂の使用が考えられるものの、砂そのものが残存するものは管見の及ぶ範囲では認められない。この点では、同一範型を使用すること等を勘案すれば、有機質等の離材を用いたことも考慮されよう。	
482	C 103住	字瓦	左端の唐草は、忍冬文を呈する。	717			
491	C 4井	字瓦		428			
499	C 外	字瓦		478			
508	C 外	字瓦		478			
516	C 外	字瓦		478			
528	B 外	字瓦		498			
515	C 外	字瓦	右偏行唐草文・珠文。	478	笠懸	国分寺創得意匠中前者の後出型と考えられる。瓦481等の後出型中外区に珠文を配するものは、他例にない。しかし、当瓦範の珠文は、非常に小さく、製作開始より時間の経過した頃のものと考えられる類例には、この珠文が認められないものが大半である。組瓦は、瓦401の後出型でも直後の瓦417等が考えられる。	
532	B 2住	字瓦	外形は図示の二者がある。上段は通有種であるが、下段のものは、瓦523・519等の様に、側帯部の反りが強い。	324			
544	C 外	字瓦		717			
545	C 外	字瓦		717			
483	C 116住	字瓦	右偏行唐草文・素文。	273	吉井	創得意匠群中でも、後出型の瓦484等の祖型となる範種と考えられる。又、内区の幅が狭い点は、後出型の内で、吉井・藤岡窯跡群中で焼造される製品が内区幅が狭い点に共通する。	
487	C 4井	字瓦	内区幅が狭い。	428			
529	C 外	字瓦		478			
472	C 6溝	字瓦	右偏行唐草文・素文。	11	吉井	前出の瓦483と同様の意匠で、創得意匠である。この唐草文は、前出の瓦483と同様の意匠で、創得意匠である。この唐草文は、鬼瓦類の外区を加飾する唐草文とほぼ同じ意匠であり、両者の関係は注意が必要であり、その両者が笠懸と吉井・藤岡で焼造されることを勘案すれば工人組織の改変も想起し得る。	
489	C 4井	字瓦	各唐草文は独立した状態で、連続性がなくなる。子葉は短い。	428			
490	C 4井	字瓦	右偏行唐草文・重圏。	428	吉井	反転子葉をも配する意匠としては数少ない類例で、笠懸窯跡群中では未出の意匠である。	
518	C 外	字瓦	内区幅が狭い。	478			
484	C 135住	字瓦	右偏行唐草文・重圏。	282	吉井	瓦483・472同様に独立した唐草で、子葉も反転子葉ではない。又、文様自体は肉置きが低く、細い沈線状に表出されている。類例に上げたものは僧寺出土のものであるが、右側帯部周辺が欠損しており完存品ではない。内区幅は瓦483で記述したが、本例は、右偏行唐草文の中では、最も内区幅が狭い一群の意匠である。	
485	C 142住	字瓦	内区幅が狭い。	288			
525	C 外	字瓦		492			
526	B 外	字瓦		498			
537	B 外	字瓦		494			
538	B 外	字瓦		494			
477	C 56住	字瓦	右偏行唐草文。	136	吉井	瓦484に類似する意匠であるが同範ではない。管見の及ぶ中では完存乃至完存に近い類例は見出せなかった。	
458	B 外	字瓦		493			
502	C 外	字瓦		478			
523	C 外	字瓦	左偏行唐草文・重圏。	478	吉井	瓦472等の意匠の逆である。子葉は反転子葉ではない。	

第1節 南側調査区

476 541	C56住 B 外	字瓦 字瓦	左扁行唐草文。重圏。	136 494	吉井	連続する唐草文で、子葉は反転気味である。鏡瓦403の外区文様の左扁行唐草の意匠と同じものであることから、両者は組瓦として認識される。
514	C 外	字瓦	均整唐草文・重圏。	478	吉井	均整唐草文としては数少ない類例である。長伸葉・反転子葉の入組む意匠としては本例唯一のものである。
543	C 外	字瓦	均整唐草文・素文。	717	秋間	秋間窯跡群の唐草文の意匠は本例唯一である。しかし、唐草自体は抽象化されており、入組み三叉文状の表出になっている。
486 493 519 535	C4井 C4井 C 外 B1井	字瓦 字瓦 字瓦 字瓦	抽象文・重圏。	428 428 478 448	秋間	抽象意匠としては数少ない類例の中でも最も類例の多い意匠である。しかし、どの様な文様を抽象化したかは判然としないが、中心部周辺の2ヶ1対のものは、阿彌陀三尊の脇侍の様にも思われるし、蓮華の抽象化とも思われる。
520	C 外	字瓦	左扁行唐草文乃至飛雲文・重圏。	478	吉井	吉井窯跡群中既出意匠で唐草文を検討する限りに於いては、当該の意匠は飛雲文と考えられる。
479 488 512 542	C73住 C4井 C 外 B 外	字瓦 字瓦 字瓦 字瓦	稜杉文・素文。	171 429 479 494	秋間	稜杉文の意匠類例は瓦119の外数例知られるが、熟れも秋間窯跡群での焼造である。当該の稜杉文は、左扁行であるものの、全体に不規則的に施文され麗美さは認められない。
474 501 510 511	C19住 C 外 C 外 C 外	字瓦 字瓦 字瓦 字瓦	稜杉文・素文。	57 479 479 479	秋間	秋間窯跡群焼造の稜杉文の意匠中最も均整がとれているものであり、県下で既出の字瓦の中でも最も小さい一群に含まれ、通有の字瓦に比較し約3分2程の大きさである。この要因は、他例が広端部側に接合するのに対し、狭端部側に接合することにある。
471	C6溝	字瓦	飛雲文か。	11	笠懸	左扁行唐草文にも考えられるが、文様の一単位には子葉が認められないが飛雲文と考えた。同范は未出。
494 497 500 504 506 539	C4井 C4井 C 外 C 外 C4溝 B 外	字瓦 字瓦 字瓦 字瓦 字瓦 字瓦	重弧文。	428 427 478 478 479 494	乗附	轆轤挽きの重弧文である。これらの重弧文は国分寺系のものではなく、国分寺系以前の意匠系譜であり、山王・秋間系のものと考えられ、組瓦は、複弁7葉乃至6葉蓮華文鏡瓦が考えられる。
495 496 521	C4井 C4井 C 外	字瓦 字瓦 字瓦	重廊文。	428 428 479	乗附 吉井 秋間	完形の類例は国分僧寺の出土であるが、同范の認定は出来なかった。
522	C 外	字瓦	重弧文乃至重廊文。	479	乗附	筧書きによる表出で、類例からすれば重弧文と考えられる。
540 527	B 外 C4溝	字瓦 字瓦	格子状重廊文。	494 498	吉井	完形の類例は国分僧寺出土であるが、同范の認定は出来ず、類例として掲載した。
478 513	C72住 C 外	字瓦 字瓦	均整唐草文・素文。	165 478	吉井	完形の類例は管見の及ぶ範囲には無かった。文様部側帯寄りには楕円形状を呈し、瓦517等と同様である。
536	B 外	字瓦	均整唐草文か。外区は素文。	494	藤岡	完形乃至完形に類するものは無い。
517	C 外	字瓦	抽象文か。	479	吉井	破片での類例は僧寺にある。
531	B 外	字瓦	斜格子。	498	吉井	同范類例は未出。
525	C 外	字瓦	飛雲文乃至左扁行唐草文。	492	吉井	類似例はあるが、同范関係は充分に出来なかった。
505	C 外	字瓦	鋸歯文。	479	吉井	筧書きの鋸歯と押捺の珠文を配する。既出例の好例は尼寺にある。
530	B 外	字瓦	不分明。	498	吉井	内区・外区・周縁の側帯部周辺が残存する。
473	C6溝	字瓦	格子文。	11	吉・藤	類例はやや多い。綿貫遺跡では格子文が主体を占める。
534	B11住	字瓦	格子文。	346	吉・藤	格子文の一群中では最も粗い格子文である。
553	C 外	字瓦	不分明。	489	吉井	下帯部の外区・周縁の破片。意匠等詳細は不分明。
509	C 外	字瓦	右扁行唐草文・重圏。	479	吉井	文様施文が不良であるが瓦484等と同様の意匠である。
492	C4井	字瓦	素文。	428	笠懸か	詳細不明であるが、全体が素文の可能性はある。
503	C 外	字瓦	不分明。	479	吉井	周縁のみの残存。意匠等詳細不分明。
507	C 外	字瓦	鋸歯文。	479	吉井	瓦505と同様の意匠である。

第4章 検出された遺構・遺物

瓦-127		出土位置		C区6号溝	
挿図番号	12-18	写真図版	101		
類	女	生産地	秋間		
					読 判 読 不 能
					摘要
瓦-128		出土位置		C区6号溝	
挿図番号	12-1	写真図版	100		
類	女	生産地	笠懸		
					読 判 読 不 能
					摘要
瓦-129		出土位置		C区6号溝	
挿図番号	12-16	写真図版	101		
類	女	生産地	乗附		
					読 判 読 不 能
					摘要
瓦-130		出土位置		C区6号溝	
挿図番号	13-2	写真図版	101		
類	女	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
					摘要
瓦-131		出土位置		C区6号溝	
挿図番号	11-16	写真図版	100		
類	女	生産地	乗附		
					読 判 読 不 能
					摘要
瓦-132		出土位置		C区6号溝	
挿図番号	12-14	写真図版	100		
類	女	生産地	乗附		
					読 判 読 不 能
					摘要
瓦-133		出土位置		C区6号溝	
挿図番号	13-3	写真図版	101		
類	女	生産地	乗附か	秋間	
					読 判 読 不 能
					摘要
瓦-134		出土位置		C区6号溝	
挿図番号	12-6	写真図版	100		
類	女	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
					摘要
瓦-135		出土位置		C区6号溝	
挿図番号	12-19	写真図版	101		
類	女	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
					摘要



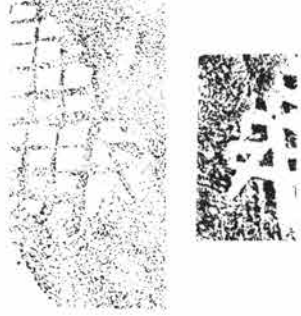


第500図 文字瓦類(1)

第1節 南側調査区

瓦-136		出土位置		C区6号溝	
挿図番号	11-6	写真図版	100		
類	男	生産地	吉井か 藤岡		
					読 判 読 不 能
摘要	子の一部か。				
瓦-137		出土位置		C区6号溝	
挿図番号	13-1	写真図版	101		
類	女	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
摘要	筥傷の可能性がある。				
瓦-138		出土位置		C区6号溝	
挿図番号	11-9	写真図版	100		
類	男	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
摘要	子の一部か。				
瓦-139		出土位置		C区6号溝	
挿図番号	12-13	写真図版	101		
類	女	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
摘要	文字の極一部分。				
瓦-140		出土位置		C区6号溝	
挿図番号	11-7	写真図版	100		
類	男	生産地	吉井か 藤岡		
					読 十 か
摘要	小さな文字で類似するものに生がある。				
瓦-141		出土位置		C区6号溝	
挿図番号	12-17	写真図版	101		
類	女	生産地	笠懸か		
					読 判 読 不 能
摘要	筥傷の可能性がある。				
瓦-142		出土位置		C区6号溝	
挿図番号	13-6	写真図版	101		
類	女	生産地	笠懸		
					読 蘭 田
摘要	山田郡蘭田郷をあらわす。郷名刻印。				
瓦-143		出土位置		C区6号溝	
挿図番号	13-5	写真図版	101		
類	女	生産地	吉井		
					読 記 号 か
摘要	瓦-217 } と同一か。 瓦-392 } 刻印。				
瓦-144		出土位置		C区6号溝	
挿図番号	12-4	写真図版	100		
類	女	生産地	藤岡		
					読 判 読 不 能 (古 か)
摘要	へんが欠損か。				




第501図 文字瓦類(2)

第4章 検出された遺構・遺物

瓦-145				出土位置		C区6号溝	
挿図番号		11-15		写真図版		100	
類	女	生産地	笠懸				
			読 文字欠失				
摘要		菌田の刻印文字を伴う格子叩き。 勢多郡菌田郷をあらわす。					
瓦-146				出土位置		C区6号溝	
挿図番号		13-4		写真図版		101	
類	女	生産地	吉井				
			読 判読不能				
摘要							
瓦-147				出土位置		C区9号溝	
挿図番号		14-9		写真図版		101	
類	女	生産地	吉井				
			読 判読不能				
摘要		髷傷か。					
瓦-148				出土位置		C区10号溝	
挿図番号		16-10		写真図版		102	
類	女	生産地	笠懸				
			読 判読不能				
摘要		正格子叩見内に刻まれている。					
瓦-149				出土位置		C区10号溝	
挿図番号		16-12		写真図版		102	
類	女	生産地	笠懸				
			読 判読不能				
摘要		瓦-148に同じ。					
瓦-150				出土位置		C区12号溝	
挿図番号		20-3		写真図版		103	
類	女	生産地	秋間か藤岡				
			読 判読不能				
摘要							
瓦-151				出土位置		C区12号溝	
挿図番号		20-7		写真図版		103	
類	女	生産地	吉井				
			読 大か				
摘要		下の可能性もある。					
瓦-152				出土位置		C区12号溝	
挿図番号		20-10		写真図版		103	
類	女	生産地	笠懸				
			読 判読不能				
摘要		文字部分がハゼにより欠失している。					
瓦-153				出土位置		C区12号溝	
挿図番号		20-13		写真図版		103	
類	女	生産地	秋間				
			読 大				
摘要		指先きの乃至幅広の髷で浅く描かれて いる。					

第502図 文字瓦類(3)

第1節 南側調査区

瓦-154		出土位置		C区12号溝	
挿図番号	20-12	写真図版	103		
類	女	生産地	秋間		
					読大
摘要	瓦-153に同じ。				
瓦-155		出土位置		C区12号溝	
挿図番号	20-14	写真図版	103		
類	女	生産地	吉井		
					読判読不能
摘要	文字の側面が窺傷。				
瓦-156		出土位置		C区12号溝	
挿図番号	20-11	写真図版	103		
類	女	生産地	吉井		
					読判読不能
摘要	窺傷か。				
瓦-157		出土位置		C区13号住居	
挿図番号	39-5	写真図版	107		
類	女	生産地	笠懸		
					読子
摘要	子の下に王を刻むが欠失している。				
瓦-158		出土位置		C区14号住居	
挿図番号	42-1	写真図版	107		
類	男	生産地	乗附		
					読判読不能
摘要	窺傷か文字の一部が不明。				
瓦-159		出土位置		C区16号住居	
挿図番号	48-3	写真図版	109		
類	女	生産地	吉井		
					7 十 か
摘要					
瓦-160		出土位置		C区17号住居	
挿図番号	51-8	写真図版	110		
類	女	生産地	笠懸		
					読判読不能
摘要	窺傷か文字の一部が不明。				
瓦-161		出土位置		C区18号住居	
挿図番号	54-4	写真図版	112		
類	女	生産地	吉井		
					読三(四か)
摘要	笠懸窯跡群産の窺描き文字には漢数字が多い。				
瓦-162		出土位置		C区18号住居	
挿図番号	54-5	写真図版	111		
類	女	生産地	乗附か秋間		
					読子
摘要	筆致が強い。				


第503図 文字瓦類(4)

第4章 検出された遺構・遺物

瓦-163 出土位置 C区19号住居				瓦-164 出土位置 C区20号住居				瓦-165 出土位置 C区21号住居			
挿図番号 58-1		写真図版 113		挿図番号 62-2		写真図版 114		挿図番号 66-2		写真図版 115	
類	男	生産地	吉井	類	女	生産地	吉井	類	女	生産地	笠懸
			読 大山				読 判読不能				読 蘭田
摘要				摘要				摘要			蘭田の刻印を伴う格子叩き。瓦-142と同じ。
瓦-166 出土位置 C区22号住居				瓦-167 出土位置 C区22号住居				瓦-168 出土位置 C区22号住居			
挿図番号 68-1		写真図版 116		挿図番号 68-3		写真図版 116		挿図番号 68-2		写真図版 116	
類	男	生産地	吉井	類	女	生産地	笠懸	類	女	生産地	吉井
			読 判読不能				読 一				読 一八
摘要			大の一部か。	摘要			笠懸窯跡群の篋描き文字瓦には漢数字が多い。	摘要			八は多胡郡矢田郷をあらわす。
瓦-169 出土位置 C区22号住居				瓦-170 出土位置 C区23号住居				瓦-171 出土位置 C区26号住居			
挿図番号 69-1		写真図版 115		挿図番号 70-9		写真図版 117		挿図番号 82-4		写真図版 120	
類	女	生産地	笠懸	類	女	生産地	笠懸	類	女	生産地	吉井
			読 文字欠失				読 蘭田				読 山
摘要			蘭田の文字を伴う格子叩き。瓦-145と同じ。	摘要			瓦-142と同じ。	摘要			達筆である。


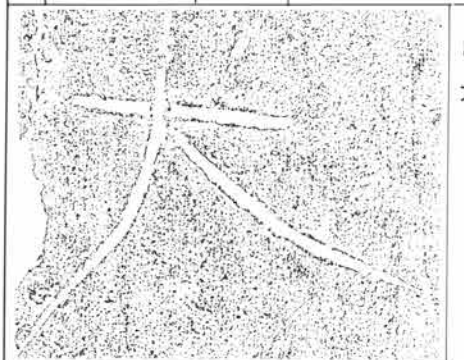


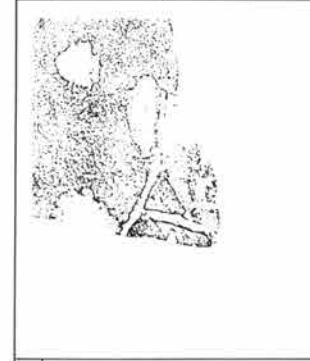
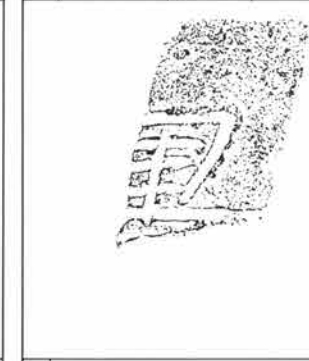
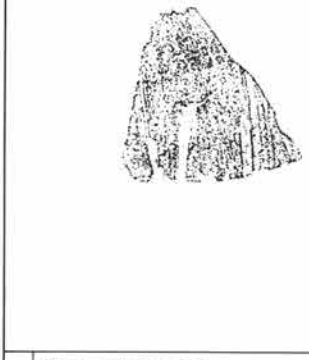
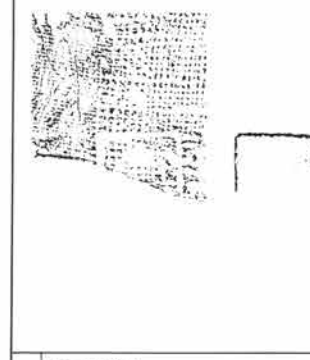

第504図 文字瓦類(5)

第1節 南側調査区

瓦-172		出土位置		C区26号住居	
挿図番号	83-1	写真図版	120		
類	女	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
摘要	指先きの傷か。				
瓦-173		出土位置		C区28号住居	
挿図番号	86-13	写真図版	122		
類	女	生産地	笠懸		
					読 勢
摘要	勢は左文字。 勢多郡の郡名文字瓦。				
瓦-174		出土位置		C区29号住居	
挿図番号	91-1	写真図版	123		
類	女	生産地	吉井		
					読 介 か
摘要	黒介乃至里介と判読出来る文字瓦の既出がある。				
瓦-175		出土位置		C区42号住居	
挿図番号	101-9	写真図版	125		
類	女	生産地	乗附		
					読 真
摘要					
瓦-176		出土位置		C区43号住居	
挿図番号	103-6	写真図版	126		
類	女	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
摘要					
瓦-177		出土位置		C区49号住居	
挿図番号	116-5	写真図版	130		
類	女	生産地	吉井		
					読 多
摘要	大多の刻印文字で大を欠失する。多胡郡大家郷をあらわす。				
瓦-178		出土位置		C区49号住居	
挿図番号	116-4	写真図版	130		
類	女	生産地	吉井		
					読 多
摘要	多胡郡の郡名刻印。				
瓦-179		出土位置		C区53号住居	
挿図番号	123-4	写真図版	132		
類	女	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
摘要	大の一部か。				
瓦-180		出土位置		C区54号住居	
挿図番号	125-5	写真図版	133		
類	男	生産地	吉井・藤岡		
					読 大 寸 (本)
摘要	大の筆致は瓦-163に類似する。 寸				




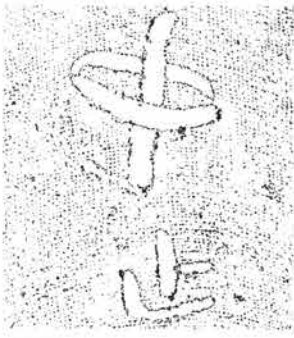
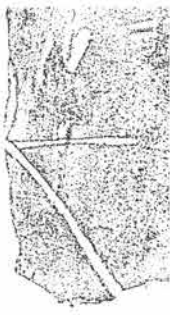




第505図 文字瓦類(6)

第4章 検出された遺構・遺物

瓦-181				出土位置 C区54号住居			
挿図番号		127-1		写真図版		134	
類	女	生産地	乗附				
			読 工 か				
摘要							
瓦-182				出土位置 C区55号住居			
挿図番号		133-5		写真図版		137	
類	女	生産地	吉井				
			読 大				
摘要							
瓦-183				出土位置 C区55号住居			
挿図番号		133-7		写真図版		136	
類	女	生産地	藤岡				
			読 判 読 不 能				
摘要				匱傷か。			
瓦-184				出土位置 C区58号住居			
挿図番号		145-1		写真図版		141	
類	女	生産地	吉井・藤岡				
			読 七				
摘要							
瓦-185				出土位置 C区58号住居			
挿図番号		145-2		写真図版		141	
類	女	生産地	吉井				
			読 判 読 不 能				
摘要				成の一部か。			
瓦-186				出土位置 C区58号住居			
挿図番号		145-3		写真図版		141	
類	女	生産地	吉井				
			読 里 か 黒				
摘要							
瓦-187				出土位置 C区58号住居			
挿図番号		145-4		写真図版		141	
類	女	生産地	秋間				
			読 判 読 不 能				
摘要				匱傷の可能性がある。			
瓦-188				出土位置 C区65号住居			
挿図番号		153-7		写真図版		144	
類	女	生産地	吉井				
			読 判 読 不 能				
摘要				匱の刻印か。			
瓦-189				出土位置 C区71号住居			
挿図番号		162-10		写真図版		146	
類	女	生産地	吉井・藤岡				
			読 判 読 不 能				
摘要				文字の一部。			





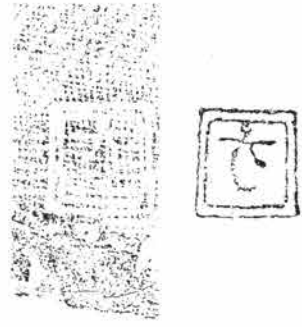


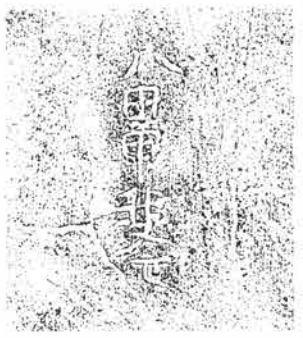
第506図 文字瓦類 (7)

第1節 南側調査区

瓦-190		出土位置		C区71号住居	
挿図番号	162-9	写真図版	146		
類	女	生産地	吉井・藤岡		
					読 判 読 不 能
摘要					
瓦-191		出土位置		C区71号住居	
挿図番号	162-8	写真図版	146		
類	女	生産地	吉井・藤岡		
					読 判 読 不 能
摘要	<p>瓦傷か。</p>				
瓦-192		出土位置		C区71号住居	
挿図番号	162-7	写真図版	146		
類	女	生産地	吉井・藤岡		
					読 判 読 不 能
摘要	<p>田・甲・里か。</p>				
瓦-193		出土位置		C区72号住居	
挿図番号	167-1	写真図版	149		
類	女	生産地	吉井		
					読 中 止
摘要					
瓦-194		出土位置		C区72号住居	
挿図番号	165-9	写真図版	148		
類	男	生産地	吉井		
					読 大 か
摘要	<p>瓦-182と同一の筆致。</p>				
瓦-195		出土位置		C区76号住居	
挿図番号	179-1	写真図版	152		
類	女	生産地	秋間		
					読 判 読 不 能
摘要	<p>瓦傷の可能性がある。</p>				
瓦-196		出土位置		C区77号住居	
挿図番号	183-2	写真図版	153		
類	男	生産地	笠懸		
					読 佐
摘要	<p>佐位郡佐位郷をあらわす。</p>				
瓦-197		出土位置		C区77号住居	
挿図番号	184-3	写真図版	153		
類	男	生産地	吉井		
					7 成
摘要	<p>直線的な文字で小さい。</p>				
瓦-198		出土位置		C区74・75号住居	
挿図番号	176-1 185-2	写真図版	151		
類	女	生産地	乗附・吉井		
					読 川 上
摘要					

第507図 文字瓦類(8)

第4章 検出された遺構・遺物

瓦-199		出土位置		C区77号住居	
挿図番号	185-3	写真図版	154		
類	女	生産地	吉井か		
					読 一八
摘要	八は田胡郡矢田郷をあらわす。				
瓦-200		出土位置		C区78号住居	
挿図番号	191-4	写真図版	156		
類	男	生産地	秋間		
					読 判読不能
摘要	大の一部か。				
瓦-201		出土位置		C区85号住居	
挿図番号	207-7	写真図版	162		
類	男	生産地	吉井		
					読 子文
摘要					
瓦-202		出土位置		C区79号住居	
挿図番号	197-4	写真図版	158		
類	女	生産地	吉井		
					読 真
摘要	瓦-175と同じ筆致。				
瓦-203		出土位置		C区85号住居	
挿図番号	208-1	写真図版	163		
類	女	生産地	秋間		
					読 大
摘要	瓦-153に同じ。				
瓦-204		出土位置		C区86号住居	
挿図番号	211-3	写真図版	164		
類	男	生産地	吉井		
					読 方
摘要	右拓本は印面側の拓本状態。				
瓦-205		出土位置		C区89号住居	
挿図番号	222-2	写真図版	166		
類	男	生産地	藤岡		
					読 判読不能
摘要	氏か。				
瓦-206		出土位置		C区96号住居	
挿図番号	230-5	写真図版	169		
類	女	生産地	笠懸		
					読 二
摘要	笠懸窯跡群の篋描き文字には漢数字が多い。				
瓦-207		出土位置		C区96号住居	
挿図番号	231-1	写真図版	169		
類	女	生産地	吉井		
					読 八田甲斐女
摘要	女は万呂の異体字。瓦-364と同じ。				

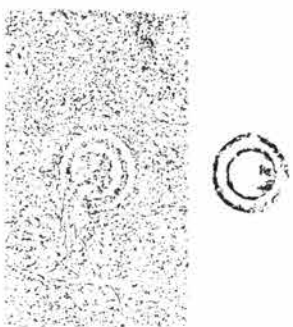



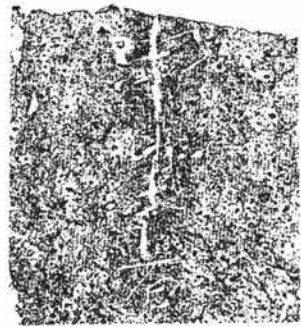




第508図 文字瓦類(9)

第1節 南側調査区

瓦-208	出土位置	C区96号住居	
挿図番号	229-11	写真図版	168
類	女	生産地	吉井
			読 文 城
摘要	成は筆順が違う。		
瓦-209	出土位置	C区97号住居	
挿図番号	235-1	写真図版	170
類	女	生産地	吉井
			読 日 か 目 か
摘要			
瓦-210	出土位置	C区99号住居	
挿図番号	238-1	写真図版	171
類	女	生産地	吉井
			読 辛 □
摘要	多胡郡辛科郷をあらわす。		
瓦-211	出土位置	C区103号住居	
挿図番号		写真図版	
類	男	生産地	吉井
			読 千
摘要			
瓦-212	出土位置	C区103号住居	
挿図番号	259-4	写真図版	176
類	女	生産地	笠懸
			読 判 読 不 能
摘要	寛傷の可能性がある。		
瓦-213	出土位置	C区104号住居	
挿図番号	240-5	写真図版	172
類	女	生産地	吉井
			読 山 岡
摘要	山は、多胡郡山字郷か。(旧片岡郡)		
瓦-214	出土位置	C区106号住居	
挿図番号	249-1	写真図版	173
類	女	生産地	吉井
			読 方 万
摘要	當は刻印放光寺跡(山王廃寺)出土の方に類似する。		
瓦-215	出土位置	C区108号住居	
挿図番号	219-3	写真図版	165
類	女	生産地	吉井
			読 女
摘要	女は万呂の異体字。		
瓦-216	出土位置	C区108号住居	
挿図番号	219-4	写真図版	165
類	女	生産地	笠懸
			読 茂
摘要	佐位郡美侶郷をあらわす。		

第509図 文字瓦類 (10)

第4章 検出された遺構・遺物

瓦-217	出土位置	C区115号住居	
挿図番号	270-9	写真図版	179
類	女	生産地	吉井・藤岡
			読 記 号 か
摘要	瓦-143と瓦-392と同一か。		
瓦-218	出土位置	C区116号住居	
挿図番号	273-2	写真図版	180
類	女	生産地	乗附
			読 神
摘要	達筆である。		
瓦-219	出土位置	C区116号住居	
挿図番号	273-3	写真図版	181
類	女	生産地	吉井
			読 九
摘要			
瓦-220	出土位置	C区116号住居	
挿図番号	272-12	写真図版	181
類	女	生産地	吉井
			読 判 読 不 能
摘要	□里か黒。		
瓦-221	出土位置	C区124号住居	
挿図番号	278-8	写真図版	182
類	女	生産地	吉井
			読 申 者
摘要	人名か。 字篆者か。		
瓦-222	出土位置	C区128号住居	
挿図番号	254-1	写真図版	175
類	女	生産地	笠懸
			読 佐
摘要	佐位郡佐位郷をあらわす。		
瓦-223	出土位置	C区134号住居	
挿図番号	281-2	写真図版	183
類	女	生産地	笠懸
			読 判 読 不 能
摘要			
瓦-224	出土位置	C区138号住居	
挿図番号	285-5	写真図版	184
類	女	生産地	吉井
			読 判 読 不 能
摘要	文字の一部と考えられる。		
瓦-225	出土位置	C区142号住居	
挿図番号	288-3	写真図版	185
類	男	生産地	笠懸
			読 判 読 不 能
摘要	瓦傷の可能性が有る。		






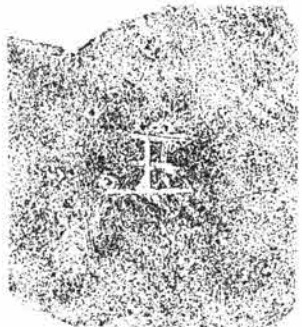



第510図 文字瓦類 (11)

第1節 南側調査区

瓦-226		出土位置		C区142号住居	
挿図番号		289-2		写真図版	
				185	
類	女	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
摘要	2文字か。				
瓦-227		出土位置		C区146号住居	
挿図番号		295-1		写真図版	
				187	
類	女	生産地	吉井		
					読 子 阿 か 千 阿
摘要					
瓦-228		出土位置		C区148号住居	
挿図番号		297-5		写真図版	
				187	
類	女	生産地	吉井		
					読 佐
摘要	佐位郡佐位郷をあらわす。				
瓦-229		出土位置		C区150号住居	
挿図番号		299-1		写真図版	
				187	
類	女	生産地	吉井		
					読 部
摘要	部の異体字。				
瓦-230		出土位置		C区153号住居	
挿図番号		303-14		写真図版	
				189	
類	女	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
摘要					
瓦-231		出土位置		C区4号井戸	
挿図番号		429-5		写真図版	
				234	
類	男	生産地	吉井		
					読 十
摘要	文字が非常に小さい。				
瓦-232		出土位置		C区4号井戸	
挿図番号		430-1		写真図版	
				234	
類	男	生産地	吉井		
					読 牛 か
摘要					
瓦-233		出土位置		C区4号井戸	
挿図番号		433-5		写真図版	
				236	
類	女	生産地	吉井		
					読 生
摘要	生は壬生氏をあらわす。				
瓦-234		出土位置		C区4号井戸	
挿図番号		433-9		写真図版	
				237	
類	女	生産地	吉井		
					読 十
摘要					

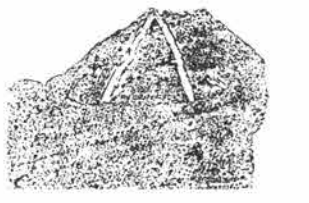


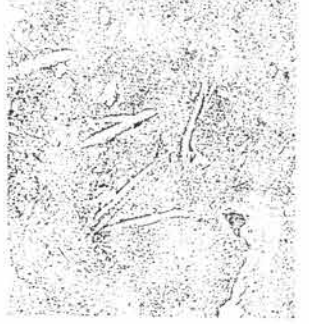





第511図 文字瓦類 (12)

第4章 検出された遺構・遺物

瓦-235		出土位置		C区4号井戸	
挿図番号	433-6	写真図版	236		
類	女	生産地	吉井		
					読 手 か
摘要					
瓦-236		出土位置		C区4号井戸	
挿図番号	433-10	写真図版	237		
類	女	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
摘要	衣の一部か。				
瓦-237		出土位置		C区4号井戸	
挿図番号	432-4	写真図版	235		
類	女	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
摘要	左のはらいか子の一部。				
瓦-238		出土位置		C区4号井戸	
挿図番号	433-3	写真図版	236		
類	女	生産地	吉井		
					読 織 工 か ●
摘要	上の文字は織か、織は多胡郡織袋郷をあらわす。				
瓦-239		出土位置		C区4号井戸	
挿図番号	432-10	写真図版	236		
類	女	生産地	吉井		
					読 干
摘要					
瓦-240		出土位置		C区4号井戸	
挿図番号	432-5	写真図版	235		
類	女	生産地	吉井		
					読 工
摘要	中央の横線は文字の一部ではなく割れ。				
瓦-241		出土位置		C区4号井戸	
挿図番号	430-2	写真図版	233		
類	男	生産地	吉井		
					読 夫
摘要					
瓦-242		出土位置		C区4号井戸	
挿図番号	433-1	写真図版	236		
類	女	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
摘要	匱傷か文字の一部か不明。				
瓦-243		出土位置		C区4号井戸	
挿図番号	433-7	写真図版	236		
類	女	生産地	吉井		
					読 十 か
摘要	記号の可能性もある。				

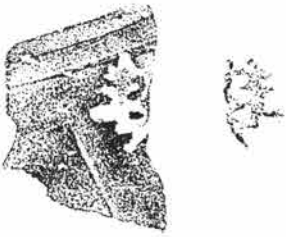


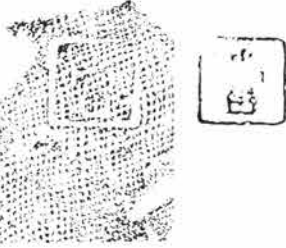




第512図 文字瓦類 (13)

第1節 南側調査区

瓦-244		出土位置		C区4号井戸	
挿図番号	432-9	写真図版	236		
類	女	生産地	乗附		
					読 判 読 不 能
摘要	窺記号か。				
瓦-245		出土位置		C区4号井戸	
挿図番号	432-11	写真図版	236		
類	女	生産地	吉井		
					読 十 か
摘要	記号の可能性もある。				
瓦-246		出土位置		C区4号井戸	
挿図番号	432-7	写真図版	235		
類	女	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
摘要	窺記号か。				
瓦-247		出土位置		C区4号井戸	
挿図番号	429-4	写真図版	233		
類	男	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
摘要	窺傷の可能性がある。				
瓦-248		出土位置		C区4号井戸	
挿図番号	432-8	写真図版	236		
類	女	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
摘要					
瓦-249		出土位置		C区4号井戸	
挿図番号	432-14	写真図版	236		
類	女	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
摘要	文字の一部と考えられる。				
瓦-250		出土位置		C区4号井戸	
挿図番号	433-2	写真図版	236		
類	女	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
摘要	右のはらい。				
瓦-251		出土位置		C区4号井戸	
挿図番号	432-12	写真図版	236		
類	女	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
摘要					
瓦-252		出土位置		C区4号井戸	
挿図番号	433-4	写真図版	236		
類	女	生産地	乗附		
					読 判 読 不 能
摘要	指先か工具による傷の可能性もある。				


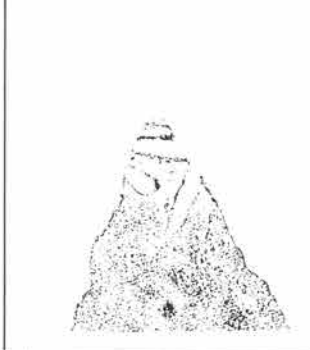



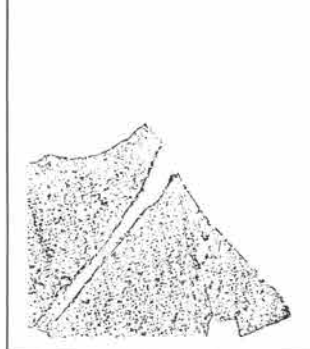

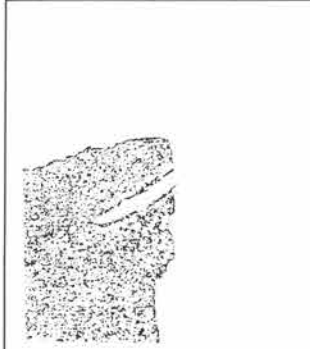

第513図 文字瓦類 (14)

第4章 検出された遺構・遺物

瓦-253		出土位置		C区4号井戸	
挿図番号		434-6		写真図版	
				237	
類	女	生産地	笠懸		
					読 勢
摘要	勢多郡をあらわす。				
瓦-254		出土位置		C区4号井戸	
挿図番号		434-3		写真図版	
				237	
類	女	生産地	笠懸		
					読 文字欠失 田か
摘要	蘭田の文字を伴う格子叩き。 瓦-142に同じ。				
瓦-255		出土位置		C区4号井戸	
挿図番号		434-4		写真図版	
				237	
類	女	生産地	笠懸		
					読 田か
摘要	山田郡をあらわす。				
瓦-256		出土位置		C区4号井戸	
挿図番号		434-5		写真図版	
				237	
類	女	生産地	吉井		
					読 置
摘要	金山瓦窯跡の既出例がある。				
瓦-257		出土位置		C区4号井戸	
挿図番号		432-13		写真図版	
				236	
類	女	生産地	吉井		
					読 家成
摘要	石上朝臣家成か。 多胡郡大領。				
瓦-258		出土位置		C区4号井戸	
挿図番号		434-1		写真図版	
				237	
類	男	生産地	吉井		
					読 羊神人宿子稻麿
摘要	宿子と麿のカバネの重複がある。				
瓦-259		出土位置		C区4号井戸	
挿図番号		434-2		写真図版	
				237	
類	女	生産地	乗附		
					読 判読不能
摘要	篋傷とも思われる。				
瓦-260		出土位置		C区外(表土)	
挿図番号		485-14		写真図版	
類	女	生産地	吉井		
					読 武井女
摘要	武は多胡郡武美郷をあらわす。女は万呂で牛万呂をあらわす。				






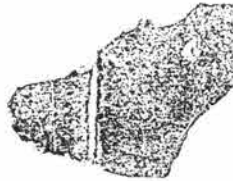

第514図 文字瓦類 (15)

第1節 南側調査区

瓦-261	出土位置	C区外(表土)	
挿図番号	483-1	写真図版	
類	女	生産地	吉井
			読 判 読 不 能
摘要	寛傷の可能性がある。		
瓦-262	出土位置	C区外(表土)	
挿図番号	486-7	写真図版	
類	女	生産地	吉井
			読 判 読 不 能
摘要			
瓦-263	出土位置	C区外(表土)	
挿図番号	484-4	写真図版	
類	女	生産地	吉井
			読 判 読 不 能
摘要	寛傷の可能性がある。		
瓦-264	出土位置	C区外(表土)	
挿図番号	485-2	写真図版	
類	女	生産地	吉井
			読 多 大
摘要	瓦-177と同じ。		
瓦-265	出土位置	C区外(II層)	
挿図番号	483-5	写真図版	
類	女	生産地	吉井
			読 判 読 不 能
摘要			
瓦-266	出土位置	C区外(49-C-7III層)	
挿図番号	485-7	写真図版	
類		生産地	吉井・藤岡
			読 判 読 不 能
摘要	大の一部か。		
瓦-267	出土位置	C区外(41-C-9III層)	
挿図番号	485-6	写真図版	
類	女	生産地	笠懸
			読 判 読 不 能
摘要	寛傷の可能性がある。		
瓦-268	出土位置	C区外(41-C-02客土内)	
挿図番号	485-5	写真図版	
類	女	生産地	吉井
			読 判 読 不 能
摘要	大の一部か。		
瓦-269	出土位置	C区外(表土)	
挿図番号	486-9	写真図版	
類	女	生産地	吉井
			読 判 読 不 能
摘要	文字の一部か漢数字の一。		









第515図 文字瓦類 (16)

第4章 検出された遺構・遺物

瓦-270		出土位置		C区外(41-C-02客土内)	
挿図番号		483-6		写真図版	
類	女	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
摘要		篋傷か。			
瓦-271		出土位置		C区外(表土)	
挿図番号		486-2		写真図版	
類	女	生産地	吉井		
					読 八
摘要		八は多胡郡矢田郷をあらわす。			
瓦-272		出土位置		C区外(表土)	
挿図番号		485-10		写真図版	
類	女	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
摘要		文字の一部と考えられる。			
瓦-273		出土位置		C区外(51-C-15Ⅲ層)	
挿図番号		483-9		写真図版	
類	女	生産地	笠懸		
					読 判 読 不 能
摘要					
瓦-274		出土位置		C区外(47-C-Ⅲ層)	
挿図番号		482-10		写真図版	
類	女	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
摘要		篋傷か。			
瓦-275		出土位置		C区外(西南)	
挿図番号		482-11		写真図版	
類	女	生産地	秋間		
					読 判 読 不 能
摘要		篋傷か。			
瓦-276		出土位置		C区外(表土)	
挿図番号		484-15		写真図版	
類	女	生産地	笠懸		
					読 判 読 不 能
摘要		篋傷の可能性もある。			
瓦-277		出土位置		C区外(Ⅲ層)	
挿図番号		486-8		写真図版	
類	女	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
摘要		篋傷か文字の一部か不明。			
瓦-278		出土位置		C区外(43-C-1客土)	
挿図番号		484-5		写真図版	
類	女	生産地	乗附		
					読 十
摘要		記号か。			

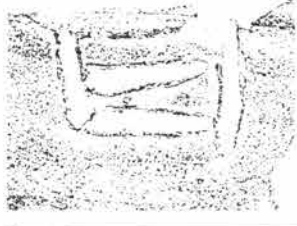

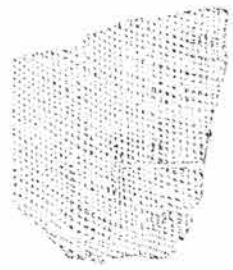






第516図 文字瓦類 (17)

第1節 南側調査区

瓦-279		出土位置		C区外(47-5Ⅲ層)	
挿図番号		484-17		写真図版	
類	女	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
					摘要
瓦-280		出土位置		C区外(57-8)	
挿図番号		483-11		写真図版	
類	女	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
					摘要
瓦-281		出土位置		C区外(不明)	
挿図番号		484-11		写真図版	
類	女	生産地	笠懸		
					読 判 読 不 能
					摘要
瓦-282		出土位置		C区外(不明)	
挿図番号		483-7		写真図版	
類	女	生産地	乗附		
					読 判 読 不 能
					摘要
瓦-283		出土位置		C区外(3号井戸No.16)	
挿図番号		483-14		写真図版	
類	女	生産地	笠懸		
					読 判 読 不 能
					摘要
瓦-284		出土位置		C区外(46-C-167粘土)	
挿図番号		485-8		写真図版	
類	女	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
					摘要
瓦-285		出土位置		C区外(Ⅲ層)	
挿図番号		483-4		写真図版	
類	女	生産地	秋間		
					読 大 か
					摘要
瓦-286		出土位置		C区外(表土)	
挿図番号		484-13		写真図版	
類	女	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
					摘要
瓦-287		出土位置		C区外(表土)	
挿図番号		483-17		写真図版	
類	女	生産地	秋間		
					読 判 読 不 能
					摘要

第517図 文字瓦類 (18)

第4章 検出された遺構・遺物

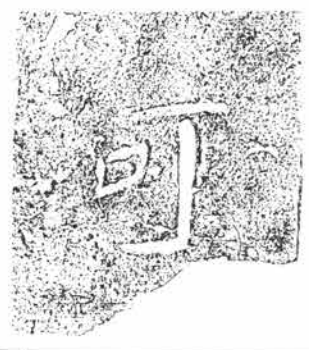

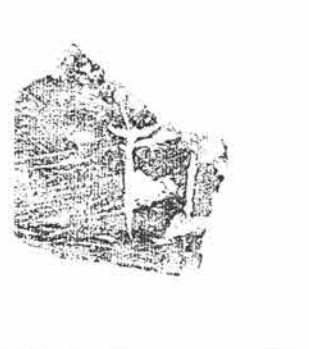




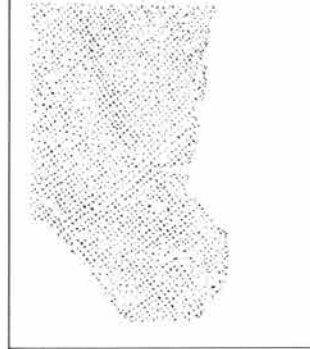
瓦-288		出土位置		C区外(集石土坑)	
挿図番号		486-6		写真図版	
類	女	生産地	吉井		
					読 判読不能
摘要	日か。				
瓦-289		出土位置		C区外(集石土坑)	
挿図番号		480-1		写真図版	
類	男	生産地	吉井		
					読 判読不能
摘要	文字の一部。				
瓦-290		出土位置		C区外(集石土坑)	
挿図番号		480-6		写真図版	
類	男	生産地	笠懸		
					読 判読不能
摘要	窺傷か。				
瓦-291		出土位置		C区外(集石土坑)	
挿図番号		485-9		写真図版	
類	女	生産地	吉井		
					読 判読不能
摘要	毛か手か壬。				
瓦-292		出土位置		C区外(集石土坑)	
挿図番号		481-21		写真図版	
類	女	生産地	吉井・藤岡		
					読 判読不能
摘要	文字の一部が窺傷か不分明。				
瓦-293		出土位置		C区外(集石土坑)	
挿図番号		479-16		写真図版	
類	男	生産地	吉井		
					読 判読不能
摘要	窺傷の可能性はある。				
瓦-294		出土位置		C区外(集石土坑)	
挿図番号		480-10		写真図版	
類	男	生産地	秋間		
					読 判読不能
摘要	文字の一部。				
瓦-295		出土位置		C区外(瓦群)	
挿図番号		477-25		写真図版	
類	鏡	生産地	吉井		
					読 大
摘要	赤色顔料附着。				
瓦-296		出土位置		C区外(44-C-02 客土フタ土)	
挿図番号		477-8		写真図版	
類	鏡	生産地	秋間		
					読 判読不能
摘要	窺傷の可能性が大きい。				

第518図 文字瓦類 (19)

瓦-297	出土位置	C区外(西南表土)	
挿図番号	479-14	写真図版	
類	男	生産地	吉井
			読 判読不能
摘要	文字の一部。		
瓦-298	出土位置	C区外(西南)	
挿図番号	483-2	写真図版	
類	女	生産地	吉井
			読 判読不能
摘要	範傷か。		
瓦-299	出土位置	C区外(表土)	
挿図番号	483-8	写真図版	
類	女	生産地	吉井
			読 子
摘要			
瓦-300	出土位置	C区外(表土)	
挿図番号	484-22	写真図版	
類	女	生産地	吉井
			読 南
摘要	既出例が多い。		
瓦-301	出土位置	C区外(表土)	
挿図番号	484-1	写真図版	
類	女	生産地	吉井
			読 判読不能
摘要	家か。		
瓦-302	出土位置	C区外(2号竪穴遺構)	
挿図番号	482-6	写真図版	
類	女	生産地	吉井
			読 判読不能
摘要	刻印。左拓本は印面の状態。		
瓦-303	出土位置	C区外(竪穴遺構)	
挿図番号	482-6	写真図版	
類	女	生産地	吉井
			読 十か
摘要			
瓦-304	出土位置	C区外(49-C-7Ⅲ層)	
挿図番号	482-2	写真図版	
類	女	生産地	吉井
			読 里□
摘要	瓦-331と同字か。		
瓦-305	出土位置	C区外(46-C-15Ⅲ層)	
挿図番号	482-1	写真図版	
類	女	生産地	吉井
			読 羊王か
摘要	生王・王王の可能性もある。		

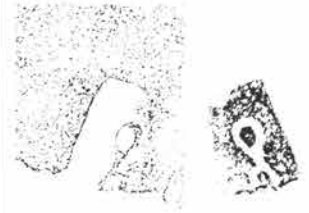







第519図 文字瓦類 (20)

第4章 検出された遺構・遺物

瓦-306		出土位置		C区外(49-C-7Ⅲ層)	
挿図番号	483-3	写真図版			
類	女	生産地	乗附		
					読 可
摘要					
瓦-307		出土位置		C区外(49-C-7Ⅲ層)	
挿図番号	484-3	写真図版			
類	女	生産地	吉井		
					読 十 か
摘要					
瓦-308		出土位置		C区外(49-C-7Ⅲ層)	
挿図番号	484-2	写真図版			
類	女	生産地	吉井		
					読 判読不能
摘要	平か2文字が考えられる。				
瓦-309		出土位置		C区外(45-C-01)	
挿図番号	485-12	写真図版			
類	女	生産地	秋間		
					読 判読不能
摘要	文字は確実に視される。				
瓦-310		出土位置		C区外(Ⅲ層)	
挿図番号	482-7	写真図版			
類	女	生産地	吉井		
					読 大
摘要					
瓦-311		出土位置		C区外(Ⅲ層)	
挿図番号	480-2	写真図版			
類	男	生産地	吉井		
					読 武 か
摘要	武は多胡郡武美郷か。				
瓦-312		出土位置		C区外(不明)	
挿図番号	479-15	写真図版			
類	男	生産地	乗附か藤岡		
					読 判読不能
摘要	文字の一部。				
瓦-313		出土位置		C区外(不明)	
挿図番号	483-12	写真図版			
類	女	生産地	吉井		
					読 十 か
摘要	文字の一部。				
瓦-314		出土位置		C区外(集石土坑)	
挿図番号	482-5	写真図版			
類	女	生産地	吉井		
					読 判読不能
摘要	寛傷か。				


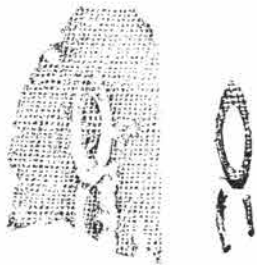


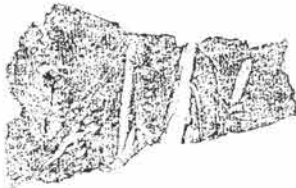


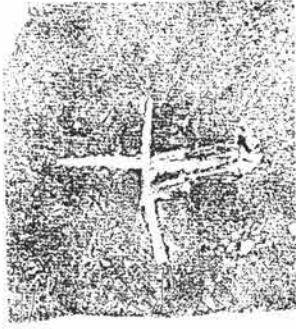
第520図 文字瓦類 (21)

第1節 南側調査区

瓦-315			出土位置		C区外(集石土坑)	
挿図番号		482-5		写真図版		
類	女	生産地	吉井			
						読多
摘要	瓦-178に同じ。					
瓦-316			出土位置		C区外(表土)	
挿図番号		484-6		写真図版		
類	女	生産地	吉井			
						読判読不能
摘要	2文字か、上位は十か。					
瓦-317			出土位置		C区外(表土)	
挿図番号		480-3		写真図版		
類	男	生産地	吉井			
						読判読不能
摘要	文字の一部。					
瓦-318			出土位置		C区外(西南)	
挿図番号		484-9		写真図版		
類	女	生産地	吉井			
						読判読不能
摘要	筥傷か。					
瓦-319			出土位置		C区外(不明)	
挿図番号		482-9		写真図版		
類	女	生産地	秋間			
						読判読不能
摘要	筥傷か。					
瓦-320			出土位置		C区外(表土)	
挿図番号		484-10		写真図版		
類	女	生産地	吉井			
						読日か
摘要						
瓦-321			出土位置		C区外(1号溝)	
挿図番号		484-20		写真図版		
類	女	生産地	笠懸			
						読文字欠失
摘要	園田の文字を伴う格子叩き。瓦-142と同じ。					
瓦-322			出土位置		C区外(4号溝1区)	
挿図番号		484-12		写真図版		
類	女	生産地	吉井			
						読判読不能
摘要	文字か。					
瓦-323			出土位置		C区外(4号溝1区)	
挿図番号		484-21		写真図版		
類	女	生産地	吉井			
						読田か
摘要	田か。					


第521図 文字瓦類 (22)

第4章 検出された遺構・遺物

瓦-324		出土位置		C区外(V)	
挿図番号		480-4		写真図版	
類	男	生産地	吉井		
					読 千 か
摘要					
瓦-325		出土位置		C区外(V・B・C)	
挿図番号		480-5		写真図版	
類	男	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
摘要	窺傷か。				
瓦-326		出土位置		C区外(V表土)	
挿図番号		480-9		写真図版	
類	男	生産地	吉井		
					読 押 読 か
摘要	型上乃至型に粘土を乗せる以前のもの。				
瓦-327		出土位置		C区外(表土)	
挿図番号		480-8		写真図版	
類	男	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
摘要	文字の一部。				
瓦-328		出土位置		C区外(V・B・C)	
挿図番号		480-11		写真図版	
類	男	生産地	秋間		
					読 判 読 不 能
摘要	文字の一部か。				
瓦-329		出土位置		C区外(集石土坑)	
挿図番号		483-15		写真図版	
類	女	生産地	乗附		
					読 判 読 不 能
摘要	窺傷の可能性はある。				
瓦-330		出土位置		C区外(20号土坑)	
挿図番号		482-4		写真図版	
類	女	生産地	吉井		
					読 長 女
摘要	女は万呂の異体字。				
瓦-331		出土位置		C区外(2号土坑)	
挿図番号		486-4		写真図版	
類	女	生産地	吉井		
					読 里
摘要	瓦-304と同字か。 筆致が瓦-300と同じ。				
瓦-332		出土位置		C区外(31号土坑墓)	
挿図番号		485-15		写真図版	
類	女	生産地	吉井		
					読 十
摘要					




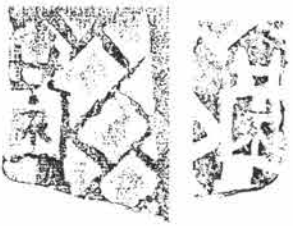



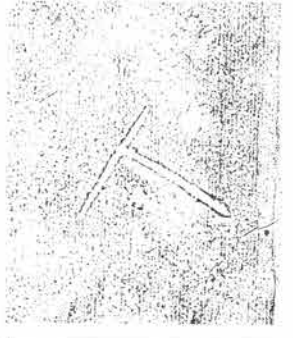

第522図 文字瓦類(23)

第1節 南側調査区

瓦-333	出土位置	C区外(34号土壌墓)	
挿図番号	483-13	写真図版	
類	女	生産地	吉井・藤岡
			読 判 読 不 能
摘要	止の左文字か。		
瓦-334	出土位置	C区外(1号溝)	
挿図番号	484-14	写真図版	
類	女	生産地	吉井
			読 大 口
摘要	2文字以上が考えられる。		
瓦-335	出土位置	C区外(不明)	
挿図番号	485-13	写真図版	
類	女	生産地	吉井・藤岡
			読 人
摘要			
瓦-336	出土位置	C区外(2号井戸)	
挿図番号	484-8	写真図版	
類	女	生産地	吉井
			読 女 か
摘要	万呂の異体字。		
瓦-337	出土位置	C区外(表土)	
挿図番号	488-11	写真図版	
類	女	生産地	乗附
			読 記 号 か
摘要			
瓦-338	出土位置	C区外(V-4-C)	
挿図番号	481-20	写真図版	
類	女	生産地	乗附か吉井
			読 山 為 口
摘要	山は田胡郡山字郷をあらわす。		
瓦-339	出土位置	C区外(V・Aトレ)	
挿図番号	485-1	写真図版	
類	女	生産地	吉井
			読 人
摘要			
瓦-340	出土位置	C区外(IV-4-C)	
挿図番号	489-10	写真図版	
類	女	生産地	吉井
			読 文
摘要			
瓦-341	出土位置	C区外(南東表土)	
挿図番号	484-16	写真図版	
類	女	生産地	笠懸
			読 判 読 不 能
摘要	匱傷の可能性がある。		

第523図 文字瓦類(24)

第4章 検出された遺構・遺物

瓦-342		出土位置		C区外(不明)	
挿図番号		485-4		写真図版	
類	女	生産地	吉井		
					読 判読不能
					摘要
瓦-343		出土位置		C区57号住居	
挿図番号		139-12		写真図版	
類	女	生産地	吉井		
					読 判読不能
					摘要
瓦-344		出土位置		C区外(49-C-7Ⅲ層)	
挿図番号		492-9		写真図版	
類	女	生産地	笠懸		
					読 勢
					摘要
瓦-345		出土位置		C区外(集石下)	
挿図番号		492-8		写真図版	
類	女	生産地	笠懸		
					読 菌田
					摘要
瓦-346		出土位置			
挿図番号				写真図版	
類	女	生産地			
					読 山長
					摘要
瓦-347		出土位置			
挿図番号				写真図版	
類	女	生産地	吉井		
					読 山
					摘要
瓦-348		出土位置		B区1号住居	
挿図番号		315-1		写真図版 192	
類	男	生産地	吉井		
					読 十
					摘要
瓦-349		出土位置		B区1号住居	
挿図番号		316-1		写真図版 192	
類	男	生産地	吉井		
					読 人
					摘要
瓦-350		出土位置		B区1号住居	
挿図番号		315-2		写真図版 192	
類	男	生産地	吉井		
					読 一
					摘要

第524図 文字瓦類 (25)

第1節 南側調査区

瓦-351			出土位置 B区1号住居		
挿図番号	317-1	写真図版	192		
類	男	生産地	吉井		
					読 判読不能
摘要	一か。				
瓦-352			出土位置 B区1号住居		
挿図番号	321-1	写真図版	193		
類	女	生産地	吉井		
					読 衣
摘要					
瓦-353			出土位置 B区1号住居		
挿図番号	320-1	写真図版	194		
類	女	生産地	吉井		
					読 十
摘要	寛傷の可能性はある。				
瓦-354			出土位置 B区1号住居		
挿図番号	313-4	写真図版	193		
類	女	生産地	乗附		
					読 代
摘要					
瓦-355			出土位置 B区1号住居		
挿図番号	313-1	写真図版	191		
類	男	生産地	吉井		
					読 手
摘要	筆致は瓦-291に同じ。				
瓦-356			出土位置 B区1号住居		
挿図番号	319-1	写真図版	194		
類	女	生産地	吉井		
					読 乙
摘要					
瓦-357			出土位置 B区2号住居		
挿図番号	325-2	写真図版	197		
類	女	生産地	吉井		
					読 十
摘要					
瓦-358			出土位置 B区2号住居		
挿図番号	325-3	写真図版	197		
類	女	生産地	吉井		
					読 八島呂部
摘要	八は多胡郡矢田郷をあらわす。4文字が描かれている。国分寺既出例に島呂部真分良がある。				
瓦-359			出土位置 B区8号住居		
挿図番号	338-8	写真図版	201		
類	女	生産地	笠懸		
					読 十二
摘要	笠懸窯跡部の寛描文字には漢数字が多い。				

第525図 文字瓦類 (26)

第4章 検出された遺構・遺物

瓦-360		出土位置		B区8号住居	
挿図番号		338-9		写真図版	
				201	
類		女		生産地	
				秋間	
					読大
摘要					
瓦-154に同じ。					
瓦-361		出土位置		B区14号住居	
挿図番号		355-4		写真図版	
				207	
類		女		生産地	
				吉井	
					読中止
摘要					
瓦-193に同じ。					
瓦-362		出土位置		B区14号住居	
挿図番号		357-1		写真図版	
				207	
類		女		生産地	
				吉井	
					読人
摘要					
瓦-363		出土位置		B区16号住居	
挿図番号		364-17		写真図版	
				210	
類		女		生産地	
				吉井	
					読上
摘要					
瓦-364		出土位置		B区17号住居	
挿図番号		371-6		写真図版	
				213	
類		女		生産地	
				吉井	
					読八田甲斐女
摘要					
女は万呂、既出例が多い。瓦-207と同じ。					
瓦-365		出土位置		B区20号住居	
挿図番号		377-11		写真図版	
				214	
類		男		生産地	
				吉井	
					読判読不能
摘要					
篋傷か。					
瓦-366		出土位置		B区22号住居	
挿図番号		383-4		写真図版	
				216	
類		男		生産地	
				吉井	
					読判読不能
摘要					
篋傷の可能性もある。					
瓦-367		出土位置		B区22号住居	
挿図番号		384-1		写真図版	
				217	
類		女		生産地	
				吉井	
					読足
摘要					
瓦-368		出土位置		B区23号住居	
挿図番号		386-1		写真図版	
				218	
類		女		生産地	
				吉井	
					読判読不能
摘要					
文字の一部。					


第526図 文字瓦類 (27)

第1節 南側調査区

瓦-369	出土位置	B区27号住居	
挿図番号	389-3	写真図版	219
類	女	生産地	吉井
			読 大
摘要	文字が小さい。		


瓦-370	出土位置	B区38号住居	
挿図番号	403-1	写真図版	221
類	鏡か	生産地	吉井
			読 木 木
摘要	同じ文字を2つ描くのは少ない。		

瓦-371	出土位置	B区38号住居	
挿図番号	405-3	写真図版	222
類	女	生産地	吉井
			読 判 読 不 能
摘要	文字の一部、一か。		

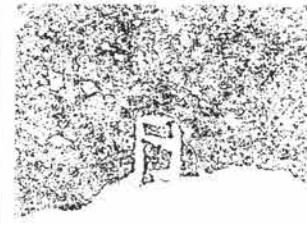
瓦-372	出土位置	B区39号住居	
挿図番号	410-2	写真図版	224
類	女	生産地	吉井
			読 十
摘要			

瓦-373	出土位置	B区49号住居	
挿図番号		写真図版	
類	女	生産地	藤岡
			読 判 読 不 能
摘要	匔傷か。		

瓦-374	出土位置	B区1号井戸	
挿図番号	451-1	写真図版	248
類	女	生産地	吉井
			読 判 読 不 能
摘要	匔傷か。		


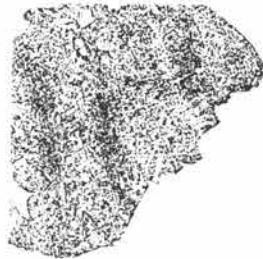

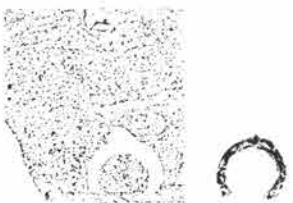

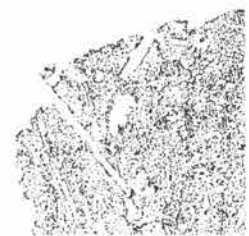



瓦-375	出土位置	B区1号井戸	
挿図番号	451-2	写真図版	249
類	女	生産地	吉井
			読 生 か
摘要	生は壬生氏をあらわす。		

瓦-376	出土位置	B区外(1号溝7-ロ-B)	
挿図番号	494-8	写真図版	
類	字	生産地	笠懸
			読 十
摘要	記号の可能性はある。		

瓦-377	出土位置	B区外(1号溝5-イ-A)	
挿図番号	494-9	写真図版	
類	男	生産地	吉井
			読 判 読 不 能
摘要	月、目等の文字と思われる。		

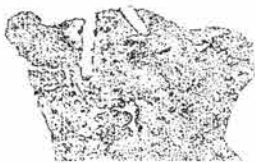


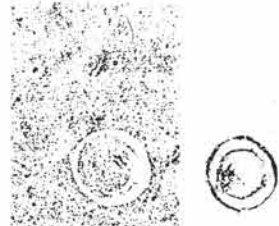
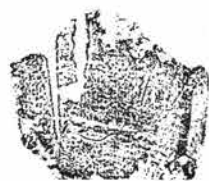

第527図 文字瓦類 (28)

第4章 検出された遺構・遺物

瓦-378		出土位置 B区外(1号溝)		挿図番号 495-6		写真図版	
類	男	生産地	笠懸				
				読 判 読 不 能			
摘要	読傷か。						
瓦-379		出土位置 B区外(1号溝)		挿図番号 494-10		写真図版	
類	男	生産地	吉井・藤岡				
				読 真 か			
摘要	読傷か。						
瓦-380		出土位置 B区外(1号溝)		挿図番号 494-10		写真図版	
類	男	生産地	藤岡				
				読 當			
摘要	刻印、金山瓦窯跡での既出例がある。						
瓦-381		出土位置 B区外(1号溝7ク土)		挿図番号 495-3		写真図版	
類	男	生産地	吉井				
				読 記 号 か			
摘要	左拓本は印面側の拓本。						
瓦-382		出土位置 B区外(1号溝)		挿図番号 496-15		写真図版	
類	女	生産地	吉井				
				読 真			
摘要	瓦-175と同じ筆跡か。						
瓦-383		出土位置 B区外(1号溝)		挿図番号 495-8		写真図版	
類	女	生産地	吉井				
				読 □ □			
摘要	読傷か。						
瓦-384		出土位置 B区外(1号溝)		挿図番号 495-1		写真図版	
類	男	生産地	吉井				
				読 得			
摘要							
瓦-385		出土位置 B区外(1号溝)		挿図番号 495-11		写真図版	
類	女	生産地	吉井				
				読 田			
摘要							
瓦-386		出土位置 B区外(1号溝)		挿図番号 495-15		写真図版	
類	女	生産地	吉井・藤岡				
				読 人			
摘要	瓦-339と同じ筆致。						


第528図 文字瓦類 (29)

第1節 南側調査区

瓦-387		出土位置 B区外(1号溝)		挿図番号 495-9		写真図版	
類	女	生産地	吉井				
							読 判 読 不 能
摘要	文字の一部。						
瓦-388		出土位置 B区外(1号溝)		挿図番号 495-12		写真図版	
類	女	生産地	吉井				
							読 判 読 不 能
摘要	匱傷か。						
瓦-389		出土位置 B区外(1号溝3-ロ)		挿図番号 495-14		写真図版	
類	女	生産地	吉井か				
							読 判 読 不 能
摘要							
瓦-390		出土位置 B区外(1号溝)		挿図番号 495-10		写真図版	
類	女	生産地	秋間か				
							読 判 読 不 能
摘要	匱傷か。						
瓦-391		出土位置 B区外(1号溝7-ロ-B)		挿図番号 495-16		写真図版	
類	女	生産地	笠懸				
							読 勢
摘要	勢多郡をあらわす。 左の拓本は印面側の拓本。						
瓦-392		出土位置 B区外(1号溝5-イ-A)		挿図番号 495-2		写真図版	
類	女	生産地	吉井				
							読 記 号 か
摘要	瓦-143 } と同一。 瓦-217 }						
瓦-393		出土位置 B区外(1号溝)		挿図番号 495-7		写真図版	
類	女	生産地	笠懸				
							読 二 か
摘要	匱傷か。						
瓦-394		出土位置 B区外(1号溝)		挿図番号 496-11		写真図版	
類	女	生産地	吉井				
							読 判 読 不 能
摘要	文字の一部。						
瓦-395		出土位置 B区外(1号溝)		挿図番号 495-13		写真図版	
類	女	生産地	吉井・藤岡				
							読 織 か
摘要	糸か。 瓦-238に同じ。						




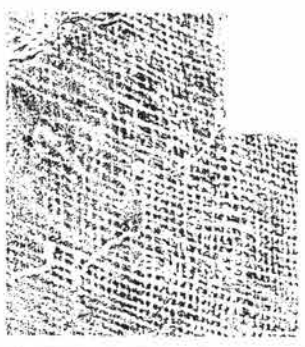
第529図 文字瓦類 (30)

第4章 検出された遺構・遺物

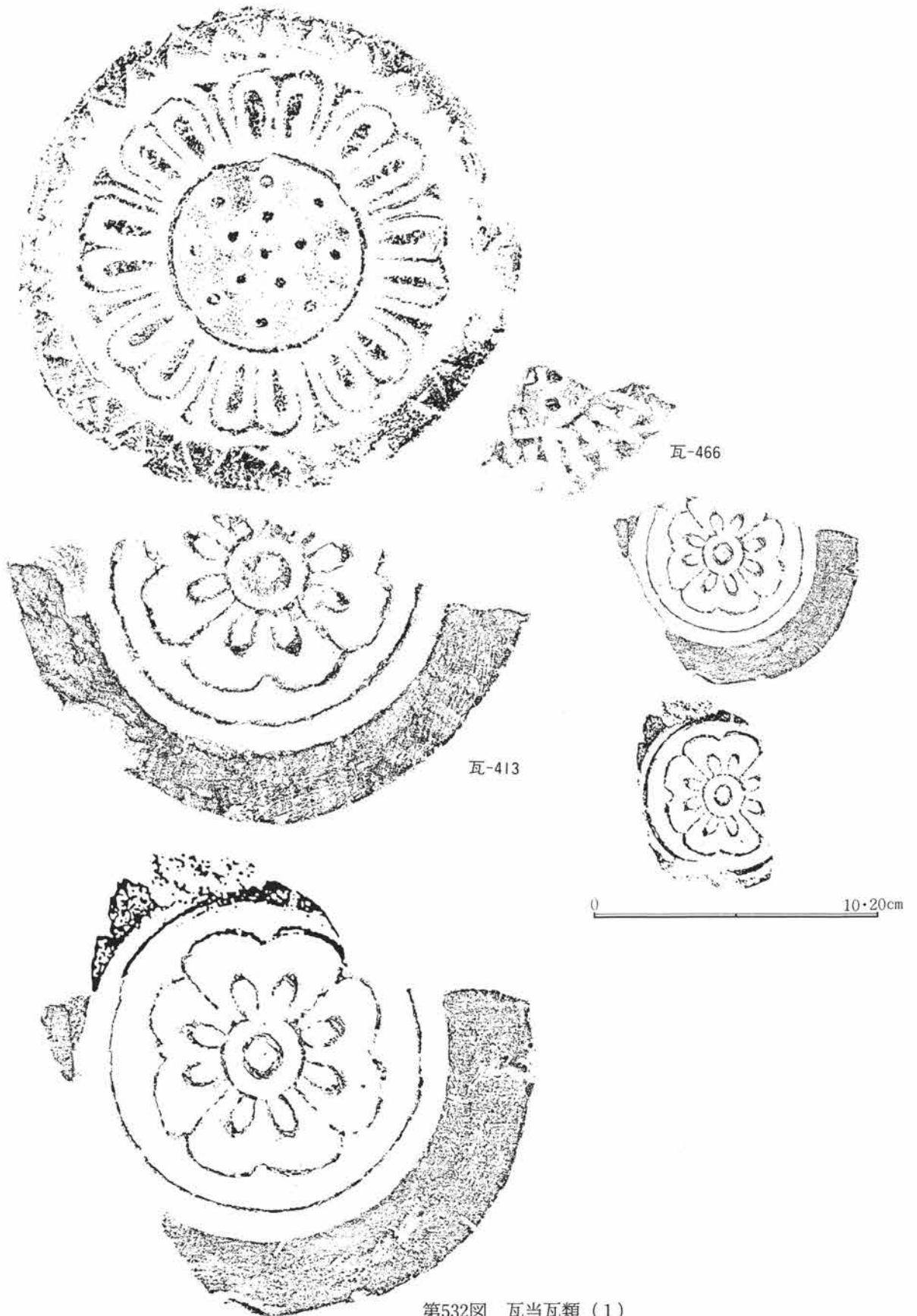
瓦-396	出土位置	B区外(B区1号溝)	
挿図番号	496-1	写真図版	
類	男	生産地	笠懸
			読 大
摘要			
瓦-397	出土位置	B区外(B区1号溝)	
挿図番号	495-4	写真図版	
類	女	生産地	吉井
			読 十 か
摘要			
瓦-546	出土位置	C区外(W-2-E)	
挿図番号	486-5	写真図版	
類	女	生産地	笠懸
			読 菌 田
摘要	瓦-142に同じ。		
瓦-547	出土位置	C区外(W-B-2)	
挿図番号	484-7	写真図版	
類	女	生産地	笠懸
			読 判 読 不 能
摘要	文字の一部か。		
瓦-548	出土位置	C区外(W-B-2)	
挿図番号	485-11	写真図版	
類	女	生産地	吉井
			読 判 読 不 能
摘要	金か。		
瓦-549	出土位置	C区外(V-)	
挿図番号	484-19	写真図版	
類	女	生産地	笠懸
			読 山 田
摘要	山田郡をあらわしている。		
瓦-550	出土位置	C区外(W-B-2)	
挿図番号	486-1	写真図版	
類	女	生産地	乗附
			読 判 読 不 能
摘要	筧傷と考えられる。		
瓦-551	出土位置	C区外僧寺南門か中門 周辺表採	
挿図番号	486-3	写真図版	
類	女	生産地	笠懸
			読 菌 田
摘要	瓦-142に同じ。		
瓦-552	出土位置	C区外僧寺金堂跡表採	
挿図番号	485-3	写真図版	
類	女	生産地	笠懸
			読 佐 ・ 勢
摘要	瓦-196に同じ。		

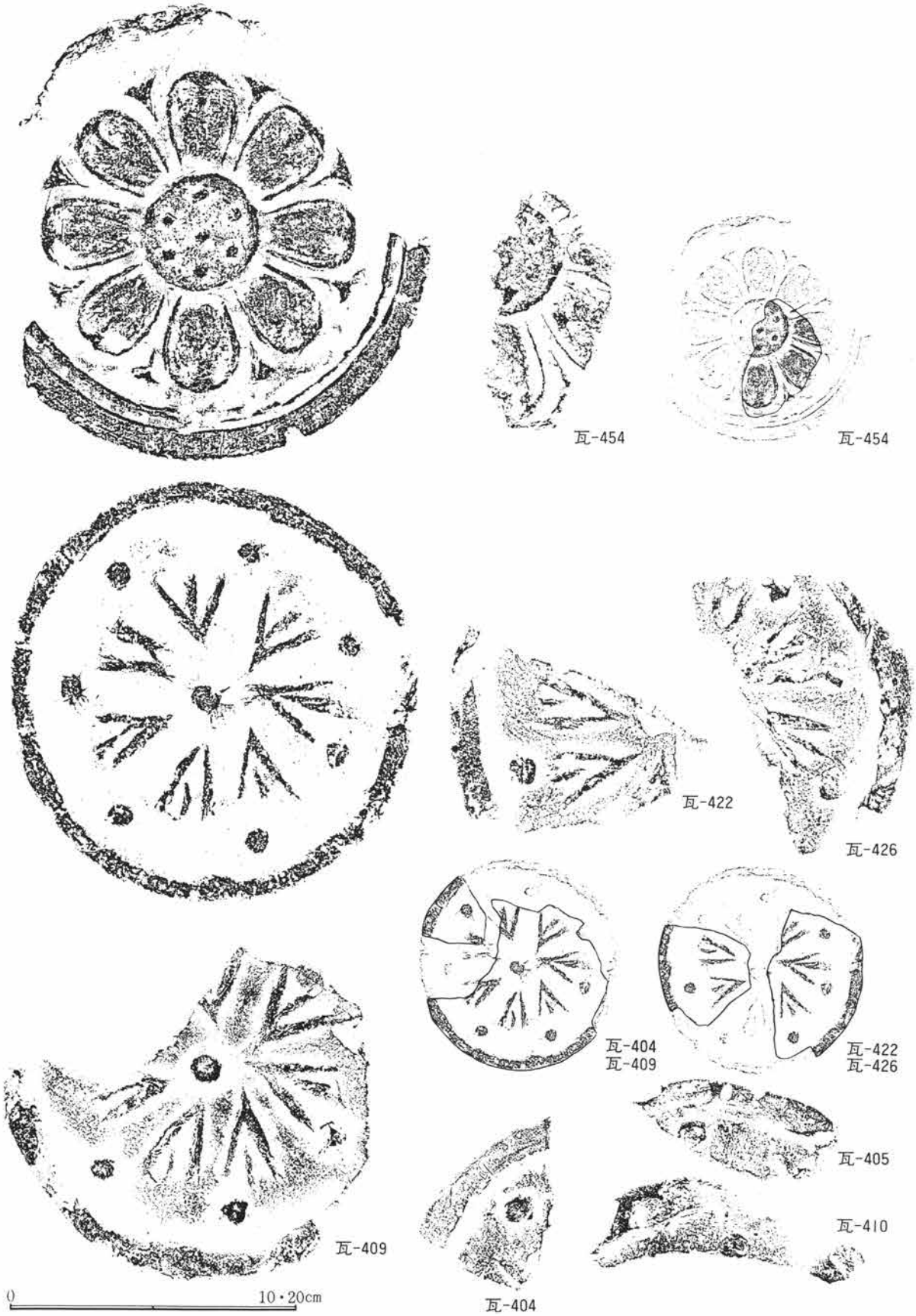
第530図 文字瓦類 (31)

第1節 南側調査区

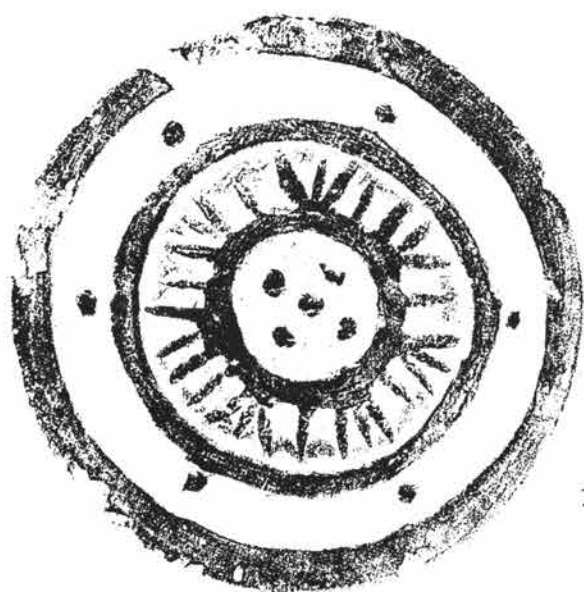
瓦-555		出土位置 C区外(Ⅳ-2-E)	
挿図番号	489-1	写真図版	
類	女	生産地	笠懸
			読 三 (四か)
摘要	笠懸窯跡群の窺描き文字には漢数字が多い。		
瓦-556		出土位置 C区外(V-4-B)	
挿図番号	483-10	写真図版	
類	女	生産地	吉井
			読 判読不能
摘要	窺傷か。		
瓦-559		出土位置 C区外(Ⅲ-4-JP-表土)	
挿図番号	481-19	写真図版	
類	男	生産地	乗附
			読 長か
摘要			
瓦-560		出土位置 C区外(C区表土)	
挿図番号	483-16	写真図版	
類	男	生産地	秋間
			読 判読不能
摘要	記号か、瓦-561と接合。		
瓦-561		出土位置 C区外	
挿図番号	482-3	写真図版	
類	男	生産地	秋間
			読 判読不能
摘要	瓦-560と同じ。		
瓦-562		出土位置 B区17号住居	
挿図番号	372-1	写真図版	
類	女	生産地	吉井
			読 半読不能
摘要	窺傷か。		
瓦-569		出土位置 B区49号住居	
挿図番号		写真図版	
類	女	生産地	笠懸
			読 井
摘要			
瓦-570		出土位置 C区外(C区Ⅲ層)	
挿図番号	480-12	写真図版	
類	男	生産地	笠懸
			読 判読不能
摘要	文字の一部。		

第531図 文字瓦類 (32)

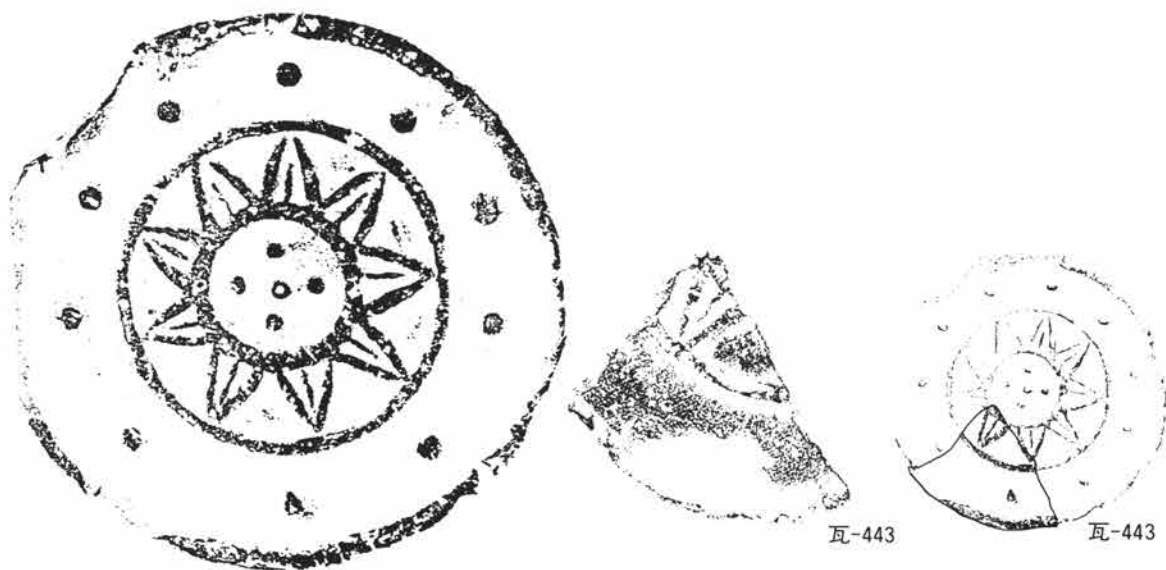




第533図 瓦当瓦類(2)



瓦-453

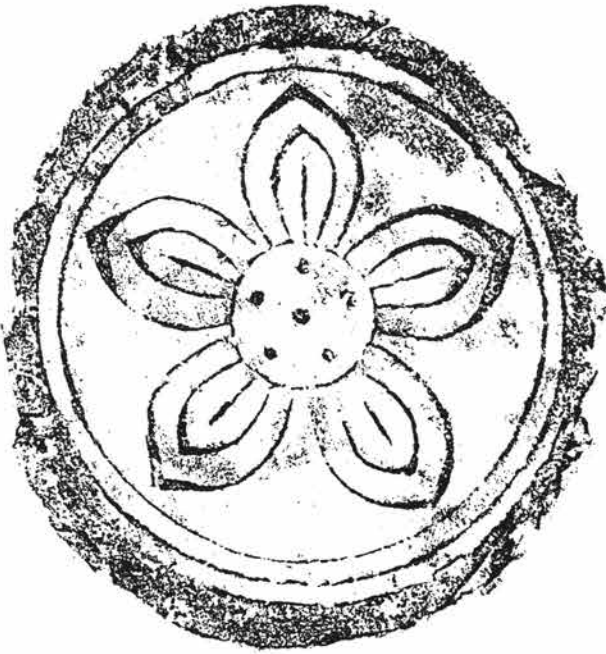


瓦-443

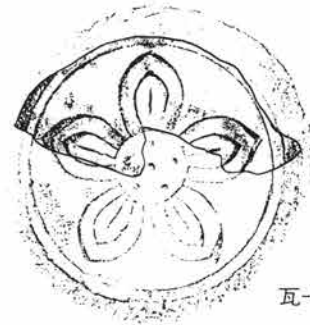
瓦-443

0 10・20cm

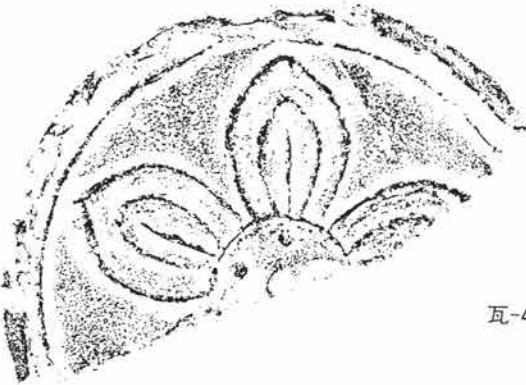
第534図 瓦当瓦類(3)



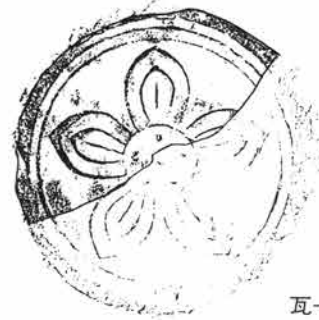
瓦-401



瓦-401



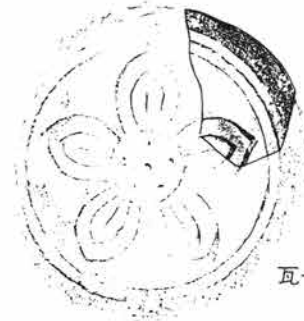
瓦-411



瓦-411



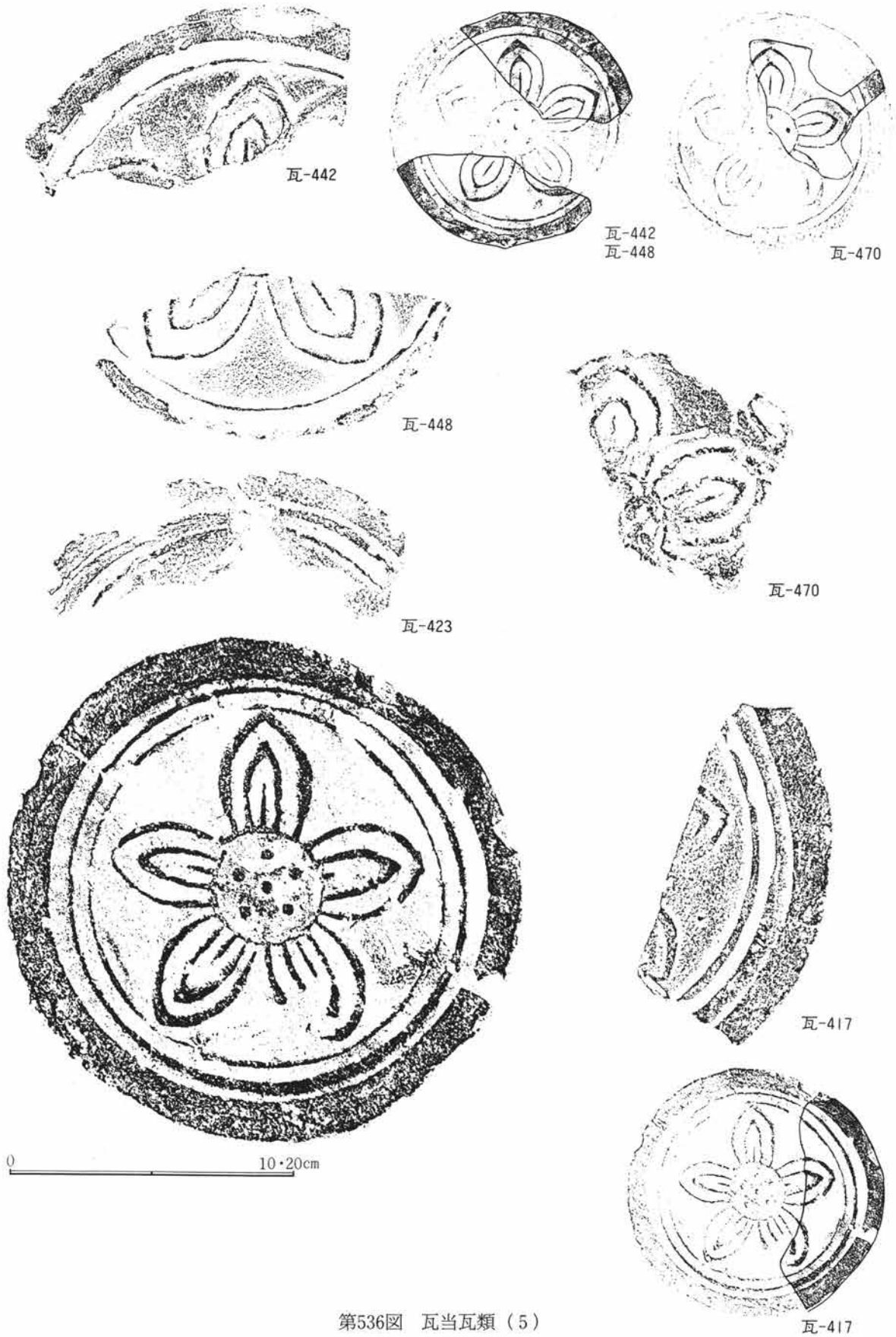
瓦-424



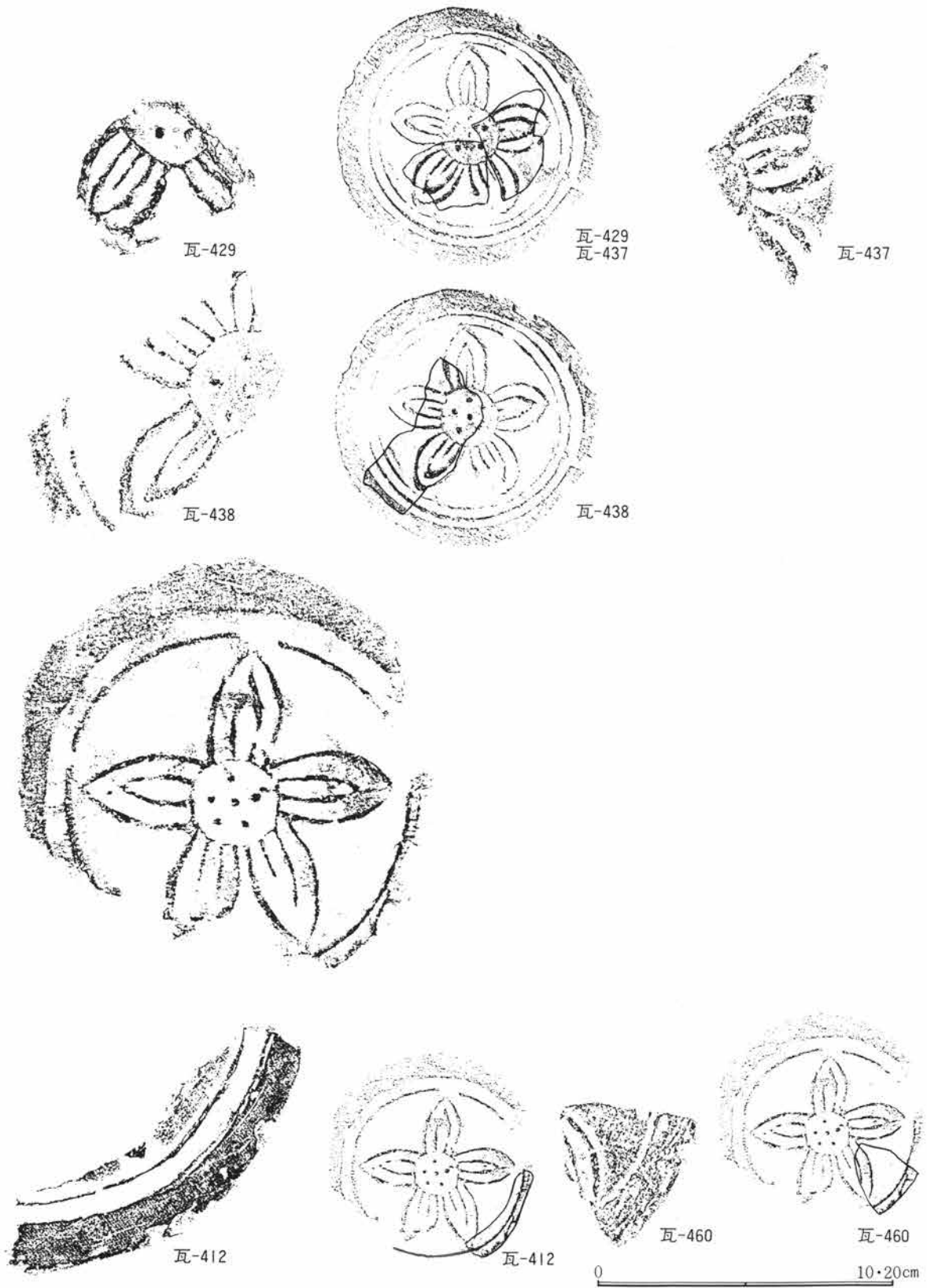
瓦-424

0 10・20cm

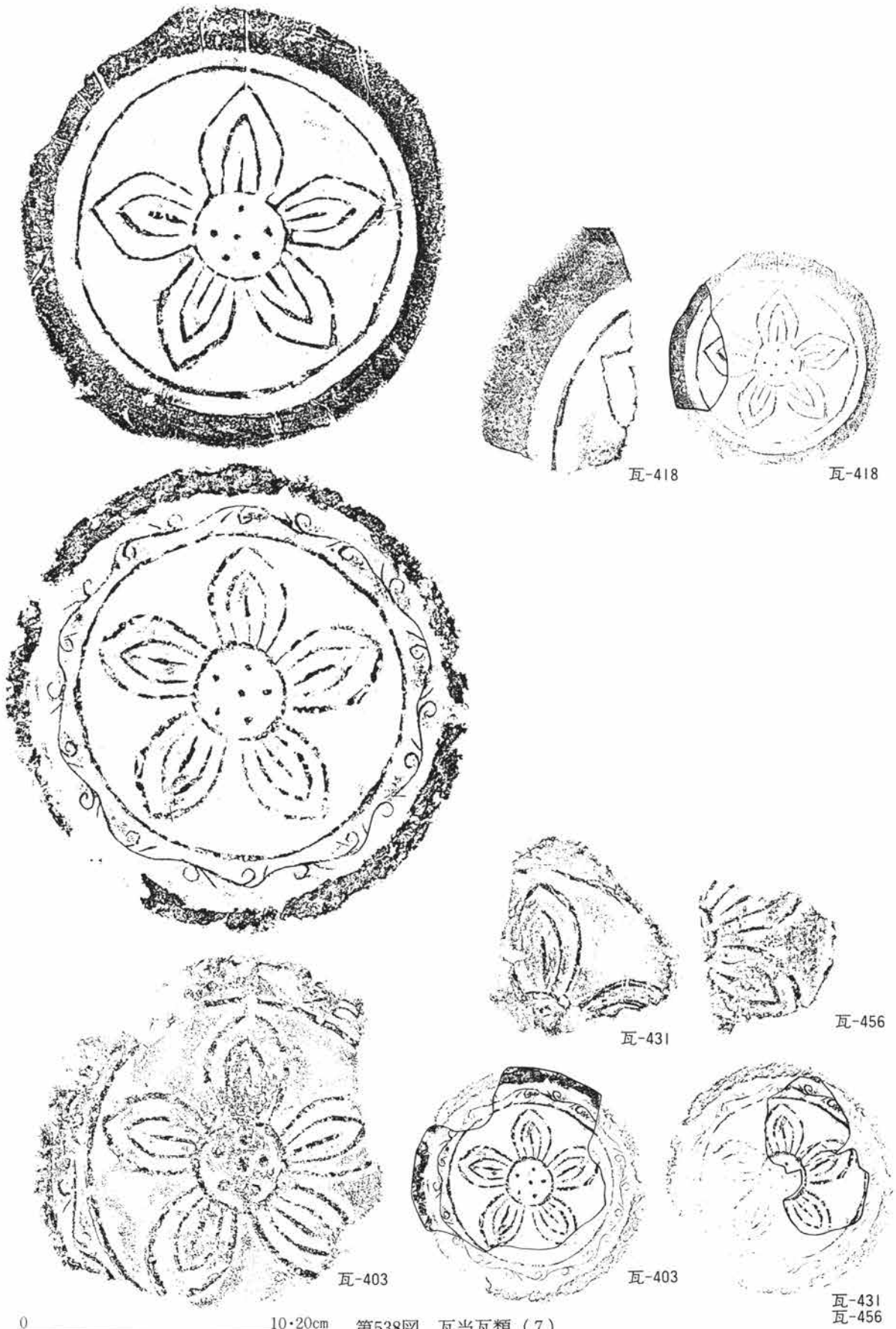
第535図 瓦当瓦類(4)



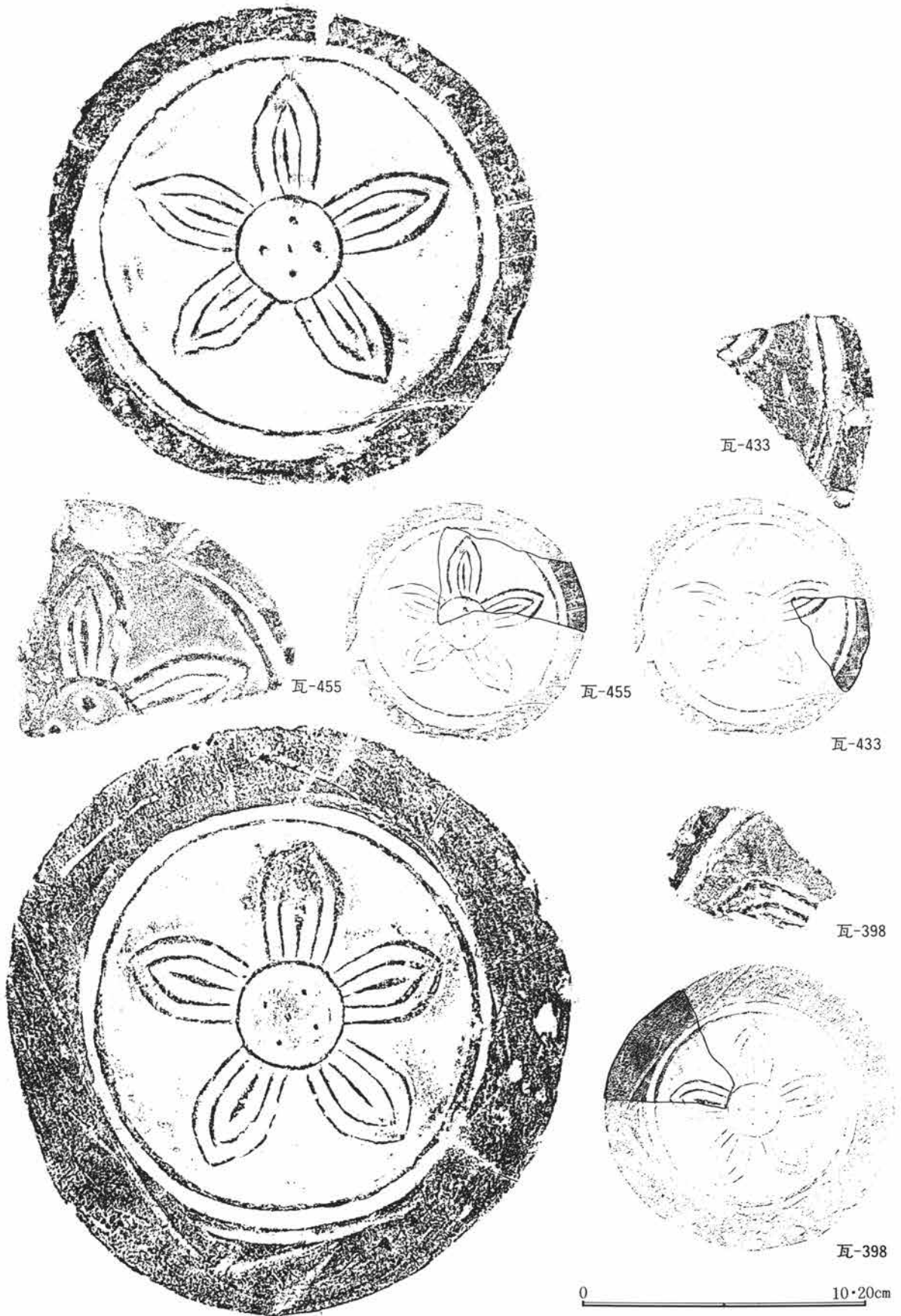
第536図 瓦当瓦類 (5)



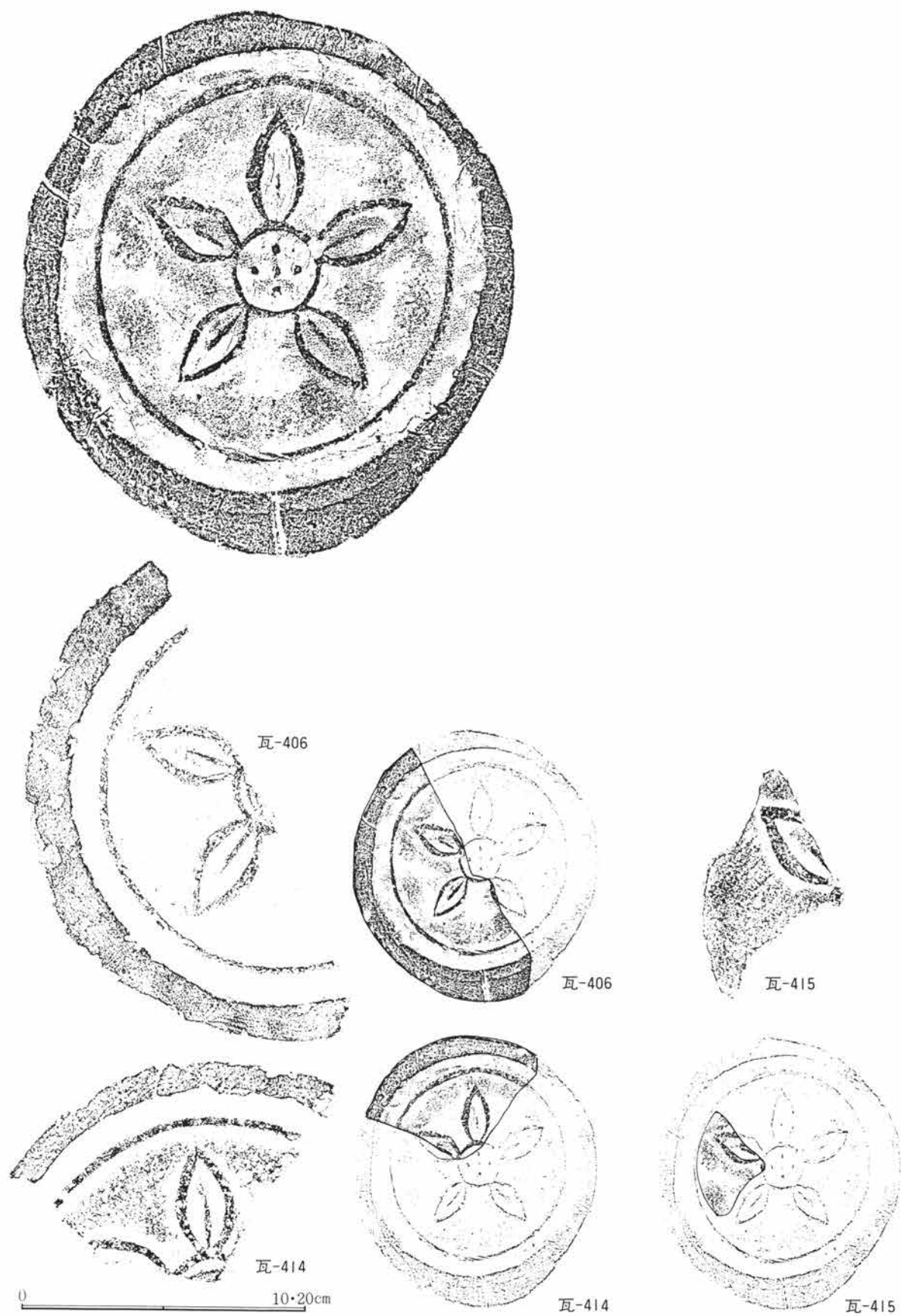
第537図 瓦当瓦類(6)



第538図 瓦当瓦類 (7)



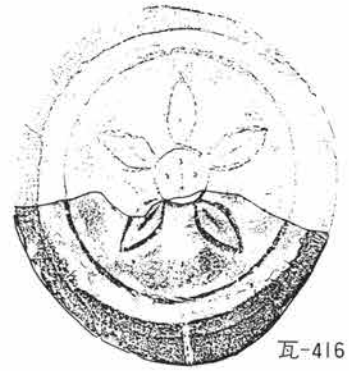
第539図 瓦当瓦類 (8)



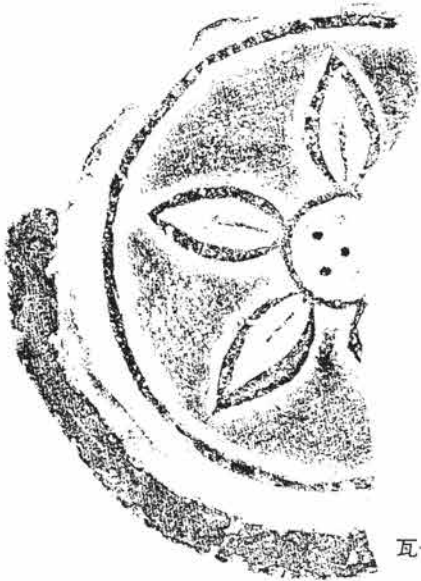
第540図 瓦当瓦類 (9)



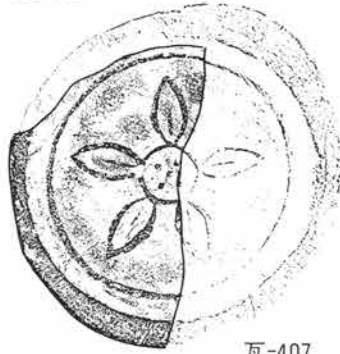
瓦-416



瓦-416



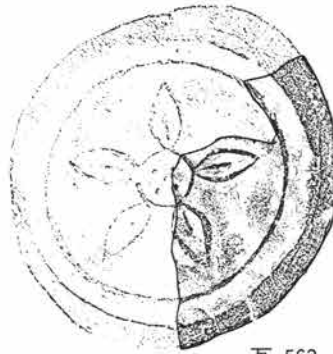
瓦-407



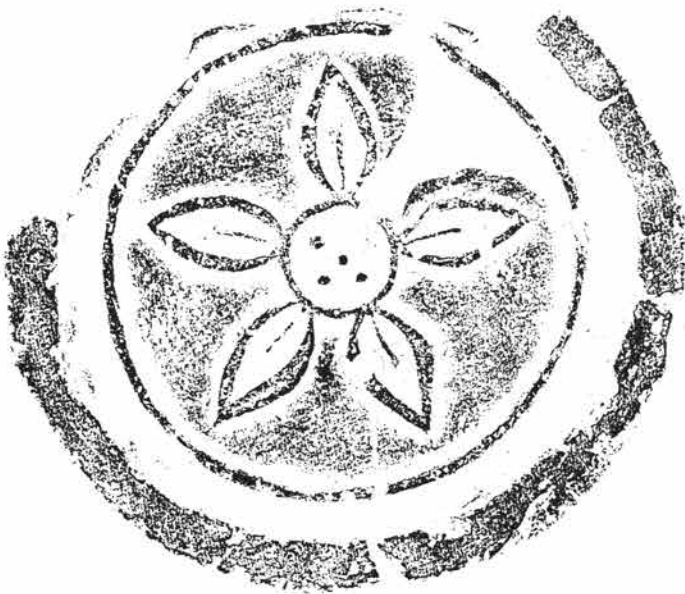
瓦-407



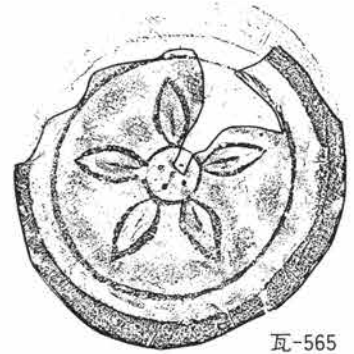
瓦-563



瓦-563



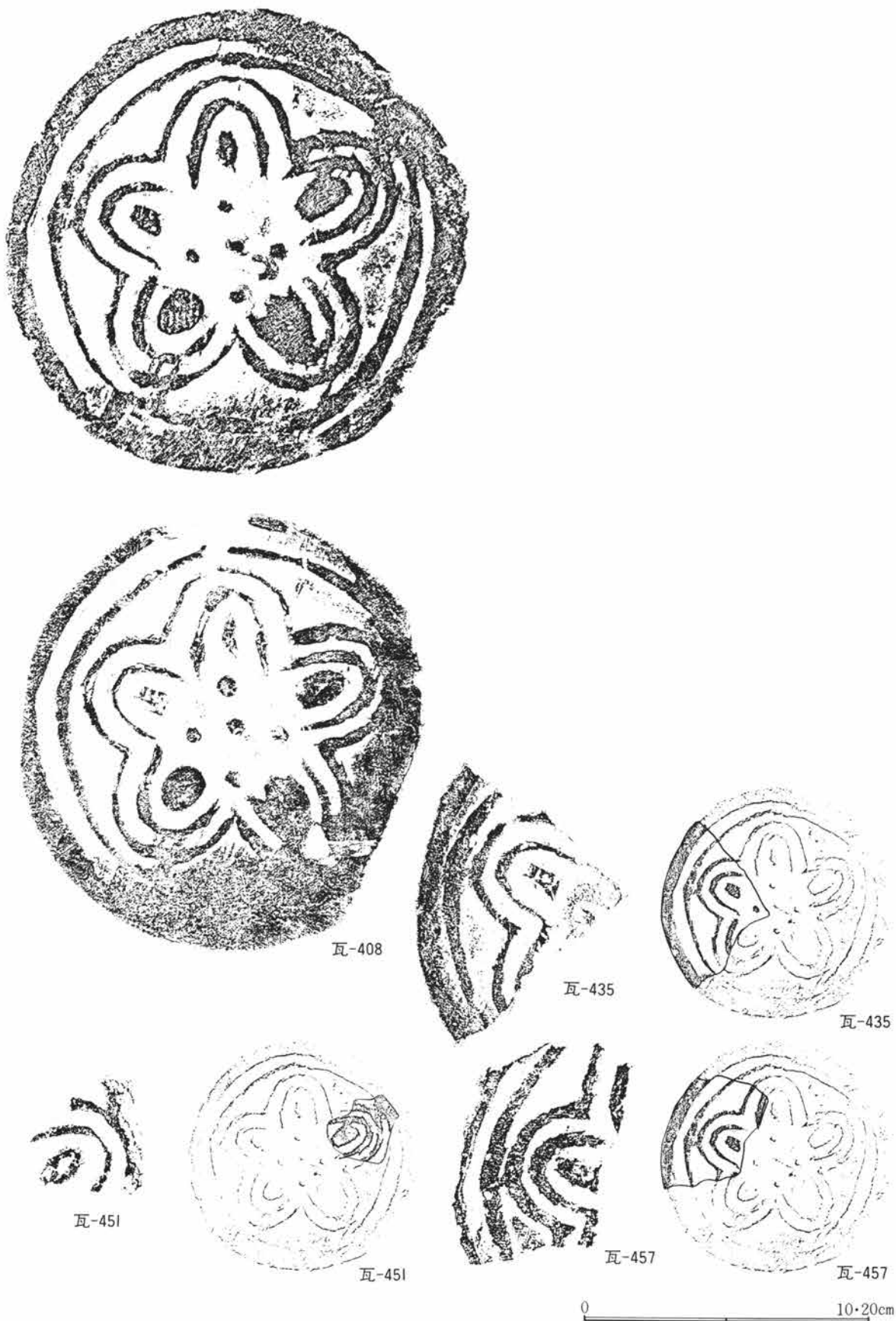
瓦-565



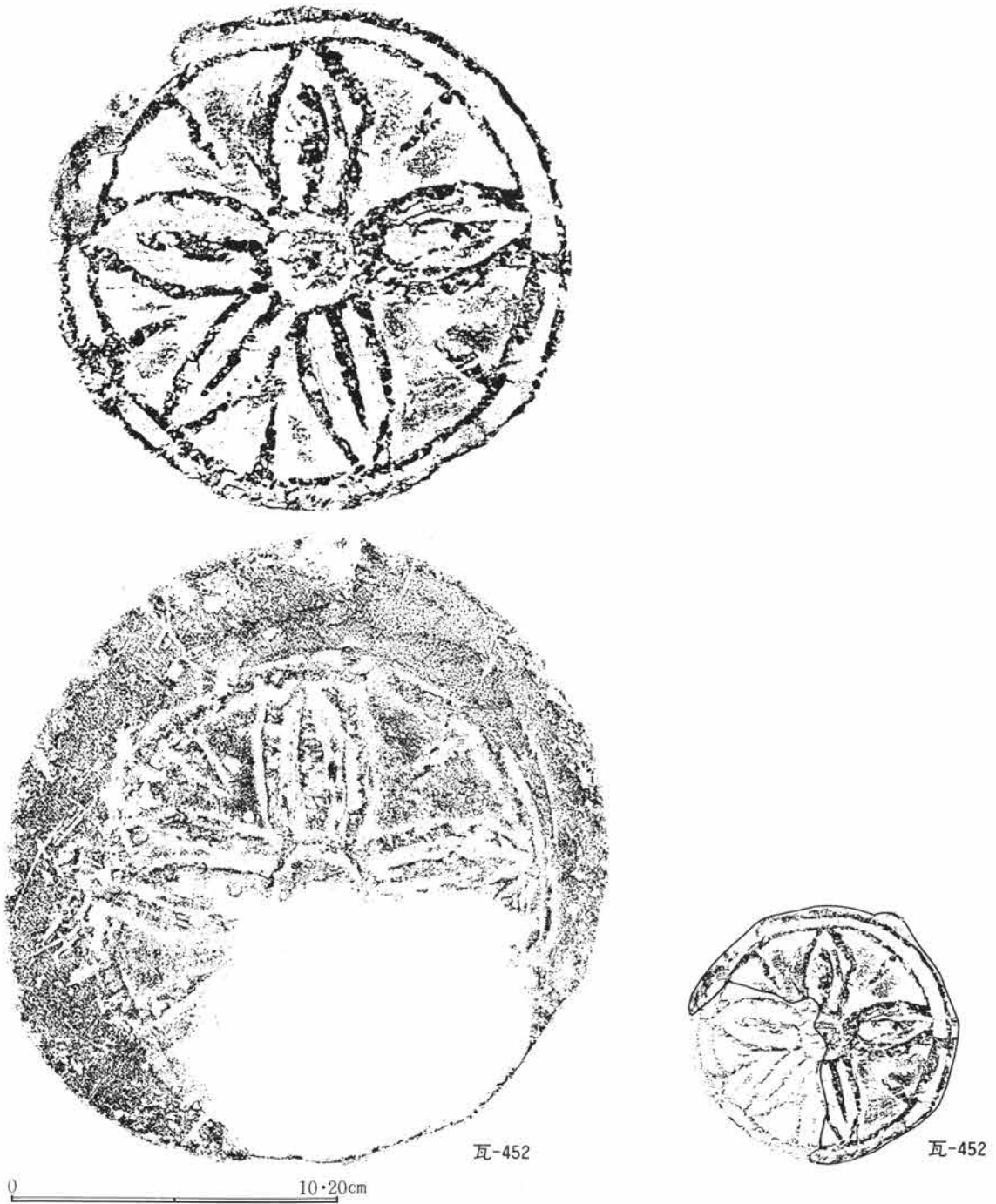
瓦-565

0 10・20cm

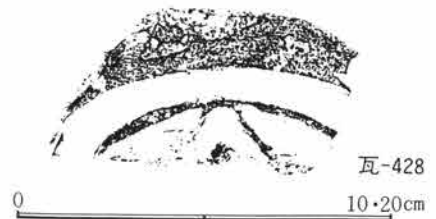
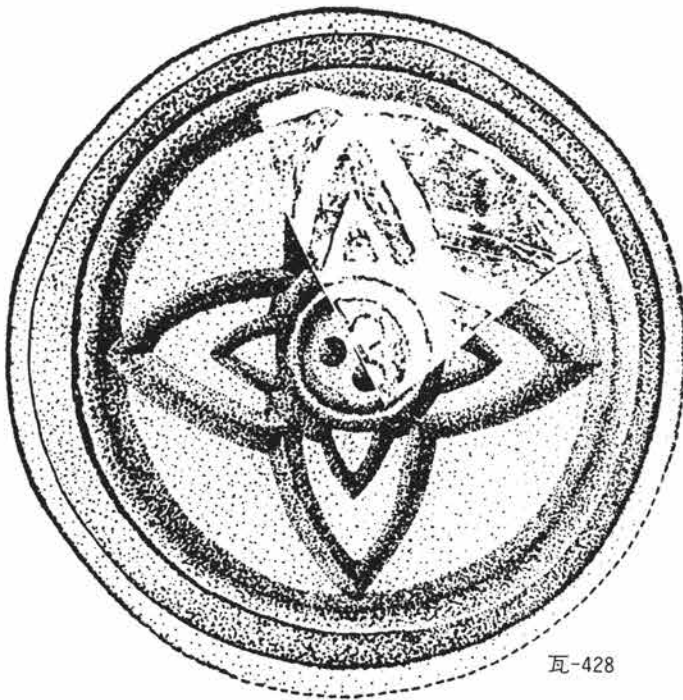
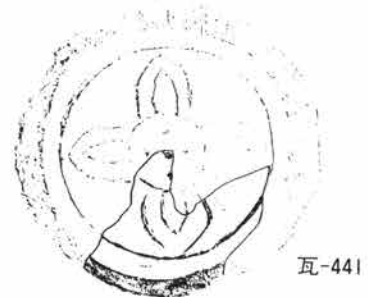
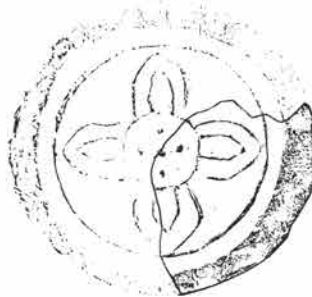
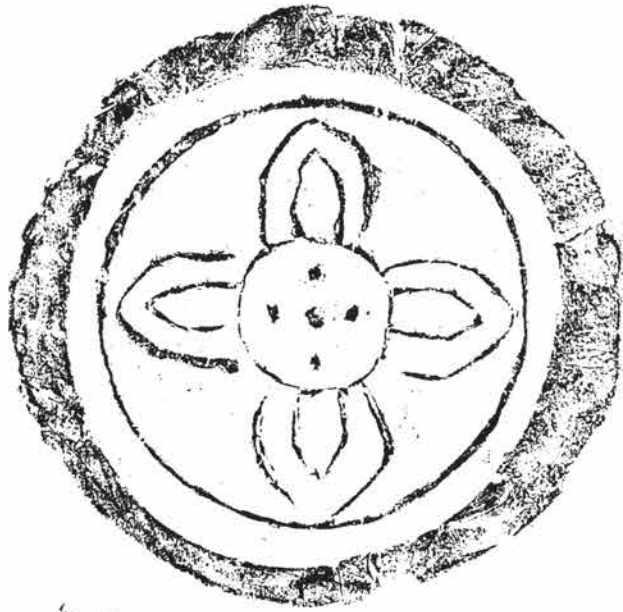
第541図 瓦当瓦類 (10)



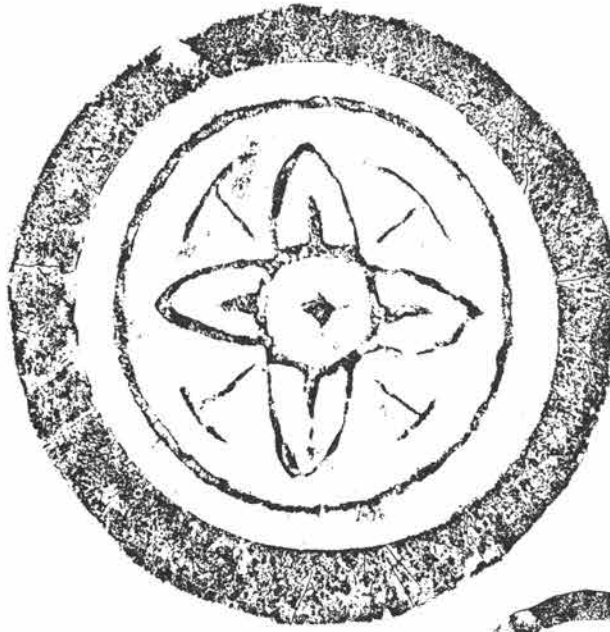
第542図 瓦当瓦類 (11)



第543図 瓦当瓦類 (12)



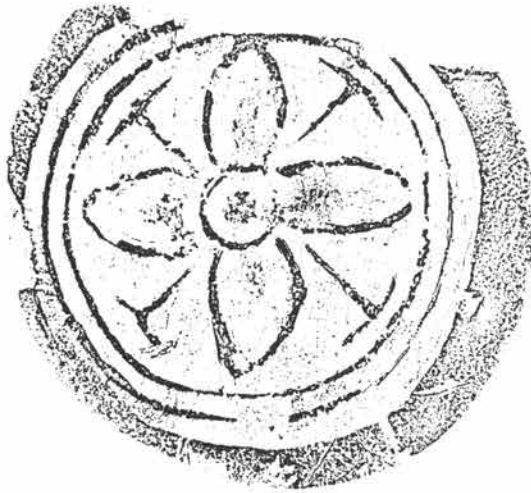
第544図 瓦当瓦類 (13)



瓦-469



瓦-469



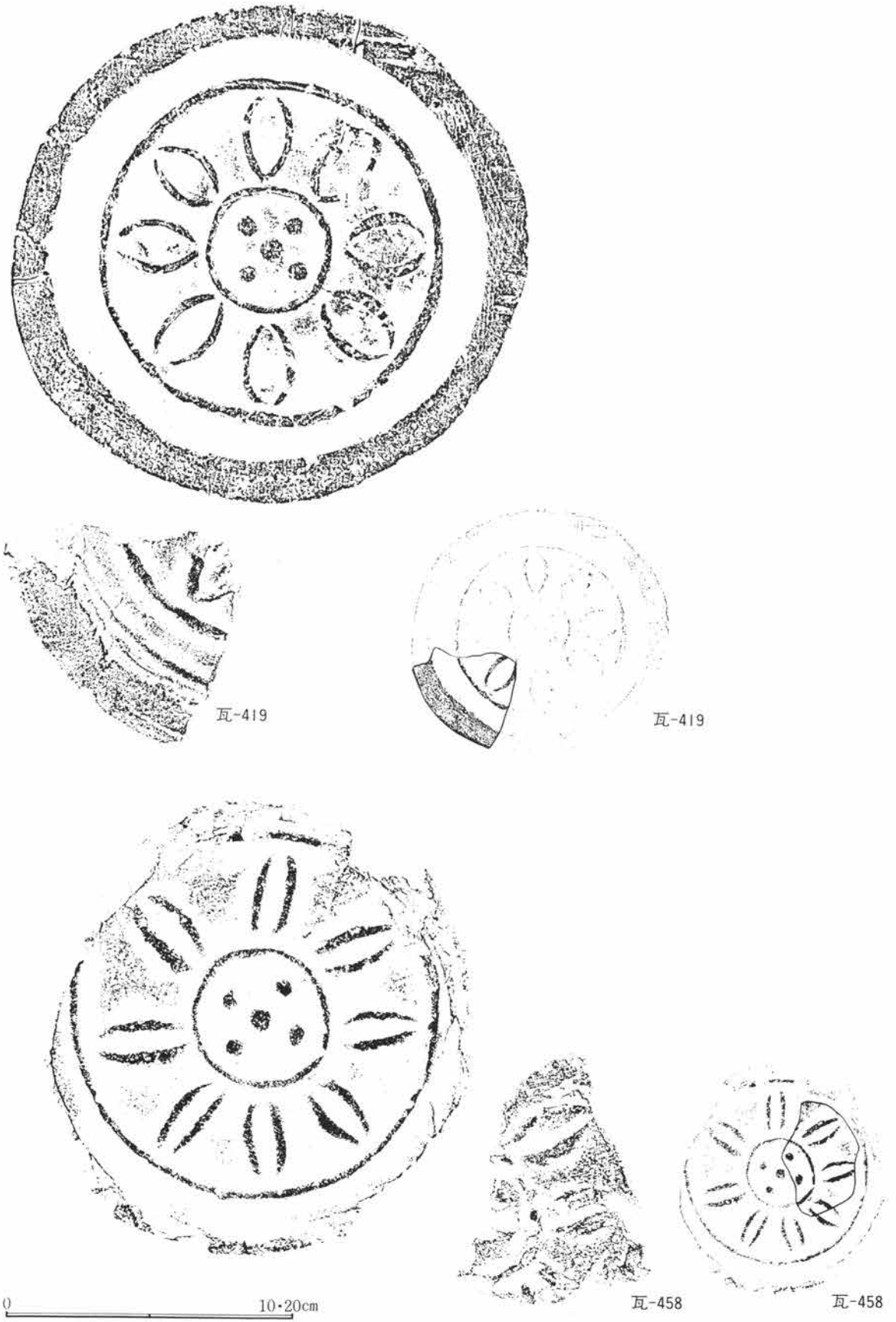
瓦-444



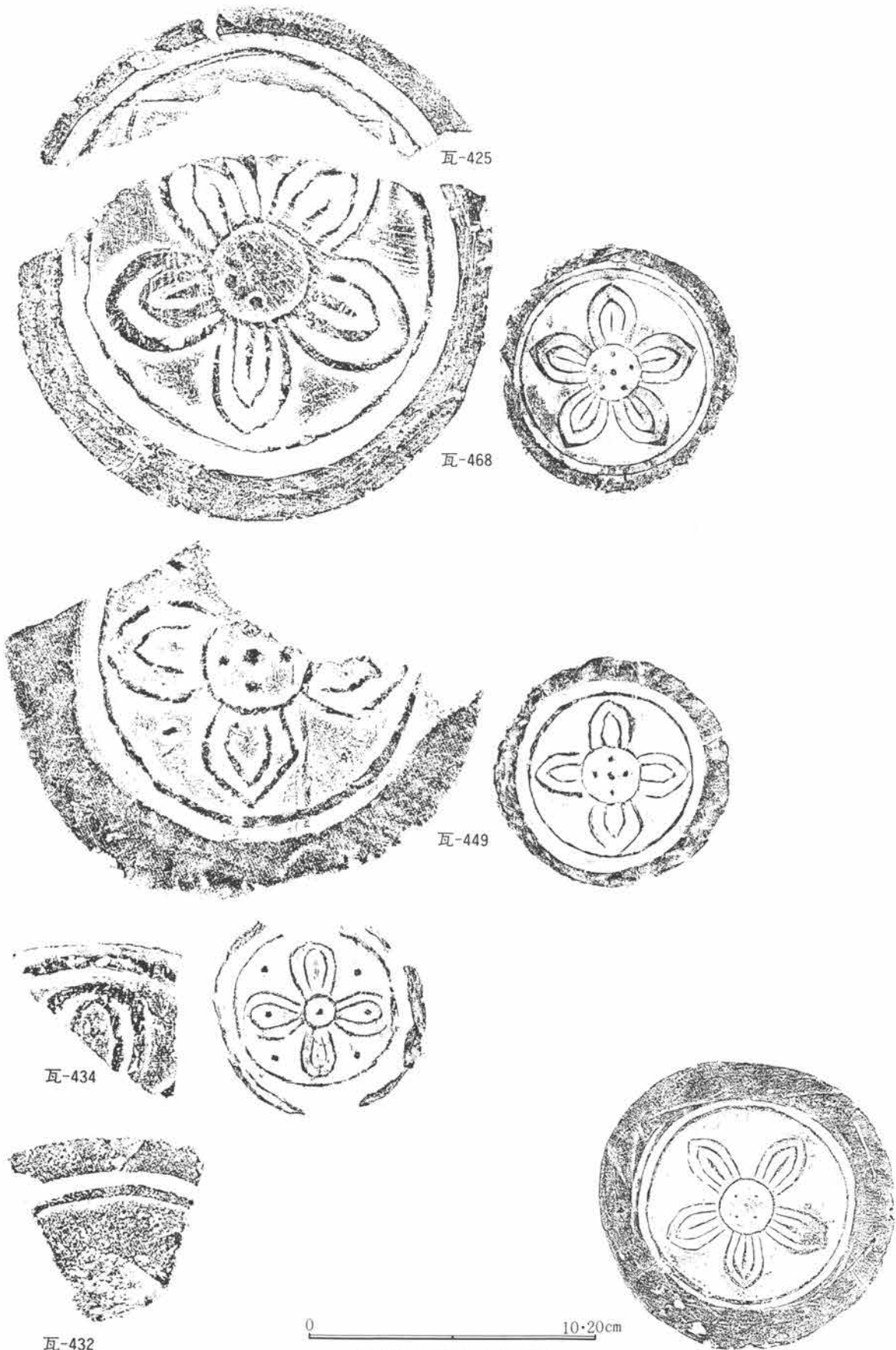
瓦-444

0 10・20cm

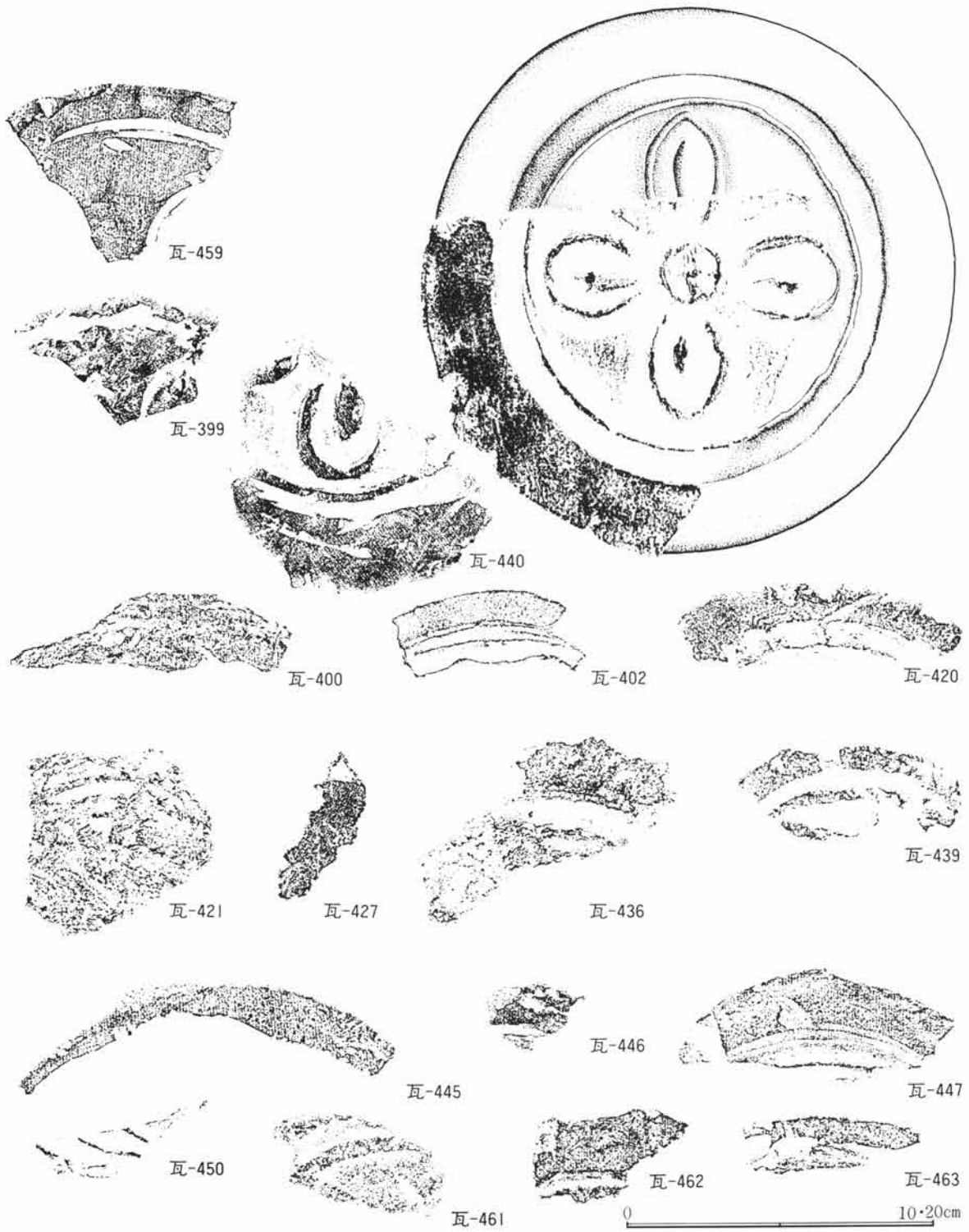
第545図 瓦当瓦類 (14)



第546図 瓦当瓦類 (15)



第547図 瓦当瓦類 (16)



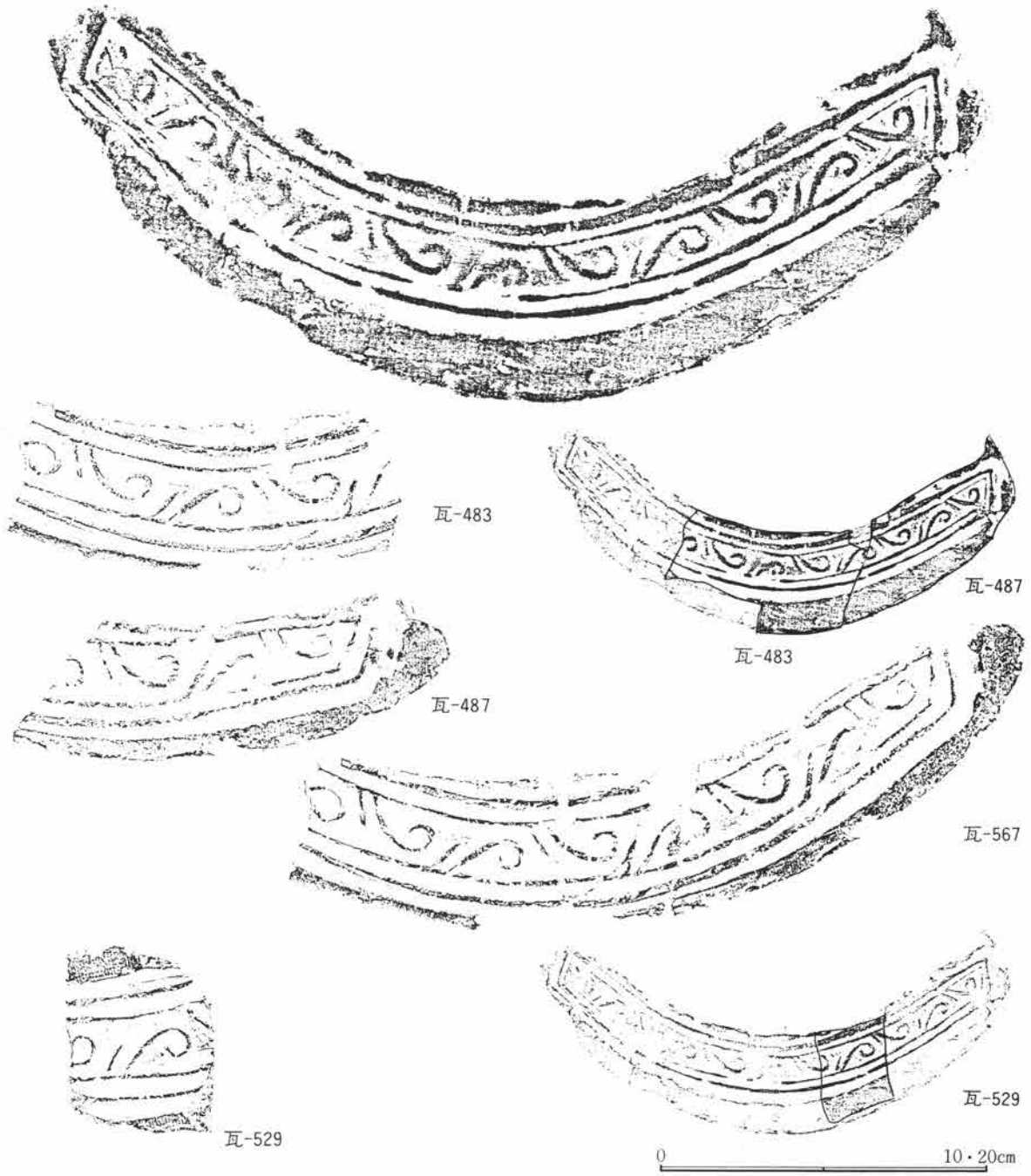
第548図 瓦当瓦類 (17)



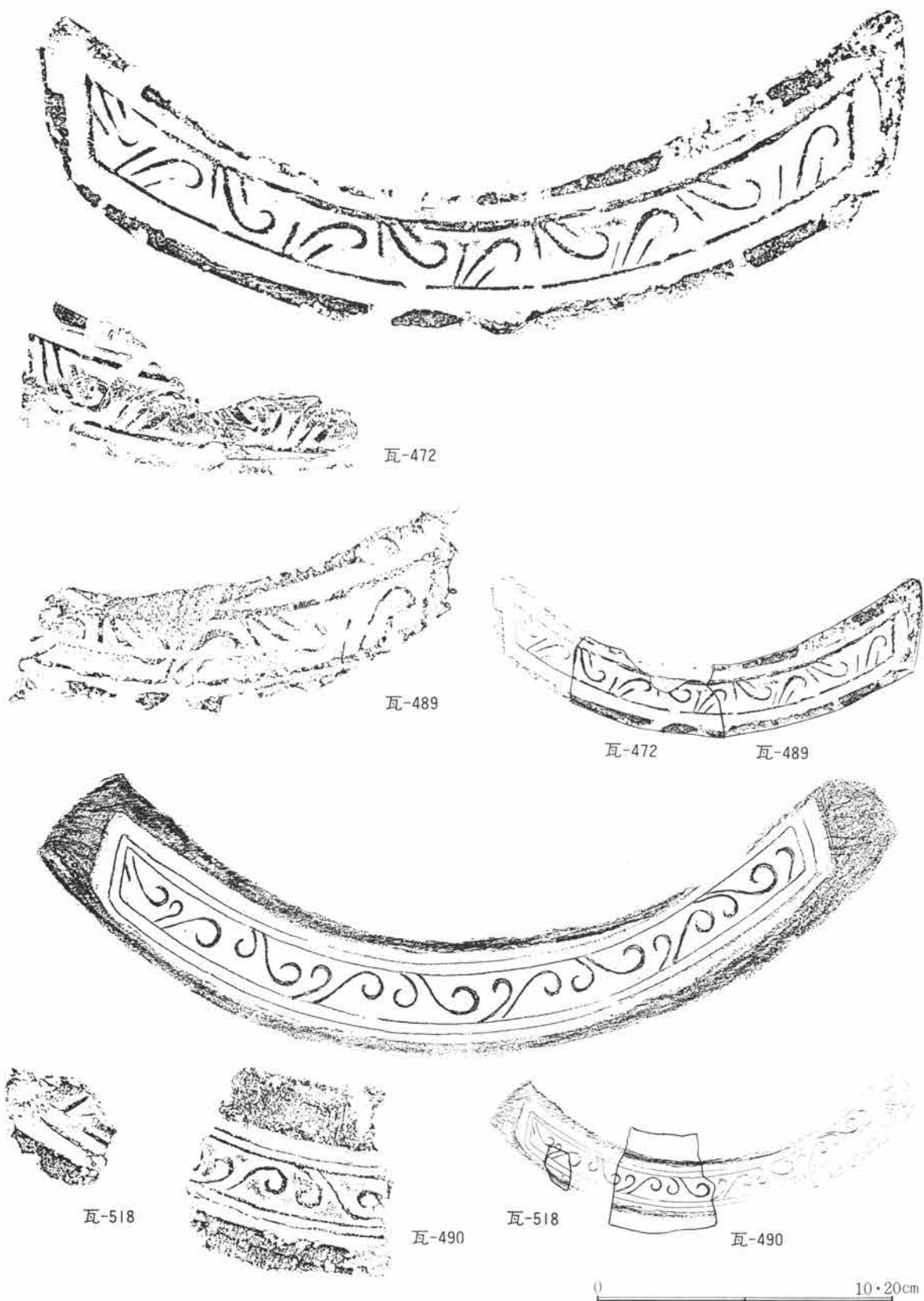
第549図 瓦当瓦類 (18)



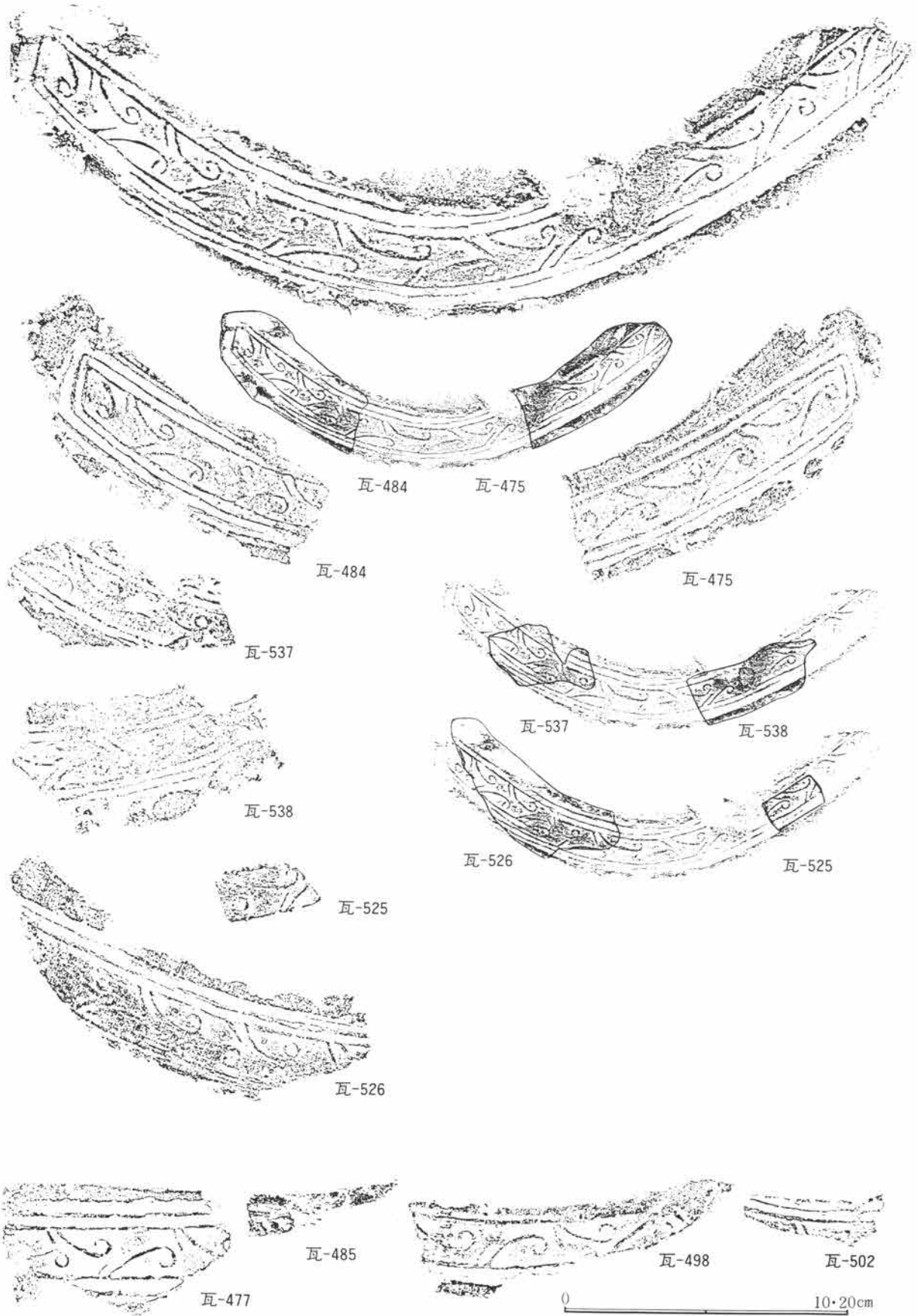
第550図 瓦当瓦類 (19)



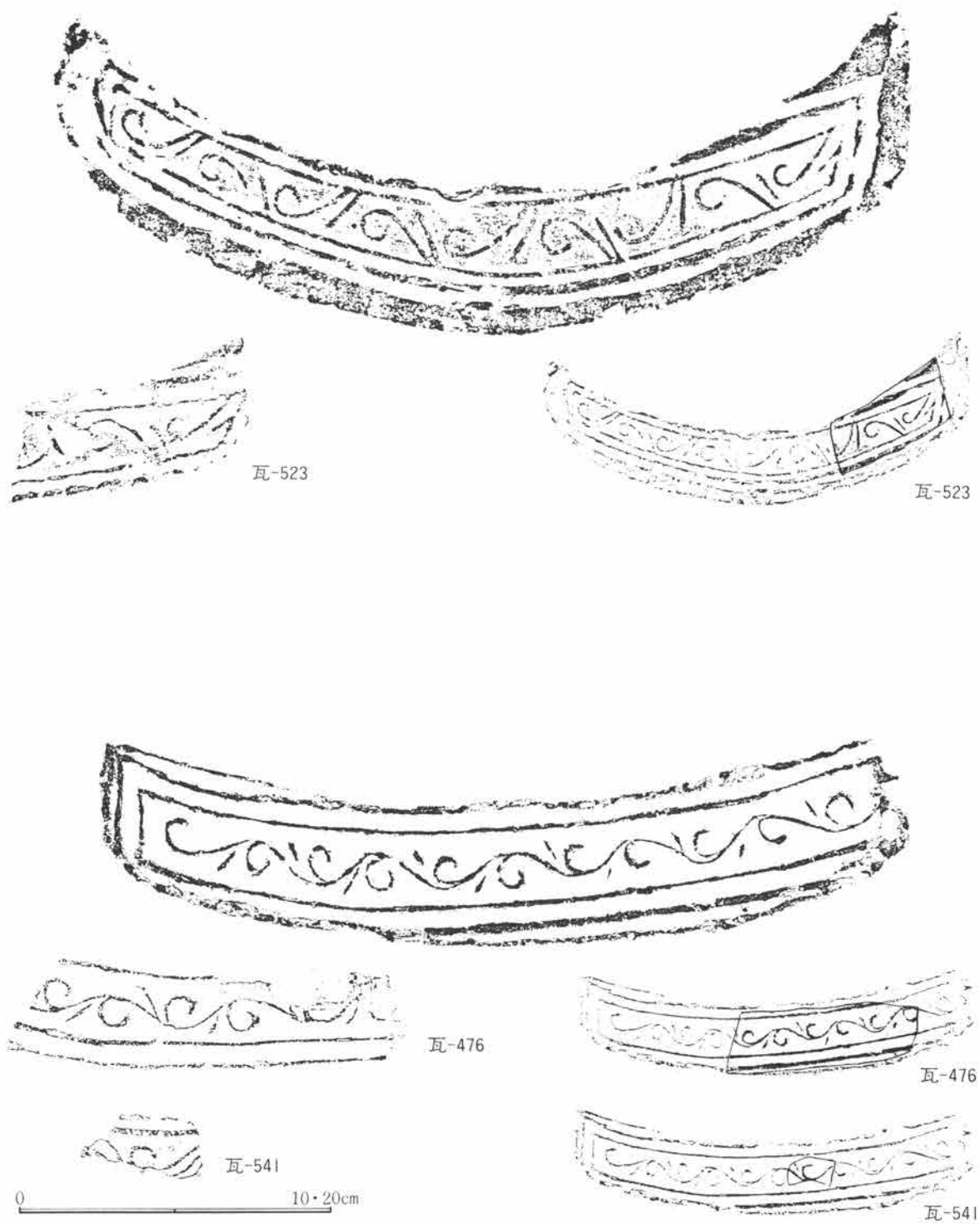
第551図 瓦当瓦類 (20)



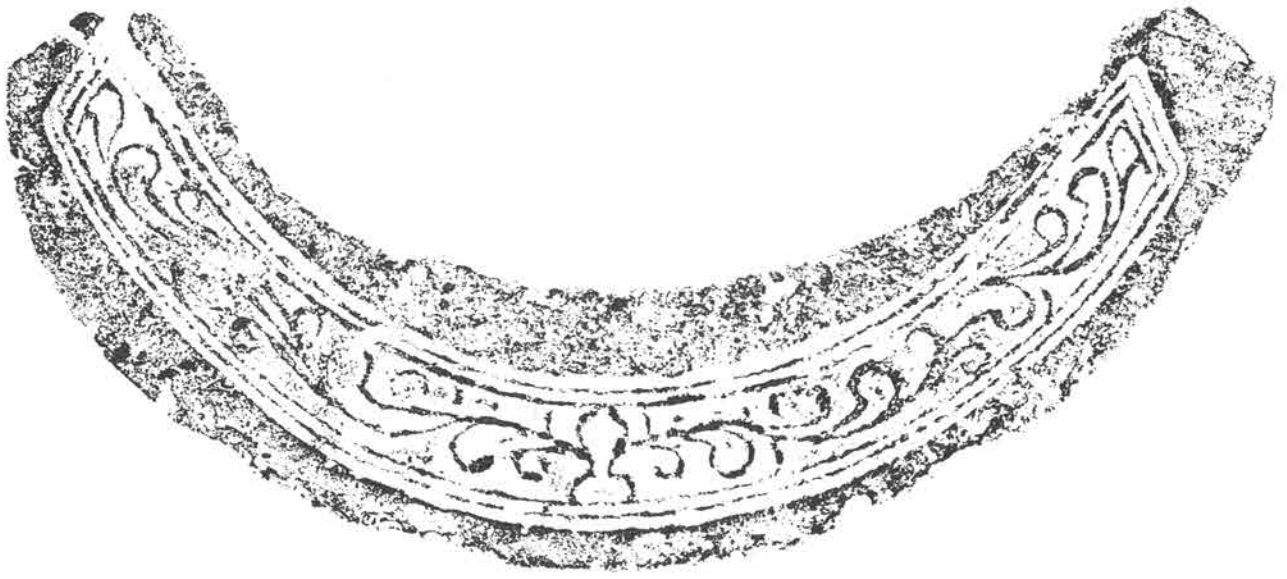
第552図 瓦当瓦類 (21)



第553図 瓦当瓦類 (22)

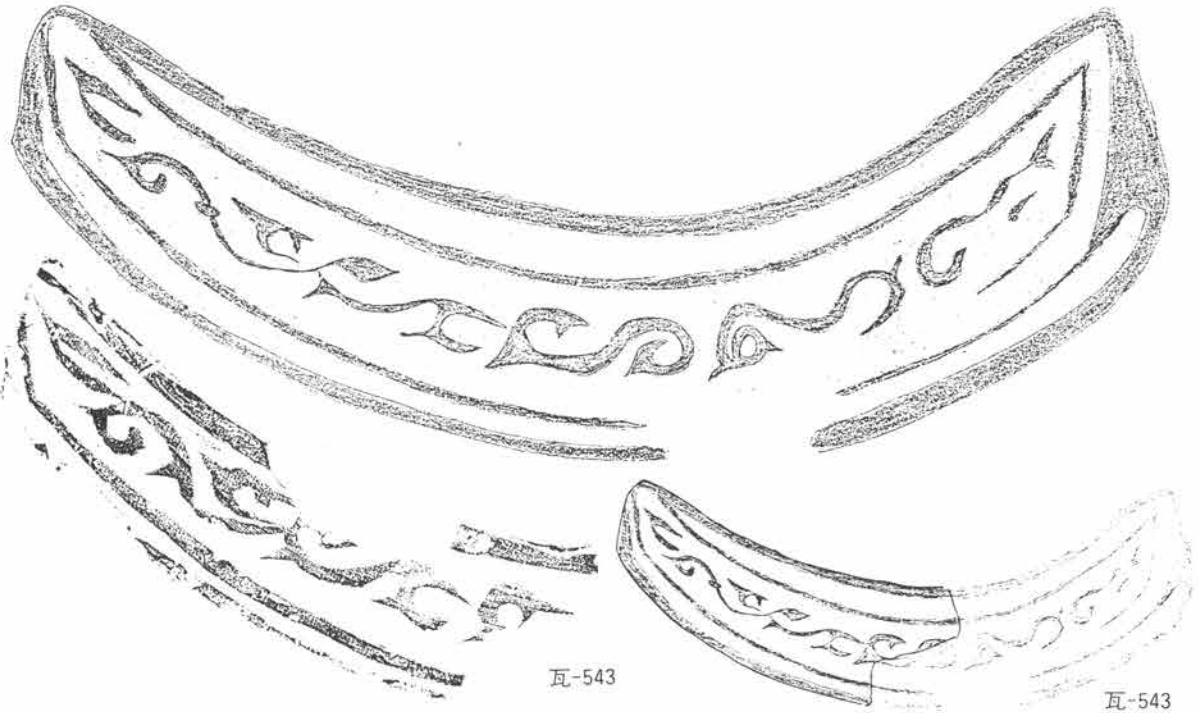


第554図 瓦当瓦類 (23)



瓦-514

瓦-514

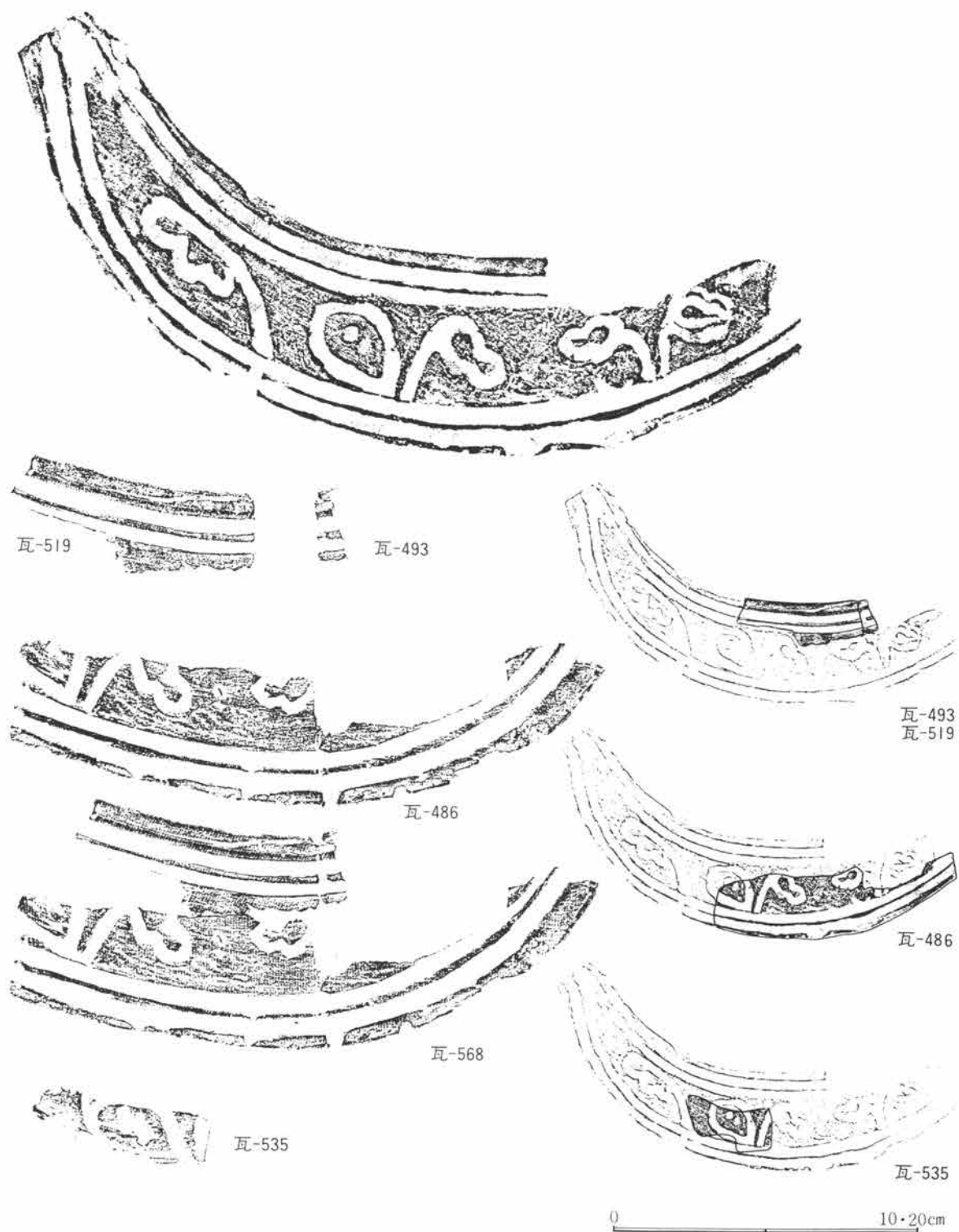


瓦-543

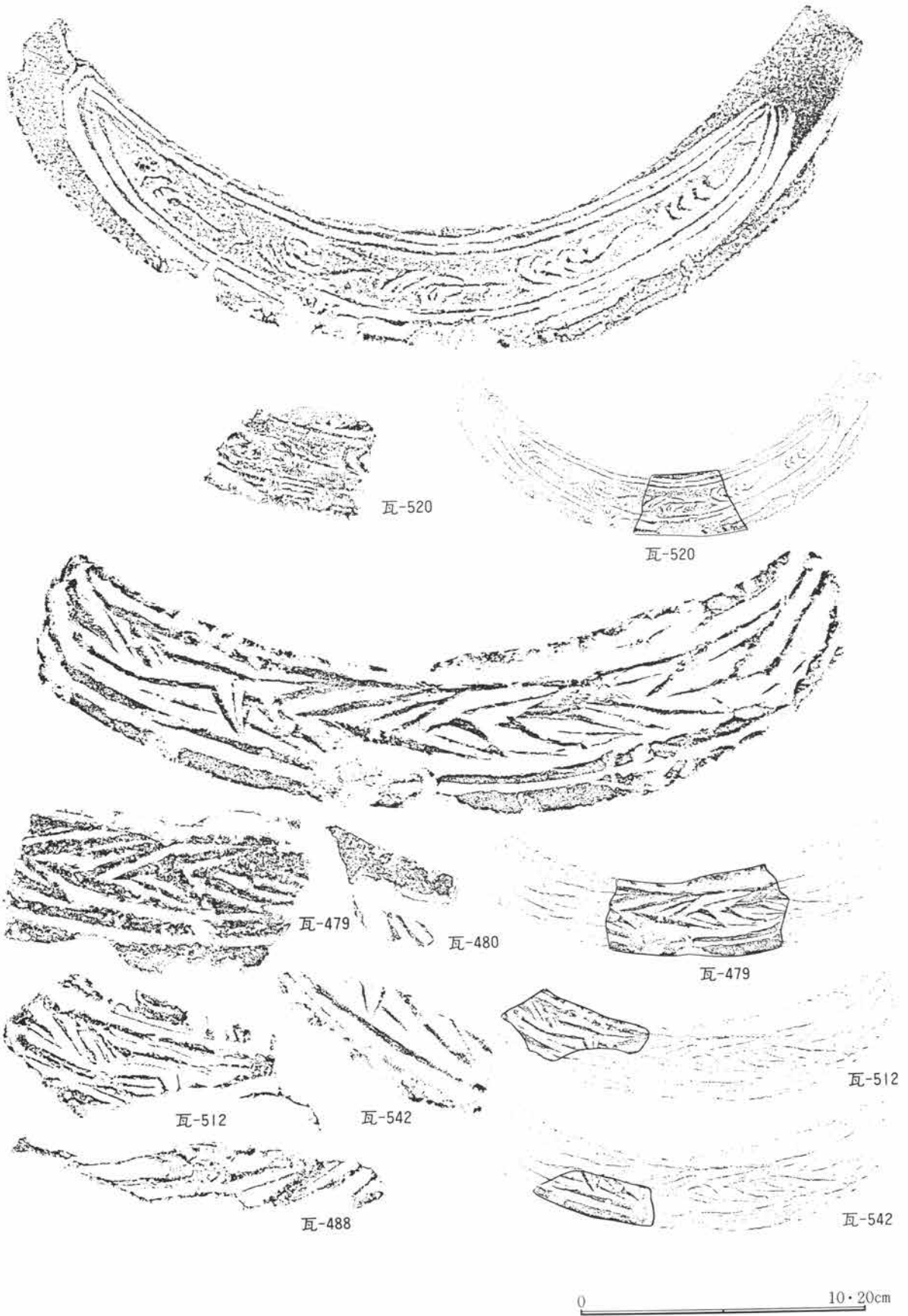
瓦-543

0 10・20cm

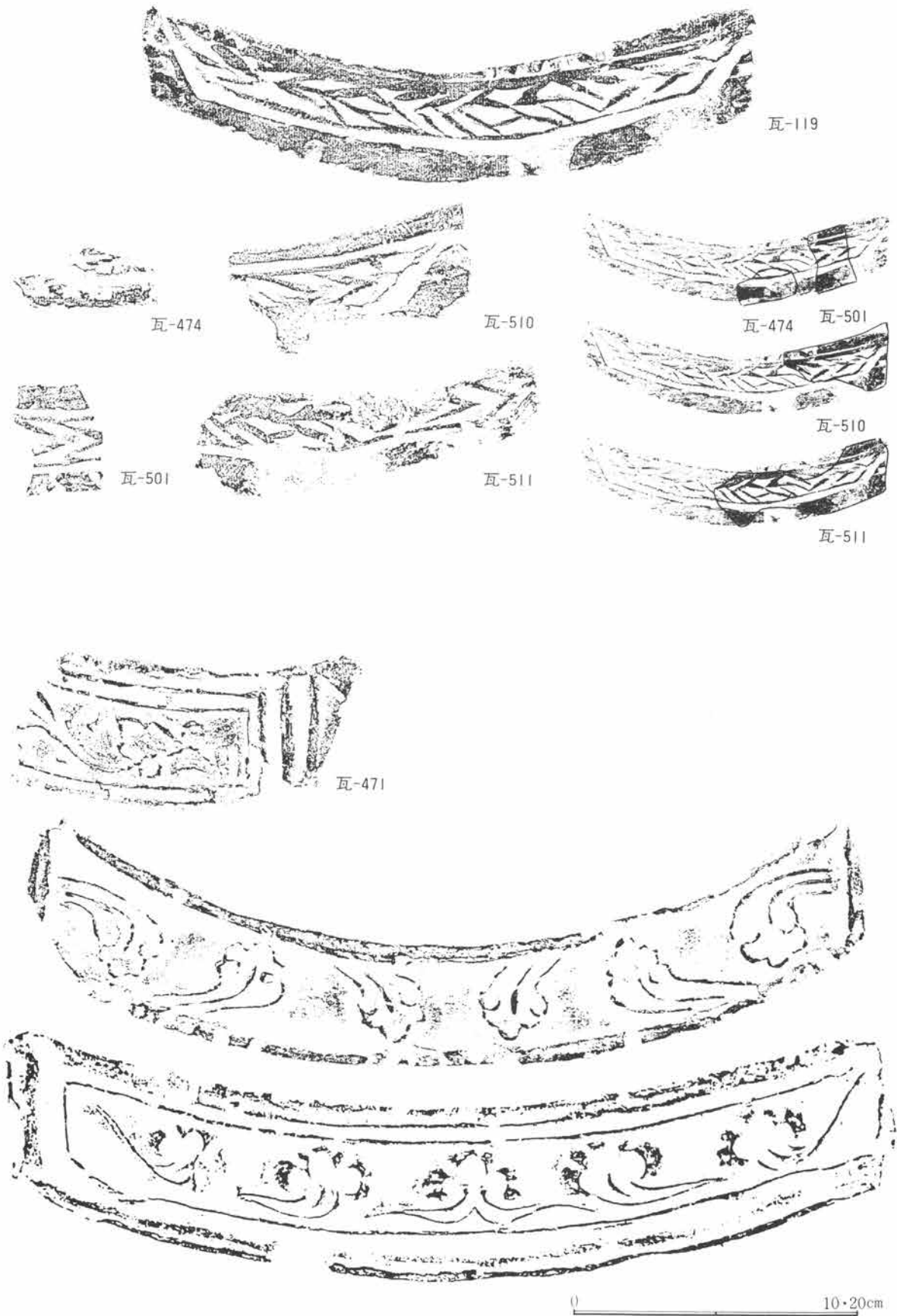
第555図 瓦当瓦類 (24)



第556図 瓦当瓦類 (25)

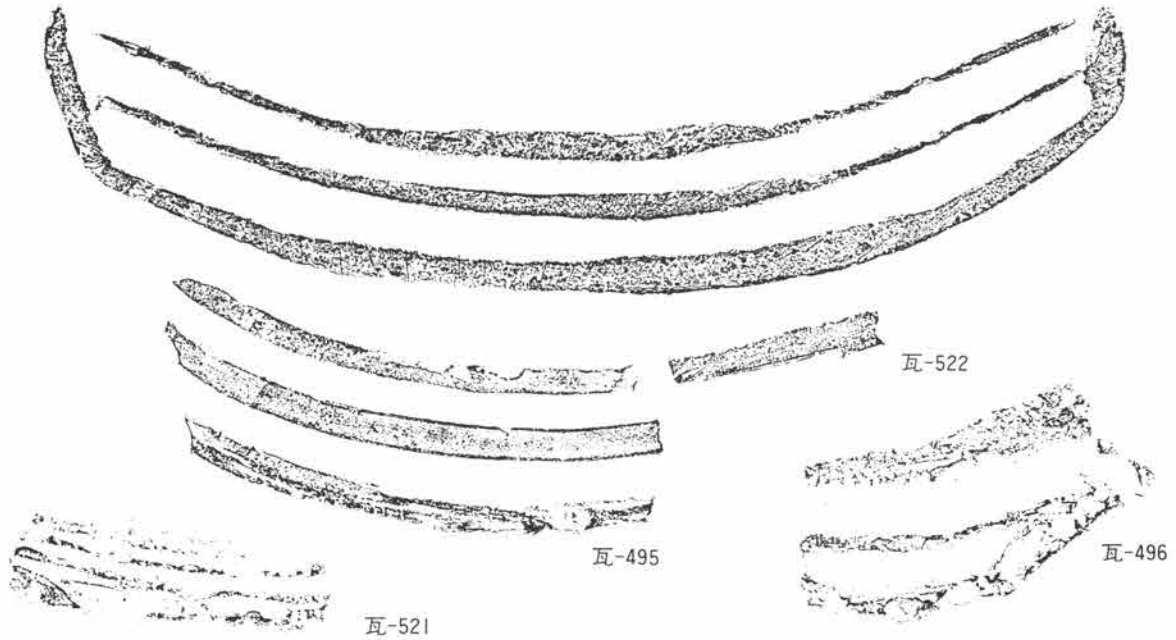
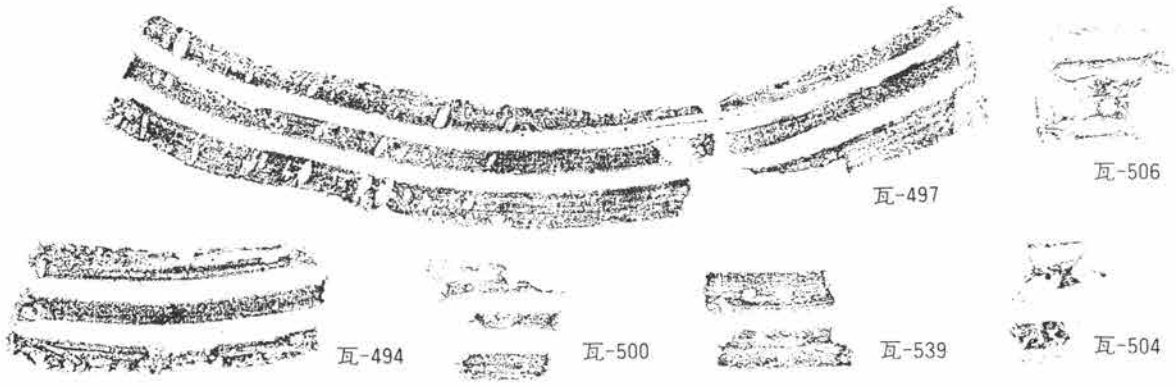


第557図 瓦当瓦類 (26)



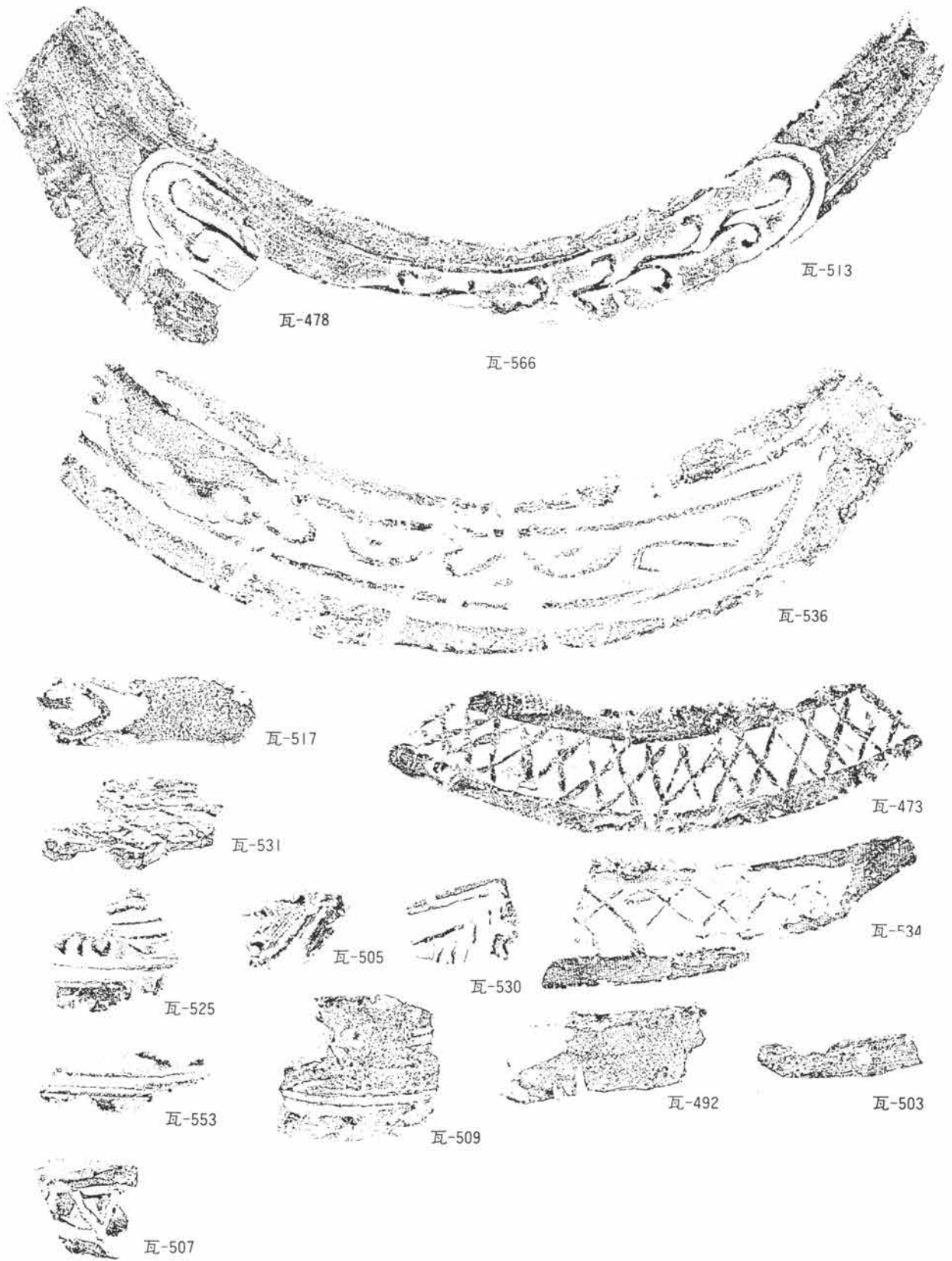
第558図 瓦当瓦類 (27)

第1節 南側調査区



0 10・20cm

第599図 瓦当瓦類 (28)



0 10.20cm

第560図 瓦当瓦類 (29)

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告第103集
上野国分僧寺・ 《本文編(1)》
尼寺中間地域(4) 一関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第33集一

平成2年3月15日印刷

平成2年3月20日発行

編集・発行／(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村下箱田784番地の2
電話(0279)52-2511(代表)

発行／群馬県教育委員会
前橋市大手町1丁目1番1号
電話(0272)23-1111

印刷／朝日印刷工業株式会社
